

バトルスピリッツ コラ ボストーリーズ

バナナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バトルスピリッツが全てのとある世界。

生まれながらに『ソウルコア』が使えない少年アスラは、

己の力を証明するために、そして師との約束を果たすために、

カードバトラー最高の称号“頂点王”を目指す！

バトスピファンタジーが幕を開ける!!

目次

ソウルコア無き少年篇	
1 コア「龍の宿るカード」	1
2 コア「頂点王への道」	54
3 コア「仮面ライダーナイト」	109
4 コア「アスラとエール」	174
5 コア「緑カラー戦!! VS アトラーパーカ ブテリモン!!」	208
6 コア「ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!」	274
7 コア「ライダースピリットを狩る者」	321
8 コア「バースト発動!! 第二の龍騎!!」	371
9 コア「青カラー戦!! VS ズドモン!!」	440
10 コア「挑戦権剥奪!? モビルスピ リット、ストライクガンダム!!」	493
11 コア「エールの進化、ウォーグレイ モン爆誕!!」	537
12 コア「仮面ライダーカブト」	582
13 コア「サバイブー疾風ー」	641

14 コア「サバイブー烈火」
697
15 コア「サバイブ激突」
749
16 コア「白カラー戦!! VS メカゴジラ!!」
777
17 コア「トウエンティ再び、仮面ライダージオウ」
826
18 コア「破滅を呼ぶデストロイア」
877
19 コア「奇跡の進化! 仮面ライダーグランドジオウ!!」
922
20 コア「三王 VS カラーリーダー!! 凄まじきガンダム!!」
986

21 コア「魅惑のピオランテ」
1034
王蛇篇
22 コア「プロローグ”頂点王” 生誕」
1090
23 コア「戦慄、仮面ライダー王蛇」
1161
24 コア「急襲の王蛇、さよならエール」
1206
25 コア「飛べガンダム、エールを救出せよ」
1272
26 コア「オメガ激突、絆の超究極進化」
1311

- 27コア「龍騎VS王蛇!!……その身に宿すのは」—— 1369
- 28コア「三王たる力!!仮面ライダーカブトハイパーフォーム」—— 1423
- 29コア「オメガモンVSデュークモン!!」—— 1485
- 30コア「テンドウ・ヒロミの1日」
1564
- ミラーワールド篇
- 31コア「ナイトサバイブVSキングギドラ」—— 1616
- 32コア「黄カラー戦!!VSホーリーエンジェモン&エンジェウーモン」
- 33コア「ロンの記憶……龍騎&ナイトVS袖付き」—— 1684
- 34コア「鏡の中の世界、アルケーガンダム追憶」—— 1811
- 35コア「集結のミラーライダーズ、そして変貌」—— 1870
- 36コア「仮面ライダーリユウガ」
1940
- 37コア「転醒するナイト」—— 1986
- 38コア「激突のミラーライダーズ、神をも焼き殺す黒い龍」—— 2035
- 39コア「未来へのドラゴンライダー」

キック

2088

40コア「紫のカラーリーダーと黒き

代償

2130

七つの大罪竜篇

41コア「憤怒の竜、ドラグノ出陣」

2183

42コア「もう二度と負けない」

2252

43コア「アスラVS怠惰な樹龍」

2317

44コア「驚異のWデート!?…オメガ

モンVS色欲の七罪竜

24622379

45コア「頂点王の実力」

46コア「熾烈なタッグバトル!…グ

ランドジオウVSエルドラシユオン!

2532

47コア「赫焉の龍騎サバイブラン

ザー!!

2611

ライダーハンターズ決戦篇

48コア「図書館の魔法使い…VS

ウィザード

2663

49コア「三ツ首龍大進行」

50コア「紫カラー戦!!VSゴースト」

2763

51コア「嵐を呼ぶ滅亡迅雷」

2821

- | | | | | | | |
|--|------|------------------|------|------|---------------------|------|
| | 52 | コア「真紅のモードチェンジ」 | | 59 | コア「アスラの誓い」 | |
| | 2880 | | | 60 | コア「ソウルコアが使えない、その理由」 | 3322 |
| | 53 | コア「綿飴大決戦、オメガモンVS | | 61 | コア「オニキスとキョーラ」 | |
| | | ピオランテ」 | 2932 | | | |
| | 54 | コア「選ばれるための一撃」 | | 3364 | | |
| | 2977 | | | 62 | コア「赤カラー戦!! VS ユニコー | |
| | 55 | コア「カブトVS黒の頂点」 | | | ンガンダム!!」 | 3410 |
| | 3030 | | | 63 | コア「ネオ・ジオングを斬れ!!」 | |
| | 56 | コア「三大スピリットを統べる者 | | 3476 | | |
| | | ウィル」 | 3093 | 64 | コア「頂点王が遺した孤高の魔王」 | 3530 |
| | 57 | コア「ダブルドラゴン」 | | | | |
| | | オニキス篇 | | | ブラックフォース決戦篇 | |
| | 58 | コア「ディアボロモン」 | 3218 | 65 | コア「明けぬ夜ブラックゲイン、ア | |

スラVSオブシディアン	3586	ラックフォース	3955
66コア「正しき黒の力で、悪しき黒を討て！」	3650	73コア「スーミ村のアスラ」	4011
67コア「ウイザード乱舞」	3696	ラストコア「オレ達のコラボストーリーズ」	4063
68コア「ジオウ・オンパレード」	3739		
69コア「マーシフルモード」	3791		
70コア「決戦、アスラ&ロンVSウイール」	3851		
71コア「融合、ナイトサバイブランザー!!」	3903		
72コア「オニキス消滅、絶望操りしブ			

ソウルコア無き少年篇

1コア「龍の宿るカード」

ここは幾億もの人々が住まうとある世界。そこには現実離れた広大なファタジの景色が無限に広がっている。

舞台となるのはその世界の1つの国。その国の人間達は……

…最上位且つ最も高貴な存在である『エックス』…

…バトスピ貴族と呼ばれる『マスター』…

…所謂平民である『レア』…

…そして、最も貧しく、身分も低い『コモン』の4つの身分に分けられていた…

そんなファンタジーの世界でも当たり前のように存在し、誰もが息をするように行うカードゲームがあつた……

その名は『バトルスピリッツ』

この世界ではバトルスピリッツこそが至高であり、バトルスピリッツの優劣こそが絶対である……

そして、この国で最も強いカードバトルを人々は
『ちようてんおう頂点王』と呼んだ。

これは何も無かった1人の少年の証明の物語。

「もう諦めろアスラ。このバトルもオマエの負けだ」

「いや、まだだ。まだだロン!!オレは諦めてねえぞ!!」

広大な土地を有する国の端に存在する小さな村。

名を『スーミ村』と言う。そこには主に最も身分の低い『コモン』の人間達が住み着いている。

そんなスーミ村の大通りに人集りが出来上がっており、その中心では2人の少年がバトルスピリッツを行なっていた。

1人は『ロン』と呼ばれている黒髪でやや癖毛のある背の高い少年。

もう1人は『アスラ』と呼ばれている灰色のツンツン頭の小柄な少年。

バトルの状況は圧倒的にロンが優勢であり、アスラは断崖絶壁の窮地に立たされていた。

「諦めていないんだったら、この状況をどうにかしてみせるんだな……オレは仮面ライダーナイトを召喚!!」

「!!」

1【仮面ライダーナイト】LV3(4S)BP6000

ロンがバトル用の端末、Bパッドにカードをセットし、黒い人型、そして剣を持つスピリットを召喚する。そのカードは世にも珍しいスピリットカード……

『ライダースピリット』……

この世界ではごく僅かな選ばれた人間にしか使う事が出来ないと言われている

へん稀少価値の高いカードである。

このロンは最も身分の低い『コモン』で『捨て子』の身でありながら、そのカードを生まれつき持っていた。それがこの『ナイト』のカードなのだ。

「アタックステップ!! ナイトで攻撃する!!」

アタックステップに入り、ロンはナイトでアタックを仕掛ける。ナイトは剣を構え、アスラの最後のライフを破壊すべく走り出した。

「……さあ来いナイトオオオオ!! このオレが遂に限界点を超えてソウルコアを得る時が来たのだああ!!」

だが、アスラは明らかにピンチなはずなのに堂々と胸を張り、寧ろここからだと言わんばかりな声を上げる。

アスラの言う『ソウルコア』とは、バトルスピリッツと言うカードゲームにおいて、必需品のようなもの。強力な効果を使用したり、スピリッツをさらなる姿に昇華させたりとその用途は幅広い。

バトルをする際は子供だろうが女性だろうが、誰もが息を吸うように生み出し、使用する事ができる。

しかし、世界でただ一人、このアスラだけは……

「でねええええええ!!!」

〈ライフ1??0〉アスラ

アスラのBパッド上には結局ソウルコアは現れず……

ナイトがそのままその剣から繰り出される強烈な刺突でアスラの前方に展開されるライフバリアを貫いた。

これでアスラのライフはゼロ。勝者はロンだ。その勝利を祝うかのように周りの人々も歓声を上げる。

「今のオマエじゃオレには勝てんな、アスラ!!」

「……きよ、今日こそはソウルコアが出ると思ったんだ……」

この世界において、ソウルコアを出す事など、身分に関係なくどんな人間でも生成できる。だが、このアスラだけはどんなに歯を食いしばり、力を入れても、そのソウルコアを出す事が出来なかった。

このバトルスピリッツが全ての世界において、ソウルコアが出せないという事は余りにも致命的である。普通に考えればアスラはこの世界で最も弱いカードバトラーだと言っても刺し違えなくて……

「だけどまだだ!!まだだロン!!オレは諦めねえぞ!!この世界で最強の『頂点王』になるまではな!!」

ロンとのバトルに敗北しても、すぐに立ち上がり、己の野望を口にするアスラだったが……

「お前にできるわけないだろ!!」

「ソウルコアも出せないくせに!!」

「チビだし!!」

「チビは関係ねえだろおおお!!」

さつきまでのバトルを見ていた人々から野次が飛んできた。

アスラの言う、『頂点王』とはこの国の最強のカードバトルの事。

この国を代表する『6人のカラーリーダー』と呼ばれる者達全員とバトルをして勝利を収め、その後、怪物じみた強さを持つ『三王』さんおうと呼ばれる3人のバトルに勝ち、そこでようやくこの国最強のカードバトル『頂点王』とバトルを行う事が可能となる。最後にそれに勝つ事が出来れば晴れて新しい『頂点王』となる事ができるのだ。

しかし、カラーリーダーは兎も角、三王に勝てるバトルは長いこの国の歴史の中でも、現在の『頂点王』のみであり、普通のバトルでは先ず太刀打ちできない。

とてもではないがソウルコアを使えないアスラには夢のまた夢とも言える目標であって……………

それに、この国には身分が4つ分かれて存在する。アスラとロンは中でも最も格下で貧しい『コモン』だ。コモン出身のバトルが上の世界で生きていけた例は限りなく少ない。

「でも、アスラじゃなくてロンならカラーリーダーにも勝てるかもな!!」

「そうそう!! ライダースピリットに選ばれてるし!!」

「イケメンで背も高いし!!」

「だから背は関係ないだろおお!!」

そんな中でもこのロンだけは向けられる眼差しが違った。世にも珍しい『ライダースピリット』を所有しているからである。上の者達から差別のあるコモンの人間の中ではまさしく希望の星とも言える存在だったのだ。

「オレもそのうちライダースピリットに選ばれていつか必ず追いつくからなロン!!」

「あり得ん。オマエは先ずソウルコアを出せるようにしろ」

「なにい!?! 順番なんてどうでもいいじゃねえか!! オマエはオレのライバルだ!! オマエに選ばれてオレが選ばれないなんて事はねえ!!」

「おいアスラ!! お前がロンのライバルになれるわけないだろ!?!」

「いい加減身の程を知れ!!」

周りから次々とアスラを非難する声が聞こえてくる。村の者は当然ながら全員同じ

コモンなのだが、その中でもソウルコアが使えないアスラは同じ身分の者達からも蔑まれてる。

「むむ、今に見てろよおお!!オレは諦めん!!今日も特訓じゃあああ!!」

「……………」

アスラはうるさくて暑苦しい声を上げながらそのまま何処かへと走り去ってしまった。周りの人々は呆れながらその様子を見届けた。

そんな中、ロンはアスラの行く宛に思う節でもあるのか、Bパッドをしまいながらもその表情をやや暗くしており……………

「クッククク……………まさかこんな貧相なコモンの村に『ライダースピリット』を持つ奴がいるなんてな……………面白い事になって来た」

人集りの中、1人の男性が怪しげな言葉を並べている事など、誰も知る由もなかった

……………

……

「んーっやっぱ勝ち筋はこれしかないし、このカードは抜けないよな……じゃあこのカードはどうだ？……いや、そうしたら手札がすぐ無くなるぞ」

村から少し外れた森の中、アスラは地べたの上で自分のデッキを広げながらその内容を改良中であつた。

アスラはソウルコアが出せない不思議な体質の持ち主であつたが、人一倍努力家であり、毎日のようにこつそりと特訓と称してデッキを組んでいた。

その研鑽の日々がいつか身を結ぶと信じて……

「……オレにもロンのナイトみたいなライダースピリットがあればなんか変われるのかな……」

ふと、自分のなんの変哲も無いカードを目に移しながらそんな独り言を呟いたアスラ。

ロンはずっと一緒だった。同じ捨て子で同じ歳で同じ村で15年も一緒に過ごして

来た幼馴染だ。

しかし、アスラにはバトルスピリッツの才に恵まれていないというロンとは決定的な違いがある。『同じ人物にバトルを教わったにもかかわらず』にだ。

ロンが羨ましいとは思う。だが、才能がないのはしょうがない。そんな自分は血の滲むような努力で強くなるしか無い。そんな事は物心ついた時から知っている。

知っているのだ……………

「うおおお!!なんかしんみりしてたああ!!ライダースピリッツがどうのこうのと言っている場合じゃねえ!!後半年でオレたちは『カラーライダー』にバトルを挑まないといけないんだ!!そのためにもまずはロンの言う通りソウルコアをダアアアアス!!」

急に吹っ切れたアスラがBパッドを展開し、そこにデツキをセット。速攻でバトルの準備をして普通のコアと一緒に『ソウルコア』を生成しようとするが……………

「いや、でねえええええ!!」

やっぱりソウルコアは出ない。その代わりにリザーブには普通のコアが4つ生成され

ており……………

彼はもう何年も何年もソウルコアを出そうと励み、鍛錬と努力を積み重ねて来たが、それは一向に報われる事はなかった……………

単純にセンスが無いのか、はたまた別に理由があるのか……………

「クツソオオオ!!!!ならば今のうちに肉体を仕上げてやるぜええええ!!!!」

それでも曲げないアスラは、全力で腹筋トレーニングを始めるた。

……………

「……………」

ここはスーミ村の人気の少ない路地裏。もうすぐ夜に差しかかろうとしているため、サンセットから放たれる橙色の光が眩しい。そんな空間の中、ロンはただ一人、アスラと同様に自身のデッキを改良していた。

アスラは『頂点王になる』と言っていたが、その夢はロンも同じ事、アスラには負け

てられない。そう思い、日々の鍛錬を欠かさなかった。

いくら自分がライダースピリットのナイトを『生まれた時から所有』しているとはいえ、それだけで勝ち上がれるほど上の世界は甘く無いと知っているからである。

また、それは自身とアスラにバトルを教えた師の言葉でもある。

……アスラとロンが頂点王になりたいと願うのはそんな師とのある約束が理由であって……

……今頃、彼女はどこで何をしているのやら……

そんな事をロンが考えていた矢先だ……

「クッククック、探したぜ〜ライダースピリットのイケメン君」

「!!」

そんなロンに生温くて気味の悪い男の声が聞こえて来た。ロンがその方へと振り向くと、そこには長髪で額から右目にかけて大きな傷跡のある男が不気味で怪しげな雰囲気を感じさせながら立っ……

「……………誰だオマエは？」

「ククク、オレは『クサリ』……………一昔前では『舞蛾まいがのクサリ』と、少しは名の売れた男よ……………今ではしがない『盗賊』だがね〜」

『盗賊』

その言葉に少しだけ身構えるロン。物を盗むのを生業としている盗賊だ。自分に対してやってくる事はただ一つ……………価値のある『ライダースピリット』の強奪だ。ロンは一瞬でそこまで推理したからこそ自身のBパッドを構えていて……………

「まあまあそう気を張るなって、オレはただ君のライダースピリットのカードが欲しいだけさ。ライダースピリットは選ばれた所有者にしか使用できないが、コレクターにはとんでもない高値で取引ができるからな〜」

「……………嫌だと言ったら？」

生まれた時から手に持っていた相棒であるナイトをあんな薄汚い盗賊に渡すわけもない。ロンは拒む姿勢を見せるが……………

「じゃあ、力尽くで」

「!!」

クサリという盗賊の青年もBパッドを構える。すると、2人のバトルスピリッツが開
始されたのか、途端に彼の背後から蛾のような巨大なスピリッツが飛び出して来て

………

……

「ふい〜〜疲れた〜〜結局今日もソウルコア出ませんでしたああ!!でも必ず出してや
るぞ!!絶対ロンに追いつくんだ!!」

本格的に晩を迎えようとする夕方の時間帯。アスラが村に帰還して来た。やはり彼の
の夢に対する想いは強いのか、ソウルコアが出なくても諦めるそぶりすら見せていな
い。

「あ……そう言えば今日の夕飯何も考えてなかったな……かと言って今から魚を釣りに行くのもなあ……」

彼が腹の虫を鳴らしながら呑気な事を考えているその時だった……

ードツゴン!!!

「!？」

突如聞こえて来た鈍い音に、アスラは思わず身を構える。辺鄙へんぴな村ではあまりない起きない事であるため、少々驚いているが……

「な、なにになに!? 隕石ですかい!? ……路地裏の方だよな!? ……ちよ、ちよつとだけ様子を見てこよ〜」

その音の正体を物珍しがって、興味本位で見に行くことにした。それが『ロン』と『クサリ』のライダースピリットを賭けたバトルによる物だとも知らずに……

…

「くっ……」

「ククク……ライダースピリットに選ばれているとは言っても、やはりまだまだ若いな。上の世界のバトルを君はまだ知らない」

一方でロンとクサリのバトル。状況は圧倒的にロンが不利だ。流石に少しは名の知れたと豪語するだけはある。彼の操る蛾のようなスピリットには今のロンでは全く歯が立たなかった。

「ほれ、終わりだ。君の伝説は始まらずして幕を下ろすのさ!!……さあ、ライダースピリットを渡してもらおう!!…行け、守護神獣モスラ!!」

「!!」

モスラと呼ばれる蛾のようなスピリットがロンの最後のライフを破壊すべく翅を広げて飛翔した。実際、最早ロンに打つ手立てはなく……

万事休すか……………

だが、そう考えが過った次の瞬間だ。ロンの耳に聞き慣れたうるさい声が聞こえて来て……………

「ちよおおおつと待ったああ!!」

「アスラ!!」

「ああ?」

アスラが突然現れ、飛び出して来た。それを見るなり、クサリは自身の操るモスラと呼ばれるスピリットのアタックを一旦停止させた。

「んくくく?…………オマエは確か、ソウルコアが出せない哀れな天然記念物…………クツクツク」

「誰が哀れな天然記念物ダアアアア!!」

嘲笑いながらアスラを蔑称で呼称するクサリ。

「話は聞こえたぞ!! ライダースピリットはロンのモンだろ!!…勝手に奪おうとすんじゃねえコノヤロー!!」

「クッククック…そう言った歪んだ事が罷り通るのが外の世界だ……そこに行く前に果てるか?……小僧……!」

言い合いの中、クサリは完全にターゲットをロンからアスラに変えた。Bパッドをアスラの方に向け、改めてバトルを要求している。彼を文字通り果てさせるために……

「……………逃げろアスラー!……………今のオマエじゃ奴には勝てん!!」

クサリの様子を察したロンが珍しく声を張ってアスラに逃げるように仰ぐ。だが、アスラにとっては逃げる理由がない。大事な友を見捨てて逃げる事など、況してやこんな落ちぶれた奴なんかには背は向けられなくて……

「バツカヤロー!!…このオレが逃げるわけないだろおおおお!!オレは『頂点王』になるんだからな!!」

そうやってアスラも取り出したBパッドを展開し、バトル台を形成、クサリへと向ける。この世界において、その端末を合わせたという事はやる事はただ一つ……

……バトルスピリッツというカードバトルだ。

……ゲートオープン、解放!!

コールと共にバトルスピリッツが開始された。

先行はソウルコアを生成する事が出来ないアスラだ。

「ターン01」アスラ

「よっしやメインステップうう!!…オレは、シャムシーザーをLV2で召喚!!」

1「シャムシーザー」LV2(3)BP3000

威勢の良いアスラが手始めに召喚したのは赤くて小さな身体を持ち、背には鋭利な棘を数本生やしているトカゲのようなスピリット、シャムシーザー。

「よおおし！…頑張れよ、シヤムシーザー!!……………このターンはこれでターンエンドだ!!」

手札：4

場：【シヤムシーザー】 L V 2

バースト：【無】

そのターンをエンドとするアスラ。シヤムシーザーはそんな彼の声に應えるように小さな雄叫びを上げた。

「全く、貧相で見窄みすぼらしいスピリットだ。……………見せてやるよ、オマエの知らない世界のバトルスピリッツをな!!」

「!」

次はクサリのターン。彼は間違いなく人間としての性格は破綻しているが、その気迫から、まだ外のバトルを知らないアスラでも確かに彼が強者であるのが伺えて……………

「ターン02」クサリ

「メインステップ、守護神獣モスラを召喚!!」

1 【守護神獣モスラ】 LV1 (2S) BP3000

「つ……さつきの奴か!」

クサリが場に呼び出したスピリットは巨大な蛾を姿をしたもの。緑を基準とした色鮮やかな翅を羽ばたかせ、アスラに小さくないプレッシャーをかける。

「アタックステップ!! 守護神獣モスラでアタック!! ……その効果でボイドからコアを1つこのスピリットに追加し、LVアップ!! ……さらにソウルコアを置いている事により、BPをプラス3000!!」

1 【守護神獣モスラ】 LV1?? 2 (2S?? 3S) BP3000?? 5000?? 8000

アスラに飛びかかっていくモスラ。その間に自身の効果とソウルコアの力でBPを徐々に上昇させていく。

「ほらほら、ソウルコアのないお前にはできない芸当だろう？」

「何だとコノヤロー!!…その内できるようになるわアアア!!」

「クツクツク……本当にお前は惨めだね〜」

鼻息を荒くし、ブンブンとした様子で怒るアスラ。だが、そのスピリットのアタックはBPの弱いシャムシーザーでブロックするわけには行かない。

「そいつはライフで受ける!!……ぐっ！」

へライフ5?!4へアスラ

飛翔してくるモスラの頭突きがアスラのライフバリアを砕く。さらにそれに伴う重たい衝撃が彼の身体にのしかかった。

「クッククック…ターンエンド〜」

手札：4

場：【守護神獣モスラ】LV2

バースト：【無】

「よっしやあい!!オレのタアアアアン!!」

できることを全て終え、そのターンをエンドとするクサリ。次はアスラのターン。勢い良くターンシークエンスを進行していく。

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!シヤムシーザーを追加で2体召喚する!!」

1【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

1【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

アスラの場にさらに2、3体目のシヤムシーザーが現れる。

「クツクツク……コモンの人間は可哀想だね〜そんな弱小スピリットしか持つてないのか〜」

「んだとおお!!人の使うカードをバカにするのが一番ダメなんだぞおおおお!!」

この世界で身分が最も低く、貧しい『コモン』は使うカードも基本的に弱いものばかりである。故に、コモンのカードバトラーはこの世界で勝ち続ける事は不可能に等しいのである……

「…いや、知らん!!だからなに!?…それでもオレはこいつに勝つ男になってみせる!!
……アタックステップ!!オマエの場のスピリットは疲労状態!!今がチャアアアンス!!
……3体のシヤムシーザーでアタック!!」

アスラが3体のシヤムシーザーでアタックを仕掛ける。シヤムシーザー達は地面を這って進んでいき……

「全てライフだ………っ」

△ライフ5??4??3??2△クサリ

3体のシャムシーザーが次々とクサリのライフバリアに激突していき、それを破壊していく。そのライフ差を一気に広げた。

「よっしやどうだ!!残りライフ2っ!!………ターンエンドだ!!」

手札：3

場：【シャムシーザー】LV2

【シャムシーザー】LV1

【シャムシーザー】LV1

バースト：【無】

アスラはそのターンを終える。

このバトル、スピリットの体数差、ライフ差から一見アスラが絶対的優勢に見える状況だが………

「ターン04」クサリ

「メインステップ……」

クサリのメインステップが開始される。

「クツクツク……オマエは馬鹿だなあ!!」

「!？」

「今、自分がこのオレに勝てそうだと思っている!!……前のターン、オレがわざとオマエの攻撃を受けていた事も知らずになあああ!!」

「なに!？」

「オレはマジックカード、モスラの羽化を發揮!!」

「!!」

そのカードを發揮させた途端。クサリの背後に巨大な繭が現れる。その繭から糸がはち切れていき……

中から彼の持つ最強のスピリットが呼び出される……

「ライフが2以下のとき、手札のモスラを召喚する!!………来おおおい!! 鎧モスラアアアア!!」

┆【鎧モスラ】LV2(3) BPI5000

「で、デカ!!」

その繭の中から飛び出してきたのは全身を鎧のような外骨格で身を包む蛾のスピリット、鎧モスラ。そのサイズは守護神獣モスラよりも圧倒的に巨躯である。

クサリはモスラの羽化の効果でこの鎧モスラを呼ぶために前のターン、わざとアスラのアタックを全て受けたのだ。

「これが出たんだ。もうオマエは終わりだ!!アタックステップ、鎧モスラでアタック!!………このスピリットはダブルシンボル!!一度のアタックでライフを2つ破壊する!!」

巨大な翅を広げ、アスラのライフを破壊すべく飛翔する鎧モスラ。さらにこの瞬間、クサリは手札からカードを引き抜いて……

「さらにフラッシュマジック…モスラの歌!!…鎧モスラを回復させる!!」

ー【鎧モスラ】（疲労??回復）

鎧モスラが瞬間的に緑の光を放ち、回復状態となり、このターン2度目のアタック権利を得た。

ダブルシンボルの2度のアタックは最大で4つのライフを破壊できる事になる。このアタックがフルで通れば残りライフ4のアスラは敗北となる。

「つ……ダブルシンボルはマズイ……フラッシュマジック…スクランブルブースター!!このバトル中、シャムシーザー1体を疲労ブロッカーにする!」

「!!」

アスラが引き抜いたマジックは疲労していて行動できないスピリットを緊急のブ

ロッカーに仕立て上げる代物。

「シヤムシーザーでブロック!!」

そんな緊急のブロックに抜擢されたシヤムシーザー1体が鎧モスラに果敢に挑むものの、通り過ぎる風圧だけで吹き飛ばされて爆発してしまう。

「あぶねー!!サンキューなシヤムシーザー……」

一先ずの危機は去り、犠牲になったシヤムシーザーに感謝しつつ、安堵の表情を浮かべたアスラだったが……

「甘い、甘いんだよ……出来損ない!!…鎧モスラはスピリットを破壊した時、ライフ1つを破壊する貫通効果を持つ!!」

「なに!?!」

「そのままブチ抜けええええええ!」

「っ……!!」

へライフ4??3アスラ

鎧モスラが巨大な翅を巧みに羽ばたかせ、突風をもたらず。その突風はアスラのライフ1つを砕いた。

「これでまだデッドラインだぜええ!!鎧モスラ、2度目のアタックだ!!」

「くっ……フラッシュユマジック、スクランブルブースター!!…シヤムシーザーを疲労ブロッカーにして、ブロックする!!」

「ああ?」

2度目の飛翔を行う鎧モスラ。その間、アスラは咄嗟に手札から2枚目のスクランブルブースターのカードを引き抜いて、再びシヤムシーザーを疲労ブロッカーに仕立て上げる。

が、コストの貧弱なスピリットであるシヤムシーザーが強力な鎧モスラに勝てるわけがない。鎧モスラの翅から繰り出される突風に吹き飛ばされ、一瞬で破壊されてしまう。

そしてその突風はまたアスラのライフをも砕いていき……………

「ぐっ…………!!」

〈ライフ3??2〉アスラ

「まだ終わらねえぞ!! 守護神獣モスラでアタック!! ……効果でコアを増やし、ソウルコアの力によりBPを8000にする!!」

「クソっ!! ……ライフで……………ぐっ、うああああっ!!」

〈ライフ2??1〉アスラ

最初に呼び出されたモスラも飛翔し、アスラのライフルを上空からの体当たりで粉々に粉碎する。アスラは余りの勢いに地面に叩き伏せられる。

「……………辛うじてライフが残ったか、だがオマエにもう勝ち目はない……………ターンエンドだ」

手札：2

場：【守護神獣モスラ】 L V 2

【鎧モスラ】 L V 2

バースト：【無】

「まだだ。オレはまだ諦めねえ、次のターン、オレがスピリットを1体でも召喚できたら、2体のアタックで勝てる!!」

クサリがエンド宣言を行う矢先、地面に這い蹲りながらもそう強気な口調で物を言うアスラ。絶対的にピンチな状況でも未だに諦めてはいないが…………

「いや、終わりだよ…………オマエなんぞが相手になるわけないだろう?…………オレの手札にはオマエの使ったスクランブルブースターのようにスピリットを疲労状態でのブロツクを可能にするマジック、『光翼之太刀』がある!!」

「?!」

クサリはアスラを滑稽だと言わんばかりに笑い出すと同時に、手札の白いカードをア

る事が出来なかった……

(はは……なんだよ、それじゃ、ソウルコアも使えないオレなんかいくらバトルの腕磨いたって、頑張ったって、『頂点王』にはなれねーのか……)

薄々気付いてた……オレはどんなに鍛えてもソウルコアは使えない。理屈は知らねーけど、きっとそういう体質なんだって……

だから今まで、バトルの才能がないことは知っていたながらも、オレなりに努力を、鍛錬を積み重ねてきた。だけど、その程度じゃ全く通用しない、届きやしない……外カードバトルーには決して勝てない……

オレはこの世界において無価値で、身分の低いコモンだから……どう足掻いたってソウルコアが使えないから……

「惨めで哀れで仕方ないなア……オマエはこの世界で何者にも成れない!!……きつとそこの『ライダースピリット』に選ばれた天才くんもオマエの事馬鹿にしてるんだろうぜ……?」

そう……………かもしれない……………

ロンは生まれた時から『ライダースピリット』に選ばれるくらい凄い才能を秘めたカードバトラーだった。実際オレよりもずっと強い。

15年一緒にこの村で育ってきたけど、ひよっとしたらオレの事なんて目障りだと思ってるだけかも……………

「もう諦めな、生まれながらの負け犬くん……………!!」

どんだけ努力しても届かねーこともある……………

どんだけ努力してもなれねーものもある……………

そう思えてきた……………

そうだ。あの人の『約束』なんてどうでも良い……………

……………ああ、もう“諦め”……………

「諦めんじゃねえ……………!!」

「?!」

アスラが心の奥底で本気で夢を、約束を諦めようとしたその時、ロンがそれを遮るかのように声を大きく張り上げた。

「諦めんなよアスラ!!オマエのあの人への想いはそんなものか……あの人は俺たちとの『約束』を守った!!……次は俺たちが!!あの人との『約束』を守る番なんだろう!!」

「……!!」

「だから勝て……立ち上がれ!!勝って証明しろ!!奴にオマエの強さを!!……オマエはオレの……ライバルなんだろう!」

「……っ!!」

「……は?……何言っちゃってんのこいつ」

そうだ。

あの人は……

オレとロンにバトルスピリッツを……

生きる術を覚えてくれたあの人は……

オレ達との『頂点王』になるという『約束』を守ってくれた……本当に『頂点王』に

なつてくれた……………

だから、

だから次はオレ達が……………

オレ達が『頂点王になったあの人とバトルする』という約束を果たさないといけねーんだ!!

こんな奴に叩き伏せられてる場合じゃねえええええええ!!

まだだ……………!!

「!!」

「まだオレは諦めねえええええ!!」

再び諦めない心をその身に宿したアスラが立ち上がる。クサリはそのアスラの全身から放たれる凄まじい気迫に思わず圧倒され、一瞬だけだが怯み、たじろいで……

「悪かったなロン……オレがどうかしてた……ちよつと待ってる……直ぐに片をつける……!!」

「フツ……ああ、張り合いのないライバルは御免だぞ」

アスラとロンがお互いの絆を確かめ合ったその直後だった。

あるカード束が赤い光を纏い、浮遊し、どこからともなく、アスラの元へ吸い込まれるかのように現れたのは……

「こ、これは?!……ライダー……スピリット……?!」

思わぬ自体に目を丸くする3人。

その先頭のカードを目に移すアスラ。そして間も無く驚愕してしまう。

何せ、それは自分がソウルコアと同様に喉から手が出る程に欲していた『ライダースピリット』だったのだから……………

「ば、馬鹿な…………まさか選ばれたのか、アイツが、あのソウルコアの無いクズが…………ライダースピリットに…………!?!」

「ハハ…………やっぱりな…………アスラがライダースピリットに選ばれないなんて…………ありえん!!」

ロンがそう言うと、アスラはそのカード達に手を伸ばし、触れ合った。すると、そのカード達は溶け込むようにアスラのデッキの中へと吸い込まれていった。

そして……………

生まれながらにソウルコアが使えない傷だらけの少年の大反撃が幕を開ける

……………

「オレのタアアアアン!!」

アスラは勢いよく自分のターンシークエンスを進行していき、その過程の中でデッキからカードをドロ―した。それは紛う事なきライダースピリットのカードであつて………

「ターン05」アスラ

「メインステツプ……オレはコイツを召喚する……!!」
「!!」

『ライダースピリット』………

それは使い手をカード自ら選ぶと言う奇怪なスピリットの総称。それを得たものは絶対的な力が与えられると言われている。

そして大抵の場合、屈強な戦士のような姿をしている。

………が、必ずと言っていいほどに、『何か別の力を宿している』

……その力は『神』『悪魔』『怪物』などと幅広く存在し、ライダースピリットによってそれぞれ異なるが……

アスラを選んだライダースピリットに宿っていたのは……

………全てを焼き尽くす、赤き龍

「………仮面ライダー―龍騎!!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV2 (2) BP4000

「っ……なんだ、なんなんだオマエは!? ……なんなんだその『赤い龍』は!?」

アスラの対戦相手であるクサリはさつきまでの余裕を完全に無くしていた。何故なら、背筋が凍り、腰が引けてしまうほどに恐ろしいものを目に写していたからである。

それは赤い龍。細長い身体。強靱な爪、顎を持つであろう強大な龍。そしてその龍は空間が張りさけるのではないかと言うほどの強い咆哮を張り上げると、消滅し、その代わりなのか、アスラの場合には赤いライダースピリットが1体現れていた……

その名は『仮面ライダー龍騎』……今後、彼が相棒と呼称していくことになるスピリットだ。

「オレは諦めねえ!! ……召喚時効果!! ……カードをオープンし、対象となるカードを加える!! ……オレは『ストライクベント』を手札に!!」

アスラのデッキからカードがめくられていく。アスラはその中にあるマジックカー

ドを加え、すぐさまそれを使用していく……

「アドベントカード……『ストライクベント』を發揮!!……BP8000以下のスピリット、
守護神獣モスラを破壊!!」

「!!」

龍騎が腰にあるベルトに装着されているカード束から1枚引き抜き、それを左手の龍の頭部を象ったバイザーへと装填。

すると……

……『ストライクベント!』

という無機質な音声と共に、龍騎の右腕に赤い龍の頭部のようなものが取り付けられる。

龍騎はその右腕を守護神獣モスラへと向け、龍の口から爆炎を放つ。勢いよく放たれたそれは守護神獣モスラを瞬く間に包み込んで、焼き尽くした。

「ツ………オレのモスラを破壊しただど!?!」

「さらに追加効果でカードをドロー!!………そしてネクサス、『ミラーワールド』をLV2

で配置!!」

ー【ミラーワールド】LV2(2)

「!!」

アスラはさらにドロ―したネクサスカードを即座に配置する。それを配置した途端、目の前に存在する全ての存在が鏡向きになる。

「なっ……す、全てのモノが……景色が反転している!?!」

当然困惑するクサリだが、アスラはそんな事御構い無しに自分のターンをさらに進行していき……

「アタックステップ!!…龍騎でアタック!!」

アタックステップへと移行し、新たに召喚した龍騎でアタックを行うアスラ。狙うは

当然残り2つのクサリのライフだが……………

「は？……馬鹿め!!やはりコモンだな!!オレの手札には白のマジック『光翼之太刀』があるのを忘れたかああ!!」

そう。

彼の手札にはスピリットを疲労ブロッカーとする力を持つ光翼之太刀が存在する。鎧モスラを対象にされれば一貫の終わりだ。

しかし、アスラはそんな強気な彼の言動など意にも介さず……………

「ミラーワールドの効果発揮!!」

「!？」

配置したネクサスカード、『ミラーワールド』の効果を発揮させる。

「龍騎がアタックした時、カードをオープン。それがアドベントカードの時、ノーコストで発揮する!!……カード、オープン!!」

再びオープンされるアスラのデッキ。その1枚のカードはアドベントカードの1種『ファイナルベント』と呼ばれるカード……………

「よつてこの『ファイナルベント』を発揮!!BP15000以下のスピリット1体を破壊する!!……………鎧モスラを破壊だ!!」
「なにっ!?!」

龍騎が今一度腰のベルトからカードを引き抜き、左腕にあるバイザーに装填。

ー『ファイナルベント!』

と、また無機質な音声がかえってくる。

龍騎の背後に再び赤い龍が身体を唸らせながら現れ、龍騎に力を与える。龍騎は高い跳躍力を活かして跳び上がり、宙を舞う。

そして、鎧モスラへと狙いを定め、直後に繰り出される赤い龍の口内から放たれる火炎弾と共にキックを放つ。これは鎧モスラの固い外骨格を砕いて、その炎で焼き尽く

『ソウルコアを使えない』アスラだからこそ握る事の出来た……
……『ソウルコアが必要の無いライダースピリット』……

………終わりだ。

………後に『ドラゴンライダーキック』と命名されることになるその一撃がクサリを襲う
………

ソウルコアが無くてもオレは!!!………頂点王になるアアアアア!!!………最後まで諦め
ないのがオレのバトスピダアアアア!!!

「ぐっ………ぐああああ!!!」

へライフ2??0くサリ

……ピー

腹の底から湧き出てくるアスラの雄叫びと共に、龍騎のキックがクサリの残ったライフを一気に蹴り壊す。余りの威力に、クサリは吹き飛ばされてしまい、付近のコンクリートの壁に身体がめり込んだ。

そんな彼のライフがゼロなった事により、アスラの勝利を告げるかのようにクサリのBパッドから無機質な音声が始める。

「が……………あ……………」

クサリは気を失っているようであり、もう暫くは十分に身体を動かす事は出来ないだろう。

「ハア……………ハア……………」

凄まじくも激しいバトルにより、アスラは疲弊したのか、息を切らす。

「……………いよつしやあ!!……なんか知らんけどオレも『ライダースピリット』のカードをゲットだアアアアア!!……神様、ありがとうううう!!……一生大事にしまあああす!!」

だが、そんな時間も束の間。アスラはすぐさま呼吸を整え、ライダースピリットを手に入れたという事実と喜びに歓喜する。

「アスラ……………!!」

「!!」

ロンが薄い微笑みを浮かべながらアスラの元まで歩み寄る。

「大きな借りができちゃったな……………だが、いつか必ず返してやる……………!」

「へへ、気にすんなってそんな事。オマエはオレのライバルで親友なんだからな!!」

いつもの何気ない言い合い。それもまたアスラがライダースピリットを手に入れたことによって意味合いも変わってきている事だろう。2人はよりライバルらしい顔つきになっていて……………

「だけどアスラ、『頂点王』になる事だけは譲れない。『あの人』に変わって『頂点王』になるのはこのオレだ!!」

「へっ…そいつはオレも譲れねえ!!オレが『頂点王』になる!!……改めて勝負だロン!!どっちが先に『あの人』に勝てるか!!」

「ああ、オマエに言われなくとも、オレはハナっから競い合ってきたつもりだ……!!」

2人はそう言いながら、最後にはお互いの拳を合わせる。

こうして、最大級のバトルスピリッツファンタジーが幕を開けた。

2コア「頂点王への道」

『頂点王』

それはこの国において最強と呼ばれるカードバトラーにのみ与えられる栄誉ある称号である。

そんな頂点王にバトルを挑むためには難題且つ様々な工程が必要になってくる。

先ず、各地に散らばる6人の『カラーリーダー』とバトルを行い、彼らに勝利した証である『カラーカード』を得る。その『カラーカード』を6種6枚を持つてこの国の中心部にある最大都市『オウドウ都』へと赴き、『三王』と呼ばれる『カラーリーダー』をも凌ぐ実力を誇る3人のカードバトラー達にもバトルを行い、勝利し、その後によく『頂点王』に挑む事ができる。

決して楽な道のりではない。山あり谷ありの険しい道のりである。そのため、大半の挑戦者達が腕試し気分ですべて『カラーリーダー』に挑戦するのだ。本気で『頂点王』を目指すものなど、おそらく手の指だけで足りる程の人数しかいないであろう……………

そして、今の頂点王、もとい、初代頂点王の名は『シイナ・メザ』と言う三十路もま

まならない若い女性だ。

彼女こそ、孤児であるアスラとロンを育てた親のような存在であり、バトルスピリッツのあれやこれをレクチャーさせた張本人だ。アスラとロンは彼女の事を実の母、又は姉のように慕っていた。

だが、彼女はまだ幼かったアスラとロンに

『私は頂点王になる。……あんたらは頂点王になった私に挑んで来な！』

……と、軽いノリのような言い方の言葉を言い残したつきり旅に出てしまった。

その時、アスラとロンはシイナの言っていた事を信じていなかった。何せ、この世界で三王よりも強いカードバトラーなど、当時は誰一人として存在していなかったのだから……

しかし、その数ヶ月後、彼女は恐ろしい速度でカラーリーダーと三王を倒し、本当に實力をこの国に示して『頂点王』の座席に着いた。

その当時は、いや、10年経った今でも凄まじまい快挙であり、アスラとロンはそんなシイナのような最強のカードバトラーに憧れた。自分達の育ての親だった事もあったのだろう。

そして誓った。約束通り、自分達が頂点王であるシイナに挑むと。

生まれつきソウルコアを使うことができないうモンの少年アスラが赤いライダーズピリット『龍騎』に選ばれてから半年が経った現在……………

「おいロン、そんなに離れなくても良いじゃん、一緒に行こうぜ!!」

「ライバルと戯れる趣味はない」

「んな固い事言うなって!!…途中までだよ途中まで!!…どうせ『新人交流戦』が終わったらそれぞれ別れて自分で旅するだろ?」

アスラとロンは故郷であるスーミ村を離れ、長い森の道を歩んでいた。アスラがロンの隣に行くまで歩幅を合わせるが、その後直ぐにロンがアスラを遠ざけるように歩幅を広げる。さつきからこれの繰り返しだ……………

2人が何故こんな長い森の道を歩んでいるのかにはある理由がある。

この世界では、年齢15になる年、『カラーリーダー』と呼ばれるこの国を代表する6人

のカードバトラー達に挑戦する権利が与えられるのだが、この国の中心部に位置し、尚且つ最大都市である『オウドウ都』にて、その新しい挑戦者達を互いに讃えあうべく、コロシアムにて『新人交流戦』が行われるのだ。

アスラとロンはそこに参加するべく、長い旅路を歩んでいたのだ。

だが、その後にスーミ村に帰郷する予定はなく、バトル交流会後、そのまま各地の街に散らばっているそれぞれのカラーリーダーに挑戦するつもりであった。そして、三王に挑み、自分達を育ててくれた恩人であり、師である、『頂点王』に挑むのだ。

「ああ、もうすぐシイナに会えるんだな〜!!…成長したオレの姿を見たらなんて言うかな〜!!」

余程楽しみなのか、アスラはその目をキラキラと輝かせていた。

それもそのはず、何せ、『オウドウ都』と言えば、三王と頂点王であるシイナが住まう場所であり、挑戦者が彼らにチャレンジする場所でもあるのだから。

アスラは頂点王であるシイナに久し振りに会える事を楽しみにしていた……………

「何言ってるんだ。頂点王であるシイナが新人交流戦なんかに行くわけないだろ？」

「ええ!? そうなのか!？」

「オレたちが思ってる以上に頂点王の立場は忙しいんだ。きつとな」

が、現実はそのはいかない。

ロンの言う通り、頂点王であるシイナはその新参の挑戦者が集新人交流戦には参加しない。そもそも、頂点王自体、滅多な事が無ければ顔を拝むことすらできない。

「ちえ、じゃあホントに三王を倒すまではお預けか〜」

「そう言う事だ。まあ、先に三王を倒すのはオレだけだな」

「んだとロン!! オレだろ!! オレが三王とシイナに勝って新しい『頂点王』になる!!」

「いや、オレだ」

「オレだ!!」

「オマエの身長の高さでオレより前に歩けるわけがない」

「身長関係ねえ!!」

ちよつとした事で軽い言い争いになる2人。しかし、これはいつもの事、親友だからこそできる微妙なニュアンスで伝わる会話のようなものに近い。

「旅は道連れ!!…行くぞ!!」

「っ!!…おい、引っ張るな!!」

アスラに無理矢理袖口を引っ張られて連れて行かれてしまう。ロンはアスラの非合理的な行動に若干呆れるも、渋々着いていく事になった……

…

「んんんこころ辺から響いて来たと思うんだけどな〜」

「もうどっかに走り去っていったんだろう?…いい加減進路を戻してオウドウ都に向かうぞ…まだまだ先は長いんだ」

腰まであるくらいの草原を掻き分けながら鳴き声のした方角へと歩みを進めるアスラとロン。しかし、肝心の鳴き声の正体は中々見つからず……

「まあまあ、後3日あるんだから、ゆっくり探そうぜ〜」

アスラは呑気だ。

確かに、この森を抜ければオウドウ都に着く。一見近く感じるかもしれない。

が、それは真つ直ぐで安全な最短ルートを通った時の話であつて、一度迷つて仕舞えば取り返しがつかない事になるのは明白。そんなアスラを早くどうにかして心変わりさせてやらなければとロンが考えた直後……

……むええええええええええ!!!

「!!」

「つ!!……つしやあ!!……今度は逃さねえぞ!!そこら辺かあああ!!」

今一度甲高い鳴き声が聞こえてきた。しかも一回目よりも断然近くでだ。

アスラとロンはその声のする方へと走り出した。緑豊かな木々の間を抜けていき、辿り着いた光景は……

……

「(っ)かああああ!!」

アスラが叫びながら鳴き声のする方へと突撃した。その直ぐ後ろにはどうでも良さそうな顔でいるロンも続いていた。

散々探した鳴き声の主、

その正体とは……………

「早くこんがり焼けねえかな〜」

「むええええええええええ!!」??泣きじゃくつてる

「え……………ナニコレ……………」

アスラとロンが見た光景は人相が悪くて長身で筋肉質な男がオレンジ色の毛並みを

したへんちくりんな小さい生き物の前脚後脚を縛って吊し上げ、焚き火で炙っていると
いうものであった……………あの生き物の鳴き声は助けを求めような悲鳴だったのであ
る。泣き顔である事からそれを痛い程察した……………

別にそれ自体は割とありがちなのかもかもしれない。腹を空かしたらそこらへんの生き
物を食べる。昔の人間の習慣だ。

が、異様に感じたのはそのオレンジ色の毛をした40cmくらいの生き物。これが
「むええええええええええ!!」の声の正体であるのは明白だったが、その姿形が謎だっ
た。

……………オレンジ色の毛意外の特徴と言えば、垂れている耳と尾が黒い事、後、哺乳類に
は見えるが、犬と言うには顔はどちらかと言えば猫だし、猫と言うには耳と尾の形が変
だ……………それに脚も犬猫とは思えないほど短い。凄くマスコツト感がある。……………何よ
り頭部にあるふさふさの髪と、そこから生えた角みたいなアホ毛、また鳴き声がその生
き物の異端さを語っていた。

そしてあのガタイのいい男……………顔とか表情とかが何人も人を殺してきた目だ。そ
んな彼があんな行為をしているのだ。これは食料補給とかじゃなくて単に動物を虐待
しているだけなんだなど、勝手に認識したアスラは若干の戸惑いを見せながらも、この
件に全力で突っかかっていく……………

「…………お、おい、オマエ!!なんか知らねえけど、動物虐めたらダメだろおおお!!」

そのガタイのいい男に勢いよく人差し指を刺して突っかかるアスラだったが…………

「ああ!?!うるせえ、殺すぞ」

「えええええ!!」

ガタイのいい男はアスラを脅すように殺意全開で威圧をかけてきた。アスラは初対面でいきなり理不尽な殺人宣言をされて困惑する。

「だいたいなんだテメエは、動物愛護団体かなんか??:オレは今、腹減ってんだ。飢死しそうなんだよ、ゆっくりあの犬食わせろやコラア…!!」

「ギャアアア!!頭がアアア!!……………って言うかアレ犬なのおおお!!」

ガタイのいい男はアスラの頭を片手で鷲掴みにし、力任せに握り潰そうとする。それと同時にあのオレンジの生物が犬だと判明した。

アスラは抵抗するように両手でそれを引き離そうとするが、男の力が強すぎて一向に離れる気配がない。

「10……………9……………8……………7……………」

「えええええ!? なんのカウントダウン!?」

「オマエが死ぬまでのタイムリミット」

「いやあああああ!!」

殺意が凄まじ過ぎてどこまで本気なのか定かでは無いが、さらに握力を上げ、アスラの頭を握り潰そうとするガタイのいい男。アスラは本気で恐怖を覚える。

「楽しそうだな、アスラ。じゃあオレはオウドウ都へ向かうぞ」

「いや、待ってくれロン!! 助けてくれえええ!!」

「自業自得だ」

「この薄情者おおお!!」

見兼ねたロンがその場から逃げるように立ち去ろうとする。クールな言葉を並べて

はいるが、その声色からは若干アスラと同じ目には会いたく無いと言う念が伝わって来
て、

しかし……………

「アスラ……………ロン?……………オマエらの名前か?」

「え?……………あつはい。そうっすけど……………」

「……………ほお?」

アスラとロンの名前を聞くなり、ガタイのいい男はアスラの頭を離し、カウントダウ
ンを中止した。そして不気味な角度で口角を上げ、微笑むと、オレンジの毛色をした犬
??を吊るしていた縄を解き、解放した。

態度の唐突な急変に戸惑うアスラとロン。さらにガタイのいい男は懐から煙草を取
り出し、それに焚き火を利用して火をつけ、吸い始める。そしてその後直ぐにとんでも
ない事を口にし……………

「よしオマエら、この犬を連れて行け」

「えええええ!!」

「むえっ!!むえっ♪」??ツツテケテー

男が偉そうな態度でそう言った。どうやら別に動物を虐めていた事に対しての反省はしていないようである。が、そのオレンジの犬??はこの男の言い分に賛成しているのか、喜んでアスラとロンの周囲を自由になった短い脚でツツテケテーと駆けていた。

「因みにオマエ達に拒否権は無い」

「えええええ!!」

困り果てるアスラとロンをさらに威圧して脅すガタイのいい男。

「つてか、さつきまでコイツ食おうとしていたのはなんだったんすかアア!!」

「うるせえ、拒否権は無いっつてんだろ小僧!!今度こそ頭潰されたいか!」

「嫌です!!精一杯お世話させていただきまアアアアアス!!」

(……恐怖がアスラの身体に植え込まれている……)

アスラは『別になんの否定もしてねえええ!!』とも思ったが、さつきの経験により、

この男に逆らったら命は無いと言う事を学習したため、この変な犬??の世話を引き受けてでもいいからなんとかこの場を早めに締め括ろうと、これ以上の口答えをせず、綺麗な角度で頭を下げた。

「むええええええええええ!!」

「つてオイイイ!!頭の上に乗るなアアア重てえ!!」

そんなお辞儀で下げたアスラの頭の上にあのオレンジの犬??が元気に飛び乗って来て……

「むええええええええええ♪♪」??髪の毛あむあむ

「髪の毛あむあむするなアアアアア!!」

オレンジの犬??はアスラの頭の上で灰色のツンツンヘアーを甘噛みし始めた。その犬??はたいへんご満悦な態度である。さつきまで逆に食べられそうになっていた生き物には到底見えない。

「わっはっはっは!! 楽しそうじゃねえか!! …… そんじや、元気でやれよ、クソ犬、『スミ村』の小僧供!!」

「ハイハイハイハイ!! なんか色々すんませんしたアアアアア!!」

「……??」

そう言つてオレンジの犬??を残し、タバコを片手に去つていくガタイのいい男。アスラはもう関わりたくなかつたからか全力で謝つた。対してロンは彼の最後に言い残した言葉に少し引つ掛かつた。

(あの人、なんでオレらがスミ出身つて分かつたんだ?)

そう、

アスラとロンは一言も自分達の出身地を口にしてはいない。それなのにもかかわらず、あの男はそれをズバリ言い当てた。

この時、ロンはどうでも良い事だったのもあつて、特に言及はしなかつた。

こうして、アスラとロンは旅に1匹の奇妙なオレンジのアホ毛犬??を連れて行くことになつた。

「うおおおお!!…デツケエエ!!…そして広えええ!!」

「アスラ、うるさい」

「でも見ろよロン。あんな鉄の建物なんてスーミには無かったよな!」

「スーミの家は大体木かレンガだからな」

あの奇妙な出会いから3日後、アスラとロン、そしてオレンジの犬??はようやく目的地である『オウドウ都』への到着した。アスラはその街の巨大さ、広大さにテンションが高くなっていた。

オウドウ都は仮にもこの国の中心部。人も多ければ建物も巨大になるのはある意味自然な現象であるが、田舎者である彼らにとってはやはり感動的な光景であったのだろう。

「あのデツカイ塔が三王と頂点王が住う場所みたいだな」

ロンがBパッドのナビシステムを視認し、その塔を指差しながら落ち着いた口調でアスラに言った。

「へえ〜〜じやああそこはいずれオレの根城になるわけだ!!」

「……………それはあり得ん。今日オレ達がバトルするのはあそこじやなくて向こうのコロシアムだ」

アスラとロンの夢は今の頂点王、つまり『シイナ』を倒し、新しい頂点王になる事。だが、それは一人しかなれない。だからこそ彼らは昔から競い合っていた。「どっちが先に頂点王になれるのか？」と……………

今日はその第一歩がある場所、オウドウ都コロシアムにて、新人交流戦が行われる。アスラとロンは早速そこへと足を進めていった……………

「つてか、オマエいつまでオレの頭に乗ってんだ？」

「むえっ♪…むえむえ!!」

「いや、何言ってるのかわかんねえ……………でも機嫌が良いのだけはなんか伝わるな」

因みに、オレンジの犬??は1日のほとんどをアスラの頭の上で過ごしていた。上機嫌に尻尾を振っている事から、どうやらすっかりそこがお気に入りなの定位置になったようである……………

ここはオウドウ都のコロシウム。横幅が広大、形が円形であり、上空が空いている。コロツサスと言えば連想がしやすいか……………

そんな場所にアスラ達含めた総勢百数人を超える新人挑戦者が集っていた。彼ら皆が今日からカラーリーダーに挑む挑戦権を得る事ができるのだ。

「いや〜遂にオレ達の挑戦が始まるんだなロン!!」

「……………ああ!!」

「むえっ♪」

期待で胸を膨らませるアスラとロン。今までこの時のために努力、特訓をし、日々腕を磨いて来たのだ。絶対に頂点王になると言う意気込みがそこから伝わってくる。

その言葉の意味を理解しているのか、アスラの頭の上に鎮座しているオレンジ犬??は嬉しそうに尻尾を振りながら鳴き声を上げた。

が……

「……見ろよアレ、『コモン』だぜ」

「見窄らしいよな〜〜なんであんな薄汚いのにまで平等に栄誉ある新人交流戦に参加させるんだよ」

「でも片方はかっこよくない？」

周囲から2人を非難する声が聞こえて来る。しかもわざと彼らに聞こえるようにだ。身分が低ければ低い程差別が大きくなる世界だ。彼らにとつて最底辺のコモンであるアスラとロンはその身分、身なりだけで価値が下がるのだろう。当然同じ人間ではあるはずなのに………

しかし……

「あつはは!!酷い言われようですな〜〜まあ慣れてるけど……てか、聞いたかロン、『片方はかっこよくない?』だつてさ!!残念だつたな!!」

「いや、アスラそれは……まあいいか」

『それは多分オマエじゃなくてオレの事だ』と言いかけるロンだったが、そんな事言ったら自分が自意識過剰に思われるため、真実を敢えて隠した。まあ、側から見てもイケメンで長身のロンとは違い、背が低くて声が大きいいアスラは女性にモテる要素がほぼ存在しないので、わざわざ口にしなくても一目瞭然なのだが……

それはともかくとして、アスラとロンは周囲の自分達を蔑んだ声など全く気にしていなかった。元々貧民で下民のコモンである彼らは上の人間達に差別されるのは日常茶飯事、慣れていたので。だが、それでも彼らの器の大きさは只者では無いのは確かであるが……

「むえっ!!むえむえっ!!むえええええええええ!!」??プンスカ!

「おつ、『ムエ』…オマエ怒ってくれてるのか?」

オレンジ犬??がアスラの頭の上で周囲のアスラとロンを非難するような言葉に腹を立てたように威嚇の鳴き声を上げる。まあ、それでも可愛さは抜けないが……

「『ムエ』？」

「ああ、コイツの名前!!呼びやすいだろ!!コイツ『むえ』って鳴くしな!!」

アスラはロンの知らぬ間にオレンジ犬??に「ムエ」という名前を付けていた。この3日間でもとでも仲良くなっていた事が伺える。

「いつ始まるんだろうな!!交流戦!!楽しみだぜえ!!」

アスラは今か今かとそれが始まらないかと待ちわびていた。

今、新人達がコロシアムに集まっているのはその交流戦が始まるのを待っていたのだ。本来ならばこれを『仕切る上位層の人間』が毎年現れるはずなのだが、今回はその様子が一切見えなかった。

と、そんな時だ。誰かがアスラとロンに声を掛けてきたのは…………

「ブツハハ!!オマエらがアレか!!…世間知らずで身の程知らずのコモンか??」

「ん?……だれ?」

「オレは『トミオ・ブスジマ』!!…オマエらと同期の新人だ!!…ブツハハ!!」

現れたのは『ブスジマ』と名乗る体型太めの男。所々で出てくる『ブツハハ』という独特な口癖が妙に頭に残る。どうやら彼も新人のようであるが、その言動、態度、振る舞いから、アスラとロンを良いような目で見ているとは思えなくて……

「……同期!!……なんて甘美な響きなんだ……!!」

だが、アスラにはそんな嫌味は通じない。ブスジマの言った『同期』という言葉の嬉しさに何故だか感動を覚えていて……

「オレ、スーミ村のアスラ!!……よろしくなブスジマ!!」

さらには好意的に握手まで求めようと手を差し伸べる程だ。ブスジマはそんなアスラの様子に鼻で笑いながら手をどかし、嘲笑するように……

「ブツハハ!!なに馴れ馴れしくしてんだ。聞こえなかつたか?オマエ達ドブネズミはこの場には相応しく無いって言ってるんだよ!!」

「……………」

蔑んだ目でアスラを見ながら汚い言葉を押し付けるブスジマ。周囲の者達は彼の行為を咎めるどころかささらに言つてやれと言つてくる次第である……

身分の違いだけでここまで差別されるのがこの世界の暗黙の了解なのだ。アスラとロンはただ単に『コモン』と言う理由だけで非難や差別されてしまう。

「そんな生意気な奴らはこのオレ様がボッコボコにしてクソボロの村にお返ししてやるぜ、ブツハハ!!」

まだまだイキルブスジマは懐から自身のBパッドを取り出し、それをアスラに向けてセツトする。これにより、アスラが応答したら直ぐにでもバトルスピリッツが開始されることになった。

「へへ………良いぜ、相手になってやるよ!!」

「むえっむえっ!!」??アスラの頭から降りる

アスラが当然これを断るわけがなく、自信満々な顔つきのまま、Bパッドをブスジマに向けてセットした。ムエは自分が邪魔になる事を咄嗟に理解したのか、アスラの頭の上から飛び降り、邪魔にならないようロンの足元までツツケテーと駆け出した。

そして……………

「ブツハハ!!行くぜえ!!」

…………ゲートオープン、界放!!

大勢の同期の新人達が見守る中、アスラとブスジマのバトルがコールと共に幕を開ける。そしてこれは当然交流戦でのバトルではなく、単に普通の野良バトルが始まっただけであり、この後も普通にその交流戦でのバトルは行わなければならない。

今回の先行はブスジマだ。勢い良く自分のターンを行なって行く。

「ターン01」ブスジマ

「ブツハハ!!メインステップ、オレはボーン・バードを召喚!!」

ー【ボーン・バード】LV1(1) BPI000

ブスジマが早速Bパッドに叩きつけながら召喚したのは骨のみとなった鳥型のスピリット、ボーン・バード。

「召喚時効果でデツキの上から3枚を破棄し、1枚ドロ………ブツハハ!!これでエンドだ!!……さあ、惨めな姿を晒しな!!」

手札：5

場：【ボーン・バード】LV1

バースト：【無】

できる事を全て終え、そのターンをエンドとするブスジマ。次はアスラのターンだったか………

ここでブスジマがある事に気づいた。

「ブツハハ!?…オマエソウルコアはどうした?!」

そう、それはアスラのBパッドにソウルコアが置かれていないという事だ。

「ん?…ああ、オレ生まれつきソウルコアが出せねえんだ」

アスラがそれについて説明した。

アスラは生まれつき、ソウルコアが出せない体質の人間。どんなに欲しても、どんなに体を鍛えても、どんなにバトルの腕を磨いても彼のBパッドからはソウルコアが生み出されないのだ。

アスラの説明に沈黙する周囲の新人達。だが、そんな時間はほんの束の間だった
……………

「ブツ!!ブオツハツハツハツハ!!?!?…はあ?ソウルコアが出せない?!!?なんだそりゃ?!冗談抜かすなよ?!!」

ブスジマが腹を抱えて笑い出した。そしてそれを起点に周囲の新人達もアスラを笑い出した。それもそのはずだ。ただでさえ落ちこぼれのコモンの人間に、まさかソウルコアも生み出せないバトラーがいるなど、誰が考えたか……

側から見たら哀れでしょうがない。笑いの対象以外の何者でもない。

「いや〜全く参ったもんだよな〜はっはっはっは!!」

まあ、当の本人はそんな事全く気にしてなかったのだが……

確かに、ソウルコアが欲しいと思わなかった時はない。が、あの龍騎を得てからと言うもの、アスラは誓っていた。『ソウルコアを使わなくてもなくても最強になってみせる』と……

「よし!!オレのターンだな!!」

「ブツ、ああ、オマエのターンだ……精々もがいてくれよ〜」

ブスジマがアスラに対しての笑いを必死に堪えながら改めてアスラにターンを渡す。アスラはそれを聞くなり勢い良くターンを進め……

「ターン02」アスラ

「メインステップ、オレはドラゴンヘッドとシヤムシーザーをLV1と2で召喚!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【シヤムシーザー】LV2(3)BP3000

アスラが勢い良くBパッドにカードを叩きつける。呼び出されたのはドラゴンの頭部と翼のみを残した低コストスピリットのドラゴンヘッドと、背に刺々しい刃を生やす赤いトカゲのようなスピリット、シヤムシーザー。

「さらにネクサスカード、ミラーワールドを配置する!!」

ー【ミラーワールド】LV1

「!!」

アスラがネクサスカードであるミラーワールドを配置した。すると、そうした途端に全ての景色が鏡写しになったように反転した。

「な、なんだこれ、左右反対になったぞ??」

見たこともないカードにたじろぐブスジマや周囲の新人達。これはアスラとロンに与えられたライダースピリットにしか与えられないカードであるため、知らないのは当然である。

「つしやあ!!アタックステップウウ!!…2体のスピリットでアタックだツツ!!」

「……ライフだ。持っていきやがれ!!……っ!!」

へライフ5??4??3へブスジマ

アスラの指示で飛翔するドラゴンヘッド。そして地を這って進むシャムシーザー。2体はそれぞれ1つずつ体当たりでブスジマのライフバリアを粉々に粉砕した。

「ターンエンドだ!!」

手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【シャムシーザー】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

できる事を全て終え、爽快なターンをエンドとしたアスラ。次は再びブスジマのターンとなる。

「ターン03」ブスジマ

「メインステップ、ブツハハ!!馬鹿め、何も考えずにフルアタックとは、知らないカードを使うとは言え、やはりコモンでソウルコアが使えない出来損ないだな!!……オレは2体目のポーン・バードを召喚!!……デッキから3枚のカードを破棄し、1枚ドロロー!!」

ー【ボーン・バード】LV1（1）BP1000

2体目のボーン・バードを展開し、その手札の枚数を維持するブスジマ。さらにまだ動くと言わんばかりに手札のカードを1枚抜き取り…………

「ネクサスカード、ダークタワーを配置!!」

ー【ダークタワー】LV1

「!!」

ブスジマの背後に漆黒の色をした塔が配置された。その塔から放たれる異質な気配はスピリットの進化を封じ込めるものであって…………

「このダークタワーがある限り、オマエのターン中、お互いに【煌臨】できず、ノーコス
ト召喚ができない!!…まあ、ソウルコアが使えないオマエには【煌臨】の無効なんて意
味ないけどなブツハハ!!」

ソウルコアの使えないアスラの前では「煌臨」の封印は無意味だというのに、効果の説明を誇らしげな表情で言い放つブスジマ。どう考えてもアスラに対する嫌味だ。

「でもってオレはこれでターンエンドだ!!」

手札：5

場：【ボーン・バード】LV1

【ボーン・バード】LV1

【ダークタワー】LV1

バースト：【無】

「あれ？アタックしねーの？」

「ブツハハ!! 愚問だな!! オマエくらいレベルのバトラーなんてまだアタックしなくても勝てるんだよ!!」

アタックをして来ないブスジマに対してアスラは疑問符を浮かべる。そんな彼は自信満々でその理由をペラペラと述べた。完全にアスラを舐めてかかっている。

次は再びアスラのターン。今一度ターンシークエンスを進行させて行く。

【ターン04】アスラ

「メインステップ!!ミラーワールドのLVをアップだ!!」

ー【ミラーワールド】(0??2) LV1??2

アスラはリザーブの少ないコアでミラーワールドのLVを上昇させる。

「そしてそんなままアタックステップウウウ!!シヤムシーザー!!もっかい頼む!!」

「ライフだブツハハ!!……っ!!」

〈ライフ3??2〉ブスジマ

シヤムシーザーが再び地を這つめ進み、ブスジマのライフバリアに突撃した。そのまま体当たりで彼のライフ1つを砕く。

「ターンエンドだ!!」

手札：3

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【シャムシーザー】LV2

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

アスラのこのターンはドラゴンヘッドをブロッカーとして残してのエンドとなった。次はブスジマのターンだ。勢い良くターンシークエンスを進行させて行く……

「ターン05」ブスジマ

「ブツハハ!!メインステップ、一気に畳み掛けてやるぜ……オレは手札からマジックカード、リターンスマークをソウルコアを支払って使用する!!」

「!!」

ブスジマはソウルコアが使えないアスラに見せつけるようにそのカードを使用した。それはソウルコアを使用する事で力を120%発揮できるカードであって……

「この効果により、オレはコスト4以下のスピリットを召喚する!!さらにコストの支払いにソウルコアを使った際、代わりにコスト6以下のスピリットを召喚できる!!」

「!!」

「来い、オレのエーススピリット!!…アルケニモン!!」

ー【アルケニモン】LV3（5）BP10000

ブスジマの場に紫色の煙が立ち上がる。その中から勢い良く飛び出してきたのは『デジタルスピリット』と呼ばれるやや特殊なスピリット……下半身がクモのような姿をした完全体のアルケニモンだ。

ブスジマはボーン・バードの効果でトラッシュを増やし、リターンズモークの効果で強力なスピリットを呼ぶための準備をしていたのだった……

「おお、デジタルスピリットか!!」

「ブツハハ!! そうだ!! 羨ましいだらろ〜!!」

「羨ましい!!」

デジタルスピリットの登場により興奮するアスラ。凄くこのバトルを楽しんでいるのが伺える。これは自分達コモンを惨めな者にするためのバトルだと言うのになだ。

そして『デジタルスピリット』とは、『ライダースピリット』と並ぶカードカテゴリーの総称である。『ライダースピリット』程ではないが、それなりにレアなカードもあり、市販に売られているものや、『マスター』や『エックス』などの上位の人間達で代々受け継がれたりしている。

因みに、このアルケニモンは市販のデジタルスピリットであり、ブスジマの身分は所謂平民である『レア』だ。

「ブツハハ!! バーカ、コモンで、しかもソウルコアも使えないオマエにはすぎたカードなんだよおおお……アタックステップ、アルケニモンでアタック!!」

そんなブスジマが呼び出したアルケニモンが戦闘態勢に入る。そして、アルケニモンにはこのタイミングで使える効果がいくつか存在し……

「先ず1つ目のアタック時効果!!…疲労状態のスピリット1体を破壊し、コア1つをアルケニモンに追加する!!」

「!!」

「ブツハハ!!対象は当然シャムシーザーだ!!」

アルケニモンが上半身にある手から闇のエネルギー弾を生み出し、それを疲労しているアスラのシャムシーザーに向かって投げつけた。避ける術がなかったシャムシーザーはそれに被弾し、爆発してしまった。

「そして2つ目のアタック時効果!!…紫1色のネクサスカードがある時、デッキの上から2枚をオーブンし、その中の完全体スピリットを召喚できる!!」

「なに!?!」

ブスジマの場には紫1色のダークタワーがあるため、この効果を発揮。カードがオーブンされる………そしてその中には紫の完全体スピリットである『マミーモン』のカードが確認できて………

「ブツハハ!!…大当たりだぜえ!!…よつてこのマミーモンを召喚する!!…アルケニモンのコアから確保してLV2だ!!」

ー【マミーモン】LV2（3）BP12000

LV2で召喚するためにアルケニモンのLVが3から2へと下降されるが、ダークタワーの頂点からミイラのように包帯だらけのスピリットが場へと飛び降り、アルケニモンの横に着地した。それは紫の完全体スピリット、マミーモン。ブスジマのもう1体のエースと呼べるスピリットである。

「ブツハハ!!アルケニモンのアタックは継続しているぞ!!」
「ライフだ!!…っ!」

へライフ5??4へアスラ

アルケニモンがアスラ目掛けて走り出した。そしてそのまま鋭い爪でアスラのライ

フーつを切り裂いた。

「ブツハハ!!まだまだ続くぞ!!マミーモンでアタック!!……その効果でオマエのドラゴンヘッドからコア2つをリザーブに置き、消滅させる!!」

「!!」

マミーモンが手に持っている機関銃を上空にいるアスラのドラゴンヘッドに向けて連射する。アスラの場合にいる唯一のプロツカーであったドラゴンヘッドはたちまち撃ち抜かれ、消滅してしまった。

「ブツハハ!!さらにマミーモンは場にアルケニモンがいる時、BPをプラス5000さ
れ、紫のシンボルが1つ追加される!!」

「!!」

マミーモンはアルケニモンがいる事によって真価を発揮するスピリット。このアタックを受ければアスラのライフは一気に2点削られる事になる。もつと言って仕舞えば残った2体のポーン・バードアタックと合わせて全てのライフを破壊されてしまう

可能性すらある。

「やるな!!……でも、ここは凌がせてもらうぜ!!フラッシュマジック、ドラゴフレイム!!」

「ブツハハ!」

「この効果により、BP3000以下のスピリット全てを破壊!!……つまり、BP1000のボーン・バードは破壊される!!」

アスラの場合より放たれる炎の弾丸。それがブスジマの場に存在する2体のボーン・バードを焼き尽くした。

「マミーモンのアタックはライフで受けてやるよ!!……っ!!」

へライフ4??2へアスラ

マミーモンはアスラのライフにも機関銃を発泡する。アスラのライフは2つ撃ち抜かれ、残りは2つとなった。

が、先のマジックによりボーン・バードは消えた。ブスジマがこのターンのみでアスラのライフをゼロにするのは不可能になり……………

「くっ……………思ったよりしぶといな。ゴミのコモンの分際で……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【アルケニモン】LV2

【マミーモン】LV2

【ダークタワー】LV1

バースト：【無】

致し方なくそのターンをエンドとしたブスジマ。次はマジックで彼の攻撃を凌いだアスラのターンだ。そのターンシークエンスを進行させて行く……………

「ターン06」アスラ

「メインステップ……………」

メインステップ開始直後、アスラは徐に3枚の手札の中から1枚のカードを引き抜いた……………

……………そのカードはブスジマ含む周囲の新人挑戦者達を驚愕させるには余りにも十分過ぎるカードであって……………

「オレは……………仮面ライダー龍騎を召喚!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2（2）BP4000

「な……………なにいつ!?ライダースピリットオ!?!……………何故コモンの人間がそんなカード持ってやがんだ!?!」

一瞬にしてアスラの場に現れたのは赤いライダースピリット、その名を龍騎。

ソウルコアが使えなくても頂点王になる事を諦めなかったアスラが努力の末手に入れた、『ソウルコアを必要としないライダースピリット』だ。

ざわつき始めるロンを除いた新人達。それもそのはずだ。何せ、散々蔑んできたソウルコアさえ使う事ができないコモンの人間が唐突に秘宝級のレアカードを召喚してき

たのだから……

「召喚時効果、オレはカードを3枚オーブンし、対象のカードを手札に加える……『ファイナルベント』を加えて、残りは破棄!!」

「な、何かの間違いだろ??……あのコモンの人間が『ライダースピリット』に選ばれるわけがない!!」

そう、ブスジマの言う通り、通常ならば『エックス』か『マスター』といった上位の人間しかライダースピリットに選ばれない。アスラやロンの『ライダースピリット』は例外中の例外といって差し違えなかった……

「そ、そうだ!!どちらにせよあのソウルコアも使えない奴が召喚したんだ!!仮にライダースピリットだとしても強いわけがない!!……ほら、どつからでもかかって来い!!返り討ちにしてやるぜブツハハ!!」

アスラの龍騎を勝手に弱いと決めつけ、開き直るブスジマ。その自信にも訳があった。彼の手札には防御用の白マジック、自軍のスピリット全てを回復させる『ピュアエ

リクサー』があるからである。これにより、2体のデジタルスピリットを回復させ、アスラの攻撃から身を守る事ができるのだ……………

しかし……………

「おう……………んじゃ、行くぜ……………!!」

アスラはブスジマの言葉に対して静かにそう返答すると、ターンをさらに進行させていき……………

「アタックステップ!!……………龍騎でアタックする!!」

「はあ!?!……………終わったな!!それだけではオレのライフは全て破壊できない!!」

「それはどうかな?……………ミラーワールドの効果!!龍騎がアタックした時、カードを1枚オープンできる。それがアドベントカードの時、ノーコストで発揮する事ができる!!」

「!?!」

アスラはアタックステップに移行し、ミラーワールドの効果を発揮される。そしてその効果でオープンされたのはアドベントカードである「ストライクベント」のカード。

見事に的中させた。

「つしゃあ!!……このストライクベントを發揮!!……BP8000以下のスピリット、アルケニモンを破壊して1枚ドロ!!」

「!!」

龍騎が腰にあるベルトに装着されているカード束から1枚引き抜き、それを左手の龍の頭部を象ったバイザーへと装填。

すると……

……『ストライクベント!』

という無機質な音声と共に、龍騎の右腕に赤い龍の頭部を模したガントレットのような武器が取り付けられる。

龍騎はその右腕をアルケニモンへと向け、龍の口から爆炎を放つ。勢いよく放たれたそれはアルケニモンを瞬間に包み込んで、焼き尽くした。

「龍騎のアタックは継続中!!」

「つ……馬鹿かオマエ!! 返り討ちにするって言っただろ?? ……フラッシュマジック、

ピユアエリクサー!!…効果によりマミーモンを回復させる!!」

「…………!!」

ー【マミーモン】（疲労??回復）BP12000??7000

ブスジマが咄嗟に放ったマジックによって、マミーモンは回復状態となる。アルケニモンの破壊に伴って、BPが大幅にダウンしているものの、龍騎には未だに勝っていて…………

「さっさと古びた故郷に帰りな!!底辺で衰れなコモン!!……オレは適当にカラーリーダーを倒して、『カラーカード』を売って、金儲けて、適当に良い思いしとくからよ!!」

「……………」

カラーリーダーに勝つ事によってもらう事ができる『カラーカード』は売ることによって相当な金額がもらえるのだ。もちろん、売って仕舞えば三王に挑む事は出来なくなる。挑戦するには6枚の『カラーカード』を持参しなければならないからである。

まあ、逆に『カラーカード』を購入することはできない。お金だけで三王に挑む事ができるのが可能になってしまふのが理由だ。

カラーリーダーに挑む挑戦者なんて、大半はそんな金儲けが目的だ。だが、少なくとも、この場にいるアスラとロンは違う……………

「フラッシュマジック……………『ファイナルベント』!!」
「!!」

龍騎が再び腰のベルトからカードを1枚引き抜き、左手のバイザーにそれを装填

……………

……………『ファイナルベント』!!

と、また無機質な音声が続いた……………

龍騎の背後に赤き龍が身体を唸らせ、咆哮を上げながら現れる。

「この効果によりBP15000以下のスピリット、マミーモンを破壊!!」

「はあ!？」

「ドラゴンライダーキックツツ!!」

高い脚力を活かし、赤き龍と共に上空へと跳び上がり宙を舞う龍騎。そして、マミーモンへと狙いを定め、直後に繰り出される赤い龍の口内から放たれる火炎弾と共にキックを放つ。マミーモンはその強烈な一撃を受けて堪らず爆散してしまう。

「ブツハハ?!?!…アルケニモンに続いてマミーモンまで!?!」

「さらにファイナルベントの追加効果!!…龍騎に赤のシンボルを1つ追加する!!」
「なにい!?!」

よって2つだ。今の龍騎は一度のアタックで2つのライフを破壊する事が可能となった。

ブスジマのライフも残り2つ………終わりだ………

ブスジマの眼前まで接近した龍騎が右の拳に赤い炎の力を溜め込み………

「行け、龍騎!!」

「ぐっ………ブツガアアアア
!!?!?!?!」

へライフ2??0へブスジマ

……ピー

極限まで溜められた龍騎の拳がブスジマのライフを全力で殴り壊す。彼のライフがゼロになった事によって、Bパットから負けを知らせるブザーの音が鳴り響いた……

「ブツ……ハハ……ハ……ハ……」

ブスジマはアタリどころが悪かったか、軽い脳震盪で気を失っていた……

何はともあれ、勝者はアスラだ……身分は最底辺のコモンで……しかもソウルコアが使えない、あのアスラが……圧倒的な実力差を見せつけて勝利して見せた……

「……アスラ、オマエに勝てるのはオレだけだ……!!」

「むえええええええええ!!」??嬉しい

まさかのコモンの勝利により、嘩然とするロンを除いた新人達。そんな中ロンはその光景を微笑ましく見つめながら己のライバルに対してそう呟いた。ムエもアスラの勝利を祝うように鳴き声を上げていて……………

オレは適当に良い思いするためカラーリーダーにバトルを挑むんじゃねえ!!……………死ぬ気で頂点王になるために挑むんだ!!

バトルの終了に伴い、Bパットが強制的に機能を停止させ、龍騎が場からデジタルの粒子となつて消滅した直後、アスラは氣を失つて耳も傾ける事ができないブスジマに大きな声で言った。

「頂点王つて……………アイツ、コモンのくせになに言つてんだ……………?」

「身の程を知れつての、頭おかしいんじゃね?」

アスラがコモンなのに頂点王となると言い出した事によつて、さらに周囲の新人達がざわつき、困惑し始める。

「うるせえ!!ざわざわすんな!!……オレが頂点王になるつつつたらなるんだアア!!」

アスラが騒がしくなった周囲へと言い放つ。誰がなんとやろうと、頂点王になる夢を諦めるつもりはない。そんな嘘偽りの無い本音が周囲にも不本意ながら伝わって

……

……と、そんな時だ。

「……ソウルコアも使えないのに最強の頂点王になるね……また妙なのが現れたもんだな……」

「っ!!」

聞こえてきたのは男性の凶太い声……

その声のする方へと思わずアスラを始めとした新人達は首を傾けた……
すると、そこにはアスラにとって忘れられないあの人物がいて……

「……と思ったらまたオマエか、小僧!!」

「あ!!…あん時の変なオツサン!!」

「誰がオツサンだ、オレは29だ。殺すぞ!」

「すみませんでしたアア!!」

最早反射的に誤っている。3日経った今でもあの日の恐怖が体の奥深くで焼き付けられている証拠だ。

そう、そこに居たのは3日前、アスラとロンにムエの世話を無理矢理押し付けた強面で老け顔で、筋骨隆々なあの男だった。

「って、そう言えばなんでアンタがこんなところにいんだ!?同期じゃないだろ?」

率直な疑問だった。アスラはその男に何故新人挑戦者でもないのに交流戦が行われているコロシアムにいるのかを聞いた。が、次にその男からでた返答はとんでもないものであつて……

「ああ!?!…そりゃオマエ、オレが『三王の1人、テンドウ・ヒロミ』だからに決まつてるだろ。毎年誰かがここのバトルを仕切らなきゃ行けねえんだよ」

…

「ソウルコアが使えない??……初めて聞いたわ……そんな小ネズミ」

一方、コロシアムの人集りから外れた物陰では、肩にかかった艶やかなブロンドヘアを片手で”フアサツ”となびかせながら、そこには誰もいないと言うにもかかわらず、『自分は偉い』と言わんばかりに上目遣いをしていた少女が一人……

アスラを見下すような態度で見つめる彼女はいつたい……

3コア「仮面ライダーナイト」

この国の中央に位置する最大都市、『オウドウ都』

ここには国の人間の約3割が集結しており、尚且つ最も技術が発展していて、街並みにはたいへん賑やかな印象を残す。また、国を代表するカードバトラーである『三王』『頂点王』が住う場所でもあるため、国の首都と呼ぶに相応しい都市であった……

そんなオウドウ都にある殺風景だが広大なコロシウムにて行われる新人交流戦。アスラとロンはこれに参加すべくそのコロシウム内にいたのだが……

「あ、アンタが三王の1人い!？」

「だからそうだって言ってるんだろおがああ!!殺されてえのか小僧!!」

「すみませんんん!!」

反射的にテンドウに頭を下げるアスラ。

新人交流戦が行われる前、アスラがブスジマとバトルした直後、今年の新人チャレンジャー達の前に現れたのは三王の1人『テンドウ・ヒロミ』……………型破りで破天荒な性格で有名である。

「あゝあゝどうしてくれるの、ブスジマ^コ完全に伸びてんじやん。罰として、オマエはこれ以上のバトル無しな」

「えええええ!!」

「あと、これからオレの舎弟になれ」

「さらつとんでもない事言つたアアア!?!」

テンドウが気絶したブスジマを確認し、アスラを指差しながら言つた。

「まあいいや。よし、これから今年の新人交流戦を始める。オレは名簿から適当に名前読み上げてやるから、さっさとバトルしろや」

テンドウは面倒くさそうに新人達に言つた。他の新人達はテンドウの登場にまだざわついている。それもそうだ。何せ、この国の最強バトラー候補が目の前にいるのだから

ら……………

「は〜い、じゃあ先ずは……………」

テンドウはそんなざわつきなぞ気にせず、やる気の無い声で手に持つ名簿を読み上げた。こうして、新人交流戦が幕を開ける。名前を呼ばれた新人挑戦者達は1組ずつ、次々とバトルを始めて行った……………

「おお!!すっげえ!!」

コロシアムの端で他の新人達のバトルを傍観しながら感激の声を上げるアスラ。現在、バトルしているのはマスターの身分同士のバトル。高級なカード同士の激しいぶつかり合いは確かに見る者達の心を魅了していた。

「やっば、マスターとかのバトルは見応えがあるよな〜。強いカードいっぱい見れるし」

「こうして見るとあのコモンのチビ、地味で大した事なかったのかもな」
「あのブスジマって奴が油断しただけだな」

周囲の新人挑戦者が現在バトルしているマスターの身分の者達とそれを見て騒いでいるアスラを目に入れながらそう話していた。

カードにもセンスにも恵まれているマスターの身分の者達が行う高度な駆け引き。高級なカードの派手なバトル。アスラの龍騎は活躍が一瞬だったのもあり、どうしても派手さに欠けているものがあつて……

「……」

「は〜い次、『スミミ村のロン』と『キシ・クシロ』……前に出る。そこで早くオレのこの面倒な仕事を終わらせてくれ」

「おお!!…次はロンか!!…頑張れよ!!」

「アスラうるさい」

次はロンのバトルのようだ。ロンは涼しい表情のままコロシアムの中央へと躍り出た。そして、その相手だが……

「アレって……確かクシロ家のキシ!!」

「今年のクシロの最高傑作って言われてる奴か!!」

周囲の誰かがそう声を漏らした。

『クシロ家』……………

この世界におけるマスターの身分の家系であり、白のデジタルスピリットを統一で使用する。マスターの身分の中では最多の人数を誇っている。

そんなクシロ家の今年の最高傑作、キシ・クシロがロンとコロシアムの中央で対峙した。

「やあ、ボクはキシ・クシロ……誇り高き身分マスター、クシロ家の最高傑作さ」

「オレは……………」

「知ってるよ……『スーミ村のロン』……………コモンの育ちながらに生まれつきライダースピリットを所持している天才」

「!!」

キシはロンが名乗るよりも早く彼の素性を口にした。

「何で知っているのか？つて顔だね。マスターの情報網をなめてもらっては困る。今年の新人達の詳細くらい、この頭の中に全て叩き込んであるのさ」

「……………そうか」

ロンはべつにそんな事思っていないが、キシは偉そうに微笑みながら自慢げにそう言った。

「ふふ、でも、『ライダースピリット』に選ばれたと言っても所詮はコモン……………マスターとの身分と力の差を教えてあげるよ」

「御託はいいから、早くやろう。あまり大口を叩くと、負けた時のショックが大きくなるだけだぞ」

「……………は?!」

今なんて言った?!

よりにもよってコモンの集る村出身の分際で……………

このマスター、クシロ家であるボクになんて言った??

オマエがライダースピリットに選ばれたのはただの偶然なんだろう?

調子に乗るなよ、この世界の底辺が………

「今わからせてやるよ、哀れなコモン君!!」

「ああ、よろしく頼む」

ロンの一言に苛立ちを覚えるキシ。マスターである彼がコモンであるロンにあのよ
うな言葉を言われるのは屈辱以外の何物でもなかったのだろう。

そんなロンはいつものクールな表情のまま、自身のBパッドを展開し、キシもまた、そ
れに合わせて自身のBパッドを展開した。

………ゲートオープン、界放!!

2人のコールと共にバトルスピリッツが始まる。

先行はクシロ家のキシだ。

「ターン01」キシ

「メインステップ、ボクは白のデジタルスピリット、ゴツモンを召喚!!……効果によりカードをオープン……対象カードは無し」

ー【ゴツモン】LV1(1S)BP2000

キシが呼び出したのは岩人間とも呼べる白の成長期のデジタルスピリット、ゴツモン。その効果でデッキからカードが2枚オープンされるが、対象カードが無いため、全てトラッシュユへと破棄された。

クシロ家のデッキから基本的に白一色。それ以外の色は断じて許されない。白こそが至高で、白こそが最強であると言う教えがあるのだ。その例に溺れず、このキシのデッキも全て白属性のカードである。

「ボクはこれでターンエンド!!……さあ、遠慮無くかかってくるといい!!」

手札：4

場：【ゴツモン】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするキシ・クシロ。次はロンのターンだ。ターンを進行していく……………

「ターン02」ロン

「メインステップ、オレはライダースピリット……………ナイトを召喚!!」

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2S)BP4000

「つ……………早速来たか、ライダースピリット!!」

一瞬にしてロンの場に現れたのは騎士のような姿をした黒に近い青色のライダースピリット、名をナイト。彼の生涯の相棒である。

「召喚時効果で1枚」

ナイトの召喚時効果だ。確実に1枚のアドバンテージを獲得した。

「アタックステップ……ナイトでアタックする!!」

「ライフで受けようか!!……ッ」

〈ライフ5??4〉キシ

ナイトでアタックを仕掛けるロン。キシはBPの弱いゴツモンでブロックはできなかったか、それをライフで受ける。

ナイトが彼のライフ目掛けて走り出し、それを手に持つ剣で1つ斬りつけ、破壊した。

「ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV2

バースト：【無】

できる事を全て終え、そのターンをエンドとするロン。次は再びキシのターン。無礼極まりない愚かなコモンに力と身分の差を叩き込むべくそのターンを進行させていく……

「ターン03」キシ

「メインステップ、ボクはハグルモンを2体召喚する!!」

ー【ハグルモン】LV1(1)BP2000(回復)

ー【ハグルモン】LV1(1)BP2000(回復)

キシの場に歯車のような形をした成長期スピリット、ハグルモンが呼び出される。

「この効果により、他の成長期スピリットにコア1つを追加!!ボクはゴツモンを対象にコアを増やす!!」

ハグルモンの効果だ。同じ成長期スピリットであるゴツモンにコアが追加されている、半ば強制的にLVが上昇した。

「さらにボクはゴツモンのLVを下げ、3体目のハグルモンを召喚!!…効果により別のハグルモンにコアを追加する!!」

ー【ハグルモン】LV1(1)BP2000

立て続けに3体目のハグルモンを召喚するキシ。その効果で今度は別のハグルモンのLVが上昇した。

「流石クシロ家、一気に3体のスピリットを並べた!!」

「こりやコモンのアイツは終わりだな……………」

周囲の新人達は完全にクシロの勝利を確信していた。ライダースピリットに選ばれていると言ってもコモンであるロンの勝利を信じているのは同じコモンの村出身のアスラと、その頭の上に乗っかっているオレンジ犬??のムエくらいであろう……………

「うおおおおお!!! 相手すげえ!! 頑張れロン!! 負けるなアアア!!」

「むええええええええええええ!!!」

(……………うるさい)

アスラとムエの全力の応援に対してそう思いつつ、ロンは手札を視認し、次なる一手を考えていた。

が、多量にスピリットを展開したキシがこのターンで何もしないわけがなくて……………

「アタックステップ、さあ、ボクの白きスピリット達よ!! 愚かで見窄らしいコモンのライフを破壊したまえ!!」

キシの指示により、ゴツモンを残したハグルモン3体がロンのライフ目掛けて飛び行く。ブロッカーのいないロンはライフで受けざるを得なくて……………

「ライフだ……………っ!!」

△ライフ5??4??3??2△ロン

3体のハグルモンの体当たりがロンのライフを半数以上破壊する。凄まじい連続攻撃により、ロンは思わず半歩後ろに下がる。

「ふふ、他愛無い……………ターンをエンドだ!!」

手札：2

場：【ゴツモン】LV1

【ハグルモン】LV1

【ハグルモン】LV1

【ハグルモン】LV2

バースト：【無】

勝ちを確信し、余裕を持って見せ始めるキシ。ゴツモンをブロッカーとして場に残し、そのターンをエンドとした。

次はロンのターンだ。一見ピンチに見えるが、不思議と彼は全く涼しい表情をしていて……………

「ターン04」ロン

「メインステップ……ナイトのLVを下げ、鎧魂を召喚」

1 【鎧魂】LV1（1S）BP1000

ロンの場に甲冑と二本の刀を身に着けた丸っこい幽霊が現れる。そしてさらにロンはここからが本気だと言わんばかりに手札からカードを1枚引き抜いて……

「さらにオレは、第二のナイトを召喚!!」

1 【仮面ライダーナイト「2」】LV2（2）BP6000

ナイトが腰にあるベルトからカードを1枚引き抜き、手に持つ剣の持ち手にあるバイザーへとそれを装填……

すると……

……『トリックベント!!』

と、アスラの龍騎同様無機質な音声か鳴り響き、その瞬間、ナイトが2人へと分身した。

「っ……2体目!?!」

「第二のナイトの召喚時効果、相手スピリット1体のコア2つをリザーブに置く……ゴツモンから取り除き、消滅させる!!」

「っ……!!」

現れたもう一体のナイトが同じようにベルトにあるカード束から1枚抜き取り、剣に付随しているバイザーに装填……

……『ソードベント!!』

と、また無機質な音声が流れ、2体目のナイトに黒くて太い槍が装備された。ナイトはその槍を手に、キシの場へと駆け出し、場にいたゴツモンに強烈な刺突をお見舞いする。ゴツモンはコアを全て抜き取られ、消滅に陥ってしまう。

「消滅の成功により、1枚ドロー」

「ツ……オマエ、コモンの癖にデツキを一段階『進化』させているのか……」
「まあな」

キシはロンが呼び出した2体目のナイトを見ながらそう言った。

この世界において、デツキとはカードバトラーと共に『進化』していく存在。ライダースピリットやデジタルスピリットなどの一部のデツキには「2」のカードが出てくるため、そのデツキが進化しているか否か非常に分かりやすい。

主にデツキやカードを『進化』させるために必要な要素は3つ。

1つ目は『生まれ持った才能』……これは一番大きな因子であり、身分が高ければ高い程その才能は大きく、それだけで何度も進化できるものもある。そしてそれはこの国が身分によって人を差別する理由の一つでもある。

2つ目は『たゆまぬ努力』……そのデツキと共に研鑽を積み重ね、多くのバトル、死戦潜り抜け、それらを乗り越えて来たデツキとバトラーも進化を行える可能性が高いと言える。

3つ目は『感情』……これは稀なケースだが、カードバトラーの激しい想いや感情、窮地での強い意志や願いにデツキが応え、進化する場合もある。

ロンのデッキの進化は2つ目の『たゆまぬ努力』だ。今までの小さな積み重ねが第二のナイトを得るに至ったのだ。

「第一のナイトのLVを2に上げ、アタックステップ、第二のナイトでアタック!! その効果、コア2つ以下のスピリット1体を破壊する!!……LV2のハグルモンを破壊!!」
「……!!」

一息つく間もなくアタックを仕掛けるロン。第二のナイトの効果がここで発揮される。その黒槍から繰り出される強烈な刺突がハグルモンを貫いて爆発させた。

「当然、アタックは継続中だ……」

「っ………ライフで受ける!!」

へライフ4??3キシ

2番目のナイトが再び黒槍を振り、キシのライフ1つを粉々に砕いた。

「次は第一のナイトでアタック!!」

「そいつもだ!!……………つ!!」

〈ライフ3?2〉キシ

今度は最初に召喚されたナイトがアタックを仕掛ける。バイザー付きの細い剣でキシのライフをまた一つ斬り裂いた。

「オレはこれでターンエンド」

手札：5

【仮面ライダーナイト】LV2

【仮面ライダーナイト「2」】LV2

【鎧魂】LV1

バースト：【無】

「……………いい気になるなよ、コモンの分際で……………!!」

鎧魂をブロッカーとして残し、そのターンをエンドとしたロン。次は今一度キシンのターン。ロンを叩き潰すべく、明らかな怒りを示しながらそのターンシークエンスを行なっていく……………

「ターン05」キシ

「メインステップ……………来た来た……………これでオマエを倒せる」
「??」

キシはこのターンのドロウカードを見てニヤケ顔が取れない。

ようやく態度の気に食わない愚かなコモンを倒す事ができるのだ。そう思うとどうしても顔が緩んでしまう。

そして彼はそのカードを手札から引き抜いて召喚する……………

「来い、完全体……………ナイトモン!!」

1【ナイトモン】LV3(5S)BP12000

「っ……………ナイト!？」

「そう、ナイトだ!!だが、オマエのチンケなライダースピリットとは違う!!このナイトモンこそが真の騎士だ!!」

騎士が呼び出したのはなんと仮面ライダーナイトと同じく騎士型の完全体スピリット、ナイトモン。巨大な体格と重圧な装甲がどうやってもロンの視界に入ってくる。

「別に真の騎士とかどうでもいい、勝つか負けるか……………それだけだ」

「減らず口を!!今すぐ楽にしてくれる!!……………ナイトモンの召喚時効果!!コスト5以下のスピリット3体を手札に戻す!!」

「!!」

ナイトモンが鉄製の大剣を天に掲げ、全力でそれを振るうと、その風圧のみでロンのナイト2体と鎧魂は吹き飛ばされ、デジタルの粒子と化し、ロンの手札へと戻って行ってしまふ。

「さあ、アタックステップ、ナイトモンでアタックする!!」

ナイトモンがキシの指示に従い、腰にある大剣を抜き取り、構え、走り出した。狙うは当然ガラ空きとなったロンのライフだが……………

ロンは焦る顔一つせず、手札からカードを引き抜いて……………

「フラッシュマジック、リアクティブバリア!!」

「ッ……………白のカード!」

「そのアタックはライフで受ける……………っ!」

「ライフ2??1」ロン

ナイトモンはもう一度剣を振り、今度はロンのライフを風圧で破壊した。

が、このタイミングでロンが使った白のマジックカードの効果が発揮されて……………

「このアタックの終わりが、オマエのアタックステップの終わりだ」

キシの場に突如として猛吹雪が発生する。残ったハグルモンはおろかナイトモンでさえもそこから動く事は不可能であって……

「どうした?! オレはまだ余裕があるぞ」

「つ……嘘をつけ、残りライフの分際で……ターンエンド!!」

手札：2

場：【ハグルモン】 LV1

【ハグルモン】 LV1

【ナイトモン】 LV3

バースト：【無】

このターンで決めるつもりが凌がれたのもあって、悔しさをわかりやすく顔に出しながらそのターンを終えるマスターの身分のキシ・クシロ。その宣言と共に猛吹雪は収まった。

次はロンのターンだが……

「……しかし、オマエのナイトではオレのナイトモンは超えられ無い!! このナイトモン

は疲労状態でのブロックが可能だからだ!!……もうオマエに勝ちは無い!!諦めろ!!」

ナイトモンの効果を思い出し、再び余裕のある表情に返り咲くキシ。

そう、ナイトモンには何度でもスピリットをブロックできる効果を持つ。しかもその上に高BPだ。ロンのナイト達では突破はほぼ不可能……

だが……

「生憎だが、こんなしようもないところで諦めたら^アライバル^ラにバカにされそうなんだから……その程度、軽く突破してやる」

「はあ!?……コモンのくせにまだそんな大口を叩くか!!やつてみるよこのゴミ!!」

だからと言ってあの最高に諦めの悪いアスラとほとんど同じ時を過ごして来たロンがそんな簡単に諦めるわけがない。ロンは逆にこのターンで勝負を決めるべく自身のターンを進行させていく……

「ターン06」ロン

「メインステツプ、オレは鎧魂、2体のナイトを再召喚!!」

┆【鎧魂】LV1(1S) BP1000

┆【仮面ライダーナイト】LV2(2) BP4000

┆【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2) BP6000

ナイトモンの効果で手札に戻されていたロンのスピリット達がこのターンで復活を遂げる。

「最初のナイトの効果でカードをドロー!!……さらに2番目のナイトでハグルモンのコアを除去し、ドロー!!」

「くっ……」

復活早々2番目のナイトがソードベントで黒槍を装備し、それをを用いてハグルモンの中心を貫いた。

「……アタックステツプ!!……2番目のナイトでアタックする!!……その効果でハグルモン

を破壊!!」

「!!」

ドローしたカードだけで十分なのか、2番目のナイトで今一度アタックを仕掛ける口ン。その効果により、再びナイトが黒槍でハグルモンを貫き、爆発させた。これにより、キシの場のスピリットはナイトモン以外全て消え去った。

だが……

「だから言ってるだろ!?!…ハグルモンなんて雑魚を破壊しようが、ボクの場合には強力なナイトモンがいる!!…これだからバカのコモン共は!!」

そう。

ナイトモンさえ生き残っていれば仮面ライダーナイトの攻撃などどうとでもできる。

しかし、当然あのロンが何の策も無しに攻め入るわけがなくて……

「その考えが捨てられないようならオマエはオレには勝てない……フラッシュユマジック、ファイナルベント!!」

「なに!?それはあのもう1人のコモンが使ったカードと同じ?!」

ナイトがベルトからカードを1枚引き抜き、剣に付随するバイザーにそれを装填
.....

.....『ファイナルベント!!』

と、また無機質な音声が流れる。すると、どこからともなく飛翔して来た黒い翼を持つコウモリ型のモンスターが黒いマントへと変形し、ナイトと合体。空を飛翔して見える。

「この効果により、BP15000以下のスピリット1体を破壊し、ナイトに赤のシンボルを1つ追加する!!」

「ば、バカな.....そんなバカな!!オマエはコモンで、ボクはマスターのクシロ家なんだぞ?!」

「だからなんだ。オマエが負けてオレが勝つ.....それだけの話だ」

アスラも披露したファイナルベントとライダースピリットのコンボ。それがロンのナイトにも発揮される。上空に飛び立ったナイトは黒マントを身体に纏わせ、巨大な槍

上の物とし、キシのナイトモン目掛けて急降下していく……………

「飛翔斬!!」

ロンがその技名を叫ぶと共に、それはナイトモンに直撃。ナイトモンは守る隙もなく、あっさりとその重圧な装甲を貫かれ、爆発四散してしまう……………

……………そして……………

「……………うあああああああ!?!」

〈ライフ2??0〉キシ

……………ピー

ナイトは勢い余り、ナイトモンはおろか、キシのライフまでもをその余波で破壊して

しまう。その凄まじい衝撃にキシは吹き飛ばされ、気を失った。

ライフゼロに伴い、彼のBパッドから敗北を告げるように無機質な機械音が虚しく鳴り響いた……………

これにより、勝者はロンだ。圧倒的な実力差を見せつけ、あのマスターであるクシロ家を倒して見せた……………

「ああおおおすつげええ!!あのコモン、本当にマスターをぶつ倒した!!」
「カッコいい!!」

バトスピ貴族と呼ばれるマスターの身分を持つクシロ家のキシを倒した事により、周囲から大きなロンに対して歓声上がる。アスラの時と違って、その向けられる眼差しは英雄を見ているかのようだ。

ただ、ロンはそれに対しても興味がないのか、寡黙なままBパッドを閉じ、中央から退いだ。

「いや、ホントにすげええええええ!!」

「むえええええええええ!!」??便乗

思った以上に強くなっていたライバル、ロンのバトルを見て、思わず声を上げるアスラ。そしてそれを面白がり、便乗して声を上げるムエ。兎に角可愛い。

「よし、次のバトルで最後だ」

今年の新人交流戦を仕切り役を務める三王の1人、テンドウがそう言った。実際面倒な仕事であるため、内心は早く終わってくれと思っている……

何はともあれ、次のバトルで今年の新人交流戦は最後となる。

そんなトリを任された栄誉ある2名は……

「小僧!! オマエだ」

「……………え?」

テンドウが指でアスラを刺して来た。アスラは戸惑い、混乱する。それはさつき『オマエはバトル無しな』と言われたからである……………まさかそれを言われた人物から今度は逆にバトルする事を強要されるとは思ってもいなかっただろう……………

「あ、あのくくオレって、もうバトルできないんじや……………」

「あのブスジマが未だに気を失って人がいないんだコラ……………オレがヤレと言ったらヤレ……………つーかオマエが気絶させたんだろ……………殺すぞ」

「すみませんっしたああ!!」

また殺し屋のような強烈な威圧をかけてくるテンドウ。逆らったら命は無い。これでアスラは是が非でももう一度バトルをしなければ行けなくなつて……………

「まあいいか……………んじや、ムエ。オマエは一旦下がつてろ……………つてアレ??ムエ??」

アスラがバトルするため、コロシアムの端から中央の方へと歩み寄りながら自分の頭の上に乗っているムエを一旦降ろそうとするが、既にそこにはムエの姿は消えていて……………

「よし……………んじや、もう一人は……………」

アスラが知らぬうちに消えてしまったムエを探そうとした直後、テンドウが名簿からそこに記された1人の人物の名前を挙げようとする……………

それは……………

その名前は……………

この世界の殆どの人間達が驚愕してしまう程の名であって……………

「…………『エール・オメガ』……………」

テンドウが名前を読み上げると、共に周囲の新人達が啞然とする。そしてアスラの立つ中央の方へと歩み寄ってくる美しい少女が1人、肩まで伸びている艶やかなブロンドヘアを揺らしながら現れた。

「…………『オメガ』って…………まさかあの『オメガ家』!?!」

「うそ…………エックスじゃん!?!なんでここに混ざってるんだ!?!」

「でも、流石…………めっちゃくつちゃ可愛い!!」

「バカ、オマエじゃ一生かけてもお近づきにはなれねえよ!!」

「オマエもな!!」

その美少女が現れた途端、またしても周囲がぎわつき、騒がしくなる。

ただ、騒がしくなるのも無理はない。

何せ、この少女はあのエックスの身分である『オメガ家』であるからだ。

エックスの人々はこの国の王族とも呼べる存在であり、数も少ない故に最も崇高な一族である。そのため、毎年行われる新人交流戦には参加せず、エックスはエックス同士で行う傾向にある。

この少女のこの場での登場は例外中の例外と言えるのであった……………

「ん?! なんか急にまた騒がしくなったな……………なんで?！」

だが、あのおバカなアスラがそんな事知ってるわけもない。彼女の有名な『オメガ』の名を聞いてもキョトンとしている。

「まあいいや、オレスーミ村のアスラ!! 同期としてお互い切磋琢磨して頑張ろうぜ〜」

ブスジマの時とほぼ同じだ。アスラは目を輝かせながらエールと言う名の彼女に握手を求める。このまま彼女が見た目通り社交的な人間であればその握手に応えるだけで終わるはずだったが……

……ペシーーン

と言う音と共にアスラの握手を求めていた手はエールに弾かれた。

「気安く話しかけないで。コモンの小ネズミが」

「え」

「私はエール・オメガ。この国のエックスよ」

「!!」

彼女の偉そうな口から「エックス」という単語が聞こえてきて、ようやくアスラも彼女がどれだけ身分の高い人間かを理解した。

「えええええ!! エックススウウウ?! ……こ、これはこれはワタクシのような小ネズミが多くなる無礼をば〜」

「わかればいいのよ」

エックスの身分を聞くと、アスラは急に態度を翻し、土下座でエールに謝罪する。
かに見えたが……………

「いやいや違アアアう!!…誰が小ネズミだああー!!」

「アンタに決まってるじゃない」

ノリツツコミだった。土下座の姿勢から勢い良く立ち上がり、全力で少女に反発して
いく。

「オレとオマエは同期!!…同じ歳!!…エックスとかコモンとか関係あるかアア!!」
「関係あるわよ、バツカじゃないの?」

この世界では最も身分の高く、王に等しいエックス。逆に最も身分の低いコモン。普通ならばコモンの人間が話しかけるだけでも無礼極まりないのである。エールも幼い頃からそう教わってきたため、アスラに対してこのような冷たい態度を取っている

……

「ハア……愚かなコモンは言葉では理解できないのね……なら、力の差で教えてあげるわ」

「!!」

エールは唐突にアスラに向かってBパッドを展開する。アスラに力の差、格の違いを見せつけるべくバトルを申し込んだのだ。それを見るなり、アスラも懐から自分のBパッドを取り出し、展開した。

「おっ……やつとやる気か、早く終わらせてくれよ。この後オレ、『男の勝負』に行かなきゃ行けねえんだから……」

「うっさいわねテンドウ。言われなくてもこんなさつきと終わらせてあげるわよ……」
「……ってか、『男の勝負』って何!？」

「ギャンブル。今日はなんか勝てそうな気がするんだよね」

テンドウとエール。2人は顔見知りなのか、そのような発言が多々見受けられた。た

だ、アスラがそんな事気にするわけもなく、気合をいれながらデツキをBパッドにセットした。

「つしやあ!!…行くぜ!!」

……………そして……………

……………ゲートオープン、解放!!

エックスのエールとコモンのアスラ。身分に月とスツポンの差がある2人のコールと共にバトルスピリッツが開始される……………

先行はエックスのエールだ。

「ターン01」エール

「メインステップ……………ネクサスカード、勇気の紋章を配置するわ……………!」

「!!」

1 【勇気の紋章】 L V 1

エールの背後に現れたのは太陽の形を模した紋章。その神々しき、存在感は彼女の身分の高さを証明しているように見える……………

「ターンエンドよ……………さあ、早くターンを進めなさい」

手札：4

場：【勇気の紋章】 L V 1

バースト：【無】

「なんで偉そうなんだアアアー!!」

「私はエックスよ!!」

「だから関係ねえええー!!」

兎に角自分が最高の身分であるエックスである事を強調するエール。アスラに対してどこまでも偉そうだ。

アスラはエールの上目遣いに対するリアクションに疲れを見せながらも自分のターンを進行させていく……………

「ターン02」アスラ

「メインステップウウウ!!……ドラゴンヘッド、シヤムシーザーを召喚し、ネクサスカード、ミラーワールドを配置だアアア!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【シヤムシーザー】LV2(3)BP3000

ー【ミラーワールド】LV1

アスラの場に龍の頭部だけを残し飛行するドラゴンヘッドと、赤いトカゲのようなスピリット、シヤムシーザーが現れると同時に、ネクサスカード、ミラーワールドの影響で全ての景色が鏡向きに変更された。

「先手必勝だアアア!!……アタックステップ、シヤムシーザーでアタック!!」

「…ライフで受けるわ……っ!!」

△ライフ5??4△ エール

アスラの指示によりシヤムシーザーが地を這ってエールのライフへと直進する。そのまま体当たりでそれを一つ砕いて見せる……

……………だが、

「え」

まるでシヤムシーザーのその行為に反応する様に、エールの配置したネクサスカード、勇気の紋章の中心部から火炎弾が形成され、上空に佇むドラゴンヘッドへと射出された。ドラゴンヘッドはそれに撃ち抜かれ、焼き尽くされると共に撃墜されてしまった……………

「えええええ!!…何事ですかアアアア!!」

「バカね……………私の配置したネクサス、勇気の紋章は私のライフが減る度にBP500

0以下のスピリットを破壊するのよ」

「ま、マジかよ……………」

「何も警戒せずにアタックして来るなんて……………やっぱりコモンの小ネズミね」

エールはアスラを見下すような目で見つめながら、勇気の紋章の効果について説明した。アスラのこのターンでの失敗はこの後も大きく響いてくるのは明白であるが……………

「へへ、でもこれで勇気の紋章の効果はわかった!!…次は失敗しねええ!!……………ターンエントだ!!」

手札：2

場：【シャムシーザー】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

それでもアスラはこの失敗をポジティブに捉えていた。まだこのターンが次のターンに繋がってくれれば心の底から信じている。

次はエールのターン。彼女はこのターンから本気だと言わんばかりにターンを進行していき……………

「ターン03」エール

「メインステップ……………勇気の紋章をLV2でアップするわ」

ー【勇気の紋章】(0??1) LV1??2

勇気の紋章のLVが上昇し、わかりやすく赤く発光。新たな効果をその内に宿す。さらにエールは手札からあるスピリットカードを召喚する。

それはエールの身分がエックスで、そのうちのオメガ家だからこそ手にできるカードであって……………

「……………そしてさらにこのカード、赤のデジタルスピリット、アグモンをLV2で召喚!!」

ー【アグモン】LV2(3S)BP5000

エールの場に現れたのは黄色い肉食恐竜をこれでもかとデフォルメした成長期のデジタルスピリット、アグモン。エールの属する『オメガ家』に伝わる最上級のデジタルスピリット。

その内に秘めた力、進化先は他のデジタルスピリットとは一線を画すと言われている。

「赤属性のデジタルスピリット……………」

「召喚時効果……………カードを2枚オープンし、その中の対象となるカードを加える……………私はこの中の対象カード『グレイモン』を加えるわ」

アグモンの効果が発揮され、エールの手札に新たなカードが加えられる。

「見せてあげるわ、光栄に思うのね……………アグモンの【進化…赤】を発揮!!」

「!!」

「アグモンを手札に戻す事で、手札にある成熟期スピリット、グレイモンを召喚!!」

1【グレイモン】LV3(3S) BP5000

デジタルスピリットのお家芸、【進化】が発揮される。

アグモンが青白く発光し、その中で姿形を大きく変える。やがてアグモンだったそれはその光を弾き飛ばし、新たに立派な3つの頭角を持つ肉食恐竜のような成熟期スピリット、グレイモンが現れた。

「うおおおおお!!!カツケエええ!!そしてデツケエエ!!」

「一々うっさいわね!!……アタックステップは続行、グレイモンでアタック!!」

アスラのリアクションは一蹴し、グレイモンでアタックを仕掛けるエール。そしてこのグレイモンにはアタック時に効果が存在し……

「効果発揮、BP5000以下のスピリット1体を破壊してカードを1枚ドロウするわ!!」

「なこ!!?」

「私の目の前から消え失せなさいシヤムシーザー!!」

グレイモンは口内に高音の炎を溜め、それをアスラのシヤムシーザーに向けて放出する。シヤムシーザーは耐えられるわけもなく、あっさり焼き尽くされてしまった……

「アタックは継続中よ!!」

「っ……ライフだ!!……ぐっ!!」

〈ライフ5??4〉アスラ

シヤムシーザーを焼き尽くした直後、すかさずグレイモンはアスラに向かって突進して来る。その立派な頭角がアスラのライフを1つ砕いた。

「ふんっ……ざつとこんなもんね、ターンエンドよ」

手札：6

場：【グレイモン】LV2

【勇気の紋章】LV2

バースト：【無】

エールは偉そうに片手で赤茶の艶やかな髪を“フアサツ”となびかせながらそのターンをエンドとした。

次はアスラのターン。劣勢だが、最後まで諦めない心を胸に刻み、そのターンを進行させていく……………

「ターン04」アスラ

「メインステップ……………行くぜ、これが対抗策だ。炎盾の守護者コロナ・ドラゴンを召喚!!」

ー【炎盾の守護者コロナ・ドラゴン】LV1(1)BP2000

アスラが対抗策と称して呼び出したのは剣と盾を持つ竜騎士。その剣は敵を斬り裂き、その盾は弱き者を護り抜く。

「そして真打の登場だぜ、来い……仮面ライダー龍騎!!」
「!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(2)BP4000

立て続けに場へと呼び出されたのはアスラの相棒……………

ソウルコアを使うことができないアスラだからこそ握ることのできた……………

ソウルコアの力を必要としない赤いライダースピリット、龍騎。

「来たわね、コモンの小ネズミなんかを選んだ哀れなライダースピリット……………」

「へへ、コイツは哀れなんかじゃないぜ!!……………オレがいつか見合うバトラーになってやる!!……………召喚時効果!!カードをオープンし、対象のカードを加える!!……………オレはこの『ストライクベント』のカードを手札に!」

アスラは龍騎の効果を使用し、その中の対象カードである『ストライクベント』を手札に加えた。

「さらにこれを発揮!!……BP8000以下のスピリット1体を破壊する!!」
「!!」

「グレイモンを破壊だ!!」

龍騎が腰にあるベルトに装着されているカード束から1枚引き抜き、それを左手の龍の頭部を象ったバイザーへと装填。

すると……

……『ストライクベント!』

という無機質な音声と共に、龍騎の右腕に赤い龍の頭部を模したガントレットのような武器が取り付けられる。

龍騎はその右腕をグレイモンへと向け、龍の口から爆炎を放つ。勢いよく放たれたそれはグレイモンを瞬く間に包み込んで焼き尽くした。

「グレイモン?!?!……何すんのよ!!」

「へへ、どんなもんだい!!……この効果発揮後、カードをドロ……こんままアタックステップだ!!いけ、龍騎!!」

グレイモンを倒した直後、畳み掛けるように龍騎でアタックするアスラ。エールとしては場にブロッカーがいないため、このアタックはライフで受ける他ないが……

「ライフで受けるわ……………ッ」

〈ライフ4??3〉エール

龍騎の硬い鉄拳がエールのライフを1つ砕いた。だが、ここでもネクサス、勇気の紋章の効果が発動してしまい……………

「何度ミスればいいのアンタは!!…勇気の紋章の効果、私のライフが減った事でBP5000以下のスピリット、コロナ・ドラゴンを破壊するわ!!」

再び勇気の紋章の中心部から火炎弾が形成され、今度はコロナ・ドラゴンへと放たれる。避ける間も無く直撃し、爆発してしまうが……………

「……………え？」

エールはその光景に思わず目を見開いた。それもそのはず、ついさつき破壊したはずのコロナ・ドラゴンが爆発による爆風と爆煙の中から姿を見せたのだから……………

「ちよつと!!なんでそいつが場に残ってるのよ?」

「ああ、コロナ・ドラゴンはコスト3以下のスピリットが効果で破壊された時に疲労状態で場に残す効果があるんだ!!…コスト3の自分も守れるってわけさ!!」

「!!」

コロナ・ドラゴンなどの『守護者』と名のつくスピリットには低コストのスピリットを効果破壊から身を守る効果を持つ。アスラはこの効果を使い、エールの勇気の紋章の火炎弾を躲したのだ。

「へへ、当然コスト3の龍騎もこの効果で守れる!!…これで頭数を減らされる心配はねえ!!…ターンエンドだ!!」

手札：2

場：【仮面ライダー龍騎】LV2（2）

【炎盾の守護者コロナ・ドラゴン】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするアスラ。次はエールのターン。破壊の対策を施された中、彼女はどう対処していくか……………

「めんどくさ……………小ネズミのコモンのくせに……………さっさと諦めさせてやるんだから……………!!」

そう意気込んでエールはターンを進めて行く……………

「ターン05」エール

「ドローステップ時、勇気の紋章LV2効果でドロー枚数を1枚増やして、その後1枚捨てるわ」

勇気の紋章の2つ目の効果がここで発揮され、エールはその多量の手札の質を向上させた。

「メインステップ……もう一度アグモンを呼ぶわ」

ー【アグモン】LV3（4）BP6000

【進化】の効果によって手札に戻っていたアグモンが今一度エールの場に呼び出される。その際に召喚時効果でデッキからカードがオープンされるが、今回は失敗。全てトラッシュへと破棄された。

「アタックステップ、【進化：赤】発揮!!…アグモンを2体目のグレイモンに進化よ!!」

ー【グレイモン】LV3（4）BP7000

「げえ?!?2体目え?!?」

「バカね、1枚しか持っていないわけじゃないでしょう?」

アグモンが再び進化し、2体目のグレイモンが姿を見せる。

「アタックステップ継続、グレイモンでアタック!!……効果で龍騎を破壊して1枚ド

ロー!!」

「!!」

グレイモンが口内から火炎弾を放出。それは龍騎に直撃し、爆発。

龍騎は破壊されたかに見えたが……

「龍騎はコロナ・ドラゴンの効果で場に残る!!」

爆発による爆風と爆煙の中から龍騎が姿を見せる。いくらやつても無駄だ。効果破壊したところでコロナ・ドラゴンがある限り龍騎は場を離れない。だが、エールは「そんなのお見通しよ!!」とアスラに言い放ちながら更なるカードを切る……

「グレイモンのもう1つのアタック時効果、『超進化：赤』を発揮するわ!!」

「!!」

「グレイモンを完全体、メタルグレイモンへと進化!!」

1 「メタルグレイモン」 LV3 (4) B P 11000

グレイモンは溢れんばかりの咆哮を張り上げると、青白い光に身を包まれ、その中で姿形を大きく変化させていく。やがてグレイモンだったそれはその光を弾き飛ばし、場に現れる。

それは左半身をサイボーグ化し、穴の開いたボロボロの翼を持つ完全体のグレイモン、メタルグレイモン……………

「ま、また進化しやがった……………」

「見せてあげるわ、オメガのカード、メタルグレイモンの力を!!…召喚時効果、B P 12000以下のスピリット1体を破壊!!…もう一度龍騎を破壊!!」

メタルグレイモンは登場するなり咆哮を張り上げながら胸部のハッチを開き、そこか

ら凶弾を発射。龍騎に直撃し、爆発するが……………

龍騎はコロナ・ドラゴンの効果で場に残っていた……………

「いくらやっても龍騎は場に残るぜ!!」

「だからそんなのお見通しして言ってるでしょ!!……………メタルグレイモンでアタック!!」

すかさずエールはメタルグレイモンにアタックの指示を送る。メタルグレイモンはその瞳に龍騎を移しながら自身のアタック時効果を起動させ……………

「アタック時効果、BP10000以下のスピリット1体を破壊!!……………龍騎を破壊するわ!!」

「!!」

メタルグレイモンが左手のアームを自在に伸ばし、しなりをつけて上から龍騎に叩き込む。龍騎は衝撃で地面に倒されてしまうが、コロナの効果で破壊は免れた……………

「いくらやったってコロナ・ドラゴンの効果が龍騎を守る!!」

「だったら好きにだけ守ってあげればいいわ……メタルグレイモンはこの効果でスピリットを破壊した時、回復する!!」

ー【メタルグレイモン】（疲労??回復）

「なに!?!」

「もう止められないわよ!!……さあ、早くこのバトルを諦めなさい!!」

メタルグレイモンがその眼光を強く放ち、疲労状態から回復状態となる。

アスラのコロナの効果を逆手に取られた。これではメタルグレイモンはアタックの度に破壊と回復を繰り返し、アスラのライフが無くなるまで攻撃をやめないだろう……

別にコロナの効果を無理に使う必要はない。破壊を受け入れれば連続アタックは一定の回数で収まる……が、そうすれば全滅は必至……

（や、ヤベええええ!!……どうしよう、こんままじゃ負ける……）

優勢からの劣勢な状況に戻り、本格的に焦り出すアスラ。

だが、その焦りも自身の手札を見るなり、すぐさま元どおりになる事になる。咄嗟に閃いたのだ。この状況を打開する強力な一手が……………

「こ、これだ!!」

アスラはこの一手に……………

一筋の光明に懸ける……………

「フラッシュマジック…………『ガードベント』!!」

「!?!」

「不足コストはコロナと龍騎から確保!!よってコロナ・ドラゴンが消滅するぜ!!」

アスラのそのカードの発揮と共にコロナ・ドラゴンがコア不足により消滅してしまうが、龍騎はベルトからカードを一枚抜き取り、今一度それを左手の龍の頭部を模したバイザーに装填する。

……………『ガードベント!!』

と、無機質な音声で鳴り響くと、龍騎の右肩に赤き龍の胴体を模した盾のような物が装着される。

「カードベントの効果、このターン、龍騎は相手の効果を受けない!!」

「!!」

「コロナ・ドラゴンはもう場にいない、今はこの龍騎だけ……つまり、メタルグレイモンはこれ以上回復はしねええ!!」

「くっ……!!」

そう、ガードベントの効果により龍騎は効果を受けない。破壊ができなければメタルグレイモンは回復することはない。これでアスラのライフを全て破壊されることはないし、龍騎も場に残すことができる。

咄嗟に閃いたにしては最善の一手と言える……

「……なんで……」

「??」

「なんでよ!!……さっさと諦めなさいよ!!……カードパワーの差は歴然としてるのに!!」

アスラの諦めの悪さに腹を立てるエール。確かにカードスペックの差はどう考えてもエールのグレイモンの方が上。ガードベントで守ろうとも時間稼ぎにしなければならない事は明白。

なのに何故……

なのに何故ここまで食い下がる……

「なんでって……そりゃ、オレは『頂点王』になるからな!!……コモンでも、ソウルコアが使えなくても、諦めなければ最強になれるって証明するのがオレの夢なんだ!!」
「っ!？」

……本気なの……?？」

本気でコイツはそんな事言ってるの……?？」

身分が最底辺のコモンで……

しかもソウルコアが使えない身体の間際で……

この国最強の称号『頂点王』だなんて……

………そんなの……

「無理に決まってるでしょ……虫唾が走るわアンタ……」

「無理じゃねえ!!…オマエが勝手に決めんな!!」

アスラの諦めない真っ直ぐな姿勢を前に徐々に表情から余裕が消え去って行くエール。諦めなければどうにかなると思っっているアスラにはどうしても腹が立つ。

まるで『自分を見ている』気がしたから……

エールは脳裏に自分の周囲の人達との記憶が蘇ってきた……

……

『エールウウウ…オマエまだ究極体を呼び出せないのかああ!?!』

黒髪の男性がエールに言った……

とてもではないが同じ人間を見るような目ではなかった……

『なんか裏で特訓?……してるみたいだけど無駄無駄アアア!!……なんでオマエにオメガ家

のカードが託されてんだよ!!……オメガ家も落ちたもんだなあ!!はっはっはっは!!』

そうよ……

なんで私がオメガのカードの継承者なの?!

他の候補者はいたのに……

その人が必ずオメガのカードを使いこなせるのに……

『オマエみたいな奴が何故誇り高きエックスであるオメガ家の人間として生まれなければならなかったのだ。理解に悩む……どうしてくれるのだ。オマエのせいでオメガ家の名が廃る』

エールと同じ艶やかな赤茶の髪を持つ男性もそこに加わり、エールを蔑む。

忘れたくとも忘れられない思い出がこれでもかどエールの頭の中を急襲して来る。

でも、やるしか無いじゃない。

いくら才能がなくなっただって……

いくら進化の力を制御するのが下手くそだって……………

そんなの言い訳にしたりしない。逃げるなんて選択肢は無い。継承者に選ばれたからにはやってやるわよ……………

そしていつか……………

……………

そしていつか絶対に認めさせてやるんだからアアアアアアアア!!!

「ええ!?……………どうしたんだよ!?!」

場面は戻る。

エールは昔の記憶を蹴散らそうとするように大きな声で叫んだ。何も事情を知らないアスラには当然意味がわからない。

そしてエールは激情に駆られ、その手札の中からカードを一枚抜き取り、そのカードの発揮を宣言して……………

「【煌臨】 發揮!!……対象はアタック中のメタルグレイモンツツツ!!!」

「つ……煌臨?!……デジタルスピリットのデッキで煌臨つて事は……」

「そう、究極体よ!!」

メタルグレイモンの身体中から溢れんばかりの炎が飛び散って行く。その熱量はアスラがこれまでに相手してきたどのスピリットよりも熱くて……

だが……

その強大な何かに変貌しようとする進化は思わぬ方向へと進んでしまうことになる

……

「え?……う、うあああああああ!!!」

「っ!」

メタルグレイモンから溢れ出た炎がメタルグレイモンは愚かエールまでもを包み込んでしまう。その様子に驚愕するアスラや周囲の面々。

やがてその炎はメタルグレイモンを完全に溶解、エールを取り込み、まるで本物の太

陽になったようにアスラの前に姿を現した……………

「な、なんだ……………なんだよ……………アレ……………」

神々しい擬似太陽と化したその中からは気を失ったエールの姿が確認できるが、とうのアスラには何が何だかさっぱりである。ただただ目の前の真つ赤な太陽にたじろいでいて……………

『究極体』……………

デジタルスピリットの中では最上位の力を持つとされる文字通り究極の形態。それを扱うには類稀なるセンスが必要不可欠。そのため、エックスの人間や一分の人間にしか扱えないと言う……………

ただ……………

エックスの中で、このエール・オメガだけは究極体を呼び出す事が出来なかった。それを理由に、彼女はずっと同じエックスの身分を持つ者達から蔑まれてきた。

彼女はエックスの人間の中でもぶつちぎりで落ちこぼれたのだ……………

」……

「あくあ。結局こうなるのね……はてさて、この先どうすんだ……スーミのアスラ……」

唐突にエールを取り込んだ擬似太陽に会場中が慌てふためく中、テンドウは呑気に煙草を吸いながらアスラに目を向けて言った……

4コア「アスラとエール」

アスラの目の前に現れたのは……

まるで世界全てを照らしていく、赤々と燃え滾る太陽そのものだった……

……

「なんなんだアアアアー?!?!……太陽!?!」

エールがメタルグレイモンを究極体へと進化させようとした途端。その進化の際の炎がメタルグレイモンを溶解し、エールまでもを取り込んで今の擬似太陽を形成してしまった……

これは力の無い者が扱いきれない力を使った際に起こる進化の力の暴走。もはやエールのライフをゼロにするしか元に戻す方法は無い。

「……………あいつ、苦しんでんのか!?!」

アスラは擬似太陽の中に閉じ込められているエールの気絶している状態を見ながらそう言った。

さっきの状況からなんとなくわかる。これはエールも意図せず起こってしまったもの。

だったら………

「くっ………待ってろ!!今そこから助けてやるからなアアア!!」

もうバトルの勝ち負けとかはどうでもいい。今はエールを助ける事だけを考えてアスラは気合を入れ直すが………

その直後、その太陽からプロミネンスの如く螺旋状の炎がアスラの龍騎に向けて放たれて………

「ええ!?………うおっ!?!」

直撃し、爆風と爆煙に包まれる。

ただ、龍騎はガードベントの効果を受けているため、赤き龍の胴体を模した盾を前方に構え、破壊から免れていた。

「こ、これ究極体のデジタルスピリットの効果か何かか？」

これまでの状況から推理して、何となくそう考えていたアスラ。だが、これ以上の思考を妨げようとするかのように太陽は再び追い討ちの火炎弾を発射して……

「……………ぐっ!？」

へライフ4??3へ アスラ

それは龍騎ではなく、アスラを直接狙って来た。アスラのライフが1つ砕け散る。

「……………っ!？」

へライフ3??2へ アスラ

これだけではない。その炎の影響だったのか、アスラのライフはさらに1つ溶解し、無くなってしまう。リザーブにもコアが送られていない事から、おそらくボイドに送られたのがわかる。あの太陽の効果だろうか……………

アスラはこれで攻撃は終わりだと思った。そのため、一度は安堵の表情を浮かべるが、擬似太陽はもう一度攻撃すると言わんばかりに火炎弾を形成していて……………

「……………そうか、メタルグレイモンは煌臨する前に回復していたから……………2度目のアタックが可能!」

これはまずい。さつきみたいなのがライフを一気に2点分破壊するようなアタックが飛んで来たなら今度こそ終わりだ。アスラは冷や汗を掻くが……………

「……………来るなら来い……………諦めねえ……………諦めないのがオレのバトルだ……………!!」

未だにこのバトルを投げ出してはいない。最後まで希望を持ち続けていた。

ただ、手札にはもう反撃する術はない……………

アスラの最後のライフを砕くべく、その太陽は溜めに溜めた火炎弾を発射……………
する時だった……………

……………クロックアップ!!

「ッ……………!!」

〈ライフ3??0〉エール

「……………え!?!」

その謎の音声が聞こえたかと思えば、突然太陽の炎が飛び散って行った。アスラを含め、会場中にいたどの新人達も驚愕した。

「あゝあ。最後の最後で面倒な事なっちゃったよ……………だる」
「て、テンドウさん!?!」

不思議な事はまだまだ続く。消え去っていく炎の中から気を失ったエールを抱き抱えたテンドウが現れたのだ。状況からしてどうやら彼がエールを救い出したようだが、アスラにはもう何が何だか……………

「よし!!お疲れ新人共、これで今年の新人交流戦を終わる!!じゃあな、さっさと散りやがれ!!……………じゃなきや殺す!!」

……………えええええ!!?

そう理不尽な言葉を漏らすテンドウに対して誰もがそう思った。

まあ、あの国を代表するカードバトラーである三王の1人がそう言うのだ。ロンを含め、他の新人達はゾロゾロとこのコロシアム内の外へと向かっていく……………

そしてエールが無事だとわかって安堵したアスラも少し遅れて外に出ようとした途

端……………

「オマエはまだ帰んじやねえ小僧……………じやなきや殺す」

「ええええええ!？」

耳から殺意を感じる声が通過して来た……………

……………アスラはテンドウに捕まった……………

あれから数分後、

ここはオウドウ都のスタジアム近くにある病院。その一室……………

……………その一室にあるベットではエールが仰向けで眠っていた。さっきの暴走で相当な体力を使ってしまったのが見て取れる……………

「……………で、なんでオレがあんと一緒にこいつの看病をしないとイケないんですか？」

「うるせえ、殺すぞ」

「えええええ!!…オレ何回殺されるんすかアアア!!」

アスラはテンドウに半ば無理矢理連れて行かれ、彼と共にエールの看病を任されてしまっていた。

「ロンは多分もうカラーリーダーにバトルを挑む旅に出たんだ!!…あいつに先を越されるわけにはいかねえ!!…早く行かせてくれ!!」

そう、ロンはもうアスラを置いて先に旅に出た。カラーリーダーに勝利した証、カラーカードを得るため、そしてその先にある三王と頂点王とのバトルのために……ライバルである彼に前を行かれるわけには行かない。アスラは一刻も早く先を急ぎたかったが……

「うるせえ!!オマエチビのくせに声デケエんだよ!!ここ病院だぞ!!」
(えええええ!!…あんたが一番声デカイ!?!)

テンドウがそれを許さなかった。仕方ないからアスラはテンドウと共に暫くここに

身を置くことにした。

「ここらで一回落ち着いてみる。そうしたら、アスラは一度テンドウに聞いてみようと思っていた事を咄嗟に思い出して……………」

「……………そう言えば、あんた三王なんだよな？」

「ああ」

「じゃあ、頂点王……………シイナもわかるんだよな!？」

「……………ああ」

「じゃ、じゃあさじゃあさ!!今シイナはどうしてる!?!……………オレとロンは昔あの人に育てられた事があるんだよ!!」

正直、テンドウが三王の1人だと知った時からその事を聞きたかった。

今、頂点王となったシイナ・メザはどんな様子なのか、どんな感じなのか、自分達の事をなんか言っていないかったか……………など、なんでもいい、なんでもいいから姉のような存在だったシイナの今を知りたかった……………

「……………まあそれなりに元気にやってる」

「おお、そうか、そうなんだ!!……っしやあ!!待ってるシイナ!!いつかオレはあんたに挑みに行きまアアアす!!……でもって勝って新しい頂点王になる!!」

テンドウはどこか上の空を見るように言った。そんな様子を気にする様子もなく、アスラはシイナが元気にしている事に喜び、己の野望を口にした……

……だが、

その野望に対して野次を入れるようにテンドウがまた口を開いて……

「オマエそれ、交流戦の時も口にしてたよな?」

「ん?……はい」

「………本気でなれると思ってんのか!」

「っ!!」

アスラの背筋が恐怖で凍りつく。

今までとは違って、凄みのある威圧をテンドウはアスラに掛けてきた。おそらくそれが本気である。その凄まじい重圧は、まさしく三王の一人であるに相応しいと言えて

……

「なんやかんやで……………結局、オレらカードバトラーに求められるのは……………『ソウルコア』だ!!」

「……………!!」

「見ただろう?……………エールの使った究極体の力、そしてそれを意図も容易く叩きのめしたオレのスピリットの力……………アレは『ソウルコア』の力を使って発揮できる力だ」

……………『ソウルコア』

子供だろうが女性だろうが誰であろうとバトルをする際は必ず排出できるモノであり、バトルスピリッツにおいて重要な役割を担う。強力な効果を使う際や、スピリットを進化させる【煌臨】を使用する際も必要となる。

誰もがそのバトル中は1つしか使えないソウルコアを巧みに使い、駆け引きをする。だが、何故かこのアスラだけはどれだけ血の滲むような努力をしてもソウルコアを出すことは叶わない……………それがこの世界においてどれだけ大きなハンデを背負っているのかは計り知れず……………

「ソウルコアの無いオマエなんざこの世界ではどう足掻いても上にいけね……………それが

現実だ……！」

さらに畳み掛けるように重圧をかけてくるテンドウ。その三王の1人たるプレツシャーの前に、アスラは腰が引けそうになるが、歯を食いしばり、気合いと根性で立ち続けていた……

「オマエ……頂点王になるって事は……オレら三王を越えるって事だよな？」
「!!」

「今オレの前でもまだ……ソウルコアが無い分際で頂点王になるとほざけるか……？」
「……………」

アスラの前に立ち塞がっているのは間違いなく頂点王までの道のりの中で最強の障害たりうる人物の1人……

本気の恐怖と畏れがアスラの本能を襲う。今すぐここから逃げたい……
だが、それ以上に……

「……………例え、今は弱くても……………」

何度負けても……………

誰に何を言われようと……………

「オレはいつか頂点王になってみせます……………!!」

夢は諦めたくなかった。アスラは恐怖を乗り越え、今一度堂々と三王の1人であるテンドウに向かって宣言した。嘘偽りない一直線な自分の夢、野望を……………
そんなアスラを前にテンドウは……………

「ふ、ワハハハハハハハ!!」

「!!」

何がおかしいのか、威圧するのをやめ、急に大きな声で高らかに笑いだした。余りに

急だったため、思わずアスラはビクツと体が動く。さらにテンドウはアスラに向けて指を指しながら……

「オマエ、面白い!!……気に入った」

「？」

「エールと一緒に旅をしろ」

「……………え？」

急に話を変えてきた。しかもとんでもない内容のものに……………

「ちよ、ちよつと待って!!オレがこいつと旅!?なんで!？」

「ツベコベ言うな、オマエに拒否権は無い……………逆らったら殺す」

「えええええ!!」

アスラは仰向けの姿勢でベッドで眠っているエールを指差しながら言った。

もう何が何だかよくわからなくなってきた。ただわかる事はこれを拒否したら殺されるという事と、なんか殺し屋のボスみたいな男に気に入られたという事……………

「……………そしていつか……………」

「？」

「頂点王になってみせろ」

「……………!!」

テンドウはアスラに対してそう言った。その声色と表情から、それが嘘ではなく本気で言っているのが伺える。アスラは思わず感動してしまった……………

それもそのはずだ。今まで、自分が頂点王になると言っても誰も応援も称賛もせず、否定と皮肉な言葉を送るだけ……………決して逆の意味のある言葉を望んでいたわけでもなかったが、アスラがかけて欲しかった言葉をかけてくれたのだ……………あの大物、三王の1人であるテンドウ・ヒロミが……………

「……………はいッッ!!」

そんなの嬉しすぎる……………

アスラはテンドウに大きな声で返答した。その真っ直ぐな姿勢に、テンドウも口角を

上げながら微笑していた……………

『なんでオマエみたいなた才能無き者が誇り高きオメガ家に生まれなければならなかったのだ……………』

『ごめんなさいお兄様……………でも私、頑張つて進化できるようにするから!!』

10年以上前、エックスであるオメガ家が住う城の中、幼きエールとその兄である15の歳程の少年が会話していた……………

いや、もはや会話と言える者では無い。エールの兄はこの時から既にエールを妹としては見ていないのだ。もつと言えば人間としても見ていない気さえする。

『努力とは弱い者がする事だ……………エックスの人間には相応しく無い』

『……………!!』

『去れエール……………この出来損ないめ……………!』

『待つてお兄様!!……………待つて!!』

エールがいくら呼び止めても彼女の兄は止まる事なくエールから遠ざかっていく
.....

『何故だ……何故オマエなんだエール……何故オマエが無き母からオメガのカード
を引き継いだのだ……!!』

エールの兄はエールが許せなかった……

あの究極体にもロクに進化できないエールがオメガ家のカードを引き継いだのが。
あのカード達はエールには相応しく無い……が、そう思っているにもエールが選ばれた
時点でもう彼女が死ぬまでそれはエールの元を離れない。

それがどうしてももどかしく、歯痒かった。

「んん……んん？」

コロシウムで力付き、病室で眠りについていたエールが目を覚ました。エールは周りを見渡すが、そこには誰もいない。

本当はついさつきまではテンドウとアスラがいたのだが、テンドウは男の勝負、もといギャンブルをしに行き、アスラは単純にトイレに行っていた。

「……………」

その後エールは机の上に置かれていた自分のBパッドとデッキが視野に入り、デッキからあるカードを手取る……………」

「……………また、究極進化できなかつた……………」

それはデッキにある究極体のカード。才能が無い自分には過ぎたカードであると理解はしていても、エックスの身分であるオメガ家である事を誇りに今まで何度も特訓して進化できるよう目指していた……………」

が、10年経った今でもそれは叶わない。兄に止められたため、テンドウに頼んでコロシウムで行われる新人交流戦に参加したが、結果的にコモンという最底辺の人間を始

めとして多くの人間が自分のコンプレックスを知ってしまうきっかけとなっただけだった……

だが……

「諦めないわよ私は……意地でもアンタを呼び出してやるんだから!!」

……
そう強く意気込んで、エールはデッキとBパッドを手に病室を飛び出して行った

……

「いや〜スッキリした〜……実はコロシウムにいた時からずっと我慢してたんだよな〜」

一方、アスラはお手洗いを済まし、病室までの道のりを歩いていった。その様子はたいへんご満悦であった……

無理もない。今まで幾らバトルの腕を磨いても、鍛錬を積み重ねても、ロンや一部の

人間を除き、誰もアスラを認めなかった。いや、認めようとはしなかったと言えよいか。

だが、アスラはあの国を代表するカードバトラー『三王』の1人であるテンドウ・ヒロミに認められた。蔑んでくる人間たちよりも遥かに凄い人に認められたのだ………

機嫌が良くなるのも合点がいく。

「………つしゃあ、エールが起きたらさっさと出発すつか!!………ロンに置いていかれるのも癪しゃくだしな」

新人交流戦は終わった。アスラとエールを除くほとんどの他の新人達は既にカラーリーダーからカラーカードを得るために四方へと散って行った。完全に遅れてる事を理解しているため、一刻も早く旅を続行したいのだ。

「早く起きねえかな〜」

と、アスラは口ずさみながらエールの眠っている病室の扉を開け、入室する。

が……………

「……………あれ?……………あいつ起きたのか?」

そのベッドには当然ながらエールの姿は消えていた。アスラは自分が御手洗いに
行っている間に起きてどっかに行ってしまった事を咄嗟に理解する。

「やば……………あいつと一緒に旅しないとオレ……………」

ー 『ツベコベ言うな、オマエに拒否権は無い……………逆らったら殺す』

ー 『えええええ!』

「テンドウさんに殺される……………!」

テンドウの言われた事を思い出すアスラ。エールと旅をすると言う約束を守らな
かつたら今度こそ頭を握り潰される……………

そう考えると頭の血の気が下がって行くのと冷や汗が滝のように流れ出てくるのを

感じた。

「さ、探さねえと……!!」

命の危険を感じたアスラはすぐさまエールを探すために病室を抜け出した。

「ハアツ……ハアツ……メタルグレイモンツツ!!……究極進化!!」

病院の外、人目の着かない場所にて、

エールはただ1人、Bパッドを展開し、究極体へと進化させる特訓を行っていた。息を切らしながらも何度も完全体呼び出しは究極体の持つ『煌臨』を発揮させていた……

だが……

「っ!!」

カードは完全体のカードに重ね合わされる事はなく、エールの指示を断るかの如く颯爽と手札へと戻って行ってしまおう………
いつもこうだ。

いつもこのカード達はエールの言う事を聞かない。普通に進化させようとすれば弾かれるし、無理矢理進化させようとすると暴走させてしまおう。

「くっ………もう一度………」

しかし、それでもエールは全く諦めている様子はなく、同じエックスながら自分を出来損ないだと蔑んでいた兄や他のエックス達を見返したい一心で特訓を続けていた。

いつかそれが実ると信じて………

と、そんな時だ。エールの耳に見知った喧しい声が聞こえて来たのは………

「あ、いたいた!!………おっ……い!!エールウウウ!!」

「っ!?!」

背後からアスラの呼ぶ声が聞こえてきて、思わず身体がビクツとなるエール。エックスの彼女にとって、この特訓は恥ずべき行為。見られたくなかったのだ。

「な、なんであんたがここにいんのよ!？」

「え?……そりゃテンドウさんに無理矢理連れてこられたからな」

「テンドウが!?!……なんで!？」

「んゝなんかオレとオマエで一緒に旅をしろって強要された」

「はあ!？」

「って事だし次の街行こうぜエール!!……オレは誰よりも早くカラーリーダーを倒してカラーカードを6種類貰わないといけないからな!!」

テンドウに言われた事をぎっくりと説明したアスラ。元気になったエールを連れ、早速旅を続行しようとするが……

「嫌よ!!……なんであんたみたいなのコモンの小ネズミと……って言うか私を名前で呼ぶな!!」

「えええええ!!」

エールはそれを全力で拒否した。

何せ旅の同行人が最底辺の身分であるコモンのアスラなのだ。その事を知ったエックスの者達からは必ずまたそれをネタに蔑まれるに違いない。いくら三王の1人であるテンドウの言い分とは言え、エールはそれが嫌な理由であった……

「いや、待て待て……オレ、オマエと旅しないとテンドウさんに殺される……今度こそ頭を握り潰されるんだよオオオオ!!」

「ふんっ!!……知らないわよそんな事!!私はエックスよ!!」

「だから関係ねえええ!!」

「関係あるわよ!!バツカじゃないの!!」

アスラを拒むエール。アスラはアスラでテンドウによって命が天秤にかけられているため、必死にエールにすがっている。

「………つて、オマエなんでメタルグレイモン召喚してんだよ?」

「え!?!」

言い合いの中、アスラがエールのメタルグレイモンとBパッドに広げられているカード達に気づいた。というか、見えてはいたが今更ながらに疑問に思ったのだ。

アスラはエールのBパッドとメタルグレイモンに近づく。エールが「ちよつと止まりなさいよ!!」と制止させるべく強気に言い放つが、遅かったか、アスラは止まった途端にエールの究極体のカードが目に入った……

「あ……そう言えばオマエの究極体スピリット……」

「!!」

アスラが何か言いたかった事を思い出した。おそらくコロシウムで行ったエールとのバトルだ。

エールは咄嗟に予想した。今からこの愚かなコモンに言われる事を……

多分、『エックスのくせに究極体も召喚できないのか!』などと他のエックスの人達同様自分を馬鹿にするに違いない。そう思うととても恥ずかしくて……

……恐くて……

だが……………

「オマエが気を失っちまった後、しばらくその究極体とバトルしたんだけどさ!!……………
スツゲエ強かったぜ!!……………オレソウルコア使えないから羨ましーぞマジで!!」

「!?」

「オマエ、あの力を自分のものにしたら最強だな!!」

「……………!!」

目の前にいた小ネズミだと思っていた奴はエールを褒めちぎってきた。声の大きさ
や真剣さからそれが嘘ではない事を即座に理解して……………

今まで自分が言われたかった言葉をこんな見下していたチビに言われるとは思って
もいなかった……………

「へへ、オレさ、何となくだけどオマエと旅をしたらもつと強くなれると思うんだ!!オマ
エもきつと強くなれるさ!!……………改めて言うぜ、一緒に旅をしよう!!」

「……………」

テンドウに強要されてから思った事ではあるが、アスラはエールに2回目の握手を求めて来た。エールはアスラの真っ直ぐで暖かい言葉に顔を赤くし、涙目になりながら……

「……よろしく………お願いします」

「おう!!」

今度は「ペしーん」と手を弾く事なく、しつかりとアスラの手を握り返した………
……その手はどこまでも暖かくて、温もりがあった………自分が今まで求めていた全てがその手の中には詰まっ………

ー…

「つしやあ!!………んじや早速支度して旅に出かけますかアアアー!!!」
「うっさ!!あんた声のデカさが身長と反比例してるわね!!」

約数秒の間硬く握手をしていた2人。アスラはそれを解除すると勢いよくそう言っ

た。遅れてしまった時間を取り戻したいため、急いで次の街、『緑のカラーリーダー』のいる街へと向かいたいのだ。

……………と、そんな時だ。

「むええええええええええ!!」??ツツテケテー!!

今まで何故か姿を消していたオレンジのアホ毛犬??のムエがアスラ目掛け、短い脚を高速で回転させながら走ってきた。

「おおおお!!!ムエ!!……………忘れてた……………」

アスラはムエとの再会に感激するも、その存在をすっかりと忘れてしまっていたようだ。そのまま旅をする気でいたのだ……………

「むええええええええええ!!」??髪の毛あむあむ

「ギヤアアア!!……………髪の毛あむあむするなああ!!!はげるううう!!」

ただムエはそれに対しても特にアスラに対して怒っている様子はなく、アスラの頭の上に飛び乗って、いつものように彼の灰色でツンツンな髪の毛を甘噛みし始める。その様子はたいへんご満悦である……………

(な、なにこの子……………)

エールはそんなアスラとムエの様子を見届けていた……………

そして、それを見るなり、瞬時に思った事がある……………

それは……………

(……………か、カワイイ!!)

ムエの可愛い仕草や声に心打たれていた。それはそれはもうどうしようもなく強く釘打たれていて……………

「わ、私の頭の上に乗ってもいいんだからね!!」

「え?」

「むえ？」

素直にならないエールは恥ずかしそうに顔を赤くしながら、アスラの頭の上に乗っかっているムエにそう遠回しに言った。アスラもムエも頭の上に疑問符を浮かべる。

こうして、

生まれつきソウルコアが使えないと言う謎体質のコモンの少年『アスラ』

エックスでありながら究極進化ができないツンツン少女『エール』

謎の小動物『ムエ』

の2人と1匹の奇妙なパーティーでの冒険の旅が幕を開けた。

ここはオウドウ都のすぐ横にある街『オオカブ町』……そのコロシウムにて、ある人物がこの街の『カラーリーダー』とバトルスピリッツを行っていた。

「…………う、嘘だろ!? ……こんなに強いのかよ!?」

そこにいたチャレンジャーはアスラに全力で叩きのめされた『トミオ・ブスジマ』………彼はそのカラーリーダーの強さに慄き、恐怖していた。

正直舐めていた。1人くらいなら勝てると思っていた。

「おいおい、オマエ……カラーリーダー舐めすぎやろ?」

緑色の髪、褐色肌の青年がブスジマに言った。彼こそがこの国のカラーリーダーの1人である。

「終わりや……やれ、アトラカプテリモン!!」

「ぐっ……ぐあああああ!!!」

〈ライフ1??0〉ブスジマ

巨大な体格、赤い甲殻、長い一角を持つ甲虫型のスピリットがブスジマのライフへと

突進して行き、その最後のライフを粉々に粉碎した。

これにより、勝者は緑のカラーリーダー。愚かな挑戦者に容赦なく自分の圧倒的な強さを見せつけた……………

「ハッ……………話にならへんな。この緑のカラーリーダー『トーマ・ヘラクレス』を倒したいんやったら、生半可な覚悟で挑んで来んなやアホ」

「ひ、ひいいい!!?」

緑のカラーリーダー『ヘラクレス』がブスジマに辛辣な言葉を浴びせた。ブスジマは腰が引け、情けない表情のまま、その場から逃げ出してしまふ。

「あくあ。もつと手応えのある挑戦者はおらんのかいな?……………はあ、退屈やなあ……………カワイイ女の子でも探しに行きますか〜」

と、ヘラクレスは呑気な声を上げた。

『カラーリーダー』……………『三王』や『頂点王』など、この国には別次元の強さを持つカードバトラーが存在するため、彼らはどうしても影が薄くなりがちで、挑戦者達の中

には彼らを舐めてかかる者も多い。

しかし、選りすぐりのカードバトラー達から抜擢されているのだ。弱いわけがない。生半可な実力では先ず齒が立たない。

アスラとロンは頂点王になるべく、この屈指の実力を持つ6人のカラーリーダー達にバトルスピリッツを挑んでいくことになる………

5コア「緑カラー戦!!VSアトラーカブテリモン!!」

「おお!!ここがオオカブ町かアアアー!!」

「むえええええええええ!!」??便乗

「ちよつと、恥ずかしいからやめなさいよバカスラ!!」

「誰がバカスラだアアアー!!」

オウドウ都を出発したアスラ、エール、ムエの一行は、目的地であるオオカブ町へと辿り着いた。

この国の中心であるオウドウ都。その周辺にある6つの大きな町の1つオオカブ町。他の街と比べても街並みに並木通りが多く存在し、家や建造物も全てが木製である。首都の周辺にと言うだけあって人の数も多く、たいへん賑わっているのが伺える。

このオオカブ町がオウドウ都から最も距離が近いのもあり、新人達は先ずこの街に潜むカラーリーダーにバトルを挑む事が多い。

「いい?ちゃんと理解しなさいよバカスラ。私は別にあんたと旅をしたいんじゃない

て、あなたの頭の上に乗っかってているムエと一緒に旅をしたいんだからね?…そこら辺を履き違えるんじゃないわよ」

「むえ〜?」

「エール、オマエムエと会う前にオレに『よろしくお願いします』って言ってなかった?」

「つ!!……あ、アレは何かの聞き間違いよ!!勘違いしないでよね、バカスラ!!」

「だから誰がバカスラだアアア!!」

「あんたしかいないじゃないアホスラ」

「くっ……どれも語呂が良いのが悔しい………」

雑談を繰り広げるアスラとエール。彼女によってどんどんアスラのあだ名が製造されていく。しかも超がつくほど語呂が良く、それでいてアスラらしいとも言えるあだ名であった。

エールもエールでどこかアスラに素直になれないでいた。アスラと手を繋いで以降、何故か彼を見ていると胸の奥が苦しく感じてしまい、つい強く当たってしまう。その理由がなんなのかは今のところ自分でもよく分からなくて………

「おっ?……なんかあそこに人集りができてるぞ?」

「え?…ああ、『市場』ね、オウドウ都にもよくあったわ」

アスラが人集りができている通り道を見つけ、それをエールが説明した。この世界での『市場』と言えば、所謂カードショップ。カードが所狭しと陳列しており、転売されている。

高値のカードなどはあまり取引されないため、基本的に、身分の高いエックスのエールはこんな市場など見向きもしない。

ただ、この最も身分の低いコモンのアスラは……………

「い、市場……………こ、これが!?こんなに広くて長いのかよ!？」

目を輝かせ、感動していた。もちろんアスラの故郷であるスーミ村にも市場はあったが、ここまでたいそう立派なものではない。

「オレ、ちよつとカード買って来る!!」

「ええ!?なんでよ!?…あんたこれからカラーリーダーに挑むんじゃないわけ!？」

「デツキ強くしてから行くに決まってるだろ!!…あんま金ないけど!!」

アスラはそう言いながらも満員電車のような窮屈さを感じさせる市場へと潜り込んでいった。まだ見ぬ新しいカードを発掘しに行くつもりである。

「……別にたいしたカードなんて置かれてないと思うけど………つて、あいつムエマで連れて行ってるじゃないの!? ……あんなむさ苦しい集まりにカワイイムエを連れていくなんて何考えてるのよっ!!」

エックスであるエールはアスラと違って市場にさほどの興味も示さなかったが、アスラではなく、その頭の上に乗っかっているムエを追いかけるように自らも市場へと足を踏み入れた………

ー…

「つたく………最近言い事ーつもねえな………ブツハハ………」

そんなただっ広い市場。その中にある唯一の休憩場のスペースにあるベンチに腰を掛けながら、身分がレアであるトミオ・ブスジマはそう落ち込むように口ずさんだ。

「チクショー……これもアスラとか言うチビのせいだ……!!」

いもしないアスラに八つ当たりするブスジマ。カラーリーダーを1人でも多く倒して適当にいい思い出を作るはずが、見下していたコモンにコテンパンに叩きのめされた挙句、未だに1人もカラーリーダーを倒せないでいるのだ。彼は今とてつもない劣等感に苛まれていた。

「あゝあ、何かいい事起きないか……ん？」

ブスジマがそう独り言を漏らしたその時だった……

「あわわわっ!!……ちよつと、押さないでよね!!」

「……………ほお？」

人混みの中、大勢の人々の身体に弾かれ、エールがブスジマの近くに飛び出して来た。エールは押し出された事に文句を言いつけるが、これだけ人が混み合っているのだ。当

然ながら誰も返事はしない。

ブスジマはそんなエールに目をつけた……………

「ブツハハ!!」

「!!」

「よおオマエ、中々カワイイ顔してるじゃねえか、このカラーリーダーをも倒したオレと一緒に遊びに行つてやつてもいいぞ!」

意気揚々とエールにナンパを始めるブスジマ。因みに、「カラーリーダー」を倒したと言うのは自分を大きく見せるための真っ赤な嘘だ。実際は情けない姿を晒しながら逃げ出してしまっている……………

エールはそんなブスジマの方へと振り向いて……………

「……………失せなさい、ネズミ」

「……………!?!」

と、見下すような目を向けながら刺のある言葉を言い放った。どうやら新人交流戦で

一度顔を見ているのを忘れていたようである。目も大きく、整ったカワイイ顔のエールから鋭利で刺のある言葉が飛んできた事により、ブスジマは驚愕する。

エールは身分の高いエックスであるため、基本的に身分の低い者達を見下すような教育を受けて来た。そのため、実際は心優しくても、どうしてもこのような態度になってしまうのだ。

まあ、今回に限っては自分に突つかかって来たネズミを取り払おうとしているだけなのが見て取れるが……

「おおーい!!エールウウー!!」

「……ああアスラ!!あんた私のムエをあんなむさ苦しいところに連れて行かないでよね!?!」

「むえ?」

「げえ?!……コイツはー……」

今度はアスラが現れた。買ってきた安くて使えそうなカードをエールに自慢気に見せつけようとするが、その前にエールの文句が炸裂した。一方でブスジマは目の前のチビがああの時の薄汚いコモン、アスラであると理解する。

「あつ!!オマエは!!」

「!!」

バレた。アスラはすぐさまブスジマの存在に気付いた。指をブスジマに刺しながら彼の名前を思い出すが……………

「ブツハハ!!」

「違ええ!!…ブスジマだ!!…ブツハハ!!」

『ブツハハ』と言うからの独特な掛け声で覚えていたアスラ。思わずそっちの単語で読んでしまう。腹を立てたブスジマは全力でそれを訂正した。

「誰よ?」

「新人交流戦で一緒だったヤツ」

「こんなのをいたかしら??」

(こ、こんなカワイイ子がコイツの連れだどどどどど!?)

ブスジマはアスラとエールが中良さげに話しているのを視認してさらに腹を立てる。自分を散々な目に合わせた挙句、そんな奴がいい思いをしていると思う時どうしようもなく怒りがこみ上げてくる。

まあ、等のアスラにはそんな自覚が有りはしないのだが…………

「コモンのクセに女連れで買物とはイイ御身分だな。そんな暇があるならカラーリダーにでもバトルを挑んだらどうだ？」

「あ、この間はごめん!!思いつきりぶつ倒しちまってよ!!」

「話を聞けええええ!!」

馴れ馴れしく友達のように接して来るアスラ。そんな彼に嫌味を言いたいだけのブスジマとは中々話が噛み合わないでいた…………

「オラオラアアア!!どけどけええ!!」

!!!

と、その嘴み合わない会話を遮るかのようにイグアナのような形をしたバギー型のスピリット、『イグア・バギー』に乗って、人が比較的少ないところを突き抜け、爽快に駆ける髭面の男が一人。何やら手にはスピリット召喚用のBパッド以外にも大きな袋を所持している。

「つ、捕まえてくれええ!!そいつ泥棒だあー!!」

息を切らしながら必死にイグア・バギーに乗っている男を追いかけている人物がいた。彼の証言や状況を察するに、あの髭面の男が泥棒である事は誰もが理解できる事であって……

「つしやあ!!…任せてくれ!!」

「むえええええええええ!!」??便乗

「ちよつとアスラ!?!」

人一倍正義感の強いアスラはそれを見るなり全力疾走でイグア・バギーを追いかけた。頭の上に乗っているムエもご機嫌良く鳴き声を上げる。

「テメーにだけいいカツコさせてたまるかよ!!……召喚、ドクグモン!!」

ブスジマも動く。懐から瞬時にBパッドを取り出し、展開。デッキのカードを1枚召喚する。現れたのはクモのような形をした成熟期スピリット、ドクグモンだ。ブスジマはBパッドを片手にそのドクグモンの背へと飛び上がった。

「ブツハハ!!おいその女、ちょっと待っとけよ、後でちゃんとオレ様がデートしてやるからな!!」

「……………キモツ!!」

ブスジマの言い回しに鳥肌が立ったエール。そんな彼女の気も知らずに、ブスジマはドクグモンを駆ってアスラ同様イグア・バギーを追いかけて行った。

…

Bパッドの召喚機能を使い、イグア・バギーとともに盗人を働いた髭面の男は今まさ

に驚愕していた。

「待てコラアアアー!!!」

「な、なんでコイツただ走ってるだけなのにイグア・バギーについて来れるんだ?!」

アスラの超人並の足の速さに度肝を抜かれていた。とても人間業とは思えない。アスラは昔からソウルコアが使えなかったため、あの手この手でなんとかソウルコアを出そうとしていた過去がある。その一つが己の身体の鍛錬。いつ報われるかもわからない途方に暮れた特訓の日々であったが、今それがこの場で生きて活躍していた。

「だ、だが、並走できるくらいじゃ追いつけねえ、このまま街を出て……………」

「むえくくく!!!」

「そうそう、むえく……………え!?!」

「むええええええええええ!!!」??こんにちわ!!

「な、なんだこの生き物おおオオオオ!?!」

このまま振り切れると予測した泥棒であったが、ふと気づくと自分の肩には謎のオレ

ンジ犬??であるムエがそこにいた。ホラー映画並の登場の仕方に泥棒は思わず驚嘆の声を上げてしまう……………

そしてムエはそのまま短い脚をちよちよこ動かしながら男の手に持つBパッドの方へと赴いて……………

「ど、どつから湧いて来やがったこのへんちくりん」

「むえ♪むえ♪」??Bパッド上のカードを眺める

「お、おい何する気だ……………」

「むええええええええええ!!」??美味しそう!!

「や、やめろおおおおお!!!!!!」

ムエは泥棒のBパッドに置かれているイグア・バギーのカードを小さな前脚で拾い上げ、そのまま飛び去ってしまう。着地する時にはその口には奪い取ったカードが咥えられており……………どうやらこれを甘噛みしたいようだ。

そして、当然の如くBパッドからカードが消えたため、イグア・バギーは実体を保てなくなり、消滅してしまう。

「むええ〜♪」??カードをあむあむ

「よおしよしよし!!良くやったぞ、ムエ!!…お手柄だな!!」

「むええ〜♪」??嬉しい

慣性の法則に従い、その場で転がり込んでしまう泥棒を他所に、ムエはアスラに褒められてご満悦のようだ。その若者と謎の小動物の勇気ある行動に、周囲にいた人々が拍手喝采し、称賛を浴びせていた……………

「くっ……………だ、だがBパッドに新しいスピリットカードを置ければ……………」

諦めの悪い泥棒がBパッドと盗んだ大きな袋を手に再び立ち上がろうと試みるが

……………

「そこだ!!ドクグモン!!」

「っ!?!……………な、なんだこの糸は?」

「ブツハハ!?!」

「ブツハハ!!…アスラ、オマエにだけいい思いはさせないぜ!!手柄はオレのモンだぜ!!」

……………後オレ様はブスジマだ!!」

ブスジマの乗るクモのようなスピリット、ドクグモンの口内から発射される糸が泥棒の手足を縛り、完全に拘束した。

これにて、一件落着。後は盗まれた物を持ち主に返却すれば全て解決する……………はずだった……………

「ほお、『オマエ達』かいな……………ワイの街で好き放題暴れてるっちゅう奴らは……………!!」
「っ!?!……………、この声……………ま、まさか!?!」

普通の常識で言うところの関西弁訛りの男性の声が聞こえて来た。その圧のあって、凄みのある声色にブスジマは思わず背筋を冷やしてしまう。知っているのだ、この声の主が誰なのかを……………どれだけ恐ろしい存在なのかを……………

「……………誰??!」

「召喚……………アトララーカブテリモン!!」

アスラもその声の主の方へと顔を向ける。そこには長身で褐色肌、緑色の髪をした端正な顔つきの男性が1人。彼はB.パッドを展開し、カードをセット。スピリットを召喚した。

そのスピリットは言わば巨大なカブトムシの化物。燃えるように赤い甲殻と、その口から放たれる奇声は、この場に居合わせた誰をも戦慄させた……………

「あのクモとあの2人、とっ捕まえろ」

「ええ!?……………お、オレ様も!?!……………う、うあああああああ!?!」

男はそのカブトムシ型のスピリットに命令を送ると、そのスピリットは4本ある腕を巧みに扱い、ドクグモンと泥棒、そしてブスジマまでもを軽々しく捕らえてしまった……………

「な、何がどうなってるんだ?」

「むえくく?」??さあ?

事是一件落着となったはずなのになんだこの光景は……………ブスジマが捕らえたはず

の泥棒。だが、そんなブスジマまでもを泥棒とみなして、彼はブスジマごととつ捕まえてしまったではないか。

「ちよ、ちよつと待て!! オレは何もしてねえぞ!! ……緑のカラーリーダー………『ヘラクレス』!!」

「ええ!?! ……緑のカラーリーダー!?!」

アトラーカーブテリモンに片手で捕らえられ、宙ぶらりんになったブスジマが精一杯の声量でその男にそう言った。その名称にアスラは驚いた。

それもそのはず、この街で必死こいて探そうとしていたカラーリーダー。それがこんな出来事の途中で出会すなんて想像もしていなかった事だろう………

「ああ!?! ……うっさいわブサイクデブ、ちよつと黙つてろや。オマエみたいな悪人面が悪させんわけないやろ?」

「偏見にも程があるだろ!! ……オレ様は昨日オマエとバトルしてやったじゃねえか!?!」

「生憎やけど、ワイは男の顔は1日も覚えん太刀やねん」

「なんだとコンヤロー!!!」

「もうええわ、おもんない奴は眠つとけ……………」
「ぐっ!?!……………」

ヘラクレスの指示でアトラカブテリモンが指で器用にブスジマの頭を叩いた。その衝撃により、ブスジマはまたしても気を失ってしまう……………」

「さあ〜と、これでほぼ仕事完了や……………後は盗まれたモンを返して……………」

「なあアンタ!!」

「??」

「オレ、今年の新人チャレンジヤーのスーミ村のアスラっス!!…カラーリーダーのアンタにバトルを挑みまアアアす!!」

彼がこの街のカラーリーダーと聞き、居ても立ってもいられなくなったアスラが勢い良くヘラクレスに声をかけに来た。要求はもちろん彼とのバトルスピリッツ。

だがヘラクレスはアスラの顔や身なりを目に映すなり……………」

「なんやオマエ、ブツサイクやな〜」

「えええええ!!……会って早々に顔を侮辱されたあゝ!?」

「いや……オマエにはワイのようなモテ要素が無さ過ぎる言うとんのや………ワイは恵まれた体格、整った顔に加え、バトルも強いっちゅうのに、オマエはチビで顔も中の下くらいで全くモテ要素が無い、しかも弱そうと来たもんや………悲しいな」

「うるせえ!!…別に見た目がカツコよくなくてもいいじゃねえっすか!!」

「むえええええええ!!」??そうだそうだあ!!

ヘラクレスに侮辱され、ポンポンと怒るアスラ。ムエもそんな彼の気持ちを理解しているのか、ヘラクレスを威嚇するような「むえええええええ!!」の鳴き声を浴びせる。

「まあまあ、落ち着けやブサイクチビ。コイツらを刑務所に叩き込んだらゆっくり相手してやるで」

しかし、ヘラクレスも仕事は仕事か、カラーリーダーとしての責務を果たすべく、一応はアスラとバトルしてくれるようだ。

なんだか腹の立つ奴だったが、挑戦を引き受けてくれる事に安堵するアスラ。と、そ

の時、またしても背後から声が聞こえて来た。この声はアスラも聞き慣れた声であつて
.....

「はあ……やつと追いついた、何なのよもう………つてアレ、何この状況?!!」

「あ、エール」

エールが息を切らしながらも遅れて追いついて来た。ただ、これまでの事を何も見ていなかったため、アトラーカーブテリモンがブスジマと犯人、ドクグモンを捕らえている状況を目に入れるなり頭の上に疑問符を浮かべる。

「おお!!カワイイ女の子めええっけえええ!!」

「は??」

「ええ!?!…急にどうしたんすかアアアア!?!」

ヘラクレスはエールの姿を目に入れるなり、ブスジマやアスラに対するこれまでの冷ややかな態度が嘘みたいに変貌し、目の色を変えてエールに近づいて来た。エールはこれに対しても疑問符を浮かべる。

「やあやあ、可愛らしいお顔の素敵なお嬢さくん!!……どうや?…ワイ、こう見えてこの街のカラーリーダーなんや?…一緒にお茶でも………」

「失せなさいネズミ」

「……………え?」

猛烈な勢いでエールをナンパするヘラクレスであったが、エールはブスジマ同様彼をネズミと呼称し一蹴。尊大且つ冷たい態度で軽くあしらってみせた。案外一番ナンパ対策に効果的なのかもしれない。

「いや待て待てエールウウウー!!!」

「何よ?」

「何よ?じゃねえ!!失礼だろオオオー!!!相手はカラーリーダーだぞおー!!」

「知らないわよそんなの、私はエックスよ?」

「だから関係ねええー!!!…それよりも先ずは歳上を尊敬しよう!!そこから!!」

いくら完全に身体がそうなるように染み付いてしまっているとは言え、このままでは

ダメだと思つたアスラが全力でエールを注意しに行くものの、「私はエックスよ」の一点張り、中々直る気配が無い。

アスラとエールの会話の様子を見たヘラクレスは彼らが一緒に旅をしている事を瞬時に見抜いて……………

「お、オマエ……………ブサイクのくせにモテるんやな……………」

「え??何がつか?」

「だから、そんなカワイイ彼女いたんやなって言つとんのか!!……………腹立つはホンマ!!」

「か、彼女おお!!……………な、な、な、なな訳な、なないじゃない!?こ、こここ、コイツはコモンよ!!」

ヘラクレスがそう言うと、エールは動揺を隠せず、顔がトマトみたいになり、舌も上手く回らなくなる。しかし、アスラは……………

(……………かのじよってなんだ??)

この有様である。田舎者故、余り言葉を知らないのであつた……………

「はあくく……まあええわ、そのチビの相手はしてやるで、一応仕事やし……ほな、先ずはとつ捕まえた泥棒共を連行しますか」

エールには既に意中の男がいる事を心の隅々まで察したヘラクレスがアトララーカブテリモンを動かし、ブスジマ達を運ぼうとするが……

「あつ、因みにブスジマは悪い奴じゃないですよ!?!……犯人捕まえたのあいつですから!!」

「……………へ〜いへい」

アスラはブスジマの誤解を解こうとヘラクレスの説得を試みた。ヘラクレスはまるで始めから知っていたような表情と仕草を見せながらアトララーカブテリモンを刑務所の方へと向かわせた……………

……

あれから1時間は経つただろうか……

アスラとエール、ムエ。そしてこのオオカブ町の緑のカラーリーダー、トーマ・ヘラクレスはバトル専用の誰もいない殺風景なコロシムへと足を運んでいた。

一触即発。今にもアスラとヘラクレスのカラーカードを賭けた戦いが始まろうとしていて……

「そう言えばエール」

「ん？」

「オレが先にカラーリーダーとバトルしちゃっていいの？」

「良いわよ、別に私旅はしたかったけどカラーリーダーとバトルする気は無かったし……」

「え?? そうなの??」

「むええ〜♪」?? エールに首ゴロゴロされてる

と、エールはムエで遊びながら適当にアスラの質問に答えた。エールがカラーリーダーにバトルを挑まないのは、単純に勝ってしまった時に目立つから。そんな風に目立って仕舞えば間違いなく他のエックスに何かを言われるからである。

「さあ、もう御託はええか??……このバトル、カラーカード以外にもエールちゃんのデー
トもかかってんねん、負けられへんわ」

「賭けた覚えはないわよ」

「そこをなんとか!!」

「嫌よ」

(……デートってなんだ??)

ちやつかりエールとデートする賭けを持ち込もうとする。下心丸出しのヘラクレス。
その様子だけなら一見この国が代表するカラーリーダーとは到底思えなくて……

「へへ、んじや、オレの初めてのカラー戦、よろしくお願いしまアアアす!!」

「オマエ、うっさいねん。声デカイわ……まあええ、ワイの實力、とことん見せつけたる
で」

早速……

2人は懐からBパッドを取り出し、それを展開してセット。デッキも置いて準備万

端。

いよいよ幕を開ける。隅っこにあるコモンの村『スーミ村』出身の田舎カードバトラー、アスラの果てしなく長くて険しい、頂点王への旅路が……………

……………ゲートオープン、解放!!

コールと共にバトルスピリッツが幕を開ける。

先行はアスラだ。颯爽とターンを進行させて行く……………

「ターン01」アスラ

「メインステツプウウウー!!……………ドラゴンヘッド、シヤムシーザーを召喚!!でもってネクスカード、ミラーワールドを配置!!」

1 [ドラゴンヘッド] LV2 (2) BP2000

1 [シヤムシーザー] LV1 (1) BP2000

1 [ミラーワールド] LV1

「!?」

開始早々、いつも通りのアスラの速攻展開。龍の頭部と翼のみの姿をしたドラゴンヘッドと、背に数本の鋭利な刺を生やした赤いトカゲのスピリット、シャムシーザーが場に現れると共に、配置中は周囲の全てが鏡向きになるネクサスカード、ミラーワールドが発動された。

(……………なんやコイツ、妙やと思つたら……………Bパッドにソウルコアが置かれてないやん。何モンや?)

開始早々、アスラのバトルに違和感を覚えるヘラクレレス。その正体はアスラのBパッドにソウルコアが置かれて無いことであつて……………

「おーい、オマエ、ソウルコア使わんとしやんとバトルできるんか?」

「へへ、大丈夫つすよ!!…オレ、生まれつきソウルコア使えないんで!!」

「……………生まれつきソウルコアが使えない?」

「俺はこれでエンド!!……さあカラーリーダーさん、いらっしやいませええー!!」
手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV2（2）BP2000

【シャムシーザー】LV1（1）BP2000

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

ソウルコアが出ないという自身の謎體質を説明しながらアスラはそのターンをエンドとした。次はカラーリーダーであるヘラクレスのターンだ。アスラの奇怪な體質を不思議に思いながらもそれを進行させていく……

「ターン02」ヘラクレス

「メインステップ……ソウルコアが使えないねえ、初めて見たわそんな天然記念物、他におらんやろ?」

「ああ、まあな、見た事ねえ!!」

嫌味の込められたヘラクレスの言葉。だが、アスラは全く気にしていないように笑い飛ばしていた。生まれて15年。散々言われて来たことであるため、この程度は慣れっ子なのである。

「だけどそれでもオレは最強の『頂点王』になる!!! コモンでもソウルコアが使えなくてもこの世界で一番強くなれるって証明する!!」

「ほお〜『頂点王』…見据えているのは遙か先って感じやなく……まあ限界はある思っうけどな……トゲアントとテントモンを召喚や」

「!!」

1 [トゲアント] LV1 (1S) BP1000

1 [テントモン] LV1 (1) BP2000

「テントモンの効果でコアブースト」

ヘラクレスが初手で呼び出したのはアリののようなスピリット、トゲアントと、緑のてんとう虫型の成長期スピリット、テントモン。

「バーストを伏せてエンドや……ほな、かかって来いや」

手札：2

場：〔トゲアント〕 L V 1

〔テントモン〕 L V 1

バースト：〔有〕

彼の場の端に、所謂罫カードであるバーストカードが裏側で現れた。しかし、アタックはできたものの、これも戦略のうちか、それ以降はこのバーストカードをセットするだけで何もせずそのターンをエンドとした。

次は再びアスラのターン。勝ちに行くためにターンシークエンスを進行させて行く

……

〔ターン03〕アスラ

「メインステップ!!オレは2体目のドラゴンヘッドをL V 2で召喚!!」

1 「ドラゴンヘッド」 LV2 (2) BP2000

アスラの場合に2体目のドラゴンヘッドが飛翔する。

「こちとら初めてのカラー戦だ!! すっ飛ばしていくぜええー!! ……アタックステップ、
いけシヤムシーザー!!」

「……………トゲアントでブロックや」

地面を這ってヘラクレスのライフへと進行するシヤムシーザー。それを阻むかの如くトゲアントが前方に立ち塞がるが……………

「BPはシヤムシーザーの方が上だアアアー!!!」

シヤムシーザーはトゲアントに噛み付く。トゲアントはダメージに耐えられず、破裂して場から消え去ってしまった。

……………だが、ただでは転ばない。

「トゲアクト破壊時効果、ソウルコアが置かれている時、ボイドからコア2つを追加する
で」

「!？」

流石にこれは計算のうちだったか、ヘラクレスのリザーブにコアがさらに追加された。

「ただどこかで尻込みするオレじゃねえええ!!……行け、ドラゴンヘッド!!」
「バカ!!また何の考えも無しに………」

止まる事を知らないアスラ。ドラゴンヘッド1体でさらに追撃を仕掛ける。余りの
計画性の無さにエールは呆れる。

「……………ライフや……………っ！」

へライフ5??4へヘラクレス

上空から繰り出されるドラゴンヘッドの体当たりがヘラクレスのライフを1つ砕く。ヘラクレスのリザーブにさらにコアが追加されると共に、今度は事前に伏せられていたバーストカードが勢い良く反転して……

「バースト発動、手裏剣大地!!」

「!?!」

「この効果でさらにコアを1つ追加し、配置!!」

1 【手裏剣大地】LV2(2)

反転するバーストカード。その時、ヘラクレスの背後に巨大な手裏剣の形をした大地が出現する。

「配置時効果。回復状態のドラゴンヘッドを疲労」

「っ!?!」

その場で風車の如く回転して行く巨大手裏剣。そこから育まれる風がアスラの残つ

たドラゴンヘッドを疲労状態へと追い込んだ。

「くっ、これじゃアタックできねえ……ターンエンドだ」

手札：2

場：【シャムシーザー】LV1

【ドラゴンヘッド】LV2

【ドラゴンヘッド】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

全てのスピリットが疲労状態、完全にアタックを封じ込まれてしまい、そのターンをエンドとすしてしまいうアスラ。次はカラーリーダーのヘラクレスのターンだが……

(……………なんやコイツ……大口叩く割には全然大した事ないやんけ………アホくさ。こんなつまらんバトルさつさと終わらせよ)

そんな事を心の中で呟いていた。ソウルコアが使えないと言うからどんなバトルをするかと期待していたようだが、さっきのアスラの軽はずみなアタックのプレイを見て落胆してしまったのが明らかに見て取れる……

「ターン04」ヘラクレス

「メインステップ……もうええわ、さつきと終わらせてエールちゃんとデートしよ」

「しないわよ!!」

「まあまあ、そうお硬い事言わさんなって……ほな、召喚するで……アトラーカブテリモン!!」

1「アトラーカブテリモン」LV2(3)BP13000

「!!」

地中より地響きと共に現れたのは赤き一角を持つ甲虫型、完全体スピリット、アトラーカブテリモン。ヘラクレスのデッキにおいてのメインアタッカーである。

「さつき召喚した奴!!」

「ああそうや。ブサイクの割には物覚えがええな」

「だから誰がブサイクだあー!!」

「ふふ、アトラーカブテリモンの召喚時効果、疲労状態のスピリット2体を手札に戻す

……ドラゴンヘッド2体や」

「なにっ!？」

軽くアスラを煽りながら、ヘラクレスはアトラーカブテリモンの効果を発揮させる。赤き一角から放たれた稲妻の衝撃がアスラのドラゴンヘッド2体をデジタルの粒子へと変え、手札へと強制帰還させた。

「スピリットが2体も手札に戻った!？」

「驚くのはまだ早い、アタックステップ、アトラーカブテリモンでアタックするで!!

……そしてこの時にも全く同じ効果が発揮される」

「!？」

颯爽と駆け出すアトラーカブテリモン。その瞬間にも赤き一角から稲妻が迸り、今度はシャムシーザーが強制的にアスラの手札へと帰還してしまう。

「次はライフや!!」

「っ……仕方ねえ、ライフだ!!……っ!!」

へライフ5??4へアスラ

飽くまでアタック時効果であるため、アトラーカブテリモンの継続された本命のアタックがアスラを襲う。赤き一角による刺突がそのライフ1つを貫いた。

「まだ終わらんで!!アトラーカブテリモンのLV2効果!!……バトル終了時、完全体スピリット1体につきライフ1つを破壊する!!」

「!!」

「いまはこのアトラーカブテリモンが1体、よって追加で1ダメージや!!」

「ぐっ、ぐあっ!!」

へライフ4??3へアスラ

アトラーカブテリモンの一角から放たれる赤い電撃が今度はアスラ自身を襲う。そのライフはまたしても砕け散って……………

「最後はテントモン、かましたれえ!!」

「っ…………ライフだ!!…………ぐっ!!」

へライフ3??2へアスラ

テントモンが翅を広げアスラの元へと飛翔する。勢い良くライフへと体当たりし、それをさらに砕いた。

「エンドステップ、手裏剣大地LV2効果、アトラーカブテリモンとテントモンを回復。……………これでエンドや」

手札：2

場：【アトラーカブテリモン】LV2

【テントモン】 LV1

【手裏剣大地】 LV2

バースト：【無】

手裏剣大地の巨大手裏剣が回転する。そこから育まれる風は、今度はアトラーカーブテリモンとテントモンに今一度活力を与える。

「……………すごい……………まるで隙が無いじゃない……………」

ここに来て初めてエールがヘラクレスに称賛の声を上げた。確かに隙が無い。アスラのライフを大きく削ぎつつ、回復により次のターンの防御も完璧。流星はカラーリダーと言える。

「終わりやな。オマエの手札にあるスピリットじゃワイのアトラーカーブテリモンには勝てん……………」

圧倒的な実力差を見せつけ、勝ちを確信するヘラクレス。だがアスラは……………

「へへ、流石カラーリーダー……面白くなって来たな!!……オレのターンだぜ!!」
 (??……なんやそのえらいたつぷりな自信は)

ヘラクレスが思っていたよりも全くこのバトルを諦めてはいない。寧ろ余裕の表情をしていた。その溢れる自信を感じたヘラクレスは僅かな違和感を感じる。

それは次のターンでアスラが呼び出すスピリットが全てを教えてく……

「ターン05」アスラ

「メインステップ!!……手札に戻ったドラゴンヘッド2体とシャムシーザーをもう一度
 召喚!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000
 ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000
 ー【シャムシーザー】LV1(1)BP2000

アトララーカブテリモンの効果によって手札に戻されていたスピリット達が次々と復活を果たしていく。そして、アスラは『真打登場』と言わんばかりの顔つきで手札のカードをさらに引き抜いて……………

「仮面ライダー龍騎を召喚!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2（2）BP4000

「なに?!…ライダースピリットやと!?!」

「龍騎は効果によって手札とデッキに戻らない!!…アトララーカブテリモンの効果は効かないぜ!!」

「……………!!」

アスラは赤きライダースピリット、龍騎を召喚する。その際に召喚時効果が発揮され、対象カードのサーチを行うが、今回は対象カードは無し。全て破棄される。

流石のヘラクレレスもまさかアスラの切り札がライダースピリットだとは思ってもなかった事だろう。何せ……………

(変や……………『ライダースピリット』や『デジタルスピリット』のデツキつちゆうのは最終進化の段階までには必ず『ソウルコアの力を必要とする』……………どんな病気が知らんけどもソウルコアが使えない奴なんかライダースピリットが宿るわけない)

そう、ヘラクレスが考えている通り……………

普通はソウルコアが使えないアスラなんかはライダースピリットが宿るなんて事は先ず考えられないし、あり得ない。可能性があるとしたら龍騎が特別なのだ。ソウルコアが使えないアスラだからこそその理由があつたのか……………

それはまだ誰もが未曾有の謎であつて……………

「ミラーワールドのLVを2に上げ、マジック、ストライクベント発揮!!……………BP8000以下のスピリット、テントモンを破壊する!!」

「!？」

龍騎が腰にあるベルトに装着されているカード束から1枚引き抜き、それを左手の龍の頭部を象ったバイザーへと装填。

すると……

……『ストライクベント!』

という無機質な音声と共に、龍騎の右腕に赤い龍の頭部を模したガントレットのような武器が取り付けられる。

龍騎はその右腕をテントモンへと向け、龍の口から爆炎を放つ。勢いよく放たれたそれはテントモンを瞬間に包み込んで焼き尽くした。

「追加効果でカードをドロー!!……でもってアタックステップ!!……行け、龍騎!!」

「バカか!!たかがBP4000のスピリットで特攻やと!?!アトラーカブテリモンで踏み潰して……」

「ミラーワールドの効果!!」

「!?!」

「龍騎がアタックした時、デッキの上からカードを1枚オープンできる。それがアドベントカードならノーコストで発揮する!!」

ヘラクレスの威勢を遮るようにネクサスカード、ミラーワールドの効果を発揮するアスラ。デッキからカードが1枚オープンされる。そしてそのカードはアドベントカー

ドの一種『ファイナルベント』……………

「つしやあ!!…これを発揮!!…効果によりアトラーカーカブテリモンを破壊し、龍騎のシンボルを赤の2つにする!!」

「はあ!?!…なんやと!?!」

龍騎が再び腰のベルトからカードを1枚引き抜き、左手のバイザーにそれを装填
……………

……………『ファイナルベント』!!

と、また無機質な音声が続いた……………

龍騎の背後に赤き龍が身体を唸らせ、咆哮を上げながら現れる。龍騎はそれと共に上空を跳び上がる。そしてそのまま赤き龍の火炎弾に背中を押されながらアトラーカーカブテリモン目掛けて跳び蹴りをぶちかました。アトラーカーカブテリモンはその跳び蹴りに強固な甲殻を貫かれ、堪らず爆発四散してしまう。

「ぐっつ!?!……………ぐおおおおお!?!」

〈ライフ4??2〉ヘラクレス

アトラーカブテリモンの爆発の余波がヘラクレスを襲う。それだけでそのライフが一気に2つも砕け散った。

「つしやあ!!……これで一気に形成逆転!!」

(なんや……何された??…ライダースピリットとは言え、たかがコスト3のスピリットが場を一掃するばかりかライフ2つ破壊するやと!?!…いや、あいつだけやない。専用のマジックとネクサスもあつてこそか……)

形成逆転に歓喜するアスラ。そして今のこの状況を分析するヘラクレス。

彼にとっては予想がつくわけもなかった事だろう。あのコモンで、ソウルコアも使えないような奴がまさかライダースピリットを召喚するどころか自分が作り上げた盤面を一掃し、一気に追い詰めて来たのだから……

並大抵のカードバトラーならアスラの強さに恐れ慄くはずだ。しかし、この緑のカラーリーダー、ヘラクレスは……

「ふ、ふふふ……ハツハツハツハ!!」

「!?」

「前言撤回!!……ええなあ!!オマエ、おもしろいわあ!!……今年の新人でワイを唸らせたのはオマエで『2人目』やで!!」

逆に気が狂ったように笑い出した。しかし、その声色から感じられるのは明らかな闘争本能。つまり、アスラは彼を本気の中の本気にさせた事になる。

「なんか本気になったっぽいけどもう遅え!!……このターンで決める!!……ドラゴンヘッド!!」

そうだ。ヘラクレスの闘争本能が剥き出しになったとは言え、今はまだアスラのターン。このターンで決めて仕舞えば恐れるものは何もない。

ドラゴンヘッド2体のうち1体が翼を広げ、飛翔するが……

ヘラクレスはその動きに合わせるように手札からカードを1枚引き抜いて……

「フラッシュアクセル!!……六刃騎士ムツバセイボウ・A!!」

喚する!!……そんなもってドラゴンヘッドのアタックをブロックや!!」
「!？」

ー【六刃騎士ムツバセイボウ・A】LV1(1)BP3000

ドラゴンヘッドの道を阻むように現れたのは系統殺人を持つ緑のスピリット、ムツバセイボウ・A。その4本の腕にそれぞれ握られた4本の剣でドラゴンヘッドを串刺しにした。ドラゴンヘッドは堪らず爆発してしまう……

「そんな……アスラのスピリットが尽くやられて行く……」

「むえくく」??悲しみ

気がつけばアスラの中には龍騎ただ1人……有利だった状況が次々と覆されるのを見て、そう呟くエール。その手に抱かれているムエも悲しそうな鳴き声を上げた。

「ほら、どないした??……さつきまでの勢いはどうしたんや??……『頂点王』になるんやな

「かったんか?」

「くっ………ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダー龍騎】 LV 2

【ミラーワールド】 LV 2

バースト：【無】

「ターンエンドお!?……どうしたどうした??……もつとワイを楽しませろや!!」
 「何なのよあいつ……さつきから人が変わったみたいに」

龍騎以外のスピリットを全て消され、一気に劣勢に立たされたアスラはそのターンをエンドとせざるを得なかった。

この国の緑のカラーリーダー。トーマ・ヘラクレスは女好きで有名だが、自分が強いと認めたカードバトラーに出会すと目の色を変え、一種の戦闘狂になってしまう。現に今回もアスラの強さを認め、死力を尽くしたバトルスピリットをとことん満喫しようとしている。それが彼がこのカラーリーダーと言う職務を全うしている理由でもあった。

「ターン06」ヘラクレス

「メインステップ……マジック、ハンドリバーズへR!!…効果で残りの手札を捨て、オマエの手札と同じ枚数ドロ……さらにコストの支払いにソウルコアを使った事により、それより1枚多い枚数のカードをドロ!!」

ヘラクレスはメインステップ早々に緑特有の相手依存のドロ型カードを使用して来た。これにより、残りの手札全てを犠牲にする事で、アスラの手札の枚数+1枚のカードをドロした。

「そして、2体目のアトラーカブテリモンを召喚!!」

1 「アトラーカブテリモン」 LV2 (3) BPI3000

「っ!!……2体目!!」

「ワッハッハッハ!!……強いカードは複数枚積むもんやろ!!」

ヘラクレスの場の地中から飛び出してくるのは、このバトル2体目となるアトララーカブテリモン。そこから鳴り響く甲高い奇声はまさに絶望の雄叫びとも喩えられて……

「アタックステップ!!アトララーカブテリモンでアタック!!……まさか効果は忘れちゃいないやろな!」

「つ……ライフを追加で破壊する……」

アスラのライフは残り2つ。既にアトララーカブテリモンの一撃で沈むラインまでたどり着いている。つまり何もなければこの一撃でゲームエンドだ。

「ワツハツハツハ!!クタバレやブサイク!!」

「……アスラ!!」

エールがピンチになったアスラの名を叫ぶ。その時、アスラは反射的に手札にある一枚のカードを抜き取って……

「フラッシュマジック!!…『ソードベント』!!」
「!!」

龍騎が再び腰にあるベルトからカードを1枚抜き取り、それを左手のバイザーに装填した。

……『ソードベント!!』

と、無機質な音がそこから発せられると、龍騎の手に龍の尾を象った柳葉型の剣が装備される。

「ソードベントの効果!!龍騎のBPを5000上げ、スピリットのコア2つをリザーブに置く!!……龍騎、アトラーカーブテリモンのコア2つをリザーブへ叩き込め!!」

「っ!?!……コアを!?!」

龍騎はその剣を手に、地を蹴って勢い良く駆け出した。狙った先はアトラーカーブテリモン。豪快な剣技でその中に眠るコアを弾き飛ばして見せた。

「どうだ!!これでL V 1!!……アトラーカーブテリモンのライフを破壊する効果は発揮さ

れないぜ!!」

アスラの言う通り、これにより、アトララーカブテリモンのLVはダウン。バトルの終了時にライフを追加で破壊する効果は消え失せて…………

「だが!!効果消したくらいでいい気になんや!!…………どちらにせよアトララーカブテリモンとムツバセイボウのアタックで2つライフを破壊できる!!」

そう、別にアスラの敗北の危機が完全に去って行ったわけでもない。「一撃でやれないなら二撃で決めるまで」…………そう言わんばかりの姿勢を見せるヘラクレス。

しかし、アスラもその姿勢に負けじと手札にある最後のカードを引き抜いて…………

「フラッシュマジック、ファイアーウォール!!」

「!?!」

「この効果により、龍騎を破壊し、このバトルでこのターンのアタックステップを終了させる!!」

龍騎は今一度ベルトからカードをドロし、その1枚をバイザーへと装填……………
……………『アドベント!!』

と、また無機質な音声が続いたかと思えば、龍騎は真つ赤に燃え滾る炎の中へと姿を消していき、新たに全長6メートル程はある赤き龍が場へと出現した。

「そのアタックはライフで受ける!!……………ぐうっ!!」

〈ライフ2??1〉アスラ

アトラーカーブテリモンが赤き一角を活かした突進でアスラの残り2つのライフのうち1つを砕く。

「ファイアーウォールの効果発動!!……………このターンのアタックステップは終わりだアアアー!!!」

赤き龍がアスラを守るかのようにアトラーカーブテリモンを長い尾で弾き飛ばした。おそらくこのターン内では何をしようともこの赤き龍がアスラの身を守る事であろう

……

「ほお?……よく凄いだな。……ワイはこれでエンドや……さあ、まだクタバさんのやっつたらもつと見せろや!!オマエの力を!!」

手札：2

場：【アトラーカブテリモン】LV1

【六刃騎士ムツバセイボウ・A】LV1

【手裏剣大地】LV2

バースト：【無】

致し方なくそのターンをエンドとした緑のカラーリーダー、ヘラクレスの効果でアトラーカブテリモンが疲労状態から起き上がった。そしてその宣言と共にアスラの場にいた赤き龍が姿を眩ましてしまう。

次はアスラのターン。

その手札はヘラクレスの猛攻を凌ぎ切るために使い果たし、今や0枚。片やヘラクレスの場には強力なスピリットを含めた合計2体のスピリット。

崖つぷち。絶対絶命の状況。普通のカードバトラーなら先ず諦め、サレンダーでこの

場を終わらせてしまおうであろう……

ただ、このアスラは……

「諦めねえ!!カード達が繋いでくれたこのターンを無駄にはしねえ!!」

「……………アスラ……………!!」

「おお、熱い……………ゾクゾクするで……………やっぱオマエ、ええなあ!!……………さあ!!早くしろ!!」

未だにその燃える闘志は冷めてはいない。再びアスラの逆襲のターンが幕を開ける

……………

「オレのタアアアアーン!!!」

「ターン07」アスラ

「ドローステップ……………ドロオオオー!!!」

アスラの勝利を信じた全身全霊のドロー。

そのカードとは……………

「メインステツプ!!……………へへ、強いカードは複数枚積むんだよな?」

「つ……………まさか……………」

「ああ、そのまさかだ!!……………オレは、2体目の龍騎を召喚!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(2)BP4000

ニヤリと口角を上げるアスラ。そしてこの場に2体目の龍騎を呼び出して見せる。

圧倒的な引きの強さ、豪運……………いや、幼き頃から血の滲むような努力を積み重ねて来たアスラだからこそできたドローと言っても過言ではない。

「召喚時効果!!カードをオープンし、アドベントカードを加える……………よし、オレは『ソードベント』を加えるぜ!!」

召喚時効果も見事に成功させ、これまた2枚目となるソードベントのカードを手札に加えた。

「さらにこれを発揮!!……龍騎のBPを5000上げ、ムツバセイボウ・Aのコア2つをリザーブに置き、消滅させる!!」

―【仮面ライダー龍騎】BP4000??9000

「くっ?!」

ソードベントの力により、再び柳葉型の剣を手にした龍騎がムツバセイボウへと攻め寄り、豪快な剣技でその中にあるコアを弾き飛ばした。全てのコアを失ったムツバセイボウは堪らず消滅してしまう。

「アタックステップ!!……行け龍騎!!……でもってミラーワールドの効果!!……カードをオープンし、アドベントカードならノーコストで発揮できる!!」

「っ……そう何度も来るわけ……」

そうたった1枚しかオープンできないネクサスの効果。捲れるわけではない。

しかし……………

アスラのデッキからオープンされたのは、これまたこのバトル中2枚目となる『ファイナルベント』のカードであって……………

「なんやとっ!?!」

「つしやあ!!…………これを発揮!!…………アトラーカブテリモンを破壊し、シンボルを追加!!」

今回で何度目だろうか…………龍騎はベルトからカードを1枚抜き取り、それを左腕のバイザーに装填。

…………『ファイナルベント』!!

と、無機質な音声の流れ、龍騎の背後へ赤き龍が身体を唸らせ、咆哮を張り上げながら出現した。

「これで最後だ、ぶちかませええー!!…………ドラゴンライダーキックツツ!!」

龍騎はその赤き龍と共に上空へと跳び上がり、その赤き龍の口内から放たれる火炎弾に背を押され、ヘラクレスのアトラーカブテリモンに跳び蹴りをかます。

「ワイのアトラーカーブテリモンが一度ならず二度までも!?……まるでデツキがこいつに勝たそうとしてるような……スーミ村のアスラ……ほんまオマエおもしろいやんけええええ!!」

貫かれる強固な甲殻。アトラーカーブテリモンは力付き、その場で大爆発を起こした。ヘラクレスはこの瞬間、敗北を確信しながらもアスラというカードバトラーを心の底で認めていて……

「ぐっ……ぐおおおおお!!」

ヘライフ2?0ヘラクレス

……ピー

アトララーカブテリモンの爆発の余波はヘラクレスのライフをも砕いた。その瞬間、彼のBパッドから敗北を告げる無機質な音が聞こえて来て……………

「ハアツ、ハアツ…………どうだ、勝ったぞ!!…………コモンでも、ソウルコアが使えなくても、カラーリーダーに…………勝ったぞおおお!!」

勝者はアスラだ。全力を出し切つての勝利に満身創痍ながらも精一杯腹の底から歓喜の声を上げた。

頂点王になるために何年も積み重ねてきた努力。それが今この場で報われ始めているのだと心より実感したのだ。

(アスラ、ホント、ムチャクチャなヤツね…………馬鹿で、うるさくて、チビで、コモンで……………けど、なんかすごいヤツ……………)

その様子を終始見届けたエールは内心でそう考え、少しだけ頬を赤く染めた。コモンの身分だが、カラーリーダーの強さに臆す事なく、何の迷わずデツキだけを信じて突き

進む小さな勇姿を不本意ながら認めていた事をこの瞬間より改めて認識して……………

「へへ、ほらよ!!」

「!?!」

一息ついたヘラクレスが懐から一枚のカードを取り出して、それをアスラに投げつける。アスラはそれをキャッチするなり凝視してみるが、特に何の変哲も無く、バトスピーカードでも無い普通の緑色で塗りつぶされたカードだった。

ただ、普通に見えるのは外観だけ、その正体は……………

「あげるで、このワイ、緑のカラーリーダーであるヘラクレスに勝利した証、『グリーンカード』や!!」

「つ!!……………お、おとおお!!これ『カラーカード』だったんすかアアア!!……………ありがとう
ごぞいまアアアす!!一生大事にしまアアアす!!」

「ええバトルやった。夢はあいつと同じ『頂点王』やったな。頑張りや」

「ハイハイイイ!!……………頑張りま……………つて、『あいつと同じ??』」

カラーリーダーに勝利した証、カラーカードを受け取ったアスラ。それと同時にカラーリーダーであるヘラクレスにテンドウ同様認められた事を感じ取り、その心を喜びで満たす。

が、ヘラクレスの『あいつと同じ』と言う言葉がつい頭の中で引つかかってしまいで……

「ああそうや。オマエと同じコモンの奴が今日オレをぶつ飛ばしよった。あのバトルも滾ったなあ、ホンマ!!……名前は『ロン』とか言っとったな」

「っ!!……ロン!!」

ヘラクレスの言葉により、アスラはロンに先を越されていた事を理解する。

「あのイケメン天才ヤロー!!……オレは必ずオマエに追いついてやるからなアアア……でもってオレが先に頂点王になるツツ!!」

アスラは幼馴染みであるロンの躍進を聞き、微笑ましく思いつつも、ライバルでもあるため、燃えるような闘争心をそのまま目標と共に言葉で表した。

「……………じゃあ、この後ワイは約束通りエールちゃんとデートを……………」

「しないわよ!!」

「いや、そこを何とか!!」

「しかもあなた負けたじゃない!!」

バトルを行う前の性格に戻るヘラクレス。早速エールをナンパして行く。ただしあつさり拒絶されてはいるが……………

「ん〜なんかよくわかんねえっすけど、『デート』って言う奴??…………オレがヘラクレスさんとしますよ!!」

「キシヨツツ!!…キモいねんオマエ、赤字タグ増やす気か!」

「あかじたぐ??」

国の最果てにある村出身。つまり田舎者故、デートの意味がわかっていないアスラ。ヘラクレスはそんなアスラの誘いを全力で断つて…………

「オマエはええよなアスラ!!……毎日こんなカワええエールちゃんとデートできるんやから!!」

「!!」

「え??そんなに直ぐできるモンなんすか!？」

ヘラクレスのデリカシーの無い発言に、エールは思わず顔を真っ赤に染め上げる。

「だ、誰が……………」

「ん??」

「誰があんたなんかとデートするかアアアア!!!!」

「ギャアアア!!?!」

問題のある発言をしたのはヘラクレスの方だが、エールは思わずアスラの方を全力でぶん殴ってしまった。

「オレ……………何もしてないんですけど……………」

力尽きたアスラは地面の感触を肌で感じながら、エールに対する精一杯の愚痴を零すのであった……………

6 コア「ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!」

オオカブ町にて、緑のカラーリーダーを倒し、緑のカラーカードを手に入れたアスラ。早速次なるカラーカードを得るべく、エール、ムエと共に次の街へと歩みを進めていた。

「ちよ……ちよつと?!…あんまり早く歩かないでよ!!」

「バカヤロー……どんだけ急いでも時間が足りねーんだよ………つかなんでもくつつくの?」

「むえー………ZZZZ」??すびー

時刻は真夜中。アスラ達は闇に包まれた真つ黒な森の中を突き進む。

実力的にも集めているカラーカード的にもロンに先を越されているアスラは急いでいた。少しでもロスした時間を取り戻すべく、こんな夜中まで歩みを進めていたのだ。その手にはランプ機能を発揮させたBパッドが握られており、前方が明るく照らされていた。

一方、暗い所が苦手なのか、無意識のうちにアスラの腕にしがみ付いているエール。

そして、謎のオレンジ小動物ムエはアスラの頭の上で健やかな眠りについていた。

「こ、ここってオオカブ町とナミラ町の間にある『レイデル森』よね？……幽霊が出るって言うので有名な……」

「幽霊？」

エールが震えた声でアスラに言った。

そう。今アスラ達が歩んでいるこの森の名前は『レイデル森』……幽霊の未確認情報が多数ある場所だ。ここを抜かなければ次の目的地である『ナミラ町』へと辿り着く事はできない。

致し方ない事はエールとて理解しているが、何もこんな真つ暗闇な夜ではなく、どうせなら白昼堂々と安堵に心を満たして歩きたかった。

「ふくん、オレ幽霊って見た事ねえな」

「私も無いわよ!!このバカスラ!!」

暗闇に怯えながらも、アスラのおバカな発言に思わずツツコミを入れるエール。

何が「幽霊って見た事ねえな」だ。誰も見た事ある訳ないし、見たくもない。

「ん〜そんなに幽霊が怖いならこの辺に家があるみたいだし、今日はそこに泊まるか？」

「べ、別に怖くなんて……ま、まあ、あんたがそこまで言うなら家に泊まってあげてもいいけど……」

アスラなりにエールを気遣って見る。エールは幽霊が怖い事は全力で否定してかかるものの、家に泊まるのは賛成だった。アスラが自分を気遣っているのがわかったからだろうか、なんか少しだけ顔を赤くして嬉しそうにしていた。

こじらせ女子は色々とめんどくさいのだ。

「よし!!んじゃ行くか!!」

アスラとエールはその家に行くことにした。アスラはBパッドのナビ機能を使ってそこまでの道のりを先行して進んでいった。無意識で彼の腕にしがみつくエールもその後をついていく。

エールは正直安堵していた。これ以上怖い思いはしなくていいと考えていた。
が……………

「つしやあ!!着いたぞ、ここがこの森唯一の民家『レイデル寺』だアアア!!」

「……………」

「結構デケーな!!」

バカスラを信じた私がバカだった……………

エールは考えを改める。

アスラが唯一の民家と呼称して紹介したこの家。これは家ではなく寺だ。明かりもなければ人の気配すら感じないため、どこをどう見ても単なる不気味な心霊スポットにしか見えなくて……………

「……民家じゃなくてお寺じゃないのこのバカスラアアア!!」

「えええええ!!……民家もお寺も対して変わんねえよ!!」

「変わるわよ!!」

生まれた時から贅沢な暮らししかした事ないエール。市民の家にはそこまで期待していなかったが、お寺では話が全く変わってくる。冗談抜きで幽霊が出ると言われている場所にしか見えない。

「まあまあ、幽霊なんか出たらオレがどうにかしてやるから安心しろって」

「だから怖くないわよ!!」

「んじゃ、行くか」

「行くなアアアア!!!」

言ってる事が矛盾してくるエール。アスラは見てもわかるくらいこの夜を怖がっているエールを安堵させるべくそのお寺へと足を進めた。

エールは行きたくなかったが、この場でアスラの腕を離す方がよっぽど怖かったので、その腕に導かれるままについていってしまった……

「こんばんはアアアア………今晚寝泊まりさせて欲しいんすけど!!」

「バカ!!何デツカイ声出してんのよ!」

アスラはお寺の扉とも呼べる障子を横に開け、腹の底から全力の声で叫んだ。いつ幽霊やお化けが出てきてもおかしくない状況であるため、エールはビビるにビビっていた。

しかし、一向に人が出でくる気配もなくて……………

「誰もいねーのかな?……………」

「いないんじゃない?…………このお寺だわ古そうだし」

「んじや許可取る必要もねーな!!ここで寝るか!!」

「嫌よ!!」

「おいおい、だったらどこで夜を過ごすんだよ……………」

「大体あなたが急いで森を抜けようとするからじゃない!!」

「だってそうしねええとロンに追いつけねえんだよ!!」

「あなたの事情なんか知らないわよ!!私はエックスよ!!」

「だからなに!?!」

軽く言い争いに発展してしまう2人。
と、そんな時だ。

「いらっしやーい」

と、アスラとエールのすぐ横で若い女性の不気味な声が聞こえてきたのは……………

「キヤアアアー?!?!」

「ギャアアアアー!?!」

恐怖に染み付いたアスラとエールの悲鳴がその寺内で鳴り響いた。2人が悲鳴を上げるのも無理はない。何せ、今まで人の気配一つなかったはずなのに、足音も呼吸音も無く、こんな近くに女性が立っていたなど誰が想像できたか……………

しかし、当然ながらこの女性は幽霊ではなくて……………

「いやゝ悪い悪い!!驚かせてしまったなあゝ!!……ここは私の別荘なんだゝ」

「いいんすよそんな事ゝ!!んな事より泊まらせていただいてありがとうございまアアアゝす!!」

「いいっていいってゝ気にすんな!!」

「……………ビックリしたわ……………ホントに……………って言うか趣味の悪い別荘ね」

お寺、もとい別荘の中

取り敢えず落ち着きを取り戻した2人にその女性が大声で笑いながら謝罪の言葉を並べた。あまり謝罪しているようには聞こえない。おそらく最初から驚かすつもりであつたのだろう。

女性の歳は大体二十歳も無いくらいだろうか。アスラとエールよりかは上に見える。髪の毛は黒くて一本に結ばれており、肌はエールにも負けないくらい白く、また絶世とも呼べる美女であつた……………

「私の名は『カゲミツ』……………親しみを込めて『カゲミツ姐さん』と呼んでもいいぞ!!」
「オツすカゲミツ姐さん!!オレはスーミ村のアスラ!!……………でもって頭の上に乗つかつてい
る変な小動物がムエだ」

「私はエール……………エール・オメガ……………エックスよ」

初見だと言うのに凶々しくアスラ達に接してくるカゲミツ。ただ、アスラ達はなんの抵抗もなく自分達もまた自己紹介を始めた。

「スーミ村?…あの最果てで隅つこの村か?……………凄いな。そんなとつから旅して来たのか」

「ああ!!オレは頂点王になるからな!!」

「っ!?!……………頂点王……………」

「ん?どうかしましたかカゲミツ姐さん?」

「……………ふふ、いや、なんでも……………」

頂点王になると言うアスラの野望を耳に入れるなり、一瞬だけが不適に笑ったカゲミツ。その理由が何故なのかは今のアスラ達には知る由はなくて……………

「ところでアスラ、オマエ、ライダースピリットを持つてるな?」

「え?……………」

急に話を切り替えて来たカゲミツ。その内容はアスラもエールも驚かざるを得ないもの。まだ教えても無いのにアスラがライダースピリットを持っているとズバリ言い当てて来たのだ。

「な、なんでそんな事わかるんすかアアアア?！」

「ふふ、私はそう言う『目』が良いんだよ!……そしてエールは噂に名高い『オメガ』のデジタルスピリットか……でも、まだ上手く扱えてないみたいだな」

「……………!!」

エールの事もズバリ言い当てる。エール自身も自分がまだ『オメガ』のデジタルスピリットを上手く扱えない事を言い当てられるとは思ってもいない事であっただろう。

「もつたいたないな、折角進化の力はふんだんにあるのに」

「べ、別に好きでもつたいたなくしてるわけじゃ無いわよ!!」

実際。エールの身体自体は凄まじいセンスがある。仮にデッキが進化したとしたら

いったいどのようなスピリットが生まれてくるのか想像もできない。が、その代償なのか、エールは究極進化させるのがどうしようも無く下手くそだった。

「ふふ、私はそう言う扱い辛いカードには慣れてるから、手取り足取り教えてやっても良
いぞ」

「!!」

「まあでも、今のところ私が興味あるのはオマエだアスラ」

「え? オレ??」

カゲミツのアスラに対する声が若干熱を含んでいるように聞こえ、エールは少しむすつとした顔になる。

「ああ、宿泊料代わりと言えば聞こえはいいがどうだ??……この私と一戦やらんか??」

わかりやすく説明すれば、今アスラはカゲミツにバトルスピリッツを要求されていた。カゲミツの目をギラギラと輝かせるその様子から、ヘラクレスに負けず劣らずの戦闘狂である事と、相当な実力者である事が伺える。

ただ、アスラも引く理由は無い。今晚止めてもらう御礼がバトルスピリッツのみなら安いものだ。

「わかった!!いいぜカゲミツ姐さん!!」

「ふふ、そうこなくてはな!!」

そう言うと、お寺から出て地に赴く2人。アスラは頭の上で眠っているムエをエールに預けた。そんなエールも眠っているムエを抱えながらお寺の前で腰を下ろした。

「なんでこんな夜中にまでバトルしてんのよあのバカスラ……」

最もな意見である。

ただ、既に承諾されたバトルスピリッツはライフがゼロになるまで終わる事はない。アスラとカゲミツは自身のBパッドを展開し、デッキをセットした。

「じゃあ行くかアスラ!!見せてもらうぞ、その実力!!」

「おう!!こっちだつて負ける気はないからな!!」

……ゲートオープン、解放!!

エールが見届けている中、2人のコールと共に、レイデル寺の前でバトルスピリッツが開始された。

先行はアスラだ。

「ターン01」アスラ

「メインステツプウウウー!!……早速行くぜ!!……仮面ライダー龍騎を召喚!!」

1【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP3000

今回のアスラは最初からフルスロットル。赤きライダースピリット、龍騎を早くも召喚して見せる。この時、召喚時効果でデッキからカードがオープンされたが全てハズレ。トラッシュユへと叩き込まれた。

「ふふ、聞いてた通りソウルコアは使わないんだな〜……面白い!!」

「あれ?! オレがソウルコア使えないの知ってたんスね?」

「え?……あ、ああ!! そうだ。私はそう言う『目』が良いからな!!」

「スツゲエエ!! 流石カゲミツ姐さん!!」

「だろう?……もつと褒めてもいいぞ〜」

まるで最初からアスラがソウルコアを使えない事を知っていたかのような口振りを見せるカゲミツ。『目』が良いとは言ってはいるが、その戸惑い振りからは誤魔化しているようにも見えなくもなくて……………

「つしゃあ!!……オレはこれでターンエンド!!……さあ、カゲミツ姐さん、どんといらっしやいませええ!!」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】LV1（1）BP3000（回復）

バースト：【無】

ただ、アスラはそんな事など全く気付かない。颯爽とそのターンをエンドとした。次

はカゲミツのターンとなる。

「ターン02」カゲミツ

「メインステップ……ではでは、楽しい一時を過ごそうか!!……ネクサスカード、『大天空寺の地下』をLV2で配置!!」

1 「大天空寺の地下」LV2 (1S)

カゲミツの背後に眼球のようなワンポイントが入った墓のような形をした何かが見える。

「配置時効果、デツキから3枚オープンし、その中の対象となる『ライダースピリット』を手札に加える!!」

「えええええ!!? 『ライダースピリット』!？」

「カゲミツもライダースピリットを!？」

アスラとエールはカゲミツが流れるように口に出した単語を聞き逃さなかった。瞬間的に理解した。このカゲミツもアスラと同じライダースピリットの所持者であると言うことが……

エールよりもアスラの方が気になるとはそう言う事だったのだ。同じライダースピリットを持つ者ならば一度はバトルして見たくもなるだろう。

「私はこの中にある『仮面ライダーゴースト オレ魂「2」』を手札に加え、それ以外はトラッシュユヘ」

カゲミツは対象となるカードをゲットし、手札に加えた。アスラ視点ではそれが紫のカードである事以外全く持つてわからなかった。

「ああ、言つてなかったっけ？……そうそう、私もライダースピリットの所持者だ!!」「そっか………っしやあ!!……めっちゃ夜だけどめっちゃ燃えてきた!!」

「ふふ、そう来なくては困る……私はさらにユルセンを召喚!!」

ー【ユルセン】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

「おお?!…小さい幽霊!？」

「ちよ、ちよつとかわいいじゃない…?!？」

カゲミツが立て続けに場に出してきたのはライダースピリットでは無い通常のスピリットカード。まるででてる坊主をお化けにしたような容姿をした『ユルセン』が現れる。

このバトルを観ているエールは「これくらいのお化けなら別に出てきても良かったわね」と今更ながらにボソツと呟いた。

「ユルセンの効果。アタックとブロック、合体できず、維持コアを0にする……でもつてエンドステップ時にこの大天空寺の地下とほぼ同じ効果を発揮!!……対象のライダースピリットを探す!!」

ユルセンの効果だ。再びカゲミツのデッキから3枚のカードがオープンされる。が、今回はどれもハズレ。トラッシュユヘと流された。

「ふむ。まあこんな日もあるか………ターンエンドだ」

手札：4

場：【ユルセン】LV1

【大天空寺の地下】LV2

バースト：【無】

オープンカードにいちやもんをつける事は無く、勝手に納得して、そのターンをエンドとするカゲミツ。次なるは一周回ってアスラのターンだ。さつきよりも勢いがついた彼はそのターンシークエンスを進行させていく………

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!………シラムシーザーを召喚し、ネクサスカード、ミラーワールドをLV2で配置!!」

ー【シラムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【ミラーワールド】LV2(2)

「っ!?……………空間が鏡向きに?」

アスラは背中に数本の鋭利なトゲを生やしたトカゲ型のスピリット、シヤムシーザーを召喚すると共に、ネクサスカードであるミラーワールドを配置。その演出により空間が鏡向きへと変化した。

「アタックステップだアアアー!!……………行け龍騎!!」

アスラの勢いは止まらない。すぐさま龍騎でアタック宣言を行う。そしてこの時、事前に配置していたミラーワールドの効果が発揮されて……………

「ミラーワールドの効果!!龍騎がアタックした時、カードを1枚オープン、それがアドベントカードならばコストを払わずに発揮する!!」

「ふ〜ん。神頼みってわけだな?」

「カード…オープンツツ!!……………よし、『ストライクベント』!!……………よってこれを発揮だ!!」

「ほお？…運が強いな」

「へへ、これによりユルセンを破壊してカードを1枚ドロースる!!」

たった1枚のドロースでアドベントカードの一種である『ストライクベント』を引き当てるアスラ。よってその効果が発揮される運びとなった。

龍騎が腰にあるベルトに装着されているカード束から1枚引き抜き、それを左手の龍の頭部を象ったバイザーへと装填。

すると……

……『ストライクベント!』

という無機質な音声と共に、龍騎の右腕に赤い龍の頭部のようなものが取り付けられる。

龍騎はその右腕をユルセンへと向け、龍の口から爆炎を放つ。勢いよく放たれたそれはユルセンを瞬く間に包み込んで、焼き尽くした。

と、思われたが……

ユルセンはその直撃を受けても全くの無傷で……

「え？」

「ユルセンは相手の効果を受けない。残念だったな」

「ずる!!……だけどアタックは続いてんだ、そのまま突っ込め龍騎!!」

「モチベを落とさず尚攻めるか!!いいじゃないか!!……褒美にライフをくれてやろう!!」

〈ライフ5??4〉カゲミツ

ユルセンはほぼ無敵だが、その代わりアタックとブロックができない。カゲミツは龍騎のアタックをライフで受けてしまうことになる。龍騎の固く握られた拳が彼女のライフ1つを砕いた。

「まだまだアアアア!!!…シャムシーザー、オマエもいけええー!!!」

「それもだ。持っていくと良い!!」

〈ライフ4??3〉カゲミツ

立て続けにシャムシーザーがカゲミツのライフへと地を這って進行する。そしてそのままそれを一つ体当たりで碎いた。小型スピリットの連続アタックとは言え、かなりのダメージがカゲミツを襲っていたが……………

「ふふ、ふひひひ!!……………いいねこの痛み、最高だ!!やっぱりバトルはこうでなくては!!」

「何あれ……………ちよつと気持ち悪いんだけど……………」

その痛みさえも快感のように受け取っているカゲミツに対し、エールはドン引きしていた。この様子からして、カゲミツは緑のカラーリーダーであるヘラクレスに勝ると劣らない程の戦闘狂である事が伺える。

「オレはこれでターンエンドッツ!!」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】LV1

【シャムシーザー】LV1

【ミラーワールド】 L V 2

バースト：【無】

絶対に破壊できないスピリットがいようとお構い無し。アスラはいつものような速攻をカゲミツのライフに叩き込み、そのターンをエンドとした。

「ターン04」カゲミツ

「メインステップ……さあ、お出しました。来い、仮面ライダーゴースト オレ魂!!」

1 【仮面ライダーゴースト オレ魂「2」】 L V 2 (3) B P 4 0 0 0

アーイ!!

バツチリミナ

バツチリミナ

カイガン!!オレ!!

覚悟!!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!

ライダースピリットの黒い素体がカゲミツの場に現れたかと思うと、その周囲に黒とオレンジのパーカーも同時に現れる。そのパーカーは妙に陽気な音声に合わせて踊るように飛び交い、最終的にはその黒い素体に被さる。

そして音声の通り開眼し、「仮面ライダーゴースト オレ魂」が姿を現した。

「これがカゲミツ姐さんのライダースピリット!!」

「ふふ、そうだ。これが私の仮面ライダーゴースト……………カッコいいだろ?」

「ハイっす!!でも召喚前の音声がクツソ長ええ!!」

このライダースピリット、仮面ライダーゴーストのカードは既に「2」である事から、カゲミツのバトルの腕前はかなりの上級者である事が理解できて……………

「さあ見せ場だ!!アタックスステップ!!…オレ魂でアタック!!」

「!!」

カゲミツは颯爽とアタックステップに移行し、オレ魂でアタック宣言を行う。そしてこの瞬間、オレ魂には強力なアタック時効果があつて……………

「オレ魂の効果、手札かトラッシュにあるコスト6以下のゴーストと同じ状態で入れ替える!!……私はトラッシュにある『仮面ライダーゴースト ムサシ魂』を対象にし、オレ魂とチェンジする!!」

ー【仮面ライダーゴースト ムサシ魂】LV2(3)BP6000

カイガン!

ムサシ!

決闘!ズバット!超剣豪!

新たなパーカーがオレ魂に着せられ、オレ魂は赤色のムサシ魂へと変化した。

「姿が変わった!?!」

「本来、ライダースピリットって言うのは姿を変えながら戦うのが定石なんだがな……その反応だとオマエ、まだ何も変化してないな？」

この世界において、デツキはバトラーと共に進化を重ねる。このカゲミツのゴーストも例外ではない。幾度となく進化を繰り返して来たのだろう。

ただ、このアスラは龍騎と出会ってまだ半年程度。進化の兆しも未だ見えずの状況であつた。

「まあオマエはコモンだしな。進化の力もあんまりないのかもしれないけどさ」

カゲミツは続け様に述べた。

アスラの身分はコモン。そもそも進化の力も無く、一度もできないおそれだつてあり得る。

「……………関係ねえ……………関係ねえよカゲミツ姐さん!!……………オレはコモンでも、ソウルコアが使えなくても、進化できなくても……………何がなんだろうと『頂点王』になつてやる!!それだけは譲れねえ!!」

「……………アスラ……………」

軽くアスラをデイスっていたような発言も見受けられたカゲミツに対し、アスラは大きく笑いながら言い返してみせた。

『超』が付く程の硬い意思がアスラの中にはある。例え何がどうなるうと、誰に何を言われようともアスラはこの夢を諦めたりはしないだろう。

「ふふ、いいねえ……オマエは見込みありだ!!アスラ!!」

「え?なんの?」

「ムサシ魂の効果!!」

「!!」

「相手スピリット2体のコアを1つずつリザーブに置く!!……龍騎とシャムシーザーから取り除き、消滅させる!!」

「なにっ!?!」

『見込みあり』と言うかカゲミツの言葉に疑問を抱くアスラだったが、束の間にカゲミツがバトルを再び進行させ、ムサシ魂の効果を発揮させる。

Bパッド上にある龍騎とシャムシーザーの上に置かれているコアが強制的にリザーブに置かれてしまい、2体はなす術なく消滅してしまった。

「さらにトラッシュにあるブレイヴ『ガンガンセイバー』の効果発揮!!ゴーストのアタック中にトラッシュから召喚できる!!……そしてそのままムサシ魂と合体!!」

0 ー【仮面ライダーゴースト ムサシ魂+ガンガンセイバー】LV2(3) BP900

「な?!…またトラッシュから!」

「最初のターンで散々トラッシュにカードを送っていたのはこのためだったのね……」

ムサシ魂に1本の剣が握られる。だが、それはすぐさま分離し、形を変え、二本の刀の形に変形した。

「さあさあ!!スピリットは無し!!アタック中のダブルシンボル!!……この状況はどうす

る!?!」

「どうするってライフで受けるしかねえだろ!!……………ぐっぐあああ!!」

へライフ5??3へアスラ

ムサシ魂の華麗なる二刀流の斬撃がアスラを襲い、そのライフを一気に2つを斬り裂いた。

「エンドステップ……………ユルセンの効果でカードをオープン。私は2枚目のオレ魂「2」を加えてターンエンド……………どうした?…まさかそれで本気とは言わないよな?!”

手札：6

場：【仮面ライダーゴースト ムサシ魂+ガンガンセイバー】LV2

【ユルセン】LV1

【大天空寺の地下】LV2

バースト：【無】

明らかに段々と調子を上げて来たカゲミツ。その顔つきも狂気に満ち溢れて来てお

り、アスラに少なからず大きなプレッシャーを与え続けていた。

しかし、アスラはこの程度で怯えたりはしない。相手が強敵だろうが格上だろうが関係ない。真つ直ぐ頂点王を目指して駆け上がるだけ……

「オレのタアアアンツツ!!」

「ターン05」アスラ

《スタートステップ》

《コアステップ》リザーブ4??5

《ドローステップ》手札4??5

《リフレッツシユステップ》

リザーブ5??6

トラツシユ1??0

「メインステツプウウウー!!…ドラゴンヘッドと2体目の龍騎を召喚!!」

1【ドラゴンヘッド】LV2(2)BP2000

1【仮面ライダー龍騎】LV2(3)BP4000

ドラゴンが頭部のみとなって飛翔するドラゴンヘッドが現れ、本日2体目となる龍騎が姿を現した。その際に龍騎の召喚時効果が発揮されるが、今回も対象カードは無し。全て破棄された。

「アタックステップウウウー!!!……龍騎でアタック!!でもってミラーワールドの効果を発揮!!……デッキを1枚オーブンしてアドベントカードを使用する!!」

「またその運任せの効果か!!……2度目も同じ結果になるとは限らんど!!」

「いや引く!!何がなんでも!!……オレは未来の頂点王になる男だからなアアアー!!!」

強く宣言し、全力でカードをドロウするアスラ。

命運を別けるであろうこのドロウ。

その内容はまさかまさかの最強のアドベントカードである『ファイナルベント』であつた……

「つしやあ!!『ファイナルベント』!!コイツを発揮だアアアー!!!」

「なにつ!?…ホントに引き当てた!？」

龍騎が再び腰のベルトからカードを1枚引き抜き、左手のバイザーにそれを装填

……………

……………『ファイナルベント』!!

と、また無機質な音声が続いた……

龍騎の背後に赤き龍が身体を唸らせ、咆哮を上げながら現れる。

「この効果によりBP15000以下のスピリット、ムサシ魂を破壊!!」

「!!」

「ドラゴンライダーキックッツ!!」

高い脚力を活かし、赤き龍と共に上空へと跳び上がり宙を舞う龍騎。そして、ムサシ魂へと狙いを定め、直後に繰り出される赤い龍の口内から放たれた火炎弾に背中を押され、加速しながらキックを放つ。ムサシ魂はその強烈な一撃を受けて堪らず爆散してしまい、カゲミツの場には合体していたガンガンセイバーが取り残されてしまう。

「ファイナルベントのさらなる効果で龍騎は赤のダブルシンボル!!…このアタックとドラゴンヘッドのアタックで一気に3点ダメージだアアアー!!!」

このターンで勝って見せると強い意気込みを見せるアスラ。

だが、このカゲミツに勝つと言う事は生半可な実力では叶わなくて……

「ふふ、ふひひひ!!……アスラ!!オマエやつぱり良い!!…ちよつと本気出しちやおうかな〜フラッシュユマジック……!!」

「っ!?……ここから反撃するのか!？」

カゲミツのフラッシュユマジックの宣言でさらなるカウンターを予測するアスラ。正直これ以上何かされると手詰まりだ。

しかし、そんな時だ……

「おいおい、新人相手にそれはマズインじゃねえの?」

ー!!

凶太い男性の音がバトルの流れを止めるかの如く割って入って来た。当然エールのものではない。ただ、この声主はアスラもエールも聞き覚えがあるものであつて………

「あ、あんた………テンドウさん!？」

「テンドウ!? ……なんでここに!？」

「なんでここにつて………迷子です」

迷子は嘘だ。

そこにいたのは筋肉質な厳つい男で、この世界に君臨する三王の1人、テンドウ・ヒロミ。アスラとエールと一緒に旅をする事になつた原因の人物でもある。

「おお!! テンドウではないか!! 久し振りだな!! ……なんだ、私と一戦やりに来たのか!? ……そうだ、やろうではないか!! 血が滲む程のバトルスピリッツを!!」

「イヤです。勘弁してください」

「ふふ、そうやって無表情でお茶を濁してくるところも変わらんな」

「知り合い………なの?」

「ああ、ちよつとな」

カゲミツとテンドウの会話によって、なんとなく彼らが知人同士である事が理解できた。

「コイツは私の婿候補だ!!」

「なんでテメエみてえなアバズレと結婚しねえといけねえんだよ!!殺すぞ!!」

「おお!!調子出て来たな!!どうだ!!一戦やらんか??楽しいぞ!!」

「やるわけねえだろ!!」

「すごいカゲミツ……あのテンドウがツツコミに回ってる……」

エールはこんな風に誰かにツツコミを入れるテンドウを見た事が無かった。

「あれ………なんかオレ………忘れられてねえつすか?」

「ふふ、バトルはまた今度のお預けだなアスラ」

「えええええ!!?…めっちゃいいとこだったのに!!」

「気にするな。オマエが前へと進む限りいつか必ずまた戦える………その時オマエが

「どれだけ成長してるか楽しみだ……ふひひひ」
「??」

龍騎のアタック中だったが、テンドウがわって入って来た事により、一時中断され、再びバトル続行と言う雰囲気では無くなっていた。アスラだけでなくスピリットである龍騎も立ち尽くして困惑していた。

カゲミツの言葉の意味が理解できず、頭の上に疑問符を浮かべるアスラ。ただ、この意味は後に判明する事になる。

「おおどうだ小僧!!調子はいいか!!」

「ハイっす!!めちやくちや頑張ってますが頂点王にはまだまだだっす!!」

「ワツハツハツハ!!そうだその息だ!!……じやなきや殺す!!」

「なんで!?!」

テンドウが煙草を啜えながらアスラに声をかけて来た。アスラは反射的に頭を下げ、彼の意にそぐわない事をしたら頭を握り潰される事を知っているからである。

「って言うかテンドウ!!なんで私がこんなチビでコモンの奴と一緒に旅しないといけないかったのよ!!」

「誰がチビだアアアア!!!」

エールは久し振りに会ったテンドウに対し、アスラと旅をしなければならなかった理由を聞いて来た。

「ああ?それを探すのも旅の理由だろうが。自分で考えるエール。じゃなきや殺す」
「えええええ!!」

煙草の煙を吐きながら不条理キャラを發揮するテンドウ。さつきから二言目には必ず「殺すぞ」だ。カゲミツによってペースを乱されていたが、どうやら少しづついつもの調子に戻って来ているみたいである。

「んな事よりオレはオマエ達2人に用があつて来たんだよ。わざわざオウドウ都から直接出向いてやったわけ。感謝しろよ?」

「なんでよ!?!」

「まあまあ、そんなにカリカリすんなって〜」

「うっさいわねこのバカスラ!!」

「誰がバカスラだアアア〜!!!」

「ふふ、喧しい連中だ……でも良いな。久し振りにこのレイデル森の夜が明るい気がする」

真夜中には幽霊が出るなどと恐れられているこの森はアスラ達の喧しい声に包まれ、確かに賑やかになっていた……………

ここに長居するカゲミツはその事を誰よりも早く理解し、干渉に浸っていた。

「でき、テンドウさん!!用ってなんすか!?!」

いつの間にかBパッドを閉じていたアスラがテンドウの前まで迫りながら聞いて来た。エールも一応聞いておこうと、そこまで足を伸ばしており……………

テンドウは煙草の煙をまた吐き出すと、その内容を口にした。

「この三王テンドウ・ヒロミ直々の命令だ。…………オマエら、ナミラ町の青のカラーリ〜」

ダー『ローザ・アルファ』と一緒に新しく発見された『コラボダンジョン』の捜索に行つて来い」

「ええ!? コラボダンジョン!？」

「すげええ!!」

『コラボダンジョンの捜索』……………そうテンドウに言われ、驚くアスラとエールだったが……………

「コラボダンジョンってなんすか!？」

「……………あんたなんで一緒に驚いたのよ」

「いや〜ノリで!!」

アスラは全くコラボダンジョンについて知らなかった。この世界においては常識の範疇ではあるが、彼が15年もの間田舎暮らしだった事が影響したのだろう。

「コラボダンジョンつつうのは昔の人間共が死ぬ前に作った迷宮の事だ。その中には多くのお宝があると言われている。ライダースピリットやデジタルスピリットも発見さ

れた例もあるぞ」

「うおおお!!! スツゲエエエエ!!!」

「ふふ、そして自分達以外の人間に使われぬよう様々な罠が仕掛けられている危険で面白い場所でもある!!」

「えええええ?!?!?!?!?! 面白くねええええ!!!」

テンドウとカゲミツが順に説明して行った。

コラボダンジョンとは、現代で言うところの古墳と言ったところか。彼らの言う通り、そこにはレアなカードも大勢あると言われているが、同時に様々な罠もある。

邪な理由で取られないためにも、カラーリーダーや三王が率先して探索に向かうのだ。

「でもなんで私たちが行かないといけないのよ?」

「うるせえ、オレが行けと言ったら行け」

「ハイハイハイ!!!…不肖アスラ!!誠心誠意努めさせていただきまアアアす!!!」

完全に乗り気なアスラ。対してエールは少々不満気である。

別にコラボダンジョンに行きたくないわけではない。寧ろレアなカードがあるなら一度はこの目に入れてみたいものだ。ただ、問題はその青のカラーリーダーだ。

「……………あいつ、苦手なのよね……………」

真夜中。

アスラとエールはテンドウからの依頼を承諾……………というか無理矢理承諾させられたが、エールは一抹の不安を抱えていた……………
その理由は、その一緒に行くという青のカラーリーダーが自分と同じエックスの身分を持ち、同い年の少女でもあるからだ……………

ここはレイデル森を抜けた先にあるナミラ町のカラーリーダーの住う家。

「ふうふうふうん♪……………ふうつ、もう少しですわ〜」

その中では背中まで薄い青色の髪を伸ばしたお嬢様口調の少女がこれでもかと思われた資料を整理していた。大変な仕事ではあるが、彼女は鼻歌交じえながらマイペースに仕事をこなしていた……………

「慣れないカラーリーダーのお仕事も大分慣れて来ましたわね……………あつ、そう言えばテンドウさんから今度のコラボダンジョンの捜索に参加する同行人をお一人決めておけと言われてましたっけ？」

終わりにかけたカラーリーダーの仕事。その途端に、青髪の少女は上司の三王であるテンドウに言われていた事を思い出す。

このナミラ町近辺にコラボダンジョンが発見されたため、彼女は必ず参加しなければならぬが、それでは何かあれば問題になるため、腕利きのバトラーの同行は必要不可欠であったのだ。

青髪の少女は人差し指で顎を押さええながら「うくん」と悩んでみる。そうすれば一人だけ思いついた……………彼ならば申し分ないだろう……………

「そうですね!!……先日対戦していただいたロンさん!!……あの方がまだこの町に滞在中でしたら同行させていただく事にしましょう!!」

その彼とはロンの事である。

なんと彼はすでに第二のカラーリーダーであるこの少女、しかもエックスの身分の者を倒していた。

これは運命なのか……いや、これを運命と言わずしてどうなる。

アスラとロンはまるで何かに導かれるように同じコラボダンジョンに足を運ぶ事となった………

翌朝。照り付ける太陽の中………

「一泊宿泊させていただき、ありがとうございますございましたアアアー!!!」

「あ、ありがとうと言ってあげても良いわよ……!!」

「うむ、2人ともまた来なよ」

「ハイツ!! 必ず来ます!!」

「しよ、しようがないわね!! あなたがそこまで言うなら来てあげなくもないわ!!」

「むやく」?? 欠伸

アスラとエール、そしてアスラの頭の上のムエは、このレイデル寺の宿主であるカゲミツに別れの挨拶をしていた。なんだかんだ2人ともカゲミツには泊めてもらった事に感謝している。

因みに、テンドウはあの夜、泊まる事なくそのまま帰った。泊まったらカゲミツに「バトルをしろ」と追い回されるからである。

「……………よし、ここでこのカゲミツ姐さんが先輩バトラーとして少しアドバイスをくれてやろう!!」

「!!」

「アスラ、オマエは豪快なヤツだ。でも、それがオマエの取り柄だとしても何も考え無しに動くのはやめろ……………諦めないのは良い事だが、考え無しだと、ただ単に無策で無謀なだけの男に成り下がる」

「!!」

アスラはふと昨日の夜のバトルを始め、今までの自分のバトルを思い出してみる。確かに言われた通り、自分とスピリット達を信じて真つ直ぐ豪快に突き進んできたが、結局はそれだけだ。

「ふふ、一旦冷静になる事を忘れるな……そうすればオマエはもつと強くなれるだろう。ソウルコアが無くてもな」

「ツツ!!……ハイツッ!!」

カゲミツに認められた気がして嬉しくなったアスラは力一杯の返事をした。

自分はまだまだ強くなれる。これからまたさらに頑張ろう。

そう志しをその胸に刻んだ。

「後エール、オマエはもう少し心を落ち着かせてみる。慌ただしいぞ」

「心を？」

「ああ、人間、真の力を発揮する時は必ず心安らいだ時だ。肝に銘じておけ」

「……………はい……………」

イマイチカゲミツの言っている事が理解できなかつたエール。教えた側のカゲミツもなんとなくエールが理解していない事をわかっている。

が、いずれわかるだろう。多分この真つ直ぐな少年と旅をしていくうちに。

カゲミツは彼らのなんとなくの事情をテンドウから聞かされていたため、実は初めから知っていたのだが、おそらくテンドウはこのアスラだからこそ、エールと一緒に旅をさせたんだろうと察していた。

因みに、『目』が良いは嘘。

「そんじや、カゲミツ姐さん、色々ありがとうございましたアアアー!!!」

「むええええええええええええ!!」??なんか便乗

「ああ、達者でな〜」

その挨拶を最後にアスラとエールはカゲミツの元を去って行った。カゲミツは彼らが見えなくなるまで見送っていた。

「……………ふふ、ふひひ!!……………2人とも深くて良い目をしてたなあ〜」

完全に2人の姿が見えなくなった頃、カゲミツはまたうっとりしながら不気味に笑って見せる。

「話を聞く限り、アスラは『オオカブ町』からスタートした……………つまり、私は『5番目』か〜……………どれだけ強くなつて現れてくるか楽しみだなく……………こんなに心躍ったのは最後にテンドウとバトルした時以来だ。待ち遠しい……………ふひひ」

二十歳にもままならないカゲミツと言う少女の正体は『紫のカラーリーダー』……………身分はマスター。『ブゲイ家』の1人。そのバトルの腕前は6人いるカラーリーダーの中でも2番目に強いと言われている。

いずれは戦わなければならない猛者に、アスラとエールは知らずして偶然出会ってしまっていた。

7コア 「ライダーズピリットを狩る者」

「いや、誰かと釣りなんて久し振りだなく都会の河ってどんな魚釣れんだろう？」

「むえ〜」?? コロコロ転がって日向ぼっこ

「……………」、これが噂で聞いた魚釣り……………思ってたより暇ね」

「そりゃオマエ、そこそこ待たないと釣れないしな」

6人のカラーリーダーからカラーカードを得るべく、オウドウ都周囲にある6つの町を巡るアスラ達御一行は、次なる目的地、ナミラ町へと既に到着していた。

本当なら今すぐにもこの街のカラーリーダーとバトルしたいところだが、テンドウから

『青のカラーリーダーと共にコロボダンジョンの搜索をしろ』

と言われていたため、取り敢えずその時が訪れるまではこうやって近辺の河でのんびりと魚釣りをしていた。

アスラは物心付く前からやっていたため、この程度は手慣れたものだが、逆にエールはエックスと言う生い立ちもあって生まれてこの方、一度もそんな事はやった事がな

かった。そんな事もあり、竿を握りながらどこか新鮮さを感じて………

「つて言うかアスラ、なんでエックスのこの私が魚なんか釣らなきゃいけないのよ？」

今更疑問を抱いたエールがアスラに聞いた。

「晩飯取るために決まってるだろ??……お金だつて無限にあるわけじゃねーんだし……多分だけどこれから魚釣つとかねーと食い物無くなるぞ」

「魚が無ければステーキを食べれば良いじゃない」

「おのれエックスウウー!!!」

「むっむえ〜」??あつ蝶々だ〜

エールはお金に困った事が無いからこんなデタラメな事を口にできるが、逆にコモンのアスラはお金に困った事しかないので、どれだけお金が大切かを理解している。身分の格差は金銭感覚の違いにここまでの影響を与えるのだ。

そしてムエは蝶々を追いかけ回す。

「エール、オマエそんな事言うど直ぐにお金無くなるぞ……………」

「お金なんかあつても邪魔なだけよ」

「おのれエックスウウー!!!」

因みにエールは今この場でもアスラには到底得られない程のお金を所持している。エールとしては寧ろ捨てたい気持ちさえあるのだ。

今思うと何故性質が真逆な貧乏小僧と箱入りお嬢様が一緒に旅をしているのか不思議でならない。※テンドウ・ヒロミのせい

「にしてもさくどんなとこだろうな??コラボダンジョン」

昂たかぶつた感情の熱ほとほりがようやく冷めたところで、アスラはエールに聞いた。

「さあ??…私も行った事ないし想像つかないわ」

「もしもさ!!もしも!!そこにライダースピリットがあつたら、オレがまた選ばれたりしねーかな!!」

竹で作られた竿を全力で河に投げ込みながらアスラはエールに聞いた。その内容は自分とて完全に痴おこがましいとは思ってはいるが、微かに寄せる願望であった。

ただ……………

「あんたね……………既に龍騎に選ばれてる癖に何言ってるのよ、ライダースピリットのカードは協調性が無いから他のライダースピリットとは共存できないのよ」

「……………どう言う事?」

「ああ〜もう!!このバカスラ!!…ライダースピリットは1人につき1種類だけって事よ!!」

「えええええ!!?…そうだったのかアアア!?!」

この世の常識。

その1つ……………

『ライダースピリットは1人につき1種類しか所持する事ができない』

選ばれた人物に絶対的な力を与えるとされているライダースピリットだが、どのカード達も個性が強すぎる上に協調性のカケラもないため、同じデッキに共存ができないのだ。

仮に今から向かうコラボダンジョンに新たなライダースピリットが発見されたとしても、既に龍騎と言うライダースピリットに選ばれてるアスラはそれに選ばれる事は無いだろう。

「ん？待てよ、じゃあオオカブ町で会ったあのミズノとか言う女の人は何なんだよ、いっぱい持ってたぞ」

「知らないわよそんな事。今思うと気味が悪かったわあいつ。急に消えるし」

「まあまあ、そうカリカリなさんなって、結構良い人だったぞ」

そして、そんな何気ない会話の中、エールの握っていた釣竿が全力でしなった。魚が餌に食いかかった証拠だ。

「え!?!…うそ、重っ!?!…何よこれ!?!」

「おっ!!釣れたな〜頑張れエール!!」

「頑張れって、どうしろって言うのよ!?!」

握っていた釣竿が途端に重たくなってしまった事で困惑するエール。

エールが全力でアスラを振り解く。アスラはその勢いのままに河へと投げ出され、逆にエールの足元には釣り上げられた20センチばかりの魚がビチビチと跳ね上がった。いた……………

アスラが河に落ちてから約2時間が経過した。

アスラとエール、そしてアスラの頭の上に乗っかっている謎の小動物ムエは青のカラーリーダーが来るであろうコロシアム前へと足を運んでいた。

そこが指定された集場所であった。

「青のカラーリーダーってどんなヤツだろうなく楽しみだぜ!!」

「……………」

今か今かと楽しみに青のカラーリーダーのご登場を待っているアスラに対し、既に青のカラーリーダーが誰なのかを知っているエールは少しそわそわしている。

できれば再開したくはなかったが、状況も状況であるため、会わざるを得ない。仕方

無くアスラの隣りで一緒に待っていた。

と、そんな時だ。

「た、たたた大変ですわアアアー!?!」

「「え?!」」

薄い青色のロングヘアの少女が慌ただしい様子でアスラとエールの元へと現れた。2人は彼女の言葉のニュアンスから鬼気迫るモノを感じた。

「た、大変ですわあ!?!」

「ちよ、ちよつと落ち着けええ!!……何があつたんですかアアアー!!!」

「た、大変ですわアアア!?!」

「だから落ち着けえ!!……天然!?!……先ずは自己紹介!!……オレはアスラ!!オマエは?!!」

「はっ!!……私わたくしとした事が……申し遅れました……このナミラ町の青のカラーリー

ダーを務めております、エックスの『ローザ・アルファ』と申します!!」

「えええええ!!切替早ええ!!……つてか、オマエがカラーリーダーアアアー!?!」

「あんた達一ツリアクションがデカいわね」

アスラの必死の呼び掛けにようやく我に帰ったナミラ町のカラーリーダーローザ。彼らの一回一回のリアクションの大きさにエールは思わず冷静にツツコミを入れる。

その声に反応するようにローザはエールの方を振り向いた。そしてそのエールの顔を見るなりさつきまでとは打って変わって嬉しそうな表情になって……………

「あつ!!エールさんじゃありませんか!!ご機嫌よう!!…: 昨年のエックス一同のお食事会以来でしょうか??: まさかテンドウさんがお選ばれになられた御二人方の1人がエールさんだったなんて!!」

「知り合い?」

「ええ…………ちよつとね」

エールとローザは同じエックスで、尚且つ同い年であるため、前々から面識がある。嬉しそうな表情を見せるローザとは正反対に、エールは嫌そうな表情を見せている。

「エールさん、外のカードバトラーは野蛮だとお聞きします。旅の方は大丈夫ですか?」
「フン…………そつちこそ大丈夫なのローザ?…………あんたみたいなノロマが青のカラーリー

「ダーなんてやっていけてるのかしら?」

「エールはローザにちよつとだけ嫌味を言ってみた。その様子はアスラと最初にあつた時同様、妙に偉そうだ。」

「はい!!お陰様でカラーカードの死守率7割をキープできましたわ!!……………あつエールさんは『究極体の進化』が全くできてませんでしたけど、その後どうなんです?」
「ぐっ!」

ニコニコと笑いながらエールが気にしてる事を口にするローザ。別にローザ自身に悪意があるわけではないが、エールは昔からローザのこう言うところが苦手だった。

「あつ……………でき、ローザだったっけ?」

「はい!!そうです!!」

「何が大変なんだ?」

「あつ……………わ、忘れてましたわアアア!!」

アスラがローザに聞く。ローザは大変だった事をすっかり忘れてしまっていた。ただ、今度こそアスラ達に説明して…………

「今回の搜索に私も一人護衛役として実力のあるバトラーを選んだのですが、その方が先行して搜索に向かってしまったんです!!」

「えええええ!!」

「ちよ、それってヤバイじゃない!」

今回のコラボダンジョンの搜索。アスラとエール、ローザを含め、さらにもう一人の4人で行われる予定だった。

しかし、そのローザに選ばれたもう一人は「早く旅を進めたい」と言う理由で、ローザに黙って勝手に一人でコラボダンジョンに向かってしまったのだった。その報告を聞いたローザは戸惑い、焦りに焦ってしまつて今のこの状況がある。

「コラボダンジョンは基本的に罠がいっぱい貼つてあつて危険なんです!!…………ああ!!もし『ロンさん』に何かあつたらどうしましょうく!!」

「……………ん??…ロン!」

さり気なくそのもう1人の名前を漏らしたローザ。アスラはそれを聞き逃さなかった。その名前は他でもない。自分が生まれた時から共に同じ時間を共有して来た片割れ、そして永遠のライバル、ロン……………

「あれ、アスラさんお知り合い何ですか?」

「……………ああ!!オレの幼馴染みでライバルだ!!……………あの天才イケメンヤロー……………抜け駆けするつもりだなあ……………つしやあ!!追いつくぞ!!色んな意味で!!」

ロンの存在を確認したアスラは気合を入れる。

その後、アスラ達3人はナミラ町外れに発見された新しいコラボダンジョンまで歩みを進めて行った……………

「……………ここです、新しく発見されたコラボダンジョン……………!!」

「おお、な、なんかイカにもって感じだな……………」

「むえ……………」??せやな

「どうでも良いから早く入るわよ」

ナミラ町外れにある、レイデル森とはまた違う方角にある森。基本は誰も近寄らないこの森にそのコラボダンジョンの石でできた扉があつた。

アスラ達は早速その扉を押してそのコラボダンジョンへと足を踏み入れる。

「お、おお!?!……………広えええ!!」

「むえええええええええ!!」??便乗

「ここ、これがコラボダンジョン!？」

「わたくし私も初めて来ましたわ〜!!」

各コラボダンジョンによってその形などは異なってくるが、今回のコラボダンジョンの中はコンクリートで造られたとてつもなく広大なドーム状の空間。

その神秘的な景色にアスラ達は思わず感激の声を漏らした。その声がかまた反響して山彦のように聞こえてくるのがまた新鮮でテンションを上げてくれる。

「聞いた事がありますわ!! こう言う形をしたコラボダンジョンには奥の方に巨大な宝物庫の部屋があるそうです!! それを探しましょう!! ロンさんもそこへ向かってるはずですよ!!」

「宝物庫!! 名前の響きカツケエエエ!!」

「むええええええええ!!」?? 便乗

「さあ!! レッツゴー!! ですわ!!」

「つしゃあ!! 行くぜエエエ!!」

(……………なんかさつきから仲良いわねこの2人……………)

小学生が知らない場所を探検するようなノリで会話するアスラとローザ。完全に意気投合しているようであり、初対面とは思えない仲の良さだ。2人はどこか気が合うのかも知れない。

そんな様子にエールはただならぬ危機感を覚えていて……………

(……………あ、アスラはローザみたいなのかしら……………って、何考えてんのよ私はアアアア!!……………べ、別にあのチビスラが誰とくつつこうがか、かか構わないし……………!!)

一人で勝手に自分の意思と闘いを繰り広げるエール。やはり妙にアスラには素直になれない。

「おいしい!!行くぞエール!!」

「っ……わ、わかってるわよ!!」

アスラに呼ばれ、エールは駆け足でそこへと向かった。

ー…

「そう言えばコラボダンジョンの罠ってどんな感じなんだ??」

アスラがローザに聞いた。初めてのコラボダンジョンの搜索だったのもあって興味津々だ。

「はい。地面に仕掛けられてる事が多いらしく、足でそこを踏んでしまうと……」

ローザが歩きながら説明していると、その足元から魔法陣のような紋様が浮かび上がる……………

その紋様は誰がどう見ても、どこからどう見ても……………
怪しい……………

「う、こんな感じのものが出てくるんです……………」

「……………」

踏んだ。

今、絶対畏踏んだ……………

アスラとエールは内心でほぼ同時にローザのドジをツツコンだ。

そしてその魔法陣の中から黒い煙で身体を形成させた化け物が出現して来て

……………

「な、なんか出たアアアー!!!」

「あ、アレは『ケモノ』です……む、昔生きてたバトスピ生命体ですね」
「ななな、なんでそんなのが罠の中にあるわけ!？」

奇声を張り上げる「ケモノ」と呼ばれる存在。すると、黒い煙でBパッドみたいなモノを形成し、バトルのスタンバイを行う。どうやらバトスピで勝たなければここはどうしてくれないようだ。

「おっ!!流石バトスピ生命体!!バトルしようってか!!っしやあ!!オレが相手してやるぜ!!」

アスラが自身のBパッドを取り出し、バトルの準備を行おうとするが……………

「待ってくださいアスラさん。ここは私がやります!!…アスラさんとエールさんは先に搜索を進めていてください」

「!？」

「ま、まあ、一応私のミスですので……………」

ローザがアスラの前に出た。どうやら自分の失態を取り戻したいようである。何とか、少しは良いところを見せたいのだろう……………

「行くわよアスラ」

「ええ!?!いいのかよエール!?!」

「問題ないわ。あいつはムカツクけど、実力は本物よ」

「はい!!エールさんよりは強いのでお任せください!!」

「一言多い!!」

「ええ……………なんかごめんな」

アスラはローザに謝りながらエールと共に先を急ぐ事にした。

「さあ、わたくし私も探検したいですし、早いとこ終わらせませますわよ……………」

古びたコラボダンジョン。その中でエックスの少女ローザ・アルファが昔の人間達の罠から出てきたバトスピ生命体ケモノとバトルスピリッツを行った……………

…

「……………ここが宝物庫」

一方一人で先行してコラボダンジョンの捜索に出向いていたロンはようやく最奥部にある宝物庫の部屋へと辿り着いていた。

彼が今回先行してコラボダンジョンを捜索しに来たのは当然理由がある。アスラもここに来ることを悟ったからだ。ローザが「テンドウさん選ばれた方々も来る」と言われた瞬間。絶対にアスラが来ることを確信した。せつかく突き放した差を縮められるわけにもいかないため、こうやって身の危険も顧みず一人でやって来た。

「それにしてもすごいな……」

宝物庫らしき場所に広がっていた金銀財宝で溢れ返るお宝の山。それらが放つ神々しい輝きに冷静沈着なロンも流石にたじろいでいた。

「……………ん？」

そんな中、一際目立つ一本の杖を見つけた……………

嫌、一際目立つのはそれではなく、その杖に埋められていた一枚のカード。気になったロンは何故か無意識のうちに……………

いや、引き寄せられるかのように、それを手に取ってしまう……………

「……………金色の……………翼……………!?!」

それはバトスピカードではあるようだが、効果もテキストも全く書かれてはおらず、ただロンの言うように金色の翼が描かれているだけだった。

その時だ……………

「……………オマエ、ライダースピリットを持つてるな？」

「っ!?!」

背筋が凍りつくような鋭い声が聞こえて来た。ロンは思わずその方向を振り向くと、そこには白銀の髪をした青年が仁王立ちで構えていて……

「何者だオマエ……どこから……」

「ライダースピリットを持つてるなど聞いている」

藪から棒にその事だけを質問してくる青年。その様子からして、ロンはどうしても彼が友好的であるとは思えなくて……

「ああ、待っているさ、紫のライダースピリットをな」

ロンはデッキから取り出した「仮面ライダーナイト」のカードを青年に見せつける。青年はそれを見るなり表情一つ変えず、デッキとBパッドを取り出し、セットした。

「ならば狩らせてもらおう。その紫のライダースピリットを……!!」

「っ!!……オマエ、盗賊か!!」

「フツ……盗賊か、あんな姑息な連中と一緒にされたくは無いが……まあ、やってる事は変わらんか……」

やはり青年の目的はロンのライダースピリット。ロンは前に盗賊にライダースピリットを強奪されかけた経験から、その青年への警戒をさらに強める。

「オマエが何者かは知らないが、オレのライダースピリットはオレの言う事しか聞かん。そんなに金が欲しいか??……目の前にこれ程の財宝を目にしてもまだ……!!」

ロンは気になっていた。

あの青年の目的について……

ライダースピリットはカード自身が所有者を選ぶため、その人物にしか扱う事ができない。要するに、それを強奪したところで、売ってお金にする事しかできないのだ。

しかし、今現在、彼らの周囲には視界を覆い尽くす程の金銀財宝が存在する。青年がそれに病みつきにならない様子を見る限り、どうしても彼の目的が金だとは思えなかったのだ。

「……………本当にそれはオマエだけが扱える代物だと思うか?」
「っ!」

「……………まあいい。バトルの中で実際に見せてやった方が合理的だ……………カードバトルなら「逃げる」の選択肢はないだろう?」

「……………ああ、良いだろう。正直、ここでオレの旅の足止めを食らうのは面倒だが、それよりオマエみたいな顔色の悪い奴に付き纏われる方がよっぽどめんどくさそうだ……………!!」

青年の意味深な言葉がロンの心の中に妙に差し込んで来た。

だが、カードバトルならバトルを挑まれて逃げると言う選択肢は無い。ロンもやる気になり、デッキとBパッドを取り出し、セット。バトルの準備を瞬時に行った……………

そして……………

……………ゲートオープン、界放!!

ロンのライダースピリットであるナイトを賭けたバトルスピリッツが2人のコールと共に幕を開ける。

先行はロンだ。

「ターン01」ロン

「メインステップ、オレは仮面ライダーナイトを召喚!!」

1 【仮面ライダーナイト】 LV1 (1) BP2000

ロンは颯爽と自身の相棒である仮面ライダーナイトを召喚。その効果でさり気なくカードをドロールした。

「成る程、それがオマエのライダースピリットか」

「ああ、まあな。ターンエンド……」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】 LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとしたロン。次は突然現れた謎の青年のターン。ゆつくりとそのターンを進行していく……………

「さあ、ライダー狩りの時間だ……!!」

「ターン02」 謎の青年

「メインステップ、ネクサスカード……パンドラボックスを2枚連続配置し、エンドだ」

手札：3

場：【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

バースト：【無】

「っ!？」

謎の青年の両脇に置かれたのは黒々とした不気味な小箱。そのどう見ても異質で禍々しいその存在はロンに少なくないプレッシャーを与えていて……

「どうした??ターンエンドだ。オマエのターンを進めろ……それとも臆したか?」

「くっ……なわけないだろう。オレのターン!!」

だが、この程度であのような男に背を向けはしない。

ロンはこのバトルに勝つため、自分のターンを進める。

「ターン03」ロン

「メインステップ!!…鎧魂、ソードルを新たに召喚し、ネクサスカード、ミラーワールドをLV2で配置!!」

ー【鎧魂】LV1(1S)BP1000

ー【ソードル】LV1(1)BP1000

ー【ミラーワールド】LV2(2)

「……空間が反転した?」

ロンの場に勢い良く放たれたのは鎧を着た浮遊霊、鎧魂と、小型だが、全身が刃物の

塊のスピリット、ソードール。そして、ネクサスカードミラーワールドの影響でこの場が鏡向きに変化した。

「ガラ空きのオマエの場に仕掛けさせてもらう!!…アタックステップ!!オレは場の3体のスピリットでアタック!!」

「!!」

男には身を守るカードは無いと見てロンが一気に攻勢に回る。ナイト、鎧魂、ソードールの3体が一齐に駆け出した。さらにこの時、配置されたミラーワールドのLV2効果で「ソードール」がオープンされ、ロンはそれを手札に加えた。

「…:…全てライフで受ける」

〈ライフ5??:4??:3??:2〉謎の青年

ナイトと鎧魂、ソードールの剣撃が、男のライフを次々と切り刻んで行った。彼は一気に半数以上のライフを失う。

ただ、この際に発生したであろうライフダメージに彼は眉一つ動かさず、何事も無かったかのように澄ました表情をしていた……………

「……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダーナイト】LV1

【鎧魂】LV1

【ソードール】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

あれ程のダメージに微動だにしないその男の様子を見て、彼が圧倒的な強者である事を悟ったロン。おそらくあの男はカラーライダーとほぼ同格の実力者……………

「ターン04」謎の青年

「メインステップ……………仮面ライダービルド ラビットタンクフォームをLV2で召喚

……!!」

ー【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV2（6S）BP6000

……鋼のムーンサルト!!

……ラビットタンク!!

「オマエもライダースピリットを!？」

謎の音声と共に赤と青のカラーリングが螺旋状で構成されたライダースピリット、ビルドが現れた。どうやら彼はあのライダースピリットに選ばれているようである。

「召喚時効果、カードを3枚オープンし、その中の対象カードを1枚手札に………オレは仮面ライダービルド 『ラビットタンクスパークリングフォーム「2」』を手札に加え、残りを破棄する」

そんな仮面ライダービルド ラビットタンクフォームの効果はサーチ。青年は新た

なるカードを加えた。

「バーストを伏せ、アタックステップ……行け、ラビットタンク!!」

青年も場にバーストを伏せると共に遂に動き出す。ラビットタンクが構え、戦闘態勢に入る。さらにこの瞬間のフラッシュタイミングで手札を1枚引き抜いて……

「フラッシュユチェンジ!!……仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリング
フォームの効果を発揮!!」

「!!」

「この効果により、BP4000以下のスピリットを全滅させる!!」
「なにつ!?!」

炎の竜巻がロンの場を通り過ぎて行く。それにナイト、鎧魂、ソードールが次々と巻き込まれ、焼き尽くされてしまった。

「そして、アタック中のラビットタンクと回復状態に入れ替える!!」

ー【仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム「2」】LV3（6
S）BP13000

……ラビットタンクスパークリング!!

ラビットタンクがベルトにボトルのような物を差し込むと、陽気な音声と共に姿形を変え、赤と青のカラーリングにさらに白色が混ざった強化形態、スパークリングフォームへと進化を遂げた。

「鎧魂の効果!!破壊時にソウルコアが置かれていた時、敵スピリットのコア1つをトラッシュへ送る!!対象は当然オマエのライダースピリットだ!!」

「だがアタックは止まらない!!」

「くっ……ライフで受ける………ぐうあっ!!」

〈ライフ5?4〉ロン

スパークリングのコア1つが鎧魂の効果でトラッシュへと送られるが、そんな事はま

るで意に介さず、手に持つドリルのような形をした剣による一撃でロンのライフを1つ斬り裂く。その際に通常よりも大きなバトルダメージが彼を襲った。

「チェンジの効果で回復状態に入れ替わったスパークリングは2度目のアタックが可能!!……………行け!!」

「つ……………それもライフだ……………ぐあっ!？」

へライフ4??3へロン

ドリルのような剣を再びロンのライフへと叩きつけるスパークリング。ロンは余りのダメージに思わず膝を付いてしまう。

「……………ターンエンド……………どうする?まだ足掻くか??」

手札:3

場:[仮面ライダービルド スパークリングフォーム「2」] LV2

[パンドラボックス] LV1

[パンドラボックス] LV1

バースト：【有】

このターンではつきりわかった事は……

ロンの予想してた以上にこの男は強いと言うことと、自分などよりも遥かに格上であるという事……

カラーリーダーと同格なんてものじゃない。感じた事も無いこの圧倒的な強さは「三王」に匹敵するかもしれない……

「足掻く!!……オレはここで立ち止まるわけにはいかない!!」

ただ、諦めはしない。

こんな奴とのバトルで根を上げるようなら頂点王には決してなれないし、ライバルにも顔向けができない。

ロンは青年にそれを主張するかのようになり、いつになく力強い声を張り上げた。

「愚かだな……」

「ここからが本気だ。行くぞ、オレのタアアアン!!」

ロンが歯を食いしばりながら力を込め、地面に付けていた膝を立ち上げる。そしてそのまま自分のターンを進行して見せた。

「ターン05」ロン

「メインステップ!! 鎧魂とソードールを再度召喚!!」

ー【鎧魂】LV1(1S) BP1000

ー【ソードール】LV1(1) BP1000

ロンの場に2体目となる鎧魂とソードールが現れた。
そしてロンはさらなるカードを手札より引き抜いて……

「第二の仮面ライダーナイトをLV2で召喚!!」

ー【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2) BP6000

「っ……2番目のカードか」

ロンの場に「2」の識別番号を持つ仮面ライダーナイトが姿を見せる。さらにロンはその力を遺憾無く発揮させ……

「召喚時効果!! スパークリングのコア2つをリザーブへ!!」
「っ!!」

2番目のナイトがベルトにあるカード束から1枚抜き取り、剣に付随しているバイザーに装填……

……『ソードベント!!』

と、また無機質な音声の流れ、ナイトに黒くて太い槍が装備された。ナイトはその槍を手に、青年の場へと駆け出し、場にいたスパークリングに強烈な刺突をお見舞いする。スパークリングはそのコアをリザーブへと散らしてしまうものの、消滅には至らなかった。

「成る程、それが第二の力か……………だが、それまでだな」

「!!」

「相手のスピリットの召喚時効果発揮後により……………バースト発動!!」

反撃を仕掛けて来たロンに対して青年がそう呟くと、事前に伏せていたバーストカードを発動させる。

そのカードとは……………

「……………仮面ライダークウガ ライジンググマイティ!!」

「っ!？」

「効果によりシンボル1つ以下のスピリットを破壊!!……………散れ、ナイト!!」

「ぐうっ!!」

2番目のナイトを襲ったのは激しく燃え盛る火柱。ナイトは跡形も無く消し済みにされてしまう……………

「そしてその後、召喚だ……………来い、クウガ ライジンググマイティ!!」

1【仮面ライダークウガ ライジングマイティ「2」】LV1(2)BP6000

青年の場が赤く発光したかと思えば、新たな赤いライダースピリット、『クウガ』がそこにはいた。

「……………ど、どういう事だ!？」

驚愕するロン。

別に2番目のナイトがあっさり破壊された事に対して言っているのでは無い

……………

「何故オマエは『2種のライダースピリットを従えている』!？」

……………そう

この世界の常識。

その1つ……………

『ライダースピリットは同じ人物に2種以上は宿らない』……………

ライダースピリットはそれぞれの個性が独特過ぎるあまり協調性が皆無。それ故に、何人たりとも2種以上のライダースピリットを所有できない。現に今までそう言う事例が1つも無い。

だが、今ロンの目の前にいる青年はなんだ……………

顔色1つ変えず、何事も問題では無いと言い張るかの如く……………当たり前のように全く別のライダースピリットを操っているではないか……………

「どうでもいい事だ。オマエの短い物差しで計れるほどこの世界は小さく無いぞ……………

!!

「っ!!」

「それともなんだ……………2種のライダースピリットを見て恐れを成したか??……………逃げるのはオマエの勝手だが、ナイトはここに置いていけ……………」

この青年はまるで殺戮マシンだ。あの天才だと言わしめたロンをまるで寄せ付けず、赤子の手を捻るかのように圧倒しているのだから……………

しかしそれでもまだ……………

「……いつオレが逃げると言った!!」

「!!」

「マジック、ネクロブライト!!……トラツシユより紫の3コスト以下スピリット1体を召喚する!!蘇れ、ナイト!!……不足コストはソードールを消滅させ確保!!……さらにナイトの召喚時効果、1枚ドロロー!!」

1【仮面ライダーナイト】LV1(1)BP2000

ロンはまだ諦めはしない。目の前の敵がどれだけ強大で、この世の定義の枠からはみ出ているようが関係無い。

あのバカで真っ直ぐなアスラならば逃げずに立ち向かうだろう………
そう思うと自然とロンは力が入り、戦えるのだ………

彼の場に紫色に発光する魔法陣が現れたかと思えば、そこから最初の仮面ライダーナイトが復活を果たした。その代償としてソードールは消滅。ロンはナイトの効果で

カードをドローした。

「アタックステップ!!……ナイトでアタック!!」

ロンが力強くナイトにアタックの指示を送ると、ナイトは手に持つバイザー付きの剣を構え、戦闘態勢に入った。

「ネクサス、ミラーワールドの効果!!……ナイトがアタックした時、デッキの上から1枚をオープンし、それがアドベントカードならノーコストで発揮させる!!」

ナイトのアタックに反応するようにロンのデッキから1枚のカードがオープンされた。

そのカードは『ファイナルベント』……最強のアドベントカードである。

「よつてこの『ファイナルベント』を發揮!!……BP15000以下のクウガ ライジン グマイティを破壊し、ナイトに赤のシンボルを1つ追加する!!」

「!!」

ナイトがベルトからカードを一枚引き抜き、剣に付随するバイザーにそれを装填
.....

.....『ファイナルベルト!!』

と、また無機質な音声が流れる。すると、どこからともなく飛翔して来た黒い翼を持つコウモリ型のモンスターが黒いマントへと変形し、ナイトと合体。空を飛翔して見せる。さらにナイトはマントを体全体に巻き付け、黒槍を形成すると、クウガ ライジングマイティへ向けて急降下した。

「飛翔斬!!」

黒槍と化したナイトはライジングマイティを貫いた。ライジングマイティは堪らず爆散してしまう。さらにそれだけに終わらない。一撃で2つのライフを破壊できるナイトのアタック自体は継続中な上に、青年の場にブロッカーはおらず、残りライフも2つ.....

「トドメだッツ!!」

終わりだ。

ナイトがバイザー付きで刀身の細い剣を構え、そのライフを斬り裂く……………
はずだった……………

「言っただろう……………オマエではオレには勝てん」

「!!」

神経を逆撫でするような鋭く冷たい青年の声がロンを襲った……………

そして男は手札からカードを1枚抜き取って反撃に出る……………

「フラッシュチェンジ……………仮面ライダービルド ゴリラモンドフォーム!!……………シンボル2つ以上のスピリットを手札に戻す!!」

「!!」

「ダイヤの雨に散れ……………ナイト!!」

ライフを斬り裂くその直前、突如フィールドにダイヤの雨が降り注ぐ。ナイトはそれ

に装甲を砕かれ、デジタル粒子となってしまい手札へと戻ってしまった……………

「……………ターン……………エンドだ……………」

手札：2

場：【鎧魂】 L V 1

【ミラーワールド】 L V 2

バースト：【無】

残った鎧魂だけでは青年のライフは全て破壊する事はできないためか、ロンはそのままそのターンを終えてしまう。

次はロンの猛攻を難無く凌ぎ切った青年のターン。鉄仮面のように表情を一つも変えずにターンを進行して行く……………

「ターン06」 謎の青年

「メインステップ……………ラビットタンクを再召喚……………さらに召喚時効果を使用し、その中のライダースピリットを1枚手札に加える」

1 【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV1(1) BP3000

……鋼のムーンサルト!!

……ラビットタンク!!

チェンジの効果で手札に戻っていたラビットタンクフォームが再び青年の場に姿を見せる。さらに召喚時効果も成功し、彼は新たなライダースピリットのカード「仮面ライダーW ヒートメタル」を手札へと加えた……………

「さらに手札に加えたこの仮面ライダーW ヒートメタルを召喚!!」

1 【仮面ライダーW ヒートメタル】LV2(3) BP6000

………ヒート、メタル!!

ハイテンションな音声と共に、右半身が赤、左半身が銀色をしたライダースピリット

が現れる。このライダースピリットもどうやらビルドやクウガとは全く性質が異なるライダースピリットであるようで……

「……また別種のライダースピリット……!?!」

この曲面でロンはようやく気がついた。

あの青年は何も自分のライダースピリットであるナイトを市場に売り捌きたいわけではない。『アツキに組み込みたい』のだ。推測だが、これまでに多くのライダースピリットを奪って来たに違いない。

「アタックステップ………W ヒートメタルでアタック!!……その効果でコアを1つ追加し、オマエの鎧魂を疲労させる」

「!!」

ヒートメタルは背に備え付けられている金属棒に炎を宿らせ振り回す。その勢いで弾き出された炎がロンの場に飛び火してしまい、最後の砦だった鎧魂に直撃……疲労状態となってしまう。

「アタックは継続中……………」

「っ!!…………ライフで受ける!!…………ぐっ!？」

〈ライフ3?!2〉ロン

ヒートメタルはロンの場に直接殴り込みに行き、その炎を纏わせた金属棒で彼のライフを殴打した。ロンのライフは残り2つとなってしまう。

「オマエのバトスピではオレには敵わない……!」

「……………!!」

「スパークリングでアタック!!」

「ライフで受ける!!…………ぐっ!？」

〈ライフ2?!1〉ロン

今度はスパークリングフォームがドリルのような武器でロンのライフをさらに1つ

斬り裂いた。いよいよ後が無くなった。未だアタックはしていないラビット坦克の
アタックが宣言されて仕舞えばロンは敗北となる……………

だが、絶体絶命の崖つ淵の状態に立たされても尚……………

ロンの目は死んではいない。青年に未だ勝つ気さえある。諦めてなるものか……………
あいつだったら、アスラだったらまだ諦めない。

だったらあいつよりも強くなる自分がここで諦めるわけがない……………

「いい加減諦めろ……………」

「諦めない!!」

「無駄だと言っている……………」

「無駄じゃない!!」

「ライダースピリットを渡せ……………」

「渡さない!!」

オレは負けない……………

アスラがオレのライバルでいる限り……………

この世から『ソウルコア』を与えられなかったアスラがオレの友でいる限り……………

そんなアスラがオレと同じ『頂点王』になると言う夢を諦めない限り……………

「オレは諦めない!!」

「じゃあ死ね……………!!」

圧倒的な強者の前に臆す事なく前を向き続けるロン。しかしそれは感情論に過ぎない。口では諦めないとは言っても、実際はもう敗北なのだ……………反撃する術も無い……………ラビットタンクが地を蹴りロンのライフ目掛けて走り出す。そして、眼前まで接近すると、青い拳がロンの最後のライフを砕く……………

その直前だった……………

「仮面ライダー龍騎を召喚!!」

……………!!

どこからともなく現れた赤いライダースピリットがその拳を寸前で押さえ込んだ。ロンはそのライダースピリットと、召喚した喧しい奴の声をよく知っていた……………

「何だ……このライダースピリットは……」

オイそこの顔色悪いの……勝手にオレのライバルに手エ出すんじやねエエエー!!!!

「アスラ………っ!!」

青年とロンが声のする方へと顔を向けると、そこにはBパッドを展開して龍騎を召喚したであろうアスラがいた。エールとムエも確認できる。

「やっと追いついたと思ったら何やってんだロンテメエ!!勝手にやられてんじやねエエエー!!!」

「余計な事を……あと少しで倒せたのに」

「ウソつけえ!!……鏡見てみる!!ポッロポロだぞオマエ!!」

「今からデツキが進化して怒涛の反撃が始まるとこだったんだ……」

「強がんじゃないやねえ!! オマエそーゆーとこだぞ!!」

久し振りの再会だったアスラとロン。にもかかわらず、いつもの言い合いが早速始まる。だが、毎度の事ながらこの言い合いはお互いがお互いを信用しているからこそできるものであって……………

「今日は素晴らしい1日だな……………何せ、オレの元にライダースピリットが勝手に集まって来るのだから……………!」

「うるせえ!! ライダースピリットいっぱい持ってるからって偉そうにすんじゃないやねえ!!! ……今からオレがロンの代わりにオマエをぶっ飛ばしてやるっ!!」

アスラと銀髪の青年によるバトルスピリッツがここに幕を開けようとしていた……………

8コア「バースト発動!!第二の龍騎!!」

エックスの身分を持つアルファ家の少女、ローザ・アルファは自分で引つかかってしまった罠から出てきたバトスピ生命体、ケモノとバトルスピリッツを行っていた。

だが、それも丁度終止符が打たれようとしていた……………

当然、ローザの勝利でだ。

「行ってください、ズドモン!!」

ローザの使役するデジタルスピリット、ズドモンが金槌のような武器を地面に叩きつけ、そこから青い稲妻を走らせる。ケモノはそれに直撃し、激しい断末魔を張り上げながら消滅してしまう……………

「ふう〜殲滅完了!!ですわ!!……………さあて!!私もエールさん達と合流しなきゃ!!ですわ!!」

このコラボダンジョンの搜索が始まってからというもの、全く触れられてはいなかったが、

このエックスの少女、ローザ・アルファは天才だ。何せ、アスラやエール、ロンと同じ15歳にして既に国を代表するカードバトルの1人、カラーリーダーに抜擢されているのだから……

彼女の実力はそこが知れない。ロンはなんとか勝つ事ができたようだが、果たしてアスラは彼女から青のカラーカードを受け取る事ができるのか……

一方、コラボダンジョンの最奥部の宝物庫ではロンをあと一歩まで追い詰めた白銀の髪の青年の前に新たにアスラとエール、ムエが立ち塞がっていて……

「オレとバトル??身の程知らずも良いとこだな。その奴見たくボロ雑巾にされたいか?」

「へっ!!気にすんな!!こちとら生まれた時からボロ雑巾なんでなツツ!!」

「……………良いだろう……………少々合理性に欠けるが、先ずはオマエのライダースピリットを

狩ってやろう」

青年が展開していたBパッドをロンではなく、今度はアスラの方へと向ける。バトルを行う対象を変えたのだ。アスラも当然それに合わせるようにBパッドを展開し、その際にお互い召喚していた全てのスピリットが消滅した。

「待てアスラ、オレも……………ぐうつ?！」

「バカヤロウ!!今は起き上がんな!!……………安心しろ!!オレが必ずあいつをぶっ飛ばすツツ!!」

「そいつは癩だ」

「癩ってなに!？」

ロンもそのバトルに混ざろうとするが、さっきのバトルで青年につけられた傷が疼き、立ち上がれるのがやつとな状態。アスラの加勢など到底不可能だった……………

ロンでも全く相手にならない程の相手だ。実際アスラー人でどうこうできるとは考えづらい……………

「待ちなさいよバカスラ!!」

「エール!?!」

いざバトルと言う時にエールがBパッドを展開しながら割って入って来た。

「なんか知らないけど、あいつはあんただけでは勝てないわ……………私も一緒にバトルしてやるわよ……………!!」

「おお……………エール、ありがとなツツ!!」

「べ、別にあんたのためじゃないわよ!!」

「ええ!?!…じゃあ誰のため!?!」

いや、本当は敵の力量も見ようともせず無鉄砲にバトルを挑んだアスラのためだ。どちらにせよアスラにとってこれ程心強い助っ人はいない。彼は大いに喜んだ。

「…………『レイドバトル』か…………女の方はライダースピリットを所持していないようだが良いだろう、2人まとめてかかって来い」

『レイドバトル』……………

この世界におけるバトスピのルールの一つ……………

所謂1対複数のバトルの事を指す。

ルールは普通のバトルとは大して変わらない。

1人側のプレイヤーは通常通り、いつものバトスピを行う。

複数人側のプレイヤー達は1つのフィールドやリザーブを共有しながらバトルを行う事になる。そして初期手札は合計が4枚になるよう振り分けられる。今回はアスラとエールの2人であるため、初期手札は2枚ずつのスタートだ。

「つしやあ!!行くぞエール!!」

「私はエックスよ、指図しないでくれる?」

「えええええ!!?こんな時でもオオオー!!?」

「…………ライダースピリットを狩らせてもらおうツツ!!」

…………ゲートオープン、界放!!!

少々もたつきながらも、謎の青年とアスラ、エールペアのレイドバトルがコールと共

に幕を開けた。レイドバトルのルール上、先行は1人側のプレイヤーであるため、青年のターンから始まる……………

「ターン01」謎の青年

「メインステップ……………仮面ライダーW サイクロンジョーカーを召喚」

1 「仮面ライダーW サイクロンジョーカー」LV1 (1S) BP2000

……………サイクロン、ジョーカー!!

緑の疾風に加え、紫電が場に迸る。そこにいたのは仮面ライダーW サイクロンジョーカー。青年が所有するライダースピリットの1種だ。

「早速出たわね、ライダースピリット」

「召喚時効果でコアを増やす……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1
バースト：【無】

そのターンをエンドとする青年。次はアスラとエールペアのターンが始まるのだが、その前にアスラはある事に気付いた。

それは彼にとってとはとんでもない事であつて……

「お、おいエール………スゲー事に気がついた………」

「ん？なによアスラ？」

「お、オレのリザーブにソウルコアがあるウウウー!!!」

レイドバトルにおいての複数人側のプレイヤー達は場やりリザーブを共有する。つまり、今回のアスラはエールと同じリザーブになるといふ事。その影響もあつてか、アスラの念願でもあつたソウルコアが遂に彼のリザーブに配置されていた。

「おお!!なんか知らねーけどオレのリザーブにソウルコアがアアアアー!!!………よっしゃアアアアー!!! 神様ありがとうございまアアアアーす!!!」

「うっさいわねアンタ!!ソウルコアくらいではしゃがないでよッツ!!」

「これがソウルコアか〜!!」

「……………」

強敵を目の前にしているにもかかわらず、目の前のソウルコアによつていつもより落ち着きが無くなるアスラ。ロンはその緊張感の無い様子を見て、少々呆れ気味だった。

「ターン02」アスラ&エール

「っしやあ!!メイנסテップだ!!…………オレは早速ソウルコアを使って贅沢に仮面ライダー龍騎をLV2でしょ……………」

「ネクサスカード、勇気の紋章をLV2で配置するわ!!」

ー【勇気の紋章】LV2(1)

アスラが念願のソウルコアを使って龍騎を召喚しようとするも、エールがそれを遮るようにネクサスカードである勇気の紋章を配置。彼らの背後に太陽を模した紋章が浮

かび上がった。

今回はレイドバトルであるため、アスラのBパッド上にもエールの勇気の紋章のカードが現れた。

「オイイイイー!!!何やってんだエールウウウー!!オレにソウルコアをを使わせてくれエエエー!!!」

「フン!!……うっさいわね、先ずはネクサスを置いてシンボルを稼ぐのは定石でしょ!!」
「ぐっ!!……返す言葉がねえ……」

——エールがアスラに上から目線で偉そうに告げた。ただ今回ばかりは正論。アスラは初めてのソウルコアを前にして少々舞い上がっている。

「でも、次のターンには使わせてやるわよ……は、初めてのソウルコア……なんでしょ?」

「お、おお!!マジか、エール!!……ありがとなッツ!!」

「べ、別にアンタのためじゃ無いわよ!!……勝つため!!そ、そうこれは勝つための算段よ!!」

エールは若干顔を赤くしながらアスラに約束した。アスラはエールの中にある優しさが五臓六腑に染み渡るのを感じた。

「取り敢えずこのターンはエンドよ……!!」

「おうっ!!」

アスラ手札：3

エール手札：2

場：【勇気の紋章】LV2

バースト：【無】

「ネクサスカード、勇気の紋章……成る程、ライフ減少時にBP5000以下を破壊する効果か……」

アスラとエールがエンドを宣言する中、青年は確実に勝利するために現状を分析していた。その様子から、彼らに馴染もうとする気が一切ないのが伺える。

「オレのターン……………」

「ターン03」謎の青年

「メインステップ……………オレはネクサスカード、パンドラボックスを3枚連続配置する!!」

ー【パンドラボックス】LV1

ー【パンドラボックス】LV1

ー【パンドラボックス】LV1

「な、何アレ……………不気味ね」

「ロンとバトルしてた時もあったなアレ」

青年はロンとのバトルでも使用した黒き小箱を今度は3枚配置した。その異様な不気味さと存在感はアスラ達にも伝わって来た。

「ターンエンド」

手札：2

場：【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1

【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

バースト：【無】

だが青年もエールの勇気の紋章がある限り、この序盤でのアタックは不可か、そのターンをエンドとしてしまう。

「ターン04」アスラ&エール

ドローステップ時にエールが配置していた勇気の紋章、LV2効果が起動され、アスラ達はドローステップを1枚増やし、その後増えた分をトラッシュへと破棄した。

「メインステップ………エール、ホントにこのターンはオレの好きにやって良いんだな？」

「そこまでは言って無い気がするけど……まあ良いわ、アンタの力、存分に見せ付けな
きゃー!!」

「おう!!オレはネクサスカード、ミラーワールドを配置!!」

ー【ミラーワールド】LV1

「……さっきの奴と同じネクサスカードか……」

このターンはエールと交わした約束通り、アスラが全力で動く。いつものネクサス
カード、ミラーワールドが配置され、空間が鏡向きに変化した。

「でもって!!仮面ライダー龍騎をLV1で召喚!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP2000

アスラの持つ赤きライダースピリット、龍騎が姿を現した。その召喚時効果が発揮さ
れるが、今回は失敗してしまい、どれもトラッシュへと破棄された。

そして、アスラの念願の時が訪れる……………

「さらに、お、オレは……………リザーブのソウルコアを使い……………龍騎のLVを1から2へ
！」

「どれだけこの瞬間を待ちわびた事だろうか。生まれた時からまるでこの世界から忌
み嫌われているかの如くソウルコアがBパッドから生成されなかったアスラが今
……………」

15年の歳月を経て……………

ようやくソウルコアが……………

シーン……………

【仮面ライダー龍騎】LV1

「アレ……………??」

「何やってんのよ、アンタ……………」

おかしいな。

ソウルコア……………

動かないんですけど……………

龍騎のLVが上がってただけ……………

Bパッド、ちゃんとバトルモードにして叫んだのに……………あれ??なんで??

いや、まさかソウルコアを目の前にしてこれが使えないなんて……………多分認識されなかったんだろ。では気を取り直してもう一度……………

「オレはリザーブのソウルコアを使い、仮面ライダー龍騎のLVを1から2へアップ!!」

……………シーン……………

【仮面ライダー龍騎】 LV1

「ウソだろ!!……………ま、全く動かねエエエー!!」

本来ならば言葉を発するだけでコアは動かせるはずなのだが、何故かアスラに限ってはソウルコアが動かなかった……………それはそれはもう接着剤で引っ付いているかの如

くピクリともせず……………

「コノヤロオオオー!!!動きやがれコンチクショー!!!」

「アンタ……………惨めね……………」

「うっせエエエー!!!」

アスラがBパッド上のソウルコアを手で無理矢理動かそうとするが、そもそも手動には対応してもいないため、当然ながら動かない。

そんな様子に、エールは「しょうがないわね」とアスラに告げながら……………

「私が置いてあげるわよ、ソウルコア……………」

「っ!!……………ま、マジかエールウウウー!!オマエってやつばめちやくちや優しいヤツなんだなツツ!!」

「っ!!……………べ、別にアンタのためじゃ無いわよ……………こ、これも勝つためだからね……………!!」

そう。

【仮面ライダー龍騎】(1??2S??1) LV1??2??1

カード上にソウルコアが乗せられ、龍騎のLVが上がった瞬間。微弱な電流が龍騎のカードから流れ、その置かれたソウルコアをリザーブへと叩き返してしまった……

「な、なんでソウルコアを弾くのよコイツウウー!!」

「オレが知るかアアアー!!!」

エールは余りにもキテレツな現象に驚愕を通り越して怒りが先走ってしまふ。

(……ま、まさか龍騎はソウルコアを必要としないんじゃないやなくてソウルコアを受け付けないの!?!……だからソウルコアが生み出せないアスラに宿った?!?)

内心でそう推理するエール。現状ではよく分からなさすぎてそう考えるしか他にはなかった。

「まあいいや元からねえソウルコアだ。エール、ソウルコアを動かすのはオマエに任せ

るぜ」

「……切替早いわね、アンタ……リザーブのソウルコアは勇気の紋章に移動させ、勇気の紋章のコアは龍騎へ!! よってLV2へアップ!!」

アスラの期待は完全にぶち壊された。

ただ、バトルは続いている。気持ちを切り替え、アスラは自分のバトルスピリッツを続行させて行く……

「オレはさらにバーストをセットしてアタックステップツツ!!…行け龍騎!!」

「ライフで受ける」

〈ライフ5??4〉謎の青年

龍騎がアスラの指示で青年のライフ1つを拳で玉砕する。その際に青年に多大なバトルダメージが発生しているはずなのだが、彼は冷徹な表情を一切崩さず、仁王立ちで構えていた。

「……………ターンエンドだ……………」

アスラ手札：1

エール手札：3

場：【仮面ライダー龍騎】 LV 2

【勇気の紋章】 LV 2

【ミラーワールド】 LV 1

バースト：【有】

アスラもここに来て緊張感を覚え始めてきた。ロン同様、あの青年からとてつもない強さを感じたのだ。生物的本能が彼を危険であると瞬時に悟らせた……………
アスラとエールのターンはエンドとなり、青年のターンが始まる。

「ターン05」謎の青年

「メインステップ……………仮面ライダービルド ラビットタンクフォームを召喚!!……………召喚時効果で新たなライダースピリットを手札へ」

ー【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV1（1）BP3000

……鋼のムーンサルト!!

……ラビットタンク!!

「あつさっきの奴!!……なんか見覚えあるんだよね」

赤と青色が螺旋状になっているライダースピリット、ビルド ラビットタンクフォームが青年の場に現れる。さらにその効果で青年は『仮面ライダークウガ タイタンフォーム』を新たに加えた。

だが、その効果はアスラが前のターンに伏せていたバーストのトリガーとなって……

「召喚時効果発揮後によりバースト発動!!……双翼乱舞!!カードを2枚ドロロー!!……
なあエール……」

「なによっ!」

「……もうちよつとドローしたいからソウルコアを払って双翼乱舞のメイン効果を発揮

させてくれー!」

「はあ!?なんでよ!!アンタさつきソウルコアの移動は私に任せるって言ったばっかじゃない!!」

「まあまあ、後悔はさせねーから!!」

バースト効果を持つマジックカード『双翼乱舞』はバースト発動時にノーコストで2枚ドローし、その後、通常のコストを払う事でさらに追加で2枚のカードをドローできる。

ただ、今アスラとエールのコアは龍騎に乗っている2つと勇気の紋章の上に載っているソウルコアのみ。ソウルコアを動かす事ができないアスラは龍騎を消滅させる事では追加効果を発揮できないのだ。だからこうしてエールに懇願している。

「……………ハア……………わかったわよ……………私は勇気の紋章の上にあるソウルコアと龍騎のコア一つを払って、双翼乱舞のその後の効果、アスラに追加で2枚ドローさせるわ」

「サンキューエール!!この借りは期待してくれよな!!」

「はいはい、まあ私の足を引っ張られるのも癪だしね」

エールがソウルコアを支払い、アスラに4枚ものカードをドロウさせた。だが、手札が増えたからとて、青年は悠長に彼らを待ったりはしない。このターンで畳み掛けて来る……………

「……………まずは邪魔な勇気の紋章を破壊する……………オレは仮面ライダーダークウガ タイタンフォームのチェンジを發揮!!対象はラビットタンク!!」

ー!!

「効果によりネクサスカード1つを破壊する。消え去れ、勇気の紋章!!」
「っ!!……………そんな、私の勇気の紋章が……………!!」

勇気の紋章がヒビ割れ、崩れ去っていく。これでアスラ達は自分達のライフ減少時に迎撃する事ができなくなった。

「そしてその後、対象となったスピリットと入れ替える……………来い!!仮面ライダーダークウガ タイタンフォーム!!」

1 【仮面ライダークウガ タイタンフォーム】LV1(1) BP6000

ラビットタンクがデジタル粒子に変換され、青年の手札に戻ったかと思えば、代わりに紫のボディを持つ大地の戦士、仮面ライダークウガ タイタンフォームが現れた。

「さらにオレは手札に戻ったこのラビットタンクを召喚!……召喚時効果で再び新たなライダースピリットを手札に加える」

1 【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV1(1) BP3000

チェンジの効果で手札に戻っていたラビットタンクが再び現れ、また新しいライダースピリットのカードを手札へと加えた。

「そしてバーストを伏せ、アタックステップツツ!!……3体のライダースピリットでアタック!!」

「っ!!来たぞエール!!……ライフで受けるか!?!」

「受けるしかないでしょ!!…アンタがさつき生意気にコア使わせるから!!」

「つしやあ!!んじやライフで受ける!!…ぐうっ!」

「っ!!……凄いだメージ……」

へライフ5??4??3??2< アスラ&エール

3体のライダースピリットによる波状攻撃がアスラとエールのライフを次々と破壊して行く。その際に彼らはロン同様、通常以上の凄まじいバトルダメージを味わってしまふ。

「くっ……ロン、オマエずっとこんなダメージ食らってたのか……」

「大した事ないだろ……その程度で痛がるようならオマエはその程度の男」

「ボロボロのヤツがんな事言ってるんじやねエエエー!!!…嘘に決まってるだろ!!痛くねーし!!」

「……なにアンタまで強がってるのよ……」

いつもの事だがちよつとした事で言い合いになるアスラとロン。ロンはアスラとどちらが先に頂点王になるか競い合っているため、どんな事であってもアスラには勝ちたいのだろう。

クールな見た目だが、彼は意外と負けず嫌いなのだ……

「……………ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1

【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV1

【仮面ライダーダークウガ タイタンフォーム】LV1

【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

バースト：【有】

そんなアスラ達3人の言葉の掛け合いなど全く気にも止めず、銀髪青年はそのターンをエンドとした。

と、その時だった。アスラ達の耳に聞き覚えのある声が聞こえて来たのは……………

「あつ…アスラさん!! エールさん!! ロンさん!! ……ご機嫌麗しゆうですわ!!」
「……………ローザ……………」

ここでコラボダンジョンの罠を突破して来たローザが3人と合流を果たした。ローザの明らかな緊張感の無い声と同じエックスの身分を持つエールは呆れる。

「おお!! ローザアアア!! あの罠突破して来たんだな!! スツゲエエエ!!」
「ふふ、えっへん!! ですわ!!」

アスラがローザとの再会を喜ぶ。そんな彼に褒めちぎられたローザはドヤ顔を披露した。

「あれ、ところでそちらのお方はどちら様でしょうか? ……何故アスラさんとエールさんがバトルを……………ハッ、まさか、これもコラボダンジョンの罠!!」

「うん。もう説明が面倒だからそう言う事にしておくわ」

勝手に現在の状況を解釈するローザ。いい加減ツツコミに回るのに疲れて来たエールはそう言う事しておくことにした。

「ロンさん!!私あれ程コラボダンジョンは危険であると言いましたの!!…こんなに傷だらけになって!!」

「……………」

「……………なんですか、その澄ましたお顔?」

天然が過ぎるローザとの会話は基本的に面倒臭い。それをカラー戦で既に学習しているロンはスーンとした澄まし顔でこの状況を華麗に流していた。まあ、なんと言うか、ほぼ無視に近い。

「にしてもアイツ、めちやくちや強いじゃ無い!!……………どうなってんのよ、ライダースピリットの複数持ちなんて……………!!」

「大丈夫だエール!!オマエの『メタルグレイモン』で一氣に大逆転だぜ!!」

このバトル。アスラは既に対局を見ている。逆転の鍵を握るのはエールの持つオメガのデジタルスピリット、「メタルグレイモン」であると踏んでいた。

「はあ!?……さっきの双翼乱舞の借りはどうしたのよ!?アンタがやつつけなさいよ!!……それに成熟期もまだドロォできてないのよ!!」

そう。

エールもできれば早くメタルグレイモンを呼び出しておきたかった。しかし、その進化前であるグレイモンが未だに手札には来て来ないのだ。元々コストが高いメタルグレイモンは召喚しづらいし、無理に召喚したら使えるコアが減るため、エールは召喚を躊躇っていた……

が、アスラには小さな脳味噌なりの策があった……

「だから大丈夫だって!!……オレが足場を作る!!……このターンで決めるぞ!!」

「……っ!?!」

アスラの言っている意味がわからなかったエールだが、あまり悠長に喋る事はできな

い。そのターンを進行していく……………

「ターン06」アスラ&エール

「メインステップ!!行くぞエール!!……………オレはドラゴンヘッド1体とシャムシーザーを3体を連続召喚だアアアア!!」

ー	【ドラゴンヘッド】	L V 1 (1)	B P 1 0 0 0
ー	【シャムシーザー】	L V 1 (1)	B P 2 0 0 0
ー	【シャムシーザー】	L V 1 (1)	B P 2 0 0 0
ー	【シャムシーザー】	L V 1 (1)	B P 2 0 0 0

「!!」

龍の頭部のみとなったスピリット、ドラゴンヘッドと、赤い身体に数本のトゲを生やしたトカゲ型のシャムシーザーが3体場に現れる。

アスラの言っていた「足場」とはこう言う事だ。これなら大量に軽減シンボルを有し

ているメタルグレイモンは……

「たったの1コストで召喚できる……」

「ああ!!ぶちかましてやれエール!!オマエの実力!!」

このタイミングのためにアスラは必要以上に手札を掻き集めた。

アスラはこのバトル、ずっとエールのバトスピに期待していた。メタルグレイモンならばこの状況を打開できると思っていた。それは新人交流戦の時にそれと対峙したアスラだからこそ感じた事であって……

そしてエールはそのアスラの、仲間の期待に応える……

「ええ、しようがないわね!!わかったわよッ!!……7コストの内、6つの軽減を確保した事により、完全体、メタルグレイモンを1コストで召喚ツツ!!」

1【メタルグレイモン】LV3(4S)BP11000

「……成る程、女はデジタルスピリットの使い手だったか」

地中から地響きが鳴り、そこから体の半分がサイボーグと化した機竜型の完全体スピリット、メタルグレイモンが咆哮を張り上げながら飛び出して来た。その効果はアスラ達も知つての通り、単純且つ強力。

「召喚時効果!!……BP12000以下のスピリット1体を破壊!!」

「……タイタンフォームは効果では破壊されない」

「だったらそれ以外を破壊するまでよ!!……ビルド ラビットタンクフォームを破壊!!」

メタルグレイモンが登場するなり胸部のハッチを開き、そこからミサイルを発射。そのミサイルは一直線の弾道を描き、青年のラビットタンクフォームを破壊した。

これで一気にアスラとエールが優勢……
 になつたかに見えたが……

「その程度でオレに勝てると思つたか?……召喚時効果発揮後のバースト、仮面ライ

ダークウガ ライジングマイティを發揮!!……シンボル1つ以下のスピリット1体を破壊する。散れ、メタルグレイモン!!」

「っ!!……そんな!?!」

「さらに場にクウガがいればカードを2枚ドロウする……クウガ タイタンフォームがいるため、カードをドロウ……」

青年が伏せていたバーストカードが勢い良く反転すると共にメタルグレイモンの足場から火柱が立ち上り、それをあつさりと焼き尽くしてしまう。

「そしてその後召喚する……来い、ライジングマイティ!!」

ー【仮面ライダーダークウガ ライジングマイティ「2」】LV1（1）BP6000

青年の場が赤く輝いたかと思えば、そこには新たなるクウガ、赤いボディを持つライジングマイティが現れていた。

「……せっかく召喚したのに……このままじゃ……」

究極体が扱えないエール。完全体のメタルグレイモンが通じないのならば事実上負けたに等しい。

内心では既に敗北を覚悟していた……………

だが、

それをアスラは許さない……………

「まだだ、まだだエールウウウー!!!」

「アスラ!」

「言つたら、この借りは期待してくれつてなアアアー!!!……………オレはマジック、クールオ
ブリストを使用!!……………トラッシュからスピリット1枚を持ち主の手札に戻す!!……………
トラッシュにあるエールのメタルグレイモンをエールの手札に戻す!!」

「!!」

アスラはこの程度の逆境で根を上げたりはしない。手札からマジックを使用し、エールの手札にメタルグレイモンのカードを握らせた。

エールは気づいた。今の自分は1人では無い。一緒に旅をして来たアスラが目の前

にいる。コモンでチビでうるさいけど、心の底から信用している彼がいる……………
こんなに心強いパートナーは他にはいない……………

「もつかいいけエエエー!!!」

「わかつてるわよ!!私エックス、この世で最も気高い一族!!だからこのバトルは私が終わらせてあげるわッ!!…………ドラゴンヘッドとシャムシーザー1体を消滅させ、メタルグレイモンをLV2で再召喚!!」

ー【メタルグレイモン】LV2(3)BP9000

アスラのドラゴンヘッドとシャムシーザーの2体が消滅したかと思えば、エールの心から出た強い叫びと共に再びメタルグレイモンが咆哮を張り上げながら地中から飛び出して来た。

「召喚時効果でクウガ ライジングマイティを破壊!!」

「!!」

再びメタルグレイモンは胸部のハッチを開いてミサイルを発射。ライジンググマイティを爆破に追い込んだ。これで青年の場に残ったのは疲労しているクウガ タイタンフォームとW サイクロンジョーカーのみ……

対するアスラとエールの場合は龍騎と2体のシャムシーザー……そしてメタルグレイモンの4体。青年の残りライフは4……ここにきてようやくアスラ達が完全な優勢に立って見せた。

「アタックステップ!!……行きなさい、メタルグレイモンツ!!……アタック時効果でB P10000以下のW サイクロンジョーカーを破壊して回復!!」

「!!」

ー「メタルグレイモン」（疲労??回復）

メタルグレイモンが左手のアームを伸ばし、青年のW サイクロンジョーカーを貫いた。W サイクロンジョーカーは堪らず爆発してしまう。

ただ、ここまで追い詰められていると言うのに、青年はその鉄仮面とも言える冷徹な表情を崩さない。

その理由が彼の手札にはあつて……

「そのアタックはライフで受ける」

〈ライフ4??3〉 謎の青年

メタルグレイモンが左手のアームを伸ばし、今度は青年のライフ1つを貫いて見せた。

「アスラ!!アンタのシヤムシーザー借りるわよ!!」

「ああ!!どんどん使え!!」

「シヤムシーザー1体でアタックッッ!!」

エールがアスラのシヤムシーザーでアタックを仕掛ける。地上を這つて進むシヤムシーザーが向かう先は当然青年の残り3つのライフ。

だが、彼はここだと言わんばかりに手札のカードを引き抜き、反撃に転じ……

「フラッシュ!!仮面ライダー ルナトリガーのチェンジを發揮!!対象はクウガ タイ
タンフォーム!!」

ー!!

「この効果により、ライダースピリット、龍騎を疲労!!……追加効果でトラッシュにコア
1つを追加!!」

「なにつ?」

ー【仮面ライダー龍騎】(回復??疲労)

弾道の読めない黄色い弾丸がアスラの龍騎を襲う。龍騎はさらに撃ち抜かれ、膝を付
いて疲労状態へと陥ってしまった。

「さらにその後、対象となったスピリットと回復状態に入れ替える!!……タイタン
フォームと入れ替わり、来い!!…W ルナトリガー!!」

ー【仮面ライダーW】LV1(1)BP3000

……ルナ、トリガー!!

クウガ タイタンフォームがデジタル粒子に変換され、青年の手札に戻り、代わりに銃を武器に持つ右半身が黄色、左半身が青色のライダースピリット、W ルナトリガーが現れた。

「チェンジの効果でプロッカーが!?!……アスラさん、エールさん!!」

「大丈夫だローザ」

「へ?」

「この程度の壁、アスラが越えられないわけがない……!!」

チェンジの効果を巧みに使い、このターンを凌ぎ切る算段だと理解したローザは思わずアスラ達の名を叫んでしまうが、ロンは真逆に冷静でいた……

それは昔からアスラと言う人間を知っている彼だからこそで……

「アスラアアアー!!!期待してんだからねツツ!!」

エールが腹の底からアスラの名を叫ぶ。

「ああ!!任せろオオオー!!」

それに応えるようにアスラも腹の底で叫ぶと、彼は最後の手札を引き抜いて、それを使用する……………

「フラッシュユマジック、ストライクベントツツ!!……………BP8000以下のスピリット1体を破壊し、カードを1枚ドロウする!!……………不足コストはメタルグレイモンのLVを下げて確保!!……………龍騎、ルナトリガーを破壊だツツ!!」

「なにつ?」

この土壇場でようやく青年の冷徹な鉄仮面に綻びが生じる。

龍騎は左手にある龍を象ったバイザーにストライクベントのアドベントカードを装填。

……『ストライクベント!!』

と、音声が鳴ると、龍騎の右手に赤き龍の頭部が装着される。龍騎はさらにそこから炎の塊を発射し、青年の場にいたW ルナトリガーを焼き尽くした。

「シャムシーザーのアタックは継続中よ!!」

「くっ!!……ライフで受ける!!」

〈ライフ3??2〉 謎の青年

結果的にブロックされなかったシャムシーザーの渾身の体当たりが青年のライフ1つを砕いた。

「……凄い、アスラさん……あのプライドのお高いエールさんがあそこまで誰かを信じ切るなんて……」

この光景を目の当たりにして、ローザは驚愕していた。それは幼い頃からエールを知っている存在だからこそ口に出る事。育てられ方もあって、あの誰に対してもどう

しても高飛車な態度を取ってしまうエールが誰かを根拠も無しに信用しているなど、自分からしたらとてもではないが信じがたかった。

「アスラはそう言うヤツだ。昔から」

「!?!」

「アイツと一緒にいるとどうしてもバカが飛び火して、最後までバトルを諦めたく無いと思ってしまう……あの女も影響されたんだろ」

アスラの心情。「諦めないのがオレのバトスピ」

エールもそんなアスラに似てきたと言えば怒られそうだが、確かに彼女にとって良い意味の影響を与えられていたのは間違いなくて……

「このバトル、アスラ達の勝ちだ!!」

ロンはアスラとエールの勝利を確信した。

「つしやあ!!エールツツ!!……後は2体目のシャムシーザーとメタルグレイモンのア

タックで勝てるツ!!」

「ええ、先ずはシャムシーザーでアタックよ!!」

エールの指示により、シャムシーザーが地上を這って移動する。目指す場所は当然青年の残り2つのライフ。

オレはアイツらに負けるのか??

完璧だった場を崩され、一気に劣勢に立つてしまった青年はこのバトルでの敗北が頭を過っていた。

だが、その直後。

その脳裏にはまた別のモノも映し出された……………

それは彼にとって掛け替えの無い、大事な思い出……………

「『……………ふふ……………じゃあ、私に何かあつたら必ず助けてね…トウエンティ!!』

色鮮やかな花園で自分に微笑んで語りかけて来てくれたのは自分が最も愛し、最も信頼する者。

そうだ。オレはあの子の……………

『カナ』のために……………

『カナ』のために……………

負けてはダメなんだアアアアアアアアアアアア

!!!!!!!

「!!」

これまでの冷徹だった青年からは想像もつかないような怒号が発せられる。その鬼気迫る様子は明らかに異常そのモノ。アスラとエールはこれまでにない程のプレッシャーを感じた。

そして青年はこのアタックを防ぐべく、手札のカードを1枚引き抜いて……………

「フラッシュマジック、救世神撃波!!カードを1枚ドロウし、バーストを伏せる!!」

「つ!!ここにきてバーストカードを伏せやがった!？」

激昂する青年は咄嗟に引き抜いたマジックで、咄嗟にその効果でドロートしたカードをバーストゾーンに伏せた。

「そのアタックはライフで受ける!!」

〈ライフ2??1〉 謎の青年

2体目のシャムシーザーの体当たりが青年のライフをさらに破壊し、遂に残り1つまで追い込む事に成功するが……………

青年の伏せたバーストが勢い良く反転して……………

「ライフ減少により、バースト発動!!……………アルティメットウォールツ!!……………その効果によりこのアタックステップを終了させる!!」

「なにつ!？」

「ウソ、ここまで来てまだあんなカード握ってるなんて……………」

青年の発動させたバースト効果により、アスラとエールの場に立ち込める猛吹雪。シヤムシーザーはおろか、龍騎やメタルグレイモンでさえも身動きが取れない。

「くっ……決め切れなかった………ターンエンドよ」

「大丈夫だ!!ここバッチリ凌いで次のターンで絶対勝つぞ!!」

「っ……ええ、そうね!!任せなさい!!」

アスラ手札：1

エール手札：3

場：【シヤムシーザー】LV1

【シヤムシーザー】LV1

【仮面ライダー龍騎】LV1

【メタルグレイモン】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

結果的にメタルグレイモンをブロッカーとして残す形でエンドとなったアスラとエール。次はあの青年のターン。ライダースピリットを集める意外に何か別の使命が

あるのか、先程までと違って余裕を失った彼はこのターンからさらなる攻撃をアスラ達に仕掛けてくるのは明白であって…………

「ターン07」謎の青年

「メインステップ…………マジック、双翼乱舞。デッキから2枚のカードをドロウし、仮面ライダービルド ラビットタンクフォームを召喚!!…………効果を発揮し、オレは新たなライダースピリットを手札に加える」

ー【仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム】LV2（4S）BP6000

青年はこのバトルで2体目となる鋼のムーンサルト、ラビットタンクを召喚し、今一度その効果で新たなるライダースピリットをデッキから引き込んだ。

「アタックステップ!!…………ラビットタンクでアタックを行う!!」

攻撃を仕掛ける青年。さらにこのフラッシュユタイミングで手札に加えたライダーズ

ピリットの効果を発揮させて……………

「フラッシュチェンジ!!……………対象はラビットタンク!!」

ー!!

ラビットタンクが黒くて禍々しい何かをベルトに装着する。そうした途端。ラビットタンクは黒い靄に身が包み込まれていき……………

新たな進化を遂げる……………

……………ヤベーイ!!

そんな音声が鳴り響いた。それと同時に黒い靄が晴れて行く……………

そこにいたのは赤と青のビルドではなく、これでもかと黒く変色した真つ黒なビルド

……………

その名は……………

「仮面ライダービルド ラビットタンクハザードフォーム!!」

ー【仮面ライダービルド ラビットタンクハザードフォーム】LV3（4S）BP1
2000

「な、何アレ……アレがライダースピリットだって言うの??」

「なあに!!色が黒くなっただけだろ!!」

その見た目の異常さに恐怖を覚えたエール。アスラは同様の気配を感じつつも、エールを心配させまいと無理矢理気丈に振る舞った。

だが、2人の予想は残念な事に的中する……………

このライダースピリットは見た目通り……………ヤバイ。

「チェンジ効果!!…BP14000以下のスピリットを全滅させるツツ!!」

「なに!?!……………うああ!?!」

ハザードフォームから放たれるドス黒いオーラがアスラとエールの場にいるスピ

リット、シヤムシーザー2体、龍騎、メタルグレイモンはなす術なく吹き飛ばされてしま
まう。

そして悲劇はまだまだ続き……………

「え??:……………うあああ?!?」

吹き飛ばされたメタルグレイモンはエールの近場で力尽き、大爆発を起こしてしまつた。エールの悲鳴がアスラの耳を貫き、彼は思わずその方へと顔を向けるが……………

そこで目に移したのはボロボロの状態で転がっているエールだった……………

「エールさん?!」

「エール……………テンメエえええ!!」

青年に怒りを爆発させるアスラ。ローザもいても立つてもいられなくなって、思わずエールのそばに駆け寄った……………

「ハザードフォームのアタックは継続中だ!!……………クタバレッツ!!」

「ツツ!!……ぐあああああ!!」

へライフ2??1へ アスラ

知らぬ間にアスラの目の前に立っていたハザードフォームが全力でライフバリアごとアスラをぶん殴る。アスラは余りの威力にBパッドごと吹き飛ばされてしまい、そのままレンガでできたダンジョンの壁に激突。

その際に壁は崩れ、アスラはこの部屋とは別の部屋まで飛ばされてしまった。

「アスラー!!!」

ロンがアスラの名を叫ぶ。本当ならば立ち上がってアスラと共に戦いたいがどうしても手出しできないのが歯痒かった……………

……

「……………ぐつ……………あ、あのヤロー……………今更本気出して来やがった……………」

崩れ去った瓦礫の山。そのすぐ横で倒れているアスラはそう呟いた。身体はもうボロボロ。全身が逃げろと悲鳴を上げている。だがそれでもアスラは……………

「早くしねーとエールが……………」

倒れた仲間。エールの事を考えていた。早くしないとあの青年にやられるのは時間の問題だったからだ。こんなところでのんびりとしてられない。

……………そんな時だ。

アスラのすぐそばで聴き慣れた鳴き声と足音が聞こえて来たのは……………

「むええええええええええ!!」??ツツテケテー!

謎のオレンジ小動物、ムエがアスラの元までツツテケテーと走り寄って来た。

「……………ムエ……………!?!」

ムエはそのまま瓦礫の山を「むええええええええええ!!」と叫びながら飛び越え、アスラの元まで辿り着いたかと思えば、そのまま通り過ぎてしまう。

アスラがその方へと首を傾けると……………

「むえっ……………むえっ!」

そこにはある一枚のカードが落ちていた。

赤いカードだ。ムエはそのカードをアスラに示すかのように口に啞えた。

ただ、その赤いカードの名前は……………

アスラもよく知っていたあのカードだ……………

「……………これって……………ひよつとして……………」

このカードがなんだって良い。構やしない。今はこれに懸けるしかないのだから

……………

そう思うと、アスラはムエが啞えているそのカードに手を伸ばし、触れると、そのカードは最初に龍騎を手にした時同様、Bパッド上のデッキに溶け込んで行った……………

ー…

「エールさん!!エールさん!!……目を開けてください!!」

場面は戻り、コラボダンジョンの宝物庫。ローザは気を失ったエールに必死に声を掛けていた。

その時に彼女は約1年前の事を思い出して……………

ー『凄いじゃないかローザ!!来年から青のカラーリーダーに抜擢だって!』

ー『最も気高きエックスの者でもその若さで成し遂げる者は少ないぞ!!大したものだ!!』

ー『オマエはアルファ家の誇りだ!!』

それは15にして青のカラーリーダーとなった自分を称賛し、讃える声。正直言っ

嬉しかった。こんなに誰かが自分に期待してくれているのだから。

そして当時、それと同時に聞こえて来たのは……………

―『それに比べてローザと同じ歳のオメガ家の長女は究極体も思うように操れないみたいだな。毎日特訓しているらしい』

―『特訓?? エックスが!?! ……ふふ、醜い事この上無いな』

―『フハハハ!! まさかエックスの者にそんな落ちこぼれが生まれるなんてな!! ……やはり真なるエックスは我々アルファ家だ!!』

この時、ローザは何も言わなかった……………

見た事があるからだ。エールが毎日特訓していたその姿を……………

泥だらけになって声を枯らして、息を切らして……………それでも懸命に究極体を呼び出そうとするその姿を……………

これが醜い?!

そんな訳あるものか……………

「もし、私がエールさんの立場だったらとづくに諦めてたかもしれません」

この世で最も気高きエックスの人間達は元々生まれ持った違い稀なるバトルセンスと引き継がれて来た強力なカードがあるため、努力を全くしない。

それは弱き者がする事であると常に否定している…………

だがエールはそれを知っていながらもただ目標のために懸命にそのエックスが恥ずべき行為を繰り返して来た…………

「私は努力ができるアナタを尊敬してます!!だから目を開けてください!!目を開けてエックスの人達に努力は本当は恥ずべき行為では無いと証明してあげてください!!」

ローザの必死な呼びかけにもエールは応じず、その瞳を閉じたままだった。脈はあるし、呼吸もしているため、死んではいけない。おそらくは気を失っているだけ…………

それに気づいたローザは僅かばかり安堵した。

だが、その目の前にはローザごとエールを殺さんとするビルド ハザードフォームが既に存在していて…………

「!!」

らいつこうとする!?!…何故諦めずに立ちほだかつて来る!?!」

青年はアスラの異常なまでの執念に僅かな恐怖心を抱いてしまい、切羽詰まった様子で思わず問いかける。

「オレは……生まれつきソウルコアが使えない人間だ……!」

「そ、ソウルコアが使えない!?!……そんな方が!?!」

「それでもオレはこの世界で一番強いカードバトラー……頂点王になって見せる!!……そのためにオレは今を生きている!!」

アスラは堂々と胸を張って青年の質問に答えた。そのアスラの言葉に最も驚いたのはすぐそばにいたローザだ。

それもそのはずであろう。ソウルコアが使えない人間など前代未聞だ。今まで見たこともなければ聞いた事も無い。

到底信じられない話だが、ローザはそれが直ぐに嘘ではない事を悟る。アスラのBパッドからソウルコアが消滅したのだ。おそらくエールが気を失って強制リタイアとなってしまう事が理由であろう。

「…………ソウルコアが…………じゃあ本当にソウルコア無しでこの人、本気で頂点王を指して…………!!」

ローザはアスラがソウルコアを本当に使えないと確信した途端、頭の中に過つて来た。今まで彼がどれだけの苦勞を重ねて来たか、どれだけ周囲の人間から蔑まれて来たかを…………

エックスの人間でありながら落ちこぼれで、家族からも蔑まれて来たエール・オメガを知る彼女だからこそアスラの置かれている立場をより深く、且つ瞬時にそれを理解してしまい…………

「ソウルコアが無い分際で頂点王だ?!…………大事なモノを失ったのでは無く、大事なモノを初めから失っているオマエが根拠の無いつまらん戯言を口にするなツツ!!」

「うるせエエエー!!!…………オレは誰に何を言われようと、必ず頂点王になるツツ!!」

「不可能だ!!…今からオレはそこに転がっている女諸共オマエをここで抹殺する!!」

「そんな事はさせねえエエエ!!!」

この世で最も身分が低いとされるコモンの分際で……
ソウルコアが使えない存在の癖に……

複数のライダースピリットを操る化け物とも呼べる青年に啖呵を切るアスラ。今一度ソウルコアが無いBパッドを立てて自分のターンを行う……

「ターン08」アスラ

「メインステップウウー!!……オレはマジック、フェイタルドローを使用!!……ライフが2以下の時、カードを3枚ドロー!!」

ここに来て手札増強カードを引き当てたアスラ。その効果で0枚だった手札を一気に3枚まで回復させた。

「さらにオレは、ドラゴンヘッドを2体をLV2と3で連続召喚!!」

┆【ドラゴンヘッド】LV3 (7) BP6000

┆【ドラゴンヘッド】LV2 (2) BP2000

アスラの場にこのバトルで2、3体目となるドラゴンヘッドが現れた。

「さらにバーストをセットしてアタックステップツ!!……ドラゴンヘッド、いけえ!!」

気迫に満ち溢れているアスラはドラゴンヘッドでアタックを仕掛ける。ドラゴンヘッド1体が宙を飛翔する。青年の残りライフは1であるため、いずれかのドラゴンヘッドのアタックが通ればアスラの勝ちだが……

「フラッシュマジック……セイントフレイムツ!!」

「!!」

「不足コストはハザードフォームのLVを下げて確保!!……効果によりBP100000まで敵のスピリットを破壊する!!……ドラゴンヘッド2体を射抜け!!」

突如として雨のように降り注ぐ聖なる炎を宿した矢。それらはアスラのドラゴンヘッドを射抜き、撃墜させた。

「そんな、スピリットが……」

「くっ……アスラ!!」

ローザやロンもアスラの圧倒的に追い詰められた事を理解する。アスラの手札は0枚で後は場に残ったミラーワールドとバーストカードだけだ……………

「……………なにやってんのよ……………バカスラ……………!!」

「っ!!……エールさん!?!……よかった、意識が!!」

「エール!!」

その時、エールの意識が微かに回復した。エールは今でも朦朧とする中で懸命にアスラに声を掛けて……………

「あんなヤツ早く倒しちやいなさいよ……………アンタはこのエックスである私が唯一認めあげたコモンなんだからね……………アスラ!!」

「っ!!……………ああ、任せろっ!!」

エールはアスラがここからさらに逆転して見せると信じて止まない。アスラはそんな彼女の気持ちをしっかりと受け止めて……………

「オマエに何ができる……………生まれた時からソウルコアが使えないゴミ以下が!!」

青年がアスラに言った。オマエでは決してこの世界で勝ち上がる事はできないと言
う意味を込めて……………

だが、アスラはそんな青年の言葉を一蹴するように鋭い眼光で彼を睨みつける。

オレにソウルコアはねえ……………だけどオレはオマエには無い、友が、仲間が……………
目標があるツ!!

今……………

アスラの最後の一手が繰り出される……………

「スピリットの破壊後によりバースト発動ツツ!!」

ー!!

ドラゴンヘッドの破壊後により、アスラが伏せていたバーストが勢い良く反転して見せた。

そしてその瞬間に姿を見せたのは全長6メートルはあるであろう巨大な赤き龍………

「馬鹿な………コイツは………」

爆音の咆哮を張り上げながら消滅して行く赤き龍。そして、その直後にアスラの場に現れたスピリットは他でも無い………

「第二の仮面ライダー龍騎をバースト召喚ツツ!!」

ー【仮面ライダー龍騎「2」】LV2(3)BP7000

赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎……その第二のである。外見は最初の龍騎とは全く変わらないが、唯一の差異は最初からソードベントによる柳葉型の剣を所持している所だ。

「アレがアスラのライダースピリット龍騎の……第二の姿……」

その明らかにパワーアップを遂げた龍騎を見て、ロンは思わず口を開いた。

「だが、その程度のBPではオレのハザードフォームは超えられない!!」

青年の言う通り、アスラの第二の龍騎と彼のビルド ハザードフォームには大きなBPの差がある。普通では超えられない……

ただし、これはあのソウルコアの無いイレギュラーな存在であるアスラを選んだライダースピリット龍騎の第二の姿……

普通な訳がない……

「第二の龍騎、バースト効果ツツ!!」

「!!」

「相手の最もBPの低いスピリット1体を破壊する!!……今のオマエの場はハザードフォーム1体だけだアアアア!!」

「なにっ!?!」

第二の龍騎は登場するなりその手に握られた剣に燃え滾る真っ赤な炎を蓄積
……

「……バーニングセイバアアアア!!」

「!!」

そしてその剣を横一線に振るう龍騎。剣からは炎の斬撃が飛び交い、それは瞬く間に青年のハザードフォームを斬り裂き、焼き尽くして行った……………

「トドメだッ!!……………第二の龍騎でアタック!!」

〈ライフ1??0〉謎の青年

刹那。

アスラやその仲間や友の想い全てを乗せた、第二の龍騎の太刀筋は青年の最後のライフを斬り裂いた……………

9コア「青カラー戦!!VSズドモン!!」

オレは頂点王になるツツ!!!

だからゴミだろうがそれ以下だろうが!!!

先ずはオマエを超える男になるアアアツ!!!

「……っ!!!」

た。

対する多大なバトルダメージを被った青年は打ちどころが悪かったのか、その場で気を失い、倒れていた。

「すごいですわアスラさん……………本当にソウルコアが使えない身で、あのライダースピリットのデッキを……………倒しました!!」

「……………アスラ……………また、強くなったみたいだな……………やっぱり、オマエを倒せるのはこのオレだけだ……………!!」

アスラの勝利に歓喜するローザとロン。

ロンは最初からアスラが勝利すると信じて止まなかったが、ローザは違う。

正直『敵うわけが無い』と思った……………

この世界において最も重要なソウルコアが使えない少年と、ライダースピリットを少なくとも3種類も所有できる文字通りの化物。

どちらが強いかは幼子でもわかるほどに単純。

しかし、そんなソウルコアが使えない少年アスラはそれでも揺るがない気迫とデッキと仲間を信じる力で勝利して見せた。そんな素晴らしい光景に、ローザは内心で驚愕と

感動でいっぱいになっていて……………

「このヤロオ何がゴミ以下だ!!なめやがってコンクショール!!」

「アンタ、もう気絶した相手に何言ってるのよ……うっさいわね」

何とか意識を取り戻したエールがアスラに言った。今のアスラはどうやら一種の興奮状態に陥ってるようだ。あれだけのバトルを行なったのだから無理もない。

「エールさん、もう動いて大丈夫なんですか??」

「ええ、もういいわ……………そ、その、あ、ありがとう……………ツツ!」

「っ!!……………ええ!!どういたしまして!!」

エールは少し照れながらも、気を失っていた自分に必死に呼びかけてくれたローザに礼を告げた。

「エールツ!!無事だったんだな!!ホント良かったぜ!」

「フン……………別にコモンに心配される覚えはないわ!……………って言うかアンタが一番ポロボ

ロじゃない!!」

「大丈夫だって!!オレは頂点王になるんだ!!このくらいじゃへこたれねエエー!!!」

「……………ホント、体力お化けよねアンタ…呆れるわ…(だ、大丈夫そうね…良かったく
!」)

アスラもエールの意識が戻り、無事だった事を大いに喜んで見せた。そんなエールもいつものように肩にかかった髪をフアサツと靡かせながら偉そうにしているが、内心ではアスラの無事に安心している。

因みに、今回ばかりは体力バカのアスラも限界である。割と虚勢を張っているし、もう一度あのバトルをやれと言われたら多分死ぬ。

そんな彼らは周囲に溢れている金銀財宝などに目もくれず、ただひたすらに談笑を繰り返していた。

……………と、そんな時だ……………

「まさか……………あのトウエンティが負けるなんてね……………」

—!!!

かアアアー!?!」

細身の男の言い分にまるで意味がわからないエールだったが、その会話を遮るようにアスラが絡んで来た。細身の男性は「やれやれ」と言った表情でアスラの方へと首と視線を向けて……………

「薄汚いコモンが……………オマエはいい加減口を動かすだけで罪だと言う事を自覚なさい」

「んだとコラアアアアアア!!……………コモンとか薄汚いとか関係あるかアアアアー!!……………つか薄汚くねえ!!」

「……………いや、アンタ今ボロボロで汚いわよ」

エールとは全く正反対の態度でアスラに接する男性。まるで本物の汚物を見ているかのように見下した態度を取った。アスラはそんな彼に対して条件反射的に全力でかかずらった。

「いずれオマエとそこのもう一人のコモンの持つライダースピリットもいただきます

………精々首を洗って待つてゐる事です………!!」
「!!」

男はそう言うと、「テレポート」というものなのか、空気に溶け込んだかのようにコラボダンジョン内から気絶した青年共々消え去った。

こうして、アスラ達の初めてのコラボダンジョンの搜索は意外と呆気なく、それでいて多くの謎を残しつつ、最後を迎えた………

「オイ、聞いたかアスラ………あのちよび髭シルクハット………オレ達のライダースピリットを奪うんだと………」

ロンがアスラに言った………

「上等だぜ、何回でもかかって来い!!全部返り討ちにしてやるッ!!」

アスラの力強い声が金銀財宝のあるこの一室に木霊した………

「ホントにもう行くのかよ、ロン」

「なんだアスラ、寂しいのか？」

「違えよ!!…やっと追いついたのにまた差をつけられるのがイヤなだけだ!!」

「オマエはまだローザに勝ってないから元々追いついてなかっただろ……」

「ぐっ!!?……痛いところを!!」

「事実だ」

あれから約3日が経過した。とくにダメージが酷かったアスラとロンは一時の療養を経て、ようやく完璧の状態まで回復していた。

多くの河が流れ、水の音が絶えない町、ナミラ町。その丁度道路との境目でアスラとロンは2人で語り合っていた。因みに、その少し離れたところではそれを見届けるエールもムエの姿も確認できる。

「オマエには2つも借りができちまったな、アスラ」

「んだよ、改めやがって……何度とも言わせんな!!オレとオマエは親友でライバル!!どつ

ちが先に最強になるか勝負するんだろ!? …じゃあどつちが欠けてもダメだろうが!!」

「フン… いつちよまえみたいな事を……………アスラのくせに……」

「んだよ、ロンのくせに……」

「フツ……」

「……………へへ」

そんな軽い言い合いの中、2人は僅かばかりに口角を上げていた。それは彼らが親友且つライバルである何よりの証拠であると言えて……………

「オレは先に3番目の『白のカラーリーダー』がいる町へ行く……………じゃあなアスラ……………アイツらに龍騎を盗られるなよ。じゃねえと、つまらないからな」

「そりゃこつちのセリフだアアア!!……………おう!!直ぐに追いついてやるぜ!!……………首洗つて待つてな!!」

「それはあのちよび髭シルクハットのセリフだろ」

アスラは言われた言葉は使つちやうタイプ。

その言葉を最後に、ロンはアスラに背を向けてナミラ町を去っていく。久しぶりのラ

イバルとの再会にはあまり言葉が足りない気もするが、彼らはそれで良い、

何せ、お互いがお互いの目標を掲げ続けている事を再確認できたのだから。再開した時にやる事なんて、これだけで十分だ。

「ん、もういいのアスラ?」

「むえ〜」??じゃあなロン〜

「ああいいさ!!…アイツとはいっか必ず決着をつけるし!!」

「ふーん…アンタもアンタなりに色々あるのね」

コラボダンジョンでの彼らのやり取りや、アスラの言葉で、エールはアスラもアスラなりの葛藤がある事を何となく理解した。

「つしやあ!!…オレ達も行くぞエール!!」

…ローザの青のカラーカードを取りに!!

そうアスラは意気込み、エールとムエと共にローザの待つナミラ町コロシウムへと足

を運んで行った……………

「お待ちしてましたわ!!アスラさん!!エールさん!!……………コラボダンジョンの搜索の際は
お世話になりました!」

「いいっていいって〜お互い様だぜ!」

青い塗装で覆い尽くされているナミラ町コロシウム。アスラとエールはローザとは
コラボダンジョン搜索以来3日ぶりの再会であった。

と言うのも、ローザはあのコラボダンジョン搜索の報告書まとめで手がいっぱい
ぱいだったため、ここ最近全くカラーリーダーとしての本業を行えていなかったから
もある。

「そう言えばどうだったのローザ。あの連中の事何かわかった?」

エールがコラボダンジョンで出会った「トウエンティ」と呼ばれる青年や、あのシル

クハットの男についてローザに聞いた。

「いえ、今のところはなんとも、ライダースピリットを所持している方々に注意を仰いがないといけなくなつたくらいですかね」

「……………そう……………」

エールはあのシルクハットの男の言葉が少々気掛かりだった。自分に対してのあの口振りは自分を知っていたというよりは『オメガ家』を知っていたと言つた感じだからである。

あまり深く考えたくは無いが、彼女としてはどうしてもその点が腑に落ちなかった。

「まあまあ、そんな堅い話はいいだろ?…………カラー戦、頼むぜローザ!!オレは早くロンのヤローに追いつきてーんだ!!」

「はい!!当然わたくし私もそのつもりですわ!!…………極力、ぶっ潰して差し上げます!!」

「えええええ!!?…急に口汚ねエエエー!!?」

アスラがBパッドを構えながら言った。ローザも明らかにエックスらしからぬ汚い

言動から、やる気は十分のようだ。

エールとその頭の上に乗っていたムエは少し距離を置き、対戦者2人はお互いを睨み合いながらBパッド同士を向け合った……………

……………そして、

……………ゲートオープン、界放!!

いつもの掛け声と共に颯爽とバトルスピリッツが幕を開ける。アスラにとって大事なカラー戦、その2試合目だ。

先行はローザだ。そのターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン01」ローザ

「メインステップですわ!!……………バーストをセットしてそのターンをエンドとします!!」

手札：4

バースト：【有】

「あれ?...そんなだけ?」

「はい!!そんなだけですわ!!」

国の代表であるカラーリーダーとしては随分と消極的にそのターンをエンドとしたローザ。

次は挑戦者であるアスラのターンだ。バースト以外は何も無いローザの場を攻めるべくターンシークエンスを進行させる。

「ターン02」アスラ

「メインステップ!!...飛ばすぜ、オレはドラゴンヘッドとシャムシーザーをLV2で召喚!!」

1 [ドラゴンヘッド] LV2 (2) BP2000

1 [シャムシーザー] LV2 (3) BP3000

アスラの場合にいつもの速攻部隊、ドラゴンの頭部と翼しかない黒々としたスピリット、ドラゴンヘッドと、赤の身体に加え、背中に数本のトゲを生やしたトカゲ型のスピリット、シヤムシーザーが現れる。

「行くぜ速攻!!……先ずはシヤムシーザーでアタック!!」

アスラが勢い良くシヤムシーザーでアタック宣言を行う。シヤムシーザーはそれに従い、地を這って進んでいく。狙うは当然ローザのライフだ………

「ふふ……ライフで受けますわ!!」

〈ライフ5??4〉ローザ

堂々とした様子でそのアタックを受けるローザ。そのライフ1つはシヤムシーザーの体当たりにより碎け散った………

だが、最初のターンにスピリットを召喚しなかった事を含め、これはローザの罠。彼女は事前に伏せていたバーストカードを発動させる………

「かかりましたわねアスラさん!!……ライフ減少によりバースト発動ですわ!!」
「!!」

ローザのバーストカードが勢い良く反転する。

……そのカードは……

「No. 26 キャピタルキャピタル!!……効果によりノーコスト配置!!」

ー【No. 26 キャピタルキャピタル】LV1 (1S)

「っ!?!」

ローザのバースト発動と共に背後へと飛来して来たのは空に浮かぶ島。ネクサスカードであるキャピタルキャピタルだ。その効果はネクサスの扱いに長けている青属性らしいものであり……

「おお、デツケエエ!! そしてカツケエエー!!」

「むええええええええええ!!」?? 乗りたい!!

「キャピタルキャピタル………つて、まずいんじや………」

キャピタルキャピタルに興奮するアスラとムエだが、ただ一人エールはこのキャピタルキャピタルがアスラにとってかなり厄介な存在であるネクサスカードであると察した。

……その理由は………

「ふふ、アスラさくん……キャピタルキャピタルはソウルコアが置かれている時、相手はソウルコアが置かれていないスピリットでアタックする際にリザーブからコア2つを支払わないといけないんですよ」

「?!」

ローザが悪戯な笑顔を浮かべながらアスラに言った。

アスラはあまり言っている事が理解できていないようであり………

「ん??……え〜つと……つまりソウルコアが置かれてないスピリットのアタックではコアを払わないといけない?」

「はい!!その通りですわ!!」

「ああ!!なんだなんだ!!そう言うことか!!……ソウルコア置けばいいんだな!!……置けば………って、オレソウルコアねエエー!?!」

「ふふ、リアクションが面白いですわ〜!」

そう。普通ならばキャピタルキャピタルの効果に引つかかるのは大抵のバトラーが初見のみ。

だが、アスラにはソウルコアが無い。

つまり、この後もアタックする際にコストを支払わなければいけない事になる。この序盤でそれがどれ程大きいデメリットかは知れたことでは無い。

「ぐぐ……まあ、無いモノはしようがね……普通のコア貯めてゆつくり攻めるか………ターンエンド!!」

手札：3

場：【ドラゴンヘッド】LV2

【シャムシーザー】 L V 2

バースト：【無】

安直な考えに至り、そのターンをエンドとしてしまうアスラ。

だが、エックスであり、その中のアルファ家であるローザは悠長に待つてはくれない。アスラが逃したこの1ターンで大きく勝負に出て……

「ターン03」ローザ

「メインステップ!!……もう一度バーストを伏せてランマー・ゴレムを召喚しますわ!!」

ー【ランマー・ゴレム】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

バーストカードと共にバネで飛び跳ねている小さなゴレムがローザの場に現れる。そしてローザは立って続けに手札からカードを引き抜いて……

「さらに私は青のデジタルスピリット、ゴマモンを召喚しますわ!!」

ー【ゴマモン】LV2(3)BP5000

「っ!!……ローザもデジタルスピリット!」

「はい!!召喚時効果でカードをオープンして、その中の対象カードを加えます!」

白いアザラシのような形をした成長期のスピリット、ゴマモンがローザの場へと現れた。その効果により、ローザは新たに「イッカクモン」[2]のカードを手札に加えた。

「行きますわ!!アタックステップ!!…その開始時、ゴマモンの持つ【進化・青】を発揮!!ですわ!!」

ー!!

ローザの宣言と共にゴマモンが青白く光輝いていき、姿形を変容させていく

……

「イツカクモンを召喚です!!」

ー【イツカクモン】〔2〕 L V 2 (3) B P 7 0 0 0

やがて青白い光を弾き飛ばすと、その中から額に巨大な一角を生やす白き巨獣、イツカクモンが姿を現した。

「まだまだ行きますわツツ!!…イツカクモンでアタック!!その効果【超進化・青】を發揮させてイツカクモンをさらに完全体のズドモンに進化させますツツ!!」

ー【ズドモン】 L V 3 (3) B P 1 4 0 0 0

イツカクモンがゴマモン同様の光を纏って進化して行く。そしてそれを弾き飛ばし、新たに現れたのは頑丈な甲羅に加え、手に巨大な金槌を所持している青の完全体スピリット、ズドモンが現れた。

「おお!!青の完全体カッケエエー!!」

ローザのデッキのエースであろう完全体のスピリットが場に現れ、目を輝かせて興奮するアスラ。ローザはそんなアスラに対して「可愛いですわ」と呟きながらズドモンを始動させる……

「アタックステップは続行です!!……やっちゃつてくださいズドモン!!」

「!!」

「その効果、「大粉碎」を發揮させますわ!!……相手のデッキの上からズドモンのLVの数1につき5枚破棄します!!」

「ん??……LVの数1につき??」

「今のズドモンのLVはイツカクモン「2」の効果で最大LVの3になってますので、3×5で合計15枚、アスラさんのデッキを破棄させてもらいますわ!!」

「じ、15枚イイイー!?!」

ズドモンが手に持つ金槌を全力で地面に打ち付けると、その接地面から青い稲妻が迸り、アスラのデッキを襲う。アスラのデッキは一気に15枚もの数トラッシュへと送ら

れてしまった。

この行為により、アスラはローザのデッキがライフを破壊せずに敵のデッキを破壊し、デッキアウトによる勝利を狙うタイプの青属性のデッキだと理解した。

「ローザのデッキは速攻デッキアウト。呑気にターン跨またいであると40枚そこそこのデッキなんて直ぐに消え去るわよ、アスラ……！」

エールがアスラに呟くように告げた。数あるデッキアウトのデッキの中でもローザのズドモンはデジタルスピリットなものもあってかなり足が速い。つまり、誰よりも素早くデッキ破壊を行える。キャピタルキャピタルで動きを制限されているアスラにとってこれ程厄介な敵はいないだろう……………

「さあアスラさん!! 【大粉碎】の追加効果です!!……………破棄されたカードの中にバーストカード、「双翼乱舞」のカードがあるので、ドラゴンヘッドを破壊しますわ!!」

「っ!!」

ズドモンが一直線に走りながらアスラのドラゴンヘッドを金槌で叩き潰した。さら

にその目先はアスラのライフへと向かって……………

「そしてアタックは継続中ですわ!!」

「アタックはライフだ!!……………っ!!」

へライフ5?!4へアスラ

ズドモンはアスラのライフ1つを金槌で叩き壊した。

「ふふ、ターンエンド……………ですわ!!」

手札：4

場：【ランマー・ゴレム】LV1

【ズドモン】LV2

【No.26 キャピタルキャピタル】LV1

バースト：【有】

余裕の表情を浮かべながらローザはそのターンをエンドとした。次はアスラのター

ンだが、あのズドモンがある限り、長くターンは回って来ないだろう。彼も小さい脳味噌でそう考えながらターンを開始する。

「ターン04」アスラ

「メイנסテップ!!……兎に角デツキがぶつ飛ぶ前に倒さねーと……オレは2体目のドラゴンヘッドをLV2で召喚!!……でもってバーストを伏せる!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV2(2)BP2000

アスラの場合に2体目のドラゴンヘッドが現れる。

「シャムシーザーのLVを下げてリザーブのコアを確保!!」

さらにアスラはローザのキャピタルキャピタルに与えられるアタック時のコストを確保すべく、シャムシーザーのLVを下げてリザーブのコアを置いた。

「アタックステップウウー!!!リザーブのコア2つを払ってドラゴンヘッドでアタック!!」

リザーブのコア2つを支払い、アスラはドラゴンヘッドでアタックを仕掛ける。

「ライフで受けますわ!!……っ」

へライフ4??3へローザ

ドラゴンヘッドが上空から急降下し、ローザのライフ1つに噛み砕いた。だが、ここでもローザの伏せていたバーストが反応して……

「ライフ減少時のバースト発動!!アルティメットウォールですわ!!」

「!!」

「この効果でこのターンのアタックステップを終了させます!!」

気が遠くなる程の巨大な氷山の一角がアスラ達の前に立ち塞がる。その巨大な壁は

アスラがこのターンを終了させるまでは絶対に消えず……………

「くっ!!……………ターンエンドだ」

手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV2(2) BP2000(疲労)

【シャムシーザー】LV1(1) BP2000(回復)

バースト：【有】

致し方なくそのターンをエンドとしたアスラ。そしてその宣言と共に氷山の一角が消え失せると、再びローザのターンが幕を開ける……………

「ターン05」ローザ

「メインステップ!!……………バーストを伏せ、リザーブのコア全部を使ってズドモンのLVを最大の3に上げます!!」

1【ズドモン】(3??6) LV2??3

前のターンはイツカクモン「2」の効果で最大LVになっていたズドモンが今度は正規の方法でそこまで到達した。これで大粉砕の効果が最大限に余すことなく発揮できる。

「アタックステップ!!…もう一度お願いします、ズドモン!!…そのアタック時効果、
【大粉砕】!!またまたデッキを15枚破棄します!!」

「ぐっ!?!…またデッキが…!?!」

ズドモンが前のターンと同じ動作でアスラのデッキを吹き飛ばす。アスラの残りデッキ枚数はとうとう5枚を切った。

あと一撃でもズドモンがアタックして仕舞えばアスラのデッキは完全に消え去る
……………

「さらに破棄カードの中にバーストカードがありますのでシャムシーザーを破壊します
わ!!」

「!!」

ズドモンがアスラの場のシャムシーザーを金槌で叩き潰す。だが、この破壊はアスラのバーストを輝かせる。

「待ってたぜその破壊!!バースト発動!!」

「!!……まさか」

アスラの口振りとその条件から咄嗟に何が伏せられているのかを察したローザ。しかしそれを止める術は無く、発動する。

「バースト効果で最もBPの低いランマー・ゴレムを破壊してコイツを……第二の龍騎を召喚する!!」

1 【仮面ライダー龍騎 [2]】 LV 2 (3) BP 7000

「っ!!」

バーストが勢い良く反転したと共にローザの場のランマー・ゴレムが焼却される。そしてアスラの場合にコラボダンジョンにて偶然見つけてそのままデツキに宿った第二の龍騎が現れた……………

普通の龍騎との違いは最初から柳葉型の剣を備えている点だ。

「来ましたわね……………第二の龍騎……………」

「あつ……………そう言えばこれ、コラボダンジョンのカード……………オレが持つてて大丈夫だったか!」

コラボダンジョンに行ったのは飽くまでも搜索。カードや財宝を得るために行ったわけではない。偶然とは言え、デツキにその重要遺物が宿ってしまった事に対して、アスラはどこか罪悪感を常々募らせていた。

「はい!!私からも報告しましたし、何よりそれはアスラさんの龍騎と同名のカード、何もアスラさんが引目を感じる事はありませんよ」

「おお!!そっか!!ありがとなローザ!!」

その点に関してローザはしっかりと対処していた。アスラは明るい様子でローザに感謝した。

……しかし……

「はい!!どういたしまして!!……………ですが……………このバトルの勝利は差し上げませんわ
」

「っ!?!」

アスラはローザから悪寒を感じ取った。それは彼女のこのターンで決めるといいう熱意が伝わって来る凄まじい気迫……………

「フラッシュマジック、爆碎轟神掌!!……………ズドモンを回復させて、このターンの間そのLVを1つ上のモノとします!!」

ー【ズドモン】(疲労??:回復)

「なにい!?!……………回復!?!」

ローザが手札から發揮させたマジックにより、ズドモンが回復状態となる。これは完全に予想外だった。これではライフは残ってもデッキがこのターンだけで粉碎される………

だが、それを止める手が、アスラにはあつた………
彼は反射的にそれを使用する………

「くっ……フラッシュマジック、ファイアーウォール!!」

「!!」

「この効果で赤のスピリット、ドラゴンヘッドを破壊して、アタックステップを終了させる!!」

ドラゴンヘッドが赤き炎により焼却される。

「そのアタックはライフだ!!……っ!!」

へライフ4??3へアスラ

ズドモンが手に握りしめた金槌でアスラのライフを叩き壊した。

だが、その直後、ドラゴンヘッドを焼き尽くしたその炎が山の如き壁を形成。ズドモンの行手を阻んで見せた……

「よし!!アスラもウォール系マジックでローザのターンを凌いだわ!!」

ローザの怒涛のデッキ破壊を凌いだアスラに対して、エールも嬉しそうに喜んだ表情を見せる。

「つしやあ!!どうだアアアー!!!」

「ふふ、やりますわねアスラさん!!……ですが、次で決められなかったら真正正銘……デッキアウトですわよ?……ターンエンド」

手札：2

場：【ズドモン】LV2

【No. 26 キャピタルキャピタル】LV2

バースト：【有】

だが、それでも余裕のあるローザ。

それもそのはず、何せ、アスラのデッキは既にデッキアウト寸前な上に、防ぎようのないキャピタルキャピタル。それに加え、現在伏せているバーストカードは……………

……………さつきも使つて見せた『アルティメットウオール』……………

(……………このバトル……………どう転がつても私の勝ちですわ!!……………アスラさんには悪いですけど、また出直して来てもらいます!!)

ローザの内に秘めていた想いは絶対的な勝利の確信。

だが……………

「じゃあ次で決めるツ!!……………オレはロンに追いついて……………いや追い越して頂点王にならねーと行けねーからなツツ!!」

「!!」

強気に宣言するアスラに、思わずローザは無理だと思つてしまった。

それもそうだ。この状況、どう見ても敵うわけがない。だが、不思議とその考えたほ
ぼ同時に「この方ならもしかして……」とも思ってしまった……

それはあの複数のライダースピリットを入れたデッキを操っていた男に死ぬ気で
勝って見せたアスラだからこそ、芽生えた微かな感情……

そしてアスラは残り少ないデッキと共にターンシークエンスを進行する。

「ターン06」アスラ

「メインステップ!!……行くぜローザ!!……オレは仮面ライダー龍騎をLV2で召喚!!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV2 (2) BP4000

「っ?!……最初の龍騎!!」

アスラは最初に手に入れたコスト3の龍騎を召喚した。

これで新旧………2体の龍騎が揃い踏みとなる。

「……………ですが、忘れちゃったかアスラさん!!キャピタルキャピタルがある限り、アタックする回数は限られますわ!!」

そう……………

如何に強力な効果を備えているライダースピリットと言えども、キャピタルキャピタルの効果は及ぶ……………

しかし……………

「ローザ、オマエこそ忘れてんじゃねーか??」

「!?」

「オレのデツキは『赤』……………ネクサス破壊が一番得意な色属性なんだぜ!!……………マジック、バスターランス!!」

「なっ!?」

「この効果によりネクサス一つを破壊する!!……………オレは……………」

アスラのそばに彼よりも大きな槍が突き刺さる。アスラはそれを引き抜いて、槍投げの如く構えて見せて……………

「キャピタルキャピタルを破壊だアアアー!!!」

ローザの背後に聳え立つキャピタルキャピタルの方へとそれをぶん投げた……………

その槍は炎を纏い、さらに勢いも増していき……………

空に浮かぶ孤島……………キャピタルキャピタルを……………貫き、焼き尽くした……………

「追加効果で2枚ドロロー!!……………つしやあ!!これで足枷は消えたぜ!!アタックステップ!!

第一の龍騎でアタックだアアアー!!!」

「!!」

勢い付いたアスラが第一の龍騎でアタックを行う。ローザは咄嗟に問題無いと思考を切り替えた。

何故なら、今伏せているバーストカードはアタックステップを終了できるウォール系マジック、『アルティメットウォール』なのだから……………

「フラッシュマジック!!……………ファイナルベント!!」

「!!」

「この効果によりBP15000以下のズドモンを破壊だ!!」

アスラが手札から勢い良く引き抜いて使用してきたのは最強のアドベントカードであるファイルベントのカード。それはバスターランスの効果で引き当てて見せた起死回生の一手だ。

第一の龍騎が腰のベルトからカードを1枚引き抜き、左手のバイザーにそれを装填
……………

……………『ファイナルベント』!!

と、無機質な音声が続いた……………

龍騎の背後に赤き龍が身体を唸らせ、咆哮を上げながら現れる。龍騎はそれと共に上空を跳び上がる。そしてそのまま赤き龍の火炎弾に背中を押しされながらズドモン目掛けて跳び蹴りをぶちかました。ズドモンはその跳び蹴りに貫かれ、堪らず爆発四散してしまう。

「ズドモンが!?!……………つ、ですが、デッキ破壊のカードはこれだけではありませんわ!!…次のターンで……………」

「関係ねエエー!!このターンで勝つ!!……ファイナルベントのさらなる効果で龍騎にシンボル1つを追加!!ダブルシンボルになる!!」

着地した龍騎がアスラの叫びと共にローザのライフを狙うべく走り出した。

「ライフで受けますわ!!……っ!!」

〈ライフ3??1〉ローザ

龍騎がローザのライフを殴りつけ、それを一気に2つ破壊して見せる……彼女のライフはとうとう残り1つ……

だが、これはローザの伏せたバーストカードの発動条件でもあり……

「っしやあ!!残りライフ1!!」

「素晴らしい快進撃ですわアスラさん……ですがそれもここまで、ライフ減少によりバースト発動!!……2枚目のアルティメットウォール!!」

「!!」

「効果により、アタックステップを強制終了!!……これで私の勝ちですわ!!」

ローザのバーストカードが反転すると共に再び氷山の一角がアスラのスピリットを……龍騎達の道を阻む……

……しかし……

「……………へ??」

目の前の氷山の一角……………氷の壁……………

アスラだけでなく、当然ながらローザの目の前にも見えるわけだが……………

龍騎がファイナルベントで呼び出した赤き龍がそれを突進で粉々に砕て見せた。ローザはその光景に思わず目を丸くしてしまい……………

「い、いったい何が……………!?!」

「へへ、ファイナルベントの効果!!……………このバトルの間、相手はアタックステップを終了できない!!……………つまりアルティメットウォールの効果は無効って事だアアアア!!!」

「ツ……………そんな!?!」

「オレと龍騎に不可能は無い!!」

ここに来て勝利への絶対的な確信があったローザの様子は一変。このバトル、自分が敗北してしまう事を悟る。

天才的な若きカラーリーダーも、まさかあの状況をひっくり返されるとは思ってもいなかったに違いない。

「トドメだ、決めろ……第二の龍騎!!」

アスラの指示により、第二の龍騎が柳葉型の剣を手に握り、地を駆けた。狙いは当然ローザのライフ……………

そして……………

「凄い!!お見事ですわ!!これが!!これがソウルコアの使えないアスラさんのバトル!!……………ライフで受けます!!」

へライフ1??0へローザ

刹那。

第二の龍騎の振るった横一線の太刀筋が、アスラを称賛していたローザの最後のライフを斬り裂いた……………

……………ピー……

「っしやあアアアー!!!」

ローザのBパッドから彼女の敗北を告げる音声が鳴り響く。アスラはそれを聞くなり思わずガツツポーズをして見せる……………

アスラはこの国のカラーリーダー、そして尚且つエックスであるローザ・アルファに勝利を収めたのだった……………

……………

「アスラさん、おめでとうございます!!……………これは私の持つカラーカード『ブルーカー

ド』です!!」

「おおおお!!サンキューローザ!!これで2枚目!!残り4枚だ!!」

「まさかあそこから逆転されるだなんて、アスラさんの底知れない力が身に染みましましたわ〜」

「おうよ!!良いバトルだったな!!」

バトルが終わり一段落したところで、ローザはアスラに自分の勝利した証である『ブルーカード』を贈呈した。アスラはそれを受け取るなり、飛び跳ねて喜んで見せた。

「よし!!んじやエール、次の町行くか!」

「切替早!?!?!?!少しは休んで行きなさいよチビスラ!!」

「誰がチビだアアア!?!」

「ふふ……」

アスラとエールのいつものやり取りに、ローザは思わず微笑むと、手を曲げてアスラを呼び出し、「耳を貸してください」と告げると……

「アスラさん。今後もできる限りでいいですのでエールさんのそばにいてあげてくださいね!!……エールさん、アスラさんといるとすごく楽しそうですね!!」

「ええ!?…そうか?…まあいいや、おうよ!!任せとけ!!」

「……………ちよつと、アンタ達何こそこそ話してんのよ!!」

ボソツとアスラにその事を伝えた。

アスラは未だにエールが落ちこぼれという理由だけで家族からも蔑んだ目で見られている事を知らない。だが、その事を知っているローザだからこそ、エールの明らかな変わりようを理解していて……………

そして、それもこれもアスラのお陰だと言うこともわかっている。まあ、当の本人には自覚なんて絶対に無いだろうが……………

「エールさんは早く究極進化できるようになってくださいね!!」

「ぐつ!?!……言われなくてもやってやるわよ!!」

天然な様子でエールに失礼な言葉を浴びせるローザ。エールは思わず顔を赤くして強気に宣言してしまう。

「よし!!……待つてろよロン!!……必ず追いついてやるぜエエー!!!」

一段と気合を入れたアスラは今も自分より前の道を進んでいくロンに対してそう叫ぶのだった……………

だがしかし、アスラのその雄叫びの腰を折るかのように、いや、どちらかと言えば旅路の腰を折るかのように……………が的確か……………

ローザが何かを思い出し、ニコニコと笑いながら彼らに告げた。

「あつそうそう、アスラさんとエールさんは一度「オウドウ都に戻れ」との御達しが届いていますわよ」

「……………え?」

オウドウ都……………

アスラも一度は訪れた国の中心部且つ最大都市であるが、ローザは何故か今回のコラボダンジョン搜索の報告書を提出した際に、その事を伝えるように言われていて

……………

「なんでだアアア!! 次の街までめっちゃ遠回りじゃねえか!？」

「ええつと……おそらく今回のコラボダンジョン搜索の件でお話を伺いたいのだと思えますわ……わたくし私は役職上ここを離れられないですし」

別にこれまで来た長い道のりに沿って戻る必要は無い。カラーリーダーの住う6つの町はどれもオウドウ都の周辺にあるからである。そのため、このナミラ町から直接オウドウ都に向かう事は可能。

しかし、それでもかなり道のりが長引く事になるのはアスラの小さい脳味噌でも安易に想像ができて……

「…………『御達し』って誰からなの？」

エールがローザにその事をわざわざ彼女に命令した人物の事を聞いた。

ただ、エールはこの時点で何となく察していた。

この国において……

カラーリーダーに、しかも身分がエックスであるローザに命令ができる人間なんて

……
……
最早あの「4人」以外では考えられない……………

「はい!!三王の方々と現・頂点王のシイナ・メザ様からです!!」

「えええええ!!」

「むえええええええ!!」??便乗

「……………」

そう。この国において最高の立場である「三王」と「頂点王」において他は無いだろ
う。

ローザが笑いながら告げて来た報告に、驚愕して声を荒げるアスラ。そしてそれを面
白がって同じように鳴き声を上げるムエ。

1人と1匹が騒がしい中、エールはただ1人焦るように汗を流し、黙り込んでいた
……………その様子はまるで何かに怯えているかのようにであり……………

「マジ!?シイナに会えんの!!」

「はい!!…ホントはロンさんも来るように言われたのですが、その前に旅路を再開なさ

れてしまつて」

「あのイケメン天才ヤロー、もうちよつと待つてたらシイナに会えたのに……もつたいねー」

「むえー」??せやな

アスラが喜び過ぎて興奮してしまうのも無理はない。

何せ、育ての親と呼べるに等しいあのシイナ・メザに約10年ぶりの再会ができるのだから……

「……………」

「あの……エールさん?」

「っ!!」

何かに怯えている様子のエールに、ローザが声をかけた。

「無理してオウドウ都に帰る必要はありませんわ……………」

「い、いいわよ!!別に気を使わなくたって……私も呼ばれたんでしょ?……ならこのバ

カスラと行ってあげるわよ!!」

「……………??」

エールとローザのこのやり取りは……………

正直今のアスラではさっぱりわからなかった……………

だが、オウドウ都に帰ったら直ぐにわかる事になる……………

エールが抱え込んでいるその内容も……………

彼女の家族の事も全部……………

「オイオイイ!!随分とボロボロじゃねえかトウエンティ!!珍しいな!!」

「……………」

「ハッ!!……………無口なのは変わんねえのな!!」

荒れ果てた荒廃。

これでもかと倒壊した瓦礫の山。本来ならば人1人の気配すら感じ得ないこの場所にて、コラボダンジョンでアスラ達と激闘を繰り広げた青年「トウエンティ」はいた。だが、それだけではない。筋肉質な男性もそこにはいて……おそらくちよび髭シルクハットの男同様、彼に関連する人物なのだろう……

「でよ!!誰にやられたんだあ!!?……まさかライダースピリット使いか?!!」

筋肉質な男は、まるでトウエンティを小馬鹿にするようなニュアンスで語りかけてきた。トウエンティは変わらず硬い表情を崩さないまま……

「……………道端で転んだ」

「ガハハハハハ!!な訳ねえだろ!!……オマエも冗談言うんだな!!」

トウエンティがついた嘘に、男性は思わずゲラゲラと笑い出した。

「トウエンティイイイ!!オレは『ライダーハンターズ』No. 1のオマエを超えたいわけ??この意味わかる?!!」

「……………」

男の声から『ライダーハンターズ』と言う聞き慣れない単語が飛び出してくる。おそらくは彼らの組織の名称なのだろう……………

「……………知らん……………オレはライダースピリットを『20枚』集めるだけだ……………」
「あつ……………そう」

トウエンティはそう告げると、男の元を去って行った。

(……………そうだオレは……………)

……………オレは必ず20枚のライダースピリットを集めて……………

……………恋人を……………

……………カナの病気を治す!!

去り際、トウエンティは内心で自分の覚悟を改めて思い直した。クールな外見とは裏

腹にその内には真に熱い感情が確かに詰まっていた……………

『ライダーハンターズ』……………

それは今後もアスラとロンの目の前に幾度と無く、厄介極まりない壁として立ち塞がって来る事であろう……………

「……………ガハハハハハ!!!……………相変わらずクールだね……………まあいいや。あのトウエンティを倒す程のバトラー……………俄然興味が湧いて来たぜ……………^{そそ}唆るなあ……………」

……………オマエもそうだろ??

「……………王蛇!!」

筋肉質な男性は去り際のトウエンティの背中を目に移しながら己のカードを手に握った。そのカードの名は「仮面ライダー王蛇」……………

10コア「挑戦権剥奪!?!モビルスピリット、ストライクガンダム!!」

このファンタジーの世界には、それぞれの国にそれぞれのカラーリーダーと三王が存在する。この世界の人々はそんな6人のカラーリーダーと3人の三王にバトルを挑み、カードバトル最強の称号『頂点王』を目指している。

知つての通り、カラーリーダーはバトスピの色属性各6つに分けられている。

……ならば三王は何で分けられているのか？

それはこの世界においての三大スピリットだ。

1つ目は全てのカードが時代によって人を選ぶと言われている『ライダースピリット』……

2つ目は元々別の世界に存在していたと言う『デジタルスピリット』……

そして最後の3つ目は……

アスラの頂点王を目指す旅は続く。

だが、今現在、彼らはちよつとした遠回りをしていた。

この国の中心部であるオウドウ都、その周辺にある6つの町に存在する各カラーリーダーから1枚ずつカラーカードを得なければならぬのだが、アスラは2枚目となる青のカラーカードを得た後に、何故か三王と頂点王にオウドウ都に来るように召集を受けていた事を知り、遠回りになるが、3番目となる白の町に行く前に一先ずオウドウ都へと足を運んでいた……………

「うおおおおお!! やつぱオウドウ都デツケエエ!!」

「ちよつと!! 恥ずかしいから騒がないでよね!!」

改めて見た中心都市の広大さに感動するツンツン髪の少年アスラ。それを注意するのは肩までかかった赤茶のセミロングヘアの少女エール。

アスラは元々ここより遠く離れたスーミ村と呼ばれる田舎出身故にこのオウドウ都に慣れていないが、エールは生まれた時からずっとこの都市に住んでいる。その事を彼

らの心情の違いに影響しているのだろう。

「くうく!! やつとシイナに会えるんだな!! 楽しみだぜ!!」

「そう言えばアンタ、シイナ様に昔育ててもらってたんだけ?」

「ああ!! ロンと一緒にな!!」

この世界で最も強いカードバトラーに送られる称号『頂点王』……………

その名を冠しているのは「シイナ・メザ」という若い女性。捨て子であったアスラとロンの育ての親でもある。彼女が「頂点王になる」と言って出て行ったつきり戻って来なかったため、アスラがシイナに会えるのは実に10年ぶりの事であった。

「ふくん。あのシイナ様がアンタとそのライバルをね……………」

「エールはさ、頂点王になった後のシイナを知ってるんだろ?」

「え?……………うん、まあね」

シイナは頂点王になった後にオウドウ都に居座る事になった。そのため、ずっとオウドウ都に在中していたエールは幼い頃から彼女を知っていた……………

「……………懐かしいわね、シイナ様は昔からよく一緒に遊んでくれたわ」

「へくなんかその話は新鮮だな!」

家族は自分の事など相手にもしてくれなかったから、シイナだけがエールの唯一の心の寄り場だったのだ。エールはその当時の思い出を感慨深く思い出していて、思わず笑みが溢れる。

「……………つて言うかムエはどこよ?」

「……………え?……………アイツならオレの頭の上に……………」

エールが話を切り替えてアスラに聞いた。アスラに懐いているオレンジの小動物ムエ。いつもならば彼の頭の上に乗っかって「むえく」と鳴き声を上げているのだが

……………

「……………い、いない……………」

アスラが自分の頭の上を触ってみると、そこには髪以外何も無い。アスラとエールは当たり一体を見渡して見るが、そのどこにもムエは存在しなくて……

「ウソでしょ!?!……探すわよ!!」

「……でもアイツの事だから時間が経ったらまた「むえ〜」って鳴きながら帰って来んじゃねえの?……心配いらねえって」

「何言ってるのよバカスラ!!エックスであるこの私のカワイイムエが消えたのよ!」

「どうせオウドウ都に呼ばれたのもこの間のコラボダンジョンについて聞きたい事があるとかだろ?じゃあパツと終わらせて、パパッとムエを見つけようぜ」

「なんで報告優先なのよこのアホスラ!!」

「さつきから聞いてりゃバカとかアホとかうっせーな!!」

いつもの事だが、ちよつとした事で言い争いになるアスラとエール。ムエの事がかわいくて仕方ないエールは一刻も早くムエを探し出してあげたいが、反面アスラは半ばどうでも良さそうだった。

だが、そんな時だ。彼らの背後で彼らを呼ぶ声があったのは……

「やあエールちゃん!!……………そしてそのチビは……………アスラだね?」

ー!!

オレンジ小動物ムエの鳴き声ではなく、人間の女性の声だ。優しくて慈悲深くて、暖かく包み込んでくれるような柔らかい声。エールは当然この声を知っている。ただ、それはアスラも同じ……………

約10年ぶりに聞く声だ……………

2人は思わず口喧嘩はやめてその声のする方へと振り向いてしまう……………
そこにいたのは……………

「シイナ様!?!」

「……………し、シイナ!?!」

「ヤッホー!!元気だった??:……………テンドウの言う通り、ホントに2人で旅してるんだね」

そこにいたのは派手な装束を飾り付けた服を着こなし、オレンジの長い髪が特徴的な女性……………

名をシイナ・メザ。この国の現頂点王である……………ただ、雰囲気や振る舞いから、そ

れらしい貫禄があるとは言えず、あまり強そうには見えない。

「シイナアアアー!!!……うおおおお!!!オレの事覚えてくれてたんだなあ!!」

アスラが涙目になりながらシイナに近づいた。嬉しいはずだろう。10年ぶりに育ての親に出会う事ができたのだから……

正直伝えたい事は沢山ある。

……『初の頂点王おめでとぅ』とか

……『なんで一度もスーミ村に顔見せてくれなかったんだ』とか

もう数えきれないくらいあるが、まずは自分の事を覚えていてくれた事に感謝していた……

「わかるよそりや、昔から全然変わってないもん!……背もあんまり変わってないな」
「変わってるわアアアー!!!目線ほぼ同じじゃねえかアアアー!!!……あの時オレまだ5歳だぜ!」

「あつはは!!声がデカイのも変わらずか!!」

「アスラ、アンタホントにシイナ様と知り合いだったのね……」

「ウソだと思ってたのか!？」

エールは正直アスラの言っている事には半信半疑だった。しかし、彼がシイナと仲良く話しているこの光景を見て、その半分の疑いがようやく信じる方へと傾いた。

「でもなんでシイナ様直々に出迎えなんて……………」

今回、アスラ達はこの国の最強カードバトラーである頂点王と三王に呼ばれてこのオウドウ都に足を運んだ。当然、現頂点王であるシイナが彼らをここに呼び寄せた事になるのだが、

エールはまさかそんな頂点王の彼女がこんなオウドウ都のど真ん中で自分達を待ち構えていたなんて思いもしなかった。当然の如くシイナは有名であるため、出会って以降周囲からの視線も強く感じる。

「ふふ、いや〜なんか久し振りに2人に会えると思っただけでもたつてもいられなくなつてね〜つついつい出迎えに来ちゃった!」

「はあ……………」

相変わらず頂点王らしからぬ楽観的な振る舞いの彼女に半ば呆れるエール。

頂点王とはいわゆるチャンピオンであり、この国を収める王ではない。ただ、彼女に對して「これはちよつと気が緩み過ぎでは？」と考えてしまう時も少なくはない。

「エールちゃんは相変わらずマジメだな〜」

「私がマジメなんじゃ無くて、シイナ様がマジメじゃ無さ過ぎるんです!!」

「……エールが敬語使ってるのなんか珍しいな」

「何よ??悪いわけ?」

「……別にそう言うわけじゃねえよ」

アスラはエールとシイナのやり取りを見ながら、そう思った。確かにカラーリーダーやあの不条理キャラを極めたテンドウでさえもタメ口を使っていたエールが、シイナにだけ敬語を使うのはいささか疑問ではある。

それ程シイナが彼女にとって大きな存在なのだろう……

「エールちゃん。何か楽しそうだね!!」

「え!？」

唐突に放たれた言葉に、エールは疑問を抱かずにはいられず、思わず首を傾けた。

「……オウドウ都で暮らしてる時は、私やテンドウといる時以外ずっと暗い顔してたけど、今はホント楽しそうだよ!!……これもうちのアスラのおかげかな?！」

「っ!!……べ、別にそんなんじゃないですよ!!」

幼少期より同じエックスの身分の者や、家族から『落ちこぼれ』と蔑まれていたエールは、「いつか見返してやる」と言う気概は持っていたものの、やはりどこかその表情は慌ただしいと言うか、余裕が無かった。

しかしシイナは、そんなエールが変わった事を一目で見抜いた。

エール本人は顔を赤くして否定しているが、エールの表情が明るくなっているのは明らかだ。そしてそれはおそらくアスラのおかげ。彼の存在はエールの中で自分やテンドウのように大きな存在になっているのだ。

「……………でさシイナ!!オレ達をオウドウ都に連れて来た理由ってなんだ!?!やっぱりこの

間のコラボダンジョンの報告とか？」

アスラがシイナに聞いた。

シイナは「あつそうそう」と、思い出したかのような口振りそのまま彼らに説明する。

「実はさく三王の1人、『エレン・オメガ』がちよつと面倒な事言い出してね………なんでも、アナタ達と直に話したいんだと」

「三王が!?!………ん? オメガ!?!」

「……………」

シイナはその事を言い出すなり、アスラはその『オメガ』と言う名前に違和感を覚え、エールは身体を怯えるように震わせ、変な汗が溢れ出てくる。

三王の1人、『エレン・オメガ』は……………」

歳が10離れたエールの実の兄だ……………」

ここは広大なオウドウ都に中心に聳え立つ巨大な鉄塔。ここでは三王が挑戦者を迎え撃つ場としても有名である。仮に挑戦者が全てのカラーリーダーからカラーカードを得たとしたら、次にこの場所に訪れて三王や、ここの一番上で待ち構える頂点王シナとバトルする事になる。

そんな鉄塔の中に、頂点王であるシナに連れられ、未だ2つしかカラーカードを持つていないために本来ならばそこへ行く資格の無いアスラが、仲間のエールと共に訪れていて……

「おお!!……すげえ、ここが三王やシナが挑戦者を待ち構える鉄塔、三王塔か!!」
「そうそう、私達の職場さ」

アスラが目をギラギラ輝かせながら感想を口にした。今彼らは三王塔と呼ばれる鉄塔にある階段を上っている。三王の1人であり、尚且つエールの実の兄でもある『エール・オメガ』に会うためだ。

「てかさ!!まさかエールの兄ちゃんが三王の1人とは思ってもなかったぜ!!……凄

んだな、オマエの兄ちゃん!!」

「……………え、ええ、まあね」

「??」

さつきまでは明るく話せていたのに、

エールは兄の話題が出てからずっとこの調子だ。

そんな彼女の様子に、アスラは疑問の念を抱かずにはいられなくて……………

それもそうだろう。今から会うのは実の兄がいる場所だ。三王の1人が挑戦者を待ち構える場所なのだ。

「ん、さあ着いたぞ〜!」

「おお、ここが!!」

シイナが鉄でできた扉を指で示しながらアスラ達に告げた。おそらくあの扉の向こうにエールの兄がいるのであろう。

「よし、じゃあ後は2人で頑張ってね!!」

「あれ??シイナは来ねーの??」

「いや〜本当は行かないといけないんだけどさ〜テンドウの奴がどつかサボリに行つて
るみたいだから、ちよつとブラつと探してくるのよ」

「……………何やってんだあの人……………」

「テンドウの事だから、また「男の勝負」とか言つてギャンブルでもしてるんじゃない??」
「それだ!!エールちゃん冴えてる〜!!」

シイナはテンドウがいるであろうギャンブルを行う賭博場へと向かうべく、一旦この
場を離れた。アスラとエールは自分達に話があると言うエールの兄、エレンがいるであ
ろう鉄の扉の先へと向かった。

アスラはともかく、エールは兎に角緊張してしよすがなかった……………

無理もない。相手はあのオメガ家の実力者である自分の兄で、三王の1人なのだから
……………しかし、理由はそれだけにあらず……………

……………

「おお!!(´▽´)が三王の間の一つ!!めっちゃくちや広エエー!!!」

人が一人やつと通れる程の狭かった階段の空間から一変、ただっ広い空間に出た事により、大はしやぎするアスラ。目をギラギラさせながら、いつか6枚のカラーカードを得て、真に挑戦する自分の姿を妄想していた……………

と、そんな時だ。その空間と比較するととても小さな玉座……………
そこに座る青年が声を発したのは……………

「貴様が、ローザの報告書にあったコモンの少年か……………そして、久しいな、エールよ……………!!」

「……………エ、エレン、お兄様……………!!」

エールと同じ赤茶の髪。上品な振る舞い。彼の声と、そこから発生するプレッシャーにエールは怯え、身体を震わせてしまう……………

そんな彼こそが、この国の三王の一人、エレン・オメガだ。

「おお!!アンタがエールの兄ちゃんか!!……………エールさんにはいつもお世話になって
まアアアア!!」

アスラがいつもの元気な様子でエレンに声をかける。その大きな声はここら一帯に反響してよく響いた。

「黙れコモン。余は貴様と談笑するために呼び出したのでは無い」

流星はエールの兄と言ったところか、出会って間もないアスラにキツイ罵言を浴びせる。

「あつー……そうつすよね〜!!……あのコラボダンジョンに関しちや、不肖アスラ、バツチり頭の中にインプットしてますんで!!なんでも聞いてくださアアアーイ!!」

アスラも流星だ。特に気にする様子はなく、目上の三王であるエレンに敬礼した。その様子は側から見たら単なるおバカにしか見えないものだが……

「……………何を言ってる??……今回のコラボダンジョンの事など、とつくの昔に青のカラーリーダー、ローザ・アルファが報告書をまとめた。それで十分だ」

「……………え？」

だが……………

エールの兄、エレンが聞いたかった事はアスラが搜索したコラボダンジョンの事ではない……………

それは……………

「単刀直入に言おう、スーミ村のアスラ。オマエのカラーリーダーへの挑戦権を剥奪する」

ん？

はくだつ??

はくだつって何だ!?

いや、何となく意味合いは……………

なんかこう……………

奪う的なニュアンスか??

カラーリーダーへの挑戦権って……………

ああ、成る程、二度とカラーリーダーに挑むなっで感じだな!!
うんうん。わかりやすくして助かるぜ〜…………

「つて、えええええ!?…………挑戦権無し〜!」

エレンの言葉をゆっくりと考えながら、時間差で驚愕するアスラ。その横にいるエルもまた驚いている。まさか内容がそんなものだとは思ってもいなかっただろう…………

「な、なんでツスか!」

「簡単な話。貴様はソウルコアを使わないからだ。バトルスピリッツに対して手を抜くような輩にカラーリーダーに挑戦する資格はない」

「いやいやいや!!手なんか抜いてねエエエー!!…………それにオレはソウルコアを使わないんじゃない!!使えないんだ!!出したくても出せないんだよ!!」

コラボダンジョン捜索の際に製作されたローザ・アルファの報告書。そこにはアスラの事も記載されていた。

しかしそこにはしつかりと『ソウルコアが使えない人間』と書かれており、アスラが自らソウルコアを使わない事を選んでる訳ではないと言う事は十分に想起できるものだった。どうも彼は難癖つけてアスラに挑戦権を剥奪させたいらしい。

「そもそも貴様ののような低俗なドブネズミがカラーリーダーにバトルを挑む時点でおかしい事なのだ……この世において、弱さとはそれだけで罪だ」

「うるせエエエー!!!…オレはもうすでに2枚のカラーカードをゲットしたし、このライダースピリット龍騎だってある!!」

アスラは証明するかのようにエレンに龍騎のカードとこれまで苦労して獲得した青と緑のカラーカードを見せつけた。だが、エレンはローザの報告書に目を通していたため、あまり動揺はしていない。

「ならばそのライダースピリットとカラーカードはここにおいて行け」

「話を通じねエエエー!?!…頭の中に石でも詰まってるのかよ!?!」

「ライダースピリットは秘宝の中の秘宝だ。貴様ののような地を這うドブネズミにはもつたない」

「龍騎はオレしか使えねえんだよ!!」

兎に角頭の固いエールの兄、エレン。アスラの挑戦権を剥奪しようとは譲らない。

「お、お兄様……………アスラの言ってる事は本当です……………私は今まで一番近くで見えてきました……………」

「エール〜!!」

窮地に陥るアスラにエールの救いの手が差し伸ばされる。エールも目の前に恐怖の対象である兄がいるはずであるのに、それを押し殺してアスラを助けようと口を動かしていた……………

が……………

「そもそもなぜオマエはこんなドブネズミと共に行動している。このエックスの恥晒しめ……………!!」

「!!」

彼はエールの言葉などに耳を傾けたりはしない。汚物でも見ているかのような視線をエールに送り、罵言を浴びせた。

「これ以上オマエが誇り高きオメガ家に泥を塗る事は許さんぞ。このドブネズミの挑戦権を剥奪するのもオマエにこれ以上の余計な旅をさせないためでもあるのだからな」

「っ!!……そんな……!」

「なんだ、『嫌』なのか?」

「っ………いい、いえ………そんな事は………」

アスラが挑戦権を剥奪され、旅をする理由を失えば、必然的にエールも旅をする理由を失ってしまう。

エックスの身分の者がコモンの者と共に旅をする事自体恥ずべき行為。当然エールも例外では無い。

しかし、エールにとってアスラの横は知らぬ間にとても居心地の良い場所になってしまっていた。兄は『嫌』かと聞いて来たが、当然『嫌』だ。

アスラの元を離れたく無い。

彼の横にいたい。

そう内心では懇願し続けていても、身体は兄への恐怖によって蝕まれ、その口は言いたくも無い嘘を吐いてしまう。

「ファン……テンドウの奴も余計な事をしてくれたものだ……もういい、去れ出来損ない。早くオメガ家の城に戻れ……二度と余の前にその姿を見せるな……!!」

「……………は、はい……………」

精神的に弱り切ったエールは、震える身体を無理矢理動かして兄に背を向けると、出口の方へと歩みを進めようとした。

そしておそらく、ここで出て行つて仕舞えば二度とアスラに会う事は出来なくなるだろう。これからずっと自分はオウドウ都の城に引きこもり、アスラはカラーリーダーへの挑戦権が無くなって遠いコモンの地に帰るのだから……………

もう二度とあの優しい手に触れる事はできない……………
 そう思っていた……………

「……………おこ……………」

ー!!

刹那。

アスラが出口に向かうエールを制止させるかの如くその手首を握って来た。エールは思わずアスラの表情に視線を向けるが、その顔は兄の方を向いていて、いつもの彼からは信じられない程怒っているのがわかった……………

「思っても無い事言ってるじゃねえよ。オレはまだまだオマエといっぱい旅がしたいぞ」

「!!」

アスラの言葉に、エールは思わず顔を赤らめてしまう。その後、アスラはエールの手を離すと、エレンの座る玉座まで歩み寄りながら、ある事を思い出した……………

「『アスラさん。今後もできる限りでいいですのでエールさんのそばにいてあげてくださいね!!…エールさん、アスラさんといるとすごく楽しそうですので!!』」

「『ええ!?…そうか??…まあいいや、おうよ!!任せとけ!!』」

「ローザが言っていた事がなんとなく理解できたぜ……………」

ナミラ町にてローザに言われた言葉を思い出したアスラ。あの時は意味が理解できていなかったが、実際にこの場に立って、見て、聞いて、ようやく理解した。

エールはいつも高飛車で、偉そうだ。でも一緒に旅をしていくうちに偶にだけど息苦しそうにしているのがわかった。何というか、焦っている感じだ。

そして理由は多分あの兄。アイツが意味わからんくらいエールにプレッシャーをかけてんだ。三王の1人なんて言うからてつきりテンドウさんみたいな懐の広い人だと思ってた……………

「三王の1人……………エレン・オメガ……………さつきから聞いてりや偉そうに何でもかんでも自分で決めつけやがって……………オレとエールはオマエの言いなりにはならねえ!!……………意地でもオレはエールと一緒に居続けてやるツツ!!」

そんでいつか、オレはオマエを超えて頂点王になる!!!
必ずオマエを騙せる!!!

「……アスラ……っ!!」

最高の地位を持つエックスのオメガ家にして、三王の一人であるエレンの圧力に怯む事なく堂々と啖呵を切ったのは……

この世界で最も低俗で、一番ちっぽけな存在であるコモン少年。

ましてやソウルコアも使えないと言う、設定だけをみたら最弱そのモノの存在。

だが、そのちっぽけで何も無い彼だからこそそこに大きな意味がある。

エールはその小さく逞しい背中に思わず涙が出てきた。今の自分にとって、彼から出てきた言葉はどれほど欲していたかは計り知れない。「ああ、自分は一緒に居ていいのだ」と心から思える。

「……コモンの分際でこの三王に、いや、エックスである余に逆らうと言う事は、それ相應の覚悟があつてこそだろうな?」

言葉でアスラにプレッシャーをかけてくるエレン。その言葉には確かな怒りの念が込められている。

当然だ。気高きエックスである自分に齒向かって来たのは薄汚いドブネズミなのだ

から……………

「ああ、バトルしろよ三王。オレのバトスピでエールが出来損ないじゃねえって事を証明する!!」

しかしアスラも怖気ついたりはしない。寧ろ堂々とバトルを仕掛けてきた。

「良いだろう。そのドブに染められた誇り事ぶち壊してくれる……………」

エレンもようやく玉座から腰を上げてバトルに対しての姿勢を見せつける。

だが……………

「ただし、余とバトルするのは貴様では無い。エールだ」

「!!」

「えっ!?!」

「エールが出来損ないじゃ無い事を証明するのだろうか??であればエールが余とバトルした方が効率が良い」

「いやいやいや!! 待て待て!! ……アレっすよ、アレ………なんかこう、オレがアンタとバトルする事によって、エールの旅に意味があった的な?」

すつかり自分がバトルする気でいたアスラ。なんとか理由を作ろうとするが、こればかりはどうにもできない。エレンは玉座から離れ、懐からBパッドを展開した。向けている先は当然アスラではなく、エールだ。

「さあ見せてみるエール。究極進化ができない貴様の力など、たかが知れてると思うがな」

「テンメエエエー!!! だからオレがバトルしてやるって言うてんだろオオオー!!!」

アスラは行き場の無い怒りを言葉にして飛ばす。ただその様子にはさっきのような覇気は全く感じられない。凄くマスコット感がある。

「下がってなさいアスラ………やってあげるわよ。アンタの代わりに」

「っ………エール………」

「そ、その………あ、あり………あ、ありが………」

「ん? 蟻?? 虫の??」

「ち、違うわよ!!」

さつき自分を庇ってくれた事に感謝を伝えたいエールだったが、伝えようとするとどうしても意識してしまい、顔が赤くなって舌が回らなくなる。だが、この光景はいつも通りのもの。エールもようやく普段通りになって来たと言える。

結局感謝は伝えられなかったが、エールは「まあいいわ」と尊大な態度で言い残すと、自分もBパッドを展開し、兄であるエレンの方へと向けた。

「エレンお兄様、お願いがあります。このバトル、万が一私が勝つような事があれば、アスラへの挑戦権剥奪の件、水に流してもらえないでしょうか?」

「!!」

「……………良いだろう。ただし、勝つ事があればの話だな」

「つ!!……………ありがとうございます!!」

「エールウウウー!!! オマエやっぱめちやくちや良いヤツだな!!」

「ふ、フン!!……………当然よ!!」

ちやつかりアスラの挑戦権剥奪の無効の条件を付け足したエール。

(あの様子、まさか勝つ気なのか??:……あの自信の無かったエールが、この三王である余に……………)

エレンが感じた妙な違和感。エールをまるでさつきまでとは別人に感じていた。

だがしかし、思い過ぎしという事もある。彼はその違和感を確認するためにも、このバトルに全力を尽くす……………

「準備はいいな……………行くぞ出来損ない」

「はい!!」

……………ゲートオープン、解放!!

本来ならばカラーカードを6枚集めた者しかバトルが行えない場所であるオウドウ都の巨大な鉄塔にて、エックスの身分を持つオメガ家の兄妹によるバトルスピリッツがコールと共に幕を開けた。

先行はエールだ。己とアスラのために全身全霊を込めてスタートを切る。

「ターン01」エール

「行きますお兄様、メインステップ!!アグモンを召喚!!」

1「アグモン」LV1(1)BP3000

エールの場に呼び出されたのは黄色いデフォルメされた肉食恐竜のような成長期スピリット。オメガ家に代々伝わるオメガのデジタルスピリット、アグモンだ。

エールはその効果でオープンされた『グレイモン「2」』のカードを手札に加えた。

「まだ使えもしないオメガのカードを使っているのか、煌臨もできないオマエには過ぎたカード達だというのに……………」

「っ!!」

「亡き母の形見のつもりで所持しているのなら、早々にそれを置いて立ち去れ」

その昔、エールがオメガのカードに選ばれる前、前継承者は彼らの母だった。元三王でもある。

出来損ないの妹がそのカード達に選ばれた事がエレンにとって何よりも腹ただしいところであった。

「い、嫌です!!私はお兄様に認めてもらうため、究極進化できるようにするため、城を抜け出して旅を始めたんです!!」

「……………」

「い、いぞオオオオ!!その調子だアアア!!!!どんどん言い返していけエエエ!!!!」

「うっさいわねアンタは!!」

過剰なまでにエールを応援するアスラに思わずツツコムエール。

以前のエールならばエレンの言葉に萎縮してしまうだけだっただろう。しかし、今は違う。自分の意思をしっかりと告げる事ができるようになっている。これもあのチビでバカでうるさい落ちこぼれの少年のお陰なのか……………

エレンはそんな妹の変化に改めて自覚し始める。

「兎に角私はこれでターンエンドです!!」

手札：5

場：【アグモン】 LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするエール。次は三王の1人でもある彼女の兄、エレンのターンだ。

「ターン02」エレン

「メインステップ………旅の中、少しは言えるようになったみたいだな。しかし、そのコモンと戯れるのはエックスの者として恥ずべき行為だと思え!!」

ー!!

エレンはそうプレッシャーをかけるように告げると、手札から1枚のカードを引き抜いた。

「戦艦ネクサス、アークエンジェルを配置!!」

ー【アークエンジェル】LV1

エレンが配置したのは世にも珍しい『戦艦ネクサス』と呼ばれる存在。

その1つ、アークエンジェル。

純白の母艦が彼の背後へと飛来してきた。

「デツケエエー?!」

この広い空間を覆い尽くす程のサイズを持つアークエンジェルの登場にアスラは度肝を抜かれた。

「余はこれでターンエンド」

手札：4

場：【アークエンジェル】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとした三王の1人エレン。次は彼の妹、エールのターンだ。

「ターン03」エール

「メインステップ!!…第二のアグモンをLV2で召喚!!」

1「アグモン」[2] LV2 (3S) BP5000

「おお!!…第二のアグモン!!」

エールは2体目で、第二のアグモンを召喚した。この第二のアグモンは彼女の母の代から既にデッキにあったモノであり、エールがデッキを進化させて入手したモノではない。

「さらにアタックステップ、その開始時に第二のアグモンの【進化・赤】を発揮させ、2番目のグレイモンを召喚!!」

1【グレイモン「2」】LV2（3S）BP6000

2番目のアグモンの身体が青白く光り輝き、その姿形を大きく変化させていく。そしてそれを弾き飛ばし、新たに現れたのは三本の立派な頭角を持つ恐竜型成熟期スピリット、グレイモン。

「召喚時効果でネクサス一つを破壊してカードをドロウします!!……アークエンジェルを破壊!!」

「!!」

2番目のグレイモンが登場するなり、口内から炎の塊を放出する。その炎の塊はエレンの背後に聳え立つ戦艦アークエンジェルを焼き尽くす………

かに見えたが………

「無駄だ。アークエンジェルの効果【弹幕・コスト5以下】………コスト5以下のカード効果を受けない」

「っ!!」

グレイモン程度の一撃では傷一つ付かないアークエンジェル。炎の塊は自然に消えて行った。

「どうしたエールよ、この程度か??……………それとも早々に怖気ついたか?!

「っ!!……………まだです!!……………グレイモンでアタック!!その効果【超進化・赤】を使って、赤の完全体、メタルグレイモンを召喚!!」

1【メタルグレイモン】LV2(3S)BP9000

グレイモンもまた青白く光り輝き、その中で姿形を大きく変化させていく。そして現れたのは左半身がサイボーグと化した完全体のデジタルスピリット、メタルグレイモン。究極進化ができないエールにとっては事実上のエースカードだ。

「よし来たメタルグレイモンッ!!これで怖いもん無しだぜ!!」

「アタックステップは継続!!アグモンとメタルグレイモンでアタックします!!」

「ライフだ。持っていくがいい……………」

△ライフ5??4??3△エレン

アグモンの鋭い爪の一撃とメタルグレイモンの左腕のアームによる一撃がエレンのライフを1つずつ引き裂いて見せた。

「よ、よし!!お兄様のライフを2つも破壊したわ!!……………ターンエンドです!!」

手札：5

場：【アグモン】LV1

【メタルグレイモン】LV2

バースト：【無】

強敵である実兄のエレンのライフを大きく削ぎ落とし、優勢に立ったと自覚したエレンはわかりやすい笑みを浮かべながらそのターンをエンドとした。

「ターン04」エレン

「メインステップ……………アークエンジェルのLVを2へ」

アークエンジェルにコアが追加され、そのLVが上昇した。そしてエレンは反撃すると言わんばかりに手札からある1枚のカードを抜き取る。

そのカードは三王である彼のデッキを支えるキーカード。オメガのカードに選ばれなかった彼が見出したカードの1つ。

「余はモビルスピリット、ストライクガンダムをLV1で召喚!!」

1 「ストライクガンダム」(1) BP4000

エレンの場に現れたのは青と白の装甲で彩られた機動戦士。名をストライクガンダム。全長6メートル程はある体軀をエールとアスラは見上げた。

「おお!!モビルスピリットオオオー!!!初めて見たぜ!」

「アンタどっちの味方してんのよ!?!」

初めてのモビルスピリットに興奮するアスラ。

『モビルスピリット』……………

それはライダースピリットとデジタルスピリットに並ぶ世界三大スピリットの3種目である。三王はこの三大スピリットのいずれかのデッキを所持し、尚且つその分野においては頂点を極めているからこそ『三王』の名を冠しているのだ。

「アタックステップ、ストライクでアタック!!……………その効果でコア1つをストライクに追加し、LV2へ!!……………さらにアークエンジェルの効果でもう1つ追加!!」

背中のブースターを起動させ、地面スレスレを高速で滑走するストライク。狙う先は当然エールのライフだ。

(……………タイミング早いけど、使うならここしかないわね……………)

その最中、エールは手札に存在していたあるカードを見つめていた。それはオメガ家のデジタルスピリット、その究極体『ウォーグレイモン』……………

今のこのタイミングでメタルグレイモンを対象に煌臨する事ができれば早々に勝利が目前と迫る事になる。

これを逃す手はない。

「……行ける……できる……私はもうエックスの出来損ないなんかじゃないッツ!!」

旅の道中でもアスラと共に散々特訓はした。今ならきつとできる。必ず成功を収める事ができる。お兄様にも認めてもらえる。

そう信じてエールは今こそそのウォーグレイモンのカードを手札から切った。

「煌臨発揮!!対象はメタルグレイモン!!」

「よっしゃ決めちまえエール!!」

エールを鼓舞するかのようにな大きな声を張り上げ、拳を強く握るアスラ。

そしてメタルグレイモンが真っ赤な炎に身体を包み込まれていく。究極進化のエフェクトだ。その圧倒的な火力を前に、滑走を続けていたストライクもその足を止める。

……しかし……

「っ!?!」

その炎は途端に弾け飛び、支払ったソウルコアはメタルグレイモンの上に、ウオーグレイモンのカードは手札にそれぞれ戻ってしまう。

エールの究極進化は失敗したのだ。

「……う、うそ……!?!」

いつもやっていた究極進化への失敗。それは至極当たり前のように彼女にとって何度も繰り返されてきたモノ。

しかし、この緊迫する状況もあって、今回のモノは今までのショックとは桁が外れている。

「……やはりな。どんなに泥汚い努力を積み重ねようと、オマエではソレを扱い切れない……!?!」

「そ、そんな………お願いウォーグレイモン!!今だけでいいわ!!…今だけでいいから私の言う事を聞いて!!お願い!!」

エールはそうカードに言い聞かせながら何度も究極進化を試みるも、結果はどれも同じ。いくらやつても上手くいかない。

「うおおおお!!!!頑張れエールウウウ!!オマエならできるぜえ!!」

アスラも声量を上げて必死こいてエールを応援するが、やはりダメだ。どうやつても、どう足掻いても彼女にウォーグレイモンは応えない。

そんな中、彼の兄、エレンはその様子に呆れて溜息を吐くと、手札から1枚のカードを引き抜いた。

「もう黙れエール。オマエのフラッシュユタイミングは終わった………次は余だ。フラッシュユマジック、光速三段突!!」

ー!!

「この効果によりメタルグレイモンをデッキ下へ!!」

「っ!!……そんな、メタルグレイモン!?!」

目では追えない光の刺突がメタルグレイモンを襲う。メタルグレイモンは力付き、倒れると、そのままデジタルの粒子と化してエールのデッキ下へと送られてしまった。

これでもう究極進化の対象にできるスピリットはエールの場にはいない……
彼女の戦略は完全に断たれたのだ。

「エール、余は本気で興が醒めたぞ……もはやこのバトルに大きな意味は無い。早々に終わらせてくれる……!!」

彼女の兄で、尚且つこの国の最強カードバトラー集団「三王」の一柱であるエレンは、妹に対して冷ややかな態度を取りながら、その手にあるカードを一枚引き抜いた……
そしてこう宣言するのだった……

「煌臨発揮!!対象はストライクガンダムツツ!!」

エールとアスラの運命やかに………

111コア 「エールの進化、ウォーグレイモン爆誕!!」

オメガ家に生まれ、オメガのカードに選ばれた少女エールは、昔からエックス族らしからぬ不器用な娘であり、非常に容量が悪かった。

そんな彼女を妹に持つ兄エレンはそれをエックス、及びオメガ家の恥とし、基本的に城の敷地内から外への外出を禁じた。曰く、『歩くだけで恥を晒しているから』らしい……

それでもエールは究極進化ができるようになる日を信じて努力を重ねていた。どんなに周囲の人間が自分に悪態をついても、彼らが弱い者がするものだと決め付けていた努力を怠る事は無かった。

ただ認められたいと思う一心で彼女は恥をかき続けてきたのだ。

しかし、その努力は一向に報われないまま、彼女が15になる年が訪れた……………

「『よお、エックスの出来損ないお嬢様』」

「『何よテンドウ、またからかいに来たわけ??』」

そんなある日、エールの前に三王の1人で、ライダースピリットを司るテンドウ・ヒロミがタバコを啜えながら現れた。

―『相変わらず態度だけはデケエのな。あつ胸もそこそこデケエか?』

―『うっさいわね!? ブン殴るわよ!?!』

―『あーはいはい、すんません……………実はよ、ちよつとばつかし面白そうな奴を見つけたんだが、オマエ今からオレと一緒にコロシアムに来ない?』

―『はあ!?!なんで私が下々の者に顔を合わなきやいけないのよ!?!』

当然の反応だ。エールはこのエックスの者達が住う城の敷地内から外へ出る事はないのである。エレンに禁じられている。街にある闘技場など行けるわけがない……………

―『そこで今日行われるのがこの国を旅する新人共が集まる『新人交流戦』だとしてもか??!』

―『!?!』

……………『新人交流戦』

齡15になる者達が集い、バトルスピリッツを行う昔からの習わしである。

「『オマエもいつまでも籠の中の鳥でいるわけにはいかねえだろ?……いい加減あの頭のお堅い兄貴から脱してもいいんじゃない?……まあ全部オマエの勝手だけ』」

「『………わかった。行ってあげるわよ』」

それがアスラとロンがバトルした新人交流戦である。エールはあの時偶然ではなく、テンドウによって必然的にアスラと出会っていたのだ。

そしてエールはこの瞬間から兄であるエレンに黙って旅をする事になったのだ。その後はローザの報告書でエレンの耳にその情報が入ってしまったのは言うまでもない

……………

「エール、余は本気で興が醒めたぞ………もはやこのバトルに大きな意味は無い。早々に終わらせてくれる………!!」

場面は戻り、今現在、オウドウ都の三王が集う鉄塔にて……………

彼女の兄で、尚且つこの国の最強カードバトラー集団「三王」の一柱であるエレンは、妹に対して冷ややかな態度を取りながら、その手にあるカードを一枚引き抜いた……………
そしてこう宣言するのだった……………

「煌臨発揮!!対象はストライクガンダムツツ!!」

ー!!

「現れよ、我がエース!!……………フリーダムガンダムツツ!!」

ー【フリーダムガンダム】LV2(2)BP9000

エールに見せつけるかの如く、エレンは彼女が失敗した煌臨を發揮させる。

彼の背後から飛び立ったのは光輝く何か。それは彼の場に佇むストライクガンダムと一筋の光明と共に重なりて、世に機械の身体を実体化させ、場へと顕現する。

その名はフリーダムガンダム。

全体的に白いボディと青い翼を持つモビルスピリットであり、三王の1人であるエレンのエースと呼べる存在である。彼はこのスピリットで多くの並いる挑戦者達を蹴散らしてきた。

「ふ、フリーダム……お兄様のエース……っ!!」

究極進化にも失敗し、正に泣きつ面に蜂の状態に陥っているエール。よりフリーダムの存在が際立ってしようがない。

ただ、エレンはそんな彼女に容赦するわけもなく……
その効果を起動させる……

「フリーダムの煌臨時効果!!……スピリット2体をデッキの下へと消すツツ!!」
「!!」

「対象とするのは残ったアグモン!!……余の前から消え失せる!!」

フリーダムは登場するなり、ビームサーベルを手に持ち、それを全力で振るって突風を発生させる。エールの場に唯一残っていたアグモンはそれに吹き飛ばされ、デジタル

粒子も化してデツキの下へと消えてしまう。

「アグモン!？」

「さらに煌臨によりアタックは継続中!!」

アグモンを消しただけでは終わらない。フリーダムは翼部にあるブースターを逆噴射させ、地面スレスレを低空飛行する。狙いは当然ガラ空きとなったエールのライフだ。

「っ!!……ライフで受けます!!……っ!!」

〈ライフ5??4〉エール

フリーダムはジャベリン状に伸びたビームサーベルを回転させ、エールのライフ一つを難なく斬り裂いた。

「さらに!!バトル終了時、オマエのライフ一つを追加で破壊する!!」

「っ!!……キャアアー!!!?」

「エールーー!!」

〈ライフ4?3〉エール

フリーダム ofs らなる効果だ。その手に持つビームサーベルはエールのライフをまた一つ斬り裂いた。エールの明らかな絶対絶命の状態に、アスラは思わず彼女の名を叫ぶ。

「……………ターンエンド」

手札：2

場：【フリーダムガンダム】LV2

【アークエンジェル】LV1

バースト：【無】

エールとの圧倒的な実力差を見せつけ、そのターンをエンドとするエレン。

(負けられない……………負けたらもう二度とアスラに会えなくなる……………それだけは嫌!!)

究極進化ができなかった事とフリーダム急襲により、既に身体も心もボロボロになつてしまったエール。

だが、このバトルに敗北して仕舞えば、アスラはカラーリーダーへの挑戦権を剥奪され、自分は城の敷地内から出られない生活に逆戻り。二度と彼と顔を合わせる事ができなくなるのだ。

それだけは絶対に回避したい。

その思いだけが今の彼女を奮い立たせていた。

「お、お兄様……………私、まだやれます!!」

エールは立ち上がり、自分のターンを進行する。

「ターン05」エール

「メインステップ!!アグモンとグレイモンを再召喚!!」

ー【アグモン「2」】LV1(1)BP2000

ー【グレイモン「2」】LV1(1)BP4000

エールの場に成長期スピリットのアグモン、成熟期スピリットのグレイモンが現れる。

エレンのライフは残り3つ。強力なモビルスピリットであるフリーダムガンダムが疲労状態である今、早急に勝負を決めたいところではあるが……

「……………ターンエンド」

手札：4

場：【アグモン「2」】LV1

【グレイモン「2」】LV1

バースト：【無】

エールは敢えてそれらをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとした。

「フンツ……この余を相手にしておいて後手に回るとはな……愚かな妹よ……!!」

「か、構いません!! 次のターンを凌いで必ず勝機を探し出しますッ!!」

「つしやあ!! よく言い返したぜエールウウウー!!」

「だからアンタはうっさいのよ!!」

エレンの色は防御に特化した白。ターンが長引けば長引く程彼にとつて有利な戦場と化していく事は明白。エールの選択が正しいかは疑いの余地がある。だが、仮にそうだとしても一度した選択は変えられない。

ターンは切り替わり、三王エレン・オメガが自身のターンを進めていく。

「ターン06」 エレン

「メインステツプ……全てのカードのLVを最大まで引き上げるッ!!」

コアが追加され、フリーダムと母艦であるアークエンジェルのLVが最大限まで上昇した。

「アタックステップ!!…フリーダムよ、天を翔ける!!…アークエンジェルの効果でコアを追加!!」

【フリーダムガンダム】(4??5)

エレンの指示に従い、フリーダムが青い翼を広げて宙を翔ける。狙いは当然エールのライフ。だが、その眼前にはそれを阻むかのようにアグモンとグレイモンが待ち構えていて……

「アグモンでブロック!!」

フリーダムは効果によりそのアタックをまともに受けて仕舞えばライフが2つ破壊されてしまう。エールはそれを回避すべく、バトルでは敵わないことを知っていながらもアグモンでのブロックを選択した。

そして彼女のこの判断を察していたかの如く、エレンは手札から1枚のカードを引き抜いて……

「フラッシュマジック、「あなたを守るから」!!……バトル中のフリーダムを回復させる!!」

ー【フリーダムガンダム】（疲労??回復）

「!!」

フリーダムガンダムが一瞬のみ白い光を帯びて回復状態となる。これでこのターン中に二度のアタックが可能となった。

そしてバトルの結果は言うまでもなく、アグモンは瞬く間にフリーダムのジャベリン状のビームセイバーに切断され、破壊された。

「フリーダムのアタック時効果、追加でオマエのライフをもらおうぞ!!」

「ぐっ?!?」

〈ライフ3??2〉エール

フリーダムがビームサーベルを振るい、エールに追撃を行う。そのライフ1つは容易く斬り崩された。

「まだ行くぞ、飛べフリーダム!!」

「ツ……グレイモンでブロック……!!」

容赦無い攻撃を続けるオメガ家の長男エレン。対してその妹エールは傷つついて弱り切った声を絞り出して、敵うはずがないグレイモンに儆くもブロック宣言を行った。

グレイモンは瞬きさえする間も無い速さでフリーダムに斬り刻まれ、大爆発を起こしてしまふ。

「効果でライフを破壊するツ!!」

「ツ……う、うあああああ!!!」

〈ライフ2?!〉エール

またしてもフリーダムがエールのライフを1つ斬り裂いた。エールは余りのダメー

シ量に呻き声を上げ、その場で膝を落としてしまう。

「ターンエンド……………エール、何を跪いている……………仮にも誇り高きオメガ家の人間がこの程度で折れる事は許さんぞ……………!!」

手札：2

場：【フリーダムガンダム】LV3

【アークエンジェル】LV2

バースト：【無】

傷ついた妹に実の兄が放った言葉は果てしなく冷ややかで、その視線は果てしなく冷たかった。とてもでは無いが実の妹に向けていいものではない……………

「デメエ……………いい加減にしやがれツ!!エールをなんだと思っただ!?…妹じゃねえのかよ!?!」

エールに対して冷たい態度を取り続けるエレンの言葉にブチ切れるアスラ。

「余に対して口を聞くなコモンのドブネズミ。オマエに発言権は無い」
「んだとオオオー!?!」

コモンのアスラの言葉には聞く耳すら持たないエレン。アスラは呆れて今度はエールの方に顔を向けると……………

「くっ……………おいエール!!…もうこんなバトル止める!!」

「っ!!」

「オレは挑戦権なんか無くったって頂点王になってやる!!…オマエがそこまでボロボロになってまでやる事ねえよ!!」

跪いているエールに向かって必死にそう告げるアスラ。仲間想いの彼らしい言葉である。エールがこれ以上傷つくのであればカラーリーダーの挑戦権なんか要らない。そう考えているのだろう。

だが……………

「うっさいわね……………私はエックスよ、この世で最も気高き存在。コモンのアンタに口

答える権利は無いわ……!!」

「!!」

震えた声でアスラを罵りながらゆっくりと立ち上がるエール。その声色や表情からは不思議とほんのり余裕を感じさせるものがあつた。

そんなアンタのためにこの私がバトルしてあげてるのよ!?!……光栄に思うことね!! わかつたららしく無い弱音吐いてないでそこで黙って見てなさい!! 今に逆転してあげるわよ!!

「…………エール…………」

本当は恐怖の対象である兄を目の前にして今にも逃げ出したいはずなのに、強気な態度を取るエール。そんな彼女の言葉から感じ取れたのは確かな覚悟。

究極進化が出来なくともこれを取り越えようとしている度胸が確かに確認できて

……………

ただ、昔のままのエールだったらとつくに諦めていた事だろう。

何事においても最後まで諦めないアスラが彼女のそばにいたからこそ、その熱が飛び火し、今のエールはこのバトルを投げ出さないので。

「……………へへ……………つしやあ!!……だったら任せませ!!オレはオマエが勝つて信じる!!」

あのプライドが高くて高飛車なエールがそこまで言うのだ。アスラは笑いながら腕を組み、エールの勝利を待ち構える事にした。

「ふんっ……………やってやるわよ、究極進化が出来なくても、私はこのバトル、エレンお兄様に勝つてみせる!!」

エールはいつもの偉そうな口調で宣言した。昔のエールだったら「兄に勝つ」と告げるなど信じられない光景である。

「くだらん戯言を口にするなエール!!……………そんなドブネズミとつるむからオマエはそこまで腐つたのだ……………今オマエからソイツを引き剥がしてくれる……………!!」

「嫌です!!」

「!!」

エールは声を張り上げ、兄であるエレンに反論する。

私はもつとこのアスラと旅がしたい!!コイツがいつか頂点王になるその瞬間まで一緒にいたいツツ!!

だから私はこのバトル、必ず勝つてみせます!!例えば三王の1人であるエレンお兄様だとしても、必ず!!

エールの心からの叫び。本音。

「もつとアスラと一緒にいたい」

その言葉が兄であるエレンの耳を通過すると、彼は額に血管を浮き上がらせ、より怒りを露わにするような表情を見せる。

だが、その瞬間だ。

「……………え!?!」

思わず声を荒げるエール。

無理もない。何せ、Bパッドにセットしている自分のデッキが突然赤く光り輝き出したのだから……………

それはまるでアスラのために戦うと胸に刻んだエールの覚悟に応えるかの如く、燃えるように煌めいて……………

ただ、その現象自体はなんら珍しいものではない。それは紛れも無く「デッキの進化」であるのだから……………

「うそ、これって……………」

「エールのデッキが……………進化!？」

「……………なんだと……………代々受け継がれているオメガのデッキが進化するだ?!？」

エールの持つオメガのデッキは先祖代々受け継がれているものだが、その長い歴史の中で一度も「進化した」と言うものはない。

それはオメガのデッキが既に完成されたものであるからである……………

だが、エールはその概念を覆し、オメガのデッキを進化させてみせたのだ。この功績はエールが継承者の中では初である。そのため、三王であるエレンもこの光景には流石

に驚愕の声を上げてしまう……………

無理もない。よりにもよって進化させたのが、あの究極進化もできない出来損ないである実の妹、エールなのだから……………

「つしやあ!!…:行けるぜエール!!ブチかませエエー!!」

「だからうっさい。黙って見てなさいって言ってるでしょ……………アスラ!!」

デッキの光が静まる。進化し終えた証拠だ。

その表情に笑みを溢しながら、アスラのため、そして己を超えるため、エールはこのターンに全力を注ぎ込む……………

「私のタアアアンツ!!」

「ターン07」エール

ターンを進める中、ドローステップでエールがドロートしたカードはやはりこのデッキには存在しなかったカード。エールがデッキを進化させた確かな証でもある。

エールはこのバトルで勝利を収めるべく、それを出し惜しみなく使用する……………

「メインステップ!!……私は、第三のメタルグレイモンを召喚!!」

ー【メタルグレイモン【3】】LV3（4）BP11000

「ツ……第三だと!？」

地響きが唸りを上げ、地中よりエールの場へと飛び出して来たのは紛れも無く身体の半分がサイボーグと化している恐竜のスピリット、メタルグレイモン。

だが、その雰囲気や佇まい、醸し出しているオーラが全く違う。正しく「3」の名を持つカードと言えよう……………

「オオオオオ!!スゲエゼエールツツ!!」

「当然よ!!……私はこのデッキでエレンお兄様に勝利してみせる!!……アタックステップ

!!…3のメタルグレイモンでアタックツツ!!」

3のスピリットの登場に興奮するアスラ。そしてエールはそのスピリットにアタックの指示を行い、3のメタルグレイモンはそれを聞くなり機械化されている左手のアームを射出した。

「アタック時効果、相手のネクサス一つを破壊!!…アークエンジェルを撃ち落とせツツ!!」

「!!」

その飛ばされたアームは一直線に母艦であるアークエンジェルへと伸びていき、それを貫通。アームがメタルグレイモンの元まで戻ると、アークエンジェルは大爆発し、その破片は地面に叩き落とされた。

アークエンジェルが効果を受けないのは「コスト：5以下」まで、コスト6である3のメタルグレイモンの効果までは凌ぎきれなかったのだ。

「さらにターンに一度、回復するツツ!!」

ー【メタルグレイモン「3」】（疲労??回復）

「スゲエ!!3のメタルグレイモンは無条件で回復できるのか!!」

赤い光をほんの一瞬だけ帯びるメタルグレイモン。それは回復状態となった事を意味しており、このターンは二度目のアタックが宣言できる。

……しかし

「アークエンジェルを落としただけでいい気になるな!!……フラッシュマジック、スクランブルブースター!!」

「っ!!」

「フリーダムを指定!!……それによりこのバトルの間フリーダムは疲労状態でのブロックが可能となる!!」

「や、ヤベエ!!……BPじゃ3のメタルグレイモンよりフリーダムの方が上だ……!!」

……ここに来てさらなるカウンターを切ってきた三王エレン。このままでは3のメタル

グレイモンを破壊され、再びエールが窮地に陥ってしまう……………

かに見えた……………

エールの手札にある1枚のカードが赤く光り輝き出した瞬間までは……………

「ツツ!!……………ウォーグレイモン……………!?!」

その輝いたカードの正体はオメガのカード。その究極体である「ウォーグレイモン」のカード。今までエールが幾度となく進化を試みたカードだ。今まで一度も出来なかったそれへの進化。

だが、今回は何か違った。まるでウォーグレイモン自身がエールに対して「煌臨させろ」と告げているかのような、そんな反応を示していたのだ。それを感じたエールは己とカードを信じて手札の煌めくウォーグレイモンのカードを引き抜いた……………

「ブロックされるその前!!……………フラッシュ【煌臨】を發揮!!…対象は第三のメタルグレイモンツツ!!」

「つ!!……………何度失敗すれば気が済む!!……………オマエではそのカード、ウォーグレイモンは扱えないと言っているだろう!?!」

メタルグレイモンが巨大な咆哮を放つと、それに合わせて極熱の炎がその身体に纏わりついてくる……………

究極進化のエフエクトだ。

今まで何度もメタルグレイモンの身体を離れて行つたそれは徐々に徐々にそこへと吸収されていき、メタルグレイモンの姿形を全く別のものへと変化させていく……………

諦めない!!……………ライフが尽きるその時まで、諦めないのが私のバトスピッツ!!

メタルグレイモン、究極進化アアアア!!!

ウオーグレイモンツツ!!

エールが究極進化を、その究極体の名を叫んだ。炎に包まれたメタルグレイモンだったそれは腕に備え付けられた鉤爪のある籠手を振るい、その炎を吹き飛ばして姿を見せる。

そこにいたのは究極体スピリット……………

最強の竜戦士……………

エールのエーススピリット……………
ウォーグレイモンだ。

「……………あ、あのエールが究極進化させただと……………!?!」

「へへ、やったな、エールツツ!!」

遂に究極進化を成し遂げたエール。それを祝うかのように拳を固めてガッツポーズして見せるアスラに対してエレンは動揺を隠し切れないでいた……………

ただ、一番喜んでいて、興奮で身体の震えが止まらなかったのはエール自身だ。だが、彼女は一旦その考えを捨て、先ずはこのバトルの勝利を収めるべく、煌臨時効果を宣言するのだった……………

「ウォーグレイモンの効果!!……………BP15000まで好きなだけスピリットを破壊する

!!」

「!!」

「BP12000のフリーダムを破壊ツツ!!……………ブレイブトルネードツツ!!」

ウォーグレイモンは登場するなり両腕を天に向け、身体を高速で回転させた。そしてそのままドリルの如くフリーダムへと突撃していく。

余りの速さに避けられないフリーダムは咄嗟に粒子でできた防壁を展開するも、ウォーグレイモンはそれを一瞬で貫き、フリーダムをも貫いてみせた……

フリーダムは堪らず爆発してしまう。

あのエックスの落ちこぼれだと言われ続けていたエールが三王の1人で、尚且つ兄であるエレンのエーススピリットを破壊してみせたのだ。

「……アタックは継続中です!!」

「くっ……ライフだ……っ!!」

へライフ3??2へ エレン

ウォーグレイモンはフリーダムを貫いたドリルの状態のままエレンのライフを破壊し、ここでようやく回転を止め、地へと足をつける。

「さらに!!……ウォーグレイモンのLV2、3のアタック時効果!!……トラッシュユにある

ソウルコアをウォーグレイモンに置く事でライフ1つをボイドにツツ!!」

「っ!!」

「行け……ガイアフオーズツツ!!」

「ぐっ……ぐおおおおお!!」

〈ライフ2?!1〉 エレン

ウォーグレイモンが両手を合わせ、その間に球体の炎を形成していく。それは両手の間隔を広げていくと共に、肥大化していき、ウォーグレイモンはそれが最大限の大きさになると、エレンのライフに投げつけた。

エレンのライフ1つはそれをくらい、たちまち消し済みになってしまう。

「おお!!オマエの究極体スピリットスゲエぞエールツツ!!……勝利まで残りライフ1つだけえ!!」

「ふんっ!!このくらい当たり前よ!!（やった〜!!……遂に究極進化できた〜!!）」

エールを褒めちぎるアスラ。エールは偉そうに肩にかかった赤茶の髪を「ファサツ」

と靡かせ、偉そうな態度を取るが、内心では果てしなく大はしゃぎし、喜んでいた。

(……………エールが究極進化を……………だが何故だ。何故今になってそれが可能となった!?)

アスラとエールが会話する光景を目に移しながら、兄であるエレンは推理していた。単純に考えれば「エールのデッキが進化したから」と言うのが妥当ではあるが、彼はどうもそれだけでは腑に落ちなかった。

その因果関係は何なのだとどうしても勘繰ってしまふ……………

(……………まさか、あのアスラとか言うドブネズミがそれを促したとでも!?)

咄嗟に思いついたのはアスラと言う存在。彼との旅がエールの成長の一端になったと考えてしまふ。

そう思ってしまうと、彼はバトルに対する意欲が無くなってしまい……………

「余の負けだ……………オマエなどもう知らん。勝手にするがいい……………!!」

「「え!?!」」

BパッドのバトルモードをOFFにし、デッキをしまい直すエレンに、思わず口を揃えるアスラとエール。

無理もない。散々な事を言ってきた挙句の果てにサレンダーして来たのだから。負けは認めているものの、態度や振る舞いから、アスラから見ればどう見ても負け惜しみにはしか見えなくて……

「オマエ!!逃げんのかよ!?!」

「そう思いたくばそう思っておくがいい」

「あ、あのお兄様……」

「聞こえなかったかエール、勝手にしろと言ったのだ。どこへでも出ていくがいい……!!」

「は、はい……あ、ありがとうございます!!」

罵倒するつもりで差し向けたエレンの言葉をポジティブ思考で捉えるエール。いや、これは単純にアスラとまた一緒に旅ができると思ったからこそその「ありがとう」と言う返答なのだろう……

「おいおい、終わっちゃったよ。せつかく負けそうになったら助けてやろうと思つてたのよ」

ー!?

彼らにとつて聞き覚えのある声はどこからか響いて来た。その声主は当然ながらアスラとエール、そしてエレンもよく知る人物であつて……

「テンドウ!？」

「テンドウさん!?!……ギャンブルとか言うやつに行つてたんじやないんすかアアア!?!」

「ああ!?!誰が行くつつた?……殺すぞ小僧」

「えええええ!?!…すんませんツツ!!」

姿を見せたのはこの国の三王の1人であるテンドウ・ヒロミ。アスラは逆らつたら何をするかわからない彼に全力で頭を下げて謝罪した。

どうやらテンドウはこのバトルが始まる前からここにいたらしく、もしもの時に弁護しようとしていたらしい。まあ、自由気まますぎる彼にまともな弁護ができるかは定かではないが……

「エール」

「何よ？」

「究極進化……できたじゃねえか。やったな」

「っ!!……と、当然よ!!私はこの国で最高の身分を持つエックスなんだから!!（ほ、褒められた〜!!）」

棒読みで雑だが、珍しく誰かを褒めるテンドウ。エールはまた言葉でツンケンしながらも、内心では褒められた事を喜んでいた。

「覗き見とは、趣味が悪いなテンドウ」

「オメエも実の妹痛みつけるとか、趣味悪すぎだぜ、エレン。そんなんじやいつまで経っても女にモテねえぞ」

「人聞きの悪い事を言うな。そして余はオマエの百倍はモテる」

睨み合う三王の2人。その目線の間には火花が飛び散る。エレンはどうやら異邦人であるテンドウの事はあまり快く思っていないようである。

「まあいいや。おいオマエら。堅つ苦しいエックス様のありがた〜いお説教は終わりだ。この後休憩挟んでオレと付き合え」

「ええ!?!付き合うってどこに?!」

「因みにオマエらに拒否権は無い」

「なんでええ!?!」

テンドウはアスラとエールの肩に手を置き、この場から連れ出そうとする。どうやら彼らをどこかへと連れていきたい様子。

「つて言うか小僧、あのオレンジ犬はどうした?……ちゃんと世話しろつつつたら、殺すぞ」

「アイツ勝手にどっか行ったんすよオオオー!!!」

「ムエの事すっかり忘れてたわ……………」

アスラに謎のオレンジ小動物ムエの世話を押し付けていたテンドウがアスラにそう言った。アスラもエールもこのオウドウ都に来てから急に行方不明になったムエの存在をすっかり忘れ去っていた。

まあこれだけ濃ゆい時間を過ごしてしまえば無理もないが……

「つたく……ほれ、行くぞ小僧」

「オウツス!!……エールも行こうぜ!!」

「ええ………あ、あのお兄様………」

「なんだ……とつとと去れ、出来損ない……」

広大な一室から去っていくアスラとテンドウ。それを他所に、エールは最後に一言何かを言いたかったのか、1人立ち止まり、兄の方へと顔を向けた……

「私の旅を許してくださいって、ありがとうございますツツ!!……いつか必ず帰って来てオメガ家の役に、いや、お兄様のお役に立って見せますツツ!!」

力強いエールの宣言。ただ、エレンはそれに対してあまり関心を示していないのか、視線を逸らし、後ろを振り向いて……

「何度も同じ事を言わせるな。去れ、出来損ない……どこにでも行け……」
「はい!!失礼しました!!」

そう告げて、エールもまたアスラ達を追ってこの場を去って行った……
唯一無二の妹がその扉を閉めた……
その途端だった……

「……………はあく」

1人この場に残っていたエレンが大きな溜息をこぼした。

「何故余は妹の前では素直になれんのだ……こんなにも妹を愛しているのに……何故キツく当たってしまうのだ……」

さっきまでとは信じられない言葉を口にし出す三王エレン。あれだけの事を言っておきながら今更「妹を愛している」はどこかおかしい気もするが……………

「何はともあれ、初のウォーグレイモンへの究極進化……おめでどう、我が妹エールよ、心より祝福しよう……………!!」

誰もいないが勝手にエールの進化を祝うエレン。ただ、そこから伝わって来るのはエールへの確かな愛情……………

「そして必ず無事帰って来い……………そうだ。あのドブネズミ……………余のエールに何かあってみる、ただじゃおかんぞ!!……………と言うか何なのだアイツは、エールに馴れ馴れし過ぎじゃないか!？」

エレンがアスラからカラーリーダーへの挑戦権を奪いたかった真の理由は「エールの保護」だ。

エレンは表向きではエールの事を「出来損ない」だと言ってはいるが、そんな事微塵も思っていない。況してや優れているとまで考えている。彼女が幼い頃から城の敷

地内から出られなかったのは、単にエールが可愛過ぎた故の事……………

まあ、要約すると、エレンはエールに対して「過保護」なのだ。それも異常な程に……………しかもそれをエールに気づかれぬように振る舞っているのだからより怖さが増す……………

この男、三王の一人にして、究極のツンデレなり……………

「最後の声、可愛かったな。直視できなくて思わずそっぽを向いてしまった……………まあできれば、昔みたい「お兄ちゃん」と呼ばれたかった気もするが……………」

エールが自分に向けた最後の表情、声色が余りにも可愛すぎて直視できなかったエレン。ここまで考えだすと最早シスコンの枠組みなどとうに超えているように思えて来る……………

こんな兄を持ってしまったエールが気の毒でしょうがない……………

ツンデレという点では似ているかもしれないが、男と女とでは需要と言うものが違う……………

ああ、愛しの妹、エール!!!

頑張れ!!

遠く離れていても余はオマエを応援しているぞ!!

そしてエレンは最後に大きな声を張り上げ、居もしないエールに声援を送ったのだ
た……………

「どこだよ〜テンドオオオ〜!!」

一方、頂点王シイナ・メザはテンドウが居そうな賭博場へと足を運んでいた。トラン
プやダーツなど、それらしい賭けのギャンブルゲームを楽しんでいる人々で賑わってい
たが、そこにテンドウらしき人物はいなかった。

当然だ。テンドウは最初から三王のある鉄塔でスタンバイしていたのだから…………

「あ、アレって頂点王シイナだよな!？」

「なんでこんな所にいるんだ……………」

「お金沢山持ってたらギャンブルの1つでもやりたくなるんじゃない?」

流石に人が多い所ではシイナは目立つか、周囲の人々がシイナを見てざわつき出した。

「ん〜困ったな……………このままじゃアスラ本当に挑戦権無くなるぞ〜」

全ての事情を把握していたシイナはそう呟いた。今考えるとテンドウなんか頼りにしないで自分だけでアスラを弁護すれば良かったと後悔している。

と、そんな時だ。背後から聞き覚えの無い声が複数聞こえて来たのは…………

「おいちよつとそこのお姉さん〜!!」

「オレらと遊ばな〜い!!」

「楽しいぜ〜!!」

「ん? 何アンタら」

所謂ナンパか。目の前にいるのが頂点王だと知らずにちよっかいをかけて来た男性が計3人。太っているのと、細長くて猫背なのと、それらを足して二で割ったくらいに体格でメガネをかけている如何にも「小物三人衆」と言う称号が似合いそうな3人組だった。

「悪い。遊ぶなら今度ね。今私忙しいんだ〜」

シイナは今急いでいる。早くアスラの元に行つて挑戦権が剥奪されないよう弁護しなければならぬからである。

しかし……………

「え〜〜いいじゃんいいじゃん!!」

「せっかく賭博場にいるんだからさ!!」

「楽しまなきやそんな!!…………オレらと遊ぼうぜ〜!!」

シイナを逃すまいと周囲を取り囲む小物三人衆。シイナは流石にイラツと来たのか、オレンジの長い髪が逆立っていき……………

「……………邪魔、しないでくれる?！」

—!!!

シイナがそう言いながらBパッドを展開して約数分後、小物三人衆は気を失い、その場に倒れ込んでいた……………

「なあ、テンドウさん……………ホントにこんな事してムエが戻って来るのか!？」

「オレに間違いは無い。それ取ったら殺す」

「えええええ!？」

三王の鉄塔から出て繁華街に出たアスラ、エール、テンドウ。そしてアスラはムエを見つけるため、テンドウの提案の元、何故か頭の上に大きめのドーナツを乗せながら歩いていた……………

テンドウ曰く、これに誘われてムエが戻って来るのだと言う……………
犬は鼻が良いとは言え、にわかには信じられない事だが……………

「チツ、タバコがねえ……………おいオマエら、ちよつとそこでタバコ買って来いや」
「なんで未成年にタバコ買わせるのよ!?!…自分で行きなさい!!」
「え〜…だる」

ニコチンが切れてイライラし始めて来たテンドウ。渋々タバコを買いに一旦アスラ達の元を離れる。アスラとエールは2人きりで彼を待つことになった……………

そう、2人きりで……………

「そーいやエール!!」

「え?…何よ?」

「助けてくれてありがとな!!オマエのお陰でオレ危うく挑戦権が無くなるとこだったぜ!!」

「ツツ!!……………べ、別にアンタのためにやったわけじゃ無いわよ!!……………私は私のため、お兄様に認められるためにバトルしたんだから、勘違いしないでよね!?!」

結果的にエールに助けてもらったアスラは改めて彼女に礼の言葉を伝えた。エールは顔が赤くなって咄嗟に彼を突き放すような言い方をしてしまう……

だが、「私のため」と言うのは本当の事でもある。エールは「アスラと旅を続けたいから」バトルをしたのだから……

「へへ、わかってるって!!……これからも頼むぜ、『パートナー』!!」

「へ!?!…パ…パ…パ…パートナー!?!」

アスラは良い加減素直にならないエールの性格を理解して来たか、切り返してそう言った。が、流石に自分に向けられた好意までは見抜けていなかった。

エールは彼の口から出た『パートナー』と言う言葉に思わず顔を今まで以上に真っ赤に染め上げてしまう……

当然、アスラのここで言う『パートナー』とは恋人夫婦仲のことではなく、旅の相棒として頑張ろうと言ったニュアンスだった。

「パ、パ、パ、パ、パ………」

「ムエ!! テメエ、いつの間に!?!」

「ああ良かった〜どこ行つてたのよ私のムエ〜!!」

「むえ〜」??このドーナツうめえ〜

安堵するエール。謎のオレンジジ小動物ムエはその後アスラの頭の上にある大きめのドーナツを食し続けていた……………

何はともあれ、数々の七転八倒、四苦八苦を繰り返しながらも、アスラ達の旅はまだ続く……………

12コア 「仮面ライダーカブト」

バトルスピリッツが全てのとある世界。

その世界でソウルコアが使えないと言う前代未聞の謎体質を持つ少年アスラは、ガムシヤラに最強の証である頂点王を目指している。

「さあ着いたぞ、ここがオウドウ都一のシヨツピングモール、『オウドウモール』だ」

「うおおおおお!!! デツケエエー!!!」

「むえええええ!!!」?? 便乗

「オメガ家の城よりはちっちゃいわね」

エールの兄、エレンによるアスラの挑戦権剥奪の件から約数時間が過ぎた。アスラとエール、ムエはテンドウに連れられ、オウドウ都で最も巨大なシヨツピングモール、『オウドウモール』に着ていた。

「な、なんかスゲエな。ちよつと科学の進歩的なモノを感じる……!」
「頭悪いクセに何無理してそれらしい事言おうとしているのよアンタは」

アスラの目の前に聳え立つコンクリの塊（ショッピングモール）は彼が田舎者と言うのもあつて未知数。

「てか、テンドウさん。こんなデツカイところで何を買いに来たんすか?」

アスラは純粋な疑問をテンドウに投げた。正直なところ、アスラはライバルである口ンが既に向かっていであろう3番目のカラーリーダーがいる町に向かいたい。

だがしかし、テンドウの誘いを断れば殺されかねないため、渋々着いてきているのだ。

「何買いに来たつて、そりや冬服をな。どうせオマエら1着も持つて無いんだらう??
……オマエ達が次に行く町は『ユキカイ町』つつつて、年中真冬なんだよ。オレもちよつとそこに用があつてな、オマエ達一緒に行つてやろうつてこつた」

「ツ!!……テンドウ、アンタも一緒に来んの!?!」

「ああ、取り敢えずユキカイ町までな……なんだエール、オマエ嫌なの??」

「うーん、まあ少なからず熱苦しい男が増えるのは嫌ね……って言うか、私は城に帰れば服なんていっぱいあるんだけど」

テンドウはどうやらアスラ達の次の目的地である年中真冬の町「ユキカイ町」に用があるらしく、どうせなら一緒に行くか的な感じで一時期彼らの旅に同行するようだ。

「おお!!一緒に来てくれるんすかテンドウさん!!」

「オマエは変わらさうっせーな……まあいいや、よし!!冬服買いに行くぞ!!」

「っしやあ!!行くぜエエエー!!………あ」

「どうした小僧」

テンドウとアスラが勢いよくショッピングモールへと足を踏み入れようとした直後、アスラは思わずその足を止めてしまった。

どうしても気になる事があったからだ。

「そう言えばテンドウさん。オレ冬服買えるだけのお金があるかわかんないんですけど………」

そう。アスラの財布事情だ。元々貧乏人のアスラは服も今着てる一着しかない事もあり、服を買った事がない。因みに今着ている黒いパーカーとかダボダボの黒いズボン等は全て頂点王シイナのお下がりだ。

アスラは本能的に財布が空になるのを恐れていたのだ。

「ああ!?!…んなモンそこの金持ちエックスお嬢様から借りれば問題ねえだろうが」

「仲間からお金は借りたくねえっす!!」

「別にいいわよ、お金なんか持つてても重たいだけし」

「おのれエックスウウー?!?!」

そう言いながら、エールは金貨がこれでもかと詰められた小袋をアスラの両掌に置いた。その貧乏人にとっては嫌味とも取れる行動にアスラは思わず発狂する。まあ、別にエールに悪気があつたわけではないのだが……

まあ、何はともあれ、ようやくアスラ達のショッピングモールが幕を開けた。開始早々、オウドウモールの異常なまでの広大さにアスラが大きな声で騒いだのは言うまでもない。

そしてその後はアスラテンドウ組とエールムエ組に分かれ、それぞれ自分の服を買いにオウドウモールを歩き回った……………

「はあく……………いつかエールにお金返さねーとな……………」

ショッピングモールの冬服コーナー。そこに所狭しと並ぶ冬服を掻き分けながら、結局エールにお金を借りる羽目になってしまったアスラはそう呟いた。いくら超絶お金持ちのエールからとは言え、仲間からお金を借りた事に少なからず罪悪感を感じていたのだ。

アスラは密かに何かしらお金が得られたらエールに借りた分のお金を返そうと言う志を胸の内にした。

「つーかよテンドウさん……………シイナどこ行ったか知らねえっすか??……………鉄塔で別れてからそれつきりで……………一応テンドウさんを探しに行ってたんだけど」

「オレに聞くな。どっか行ったんじゃないね??……………アイツが考えてる事は昔からわからん」

ふと、思い返し、アスラがテンドウに訊いた。

テンドウを探しに行つてからすつかり姿を潜めてしまった頂点王シイナ。アスラはそんな彼女の行方が気になっていたが、テンドウはそれに対して興味なさそうに言い返した。

「てか、別に気にかける事ないんじゃないかね?……オマエは頂点王になるんだろ??今の頂点王がどこにいるかなんて気にしてどうするよ」

「ッ!!……確かに!!カラーカード6枚集めりやどっち道またシイナに会える!!……っしやあ!!待つてるシイナアアア!!次に会う時はカラーカードを6枚集めた時だアアアア!!!……そんな時はゼツテー勝つてオレが頂点王になってやるからなアアアア!!!」

(……やっぱコイツ扱い易いな)

テンドウにそう言われた途端。急速な速さで納得するアスラ。カラーカードを集めて改めて頂点王シイナに挑戦してやると胸に刻んだ。

テンドウは単細胞で言いくるめ易いアスラに思わず内心で扱い易いと感じていた。

「あと小僧、オマエいい加減服決めろや。女じゃあるめえし、殺されてえのか?」「すんませんツツ!!! さっさと選びますウウウー!!」

テンドウに急かされ、と言うか脅され、服選びに戻るアスラだったが、彼は思った。

「『テンドウさん。まさかそんなマフラー1つで行くのか!』と

これから年中真冬の町に赴くと言うのに、テンドウは赤いマフラー1つと、後は何故か色鮮やかな花束を購入。

彼はいつも上着はロス黒いタンクトップ1枚だけだ。その上からマフラー1つだけでは、アスラから見たら到底冬は越せないように見えてしまう。

いや、間違いなく越せないだろう……

しかし逆らったら命はないため、アスラはツツコム事は控える事にした……

「そーいや小僧。オマエ、コラボダンジョンでトウエンティとか言う複数種のライダー

スピリットを操る男と対面したんだってな」

「ん??……あ、はい!!……めっちゃ強かったっス!! エールと力を合わせてなんとか勝てましたけど……」

テンドウはアスラに唐突にコラボダンジョンについて質問してきた。

アスラにとつて今でも忘れられないあのコラボダンジョンでの出来事。常識ではあり得ない複数種のライダースピリットを操る男トウエンテイとのバトル。エールの協力と、途中でムエが見つけて来た第二の龍騎が無かったら今頃どうなっていたかは定かではない。

「……まあ、だろうな。オマエ一人じゃアイツには勝てん」

「……………??」

テンドウの呟いたセリフにアスラは違和感を感じて疑問符を浮かべるが、それまでであり、その後この話は特に進展はしなかった。

もう少し鋭い者ならば「まるでトウエンテイを知っているような口振りですね」と訊いて来たに違いない。

「女の買い物って遅せーよな」

「…まあいいじゃねえっすか!!…気長に待ちましょう!!」

「だからオマエ声がデケー…さつきから耳が痛てーんだよ…殺すぞ?」

「すんません!!」

「だから声がデケー!!」

買い物が一通り終わり、買い物物袋を手にとってオウドウモールの広場にあるベンチに腰を下ろすアスラとテンドウ。エールとムエの帰りを待っているのだが、待ち始めて約30分。一向に彼女らの気配は感じられず……………

待ち惚けていた……………

「あついたいた。おゝい!!」

「むえゝ」??やつほゝ

「おつ、テンドウさんエール達っすよ!!」

ここでようやくエールとその頭の上に佇むムエが帰って来る。その手にはアスラとテンドウなどよりもずつとパンパンに膨れ上がった買物袋を持っていて……

「すげー荷物の量……テンドウさんも言ってたけど女の買物って長いんだな」

アスラがエールに訊いた。

「当たり前じゃない。特にこんな品揃えの多いショッピングモールはね。ちよつと迷ったけど、これでムエの冬服もバッチリよ!」

「ムエにも買ったのかよ!?!……犬は服なんか着ねーだろ!?!」

「むえ、むえむえ〜」

「……………何言ってるかわからんがご機嫌が良いのだけは伝わってくる……………オマエもやっぱメスなんだな」

自分の服だけでは無く、犬であるムエの服まで買っていたエール。ムエはその買ってもらった服が気に入っているのか、偉くご満悦な様子で鳴き声を上げていた。

「はいアスラ」

「え」

唐突にエールがアスラに自分の持っている重たそうな買い物袋を差し向けてきた。

「持ちなさいよ。こう言うところに来たら身分の低い者がエックスの荷物持つって相場は決まってんのよ」

「ええ!?自分で買ったのに!?……………まあ良いけど」

(こいつ将来尻に敷かれそうだな……………)

なんだかんだでエールの荷物を持ってあげるアスラ。テンドウはそんな様子を目に移しながら近い将来アスラがエールの尻に敷かれている姿を想像していた。

「よしオマエら。買うもん買ったし、そろそろユキカイ町に行くか……………つて言いたいところだが、あと一ヶ所付き合ってもらう」

「ええ!?まだどっか行くんすか!？」

「なんだ、嫌なのか小僧?! ……それはオレに殺される覚悟があつての発言だよな?!」

「すんませんしたアアア!! 不肖アスラ、どこまでもついて行きまアアアす!!」

「……はあ、めんどくさいわね」

「むえ〜」??せやな

何度も言うが、テンドウに逆らつたら命の保証はできない。アスラは結局同意し、エールとムエもめんどくさそうにしながらも渋々同行した。

そしてテンドウが向かつた次の行き先は……………

「あれ、ここつて……………」

オウドウモールには半歩劣るが、それでもそれなりに大きな建物を目に移しながら、アスラはそう呟いた。

どこかで見覚えがあつたからである。

「病院ね」

「そうそう!!病院だ!!……エールが倒れて、テンドウさんに連れて行かれて、その後もエールの看病したっけな!!懐かしい」

「なっ!?!……アンタ私の看病なんてしてたわけ!?!」

そう。ここは「オウドウ病院」……

新人交流戦の際にエールが倒れ、アスラとテンドウがその病室に赴いていたのは今でも記憶に新しい。

ただ、エールはそれを知らなかったためか、それとも気を失っている時に寝顔を見られた事を恥ずかしく思ったのか、思わず顔を赤くしてしまう。まあおそらく後者である。

「でもなんで病室なんて……ハッ!!まさかテンドウさん体調悪いんすか!?!」

「バカかオマエ。オレのどこが体調悪いんだよ。オマエの方が異常だろうが。主に頭の中」

「ひでエエエー!!!」

などと会話しているうちに、彼らはテンドウを先頭に院内をどんどん進んで行く。そしてある一室でテンドウは足を止めると、彼はその病室のドアを横に動かし、開口した。その病室の中にいた人物は……………

「あつ兄さん!!」

「よお、カナ。元氣そうじゃねえか」

「わあ!!綺麗な花束だね〜流石兄さん、センスあるわ〜」

病室のベッドで横たわり、窓から今日の晴れ晴れとした天気を眺めていたのは、『カナ』と呼ばれる黒髪ロングの女性。彼女はテンドウの声が聞こえるなり、病人とは思えない程に元気に挨拶をした。

テンドウはその後、オウドウモールで購入していた色鮮やかな花束を花瓶に供えた。どうやら彼女の見舞い品であったようである。

「あら。そこにいるのはまさかエールちゃん!?……………大きくなったわね〜!!……………お母さんに似てとつても美人!!」

「はい!!ありがとうございます!!カナさんも元氣そうで何よりです!!」

「……………エールが敬語使ってる。誰だこの人??」

エールが敬語を使う人間は限られている。頂点王シイナとか、兄であるエレンなど、偉大なる人物が多い。つまり目の前にいるこの黒髪ロングの女性もおそらく凄い人物なのではとアスラは勘繰る。

そんな疑問を抱いたアスラにエールが偉そうに説明し出した。

「アンタは初見だったわね、この人は『テンドウ・カナ』……………テンドウの妹よ」
「ふ〜ん」

テンドウさんの妹か〜

ん??

妹って事は……………

……………えーつと……………

あつ!! そうそう、兄妹だ兄妹!!……………羨ましいよなくオレ捨て子だからホントに血の繋がった兄弟とかいないんだよね〜……………

……………つて

「えええええ!!?……テンドウさんの妹オオオ!!?……全然似てねエエエー!!!」

「おい小僧。病室で騒ぐな。後似てないって何??…傷ついちゃうよ??オレのガラスのハートが」

「あつはは!!面白いねこの子!!」

そうだ。アスラの目の前にいる女性は他でもない……

テンドウの妹、「テンドウ・カナ」だ。

アスラの言う通り、正直華麗な容姿を持つカナと、髭も剃らないくらい不潔なテンドウとではぱつと見で実の兄妹であるとは判別しづらいものがあつて……

「私はテンドウ・カナ!!…あなたは??…見た感じマスターやエックスじゃなさそうだけど……」

「あつ!オレ、コモンのアスラつて言います!!……頂点王になるのが夢つす!!」

「まあ!!カッコ良くて素敵な夢ね!!じゃあいずれ兄さんやシイナ様より強くなるんだ!!」

「ハイ!!そんなためにめっちゃ努力します!!」

自己紹介するにあたって、取り敢えず己の夢を語るアスラ。

普通なら低俗なコモンの人間が何を語ってるんだと罵られるのがこの世界での常であるが、カナはそんな素振りは何一つ見せず、素直にアスラの掲げる大きな夢を褒めて見せた。

「ところでアスラ君。君はエールちゃんのボーイフレンドかなんか?」

「ボ、ボボボーイフレンドオ!」

突然カナがアスラにそんな質問を投げかけてきた。それを聞いた途端エールは思わず首から上が真っ赤になってしまう。

「……………ボ……………ボールフレンドってなんすか?」

しかしアスラはこの様である。田舎者故、と言うか田舎者でも普通は知っている単語だが、知らなかった……………

「ちちちち違います!! 誰がこんなバカスラと!!」
「ええ、そうなの〜（この子わかりやすいわね〜）」

エールが全力で否定するも、彼女の困惑ぶりや顔の赤面度や全く状況を理解できずおらずキョトンとしているアスラの様子から、カナはニヤニヤしながら全ての恋愛事情を察した。

「まっ頑張つてね、エールちゃん!!」

「えっ…何をですか!?!」

親指を上立て、目をギラギラさせながらエールの恋を応援するテンドウの妹、カナであった……………

「よし、小僧とエールは一旦病室を出ろ……………今から兄妹水入らずの会話が始まるからな」
「自分で言うところじゃなくない? ……まあ別にいいんだけど」

「お邪魔しましたアアアー!!!」

テンドウがアスラとエールを急かすように追い出す。正直、自分で連れて来といてなんだと思ったエールだったが、まあホントに聞かれたくない話でもやるのだと思い、そこは承諾。アスラと共に病室を去っていった……………

そして病室の扉が閉まる瞬間、エールはある事に気がつく。

(……………あつ……………今、私たち2人つきり……………ムエはいるけど)

突然の事で気がつかなかったが、アスラとほぼ2人つきりになった事を自覚して少し嬉しくなるエール。最近是他の人物と一緒にいる時が多くなりつつあったため、実際はそうでもないが、この状況は何気に久し振りに感じる。

そう思った直後、アスラがエールに向かってある言葉を言い放つ……………

「いや……………カナさん。めっちゃ美人だったな……………テンドウさんの妹とは思えねえ」

「むええ……………??せやな

そう呟いた。頭の上に乗っかっているオレンジ小動物ムエも同意するように首を縦に振って、「むええ」と鳴いた。

だが、アスラのこの言葉に過剰に反応して見せたのは他でもないエールだった。

「えツツ?!……アンタ女の人見て綺麗とか美人だとか思うわけ!」

「んだよ藪から棒に……まあそりゃオレも男だし」

アスラが女性に対して「美人」と言う印象の無かったエールはこの言葉に食いついてしまう。

まあ確かに今までのアスラの行動や言動からして余り異性に興味があるようには思えない。

そして、エールは反射的とは言え、ある失敗を犯してしまう……

「……………じゃあ私の事どう思ってるわけ?」

「ん??…どうって?」

「そりゃ、私の事も……………私の事も……………」

……………『綺麗とか思ってるの??』……………

そう訊こうとした。

ただ、それを言おうとした途端、エールは自分で喋りながら自身の誤ちに気付いた
……………

「ちよちよちよちよつとバカスラ!!今の質問無し!!聞かなかつた事にしなさい!!」

「はあ!?!どう言う事!?!」

「い、いいから着いて来ないでよねエエエー!?!」

「……………えゝ…なんだつたのアイツ……………」

「むえゝ」??気づいてやれよチビスラ

「あつ!!今オマエオレの事馬鹿にしただろ!!」

また顔が真っ赤になったエールはアスラから逃げるように走り出してしまった。その様子を見たムエは澄ました顔でアスラに「むえゝ」の鳴き声を浴びせた。

「ねえねえ!!聞いた兄さん!!『私の事どう思う!?!』だつて!!あのエールちゃんが!!遂に春が来たんだよ!!」

「今夏だけだな」

「わあ!!頑張つてエールちゃん!!女は度胸よゝ!!コモンとエックスの身分の格差恋愛な

んて凄くロマンチック!!」

アスラとエールの会話は病室には筒抜けだったため、テンドウもその妹カナも彼らの会話を耳に入れてしまう。昔からエールを妹のように可愛がって来たカナはそれはそれは嬉しかった。

「……………オマエ、後余命は何年だ」

「ツ!!」

テンドウが会話の流れを断ち切るかの如くそうカナに言い放った。

「……………後……………1年もないんだって、持って10ヶ月そこら」

「……………そうか」

カナの病気は重たい。約2年前だろうか。病名も分からず、ただただ身体が衰弱していくという謎めいた病気。今こそ振る舞いや顔色は元気そうにしているが、いつ動かなくなるかも時間の問題であった。

「あつ……そんなに気落ちしないで!!……今を楽しく生きれば私はそれで良いから!!」
「……誰も気落ちなんてしてねーよ」

テンドウは「オマエはそれで良いかもしれないねえが他の奴らはそれじゃダメなんだよ!!」と言う言葉が喉から出かけるも、それを押し殺しながらいつもの低いテンションで気落ちしてる事を否定した。

「………んじゃ、オレはニコチン切れたからちよつくら屋上でタバコ吸ってくらあ」
「うん。いつてらっしやい!」

そう告げて、テンドウは病院で唯一喫煙所として認められている屋上へと足を運んだのだった。言葉自体はいつも通り棒読みで、どこか掴み所が無い感じだが、
実の妹であるカナには彼の大きな背中に一抹の寂しさと虚しさを感じて……

ここは屋上。病院が7階建てなのもあって、そこそこ見晴らしが良く、晴天なのもあって、本日の眺めは最高を極めていた。そんな屋上の手摺りに手を置き、タバコを吸ってニコチンを補給していたのは三王の1人、テンドウ・ヒロミ。

彼は何を思っているのか、一見そのタバコを吸っている様子はクールに見えるものの、その背中からはどこか物寂しい雰囲気^が伺えて……………

「……………トウエンティ……………」

テンドウがその人物の名を口にすると、ふと昔の記憶が蘇って来た……………

それは今でも毎日のように脳を過ぎり、忘れたくとも忘れられない2年前の記憶

……………

「『テンドウさん!!……………貴方のライダーを……………カブトをオレにください!!』」

「『えーせつかく選ばれたのにー嫌なんですけどー』」

ガムシャラとも言える勢いで当時、2年前のテンドウに言い放って来たのはアスラ達
がコラボダンジョンにて交戦した銀髪の若い男性、トウエンティ。

「何度も頭を下げてるテンドウのライダーが欲しいと懇願するがテンドウはいつものやる気のなさそうな感じで適当にその言葉を受け流していた。

「『冗談言ってる場合じゃないんです!! わかってるでしょ?! カナはもう長く無い!!』……だからオレには20枚のライダースピリットが必要なんです!!』」

「『……バカヤロウツ!! ……どこの馬の骨だか知らんがなんもんウソに決まってるだろ!?!』」

「『じゃあ手をこまねいてただただ弱っていくカナを見守れって言うんですか!?!』」

……『20枚のライダースピリットを集めれば願いが叶う』

トウエンティはある人物にそう言われていた……

そんな信頼性も無い話。馬鹿なのは百も承知だ。しかし、今彼女を……

カナを救う方法はこれしか無くて……どうしてもこの方法に身を投じるしか無くて……

「『カナは今の時間をを大事に生きようとしている。そのためにもオマエはアイツのそばにいてやれ、トウエンティ……それがオマエにできる最善、最高の行為だ』」

トウエンティイに対してそう告げるテンドウ……………

この言葉は正論だ。トウエンティイとてそんな事理解している。こんな意味のわからない方法に懸ける方が遥かにバカバカしい。

……………だが、

ー『……………嫌です……………約束したんだ。カナを護るって……………助けてやるって……………必ずオレは20枚のライダースピリットを集めて見せますッ!!』

ー『トウエンティイイツツツ!!!』

トウエンティイの馬鹿げた発言に、遂に本気で怒りを露わにするテンドウは彼を怒鳴りつけながら全力で拳を振るった。

この殴打は彼にしては意外にも珍しい行為であり、本気で誰かを殴ったのは後にも先にも存在しなかった。

だが、それ程までにトウエンティイを見込んでいたという事でもある。

あれから2年程が経過したが、青のカラーリーダー、ローザ・アルファが提出したコラボダンジョンの報告書によれば、どうやらトウエンティイはテンドウの言いつけを無視

して未だにライダースピリットを集めているようである。しかも半ば無理矢理な方法で……………

「……………あの野郎……………まだそんな馬鹿みてーな事をやってんのか……………!!」

場面は戻り現在。久し振りに何かに怒りを露わにするテンドウは啞えていたタバコを強引に噛み砕く。

するとそんな時だ……………

「……………テンドウ」

「ッ!?!」

背後から聴き慣れた声が聞こえて来て、テンドウは思わずその後ろを振り向く。そこには肩までかかった赤茶の髪を靡かせるエールの姿であつて……………

テンドウはエールの前では咄嗟にいつもの調子に戻して接する。

「なんだエールか……………どうした屋上なんか足運んで……………小僧はどうした??!」

「ツ!!……まあ、ちよつと別行動つて感じ………(い、言えない………恥ずかしくなつて顔が合わせられなくなつただなんて……いや、別にあんなバカスラ、気にも止めて無いんだけど………)」

「ふうん(まあ理由はわかるけど)」

半ばアスラから逃げ出すように飛び出していたエール。思わず嘘をついて誤魔化すが、さっきの会話が病室に筒抜けだったのもあって、テンドウにはバレバレであった………

「あ、アンタこそこんなところで何考えてたのよ??」

「ギャンブルと胸のデカい女」

「………サイテー」

テンドウの返答にドン引きするエール。だが、テンドウの言っていることは嘘だ。エールはカナの恋人があのコラボダンジョンで出会ったトウエンティだとは知らない。テンドウはそれを悟らさないためにわざと適当にお茶を濁したのだ。

「……オマエ、ホントにアネゴに似て来たな……主に顔」

「はあ!? 何よ急に」

「ちようどスペースもある事だし、どうだ。久し振りにオレとバトルでもやらねえか?」

突然エールにバトルをぶっかけるテンドウ。因みに彼の言う「アネゴ」とはエールの
実の母親である『エレナ・オメガ』の事を指している。

普段から何を考えているのかわからないテンドウだが、さっきまでの会話の流れから、エレナと瓜二つの容姿を持つエールを見て、久し振りにバトルをやる気になったのかもかもしれないと推測できる。

その後、特に断る理由が無いのもあつてエールは「まあいいけど」とちよつと上目遣い
をしながらBパッドとデツキを取り出し、バトルの準備を行った。テンドウも同様である。

「んじや、やるか」

「ええ、成長した私の力でコテンパンにしてあげるわよ!!」

「そりや楽しみだ……行くぜ」

……ゲートオープン、解放!!

そして……2人のコールと共に病院の屋上にてバトルスピリッツが開始された
……

先行はエールだ。

「ターン01」エール

「メインステップ……行くわよ、私は創界神ネクサス、八神太一を配置!!」

1「八神太一」LV1

「あ??…んだそりや、聞いた事ねえカードだな」

「ふんっ……私だつて知らなかったわよ!!」

「なんでそこ偉そうなの?」

エールが配置したネクサスカードは所謂『創界神ネクサス』と呼ばれる特別なネクサスカード。この世界においては僅か一部のデッキ以外には宿らないと言われている。

八神太一と呼ばれる創界神ネクサスはあのエレンとのバトルによって進化した際に発現したものである。ネクサス本来は配置したプレイヤーの背後に出現するが、このカードは特別なのか、配置後も特に変化は無く、エールが一瞬だけ赤い光を帯びるだけに留まった。

「《神託》の効果でデッキからカードを3枚トラッシュへ送るわ!!……対象カードは1枚!! よってコアを1つ追加!!」

創界神特有の効果だ。八神太一にコアが追加される。その後は対象スピリットが召喚されるたびにコアが置かれていく。

「これでターンエンドよ」

手札：4

場：【八神太一】LV1（1）

バースト：【無】

このターンをエンドとするエール。次はいよいよ三王の1人であり、仮面ライダーを

司るテンドウのターンだ。

「ターン02」テンドウ

「メインステップ……………創界神ね……………ちよつとだけ本気出さねえと行けないみた
いだな……………」

「!?」

テンドウはそう呟くと、早速手札から1枚のカードを引き抜く。
そのカードもまたこの世において特別たりうるカード……………

「変身!!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

「!!」

テンドウがそう叫び、カードを配置すると、神々しい光を纏い、瞬く間に赤き一角を持つライダースピリット、カブトに変身して見せた……………

そう、彼自身がライダースピリットとなったのだ……………

「変身のカード……………一部のライダースピリットが内包してると言うあの……………!」

「よく勉強してるじゃねえか。このカードも一応カテゴリ上は創界神だからな。目には目を、歯には歯を、創界神には創界神つてな……………《神託》を發揮させてカードをトラッシュに。対象は3枚、コアを3つオレに追加」

ごく僅かのライダースピリットには『変身』できるカードが備わっている。それを使えばこの通り選ばれたバトラー自身がライダーとなる。

テンドウもまたその能力を備えた仮面ライダーカブトの使い手なのだ。

「……………まつ、なんだかんだ言って他にできる事ないんだけどな。エンドだ」

手札：4

場：【変身!!仮面ライダーカブト】LV2(3)

バースト：【無】

しかし、最初のターンはコアが少なく、それ以外の事はできなかったか、テンドウはそのターンをエンドとした。次はエールのターン。先行で配置した創界神ネクサスのシンボルを活かしてスピリットを呼ぶ。

「ターン03」エール

「変身……自分がライダースピリットになるなんて……」

メインステップ開始早々、ライダースピリットになったテンドウに向かってそう呟いたエール。テンドウとは昔からのそこそこ長い付き合いで、沢山バトルをやってきたが、あの変身のカードを所持していた事は知らなかった。

「だけど関係無い。その真つ赤な仮面ごとライフを破壊するまでよ!!」

「おお、怖い怖い」

しかし、そのカードを見ても物怖じする様子は一切見せず、寧ろ余計に強気になって

いるエール。テンドウはそれを見て「怖い」と告げるが、棒読みで低テンションなため、とてもでは無いが怖がっているようには見えない。

「ネクサスカード、勇気の紋章をLV1で配置!!」

ー【勇気の紋章】LV1

エールの背後に神々しく光り輝く太陽を模した紋章が姿を見せる。

「さらにベアモンを召喚!!」

ー【ベアモン】LV1(1)BP2000

小さな熊のような姿をした成長期スピリット、ベアモンがエールの場に現れた。因みにこのデジタルスピリットはオメガのカードでは無く、市販で販売されているようなごく普通のカードだ。

「アタックステップ、ベアモンでアタックよ!!……効果でドロ」

ベアモンがテンドウのライフ目掛けて走る。その効果により、エールは手札を増やした。

「ライフだ。くれてやるよ」

〈ライフ5??4〉テンドウ

迷わずライフを切る選択をするテンドウ。見た目がライダーになっても通常の仕様とは変わらず、前方にバリアが展開され、ベアモンはそれを殴りつけ破壊した。

「ターンエンドよ」

手札：5

場：【ベアモン】LV1

【八神太一】LV1（2）

バースト：【無】

できる事を全て終え、そのターンをエンドとしたエール。次はテンドウのターン。自分からバトルをふっかけて来たにもかかわらず、めんどくさそうな仕草をしながらターンを進めていく……………

「ターン04」テンドウ

「メインステップ……………仮面ライダーカブト マスクドフォームを召喚」

1 「仮面ライダーカブト マスクドフォーム」LV2 (3) BP6000

テンドウが呼び出したのは強靱な鋼の鎧を持つライダースピリット。三王のライダースピリットと言う事もあって貫禄が際立っている。

「召喚時効果を発揮。オレはその中の対象カードを手札に加える」

その召喚時効果はなんの変哲もないサーチ効果。テンドウはその中にある対象内の

カードを1枚手札に加え、残りをトラッシュへと破棄した。

「バーストをセット……オメガのデッキにパワーで立ち向かうのもバカらしいな。ここはいつちよ一発行きますか……マスクドフォームでアタック」

テンドウの指示でマスクドフォームはカブトの角を象ったような銃を取り出す。攻勢に回った証拠だ。そしてさらにここは速攻で畳み掛けるべくフラッシュユタイミングで発揮できるある効果を発揮させる。

「フラッシュユ【神技】!!」

「!?!」

「オレに置かれたコアを3つボイドに置き、スピリットのシンボルを赤の2つにする。マスクドフォームはこれでダブルシンボル」

創界神ネクススが持つ特有の効果【神技】……………

上に置かれたコアをボイドに戻す事で発揮できる効果だ。これにより、アタック中のマスクドフォームのシンボルが2つとなり、一度のアタックで2つのライフ破壊が可能

となった。

「くっ……ライフで受ける!!……ッ!!」

△ライフ5??3△ エール

マスクドフォームが1つの銃から3つのレーザーを発射させる。それは瞬く間にエールの元まで届き、そのライフを一気に2つも焼き貫いた。

「ターンエンド……どうしたエール、そんなもんか??……まだまだオレは全体の3割くらいでバトルやってるぜ」

手札：4

場：【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】LV2

【変身!!仮面ライダーカブト】LV2 (1)

バースト：【有】

「うっさいわね!!……そんな余裕ぶっこいてると、足元掬われるわよ!!」

随分と余裕のあるテンドウ。

だが、エールも負けてはいない。次のターンを勢い良く開始させていく……………

「ターン05」エール

「メインステップ……………行くわよ、私の全力!!……………太一のアグモンと第二のアグモンを召喚!!」

1 「太一のアグモン」 L V 1 (1) B P 3 0 0 0

1 「アグモン」[2] L V 2 (3) B P 5 0 0 0

エールの場に黄色い肉食恐竜をこれでもかとデフォルメしたような見た目の成長期スピリット、アグモンが2体召喚される。その容姿はほとんど同じだが、効果は全くの別物であって……………

「太一のアグモンの効果でカードをオープン、その中の対象内スピリットカード……………

よし、私は『ウォーグレイモン』を手札に加えるわ!!」

「……来たか、オメガの片割れ」

エレンとのバトルを経て進化したアグモンの効果により、エールはデツキから自身のエースカードであるウォーグレイモンのカードを手札に加えた。

「アタックステップ!!…第二のアグモンでアタックするわ!!」

反撃に出ると言わんばかりの勢いでエールがアタックステップへと移行、第二のアグモンが戦闘態勢に入る。そしてその直後となるフラッシュユタイミング。エールは第二のアグモンに秘められたさらなる効果を発揮させて……………

「フラッシュ、第二のアグモンの効果発揮!!」

「!!」

「自身を手札に戻す事でウォーグレイモンを召喚する!!……………ワープ進化!!来なさい、ウォーグレイモンツツ!!」

ー【ウォーグレイモン】LV3（4）BP16000

吠えるアグモン。その際に赤々と燃え滾る炎をその身に纏い、姿をグレイモン、メタルグレイモンへと進化させていき、その最終段階として、強靱たる鎧をその身に纏う竜の戦士、究極体のウォーグレイモンへと進化を遂げた。

「よお、ウォーグレイモン。面と向かうのは10年ぶりか？」

エールの母であり、尚且つカードの前継承者であるエレナが亡き者となってから約10年。テンドウが前にウォーグレイモンと面と向かって対面したのもまたそれくらいの年月が経過して……

テンドウはどこか感慨に浸るような声を漏らしていた。ウォーグレイモンを操っているエールがエレナと瓜二つの容姿を持つのもあって懐かしく思っていたのだろう。

「何思い出に浸ってんのよ!!……ウォーグレイモンが出たんだからもう容赦はしないわ!!」

「……はいはい。無駄口は叩きませんよー」

そしてエールは進化できるようになったウォーグレイモンの効果を遺憾無く発揮させていく……………

「煌臨時効果!!…マスクドフォームを破壊するわ!!」

「!!」

「ブレイブトルネードツツ!!」

ウォーグレイモンは薄緑色の眼光を放つと、両手を天に掲げ、自身の身体を竜巻のように回転させると、そのまま両手を前方に向けて空を裂きながらマスクドフォームの元まで突き進む。マスクドフォームは防ぐ事も避ける事も出来ずそれに装甲を貫かれ、大爆発を起こした。

その後、ウォーグレイモンは地に足を着けると、目の前には既にライフを砕く対象であるテンドウがいて……………

「ウォーグレイモンでアタックツツ!!」

「……………ライフだ……………ツツ!!」

へライフ4??3へテンドウ

ウオーグレイモンは手に装備されている鉤爪付きの籠手でテンドウのライフ1つを紙切れのように引き裂いた。

「まだ終わらない!!ウオーグレイモンのLV2以上のアタック時効果!!……トラッシュコのソウルコアをウオーグレイモンに置いてライフ1つをボイドに置く!!」

「っ!!……メイנסテップで事前にソウルコアをトラッシュコに置いてたか……」

「その通り!!……くらいなさいテンドウ!!……ガイアフォースツツ!!」

「ぐっ!!」

へライフ3??2へテンドウ

ウオーグレイモンの真価とも言えるアタック時効果。これを発揮させるためにエルはアグモン達を召喚する際、事前にソウルコアでコストを支払っていたのだ。

ウオーグレイモンが両手の間隔から赤き巨大な火球を形成してテンドウのライフに

叩きつけた。彼のライフーつは消し済みになり消滅してしまう。

「どうテンドウ??:…後はアグモンとベアモンでアタックすれば私の勝ちよ!!」

「そう言う説明はフラグだぞ」

「え」

ウオーグレイモンのガイアフォースをまともに受けたにもかかわらず涼しい表情をエールに見せつけ、軽いメタ発言までかましてくるテンドウ。

ただ、それはハツタリではない。

テンドウはこのタイミングで事前に伏せていたバーストカードを発動させる
……………

「ライフ減少によりバースト発動……………仮面ライダーカブト ライダーフォーム!!」

「!!」

……………クロックアップ!!

「!?」

刹那。

テンドウのバーストカードが発動し、表向きとなったその直後だ。

エールは思わず言葉を失った。

それもそのはず、何せ、自分のスピリットであるアグモンとベアモンが突如として爆発してしまったのだから………

「BP10000以下のスピリット3体を破壊し、その後召喚する」

ー【仮面ライダーカブト ライダーフォーム「2」】LV3（5）BP10000

エールがふとテンドウの場に目をやると、そこには今のテンドウと全く同じ姿をしたライダースピリットが1体。

それこそが仮面ライダーカブトデッキの花形とも呼べるスピリット、カブト ライダーフォームである。アグモンとベアモンを一瞬にして倒したのもこのスピリットだ。

「くっ……アタックできるスピリットがない……ターンエンドよ……」

手札：5

場：【ウオーグレイモン】 LV3

【八神太一】 LV2 (5)

【勇気の紋章】 LV2

バースト：【無】

この場と状況において返す手立ては無く、エールはそのターンをエンドとしてしま
う。次はようやくライダーフォームの召喚を成功させて見せたテンドウのターンだ。

「エール、流石に少しはできるようになったがまだまだだな」

「なんでちよつと偉そうなのよ？」

「オマエがそれ言う??…こう見えてもオレ三王の1人よ？」

自分にもブーメランな言葉を平気で使ってくるエール。テンドウの言う通り確かに
いつも「自分はエックスだ」と偉そうに主張してくる彼女に言われたくはないだろう。

「ターン06」テンドウ

「メインステツプ……ブレイヴカード、カブトクナイガンをライダーフォームに合体」

1「仮面ライダーカブト ライダーフォーム「2」+カブトクナイガン」LV3(5)
BP13000

テンドウがそれを召喚すると、クナイのような形をした武器がライダーフォームに取り付けられる。

「アタックステツプ!!……ライダーフォームでアタック。合体しているカブトクナイガンの効果でトラッシュからコアを戻す……さらに赤のシンボルを1つ追加」

「ツ……またダブルシンボル……!?!」

アタックを仕掛けるテンドウ。今度はブレイヴの効果によりダブルシンボルを作り出した。

さらにこれだけでは終わらない。テンドウはこのタイミングでさらなる一手を繰り

出す。

「さらにここで【転神】の効果」

「!?……転神!?」

聴き慣れないその効果名に戸惑うエール。それもそのはずだ。何せ、この【転神】と
言う効果はこの世界において、ほんの一握りの創界神ネクサスしか持つ事ができないの
だから……

「オレの上に置かれたコア1つをボイドに置く事でこのターン、オレをBP3000、ブ
ロックされないスピリットとして場に呼ぶ」

1 【変身!!仮面ライダーカブト】(2??1) BP3000

「え!?……アンタ自身が場に!？」

見た目がカブト ライダーフォームと化しているテンドウ。Bパッドの元を離れ、自ら前戦へと現れた。

これこそ【転神】……………

創界神ネクサスがスピリットとしてアタック及びブロックができるようになる効果である。

「さあどうするエール。このままじゃ一気に3点分持つてかれるぜ？」

「つ……………ライダーフォームのアタックはライフで受ける!!」

ライフ3?! 1

ライダーフォームがカブトクナイガンでエールのライフを斬りつけ、それを一気に2つ砕いた。

このままでは転神を果たしたテンドウの一撃により、ゲームエンドだが、エールにはまだ奥の手があつて……………

「甘いわねテンドウ!!……………私の勇気の紋章の効果、BP5000以下のスピリット1体を

破壊する!!」

「!!」

「アンタに引つ付いたその仮面を破壊する!!」

そう。

勇気の紋章だ。

エールの背後にある太陽を模した紋章から火炎弾が発射され、カブトと化したテンドウに命中した。

「よし!!」

被弾により発生した爆煙。その光景を見て、ガッツポーズするエール。

これで次のターン、またウォーグレイモンで攻めれば勝てる……………

そう思っていたが……………

「おいおい……………なんだよ今のチンケな炎は……………」

「え!?!」

「ちつとも効かねえなあ!!」

「なんで!?……アンタさつきBP3000って……」

爆煙が晴れた瞬間。エールの目に移ったのは傷一つ無く余裕のある仕草を見せるテンドウ。

「オレは創界神ネクサス。スピリットとして場に出てもそれを対象とした効果以外は受けねー」

「はあ!?……何よそれ!?インチキじゃない!!」

転神の効果について説明するテンドウ。

エールが勘違いしていたのも無理はない。この世界では転神は非常に珍しく、知識として内包する機会はほとんどない。テンドウ自身がその効果をあまり使った事がないのも理由の一つである。

エールはその効果の事をインチキと称するが、この国の三王の一人であるテンドウにはこのくらいの効果が寧ろお似合いとも言えて……

「そんじゃ……………行くぜ」

「!!」

突如、テンドウはエールにプレッシャーをかけるような声を上げると、彼は既にエールの眼前にいて……………

エールはその声に思わず背筋が凍りついた。そのかけられた重圧は間違いなく今まで何人もの挑戦者を葬って来た三王そのモノだ。

そしてテンドウはベルトにある赤い角を捻り……………

「……………ライダーキック……………」

「っ!!」

〈ライフ1??0〉 エール

足にエネルギーを溜め、そのまま回し蹴りを放つテンドウ。エールのライフは無残にも散ってしまった……………

このバトルの勝者は、やはりと言うべきか、この国の三王の1人で、ライダースピリッ

トを司るテンドウ・ヒロミに終わった……………

……………

「……………なんでアンタって普段おちやらけてるくせにバトルはめちやくちや強いよ、意味わかんない」

「ワツハツハツハ!!…だからオマエ三王を舐めすぎだろ!!」

バトルも終わり、病院の屋上でたむろするテンドウとエール。

エールがテンドウのめちやくちやな強さに愚痴を零す。テンドウはタバコを吸いながらそんな彼女の様子を見て笑い飛ばしていた。

そして、彼はエールの頭に手をポンつと置くと、

「いつかオレと肩を並べられるくらい強くなれ。それがこの旅の中でオマエに課せられたノルマだ」

「ふんっ!!…アンタの肩なんか余裕で超えてやるわよ!!」

「ワツハツハツハ!!…そのいきだ!!」

アスラと一緒に旅をしると言ってきたり、コラボダンジョンに行けた言ってきたり、テンドウには謎めいた行動が多い。

そして今回はエールに旅のノルマを課してきた。到底一朝一夕の旅では三王に肩を並べるなど不可能に等しいが、強気な性格のエールはそれさえをも超えてやると豪語した。

すると、そんな時だ。またしても聴き慣れた声が入ってきたのは……

「あれ??…エールとテンドウさん。どうしたんすか2人とも屋上で」

「あ、アスラ!？」

「よお小僧」

アスラが屋上に現れた。その頭の上にはムエも確認できる。

「着いて来んかって言ったのになんで着いて来てんのよ!!」

「いやいやいや!!ちげーよ、暇だったから病院を探検してたらここに辿り着いたんだよ

!!」

「子犬かオマエは」

アスラは別にエールを追いかけていたわけではない。この間来た時は特に見て回る事はできなかった事もあって、この病院を探検していたのだった。その結果がこの状況を作り上げた。

「あつそう言えば、さつきオマエが言った『私の事どう思ってる』って質問なんだけどさ!!」

「っ!?……そ、そんな事もうどうだっいいいわよ!!」

「ええ!?……いいじゃん、言うくらいすぐ終わるし!!」

さつき無意識でエールがアスラにしてしまった質問。それはアスラはエールの事をどう思っているのかと言うものである。

アスラはエールに向かって微笑むと、質問の答えとしてこう告げた……

「オマエはオレの大事な仲間だ!!……これからよろしくな!!」

「ッ!!」

その言葉に思わず顔が赤くなるエール。

別に口で言われなくてもわかり切っていたアスラの気持ちだし、何なら質問の趣旨が若干変わってる気もするが、実際にそう言われてみると言葉では表し切れないほど嬉しかった。

「ふ、ふんっ……わかってるじゃない!!……えへへ……ま、まあアンタがそこまで言うならこれからも仲間としてよろしくしてあげなくもないわ!!」

「だからなんで偉そうなんだよオマエは……てかなんでニヤついてんの?」
「べ、別にニヤついてなんかいいわよ!!」

いつもの尊大な態度を取りつつも、堪え切れないほどの幸福が襲って来て、思わず顔がニヤついてしまうエール。素直にならないため、否定はしているものの、内面も表面でもアスラの言葉が嬉しかったのはバレバレであった。

「……………あつ、そうだ小僧。頂点王からオマエにコレを渡せと言われたんだつた」
「ええ!!? シイナから!!」

ここに来てようやくテンドウが会話に混ざって来た。彼は懐からある一枚のパトスピカードをアスラに手渡した。

それは彼の言う通り、現頂点王シイナ・メザがアスラのために渡そうと思っていたカード。どのタイミングかは定かではないが、それをテンドウに手渡されていて、今、ようやくこのアスラがそれを握る事になる……

そのカードとは……

「め……………めっちゃキレイエエー!!!……………何すかコレ、黄金の翼!?!」

「なんかこの間とは別のコラボダンジョンで手に入れたんだと。オマエにお守りとしてあげるってさ」

「うおおおおお!!!シイナアアアー!!!ありがとうございますウウウー!!!一生大事にしまアアアアす!!」

黄金の片翼が描かれたカード。特に何の効果も無く、バトルにおいては何も使えないが、コラボダンジョンで発見したと言うのもあつてその貴重さが窺える。

「よし。そんじゃオマエら。用も済んだし、そろそろユキカイ町行くか」

「はい!! 行きましたよオオオー!!」

「むえ〜」

「しようがないわね、行ってあげるわよ」

「待つてろよロン!! 今に追いついてやるぜエエー!!!」

やる気は十分。

目指せ頂点王。

追い越せライバル。

アスラの頂点王を目指す物語はまだまだ続く。

しかし、まだアスラを含めた面々は知る良しもなかった……………

アスラの最大のライバルであるロンが今まさに巨大で大きな壁にぶち当たっていた事を……………

133 コア 「サバイブ―疾風―」

「にしたって夏に雪が降ってるなんてスゲーよな!!」

「暑かろうが寒かろうがアンタはどこにいてももうっさいのね」

パラパラと並木通りに降り注ぐ季節外れの粉雪。

アスラ、エール、ムエ。そして一時的に同行する事になった三王の1人、テンドウは歩きづらい雪道をただひたすらに歩んでいた。

その道の先にある年中真冬の白の町、『ユキカイ町』へと行くためだ。季節は夏だと言うにもかかわらず降り積もる雪にアスラは感動し、興奮する。

「ここら辺は年中真冬だからな」

タバコを吸いながら歩いているテンドウがそう呟いた。そしてその後、人差し指を真正面に向けると、そこには……………

「ゴタゴタ抜かしているうちに着いちまったぞ、ユキカイ町」

ー!!

アスラとエールは会話を止め、テンドウが指差した真正面を振り向く。

そこで目にしたものは粉雪で煌めく輝かしい氷の町並みであった。そこそ、次の目的地、『ユキカイ町』であった……

「うおおおおお!!! スツゲー!!!」

「むええええええええええ!!!」 ?? 便乗

町のゲートに到着するアスラ達。そして最早お約束と言うべきか、到着するなりアスラはその驚愕な情景に思わず声を張った。頭の上に乗っかっているムエも同様だ。

無理もない。何せこのユキカイ町、家々が至るところまで氷や雪で作られているのだから………

「見ろよエール、家や建物が全部氷か雪だぞ!」

「多分知らなかったのアンタだけよ」

興奮するアスラ。しかし、ユキカイ町の家々が全て氷か雪で作られている事などこの国においては常識の一つ。普通は驚く事はまず無い。彼がどれだけパトスピ以外の事に無頓着であったかが見て取れる。

「そんじゃ、オレとはここでお別れだな」

「えっテンドウさんもう行っちゃうんすか!?!:オレのカラー戦観にきてくださいよ!!」

テンドウがアスラ達に掌を見せながらそう告げた。アスラとしてはテンドウに成長した自分のバトルを見て欲しかったのか、それらしい発言をした。

「うるせえぞ小僧。オレあ観光じゃなくて仕事でここに来たんだよ」

「そう言えばその仕事って何??:アンタが自分で赴く程なわけ?」

エールがテンドウに訊いた。

「テンドウの奴、いつも勝手よね……じゃあアスラ、私はムエと今晚の宿探して来るから、アンタはスタジアムにでも行ってきつさとカラー戦やって来たら？」

「むえ？」

エールがアスラの頭の上にいるムエを取り上げ、胸元に抱き寄せながら提案して来た。確かにそっちの方が手っ取り早いと言うか効率的だ。

「おお!! わかったぜ!! サンキューな!!」

「べ、別にアンタのためじゃないんだからね!？」

アスラに感謝されて顔を赤くするエール。そして、アスラ達は二手に分かれて行動することとなった。アスラは白のカラーカードを得るべく、この町で最も大きくて目立っている氷のスタジアム目掛けて走り出す。

「うっひゃー!!ここがユキカイ町のスタジアム!!……ホントに水でできてんだな!!」

走り出して約5分が過ぎた頃、アスラはスタジアム前に到着した。その見た目麗しい外観及び神秘さは、このスタジアムは他のどのスタジアムにも劣らないであろう。

「ここにいるカラーリーダーは白属性の使い手だったな……白と言えば鉄壁の防御力。オレの龍騎で突破してやるぜ!!」

思い出しながらそう呟いたアスラ。

そうだ。今回のカラーリーダーは白属性の使い手。今までのカラーリーダー達が己の扱う色の長所を重視して来た戦いぶりから、今回は白属性の特徴である鉄壁の護りが活かされた戦いを彼は推測していたのだ。

事実その考え方は正しい。

カラーリーダーとは言わば色の頂点。各々がその色の持ち味を最大限に発揮させるのである。

「つしやあ!!……そんじやいざ行きますかアアアア!!」

アスラが大声で息巻いていたその時だ。アスラの聞き覚えのある声が聞こえて来たのは……………

「そこで何をしている……………」

「っ!!」

その聞き覚えのある声主は当然エールでもなく、テンドウでもない……………何年も何年も聞いていた、自分とは違って冷静で落ち着いた声だ。

アスラは思わずその声のする方へと首を傾けた……………

「アスラ……………!!」

「……………ロンッ!!」

そこにいたのは自分の片割れとも呼べる存在であるライバルの少年、ロン。相変わらずイケメンで背が高い。

アスラはそんなライバルの久し振りの登場に体中がゾクゾクした。

「へへー!!…何ってそりや、ここにいる白のカラーリーダーにバトルを挑むに決まってるんだろ!!…言つとくけど、今回はオレが先だったからな!!」

アスラが得意げにロンに言い放つが……

「オマエ……予約は取ったのか…?」

「……………え」

「その様子じゃ知らなかったみたいだな。こここのカラー戦は予約制だ。つまり次はオレがこここのカラーリーダーとバトルすると言う事になる」

「な……………なんじゃそりやアアアア!!」

アスラは論破された……………

いや、遅かれ早かれこうなっていたに違いない……………

……………

「なあロン!! 予約ってどうすんの!? …どこ押せばいい!? ……ねえ!？」

「知らん。自分でやれ」

「この薄情モノオオオー!!」

白のカラーリーダーにバトルを挑むべくスタジアム内の中心を目掛けて早歩きするロン。アスラはそんなロンを追いかけながらBパッドでどうにかバトルの予約を試みていた……………

彼らがそんなやり取りを交わしていくうちに、ようやくスタジアムの中心であるバトル場に到着した……………

そこには年齢が4、50と言った程度の男性が1人いた。寒さ故に着込んだその凶太いコートやワイルドな風貌から、明らかな強者のオーラが伝わってきて……………

「……………『また』オマエさんか……………スーミのロン」

「今日で終わらせませす。覚悟してください」

「おお!! アナタが白のカラーリーダー!! …オレ、スーミのアスラって言います!!」

アスラが目ギラギラさせながら白のカラーリーダーらしき人物に全力で挨拶をし

た。

「ほお??…オマエさん此奴の友人か??」

「ハイイ!!コイツのライバルツす!!」

「おお……ワシも若い頃はそう言った存在達と切磋琢磨したもんじゃ…懐かしい……遅れたな。ワシの名は『ゴゴ・シラミネ』……知ってるとは思うが、白のカラーリーダーじゃ」

「よろしくお願いしまアアアアアす!!……ゴゴさん!!コイツとのバトルが終わったらオレともバトルしてくださいアアアアアい!!」

アスラがまたしても目をギラギラと輝かせてゴゴにバトルをする約束を取り付けようとするが……

「まあ良いけど、先ずは予約じゃな」

予約は大事……

「グダグダ喋ってないで、早くオレとバトルしてください」

長々とアスラと話していたゴゴに痺れを切らしたロンがそう告げた。何か今回の彼は落ち着きがないように思える。

「……………オマエさんもしつこいの……………何度ワシに負ければ気が済む？」

「……………え」

アスラはそのゴゴの言葉に驚きが隠せなかった。

何せ、その口振りはまるで『ロンが何度もこの人に負けていた』と感じざるを得ないモノであるからだ。仮にもあのロンが同じ相手に何度も負けてしまうとはアスラも思っただけでなく……………

「オマエさんはワシに55回負けた。ここからさらに負けて56回にしたくはないんじゃない……………5が並ばなくなるから」

「えええええ!?理由がめっちゃ変ー!?……………てか55回負けたアアアー!?!」

ロンはこの町で彼に55回バトルを行い、その全てに敗北した。しかも圧倒的な程の力を見せつけてのだ……………

よく見たらロンの体は既にボロボロだ。どうやら55回バトルに負け続けていた事は隠しようがない事実であるようだ……………

アスラはバトルに負けた数だけに及ばず、ゴゴの妙なこだわりにもツツコミを入れてしまう。

「大丈夫です。56回目でオレが勝てば良い。そしたらアナタに56回負けた事にはなりません」

「ふむ……………まあ確かに……………じゃが、手を抜く理由にはなりませんか?」

「それは当たり前だ……………!!」

ゴゴの言葉に言い返すロン。

そしてお互いにBパッドを懐から取り出し、それをバトル台へと変形させ、展開。バトルの準備を早々に行って見せた……………

そして……………

……ゲートオープン、解放!!

アスラが見守る中、ロンの56回目となる白のカラー戦がコールと共に幕を開ける。
先行はロンだ。

「ターン01」ロン

「メインステツプ……ネクサス、ミラーワールドを配置してターンエンド」

手札：4

場：【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

ロンがミラーワールドを配置した事により、この場の空間が鏡向きになる。

「このカードはもうとっくに見飽きたな」

ゴゴにとって何度も目にして来たミラーワールド。この空間が反転する現象もいい

加減見飽きている。

そして次はそんな彼のターン。ゆっくりとそれを進行していく……………

「ターン02」ゴゴ

「さてメインステップ…ワシも地の利を固めるとするか…ネクサス、獣の氷窟をLV2で配置してターンエンド」

手札：4

場：【獣の氷窟】LV2

バースト：【無】

ゴゴの背後に凍てつく氷で包まれた洞窟が配置される。その奥にはまるで強大な獣でもいるかのような気配が感じられて……………

そして今度はロンのターンだ。ゴゴを倒すべくターンを進める。

「ターン03」ロン

「メインステップ…オレのライダースピリット…ナイトを召喚する!!」

ー【仮面ライダーナイト】LV1（1S）BP2000

「おお出た!!ナイト!!」

このバトル、初めてスピリットを召喚したのは挑戦者のロン。群青色に身を包んだ騎士のライダースピリット、ナイトが現れた。それに伴ってアスラも声を上げる。

「召喚時効果でードロー」

そしてロンはその効果でカードを1枚デッキから引き抜くが……

「ここで獣の氷窟…LV2効果。ワシも1枚のカードをドロー」

「ええ!?!…何それ、ズル!!」

驚くアスラ。獣の氷窟LV2の効果は所謂便乗ドロー。敵のスピリットかマジック

の効果で手札が増えればその分だけカードをドローできるのだ。

ただ、56回も彼とバトルしているロンにとってそんな事百も承知。

「ミラーワールドのLVを2に上げ、アタックステップ、ナイトでアタック!!」

ナイトで攻撃を仕掛けるロン。そしてこの瞬間に配置していたミラーワールドのLV2効果が発揮されるも、それはアドベントカードではないため、彼の手札へと加わった。

「アタックはライフで受ける……」

ブロックできるスピリットも無ければカウンターも無い。

ゴゴは当然このアタックをライフで受ける宣言をする。

ナイトが手に持つレイピアのような鋭い剣で強烈な刺突を繰り返し、彼のライフを砕こうと試みるが……

「……………ふむ」

へライフ5??5へゴゴ

「え!?!…ライフ減ってねえぞ!?!」

ゴゴを守ろうとするライフバリア。それは通常のバトルならば容易く破壊されるモノであるが、今回は違う………

「獣の氷窟LV1、2の効果。BP4000以下のスピリットのアタックではライフは減らない」

ー!!

………
またしても獣の氷窟だ。その効果により、ナイトのアタックでライフが砕けなかった

「まさか、アレだけワシとバトルしておいてこの効果を忘れるとは、愚の極みじゃな」

「……オレはただミラーワールドの効果でカードをドロ―したかっただけです……ターン

エンド」

手札：6

場：【仮面ライダーナイト】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

「……またその減らず口か。ワシと長期戦して勝てると思つてるのか？」

ロンはゴゴと言ひ合いになりながらもそのターンをエンドとした。実際に彼が手札を増やしたかったのも事実中の事実である。

「そんなバトルではワシのこのライフには傷一つつかんぞ」

「いやいや、流石に傷一つはつくだろ」

そう告げるゴゴにアスラは思わず口を挟む。

それもそのはず。何せ、このバトルスピリッツと言うゲームにおいてライフとは自ずと減っていくモノ。一つも傷がつかないわけがない。

それが当たり前だ。

しかし、この男、白のカラーリーダーであるゴゴ・シラミネは違う。

「アスラ、この人の言っている事はハツタリじゃない。オレはこの人と55回バトルをして、ただの一度もそのライフを破壊できなかった」

「ッ!？」

信じられないことをアスラに告げるロン。この白のカラーリーダーであるゴゴはつまりライフ5をバトル中ずっと維持し続けていた事になる。

「5という数字は美しい。それ故にワシはこの初期ライフ5を維持し続ける」

「……………いや、意味がわかんねえ」

流石のアスラも彼の妙なこだわりにちよつと引いた。

だが、その実力は本物だ。彼は今までロンを含めてほとんどの挑戦者からライフ5を守り切っていた。

正に挑戦者達にとって彼は立ち塞がる巨大な壁と言える。

「ワシのターンじゃな」

……
そんな鉄壁の防御力を誇るカラーリーダー、ゴゴのターンがまたしても幕を開ける

「ターン04」ゴゴ

「メインステップ…ネクサス、侵されざる聖域を配置してターンエンド」

手札：5

場：【侵されざる聖域】 L V 1

【獣の氷窟】 L V 2

バースト：【無】

「えっ…それだけかよ!？」

ゴゴの背後にはまたしてもネクサスカードが配置される。それはデッキに1枚しか

入れる事ができない強力なカードではあるものの、あれだけ豪語しておきながらこの程度の動きしかないのは少々実行性に欠ける。

しかし、それでも確実に彼のフィールドが完成しつつあったのは間違いない。

「ターン05」ロン

「メインステップ：ミラーワールドのLVを1に下げ、オレは第二のナイトをLV2で召喚!!」

1 「仮面ライダーナイト」[2] LV2 (2) BP6000

ロンは攻勢に回ると言わんばかりに第二のナイトのカードを切った。

ナイトはカードを読み込むバイザー付きの剣にカードを装填。

1 『トリックベント!!』

の音声がそこから発せられたかと思えば、全く同じ姿をした第二のナイトがその隣に

現れていた。

「アタックステップ!!……第二のナイトでアタック!!……BPは6000、獣の水窟の効果は効かない!!」

「つしやあ!!これでライフを破壊できる!!」

第二のナイトが黒い剣を手に持ち、地を駆ける。狙うは当然ライフ5のゴゴ。アスラもなんだかんだでロンの応援をしているようである。

だが、

彼のライフを破壊するのはそう易い事ではなくて……

「フラッシュマジック、ミストカーテン」

「!!」

「第二のナイトを指定。このターン、そのスピリットではワシのライフは減らん」

清廉潔白な白いカーテンが第二のナイトの眼前に現れ、その行く手を阻む。少なくともこのターンはほとんどの身動きはできないであろう。

しかし……

ロンも負けてはいない。手札からカウンターのカードを引き抜いた。

「フラッシュマジック…ソードベント!!」

「!!」

「この効果により、このターンの間、第一のナイトのBPをプラス5000!!…よって、獣の氷窟のラインを超える!!」

ー【仮面ライダーナイト】BP2000??7000

第一のナイトはまたカードを装填する。

ー『ソードベント!!』

今度はその音声と共に大きな黒槍がその手に装備された。これにより、このターンのみだが、第一のナイトもゴゴの配置するネクサス、低BPスピリットを無力化する獣の氷窟のラインを超えた。

「……………第二のナイトのアタックはライフで受ける……………そして5は維持される」
ライフ5?5

このタイミングは飽くまで第二のナイトのアタック中。ゴゴはそのアタックをライフで受ける宣言をする。第二のナイトが剣で彼のライフを斬り裂こうとするも、ミストカーテンの羽衣のようなバリアが身代わりとなった。

「続け、第一のナイトでアタック!!」

「よし、今度こそいけるぜ!!」

ソードベントの恩恵を受け、第一のナイトがゴゴのライフを斬るべく走り出した……………

だが、ゴゴはこのタイミングで手札のカードを切る……………

「フラッシュマジック、ミストカーテン」

「ツ!!……………2枚目だど!?!」

「第一のナイトを指定し、このターンの間そのスピリットのアタックではライフは減らん……………よってそれもライフで受ける」

〈ライフ5?!5〉ゴゴ

2枚目のミストカーテンが今度は第一のナイトに纏わり付く。ナイトが黒槍でゴゴのライフを貫こうとするが、またしてもミストカーテンが身代わりとなった。

「ま、マジかよあの人ホントにロンを相手にライフ5をキープしてやがる」

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV1

【仮面ライダーナイト「2」】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

その余りの絶対的な隙の無い防御力に啞然とするアスラ。ここでようやくこれまでの

事が嘘ではなく紛れも無い事実である事を悟る。

対するロンはここは致し方なくターンエンド。ゴゴにそのターンを明け渡す。

「ターン06」ゴゴ

「メインステップ……さて、そろそろ頃合いかな？」

「!!」

ゴゴがメインステップに入る直後……

ロンはある悪寒を感じた。55回のうち何度も感じたそれは……

間違いなくあのスピリットだ。それはゴゴのバトルスピリッツを象徴すると言って
も過言では無いモノであって……

「………召喚。コスト5!!メカゴジラ!!……獣の氷窟のLVを下げ、LV3で召喚じゃ
!!」

1【メカゴジラ「1993」LV3(4)BP9000

ゴゴがそう告げると、獣の氷窟から何か飛び出して来た……………

それは正しく機竜と呼べる存在。その名はメカゴジラ。白のテクノロジが全て注ぎ込まれたロボットであり、ゴゴのバトルスタイルそのものを表しているスピリットでもある。

ロンは合計55回このスピリットに敗北して来た……………

「な、なんかスゲエ!! かつちよいいイイー!!」

まるで緊張感を感じていないアスラはただただそのメカゴジラのカッコよさに痺れ、目をギラギラと輝かせていた。

「さらに装備。ガルーダ!!」

ー【メカゴジラ「1993」＋ガルーダ】LV3（4）BP13000

まだゴゴのメインステップは終わらない。戦闘機がメカゴジラの頭上に現れ、そのま

まそれとドッキング。メカゴジラは両肩からのビーム砲に加え、ジェット機の翼を手に入れた。

「なんかまたカッコ良く!?」

そしてアスラはまだカッコいいだのと呑気にほざいている。

「アタックステップ!!……翔けるメカゴジラ!!……アタック時効果で第二のナイトを手札に戻す」

「っ!!」

メカゴジラは両肩に備え付けられたビーム砲を第二のナイトに向けて射出。それは見事命中し、ナイトの身体はデジタルの粒子となってロンの手札に帰還してしまった。

「さあ受けよ、ダブルシンボルのアタック!!」

「くっ……ライフで受ける………ぐあああ!!」

へライフ5?3) ロン

メカゴジラがジェット機の逆噴射で加速し、恐ろしい速度で一気にロンとの間合いを詰めると、鋼でできた強靱たる素手で彼のライフ2つを粉々に粉碎した。

余りのバトルダメージにロンは思わず膝を着いた。

「……ターンエンド。スーミのロン。オマエは何度もワシに負け続けた。そのボロボロの身体でまだ立つか？」

ゴゴがロンに訊いた。

そうだ。バトルを始める前から既にロンの身体は限界を迎えていた。彼と56回もバトルを繰り返したゴゴならばその事をより深く理解している。

「うるさい……オレはアンタを超えて、頂点王にもなる男だ。頂点王は限界のあるモノがなつてはならない!!」

「……そうか。ならば力尽きるまで真つ向から向かって来るといい」

「初めからそのつもりだ!!」

勢い良く膝を立ち上げたロンが確かな意気込みと共にそのターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン07」ロン

「メインステップ…鎧魂を召喚し、手札に戻った第二のナイトを再召喚!!」

1 【鎧魂】LV1(1)BP1000

1 【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2)BP6000

鎧を着た小さな幽霊、鎧魂が現れたかと思えば、再び第二のナイトがロンの場に姿を見せる。

そして今度はその強力な召喚時効果も発揮されて……………

「召喚時効果!!…相手スピリットのコア2つをリザーブへ!!」

第二のナイトは黒槍を装備し、その一太刀で疾風の斬撃を放つ。それは一直線にゴゴのメカゴジラに飛びいき、直撃。

その体内にあるコアはリザーブへと弾き出されてしまった……………
かに見えた。

「無駄な事を。侵されざる聖域の効果により、メカゴジラは赤を除いた【装甲】を得ている!!……………それによりナイトの効果は無効!!」

「くっ!!」

届いたかに見えた第二のナイトの斬撃はメカゴジラには全く通用しておらず、ただの一つもコアは外れてはいなかった。

現在。メカゴジラはゴゴの配置していたネクサス、侵されざる聖域の効果で赤を除く装甲を与えられている。それに加えて元より所有している超装甲：赤により実質全ての装甲を獲得しているに等しいのである。

「……………第一のナイトのLVを3に上げ…ソウルコアを魂鬼と入れ替える……………
ターンエンド……………ッ!」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】 LV3

【鎧魂】 LV1

【仮面ライダーナイト「2」】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

「ふむ。まあ、そうなるだろうな」

「おいロン!?…なんでアタックしねんだよ!?…今ならゴゴさんのライフを破壊できるじゃねえか!!」

苦渋をなめたような苦しい表情を見せながらそのターンをエンドとするロン。彼がこのターンアタックしなかったのにはアスラも知らない理由があるのだ。

「少年。メカゴジラはLV2、3の時疲労状態でブロックができる。今アタックしたところで皆返り討ちに合うだけなんじゃ」

「ツ!!……マジ!?!」

そう。このメカゴジラ。疲労状態でのブロックを可能とする効果を持ち合わせている。疲労状態でブロックができると言うことはそれすなわち無限ブロックカー。負けないう限り何度でもライフを守る事ができる。

これこそ、このスピリットが彼の象徴たる証の効果であつて……

装甲の効果も相まって、この状況を打破できるのは至難の技と言えよう……

そして次はそんなゴゴのターン。56回目となる勝利のため、ターンシークエンスを進めていく……

「ターン08」ゴゴ

「メインステップ……体ずつ消して行こうか。マジック、光速三段突……第二のナイトをデッキの下へ」

「!!」

光速で放たれる光の刺突が第二のナイトを貫く。第二のナイトはデジタル粒子と化し、ロンのデッキ下へと消え去ってしまった。

「さらにアタックステップ!!……進撃せよ、メカゴジラ!!……その効果で第一のナイトを手札に!!」

「っ!!」

メカゴジラは両肩に備え付けられたビーム砲を第一のナイトに向けて放出。見事に命中させ、それをロンの手札へと戻した。

そしてさらに追い討ちをかけるかの如くゴゴは手札のカードを引き抜いて……

「フラッシュマジック……全武装攻撃!!……効果によりメカゴジラを回復させる!!」

「!!」

ー【メカゴジラ「1993」+ガルーダ】(疲労??回復)

連続アタックを可能にするマジックカード、全武装攻撃が発動される。これにより、メカゴジラは疲労状態から回復状態となった。

「…………アタックは鎧魂でブロック!!」

これに対し、ロンは唯一のブロックカーである鎧魂に防御を命ずる。鎧魂が主人を守らんとメカゴジラの元まで浮遊するが、その鋼の腕で吹き飛ばされ、爆発してしまう
…………

「…………鎧魂の効果…ソウルコアが置かれていたため、メカゴジラからコア一つをトラッシュュに送る…………」

「無駄だ!!【装甲】により、その効果も無効!!」

鎧魂が破壊された直後、紫の靄がメカゴジラにまとわりつくも、メカゴジラはそれさえも弾き飛ばしてしまう。

「このターンの進撃はまだ終わらん!!…メカゴジラで再度アタック!!」

メカゴジラが眼光を輝かせ、再びその鋼の身体を起動させる。狙うは当然ロンのライ

フ……………

もはやロンに打つ手は残っていないくて……

そのままこの攻撃を受け入れるしかなかった……………

「ライフで……………ぐつ…ぐあああ!!」

へライフ3??1<ロン

「ロンー——!!!」

メカゴジラはその鋼の手腕でロンのライフを打ちつけ、一気に2つ破壊した。ロンはその上から来た強烈なダメージにより、地面に叩きつけられる。ライバルのピンチに、アスラは思わず彼の名を叫んだ。

「……………ターンエンド」

手札：1

場：【メカゴジラ「1993」+ガルーダ】LV3

【侵されざる聖域】LV1

【獣の氷窟】LV1

バースト：【無】

できる事を可能な限りやり終えたか、そのターンをエンドとするゴゴ。次はロンのターンとなるのだが……

彼はまるで力尽きたように地面に倒れているままであり、一向に起き上がる気配が無かった……

「立ち上がれないか……無理もない。寧ろよくここまでやったと称賛したいくらいじゃ……身分はコモン。ライダースピリットに選ばれているとは言え周囲のカードは安物ばかり……それでよくもまあ3番目まで辿り着いた」

「ロン……」

自分を上出来であると称賛し、そう告げるゴゴの言葉を耳に入れながら、ロンはふと思いついた……

ーもう…コイツに勝つ事はできないと……………

力の差があり過ぎる。

何度やっても勝てる気がしない。

何が生まれた時からライダースピリットに選ばれているだ……………

こんなモノ、アイツの前では何の役にもたちやしない……………

自分はよくやった。上出来だ。ここがきつとコモンという低身分の者が辿り着ける限界であるのだろう……………

そう考えてしまっていた……………

彼をそこまで思い至らせる程にゴゴは強いカードバトラーだった……………

だが……………

「何やってんだロン……………立てよ」

「!?」

昔から何度も聞いていたうるさい声が耳を通過する。それは幼馴染みにして最大の

ライバル、アスラの声だ。

「好き勝手言われてんじゃねえ……………早く立て!!…オレ達の物語はまだ半分も来ちゃいねえぞ!!」

「!!」

オマエはオレのライバルだ……………オレの目の前で…オレ以外の奴に負けんじゃねえ!!

ああ……………

そうだった。

オレの後ろにはいつもコイツの喧しい声が聞こえて来るんだ。

このまま寝てると、アイツがオレの前に行っちゃまう……………
それだけは絶対に許せないし、あり得ない。

「アスラ……………うるさい」

「ツ!!……………ロン……………!!」

アスラの言葉を聞き入れるなり、ロンはそのボロボロの身体を奮い立たせて、立ち上がった。そしていつものように飄々とした態度でアスラを「うるさい」と一蹴した。

「ここから怒涛の反撃が始まるんだ。黙って見てろ」

「だからウソつけエエエー!!!…絶対打つ手無しって感じだったろ!!」

「そのまま寝ていた方が幸せじゃったと思うがの」

「オレは幸せになるためにバトルしてるんじゃない。頂点王になるためにバトルしてるんです…ハッキリ言って、寝てる暇は無い」

そうだ。

ロンの夢もアスラと同じ頂点王になる事。アスラが諦めない限り自分も早々に折れ

る気は無いだ。

「オマエは所詮最も身分の低いコモン。バトルスピリッツ絶対主義のこの世界で生き抜く事はできん!!」

「関係無い……オレはシイナ・メザを超え、いつか必ずアスラよりも先にこの国の頂点王になる!!」

ロンの怒号とも取れる声が氷のスタジアムに響き渡った。

そしてその時だ。

ロンの懐にあったあるカードが彼の声に応えるかのように青く光り輝き、彼の前に飛び出してきたのは……

「……………コレは……………」

その正体はコラボダンジョンに捜索に行った際、何故かふと無意識に手に入れていた黄金の翼のカード。

「えっ……………アレって……………」

アスラもその絵柄のカードには見覚えがあった。それはついこの前、テンドウから頂点王からの贈り物と称され手渡されたカードの事だ。今、ロンの目の前にあるそのカードは自分の持つそれと類似していて……………

「……………なんだそのカードは……………!?!」

「オレも知らない。けど、これだけはわかる……………このカードはオレに『生き残れ』と訴えている!!」

「!!」

目の前の現象に驚かすにはいられなかったゴゴ。そしてロンは目の前にある黄金の翼のカードを握りしめると、それは光の粒子となって新たにデッキへと宿った……………

「……………オレのターンツツ!!」

啖呵を切るようにターンを進めていくロン。ここから彼の逆襲が幕を開ける

………

「ターン09」ロン

「メインステップ……仮面ライダーナイトをLV3で召喚!!」

1 【仮面ライダーナイト】 LV3 (6) BP6000

「性懲りも無く、またそいつか」

「さっきまでのナイトだと思っうな……召喚時効果により、1枚ドロ」

ロンがナイトの効果で新たなカードをドロする。すると、どこからとも無く、ロンに追い風になるように突風が吹き荒れる。

「……この風……どこから吹いてきた……？」

「ミラーワールドのLVを2に上げ、アタックステップ!!……ナイトでアタック!!」

疲労状態でもブロックが可能なメカゴジラを前にしてアタックを仕掛けるロン。だが、決して無謀な行いでは無い。アタックした事により、ミラーワールドの効果が発揮される。

「ミラーワールドの効果!!…デツキの上から1枚をオープンし、それがアドベントカードならノーコストで発揮させる!!…オープンされたのはソードベント!!…これにより、ナイトのBPを5000上げ、メカゴジラのコア2つをリザーブへ!!」

ー【仮面ライダーナイト】BP6000??11000

この効果でオープンされたのは『ソードベント』のカード。ナイトは腰のベルトからカードを引き抜き、それをバイザー付きの剣へと装填し、黒槍を装備する。

そしてそのままそれを振るって疾風の斬撃を放つが……

「その程度の風でメカゴジラは斬れん!!」

当然、メカゴジラには通用せず、またしても弾き飛ばされてしまう……

「そのアタック…メカゴジラで承ろう!!…この瞬間、ガルーダの合体時効果により、B Pを3000アップさせ、コアを1つ増やす!!」

黒槍と剣を両手に持ち、メカゴジラに特攻するナイト。だが、B Pの差は歴然。その斬撃や刺突はメカゴジラには傷一つつかず、メカゴジラに蹴り飛ばされてロンの元まで吹き飛ばされてしまう……

ナイトはなんとか立ち上がるも、破壊されるのは時間の問題であった……
しかし……

「この力。存分に振るわせてもらおう……!!」

ロンは手札に来ていた新たなカード、新たな切り札。

おそらく黄金の翼のカードであったそれをこの最後の最後の場面で発揮させる。

「フラッシュ煌臨を發揮!!…対象は仮面ライダーナイト!!…この時、ナイト自身の効果でコストを5として扱う!!」

「ッ!!……………ロンが煌臨!?!」

ロンの突然の煌臨宣言に戸惑うアスラ。それもそのはず、彼のデツキには煌臨を持つカードなど入ってなかったし、今まで一度もそれを発揮した所を見た事が無かったのだから……………

煌臨のエフェクトなのか、ナイトはいつものようにベルトからカードを引き抜くと、それと同時にバイザー付きの剣を一瞬にして青いシールドに変化させ、さらに強い突風が発生。そのカードが今までのどのアドベントカードよりも強力なものであると周囲の者達を悟らせる……………

そしてナイトはバイザー付きの青いシールドにそのカードを装填した……………

……………『サバイブ!!』

無機質な機械の音声がそう告げると、ナイトは瞬く間にその姿を青い騎士へと一変させる。ロンは新たに現れた黒いマントが疾風の中で靡くのを目に移しながら、こう言い放つのだった……………

「これがオレの新たなエース……仮面ライダーナイトサバイブだツツ!!」

【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3(6)BP21000

「……………ナイト……………サバイブ!？」

「まさかさっきの青く光り輝いた、あのカードなのか!？」

ナイトの進化系と言っても過言では無いスピリットの登場に驚愕するゴゴとアスラ。特にアスラは「サバイブ」と言う言葉にどこか耳覚えのあるような反応をしております……………

「コイツがいる限り……………オレは負けない……………煌臨時効果!!…相手スピリット1体のコア2つをトラッシュユに送る!!」

「!!」

ナイトサバイブは青き盾に内蔵された騎士の剣を引き抜く。煌臨時効果発揮の態勢に入ったのだが……………

「愚か者め。いくら進化しようが、そいつが紫のスピリットである事に変わりはない……このメカゴジラには通用しないぞ!!」

そう……

今のメカゴジラには侵されざる聖域の効果と元からある効果と合わせて全ての色の【装甲】を所持している。ナイトから強化されたナイトサバイブは強化前と同じ紫。

この効果も無効にされる……
はずだった……

「愚かなのはアナタの方だ……」

ロンがそう告げると、ナイトサバイブはその引き抜いた剣で空を斬り裂く。そしてそこから疾風の斬撃がメカゴジラに向けて放たれた……

メカゴジラはこれをも難無く弾き返そうと試みたが……

1【メカゴジラ「1993」+ガルーダ】(5S??3S) LV3??2

「なにつ!?……………」

その目に入って来た光景を疑うゴゴ。無理も無い。紫属性のナイトサバイブが放った疾風の斬撃が装甲を持つメカゴジラの体内のコアをトラッシュユへと弾いたのだから……………

「ナイトサバイブは煌臨時……このバトルの間色を無色とする……色が無ければ装甲は無意味!!」

ナイトサバイブの効果は色を無色として扱う事。これにより、メカゴジラの持つ装甲を無視してコアを弾き飛ばす事が可能だったのである。

「……………さらに煌臨スピリットはその煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ!!……………ナイトサバイブ!!……そのままメカゴジラを破壊しろ!!」

「ッ!!」

メカゴジラに向けて走り出したナイトサバイブ。その手に握る剣に疾風の風を纏わせながらメカゴジラの動体に斬り込んだ。メカゴジラはそれに真つ二つに斬り裂かれ、なす術なく大爆発を起こしてしまう。

その際に合体していたガルーダが逃げるように離脱した。

白のカラーリーダー……ゴゴとバトルしてから55回。スーミのロンはようやく要塞の如きスピリット、メカゴジラをトラッシュユへと葬ったのだった……

「……………まさかメカゴジラを倒すとはの……………しかし、その剣はワシのライフまでに届かんようじゃな」

そう言い放つゴゴ。挑戦者のデッキのカードが異様な進化を遂げ、エースであるメカゴジラが破壊されたというにもかかわらず、妙な冷静さを保っていた。

だが、彼のライフを破壊できないプランをロンが考えているわけがなくて……………

「アナタの目はどこに付いている……………オレのナイトサバイブは二度飛ぶ」

―【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

「ツ!?!……既に回復しているじゃと!?!」

煌臨スピリットは煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ。

故にアタック中だったナイトに煌臨したナイトサバイブはそれに合わせて疲労状態となっていたはずだが、この通り、何故か回復していて……

「ナイトサバイブの第二の効果……ターンに一度、デツキの上からカードを3枚トラッシュに置く事で回復する……オレはこの効果をメカゴジラとのバトル中に発動していた……!!」

「……ツ!!」

「……オレはこのナイトサバイブでアンタのライフを斬る!!……いけえ!!!……アタック時効果で今度はガルーダを消滅!!」

「ツ!!……アタック時にも使えるのか!?!」

回復したナイトサバイブがロンの指示により再び駆ける。狙うは今度こそゴゴのライフ……

再びその剣に疾風の風を纏わせ、斬撃を放つ。それは戦闘機であるガルーダを捉えて、難無く斬り裂いて見せた。その後、ナイトサバイブはゴゴの元まで一気に距離を詰める。

この白のカラーリーダーであるゴゴのバトルスピリッツは正に鉄壁の壁。鋼鉄の如く何人たりともそのライフに傷を入れる事を許さない……………

そのため、この国のカードバトラーは彼のライフを破壊できるか否かでこの世界で上に行けるかを判別している。

そしてようやくこのロンも……………

「……………ぐっ!?!」

へライフ5?!4へゴゴ

そのレールの上を走る事になる……………

ゴゴのライフが破壊される音はいつものガラス細工が割れるように軽い音ではなく、まるで巨大な門が無理矢理こじ開けられるかの如く鈍い音だった。それは幻聴かもしれないが、そう感じてしまう程に、彼のライフを1つでも破壊する行為は重たいのだ。

「ハアツ…………ハアツ…………どうだ。コモンの一撃は……………」

連戦に激戦を重ね、ようやく彼から1つのライフを破壊したロン。流石に息が乱れている。そんなロンの様子を見て、ゴゴは「コモンの少年が、まさかここまでやるとはな」と鼻で笑いながら呟くと……………

「このバトル、ワシの負けだ」

ー!?

そう告げた。

ゴゴの言葉に驚きが隠せないロンとそれを見届けていたアスラ。無理も無い。この国を代表するカラーリーダーがサレンダー行為をするなど信じ難い事なのだから………

「ちよつとオオオー!!!…ライフまだまだたくさん残ってますよオオオー!!!?…諦めなかつたらまだチャンスはありますってエエエー!!」

アスラが右手を上げながら提案するように割って入って来た。ロンに勝っては欲しいが、このバトルをしっかりと最後まで見届けておきたいという感情もあるのだろう………

「いや、これで良い。ワシは他のカラーリーダーと比べてもちよつと強過ぎるからの。元々ライフを一つでも破壊できたらカラーカードを渡すようにしておる………ほれ!」

「!!」

ゴゴはそう言いながらロンに真つ白なカード、カラーカードの1つであるホワイトカードをロンに投げ渡す。これにより、ロンは白のカラーリーダー『ゴゴ・シラミネ』に勝利した証を得る。

「……………まあ、続けてたとしても、おそらくワシの負けじやよ。あのスピリットをどうにも止められないしの」

「ええ……………」

「……………と言うわけで、勝利おめでとう…スーミのロン。まあこれからも頑張れ」

アスラはちよつとだけ残念そうな声を漏らした。どんな理由があれど、天下のカラーリーダーが途中でバトルを投げ出すのはなんか拍子抜けだった。

だが、ロンはその言葉を理解したか、デッキとBパッドを仕舞った。それに伴い、ナイトサバイブはこの場から一旦姿をゆつくりと消滅させた。

「まあいつか……………おいロン!!…やったな!!スツゲエぞ!!あの人からライフ破壊する

なんて!!なんかちよつと腑に落ちねえけど、オレも負けてられないな!!……………てか、さっきのカード何!?…どこで手に入れた!?……………実はオレもテンドウさんから似たような物を……………」

「アスラ、一度に何個も質問するな。うるさい」

その様子を見て思わずロンに駆け寄るアスラ。正直言つて情報が多すぎてどこから話して良いかわからない状況に陥つていて……………

ロンはそんなアスラを見ながら何かに思い至つたのか、再び懐からデツキを取り出すと、彼に見せつけながら……………

「アスラ……………今すぐ、今すぐオレと戦え!!」

「!?」

「現時点でどちらが上か、この場でハッキリさせよう……………!!」

そう言い放つのだつた……………

そして遂に、幼馴染みであり、尚且つ運命のライバルとも呼べる2人のバトルスピーリッツが幕を開けようとしていた……………

14コア 「サバイブ―烈火―」

この国においての最高位の身分、エックスを持つ少女エール・オメガは夏だと言うのに粉雪が降り続ける極寒の町、ユキカイ町を走っていた。その胸元にはオレンジの犬、ムエが抱き抱えられている。

行き先はこの町のコロシウム。この町での宿を探し終えたエールはアスラのバトルを一目見ようと急いでいた。

「ハアツ…ハアツ…：間に合うかしら？…：いや、別にあんな奴のバトルなんて興味ないんだけど…：!!」

「むえ〜?」??じゃあ走るのやめようぜ?

息を切らしながらもツンデレを發揮するエールに、ムエは自分の言葉が伝わらない事を知っているながらもツツコミを入れる。確かに別にアスラのバトルに興味がないなら急いで走る必要性は皆無である。

やがて彼女らはユキカイ町の氷で覆われたスタジアムに到着するのだった…：…

……

エールは今、到着したスタジアムの床を走っている。バトル場のある中央を目指しているのだ。そして突然見知った人物の声が聞こえて来た。

それはとてもとても喧しいが、自分にとっては馴染み深く、落ち着く声であつて……

「ドラゴンライダーキックツツ!!」

「ツ!!……アスラの声……間に合った!!」

聞こえて来たのは仮面ライダー龍騎の技名である「ドラゴンライダーキック」の名を叫ぶアスラの声。技名を叫んでいると言うことは絶賛バトル中であると言う事。エールはホツと肩を下ろし、再び走り出すと、ようやくアスラがいるであろう中央のバトル場に辿り着いた。

その瞬間、バトルしているアスラの光景が目映った。宣言通り龍騎が赤き龍の火炎弾に背を押され、対戦相手に飛び蹴りをかましていた。

しかしその相手は……………

「……………ぐっ!!」

〈ライフ4??2〉ロン

「……………あれ、アイツ確か……………ロン??……………だったっけ?…アスラのライバルの……………」

そう。その対戦していた相手は白のカラーリーダーではなく、アスラのライバルであるロン。龍騎のライダーキックを受けてそのライフが大きく削がれた。

ロンのカラー戦を見届けた後、アスラは何故か彼に突然バトルを挑まれ、現在に至る。

「おっ!!…バカスラ!!」

「ツ……………おおエール!!…宿探し終わったのか?!…ありがとなッ!!」

「そんなことより何でアンタ白のカラーリーダーじゃなくてライバルとバトルしてんのよ!!」

気になったエールがアスラに声をかけた。

「……まあ、色々あつて……」

「カラーリーダーとはバトルできたの？」

「……なんか予約制だとかで無理なんだと」

ある程度の事情を簡潔に説明するアスラ。その様子を見ていたのは白のカラーリーダーとアスラの対戦相手であるロン。

「おいアスラ。バトル中によそ見るな……次はオレのターン、手は抜かない!!」

「おおい!!悪い!!……どっからでもかかって来やがれ!!ターンエンドだ!!」

手札：3

場：【仮面ライダー龍騎】LV2(4)BP4000(疲労)

バースト：【有】

ロンに急かされ、アスラはそのままターンをエンドとした。

因みに現時点でアスラとロンのライフは共に『2』……ロンの場合はスピリットどころかネクサスもバーストも無い状況であり、若干アスラが優勢だった。

「あの少年。コモンでしかもソウルコアが使えない身でここまで生き残って来たのか？……なかなか骨があるじゃないか」

「ここまでのアスラのバトルスピリッツを見て、そう呟いたのは白のカラーリーダーゴゴ・シラミネ。素直にアスラが成して来た事に関心を示す……が。」

「……………まあ、どちらにせよロンには勝てんがな」

直ぐにそう言い返した。彼は既にどちらに勝利の女神が微笑むのかを見抜いているようである……………

（……………オレが伏せたバーストは第二の龍騎。ロンの奴が龍騎を破壊したらこれを発動させてやるぜ!!）

一方でアスラは割と余裕であり、次のロンのターンを凌いで勝つ気でいた。そして、様々な人物の考えが交差する中、ロンのターンが幕を開ける……………

「ターン05」ロン

「メインステップ……………鎧魂と第二のナイトを召喚!!」

1 【鎧魂】LV1(1)BP1000

1 【仮面ライダーナイト「2」】LV2(3)BP6000

鎧を着た人魂ならぬ鬼魂、鎧魂と、ロンの持つ紫の騎士型のライダースピリット、ナイトが現れる。

「ナイトの召喚時効果!!…龍騎のコア2つをリザーブへ送く!!」
「っ!!」

ナイトは『ソードベント』のアドベントカードをバイザー付きの剣に装填し、黒槍を

手にする。そしてナイトはそれを振るい、風の斬撃を龍騎に飛ばす。龍騎はそれを両手をクロスさせてガードするも、体内のコアは吹き飛ばされてしまう。

(……………つしやあ……これで良い……これで龍騎のコアは2つ。第二のナイトのアタック時効果で破壊される……その時第二の龍騎のバーストが火を吹く!!)

第二のナイトのアタック時効果。コア2つ以下のスピリット1体を破壊する。たった今龍騎はその効果範囲内に収まった。アスラはこの効果による破壊で第二の龍騎のバースト発動を狙っていたのだ……………

「アタックステップ!!」

「つしやあ!!……どんと来やがれロンー!!」

アタックステップに移行するロン。待ち構えていたアスラはロンを挑発するように腹の底から声を荒げる。

……………だが、

「鎧魂でアタック!!」

「……………え……………そつち!？」

最初にアタックして来たのは第二のナイトではなく、まさかの鎧魂。龍騎を破壊して来なかった事に動揺が隠せないアスラ。

さらにロンは畳み掛けるべく手札からある一枚のカードを抜き取る。
それは進化したての最強カード……………

「フラッシュ煌臨発揮!!…対象は第二のナイト!!」

「!？」

ロンの宣言と共にナイトはベルトからカードを引き抜く、それと同時にナイトとロンを中心に疾風の風が吹き荒れ、武器であるバイザー付きの剣はバイザー付きの青いシールドへと変わる。

そしてナイトはその引き抜いたカードを青いシールドに装填……………

……………『サバイブ!!』

無機質な機械の音声がそう告げると、ナイトは瞬く間にその姿を青い騎士へと一変させる。

「煌臨!!…ナイトサバイブ!!」

┆【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2(3)BP11000

「ツ……………さっきの進化したナイト……………!!」

「……………何コイツ……………あんなカード持ってたの??」

ナイトの強化形態、サバイブの登場にたじろぐアスラ。これを初めて見たエールもまたその圧倒的な強者のオーラを感じていた。

ロンはそんな彼らのリアクションなど気にも止めず、ナイトサバイブの効果を発揮させる。

「ナイトサバイブ…煌臨アタック時効果!!…第一の龍騎のコア2つをトラッシュユヘ!!…

よって消滅する!!」

「ッ!!……」

ナイトサバイブが盾から騎士の剣を引き抜くと、そこに疾風の力を込め、アスラの龍騎へ向けてそれを放った。龍騎はガードするも、体内のコアが全て弾き飛ばされ、この場から消滅してしまう……

「第二の龍騎のバースト発動条件は【自分のスピリット破壊後】……消滅では発動できない!!」

「!!」

ロンは完全にアスラの戦術を読んでいた。だからこそ第二のナイトで先にアタックする事はせず、敢えて鎧魂でアタックし、そのフラッシュ間でナイトサバイブによる消滅を行ったのだ。

「鎧魂のアタックは続いてるぞ!!」

「くっ……ライフだ!!……ッ!!」

へライフ2??1へアスラ

鎧魂が手に持つ古びた刀でアスラのライフを1つ斬り裂いた。これによりアスラのライフは残り1つだ……………

「終わりだ……………ナイトサバイブ!!」

ナイトサバイブはロンの指示により、戦闘態勢に入り、アスラのライフ目掛けて走り出した。

……………もうアスラにはこれをどうにかする手段は残されていない……………

……………できる事と言えば、このバトルのラストコールをするのみであり……………

「……………ライフで受ける……………ッッ!!」

へライフ1??0へアスラ

ナイトサバイブの疾風を纏わせた剣の一撃がアスラの最後のライフを難無く断ち切った……………

アスラはロンとのバトルに敗北したのだ……………

「アスラ……………」

バトルに敗北し、その場で膝をつくアスラに対し、エールは心配しているのが見て取れる言い方で彼の名前を呟いた。

だが……………

「クツソオオオー!!!……………オレの負けかアアアー!!!」

「わっ!?!……………うるさ!!」

別にどうの本人は落ち込んでいるわけではない。アスラは勢い良く立ち上がりながらいつものように大音量で叫んだ。彼は悔しそうにはしているものの、どこか満足気な表情でもであり……………

「良いバトルだったなロン!!……でもいつか必ずオマエを追い越してやる!!」

アスラがロンに向かってグータッチを求めするように拳を突き付けるが、ロンは自分の拳をその拳に合わせる事はせず……

「……………オレはオマエみたいな奴をライバルだと言っていたのか……」

「っ!？」

ロンの口から放たれた言葉はいつもの友人やライバル目線で言える言葉ではなかった。まるで他のレア以上の身分を持つ者達のようにアスラを見下しているような……………そんな棘のある言葉だ。

「ライダースピリットを得てもやる事は突撃の選択のみ。とんだ体たらくなバトルだ。オレはもうオマエみたいなバカをライバルとは呼べない……………!!」

「……………なんだと……………!!」

例えばこの言葉が特に顔も知らなくて、見知らぬ人物であったのなら、アスラはいつ

ものようにおちやらけて終わったはずだろう。そんな言葉聴き慣れたものだからだ。ある程度は水に流せる……………

しかし、それを言い放つのがロンなら話は別だ。彼がそう言った言葉を言い放つからこそ、アスラは珍しく怒りを露わにしている……………

「だが……………もう一度だけチャンスをやろ……………2日後……………この町の外れにある雪原広場で再びオレとバトルしろ。そこでもまた同じようなバトルをしたら、今度こそオレはオマエとの好敵手関係を切る!!」

「……………ああ、わあつたよ……………2日後、オレがオマエのライバルだって事を改めて自覚させてやる!!」

彼らは2日後に再戦を交わし、この日はそれで一旦幕を閉じた。

翌日。ユキカイ町の繁華街の一角にて……………

「と言うわけなんですテンドウキアアアーン!!……この黄金の翼のカードを進化させるため、是非オレにバトルのご教授をオオオー!!!」

「え……やだ」

「ええええええ!!?」

アスラは仕事でこの町に来ているテンドウに会いに行っていた。そのすぐそばにはエールとエールに抱っこされているムエも確認できる。

ロンに対抗すべく、アスラが見出した作戦は黄金の翼のカード。先日頂点王シイナからもらい受けたそれをロンと同じく進化させればきつとサバイブに対抗できる力が入ると思っていたからである……

だが結果は聞いての通り、テンドウはあっさりとそれを拒否した。

「なんでですかアアアア?!?!……今なんか「よし、やろう」って言う空気だったじゃねえっすか!!」

「いや、だってめんどくさいだろ。アイス溶けるし」

「……ホントにあったのね、メタルアイスクリーム……」

「むえ〜!」??私も欲しい!!

ロンーロー!!!」

「ちよつとバカスラ、どこ行くのよ!？」

「足腰鍛えるために雪原走って来る!!」

「特訓のベクトルが全然違うじゃない!!…バトスピしなさいよ!!」

「むえ〜」??いってら〜

アスラはそう言いながら全力疾走でこの場を去っていく。このバトルスピリッツ絶対主義の世界において、走り込みや筋トレなど愚の骨頂極まるが、運動が得意なアスラにとつてはどうやらその方法が一番平常を保てるようだ。

「……………行っちゃった……………にしたって男ってホントバカよね」

「何が？」

エールが漏らした言葉に、テンドウが反応した。

「アスラもそのライバルも、ライバルとして認めないからなんだって言うのよ。自分は自分じゃない」

「……………エレンに認められたいとか思ってたオマエが言う?…結構なブーメランよ?」
「そ、それとこれとは話が違うわよ!!」

エールは今回の出来事により、そう思い至っていた。

「……………まあ、アイツらはガキの頃から一緒だったみたいだしな。他人にはわからないモンがあんじゃね?」

「他人にはわからないモノ……………」

「てか何エール、オマエあの天才イケメン君に小僧取られて嫉妬してんの?」

「し、ししし、してないわよ!!…誰があんなチビ!!」

テンドウの言葉に、エールは顔を赤くしながら全力で否定するが、正直、彼女はアスラをあそこまで必死にさせるロンとの関係を羨ましく考えていた。

ユキカイ町外れにある雪原広場。足元に軽く雪が積もるこの場所にて、決戦は明日だ

と言うにもかかわらず、アスラのライバル、ロンはこの場に一人佇んでいた……………
その手には昨日進化を果たしたナイトサバイブが握られていて……………ロンはその
カードを凝視していた。

「やつほー……………おっ、やつぱロンは良い感じのイケメンになったんだな〜」
「!!」

ロンが耳覚えのある明るい声に反応した。それは女性の声。自分とアスラにとって
は忘れられない懐かしい声だ。ロンは思わずその声のする方へと振り向いた。

「……………シイナ……………なのか?」

「正解!!……久し振り、大きくなつたね!」

そう。そこにいたのは他でもない。自分とアスラを5歳になるまで育ててくれた恩
人、現頂点王シイナ・メザだ。

「……………なんで頂点王のアナタがこんなところにいるんですか?」

「アスラ程のリアクションはしてくれないんだね。ロンは大人だなく……背丈も私より高くなったし」

「リアクションに関してはアイツがバカなだけです」

久し振りに母に等しい存在と再開したと言うのに、ロンはあまり驚くような素振りは見せず、冷静な口調でシイナに訊いた。

「ふふ、ロン。私はね、楽しみなんだよ。……自分が育てた子が私に挑んで来る事と、その過程を見るのがね」

「……………随分と変わった趣味を持ってたんですね」

約10年前、シイナは2人をスーミ村に残し、頂点王になる旅に出た。そして頂点王になり、今があるのだが……………

簡単に説明すると、彼女はアスラとロンの2人が切磋琢磨し合い、強くなつていく過程を頂点王という立場で眺めたかったのだ。そのためだけに三王さえをも倒し、この国初の頂点王になった。

そして、次はシイナがロンに質問する。彼女は小さく微笑みながら口を開き……………

「……………ねえロン。そんなにアスラが弱いのがイヤ？」

「!!」

何も事情を説明していないにもかかわらず、このシイナは何故か今の自分の心境や状況を知っていないとできない質問を投げてきた。

流石のロンも若干の戸惑いを見せたものの、直ぐに冷静さを取り戻し、飄々とした態度で返答する……………

「……………はい。嫌です」

「なんで?……………別にいいじゃん」

「昨日。オレのナイトが進化しました……………その時、同時に感じたんです……………オレとアイツの実力差を……………オレの方が圧倒的に強くなってしまったと……………」

「ふーん……………つまりロンはアスラに手応えを求めていると?」

「……………そうなりますね」

「自分より弱過ぎてもダメ。もちろん強すぎてもダメ。ふふ、ライバル関係は複雑だ」

好敵手と言う存在に弱い奴は要らない。

ロンの考え方だ。幼馴染みだとか、同型のライダースピリットとかがでアスラをライバルにしていたわけではない。

自分がいくら強くなっても、アスラはその差を直ぐに埋めて強くなって来る。それが堪らなく楽しいから彼は今までロンのライバルでいられた。

しかし、サバイブによりそれは崩壊。ロンはアスラの手が届かない強さに至った事を悟り、それを確かめるべく彼にバトルをけしかけて現在の状況に陥っている。

シイナの言う通り、ライバル関係と言うのは簡単には言い表せない複雑極まるモノなのである。特にアスラとロンの場合は……………

「そっかそっか!!……………どちらにせよ、明日が楽しみだ!!……………2人の途中経過を拝めるんだからね!!……………じゃあ、明日見に来るから、頑張ってるね〜」
「……………」

最後にそう告げてその場を立ち去るシイナ。ロンはそれに対して何も言葉は返さず、ただ黙って彼女の背中を見送った……………

そして翌日……………

遂に決戦の時……………

粉雪が浅く降り積もった雪原にて、アスラとロンは対峙していた。その周囲には彼らのバトルを見届けるべく、エールとその頭の上にいるオレンジ犬ムエ。テンドウがいた。

その場はとても殺風景で、如何にも決戦と言った言葉が似合う雰囲気であり……………

「どうだアスラ。少しは強くなれたか？」

「たった2日で強くなれるなら苦労はしないぜ。でも、昨日散々走り回ったり叫んだりしたら色々スツキリしたぜ。今日、オマエのライバルはオレしかないって事、もう一度バツチリ叩き込んでやる!!」

「それがいつもの空回りじゃなければ嬉しいがな!!…行くぞ!!」

「おう!!」

……ゲートオープン、解放!!

言い合いの中、2人は展開されたBパットにデッキをセット。コールと共にバトルス
ピリッツを始める。

……先行はアスラだ。

「ターン01」アスラ

「っしやあ!!……メインステップ……ドラゴンヘッドとシャムシーザーをLV2と1で連続
召喚!!」

1 [ドラゴンヘッド] LV2 (2) BP2000

1 [シャムシーザー] LV1 (1) BP2000

アスラのいつものスピリット達、龍の頭部のみで活動を続けるドラゴンヘッドと、背
に数本のトゲを生やした赤きトカゲ、シャムシーザーが場に現れる。

「さらにネクサス、ミラーワールドを配置して…エンドだ!!」

手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV2

【シャムシーザー】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

立て続けにネクサスカードを配置するアスラ。これにより、周囲が一瞬にして鏡向きになる。

そしてアスラはこれ以上は動かず、ターンを終えた。

「……そういや、アイツあの黄金の翼のカードはどうした？」

バトルを傍観しているテンドウが横にいるエールにアスラの持つ黄金の翼のカードの事を聞いてきた。

「……結局何も変化は無かったみたいよ。でも、「デッキに入れときゃ勝手に進化するだ

ろ!!」とか言ってたから、多分デッキに入れてるんだと思うわ」
「……………ふーん」

アスラが鍛えたところで特に何も反応を示さなかった黄金の翼のカード。楽観的な考え方により、今はそのデッキの中に眠っている。当然それをドロウして仕舞えば全くの死に札。アスラのこの行いは博打に近い。

(……………そう言えばシイナがいないな……………)

そしてロンはこの場に昨日来ると告げたシイナが見当たらないのを確認しながらも、自分のターンを進めていった……………

「ターン02」ロン

「メインステップ……………鎧魂、ソードールを召喚し、ミラーワールドを配置!!」

1 【鎧魂】LV1(1S)BP1000

ー【ソードール】LV2(3) B P 3 0 0 0

ー【ミラーワールド】LV1

ロンの場に鎧魂と、全身が剣で構築されたスピリット、ソードールが現れる。ミラーワールドは既にアスラが配置していたためか、周囲の変化は特に起きなかった。

「アタックステップ…ソードールでアタックする」

「来やがったな…ライフだ!!…ツツ!!」

〈ライフ5??4〉アスラ

手始めと言わんばかりにソードールでアタックを仕掛けてきたロン。BPでソードールに敵う者を有しないアスラはこれをライフで受ける宣言をした。

ソードールはその鋭利な両手を活かし、アスラのライフ1つを斬り裂く。

「……………ターンエンド」

手札：2

場：【鎧魂】 LV1

【ソードール】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

ロンはブロッカーとして鎧魂を残し、そのターンを終えた。アスラはその宣言と共に反撃を開始すべくターンシークエンスを進めていった……

「ターン03」アスラ

「メインステップツツ!!……行くぜ相棒!!……仮面ライダー龍騎をLV1で召喚!!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV1 (1) BP2000

アスラが勢い良くカードをBパットに叩きつけながら召喚したのは、赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎。因みにこの龍騎はいわゆる第一の龍騎であり、召喚時効果が発揮される。

「召喚時効果により、オレはオープンされた第二の龍騎を手札に!!」

それにより、アスラはバースト効果を持つ第二の龍騎を手札に加えるが……………

「ドラゴンヘッドのLVを下げ、ミラーワールドのLVを2にアップ!!…アタックス
テップだ!!」

「??……………第二の龍騎を伏せないの!?!」

「っ!?!……………どう言う事だアスラ……………」

アスラのプレイングに反応したのはエールと対戦者のロン。しかし、反応を示してしまうのも無理はない。バーストが手札にあると相手に知られていてもブラフとして伏せるのがもっとも一般的な戦術であるからだ。

「うるせエエエー!!!!…オレにも考えがあるんだよ!!……………龍騎でアタック!!…ミラーワールドの効果でカードをオープンし、アドベントカードならそれを発揮させる!!……………よし、オレが引いたのはストライクベント!!……………鎧魂を破壊してドロ―だ!!」

「!!」

龍騎がベルトにあるカード束からそれを1枚引き抜くと、左手にある龍を模したバイザーにそれを装填……………

『ストライクベント!!』

と言う無機質な機械の音声と共に、龍騎の右手に赤き龍の頭部が取り付けられる。龍騎はそれを鎧魂に向け、龍口から爆炎の炎を放出した。

狙われた鎧魂は抵抗する間も無く焼き尽くされてしまった……………

……………が、

「鎧魂の破壊時効果。ソウルコアが自身に置かれていた時、相手スピリット1体のコア1つをトラッシュに送る……………!!」

「!!」

「消えろ、シャムシーザー……………」

「くっ!!……………」

鎧魂の破壊に合わせるように紫色の靄がシャムシーザーの周囲に発生。シャムシーザーはなす術なくその靄に体内のコアを抜き取られてしまい、消滅してしまった……………

「……………オマエはオレの鎧魂の効果を知っていたはずだ。なのに何故わざわざ鎧魂から破壊した？」

「ああ!? ……んなモン残しててもしようがねえからに決まってるだろ!？」

「……………これだからオマエは成長できないんだ……………」

「んだと……………!？」

ロンはアスラに自分と肩を並べられるような理想のライバルを求めている。

アスラのわざわざ鎧魂の破壊時効果を踏みに行くようなプレイングに軽く失望していた。アスラもアスラでこう言った文句に対しては基本怒りを見せたりはしないものの、話し手がロンなのもあつてどうしてもそれを堪え切れないでいた……………

「……………残ったドラゴンヘッドでアタック……………!!」

「ライフだ……………っ!」

〈ライフ5??4〉ロン

飛翔するドラゴンヘッドがロンのライフ1つを噛み砕いた。

「つしゃあ!!……これで残りライフは同じだけ!!……ターンエンド!!」

手札：4

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【仮面ライダー龍騎】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

互いの仲に亀裂が走りながらも、アスラはそのターンをエンドとした。

「……………あのロンとか言うイケメン君はバトルが面白くねえんだよな……………」

「何よ、藪から棒に……………」

エールと共にバトルを眺めているテンドウがそう呟いた。

「……あのイケメン君はそのデッキのテンプレみたいな動きしかないだろう?……」
「……………ああ……………まあ確かにね……………紫ならやりそうって感じの事しかないわよね」
「バトルは上手いし、センスもあんだが、あの小僧と比べると真面目すぎてこれっぽっちも面白くねえ」

テンドウはどうにもロンのバトルが気に入らなかった。確かに強いし完璧なまでの試合運びをして見せる。だが、それだと意外性が無くて面白味に欠ける。

「……………なんでアスラは面白いのよ?」

逆にエールがテンドウに訊いた。

「アイツはぶつちやけバトスピ下手だし、考える脳なんてほとんどねえ。けど、何者をも恐れない度胸。最後まで勝負を投げない気合、ど根性。何より天性の感で誰もが驚く事をやつてのける。これまでにアイツがカラーリーダー含め、多くの強敵相手に勝ち上がっ

て来れたのもその部分がデカイ……………故にあの小僧は面白い!!」

「……………単なるバカが引き起こした偶然だと思っけど……………」

「むえ〜!」??同じく!

テンドウがアスラと出会った当初からやけにアスラを気に入っていたのはそう言う理由だった。ソウルコアが使えなくて、気合とど根性と感だけでバトルするカードバトル。これが面白くないわけがないと確かな自信が彼の胸の奥にはあつて……………

そして2人がそんな会話をしていくうちに、ロンの第4ターンが幕を開ける。

「ターン04」ロン

「メインステップ……………ソードールのLVを1に下げ、魔界竜鬼ダークヴルムを2体連続召喚!!」

1 【魔界竜鬼ダークヴルム】 LV1 (1S) BP3000

1 【魔界竜鬼ダークヴルム】 LV1 (1) BP3000

ロンの場に禍々しい気を放つ2体の紫の龍が咆哮を上げながら出現した。

「召喚時効果……オレのライフを1つ破壊し、2枚ドロー!!……これを2度行い、オレはライフ2つを破壊し、4枚のカードをドロー!!」

へライフ4??3??2<ロン

2体の魔界竜鬼は現れるなり主人であるはずのロンのライフバリアを噛み砕いて見せた。しかし、それこそ力の代償。彼は新たに4枚ものカードをドローして見せた……

「アタックステップ!!……2体の魔界竜鬼でアタックする!!」

「ツ……ライフだ!!……どんと来やがれ!!……ぐうっ!!」

へライフ4??3??2<アスラ

2体の魔界竜鬼は今度はアスラのライフバリアに目をつけると、すぐさまそこへと飛

翔し、それを噛み砕いて見せた。

これでアスラもロンと同じ残りライフ2となる……………

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【ソードール】LV1

【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

ソードールをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとするロン。次はアスラのターンとなる。

「ターン05」アスラ

「メインステップ!!……………ドラゴンヘッドを不足コストに第二の龍騎をLV2で召喚!!」

1 【仮面ライダー龍騎「2」】LV2(3)BP9000

「っ!?……そのまま召喚するだ!?」

ドラゴンヘッドが不足コストで消滅する。

前のターンで手札に加えていた第二の龍騎のカードをこのタイミングでバーストとして伏せるのでは無く、普通にコストを支払って召喚したアスラ。その意外な登場に口ンも戸惑う。

「伏せたってどうせ発動してもらえねえんだ!!…ならこうするまでつて奴よ!!」

「ワツハツハツハ!!……やっぱアイツ面白ええわ……!」

「…………だからただ単にバカなだけじゃないの?…テンドウも含めて……」

アスラらしいとも言えるコストの大きいバーストスピリットの通常召喚に腹を抱えて笑いこむテンドウ。それに対しエルはテンドウとアスラを同時に視野に入れながら「バカ」だと一蹴して見せた。

「オレだって頭くらい使えるんだぜ!!……第二の龍騎でアタック!!……その効果でソードルを破壊!!」

「!!」

「バーニングセイバーツツ!!」

早速第二の龍騎でアタックを仕掛けるアスラ。第二の龍騎は柳葉型の剣に炎を纏わせ、その刀身でロンのソードルを斬り裂いた。ソードルは堪らず爆散してしまう。

「さらにミラーワールドの効果!!……アドベントカード、ストライクベントを發揮!!……
ダークヴルムを1体破壊してドロロー!!」

「なに!?!」

再び『ストライクベント』の音声が木霊すると、今度は第二の龍騎に龍頭が装着され、爆炎の炎を放出。魔界竜鬼ダークヴルムもまた焼き尽くされてしまった……

これでロンの場には疲労した魔界竜鬼ダークヴルム1体を残すのみとなった。

「オマエのライフは2!!…龍騎2体のアタックで終わりだアアアー!!!」

アスラはこのターンで勝負をつけるつもりだ。事実王手に迫るまでにかなりロンを追い詰めていた。

しかし、ロンもそう簡単にはくたばらない。彼は手札から1枚のカードを引き抜いた………

「甘い!!……フラッシュマジック…ネクロブライト!!…トラッシュユから鎧魂を復活!!」

1【鎧魂】LV1(1S)BP1000

ロンのカウンターマジックにより、龍騎によって破壊されたはずの鎧魂が淡い紫の輝きと共に場へと帰還した。

「第二の龍騎のアタックは鎧魂で受ける!!」

そしてロンはこの鎧魂を早速ブロッカーとして運用する。鎧魂が果敢に第二の龍騎に戦いを挑みに行くも、柳葉型の剣で呆気なく斬り裂かれてしまう。

しかし、本領発揮はここからである。

「破壊時により第一の龍騎からコア一つをトラッシュに!!……よって消滅!!」
「ぐっ……!!」

鎧魂が破壊された直後、紫の靄が第一の龍騎の周囲に発生し、その体内にあるコアを弾き飛ばした。コアが全て無くなった龍騎は堪らず消滅してしまう。

このロンのカウンターにより、アスラのアタッカーは損失。このターンをエンドにせざるを得ない状況に追い込まれてしまう。

「……………ターンエンドだ……………」

手札：5

場：【仮面ライダー龍騎「2」】 LV2

【ミラーワールド】 LV2

バースト：【無】

このターンで決められなかった悔しさに顔を歪ませながらそのターンを終えるアスラ。次は彼の攻撃をマジック1枚で凌いで見せたロンのターンだ。

「……………成る程、少しはやれるように頭を捻って来たみたいだな」

「へっ!!……………まあな」

「……………だが、足りない……………この程度じゃまだオレはオマエをライバルとは認めない

……………!!」

「!!」

このターン、アスラなりにロンの対策をして来たつもりだった。

邪魔な存在だった鎧魂は早めに倒し、第二の龍騎を敢えて伏せず、意表を突いた。テンドウが言っていたように非常に面白いバトルだった。

しかし、その程度ではロンの圧倒的な強さに追いつく事はできない。それが次のターンで証明される……………

「ターン06」ロン

「メインステップ……仮面ライダーナイトを召喚!!……効果でドロー!!」
「ツツ……!!」

┆【仮面ライダーナイト】LV3（6）BP6000

満を辞して登場する群青色の騎士型ライダースピリット、ナイト。アスラは幼い頃から何度もこのスピリットを見て来たが、このスピリットにこれだけ存在感を感じたのは初めてだった。

その理由としては、やはりあのカードの影響が大きいか……

「アタックステップツツ!!……ナイトでアタック!!」

そんなナイトでアタックを仕掛けるロン。そしてこのタイミングですぐさまあるカードを手札から引き抜いた……

「フラッシュ煌臨發揮!!…対象は仮面ライダーナイト!!」
「……………来る…………!!」

ロンの煌臨發揮宣言にアスラは危機感を覚え、冷や汗をかいた。

煌臨のエフェクトにより、ナイトはベルトからカードを引き抜く、それと同時にナイトとロンを中心に疾風の風が吹き荒れ、使用武器も青いシールドへと変化する。

そしてナイトはバイザー付きの青いシールドにその引き抜いたカードを装填……

……………『サバイブ!!』

無機質な機械の音声がそう告げると、ナイトは瞬く間にその姿を青い騎士へと一変させた。

「煌臨……………仮面ライダーナイトサバイブ!!」

┆【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3（6）BP16000

仮面ライダーナイトの強化形態、ナイトサバイブがアスラの前に今一度立ちほだかつた……………

「煌臨時効果!!…第二の龍騎のコア2つをトラッシュユへ!!」

「っ!!」

ナイトサバイブが盾から騎士の剣を抜き取り、そこに疾風の力を纏わせ、第二の龍騎へ向けそれを放つ。第二の龍騎は両手をクロスさせガードするも、体内のコア2つを奪われ、LVダウンに陥ってしまった。

「さらにナイトサバイブの効果!!…デツキの上から3枚をトラッシュユに置き、回復!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

ナイトサバイブは二度飛ぶ。ロンのトラッシュユにカードが叩き込まれると共に回復状態となった。

「うーん。…やっぱアイツのバトルは面白くないんだよな」

「アスラのライフは後2つ…下手したらこのアタックステップで終わる…」

ナイトサバイブを初めて見たテンドウはまたしても彼のバトルを面白くないと対評
価を送る。そしてエールの言う通り、アスラが何も無ければこのターンで決着が着く
……

「終わりだアスラーー!!!」

ロンがトドメと言わんばかりに声を荒げる。

だが、運命の神はアスラを見放さなかった。確かにその手札にはまだカウンターのマ
ジックが存在していて……

「終わらねエエエー!!!…フラッシュマジック!!…ファイヤーウォール!!」

「!!」

「第二の龍騎を破壊し、このバトルの終了時にアタックステップを強制的に終わらせる
!!…アタックはライフで受ける!!」

〈ライフ2??1〉アスラ

ナイトサバイブの疾風の剣技がアスラのライフを斬り裂き、風前の灯まで追い込むも、直後に第二の龍騎が火柱に包み込まれ、消滅。その残された火柱はナイトサバイブと魔界竜鬼の道を阻んだ。

「……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

結果的に場に2体のブロッカーを残してのエンドとなったロン。次はギリギリで凌いだアスラのターン……………

「ターン07」アスラ

ドローステップ直前までターンを進めると、アスラはロンに対して口を開く。

「なあロン」

「……なんだ」

「ざつき気付いたんだけど、オレ、オマエのナイトサバイブが……いや、オマエがめっちゃ怖い!!」

「?」

「意味わかんねえくらい強くなるオマエがめっちゃ怖い!!……心のどつかでオマエには一生勝てねーかもって思ってたかもしれない!!」

このターン。アスラはテンドウに言われていた事を密かに思い出していた。

『……………てか何、オマエそんなにその天才イケメン君のスピリットが怖いわけ?』

そうだ。アスラはナイトサバイブが……恐ろしい速度で成長して行くロンが怖い。自分をもっと遠くに置いていかれている気がして知らずのうちに凄まじい恐怖を感じていたのだ……………

「でもだからこそ今はオマエを超えたいって心の底から思ってる!!!……幼馴染みだからとか、ライダースピリットに選ばれてる者同士だからとかじゃねえ!!!……」

そこまで言い切ると、アスラは全力で息を吸い、肺を膨らませ……

オレは頂点王になる!!

それだけはオマエにも譲れねえんだ!!!

粉雪積もる雪原にアスラの爆音が木霊する。

結局。

やる事は変わらない。アスラはただガムシヤラに前だけを見て走るしかない。

だが、それこそがアスラの真の強さと言えよう……

そしてこの瞬間……

アスラの決意と言葉に応えるかの如く、デッキが赤く光輝いた。

「……あ、あれって……」

「進化だな」

「むえ〜」きれ〜

ソウルコアが使えない少年のデッキから進化の光が解き放たれる。ただ、この場での事に驚いていたのはエールのみ。テンドウはいつも通りのほほんとしており、ロンは真剣な眼差しでアスラを見つめ、アスラもまた堂々と胸を張り、ロンと向き合っていた……

そしてターンを進め、アスラはドローステップに入る……

「……ドロー!!」

勢い良くドローされたそのカードはシイナからもらい受けた黄金の翼のカード。そのカードはドローされた直後にみるみる変わっていき、やがて一種のバトスピカードと

なった……………

「メインステツプ……シヤムシーザーを召喚」

ー【シヤムシーザー】LV1（1）BP2000

このバトルでは2体目となるシヤムシーザーが姿を現した。そしてアスラは立て続けにカードを引き抜き……………

「ネクサス、燃えさかる戦場を配置!!」

ー【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

アスラが配置したネクサスにより、ここら一変が炎に包み込まれた。その炎の熱により、浅く積もった雪が消滅し、大地が顔を出す。

燃えさかる炎の中、お互いがお互いを倒すべき存在だと認識しているかのようににらみあうアスラとロン。そしてアスラは遂に進化したカードを引き抜いた……………

「……………オレはこいつを召喚!!」

「……………龍騎……………」

アスラがそう言つて呼び出したのは仮面ライダー龍騎。

しかし、ロンがそう思つていた束の間。その龍騎はベルトからカードを一枚引き抜く。すると、周囲から烈火の如く炎が吹き荒れ、左手のバイザーは龍の頭部を模したシヨットガン型の武器に変更された。

そして龍騎はその武器の龍口たる部位にそのカードを装填……………

……………『サバイブ!!』

そう無機質の機械音が告げると、龍騎は真っ赤に燃える炎の中でさらなる姿へと昇華して見せた……………

その名は……………

「仮面ライダー龍騎サバイブ!!」

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV3（4）BP13000

ロンのナイトサバイブと対を成す存在、龍騎サバイブ。アスラの諦めない真っ直ぐな気持ちにより黄金の翼のカードが進化させた最強の姿だ。

「ロンッツ!!……オマエがなんと言おうが、オレはオマエのライバルであり続ける!!」

アスラがロンにそう言い放つと、

「……………オレもそれを望んでいる……………!!」

ロンもまたアスラにそう言い返した。

激しく燃えさかる炎の中、睨み合うアスラとロン、そして互いに武器を構え、戦闘態勢に入るサバイブと化した龍騎とナイト。

このバトルの先にあるであろう勝利を手にするのはアスラかロンか……………その答えは未だ誰も予想できない……………

15コア「サバイブ激突」

「ロンツツ!!……オマエがなんと言おうが、オレはオマエのライバルであり続ける!!」
「……………オレもそれを望んでいる…………!!」

穏やかに粉雪が降り続ける雪原にて、アスラとロンのライバル対決は続く。アスラとロン。そしてサバイブと化した龍騎とナイトは互いを倒すべき好敵手であると認識しているかの如く睨み合う。

「アレが龍騎の強化された姿、龍騎サバイブ……………」

このバトルを見守っているアスラの旅仲間の少女、エールがアスラの龍騎サバイブを見てそう呟いた。もう1人の傍観者、三王の1人であるテンドウ・ヒロミはバトルで熱くなっている2人とは裏腹に、冷静で落ち着いた表情を見せながらタバコを吸っていた。

「リザーブのコアとシャムシーザーのコアを使い、ミラーワールドのLVを2にアップ!!」

シャムシーザーは消滅してしまうものの、龍騎を強化できるネクサスカード、ミラーワールドのLVが強化された。

……そして遂にアスラのアタックステップが開始される。
それはサバイブ同士の激闘の狼煙……………

「いくぜロン!!……………龍騎サバイブでアタックツ!!……………この瞬間、ミラーワールドの効果でカードをオープン!!……………めくられたのはアドベントドロ!!……………オレは2枚のカードを引くぜ!!」

アスラの宣言により、龍騎サバイブの仮面の奥にある赤き眼光が光輝く。そして龍騎サバイブは龍頭を模した大きめのショットガンの銃口をロンの場に存在する魔界竜鬼ダークヴルムへと差し向け……………

「アタック時効果、BP15000以下のスピリット1体を破壊する!!」

「!!」

「ダークヴルムを破壊だ!!」

そこから炎の弾丸を放つと、ダークヴルムをあつさりと焼却して見せた。これでロンの場に残ったのはナイトサバイブのみとなる。

しかも効果はこれで終わりではなくて……

「この効果で破壊に成功した時、龍騎サバイブに赤のシンボルを1つ追加する!!」
「効果で破壊して自力でダブルシンボルになった!?!」

龍騎サバイブのその効果に驚いて見せたのはバトルを見守っているエールだった。これにより、龍騎サバイブのシンボルは2つ。ロンの残りライフ2を一撃で無きモノにできる力を得た……

「……その程度、ブロックして仕舞えばなんの問題も無い……迎え撃てナイトサバイブ!!」

アスラの龍騎サバイブのアタックに対してロンがライフの砦として差し向けたのは自身の持つ最強のスピリットナイトサバイブ。

ナイトサバイブに銃口を向け、先程と同じく炎の弾丸を何発も放つ龍騎サバイブ。

しかし、ナイトサバイブはそれらを全て紙一重で避けるか騎士の剣で叩き落しながら龍騎サバイブの元までジリジリと接近してくる。

「BPはオレの方が上だ!!」

「なめんじゃねえ!…燃えさかる戦場の効果!!…アタック中の龍騎サバイブのBPをプラス3000!!…ナイトサバイブと同じだ!」

1〔仮面ライダー龍騎サバイブ〕BP13000??16000

アスラの背後で燃えさかる炎がアタック中の龍騎サバイブに力を貸している。これにより、龍騎サバイブはロンのナイトサバイブとほぼ同格のパワーを発揮している。

しかし……

相打ちで終わらせる程ロンと言う好敵手は甘く無くて……

「オマエの龍騎がオレのナイトと差し違えるのは有り得ない……フラッシュマジック
…ソードベント!!」

「!?!」

ロンが手札から引き抜いたカードはアスラも良く知っているカード。同型のライダースピリットを使っているからこそその効果の強力を理解していて……

「効果によりナイトサバイブのBPをプラス5000し、オマエのサバイブからコア2つをリザーブへと叩き返す!!」

「くっ!?!……」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】BP16000??21000

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】(4??2)LV3??2

遂に龍騎サバイブの眼前まで接近したナイトサバイブが騎士の剣で龍騎サバイブの胴体を斬りつける。その衝撃で龍騎サバイブの体内のコアが2つ弾き飛ばされ、LVダ

ウンに陥ってしまふ。

「…………ふう……………これでイケメン君のスピリットのBPは21000。対する小僧は燃えさかる戦場の効果込みで14000…………7000差か」

エールの横でバトルを眺めているテンドウがタバコの煙を吐き出しながらそう呟いた。バトルスピリッツというゲームにおいてBP7000の差はかなり深刻的だ。ここからの逆転は難関極まる。

そんな差がついた2体のBPバトル。剣を持つナイトサバイブと銃を持つ龍騎サバイブの勝負において、接近戦ではどちらが優位に立てるかは一目瞭然。ナイトサバイブが凄まじい速度の剣撃で龍騎サバイブを斬りつけていき、追い詰めていく。龍騎サバイブは銃を盾がわりになんとか凌ぎ続けているが、やられるのは時間の問題である。

「強化されてもこの程度、終わりだアスラ。疾風の剣技の前に沈め…………!!」
「ッ!!」

何度も攻撃を続けるナイトサバイブが龍騎サバイブに膝を突かせる。そしてナイト

サバイブは騎士の剣に執筆の風を纏わせ、龍騎サバイブにトドメの一撃を振るった
.....

龍騎サバイブはその一撃にあっさり斬り裂かれ、溜まらず爆散……………
するはずだった……………

「……………何!？」

その光景に思わずいつもの冷静さを欠いて驚愕してしまおうロン。

それもそのはず、何せ、追い詰めたはずの龍騎サバイブの銃口の前から短い剣が伸び、
それでナイトサバイブの疾風を纏わせた剣技を食い止めていたのだから……………

「……………甘いのはそっちの方だぜロン……………オレのデツキにもこのソードベントは入って
んだ!!」

「!!」

「これにより、龍騎サバイブのBPを5000アップさせ、ナイトサバイブのコア2つを
リザーブへ叩き返す!!」

「くっ!？」

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】BP14000??19000

1 【仮面ライダーナイトサバイブ】(6??4)LV3??2

龍騎サバイブが反撃開始だと言わんばかりにナイトサバイブの腹を蹴り上げながら起き上がる。ナイトサバイブは思わず姿勢を崩してしまい、体内のコアが弾き出され、LVダウンに陥る。

「こ、これでアスラの龍騎サバイブのBPは19000……対するナイトサバイブのBPはLVダウンして16000……アスラが上回った!!」

「フツ……行け、小僧!!」

エールとテンドウがアスラの背中を押すようにそう言った。

「ロン!!……オマエがいくら強くなろうとも、オレはオマエに直ぐ追いつく!!……でもって必ず超えてやる!!」

「くっ……」

「そのタイミングが今だアアアー!!!」

アスラの叫びに呼応するように龍騎サバイブはその銃剣の刀身に赤々と燃え滾る炎を纏わせると……

「……バーニングセイバーツバイ!!」

龍騎サバイブはナイトサバイブに向けてエックスの字を描くようにナイトサバイブを斬りつけた。ナイトサバイブは咄嗟に青き盾でガードしていたものの、あてにはならず、それ事焼き尽くされてしまった。

そして力尽きたように膝から倒れると、溜まらず爆発四散した……

鉄壁のカラーリーダー、ゴゴ・シラミネのメカゴジラをも倒したロンのナイトサバイブをアスラは超えて見せたのだ……

「龍騎サバイブの効果、バトル終了時、龍騎サバイブのシンボルの数だけ敵のライフを破壊する!!」

「!?」

さらにここに来て龍騎サバイブの第二の効果が適用される。龍騎サバイブは自身の効果で既にダブルシンボルと化しているため、ロンのライフをこの効果で2つ破壊できる事になる。

ロンの残りライフもまた2つ。この一撃で勝負が決する……………

天空から咆哮を張り上げながら現れたのは龍騎に宿る赤き龍。しかし、龍騎サバイブの影響か、その龍の姿も一変して大きく変化して見せる。その姿はより巨大な武装龍となり、アスラの前方、龍騎サバイブの背後に身を置いた。

その後龍騎サバイブはベルトにあるカード束からカードを引き、それを銃のバイザー部に装填……………

……………『シユートベント!!』

と、無機質な機械音声が流れると、龍騎サバイブは銃口をロンへと差し向け、赤き武装龍は口内に燃え滾る炎を溜めていく……………

「……………メテオバレット!!」

「ツ!!」

アスラの技名の宣言と共に、銃から発射される赤いレーザーと赤き武装龍の口内から放たれる火炎放射。それらはロンの元へと一直線に飛び行き、直撃。そのライフを焼き尽くした……………

「っしやあ!!…どうだコノヤロー!!」

唸る爆発音と漂う爆煙。アスラやエールは勝利を確信した……………

しかし……………

「……………まだだな」

「え」

そう呟いたのは三王の一人であるテンドウだった。そしてまたその直後に爆煙が少し晴れ、ロンの顔が見れるようになったが……………

「…………アスラ、オマエにオレは超えさせない…………ツ!!」

〈ライフ2??1〉ロン

「な、何…………ライフが1つ残ってる!?!…………オレの龍騎サバイブは確かにシンボル2つだったはずなのに!?!」

ロンのライフの生存に戸惑うアスラ。対するロンはいつものクールな表情を崩さず、何が起こったのかを明確にアスラに説明していく…………

「オレのライフが減らされる直前、オレはマジックカード、リアクティブバリアを使つた」

「!?!」

「これにより、自身を破棄。そのダメージを1に抑えた」

アスラの渾身の一撃をマジック1枚で紙一重で避けていたロン。そのダメージ数を

抑え、生存に至ったのだ。

「ほお、思ったより根性あるじゃねえかあのイケメン君」

そのロンのプレイングにテンドウがようやく彼を評価した。ロンはBPでは敵わない龍騎サバイブでアスラが特攻して来た時点で大方の予想はできていた。それ故にいつでも即死のダメージが来てもすぐさまカウンターを打ち返せるべく、身構えていたのだ。

「くっ………ターンエンド………」

手札：3

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

バトルの終了時。動かせるスピリットが存在せず、フラッシュユタイミングすら作れなくなつたアスラはなす術もなくそのターンをエンドとしてしまう。

そしてその残された3枚の手札には次のターンを凌ぎ切れるカウンターは入って無くて……………

「勝負あつたな」

「そんな…………アスラ…………!!」

なんだかんだでアスラの勝利を信じて止まなかったエールが寂しそうな声をこぼした。

そしてその言葉虚しく、ロンのターンが幕を開け、ターンシークエンスが進行されていく……………

「ターン08」 ロン

「メインステップ…………マジック、リターンスマークを使い、トラッシュからナイトを蘇生!!…召喚時効果でドロー!!」

1 【仮面ライダーナイト】 LV3 (4) BP6000

紫色の煙がロンの場を包み込んだかと思えば、その中から仮面ライダーナイトが姿を現し、復活を遂げた事を周囲に知らしめた。

アスラのライフは残り1つ。このナイトのアタックだけでも十分に事足りる。ナイトはレイピア状の剣を構え、戦闘態勢に入った……………

「…………アスラ、最後に何か言い残す事はあるか？」

ロンがアスラにそう告げた。彼なりにアスラの事を考えての事だろう。

「……………何言ってるんだロン!!……………んな事はオレのライフを全部破壊してからに言いやがれ!!……………最後まで諦めないのがオレのバトスピだ!!……………余裕ぶっこいてんじゃねえ!!」

「フツ……………オマエならそう言うと思つた!!……………ナイトでアタックツツ!!」

アスラは何が起ころうとも最後までバトルを諦めない。それは生まれた時から何もなかった彼だからこそ至った考え方であり、それはロンを始め、多くの者達が影響されて来た……………

そんな中、ロンがナイトにアタックを命ずる。アスラは追い詰められているが、もちろん彼もまた追い詰められていた事に違いは無い。これを外したら負けるのはロンの方だ。

ナイトが剣を構えてアスラの最後のライフまで走り行く。その過程でナイトは疲労状態となって身動きが取れない龍騎サバイブを素通りする。

そして……………

「ライフで受けるツツ!!」

〈ライフ1??0〉アスラ

ピー……

潔くアスラがラストコールをすると、ナイトは構えた剣から刺突を繰り出し、彼の最後のライフを貫いて見せた。アスラのBパッドからは敗北を告げるような無機質な音が鳴り響く。

これにより、勝者はロン。サバイブ同士のバトルには敗北を喫してしまったものの、

このバトル自体は見事に勝利を収めて見せた……………

「……………アスラの負け……………」

「まあ、人生そう上手くいくもんじゃねえからな」

残念そうにそう言葉を漏らすエール。そしてテンドウは人生経験豊富な大人らしい言葉を使って見せた。

バトルの終わりに伴い、Bパッドを閉じる両者。龍騎サバイブとナイトは互いを睨み合いながらほぼ同時にゆつくりとその姿を消滅させて行った……………

「……………今回は負けたけど、次は絶対勝つからな……………」

「何いつもは勝ってるみたいな言い方してんだ。オマエがオレに勝った事は一度も無いだろ？」

「いいじゃんかよ別に!!……………でも、オマエのサバイブは倒したぞ!!」

軽く言い合いになる2人。しかし、絶妙だがこのニュアンスはいつも通りのやりとり。さつきまでと違って大きく反発し合っているわけではない。

「ああ、わかっている……アスラ、オレ達にとつて6人のカラーリーダーと三王を倒す事は単なるノルマでしか無い。次バトルする時はそのノルマ達成後だ……そしてその時、オレはオマエに完全勝利する……ライバルとしてな」

「……………おうっ!!……………オレもライバルとして、オマエを超えてやる!!」

どっちがこの世界で上に行けるか、勝負だ!!

2人はそう言い合いながらも、お互いの拳を突きつけ、グータッチを交わした。

アスラは生まれながらにソウルコアが使えないし、この世界では最も価値の無いコモン。だがロンはそんなアスラがこの世界で上に行くことを確信している。だからこそそのような言葉を口にできるし、ライバルだと思える……………

今回の件でロンは改めてそれを強く自覚した。アスラもまた内心では彼が自分の事をライバルだと称してくれて嬉しかった。

「……………じゃあな。オレは先に行く」

「直ぐ追いつくさ!!」

「フツ……………」

ロンは背中を向け、アスラ達の元を去っていく。おそらく次のカラーリーダーがいる町へ向かうのだろう。

「アスラー!!」

「おつエール!!…どうだった!? オレのバトル!!」

「どうって、無様に負けたわね」

「なんでええ!?!…もうちよつと労いの言葉があつても良くない!?!」

「なんでエックスの私がコモンのアンタにそんな事言わないといけないのよ?」

ロンが去った後、エールが居ても立つても居られなくなり、アスラに声をかけた。しかし相変わらず態度はともてモデカい。それでも彼女なりにアスラを心配していたのだが、こうして目の前に来てみるとどうしても素直にならないでいる。

「むえええええええええ!!」

「ギャアアア!! オレの髪食うなアアアー!!」

そして相変わらず行動が意味不明な謎のオレンジ小動物ムエ。エールの頭の上からアスラの頭の上まで飛び移ったかと思えば、すぐさま彼のツンツンとした灰色の髪の毛を甘噛みし始める。

(久し振りに髪の毛食われてるわね……………ムエかわいい……………!!)

エールはそんなムエの意味のわからない行動や仕草にメロメロだった。

(……………コイツのライダースピリットはいったいなんだ?……………)

テンドウはアスラ達の賑やかな光景を目に移しながら、アスラに宿った龍騎と言うライダースピリットについて考えていた。

(ライダースピリットはその最終進化前には必ずソウルコアの力が必要になる……………だが小僧にはソウルコアが使えない……………)

そう、そんな身体にライダースピリットなんて宿るわけが無い……

この異端のライダースピリットを目の前にして、テンドウはこれから何かが起こるの
では無いかと、どこか胸騒ぎを覚えていた。

(まあいいや……どつちにしろコイツを張つてたらいずれ現れるだろ……：トウエンティ
……)

アスラ達がナミラ町近辺のコラボダンジョンで戦ったトウエンティと言う青年。テ
ンドウは彼こそが目的だった。

やめさせねばならない。

ライダースピリット狩りなど……

そんな事、カナは望まないのだから……

場所は代わり、瓦礫の山がこれでもかと敷き詰められ、荒れ果てた廃墟。

そこを今から出ると言わんばかりに堂々と歩いていたのは他でも無い、冷静沈着且つ

冷酷であり、通常では有り得ないライダースピリットの複数持ちを可能にしている青年、トウエンティだ。

「あらトウエンティ、お仕事？」

「……………そんなところだ」

そんなトウエンティに声をかけたのは美しい大人の女性。色気漂うその雰囲気は目に入った男性を一瞬にして虜にしてしまいそうだ。

だがトウエンティがそんなモノに目を奪われるわけ無く、まるで自分の方が上であると言いたげな物言い言い返した。

「ウィルから聞いたわよ……変なライダースピリットを使う坊やに負けたんだって？」

「……………」

「反論しないって事は本当なわけね」

女性の口から言い放たれた『ウィル』と言う名前はおそらくアスラ達の目の前でトウ

エンティを連れ去ったあのちよび髭シルクハットの男性の事だろう。

「ガハハハハ!!…オレらライダーハンターズの中でトップのトウエンティを倒すとはな!!…そいつ、なかなか骨があるじゃねえか…バトルして、殺してやりてえ!!」

「オロチ、またそんな事したらオウドウ都の人間が黙つてないわよ」

「ハッ!!…関係ねえな!!…オレはバトルして、勝つて、殺したい!!…でもつて殺したそいつからカードを奪い、デツキを強化する…それこそがオレの生き様だ!!」

今度は『オロチ』と呼ばれる茶髪で筋肉質な男性が口を開いた。それはとても怪しげな発言。まるで今まで何人かを殺害して来たような言い草であった。仮に普通の人間がこの場に居たら、恐怖で背筋がゾツとするに違いないだろう。

「話戻すけどさくあく…抜け駆けはダメよトウエンティ…私もその坊やに少なからず興味があるんだから…どんな子だろう?…かわいい顔だったらいいなあ!!…あつても、直ぐ横に女がいるんだつけ、確かエックスの」

「……………エックス?」

女性の『エックスの女』と言う言葉に反応して見せたのはオロチだ。

「おい……そいつは何家の奴だ？」

「あらオロチ、ウィルの情報聞いてなかったの？……グレイモンを使つてたから『オメガ家』らしいわよ」

「……………オメガ家……………!!」

『オメガ家』……………

その名詞を耳に入れるなり、オロチは満面の笑みを浮かべた。何か過去にオメガ家との間に何かがあつたのだろうか……………

「……………赤いライダースピリットにオメガ家!!……………なんだその面白いラインナップは!!……
唆るじゃねえか……おイトウエンティ、オレに行かせる!!……でもって殺させろ!!」

「何よ急にしやしやり出ちやつて〜」

「奴との決着はオレがつける。オマエ達は手を出すな……………」

「それは……オレに喧嘩売つてるって事でいいんだよな??……………今すぐここでどちらが上か
決着つけてもいいんだぜ?……あの頃のオレだと思ふなよ」

一色触発。ジリジリと睨み合うトウエンティとオロチ。今にもお互いデツキとBパッドを取り出して殺し合いと言う名のバトルスピリッツが幕を開けそうだ……
しかし……

「そこまでですよ……3人とも」

—!!!

それを制止させるかの如く、また別の誰かが声を発した。

「おいおい、今良いところだったじゃねえか……主任さんよ」

「あらウィル。今日もシルクハットがお似合いね……て言うか、私を頭数に入れないでくれる？」

それはウィルと呼ばれるちよび髭シルクハットの男性。オロチが彼の事を『主任』と口に出している事から、立場上は彼らより上である事は理解できて……

「今回の件はトウエンティに任せましょう…気は進まないでしょうが、お二人にはどうか気を使っていたきたい」

「あらあら、ウィルがそこまで言うなんて〜」

「ハツ…流石、主任のお気に入りは格が違うな」

ウィルはどうやらトウエンティにアスラのライダースピリットを任せたいようである。オロチと女性も気に食わない顔を見せるものの、彼には逆らえないのか、意外にもあつさり承諾している様子を見せた。

「オレには時間が無い…もう行くぞ」

対するトウエンティはウィルに対して詫びも入れず、そのままの方へと足を進めた。全てはライダースピリットを20枚集めて、『テンドウ・カナ』の病気を治すため………

「あらあら、行っちゃった。あんな良い男をあそこまで必死にさせる女ってどんな子なのかしら?」

去つて行くトウエンティの背中が見えなくなると、女性がそう言葉を漏らした。

『ライダーハンターズ』は主任である『ウィル』に『ライダースピリット20枚を先に集められたら何でも1つ願いを叶える』と言われて集められた3人から成る。

故にトウエンティ含めた3人はどちらが先に20枚のライダースピリットを集めるかを競っているわけだが、その中でもトウエンティの必死さは抜きん出ていた。まるで身を滅ぼすかの如く勢いでライダースピリットを持つ者達を片っ端から倒していき、現在半数近い9枚のライダースピリットを確保し、現在トップに躍り出る程だ。

「……………つまらねえな。トウエンティの奴だけ祭りの舞台に行くのはよ……………まあでも………ようは手を出さなければいいんだろ？」

「ふむ。まあほどほどにしておいてくださいね」

「わあつてるよ。祭りは眺めるだけでも十分楽しいからな」

オロチがそう言い放った。制止させたところで止められ無い事を自覚しているウィルは、あまりこの件に関与はしないよう忠告するのみにとどまった。

「良いなくオロチだけ……私も見てみたい……ソウルコアが使えない坊や♡」

女性もまたそう言い放った。

頂点王を目指す最弱の少年、アスラの旅はまだまだ続く。しかし、その障害の壁は果てしなく分厚くて………

16コア「白カラー戦!! VS メカゴジラ!!」

「うんめえええ!!」

「……………アンタもつと上品に食べれないわけ？」

アスラとロンのサバイブ同士の激闘から数時間が経過した現在。

ユキカイ町にある旅館の広間にて食事をしてきたアスラとエール、ムエ。

アスラは見たこともない豪華な品々に興奮し、横にいるエールが呆れる程に凄まじい勢いで貪り食っていた。

「いやマジでうめえよ!!…こんなスゲエの食った事ねえ!!」

「ふんっ…私が予約してあげたのよ、感謝なさい」

「おお!!あんがとなエールツ!!」

「ツ!?!」

エールはいつもの上から目線でアスラに自分に感謝するよう要求するが、アスラは思

湯に肩まで浸かるなり、気持ち良さでそう言葉を漏らすアスラ。激闘を終えた後の温泉は確かに格別なものであったのだ。

しかも今この温泉は貸し切り。貧乏なアスラにとって、これほどまでに贅沢な時間は無かった。

「おお〜いエールウウー!!!…そっちはどうだあ!!」

「どこにいてももうっさいわねアンタはアアアー!!!…覗いたらぶっ殺すわよ!!」

「いや、覗かねえよ!?!」

「むええええええ〜」??良い湯だな〜

「あつ!!ちよつとムエ!!…お湯に浸かる前に身体洗わなきや!!」

長い柵一つ跨いだ女湯にいるエールに声をかけるアスラ。別に覗く気なんてさらさらなかったが、返事の内容から、覗いたら殺される事は理解した。

そしてムエはどうやら湯溜まりに飛び込んだようである。珍しく如何にも犬らしい行為だ。

するとその時だ。「ゆっくり浸かるか」と思い至ったアスラの耳に聞き覚えのある声
が聞こえてきたのは……………

「なんだ覗かねーのか、面白くねーな小僧」

「ツ!!……テンドウさん!?!…なんでここにいるんすか!?!」

「ああ?…いや、このおっさんがオマエに会いたいわって言うんでな」

「よおスーミのアスラ」

「ゴゴのおっちゃんまで!?!」

湯気で立ち込めていて見えなかったが、そこには三王のテンドウ・ヒロミと、ユキカイ町のカラーリーダー、ゴゴ・シラミネがいた。テンドウはアスラが女湯を覗かないのを少しだけ残念そうにしていた。

「小僧。男だったら命を懸けてでも女風呂を覗け」

「なんでそんな事に命を懸けなきゃいけねえんすかアアア!!?!」

「テンドウ、オマエ相変わらずだのお」

堂々と意味不明な事をアスラに告げるテンドウ。ゴゴはテンドウとも面識があるかのような発言をして見せた。三王とカラーリーダーであるため、なんら不思議ではない

のだが、アスラにとっては正直意外だった。

「てか、ゴゴのおっちゃん、オレに用があるんじゃないんすか?」

「うむ、そうじゃった……アスラ、オマエさんにワシの白のカラーカード、ホワイトカードを託そうと思ってるな」

「ああ、そうだったんすね……ご親切にありがとうございます……」

ん?

白のカラーカードって事はアレだな。おっちゃんに勝った証……だよな……

それを戦わずしてオレにくれると……

おっちゃんめっちゃ太っ腹じゃねえか!!

「じゃねえよ!!!……なんでおっちゃんとバトルもしてねえのにカラーカードもらわない
といけないんすかアアアア!!!」

「騒いだり大人しくなったり忙しい奴じやの……ほれ、この間のオマエさんとロンの
バトル。実は遠くで見物しとったんじやが、今の実力ならさらに上の世界でも通じると
考えての。無条件でカラーカードを渡そうと至ったのじや」

思わずノリツツコミをかましてしまうアスラ。

ゴゴは極力合理的に生活したい。

そのため、いずれ自分に挑みに来るであろうアスラ。彼が十分な力を所持していると見抜き、無条件でカラーカードを託そうと思ひ至り、テンドウに彼らが寝泊りしている宿を教えてもらい、今のこの時間がある。

「……つまり、負けるのがわかったから先にカラーカードを渡して時間を有意義に過ごすって事っすか？」

「ふむ。まあ、平たく言えばな」

「だったらイヤだ!!……もらうならちゃんと挑んで、ちゃんと勝つてからもらいたい!!」

そうだ。

アスラにとって、そんな成り上がりで譲り受けたカラーカードなど要らないし、必要無い。仮にもらったとして、それで頂点王になれたとしても意味が無い。

ちゃんと、しっかりとゴゴに「勝った」と言う証のカラーカードが欲しいのだ。

「暇だって言うなら……今、この場でオレと戦ってくれ!!」

「!?」

「本気のアンタにちゃんと勝ちたい!!…勝たないとオレは頂点王にはなれねえ!!」

自分の想いを全力でゴゴにぶつけるアスラ。この旅館の温泉の場でバトルを要求する。どちらにせよ明日や明後日にでも挑む予定だったカラー戦、今ここでバトルする方がアスラにとっては合理的であって……

「ワハハハハ!!!…貫えるモンは素直に貫つときや良いだろうに……やっぱオマエ面白
れえわ小僧」

アスラの行動と言動を見て聞くなり、テンドウは大きく笑い立てた。

「どうするよおっさん。この小僧本気よ?」

「むむ………まあ、そこまで言うなら良かろう」

「っしやああ!!…あざアアアす!!」

あまり乗り気では無いものの、アスラがここで引き下がる人間では無いとわかってい
るからか、バトルを承諾するゴゴ。アスラは勢い良く感謝のお辞儀を全力で行った。

その後、彼らは一度脱衣所まで赴き、服に着替え、デツキとBパッドを確保。そして
再び温泉に向かい、湯溜まりを囲むようにBパッドを展開、設置する。

「極力無駄は省きたかったが、しょうがないのお……」

「行くぜ……………」

……………ゲートオープン、解放!!

テンドウが見守る中、本来ならば予約必須のユキカイ町のカラー戦。それがコールと
共にある旅館の男湯にて開始される。

先行はゴゴだ。ライフ5を維持し続ける彼のターンが進行して行く。

「ターン01」ゴゴ

「メインステップ……………先ずはバーストを伏せる……………ネクサス、ジグザール鋼鉄草原を配

置!!」

ー【ジグザール鋼鉄草原】LV1

場にバーストを伏せると同時に、ゴゴの背後に鋼鉄でできた草原が配置される。

「ターンエンドじゃ……さあ、どっからでもかかってくるといい」

手札：3

場：【ジグザール鋼鉄草原】LV1

バースト：【有】

「ツ……行くぜ……!!」

いざこうして面と向かってバトルをしているとゴゴ・シラミネと言う人物がどれ程の深い実力を持つのが本能的に理解できる。

アスラはその彼の迫力に思わずたじろぎかけるが、夢のため、力を振り絞り全力でターンを進める。

「ターン02」アスラ

「メインステツプツ!!……来い、仮面ライダー龍騎!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(2)BP4000

瞬時にアスラの場合へと姿を見せたのは彼を象徴する赤キライダースピリット、仮面ライダー龍騎。

「召喚時効果!!……カードをオープンし、オレはその中の対象となった2枚のカードを加える!!」

召喚だけでなく効果も成功。アスラは龍騎の効果で「ソードベント」と「龍騎サバイブ」のカードを新たに加えた。

「ふむ。赤キライダースピリット……テンドウがワシに挑んで来た事を思い出すの」

「ええ!?…テンドウさんがゴゴのおっちゃんに!?」

「おいじいさん。要らん事喋んなよ」

ゴゴがアスラの赤キライダースピリットである龍騎を見て、昔テンドウが三王ではなく、挑戦者だった頃の時代を思い出していた。

「昔からセンスだけはズバ抜けておつてな。2ターン目でライフ5を4にされた」

「2ターン目って…今のオレのターンと同じタイミングでって事っすかアアアア…!!?」

流石だぜテンドウさん!!」

「よせやい。照れるだろ?」

とか言われつつもテンドウは表情では全く照れていない。言われて当たり前みたいな顔を浮かべている。

「さあ、オマエさんにそれくらい力はあるか?」

「大有りだぜ!!…バーストをセットしてアタックステップ!!…ブチ込め龍騎!!」

そこまで言われたら是非でもこのターンでゴゴのライフを減らしたくなるアスラ。バーストを伏せると同時に龍騎で攻撃を仕掛ける。

ゴゴはこれを守る手立ては存在しなくて……

「ライフでもらおう!!」

へライフ5??4<ゴゴ

ライフで受ける宣言を行った。龍騎が渾身の拳の一撃をそのライフにお見舞いし、それを一つ砕いて見せた。

「つしやああ!!……なんだ、意外と呆気なかったな!!」

思いのほかあつさりライフを破壊できた事に喜ぶアスラだったが……

その束の間、ゴゴが事前に伏せていたバーストカードが勢い良く反転して見せた

……

「ライフ減少によりバースト発動!!……エクステイクションウオール!!」
「なに!?!」

「この効果により減った分のライフを回復!!」

へライフ4??5へゴゴ

やはり5を守る者の名は立てでは無いか、バースト効果により減らしたライフをすぐさま元通りにして見せた。

「ほっほ。単なる突撃じゃワシの5は覆せんぞ」

「くっ………ターンエンドだ………」

手札：6

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

バースト：【有】

「ブワッハッハッハ!!!…残念だったな小僧!!まだまだオマエじゃ超えれんな!!」
「ぐっ!?!………だけどいつか超えてみせまアアアす!!」

打つ手のなかったアスラは反射的にそのターンをエンドとするが、その光景を見たテンドウがアスラに指を刺して笑ってきた。

「ターン03」ゴゴ

「ドローステップ時、ジグザール鋼鉄草原の効果。ドローをする代わりに一時そのカードをオープン。それが系統「機獣」を持つカードの時コアを増やす」

「!!」

「オープンされたのはメカゴジラ「1993」のカード。よってコアを増やす」

ジグザール鋼鉄草原のLV1、2の効果がこのタイミングで炸裂。ゴゴはこの効果で事実上の二度目のコアステップを行ってみせた。

「メインステップ……鉄壁の布陣を整える……メカゴジラをLV2で召喚じゃ」

1「メカゴジラ「1993」LV2(2S)BP6000

「うおおお!!メカゴジラ出たアアア!!:::やっぱカッコエエエ!!」

「そうじゃろそうじゃろ!!」

ゴゴの場に現れたのは彼を象徴する機械龍、メカゴジラ。アスラはその雄々しい姿に
男心をくすぐられる。

「まだ行くぞ、ブレイヴカード:::ガルルダを召喚し、メカゴジラと合体!!」

「!!」

ー【メカゴジラ「1993」+ガルルダ】LV2(2S)BP10000

これはロンにも見せた合体。この行動がどれだけ強力な動きなのかをアスラは熟知
している。

マツハで空を翔ける戦闘機がメカゴジラの背に装着され、合体状態となり、メカゴジ
ラは翼を得た。

「さらにバーストをセット。行くぞ、アタックステップ……メカゴジラで攻撃」

ゴゴの指示を受け、メカゴジラがアスラの眼前まで迫る。この時、メカゴジラのスピリット効果により、アスラのスピリット1体が手札に戻せるが、今のアスラの中には手札デッキに戻らない龍騎がいるため、実質無効となった。

しかしそれでもアタックは続く、ブロッカーのいないアスラはこれを防ぐ手段は無く
て……………

「ライフだ!!……………ツ!!」

〈ライフ5??3〉アスラ

メカゴジラの鋼鉄の拳がアスラのライフを砕く。その余波、衝撃だけで温泉の湯溜まりが噴水のように飛沫を上げた。

だが、前のターンのゴゴ同様、ライフの減少こそがアスラのバーストの発動条件であって……………

「ライフ減少によりバースト発動!!……アドベントドロワー!!」
「!!」

「バースト効果の破壊はできねえから意味無いけど、その後のメイン効果を使う……カードを2枚ドロワー!!」

勢い良く反転したバーストカードはマジック、アドベントドロワー。ソウルコアの使えないアスラにとつて煌臨スピリットを手札に加えるその効果を持つこのカードは一見そぐわれないように見えるが、ドロワー効果のある「ベント」と名の付くカードであるため、デッキに採用しているのだ。

一方その頃、隣の女湯にいるエールとムエ。

エールはタオル一枚を身体に羽織っており、ムエの身体を洗おうとしていた。

「ん?……何、今のデツカイ音………またアスラが何かバカやってるのかしら?」

「むえ〜……」??何やってんだろ……

メカゴジラの攻撃で発生した爆音が女湯まで届く。さつきからアスラの雄叫びも聞こえてくるのもあり、エールは彼が何か男湯で騒いでいるのだと推理していた。

「むえええええ!!」??アスラの元まで行って来い!!!

アスラが何かやっている事を察していたのはムエも同じか、気になったのでそこへ向かおうとするが……

「ちよつとどこ行くのよムエ!!…まだ洗い終わってないわよ!？」

「むえ、むええええ!!」??は、離せええええ!!

しかしそれをエールが見逃さない。男湯に向かおうとするムエを捕まえて泡を擦り付ける。ムエの身体はたちまち泡だらけになり、綿菓子みたいな姿になった。

嫌がるムエ。しかし犬の悲痛な言葉はエールには通じなかった……

「ターンエンドじゃ……知ってるとは思うが、メカゴジラは疲労ブロッカー……何度でもオマエさんの攻撃を防ぐ」

手札：1

場：【メカゴジラ】「1993」＋ガルーダ】LV2

【ジグザール鋼鉄草原】LV1

バースト：【有】

「わかってますともオオオー!!!……絶対ソイツ倒してロンのヤツに近づいて見せまアアアす!!」

場面は戻る。

強固たる機械龍メカゴジラを前にして勝利宣言するアスラ。

言葉通り常に自分の先を行くロンに近づくため、そして頂点王になるため、目の前の強固たる壁にガムシヤラに立ち向かって行く……

【ターン04】アスラ

「メインステツプウウウー!!!……ドラゴンヘッドと3体のシャムシーザーを連続召喚!!」

┌ [ドラゴンヘッド] LV1 (1) BP1000
┌ [シャムシーザー] LV1 (1) BP2000
┌ [シャムシーザー] LV1 (1) BP2000
┌ [シャムシーザー] LV1 (1) BP2000

龍の頭部と翼だけで活動を続けるドラゴンヘッド1体と、背に何本もの白キトゲを生やす赤キトカゲ、シャムシーザー3体がアスラの場に現れた。

「ほお、そんなに低コストスピリットを手札に抱え込んでいたか……しかし、幾ら束になつてかかつて来ようともメカゴジラの前では無意味!!」

アスラの場に存在する5体のスピリット達を眺めながら強気にそう言い放つゴゴ。そうだ。幾ら数が多くてもメカゴジラのBPに勝つ事ができなければ意味は無い。

「無意味かどうかはオレが決める!!……行くぜ!!」

「!!」

アスラはそう言い返しながら、手札にあるカードをさらに引き抜いた。

そのカードは進化したての最強カードだ……

「召喚!!……仮面ライダー龍騎サバイブツツ!!」

アスラの場合に2体目となる龍騎が現れ、ベルトにあるカードデッキからカードを1枚引き抜いた。さらにその体中から烈火の如く炎が吹き荒れる。

龍騎は左腕にあるバイザーを龍の頭部を象ったショットガンのような武器に変換させ、そのカードをそこに装填……

……『サバイブ!!』

と、無機質な音声が流れ出た瞬間、龍騎は瞬く間に強化形態である龍騎サバイブに昇

華してみせた……………

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV1(1)BP7000

「……………ふむ。強化形態……………またしてもサバイブか」

「そうっす!!これがオレの龍騎の新たな力、サバイブだあ!!」

アスラの最強スピリット、龍騎サバイブを見てもまだ余裕のある表情を見せるゴゴ。まだアスラの攻撃を凌げる算段でもあるのだろうか……………

「ドラゴンヘッドとシャムシーザー1体を消滅させ、龍騎とサバイブをそれぞれLV2へアップ!!」

ドラゴンヘッドとシャムシーザーが消滅してしまうが、その代わりにアスラの龍騎達に力が与えられる。

そしてまだこんなものじゃないと言いたげな雰囲気醸し出しながら、アスラは手札のカードをさらに引き抜いた。

「さらにマジック、ソードベント!!」

「!!」

「この効果により、龍騎のBPを5000上げ、メカゴジラのコア2つをリザーブに送る

!!」

「!？」

ー【仮面ライダー龍騎】BP4000??9000

ー【メカゴジラ「1993」+ガルーダ】(2S??0)消滅

2体目のシャムシーザーが消滅する。そして通常の龍騎はベルトからカードを引き抜き、左腕にある龍の頭部を象ったバイザーにそれを装填……

……『ソードベント!!』

と、またしても無機質な音声の流れ、龍騎に龍の尾を模した柳葉型の剣が装備される。

龍騎はそれを構え、メカゴジラに向かって炎の斬撃を放つ。

メカゴジラはそれに身体を切断され、激しい断末魔を張り上げながら爆散した。そしてその爆煙とともに合体していたガルーダが逃げ出すように飛び出す。

「成る程、メカゴジラは赤と白の装甲を持つ。本来なら龍騎の効果は効かないが、紫のカードであるソードベントは別……メカゴジラを消滅できたわけだ」

この光景を見ていたテンドウがそう呟く。ロンのバトルとは違い、今のメカゴジラは赤と白の装甲しか持たない。龍騎は赤属性だが、ソードベントは飽くまでも紫のカード。そのため、メカゴジラの装甲を無視して消滅させたのだ。

「まだまだこっからだぜゴゴのおっちゃん!!……オレは龍騎サバイブでアタック!!」
「!!」

そうだ。真の攻撃はここから幕を開ける。龍騎サバイブがアスラの指示により、武器である龍の頭部を模したショットガンを構える。

「アタック時効果で残ったガルーダを破壊!!」

「っ!？」

龍騎サバイブはそのままそのショットガンから烈火の如く炎の弾丸を発射。それは標的にされた戦闘機のガルーダに一直線に飛び行き、命中。爆発四散した。

「この効果で破壊した時、赤のシンボルを1つ追加する!!…龍騎サバイブはダブルシンボルだ!!」

破壊に成功した事により、龍騎サバイブは一撃で敵のライフ2つを破壊できる状態、ダブルシンボルと化した。

「どうだおっちゃん!!…これで一気にライフゼロだぜえ!!」

「ふっ……あまいの、アスラ」

「!？」

ゴゴの象徴たるスピリット、メカゴジラを破壊し、勝利目前となったアスラ。しかし、

依然としてゴゴの余裕のある表情は変わってはいなかった……

その理由は伏せられたバーストにある……

ロンとのバトルの際は引き込まなかったため、召喚は叶わなかったが、それはアスラとのバトルで火を吹く事になる……

「スピリットの破壊によりバースト発動!!……対G兵器スーパーメカゴジラ!!」

「!?」

「効果によりカードを3枚オープン……その中のメカゴジラと自身をノーコスト召喚する!!」

「何だって!?!」

勢い良く反転したゴゴのバースト。その効果で彼のデッキから3枚のカードがオープンされる。そしてその中には該当するカードが1枚あって……

「効果は成功じゃ!!……よってこのスーパーメカゴジラとメカゴジラ「1974」を召喚!!」

ー【対G兵器スーパーメカゴジラ】LV1(1S)BP7000

ー【メカゴジラ「1974」】LV1(1)BP4000

上空からゴゴの場に降り立ったのは2体のメカゴジラ。スーパーメカゴジラと呼ばれるスピリットはさつきアスラが破壊したガルーダと合体状態にあったメカゴジラとなんら変わらない姿をしていたが、もう片方の「1974」はこれまでのメカゴジラとは若干シャープであり、見た目に差異があった……

「マジか……せつかくメカゴジラを破壊したのにすぐさま2体になって復活かよ……!?!」

「はっはっは!!……これはロンにも見せてはおらん奥の手じゃ……メカゴジラ「1974」の召喚時効果でシヤムシーザーを手札に戻すぞ」

「っ!?!」

メカゴジラは登場するなり、指からミサイルを発射する。それに被弾したシヤムシーザーは粒子となってアスラの手札に帰還してしまう……

「だけどその程度じゃ龍騎サバイブは止められねえぜ!!……ブチ込め!!」
「メカゴジラ「1974」でブロックじゃ!!」

龍騎サバイブの本命のアタックが開始される。ゴゴはライフ5を維持すべく、敢えてBPの低いメカゴジラ「1974」をブロックカーとしてぶつける。

メカゴジラは龍騎サバイブに立ち塞がり、鼻から火炎発射を放つが、火は龍騎サバイブには通じないか、龍騎サバイブはそれを右腕で軽く振り払って見せる……

そしてショットガンに再び烈火の弾丸を発射。メカゴジラ「1974」はそれに撃ち抜かれ、呆気なく爆散してしまった……

「龍騎サバイブのさらなる効果!!……バトル終了時、このスピリットのシンボル1つにつき敵のライフを破壊する!!」

「ツツ!!……なんじゃと?」

ここにきて龍騎サバイブのさらなる効果。しかもライフ貫通効果であるため、ゴゴはここに来て余裕のあつた表情を崩してしまう……

効果発揮な演出なのか、天空から咆哮を張り上げながら現れたのは龍騎に宿る赤き

龍。しかし、龍騎サバイブの影響か、その龍の姿も一変して大きく変化して見せる。その姿はより巨大な武装龍となり、アスラの前方、龍騎サバイブの背後に身を置いた。

その後龍騎サバイブはベルトにあるカード束からカードを引き、それを銃のバイザー部に装填……………

……………『シユートベント!!』

と、無機質な機械音声が流れると、龍騎サバイブは銃口をゴゴへと差し向け、赤き武装龍は口内に燃え滾る炎を溜めていく……………

「……………メテオバレット!!」

「ツツ!?!」

そして放たれた赤いレーザーと烈火の炎はゴゴの鉄壁のライフまで飛び行き

……………

「……………ぐおっ!?!」

〈ライフ5?3〉ゴゴ

一瞬にしてそのうちの2つを焼き尽くして見せた……………

アスラも遂にこのカラー戦のクリア条件であったライフの破壊を達成したのだった

……………

「つしやああ!!……………おっちゃんのリライフ…ぶっ壊してやったぜ!!」

「ワツハツハツハ!!……………4ターンで達成か!!……………やるじゃねえか小僧!!」

「あざアアアアす!!」

普通のカードバトルならば決して壊されることのないゴゴのリライフを破壊した事に対し、アスラを豪快に褒めるテンドウ。アスラは彼に御礼の言葉を送りながら全力でお辞儀した。

「あいたた、なんつー攻撃力……………ライフで受けたら4点持つてかれとつたんか」

「大丈夫かおっちゃん!?!」

アスラはライフダメージをちよつとだけ痛そうにしていたゴゴを案ずるように声をかける。

そしてゴゴはアスラに年寄り扱いするなど言わんばかりの言い方で「大丈夫じゃ」と言い返しつつ、懐からあるカードを1枚取り出し、アスラに投げつけた。アスラはそれをキャッチし、視認する。

「白のカラーカード……………」

「おめでとう。これでオマエさんも中間地点突破じゃ……………」

それはゴゴに勝利した証である白のカラーカードであった。

ユキカイ町の白のカラーリーダー、ゴゴ・シラミネは強過ぎる。それ故にライフを1つでも破壊できたなら突破したとみなされるシステムが認められているのだが……………

いや、いらねええええ!!!

「なに?!」

アスラは絶叫しながら渡されたそのカラーカードを真つ二つに破いてしまう。

誰もが喉から手が出る程欲するカラーカード。アスラとて、それが欲しくないわけないだろうに……………

「何やつとんじやオマエさん?!…せつかくのカラーカードを…………」

「それはこつちのセリフだおつちゃん!!…オレ、本気のアンタに勝ちたいって言ったよな!!」

「!?」

「しつかりライフゼロになるまでバトルしないとオレは勝った気になれねえし、頂点王にもならない!!…ちゃんとライフゼロになるまで全力で相手してくださいアアア!!」

「こやつ…………バカなのか…………!?!」

アスラの信じられない行動に唾然たするゴゴ。長年カラーリーダーをやつて来たが、誰もがこの条件を喜んでくれていた。

しかし、今日の前にいるこの小柄の少年はどうだ。何故か逆に自分が叱られているではないか……………

「ワツハツハツハ!!……………小僧、オマエやつば面白えな!!」

テンドウはそんなアスラの行動を見るなり、指を刺して笑いこけていた。

「ライフ2つだけを破壊してもらったカラーカードに意味はねえ!!……………ちゃんと戦うま
でオレはバトルはやめねえええええ!!……………ターンエンドだ!!」

手札：2

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2

【仮面ライダー龍騎】LV2

バースト：【無】

ターンを終えるアスラ。次は本来行う予定のなかったゴゴのターンだ。

「ライフ5じゃなくなったバトルに意味は無い……………が、そこまで言うなら良かろう

………その選択、後悔するなよ!!」

「ツツ!!」

これまでとは比較にもならない程の強者のオーラを放つゴゴ。そのプレッシャーに呑まれたアスラは思わずその身を半歩退るが、ようやく彼が本気を出してきてくれた事に対して喜んでもいた………

「ターン05」ゴゴ

ドローステップ時に再びジグザール鋼鉄草原の効果が発揮されるが、機獣を持つカードではなかったため、単純なドロートとなった。

「メインステップ……異魔神ブレイヴ、白魔神を召喚!!」

ー【白魔神】LV1(0)

「ツ………異魔神!!」

ゴゴの前方、スーパーメカゴジラの背後に現れたのは鋼鉄の機人。数あるブレイヴの中でも特殊なブレイヴ、異魔神ブレイヴだ。

「スーパーメカゴジラに右合体……LVもアップじゃ」

ー【対G兵器スーパーメカゴジラ＋白魔神】LV1??2（1S??7S）

白魔神はスーパーメカゴジラに向けて右手から光線を放ち、スーパーメカゴジラにさらなる力を与えた。その様子はさながら白魔神がスーパーメカゴジラを役使しているようにも見える……

「このフォーメーションは何年ぶりかのおお!!…なんか気分も上がって来たわい!!」
「……えええええ!!…なんか性格変わってらっしやる!？」

アスラに焚きつけられてからと言うもの、妙にテンションがハイになって来てるゴゴ。いつもバトルのブレイヴを制限して来た彼にとって、その解放はドーピングに近い効

果を与えていたのだろうか……

「アタックステップ!!スーパーメカゴジラでアタックじゃ!!……白魔神との合体により、そのシンボル数は3!!」

「3!?!…んなもんくらったら終わりじゃねえか!?!」

「だから言つたら、後悔するな!!」

指示一つでスーパーメカゴジラを発進させるゴゴ。白魔神が白のシンボルを2つ持つブレイヴであるため、一撃で3点ものライフを破壊する事が可能だ。

「けど、どんなアタックもブロックしちまえば関係ねえ!!」

アスラの場合にはバウンス耐性のある通常の龍騎がブロッカーとして残されている。確かに、いくら強力なアタックとは言え、ブロックして仕舞えばライフを守る事ができるが……

「緩いわあ!!……スーパーメカゴジラはソウルコアが置かれている時、ブロックされぬ!!」

「なにいい!？」

ここに来てアスラが決して使うことのできないソウルコアを用いた効果が発揮される。これにより、スーパーメカゴジラはトリプルシンボル且つアンブロッカブルと言う凄まじい性能のスピリットと化した……………

これこそ、本領を発揮させたゴゴ・シラミネの必勝パターンである。

「これで終わりじゃあああああ!!!」

「ツツ?!」

スーパーメカゴジラは両肩のレーザー砲や胸部から発射されるミサイルをこれでもかと言わんばかりにアスラへと放出、そしてそれらは全弾命中……………

あたり一帯は温泉の湯煙と爆煙に包み込まれてしまった……………

この有様だ。ゴゴはアスラのライフは全て碎け散り、勝利したと内心で確信していた

……………

が……………

「……………いってて……………」

〈ライフ3??2〉アスラ

「なに!?!……………ライフが1しか減って無いじゃと!?!」

湯煙や爆煙から顔を覗かせたアスラ。しかし、そのライフはトリプルシンボルのアタックを受けたにもかかわらず、1つしか減ってなくて……………

「あつぶねええ!!……………何とか間に合った……………オレはフラッシュでマジック、ブレイジングバーストを使ってたんだ」

「!?!」

「この効果で龍騎を破壊……………そうした時、このターン、オレのライフはアタックだと1つしか減らねえ!!」

赤のマジック、ブレイジングバースト。自分のスピリットを破壊する事で起動する効果だが、アスラは咄嗟にこれを使用し、スーパーメカゴジラの攻撃を紙一重で避けてい

たのだ。

「……………どうだおっちゃん!!…アンタの本気のターン、凌いで見せたぜ!!」

「抜かせ小童め!!……………どちらにせよオマエさんには無い、次のターンで幕引きじゃ…
ターンエンド」

手札：1

場：【対G兵器スーパーメカゴジラ+白魔神】LV2

【ジグザール鋼鉄草原】LV1

バースト：【無】

アスラとて理解している……………トリプルシンボルでアンブロッカブルの攻撃などそう何度も凌げるものではない。

次のターンがラスト。ここで決めなければ負けは濃厚……………

しかし、自分に勝利したロンはとつくにもつと先を行っている。こんなところでつまづくわけには行かない……………

ライバルと頂点王を超える大きな一步を踏み込むために、アスラのターンが幕を開ける……………

「ターン06」アスラ

「メインステップウウウー!!…もういつちよシヤムシーザーだ!!」

ー【シヤムシーザー】LV2(3)BP3000

メカゴジラの効果で手札に戻されていたシヤムシーザーがアスラの場に戻って来た。

「さらに龍騎サバイブのLVを最大にアツプツツ!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】(1??4)LV1??3

龍騎サバイブのLVを最大にまで上昇させたアスラはゴゴの残り3つのライフを破壊すべく動き出す……

「アタックステップ!!……行け、シヤムシーザー!!」

「ライフじゃ!!……ッ!」

〈ライフ3??2〉ゴゴ

初発はシャムシーザーで仕掛けるアスラ。何も無いのか、ゴゴはこれをライフで受ける宣言をし、シャムシーザーの体当たりをそのライフで受け止めた……

「そして真打登場だぜ!!……龍騎サバイブでアタアアアツク!!」

「!!」

「龍騎サバイブの効果でオレの勝ちだアアア!!」

アスラの絶叫と共に龍騎サバイブが動き出す。その効果が発揮されればゴゴの残り2つのライフを全て破壊することも可能だ……

ゴゴはアスラのその戦略を見越していたのか、ここに来てさらなるカウンターカードを残り1枚の手札から切って……

「だから緩いと言っておる!!……フラッシュユマジック、全武装攻撃!!」

「!？」

「この効果で合体したスーパーメカゴジラを回復!!…そしてブロックじゃ!!」

「【対G兵器スーパーメカゴジラ+白魔神】（疲労??回復）」

龍騎サバイブの行く道をスーパーメカゴジラが立ち塞がる。龍騎サバイブはショットガンから烈火の弾丸を放つが、スーパーメカゴジラな尾を振り回しそれを弾く。

「そしてそのまま龍騎サバイブをもその尾で振り払って見せた……」

「龍騎サバイブの力量は既に見切った!!…バトルで生き残らなければさほど脅威では無い!!……トドメじゃ、スーパーメカゴジラ!!」

「ツツ!!」

スーパーメカゴジラは両肩に備え付けられたビーム砲から高出力のビームを放出。真っ直ぐ龍騎サバイブへと向かって来たが………

「まだまだ!!まだオレはバトルを諦めねえええ!!……フラッシュマジック、ソードベント

!!

「ッ……2枚目!？」

「この効果により、龍騎サバイブのBPを5000アップさせ、スーパーメカゴジラのコア2つをリザーブへ!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】BP13000??18000

「くっ!?!……BP18000……16000のスーパーメカゴジラを上回ったじやと!？」

ー【対G兵器スーパーメカゴジラ+白魔神】(5S??3S)

アスラの放ったマジックカードの力により、龍騎サバイブのショットガン状の武器の銃口から短剣が伸び、いわゆる銃剣と化す。

龍騎サバイブはその銃剣を振るい、迫って来たスーパーメカゴジラのレーザーを難無く斬り裂いて見せた……

「そしてオレの手札、ラスト1枚!!……ファイナルベント発動!!」

「!?」

「効果により龍騎サバイブのシンボルを1つ追加!!…ダブルシンボルになる!!」

龍騎サバイブはアスラ同様ここで決めると言わんばかりにベルトからカードを1枚引き抜き、それをショットガンのバイザー部に装填……

……『ファイナルベント!!』

と、無機質な音声が鳴り響くと、再び赤き武装龍が咆哮を張り上げながらアスラの方に現れ、龍騎サバイブはそのままその背中に飛び乗った……

「ドラゴンファイヤーストームツツ!!」

アスラの言い放った技名を聞きなり、龍騎サバイブを乗せて発進する赤き武装龍。その口内から赤々と燃え滾る炎の弾を何発も連射し、スーパーマカゴジラの翼やレーザー砲などの武装を次々と破壊していく……

「イツケえええええ!!!」

拳を前に突き出すアスラ。赤き武装龍は上空でバイク型マシンに変形、龍騎サバイブはその上に腰を掛け、燃え滾る炎を全身に纏い、スーパーメカゴジラに向かって急降下して行き、激突。

流石にこれは耐えられず、スーパーメカゴジラは堪らず爆散……………
そして……………

「龍騎サバイブの効果!!…シンボル2つだから2つのライフを破壊するぜ!!」
「ツ……………まさか本気を出させた上で勝利するとは……………天晴れだスーミのアスラ!!……………
このライフ、そしてカラーカードを今度こそ受け取るがいい!!!」

〈ライフ2??0〉ゴゴ

龍騎サバイブを乗せたバイク型マシンはスーパーメカゴジラだけでは収まらず、そのままゴゴの残り2つのライフにも激突して行き、それを玉砕して見せた……………

これによりゴゴのライフはゼロ……………

「つしやああ!!…オレの勝ちだアアアア!!!」

勝利したのは挑戦者のアスラだ。己の勝利を祝うような彼の雄叫びが男湯に木霊した……………

「ええ!?!…カラーカードをもらった!?!」

「おう!!もらったぜ!!」

「だからアンタの雄叫びとか爆発音が喧しかったのね……………てか、なんで温泉入ってただけでそんな事になるのよ……………」

「むえ……………」??見たかった……………

バトルも終わり、本当の意味でゴゴから白のカラーカードを得たアスラは、旅館の口ビーで牛乳を飲みながら浴衣姿のエールと会話していた。エールの胸元にはすっかり

いこえてる。

そして彼は呼吸を整えると、右手をポンとアスラの頭の上に置いて……………

「ふっ……………後半分だ。奢らずに進んで来い。クソチビガムシヤラ小僧」

「ツツ!!……………おうっす!!絶対勝ちまアアアアアす!!」

「ワツハツハツハ!!……………その息だ!!」

アスラにそう告げてくれた。

その様子を見て、なんだかんだでアスラはテンドウのお気に入りなのだ、ゴゴやエールも改めて思った。

「……………で、どうすんのよアスラ。もうこの町にいる意味無くなったけど」

エールがアスラに訊いた。アスラは気合を入れるように腕を曲げてサムズアップのポーズをとると……………

「当然、明日にでも次の町行くぞ!!……………さっさとロンに追いつかねーとな!!」

ライバルであるロンに追いつきたいアスラはできるだけ最短の道に行く。明日にでも出発すると意思表示をするが……………

ここでゴゴが徐に口を開いて……………

「ふむ。まあ、そんな急がんととも、明日じゃったらアレに参加してから出発すると良い」

「アレ??…………アレってなんすか？」

「アレと言えば、年に二度行われる『ユキカイ雪祭り』じゃよ…………是非見ていってくれ」

ユキカイ町は年に二度とある祭りが開かれる。それはこの国全ての町を含め、最も美しい祭りともで言われている。

これを見て回る事になったアスラとエール。彼らのユキカイ町での物語はまだまだ続く……………

17コア「トゥエンティ再び、仮面ライダージオウ」

「あれ?……なんだココ?」

その時、アスラは深く冷たい、闇の中にいた。360度どこを見渡しても一寸先は暗闇だらけ。自分がなんでこんなところにいるのかも皆目検討がつかなかった……

「よお……いらっしやい」

「ッ!!」

そんな時、暗闇から男の肉声だけがアスラの耳を通過してきた。アスラはその声に反応して再びあたりを見渡してみるが、そこには闇だけで誰もいやしなかった……

「……誰だよ?……どこにいやがる?」

アスラが声の主に訊いた。

「誰だとはつれねーな……オレはいつだってオマエの一番近くにいるのによ」

「……いや、オマエみたいなヤツ断じて知らん!!」

意味深な言葉を呟く闇からの声。いつもアスラの近くにいるのはエールとかムエとか、強いて言えばテンドウくらいだ。しかし、その声はその中の誰のモノでも無い。

「ゼゼゼ……………まあ良いだろう。オマエの身体はそのうちオレがもらう……………!!」
「……………ツ!?…オマエ何なんだよ!？」

独特な笑い方をしながらまたしても意味深な言葉を呟く闇からの声。まるでアスラを乗つとると言わんばかりの言い草に、アスラは思わずその声の正体を探ろうと声を荒げてしまう……………

「……………オレ?……………オレは……………」
「ツ!？」

闇からの声が質問に答えようとするが、それを言いかけたところで深い闇が晴れ上がって行き、光が差し込んで来た。その眩しさにアスラは顔に腕を覆いかぶさった……………

……………

「うわツツ!?!」

時刻は深夜。アスラはまるで悪夢でも見ていたかのように勢い良く布団から飛び上がった。

ここは寝泊りしている豪華な旅館だ。横の部屋ではエールとムエが眠っているはずだ。

「な、何……なんで起きたのオレ??……なんか夢の中で誰かと話してたような……」

しかし、その悪夢が何なのかをいまいち思い出せないアスラ。体中は多量の発汗をしているため、何か悪い夢でも見ていたのは間違い無いのだが……

「……………ま、いや!!……もっかい寝よ!!」

切り替えの早いアスラ。現実になるはずも無い夢を思い出そうとしても無駄だと思い、すぐさままた眠りにつく。

この時、机に置いていた自身のデッキケースの中にあつた『仮面ライダー龍騎』のカードが黒く輝いていた事は知らず……………

「うおおお!!…スツゲエ、雪とか氷とかで色んなもん作れんだな!」

「むえ〜」??何となく鳴いてる

「雪像と氷像って言うのよ、そんな事もわからないの?…流石コモンね」

翌日、季節は夏だと言うにもかかわらず、今日も粉雪が降り積もるユキカイ町。

そんなユキカイ町には年に二度、あるイベントが開催される。それが今アスラ達が見ている『ユキカイ雪祭り』だ。多くの匠達により造られた氷像や雪像が所狭しと町の大広間に並んでおり、多くの人たちがそれを一目見ようと足を運んでいた……

「いや〜オレ始めて他の町の祭り来たからなく……スーミ村の祭りと比べたらスケールが違うぜ!!」

「コモンしか住んでない村と一緒にしないでよ…オウドウ都の祭りはこんなもんじゃな
いっ」

「おお!!そんなスゲエのか!!…だったら今度一緒に行こうな!!」

「ツツ?!……ま、まあアンタがそこまで言うなら一緒に見て回ってやらなくもないわ……!!」

オウドウ都には年に一度、このユキカイ雪祭りとは比べものにならない程に大きな祭りがある。単に素直な性格なだけなのは知っているが、それでもアスラに祭りに誘われたエールは顔を赤くしながら「まあ仕方ないから」的な感でそれを承諾した。

「お~~~~い!!」

「!!」

上方から耳覚えのある声のアスラ達の耳を通過していく。彼らはその声に反応してあたりを見渡していく……

そしてその声の主は……

「ゴゴのおっちゃん!!……なんすかその雪像!!……こだわりヤッバ!!」

「ほっほっほ!!……5はワシを象徴する数字じゃからな!!」

「……どうやって作ったのよ」

白のカラーリーダー、ゴゴ・シラミネだった。おそらく自分で作ったであろう5の形をした雪像の上で胡座をかいていた。

「どうじゃ、ユキカイ雪祭りは凄いいじゃろ？」

「ハイイイ!!…雪や氷でこんなスゲエもん作れるなんて、もう感動しましたアアア!!」

「ふんつ…オウドウドの祭りの方が凄かったわ」

「ほっほ、まあオウドウドと比べられたらのお」

ユキカイ雪祭りの感想をアスラ達に問い掛けるゴゴ。アスラとエールはそれぞれの感想を述べていく。

「ところでおつちゃん!!…なんでそんな高いところいんだよ!？」

アスラが5の形をした雪像の上に座っているゴゴに訊いた。

すると、ゴゴはユキカイの名物の溶けないアイスクリーム、メタルアイスクリームをジャンパーの懐から取り出し、舐め始めながら説明した。

「毎年、2回。このユキカイ雪祭りの日はこうしてのんびりと町を見渡していたいんじゃないよ、この町のカラーリーダーとしての」

「……おお、なんかよくわからんけど、カッケえ!!」

「そう?…仕事サボってるだけじゃない?」

アスラの前でメタルアイスクリームを舐めながら少しだけ格好を付けるゴゴ・シラミネ。アスラの胸には感動という鐘が鳴り響くが、逆にエールには全く響かない。

「む、むむえ……!!」??あ、あれは!?

だがそんな事よりもムエだ。アスラの頭の上に乗っかっているそのもふもふのオレンジ犬は、ゴゴが懐から取り出したメタルアイスクリームを目に移すなり……………

「むええええええええ!!」??食わせろおっちゃん!!!

「ツ!?!…おい、どこ行くんだよムエ!?!」

アスラの頭の上から離れ、降り積もった雪の上をツツテケターと駆けるムエ。そしてゴゴの造り上げた5の形をした雪像を凄まじい速度で登って行き……………

「うおっ!?……………どうした犬ツコロ!?」

「むえええええ!!」??それを寄越せ!!!

「ちよちよちよ……………暴れるでない……………ツツ……………うおおおお!!?」

メタルアイスクリームを寄越せと訴えかけているようにゴゴにまとわりつくムエ。さらに悲劇は続き、バランスを崩れた事により、5の形をした雪像がぼつきり折れてしまう。

ゴゴとムエはその上から落下してしまう。

「むええええええええ!!」??ゲツトおおお!!

だが、ムエは執念でゴゴの手から離れたメタルアイスクリームを空中で短い前脚後脚をフルに使いキャッチ。その後は綺麗に着地して見せる。反面ゴゴは凄まじい勢いで降り積もった雪に叩きつけられてしまった……………

「ゴゴのおつちやアアアーン!?」

(…………ムエ、可愛い…………!!)

「ムエ!!!…オマエ何やってんだアアアーン!!」

「むええええええええええ!!」??うめえええええ!!

相変わらず行動の一つ一つが謎いムエ。そんな変な犬にメロメロなエール。アスラはただ一人雪の上に落っこちたゴゴの身を案じていた……………

「大丈夫かよおつちゃん!?」

「こ、腰が…………」

「おつちやアアアーン!?」

衝撃で腰を痛めていたゴゴ。その後アスラは彼を担いで全力で医務施設へと急行して行った……………

ここはユキカイ町の医務施設。オウドウ都程では無いがそれなりに大きな施設である。

「いや…あのクソ犬何なんだよ、最近ますます意味がわからん」

そんな医務施設の自動ドアから出て来たアスラ。ゴゴの腰も単なるギックリ腰で特に大事では無かったようであり、取り敢えず一安心。

「よし、んじゃそろそろエールと合流して次の町に行くかな……待ってるよロン!!…絶対オマエを追い越してやるからなアアアー!!」

握り拳を固めながら強く意気込むアスラ。未だ雪像や氷像が所狭しと並ぶ広場にて自分を待つアスラとムエの元まで合流しようとしたが………

ここでアスラを呼ぶ声が彼の耳を通過した………

それは耳覚えのある声色であり………

「……久し振りだな。ソウルコアが使えないゴミ以下」
「!!!」

その声を聞くなり背筋が凍り付くアスラ。反射的にその声のする方へと体を向けると……………

「……オマエ……トウエンティ……!?!」

そこにいたのは銀色の短髪が特徴的な青年、トウエンティだった。アスラの脳内では今でもコラボダンジョンでの激闘の瞬間が蘇ってくる……………

彼はライダースピリットを狙っているため、アスラはそれを警戒して身構える。

「フンツ…やはりヤツからオレの名は聞いていたか」

「……またオレ達のライダースピリットを奪おうってか?」

「ああそのつもりで来た……が、ここはユキカイ雪祭りを楽しむ者達の目がある。場所を移そう」

「!?!」

トゥエンティの意外な提案に気が緩むアスラ。前会った時は関係無い人まで巻き込む感じだったのに、いったいどういう風の吹き回しなのだろうか……

…

その後、アスラとトゥエンティは場所を移し、人集りのある場所ではなく、人影の全く無い路地裏へと足を運んだ。

路地裏と言ってもかなり横幅が広く、隠れてバトルを行うにはうってつけの場所であり……

「ここなら誰も来まい」

「……ひよつとしてオマエって良い奴なのか？」

「はあ？…何を言っている」

「いや、他の人達を気遣ってわざわざこんなところに誘い込むなんてちよつと意外だな
くって思ってるさ」

トウエンティのこの行為から、アスラは彼が完全に悪意の塊を持つ人物では無いと察した。

だがトウエンティは……………

「通報されると面倒なだけだ……………それに、オレは魔王に魂を売った身……………他の連中がどうなろうと、オレの知った事じゃ無い……………」

「!？」

「御託はもう十分だろ……………さあ、ライダースピリットを狩らせてもらう」

トウエンティの言った言葉の意味があまり理解できないアスラ。しかしトウエンティは彼の頭の処理を待たずしてバトルの開始を急かした。

両者ほぼ同時にBパッドを展開し、デッキをその上にセット。バトルの準備が完了した。

そして……………

……………ゲートオープン、解放!!

トゥエンティはライダースピリットを奪うため、

アスラはそのライダースピリットを護るため、

人影の少ない路地裏にてひっそりと、コールと共にバトルスピリッツが開始された。

先行はアスラ、いつもの「っしやあ!!」の掛け声で気合をいれながらターンシークエンスを進行していく。

「ターン01」アスラ

「メインステップ……行くぜ、仮面ライダー龍騎をLV1で召喚!!」

1【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP2000

初手でアスラが呼び出したのは自身の相棒、赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎。その召喚時効果を発揮させ、アスラは新たに2枚のカードを手札へと加えた。

「あの時はオレ1人じゃ勝てなかったけど、今回こそは今まで培ってきたモノをぶつけ

て、オマエに勝つ!!……ターンエンドだ」

手札：6

場：【仮面ライダー龍騎】LV1

バースト：【無】

先行の第一ターン目の事もあり、早々にエンドステップを迎えたアスラ。次はトウエンテイのターンだ。アスラの龍騎を奪うべくターンシークエンスを進行させていく……

「ターン02」トウエンテイ

「メインステップ……ライダースピリットの本当の使い方を教えてやる」
「ッ!?!」

トウエンテイはアスラにそう告げながら手札にある1枚のカードを引き抜いた。それはおそらくこの世界にいる誰もが驚愕しかねない強力なカードであり……

「変身!! 仮面ライダージオウ……!!」

「変身!?!」

トゥエンティの腰にバックルのようなものがあるベルトが取り付けられる。そして彼の背後に数多もの時計が浮かび上がると、そのバックルを回転させる。

………カメーーンライダー!!

………ジ、オーウ!!

ー【変身!! 仮面ライダージオウ】L V 1

その謎の音声と共に、トゥエンティは顔にライダーと描かれているのが特徴的なライダースピリットの一種、仮面ライダージオウと化していた。

「……オマエがライダースピリットに!?!」

「一部の強力なライダースピリットはプレイヤー自身をライダースピリットにする力がある。そしてこのジオウこそ、オレを選んだライダースピリットだ!!」

「ッ!？」

「神託の効果でデッキからカードを3枚トラッシュへ、対象カードは3枚、よってオレ自身にコアを3つ追加する!!」

ライダースピリットの変身カードはカードカテゴリ上は創界神ネクサス。そのため神託の効果が発揮され、コアが追加された。

「それがオマエを選んだってどう言う事だよ!!……じゃあ他のライダースピリット達はなんなんだ!!」

「アレは他の者達から奪ったヤツに過ぎん。ジオウはその身にライダースピリットを幾らでも取り入れる力がある!!」

「えええええ!!?…ドユコトオオオ!!?」

頭の悪いアスラではトウエンテイの言っている事は完全に理解できていないが、要するに、本来ならば同じデッキに入れる事ができないライダースピリットのカード達をトウエンテイが何の問題も無く同じデッキに入れる事ができていたのは、あのジオウと呼ばれるライダースピリットの異能じみた力のお陰であると言う事だ。

「さらにオレは仮面ライダーW サイクロンジョーカーを召喚…効果でコアブースト」

1 【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1(1) BP2000

立て続けに動くトウエンティ。今度は右半身が緑、左半身が黒色のライダースピリット、Wサイクロンジョーカーが現れる。

「くっ……やっぱ当然のように別のライダースピリットを使って来んのか……」

「ネクサス、パンドラボックスを配置……バーストを伏せ、ターンエンド」

手札：1

場：【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1

【変身!!仮面ライダージオウ】LV2(4)

【パンドラボックス】LV1

バースト：【有】

トウエンティの横に黒い小箱が、そして場には裏側でバーストカードがセットされ

た。

後攻2ターン目であるにもかかわらず、手札の5枚のうち4枚を使い切り、次のアスラのターンでの防御を盤石のものとして見せた。

「ターン03」アスラ

「メインステップツ!!……変身だかなんだか知らねえけどオレはそんなものに恐れたりしねえ!!……シヤムシーザーを召喚して、ネクサス、ミラーワールドをLV2で配置だアアアア!!!」

ー【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【ミラーワールド】LV2(2)

アスラの場合に赤い身体に数本のトゲを生やしたトカゲ型のスピリット、シヤムシーザーが現れると同時に、周囲の光景が鏡向きに変換された。

「アタックステップ!!……龍騎でアタック!!……ミラーワールドの効果でカードを1枚

オープン!!」

準備は整ったと言わんばかりにアタックを仕掛けるアスラ。ミラーワールドの効果でカードがオープンされるも、それはアドベントカードではないため、そのまま手札へと送られた。

しかし、アタックそのものは継続されているため、龍騎はトウエンティのライフを破壊すべく走り出す。

「別に変身に恐れなくても良いが、オレのバーストには警戒すべきだったな!!……ライフで受ける!!」

「ツ……!!」

〈ライフ5??4〉トウエンティ

まるで今からバーストを発動すると宣言したような言い草を残し、龍騎の拳を受けるトウエンティ。

そして言葉通り、裏側になっていた彼のバーストは勢い良く反転して……

「ライフ減少のバースト、仮面ライダーキバ キバフォーム!!」

「ツ……また別のライダースピリット……」

「効果により敵スピリットのコア2つをリザーブに置く。消え失せるシャムシーザー
！」

「なにつ!？」

「そしてその後召喚される……現れろ!!」

ー【仮面ライダーキバ キバフォーム】LV1(1)BP2000

上空からシャムシーザーにかかと落としをお見舞いしてみせる黒いライダースピリットが一体。

それはロンのナイトと同じく紫のライダースピリット、仮面ライダーキバ。それがアスラのシャムシーザーを消し飛ばすと同時に姿を現した。

「召喚時効果でドロ……さあどうする……オマエの攻め手は欠かれたが……」

「ぐっ……つええ……ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダー龍騎】LV1

【ミラーワールド】LV2（2）

バースト：【無】

改めてトゥエンティの底知れない強さを身をもって感じるアスラ。あの時はエールと力を合わせたから勝てたのだと痛感している。

そして今の自分が彼に勝つにはもうあの手を使うしか無いと思いついて
………

（龍騎サバイブだ……あの力があればアイツにも勝てるかもしれないねえ……いやかもしれないじゃない……勝つんだ!!）

そのあの手とは先日手に入れた龍騎の強化形態サバイブの事だ。

確かにあの攻撃力ならトゥエンティの防衛ラインを突破しつつ一気に勝機を掴み取る事が可能なのかもしれない。アスラはそれを信じ、頭が悪いながら手札のカードで作戦を練って行く。

しかし、トウエンティがその考える時間を作ってくれるわけなくて……

「ターン04」トウエンティ

「メインステップ……オレは再びバーストをセットし、このライダースピリット……仮面ライダージオウを召喚!!」

ー【仮面ライダージオウ】LV2(2)BP7000

「っ!?!…変身したのと同じヤツ!?!」

トウエンティが新たなバーストを伏せると共に召喚したのは自身が変身した仮面ライダージオウそのもの。

彼はその強さを遺憾無く発揮させ、アスラを追い詰めて行く……

「アタックステップ……ジオウでアタック…効果でドロ〜だ」

アタックを仕掛けるトウエンティ。そしてさらに畳み掛けるべくその手札から1枚のカードを引き抜いて……………

「フラッシュチェンジ……………仮面ライダージオウ ビルドアーマー!!」

「チェンジのカード……………!!」

「この効果により、デッキから2枚オープンし、対象となるカードを1枚手札へ加え、残りを破棄」

トウエンティはライダースピリット特有の効果であるチェンジの効果を使い、2ターン目で消え去った手札を回復させた。

「そして通常のジオウと入れ替える!!……………この時、通常のジオウの効果でトラッシュのコア全てを自身に追加!!」

「えええええ!!…トラッシュのコア全部って使ったコアが戻るのか!？」

その強力すぎる効果に唖然とするアスラ。

この時点でジオウが他のライダースピリットと比べてどれ程強力なライダースピ

リットであるのかが認識できる……………

「来い、仮面ライダージオウ ビルドアーマー!!」

ー【仮面ライダージオウ ビルドアーマー】LV2(3) BP7000

ジオウがベルトのバックルにライドウオッチと呼ばれるアイテムをセットし、再びそれを回転。すると様々なパーツが瞬時に現れ、ジオウに装備されて行く。

そしてそれが完全に装着されると、ジオウは新たな姿、ビルドアーマーとなった。

「ビルドって……………あん時使ったライダーズピリットじゃねえか!!」

「ジオウは他のライダーズピリットの力を自分のものにできる」

「えええええ!!?…マジ!?!」

アスラはもはやどこで驚けば良いか分からなくなってきた、落ち着きがなくなる。

「チェンジの効果によりアタックは継続中!!」

「ツ……ライフだ……ぐっ!？」

〈ライフ5??4〉アスラ

回復状態のままアタックが続行するチェンジ特有の効果。ビルドアーマーはその手に装着されたドリルの一撃でアスラのライフを1つ破壊した。

「手は抜かない……一気に仕留める!!……ビルドアーマーで再度アタックし、その効果で龍騎を破壊!!」

「なにっ!?!……龍騎!!」

畳み掛けるトゥエンティ。ビルドアーマーは手のドリルで龍騎の腹部を貫通。龍騎は堪らず爆散してしまった……

「さらにオレ自身の効果、【転神】……コア3つをボイドに置く事でこのターン、オレはBP3000のスピリットとしてアタックする事ができる!!」

「ネクサスでアタック!？」

1【変身!!仮面ライダージオウ】LV2(6??3)BP3000

別次元の効果を発揮し続けるトウエンテイのデッキのカード達。

だが、驚きっぱなしではいられないか、アスラも反撃すべく手札から1枚のカウンターを引き抜いて見せて……………

「負けねえ!!…フラッシュユマジック、ガードベント!!……トラッシュに龍騎が2枚の時、このターン、オレのライフは後1つしか減らねえ!!」

「!!」

「そのアタックは当然ライフだ!!……っ!!」

へライフ4??3アスラ

再び猛威を振るうビルドアーマーのドリルの一撃。だが少なくともこのターンはアスラのライフはガードベントの効果により守られる事になる。その証拠に、ライフが減った今現在、アスラの手には龍騎の龍の胴体を模して作られた赤い盾が握られてい

た。

どんなアタックが飛んでこようがこれで跳ね返せる。

因みに発揮するのに必要な2枚目の龍騎は龍騎の召喚時効果でトラッシュに破棄されていった。

「……ターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダージオウ ビルドアーマー】LV2

【仮面ライダーキバ キバフォーム】LV1

【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】LV1

【変身!!仮面ライダージオウ】LV2(3)

【パンドラボックス】LV1

バースト：【有】

せっかくの転神の効果も実質無効となり、そのターンをエンドとしたトゥエンティ。しかし特に慌てふためく様子もなく、冷静な表情を浮かべていた。

次はアスラのターンだ。

「行くぜトウエンティ……このターン、オレの全身全霊の攻撃でオマエを超える!!」
「……やれるものならやってみろ……叩き潰してくれろ……!!」

トウエンティを超えるべく、アスラの渾身のターンが幕を開ける……

「ターン05」アスラ

「メインステツプツ!!……ドラゴンヘッド2体を連続召喚!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

アスラの場合に龍の頭部と翼のみで活動が続ける小さな龍が2体現れる。だがこれらのスピリットは前座に過ぎない。

アスラは本命となる切り札を手札から引き抜いた……

「コイツで勝つ……来い、仮面ライダー龍騎サバイブッ!!」

アスラの場合に龍騎が現れ、ベルトにあるカードデッキからカードを一枚引き抜いた。さらにその体中から烈火の如く炎が吹き荒れる。

龍騎は左腕にあるバイザーを龍の頭部を象ったショットガンのような武器に変換させ、そのカードをそこに装填……

……『サバイブ!!』

と、無機質な音声の流れ出た瞬間、龍騎は瞬く間に強化形態である龍騎サバイブに昇華してみせた……

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】 LV2 (2) BP11000

「……その姿、龍騎が強化されたものか」

「ああそうだ!!……オマエを超えるための切り札だ!!」

アスラは続け様に「アタックステップッ!!」と声を上げ、一気に攻勢に転ずる。

「龍騎サバイブでアタック!!…効果でBP15000以下のスピリット1体を破壊して赤のシンボルを1つ追加する!!…Wを破壊だアアア!!」

「!!」

龍騎サバイブの手に持つショットガンから放たれた烈火の弾丸がトウエンティの場にいるW サイクロンジョーカーに被弾、それは呆気なく爆発してしまう。

「ダブルシンボルのアタック!!…これはどう受ける!!」

「……キバでブロック」

ダブルシンボルのアタックは冷静にブロックするトウエンティ。キバフォームが低姿勢で構えながら龍騎サバイブの行手を阻む。

だがBPの差は圧倒的。龍騎サバイブは再び烈火の弾丸を放ち、キバフォームを撃ち抜いて見せた。

しかもこの瞬間、龍騎サバイブのさらなる効果が起動して……

「龍騎サバイブの効果!!…バトル終了時、龍騎サバイブのシンボルの数だけ敵のライフを破壊する!!」

「!!」

「行け龍騎サバイブ……メテオバレットツ!!」

龍騎サバイブはベルトからアドベントカードを1枚引き抜き、それを武器である龍の頭部を模したショットガンに装填……………

……………『シユートベント!!』

と無機質な音声流れると、咆哮と共に赤き武装龍が姿を現し、アスラの前方、龍騎サバイブの背後へと身を置いた。

そして龍騎サバイブは銃から深紅のレーザーを、赤き武装龍は口内から爆炎の炎を放出。それらは瞬く間にトゥエンティの元へと飛び行き……………

「……………ぐうつつ?!!」

へライフ4?2) トウエンティ

そのライフを一気に2つ焼き尽くして見せた。そのあまりの攻撃力に流石のトウエンティも半歩足を後退させてしまう。

「つしやあ!!……大ダメージだぜ!!……このまま一気に……」

……『一気に仕留める』

そう言いかけ、トドメを刺すべく残ったドラゴンヘッド2体でアタックを仕掛けようとしたアスラ。

だがそれも束の間、トウエンティが伏せていたバーストカードを裏から表へと反転させて……

「ライフ減少によりバースト発動!!……絶甲氷盾!!」

「なに!?!」

「効果でライフ1つを回復し、さらにコストを支払いこのターンのアタックステップを

「終了させる!!」

〈ライフ2??3〉トゥエンティ

発動されたのは汎用的な防御カード。ライフを回復された挙句、アタックステップまでもが強制的に終了させられてしまった……

「どうした?……オレを超えるんじゃないのか……?」

「くっ……ターンエンドだ……!!」

手札：2

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(2)BP11000(疲労)

【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000(回復)

【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP2000(回復)

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

アスラとして別にトゥエンティのバーストを完全に警戒していなかったわけではない。

バーストがあろうがなかろうがあの場合は攻めるべき時だった。

だが自分の龍騎サバイブの強さを過信していたのも事実であることを理解しているからこそ、このターンの強制終了は相当に応えていて……

「不相応なモノを与えられてはしやぐなよゴミ以下。オマエはこのオレのターンで終わる……!!」

「!？」

……このバトルのファイナルターンを宣言し、トウエンティのターンが再び幕を開ける……

「ターン06」トウエンティ

「メインステツプ……再度仮面ライダージオウを召喚する」

1 【仮面ライダージオウ】LV2 (3) BP7000

トウエンティは今一度自身のライダースピリットであるジオウを呼び寄せた。

「アタックステップ!!…ジオウでアタック!!…効果でドロォ!!」

召喚からアタック、ドロォまでを流れるように行うトウエンティ。だがアスラも黙って止まれたりはしない、手札からカウンターカードを1枚引き抜こうとするが……………

「あまいぜ!!…フラッシュマジック、ファイヤーウォール!!…ドラゴンヘッドを破壊し、このアタックでアタックステップを終了させる!!」

アスラの防御マジック、ファイヤーウォール。前のターンでトウエンティが使用した絶甲氷盾と同じ効果を発揮できる……………

しかし……………

「ツ!?!…なに…?!?」

自分のフラッシュタイミングあつたにもかかわらず、そのファイヤーウォールのカー

ドや支払ったコアが戻って行く。

この光景を理解できていないアスラにトウエンティが口を挟む。

「仮面ライダージオウは時を操る……ジオウがアタックする時、フラッシュタイミングの順序はオレ自身が決める!!」

「なに!?!」

通常、フラッシュタイミングは……

防御側?? 攻撃側

にて行われるため、本来であればアスラがトウエンティよりも先にフラッシュタイミングを行う権利があった。

しかし、仮面ライダージオウがいればそのルールなど無意味。トウエンティは自分から先にフラッシュタイミングでカードの効果を使う事が許されるのだ。

「そしてオレのフラッシュ……煌臨発揮!!……対象は仮面ライダージオウ!!」

「……煌臨……!!」

アスラより先にフラッシュタイミングを行うトゥエンティ。ソウルコアを支払い、進化に等しい煌臨を行う。

ジオウのベルトのバックル部にさらにもう一つ別のライドウォッチが装着され、ジオウはそれをバックルごと回転させ……………

……………ジオウ!!ジオウ!!ジオウ!!

IIー!!

ハイテンションな音声が流れると共に、仮面ライダージオウはその姿をさらに一段階強化した。

「……………煌臨、仮面ライダージオウII……………!!」

I【仮面ライダージオウII】LV2(3)BP10000

「……………オレの龍騎やロンのナイトのサイバブと同じ……………さらなる強化……………!!?」

「その程度のライダースピリットと一緒にするな。オレのジオウは他のライダースピ

リットとは格が違う……!!」

トウエンティはそう強く言い放ちながら、ジオウⅡの煌臨時効果を遺憾無く発揮させていく……

「ジオウⅡの煌臨時効果!!……手札かトラッシュにあるライダースピリットを20枚までデッキ下に戻す事で、戻した枚数2枚につき1体、BP15000以下のスピリットを破壊する!!」

「……ッ!?!」

「オレはトラッシュにある6枚のライダースピリットのカードをデッキの下に戻し、オマエの3体のスピリットを破壊する!!」

様々な方法でトウエンティのトラッシュに送られていたライダースピリットのカードが合計6枚、デッキ下へと移動する。

それに合わせ、ジオウⅡは自分と同じ顔が持ち手に着いていて刀身に「ジオウサイキョウ」と書かれた剣を発言させる。

そしてその剣を巨大化させ、アスラの場のスピリット達に時計の針を描くように一

閃。その剣技に避ける術なく、ドラゴンヘッド2体と、龍騎サバイブはなすすべなくまともに受けてしまい、力尽きて爆発してしまう……………

「くっ…………ドラゴンヘッド…………龍騎サバイブッ!!」

アスラのマジック、ファイヤーウォールを發揮させるには自分のスピリットを1体破壊する必要がある。だがその前にスピリットを全滅させられたため、今回に限ってそのコストを払う事は不可能。

「…………もうオマエに勝ち目は無い。諦めて龍騎のカードを渡せ…………!!」

勝利を確信したトゥエンティがアスラに言った。

「諦めねえ…………オレはこの国で一番強い頂点王になるまで…………諦めねええええ!!」

だがアスラは敗北がほぼ確定となった今でも勝負を捨てたりはしない。己の力を証明するため、そして師との約束を果たすため、頂点王を目指し続ける。

「頂点王……そんなに富や栄誉、名声が欲しいか!!……オレはオマエみたいに自分のためだけにバトルしてるんじゃない!!」

「ッ!?!」

アスラの言葉で着火させたように突然怒号を放つトウエンティ。その思いがひしひしと伝わって来た。

そして確信する。トウエンティは本当は善人で、誰かのために仕方なくライダースピリット狩りなんて非情な事を行っているのであると……

「煌臨スピリットはその煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ、故にジオウIIはアタック中!!……そしてそのアタック時効果!!……デッキの枚数10枚につき1つ、赤のシンボルを追加する!!」

「ッ!?!」

「オレのデッキは現在31枚、よってそのシンボルを3つ追加し、クアドラプルシンボルとなる!!」

ここに来てジオウⅡのさらなる効果が発揮され、怒涛の4シンボルとなる。
ブロックしたいところだが、さっきの効果でスピリットを破壊してしまったアスラ
にその術は無くて……………

「……………ライフだ……………ッ!!」

ライフで受ける他無かった……………

ジオウⅡはベルトのバックル部を回転させ、エネルギーを足に溜める。

……………トゥワイスタムブ레이크!!!

またハイテンションな音声が流れ、その状態で跳び上がり、アスラのライフ目掛けて
急降下した……………

「……………ぐああ!!」

へライフ3?!0アスラ

3つのライフをキック一撃で全て葬り去るジオウⅡ。アスラはその衝撃と爆風により、Bパットとデッキごと吹き飛ばされ、地面に転がり込んでしまう……………

これにより、このバトルの勝者は多くのライダースピリットを扱い、圧倒的な力を見せつけたトウエンティとなった。彼はジオウの変身を解き、アスラのライダースピリット、龍騎のカードを奪うべく、地面に這いつくばっている彼の元までゆつくりと歩みを進めて行く……………

「オレの勝ちだ……………オマエのライダースピリットは狩らせてもらおう……………」

「トウエンティ……………オマエ、他の誰かのためにバトルしてんだろ!? ……その誰かのためだけにライダースピリット狩りなんて馬鹿みたいな事してんだろ!?!」

「オマエなどに教えてやる義理は無い……………!!」

アスラはこのバトルの中で、トウエンティの心の断片を聞いて、ライダースピリットを狙う敵であるのは承知の上で、彼自身をどうにか救い出してあげたいと考えてしまっていた……………

先ずはなんでこんな事してるのかをちゃんと説明して欲しかった。絶対に理解し合

えると思ったからだ。

だがトゥエンティにそんなアスラの想いは届かず、一步、また一步も彼の元まで近づいて行く……………

しかし、辿り着く前にアスラを守るように現れ、トゥエンティの行手を阻もうとする人物が1人……………

「待ちなさいよ顔色悪いの……………ここから先は一步も通さないわ!!」

「ツ……………エール……………」

「あの時のエックスの小娘か……………」

その正体は他でも無い、エール・オメガだった。態度は大きいのが、手足の先が細かに震えており、今にも逃げ出したい様子が伝わって来る……………

「……………エックスの小娘、そこに転がっているのはコモンでソウルコアも使えないゴミ以下同然の男だ。この国で最も高貴な存在であるオマエがこの世界で最も価値の無い人間を助けてなんのメリットがある?」

立ち止まったトウエンティがエールに訊いた。

トウエンティの言う通り、この国の常識的にはエックスの人間が薄汚いコモンを護る事などあつて良いわけないし、それだけで処罰を下される事だつて有り得るのだ。

わざわざ怖い思いまでしてする意味やメリットが彼としては理解できなくて………

「確かにアスラはコモンだし、ソウルコアは使えないし、うるさいし、バカだけど………関係無い!!……コイツはこんな落ちこぼれだった私を仲間として認めてくれた、大事な存在………今まで何度もコイツの声や行動に助けられた………」

エールは恐怖で震える拳を固め、アスラとの思い出を頭に浮かべながらトウエンティに語る。

最初は単なるバカだと思つてたし、頂点王なんて絶対なれないと思つていたが、一緒に旅をしていくうちに、「コイツなら絶対なる!」と確信してしまった。アスラの行動や言葉にはここまで人を動かす力があつたのだ………

「だから今度は私が助ける番!!……アスラが頂点王になる日まで、私は一緒に旅を続け

る!!」

「……………エール……………ッ」

エールの心からの叫び、想いがアスラの心にも響く。彼女は既にコモンやエックスの身分などの概念に囚われてはいない。

「助ける……………そう、オレもあの子を助けるために戦っている……………あの子を救い出すためならオマエらなどどうなっても構わん!!」

「ッ!!」

トゥエンティの邪魔立てするならば容赦しないと云わんばかりの言動に、デツキとBパットを構えるエール。

しかし、

トゥエンティとエールのバトルが開始されるのかと思われた次の瞬間……………
またしても別の誰かの声が彼ら3人の耳を通過して来た……………

「よく戦った小僧……………よく言ったエール……………」

その男はタバコを唾えており、表情からは溢れんばかりの怒りを感じさせられた

.....

「そしてオマエは何言ってるんだ.....馬鹿弟子!!」

「テンドウさん!？」

「テンドウ!!」

その正体はこの国の三王の一人、テンドウ・ヒロミだった。彼にしては珍しく本気で怒りを露わにしており、その事もあってアスラもエールも驚きが隠せなかった.....

「またオレの邪魔をする気か.....三王、テンドウ・ヒロミ!!」

トウエンテイもまたテンドウの顔を目に映すなり怒りを露わにした。

力の渦が次々に交差していくユキカイ町の路地裏。

アスラやエールの命運や如何に.....

「もう我慢ならねー……ちよつくら祭りを始めて来るぜ」

「ちよつと待ちなさいよオロチ!?……アンタの言う祭りは血祭りでしょうが!!……三王だっているのよ!?!」

「ああ!?!……関係あるか!!」

「いや絶対関係ある!!……もうありありのあり!!……って感じ」

オロチはエールの顔を認識するなり、思わずその場に行こうとするが、それを女性が食い止める。

「全く、ウィルに今回はトウエンティに任せろって言われたわよね?……どいつもこいつも血の気が盛んのテンコ盛りの太郎なんだから……」

「……テメエの語彙はなんだ」

「まあでも正直、トウエンティが先にライダースピリットを集めまくるのも嫌々の嫌なのよね」

ライダーハンターズは誰が先にライダースピリットカードを20枚集めるかを競い

合っている。

その中でもオロチは別に誰かを殺して、強いカードが手に入ればそれで構わないため、特にそのレースを意識してはいない。

しかし女性はどう。トゥエンティやオロチよりも先にライダースピリットを20枚集めて自分の願いをウイルに叶えてもらいたい。

「……………ちよつとくらい邪魔してもいいわよね……………ふふ」

彼女はそう不気味な笑みを浮かべながらBパッドを通話モードに切り替えた

……………

18コア 「破滅を呼ぶデストロイア」

ユキカイ町路地裏でのトウエンティとのバトルに敗れたアスラ。彼に龍騎のカードを取られかけるが、彼を助けるべくエールとテンドウが駆けつけた。

「テンドウさん……アイツが弟子って、知り合いだったんすか!？」

「……昔の話な。今はただの犯罪者と捕獲者だ」

テンドウとトウエンティが師弟の関係にあつた事に驚くアスラとエール。

だがそれは彼の言う通り昔の話であり、今は追う側追われる側の関係になつてしまつて
いる。

「……丁度良い、今ここでアンタのライダースピリット、カプトもいただく!!……覚悟し
ろ」

「オマエがオレに勝てた事あつたっけか?……ナメンじゃねえぞ、殺されてーのか?」

「……あの時のオレのままだと思ふなよ……!!」

今にも始まりそうな彼らのバトルスピリッツ。睨み合ったこの時点で既に熾烈極まる内容が予想される……………

しかし……………

「ぐっ?!……………ぐあああ?!」

—!!!

困惑するアスラ達。無理も無い、何せ、トウエンティが目の前で何故か突然苦しみ出したのだから……………

その表情や上ずった声から、相当な痛みが彼を襲っているのがわかる。

「お、おい!!……………大丈夫かよ!」

「う、うるさい!!……………この勝負は預けておく!!……………オマエ達のライダースピリットは今日中に必ず貰ってやる!!」

「……………逃すかよ!!」

痛みにもがきながらも、特別仕様のBパッドの機能でワープゲートを生み出すトウエンティ。テンドウがそれを見るなり追い討ちをかけようとするも、それを行う前に彼はそれを潜つてこの場から立ち去ってしまった……

「チツ……逃したか……」

トウエンティを取り逃した事に腹を立て、舌打ちをするテンドウ。癖なのか懐からタバコを吸い始めた。

「ちよつと大丈夫なのバカスラ？」

「ああ、助かったぜエール」

「べ、別にアンタのために動いたわけじゃないんだからね!!」

「えええええ!!…じゃあ誰のため!？」

トウエンティに倒され、地べたに這いつくばっていたアスラに肩を貸すエール。強敵であるトウエンティを前にして恐怖しながらも自分を助けるために飛び出して来てくれたエールに感謝するが、彼女はまたしても特有のツンデレが発揮してしまい素直にな

れなかった。

「てかエール、なんでオマエオレの場所わかったんだ？」

一段落落ち着いたところでアスラがエールに純粹な質問を投げて来た。

確かに、ここは横幅は広いとは言え薄暗い路地裏。広大なユキカイ町からここまで辿り着けるのは少々厳しいだろう……………

「ああ、それならアイツのおかげよ……………なんか腹立つけど」

「え」

と、言いながらエールがある方向に指を刺した。アスラもその方向へと首を向ける。そこにいたのは……………

「ブツハハ!!…久し振りだなアスラ!!」

「あつ!!オマエ……………誰だ？」

「ブスジマ・トミオだ!!…忘れんじゃねえ!!」

体型太めで、ドクロマークの革ジャンを来たアスラ達の同期、レアの身分を持つブスジマ・トミオだった。

「ブツハハ」と言う独特な口癖が目立つ彼だが、アスラにボコボコにやられたり、ヘラクレスに逮捕されかけたり、基本的には散々な目に合っているのが印象的……

久し振りに勢い良く登場したが、アスラに名前を忘れられてしまい、出鼻を挫かれてしまった。

「アンタの帰りが遅いなーって思ってたらこのネズミが『噂のライダースピリット狩りが近くにいるって噂を聞いたんだブツハハ』とかなんとか言って話しかけて来て、もしかしたらと思ってるね」

「……成る程」

最初ブスジマは軽くエールをナンパする感じで話しかけて来たが、エールはそれをすぐさま一蹴。その後ブスジマが話題としてライダースピリット狩りの話を持ちかけた際に、エールはアスラがそれと出くわしたのでは？…と考え、バトルできそうな路地裏を風潰しに探し回ったのだった。

「つまりはオレのお陰だ!!感謝しなブツハハ!!」

「アンタそこ以外何もしてないじゃない」

「ぐっ……この女いたいところを……!!」

「ワツハハ!!…でもサンキューなブスジマ!!」

本当にいたトゥエンティを前にして恐怖で前に出れなかったブスジマ。だがアスラはそれでも彼に感謝の言葉を贈った。

「……小僧、オマエとエールはもうこの町を出ろ」

「え!?!」

ブスジマの登場で和んで来た一面も束の間、テンドウがアスラにそう提案して来た。

「トゥエンティはしばらくこの町に残るはずだ。オレが逮捕する。オマエらは先に安全なところに行け」

「テンドウ……」

三王として以前に大人らしい判断と言える。ライダースピリットを持つアスラは常に彼の標的になる。今は少しでも距離を置く必要があった。

「……………アイツにまた挑むなんて馬鹿な事考えんじゃねえぞ。身に染みたはずだ、今のオマエじゃどんなに限界を越えようがアイツには勝てないってな」

「……………わかりました……………ッ!!」

下唇を噛みしめながら悔しそうな表情を見せるアスラ。

トウエンティが本当は善人であれ、他の誰かのために戦っている事がわかったとは言え、自分はあのバトル、完全に敗北したのだと、この瞬間に痛感したのである。

本当ならば「いや、リベンジさせてくださいアアア!!」と言いたるところだが、今の自分がテンドウにそんな事を口にする資格は無いと感じ、その提案を承諾した。

「ブツハ……………オレは?」

そう言えば自分はどうしろとか何も言われたないよな……………

彼はこの痛みの正体を知っている……………

そしてそれは今すぐにでも『放棄』する事ができる。

だがやめられない、この世で最も大事な存在であるカナのために、それはまだ捨てられないのだ。

―『……………綺麗な雪だね!!』

―『ああ、そうだな』

―『あつはは!!…いつもクールだねトウエンティは!!』

―『……………君がはしやぎすぎなだけだ』

三年前、場所は同じくユキカイ町にて微笑み合うトウエンティとテンドウ・カナ。

今でも鮮烈に蘇ってくる彼女との記憶、思い出……………素敵な笑顔。

あの笑顔だけは守らなくてはならない。

例え自分の身が朽ち果てようとも、彼女の横に自分がいられなくなつたとしても

……………

「……………カナ……………この身が崩壊しようとして、横にいられなくなつても……………オレは絶対に

君を守る」

トウエンティは痛みを堪え、身体を奮い立たせながら、ライダースピリットを奪うべく今一度歩みを進めた。

しかし、それも束の間。異常な爆発音や、氷が砕け散るような音が四方八方から聞こえて来た。

「……………なんだ？」

その音のサイズからただ事では無い事を察したトウエンティ。ライダースピリット狩りを行いたいのは山々であるが、念のためその音の正体を確かめる事にし、その音が聞こえた方向のうち一つへ足を進めた。

一方アスラ達4人がいる路地裏。ここでもその凄まじい音は耳に入ってきて

……………

「な、なんだったんすか今のデツケエ音!？」

「さあ?………ん?」

胸騒ぎはしていたものの、特にその音には無関心だった様子のテンドウ。そんな彼のBパッドに着信が届いた。彼はそれをめんどくさそうに応答した。

「はいもしもし。めんどくさいから切つていい?」

《なんでじゃ!?!……オマエのボケに付き合つとる暇はないぞテンドウ!!》

「なんだよゴゴのじいさん。オレちよつと忙しいんだけど」

通話の相手はこの町のカラーリーダー、ゴゴ・シラミネだった。今は急なギツクリ腰のせいで医療施設で療養中である。

そんな彼が切羽詰った様子でテンドウに着信を寄越して来たのだ。この時点でただ事では無い何かが起こっているのをテンドウは察していて……

《忙しいもクソもない!!……ユキカイ町が謎のスピリット軍団に襲撃されとるんじゃ!!》

今現在、ユキカイ町は混沌としていた。

謎の黒い怪物、おそらく誰かがBパッドで召喚したスピリットが町を襲っていたのだ。雪まつりによって町の人々の多くは中心に集められていたのもあり、今のところ大事に至ってはいないが、このままでは危険なのは明白であった。

《避難は大方完了した。ワシは北ゲートへ向かう。オマエさんは西ゲートへ向かえ!!》
「相変わらず仕事はえーなじいさん。だがどうするよ、この町のゲートは3つ。最後の東ゲートは……………」

スピリット達はユキカイ町の3つのゲートを破壊して侵入した。今でもその周辺で町の建物等を破壊し続けている。

三王の一人であるテンドウがこの場に居合わせたのは不幸中の幸いと言えた。3つのうち2つは彼とゴゴで対応できる。

しかしもう1つは……………」

「オレが行く!!」

「ちよつとアスラ!?…アンタ身体が……」

「他の人達が危険なのに黙ってられるか!!…残りは東ゲートだな!!…オレに任せてくれ!!」

バトルに敗北したばかりで身体が痛いとかは言ってもらえない。アスラは何の罪もない町の人々を危険に晒さないために走り出した。

「ほっほ、やはりオマエさんの近くにアスラはおったか、予想通りじゃ」

「……知ってて着信よこしたのかよ、このサイコパスじい……おいエール、オマエは小僧に着いていつてやれ」

「ツ……わかったわ!」

テンドウにそう言われ、エールがアスラの後を追うように走り出した。

「……ぶ、ブツハ!?!……お、オレはここで待機って事だな!!」

「あつ…オマエまだいたの、帰っていいぞ」

「扱いひでえええ!!」

その破壊をやめさせるべく彼の目の前に現れたのは他でもないアスラだった。怒りを交えた雄叫びがこの場に響き渡る。

「オマエがスピリット達を召喚したんだな!!…今すぐこんな事やめさせろ!!」

「……灰色のツンツン頭に黒パーカー……ああ、君ひよつとして最近噂のソウルコアが使えないライダースピリット使いつてヤツ？」

「ッ!？」

アスラの顔を見るなりデストロイア達の動きを止める青年。その言動からアスラの事を認知しているようであり……

「オマエオレの事知ってんのか!？」

「ああ、ヒツヒツ…惨めでクソチビって噂だったけど本当だったみたいだな」
「なんだとコノヤロー!!」

アスラを見下す青年。アスラも腹を立ててプンプン怒り出した。

「僕ちゃんの名はダスト……不滅のダスト……噂通りなら君は赤のライダースピリットを持つてるんだよな？」

「ああ、それがどうした」

「ヒツヒツ……僕ちゃん実はコレクターの趣味があつてね？…ライダースピリットを集めてるのよ。まあカードに選ばれてるわけじゃないからデッキにはないけど………どうだろう、君のライダースピリット、僕ちゃんのコレクションに加えて見るのは？」

「イヤだ!!」

「ヒツヒツ……だろうね。ならば力づくで!!」

ダストと名乗るその青年はアスラのライダースピリット、龍騎を力づくで奪うべく、Bパッドを彼の方へと向け直し、デッキをセットした。カードが消えた事でデストロイアと呼ばれていたスピリット達はこの場から消滅し、無残にも破壊された氷の街並みのみが残ってしまった。

「上等だぜ……オマエぶつ倒して必ずこんな事止めてやる!!」

アスラも町のみんなを守るためにBパッドとデッキをスタンバイするが………

「……コレクターか、成る程……つまり貴様を倒せばたんまりとライダースピリットを得られるわけだ……!!」

ー!!

凍りつくような声が今にもバトルを始めようとしてきた2人の耳を通過していく。そして声のする方へ現れていたのは……

「……トウエンティ、なんでオマエ!?!」

「それはこっちのセリフだ」

他でもないトウエンティだった。彼もまたアスラより5メートルばかり離れたところでBパッドとデッキをセットした。その向けられている先はライダースピリットを複数枚所持していると言うダストだ。

「オマエ、なんか痛そうにしてたじゃんか、大丈夫か!?!」

「貴様に心配される覚えはない……コイツのライダースピリットを奪った後はオマエ

だ。覚悟しろ」

「成る程ねく……君が噂のライダーハンターズ、トウエンティか……確か複数種のライダースピリットを操るって言う」

「知っているなら話は早い。始めるか……」

Bパッドを構えながら言い合う三名。その間にダストは内心で「まあオレはそのライダーハンターズのヤツに依頼されて来たんだけどね」とニヤついていた。

「あらあらく……トウエンティは計算通りだったけどあの坊やまで来ちゃった……ん……まあいいか」

「本当なら今すぐにも祭りに行きたいところだが……まあこれはこれで面白そうじゃねえか」

そう言葉をこぼしながらアスラ達3人を高みの見物をしているのはライダーハンターズの筋肉質の男性、オロチと美しい女性。

「私の知り合いダストちゃんのカードは……ちよつとばつかしトウエンティと相性悪

いのよね〜」

女性がさらにそう呟いた。

言動から察するに、おそらくダストに町で暴れるよう依頼したのは彼女だ。今一度トウエンティを再起不能に陥らせるのが目的に違いない……………

「さあ、君のライダースピリットももらおうか。きつと最&高のレアカードばかりなんだろ??……………背筋がゾクゾクして来たよ」

「ああ……………オレもだ」

場面は戻り東ゲート。トウエンティとダストのバトルが始まろうとするが……………

「ちよつと待てトウエンティ!!……………オレもやる!!」

「……………なに?」

「オレは今、アイツにとてつもなくて腹が立ってる!!……………ぶっ飛ばさねーと気が済まねえ!!」

「……………勝手にしろ」

アスラが割って入って来た。トウエンティはそれに関して特に問題はないのか、意外にもあつさり承諾してしまう。

「ふくん。つまりは1対2のレイドバトルって事だな……良いよ良いよ!! 2人がかりで来なよ!!」

トウエンティにプラスワンで相手をしなければならなくなったと言うにもかかわらず、ダストは余裕な表情を浮かべて見せた。それほどまでに自分のバトルスピリッツに自信があると言える。

「つしやあ!!……んじや行くぜ!!」

……ゲートオープン、解放!!!

ユキカイ町東ゲートにて、3人の男達のバトルスピリッツが開始される……………

先行はレイドバトルのルールに則り、1人側のプレイヤーであるダストからとなるが

……………

「……………オレは、4枚のカードをドローする」
「オイイイイ!!」

トウエンティが手札となる4枚のカードをデッキからドローした。それは普通のバトルであれば当然の行いであるが、このレイドバトルでは話が変わってくる……………

「なんで4枚ドローしたんだよ!? ……オレ0枚になるじゃねえか!!」

そう。レイドバトルでは複数側のプレイヤーは初期手札4枚を割り振る。トウエンティが4枚ドローしたせいでアスラは今回のバトルに限り初期手札0枚となってしまうのだ。

これではアスラはいないも同然である。

「当然だ。勝手に入って来たのはオマエなのだから……………そこで指をしゃぶって見ていろ」

「いやいやいや!!! ……勝手に入って来たのそっちだよね!」

「ヒツヒツ……………なんとも間抜けな連中だね……………」

アスラとトウエンティのそのコントみたいな言い合いを目に移し、ダストはニヤケながら自分のターンシークエンスを進行させて行った……………

「ターン01」ダスト

「メインステップ……………僕ちゃんはネクサス、妖星ゴラスを配置!!」

1 【妖星ゴラス】 L V 1

ダストの背後に太陽に似た燃える塊が出現。

「配置時効果、デッキの上から5枚をオープン、その中の対象となるカードを加え、残りは破棄……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【妖星ゴラス】 L V 1

バースト：【無】

対象となるカードを一枚手札に加え、そのターンをエンドとしたダスト。

次はアスラとトウエンティのターンだが……………

「オレのターン……………」

「オレ達のターンだろ!?!…ほれ、やり直し!!」

「スタートステップ……………」

「聞けよ!!」

トウエンティはペアであるアスラの言葉を無視しながらターンシークエンスを進めていった……………

「ターン02」アスラ&トウエンティ

「ぐっ……………これ一枚じゃ何もできねえ……………」

「メインステップ……………第二の仮面ライダーW サイクロンジョーカーを召喚!!」

1 【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】「2」 L V 1 (1) B P 4 0 0 0

……サイクロン、ジョーカー!!

と、無機質な機械音が流れると共に左半身が緑、右半身が黒色のライダースピリット、
W サイクロンジョーカーが現れた。

「召喚時効果発揮、リザーブにコアを1つ追加。オマエの手札が5枚のため、さらにト
ラッシュにもコアを1つ追加」

「へえ、召喚しただけで2つもコアを……便利な効果だね」

「……口を慎め無法者。オレは必ずこの勝負に勝ち、貴様のライダースピリットをいた
だく……ターンエンドだ」

アスラ手札：1

トウエンティ手札：4

場：【仮面ライダーW サイクロンジョーカー】「2」 L V 1
バースト：【無】

「ヒッヒッ……随分と必死なんだね」

アスラの力に頼ろうとはせず、己が力のみで勝利を得ようとするトウエンティ。そんな彼に対し、ダストは薄気味悪い笑みを浮かべながら、ターンを始めようとする……

「ええ!!……ちよつとバカスラ!!……どう言うことよこれ!!……なんでアンタがトウエンティとレイドバトルなんてやってんのよ!」

「あつ……エール……」

ここでようやくエールが到着した。この混沌とした状況に思わずツツコミを入れてしまう。

「うー……今はちよつと説明しづらいんだけど………要はあのヒツヒツ言ってるヤツがスピリット出して町を壊してたって事!!」

アスラがダストを指刺しながらエールに告げた。まだ完全とはいかないが、彼女も少しばかりは理解を覚える。

「へえく……おチビちゃんなかなか可愛い娘連れてるじゃないの!!……決めた!!……このバトルに勝ったらその娘ももらったげる!!」

「キモツ!!」

「ふく……辛辣なところも素敵!!……最&高!!」

女好きな面も持ち合わせているのか、ダストはさらにエールまでもを要求して来た。

「ええ……なんなのコイツ……アスラ!!負けんじやないわよ!!」

「おう!!任せとけ!!……バツチリ守ってやんよ!!」

「ツ……べ、別に守れとか言ってるわいよ!?!……か、かか勘違いしないでよね!?!」

「ええええええ!?!……なんかごめん!!」

「ヒツヒツ……ツンデレなところもますます気に入った。必ず僕ちゃんのモノにしてやるよ!!」

「誰がツンデレよ!!」

会話するたびにダストに気に入られるエール。

そしてよりやる気を見せるようになったダストは、ここでようやく第3ターンを開始

する。

「ターン03」ダスト

「メインステップ!!…モンスターXを召喚!!」

ー【モンスターX】LV1(1)BP4000

ダストが初めて召喚したスピリットは白き外骨格を見に纏う怪獣。その雄叫びがフィールドにこだました。

「アタックステップ!!…モンスターXで攻撃、【真・激突】により可能な限りブロックしてもらおうぞ!!」

「……第二のサイクロンジョーカーでブロック」

早速そのスピリットで攻撃を仕掛けるダスト。効果によりブロックを強制されたトウエンティはサイクロンジョーカーでそれを迎え撃つ。

モンスターXがサイクロンジョーカーに突進するが、サイクロンジョーカーは華麗にそれをかわして回し蹴りをお見舞いする。その一撃で瀕死に陥るモンスターXだったが、最後の力を振り絞ってサイクロンジョーカーを鷲掴みにして地面に叩きつけた。

この瞬間、両名限界を迎え、たまらず爆散してしまった……

「相討ちか……」

「相討ちではないんだな……!!」

「？」

「モンスターXが破壊された事により、手札にあるカイザーギドラの効果発揮!!……これをノーコスト召喚する!!」

ー【カイザーギドラ】LV1（1S）BP10000

爆発による爆煙の中、翼を広げ現れたのは黒き三つ首龍。皇帝の名を持つギドラだ。ダストは最初からこのスピリットの召喚を狙っていたのだろう……

「LV1でBP10000?!」

「ヒツヒツ……どうだ凄いだろう?……まあでもこのターンはもう動かないかな……ター
ンエンドだ」

手札：4

場：【カイザーギドラ】LV1

【妖星ゴラス】LV1

バースト：【無】

しかし、強力なスピリットを召喚した束の間、そのターンをエンドとしてしまうダ
スト。

「ツ!?…アタック無し!?……でもチャンスだ、行くぞトウエンティ!!」

「黙れゴミ以下」

反撃に転じようとするアスラ。しかしトウエンティは彼を一蹴しながらそのター
ンシークエンスを進行していく。

「ターン04」アスラ&トウエンティ

「メインステップ……オレは仮面ライダージオウに変身する!!」

ー!!

………カメー……ンライダー!!

………ジ、オー……ウ!!

ー【変身!!仮面ライダージオウ】LV1

ハイテンションな音声が流れ、トウエンティが複眼に「ライダー」と刻まれたライダースピリット、ジオウに変身して見せた。

「……あれがジオウか……噂に名高い風格だ」

「神託の効果、カードを3枚トラッシュユへ……対象カードは3枚、よってオレ自身にコアを3つ追加」

変身のカードは飽くまでも創界神ネクサス。神託の効果によりコアが追加された。

「さらにネクサス、パンドラボックスを2枚連続配置し、バーストをセット!!……これでターンエンドだ」

アスラ手札：2

トウエンティ手札：1

場：【変身!!仮面ライダージオウ】LV2（3）

【パンドラボックス】LV2（1）

【パンドラボックス】LV2（1）

バースト：【有】

不気味な黒い小箱、パンドラボックスや、バーストカードを配置し、そのターンをエンドとしたトウエンティ。このパターンはアスラの時と全く同じである。

「ちよつとバカスラ!!…アンタもなんかしなさいよ!!」

「無理!!…だつてオレの手札2枚だもん!!」

叱咤して来るエールにアスラは悲し泣きしながら2枚しか無い手札を見せつけた
.....

「ターン05」ダスト

「メインステップ……バーストセット」

ターンの開始早々、ダストの場にバーストが伏せられる。

「さらに2種目のネクサス、偽りの地下帝国を配置」

1【偽りの地下帝国】LV1

彼の背後に淡い紫の色を輝かせる帝国が配置される。

「残ったリザーブのコアを使ってカイザーギドラのLVを2にアップ!!……アタックス
テップ、行って来いカイザーギドラ!!」

ダストの指示により飛び立つカイザーギドラ。狙うはアスラとトウエンティのライフだ。

「……ライフで受ける………ッ」

「ぐっ!？」

〈ライフ5??4〉アスラ&トウエンティ

2人のライフバリアを噛み砕くカイザーギドラ。その破壊は伝播し、2人にそれ相応のダメージを与えた。

しかしトウエンティにとってこれは計算のうち。事前に伏せていたバーストカードを勢いよく反転させる………

「ライフ減少によりバースト発動!!………仮面ライダーキバ キバフォーム!!………効果によりカイザーギドラのコア2つをリザーブへ!!」

「!？」

「その後召喚。効果でドロ―」

ー【仮面ライダーキバ キバフォーム】LV1(1)BP2000

突如紫の光に包み込まれるカイザーギドラ。その体内のコアが抜き取られ、LVダウ
ンに陥る。

逆にトウエンテイの場では新たなライダースピリット、仮面ライダーキバが地上に降
り立っていた。

「ヒツヒツ……複数のライダースピリットを操る力……羨ましいくらいチートだね
……ターンエンドだ」

手札：3

場：【カイザーギドラ】LV1(1S)BP10000(疲労)

【妖星ゴラス】LV1

【偽りの地下帝国】LV1

バースト：【有】

新たなライダースピリットの出現にもまるで驚くような様子は見せず、余裕のあるダスト。

次はアスラとトウエンティのターンだ。トウエンティはここで決めると言わんばかりに勢いよくターンシークエンスを進行させて行った……

「ターン06」アスラ&トウエンティ

「メインステップ……仮面ライダージオウをLV2で召喚!!」

1【仮面ライダージオウ】LV2(2)BP7000

トウエンティは今の自分と全く同じ姿をしたライダースピリット、ジオウを召喚した。

「アタックステップ!!…行け、仮面ライダージオウ!!…アタック時効果で1枚ドロ」

遂に自らアタックを仕掛けるトウエンティ。仮面ライダージオウが戦闘態勢に入る。

「さらにこの時、オレが先にフラッシュユタイミングを行う事ができる!!」

「!?」

「煌臨発揮、対象は仮面ライダージオウ!!」

ジオウは時を操る。本来であれば防御側であるダストからフラッシュユタイミングのカード効果を使えるはずが、反転してトウエンテイから行う事が可能である。

ジオウはベルトにさらに別のアイテムのスイッチを入れ、嵌め込み、回転させる

……

………ジオウ!!ジオウ!!ジオウ!!

………**II**………**!!!!**

「現れ出でよ!!………仮面ライダージオウII………!!」

1 【仮面ライダージオウII】LV2(2)BP10000

仮面ライダージオウは一瞬にして変化を遂げ、その姿は仮面ライダージオウⅡとなった。

「……如何にも切り札って感じだね!!…それが最強形態なのかな?」

「煌臨時効果、トラッシュにあるライダースピリットを20枚までデツキの下に戻し、戻した枚数2枚につき1体、BP15000以下のスピリットを破壊する!!」

「!!」

「オレはトラッシュに眠る4枚のライダースピリットをデツキの下に戻し、貴様のカイザーギドラを破壊する!!」

トウエンテイのトラッシュに送られていたライダースピリットのカードが合計4枚、デツキ下へと移動する。

それに合わせ、ジオウⅡは自分と同じ顔が持ち手に着いていて刀身に「ジオウサイキョウ」と書かれた剣を発現させる。

そしてその剣を巨大化させ、カイザーギドラに時計の針を描くように一閃。その剣技に避ける術なく、カイザーギドラはたまらず爆散してしまった……

「さらに!!……ジオウⅡのアタック時効果!!……オレのデッキの枚数10枚につき赤のシンボルを1つ追加する!!……オレのデッキは31枚!!……よって3つ追加し、クアドラプルシンボルとなる!!」

アスラを倒した時と全く同じパターンだ。仮面ライダージオウⅡはその効果で4点のシンボルとなり、一撃で4つものライフを破壊できる強力なスピリットと化した。

「……………ライフで受けちゃうか!!」

「だったらその身で味わえ!!」

……………トウワイスタイムブ레이크!!!

ジオウⅡはベルトのバックル部を回転させると、またしてもハイテンションな音声が流れる。ジオウⅡはそのまま飛び上がり、滑空するようにダストに向けて飛び蹴りを放つ……………

「ぐっ……………ぐあああ!!?」

へライフ5?!1ダスト

その一撃は重く、5個あるうちの4つを破壊して見せた。
ダストは余りのダメージで思わず膝をついてしまう……………

「よし!!……………キバのアタックで終わりだな!!」

「黙れ、言われなくとも最初からそのつもりだ……………!!」

ライフは残り1つ。トゥエンティがダストにトドメを刺すべくキバで攻撃を仕掛けようとした……………

しかしその直後、ダストは徐に立ち上がり、事前に伏せていたバーストカードを発動させて……………

「ライフ減少によりバースト発動!!……………エクステインクションウォール!!」

ー!!

「この効果により減少された分のライフを一気に回復させる!!……………つまり4つ!!……………ラ

「イフは元通りだ!!」

「ライフ1??5」ダスト

「ま、マジかよ!!?……一気にライフを戻しやがった!!?」

「ヒツヒツ……さらにコストを払いフラッシュ効果、このアタックステップを終了させる……!!」

「せつかく1まで追い詰めたと言うのに再び振り出しに戻されたアスラとトウエンティ。」

「フン……所詮は1ターン延命したに過ぎん……」

「アスラと違って冷静なトウエンティはこのターンでの決着は不可能と見て、ターンをエンドとしようとするが……」

「……ターンエン……ぐっ!?!」

「ツ……トウエンティ!?」

「ぐおおおお!!」

またしても突然身体に激痛が走るトウエンティ。思わず片膝を突いてしまう。

「お、おいオマエ……ホントに大丈夫なのか!」

「うるさい!!…オマエなんぞに心配される覚えは無いと言っているだろ!!」

彼の容態を心配するアスラ。だがトウエンティは痛みを堪えながらそれを拒絶する。

「ヒツヒツ……ヒヤアツハツハツハツ!!」

その様子を見てダストが滑稽だと言わんばかりに汚い笑い声を荒げた。

「やっぱりな!!…オマエ、そのジオウのデッキで何回バトルした?…ライダースピリットを何枚も同様に扱えるなんてチートじみた力なんのリスクも無いわけ無いよなあ!!!」

「!!」

「もう限界なんだろうオマエの身体はあ!!!」

ライダースピリットを複数操る力を有する仮面ライダージオウのカード。

しかしそれは使用者の身体を徐々に蝕んで行く。トウエンティは絶対的な強さの代償として己の肉体を捧げ続けて来たのだ。

「そ、そうなのか!?……オマエずっとその誰かのために無茶を……」

「黙れゴミ以下……オレは、オレはまだ立ち上がれる……!!」

アスラはここでトウエンティが誰かのためにバトルをしていた事を思い出す。きっとその誰かのためにそんな身体になってしまっていた事を直感的に見抜いた。

だがトウエンティはそんなアスラに聞く耳を持たず、痛みに苦しみながらも、残る力を振り絞り、立ち上がって見せた。

「ヒツヒツ……健気だね……そこまで大事なのかい?」

「……………何がだ」

「惚けなくてもいい!!……僕ちゃんは知ってたぜ!!」

オマエが三王、テンドウ・ヒロミの妹、テンドウ・カナと恋仲である事!!

そして病に伏した彼女を助けたいがために、ライダースピリット20枚をウィルとか言うシルクハットの男に献上しようとしている事もな!!!

ダストの口から言い放たれる衝撃的な真実。

それがアスラとエールの耳にも通過してしまい……………

「トウ、トウエンティとカナさんが恋仲!?!」

「な、何だつて!?……おいトウエンティ!!…ホントなのか!？」

「黙れ」

「黙れじゃわからん!!……オマエ、カナさんのためにライダースピリット狩りなんて非情な事……」

真実に驚愕しながらもトウエンティに訴えかけるアスラ。だがトウエンティは話す気など無く、それを軽くあしらってしまう。

「ヒツヒツ……じゃあ僕ちゃんのターンだね」

そんな中、ダストが再びターンを進行させていく。

「ターン07」ダスト

「メインステップ……偽りの地下帝国をLV2へアップ」

ダストの背後にある偽りの地下帝国のLVが上昇する。そしてその効果はコスト1

0以上の紫のスピリットを召喚する際、そのスピリットのコストを6に定める事。
彼はその効果を見越した上で、さらに手札に手を伸ばした。

「ヒツヒツ……その咆哮は破滅を呼び寄せる……来い、デストロイア・完全体!!」

1【デストロイア（完全体）】LV3（5S）BP20000

巨大な翼を広げ、彼の場に降り立つ怪獣のような姿をしたスピリットか1体………
名をデストロイア。

「現れるなり本当に世界でも滅ぶかのような咆哮を張り上げ、アスラとトウエンティを
その視界に映した………」

「さあ、お楽しみは………これからだ」

ダストはまたしても不気味に笑いながら彼らにそう告げたのだった………

19 コア「奇跡の進化!仮面ライダーグランドジオウ!!」

「おいゴゴのじいさん。そっちはどうだ。スピリットを召喚していたバトラーはいたか？」

《いや、それはこっちにもおらんかったぞ……しかもワシの目の前で突然姿を消しおつた……ヤツらは何じやったんだ》

テンドウとゴゴはお互いにBパッドの通話機能を使用し、連絡を取り合っていた。

北ゲートでデストロイア・幼体と呼ばれるスピリットと交戦していたゴゴ。テンドウも同様に西ゲートで戦っていたが、それらのスピリットは忽然と姿を消してしまつてたのだ。

考えられる理由はただ一つ……

「多分、その所有者がバトルを始めたんだらうな」

《ッ!!……そうか、じゃから他のスピリットは消えた……》

そう。それしか考えられない。

バトルを始めるためには一度Bパッドの上にあるカードやコアを全てリセットしなければならぬからである。

「でもって、オレのここにも、アンタんここにもそのスピリットの所有者がいなかったって事は……………」

《ま、まさかアスラのところに!?!》

「ああ、おそらく……………」

《オマエさん、アスラの電話番号はわかるか!?!》

「イヤ知らねえ。チツ……………こんな事なら番号交換しとくんだったぜ……………めんどくせえ、帰って良い?…」

《ダメに決まつとるだろ!?!…ボケかましとる場合か!?!》

そこまで会話すると、テンドウとゴゴは通話を切り、再び走り出した。今度は真反対の方向にある東ゲートへ……………

バトルしているであろうアスラの元へ……………

ユキカイ町を「デストロイア」と呼ばれるスピリット達で破壊しに来た「不滅のダスト」と対峙するアスラとトウエンティ。

何の罪もない町の人々を危険に晒したダストを許すまじと果敢にバトルに挑もうとするアスラだったが、トウエンティはアスラに構う事なく一方的に身勝手なバトルを行なっていく。

さらにダストの口からトウエンティが恋仲であるテンドウ・カナのために仮面ライダージオウを使ってライダースピリットをシルクハットの男に献上しようとしている事実も発覚。遂にテンドウに続いてアスラとエールもそれを知ることとなった。

そしてダストは追い討ちを掛けるかの如く、破滅を呼び寄せる魔竜、「デストロイア・完全体」をフィールドに召喚したのだった……………

「で、デケエ……………これがアイツのエースカード!？」

「ああそうさ、僕ちゃんが持つ最強デツキの最強カードだ……………これさえ出てくれば君らのライダースピリットなんてただのレアカード……………意味をなさなくなる!!」

本当に世界を破滅でもさせようとしているかのような姿をしているデストロイア・完全体。その巨軀たる肉体に慄くアスラ。

だが龍騎のカードを守るため、ユキカイ町の人々を守るためにここは意地でも勝たなければならぬと再び意志を固め直した。

「関係無い。このバトルに必ず勝ち、オレは貴様の持つライダースピリットを全てもらう!!」

「ヒツヒツ……愛しのあの娘のためだろう……一途だね君は!!……アタックステップ!!……デストロイア・完全体でアタック!!」

トウエンテイの一途な想いを侮辱するように笑うダスト。

そして遂にデストロイア・完全体が咆哮を張り上げ出陣する。

「フラッシュでデストロイア・完全体のアタック時効果だ!!……君のジオウIIを破壊させてもらう!!」

「!!」

デストロイア・完全体は不気味な口内から霧状の黒いブレスを発射。トウエンティの場にいるジオウIIはそれを浴びてしまい、たちまち爆散してしまう。

「マジかジオウIIが!?!」

その破壊に戸惑うのはトウエンティではなくアスラだった。

だがその間も束の間、ダストはデストロイア・完全体の更なる効果を發揮させて

……

「この効果發揮後、デストロイア・完全体を破壊する!!」

「え」

「じ、自爆!?!」

ジオウIIを破壊した途端、唐突に自らも爆散してしまった。その意味のわからない奇行、効果にアスラとエールは目を丸くする。

いくら強力なスピリットを破壊したかっただけとは言え、自身のエースカードと称するカードを自爆させる戦術は流石に拍子抜けだった。

「なんか勝手に破壊されたぞ……………」

「……………おそらく何かまだ効果があるはずだ」

「え!?!」

冷静に思考を働かせ、そう呟くトウエンティ。

ダストはその彼の言葉に対し、「御名答!!」と叫びながらダストロイア・完全体の効果を発揮させる……………」

「ダストロイア・完全体は破壊時、トラッシュにあるダストロイア・幼体をコストを支払わずに好きなだけ召喚する!!」

「幼体!?!」

「そうそう、つまりは分裂するわけさ!!……………カモン、4体のダストロイア・幼体!!」

┆【ダストロイア（幼体）】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

┆【ダストロイア（幼体）】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

┆【ダストロイア（幼体）】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

1 「デストロイア(幼体)」LV1(1)BP1000

完全体のデストロイアが爆散した後の爆煙の中より現れ出たのはそれよりサイズが遥かに劣るデストロイア達、翼はなく、スピリットとしての才能も劣るが、その数は4体。

アスラはその姿を見て、それらのスピリットがユキカイ町を破壊していた事を思い出した。

「あの時のスピリット………てかなんで4体!?!…デッキに入れてもいい同じ名前のカードは3枚までだろ!?!」

「ヒツヒツ………デストロイアにバトスピの常識は通用しない、デストロイア・幼体は何枚でもデッキに入れてOKなんだ」

「えええええ!?!……ズル!!」

本来であれば同名カードはデッキに3枚まで、しかしこのデストロイア・幼体は何枚でも投入が可能。

故に完全体の効果が最大限に発揮できる。

だがダストが勢いに乗りかけたその瞬間、それを静止させるかの如く、トウエンティは手札からカードを1枚引き抜いて……………

「フラッシュエンジン……第二の仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム!!」

「4種目のライダースピリット!」

「この効果でBP4000以下のスピリットを全て破壊する!!……散れ、弱者!!」

トウエンティの放ったカード効果により赤い竜巻が発生。それは瞬く間にダストのフィールドを飲み込み、デストロイア・幼体を一蹴して見せた。

「そしてこの効果発揮後にキバと入れ替える」

1【仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム「2」】LV1(1)
BP6000

キバの身体が粒子に変換され、再び合成すると、その姿は赤と青と白が螺旋状にカ

ラーリンググされた仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォームと
なっていた。

「流石は噂のライダー狩りトウエンティ……幼体達の波状攻撃が始まる前に手を打った
か……でもまあそんなボロボロな状態でのバトルはいつまで持つかな??……ヒッ
ヒッ……ターンエンド」

手札：3

場：【偽りの地下帝国】 LV 2

【妖星ゴラス】 LV 1

バースト：【無】

場のスピリットが全て消え去ったダストはそのターンをエンドとした。

彼の言う通り、トウエンティは既にジオウデッキの多用によりボロボロであり、足元
もフラついている。

「オレは勝つ……カナのために……ただそれだけのためにオレは全てを投げ捨てて
賭けに出た」

「トウエンティ………」

賭けとはおそらくウィルにライダースピリットを20枚献上すればどんな願いでも叶えてもらえると言う事だろう。

この言葉でアスラとエールはダストの言っている事が真実であり、トウエンティがカナのためにライダースピリットを奪っている事を確信した。

「オレのターン!!」

自分のターンを始めるトウエンティ。

アスラもそれに釣られてターンシークエンスを進行させて行く。

「ターン08」アスラ&トウエンティ

「メインステップ!!……キバを再召喚!!……効果でドロー!!」

1【仮面ライダーキバ キバフォーム】LV1(1)BP2000

またアスラを無視して勝手にターンを進めるトウエンティ。場にはキバが再召喚される。

「さらにオレは、仮面ライダービルド ゴリラモンドフォーム!!…仮面ライダーW ヒートメタルを召喚!!」

ー【仮面ライダービルド ゴリラモンドフォーム】LV1(1) BP5000
 ー【仮面ライダーW ヒートメタル】LV1(1) BP3000

……………ゴリラ、ダイヤモンド…ベストマッチ!!

……………ヒート、メタル!!

音声と共に、赤と白で螺旋状に構成された仮面ライダービルド ゴリラモンドフォームと、赤と銀で半身を分ける仮面ライダーW ヒートメタルが現れた。

「おお!!……………なんかめっちゃライダーズピリットいるう!?!」

トウエンティ自身が変身したライダーを含め、フィールドに存在するライダースピリットは全部で5体。その光景にアスラは思わず声を上げた。

「アタックステップ!!……W ヒートメタルでアタックし、コアを増やす!!……さらにフラッシュでオレの【転神】の効果!!コアを3つボイドに置き、このターンの間、BP 3000のスピリットとしてバトルに参加できる!!」

炎を纏う棒を振り回し戦闘態勢に入るヒートメタル。さらにトウエンティは追い討ちをかけるように転神の効果を発揮。これで合計5回のアタックを可能とした。

だが、それさえをも欺くかの如く、ダストは手札から1枚のカードを引き抜いて

……

「ヒツヒツ!!……デストロイアと数で渡り合おうだなんて100万年早いよ!!……フラッシュマジック、スケープゴート!!」

ー!!

「この効果により、トラッシュにある紫のスピリット1体を蘇生!!……戻って来い、僕

ちゃんのデストロイア・完全体!!」

ー【デストロイア（完全体）】LV1（1）BP8000

「げえ!?!…また出てきやがった!?!」

紫の煙がダストの場を包み込んだかと思えば、その中より再びデストロイア・完全体が咆哮を張り上げながら姿を見せる。

「ヒートメタルのアタックはこの完全体でブロック!!」

BPは圧倒的にデストロイアが上。体格差を活かし、ヒートメタルを鷲掴みにして地面に叩きつけた。ヒートメタルは堪らず爆散してしまう。

「そしてこのバトル終了時、スケープゴートの効果で召喚されたデストロイア・完全体は破壊される!!」

「ッ……破壊」

しかし勝利した束の間、デストロイアは塵となって消滅してしまう。だがダストはその様子を見て薄ら笑いを浮かべる。

それもそのはずだ。何せまたしてもあの強力な破壊時効果を発揮できるのだから

……

「破壊時効果あ!!…トラッシュからデストロイアを好きだけ呼ぶ!!…舞い戻れ幼体ども!!」

ー	【デストロイア (幼体)】	LV1 (1S)	B P 1 0 0 0
ー	【デストロイア (幼体)】	LV1 (1)	B P 1 0 0 0
ー	【デストロイア (幼体)】	LV1 (1)	B P 1 0 0 0
ー	【デストロイア (幼体)】	LV1 (1)	B P 1 0 0 0

「またうじゃうじゃと……」

「どうすんだよ、これじゃキリがねえぞ!？」

破壊による爆発の爆煙の中、再び4体のデストロイア・幼体がフィールドへと呼び出してきた。

「どうだい。僕ちゃんのデストロイアは決して死ぬ事はない。これこそ「不滅のダスト」の由来さ」

不滅の名の如く、姿形を変えて何度も蘇ってくるデストロイア。せっかく破壊してもまた目の前に現れると言うのは向かい合っているバトラーにとってかなり大きなプレッシャーを与え、疲弊の元となる。

アスラとトウエンティは極限の中バトルしていると云っても過言では無くて
.....

「名の由来など聞いてない。何度でも蘇るなら何度でも破壊するまでだ!!.....変身したオレを含め、全ライダースピリットでアタック!!」

「ヒツヒツ.....無駄さ、蘇った4体の幼体でブロック!!」

一切攻撃を仕掛けるトウエンティ。そしてそれを阻むデストロイアの幼体。

スパークリングフォームはドリル状の武器を振り、
キバは鋭い爪で、

ゴリラモンドフォームは巨大な拳で、

ジオウに変身したトウエンティは跳び蹴りでそれぞれ1体ずつデストロイアの幼体を対処していった。

「よし!!これでまた全滅だ!!」

「ターンエンド……」

アスラ手札：4

トウエンティ手札：2

場：【仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム「2」】LV1

【仮面ライダービルド ゴリラモンドフォーム】LV1

【仮面ライダーキバ キバフォーム】LV1

【変身!!仮面ライダージオウ】LV2 (3)

【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

バースト：【無】

デストロイアの殲滅を完了させたトウエンティはアスラの合意も聞かぬままそのターンをエンドとした。

次はダストのターン。デストロイアを殲滅させられたにもかかわらず、その表情は未だに余裕があり……………

「ターン09」ダスト

「メインステップ……………証明してあげるよ、デストロイアをいくら破壊しても無駄だった事をね!!」

ー!!

アスラとトウエンティにそう告げながら、ダストは手札のあるカードを引き抜き、それをBパッドに叩きつけた……………

「このカードは召喚する際、トラッシュにあるデストロイアスピリットを7枚まで手札に戻し、戻したカード1枚につき1コスト減らす!!……………僕ちゃんはトラッシュの5枚の

デストロイアを手札に戻し、このカードの召喚コストをマイナス5にする!!…ネクサスのシンボルと合わせて1コストでこのカード、完全生命体デストロイアをLV1で召喚!!」

┆【完全生命体デストロイア】LV2(1)BP8000

トラッシュからデストロイアのカード達が舞い戻る。それと同時に完全体のデストロイアと全く同じ姿をしたスピリットが翼を広げてフィールドに現れた。

「そして手札から幼体を4体召喚!!」

┆【デストロイア(幼体)】LV1(1)BP1000
 ┆【デストロイア(幼体)】LV1(1)BP1000
 ┆【デストロイア(幼体)】LV1(1)BP1000
 ┆【デストロイア(幼体)】LV1(1)BP1000

「また復活………」

「トラッシュユからカードを5枚回収した挙句大型スピリットを1コストで召喚!?……………これじゃ何度破壊してもあのスピリットを倒せないじゃない……………」

「またしても全く同じ光景……………アスラとエールは何度倒しても蘇ってくるデストロイアに驚愕する。」

「まだまだ!!……………さらに僕ちゃんは幼体の効果発揮!!……………4体のデストロイア・幼体を破壊して、完全体を召喚!!」

1 【デストロイア（完全体）】 L V 3 (5) B P 2 0 0 0 0

集合し、密集していくダストの4体のデストロイア・幼体。

それらは結集、合成を果たし、再び完全体の姿となった。これにより、「完全体」と「完全生命体」……………類似性のある2体がダストの場に並んで……………

「……………全く同じスピリットが2体かよ!?!」

「ヒツヒツ……………そしてトウエンティ!!……………君にはこれをプレゼントだ!!……………この一撃を耐え

られるかな??:…手札からマジック、ゴッドブレイク!!」

「……!?!」

「この効果でカードをドロー……さらに相手の創界神ネクサス1つを破壊する!!……君の変身は解除させてもらおう!!」

「なんだと!?!」

「ヒヤアツハツハツハツハツハ!!……死ぬトウエンティ!!」

刹那。

ジオウに変身したトウエンティの周囲にいくつもの光球が出現。それらはトウエンティに吸い付くように直撃して行き、大爆発を引き起こした……

「ぐっ……ぐあああああ!?!」

「トウエンティ……!!」

バリアが身を守るバトルダメージとは違い、そのまま身体に影響を及ぼす一撃はアスラの達の想像を絶する。

余りのダメージによりジオウの変身が解ける。倒れそうになった身体をどうにかし

て振り立たせるが、足元はフラついており、今まで以上にダメージの影響を受けているのが一目でわかる。

「創界神を破壊するなんて……………」

「トウエンティ!!!…おい、大丈夫かよ…トウエンティ!!!」

「だ、黙れ……………まだオレは負けてない…………!!!」

「ヒュー…頑張るねーリスクのあるデツキを使い続けて、変身を強制解除に追い込まれてもまだ立ち上がる。でも良い加減限界でしょ?」

ゴッドブレイクの効果に驚愕の言葉が漏れるエール。アスラはトウエンティの事にかかるが、トウエンティはゴッドブレイクの痛みとジオウデツキの多用による痛みを堪えながら彼に悪態をついた。

そんな中、ダストはその光景を嘲笑うかのようにBパッドのデストロイアのカードに手を当てて……………

「でもそろそろ引導を渡してあげるよ……………そして君のジオウも僕ちゃんの物だ!!……………アタックステップ…完全生命体デストロイアでアタック!!…さらにフラッシュタイミン

グでマジック、フレイムテンペストを使用!!…ソウルコアの力を使い、BP7000以下のスピリット……つまり君のライダースピリットは全滅する!!」

「ッ!!」

アタックを仕掛ける……

完全生命体デストロイアが走り出すと共に炎の竜巻がトウエンティのライダースピリット達を取り込んでいき、それらをたちまち焼き尽くして見せた。フレイムテンペストへRはソウルコアさえ使えばBP7000以下のスピリットを壊滅させる強力なマジックカード。

「アタックは継続中。さらに2体のデストロイアはダブルシンボル!!…残りライフ4つの君らは終わりだあ!!」

トウエンティの場を一掃し、勢いづくダスト。しかし、トウエンティは極限の状態の中でカウンターとなるカードを手札から引き抜いて……

「……ッ……フラッシュマジック、ブリザードウォール!!」

「!?」

「この効果によりこのターン、オレのライフはアタックによって1つしか減らされない!!」

吹雪の壁がトウエンティとアスラを覆う。これより少なくともこのターンでの敗北は免れなが……

「だけどーでもダメージは食らう……行け、完全生命体デストロイア!!」

「くっ……ライフで受ける……ぐあああ!?!」

「ぐうっ!!」

へライフ4??3へアスラ&トウエンティ

完全生命体デストロイアは、吹雪の壁に恐る事なく、頭部の一角を突き出しながら突進して行き、トウエンティとアスラのライフを1つ貫いて見せた。

伝播し合い、互いにダメージを受けるアスラとトウエンティ。その中でもトウエンティはジオウの使い過ぎやゴッドブレイクによるダメージが残る中での一撃であった

ため、もはや瀕死寸前である……………

「ヒツヒツ…思いの外粘るな…：…僕ちゃんはこれでターンエンド」

手札：1

場：【デストロイア（完全体）】LV3

【完全生命体デストロイア】LV1

【偽りの地下帝国】LV1

【妖星ゴラス】LV1

【ゴッドブレイク】

バースト：【無】

そのターンをエンドとしたダスト。この宣言とともにトウエンティの放ったブリザードウォールの吹雪が静まり返った。

次はアスラとトウエンティのターンだが……………

「ターン10」アスラ&トウエンティ

「ドローステップ!!……ドロー!!」

「……………ハアツ…ハアツ…………ド、ドロー……………」

「ツ!?!……トウエンティ!?!…おい、トウエンティ!?!」

ドローステップを行った直後、トウエンティはこれまでの蓄積されたダメージによって遂に身体が限界を迎え、地面に横たわってしまう……………

「くっ……………身体が……………!!」

「ヒヤアツハツハツハツハツハ!!……………やっとくたばったか!!……………終わりだね!!」

その光景を目に移しながら、自身の勝利を確信するダスト。

だがそんな彼の目の前に立ち塞がるのは、当然トウエンティでも無く、この世で最も最弱の設定を持つ少年だった……………

「まだだ!!……………オレ達はまだ諦めてねエエー!!」

「ああ?…何まだいたのおチビちゃん。ソウルコアも使えない君に何ができるって言うのヤ」

最後まで勝負を投げないアスラ。ダストの前に立ちはだかつて見せる…………

「…………や、やめろ…………オレがいつオマエに助けろと言った…………」

立ち上がる力を失くしたトウエンティがかすれた声でアスラにそう言った。おそらく彼にとつて誰かの手助けを受ける事は恥同然なのだろう。

「オマエの合意なんて知らん!!…………オレが助けたいから助けるんだ!!…………オマエがそれをイヤだつて言うなら寝てないで立てよ!!」

「ツ!!…………ふざけるな…………ツ!!」

ジオウデツキによるダメージと、ゴッドブレイクによるダメージが蓄積され、立つにも立ち上がれないトウエンティ。不本意にアスラに助けられると言う苦渋を噛み締める。

「改めてオレのメインステップ!!」

アスラはそんなトウエンティを他所に、再びチーンシークエンスを再開させ、メインステップに入る。ユキカイ町の人々を守るため、そしてさらにはトウエンティを助けるために溜め込んでいた手札をここらでようやく解消させていく……

「ドラゴンヘッド2体を連続召喚!!……そして来い、龍騎サバイブツ!!」

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

┆【龍騎サバイブ】LV3(4)BP13000

頭部と翼のみの竜と赤きライダースピリット、龍騎が現れる。

龍騎はベルトからサバイブのアドベントカードを引き当て、それを変化させた龍の頭部を模したショットガン状の武器に装填……

……サバイブツ!!

と言う音声と共に、その姿は一瞬にして一変し、強化形態、龍騎サバイブと化した。

「出た!!アスラの龍騎サバイブ!!」

「つしやあ!!……今回も頼むぜサバイブ!!」

「ヒツヒツ……このご時世に通常召喚しかできないスピリットが最強カードだなんてね」

龍騎サバイブの登場に期待が募るエールとアスラ。だがダストは自身で踏み倒しができないであろう龍騎サバイブを見るなり嘲笑った。

アスラはそんな言葉には耳を貸さず、己のターンをさらに進行させる。

「アタックスステップだ!!……行け、龍騎サバイブ!!…効果で完全生命体デストロイアを破壊だ!!」

「!!」

龍騎サバイブは手に持つ銃から烈火の弾丸を放つ。完全生命体デストロイアはそれに直撃してしまい、爆散してしまう。

「この時、龍騎サバイブに赤のシンボルが1つ加算され、ダブルシンボルとなる!!」
「だからどうした!!……たかがBP13000!!……BP20000もあるデストロイア・完全体の敵じゃないよね?」

龍騎サバイブのアタックに対してデストロイア・完全体をぶつけて来たダスト。

そのBP差は実に7000。そう安易に超えられるモノでは無い。

デストロイアが口内から紫の炎を放出。龍騎サバイブはたちまちその炎に飲み込まれてしまう……

「フラッシュマジック、ソードベント発動だ!!」

「なに!?!」

「この効果で龍騎サバイブのBPを5000アップさせ、デストロイア・完全体のコア2つをリザーブへ送る!!」

ー【龍騎サバイブ】BP13000?18000

「……………デストロイア・完全体のLV2BPは15000……」

「[デストロイア(完全体)](5S??3S) LV3??2

ソードベントの影響で龍騎サバイブの銃口から短剣が伸びる。龍騎サバイブは銃剣と化したそれに烈火の炎を纏わせて横一閃。炎の飛ぶ斬撃を放つ。

その斬撃は空と紫の炎を斬り裂き、最終的にはデストロイア・完全体をも真つ二つに斬り裂いて見せた。

「そして龍騎サバイブがアタックしたバトルの終了時!!…龍騎サバイブのシンボル1つにつき、敵ライフ1つを破壊する!!」

「ツ……貫通効果!?!」

「ああ、龍騎サバイブのシンボルは赤の2つ……よって2点のダメージだ!!…行け龍騎サバイブ……メテオバレットツ!!」

龍騎サバイブはベルトからアドベントカードを1枚引き抜き、それを武器である龍の頭部を模したショットガンに装填……

………シュートベント!!

と無機質な音声が流れると、咆哮と共に赤き武装龍が姿を現し、アスラの前方、龍騎サバイブの背後へと身を置いた。

そして龍騎サバイブは銃から深紅のレーザーを、赤き武装龍は口内から爆炎の炎を放出。それらはデストロイアの破壊による爆発の爆煙を挟み取り、瞬く間にダストの元へと飛び行き………

「ぐっ!?!」

〈ライフ5??3〉ダスト

そのライフに傷を付け、一気に2つを粉々に砕け散らせた。

「つしやあ!!……ソウルコア無しの一撃はどうだコノヤロー!!」

ようやく5からズレてくれたライフ。勢いづくアスラがガッツポーズを見せながら
そう叫んだ。

しかし、ライフダメージを与えたとは言え、またしてもデストロイア・完全体を破壊
した事に変わりはなくて……

「ヒツヒツ……いいよ、2つくらい必要経費さ!!……デストロイア・完全体の破壊時!!
……今一度来い、4体の幼体!!……そして、完全生命体デストロイア!!」

- ┆ 【デストロイア（幼体）】 LV1（1） BP1000
- ┆ 【デストロイア（幼体）】 LV1（1） BP1000
- ┆ 【デストロイア（幼体）】 LV1（1） BP1000
- ┆ 【デストロイア（幼体）】 LV1（1） BP1000
- ┆ 【完全生命体デストロイア】 LV2（3） BP12000

「ツ!?!……今度は幼体だけじゃなくてあのデッケエのも復活しやがった!?!」
「ヒツヒツ……コイツもデストロイアだからね!!」

魑魅魍魎、百鬼夜行……………

そんな物騒な言葉でしか言い表しようが無いデストロイア軍団。復活を果たす事に強化されている節がある。

「くっ……………ターンエンドだ……………」

アスラ手札：1

トウエンティ手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000(回復)

【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000(回復)

【龍騎サバイブ】LV3(4)BP13000(疲労)

【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV2(1)

バースト：【無】

「ハアツ…………ハアツ…………これでわかったただろゴミ以下。オマエじやヤツには勝てん」

「トウエンティ…………立ち上がったと思っただら何勝手に決めつけてんだ!!…………オマエもだろ
うが!!」

トウエンティは息を切らしながらも何とか立ち上がって見せた。

しかし、その身体は今にでも朽ち果てそうなくらいボロボロであり、立っているのが不思議なくらいだ。そんなトウエンティの言葉はアスラからしたらどう見ても強がっているようにしか見えなくて……………

そんな彼らの様子見たダストは「そうじゃなきや面白く無い」と不適に呟きながら己のターンを進行させて行つた……………

「ターンー」ダスト

「メインステップ!!…………マジック、ツインフレイムを使い、ドラゴンヘッド2体を焼く

!!

「!!」

放たれた2つの火炎弾が上空で翼を広げて佇む2体のドラゴンヘッドを撃ち抜き、爆発させた。

これでまたアスラとトウエンティの場にはブロッカーと呼べるスピリットは消え失

せてしまい……………

「さあ!!これで本当に終わりだ!!…………アタックだ完全生命体デストロイア!!」

意気揚々と完全生命体デストロイアで攻撃を仕掛けるダスト。もうすぐ自分のコレクションが増えるのが心から嬉しいのだろう。

だがアスラはここでも決死のカウンターカードを1枚しか無い手札から引き抜いて見せて……………

「フラッシュマジック、ファイヤーウォール!!」

「っ!?!」

「効果で龍騎サバイブを破壊し、このバトルでアタックステップを終了させる!!」

龍騎サバイブが地面から吹き出して来た火柱に飲み込まれ強制的に焼却される。

「そのアタックはライフで受ける!!…………ぐっ、ぐうっ!!」

「ぐあああああ!?!」

へライフ3??1へアスラ&トウエンティ

「アスラー!!!」

完全生命体デストロイアが豪腕を活かしてアスラとトウエンティのライフを叩きつけ、破壊した。

強烈なダメージを前にアスラは膝を突き、トウエンティは本当に力尽きたように仰向けで横たわった。アスラの窮地に、エールは思わず声を荒げる。

そんな中、アスラは立ち上がりながら待機状態にあったファイヤーウォールの効果을 解決させる。

「ぐっ……ファイヤーウォールの効果でアタックステップは終了!!」

龍騎サイブを焼き尽くした火柱がフィールド全体に広がり、壁を形成。これにより、少なくともこのターンでライフがゼロにされる可能性は消え失せた。

「……………ターンエンド……………ふざけるなよオマエら!!…さつきから僕ちゃんの攻撃を何
度も凌ぎやがって!!…さつきとくたばれよ!!…さつきとオマエ達のカードを僕ちゃ
んに寄越せよ!!」

手札：1

場：【デストロイア（幼体）】LV1

【デストロイア（幼体）】LV1

【デストロイア（幼体）】LV1

【デストロイア（幼体）】LV1

【完全生命体デストロイア】LV2

【偽りの地下帝国】LV1

【妖星ゴラス】LV1

【ゴッドブレイク】

バースト：【無】

何度攻撃を仕掛けても倒れないアスラとトウエンティに激怒するダスト。その口か
ら漏れ出している言葉は彼の歪んだ性格を表しているかのようであった。

横たわっているトウエンティを見る限り、おそらくはアスラの方に強く意味が込めら

れているに違いない。

しかし、アスラとて守りきったとは言え絶体絶命の状況には変わりない。彼は切羽詰まった様子で横たわるトウエンティの方へ顔を向けると……………

「何やつてんだよ……………立てよトウエンティ……………!!」

そう告げた。しかし、今度こそ完全に力尽きているのか、トウエンティはその言葉に對して何一つ言葉を言い返せなかった……………

その様子を側から見ていたダストは滑稽だと言わんばかりに笑い飛ばす。

「ヒヤアツハツハツハツハツハ!!……………そりやそうだよな!?!…そいつを起こして協力してもらわないと、オマエの大事なライダースピリットが取られるもんな!!…ソウルコアが使えないオマエはそいつが無いとこの世界で生きていけない雑魚だからな!!」

……………違う。

ずっとアスラを見て来たエールは思った。アスラはそんな理由で誰かに助けを求めたりしない。

「ヒツヒツ……でも滑稽だよね……君もライダースピリットを持つてるからトウエンティに狙われてるんだろ??……いわゆる天敵じゃん。そんなヤツにしがみついてまで生きようとする気分ってどんな気分??」

意地汚い目つきでアスラを視界に映しながらそう告げて来たダスト。

そうだ。基本的にトウエンティを助けるメリットは、こんな状況で無ければ皆無に等しい。

だが、アスラは彼が言うような事は微塵も思っでなくて……

「オレは……頂点王になる」

「はあ!!……何言ってるんだオマエ!!……だから何!!……そいつを助ける理由にはならないよね……!!……しかもオマエみたいなクソ雑魚が頂点王になれる訳ないだろ??……夢は現実味を持って語ろうぜおチビちゃん!!」

「理由ならある!!……頂点王になるヤツは誰も見捨てたりしねえ!!」

「ッ!?!……」

放たれるアスラの振り絞られた怒号、覚悟。

その迫力にダストは思わずたじろぎ、半歩後退した。

頂点王なら、シイナ・メザならば決して誰も見捨てたりはしないと、考えているアスラは、元は善人だったであろうトウエンティをいずれ必ず救い出そうと自然に思い至っているのだ。

「……何度も言わせんな、立てよトウエンティ……オマエオレに言ったよな……『オレはオマエみたいに自分のためだけにバトルしてるんじゃない』って……カナさんのためなんだろう……じゃあオマエが負けたらカナさんはどうなんだよ……」

この町の人々のためでも、

オレのためでも……

もちろんオマエ自身のためでもない……

カナさんのために……

カナさんのために立てよトウエンティ!!!

立って戦えよおおおおお!!!

渾身とも呼べるアスラの決死の雄叫びが、壊れ切ったユキカイ町東ゲートに響き渡る。

そしてその声に反応するかの如く、トウエンティの意識が微かに蘇り、彼女の名を……愛する者の名を呟いた……

「……………カナ……………」

そうだ。

オレは決めたんだ。

この身がどうなろうと、例えオレ自身が魔王になろうとも……………

カナを守り抜くと!!!

「ターン12」アスラ&トウエンティ

「メインステップ……仮面ライダージオウを召喚」

1【仮面ライダージオウ】LV2(3)BP7000

トウエンティが手始めに召喚したのは、このバトルでは2体目となる仮面ライダージオウ。

「そんなに協力を望むなら力を貸せ、アスラ!!……トラツシュから龍騎サバイブを回収しろ!!」

「おう任せろ!!……マジック、コールオブロスト!!……オレはこの効果でトラツシュからスピリットカード、龍騎サバイブを手札に戻すぜ!!」

初めてアスラの事を名前で呼んだトウエンティ。アスラは彼の言葉に応えるように手札のマジックカードで龍騎サバイブを手札へと回収して見せた。

「はあ!? …だから何!? ……今更その程度の雑魚共でこの戦況を覆すつもりか!」

「ああ、容易だ。コイツを使えばな……いくぞ、煌臨発揮!! 対象は仮面ライダージオウ!!」

「ツ…何!? ……メインステップ中に煌臨だと!」

トウエンティのメインステップでの煌臨宣言。アスラでは動かすこともできないソウルコアがトラッシュユに送られる。

フィールドではジオウが大きめのライドウォッチのスイッチを入れ、ベルトのバックル部に装着し、それを時計の針のように回転させる。

その直後にジオウの背後から次々と様々なライダースピリットの銅像が立ち並ぶ。その数は実に20体。彼に奪われていないアスラの龍騎さえも何故か確認できる。そしてそれは黄金の箱に収容され、宙へ踊るように飛び交って行った。

アドベント!

COMPLETE!

ターンアップ!

CHANGE BEETLE!

ソードフォーム!

ウエイクアツプ!

カメンライド!

サイクロン、ジョーカー!

タカ・トラ・バツタ!

3・2・1!

シャバドウビタツチヘンション!

ソイヤツ!

ドライブ!

カイガン!

レベルアツプ!

ベストマッチ!

ライダータイム!

「煌臨!!」

………グランドタイム! !

クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイード!

響鬼・カブト・電王！キバ・デイケイド！

ダブル！オーズ！フォーゼ！

ウイザード！鎧武・ドラーイーブ！

ゴースト！エグゼイド！ビ・ル・ドー！！？！

祝え！ 仮面ライダー！！グ・ラ・ン・ド！ジオウ！

ー【仮面ライダーグランドジオウ】LV2（3）BP12000

ライダースピリットの銅像達を収容した20の黄金の箱は縮小され、ジオウに装備されていく。その箱の扉は開き、黄金でできたライダースピリットの仏像のような物体に変化した。

そして新たに誕生したのは仮面ライダーグランドジオウ。

ライダースピリットを続べると言われている仮面ライダージオウの新たな形態である。そんな凄まじきライダースピリットの登場にエールとアスラは驚愕しており

……

「す、すい……………」

「てか、召喚音声なっが!?!……しかもさり気なく龍騎いたし……」

「どうでも良いことだ……オレに力を貸せ」

「ツ……ああ!!……奪うんじゃなくて貸すんだっいたらいくらでも貸してやるぜ!!」

トウエンティは決してアスラを認めたわけではないし、認めたくもない。いずれ龍騎も奪うつもりだ。

しかし、彼のその異常なまでの執着心と諦めの悪さだけは不本意ながら理解したのと同時に、このバトルでは意地でも負けたくはないため、恥を承知の上で彼の力を借りたのだ。

全てはカナナのために……

「……何がグランドだ!!……ただ仏像を引っ付けただけじゃないか!!……僕ちゃんのデストロイアの敵じゃない!!」

「小物が……ライダースピリットの力を侮るな」

「こ、小物だと!?!」

ダストを煽るトウエンティ。彼は徐々にその余裕がなくなってきた。

そしてトウエンティはその進化したてのグランドジオウで一気に攻め立てる。

「アタックステップ……グランドジオウでアタック!!……そのアタック時効果により、オレはアスラの手札にある龍騎サバイブをグランドジオウの煌臨元に追加する!!」

「えっ!?!……オレのサバイブを!?!」

発揮されるグランドジオウのアタック時効果。右腕にある龍騎の仏像をタッチすると、光に包まれながら龍騎サバイブの龍を模したショットガン状の武器が現れ、グランドジオウはそれを固く握り締める。

「龍騎サバイブの武器!?!」

「ああ、グランドジオウは全てのライダースピリットのアタック時効果をコピーできる……ここでは龍騎サバイブのBP15000以下のスピリット1体を破壊し赤のシンボルを1つ追加する効果をコピー……よって完全生命体デストロイアを破壊する!!」

「なにつ!?!」

グランドジオウが龍騎サバイブの武器から同様の烈火の弾丸を放つ。完全生命体デ

ストロイアはまたしてもその弾丸に撃ち抜かれて爆散してしまい、グランドジオウは一撃で2つのライフを破壊できるダブルシンボルと化した。

しかし、その一撃を通すにはまだ4体のデストロイア・幼体と言う大きな壁があり

.....

「ヒツヒツ……何だ破壊しても無駄だ!!……デストロイアは不滅!!何度でも蘇る!!」

「……………ああ、確かにな。散々やられて十分身に染みた……………だが、スピリットは不滅でも、オマエ自身は不滅ではない!!」

「ッ!?!」

トウエンティはこのタイミングでグランドジオウの第二の効果を発揮させる……………

「グランドジオウのさらなるアタック時効果!!……フラッシュタイミングで煌臨元にあるカード1枚を1コスト支払って召喚する事で敵ライフ1つを破壊する!!……オレは龍騎サバイブを1コスト支払いLV2で召喚!!……貴様にダメージを与える!!」

1【龍騎サバイブ】LV2(2)BP11000

「ツ!?!……煌臨元になったスピリットを再召喚!?!……ぐあつ!?!」

〈ライフ3?!?2〉ダスト

グランドジオウが追加で龍騎の仏像にタッチすると、今度は2002と書かれた黄金の扉が出現し、そこから龍騎サバイブが烈火の弾丸を発射しながら現れる。

その烈火の弾丸は幼体達をすり抜け、ダストのライフのみを破壊した。

「アタックは継続!!」

「ツ……幼体でブロックだ!!」

グランドジオウの道を阻むのは4体いるデストロイア・幼体のうちの1体。幼体は鎌のような腕でグランドジオウを八つ裂きにしようとするが、グランドジオウには通じず、逆に鎌の方が折れてしまう。

グランドジオウはその後、ベルトを回転させ……

……オールトウエンティタイムブ레이크!!

の音声が流れると共に飛び上がり、幼体に飛び蹴りを放った。幼体はたちまち爆散してしまふ……………

「ヒツ……………ヒビ……………これでアタックは終わり、次のターンで……………」

「次のターンはねえ!!」

「ツ!?!」

ここでダストの言葉を遮るように叫んだのはトウエンティではなく、アスラだった。

そう、次のターンなど無いのだ。トウエンティがアスラの龍騎サバイブを再召喚した時点で……………

「癪だが……………最後はオマエが決める」

「おう!!……………龍騎サバイブの効果!!……………ライダースピリットのバトル終了時、そのスピリットのシンボル分のダメージを与える!!」

「ツツ……………そ、そうかこのために……………」

……シユートベント!!

龍騎サバイブがシユートベントのカードを銃に装填すると、再び赤き武装龍が現れる。

「……いけ龍騎サバイブ……メテオバレットツツ!!」

「そんなウソだ……何かの間違いだ……この僕ちゃんが……この僕ちゃんが……うあああああ!!」

〈ライフ2?0〉ダスト

龍騎サバイブの銃口から放たれるビームが、赤き武装龍から放たれる火炎放射が、それぞれダストの最後のライフを破壊して見せた……

これによりレイドバトルは終了、ダストの敗北を告げるように「ピー……」と、Bパッドから無機質な音が流れてくる。

アスラとトウエンティは見事に不滅のダストに勝利して見せた。ダストは最後の凄

まじいバトルダメージを受けた事により気を失っている。

「つしやあ!!……どうだコノヤロー!!」

勝利に呼応するように雄叫びを上げるアスラ。単体での勝利ではなく、大半がトウエンティのおかげと言っても過言ではない勝負だったが、それでも勝てた事は嬉しかった。

そのトウエンティは敗北したダストに向けて手をかざす。すると、ジオウの力なのか、彼の懐に存在していたライダースピリットのカード達が、まるで強力な磁石に吸い込まれるかのように飛び行き、トウエンティの手の中に収まった……

「3枚か……これで12枚……!」

このバトルのみで一気に3枚のライダースピリットを手に入れ、遂に半分を超えた事に僅かながら頬を緩める。

後8枚だ。

後8枚あればカナを病気から救い出すことができる。

「へへ、よかつたなトウエンテイ！」

「ちよつとアスラ……よかつたつて……理由はどうかあれ、コイツは人のカードを奪うようなヤツなのよ!？」

エールに説教じみた事を言われるアスラだが、「まあ良いじゃん良いじゃん!」と言って聞き流す。

「……オマエ、オレを助けた事……後悔するなよ……今日は引き返すが、オレはオマエの龍騎を常に狙っている事を忘れるな」

「おう!!……そんな時はいつでも相手してやるぜ!!……オマエも、オマエの夢のために頑張れよな!!」

「!？」

Bパッドを操作し、何も無い空間からワームホールを生み出したトウエンテイは別れ際にアスラに宣戦布告するが、何故か彼に「頑張れ」と言われた事により、若干だが動揺してしまう。

ライダーハンターズに入ってからというもの、恋人とは距離を置き、師には見限られたため、他の誰かに応援されるなど一度も無かったからだ。

「……………」

トウエンティはその後、無言でワームホールの中を潜って行った。そのワームホールは次第に縮小されて行き、アスラとエールだけがこの場に取り残された……………」

「アスラ……………テンドウにもうトウエンティには関わるなって言われたじゃない……………なんであんな応援するような言い方したのよ」

エールが半ば説教をするかのようにアスラに訊いた。

彼女はただ単に、誰これ構わず手を差し伸べようとするアスラが心配なのだ。

「めっちゃバカな事したっていうのはわかる……………でも頂点王は…シイナだったらきつと同じ事やったさ!!……………だって困っている人を放って置かないのが頂点王だから!!」

「アスラ……………」

「へへー……オレは結局、トウエンティと違って自分の事しか考えてないんだよな！」

アスラはエールに清々しい笑顔を向けながらそう言い返した。

自分はトウエンティみたいに他の誰かのために戦ったんじゃないやなくて、頂点王になりたい自分のために戦ったのだと……

エールには不思議とそのアスラの言葉がどこか重たく感じていて……

「っしやあ!!……暗めの話はこれで終わりだエール!!……今はあのヤローを縛り上げるぞ!!」

「ッ……そ、そうね」

切り替えの早いアスラ。バトルダメージにより気を失ったダストの方へと首を向けるが……

そこにダストは存在しておらず……

「ええええええ!!……消えてるうう!!」

「まさか逃げられた!!」

ダストは彼らのやり取りの中で密かに意識を取り戻し、逃走していたのだった

……

……

「ハアツ……ハアツ!!」

ここは東ゲート側、ユキカイ町の外、バトルに敗北したダストは息を切らしながらも全力で走っていた。

「あんな連中に僕ちゃんか負けるわけがない!!……そうだ、このダストロイアさえあれば何度だってやり直せる!!……ヒツヒツ……トウエンティやあのクソチビに仕返ししてやる!!」

「むえ〜」

「……そうそう、むえ〜……つてなんだオマエはあ!?!」

「むえっ」??よっ!

トウエンティとアスラに復讐を誓うダストだったが、その直後にいつのまにか自分の肩に乗っかっているオレンジ色の犬みみたいな小動物一匹を認識してしまう……………それは紛う事なきムエだ。

……………

「あのヤロー……………どこ行きやがった!？」

一方アスラはエールと手分けして逃走したダストを捜索していた。残る体力も僅かであるため、正直しんどかったが、トウエンティだけじゃなくダストまで流したとなるとテンドウになんと言われるかわからないため、こうして極限まで振り絞って頑張っていた。

そんな彼は今、若干雪が積もっている風原の中を歩いているのだが……………

……………むええええええ!!!

「っ!!…………この鳴き声……………」

突如として耳覚えのある鳴き声があすらの耳の中に入って来た。

あすらはムエに何かあったのだと思い、その声のする方へ全力で走った。

そんなに遠く離れてはおらず、意外にも4、50メートル程で到着した。そしてその先であすらが目にした光景は……………」

「ムエ!!……………」

「むえ☒…むえ♪…むえ♫…むえ♪…………むえ☒…むえ♪…………むえええええ!!」??勝利の雄叫び

「え……………ナニコレ」

あすらの目に映ったのは再び気を失って横たわったダストの姿に、まるでそれを自分が討伐したのだと自慢するかのように勝利の雄叫び??をあげるムエの姿だった……………」

その意味深な光景に、あすらは言葉を失った……………」

「まさかムエがやったのか??……………いや、まさかな……………」

お仕置きと言わんばかりにアスラの頭を鷲掴みにして来た。怒りの化身と化したテンドウは凄まじい握力は凄まじく、アスラの頭はみしみしと音を立てる……………

「…………それと、全部知ったんだってな…………アイツの事情」

「ツ!?!」

今度は鷲掴みにした頭を離しながら、そう言葉を漏らしたテンドウ。

彼としても複雑ではあるだろう。妹の病気を治すために悪事を働く弟子をこの手で捕らえなければならぬのだから……………

「アイツの裏にいるウィルとか言うちよび髭シルクハットには何かある。トウエンティに関わるっつゝ事はそれと関わるのと同じだ」

「…………でもオレ…………アイツは放って置くことなんてできません!!…………いつか必ず救ってやりたい!!」

「…………何オマエ、オレに逆らうの?…………殺して良い?」

「ええええええ!!」

テンドウの前で堂々と宣言するアスラ。トウエンティの事情を知った今、立ち止まるわけにはいかないのだろう。

その決意を聞いたテンドウは再びアスラの頭を再び握りしめようと見せかけて手を「ポンツ」とその上に置くと……………

「……………オマエはオマエの夢だけ見てりやいい……………バカだからな」

「……………??」

テンドウがアスラに掛けた一言は励まし、激励にも聞こえなくもないが、彼をトウエンティ含めたライダーハンターズと関わらせたくない気持ちが見えろ一言だった。

こうして、様々な感情が複雑に絡み合ってしまったこのユキカイ町襲撃事件は、多くの謎を残して行きながらも、ダストの逮捕に成功し、形としては解決したのだった……………

「あ〜あ……………ダストちゃん捕まっちゃった!!……………これでもう刑務所行きでおわおわの

おわじやない。結構気に入ってただけどなく…お粗末様」

今までの一連の騒動の引き金でもあり、尚且つそれらを遠くから視認していた2人のうちの1人、ライダーハンターズの絶世の美女が黒くて長い髪を指でくるくると回しながらそう呟いた。

言動が適当である事から察するに、ダストは捨て駒としてしか見ていたのがわかる。

「結果的にトウエンティを強くしちやつた気がするけど……まっそれはよしよしのよ
しって事で!!……そんなじゃ帰るわよオロチ」

「ああ……へっ……ソウルコアが使えないガキにオメガの片割れ、やっぱ面白れえライン
ナップじゃねえか」

もう1人の茶髪で筋肉質な男性、オロチがそう呟いた。

「……………いずれ殺して……奪ってやるよ、その力をな……」

「別に殺すのは勝手だけどさくあ……奪ったライダースピリットは私にプレゼントして
よね!!……アンタはライダースピリット使えないし、ウィルに願いを叶えてもらう事に

も興味無いんだからさ！」

「ああ……構やしない、オレは戦えればそれで良いからな……ところでイバラ、オマエあの主任に何を叶えてもらうんだ……？」

「あら何??……私に興味があるのかしらオロチ」

ライダーハンターズの絶世の美女の名は『イバラ』……

オロチはトウエンティの願いは知っていたが、彼女の願いは知らなかったので、興味本心でさり気なく聞いてみた。

「割と言ったとは思っただけどね……私の願いは永遠の若さ……ただそれだけよ」

ライダーハンターズはオロチが願いを叶える事に興味がないため、実質トウエンティとイバラの1on1である。

トウエンティはカナのため、イバラは自分自身のため、今日も誰かの大切なライダースピリットを力づくで奪い去っていく……

20コア 「三王VSカラーリーダー!!凄まじきガンダム!!」

アスラ達の旅は続く。

ダスト・トラッシュ、不滅のダストが巻き起こしたユキカイ町での一件も熱りが冷め、ようやくアスラ達は4番目の町を指して歩を進めていた。

今はその道中にある小さな村に身を置いている。その村の名前は「トッチュ村」と呼ばれ、ユキカイ町と4番目のカラーリーダーの待つ町である「ライライ町」の間にあり、旅人達の疲れを癒す憩いの場のような村であった。

「お、おお……これが噂で聞いたプリン……!!」

「むえ〜!」??うまそう!

そんな小さな村の小さな喫茶店。そのオープンフロアにて、村の風景を楽しみながら、アスラとエール、ムエは食事をしようとしていた。

アスラが注文したのは何の変哲もない普通のプリンだ。彼は田舎者ゆえ、プリンとい

う極上のオヤツを見た事がなかった…………

「…………アンタホント田舎者なのね、プリンも知らないなんて」

エールが砂糖全開のコーヒーを口に濯ぎながらアスラに言った。なんだか偉そうだ。

「そりやもう…………オレとロンが育った村は国の隅っこにあるスーミ村だからなく…………
おお、歯応えねえ…………」

アスラはプリンの独特な食感を噛みしめながら答えた。

「てか、エールこそあんまりこう言うの知らないんじゃない??…………オマエあの堅物兄さんの言いつけであんまり外出られなかったんだろ？」

今度はアスラがエールに訊いた。

そう、エールは実の兄であるエレン・オメガに『煌臨できないオマエはエックスの、オメガ家の恥だ』と称され、基本的な外出を禁じられていた。

もちろんエレンはそんな事微塵も思ってはおらず、エールを閉じ込めていた本当の理由には単なる過保護なだけなのだが、彼の素直になれない性格のせいで、エールが今年で16歳になる年になっても今だに勘違いされたままなのである。

「人を箱入り娘みたいに言わないでよね。週一くらいでテンドウかシイナ様が遊びに連れてつてくれたわよ……………あと、カナさんもね」

「!!」

エールがそこそこの外の世界を知ることができたのは頂点王シイナとテンドウ兄妹のおかげと言っても過言ではなかった。故に、エールは彼らを実の兄と同等に慕っているのだった。

しかし、彼女の口から「カナ」の名前が出た瞬間、和んでいた場が一瞬にして凍りついた。アスラはトウエンティのライダースピリットを奪取し続ける理由を思い出した。

「……………カナさんの病気ってそんなに重かったのか?……………アイツがあんな躍起になる程」

「ええ、いつ危ない状況になるかもわからないんだって……………でも知らなかった、まさか

トウエンティがカナさんの恋人だったなんて」

恋人であるカナのために、トウエンティはライダースピリット使いを倒して回っていた。

エールはカナに恋人がいる事は常々聞かされていたが、まさかあのコラボダンジョンで初めて出会ったトウエンティだとは思ってもいなかった。

「まっ……堅っ苦しい事は考えててもしょうがないや。テンドウさんに『バカは自分の夢だけを見てれば良い』って言われたんだよな。だから先ずは頂点王になる!!……でもってそれが終わってからトウエンティを助ける!!……どうよ、我ながら良い作戦!!」

「ははっ!!……アンタらしいわね!!……流石バカの中のバカ、バカスラ」

「だから誰がバカスラだアアア!!」

「むえ〜」??日向ぼっこ〜

アスラの大雑把な目標に、エールは思わず笑ってしまった。

不思議な事に、アスラのこう言う誓いや掲げられた目標は達成できる気がしてならない。彼ならいつか必ず頂点王になってトウエンティやカナさんを救ってくれるとエー

ルは感じた。

そしてムエはテーブルの上でお日様の光で日向ぼっこしていた。

「それじゃ、さっさと次の町に向かうわよ!!……別に次の町が娯楽の町だからって理由じゃないんだからね!!」

「おう!!絶対4番目の黄色のカラーカードもゲットしてやるぜ!!」

徐々に普段通りの状態に戻っていくアスラとエール。

その昂ったテンションを次の町まで歩き行く力に変えようと喫茶店を出ようとするが………

その瞬間だった。村人だか旅人だかの男性2人の声が耳の中に入ってきてしまったのは………

「おい、聞いたか!?!……このトツチュ村のコロシアムでカラーリーダーと三王がバトルするんだってよ!!」

「えっ……やべえ……今すぐ向かおうぜ!!」

ー!!

この世界で最も栄誉ある職種とされるカラーリーダーと三王。何とその両名の各一名がこの村でバトルすると言う情報だった。

村人中の人々がそのコロシアムに向かっている事から、その情報の信憑性の高さが窺える。

「マジか!!……オレ達も行ってみようぜエール!!」

「言うと思った……ま、まあ、アンタがそこまで言うなら一緒に行つてあげなくもないわ!!」

「ええ!?!…なんで偉そうなのお!?!」

「フン……私はエックスよ?」

「……………久し振りに聞いたぞその決まり文句」

「むえく!?! let's go!

この国の強者同士のバトルだ。アスラが食いつかないわけがない。

ムエもどうやらそのバトルが気になるようであり、アスラの頭の上に飛び乗りながら

let's goと言わんばかりに短い前脚を突き出した。

そのが2人と1匹は村人達を辿るように村のコロシウムへと足を運んだのだった

.....

.....

ここはトツチコロシウム。オウドウ都やその周辺の大きな町などと比べると大したサイズではないものの、村人500人程は余裕で収まる。

その中の一角にアスラとエールはいた。

今は一眼見ようと集まった大勢の村人達や旅人達と共に噂の三王とカラーリーダーを待つだけだ。

「カラーリーダーは誰かはわかんねえけど、三王側はテンドウさんじゃねえかな?…昨日までずっと一緒だったし」

「うーん。テンドウ、こういうところでバトルするのは性に合わなそうだけどね……かと言ってお兄様だとちよつと気まづいしなー」

「エールは実の兄、エレンに『二度と顔を見せるな』とまで言われた別れ際の事を思い出していた。」

「じゃあ最後の一人、デジタルスピリットの三王かもな!!……楽しみだぜ!!」

アスラは元気よくそう言った。

三王とは、この世界においての世界三大スピリットである「ライダースピリット」「デジタルスピリット」「モバイルスピリット」で分けられている。

テンドウならライダースピリット、

エレンならモバイルスピリット、

当然ながらデジタルスピリットの使い手の三王もこの国に存在することになるのである………

しかし………

「ああ、それはないわ。今デジタルスピリットの三王はいないの……10年くらい前はお母様が三王だったけど死んじゃったし」

「!!」

エールは割と衝撃的な内容をサラリと口にした。

そう、エールの母である「エレナ・オメガ」こそ、この国の三王であったが、とある事件で死去。彼女に代わるデジタルスピリットが現れない事と、そもそもカラーリーダーを全員倒せない人物が多すぎることもあり、今現在、この国のデジタルスピリットの三王は空席なのである。

「……な、なんかごめんな」

「なんでアンタが謝るのよ……別にどうでもいいわ。アンタも親いないんでしょ」

嫌な事を思い出させてしまうような発言をしてしまった事を反省するアスラ。

エールとて、母がいない事は気にはしていない。かれこれもう10年以上も経つのだ。母といった時間よりシイナやテンドウと居た時間の方が遥かに長い。

エールはとにかく今を大事に生きていたかったのだ。

そんな時だ。観客と化した大勢の村人や旅人達の声援と言う名の轟音が飛び交い始めたのは……

アスラとエールは遂にカラーリーダーと三王が来たのだと推理してスタジアムの中
央へと首を向けた……………

そしてそこに居たのは……………

「まさかこのタイミングでアンタに下克上する事になるなんてな!!……………三王、エレン・オ
メガ!!」

「黙れ元レア。エキシビジョンマッチとは言え容赦はしない。その身に余の強さを刻む
が良い」

「あつ!!ヘラクレスさん!」

その光景に思わず大きな声を上げるアスラ。

それもそのはず、目の前にいたのは予想していたエレン・オメガに加えて緑のカラー
リーダー、ヘラクレスも居たのだから……………

そんなヘラクレスとエレンもアスラの大声で彼らの存在に気づいて……………

「お久し振りでエエエーす!!」

「うん?……………誰やこのブサイクチビ」

「スーミ村のアスラつすよ!?………忘れたんすかアアアー!!………あんだだけ良いバトルしたのに!!」

「ハツハツハツハツハ!!……オレは男の顔は1日と覚えへんからな!!………おつ、エールちゃん久しぶりいゝゝゝ元気だった?………今日も可愛ええね!!」

「………キモツ!!」

アスラは覚えていないが、エールの事はきつとりと覚えていたヘラクレス。目をハートにしてエールに言い寄るが、エールはそれを一言で一蹴して見せた。

「スーミ村のアスラに、エールか………」

「お、お兄様………」

「二度と顔を見せるなど告げたはずだ。何故こんなところにいる」

「す、すみません………ただカラーリーダーと三王のバトルが観てみたくて………」
「相変わらずいけすかねえ兄貴だな」

実の妹であるエールと目が合うなり冷たい言動を取るエレン。その表情も冷酷の一言で表せる程だ。

しかし……………

(なんでエールがここにいるんだアアアー!!!)

と、本当は内心で凄まじく焦っている。彼としては三王として単にカラーリーダーの実力を測るためのエキシビジョンマッチに來ただけだったのだ……………

ただそれだけであつたと言うのに偶然とも言える確率でエールと出会ってしまった……………

(相変わらず可愛い……………流石は余の妹、そして冷たい態度取つてすまない。お兄ちゃん
は本当はオマエを愛しているのだ。許してくれ……………て言うかここにいてるつて事
はあのドブネズミは白のカラーリーダーゴゴ・シラミネを突破したと言うのか!?!……………
くっ……………ますます腹が立つあのコモンめ……………さつさと負けて諦めれば良いものを
……………そうすればエールはオウドウ都に帰つて来てくれると言うのに……………)

冷静な表情を他所に心の中で思考を張り巡らすエレン。本当にエールが大事であり、彼女の横にいるアスラが目障りではないようである。

「ヘー……エールちゃんの兄貴は三王のエレンやったんか、初耳や………ハッ!!
……つまりこのバトルで勝ったらワイとエールちゃんの交際を認めてもらえる!!」
「……な訳ないでしょ」

エレンとのバトルに勝利すればエールと交際できると錯覚するヘラクレス。エールは冷静な口調でそれを全力で否定するが………

!!
（な、なんと………この軟派な男、余のエールを狙っているのか?!………ゆ、許さん!!）

エレンはエールを狙うヘラクレスに対して密かに怒りの感情を募らせる。

!!
「さあお義兄様!!……ワイとエールちゃんの交際を賭けてバトルや!!……まけへんでえ!!」

「フン……軟派な男め、余の強さを軽んじた事、後悔するが良い!!（エールのために貴様はこの場で余がぶち殺す!!）」

……ゲートオープン、界放!!

アスラとエール、100人近い観客達が見守る中、緑のカラーリーダー、ヘラクレスと三王エレンのバトルスピリッツがコールと共に幕を開けた……

……先行は三王、エレン・オメガだ

「ターン01」エレン

「メインステップ……先ずは母艦ネクサス、クサナギをLV2で配置する」

1「クサナギ」LV2(1S)

モビルスピリットのデッキにおいては必須レベルの強力カード、母艦ネクサスを早速背後に呼び寄せるエレン。宙に浮かぶ巨大な戦艦がヘラクレスに少なくないプレッシャーをかける。

「ターンエンドだ」

手札：4

場：【クサナギ】LV2（1S）

バースト：【無】

「ターン02」ヘラクレス

「さあメインステツプや!!…ワイもネクサスカード、大樹茂る天守閣をLV2で配置!!」

1 【大樹茂る天守閣】LV2（2）

ヘラクレスが初手で配置したネクサスカードは聳え立つ神城の天守閣を貫く大樹。

「バーストをセット………ほな、ターンエンドや………どっからでもかかって来いや」

手札：3

場：【大樹茂る天守閣】LV2（2S）

バースト：【有】

さらにバーストを伏せてそのターンを終えるヘラクレス。彼の表情は非常に自信に満ち溢れている。

「ターン03」 エレン

「メインステップ……余はこのスピリット、ストライクガンダムを召喚する……その際、クサナギはLV2効果で白のシンボルが3つとなり、全ての軽減を満たしての召喚となる」

「ストライクガンダム」 LV2 (2) BP6000

エレンの場に現れたのは彼を象徴するスピリットの1体、モビルスピリットストライクガンダム。白色をベースとしたそのボディの光沢が今日も光り輝く。

「召喚時効果、カードを2枚オープンし、その中の対象カードを手札に加える……」
「……………ストライクガンダムってあんな効果だったか？」

龍騎に似たような召喚時効果を持つストライクガンダム。エレンは新たにカードを手札に加える。しかし、以前ストライクガンダムを見たアスラは僅かながら違和感を感じていて……………

「相手の効果によって手札が増えた事によりバースト発動!!……………千枚手裏剣!!」

「!!」

ヘラクレスはエレンの手札が増えたタイミングを逃さない。すかさずバーストを反転させた。

「効果によりリザーブにコア2つを追加し、ストライクガンダムを疲労させるで!!」

およそ一千枚程の手裏剣がストライクガンダムに襲い掛かる。ストライクガンダムはそれに被弾してしまい、疲労する……………

かと思われたが……………

「甘い!!……………ストライクガンダムの効果【PS装甲:4以下】!!……………コスト4の千枚手裏

劍の効果は受けない!!」

千枚手裏劍は全く通じてはおらず、ストライクガンダムはそれら全てを強固たる装甲で弾き飛ばしていた。

「どうした元レア、その程度でカラーリーダーは務まらんど!!……アタックステップ!!
……ストライクガンダムで攻撃する!!」

強気に攻めに出るエレン。ストライクガンダムが拳を固めて戦闘態勢に入るが
……………

「この程度なわけないやろ!!……配置していたネクサス、大樹茂る天守閣の効果発揮!!
……デッキの上から1枚をオープン、それが殺人スピリットならノーコストで召喚でき
る!!」

「!」

「カードをオープン!!……効果は成功、成熟期スピリット、カプテリモンや!!……よってL

V2でノーコスト召喚!!」

1【カブテリモン】LV2(3)BP8000

大樹茂る天守閣の効果がここで起動。その大樹の中から甲虫型の成熟期スピリット、カブテリモンが飛び出してきた。

「すげえ!!…相手の攻撃に反応してスピリットを召喚した!!」

「気持ち悪いヤツだけど流石カラーリーダーではあるわね………」

三王のエレンが相手なのもあってヘラクレスが勝つと思っている人物は相当少ないはずではあった。しかし、その見事な豪運は流石カラーリーダーであると認めざるを得なくて……

「そのアタックはカブテリモンでブロック!!……返り討ちや!!」

ストライクガンダムに迫るカブテリモン。強靱な4本の腕でストライクガンダムを

驚掴みにして見せる。そのまま装甲事粉々に粉碎する気であるのだろう……

「返り討ち?……それは余のセリフだ!!」

「っ!?!」

エレンの威圧に思わず怯むヘラクレス。そしてエレンはストライクガンダムに眠るある効果を發揮させる……

「相手のスピリットがアタック、ブロックした事により、ストライクガンダムの『零転醒』を發揮!!……！コストを支払い、さらなる姿へ昇華させる!!」

「て、転醒やと!?!」

ストライクガンダムのカードを反転させるエレン。その裏側は別のカードの絵柄や効果テキストが光と共に出現していた。

フィールドではストライクガンダムがカブテリモンを蹴り飛ばし、その間に赤くて大きな盾とビームガンする。

「転醒により、ストライクガンダムの姿はエールストライクガンダムに変わる」

ー【エールストライクガンダム】LV1(1)BP5000

「な、なんだなんだ!?!……カードの裏側がスピリットカードに変化したのか!」

「あれは転醒……一部のスピリットが持つ稀有な効果……エレンお兄様のストライクガンダムはその稀有な存在の1つなのよ」

転醒するストライクガンダムに驚愕するアスラや周囲の人々の中、エールがそれを簡潔に説明した。

転醒……

それは煌臨とチェンジに並ぶスピリットの強化方法。特定の条件を満たすと裏側に新たなカードが現れ、反転すると共に状況を一変させる強力なカードだ。

「エールストライクガンダムの転醒時効果、ボイドからコア1つを追加し、このターンの間エールストライクガンダムのBPを5000アップ!!」

ー【エールストライクガンダム】LV1??2(1??2)BP5000??12000

「なんやと?!……マジックカードも無しにカプテリモンのBPを上回ったやと?!」

エールストライクガンダムの効果でその出力が上昇。ビームガンから赤色のビームを放ち、カプテリモンを撃ち抜く。カプテリモンは堪らず爆散してしまった……

「ターンエンド……カラーリーダー、三王たるもの、如何なる状況であっても冷静に対処しなければならぬ。その心情を刻むがよい」

手札：5

場：【エールストライクガンダム】LV2

【クサナギ】LV2

バースト：【無】

「はんつ!!……どこまでも上から目線かいな!!……これだからイケメンで高身分のヤツはムカつくんや!!……見とけよ!!……このバトル、最後に立つんはこのワイや!!」

エレンの転醒がヘラクレスのバトスピ魂に火を灯す。

彼はさらにやる気に満ちた表情を見せながらそのターンシークエンスを進行させていった……………

「ターン04」ヘラクレス

「メインステップ!!……………テントモンを2体連続召喚や!!……………そして効果でコアブースト!!」

1 「テントモン」 LV1 (2) BP2000

1 「テントモン」 LV1 (2) BP2000

てんとう虫型の成長期スピリット、テントモンを2体呼び出したヘラクレス。その効果で総合コア数も増加する。

「さらに増えたコアを使い、もう1枚ネクサスカード、アルバ大草原を配置や!!」

ー【アルバ大草原】LV1

ヘラクレスの足元を中心に緑の大草原が優雅に生い茂って行く。

「大樹茂る天守閣のLVを2に戻し、アタックステップ!!…2体のテントモンでアタックやで!!」

「ライフで受ける……………」

〈ライフ5??4??3〉エレン

2体のテントモンが体当たりしてエレンのライフを粉砕するが、エレンは痛みなどなかったかのように平然と立ち振る舞っていた。

「ターンエンド!!…さあ来いやエックスで三王の高スペック野郎!!…このヘラクレス様の才能をみせたるで!!」

手札：1

場：【テントモン】LV1

【テントモン】LV1

【大樹茂る天守閣】LV2

【アルバ大草原】LV1

バースト：【無】

「カラーリーダーに抜擢されたとは言え、貴様は所詮レア。余との格の違いをまだ理解できていないのか？」

「身分は関係あらへん!!……ワイはそのブサイクチビとそのライバルからそれを学んだんや」

エレンはそう言われてアスラの方を振り向く。

アスラのバトスピに対する熱意、頂点王を目指す情熱はロンをはじめ、様々な人々に伝播して行つた。このヘラクレスもまたそれに当てられたといふべきであろう。

しかし、エレンは叱責するようにすぐさま「愚か者め」と口ずさむと、己のターンを進行して行つた。

「ターン05」エレン

「メインステップ……余はこのスピリット、フリーダムガンダムをLV3で召喚!!」

ー【フリーダムガンダム】LV3（4）BP13000

ストライクガンダムよりも一回り大きなモビルスピリットが青き鉄の翼を羽ばたかせ舞降りる。その名はモビルスピリット、フリーダムガンダム。

三王エレンのエースカードだ。

「召喚時効果、貴様のテントモン2体をデツキの下に戻す!!」

「!!」

現れるなりビームサーベルを手に持ち、それを振るって突風を発生させるフリーダムガンダム。テントモン達はそれに抵抗もできず、粒子と化してデツキの下に強制送還されてしまった。

「アタックステップ!!……行くがいい、エールストライクガンダム!!……その効果でコア

を増やし、BPを5000上昇!!」

1【エールストライクガンダム】(1??2) BP5000??12000

エールストライクガンダムが背についているストライカーパックと呼ばれる飛行物を起動させて低空飛行で宙を翔ける。

狙うは当然今だに1つも破壊されていないヘラクレスのライフだが……

「大樹茂る天守閣の効果!!……カード1枚オープンし、殻人スピリットならノーコスト召喚!!」

「またその効果か、運頼みで超えられる程余は甘くはない!!」

「うっさいわボケ!!……見とけよ、ここからワイのバトルスピリッツやアアア!!」

気合を入れながらカードをドローするヘラクレス……

そしてそのめくられた運命の1枚は……

彼のデッキの強力なデジタルスピリット、アトラーカプテリモンであり……

「よし!!……効果成功や!!……来たれ、完全体、アトラークブテリモンツ!!」

ー【アトラークブテリモン】LV2(3) BPI3000

ヘラクレスが圧倒的な豪運で呼び寄せたのは赤き甲虫型のデジタルスピリット、アトラークブテリモン。巨大な体軀から放たれる奇声がその場の者達全ての耳を通過した。

「召喚時効果!!……相手スピリット2体を疲労させるか、疲労している2体のスピリットを手札に戻す!!」

「フリーダムガンダムには【PS装甲：コスト7以下】により、効果は効かぬ!!」

「んなもん百も承知や!!……コスト4以下のPS装甲しかないエールストライクガンダムを手札に戻させてもらおうで!!」

「っ!!」

アトラークブテリモンは登場するなり、その強靱な一角から赤き稲妻を解き放つ。それは瞬く間に宙を翔けるエールストライクガンダムにヒット。エールストライクガンダムは粒子と化し、エレンの手札に帰還してしまった。

「さあどないするエックスの三王様よ!!…そのモビルスピリットで相討ち覚悟の特攻でもかますか!」

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【フリーダムガンダム】LV3

【クサナギ】LV2

バースト：【無】

フリーダムガンダムを失うわけにもいかないため、ここはあっさりターンを終了させる三王エレン。ヘラクレスのカードバトラーとしての実力が彼にターンを終了させたとも例えられる。

ヘラクレスはこの機を逃すまいと一気に畳み掛けるべく、そのターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン06」ヘラクレス

「メインステップ!!……全てのカードのLVを最大にする!!……アルバ大草原はLV2の時、殺人スピリットを手札デッキに戻す効果から守る!!……これでお得意のバウンス効果は効かんで!!」

白属性しかないエレンのモビルスピリットデッキにおいて、アルバ大草原の効果はかなり刺さる。このカードの存在だけでヘラクレスはこのターンを強気に攻める事が可能になった……

「アタックステップ!!……行けや、アトラーパーカブテリモン!!」

「アタック時効果はフリーダムガンダムには通じんぞ!!」

「んなもんわかるわボケエ!!……その程度の壁、ワイのデッキなら余裕で超えられるわ!!」

ヘラクレスはエレンにそう叫びながら、手札にある1枚のカードを引き抜いて見せた……

「フラッシュ煌臨発揮!!……対象はアトラーパーカブテリモン!!」

「!!」

その正体は煌臨のカード。

デジタルスピリットで煌臨と言えば、あのカードしかない……………

「究極進化!!……………来たれ、最強のカブテリモン……………究極体、ヘラクルクブテリモンツツ!!」

―【ヘラクルクブテリモン】LV2（6）BP18000

アトラークブテリモンを中心に吹き荒れる竜巻。

その中で体をさらに肥大化させ、甲殻の色も輝かしい黄金に変わる。やがてその竜巻を気合だけで弾き飛ばしたかと思えば、そこには究極体、最強のカブテリモンの称号を持つヘラクルクブテリモンが存在していた……………

「うおおおお!!メチャクチャスゲー!!」

「カラー戦の時にはなかったわよねこんなカード……………これがヘラクレスの本気!!」

「せや!!これがワイのエースカードにして最強の切り札!!……ヘラクルカブテリモンや!!」

その存在に驚愕するアスラ、エール。そして周囲の観客達。そしてヘラクレスは煌臨した直後のヘラクルカブテリモンの効果を起動させていく……

「ヘラクルカブテリモンの煌臨時効果!!……煌臨元となったアトラーカブテリモンを手札に戻す事で、コアを3つこのスピリットに追加や!!」

アトラーカブテリモンのカードがヘラクレスの手札に舞い戻り、ヘラクルカブテリモンのカード上にコアが3つ追加された。

これだけでも十分に強力な効果であると言えるが、まだまだこんなモノではない。ヘラクレスはヘラクルカブテリモンのさらなる効果を発揮させる……

「ヘラクルカブテリモンの効果!!……このスピリットのコア3つを支払い、相手のスピリット1体を疲労させ、ヘラクル自身を回復させる!!」

ー【ヘラクルクアプテリモン】（疲労??回復）

「っ!!」

ー【フリーダムガンダム】（回復??疲労）

コストの支払いに伴い、雄叫びを上げるヘラクルクアプテリモン。その瞬間に突風が発生、その突風により、フリーダムガンダムは膝を潰してしまうが、逆にヘラクルクアプテリモンは回復状態となって見せた。

「ヘラクルクアプテリモンのコストは8!!……もうPS装甲は通じんで!!……アタックは継続や!!」

「ライフだ」

〈ライフ3??2〉 エレン

この状況でまだ冷静さを欠かないエレン・オメガ。ヘラクルクアプテリモンの攻撃をラ

イフで受ける宣言を堂々と告げる。

ヘラクルクブテリモンはその極太の腕で彼のライフを叩きつけ、それ1つを粉々に粉砕した。

「まだや!!……ヘラクルクブテリモンで再アタック!!……フラッシュ効果で3コストを支払い回復や!!」

ー【ヘラクルクブテリモン】（疲労??回復）

再びエレンに目を向けるヘラクルクブテリモン。その効果で今一度回復して見せる。

「エレンお兄様のライフはあと2つ……ヘラクルクブテリモンのアタックが全て通れば負ける!」

気負うようにエールがそう呟いた。エレンは彼女にとって唯一の肉親という事もあつてか、彼の負ける瞬間を見たくはないという思いがその言葉には込められていて

……

しかし、エレンもまた内心ではエールの前で負ける事は許されないと考えているため、手札にある1枚のカウンターカードを引き抜いて見せた……………

「フラッシュマジック、リミテッドバリア!!……………このターン、コスト4以上のアタックでは余のライフは減少しない」

「なに!？」

「さらにコストの支払いにソウルコアを支払った事により、貴様のネクサスカード1枚を手札に戻す!!……………余はこの効果で大樹茂る天守閣を手札に戻す!!」

「ぐっ!？」

「そのアタックはライフで受ける」

〈ライフ2??2〉 エレン

大樹茂る天守閣が手札に戻された挙句、鉄壁の防御を張られたヘラクレス。ヘラクレスのカプテリモンがいくら彼のライフを砕こうとしてもそれは傷一つ付かない。

「……………どうした?……………その程度、挑戦者には通じてても、三王たるこの余には敵わんぞ

……

「ぐっ……くそ、エンドや」

手札：2

場：【ヘラクルカブテリモン】LV1

【アルバ大草原】LV2

バースト：【無】

結果的にヘラクルカブテリモンをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとしたヘラクレス。

だが、彼の場には手札デッキに戻す効果を無力化するネクサス、アルバ大草原がある上、まだライフは全開の5。

全力の攻撃を仕掛けたとは言え、まだ余裕があった………
しかし………

「興奮めだヘラクレス………貴様とのバトルに付き合うのはここまでだ」
「なんやと!？」

まるで次のターンで勝利すると言わんばかりに宣言したエレン。

いくら最強の三王と言ってもそれは無理があると、その場の誰もが考えた。だが次のターン、その常識は覆る……………

「ターン07」エレン

「メインステップ……………先ずはそのネクサスから消す!!……………クサナギのLVを2に戻し、パーフェクトストライクガンダムをフル軽減で召喚する!!」

「!!」

「パーフェクトストライクガンダム」LV2(2S)BP8000

エレンの場に現れたのはまたしてもストライクガンダム。

しかし、その装備は剣やランチャー、ビームガンまでをも装備して見せたまさに完璧な装備を施したストライクガンダムである。

「召喚時効果!!……………貴様のネクサスカード一つをデッキの下に戻す!!……………消え去れ、ア

ルバ大草原!!」

「!!」

パーフェクトストライクガンダムは手に持つ剣を横一閃に振り、斬撃を飛ばす。それはヘラクレスのアルバ大草原を瞬く間に切り裂いて見せた。

これでヘラクルカブテリモンに与えられていた手札デッキに戻す効果の耐性は消滅。エレンはすかさずアタックステップへと移行し……………

「アタックステップ!!……………フリーダムガンダムで攻撃する」

フリーダムガンダムで攻撃を仕掛けるエレン。だが、誰が見てもまだこのターンで勝てる程の状況は確立されていないのがわかる。

しかし、エレンはその考えを覆してしまうようなとんでもない一手を手札から引き抜いて……………

「フラッシュエンジ……………フリーダムガンダム・ハイマツトフルバーストを発揮!!」

……………対象はフリーダムガンダム!!」

「っ!?……モビルスピリットがチェンジ!?」

「貴様の物差しでバトルを測るな!!」

その刹那。フリーダムガンダムは内包する武装全てを解放、強力な機関銃をいくつも展開して見せる……

本来、チェンジの効果はライダースピリットの十八番。しかし、ごく一部のデツキでも稀にその効果を發揮できるモノもある。それがこのエレンのストライクフリーダムデツキであり……

「この効果により、合計コスト40までスピリットを手札に戻す!!……消えろヘラクルカブテリモン!!」

「40までやと!?」

全武装から一斉射撃を行うフリーダムガンダム。ヘラクルカブテリモンはなすすべなくそれに撃ち抜かれ、粒子も化して手札に帰還してしまった。

「そして回復状態で入れ替える……バトルは継続!!」

ー【フリーダムガンダム「ハイマットフルバースト」】LV3（4）BP17000

全武装一斉射撃を今度はヘラクレス本人に向けるフリーダムガンダム。もちろん効果が手札に戻す効果のみなわけがなく……………

「ハイマットフルバーストの効果!!……………このターンの間、白のシンボル1つを追加する!!」

ー!!

「よってダブルシンボルとなり、一度のアタックで貴様のライフ2つをいただく!!……………食らうがいい!!」

「うおおおつ!!?」

へライフ5?!3へヘラクレス

自力でダブルシンボルとなったハイマットフルバーストの一斉射撃がヘラクレスを飲み込む。そのライフが一気に2つ碎ける……………

「まだだ!!……二発目エエエー!!!」

「…………ぐ、ぐおおおおつ?!」

へライフ3?!1へハラクレス

まだまだ攻撃は続く。ヘラクルクブテリモンに対する一撃含め、三発目の一斉射撃がヘラクレスのライフをさらに撃ち砕く。

「な、なんや…………このデタラメな強さ…………これが三王エレン…………」

三王エレンのあまりの強さに戦慄するヘラクレス。今まさにカラーリーダーとして、三王とカラーリーダーの圧倒的な力の差を認識していた…………

そして…………

「これで終いだ…………パーフエクトストライクガンダムでアタック…………!!」

「ツ…………はは、お見事、ワイの負けや…………!!」

へライフ1??0へハラクレス

パーフェクトストライクガンダムのビームガンから放たれる赤いビームが、お手上げだと言わんばかりに掌を上げたハラクレスの最後のライフを無慈悲にも撃ち貫いて見せた……………

ハラクレスのBパッドから彼の敗北を告げるかのように「ピー……」と無機質な機械音が流れる……………

「これが余のモビルスピリット、余のガンダムツ!!」

エレンの言葉に合わせ、2体のモビルスピリットが勝ち誇るように腕を組む。

これにより、勝者は三王エレンだ。アスラとエールを除く周囲の人々はその圧倒的な強さを見せつけての勝利に轟音という名の歓喜を上げた。

「流石やわ!!……………でも良いバトルやったさかい。またやるな!!」

「フン……………元レアと馴れ合う気はない」

「なんで!!……せつかくこのワイが珍しく男と仲良うしようちゆうんに!!……最後まで笑い笑えや!!」

彼に握手を求めるヘラクレスだったが、エレンはそれを拒否。寧ろ背を向けてこの場からすぐさま立ち去ろうとする……

「余は多忙の身。相手してやっただけ光栄に思え」

「なにい!?……やっぱ腹立つわアンタ!!……今に見ておれ、必ずそのふんぞり返った態度ぶっ壊してやるからな!!」

エレンはこの場から立ち去るが、本当のところ、「エールと同じ空間に長居はできない」と考えた結果である。彼は最後に自分の妹であるエールを名残惜しそうに視界に入れながら、このスタジアムから去ってしまった。

「お兄様……」

「メツチャつええ……アレがオレの超えるべき相手……三王か……」

エールもそんなエレンを視線だけで見送った。アスラはこのバトルで実感した三王エレンの実力をその胸に刻んでいた。

バトルが終了したことにより、イベントは終了。周囲の旅人や村人がぞろぞろとこのトッチュスタジアムを離れて行った……

「うおお!!…負けたったアアアー!!……親愛なるエールちゃん、今こそ慰めのハグをオオオオオー!!」

「やらないわよッ!!」

「ぐへえ!!」

一段落してから、エールに飛びかかるヘラクレス。エールはそれを思いつきりグーで殴り返り討ちにして見せた。

「ええやんけ一回くらい!!…ワイ結構頑張ったやん!!…お願い、この通り!!」

「フン…私はエックスよ、なんでアンタにそんな事しないといけないのよ」

どこまでも女好きな緑のカラーリーダーヘラクレス。エールに殴り飛ばされながらもまだまだ食い下がる。流石にここまで来ると逞しい……………

「ヘラクレスさん凄かったつす!!……………あのヘラクルカブテリモンもちよー強かったです!!」

「はあつ……………オマエの感想は聞いてないねん……………」

「えええええ!!……………テンション下がったアアアア!!」

逆にアスラが目をギラギラさせながらバトルの感想を言うと、男に褒められるのは嫌なのか、彼はテンションを下げってしまう。

「つーかブサイクチビ、ここまで来たつちゅー事はあの難関中の難関、ゴゴ・シラミネのおっさんを突破したんかいな?」

「ハイイイイ!!……………頑張りましたがまだまだです!!」

「ふー……じゃあ次はライライ町の黄のカラーリーダーか……………ワイ、アイツ苦手なんよな、男やし」

「えええええ!!?…男ってだけで!」

「もちろんそれだけやないで?…まっ、おうたらわかるわ、この上ないくらい面倒やから」

「アンタがそこまで言うなんてよっぽどなのね……………」

話しているうちに内容が黄のカラーリーダーの話に逸れる。

ヘラクレス曰く、少々変わり者が多いこの国のカラーリーダー達の中でも、黄のカラーリーダーは特に変人であるらしく……………」

「……………」と、言うわけでどーやエールちゃん。この国随一の娯楽が集まるライライ町で一緒に洒落込まへん?」

「なんでそうなるのよ……………」イヤよ、て言うかアンタは仕事以外でオオカブ町を離れたらだめじゃない」

「なんのなんの!!…エールちゃんとデートするためならばたとえ火の中!!……………」

あつ、最近あそこでつかい遊園地ができたんや…一緒に行かへん?」

「いいからさっさと帰りなさい」

会話のワンクール事にエールをナンパし続けるヘラクレス。それに対してエールは
 終始ツンツンしている。

その様子を見てヘラクレスは何か気に気がついたように「ハツ」と言葉を漏らすと
 ……

「わ、わかったで、エールちゃんそこまでこのブサイクチビとデートしたいんやな??…:
 ワイは邪魔者言うんかい」

「??…オレ?」

「っ?!?!…ち、違うわよ!?!…なんでこんなチビでバカで…:し、しししかもコイツはコモ
 ンよ!?!…:私はこの国で1番身分が高いエックス!!…つ、釣り合うわけないじゃない
 !!」

「なんかよくわかんねえけど、言われようがひでえ!?!」

ヘラクレスにそう言われて焦るに焦りまくるエール。

顔は真っ赤になって、滑舌も悪くなり、身体からは変な汗も流れて来た。実際アスラ
 と一緒に遊園地に行きたいのは確かなのだが、素直じゃない性格故になんとか誤魔化そ
 うとしているのがヘラクレスにはバレバレであり…:

そんなエールの気持ちなどつゆ知らず、アスラは彼女の方に顔を向けると……………

「その遊園地??……………つてのは知らねーけど、行けるならオマエと一緒にいきたいぞ!!
……………あつ、ついでにムエも」

「むえむえ〜」??行こ行こ〜

「………!!~~~~なつつつ……何言つてんのよこのバカスラアアア……!!!!」

「ぶわあああああー!!」

今一番言われたい言葉を他でもないアスラに言ってもらったエールだったが、気恥ずかしさが頂点を極めた彼女は思いつきアスラを殴り飛ばしてしまう。

ヘラクレスは地平線の先まで飛んで行ったアスラを見て、腹を抱えて大爆笑していた。

そんなこんなで、生まれながらにソウルコアが使えないコモンの少年アスラとエックスの名家オメガ家に生まれた少女エール……………あついでに謎のオレンジ小動物ムエの2人と1匹の旅はまだまだ続く……………

21 コア 「魅惑のピオランテ」

ここはとある場所にあるとある廃墟。

崩れ去った瓦礫の山々の上はトウエンティイライダーハンターズの隠れ家である。

「あらトウエンティイ、もうお仕事に行くの??……熱心ねー」

「……イバラか」

短めの銀髪青年、トウエンティイは次なるライダースピリット使いを狩りに赴こうと隠れ家を出ようとした直後、ねっとりとした声色の絶世の美女、イバラに呼び止められる。

「この間もあーんなにボロボロのボロ雑巾になつて帰つて来たのに、よくこんな短いパンで狩りに行けるわね……私なんかまだ4枚よ??……分けて欲しいものだわ」

「フン……だったら今ここで貴様のライダースピリットを狩つてやっても良い」

「あーあー……冗談冗談!!私があんたに敵うわけないじゃん」

どこか掴み所の無いイバラ。だがトウエンティは彼女のペースに流される事なく会話を進めて行き……

「あのダストとか言う無法者をユキカイ町に放り込んだのはオマエなのだろう?」

「っ?!?!…あ…あらあら、な、ななんの話なのかしらん?」

「知っているぞ。オマエは大勢の男共を従えている事をな」

ユキカイ町にてダスト・トラッシュという青年が巻き起こした襲撃事件。それを裏で操っていたのは他でも無いこのイバラのだが、トウエンティは驚異の感の鋭さでそれを見抜いていた。

イバラは突然の事に動揺し、冷や汗が止まらなくなる。

「……まあ良い……だがオレの邪魔だけはするな……さもなければ先ずはオマエから消す」

「もうトウエンティ物騒……言われなくても何もしてませーん」

トウエンティは脅すように宣言しながらこの場を去っていった。イバラはその背中を見ながら安堵するようにため息をついた。

「ふうく……危にやー危にやー……トウエンティに睨まれるとホントにオワコンのちゃんちゃんになりにかないわく」

この一瞬だけでトウエンティと言う人間が如何に恐ろしい人物なのかを理解したイバラ。余計な事をしたら本当に何をされるかわかったものではないと直感で悟る。

「……それにしてもあの坊や、敵であるトウエンティをあそこまで必死になって助けようとするなんてねく……結構面白かったわ」

イバラはユキカイ町で見物していたアスラとエールの事を思い出しながらそう言葉を漏らした……

特にアスラだ。

敵であるトウエンティをあそこまで必死に救おうとする姿は彼女にとって余りにも異常極まりないと感じていて……

「よし!!……せつかくだから遊んで来てあげましょ!!……うんうん、そうしましょ!!」
楽しみが増えた子供みたいな声を上げるイバラは、トウエンティに続くように廃墟を
去っていった……………

アスラとエールは次なる町、ライライ町へ向けて旅を進めていた。
しかし、今の時間帯は夜であり、2人はそれぞれ自分の小さなテントを立てて就寝
に付いていた。因みにこのテント2つを立てたのはアスラ1人だ。

「ううー……ううーむ……どうしたもんかな〜」

エールとムエが一緒のテントで就寝している中、アスラは1人自分のテントの中で
デッキのカード、龍騎を眺めながら大きな唸り声を上げた。

「ユキカイ町で黄金の翼のカードが龍騎サバイブになった……ロンとのバトルでオレは確かに強くなってるって事はわかったけど……」

このままでは頂点王にはなれない。

まだ何か足りない。ユキカイ町で龍騎サバイブというこれまでの比にならない程に強力な力を手に入れたが、その龍騎サバイブも決して最強ではない事もトウエンティとのバトルを通して学んだ。

アスラはその事を痛感しているが、その先のヴィジョンが見えず、密かに悩んでいて……

「トウエンティはオレの龍騎サバイブを利用してその力の限界を引き出した……ただ何かあるはずなんだ……オレにしかできない龍騎サバイブの強化方法が……」

トウエンティがグランドジオウというカードで龍騎サバイブを操った事を思い出しながらそう言葉を漏らすアスラ。

そう、あの時見たく、龍騎サバイブの力の限界を超えるような方法をアスラは欲していた……

「だアアアアー!!……わかんねえ!!……何も思いつかねえ!!だつてオレバカだからアアアアアー!!!」

ただでさえ強い龍騎サイブをそこからさらに強くするようなイメージが全然わかないアスラ。頭からプスプスと煙が上がり、ショートしてしまふ。

しかしそれはこの先さらにバトルで勝ち星を上げ続けるためには必須条件なのは確かな事……

次の町はもうすぐ到着する……

アスラに残された時間は残り僅かしかなかった……

早朝、日の光が差し込む森の中、スズメが囁り合う鳴き声が聞こえてくる中、アスラはただ1人Bパッドを構えていた。早朝特訓である。

早朝特訓と言つても、Bパッドを展開して、デッキを1人回したり、ダメ元でソウルコアを出そうとしたりする程度だ。しかし、その特訓の積み重ねがアスラの諦めない

心の表れでもあり、彼をここまで成長させた1つの要因とも言えて……………

「つしやあ!!…先ずは考えるより動くだ!!…行くぜ、召喚!!……仮面ライダー龍騎!!」

手始めに相棒である赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎を召喚するアスラ。

「次はコイツだ!!…第二の龍騎!!」

立て続けに手札から引き抜き、Bパッドに叩きつけたのはコラボダンジョンで偶然発見した第二の龍騎。龍の尾を模した柳葉型の剣を装備した仮面ライダー龍騎が場に現れる。

「最後はオマエだ!!……召喚、仮面ライダー龍騎サバイブツ!!」

3体目の龍騎が現れると、その龍騎は左腕のバイザーを龍を模した銃器に変換させ、烈火の如く吹き荒れるカードをそこへ装填……………

………サバイブ!!

と、無機質な音声が鳴り響くと共に、一瞬にして龍騎は新たな強化形態、龍騎サバイブへと進化を遂げる。

これにより、合計3体の仮面ライダー龍騎がアスラの目の前に出揃った。

「おお!!…やっぱライダースピリットが3体揃うと迫力がチゲエな!!………よし、んじゃ次はアタック行くぞ!!」

アスラは言いながらBパッド上の龍騎カードに触れようとする………

………だが………

「あつ!!………やっつと見つけた」

「ん?………どちらさま?」

女の人の柔らかい声がアスラの後ろから聞こえて来た。エールでもないその声に疑

問を浮かべたアスラは咄嗟にその方向へと振り向く……

その先にいたのは絶世の美女とも言えるくらいの人物であり……

「ふふ、私はイバラ……ライダーハンターズのイバラよ、よろしくねソウルコアの使えない坊や?」

「ら、ライダーハンターズ!?……トウエンティと同じ組織の!?!」

トウエンティと同じ組織の一員である事を速攻でひけらかすイバラ。アスラの警戒態勢は一気に跳ね上がる。

因みに、組織の名前がライダーハンターズであると言う情報はユキカイ町の襲撃事件の後にテンドウとの会話から耳にしていた。

「アンタもオレの龍騎が目当てか!?……コイツは誰がなんと言おうがオレのだ!!…ゼツテー渡さねえぞ!!」

「ノンノン!!……まあ渡してくれたら嬉しいけど、今日は純粹にお友達になろうと思つて!!」

「……………え」

イバラの意外な回答に拍子抜けするアスラ。

自分とライダーハンターズはいわば敵対関係にあるはずだ。トウエンティを助けたのは彼がどうしても完全な悪人に見えなかったからで、基本は倒すべき敵である。

と、考えていたが、トウエンティ同様、この女性からも完全な悪意は感じられなくて

.....

「へ〜…意外と身体ごっついね〜」

「そりやまあ鍛えてますからアアア〜!!!.....いやチゲエ!!触んじやねエエエ〜!!!」

「まあまあ、そうお硬いこと言わないの」

知らぬ間にアスラの眼前まで近づいて来たイバラが彼の身体をベタベタ触って来た。アスラも力づくで振り解きたいところだが、相手が女性という事もあり、力が出せずにいた。

「ふ〜〜ん.....筋肉質などこ意外は普通の人間だと思っただけだなあ.....ねえねえ坊やはなんでソウルコア使えないの!?!」

「んなもんオレが聞きてえよ!!……いいから離れてくれ!!」

「ええいけずくく……でも離してやらないくく」

「うああ!!」

アスラを押し倒すイバラ。アスラは本能的にコイツが頭のネジが外れたやばいやつであると察する。

そしてイバラはアスラの上に跨りながらある事に気がつく。

「あれ、君全然ドキドキしないんだね??……私の事綺麗って思ったりしないの??」

「はあ!?!……言ってる意味がさっぱりなですけど!?!……アンタは美人だとは思うけど普通に考えてこんなヤバイ女にトキメク方がどうかしてますってエエエー!!!」

これまでのイバラの行為は全ていわゆるハニートラップと言うものだ。美しい美貌を武器に、対象の男性を色気じかけにかけ、その人物を意のままに操る。以前ユキカイ町で暴れ回ったダスト・トラッシュが良い例である。

しかし彼女の経験上、アスラは自分に靡かないタイプだ。因みにライダーハンターズ的面々には全く通じない。

「もしかして坊や他に好きな女の子いたりするの??:…おねーさん坊やの恋バナ聞きたいな〜」

「ええ??:…好きな女の子??:…うーん…ん??:」

イバラにそう言われてアスラは頭の中で考えてみる。そうしたらなんか、ぼんやりと女の子のシルエットが出て来たが、それが誰なのかはアスラ自身にも分からなくて……

「その反応!! やっぱりいるんだ!!:…いいね恋バナ!! もつとやろうか!!:…私の恋バナは長いよ〜:ストライクゾーン広いからね私!!」

「いや意味わかんねえ!!:…いいからそこをどけエエー!!」

だんだんイバラが怖くなって来たアスラ。もう恐ろしくてしょうがない。一刻も早く彼女と身体的にも精神的にも距離を置きたい。

するとそんな時だ。

アスラに救いの船が現れたのは……

「ふあくあ……………朝っぱらから喧しいわね……………どうせバカスラでしょ」

「エール!!」

寝起きのエールが欠伸をしながら現れた。アスラにとってはこれ以上はない救いの女神だ。

「エールウウウー!!!……………ここだアアアー!!助けてくれエエエー!!!」

「ん?」

そんな救いの女神の登場にいてもたってもいられなくなったアスラはコミカルに涙を流しながら助けを求める。

エールは寝ぼけながらもその方向へと身体を向ける……………

するとそこには眠気なんぞ吹き飛ばす光景が待ち構えていて……………

「なツ?!……………何やってのよアンタ!……………誰よその女!!」

「お…君がエール・オメガちゃんだね…私はイバラ、こう見えてトウエンティと同じラ

ライダーハンターズの一員なのさ!!」

「はあ!!ライダーハンターズ!!」

好きな男の子が謎の色気むんむんの女性に押し倒されている謎い状況に困惑するエール。めっちゃめっちゃ嫉妬しているが、それ以上に彼女がライダーハンターズの一員である事に驚愕して……

「いや……この際どうでもいいわ……早くそいつから離れなさいよ!!」

「え?!……じゃあエールちゃんが坊やとこうしていたいの?」

「ギヤアアアアア!!!……こええええ!!抱きしめるなアアア!!……でもなんか良い匂いするウウウ!!」

「なっ!!」

イバラが倒れているアスラを抱きしめ始めた。その謎の行為にエールは思わず顔を赤らめる。

「ねえねえ、坊やは私とエールちゃん。どっちに抱き締められたい?」

「!!」

イバラが抱き締めながらアスラに訊いた。アスラを早く彼女から引き剥がしたいエールだったが、この質問ばかりは本能的に気になってしまっていて……

「はあ!?…んなもんエールに決まってるじゃねえかアアアー!!…いいから離れろオオオー!!」

「っ?!?!」

即答だった。

アスラはイバラの拘束から解き放たれたくて必死だった。

そりゃ、今のこの状況を加味したらイバラよりもエールに抱きしめられた方が良いに決まっている。こんな愚問、答えは始めから一択だったのだ。

しかしそうだと知っていてもエールにはアスラの発言は耐えられなくて

……

「()の……」

「エールです……………」

「あれれ?!? ……なんか元気ないわね? ……お腹空いちやっただ!? ……朝ですものね!!」

一段落したは良いものの、なんやかんや完全にイバラのペースになっている事を自覚しているアスラとエール。

正直言つて今までで一番接しづらい。

「いや〜…最初はアスラ君を私の美貌で手中に収めようと思ったんだけど……………無理だったか〜」

「やっぱ友達になる気なんてさらさらなかったんじゃねえかアアア〜!!」

意外と正直者なイバラ。

いや、これは正直者というよりは口が軽すぎるだけと捉えるべきか……………

「いや〜……………私、お口がヘビーライトでさ〜」

極め付けはこの謎の語彙である。

意味がわからなさすぎる。会話にならない上にそれだけでせつかくの美貌が台無しだとも思えてくる。

「ところで2人は恋人同士なのかな？」

「は、はあ!?!……ち、ちちがうわよ!!バツカじゃないの!?!」

「違うけど」

イバラに恋人同士なのかと唐突に聞かれて動揺するエール。しかしアスラはそれを聞いても特に揺らぐ事はなく、普通に返答した。

(何なのよこの女……恋人がどうかって……私達って側から見たらそう言う仲に見えるのかしら……)……つて、私は別にこんなヤツどうとも思っていないだからアアアア!!)

「?!……どうしたんだよエール……」

慌てふためくエール。その内心で好意を否定する気持ちと無意識に肯定する側が争い始める。

アスラはそんな彼女の気持ちも知らずに疑問符を頭に浮かべた。そんな彼らの様子を見てイバラはニヤニヤしている。

「よし!!じゃあエールちゃん、私とバトスピ しましうか!!……このアスラ君を賭けて!!」

「えええええ!!」

「はあ!?!」

突然のバトルの申し込み。しかも賭けるのはライダースピリットでもなく何故かアスラ本人だ。

その意味のわからない奇行に彼らはますます混乱してしまう。

(この人やっぱりアスラの事……いや待て待て、なんで私そんなに必死なのよ!?!
……落ち着け……落ち着きなさいエール・オメガ……コイツは一応仲間。仲間が盗られたら嫌よねよりや……そう、仲間だから……仲間だから……バカスラは仲間だから……アホスラは仲間だから……チビスラは仲間だから……)

エールはまるで自分に催眠術でもかけるかの如く冷静さを取り戻していく。そうだ。きつとこれは彼の事を仲間だと思ってるからに違いない。

「いいわよ、受けて立つわそのバトル!!」

「ええ!?!…受けるのおお!!」

「やったね〜そうこなくちゃ!!」

話は何度も転がりながら結果的に2人の美人がアスラを取り合う事になった。

アスラは今自分がどれだけ男にとって羨ましい状況になっているのかを全く理解していない。

その後2人は自分のB.Pアッドを展開。デッキをセットし、バトルの準備を瞬時に行なった。

「このバトルで勝ったらアスラ君は私のモノよ〜…楽しみだわ〜」

「そんな事はさせない!!」

「あらあら必死なのね〜…そんなに嫌嫌の嫌?」

「ち、違うわよ!!…そんなんじゃないよ…い、いいからさっさと始めるわよ!!」

「はいはい!!……可愛いわね」

……ゲートオープン、解放!!

「……ホントに始まったよ……なんなのこの状況……もう何がなんだか……」

アスラの理解が追いつかないまま、

オメガ家のエールとライダーハンターズのイバラのアスラを賭けたバトルスピリッツがコールと共に開始された。

先行はエールだ。

「ターン01」エール

「メインステツプ、アグモンを召喚!!」

1【太一のアグモン】LV1(1S)BP3000

「あらあら、可愛いトカゲちゃんねー！！！」

「トカゲじゃない！！…恐竜よ！！…：召喚時効果でカードを4枚オープンして、その中の対象カードを加える！」

エールは太一のアグモンの効果で対象内になる2枚のカードを手札に加えた。

「ターンエンド！！」

手札：6

場：【太一のアグモン】LV1

【バースト：【無】

あんなおちやらけた態度こそ取ってはいるが、イバラはライダーハンターズの1人。エールは気を引き締めてターンを送る。

「ターン02」イバラ

「メインステップよく…：湖に咲く薔薇を2枚、ポンポンっと配置しちゃうわ！！」

「!!」

―【湖に咲く薔薇】 L V 1

―【湖に咲く薔薇】 L V 1

彼女の背後にまるで生きているかのように不気味で、巨大な薔薇が咲き誇った。
見た事がないカードにエールはより一掃警戒心を強めていく。

「このターンはエンド、さあいらっしやいエールちゃん!!…おねーさんがたつぷりと遊んだげる!!」

手札：3

場：【湖に咲く薔薇】 L V 1

【湖に咲く薔薇】 L V 1

バースト：【無】

悪意のなさそうな笑顔を向けながらそのターンをエンドとするイバラ。再びエールにターンが回ってくる。

「ターン03」エール

「メインステツプ!!…創界神ネクサス、八神太一を配置!!…神託の効果でデッキからカードを3枚トラッシュに送り、その中の対象カードの数だけコアを追加!!」

ー【八神太一】LV1(0??2)

「ふーっ、創界神ネクサスカ」

エールの身や周囲にはこれといった変化はないが、強力な創界神ネクサスである八神太一が配置される。

「さらに!!第二のアグモンを召喚!!」

ー【アグモン】[2] LV1(1)BP2000

2 種目となるアグモンがエールの場に姿を見せる。

そして創界神ネクサスにもコアが追加されるのを目に移すなり、エールは「アタック ステップ!!」と勢いよく宣言して見せて……

「第二のアグモンでアタック!!」

「ライフで受けるわ!!……ッ」

へライフ5??4 イバラ

第二のアグモンでアタックを仕掛ける。鋭い爪がイバラのライフを1つ切り裂いた。

「よし、ターンエンドよ!!」

手札：5

場：【太一のアグモン】LV1(1S) BP3000(回復)

【アグモン】[2] LV1(1) BP2000(疲労)

【八神太一】LV1(3)

バースト：【無】

「あつれれー!?……もう一体で来ないのかしらん?……アスラ君が私の手に渡るのが嫌々なんでしょ?」

「だ、だから違う!!……戦術よ!!……アンタこそ早くしなさいよ!!……私はエックスよ!」

アスラに対して素直になれないエールの気持ちをかからかい、内心で笑みを浮かべながら、イバラは再び訪れた自分のターンを進めていく……

「ターン04」イバラ

「メインステップ……風魔ベニマトイちゃんいらっしやあい!!」

ー【風魔ベニマトイ】LV1(1S)BP3000

忍者の衣装を着た赤い小鳥が姿を見せる。

普通の緑デッキであれば単なる召喚に終わるが、イバラのデッキは違う。配置していた湖に咲く薔薇が発光していき……

「湖に咲く薔薇の効果発揮ゴー!!……コスト4以上の緑スピリットが召喚された時、コアを1つをネクサスに追加!」

「ツ……召喚しただけでコアを……!!」

湖に咲く薔薇のネクサスは2つ。つまりコスト4以上の緑スピリットが彼女の場に呼び出されるたびにコアが2つずつ追加される事になる。

イバラがどこまでこのバトルに対して本気なのか定かではないが、少なくともこの動きはどうしようも無く強力であって……

「さらにミツジャラシちゃんいらつしやい……効果でコアブースト、さらに2枚の湖に咲く薔薇の効果でもう2つ追加よ」

1【ミツジャラシ】LV2(2)

ミツバチのようなスピリットが現れると共にまたしても立て続けにコアが増えていく。

イバラはさらに増えたコアを使用して手札のカードを引き抜いた……………

「そしてマジック、ハンドリバーズ!!…残りの手札を破棄してエールちゃんの手札の枚数分ドロ!!」

「減った手札が戻った……………」

「すごいでしょ♡」

そしてイバラは続け様にアタックステップを宣言すると……………

「ベニマトイちゃんであタック!!効果でコア一つをリザーブに追加。ソウルコアの力でアグモンちゃんを疲労!!」

「!!」

ー【太一のアグモン】（回復??疲労）

ベニマトイが小さな翼を広げ、動き出す。すると突風が発生し、エールのアグモンが横たわってしまう。

「ライフで受ける……ッ」

へライフ5??4へライフ5??4

ベニマトイは脚に持つ忍法の巻物のようなモノをエールのライフに叩きつけ、それをつを砕いた。

「うっふふ、もっと積極的に攻めてあげたいところだけど………楽しみはとっておかないとねん!!………ターンエンドよ〜」

手札：5

場：【風魔ベニマトイ】 LV1

【ミツジャラシ】 LV2

【湖に咲く薔薇】 LV1

【湖に咲く薔薇】 LV1

バースト：【無】

そのターンエンドしたイバラ。ここでようやくエールにターンが回って来た。

「ターン05」エール

「メインステップ!!…グレイモンを召喚!!」

「『グレイモン』 L V 1 (1) B P 4 0 0 0

立派な3本の頭角を持つ恐竜のような姿をしたデジタルスピリット、グレイモンがエールの場に現れた。

このスピリットが登場したと言う事はいわゆる攻めの姿勢であり、エールがこれから強力な攻撃を開始すると言う合図でもあつて……………

「アタックステップ!!…グレイモンでアタック!!…効果で風魔ベニマトイを破壊して1枚ドロ!!」

「あら…さよならベニマトイちゃん」

グレイモンの口内から放たれた火球がイバラのベニマトイを焼き尽くした。

さらにエールはここで畳み掛けると言わんばかりに手札からカードを勢い良く引き抜いてそれをBパッドに叩きつけた。

「フラッシュマジック、ガイアフォース!!」

「むっ……」

「この効果でミツジャラシを破壊して、グレイモンを回復させるわ!!」

ー【グレイモン】（疲労??回復）

巨大な火球がミツジャラシを焼き尽くすと共にグレイモンが疲労状態から回復状態となった。

「おお!!これでグレイモンで2回、2体のアグモンで1個ずつライフを破壊すればエールの勝ちだぜ!!」

合計4回のアタックでエールの勝利が決まる。アスラもそれを喜ぶように声を漏ら

すが、イバラは「その言葉は失敗フラグよ!!」と高らかに宣言しながら手札のカードを引き抜く。

「フラッシュ神速、アグラオペリカンちゃんを神速召喚!!」

ー【アグラオペリカン】LV1（1）BP2000

「ツ……神速」

リザーブのコアのみを使用する事でフラッシュユタイミングで召喚できる神速の効果により、ペリカンのようなスピリットがグレイモンの目の前に立ちはだかる。

「アグラオペリカンちゃんの召喚時効果!!……【旋風・i】によりアグモンちゃんを1体重疲労よ〜」

「っ!!」

ー【太一のアグモン】（回復??重疲労）

アグラオペリカンのクチバシから発せられるエコーがエールのアグモン1体を重疲労させる。

重疲労とはいわゆる疲労を重ねたモノである。一度の回復で疲労状態となり、二度目の回復でようやく回復状態となる。

「グレイモンちゃんのアタックはアグラオペリカンちゃんが引き受けるわ〜」

イバラの指示によりグレイモンに飛びかかるアグラオペリカン。しかしグレイモンに首根っこを鷲掴みにされ身動きが取れなくなり、そのまま地面に叩きつけられて爆散してしまった。

「あらあら負けちゃった〜……でも」

「……ターンエンド……」

手札：5

【太一のアグモン】 L V 1

【アグモン「2」】 L V 1

【グレイモン】LV1

【八神太一】LV1(4)

バースト：【無】

「うつつふ、そうするわよね」

このターンで決めきれないならいつそ防御に徹したほうが良いと判断したエールは、追撃はせずそのままの状態でターンを終えた。

次は終始マイペースなイバラのターン。彼女が湖に咲く薔薇の効果で増え続けたコアを活かして強力なスピリットを呼び寄せるのは目に見えて……

「ターン06」イバラ

「メインステップ……ちよこつとだけ本気出しちやおーっつと!!」

「ツ………何か………来る」

イバラは勢い良く手札のカードを引き抜き、それをBパッドに叩きつける。

「来なさい、ビオランテ・植獣形態ちゃんを召喚!!」

ー【ビオランテ（植獣形態）】 L V 2（5 S） B P 17000

「ツ……何よ……コイツ!？」

「や、ヤベー………」

イバラの場に現れたのは植物の体を持つ龍の姿をした怪物、ビオランテ。その不気味さ、異常さにバトルしているエールはおろかアスラさえもたじろいでしまう……

「この子の強さはヤバヤバのヤバなんだから!!……効果でコアを2つブースト!!さらに2枚の湖に咲く薔薇の効果でコアブースト!!……そのコアを使ってビオランテちゃんのLVを上げちゃう!」

【ビオランテ（植獣形態）】 L V 2?? 3

止まらないコアブースト。ビオランテのLVとBPが飛躍的に上昇する。

「アタックステップ!!……やっちゃってビオランテ!!…効果でグレイモンを疲労!!」
 「なっ!?!」

ー【グレイモン】（回復??疲労）

ビオランテはグレイモンに向けて口内から樹液を発射。グレイモンはたちまち疲労状態となってしまふ。

「さらにフラッシュマジック、タフネスリカバリー!!…ビオランテちゃんのBPを2000上げて回復!!」

ー【ビオランテ（植獣形態）】（疲労??回復） BP 22000??24000

「回復した!?!……ライフで受ける!!……っ!」

へライフ4??3へ エール

効果により二度目のアタック権限を得たピオランテ。蔓を巧みに活かしてエールのライフ1つを破壊した。

「続けてアタックよ!!…今度はアグモンちゃんを疲労!!」
「くっ……」

ー【太一のアグモン】（回復??疲労）

今度はアグモンがピオランテの樹液の餌食になる。アグモンはやる気をなくしたように尻餅をついて疲労状態となってしまふ。

「さあアタックはどうするのかなあ!？」

「ツ…そんなの受けるに決まってるじゃない!!…ツ」

〈ライフ3??2〉エール

ビオランテによる連続攻撃でエールのライフが次々と砕け散っていく。

「うつつふ、アスラ君を得るまで残り2つねく……あーっー楽しみだわ……ターンエンド」

手札：3

【ビオランテ（植獣形態）】 LV 3

【湖に咲く薔薇】 LV 1

【湖に咲く薔薇】 LV 1

バースト：【無】

ビオランテの疲労効果とマジックによる連続アタックにより一気に攻勢へと回ったイバラがこのターンをエンドとした。

次はエールのターンだ。しかし、ビオランテの効果の本領発揮はここからであって……

「ターン07」エール

このターンのリフレッシュステップが回ってくる。エールのアグモンやグレイモン達が回復となるはずだったが……………

「え…………アグモンとグレイモンが回復しない!？」

「ふふ、ピオランテの効果で疲労したスピリットは次のリフレッシュステップで回復できない…………その子達はまだおねんねしてなさい」

ピオランテの効果により疲労したままとなつているアグモンとグレイモン。もう一体のアグモンも重疲労から疲労状態となつただけであるため、エールの場の3体のスピリットは全て疲労状態という状況でメインステップを迎える事になる。

ここに来て存在するスピリットの身動きが取れなくなるのはエールにとっては辛すぎるモノがあり……………

「くっ…………スピリットのLVをアップ…………バーストをセットしてターンエンド」

手札：5

場：【太一のアグモン】 LV 3

【グレイモン】 LV 2

【アグモン「2」】LV2

【八神太一】LV1（4）

バースト：【有】

できることは限られてしまい、バーストのセットとレベルアップのみでそのターンをエンドとしてしまうエール。

次はイバラのターンだが……………

「ねえ……………アンタは何を叶えてもらうの？」

「ん？」

「だからアンタもトウエンティみたいに何か叶えて欲しい夢があるからライダー狩りなんて馬鹿みたいな事やってるんじゃないの？」

エールがイバラに訊いた。

トウエンティと同じ組織に居るイバラ。だとすれば必ずあのちよび髭シルクハット……………ウイルに何か願いを叶えてもらうために居るのではないかと……………

致し方ない理由があるのではないかと考えていた……………

「ああ、そう言えば言つてなかつたわね〜…私の願い、それは永遠の美貌を得る事よ」
「……は!？」

「そりやだつて〜…もつたないでしょ?…せつかくこんな美人で生まれたんだから老けていくのなんて、見たくないでしょ?」

「知らないわよ!!」

「えー…エールちゃんから訊いて来たんじゃない〜」

イバラの願いを聞きなり拍子抜けするアスラとエール。

無理もない彼女の願いはトウエンティとは違い、なんとも適当だった。まるでどこまで本気なのか分からない彼女の軽い性格を表しているかのようであり……

「だいたい、そんなに長生きしてなんになるって言うのよ!!」

「ノンノン!!…わかつてないな〜綺麗な私が生き続ける事に意味が有り有りの有りのよ〜」

会話が通じない。エールやアスラは本当の意味でイバラがまともな人間ではない事

を悟る。

「さっ……私のターンね……このターンで決めるわよー!!」

トドメを刺すと言わんばかりにイバラがターンシークエンスを開始させていく。絶体絶命に陥っているエールだが、この場は何も反撃する事はできず……

「ターン08」イバラ

「メインステップ……2枚の湖に咲く薔薇を最高LVにして、アタックステップ!!…
ビオランテちゃん、やっちゃって!!」

「エールー!!」

ビオランテに攻撃の指示を送るイバラ。エールを心配するアスラが声を荒げた。
しかし、その様子にエールは何故か笑って見せて……

「ふふ……待ってたわ、その攻撃!!」

「!？」

「相手のアタックによりバースト発動!!」

エールの反撃だ。彼女の伏せていたバーストカードが火を吹くように勢い良く反転して行く……………

その正体は……………

「煌星銃ヴルムシューター!!…効果により、ネクサスカード、湖の咲く薔薇を破壊して1枚ドロロー!!…その後召喚!!…不足コストは他のスピリットをLVダウンして確保!!」

1 【煌星銃ヴルムシューター】 LV1 (5S) BP6000

「ッ……………」

空から放たれた炎の銃弾。それは瞬間にイバラの湖に咲く薔薇を撃ち抜き、焼き尽くして見せると、エールの場に伝説の星龍を模して造られた銃が現れて……………

「うっふふ……だからどうしたって言うのよ?…ヤケのケンパチにでもなったつもり!?
…そんなんじゃない私のピオランテちゃんは倒せないわよ!!」

バースト召喚されたのは所詮、単騎ではどうしようもなく性能が低いブレイヴ。イバラは余裕な表情を浮かべる。

だが、エールのこのヴルムシューターは単なるブレイヴではなくて……

「甘いわね!!…ヴルムシューターの本領発揮はここからよ!!」

「!!」

「フラッシュ煌臨を發揮!!…対象はヴルムシューター!!」

「な、何ですって!?!…ブレイヴを対象に煌臨!?!」

煌星銃ヴルムシューター。

数多く存在するブレイヴの中でも稀有な「装填」の効果を持つ特殊なブレイヴ。本来であれば煌臨元になれないブレイヴも、この効果があれば煌臨元とする事が可能だ

……

そして、今からエールが呼び出す煌臨スピリットと言えばアレしかないだろう……

「来なさい!!…私のエースカード、ウォーグレイモンツ!!」

ー【ウォーグレイモン】LV3（4）BP16000

高熱を宿す炎の球体を切り裂きながら中より現れ出たのはオメガ家のカードを象徴する1体、鋭い鉤爪の装備が特徴的な竜人、ウォーグレイモン。

さらに今回はその登場だけでは終わらず……

「ヴルムシューターの効果!!…煌臨元となったこのカードをウォーグレイモンに合体!!」

ー【ウォーグレイモン+煌星銃ヴルムシューター】LV3（4）BP22000

「おお!!…スツゲエエエー!!」

ウォーグレイモンの鉤爪と背中の中のシールドが消滅。その手には新たにヴルムシュー

ターを握り、背中には薄桃色の翼が生えてくる。最後にその身を紅蓮の赤に染め上げられ、ウォーグレイモンはさらなる強化を果たした。

この光景にアスラも興奮し、歓喜の声を上げた。

「ビオランテのアタックは合体したウォーグレイモンでブロック!!」

エールの指示を聞くなり、向かってくるビオランテを迎撃すべく出撃するウォーグレイモン。

ヴルムシューターにガイアフォースの力を込めて炎の弾丸を連射するが、ビオランテは口内から樹液を吐きつけ、それを容易く撃ち落としてしまう。

「うっふふ!!…何それ、必死過ぎて寧ろ笑えるんですけど!!…フラッシュマジック、タフネスリカバリー!!…ビオランテちゃんのBPを2000上げて回復!!」

ー【ビオランテ（植獣形態）】BP22000??24000（疲労??回復）

「ッ………2枚目!」

「これで私のビオランテちゃんの方が強くなったわー!!」

2枚目となるタフネスリカバリーでBPが増幅するビオランテ。その眼光を輝かせると共に、自身の身体と繋がる蔓を伸ばしてウォーグレイモンを締め付ける。

身動きが取れなくなつたウォーグレイモンはどうにかして脱出しようと試みるが、その拘束力は高く、中々振り解けないでいた。

このままでは装甲ごと破壊されてしまうが、その前にエールはさらなるカウンターのカードをBパッドに叩きつける……

「フラッシュマジック、ダイナパワー!!」

「!!」

「この効果により、このターンの間ウォーグレイモンのBPを3000アップさせるわ!!……これで合計BP25000、ビオランテを超えた!!」

ー【ウォーグレイモン+煌星銃ヴルムシューター】BP22000??25000

「あらやだ」

力の増幅を感じ、緑色の眼光を輝かせるウォーグレイモン。力づくでビオランテの蔓から脱出し、今現在込められる最大の出力をヴルムシューターに込めると、それをビオランテに向けて発射。

ビオランテは迎撃すべく再び口内から樹液を発射するが、今回の炎の弾丸はそれさえをも焼き尽くしながら突き進み、遂にビオランテ本体に命中。

流石に耐える事は出来ず、ビオランテはたちまち焼き尽くされ、激しい断末魔を上げながら消滅してしまった……………

「つしやあ!!…流石エール!!あのデケーヤツをぶっ飛ばしやがった!!」

「ふふ、結構やるのねく……………じゃあターンエンドで」

手札：3

場：【湖に咲く薔薇】LV2（5）

バースト：【無】

余裕の表情でターンを切るイバラ。

場のカードはネクサスのみ、エールのスピリット総数からしても圧倒的に追い込まれ

ているはずであるのに……………

まだ奥の手があるのか、それとも単なる強がりなのかは知れた事ではないが、エールはこのターンで決着をつけるべくターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン09」エール

ビオランテの樹液による影響も消え去り、エールの場にいる全てのスピリットはこのターンで完全復活を果たした。

「メインステップは飛ばしてアタックステップ!!……………ウォーグレイモンでアタック!!」

トドメを刺すべく、ヴルムシューターの銃口をイバラに向けるウォーグレイモン。

しかしこのタイミングでイバラはあるカードの発揮を宣言して見せて……………

「まだまだ甘々のちゃんちゃんだけどねっ!!……………ネクサスカード、湖に咲く薔薇のLV2効果!!……………このカード上のコア5個をトラッシュに置く事でビオランテスピリットをノーコスト召喚!!」

「なっ?!…このタイミングでまたアレを出すって言うの!？」

湖に咲く薔薇の隠された効果がここでまさかの起動。

ビオランテスピリットと言われてエールは思わず前のターンでやつと破壊できたあのビオランテを頭に浮かべるが……

「アレなんかよりも凄いわよー!!……召喚、バイオ怪獣ビオランテちゃん!!」
「!!」

森を覆い尽くす程の巨大な植物、いや、植獣のシルエットが現れる。

アストラとエールは直感でこの存在こそがイバラのエースカードである事を理解した。

そしてその驚異的な存在がエールのウォーグレイモンに牙を向けようとした

……

……その直後だ。

イバラのBパッドからまるでアラームのような音が鳴り響いて来たのは。その音はバトルに敗北した際に鳴る無機質な機械音ではなく、単なるタイマーによるアラームのようであり……

「あつ……朝ごはんの時間だ〜帰らなきゃ」

「え」

「は!?!」

そう言いながらイバラはBパッドのバトルモードを解除し、自分からバトルを放棄してしまう。その影響で巨大な植獣のシルエットは何もせず消滅してしまう。この場合は当然棄権したとみなされ、エールの勝利となる。

だが普通に棄権したならまだしも、その理由はまさかの朝ごはん。

アスラとエールには理解出来なくて………

いや、彼女の言動は初めから理解できてはいなかったが………

「それじゃーねー!!一緒に遊べて楽しかったわ〜……ちゃんと朝ごはん食べるのよ〜」

「え!?!……ちよつと本気なの!?!……バトルの続きはどうすんのよ!?!」

「ん?……あー……じゃあまた今度アスラ君をテイクアウトしに来るわ〜」

「ダメに決まってるでしょ!?!」

「うっふふ、そうよねー……ダメよねー……好きな子取られたくないわよねー……」

…エールちゃん！」

「なツ……だ、だから違うわよツ!？」

「?」

「それじゃ、また会いましょーねー」

イバラは最後にそう言い残すとBパッドの端末を操作してワームホールを生み出し、そこを潜り抜けて行った……………

彼女の姿が消えた途端、アスラとエールはどつと疲れが身体に来てしまい、思わずその場に座り込んだ……………

「つ、疲れたな……………」

「え、ええ…………ある意味トウエンティより相手にしたくないわ……………」

これでライダーハンターズの4人のうち3人と邂逅を果たした事になるアスラとエールであったが、その中でもイバラは特に関わりたくなかった。

理由はただ単に会話するだけで疲れるからである。

「むあ〜」

「あつムエ」

そんな中オレンジの小動物、ムエが呑気に欠伸をしながら起きてきた。この瞬間より、アスラとエールはなんとなくだが平和な時間が帰ってきてくれた事を自覚し始めた。

場所は変わり、ここはライダーハンターズの隠れ家。イバラは崩れているコンクリートの塊の上でスプーンを使い、カップアイスを食べしていた。

「あー癒しー癒しー…夏はやっぱりアイスよねん！」

「しかし、朝からアイスではお腹を壊しますよ」

「あ、ウィル…今日も素敵ね、特にお髭とか」

「お褒めのお言葉、ありがとうございます」

そんな中、ライダーハンターズの主任的存在であるウィルがシルクハットの束を持ちながら現れる。

「エール・オメガとあのゴミに会って来たのですね？」

「あらあら、流石ねー……そうよ、初々しくて可愛かったわー……特にエールちゃんは養ってあげたいくらいよ」

「ふむ。中々言い返しづらいボケですね。ノーコメントでお願いします」

「ボケじゃないわ、そこそこ本気よ？」

イバラの言い返しづらい言葉にも、紳士的な態度ですぐさま言葉を言い返してみせるウィル。流石はまともな人間が誰もいないこのライダーハンターズをまとめているだけのことはある。

「つて言うかー……なんでウィルはアスラ君の事嫌いなわけ？……まあそりゃイケメンじゃないけどー……あつ、でも身長さえ伸びてくれればそこそこいけるかもねー」

イバラがウイルに訊いた。

スミミ村のアスラは薄汚い小僧だ。しかし、その人当たりの良さと器の大きさとで数多くの人物からそれなりに良い印象を受ける事が多い。少なからずイバラもそう思っているからこそ、ウイルが何故彼の事が嫌いなのかを疑問に感じていて……

「いやはや、いけない事だもわかっているけどどうしても腹が立ってしまったのですよ……あんなソウルコアに愛されなかった者如きが、あの世界の力に選ばれたのだと思いますとね……」

「??……ふーん……美味しそうねー」

ウイルの言っている意味がわからなかったイバラは取り敢えず「美味しそうねー」と適当に返答してみる。

「そろそろ潮時かもしれません。トウエンティには申し訳ないでしょうが、あの薄汚い小僧には消えてもらいますか……クッククック」

「えーアスラ君殺しちゃうの……残念ー」

さつきとは打って変わって紳士的な態度を崩し、薄気味悪い笑いを浮かべるウイル。どうするのかわからないが、少なくともアスラを消せる事を嬉しく思っている様子。そんな彼を側で見ていたイバラは「まあ仕方ないか」と言った感じの表情を浮かべていた。

王蛇篇

22コア「プロローグ」頂点王「生誕」

これは、生まれながらにソウルコアが使えない少年、アスラの物語が始まる約10年前のお話。

冬の季節、その日は粉雪もパラパラと降り続けていて、肌寒かった。
しかしながらこの日は……..
私にとって運命の出会いとも言える日だったんだ。

季節は冬。粉雪がゆっくりと降っていて、とても肌寒い。

旅の途中で隣国に来ていた当時10歳のシイナ・メザはその隅っこにあるとある村にて、籠の中で泣きじやくる生後間もない2人の赤ん坊を眺めていた。おそらくは捨て子だ。

「……………兄弟?… ……じゃないか、顔が似てない……………それに」

もう片方の赤ん坊はカードを握っていた。バトスピのカード、それも希少なライダースピリットのカードだ。それだけでこの赤ん坊がどれだけこの世で異端な存在か理解できる。

「ふむ。名前はアスラにロンか、良い名前だな……………オマエ達、このままここにいても凍死するだけだし、いつそ私に育てられてみるか?」

ライダースピリットのカードを握る赤ん坊の名はロン。そうじゃない方はアスラと

いう名前が籠に記載されていた。

10歳とは思えないシイナの言動。彼女は偶然見つけたという成り行きだけでその2人の赤ん坊を育ててみることにした。

最初は本当にただの成り行きだった。このまま放っておけば赤ん坊は凍死で絶命してしまふからだ。みすみす見て見ぬふりは出来なかつただろう。

しかし、その後はこの赤ん坊達のためだけに自分が隣国の最強の存在になつてしまふなど、当時、その赤ん坊達はもちろんの事、彼女さえ知る由がなかつた事だろう……

そこから時は流れ、5年後、季節は春。時間帯は早朝。

ある古家の一つ部屋に日差しが差し込んで来た。そこで寝ているのは15歳になつたシイナ・メザだ。目覚ましを設定したBパッドと言う端末がジリジリと音を立てているにもかかわらず、いびきをかきながらぐうたらと居眠りを続けていた。

「おお〜いいい!!…おつきろー!!」

「ぐへえっ!？」

灰色のツンツン頭をした小さな男の子が元気よくシイナの上に飛び乗ってきた。お腹に男の子の体重がのしかかって思わず変な声が出て来る。

そしてその元気はつらつな男の子の横ではもう一人大人しそうな男の子も確認できる。

「いったた……なんだい朝っぱらから喧しいじゃないか、いつもの事だけど……」

「んだよー！！…シイナがオレ達にバトスピ教えてくれるって言ったじゃんか!!」

「だからってなーアスラ、アンタもうちよつとロンみたいに落ち着きのある感じにならない?」

「でもシイナ、寝坊はいけない」

「おお……相変わらずロンは一言キツイ……」

5年の月日が流れ、2人の赤ん坊は5歳の男児へと成長していた。

元気の有り余ったツンツン頭の男の子はアスラ。

クールな性格で黒髪で癖毛の男の子はライダースピリットのカードを握りしめていたロンだ。

「はいはい。子供より寝坊助で悪かったよ……ふふ、そんじや支度して外に出ますか
!!」

「おおっ!!……やったー!!」

シイナがそう言うと、アスラとロンは嬉しそうに口角を上げた。遂に念願のバトルスピリッツができるのだ。きつと楽しみで仕方がなかったのだろう……

ー…

最も身分の低いコモンの人々のみが住う、国の隅っこに存在する村、スーミ。そこに彼らは住んでいた。捨て子であるため、厳密にはどうかはわからないもの、分類上はアスラとロンも最底辺の身分であるコモンと言う扱いになる。

そしてその村の広場にてBパッドと呼ばれる端末をバトル台として展開するアスラとロン。

2人の初めてのバトルスピリッツが既に幕を開けていたのだった。シイナはその様子を微笑ましく眺めている。

「召喚……仮面ライダーナイト!!」

5歳のロンがBパッドにカードを置くと、目の前に紫のライダースピリット、仮面ライダーナイトが姿を見せる。普段は落ち着きのあるロンも今回ばかりはその勇姿に高揚し、感動に胸を打ち鳴らしていた。

「おっ!!……ライダースピリットの召喚、上手くできたじゃんか!!……普通は選ばれるだけでも大変なのにな……ロンはきつと強いバトラーになれるよ」

「……………」

シイナにそう言われて嬉しそうに頬を緩めるロン。実際に本当に才能はある。出なければ仮面ライダーナイトはロンのBパッドに反応すらしないであろう。

しかし、それに比べて片割れのアスラは……………

「な、なあシイナ……………オレのBパッド壊れてんのかな……………ソウルコアが無いんだけど……………」

「ん?」

いつも元気が凄まじいアスラがらしくもなく青ざめた表情でそう告げてきた。

基本、通信機器からバトル用の台までこなすBパッドは頑丈にできている。実体化するスピリットの攻撃にだって耐えてしまうのだ。どんな衝撃を受けても故障なんて一生に一度あるか無いか程度であるはずなのに……

「……………ホントだ。無いね、ソウルコア……………」

「だろ!?…壊れたんだよ!!」

「うー…む……………考えづらいけど……………まあしようがないか、じゃあ今日は私のを使得ってみる?」

「マジ!?…サンキュー!!」

そう言いながら今度はシイナのBパッドを使得ってバトルを始めようとするが

……………

「……………アレ、ソウルコア……………無い」

「……………」

そのシイナのBパッドからも出てくるはずのソウルコアは無く、通常の青色のコア4つのみであった。

流石にコレはシイナも不可解に感じ始める。今度はロンのBパッドで試してみると、やはりアスラが使うとソウルコアは発現しなかった…………

「ど、どう言う事だよオオオー!!!…なんでオレが使うとソウルコアが出ないんだよおおお!!」

信じられない現象だった。

子供だろうが女性だろうがBパッドさえ使えば息を吸うように出せるはずのソウルコアがこのアスラには使えないのだ。

それはこのバトルスピリッツ絶対主義の世の中において、あまりにも大きすぎるハンディだ。身分も最も低いコモンである事から、アスラはおそらくこの世界で最弱のカードバトラーと言えるのかもしれない。

「……………ひよつとしたらアスラは先天的にソウルコアを作り出せないのかもしれない」
「え？」

「本来、人はコアを生み出せる。それを最適化できるようにするのがこのBパッドなんだけど、もしかするとアスラはそのコアを生み出す力が他の人よりも弱いかもしれない」

「……………そ、それって、頑張ったたらソウルコアを使えるようになるって事だよな!? ……
そーなんだよなシイナ!」

「……………確証は無い……………」
「!？」

　　年齢5歳と言う年齢には衝撃的過ぎるシイナの言葉。

　　しかしそうとしか言えない。このままウソをついてもアスラのためにならない事を彼女は知っているのだから……………

「お、オレは……………オレはそんなの信じねー!!……………ソウルコアが使えないなんてバカみたいな話、信じられるかよッ!!」

「ちよっ、アスラ!？」

突きつけられた現実を受け入れられず、自分のBパッドを抱きしめながらシイナと口の元を走り去っていくアスラ。

その後、まるでアスラの心の中を表しているかのように雨が降り始めた……………

この雨の中、走り去って行くアスラの背中を目に映しながらシイナはある事を考えていた……………

アスラとロンは最も身分の低いコモンだ。この国で最も軽蔑される存在。しかもライダースピリットを持つロンならともかく、ソウルコアが使えないというアスラは尚更身分の高いマスターやエックスの者達からゴミを見るような目で見られるに違いない……………

しかしながら、このアスラの謎めいた病気が発覚した直後、シイナはある決意を固めた。

自分はバトルが強い。

神に天賦を与えられたのではないかと疑う程、異常に強い。

屈強の強者に化物と言われる程に強い……………

だが、これを表向きな場所でひけらかすのは好まない。
しかし……………

この子達の希望になれると言うのであれば話は別だ……………

…

雨が降り続く。

アスラは村を飛び出し、一人森の中でBパッドをバトルモードで展開していた。

当然、その中にソウルコアは無く、この世の終わりのような表情で固まっていた。無理もない。楽しみにしていたバトルスピリッツでソウルコアが使えないと言う奇怪な病が判明したのだから……………

齢5歳の少年にはあまりにも辛すぎる現実だ。

しかしそんな時だ。突然雨が当たらなくなつた。シイナがアスラを傘に入れてあげたからだ。そのすぐ横では同じようなポロ傘を持つロンも窺える。彼もまたアスラ同様に寂しそうな表情をしていた。

「風邪ひいちゃうぞ」

「うるせー……風邪なんかひいたことねーよ」

「バカは風邪をひかないからね。私もないし」

生まれながらにソウルコアが使えない少年アスラ。幼馴染にして生まれながらに希少なライダースピリットに選ばれていたロンとはえらく差がある。

シイナも5年前に拾ったあの2人の赤ん坊にここまで恵まれ方に違いがあるとは思ってもなかっただろう。

「……………泣くなよ。男だろ？」

「泣いで……………ねえよツ!!」

シイナに抱きしめられるアスラ。その目には大粒の涙がこれでもかと溢れかえっていた……………

「なあアスラ、ロン……………頂点王って知ってるか？」

アスラが涙を拭った直後、シイナが幼馴染の2人に聞いた。

「知ってるよ……この国で一番強いバトラーの事だろ」

「……………」

アスラがそう答えると、ロンも同意するように頷いて見せた。

そう、頂点王とはいわゆるこの国のチャンピオン。

バトスピの色事に存在する合計6人のカラーリーダーを倒し、

『ライダースピリット』『デジタルスピリット』『モビルスピリット』の世界三大スピリットをそれぞれ操る3人の三王を倒してようやく頂点王になる事ができる。

「ああ、そうだ。それが頂点王。私が元いた国にもあつた……私がこの国で頂点王になってやる!!…アンタ達は頂点王になった私に挑んで来い!!」

ー!!

シイナの突然の発言にアスラとロンは驚いた。

子供でもわかる事実。三王が強すぎて誰もこの国で頂点王に輝いた者はいないのだ。

「む、無理だ!!……なれるわけねえ!!」

「う、うん……」

アスラがそう言うと、またロンも頷いて見せる。この国で一番身分の高いエックスの者達が主に三王を務めているのだ。コモンの少年達からすれば勝てると思う方がどうかしている。

しかしシイナはそんな様子を目に映しながらも笑って見せると……

「いいか、アスラ、ロン!!……バトスピってーのは強いカードだけでやるものでも、身分だけでやるものでも、ましてやソウルコアでやるものじゃない……諦めない心でやるもんだ!!」

ー!!

「強くなりたいなら、諦めるな!!」

彼女がそう告げると、今度は彼女の心を表すかのように雨が上がって日の光が森の

木々を突き抜けて差し込んで来た。

そして次の日の朝方、シイナ・メザはスーミ村を発った。全ては最強の頂点王になってアスラとロンの希望になるために………

この年、最年少である15歳で最強の三王の座に着いた者がいた。

名はエレン・オメガ

最も身分が高いエックスであるオメガ家の長男として生まれ、僅か10歳でその才能を開花。三王になるための試験の数々をクリアしていき、遂に15の歳でモビルスピリット使いの三王としてこの国の上に立った。

また、母はデジタルスピリットの三王であり、彼はそんな母を尊敬していた。

ただ、そんなある日だ。三王として事務作業をこなしている時、自分のBパッドから一件の電話が舞い込んで来た。エレンは何も気にする事なく、その通話に応じる。

「エレン・オメガだ。用件を早く言え」

身分が最上位な事もあってえらく尊大な態度で問いかけるエレン。

「おっ…出た出た、エレナさんに教えてもらった番号通りだったな」

「??」

Bパッド越しに聞こえてきたのは自分とあまり歳が変わらないくらいの少女の声。エレンはエックスで尚且つ三王である自分を前にしているにもかかわらず、その少女はかなり余裕のある声だと感じ、腹を立てつつも、その内容を気に留める……………

「誰だ貴様は、まるで母上から余のBパッドのアドレスを聞いて来たかのような口振りだな」

そう、その少女の口から出た「エレナ」とは、紛れもなく現オメガ家当主「エレナ・オメガ」の事であり、デジタルスピリットの三王にしてエレンの実際の母親だ。

そしてエレンのその返答を受けるなり、少女は鼻で「フツ」と笑って見せると……………

へそりやまあ勝ったからね、残る三王はアンタただでぞ、ストライクガンダムのエレン
!!
!!

「な、何?!……………貴様、他の三王を……………母上を倒したと言うのか?!」

その言葉に驚愕したエレン。

無理もない。

三王に勝てる者などこの世にほとんどいやしない。それにエレンは他2人の三王の実力を知っている。負けるどころなど想像もできないのだ。

へまあね、エレナさんもそうだけど、テンドウとか言う老け顔もまあ強かったな。それなりに骨は折れたよ

「信じられん……貴様みたいな子供が三王を倒すなどと……」

〈残念ながら異邦人の私は三王塔に入れなくてね、て言うか門前払いでね……頑張つて裏に呼んで1人ずつボコして来たよ〉

「貴様もテンドウと同じ異邦人か……」

〈ああ、国は違うけどね〉

三王塔とはこの国の最大都市オウドウ都の中心にある三王達が挑戦者達を待ち構える塔の事であるが、

余程特別ではない限り異邦人は立ち入る事ができない。そのため、少女は事前に知り合っていたテンドウから1人ずつ呼び出して倒して来た。そしてそれもラスト3人目。モビルスピリット使いのエレンだけだ。

「今から私が指定する場所に来い。そこでバトルと行こうじゃないか……この国の頂点王の座はいただくよ……」

「お、おい待て!!」

エレンがそう言い切る前に通話は途切れてしまい、指定された住所のみがBパッドに記されていた。

「くっ……異邦人が頂点王だ?!……ふざけるな、そんな馬鹿げた事はこの余が認めん!!」

ただでさえ異邦人であるテンドウ・ヒロミがこの国のライダースピリットの三王を務めているのだ。初代頂点王までもが異邦人にさせてはなるまいと言う気迫のまま、エレンはただっ広い三王の間を飛び出して行った……

「……か……」

エレンが少女に呼ばれた場所は、今では使用されていないバトルスタジアム。その当時はここで盛んにバトルスピリッツが行われていたのだが、今となっては単なる古びたスタジアム跡地。

エレンはその錆び切った扉を強引に開くと、その先から漏れ出した光へと足を踏み入れる。スタジアムの中央にはオレンジ色の長い髪を靡かせる1人の少女がいた。

彼女が自分を呼び出した張本人だと言う事は見るより明らかな事実であつて……

「よく来たな。私はシイナ。改めてよろしくな、三王エレン」

「貴様みたいな年端も行かない小娘が本当に母上とテンドウを倒したと言うのか？」

「年齢は15、アンタとおんなじだ。何度も言わせんなって。今度聞けよ……本当だからさ」

15歳と言えばちょうどカラーリーダー達に挑戦できるようになった年齢。

信じられない。こんな短期間でカラーリーダーはおろか三王を2人倒したなど。まだ2ヶ月も経っていないはずだ。もしそれが事実であるのであれば彼女は紛う事なき化物だ。

「そんじやいっちょやるか……これでようやくラストだと思おうと気が楽になるな」
「舐めるなよ小娘如きが。この余を軽んじた罪を思い知るがいい」

そう言い合い、睨み合いながら、2人はバトル用端末、Bパッドをその場でバトル台として展開。これにより、こちら一帯は限定的なバトルフィールドと化した。

そして2人はそのBパッドの端末の上にデッキを置くと、それに合わせてコアが出て現。その中にはバトル中にたった一つしか使えない貴重なコア、ソウルコアも確認できる。

だが……………

「さーてと、アンタはどこまで耐えられるかな?」

「……………なに!」

エレンは見た。

シイナが偉そうな態度で物事を喋ってくると共に大事なコア、ソウルコアを地面に投げ捨てた。Bパッドのコアはデータの塊であるためか、そのソウルコアは落ちた衝撃で

たちまち消滅してしまう。そしてその代わりと言わんばかりに彼女のBパッドには4つ目の通常コアが出現した。

これにより、シイナは少なくともこのバトル中はソウルコアを使えないことになる………

その奇怪な行動にエレンは目を丸くしており………

「な、何をしているのだ？」

「何って、見たらわかるだろ。ソウルコアの代わりに普通のコアを用意したんだよ。ちようど良いハンドデだろ？……私の息子が生まれながらにソウルコアが使えなくてさ、これを使わなくても三王に勝てるって事を今のうちに証明しておこうと思って」

確かに、ルール上は何の問題もない。

ソウルコアを放棄する代わりに4つ目の通常コアでバトルを行う事ができる。

だがそんな事、基本的に何のメリットもない。寧ろデメリットの塊である。当然だ。バトルにおいて必須とも言える便利なソウルコアが使えなくなるのだから………

普通のカードバトラーならば最初から敗北を宣言しているのと同じだ。

「き、貴様は……エックスであるこの余を……この三王エレンを……」

シイナにとって、これは証明に過ぎない。ソウルコアが無くても三王にだって勝てる。頂点王になれると、アスラのために勝手に納得したいだけだった。

「ナメているのかアアアアー!!!」

ー!

エレンの怒声により、古びたスタジアムが軋む。通常のバトラーならばその迫力で卒倒してしまうだろうが、このシイナは平然とした様子でその場に佇む。

……ゲートオープン、界放!!

そしてそんな中、シイナが頂点王になるための最後の試合がコールと共に幕を開けた。

先行は三王エレンだ。シイナに対しての怒りをぶつけるかの如くターンシークエン

スを進めていく……………

「ターン01」エレン

「メインステップ、現れるM1アストレイ!!」

1 [M1アストレイ] LV1 (1S) BP2000

エレンが呼び出したのは世界三大スピリットであるモビルスピリットの1体。細身のフォルムにビームガン、盾を装備したM1アストレイが姿を見せる。

「ターンエンド。異邦人の分際でこの三王エレンに立てついた事、後悔するがいい」

手札：4

場：[M1アストレイ] LV1

バースト：[無]

やれる事を全て終え、そのターンをエンドとしたエレン。次は挑戦者であるシイナの

ターン。ゆつくりとターンシークエンスを進めて行く。

「ターン02」シイナ

「メインステップ……2枚のネクサス、ディーアークとデジヴァイスを配置してターンエンド」

手札：3

場：【ディーアーク】LV1

【デジヴァイス】LV1

バースト：【無】

刹那、シイナの腰に手のひらサイズの小さな2つの機械が取り付けられる。エレンはそのカードを視認するなり、またしても彼女に対して怒りを募らせていて……

「……デジタルスピリット専用のネクサスカード……貴様、デジタルスピリットのデッキで母上を……くっ!!オメガ家を愚弄するのもいい加減にしろ!!」

「フツ……アンタのお母さんは強かったよ。この私と張り合えたデジタルスピリット使い

なんてそうそういなかったからね」

シイナはデジタルスピリットの使い手だ。そのデッキでデジタルスピリットを司る三王エレナに勝利したのだと考えて仕舞えば、その息子であるエレンの悔しさは計り知れなくて……………

「ターン03」エレン

「メインステップ!!2体目となるM1アストレイを召喚!!」

1【M1アストレイ】LV1(1)BP2000

エレンの場に全く同じ機体が並ぶ。

「最初に召喚したM1アストレイの効果!!…ターンに一度、モビルスピリットが召喚された事により、ボイドからコア1つをこのスピリットに置く!!……………余はこれでターンエンド」

手札：4

場：【M1アストレイ】LV1

【M1アストレイ】LV1

バースト：【無】

「どうした？…私の場はガラ空きだぞ。私の事がムカつくなら攻めて来たらどうだ？」
「黙れ下郎!!…いいから早く己のターンを進めろッ!!」

エレンとて直ぐにあの小生意気な小娘に攻撃を仕掛けたかったことだろう。

だが、今現在、場に存在するM1アストレイは攻める用のカードではない。様子見や手堅くコアと手札を固めるためのスピリットだ。下手にアタックして敵に塩を……いや、コアを送るより、ブロッカーに回す方が先決だ。

このアタックを行わない判断は、エレンが怒りを募らせながらも冷静でバトルに当たっている何よりの証拠でもあつて………

「ターン04」シイナ

「メインステップ……と、アタックスステップは何も無しだ。ターンエンド」

手札：4

場：【ディーアーク】LV1 【デジヴァイス】LV1

バースト：【無】

「……………は？」

そのターンをほとんど何もせずに終えてしまったシイナ。その有様にエレンは思わず呆けてしまう。仮にも他の三王を倒した者が一度のターンを無駄にするようなプレイングをすると思えなかったからだ。

「あれ？…聞こえなかったか？…ターンエンドだ。ほれ、さっさとシークエンスを進めな——」

「貴様………どれだけこの余を小馬鹿にすれば気が済むのだ……ッ!!」

「頂点王からの大事な1ターンだ………有意義に使えよ」

『頂点王』と言う発言から、既に自分が勝った気になっているのが伺えるシイナ。

そんな彼女から異端さ、異常さを感じつつも、それよりも先に怒りがどうしても込み上げてくるエレン。彼女を叩き潰すべく、己のターンシークエンスを進めて行く……

「ターン05」エレン

「メインステップ!!……ならば望み通り有意義に使わせてもらおう!!……発進せよストライクガンダム!!」

ー「ストライクガンダム」LV2(2)BP6000

「おつ、出たかキーカードの1枚」

エレンがBパッドに向かってカードを叩きつける。そしてその場に現れたのは新たなモビルスピリット。ストライカーパックと呼ばれるブースターを背中に装備しているストライクガンダムだ。

「この瞬間、2体のM1アストレイの効果!!…ストライクガンダムの召喚によりコアを1つずつ追加!!…さらに上に置かれたコアをストライクガンダムに移動させる!!」

M1アストレイ2体分の効果も起動され、コアが大きく動き出して行く。

ストライクガンダム……………

それは何の変哲もない普通のモビルスピリットの1枚だが……………

自分の一族のカード、即ちオメガのカードを持たない彼が唯一見出したカードだ。彼はそのカードと共に強気者が集うエックスの中で恥とも呼べる努力を積み重ねて来た。

それ故、彼は強くなれた。恥を忍んで積み重ねて来た努力で15歳と言う若さでこの国の三王たる者にまで登り詰めた。

ストライクガンダムとはまさしく彼の魂そのモノであると言える。そしてそのストライクガンダムを軸に、今年だけで多くの挑戦者達を薙ぎ払って来た……………

今回も……………そう思いながら、エレンはメイנסテップからアタックステップへと移行した。

「アタックステップ!!…攻撃せよストライクガンダム!!…効果によりコア1つをこのス

ピリットに追加!!」

「ほお、まだコアを貯めるか、飽きないねー」

ストライカーパックを起動させ、ストライクガンダムが動き出す。低空飛行で翔ける中、余裕の表情を浮かべ続けるシナに対し、エレンはこのタイミングで手札に存在するあるカードを切った……………

「ストライクガンダムがアタックした時、手札にあるエールストライクガンダムの【換装：ストライカーパック】を發揮!!」

「!?!」

「効果により、ストライクガンダムとこのカードを回復状態に入れ替える!!」

ー【エールストライクガンダム】LV3(4)BP8000

ストライクガンダムに赤きシールドと、長めのレーザー銃が装備される。

これがストライクガンダム特有の【ストライカーパック】の効果。ライダースピリットの【チェンジ】さながらの効果のアタック時と言う早いタイミングで發揮できるのが

強み。

「へー……回復状態だね、つまりこのターン2回殴れるって事か」

「貴様に発言権は無い!!……これで決める!!……フラッシュ煌臨を発揮!!……対象はエールストライクガンダム!!」

「……!!」

まだまだ続くエレンの怒涛のカード捌き。次なるはゲーム中1つしか所持できない貴重なコア、ソウルコアを払っての効果発揮だ。

エールストライクガンダムの頭上から別の機体が光となりてエールストライクガンダムと重なり合う。

「現れ出でよ!!……フリーダムガンダムツ!!」

ー【フリーダムガンダム】LV3(4)BP13000

体中に纏う光の粉を振り払いながらエールストライクガンダムの代わりに姿を現したのは、彼のデツキのエースカード、白のボディに青い機械翼が特徴的なモビルスピリット、フリーダムガンダム。

ストライクガンダムと共に彼のデツキを支えている1枚だ。

「煌臨時効果は貴様の場にスピリットがない事により不発となるが、アタック時効果は発揮される!!…アタックしたバトルの終了時に追加でライフ1つをトラッシュに置く!!」

「……!!」

つまりは2点だ。

このフリーダムガンダムはブロックさせなければ、相手に2点のライフダメージを与える事ができる。

「さらに煌臨スピリットはその煌臨元となったスピリットのすべての情報を引き継ぐ!!
…アタック中に回復したフリーダムガンダムはこのターン2度の攻撃が可能!!」

「成る程、フリーダムガンダムの二撃で4点。M1アストレイで殴って1点………全部

が通れば私の負けって事か」

「察しが良いな……これで終いだ!!……異邦人の貴様が頂点王になつてはならんのだ!!」

一度のターンでシイナの全てのライフを破壊するプランを事前に練っていたエレン。しかし、シイナはそんな彼のプレイングを嘲笑うかのように手札のカードを一枚引き抜いて見せた……………

「フラツシユマジック、リアクティブバリア」

「何!?!」

「白使いだったらわかるよな?……このアタックの終了がこのターンのエンドだ……………フリーダムのアタックはライフで受ける…………ツ」

へライフ5?!4?!3!シイナ

迫りくるフリーダムガンダム。その手にビーム状のジャベリンを握り、二連撃でシイナのライフを斬り裂いた。

しかしその瞬間。あたり一帯はたちまち猛吹雪と化してしまい、2体のM1アストレイはおろかフリーダムガンダムでさえ身動きが取れなくなってしまう……

「くっ……防御札を握っていたか……ターンエンドだ」

手札：3

場：【フリーダムガンダム】LV3

【M1アストレイ】LV1

【M1アストレイ】LV1

バースト：【無】

エレンのエンド宣言により、吹雪は晴れ上がり、再びお互いの顔を認識できるようになる。その瞬間に垣間見えたシイナのドヤ顔がまた彼の鼻に付く。

「ターン06」シイナ

「メインステップ……さてと、そろそろ動き出しますか」

そう言いながら、シイナは手札のカードをBパッドに置いた。おそらくはスピリットカード……………

その正体は……………

「私はブイモンを召喚する」

ー【ブイモン】LV2(3)BP4000

彼女の場によくやく現れたスピリットカード。

それは小さな青き竜、成長期のデジタルスピリット、ブイモン。

「…………やはりデジタルスピリット…………」

「召喚時効果、カードを2枚オープンして対象のカードを手札に加える…………よし、成熟期のステイングモン。よってこのカードを手札に加える」

ブイモンの召喚時効果により、シイナは手札に新たにカードを呼び込むが……………

「だがそこで、M1アストレイの効果発揮!!…貴様が己のターンで手札を増やした時、カードを1枚ドロウする」

「!!」

「そして今回はそれが2体分発揮され、計2枚のカードをドロウ!!」

ここに来てM1アストレイの第二の効果が発揮される。エレンはなくなりかけていた手札をここで増加させて見せた。

しかしシイナはその効果に対しても「なるほど」と余裕の表情で微笑むと、ブイモンの追加効果を発揮させた……………

「ブイモンの追加効果!!…2コスト支払う事で手札にある緑の成熟期スピリットを召喚できる!!…来い、ステイングモン!!」

「!!」

1【ステイングモン】LV1(1)BP5000

今度は緑のデジタルスピリットだ。スマートな昆虫戦士、ステイングモンが颯爽とブ

イモンの横に現れる。

「ステイングモンの召喚時効果でコアを増やす。次いでにディーアークの効果で1枚ドロ」

「今度は緑のデジタルスピリットだど!?…くつ…ディーアークの効果に誘発してM1アストレイ2体分の効果、カードを2枚ドロ……」

「さらにバーストをセット」

シイナの場合にいわゆる罠のカードであるバーストカードが裏向きでセットされた。

「アタックステップ、デジヴァイスの効果、成長期のブイモンがいる事により、自分を疲労させて1枚ドロ」

「M1アストレイの効果で余もカードを2枚ドロ」

「そしてブイモンの【進化：青】発揮!!…現れる、エクスブイモン!!」

1【エクスブイモン】LV2(3)BP5000

デジタルスピリット特有の進化の効果が発揮される。ブイモンが青白い光に包まれ、姿形を大きく変化させて行く……………

そしてその光を解き放ち、現れたのは青き鬨竜、成熟期スピリットのエクスブイモンだ。ブイモンと違ってより竜らしい姿となった。

「進化の効果は手札増加の効果に値する。よってM1アストレイの効果で2枚ドロー!!」

「お好きにどうぞ……私もエクスブイモンの召喚時効果を使わせてもらう。デッキから2枚ドローして1枚捨てる」

「っ?!……M1アストレイの効果で再びカードを2枚ドロー……………」

いわゆる便乗ドロー効果を持つM1アストレイの効果を恐れる事なく発揮させて行くシイナ。そのあまりの躊躇や戸惑いの無さにエレンも僅かばかりだが困惑を覚えて行く……………

「そしてステイングモンでアタック!!……効果でさらにコアを追加!!」

ステイングモンにアタックを命ずるシイナ。さり気なくコアが増えていく。そしてここだ。

このタイミングでシイナはあるカードを手札から切つて見せた……………

「フラッシュユ【ジヨグレス進化】発揮!!…対象はエクスブイモンとステイングモン!!」
「!?!」

三王エレンでさえも聴き慣れないその効果名。シイナにそんな彼に構う事なくプレイを続行する……………

「2体の成熟期スピリットを糧に、現れる完全体、パイルドラモン!!」

1【パイルドラモン】LV3(5)BP13000

青き鬨竜と勇猛なる昆虫戦士が0と1のコードに分解、及び結合していき、新たな姿へと昇華していく……………

そして新たに現れたのは赤い頭部、甲殻を纏う竜のボディ、腰に備え付けられた2つ

の機関銃が特徴的なデジタルスピリット、パイルドラモンだ。

「ジヨグレス進化……だと!? ……なんだその進化方法は!?」

「結構珍しい効果だからね……驚いた?」

デジタルスピリットの効果は単体が進化していくもの。

しかしこのパイルドラモンの「ジヨグレス進化」は違う。2体のデジタルスピリットが融合してより強大な姿となって誕生している。

デジタルスピリットの中でもそんな異端な存在に、エレンは流石に驚きを隠さなくて

……

「…だか進化には変わりはない。M1アストレイの効果で2枚ドロ!!」

そう。

デジタルスピリットの【進化】の効果は手札増加にあたる効果。パイルドラモンの【ジヨグレス進化】も例外ではない。

エレンは冷静さを取り戻しながら効果により2枚のカードをドロした。散々効果

を使わされたのもあり、今現在その手札の枚数は15枚。正直言って負ける気がしない
……

だが……………

「待ってたよ。相手の手札増加によるバースト!!…グリードサンダー!!」

!？」

「効果により、その手札を全て破棄し、強制的に2枚ドロウさせる!!」

「何だと!?!…………ツ」

伏せられていたシイナのバーストが反転する。

そしてその瞬間に青い稲妻がエレンの周囲に迸り、大量にあつたその手札を全てト
ラッシュへと破棄させてしまう。彼はその後、効果により新たに2枚のカードをドロウ
するも、手札15枚から2枚にさせられたのは誰がどう見てもかなり危険な状況である
と云えて……………

「貴様……………この瞬間を狙ってたのか、だからM1アストレイの効果を躊躇なく使わせて
来たのか……………!!」

「御名答だ三王エレン。だけど気づくの遅すぎ……………パイルドラモンの召喚時効果!!…
【ジヨグレス進化】で召喚していたらコスト7以下の敵スピリット全てを破壊する!!」
「!？」

「行け……………デスペラードブラスタ―!!」

今度は待機状態にあつたパイルドラモンの召喚時効果がエレンに襲いかかる。

パイルドラモンは腰に備え付けられた機関銃を両手で持ち上げ、これでもかと言わんばかりに連射する。エレンの場にいる2体のM1アストレイは堪らず爆散してしまうが……………

「フリーダムガンダムには【PS装甲：コスト7以下】がある!!…コスト7のパイルドラモンの効果では破壊されぬ!!」

フリーダムガンダムはそのパイルドラモンの弾丸を受けても装甲を貫かれる事はなく、難無く耐え凌いで見せる。

「だったらこんなのはどうだ?…アタックステップ続行!!…パイルドラモンでアタック

!!…効果によりコアを2つパイルドラモンに追加する事で、ターンに一度回復!!」
「!？」

ー【パイルドラモン】（疲労??回復）

パイルドラモンで攻撃を仕掛けるシイナ。その効果でコアが追加されると共に回復状態となる。

「パイルドラモンとフリーダムガンダムのBPは同じ13000!!…ブロックしたら相討ち!!…PS装甲は効果による破壊は守れてもバトルによる破壊からは守る事はできない!!」

「くっ…ライフで受ける…っ」

へライフ5??4へエレン

甲殻で強化されているパイルドラモンの拳がエレンのライフ1つを粉々に打ち砕いた。

パイルドラモンが厄介なのは百も承知なのだが、フリーダムガンダムを失ってまで破壊する程でもないと思つての判断だろう。手札の枚数は残り2枚であるため、英断と言える。

「もう一度だ。言つて来いパイルドラモン!!」

再び拳を固めるパイルドラモン。この際にさらに追加でコア2つがスピリット上に置かれた。

「それもライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ4??3〉 エレン

固められたパイルドラモンの拳が今一度エレンのライフ1つを砕いて見せた。

「ターンエンド。さあ、次の私のターンで終わりだ。せいぜい最後のターンを楽しむ事だ」

手札：6

場：【パイルドラモン】 LV3

【ディーアーク】 LV1

【デジヴァイス】 LV1

バースト：【無】

たつた1ターン。

たつた1ターンの出来事だった。自分が並べていたモビルスピリットはエースを残して一掃。増えていた手札も残りわずかにされ、強力なデジタルスピリットも場に立たされた。それがたつた1ターンでの出来事だった。

エレンはこの時から認めたくもないというのに、不本意ながらシイナの底が知れない実力を認めてしまっていた。

はつきり言って化物だ。これでさらにソウルコアを使っていたらと思うと背筋が凍りつく。

「フツ……最後のターン？……笑わせるな。それはこっちのセリフだ」

「？」

だが、相手がいくら怪物、化物と言われても仕方がないほどの実力者だとしても、異邦人だ。奴が頂点王になる事を許してはいけない。

エレンは最高峰の身分エックスの、オメガ家の、三王としての誇りを掛け、ターンシークエンスを進行させていった……

「ターン07」エレン

「メインステップ、フリーダムガンダムを召喚!!」

ー【フリーダムガンダム】LV2(2)BP9000

「召喚時効果でコア2つをフリーダムガンダムに追加!!」
「ん?……最初のフリーダムガンダムと効果が違う……?」

エレンの場に新たに現れたのは2体目となるフリーダムガンダム。しかし、その効果は最初に煌臨したフリーダムガンダムとは全くの別物。

その点でシイナは若干の違和感を感じていて……………

「アタックステップ!!…2体目のフリーダムガンダムでアタック!!…さらにこのフ
ラッシュユタイミングで1コストを支払い、転醒を發揮!!」

「ツ……………転醒か!!」

2体目のフリーダムガンダムのカードの裏面に新たな記述が加えられる。そしてエ
レンはそのカードを手に取り、新たにその面が表になるようにBパッドに叩きつけた
……………

転醒……………

【進化】や【チェンジ】【煌臨】に並ぶスピリットの強化方法だ。今現在で確認されてい
る母数も少ないレア効果でもある。

「現れ出でよ!!…フリーダムガンダム・ミーティア装備!!」

1【フリーダムガンダム【ミーティア装備】】LV2(3)BP15000

戦艦のような何かがフリーダムガンダムの背中に装着される。その数多くの砲手がフリーダムガンダムの新たな武器と化した。

「転醒時効果!!……コスト7のスピリット全てをテツキの下へ戻す!!……消え去れパイルドラモン!!」

「!!」

ありったけの粒子砲を発射するフリーダムガンダム・ミーティア装備。パイルドラモンはひとたまりもなくそれに飲み込まれ、塵となって消滅してしまう……………

「アタックは続行!!……このアタックはブロックできん!!」

「ライフで受ける……………ッ」

〈ライフ3??2〉シイナ

ブロックしようにもスピリットがない。シイナはそのアタックをライフで受ける宣言をし、フリーダムガンダム・ミーティア装備の粒子砲をライフで受け止めた。

「これで貴様のライフは残り2つ!!……フリーダムガンダムの攻撃で終いだ!!」

エレンはそう言いながら残った最初のフリーダムガンダムを発進させる。この攻撃が通れば2点のダメージが入り、シイナの負けが確定となる……

だが………

彼の目の前に存在していたこのシイナと言う化物はこの程度ではくたばらなくて………

「フラッシュマジック、デルタバリア!!」

「!？」

「アタックはライフで受ける………ッ」

へライフ2??1??1シイナ

何度も何度もビームサーベルでシイナのライフを斬り裂こうとするフリーダムガン

ダム。しかし、シイナのライフはいつまで経っても1より少なくならなくて……………

「無駄だフリーダムガンダム。デルタバリアの効果により、このターンの間、コスト4以上のオマエのアタックと効果じゃ私のライフを1より少なくできない」

「くっ……………まだそんな防御マジックを……………」

フリーダムガンダムに語りかけるようにデルタバリアの効果説明を行ったシイナ。それを聞くなり、フリーダムガンダムは大人しくエレンの場に帰還する。

「……………ターンエンドだ……………」

手札：2

場：【フリーダムガンダム】LV3

【フリーダムガンダム「ミィティア装備」】LV2

バースト：【無】

致し方なくそのターンをエンドとしてしまうエレン。そして次はシイナが勝利宣言を行ったターンが幕を開ける。

シイナは薄い笑いを浮かべながら己のターンシークエンスを進行させていった
……………

「ターン08」シイナ

「メインステップ……ギルモンを召喚」

ー【ギルモン】 L V 1 (1) B P 3 0 0 0

「ツ……今度は赤のデジタルスピリットだ?!? ……コイツ、いったい何色のカードを使う
と言うのだ……………」

シイナが新たに召喚したのは小さい肉食恐竜のような姿をした赤の成長期デジタル
スピリット、ギルモン。

青、緑、白に加えて極め付けは赤。全く噛み合わないカード達を重ね合わせ、それを
容易く扱うシイナは正に強者だと言って……………

「ディーアークの効果で1枚ドロ……さらにマジック、ブルーカード
!!」

「効果によりカードを4枚オープン。その中にギルモンと同じ赤一色のデジタルスピ
リットがあればギルモンをデッキ下に戻し、1コスト支払い召喚できる」

マジックによりシイナのデッキから計4枚のカードがオープンされる。

そしてその中には確かに赤一色のカードが確認できた。

「フツ……効果は成功。私は私のエースカードを召喚する!!」

「なにつ!?!…貴様のエースはパイルドラモンではないのか!?!」

「誰もそんな事は言っていないぞ………来い、赤の究極体、デュークモンツ!!」

ー【デュークモン】LV3（6）BP18000

青いカードがギルモンの身体を潜り抜けていく。ギルモンはその中で進化に進化の
姿を重ね合わせていき、白い鎧、槍、盾を装備し、赤いマントを靡かせる赤属性の究極
体スピリット、デュークモンと姿を変えた………

このデュークモンこそがシイナのデッキの最強カード。エースなのだ。

「そしてブレイヴカード、裁きの神剣リ・ジエネシスを召喚し、デュークモンに直接合体!!…召喚の際、コストとしてエクスブイモンのカードを除外」

「**【デュークモン+裁きの神剣リ・ジエネシスへR】LV3(6)BP28000**

「ツ……び、BP28000だ?!」

立ち籠める雷雲。鳴り響く雷音より、巨大な神剣、リ・ジエネシスがシイナの場に投下される。

デュークモンは槍と盾を消滅させ、両手を露わにすると、その身の丈程もある神剣をその手に取ってみせ、合体スピリットとなる。

エレンはこの時、初めてシイナを恐れていた事がわかった。自分は最初からこの化物に至極怯えていたのだとようやく自覚してしまう……

「仕上げだ……アタックステップ!!…やれデュークモン!!…効果でフリーダムガンダ

ム・ミーティア装備を破壊!!」

「!!」

正しく裁きの一撃。デュークモンはり・ジエネシスを振るう斬撃だけでエレンのフリーダムガンダムをミーティア事斬り裂いてしまう。

もはやPS装甲など無意味。

終わりだ……………

そう自覚してしまっても、エックスのオメガ家として、三王として、最後まで手札のカードを切って……………

「ツ…………フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「!!」

「これによりこのターン、フリーダムガンダムのBPを3000上げ、疲労状態でのブロックを可能にする!!…ブロックだフリーダムガンダム!!」

最後の頼み綱フリーダムガンダムが裁きの神剣を手にするデュークモンに果敢に挑む。

ビーム状のジャベリンでデュークモンを斬り裂こうとするも、デュークモンの強者が放つ鋭い眼力とオーラにより吹き飛ばされてしまう。

そしてさらにシイナは追い討ちをかけるようにデュークモンのもう一つの効果を発揮させて……………

「デュークモンの効果。ターンに一度、トラッシュにある滅龍スピリットを手札に戻す事で回復する」

「なにっ!？」

「トラッシュにあるギルモンを手札に戻して回復しろ、デュークモン!!」

ー【デュークモン+裁きの神剣リ・ジエネシス〈R〉】(疲労??回復)

ブイモンの召喚時効果の際にトラッシュに送られていたギルモンのカードがシイナの手札に回収されると共に、デュークモンは回復状態となってみせる。

これにより、このターン中は2度目のアタックが行える。エレンにとっては絶望的な状況だ……………

「先ずはフリーダムガンダムを破壊!!」

シイナの言葉にデュークモンはゆっくりと頷いて見せると、裁きの神剣を全力で振り下ろしてみせる。フリーダムガンダムはそこから発生した激しい衝撃波に飲み込まれ、爆発四散してしまう……

「フリーダムガンダム……馬鹿な……こんな事が……」

圧倒的な実力の差。痛感したくなくとも嫌でも痛感してしまう。

自分が今までやっていた血反吐を吐くような努力も……

まるで全てはこの化物が頂点王になるための布石だったのでと感してしまう程

……

「デュークモンでアタック!!……合体によりトリプルシンボル!!」

「ッ!!」

気がつけば自分の場には自分を守る者は誰一人としておらず、化物に使役された聖騎

士だけが目の前に存在していて……………

そしてその聖騎士は裁きの神剣を彼のライフに向けて振り下ろした……………

「認めん……………余はオマエを……………認めんぞオオオー!!!」

〈ライフ3?0〉エレン

ピー……………

エレンの最後のライフが砕け散ると共に、彼のBパッドから彼の敗北を告げるような無機質な機械音が鳴り響く。

即ちシイナの勝利だ。あの三王エレンを相手に実力差を見せつけての完勝だ。

「……………私が……………頂点王だ」

「くっ……………!!」

今この瞬間。

三王が余にも強過ぎたせいで誰一人として存在していなかったこの国に、初代頂点

王が誕生した。歴史が動いた快挙である。

その名もシイナ・メザ。彼女はそれを証明するかのように右拳を天に突き上げる。それを目にしていたエレンは言い返せる言葉が無く、ただただ平伏していた。

「じゃあな。それなりに楽しかったよ」

シイナはそのままエレンを素通りし、スタジアムを後にする。

この時のエレンの悔しさは尋常では無かった事だろう。何せ、相手はこの国出身ではない異邦人。自分の母と同じデジタルスピリットの使い手で、己の魂とも言えるモビルスピリットを全て薙ぎ払われての完敗。

極め付けはソウルコア無しでそれをやってのけられた事だ。

発言からして何か理由があつての事なのは理解していたが、こんな奴が頂点王になつてはダメだと心から思っていた……………

…

「よお、おめでとさん」

「あつ…テンドウ…」

日の光が一切通らない真夜中。

ライダースピリットを司るこの国の三王、テンドウ・ヒロミは、廃墟と化したスタジアムの門前でタバコを吸いながらシイナを待っていた。言動からしてどうやらバトルの結果も知っているようである。

いや、一度彼女とバトルして負けたテンドウならばこの結果は既に知っていたのかも
しれない。

「どうだった…手応えは？」

「ん…まあまあかな。もうちよいやるかと思ったね」

「フン…流石だな」

おそらくこの世界で最強の三王の実力を「まあまあ」だと評価するのはこのシイナくらいなモノだろう。しかし悔しい事に彼女にはそれだけの実力と実績がある。

「スーミとか言うボロ村に帰んのか?…頂点王となったからにはオマエさんはこのオウドウ都の人間になっちまったぜ」

「知ってる……でもいいよ、あの子達は自力で勝ち上がって来るさ。なんてったって私の息子なんだから」

「……………親バカだな」

シイナはこの時こそそうは言っていたが、偶にはスーミ村に帰るつもりではあった。

もちろんアスラとロンは自力でも必ずこのオウドウ都に訪れ、並みいるカラーリィダーや三王を撃破するだろうと信じて止まなかったが、とある理由ができてしまったのである……………

「おい!!…おいしっかりしろエレナさん!!…死んじやダメだ!!」

とある日、シイナが頂点王になってまだ間も無い日だった。

オウドウ都の誰もいない街の裏路地、その片隅にてシイナの悲痛な叫び声が木霊す

る。

シイナに抱えられた女性は一エレンの母親であり、この国のデジタルスピリットの三王でもあるエレナ・オメガ。腹部を刃物か何かで刺されたのか、辺りは血だらけである。シイナが到着した時点ではもうこの有様であり、正直言つて、誰がどう見てももう彼女は助からないと思つてしまう事だろう……

「し、シイナ……さん……お、おね、お願いが……」

「喋んな!!……傷口が開いちまう!!……早く病院に……」

エレナは今にも消えかけている掠れた声色でシイナに語りかける……

「私が死んだら……エレンは……今以上に多忙に……な、なるでしょう……いや、自らその道を進むに違いありません……あの子は……そういう、子です……」

「だから喋んなって……」

「娘を……エールのお世話を貴女に……お願いしたい……人一倍繊細なあの子はきつと多くの涙を流してしまうでしょう……あの子をどうか……どうか……」

「わかった……わかったから……」

シイナにもう何も出来なかった。手の施しようがなかった。ただできたことと言え
ば、ただ彼女の遺言を聞き入れることしかやるべき事だけだ。

「こ、このカード達を……エールの元に……」

「ッ……オメガの赤のカード達!」

エレナが震える手でシイナに渡したのは、今まで自分が使用してきたオメガ家のカー
ド。その片割れ。継承者だった彼女が逝ってしまう今、次の使用者を探し求めているの
か、赤く点滅している。

エレナにはわかっていた。次の持ち主が娘のエール・オメガになる事を……

しかし、弱い5歳の少女がこのカードの継承者になる事はどれだけの重圧がのしか
かってしまうのか計り知れないものがある。

「……ごめんねエール……ごめんねええ……弱いママで……あなたを……あなたとエレン
の成長を見守ってあげられなくて……ごめんね……」

「エレナさん……」

涙を流しながら後悔の言葉が次々と溢れ出して来るエレナ。
自分が亡くなった後の家族の状況を想像するとどうしても悲しくなり、己の弱さを心の底から憎んでしまう。

「ッ……………ああ……………任せろ……………任せろエレナさん!!…娘さんは必ず、この頂点王が立派に育てます!!…だから……………だからどうか笑ってくれ……………未来に怯えず、2人の幸せを願って……………笑ってくれよ!!」

「……………ええ……………あ、ありがと……………シイナ……………さん……………」

エレナはシイナの言葉を聞いて、最後は家族の幸運を信じ、笑顔を見せて息を引き取った……………

その直後だ。曇りだった天気が、まるで世界が彼女の死を嘆き悲しんでいるかの如く豪雨に様変わりしたのは……………

シイナはその雨に打たれながら、ある決心をした。いや、そんな程度の決心、豪雨になるから決めていた……………

あの子を……………エレナの娘、エールのお世話をすると……………

「(ハハ)……だよね？」

そこからさらに時は流れ、1週間は経過したか、エレナの葬式や儀礼なども全て解決し、ようやく多くの者達がその悲しみを克服した時だった……

シイナはオウドウ都にあるオメガ家の住う巨大な敷地に足を踏み入れていた。本来ならば門前払いであるが、頂点王になった今は出入り自由だ。

そして今はオメガ家の城にあるとある一室の扉の前にいる。そこは、そこそが、エレナの言っていた娘のエールの部屋だった……

シイナはちよつとばかしの勇気を振り絞ると、その扉を開け、部屋の中へとお邪魔した。

「やあ、君がエールちゃんだね？」

「……………誰？」

その中にいたのはまるでお人形さんのように可愛らしい女の子。この子が当時5歳のエール・オメガだ。

突然入居して来たシイナに若干の戸惑いや困惑を感じているようだ。

「君にこれを渡そうと思ってね……………ほい」

「？」

シイナはそう言いながら、エールと目線を合わせるために腰を下ろし、エレナから授かっていたオメガ家のデジタルスピリットの片割れを渡した。

終始赤く点滅していたカードだったが、エールの手に渡った途端、それは静まりかえった。どうやら本当にエールを次の持ち主と認めたようだ……………

「これ……………ママの……………ッ」

そのカード達を見て、亡き母の事を思い出したか、思わずして涙が込み上げてくるがどうか堪えるエール。

シイナはそんなエールの様子を見るなり、その頭の上にポンツと手を置くと……………

「よし!!…これから私がエールちゃんのお姉ちゃんだ!!…遠慮せずに『お姉ちゃん』と呼んでくれたまえ!!」

シイナは胸を張りながら堂々とエールの前で宣言して見せるが……

「……………いやよ」

「えええええ!!」

エールは涙を拭いながらそれを真っ向から否定して見せた。

「なんでえ!?!…完全に笑いながら「お姉ちゃんツ!!」って言う流れだったじゃん!!…感動の1ページになる瞬間だったじゃん!!」

「知らないわよ、私はエックスよ」

「私は頂点王だ!!…偉いんだぞ」

なんだかんだで一瞬にして仲良くなるシイナとエール。その様子は本当の姉妹さな

がら。

口ではあまり言えてはいないが、10年経った今でも、エールはシイナを本当の姉のように思っていた。それ程までに彼女はエールの中で大きな存在となっていたのだ。

そしてシイナは頂点王故の多忙さと、エールを大きくなるまで見届けるよう言われたエレナの遺言から、このオウドウ都を簡単には離れられなくなってしまった……

それがアスラとロンにいるスーミ村に帰る事ができなくなった大きな要因だ。しかし、何度も言っているように、シイナは彼らを信じている。

いつか大きくなって自分を倒しに来ることを……

それが楽しみでしようがなかった……

「つ……なんだ、なんなんだオマエは!? ……なんなんだその『赤い龍』は!？」

そして時は経ち、さらに10年もの月日が流れた。

国の片隅に存在するコモンの人々が住う小さな村、スーミにて、盗賊「舞蛾のクサリ」

はバトルしている敵に戦慄し、恐怖に慄いていた……………

目の前にいるのはクソチビでクソガキで、最も自分の低いコモンで……………しかも生まれつきバトルに欠かせない『ソウルコア』が使えないこの世界の欠陥品のような存在で、残りライフはたったの1つであるというのに……………

その少年と、その背後で鳴動する赤き龍にただただ怯える事しかできなくて……………

「オレは……………諦めねえ……………ツ!!」

15歳になった少年、アスラは鋭い眼力でクサリを睨みつける。そして最後まで諦めなかったからこそ握る事のできたその『赤いライダースピリット』を手に、

今……………最大の友であり、ライバルでもあるロンと共に、頂点王になったシイナの背中を追いかける……………

これは、バトルスピリッツの勝敗、優劣が全てのとある世界で、生まれながらに『ソウルコア』が使えない少年アスラが……………

己の力を証明するため……………

そして師であるシイナとの約束を守るため……………

最強のカードバトラーの称号“頂点王”を目指す物語………

23コア 「戦慄、仮面ライダー王蛇」

ライライ町……

オウドウ都周辺にある広大な街の一つであり、黄色のカラーリーダーが住う場所。

華やかなパレード、優雅なテーマパークなど、兎に角娯楽に富んでいるこの街だが、それは飽くまで表面ではの話。裏路地、いわゆる裏面では、今日も無法者達がたむろしている。

だが、そんな裏路地を……ニヤニヤと薄笑いを浮かべる無法者達の前を堂々と素通りしようと歩みを進みていく人物が1人……

それはアスラの最高の友にして最大のライバル、黒髪の癖毛で、高身長なイケメン、口ンだ。

「おっと止まりな兄ちゃん……！」

悪趣味なドクロの首飾りをした無法者集団の1人の男性が、そんなロンの行手を阻んだ。

そしてこの後に想像できるパターンはほぼ一択……………

「へっへっ……………オマエ、ライダースピリット所持者のスーミのロンだろ？……………オマエのライダースピリットを置いていきな。さもねえと……………どうなんのかわかってるよなく？」

「……………」

ライダースピリット狩りのつもりなのか、男のその言葉を歯切りに、無法者集団がゾロゾロと集まっていく。その数約10数名と言ったところか……………

白のカラーライダー、鉄壁の防御力でライフ5を維持し続けるゴゴ・シラミネを下した事によって、ロンやアスラは今ではそれなりに名前が知れ渡っている。特にロンは端正な顔付きや背の高さもあって、身分を問わずに主に女性からの人気が高い。

しかし今回はその人気の高さが仇となり、今現在こうしてライダースピリット狙いの無法者達に行手を阻まれているわけだが……………

「……………御託はいい。奪いたければ勝手に奪え……………ただし、力づくでな」

ロンは無法者達にそう言い放ちながら自分のBパッドを展開した。

「この数を1人で相手しようつてか!!……やっぱコモンのイキリ野郎つて噂は本当なんだな!!」

無法者達もまたロンに合わせてBパッドを展開した。

……「力づく」と言えば己の肉体で殴り合うのが一般的に脳裏に浮かんでくるだろうが、この世界は違う。何度も言うように、バトルスピリッツこそが至高であり、バトルスピリッツの優劣こそが絶対なのだ。

……ゲートオープン、界放!!

そして、ロンのライダースピリットを力づくで奪うべく、彼と無法者達によるバトルスピリッツがコールと共に開始される……

しかし、このバトルの決着が着いたのは僅か数分だった。

無法者達が数で押し切るかと思えば、1人、また1人とロンに次々と倒されていき

……

「……………う、ウソだろ……………この数をたつた1人で……………」

「さっさとどいてもらおう。オレは早く5番目のカラーライダーのいる紫の町に行かないといけないからな」

あつという間に残り1人にされていた。その残っていた人物は最初にロンの前に現れた者であり、彼こそがこの無法者集団のライダー的存在だったのだが、やはりその程度のチンケな組織の頭ではロンには敵わなくて……………

ロンは一刻も早く5番目の町に赴きたかった。理由は単純にこの町の黄色のカラーライダーは倒したから。用済みなのだ。チンタラしていると、あのうるさい幼馴染みがやって来る。

それだけは避けたいロンはこうして裏路地と言う近道を通っていたのだった。

「仮面ライダーナイト……………アタックだ!!」

「ヒイヒイヒイ……………ツ!?!」

ロンが自身の持つライダースピリット、ナイトにアタックの指示を送ると、完全に威

勢のなくなった男は情けない声を上げてしまう。

そしてナイトは装備された黒槍を手に、その男の最後のライフを一刀両断に見せて……………

「そ、そんなバカな……………ただのコモンにこんな力が……………」

「……………約束通り先を行かせてもらう」

酷く落ち込む無法者。

こう言う時は何かカッコいいセリフでも掛けて上げながらこの場を立ち去るべきなのだろうが、基本無口なロンがそんな事を言うわけもなく、というかどこの誰かも知らない相手にそんな言葉を掛けてあげるわけもなく、ただただ歩みを進めてこの場から立ち去ろうとするが……………

「おい、待ちな」

「!!」

無法者達とはまた別の男の声がロンの耳を通過する。その声はなぜだかはわからな

いが、妙な殺気を感じさせるものがあつた。

ロンがその方へと首を向けると、そこには茶髪の大男がニタニタと不気味に笑いながらこちらを見つめていて……………

「あ、アイツは……………」

「……………、殺し屋……………大蛇のオロチだ……………」

「殺される……………」

「逃げろ……………逃げろオオオー!!!」

そのオロチと呼ばれる大男を目に移すなり血相を変え、一目散に逃げ去っていく無法者集団。無論悪い意味でだが、余程この人物が有名なのが伺える……………

「何だオマエは。生憎だがオレには時間が無い。用があるならさっさとしてくれ」

ロンは不気味な殺気を常時放っているオロチに対しても臆する事なく強気な物言い
で接する。オロチと言う人物そのものを知らない事もあるのだろうが、常人であれば卒
倒してしまう程の空気の中で平然としているのは流石と言える。

「なあに。オマエ強そうだからな。ちよつとこのオレと遊んで欲しいだけさ……無論、コレでな」

「……………バトルか」

オロチはそう言いながら自分のBパッドを取り出した。

彼が要求しているのは間違ひなくロンとのバトルスピリッツだ。売られたバトルは高値で買うのがこの世界のカードバトル……ロンもそれに合わせて当然のようにBパッドを構える。

バトルしてくれると思ひ至つたオロチはその様子に再びニタニタと不気味に笑い出して……………

「そうこなくちやな……!!」

「さつきも言つたが、オレには時間が無い。チンタラしてたらあのバカが追いついて来るからな。さつさと終わらせてやる」

「へっへ……期待してるぜ」

常に闘争本能と殺気が剥き出しの大男。ロンとてこの大男が普通のバトラーとは掛
け離れた存在かは一目でわかる。

しかし、『頂点王になる』と言う夢を掲げている以上、誰が相手であろうと挑まれたバ
トルからは避けられない。

……………ゲートオープン、界放!!

そしてこのライライ町の裏路地の片隅にて、コールと共にスーミ村のロンと、謎の大
男オロチのバトルスピリッツが幕を開ける……………

先行はロン……………

「ターン01」ロン

「メインステップ、オレはネクサスカード、ミラーワールドを配置」

ー【ミラーワールド】LVI

ナイトと龍騎の戦う世界、ミラーワールドが配置される。その影響で現実のこの世界が鏡像の世界へと移り変わる。

「フツ……ミラーワールドね〜」

「……何がおかしい？」

「いや、何でも……」

「……オレはこれでターンエンドだ」

手札：4

場：【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

ロンのミラーワールドを視認するなり、何を思っているのか、不気味な乾いた笑い声を晒すオロチ。

ロンはそんな彼の笑いに疑問を浮かべながらも、このターンをエンドとした。

「ターン02」オロチ

「メインステップ……バイ・パイソンをLV2で召喚……!!」

┌【バイ・パイソン〈R〉】LV1(2S)BP3000

「オレと同じ……紫か」

オロチが初手で呼び出したのは白蛇の姿をしているスピリット、バイ・パイソン。白い身体の所々に埋められている紫のアメジストがそれなりのインパクトを残す。

「アタックステップ!!……バイ・パイソンでアタック!!……効果で自身のソウルコアをトラッシュに置く事で2枚ドロ―だ」

「!!」

┌【バイ・パイソン〈R〉】(2S??1)LV2??1

貴重なソウルコアがトラッシュへと送られる。

しかし、払った代償はきつちりと等価交換で返ってくる。オロチは2枚のカードを新たにデッキからドロした。

「アタックはライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ5??4〉ロン

バイ・パイソンはロンのライフバリアに噛みつき、それを破壊した。

ロンにそれなりに大きなバトルダメージが蓄積される。そしてこの時の感覚を彼は何となく覚えていて……………

「この感じ……………あのチート野郎の時と同じ……………!?!」

彼の言うチート野郎とはトウエンテイの事である。何故かは知らなかったが、あのコラボダンジョンでの一件では普通のバトルでは先ず有り得ないダメージがあった。

今回のそれはあの時と似ている……………

「どうした?…オレはこれでターンエンドだ……かかって来いよ」

手札：6

場：【バイ・パイソン】LV1

【バースト：【無】

「ツ……オレのターン!!」

余裕のある表情を浮かべるオロチ。ロンはこれ以上深い事は考えず、己のターンを進行していった……

「ターン03」ロン

「メインステップ、オレはアーマーバットと仮面ライダーナイトを召喚!!」

1【アーマーバット】LV1(1)BP1000

1【仮面ライダーナイト】LV1(1S)BP2000

「来たか同型……峻るな」

ロンの場合に鎧を装着した蝙蝠型のスピリット、アーマーバットと、自分を選んだライダースピリット、ナイトが現れる。

その際、ナイトを見たオロチはボソつと「同型」と意味深に呟くが、ロンの耳には伝わってはおらず……

「召喚時効果でドロロー!!……さらにミラーワールドのLVを2に上げ、アタックステップ!!……駆けるナイト!!」

早速召喚したナイトで攻撃を仕掛けるロン。ミラーワールドのLV2効果でカードがオープンされるが、アドベントカードではなかったため不発。カードは手札への加えられた。

「来いよ、ライフだ!!………ッ」

〈ライフ5??4〉オロチ

ナイトの剣から繰り出される斬撃がオロチのライフを襲う。1つが紙の如く斬り裂かれるが……………

「やっぱいいなオマエ……………どうした? ……もう一発打って来い……………!!」
「!?!」

まるでアタックが快感であつたかのように、不適に喜び出すオロチ。ロンにさらなるアタックを要求してきた。

単に彼を挑発しているのか……………それともまた何か深い理由でもあるのか……………はたまた何も考えずにバトルと言う名の戦いを楽しんでいるのかは彼の溝知る事だ。

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【アーマーバット】LV1

【仮面ライダーナイト】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

「んだよ、来ねえのか」

しかしロンは冷静だった。追撃は控え、アーマーバットを次のターンの防御に回した。オロチはロンのプレイングに少々落胆しながらも己のターンを進行して行った………

「ターン04」オロチ

「メインステップ……ボーン・ダイルを召喚」

ー【ボーン・ダイル】LV1(1)BP2000

オロチの場に骨化したワニ型のスピリットが現れる。効果なのか、そのスピリットの頭上には常に白のシンボルが2つ浮いている。

そしてオロチはさらに手札にあるカード1枚を引き抜いて………

「さらにコイツ……月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルムの声を聞け!!」
「!!」

「月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム」LV2（2S）BP10000

ボーン・ダイルが不足コストで消滅する。

しかしその直後、オロチの背後に神秘的な満月が現れたかと思えば、死煙を纏いし漆黒のドラゴンが咆哮を張り上げ、武器である死神のような鎌を手に、この場へと参上した……

「コイツは……」

「凄いだろう？……だが見た目だけじゃない」

その迫力に僅かばかり意識を呑み込まれるロン。そしてオロチはその後徐に「アタックステップ……」と、宣言して……

「ルナヘイズでアタック!!……その効果、手札のカード一枚を裏向きで手元に置き、このスピリットのBP以下のスピリット1体をデッキ下に戻す!!」

「なに!?!」

「オレは手札のカード1枚を裏向きで手元に置き、ナイトを消す!!」

ルナヘイズの鎌が漆黒の闇を纏う。ルナヘイズはその鎌でロンのナイトを斬り裂いてみせる。するとナイトはたまらず粒子と化してロンのデッキの一番下へと送られてしまった……

「アタックは継続中だ」

「くっ……ブロックだアーマーバット!!」

咄嗟のブロック命令。しかしアーマーバットでは全く敵にならない。鎌を振るう一撃であっさりと斬り裂かれてしまった。

「続けバイ・パイソン!!」

「ライフだ!!……ぐっ」

〈ライフ4??3〉ロン

またしてもバイ・パイソンがロンのライフバリアを噛み砕く。

「……ターンエンドだ。どうした?……祭りはこれからだろ?」

手札：4

場：【バイ・パイソン〈R〉】LV1

【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2

手元：【裏向き】×1

バースト：【無】

「どうしたどうしたと喧しいヤツだ……いいだろう、ここから全力で相手してやる!!」

決してロンが手を抜いていたわけではない。

しかし、オロチにはそれなりの覚悟を持って戦うしかないと考えた彼は、ここからこのバトルに対しての意識をさらに向上させていって……

「ターン05」ロン

「メインステップ、2体目のアーマーバットを召喚」

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

今回2体目となるアーマーバットがロンの場で翼を翻す。そして立て続けにロンは立て続けに手札のカードを構えて……………

「そして……………第二のナイトをLV2で召喚!!」

ー【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2S)BP6000

通常よりも性能が向上した第二のナイトがアーマーバットの横に並ぶ。

「召喚時効果!!……………敵スピリット1体のコア2つをリザーブへ送る!!……………ルナヘイズを対象

に取る!!」

「無駄だ!!……ルナヘイズの【重装甲・紫／白】でそれを無効!!……代わりにバイ・パイソンで受けてやる!!」

「ッ……!!」

第二のナイトが黒槍を振り飛ばす斬撃を発動させる。しかしバイ・パイソンはそれに引き裂かれてしまうものの、ルナヘイズは重厚な装甲でそれを弾き返してしまう。

「また装甲か……なら直接ライフを攻めるのみ!!……行けナイト!!」

ロンの指示で黒槍を構えて走り出す第二のナイト。ミラーワールドの効果でカードが手札に加えられた。

彼は紫の効果では突破し辛いルナヘイズを無視してライフを削る作戦に出たのだらう。

だが……

「ルナヘイズのさらなる効果!!……敵スピリットがアタックした時、回復。その後1枚引

く」

「なに!？」

「ルナヘイズ、相手してやれ」

第二のナイトがオロチの眼前に迫った直後、ルナヘイズが眼光を輝かせ、回復。巨大な手でナイトを鷲掴みにし、持ち上げて見せる。

「さらにブロック時、手札1枚を裏向きで手元に置き、今度はアーマーバットをデツキの下に戻す」

「ぐっ……」

アーマーバットがルナヘイズの鎌に斬り裂かれる。さらに鷲掴みにされた第二のナイトが地面に叩きつけられ、堪らず爆散。

ロンの場は再びミラーワールドのみとなった。

「……ターンエンドだ……」

手札：6

場：【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

自分のターンのまさかの惨劇……

しかしそう簡単に試合を投げ出すわけにはいかない。彼は頼みの綱である手札を確
認しながらそのターンをエンドとした。

「ターン06」オロチ

「へっへっ……メインステップ、先ずはバーストを伏せ……手元からボーン・ダイルを呼
ぶ」

ー【ボーン・ダイル】LV1(1)BP2000

いわゆる罠のカードであるバーストが伏せられると共に、ルナヘイズの効果で裏向き
で置かれていたカードが反転。オロチの場へと置かれる。再び骨化したワニ型のスピ
リット、ボーン・ダイルが姿を見せるが……

「さらに不足コストをそのボーン・ダイルより確保……手元より2体目のルナヘイズをLV2で召喚!!」

「なに!?!」

1 【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】 LV2 (2) B P 1 0 0 0 0

またしてもすぐさま消滅するボーン・ダイル。その代償により、2体目のルナヘイズがオロチの場へと顕現……それは最初の1体目と共鳴するように咆哮を張り上げた。

「くっ……」

「アタックステップ!!……2体のルナヘイズで攻撃!!」

オロチの指示を聞くなり死神のような鎌を手には構えて宙を翔ける2体のルナヘイズ。場がガラ空きのロンはこれをライフで受ける以外の選択肢が無くて……

「ライフだ!!……ッ」

△ライフ3??2??1△ロン

両サイドから2体のルナヘイズが鎌を振り、ロンのライフを斬り裂く。
その残り数は風前の灯。一気に追い詰められてしまった……

「ターンエンド……どうした?…終わっちゃまうぞ。まだまだオレと遊んでくれ」

手札：5

場：【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2

【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2

バースト：【有】

狂気のおロチ。それが操る強力なスピリット、ルナヘイズ。普通のカードバトラーならばこの上ない恐怖を植え付けられるような状況。

だが………

「突破できないわけではない」

「……………ほお？」

その恐怖とやらを全く感じ得ないロンの言動。寧ろ絶対的な勝利を確信しているようにしか見えない。

……………関係ないのだ。どんなに狂気に満ち溢れた指名手配中の殺人鬼が相手だろうと、死神のようなドラゴンが相手でも……………

自分はあるのアスラと競い合い、シイナをも超えて頂点王になる男なのだから……………その心情が恐怖と言う感情を寄せ付けず、彼の身体を突き動かしているのだ……………

「オレのタアアアーン!!!」

そして気迫に満ち溢れたロンのターンが幕を開ける……………

「ターン07」ロン

「メインステップ、第一のナイトを召喚!!……………効果で1枚ドロ!!」

1 「仮面ライダーナイト」LV3(6)BP6000

今回は2体目となる第一のナイト。その効果で順当にカードをドロウする。

ロンはそのドローカードを見るなり、彼としては珍しく思わず頬が緩んだ。

……その理由はただ1つ。来たのだ。バトルにおいて絶対的な信用を寄せる自身の最強カードが……

「アタックステップ!!…ナイトでアタック!!…ミラーワールドの効果でカードを1枚手札に!!」

「BP6000?…その程度じゃルナヘイズは突破できないぞ。2体分のルナヘイズの効果、2枚ドロウし、2体を回復!!」

1 「月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム」(疲労??回復)

1 「月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム」(疲労??回復)

ナイトのアタックに反応し、疲労していた2体のルナヘイズが回復状態となり起き上がる。このままではまたしてもナイトを即座に叩き潰してしまうだろう……

だが、本題はここからだ。ロンは手札にある最強カードをこのタイミングで使用する
……………

「それは知っている!!……フラッシュ煌臨発揮!!…対象は第一のナイト!!……この瞬間、
ナイトは自身の効果でコスト5として扱う!!」

「!!」

リザーブのソウルコアがトラッシュユへと送られる。これはソウルコアをコストにしてスピリットを進化させる煌臨の下準備だ。

そしてその煌臨で新たに現れるスピリットは……………

「来い、ナイトサバイブ!!」

ナイトはベルトにあるカード束から1枚のカードを引き抜くと、レイピア状の剣が瞬
く間にして騎士の剣を内蔵した青い盾に切り替わり、疾風の如く風が吹き荒れる……………

……………サバイブ!!

1【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3(6)BP16000

ナイトがその引き抜いたカードを青い盾のバイザー部に装填すると、その無機質な音声と共に強化形態、仮面ライダーナイトサバイブへと進化を遂げる……

「ほお、唸るな。そんな隠し球まで持ってたか」

ロンのエースであるナイトサバイブの登場により、オロチは彼に対する期待を高める。だがそんな事ロンが気に留めるわけもなく……

「ナイトサバイブの煌臨アタック時効果!!…スピリット1体のコア2つをトラッシュへ送る!!」

「ああ?…さつき身をもつて体感しただろ。ルナヘイズにコア除去は効かねー」

ナイトサバイブの強力なコア除去効果。しかし、それは所詮紫属性の効果であるのは違いなくて……

はたからみればルナヘイズの持つ紫と白の重装甲に難なく弾き返されてしまうだろう……

しかし……

「……フツ……それはどうかな？」

「？」

ロンが鼻で笑いながらそう言うと、ナイトサバイブは盾から引き抜いた騎士の剣を振り、その切っ先から疾風の斬撃をルナヘイズへ向けて発射させる。装甲を持つルナヘイズはそれを弾くかに見えたが……

ー【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】(2??0) 消滅

「……なに？」

分厚かったルナヘイズの装甲をまるで紙のように斬り裂いたナイトサバイブの疾風の斬撃。堪らず消滅してしまうルナヘイズの前に、ロンはオロチにカラクリを説明す

る。

「ナイトサバイブのこの効果発揮時、自身の色を無いものとして扱う。色がなければ装甲の効果は意味をなさない……!!」

「成る程。なかなか面しれーじやねえか」

「……ナイトサバイブのもう1つの効果で自身を回復」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

ナイトサバイブの効果も聞いても全く焦りを感じないオロチ。どこまでも嘲笑うかのようにニタニタと薄気味悪い笑顔を浮かべている。

そんな彼に対し、ロンは畳み掛けるべく、回復したナイトサバイブを対象にさらなるカードを手札から切って……………

「フラッシュマジック、ファイナルベント!!」

「!!」

必殺のアドベントカード、ファイナルベントがここで発動。
ナイトサバイブがベルトから引き抜いた1枚のカードを青い盾に装填……………

……………ファイナルベント!!

と、無機質な音声が鳴り響き、どこからともなく黒い翼のモンスターがナイトサバイブの元まで現れる。しかし、その姿もほんの一瞬であり、ナイトがサバイブへと進化した影響により、その黒き翼は鋼を纏う疾風の翼へと強化される。

ナイトサバイブはその疾風の翼の背に飛び乗る。

「ファイナルベントの効果!!…:BP15000以下のスピリット1体を破壊し、このバトル中、ナイトサバイブのシンボルを1つ追加!!…:ダブルシンボルとなる!!」

「へへ……………知ってるさ」

ロンの効果説明に、オロチはそう呟く。だがその間にナイトサバイブを乗せた疾風の翼がバイク型のマシーンへと変形。ルナヘイズへ向けて走り出す。

「疾風断!!」

ナイトサバイブのなびく黒いマントがバイクごと包み込み、一本の巨大な黒槍を形成。そのまま突進していき、ルナヘイズへと激突。ナイトサバイブはそれを貫通させ、難なく撃破して見せた……………

そして守る壁がいなくなったオロチのライフまで突き進み……………

「ッ……………!!」

〈ライフ4??2〉オロチ

そのライフをも砕いて見せた。ロンは見事に逆境の状況から形成逆転して見せる。流石はアスラのライバル、頂点王を目指す者だ……………

しかし……………

「へっ……………やっぱいいなオマエ」

「!!」

「そうだ。その調子だ。その調子でこのオレをもっと楽しませてくれ……!!」

先程までとは比べ物にならないオロチの異常な殺気。流星のロンもその迫力に一瞬たじろいでしまう……

同時に彼の考えを僅かに理解した。

自分がルナヘイズを突破してくるのを待ち望んでいたのだ。そして仮に突破できたら使う予定だったのだろう……

あの伏せられたバーストカードを……

「ライフ減少によりバースト発動……!!」

「!!」

ロンの予想通り、やはり伏せられていたオロチのバーストカードがここに来て発動。勢いよく反転して見せる……

そのカードとは……

「召喚!!……仮面ライダー王蛇……!!」

「!!」

1 【仮面ライダー王蛇】 LV2 (3) BP8000

ロンとナイトサバイブの眼前に現れたのは紫に包まれたボディが特徴的な邪悪なライダースピリットの1体、仮面ライダー王蛇。

「……オマエもライダースピリットを……」

「ああ、まあな。ここからが本番だ……さあどうする? ……まだ来るか?」

「……ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーナイトサバイブ】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

フルアタックしてもまだ勝負を決められない事や、見たこともないライダースピリットの効果も把握していないのに無闇に飛び込むのは危険であると判断し、ナイトサバイ

ブをブロッカーとして残してそのターンをエンドとしたロン。

次は自身のライダースピリットである王蛇を召喚して見せたオロチのターンだ。その止まる事を知らない狂気はこのターンでさらに爆発する……………

「ターン08」オロチ

「メインステップ!!」

オロチのメインステップ。彼はさらにロンが驚愕せざるを得ないカードを手札から切って見せて……………

「さあ行くぞ、オレは…………いやオレも!!…………ネクサスカード、ミラーワールドをLV2で配置する!!」

ー【ミラーワールド】LV2(2)

「ツ…………な、何!?!…………ミラーワールド……………」

オロチがターン開始早々に配置したのはまさかのミラーワールド。既にロンが配置していた事もあり、これといった変化は無いが、アスラとロンのデッキ以外ではお目にかからないこのカードを何故オロチが手にできているのかが疑問であり……

「何故オマエがそのカードを……」

「そりゃ、オマエとオレのライダースピリットは同型だからなあ」

「ツ……ど、同型……ナイトと、オマエのライダースピリットが!？」

信じられない。自分のライダースピリットが殺人鬼の持つライダースピリットと同型など。

しかし現実には彼はミラーワールドを配置した。それが彼らのライダースピリットが同型であるという何よりの証拠であって……

「はっはっは……お待ちかなのアタックステップだ!!」

「ツ……!!」

深い事を考えている暇は無い。少々揺さぶられたが、よくよく考えてみればそんな事自分には全く関係のない事だ。

ロンはオロチの攻撃に備えて身構えるが……………
その時だった……………

「そこまでですよ……………!!」

「ッ……………」

その声にアタックしようと王蛇のカードに手を伸ばしていたオロチの手が止まる。彼とロンがその声の方へと首を向けると、そこには他でも無い。ライダーハンターズの主任、ウイルがいて……………

「オマエ、あの時の……………ちよび髭シルクハット」

「ふふ、自己紹介がまだでしたね。私の名はウイル。最近巷で噂のライダーハンターズの主任を務めさせていただいております」

ロンがウイルに出くわすのはあのコラボダンジョンでの一件以来だ。この時点でロ

ンはオロチがああ連中と何らかの関わりがある事を察する。

「おい主任!!…今いいとこだつたら、邪魔すんな!!」

「まあまあ、落ち着いてください。オロチにはもつと良い相手を用意してあげますよ。この少年は生かしておきなさい」

「もつと良い相手?…誰だ」

無理矢理バトルを中断させられた事にはらわたを煮えくり返すオロチ。いくら相手が主任でも激怒してしまふ。

しかしウィルはその事も想定済みなのか、オロチをロンではない別の誰かとバトルさせようとしていた……………

それは……………

「ふふ、貴方もお分かりでしょう。ソウルコアが使えないあの薄汚い小僧……………ヤツを始末してきなさい。ライダースピリットの強奪も忘れないようにね」

「ツ……………アスラの事か……………」

「ああ、成る程ね。ここで暴れ足りなかつた分、それに関しちや好きにやらせてもらう

「ぜ」

「はい。いいでしょう……私は目標を達成してくればそれで構わないので」

そう。

その相手とは他でもないロンの最高の友にして最大のライバル、ソウルコアが使えない故に最後まで諦めない心と龍騎を手にする事ができた少年アスラ。

何が理由なのか、ウイルはアスラを目の敵にしており、今回、痺れを切らして殺人鬼であるオロチにそれを自ら依頼しに来たのだ。

「じゃあな。次に戦う時まで腕磨いとけよ」

「……………オマエもな」

オロチはロンにそう言い残すと、Bパッドでワームホールを形成。ライダーハンターズの隠れ家へと戻っていった……………

このライライ町の裏路地に残されたのはロンとウイルのみ。ウイルはお互いに目を合わせるのを確認すると、不適に笑いながら徐に口を動かした……………

「ところでロンさん。貴方、私たちライダーハンターズに入団する気はありませんか？」
「??」

「ライダースピリットを20枚。私に納品してくれましたらなんでも願いを叶えてあげますよ?」

ウイルからの突然のスカウト。何の意図があつての事なのかは定かでは無いが、どちらにせよ何か企みがある事をロンは悟る……………

「断る」

当然返事は拒否の一択、尚且つ即答。得体の知れない組織の親玉を前にしても恐れずに堂々とした態度でそれを言い放つて見せる。

「ふむふむ。ライダースピリットを20枚集めてくれたら、貴方の夢でもある頂点王にしてあげてもいいのですがね」

「馬鹿言え。頂点王は自分の力であるものだ。オマエみたいなちよび髭シルクハットに叶えてもらうモノじゃない……………」

そして……………

アスラはオマエ達には負けない

「アイツに勝てるのはこの世でただ一人……オレだけだ」

強く言い切るロン。

彼にとってその得体の知れない組織というのは自分達の夢の障害のような存在ではない。つまり彼らが何を企てようともどうでも良いのだ、興味が無い。

「ほう。言ってくれますね。この世の欠陥品とも呼べるゴミが我々に勝つと……………天才の貴方が何故あのソウルコアも使えないゴミを好敵手と認めるのかいささか謎ですが。まあ良いでしょ、味方にならないと言うのであれば邪魔立てだけはしないでくださいね」

「邪魔立てしてるのはアンタらだろ」

「ふふ、それではご機嫌よう」

ウイルもまたそう言い残し、オロチと同様の方法でこの場を去っていった……………
いよいよ本格的に蠢き出してきたライダーハンターズ。アスラやロンはこの驚異を
乗り越える事ができるのか……………

「来る障害は全て跳ね除けるくらいじゃないと頂点王にはなれない……………そうだよなア
スラ。必ず勝ち上がって来い……………その上で、必ずオレが勝つ!!」

アスラが言いそうな言葉を口にしながら、再び歩みを進めるロン。しかし、その表情
は最高の友が狙われていると知っていないながら、何故か笑っていた。

アスラが必ず勝ち上がって来る事を確信しているのと、彼との最後の決戦を心待ちに
しているのが理由であろう。一見変に見えるが、これは幼き日々からアスラと共に過ご
してきた彼だからこそその感覚であって……………

こうして、アスラの最大のライバル、ロンの旅もまだまだ続くのであった。

ライライ町の門前、ここからでも華やかなパレードが認識できる中、アスラとエール、そして謎のオレンジ色の犬みたいな生物、ムエは立ち止まっていた。

何やらアスラとエールが言い争いをしているようであり……

「カラー戦が先だ!!…オレは早くロンのヤツに追いつかねえと行けねえんだよ!!」

「フン、アンタの都合なんて知らないわよ!!…なんと言おうがテーマパークに行くのが先よ!!」

「むえ〜」

割と珍しく本気で口論している2人。それはライライ町で先にカラーリーダーに挑戦して来るか、華やかなテーマパークに観光に行くかを決めるモノであった。

アスラとしては先にカラーリーダーに挑戦したい。当然だ。当初の目的はそれのみだったのだから。しかしエールがそれを譲らない。なんとしてもテーマパークの観光を優先させようとしている。

「楽しみはとつとけよ!!…オレだつてちよつと楽しみなんだぞ!!」

「アンタがカラー戦やつてるうちに時間が潰れるじゃない!!…やつぱりテーマパークが

優先よ!!」

「じゃあムエと2人で行けばいいじゃねえか!!」

「そ、それはダメよ!!」

「なんで?」

「な、なんでって……そりゃ……」

「……そりゃ?」

「い、いいから貧相なコモンは偉大なるエックスに従いなさい!!」

「理不尽!」

エールとしてはどうしてもアスラと一緒にテーマパークに行きたい。その時間をカラー戦で費やしたくなかった。アスラもエールの気持ちに気づいていれば何か気の利いたセリフの1つや2つを吐けていたのだろうが、当然気がついてるわけもなく、今現在こうして口論するに至っている……

「じゃあバトルだ!!…バトルで勝った方が決めるのはどうだ?」

「嫌よ。なんでこんなクソ暑い日に熱苦しいアンタとバトルなんてしなきゃいけないのよ」

「なにいい!?!:オマエ人気投票1番だったからつてちよつと調子乗つてんじゃねえだろうな!!」

「何の話よ」

この世界ではもつともな決め方を提案するアスラだったが、エールはこれをスマートに拒否。いつもの事だが尊大な態度でアスラを一蹴する。

結局この後ジャンケンで決める事になったのだが、アスラがグーで負け、最終的にはテーマパークが先という結果に落ち着いた。この結果にエールが内心でどれほど喜んでいたかは計り知れない。

しかし、この後そのライライ町のテーマパークにて、とんでもない事件が起こつてしまふ事など、今の彼らでは知る由もなかった事だろう。

24コア「急襲の王蛇、さよならエール」

「……………ここが出来立てホヤホヤのライライ町テーマパーク……改めて見ると壮観ね」

「うおおおおお!!…スツゲエエエー!!…そしてデツケエエエエー!!」

「むええええええ!!」

4番目の娯楽の塊の町、ライライ町。その名物であるテーマパークに足を運んでいたアスラとエール、そしてオレンジ色のもふもふした犬みたいな生物ムエ。

多くのアトラクションが所狭しと並び、華やかなテーマパークを前にして、アスラは目をギラギラと輝かせながら思わず感激の気持ちを言葉にして叫び、ムエはそんなアスラの大声に便乗して鳴き声を上げていた。

「で、結局テーマパークって何するところなんだ?」

「……………なんでそこに説明しなきゃいけないのよ」

テーマパークがなんなのかを分からずについてきていた田舎者のアスラ。彼の常識

の知らなさにエールもツツコム気が失せる。

「見てわかんないの?…楽しむ所よ」

「楽しむのか?…:…なんかさつきから悲鳴とかめつちや聞こえてきて怖ええんだけど」

「アレはそう言うモノなの!!…:…いいからさつきと一緒に行くわよ!!…:…えへへ」

「ええ!」

「むえ〜」?? let's go

絶叫マシンに乗っている者達を見ながらそう言うアスラ。テーマパークや遊園地のイロハを理解していない田舎者に一々口で説明するのは効果的ではないと見たエールは、嬉しそうな笑みを浮かべながら彼の手を引き、その絶叫アトラクションの方へと向かった。

…

「おいエール。これ乗っても大丈夫なの?」

「多分」

「多分!?!」

「むえ〜」?? 楽しみ

今現在、アスラ達は絶叫アトラクション……いわゆるジェットコースター……その先頭に搭乗している。アスラはしっかりと手摺りを握っているが、彼にとつてジェットコースターは未知の乗り物であるため、凄く不安そうな表情を見せている。

そしてムエはそんなアスラの頭の上に乗っかっている。ハッキリ言っただけで凄く危ない。

「私も初めてだから。ちょっとワクワクして来たわ」

「なんで!?!…こんな高いところから振り落とされたら死んじゃうぞ!?!」

「振り落とされるわけじゃないでしょ?…何のために固定されていると思ってるのよ」

「むえ〜」?? 楽しみ

「うおっ…動いた!!」

そんな中、ジェットコースターが遂にゆっくりと車輪を回し動き出した。レールの頂目掛けてじわじわとしたペースで登っていく……

アスラがエールの言葉の内容をもう一度聞こうとしたその一瞬で遂に頂に到達したジエツトコースターは落下するように滑り出し、速度が異常に上がる。

凄まじい速度で直進しつつ、右往左往と突き進む恐怖のアトラクション、ジエツトコースター。

その間でアスラは正直これのどこか楽しいのかさっぱり分からなかったが、自分の横にいるエールの横顔が、というか笑顔がまあ楽しそうだったので、これはこれで良し。と、勝手に結論つけて満足した。

ー…

10分後くらいでアスラ達はアトラクションから降りる。途中途中でムエがアスラの頭の上から飛んでいってしまったりとアクシデントは尽きなかったが、少なくともエールはなんやかんやで楽しめた様子。

ただアスラは乗り物には弱かったか、少々疲れ気味である。

「あー楽しかったー!!…じゃあバカスラ、次はアレに乗るわよ!!」

「スペインが短けえ!?!…しかも似たようなヤツじゃねえか!!」

「むっ……似て非なるものよ!!……いいからさっさと歩く!!」

「おお、マジかよオマエ………」

エールに嫌々歩かされるアスラ。彼としてはエールがこれで喜んでくれるのであれば動くしかあるまい。なんやかんやでアスラはエールに優しいのだ。

しかしこの後が地獄だった。エールは絶叫アトラクションというアトラクションを全て巡り、アスラはそれらに搭乗するたびに心体諸共疲労困憊に陥り、衰弱していった……

そして時刻はそれら全てを乗り終えた夕方前。夏の季節でも比較的涼しい時間帯で、アスラとエール、ムエは休憩所でもあるアイスクリーム屋に足を運んでいた……

「あー………まだ目が回る………」

「どうしたのよ?……体力だけが取り柄のアンタらしくないわね」

「寧ろなんでオマエが疲れてないのか疑問なんだけど……てか、「だけ」は余計だろ」

「むえ………」

アスラとムエはこの時点で疲れ切ってしまいテーブルにぐったり。それに比べて

エールは乗り物は強いのか、全然余裕そうだ。

「まあ気を取り直してバナラシエイクでも食べましょ。仕方がないから今回は特別に私が買って来てあげる」

「おお!!…いつもはオレをコキ使うくせに!!…珍しい!!」

「うっさいわね!!…買って来ないわよ!？」

「ごめんなさいイイイー!!…お願いしますウウー!!」

この手の役回りは大抵アスラに行かせるのがエールと言うエックスの少女であるが、今回ばかりはアスラを無理矢理付き合わせてしまったと非を感じているのか、率先してテーブルから立ち上がり、甘いバナラシエイクを買いに行った。

当然、自分とアスラに分だが………

「ツ………、これは………」

エールはアイスクリーム屋のメニューであるものを発見してしまう………

それは普通なら注文などしないとあるバナラシエイク………

しかし、エールは恥を凌ぎ、何を血迷ったのか本能的にそれを店員に注文してしまう

……

そのバナラシエイクとは……………

ー…

「……………おお、これがバナラシエイクってモンか。初めて見たな。こんなかにアイスクリームが入ってるのはなんか新鮮……………で、なんで1つしかない上にストロークが2つもついてるんだ？」

エールが注文して持って来たのは高さ20センチはありそうな巨大なバナラシエイク。2つのストローがアスラとエールの方向についており、如何にも2人で食べろと言われている。

無論。これはカップル専用のシエイクだ。実際はカップルでも注文しない代物だが、エールは恥を忍んで本能的にアスラとの距離を縮めたいがために購入して来た。

「おい聞いているかエール!?!…なんでこんなデツカイの!?!…そしてなんで1個しかねえの

!？」

「黙りなさいコモン……………さ、サイズがコレしかなかったのよ……………」

「ええええええ!!?…この店ピーキー過ぎんだろ!!？」

好意を抱いているのを隠すため、咄嗟に苦し紛れのウソをついたエール。しかし流石は田舎者のバカスラ。根も葉もないエールのウソを簡単に信じてしまっている。

「まあ良いや。じゃあ食って見ますか……………アイスクリームをストローで吸うの初めてだな」

「う、うん……………そうね……………」

割り切ってバナラシエイクをストローで吸い始めるアスラ。しかしこれを買ってきたあの本人であるエールは顔を赤くしてなかなか手をつけないでいる。

「おおうめえ!!…これがバナラシエイクってヤツか!!…うめえぞエール!!…オマエも吸ってみろよ!!」

「はあ!!?…なんでよ!!?」

「なんでってオマエが買ってきたんだろ!？」

「そ、そりやそうだけど……………」

アスラはほぼ無意識で自覚していないが、2人同時にこんな食べたら恋人同然だ。エールは当然その事を承知の上で購入して来たが、いざ食べてみようとするとうもろこし恥ずかしくなって手が進まない……………」

そんなエールの様子を見て、アスラは何か気がついたように口を開けると……………」

「あつ……………ひよつとして食欲ねーとか!?!…だったらオレー1人で食っていい!？」

「そ、それはダメよ!!…2人で食べなきゃ意味がないの!!」

「ええ!?!…なら一緒に食おうぜ」

どこことなく言っていることが矛盾し始めたエール。彼女の気持ちを理解できていないアスラから見ればこれを食べたいのか食べたくないのか皆目見当がつかない。

「え、ええ!!…食べるわよ!!…吸って見せるわよこのバカデカイバナラシエイクを!!」

「お、おお……………そんな凄まじくても……………」

決意を固め、ようやくバナシエイクに手をつけようとするエール。顔を赤らめながらもストローに口をつけようとする……

しかし……

その直前に彼女の目に焼き付いて来たのは他でもないアスラ……

自分の反対側でバナシエイクをストローで吸うアスラだ。

刹那

エールは思い浮かべてしまう。

アスラと自分が同時にこのバナシエイクを吸う姿を……

その様子は紛れもない……

カップル……

「ツ……!? ★♪%\$〒○\$€%#☆!!!?!」

「え?…何?…この声にならない声!?!」

今までの自分の行いをようやく自覚してしまい、恥ずかしさで声にならない声を発してしまうエール。アスラはそんな彼女に気を使いながらも、何故かは知らないが嫌な予

「おーい!!…悪かったから機嫌直せて、エールー」

「……………」

「むえ〜」

あれから小一時間は経過したか、テーマパーク内を歩く2人だが、エールがムエを抱えながらアスラよりかなり前に出ている。

アスラは機嫌が悪くなったと考えているようだが、実際はただ単にエールがアスラに對して気まづくなっただけだ。無理もない。珍しくあそこまで大胆にアプローチしたのだから……………

「何よあのバカスラ。人の気も知らないでのほほんとしちゃって」

「むえ〜」

「大体、何であんなチビなのよ……………せめてもうちよつと背が高ければかつこ……………」

「むえ〜」

「いやいや!!いやいや!!…カツコよくない!!…なんであんなバカスラの事…」
「むえ〜」

己の恋愛心と葛藤するエール。今の距離、周りの人達の声、そして所々でムエの鳴き声が挟まって来ているのもあって、アスラには彼女の声が全く聞こえなかった。

「うー…む…エールのヤツ、なんか悩んでるっぽいな。ここはどうかしてご機嫌を取らねば……」

エールが悩んでいるのは理解している様子だが、やはり彼女の気持ちには全く持つて気がついていないようであるバカスラ。

正直、ここまでアプローチされても彼女の気持ちに気が付かないのであれば、もはやアスラが悪い。

もう一度言う。アスラが悪い。エールは決して悪くない。彼が余りにも鈍感過ぎるのだ。

だが、こう言った甘酸っぱい経験も彼らの青春の1ページと言える……………

しかし、その時間は唐突に終わりを告げる事になる……………

「おい。そのチビ」

「ん？」

人混みの中、男性の太い声が突然アスラを呼び止めた。それに伴ってエールも足を止める。その男性はかなり大柄だが、深々とフードを被っており、顔がはつきり見えなかった。

だが、男は直ぐにそのフードを外し、正体を公にする。

「へっへっ……………ようやく会えたな。オレはオロチ……………大蛇のオロチだ……………!!」

「??」

「ツ……………お、オロチ……………って、まさか……………」

その正体はオロチ。

る。

「アスラ。コイツ指名手配中の殺人鬼よ……なんでこんなところに」

「エックスの女、その質問に答えてやる……ライダーハンターズとして、そのチビのライダースピリットを奪いに来たって言えばわかるか？」

「ライダーハンターズ!？」

「アンタがそれに属してるって言う事!？」

オロチがライダーハンターズの一員であると言う事に驚愕するアスラとエール。一般的には殺人鬼、大蛇のオロチは単なる指名手配中の殺人鬼と言う概念のみの存在であり、この国の者達は彼の顔こそ知っているが、その情報を知っている者はごくわずかに限られていた。

一般でこの情報を知ったのはアスラとエールがおそらく初であろう。

「ツ……テメエもオレの龍騎を奪おうつてか!!……望むところだ!!……返り討ちにしてやるぜ!!」

「へっ……待ってたぜその言葉」

売られたバトルは買わずにはいられない。オロチを撃退するため、そして龍騎を守るため、当然アスラはこのバトルを受けようとするが……………

「ダメ、アスラ!!…なんか嫌な予感がする……………」

「ツ……………」

それをエールが止めようとする。

エール自身も何が理由なのかはわからない。単に彼が殺人鬼で怖い言う理由かもしれないが、どうしても何か引つかかる様子であり……………

「大丈夫!!…オレはライダーハンターズなんかに、況してや殺人鬼なんかに負けやしない!!」

「ツ……………本当?……………本当に大丈夫なの!?!」

「ああ、何てったってオレは未来の頂点王だからなツ!!」

身分も最底辺な上にソウルコアが使えない奇怪な病気持ちの癖に、不思議と安心して

しまうその彼の声。理由も理屈も無しに何故か心の底から信用してしまう……………
自分が止めようが止めまいが、どちらにせよアスラは前を見て突き進む。ならば見
守るしかないと彼女は判断して……………

「トウエンテイの時見たく、そのオメガ家の女と2人がかりで挑んで来てもいいんだ
ぜ？」

「そんな心配はいらねえ!!…オマエはオレがぶつ倒すぜへびヤロウ!!…でもってその身
柄をテンドウさんあたりに受け渡してやる!!」

「やる気十分か。いいね…：唆るぞ。勢いだけなら近年稀に見る上者だよオマエは」

そう話しながら、2人はBパッドを展開し、己のデッキをセットする。オロチはアス
ラの威勢の良さにますます興味を示しているようだ。

……………ゲートオープン、解放!!

そして誰もいなくなつた寂しげなテーマパークにて、エールとムエが見守る中、ソウ
ルコアが生まれつき使えない少年アスラと、指名手配中の殺人鬼且つライダーハンター

ズの一員であるオロチのバトルスピリッツが幕を開ける……………

先行はアスラだ。相手が殺人鬼だろうがライダーハンターズだろうが関係ない。彼は全力で己のターンを進めていく。

「ターン01」アスラ

「メインステップ!!……………ミラーワールドを配置してターンエンドだ!!」

ー「ミラーワールド」LV1

ミラーワールドが配置される。その影響で現実のこの世界が鏡像の世界へと移り変わった。

「はっは、オマエホントにソウルコアが使えないんだな」

「ああ!!…悪いか?」

「いや別に。逆に面白い」

先行のアスラのターンはこれで終了。次は常にニタニタと不気味な笑みを浮かべているオロチのターンだ。

「ターン02」オロチ

「メインステップ……オレもネクサスだ、来い水銀海に浮かぶ工場島」
「!!」

ー【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

オロチの背後にその名の通り水銀の海に浮かぶ工場島が出現した。それは周囲が色鮮やかで華やかなテーマパークなものもあつてとても浮いている。

「ターンエンドだ」

手札：4

場：【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

バースト：【無】

全てのコアを使い切りそのターンをエンドとしたオロチ。次は再びアスラのターンだ。お互いにネクサスでシンボルを稼いだ事もあり、このターンからバトルスピードが加速するのは目に見えていて……………

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!…行くぜ、仮面ライダー龍騎をLV2で召喚!!」

1【仮面ライダー龍騎】LV2(2)BP4000

アスラの場合に赤きライダースピリット、第一の龍騎が現れる。そのスピリットの登場を目に移すなりオロチはまた興味が唆られるような表情をして……………

「来たな赤いライダースピリット……………!!」

「召喚時効果だ!!…カードを3枚オープンしてそんなかの対象カードを加える!!」

オロチの言葉は無視して龍騎の召喚時効果を使用するアスラ。2枚のカードが対象内であったため、その2枚を手札へと加えた。

しかし……………

「そう簡単に手札は増やさせない。水銀海に浮かぶ工場島LV1の効果!!…オマエのターン中に増えた手札のカード1枚につき手札を1枚破棄させる!!」

「なにっ!？」

「これじゃ手札が増えない……………」

アスラの手札が紫と白色の光に覆われる。彼が増えた枚数2枚分のカードをトラッシュへと送らなければそれは消える事はない。

手札2枚の損失は痛い、致し方ない。アスラは6枚あるうちの2枚を破棄した。

「くっ……………」

「どうした?…たかだか手札2枚捨てられただけじゃねえか……………ほら、来いよ!!」

「ッ……………行け龍騎!!」

アスラを挑発するように言葉を告げるオロチ。彼はそれにあえて挑むかのように龍騎に攻撃の指示を送った。

そして当然ながら前のターンでネクサスの配置のみでコアを使い果たしたオロチにカウンターの余地は一切無くて……………

「来た来た……………ライフで受ける……………ッ！」

〈ライフ5??4〉オロチ

固められた龍騎の熱き拳がオロチのライフバリアを粉々に粉碎する。

この世界においてのバトルスピリッツはそれなりのダメージ、痛みが存在する。しかし、オロチはその痛みを受けてもそれが快感にでも変わったのではと錯覚してしまうほどに笑っていて……………

「いいね。流石ライダースピリット……………ソウルコア無しのヤツが使い手でもこれ程とはな……………へへ、より楽しみになって来たぜ」

「ッ……………何なんだよオマエは……………マジで気持ち悪いぞ!!」

「さつきも言ったろ、オレはライダーハンターズのおロチだ……それ以外の何者でもない……さあ、まだ何かあるのか？……このオレをもっと楽しませてみる」

バトルに対する考え方が常人のそれからかなりズレているオロチ。今までバトルを楽しむ人達とは何度か接点があったアスラだったが、オロチは異常だ。

ヘラクレスやカゲミツのような戦闘狂達には少なからず真剣さがあった。だからアスラは彼らが周囲とズレた発言をしても受け入れられるし、寧ろ好きだった。

だが彼は違う。そこに真剣さはなく、ただただ目の前の敵を痛ぶるただけにバトルしているように思えた。そしてライダーハンターズや殺人鬼という肩書や立場がよりそれらを際立たせている。

「……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

アスラはそんな彼を限界まで警戒しつつも、バトルを進めるべくそのターンをエンドとした。

「ターン04」オロチ

「メインステップ……水銀海に浮かぶ工場島2枚目を配置」
「なに!？」

ー【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

オロチの背後に連なる工場島。これでアスラは己のターンでの手札増加時、増えた枚数の倍の数のカードを破棄しなければいけないなくなる。

もはや不用意にその手の効果は発揮できなくなったと言えよう……

「そしてバイ・パイソンをLV2で呼ぶ」

ー【バイ・パイソン〈R〉】LV2(2S)BP3000

オロチはさらに宝石のアメジストが所々体内に埋められている白蛇のスピリット、バイ・パイソンを前戦へと呼び出した。

そして彼は徐に「アタックステップ……!!」と宣言して……

「行けバイ・パイソン!!…効果により自身のソウルコアをトラッシュに置き、2枚ドロー!!」

ー【バイ・パイソン】(2S??1) LV2??1

バイ・パイソンが蛇らしい動きで走り出すと共に、アスラに宿ることのないソウルコアの力を発揮させる。オロチはその力で減って来た手札を潤す。

そして前のターン、龍騎でアタックしたアスラはこの攻撃をかわす手段がなくて

………

「ライフだ!!………ッ」

〈ライフ5??4〉アスラ

バイ・パイソンの体当たりがアスラのライフルつを粉々に砕く。

彼からの手痛い反撃。トゥエンティの時同様の多大なバトルダメージを彼は受ける。

「アスラ……!!」

「大丈夫だエール………まだ、まだこれからだ!!」

「ああ、だろうな。そうでなくちゃ困る………まだまだオレを楽しませてくれ……ターンエントだ」

手札：5

場：【バイ・パイソン】 L V 1

【水銀海に浮かぶ工場島】 L V 1

【水銀海に浮かぶ工場島】 L V 1

バースト：【無】

多大なバトルダメージに思わずしてよろけるアスラ。その様子に彼を心配するエール。

当然ながらあのアスラがこんな序盤で諦めるわけないのだが、その執着心がまたオロチの残虐性を高めさせているようにもエールは感じていて……………

「ターン05」アスラ

「メインステップ、バーストをセットしてターンエンドだ!!」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【有】

アスラのターンはバーストを伏せるだけにとどまる。普段なら攻撃を優先する彼の戦い方としては非常に珍しい行いだ。冷静に状況を見ているとも言えるが、無意識下では余程彼を警戒している事も窺えて……………

「どうした?…バーストを伏せただけじゃ、そのバーストに何か策があるのが丸わかりだぞ」

「どうしたどうしたってうつせエエー!!…オレにも色々考えがあんだよ!!」
「へっへ…期待してやるぜ」

これまで幾度となく強敵達に強き心でぶつかって来たアスラ。無法が常識のライダーハンターズや殺人鬼が相手だろうとそれを恐れてはいない。いや、正確には恐れてはいるが気合と根性でそれを押し殺して戦っていると言った方が適切か……その証拠にその額や頬には緊張感を象徴する汗が流れている。

兎に角ライダーハンターズに龍騎を取られるわけにはいかない。今はその考えで頭がいっぱいだった。

「ターン06」オロチ

「メインステップ……そろそろ見せてやろう……!!」
「ッ……何か来る!?!」

メインステップ開始直後、オロチが自分の手札に手を掛ける。その雰囲気や表情から、アスラはかなりの強敵が降って来ると予想して……

「…コイツの声を聞きな!!…月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム!!…LV2だ」
 「!!」

1【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2(2)BP100000

オロチの背後から巨大な死神の鎌を携えるドラゴンが咆哮を張り上げながら飛び出して来た。

その名はルナヘイズ。この世界においての強力な力を持つ三大スピリットではないが、それでも十分な実力を保有するレアカードのドラゴンだ。

「さらにバーストを伏せ、アタックステップ…飛ベルナヘイズ!!」

その目にアスラを映し、鎌を構えて飛び出したルナヘイズ。そしてこの瞬間にもその強力無慈悲な効果が発揮されて……

「ルナヘイズの効果!!…手札1枚を裏向きで手元に置く事で、コイツのBP以下のスピ

リットト1体をデッキの下に戻す」

「!!」

「消え去れ龍騎!!」

「消えん!!……第一の龍騎は効果によって手札とデッキに戻らねえ!!」

「!!」

武器である鎌に死煙を纏わせ龍騎に斬りかかるルナヘイズだったが、龍騎はその一撃を両手を用い、見事な早技で押さえ込んだ。

「どうだ!!」

「なかなかやるな!!……だがアタックそのものはどうする!?!…その雑魚じゃ当たり負けするぞ!!」

「!!」

ルナヘイズの鎌を受け止めたままでは良かったが、その後ルナヘイズは「邪魔だ」と言わんばかりに力任せに鎌を振って龍騎を吹き飛ばして見せる。

全てはその眼前に映し出されているアスラのライフを斬り裂くためだ。そして龍騎

を失うわけにもいかなかったため、アスラはこの攻撃を自分で受け止めるしかなくて……

「ライフだ!!……ぐっ!」

〈ライフ4?!3〉アスラ

振り下ろされた鎌がアスラを襲う。そのライフ1つは紙のように斬り裂かれた。

またしても多大なバトルダメージがアスラに与えられるが、彼もやられっぱなしではない。伏せていたバーストカードに目を向けると……

「ライフ減少後のバースト、アドベントドロ!!」

「!!」

「効果でBP7000以下のバイ・パイソンを破壊!!……でもってコストを払って2枚ドロだ!!」

アスラのバーストが反転すると共に、オロチの場で休んでいたバイ・パイソンが真っ赤な炎で焼却される。

しかもそれだけではない。アスラはデッキから2枚のカードをドロウするが、この際にオロチのネクサスである水銀海に浮かぶ工場島の効果は発揮されなくて……………

「上手い!!…敵のターンで手札を増やせば、水銀に浮かぶ工場島の手札を捨てる効果は発揮されない!!…アイツ、色々考えるようになって来てるじゃない!!」

エールがアスラに向けて関心の意味を含んだ言葉を漏らした。
そう。

このカウンターを狙ってアスラはアドベントドロウをメインステップで使わずにバーストとして伏せたのだ。事実効果は的面。オロチはこれ以上の攻撃手段を失う。

「なるほど。伊達に3人もカラーリーダーを倒しちやいないか。ターンエンドだ」

手札：4

場：【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2

【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

バースト：【有】

未だに余裕の表情を浮かべてはいるが、少なくともこのターンでは何もできなくなつてしまったオロチはそのターンをエンドとした。

次はアスラのターン、一気加勢に攻めるべくターンシークエンスを進めるその前に、彼はオロチにある質問を投げつけて……………

「おいへビヤロウ……………アンタも何かあのちよび髭シルクハットに叶えて欲しい事でもあるのか？」

「ああ……………ちよび髭シルクハット……………ああ、主任の事か」

「トウエンティもイバラも、方向性はチゲエけど自分の叶えたい願いがあった。アンタは何なんだよ？」

どうしてもこれが聞きたかった。

アスラはまだオロチの全貌を知らない。ひよつとしたらトウエンティみたいにやむを得ない理由でもあるのかと考へてもいた。別に本当にそんなものがあつても負けてやるつもりはないが、

どうしてもオロチと言う人間を理解したかった。

しかし……………

「ねえよ」

「!!」

オロチは即答でアスラからの質問に返答した。

「オレはただ強い奴らと戦えれば良い。あそこにはトウエンテイ、主任もいる。殺しがいのある奴らがいる上、向こうから強い奴と戦えと依頼して来る。こんなに楽しい団体は他にねえ、まあ、強いて言うなら「このまま戦いを続けたい」……………か」

「ツ……………そんなに戦いたければカラーリーダーにでもなればいいじゃんか!!」

「カラーリーダーになったらそいつらを殺せなくなる」

「殺すつて……………どう言う事だよ!?!」

「聞いたろ。オレは殺人鬼だ。バトルで負かした相手を殺し、そのカードを奪う。それがモットーだ……………顔は忘れたが、このルナヘイズもその戦利品だ」

全く持って会話にならない。

ライダーハンターズにまともな人間はトウエンティくらいしかいないのか………そう言った感想を抱くアスラ。

オロチにとって、戦いは、バトルは快楽に等しい。だからこそ本気で戦って殺したいのだ。その考えが常人に理解できる事はまず有り得ない。

「あ、アスラが………殺される……!?」

オロチの心情やこれまでの行いを知ったエールはアスラが彼に殺されてしまうのではないかと考えてしまう。当然だ。今では大事な存在になった彼を失いたいわけがない………

「安心しろエール……オレはこんなイカレヤロウに殺されたりしねえ!!…意地でも勝つて頂点王になってやる!!」

「!!」

そんな彼女の恐れを吹き飛ばすかのように声を張るアスラ。

そしてその声色には僅かながらに怒りも感じられる。しかしそれは今まで何人かが

彼の理不尽な殺害で命を失ったと考えれば、正義感の強い彼からしたら当然の感情であると言える。

「へっへっ…そうかよ。だったらさっさとかかって来な。全力でオレにぶつかって来い」

「上等だッツ!!…ぶっ倒してやるッツ!!」

彼を倒したいその一心で、アスラの逆襲のターンが始まる。

「ターン07」アスラ

「メインステップツ!!…先ずはゴラドンを召喚!!」

1 「ゴラドン〈R〉」 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

小さな怪獣のようなスピリット、ゴラドンがアスラの場合に召喚される。

そして、十分な軽減シンボルが揃った事で、アスラは手札にある最強のカードを引き

抜いて……………

「召喚!!…:仮面ライダー龍騎サバイブ!!」

「!!」

アスラの場合に新たな龍騎が現れる。

その龍騎はベルトにあるカードデッキからカードを引き抜くと、瞬間に烈火の如く炎が燃え上がり、その中で龍を模した銃器にカードを装填……………

……………サバイブ!!

1【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(2)BP11000

龍騎はさらなる強化形態、仮面ライダー龍騎サバイブとなり、アスラの目の前に現れた。

「いいな強化形態。唆るな」

「コイツで……オマエに勝つ!!」

アスラは続け様に「アタックステップツ!!」と強く宣言すると、Bパッド上にある切札である龍騎サバイブのカードに手をかける……

「行け龍騎サバイブ!!…効果によりBP15000以下のスピリットを破壊!!」

「!!」

「ルナヘイズ・ストライクヴルムをぶっ飛ばせエエー!!!」

龍騎サバイブの武器である龍を模した銃器から烈火の弾丸がルナヘイズへ向けて発射される。ルナヘイズは咄嗟に鎌を盾代わりとして構えるが、それも虚しく、あっさり鎌ごと焼き尽くされてしまった。

「さらに赤のシンボルを1つ追加!!…ダブルシンボルになる!!」

「ほお、やるじゃねえか」

「龍騎サバイブはライダースピリットのバトル終了時、そのシンボルの数だけ追加でライフを破壊する!!…この一撃で終わりだ!!」

龍騎サバイブの赤属性の特徴をこれでもかと詰め込んだ超攻撃的な効果がオロチに迫る。

今回のアスラは彼ながらに完璧な戦術だった。これまでの失敗や敗北からの経験を活かし、龍騎サバイブの超攻撃的な効果を最大限発揮させるためにオロチのライフを4に調整。オマケに防御にも手を回した……………

完璧だった……………

しかし……………

オロチはそれだけで倒せる男ではなくて……………

「フラッシュマジック、ネクロブライト!!」

「なに!？」

「この効果でトラッシュからバイ・パイソンを蘇生させる!!」

ー【バイ・パイソン】LV1(1)BP2000

咄嗟に引き抜かれたオロチのマジックカード。

その力により、紫の輝きと共にバイ・パイソンが場へと復活を果たす。呼び出された理由はただ一つ………

壁だ。

「オレを守れ」

主人の声を聞くなり、バイ・パイソンが龍騎サバイブに向かって飛びつくが、BPの差は歴然。龍騎サバイブの空いている拳に殴り飛ばされて呆気なく爆発してしまう。

しかし、その役割は果たした………

「くっ………効果で龍騎サバイブのシンボル分、2点のダメージを与える!!」

「!!」

「メテオバレットトツツ!!」

龍騎サバイブはベルトからカードを引き抜き、それを武器である銃器に装填……………

……………シュートベント!!

その音声と共に赤き武装龍が龍騎サバイブの背後に現れ、龍騎サバイブの銃撃と、その武装龍の豪快な火炎放射がオロチのライフまで届いて……………

「ツ……………!!」

〈ライフ4??2〉オロチ

壁など物ともしない龍騎サバイブの破壊力。オロチのライフを遂に半数以下まで追い込む事に成功した。

「よし!!……予定はちょっと狂っちゃったけど、龍騎とゴラドンのアタックで……………」
勝てる……………」

アスラがそう確信し、言い切る前に……………」

オロチの伏せていたバーストカードが勢いよく反転した……………」

「ライフ減少により、バースト発動……………」
!？」

オロチは決してライフを守りたいがためにバイ・パイソンを蘇生させたわけではない。その真の狙いはライフを中途半端に破壊させる事だ。

「来いよ……………仮面ライダー王蛇!!」
!!」

1【仮面ライダー王蛇】LV2(3S)BP8000

アスラとそのスピリット達の眼前に一瞬にして現れたのはライダースピリットの1種……邪悪な鎧をその身に纏う仮面ライダー王蛇だ……

その禍々しさはアスラ達が見てきたどのスピリットよりも凄まじく、その存在を目に映しているだけで重圧がのし掛かり、身体が重たく感じてしまう程だ。

「オマエも、ライダースピリットの使い手だったのか……!?!」

「ああ。どうだ?…立派なもんだろ」

ライダースピリットの使い手はこの世界においては一握りしか存在しない。まさかこの男が……よりもよって殺人鬼であるこの男が選ばれていたことなど、アスラにとっては想像もしていない事であって……

「大蛇の召喚時効果!!…疲労しているスピリットを殺す!!」

「!!」

「龍騎サバイブを破壊する!!」

邪悪なライダースピリット、大蛇の召喚時効果が発揮される。その眼光が紫色に輝くと、紫炎がアスラの龍騎サバイブを襲い、それを塵になるまで焼き尽くした。

「そんな……龍騎サバイブが一撃で……」

そう言葉を漏らしたのはアスラではなくエルだった。このバトルでのアスラの敗北を誰よりも恐れているからこそその言葉である。

しかし、まだまだ大蛇の効果は終わらなくて……

「そしてこの効果で破壊したスピリットのLVの数だけ、ソウルコア以外のコアをボイドに置く」

「龍騎サバイブのLVは2……」

「ああ、そしてオマエはソウルコアが無い。デメリットも関係ねえな!!」

アスラのBパッド上にあるコアが2つ破壊される。ボイドに送るコア除去効果はトラッシュユアリザーブに送られるコア除去とは訳が違う。これにより、アスラの使用でき

るコア数は一気に削減された……………

「どうした？…頂点王になるんじゃないやなかったのか？…反撃して来いよ」

「ツ……………ターン……………エンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

【ゴラドン〈R〉】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

「んだよ。つまらねえな……………所詮はソウルコア無しか……………」

このターンでは決めきれない事を考えると、次のターンでの防御を優先したアスラ。だが、オロチはその判断を良しとはせず、アスラに対する興味が一気に失せてしまったかのような発言をする……………

「興醒めだクソチビ。オマエはこのオレのターンで殺す」

「!?」

この国のライダースピリットの三王、テンドウ・ヒロミがいつも自分に行って来るよ
うな「殺す」ではない。

オロチは本気だ。本気でアスラを殺害する気で襲いかかって来る……

「ターン08」オロチ

「メインステップ……先ずはミラーワールドを配置」

ー【ミラーワールド】LV1

「なに!?…ミラーワールド!?…オレとロン以外にも使えるヤツがいたのか!?!」

「当然だ!!…オマエらのライダースピリットとオレのライダースピリット、王蛇は同型
だからな!!」

「!?」

配置される2枚目のミラーワールド。それに発覚する王蛇が龍騎と同じタイプのライダースピリットであると言う事実。アスラは少なからずショックを受ける。

無理もない。何せ、自分が今まで相棒と称してきたライダースピリットが殺人鬼を選んだライダースピリットと同型なのだから……………

だが……………

まだまだこんな物ではなかった……………

「へっへ、おいエックスの女。よく見とけよ」

「!?」

オロチはニタニタと不気味に笑いながらエールに視線を向けると、そのカードをBパッド上に叩きつける……………

そのスピリットカードとは……………

メタルガルルモンを召喚!!

ー【メタルガルルモン】LV2(3) B P 14000

オロチの場に現れたのは……………

薄水色の機械のボディでできた神獣にして、究極体のデジタルスピリット……………

知らぬ者からみたらそれは単なるちよつと特別なスピリットカードにしか見えない
だろう……………

実際アスラは分からなかった……………

だが、エールは違った……………

「ウソ……………なんで?!……………なんでアンタがそれを持つてるの?!」

「へへっ……………!」

「エール？」

その究極体を見るなり困惑してしまうエール。鬼気迫る勢いでオロチを問い詰める。アスラは彼女が一体なにをそこまで困惑しているのかと疑問を抱いてしまう。

だがその理由は直ぐにわかる……………

「それは…………それは私達オメガ家のカードじゃない!!」

「!？」

「ああ。そうだな。オメガ家にしか使えない特別なデジタルスピリット、オメガのカード…………その片割れだ」

「え…………ちよ、ちよつとどういう事だよエール!？」

エールの言葉に、今度はアスラが焦り、困惑する。エールは一度心を軽く落ち着かせたから彼に説明して……………

「……………本来…………オメガのカードは2種類あるの……………1つは私の持つてるウオーグレイモンを主軸とした赤のオメガ。そしてもう片方は目の前のメタルガルルモンが切札の

紫のおメガ……………」

「!?……………アイツ、なんでそんなカード持つてんだ!?」

「こつちが聞きたいわよ!!…紫のおメガはお母様が死んでから紛失した。なのになんでアンタみたいなヤツが……………」

赤と紫のおメガ。その内の紫のおメガはエールの母であり、尚且つデジタルスピリットの三王でもあつたエレナ・おメガが赤のおメガと共に所有していたのだが、彼女が亡くなつてからは何故か紫のおメガは紛失してしまい、10年間それっきりだった。

それが今になって自分の目の前に現れているのだ。エールが混乱してしまうのも無理はない……………」

だが、そのカラクリは非常に簡潔且つ単純明快なものであつた……………」

オロチはまた不気味に笑いながら衝撃的な真実を2人の目の前で口にする

……………」

そりやそうだろ。オマエの母親はオレがこの手で殺したんだからな

た……………

まさにオロチは母親の仇とも言える存在であったのだ。

「エール……………」

エールの悲痛な叫びがアスラの胸に突き刺さる。本当の母親が殺されていたと言う気持ちは、肉親のいない彼には完全に理解できるものではないが、怒りと憎しみが込み上げて来るのを感じて……………

「テメエエ!!…へびヤロオオオー!!」

「粹がるな弱者!!…言つたら、オマエはこのターンで殺す!!」

「ツ…………アスラ!!」

込み上げてくる怒りを今直ぐにでもオロチにぶつきたいアスラだが、今はオロチのターン。どう足掻いても何もできないのがは凄まじく腹立たしくて……………

「アタックステップ、メタルガルルモンで攻撃!!…その効果で龍騎とゴラドンからコア

「つづつをトラッシュに送り、回復!!」
「なに!?!」

「【メタルガルルモン】（疲労??回復）

オロチの指示を聞くなり、メタルガルルモンは体中にあるミサイルを全弾発射させる。それに狙われたゴラドンと龍騎はなす術なくそれに直撃。龍騎は辛うじて生き残るが、ゴラドンは耐えられず消滅してしまった。

「ハツハツハー!!!!アタックは継続だ!!」

「ツ……ライフで受ける………ぐっ、ぐあああ!?!」

「アスラ!?!」

〈ライフ3??2〉アスラ

オロチの影響か、狂気に狂わされたかのような勢いでアスラのライフ1つを噛み砕くメタルガルルモン。バイ・パイソンやルナヘイズの非にならない程のバトルダメージが

彼を襲った、思わず膝をついてしまう……………

直ぐにでも立ち上がらないといけないのは分かっているが、無意識の恐怖と信じられない程に高いバトルダメージでどうしても立ち上がれなくて……………

「まだだ……………まだオレは諦めねえ……………!!」

しかし心はまだ負けてはいない。アスラは掠れかけた声を必死に張り上げながら口元に啖呵を切った。

しかし、今までその諦めない心と気合いとど根性で強敵を退け、又は突破してきたアスラだが……………

今回ばかりは、それだけではどうしても届かなくて……………

「オレがコイツをあの上王から奪ったって事はと言う事だかわかるよな?」

「……………!!」

「オレは上王を超えてるんだよ!!……………ソウルコアが使えないオマエ如きがオレに敵うわけないんだよ!!」

「!!」

オロチは高らかに笑いながらそう言うと、「王蛇でアタック……!!」と、強気に宣言して………

「王蛇のアタック時効果。龍騎のコアをリザーブに置き、消滅させる」

「っ!!」

王蛇がソードベントのカードを杖の形をした武器のバイザー部分に装填すると、ドルのような形をした剣がその手に握られる。そして徐に首を回しながら龍騎に迫っていき、それを腹部に突き刺す。

龍騎は堪らず消滅してしまった………

「龍騎!?!」

「スピリットの死を嘆いている場合じゃないぞ。今度はオマエの番だ。フラッシュマジック、ファイナルベント!!」

「!!」

「効果は当然わかるよな?……これにより、アタックしている王蛇に赤のシンボルを1つ追加……ダブルシンボルになる」

王蛇はファイナルベントのカードをベルトから引き抜くと、それを再び杖のバイザー部分に装填……

……ファイナルベント!!

と言う音声と共に紫色に包まれた巨大な大蛇が地を這いながら王蛇の背後に現れる。その後王蛇は謎めいた浮力で飛び上がると、大蛇が勢いよく吐きつけた毒液で勢いをつけ、アスラ目掛けて発進した……

アスラの残りライフは2つ……

そしてもう……

彼にこれを防ぐ手立ては残っていないくて……

「ぐっ……ぐあああああ?!」

へライフ2??0へアスラ

ピー……

王蛇の勢いをつけた連続蹴りがアスラのライフを1つ残らず破壊した。アスラはBパッドの「ピー」という敗北音声と共に、余の爆風により吹き飛ばされ、蓄積されたダメージに耐えられず、その場で転がり込んでしまう……

「ぐっ……」

「アスラ……そんな……!?!」

エールの恐れていた事が真実になろうとしていた。アスラはオロチに敗北し、オロチに殺害されてしまうと言うものだ。

「はっは……興味はないが、一応仕事なんだな。このカードはもらっていくぜ」

「……………龍騎……………」

オロチは王蛇のソードベントの剣を手にしながらアスラのBパッドまで近づくと、彼の命よりも大事なカードである仮面ライダー龍騎のカードが奪い取られてしまった。

「コイツが無ければオマエはもう頂点王になるのは無理だな……………はっはっ……………それどころかそこらへんのバトラーにも勝てなくなっただか!!」

「か、関係ねえよ……………ハアツ、ハアツ……………オレは諦めねえ。頂点王になる!!……………それがシイナとの約束だ!!」

敗北しても尚、龍騎を奪われても尚……………

アスラは夢を諦めなかった。身体は弱り切っただけでも心だけで強い覇気をオロチに向けて放って見せる。

「そうか……………死ね」

しかし、オロチはそのアスラの覇気に怯む事はなく、王蛇のソードベントの剣の切っ

先をアスラはと向ける……………

無論、殺害するためだ。

そしてその剣が振り下ろされる直前……………アスラは不本意ながら死を覚悟してしまおうが……………

「やめてエエエー!!!」

ー!!

刹那。エールの叫びが木霊し、オロチはその手を反射的に止める。

「お願いやめて。アンタの欲しがってた赤のオメガは私の手の中にある……………これをあげるから……………許して……………!!」

「何言ってるんだエール……………!?!」

自分のデツキをオロチに突きつけるエール。命よりも大事な母親の形見であるデツキを譲ると言うのだ。かなりの覚悟が見受けられる……………

オロチはそんなエールの言葉を聞くなり、またしてもニタニタと不適に笑いながらソードベントの剣を投げ捨てると……………

「はっはっ……………いいぜ。ついて来い」

オロチはそう言いながら己のBパッドの機能を使い、ワームホールを形成、エールに自分の後をついてくるように催促する。

エールは黙ってそれに従うように、そこへと足を進めるが……………

「待てよエール……………どこ行く気だ……………!!」

「!!」

倒れたアスラがエールを止めるべく、声を振り絞った。

行かせてたまるか。仮にも殺人鬼と一緒にどつか行くんだぞ。怖くないわけないだろ……………

「お別れね。さよならだよ」

「!?」

「清々するわ。コモンのドブネズミと一緒に行動しなくてもよくなるもの……頂点王なんて叶いもしない夢なんて見るのはやめて、さっさと故郷の貧相な村にでも帰れば？」

「何、言ってるんだ……!!」

しかし、エールは初めてアスラと出会った時みたいな冷ややかな態度を向ける。

ウソなのはわかる。一目瞭然だ。自分を護るために犠牲になろうとしているのはわかっている。だけどそんな事見過ごせるわけがない……………

「私はこの国で最も身分が高いエックスよ?……薄汚いコモンのアンタと今まで一緒に居てやっただけでも感謝なさい」

「仲間だろうが!!」

「アンタみたい喧しいヤツを仲間だなんて思った事ないわよ……いいから早く失せなさいって……………」

「おい行くぞエックスの女。早くここを潜れ」

「わかったわ」

「おいエール!!」

オロチに言われるがまま、エールはオロチの元まで赴き、出現しているワームホールを潜ろうとする……………

だが……………

「待てエール……………行くな……………行くなアアアー!!!」

「……………じゃあね……………アンタとの時間はそれなりに楽しかったわ……………!!」

アスラの怒号が混ざった悲痛な叫びも虚しく、最後は本当の事を口にしながら、エールは片目から一粒の涙を流し、オロチと共にこの場を去っていった……………

龍騎も仲間も奪われ、ただ一人無人のテーマパークに取り残されたアスラは蓄積されたダメージにより気を失ってしまう……………そしてその後直ぐに彼らの唐突な別れを悲しむかのような大粒の雨がポツポツと降り始めた……………

25 コア「飛べガンダム、エールを救出せよ」

「どっだ……………(ハハ)?」

薄れている意識の中、アスラは気がつけば一寸先どころか百寸先まで闇だと錯覚してしまう程のドス黒い空間の中にいた。だが、どこかひんやりしていて気持ち良い。

「おい。何奪われてんだ……………」

「?」

「ぐずぐずするなよ、さつさと赤き龍を取り返して来い……………アレが無ければ困るだろう、お互いにな」

「オマエ……………誰だ?……………どこにいった?」

闇の中から凶太い声が聞こえて来た。実はこの声は一度ユキカイ町でも耳にしているが、アスラの記憶からはすっぽりと抜け落ちているのか、彼は覚えていなかった。

いや、どちらかと言えば忘れさせられたと言うべきか……………

「赤き龍…………龍騎……………そうか、獲られたんだ」

「ゼゼゼ…………二度と負けんなよ、特にあのイカれたヘビヤロウにはな」

「……………ヘビ……………!!」

凶太い声の主の言葉からオロチの顔がアスラの頭の中で想起させられる。その途端、アスラは思い出した。

奪われたのは龍騎だけじゃない。もつと大事なモノも奪われたと言うことを

……………

そう思うと薄れていた意識が徐々にハッキリとして来て……………

「……………そうだ、あのヘビヤロウに……………奪われた……………大事なモノ……………龍騎なんかよりもつと大事な……………」

二度と負けてたまるか!!

エールは必ず助ける!!

オレは頂点王になる男だ!!

「ゼゼゼ……期待しておこう……まあ、死なねー程度に頑張んな」
「!!」

オロチにリベンジを果たし、必ずエールを救い出すと誓うアスラ……
その刹那、闇が晴れ、大いなる光が彼の体を覆い尽くして……

「ッ!!」

反射的に起き上がるアスラ。場所はベッドの上だ。悪い夢でも観ていたのか、寝汗がべっとりしていて酷い。と言うか上半身が包帯でぐるぐる巻きにされていて変な感じがする。

「……………オレ、夢の中で何かと話してたような……………??」

又しても見ていた悪夢を思い出せないアスラ。しかしオロチにリベンジしてエールを救い出すと言う誓うはハッキリと覚えている。

そして彼が今のこの現状を把握しようとした直後だ。見知った声が聞こえて来たのは……………

「よお小僧。起きて早々、案外元気そうじゃねえか」

「ツ!!……………テンドウさん!?!……………なんでここに……………つてかここどこですかアアアア!?!」

「ああ?…ライライ町の病院に決まってる?…このオレンジ犬がオマエの場所教えに来たんだよ。それでわざわざオマエをここまで運んでやったんだ。感謝しろよ小僧。じゃなきや殺す」

「ええええええ!!…でもありがとうございまアアアアす!!」
「むえ〜」

すぐ横にいたのは他でもない、この国のライダースピリットの三王、テンドウ・ヒロミだ。その肩の上にはオレンジ色のもふもふ、ムエも確認できる。

だが、そこにいたのはテンドウだけではなくて……………

「ようやく起きたかコモンのドブネズミ、待ちわびたぞ」

「ええ!?!…エールの兄ちゃんまで!?!」

「さあ、早く我が妹、エールの居場所を吐け。さもなければこの場で八つ裂きの刑にしてくれる」

さらにモビルスピリットの三王、エレン・オメガまでいた。この病室は2人の三王が腰を置く凄惨な状況だった。常人なら2人の放つ強者のオーラだけで意識が途絶えそうだが、場慣れしているアスラは驚愕しつつも案外平然としていた。

そして、今はそんな事よりもエールだ……………

アスラは苦々しく表情を見せながらもエレンの質問に答える……………

「エールは……………オレを庇ってオロチとか言うライダーハンターズのヘビヤロウと一緒にどっか行つちまった……………場所はわかんねえ……………」

「ツ……………オロチと共に姿を晦ましただどお!?!…奴は殺人鬼だ。ふざけるなよ貴様!!」

「まあまあ、ツンデレお兄様。そんなくらは初めから何となく予想できてたろ」

「誰がツンデレだ!!」

怒りに我を忘れ、アスラの胸ぐらを掴んで殴りかかろうとするエレン。しかしそれをテンドウが制止させる。

エレンはエールやアスラと違い、オロチが10年前にオメガ兄妹の母親で、三王の1人でもあったエレナ・オメガを殺害した事を最初から知っている。それ故にエールとオロチの接触を遠ざけていた。

しかしその均衡は遂に破られ、今のこの最悪な状況がある。

「よし。じゃあ怒り狂うツンデレお兄様のために良いものを見せよう」

「?」

テンドウがそう言いながら自分のBパッドをエレンに見せつけた。その画面には位置情報の詳細が表示される、所謂マップの画面だったのだが……………

「何だこれは?」

「何って、可愛い妹様の位置情報だよ」

「!?」

「昔、アイツがどこにいてもわかるようにBパッドにGPS付けろって頂点王がうるさくてな。それでオレとあの呑気な頂点王のBパッドはエールの場所がわかるのよ」

なんとエールの位置情報だった。エレンとしては喉から手が出る程に欲しい情報だったが……………

「貴様、何で早くそれを見せない!!」

「何で最初からそれ見せなかったんすかアアアー!!」

ほぼ同じタイミングでツツコミを入れるアスラとエレン。彼らとしては珍しく意見が一致した。

「ハツハツハ!!…悪りい悪りい、今のさっきまでシンプルに忘れてたわ!!」

「笑うところ!」

「……………まあ良いだろう。これでエールの場所がわかる……………借りるぞ」

エレンはそう言いながらテンドウのBパッドを手に取ると、もう要はないと言わんばかりに病室を出ようとする。

「ちよつと待つてくれ!!……オレにも行かせてください!!………ッ!」

「貴様では足手まといだ………ベッドの上で這いつくばっている」

エレンについて行こうと飛び出そうとするアスラだったが、さっきのバトルダメージがまだ残っているのか、痛みが体中に迸った。

「おいおい小僧。オマエはダメだろー。仕方ねえオレはコイツがどつか行かねーように監視しとくから、ツンデレお兄様はGPS辿ってエールを探しな」

「来ないつもりか?………テンドウ、ヤツは母上を殺した男だ。オマエも少なからず恨みはあるだろ?」

「恨みを晴らすならオメガ家のお偉いさんに限られるだろうよ。オレは面倒くせー。いいからとつとつと来て来い」

「……………腰抜けめ」

エレンはテンドウに悪態を吐きながら病室を後にした。いや、おそらく帰ってくる事はないだろう。

「……………てか、エールの兄ちゃんってあんなエールの事大事に思ってたんですか？」

「ああ、だから言ってるだろ？…ツンデレお兄様ってな」

「むえ〜」

エレンが病室を出たのを目に移すなり、アスラがそうテンドウに聞いた。

今回のやり取りをきっかけに、アスラはエレンのエールに対する本当の想いを知る事になった。少なくとも今までの彼の悪い印象は若干だが拭かれた事だろう。

「まさかあの殺人鬼がライダーハンターズとはな……………」

ライライ町近辺の森の中。エレンはテンドウのBパッドに表示されているマップを頼りに走っていた。全てはオロチに攫われたエールを救い出すため、

そして……

「ヤツは母上の仇だ。この手で必ず倒す」

心の中で憎しみをスパイスに燃え上がる怒り。

オロチが憎くてしょうがない。しかしそれは無理もない事、何せ、10年前、実の母親に手をかけたどころか今度は妹まで連れ去ったのだから……

「着いた……この辺りか……」

テンドウのBパッドが指し示す場所へとたどり着いたエレン。だが、そこには森の木々、人通りの悪い並木道があるだけで、それ以外は自分以外何も存在していなかった……

「オロチイイー!!!……そこにいるのはわかってる!!!……大人しく余と共に投降しろ!!!」

怒号の混ざったエレンの叫び。その叫びに怯えるように木々に止まっていた小鳥の群れが翼音を立てながら飛び立っていく。

そして出て来たのはそれだけではなかった……

「もー……うるさいわね……でも良いわ。許し上げる……イケメンだから♡」
「!?」

叫びに反応するかのように姿を見せたのは、エールでもなければましてやオロチでもない。長い髪を靡かせる絶世の美女とも呼べる人物。

「私はイバラ……ライダーハンターズのイバラよ……お探し物はこれでしょ?」

「ツ……エールのBパッド!!……貴様らエールに何をした!!」

エールのBパッドをエレンに見せつけるように投げ捨てるイバラ。この時点でエレンは察した。オロチがエールのBパッドのGPSに気が付いた事、そして目の前のこの女が身代わりとなってエールのBパッドを持ち出した事を……

「別にまだ何もしてないわよー……私はオロチに頼まれて困役になっただけだし……あつ、でもオロチの事だから保証はできないんだけどねん」

「本当の場所はどこだ？……早く教えた方が身のためだぞ」

「うつつふ、三王様は本当に妹さんが好きなのね……でもわかる。可愛いよねエールちゃん!!」

「貴様とはまともな会話ができんようだな。ならば力づくで吐かせてやるまでだ」

「あらあら光栄……あの三王にバトル振られるなんて」

エレンがそう言いながらBパッドを展開すると、イバラもそう反応しながら自分のBパッドを展開した。賭けるモノはエールの居場所という情報。

2人はBパッドにデッキをセットし、バトルの準備を行うとすぐさま……

……ゲートオープン、解放!!

コールと共にバトルスピリッツを開始した。

先行はイバラだ。

「ターン01」イバラ

「メインステツプ、湖に咲く薔薇をポンっと配置してエンドよ〜」

ー【湖に咲く薔薇】LV1

バトル開始直後、イバラの背後に不気味な雰囲気醸し出す巨大な薔薇が姿を見せる。

アスラとエールならわかる事だが、これがあるだけでイバラのデツキはより円滑にコアブーストが行えるようになる。当然、イバラはそれを狙っているのだが……………

「ターン02」エレン

「メインステツプ……………ストライクガンダムを召喚!!」

ー【ストライクガンダム】LV1

そんな彼女のターン終了直後にエレンが呼び出したのは一体の機械兵、世界三大スピリットの一角でもあるモビルスピリットのストライクガンダムだ。

「これがストライクガンダムね…想像よりも小ちゃいのねん」

ストライクガンダムに感想を残すイバラだが、会話もしたくないエレンはそのまま「アタックステップ……」と、静かに、それでいて迫力のある宣言をすると……

「行けストライクガンダム!!…効果でコアを追加!!」

戦闘態勢に入ったのか、その鉄の瞳から強い眼光を放つストライクガンダム。コアが追加され、LV2へと上昇する。

そしてその直後、エレンは手札からあるカードを引き抜いて……

「このタイミングで、手札にあるソードストライクの『換装・ストライカーパック』を発揮!!」

「!!」

「ストライクをソードストライクの姿へと昇華!!……現れ出でよ!!」

ー【ソードストライクガンダム】LV2(2) BP7000

自身の身の丈ほどはある巨大なビームサーベルを装備するストライクガンダム。その名称も変化し、その風貌に相応しいソードの名を冠するようになる。

「さらにソードストライクの効果、1コストを支払う事でネクサス1つを斬り裂く!!」
「っ!?!」

「ソードストライクのコアから支払い、湖に咲く薔薇を対象に取る!!……やれ!!」

天空にビームサーベルを掲げるソードストライク。そのままイバラの背後に聳える巨大な薔薇へと振り下ろし、それを一刀両断にして見せた……

「そのネクサスの効果は知らんが、先手必勝だ。先に断ち切らせてもらった」
「あらあら……抜け目がないのねん。流石三王」

エレンにとって、イバラのネクサスは全てが未知数だった。

しかし、そんな破壊時効果があるかもしれない初見のネクサスカードを何の躊躇もなく颯爽と破壊したのは三王としての長年の感と直感が冴えているとしか考えられなくて……………

「【換装：ストライカーパック】の効果で呼び出されたソードストライクは回復している……………つまり二度の攻撃が可能だ!!」

「ツ……………まあ良いわ。全部ライフで受けましょ!!」

〈ライフ5??4??3〉イバラ

アタック中のスピリットと回復状態に入れ替えられたソードストライクガンダムはこのターン二度のアタックが可能だった。エレンはそのアタック権利を全て浪費させ、イバラのライフを極限まで減らしに掛かる。

ソードストライクはその巨大なビームサーベルを二度振り、そのライフを1つずつ斬り裂いて見せた。

「ターンエンドだ……ライダーハンターズの女、時間が惜しい、早くターンを進めろ」

手札：4

場：【ソードストライクガンダム】LV1

バースト：【無】

「うつつふふ、面白いわ……本当にエールちゃんの事しか頭がないのね……ま、あの子可愛いから気持ちにはわかるけど♡」

僅か2ターン目で三王たる者の実力をイバラに見せつけるエレン。その頭の中はエールを助け出す事しか頭にない。しかし、イバラはそんな彼の内心を見抜きながら余裕の表情で手札を構えていて……

「……………」

「おい、何ソワソワしてんだ小僧。まさかここを出たいとか言うんじゃねえだろーな？」

「ハイハイ!!……やっぱオレも行きかけたです!!」

「直球だな、ダメだけど」

エレンとイバラがバトルしている中、時同じくして、ライライ町の病院ではアスラが無理して飛び出さないようにテンドウが監視していた。アスラとしては自分のせいでエールが居なくなつたと考えているため、性格上、助けに行きたくてウズウズしていても致し方ないと言えるが……

「……………ところでテンドウさん」

「あ?」

「エールの母ちゃんつてどんな人だつたんすか?……オレ今までずっとエールと旅して来ましたけど、そう言う事はあんまり聞いてなくて……て言うか気まずくなるから聞けなくて……」

アスラがテンドウに訊いた。エールの母親が三王である事はまあ訊いていたが、既に故人になっていると知ってはどうも聞くことが出来なかつた。そのため、彼はエールの母親、エレナについてほとんど無知だつた。

テンドウはタバコに火をつけながら間を置き、その事を徐にアスラに語りだした。

「エールとエレンのお袋、オレが『姉御』と呼び慕っていたエレナ・オメガ。あの人はオレが知る限りだと最強の三王だった」

「最強の三王……………」

「ああ、赤のオメガと紫のオメガ。2つのデツキで如何なる挑戦者も……………と言うかオレとエレンも一度だって勝てた事はなかった……………勝てたのはそれこそオマエの知る頂点王くらいだよ」

当時は2つのデツキを操る最強の三王とまで言われていたエレナ。何故当時はただの殺人鬼に負けて紫のオメガを取られたのかがいささか疑問に残るが……………

テンドウは「それで何より……………」と言葉を付け足して……………

「凄く優しいババアだった」

「ババアって……………」

どこか重みがあり、説得力のある一言だった。おそらくエレナ・オメガを間近で見ている彼だからこそであろう。この時点でそのエレナ様がどれだけ皆に親しまれ、信

用されていたのかがわかる。

「だがある日突然殺された……当時はまだあまり名の知れてなかった殺人鬼、オロチにな」

「!!」

「あのヘビヤロウはその後、全国から指名手配を受けたが、この10年姿形の気配すら見せなかった。そんな事もあつてか、殆どの連中は迷信かなんかだと思つてただらうな………おつと悪い、話が逸れたな」

オロチの内容に話が逸れる。信用できるエレナを失つた事により、テンドウはオロチに対して怒りを露わにしているかと思われたが、実際そうでもないようで、この事を話している際もあまりそのような兆候は見られなかった。

「姉御が死んでから何もかもが変わつた。エレンは居なくなつた三王の枠を補うべく多忙を極めながらも、姉御と瓜二つの顔だつた唯一の肉親であるエールを護るために強引に城に閉じ込めた。そしてエールは半ば無理矢理受け継がれた赤のオメガを扱いきれずに苦悩した……それはオマエもわかるだろ？」

「……………はい」

エレンがエールを城に閉じ込めていたのも今ではなんとなく理解できた。きつと大事なモノをこれ以上失いたくなかったのだろう……………

エールだけでなくエレンもこの10年で相当な苦労や努力を重ねていた事がこの時点で理解できる。

「オレ…………エールの事知ってるようで、何も知らなかったんすね……………」

「……………ま、オマエが気にする事じゃねえんじゃね?…それより小僧、タバコ切れたからちよつと買つて来い」

「……病院つすよ!?!」

「むえ〜」

エールの事をあまり理解してやれていなかった事を反省するアスラ。テンドウは慰めているつもりなのか、テンドウはお気楽な言葉を彼に伝える。

そして、彼らの会話を一旦締め括るかのように、ムエは「むえ〜」と鳴き声を上げた。

場面は戻り、森中でのエレンとイバラのバトル。モビルスピリット、ソードストライクガンダムを目に映し、余裕のある表情を浮かべながら、イバラの第4ターンが幕を開ける。

「ターン03」イバラ

「そんじゃ、ちゃちゃつとやつちやいましてよか!!……メインステツプ、スピリットカード、ビオランテ・花獣形態ちゃんをLV2で召喚!!」

「!!」

1【ビオランテ（花獣形態）】LV2（3）BP5000

破壊したはずの湖に咲く薔薇と全く同じ姿をしたモノが、今度はイバラの前衛に現れる。

「さっきのネクサスと全く同じ姿をしたスピリットか」

「うっふふ、ネクサス戦法が通じないならスピリットカードで戦うまでよく……ターンエンド」

手札：4

場：【ビオランテ（花獣形態）】LV2

バースト：【無】

不気味な薔薇が前に出て来た事で、より重たいプレッシャーがエレンを襲う。しかし、彼はそれを物ともせず、堂々と己のターンを進行していき……………

「ターン04」エレン

「メインステップ、ソードストライクをLV2へアップさせ、ストライクガンダムを再起動させる」

1【ストライクガンダム】LV2（2）BP6000

ソードストライクのLVが上昇すると共に、「換装」の効果で手札に戻っていた通常のストライクガンダムが今一度姿を見せる。

そして2体の強大なモビルスピリットが並んだ事にも関心を示す事なく、エレンは己のアタックステップを開始する。

「畏見え見えの盤面だが、ここは攻めさせてもらう!!……いけストライクガンダム!!……効果でコアブースト」

ストライクガンダムが背中ของブースターでイバラの元へと低空飛行で翔る。

「うっふふ、それでも正直に飛び込んで来てくれるのねん!!……イケメンにそう言われると嬉しいわ!!……花獣形態ちやんでブロックよ!!」

ストライクガンダムの行手を巨大で不気味な薔薇が阻む。しかしながらBPは僅差でストライクガンダムの方が上。トゲのある触手がストライクガンダムを縛り付けるが、それを容易く擦り抜け、中心の花弁を鋼鉄の拳による一撃で殴り飛ばす。

それにより巨大な薔薇の怪物は力尽きて爆散してしまう……

「このタイミング……狙いは破壊時の効果か。いいだろう、使うがいい」
「うつつふ、偉そうな所はエールちゃんにくりそつね!!……そしてお察しの通り花獣形態ちゃんの効果を發揮させちゃうわ!!」

バトルによって破壊されるまで一切の効果を使わなかった事からイバラの狙いはスピリットの破壊時効果だと悟ったエレン。そしてそんな彼の予測は完璧に的中しており、イバラはそれを出し惜しみせず使用する……

「この効果で、手札にあるビオランテと名前のあるスピリット1体をノーコスト召喚!!」
「!!」

「呼んじゃうのは最強のビオランテ……今日もよろしくやつちやつて!!……現れなさい、バイオ怪獣ビオランテ!!……LV2!!」

ー【バイオ怪獣ビオランテ】LV2(3)BP20000

爆散して飛び散った花卉の残骸が蠢きながら再生し、再び密集、さらに肥大化してい

く……………

完全に薔薇の姿に戻るかと思われたが、現れたのはまるで触手を引つ提げたワニみたいな怪物。2機のストライクガンダムを自身の影で隠してしまうほどの巨躯を持ち、三王であるエレンを威嚇するかの如く鋭い咆哮を上げる。

「どう?…イケてるでしょ…これで残ったソードストライクでアタックしても返り討ちに会うだけだから無理無理の無理ね!!」

「フン……この程度の事で粹がるな無法者、ターンエンドだ」

手札：4

場：【ソードストライクガンダム】LV2

【ストライクガンダム】LV2

バースト：【無】

三王らしく堂々と振る舞うエレンだが、流石にこのターンではまだあの巨大なジオラントを倒す手段が無いか、このターンはエンドとし、イバラにそれを譲る。

逆に勢いに乗って来たのか、イバラは意気揚々に己のターンを進めていった……………

「ターン05」イバラ

「メインステップ……バーストをセット……さらにテツポウナナフシをしよーかん
〜!!…バイオ怪獣ビオランテちゃんに直接合体よ!!」

1 【バイオ怪獣ビオランテ+テツポウナナフシ】LV2 (3) BP22000

名前の通り鉄砲の形をした虫のスピリットがイバラの場に出現すると、巨大なビオラ
ンテは自身の触手でそれを掴み取り、吸収、より強大な力を持つ合体スピリットとなっ
た。

「召喚時効果。残った手札を捨て、あなたの手札の枚数分だけドローさせてもらうわ！」
テツポウナナフシの効果だ。イバラは残り2枚となった手札を捨て、エレンの手札の
枚数分、計4枚のカードを新たにドローした。

「さあ!!お待ちかねのアタックステップよ!!…行きなさいビオランテちゃん!!」

イバラの指示を聞くなり眼光を鋭く放つビオランテ。その目先に存在するのはエレンの場にいるソードストライクガンダムだ……………

「アタック時効果発揮〜!!……………ソードストライクガンダムを疲労させる。さらにコア2個以下のスピリットを疲労させた事で回復するわ!!」

「!!」

【バイオ怪獣ビオランテ+テツポウナナフシ】（疲労??回復）

ビオランテは触手を鞭のようにしなりをつけ、ソードストライクガンダムを叩きつける。ソードストライクガンダムはその場で叩き伏せられてしまい、このターンの身動きを封じられてしまった。

「さらにビオランテちゃんは元々ダブルシンボル!!…テツポウナナフシちゃんと合わせてトリプルシンボルとなっているわ〜!!……………つまり何が言いたいかわかる?……………これで終わりって事よ!!」

トリプルシンボルと化したビオランテの二度の攻撃。並大抵のカードバトラーならこの時点で早々に決着が着いたはずだろう……………

しかし、イバラの今回の敵はこの国の最強カードバトラー三王の一角、エレン・オメガ。当然この程度で終わるわけがなくて……………

「二撃目はライフで受ける……………ッ」

〈ライフ5??2〉エレン

ビオランテの触手を振るった一撃がエレンを襲う。エレンに多大なバトルダメージがのし掛かるが、それでも彼は平然と場を見つめていて……………

「終わりよ!!……………二撃目え!!」

狂った目でエレンを見つめながらそう宣言するイバラ。ビオランテが二撃目を構えるが……………

その瞬間に三王たるエレンは手札にあるカードを引き抜いて……………

「フラッシュチェンジ、フリーダムガンダム・ハイマットフルバースト!!」

「!?」

「この効果により、コスト40まで好きなだけスピリットを手札に戻す。醜き獣物よ、去れ!!」

「あら?」

エレンの放ったカード効果により、草花で構成された身体がたちまち粒子と化し、テップウナナフシごと消滅してしまうビオランテ。自身の最強カードのそんな呆気ない幕引きに、イバラは思わず声を漏らす。

そして、ビオランテを倒したカードの真骨頂はその効果発揮後だ。

「チェンジの効果により、ストライクガンダムと回復状態に入れ替える……………現れ出でよ、フリーダムガンダム・ハイマットフルバースト!!」

ー「フリーダムガンダム「ハイマットフルバースト」」LV2(2)BP12000

通常のストライクガンダムが溢れんばかりの光量に包み込まれていき、その中で姿形を大きく変える。そしてそれを弾き飛ばしながら姿を見せたのはストライクではなく、フリーダムの名を持つモビルスピリット、無数の銃火器を持つハイマツトフルバーストだ。

「どうした三下。これで終わりか??」

「あらあら……やっぱりエールちゃんが絡んで来ると張り切っちゃうのね……
………ターンエンドよ」

手札：6

バースト：〔有〕

ハイマツトフルバーストの強力なバウンス効果により半ば強引にターンエンドを迫られたイバラは致し方なくこのターンをエンドとした。しかし、劣勢なのは見るよりも明らかだが、その表情はどこかまだ余裕があつて……

（うつつふふ、馬鹿正直にパワーカードをぶつけるだけが私のバトルじゃなくてよ……次

のターン、私のバーストが火を吹くわ!!」

内心でそう呟くイバラ。彼女の狙いは伏せていたバーストカードだ。これを発揮させ、次のターンでこの劣勢から一気に大逆転を狙う気だった……………

しかし……………

「ターン06」 エレン

「メインステップ……………何を狙っているのか見え見えだ。この程度で三王である余を欺けると思うなよ」

「?」

「手札に戻ったストライクガンダムを再召喚!!」

ー【ストライクガンダム】LV2(2)BP6000

エレンがそういう放つと、三度通常のストライクガンダムが現れる。

「召喚時効果、貴様のバーストを破棄する」

「え？」

ストライクガンダムが地面に向かって鋼鉄の拳を打ち付けると、地割れが発生し、イバラのバーストをその狭間へと沈めた。今まで使う機会がなかったが、これがストライクガンダムの強力な効果の1つだ。

「ええええええ!?……うっそー!!」

「翔烈降臨か、成る程。この効果で手札に戻ったビオランテの再度召喚が狙いだったか」

この光景に両手で頬を挟んで驚愕であると言いつつイバラ。伏せていたのは緑のマジックカード、翔烈降臨。エレンの言う通り、この効果でハイマツトフルバーストによつて手札に戻ったビオランテを呼び戻そうとしていた。

しかし、それもはや叶わぬ夢。

エレンはこれで終わりだと言わんばかりに「アタックステップ!!」と強く宣言すると

……

「三機一斉攻撃!!」

「!!」

〈ライフ3??2??1??0〉イバラ

ストライクガンダムが鋼鉄の拳で、ソードストライクが巨大なビームサーベルで、ハイマツフルバーストが銃火器による一斉射撃で、それぞれイバラのライフを一つ残らず叩き壊した。

これにより、勝者はエレンだ。最後は意外と呆気なかったが、完璧な予測と圧倒的な実力差を見せつけ、ライダーハンターズのイバラに勝利を収めて見せた。

「あくあ、負けちゃったー！ー流石は三王でイケメン。正に隙無しって感じ〜」

「余の勝ちだ。エールとオロチの居場所を洗いざらい吐いてもらう」

「おーこわ〜……激おこだね〜」

勝利した事により、エレンはイバラに情報を言えと脅迫するようにジリジリと詰め

寄っていく。ついでにライダーハンターズの一員でもある彼女を拘束するかなのだらう。

イバラとしては絶体絶命のこの状況……だが、彼女はこれと言って焦っている様子もなく、「でも……」と小さく笑いながらそう呟くと……

「この仕事が終わったらオロチから赤いライダースピリットをもらえる約束してるから、そう簡単にお縄に付くわけにはいかないのよねー!!!」

「!!」

オロチから借りていたGPS付きのエールのBパッドをエレンに向かってぶん投げたイバラ。決してヤケクソになったわけではなく、エレンがそれをキャッチしている間に、自分のBパッドからライダーハンターズ特有のワームホールを開き、この場から瞬時に逃げ出したのだ。

「ツ……貴様アアアア!!!」

逃げるように消え失せたイバラに対し、激怒するエレン。無理もない、散々足を止め

られた挙句、殆どの情報を得られないまま終わってしまったのだから……………

彼はただただ行き場の無い怒りを誰もいやしない空間にぶつける事しかできなくて……………

ここはどこかの洞窟、その最も奥にある広大な空間……………

そこにはエレンが探し求めていたエールと、そんな彼女をここまで連れてきた殺人鬼の大男、オロチがいた。

「ここはオレの隠れ家。三王どころか同じライダーハンターズの連中でさえも知らない場所だ」

「……………」

「オマエをここまで連れて来てやったのには当然わけがある……………わかるよな？」

オロチがエールに訊いた。それは彼女にとつては至極簡単な質問。いや、彼女でなくともオロチと言う男を知っていれば誰にでもわかるものだ。

「ええ、当然わかかってるわ。私を倒して赤のオメガのカードを手に入れたいでしょ？……まあそうでもしないと赤のオメガは他の誰かの手に渡る事はないんだけどね」
「ああそうだ。ここでオマエを殺す……あの時のオマエの母親みたいにな。考えただけでも唆る展開だ」

オロチはエールとエレンの母親を殺害した事を思い出しながら告げた。普通なら、親を殺害した仇が目の前にいれば復讐心に囚われてしまい、我を忘れてしまうだろうが、エールはどこか冷静な表情を浮かべていて……

「……………アンタに着いて行く時、赤のオメガを渡すって言ったけど、アレは全くのウソよ……最初から渡す気なんてさらさらないわ」

「ほほお……つまりオマエはこのオレに勝つ気でいるのか。三王たるオマエの母親に勝利したこのオレに!!」

「……………関係無い。そのカードは、紫のオメガは私達オメガ家のモノ……………アンタには相応しく無い。今ここで返してもらおうよ!!」

「ハッ……………いいね……………それだけ強気で来られると殺しがいるつてもんだぜ……………

ほらよ!!」

「!!」

オロチはBパッドを持たないエールにBパッドを投げ渡す。どこの誰から奪ったのかは定かでは無いが、これでエールもバトルができる。

エールは初めからアスラの元を離れる気などなかった。全てはオロチがエレナから強奪した紫のオメガを取り返すためだ。そのためにアスラに騙すような事を言い放ち、オロチの後を歩いて行ったのだ。

その後、2人はお互いのBパッドを展開し、デッキをセットした。そして、初手の手札を引きながら互いに鋭く睨み合い、言葉を交わしていく。

「オレは10年間この時を待ちわびた……………行くぞオメガの女ああ……………必ずその赤のオメガをいただく!!」

「そんな事はさせないし、私はアンタを絶対許さない!!」

……………ゲートオープン、界放!!

オロチはエールから赤のオメガを奪うため、逆にエールはオロチから紫のオメガを取り戻すため、命を賭けたバトルスピリッツが幕を開けた……………

26コア 「オメガ激突、絆の超究極進化」

……………ゲートオープン、界放!!

広大な空間を有する洞窟の最奥部、そこで赤のオメガのカード達を欲するオロチと、紫のオメガを取り戻すべく勇気を振り絞って立ち上がったエールのバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける……………

エールの孤独な戦いが始まったのだ……………

先行はオロチ。殺人鬼らしい狂ったような不気味な笑みを浮かべながらターンシークエンスを進行していく。

「ターン01」オロチ

「メインステップ、ネクサスカード、ミラーワールドを配置してエンドだ」

1 「ミラーワールド」LV1

アスラとロンのみが所有していたネクサスと全く同じカードを配置するオロチ。その影響で情景が鏡像へと切り替わった。

「ターン02」エール

「メインステップ、勇気の紋章をLV2で配置してエンド」

1 「勇気の紋章」LV2（1S）

エールもすぐさま擬似太陽とも呼べる存在を背後に配置し、そのターンをエンドとした。

お互いにネクサスと言う名の足場を配置し、地の利を固め合ったこの最序盤。ここからバトルがより加速するのは誰の目から見ても明らかであって……

「ターン03」オロチ

「メインステップ、バイ・パイソンをLV2で召喚!!…バーストも伏せる」

ー【バイ・パイソン】LV2(2S) BP3000

白蛇の見た目をした紫属性のスピリット、バイ・パイソンがオロチの場に現れる。そしてついでのように配置されたバーストを見て、エールは目を細めた。アスラ戦でも使ったライダースピリット、仮面ライダー王蛇を警戒しているのだろう。

「アタックステップ、バイ・パイソンでアタック。効果でソウルコアをトラッシュに置き、2枚ドロー」

ー【バイ・パイソン】(2S??1) LV2??1

動き出したバイ・パイソン。その効果でソウルコアがトラッシュユへと弾かれ、オロチに2枚のカードを与えた。

「ライフで受ける!!……………」

〈ライフ5??4〉エール

前のターンでネクサスの配置にコアを使い果たしたエールにこれを防御する術はなく、そのままライフで受けた。バイ・パイソンの体当たりがそれを1つ砕き、彼女に多大なバトルダメージを与える。

だが、ただで転ぶわけでもなくて……

「勇気の紋章の効果、私のライフが減った時、BP5000以下のスピリット1体を破壊する!!」

「!」

「消えなさいバイ・パイソン!!」

擬似太陽の中心から火炎弾が放たれる。それは一直線にオロチのバイ・パイソンの元まで飛び行き、焼き尽くした。

「馬鹿ね。警戒くらいしなさいよ」

「その効果は知ってたさ。知ってて殴った」

「は？」

「カードを増やしたかったからなく……何よりライフを減らした方が面白いだろ？……これは食うか食われるかの勝負!!祭りだ!!……バトラーもスピリットも命を張ってこの存在だ……そう思わないか？」

「何言ってるのよアンタ……」

兎に角狂った発言が目立つオロチ。

バトルスピリッツを楽しむという価値観を持つカードバトラーならこの世界にだって大勢いるが、命の削り合いを楽しむなどと言う狂った価値観を持つカードバトラーなど、おそらく彼くらいなものだろう。

「ターンエンドだ。本気で来い。じゃねえと唆らねー」

手札：5

場：【ミラーワールド】LV1

バースト：【有】

そんなオロチの言葉に背筋を凍らせながらも、エールは回って来た自分のターンを全力で開始する。

「ターン04」エール

「ドローステップ、勇気の紋章の効果。ドロ一枚数を1枚増やし、その後1枚捨てるわ」
勇気の紋章の効果がここでも起動。エールの手札の質が向上していく。

「メインステップ!!…創界神ネクサス、八神太一を配置!!…神託の効果でコアを増やす!!」

1【八神太一】LV1(1)

エールの創界神ネクサス、八神太一が配置される。特に何が出現したわけでもなく、変化もないが、破壊されづらい強力なネクサスを配置できたのに変わりはない。

神託の効果も成功し、カードには1つのコアが置かれた。

「さらに!!…:勇気の紋章のコアを使って、太一のアグモンをLV2で、第二のアグモンをLV1で連続召喚!!」

1【太一のアグモン】LV2(2)BP4000

1【アグモン】[2]LV1(1S)BP2000

エールの場に2体のアグモンが召喚される。太一のアグモンの召喚時効果でその手札に追加で1枚のカードを加えられ、神託により、八神太一にはコアが2つ追加された。

「八神太一の効果!!…:コア3つをボイドに送り、1枚ドロ」

創界神ネクサスとしての効果が起動。エールの手札はさらに増える。

「アタックステップ!!…:太一のアグモンの【進化・赤】を發揮!!…:成熟期スピリット、グレイモンに進化!!」

1「グレイモン」LV1(2) BP4000

太一のアグモンの身体が青白く発光すると、その姿形を大きく変化させ、最終的には巨大な3本の頭角を持つ恐竜のようなデジタルスピリット、グレイモンに進化を遂げた。

新たなデジタルスピリットの登場により、八神太一にコアが1つ追加される。

「アタックステップ!!…第二のアグモンでアタック!!」

しかし、エールは強力な効果を持つグレイモンではなく、成長期の第二のアグモンで攻撃を仕掛けた。前のターンでコアをほとんど使い切ったオロチはどちらにせよライフで受けるしかないのだが……

「ライフだ!!……ッ」

へライフ5?!4へオロチ

「よしっ!!」

アグモンがその鋭い爪で彼のライフを1つ切り裂いて見せた。エールはその様子にグツと拳を握りガッツポーズを見せる。

オロチは多大なバトルダメージを受けるも、その表情は不気味にニヤついでいて……

「わかるぞ。オレにはわかる……オマエはオレの王蛇を警戒してるな」

「!!」

「だからわざわざグレイモンじゃなくてソウルコアが置かれているアグモンから殴って来た……違うか？」

「……………!」

凶星だ。仮面ライダー王蛇の効果で最も警戒すべきは破壊効果でもコア除去効果でもなく、召喚時で破壊したスピリットのソウルコア以外のコアをボイドに送ると言う事だ。

コアが増え辛い赤デッキのエールはこの手の効果は嫌でも警戒してしまっていた。

だから破壊されても最小限で済むようにソウルコアしか置かれていない第二のアグモンからアタックを仕掛けた。

だが……………

「警戒し過ぎなのは良くねえな!!……………バースト発動!!……………絶甲氷盾!!」

「ツ……………王蛇じゃない!?!」

「効果でライフ1つを回復!!」

〈ライフ4??5〉オロチ

勢い良く反転して出て来たのは予想していたライダースピリット、王蛇ではなく、なんの変哲もない汎用マジック。その効果でライフ1つが瞬時に回復してしまった。

「エックスのバトルは素直過ぎる。教科書に載ってるような戦い方だ……………だから負けたんだよ、この国で最強と言われた三王でさえも、このオレに!!」

「ツ……………アンタがお母様を語るな!!」

手札：4

場：「グレイモン」 L V 1

【アグモン「2」】 L V 1

【勇気の紋章】 L V 1

【八神太一】 L V 1（1）

バースト：【無】

自分の母親であるエレナの事を語るオロチに怒りを露わにするエール。人間として間違いなく底辺であるあの男にそう言われるのが悔しくてしょうがないのだろう。

だがここはそのターンを終え、オロチにターンを渡した。

「ターン05」オロチ

「メインステップ、ネクサス、水銀海に浮かぶ工場島を配置!!」

1 【水銀海に浮かぶ工場島】 L V 1

アスラ戦でもオロチが使用したネクサスカード、水銀海に浮かぶ工場島が配置され

る。これでエールは自分のターンのみ、効果で手札を増やしても、その枚数分破棄しなければならなくなる。

「さらに新しいバーストを伏せ、エンドだ」

手札：4

場：【ミラーワールド】 L V I

【水銀海に浮かぶ工場島】 L V I

バースト：【有】

しかし攻め札がなかったか、ネクサスの配置だけで早々に己のターンを終えたオロチ。エールはこの気を逃すまいと自分のターンを再び始めていった……………

「ターン06」エール

「メインステップ!!…第二のグレイモンをL V Iで召喚!!」

1【グレイモン】「2」 L V I (1) B P 4 0 0 0

エールのターン早々、場に2体目となるグレイモンが姿を現した。その影響で八神太一にも2つ目のコアが追加される。

「召喚時効果で水銀海に浮かぶ工場島を破壊して1枚ドロー!!」
「!!」

登場するなり轟音のような咆哮を張り上げる第二のグレイモン。水銀海に浮かぶ工場島はその振動でヒビ割れるように砕け散り、消滅していった。

「私にネクサスを活かした戦いは期待しない方がいいわよ」

「ほお、中々面白いな。だがそれくらいできなきや奪う価値もない!!……さあ、次はオレをどう楽しませる?」

「こうしてあげるわよ!!……勇気の紋章のLVを2に上げてアタックステップ!!……第二の
アグモンでアタック!!」

王蛇を警戒して再びソウルコアしか置かれていない第二のアグモンでアタックする

エール。オロチはこの攻撃から身を守るそぶりすら見せず……………

「ライフだ!!…………ツ」

〈ライフ5??4〉オロチ

アグモンの鋭い爪が今一度オロチのライフを切り裂いて見せた。しかし、それは彼の伏せていたバーストカードの発動条件でもあつて……………

「ライフ減少により、バースト発動!!……………来い、仮面ライダー王蛇!!」
「ツ……………来た」

1 【仮面ライダー王蛇】 LV2 (3) BP8000

勢い良く反転したオロチのバーストカードは今度こそ仮面ライダー王蛇。様々な鏡像が重なり、現実はその邪悪な姿を見せる。

「召喚時効果!!…疲労している第二のアグモンを破壊!!」
「!!」

登場したばかりの王蛇が第二のアグモンを睨みつけると、第二のアグモンから紫炎が纏わり付き、それを焼き尽くした。

この際に、第二のアグモンのLVの数だけソウルコア以外のコアをボイドに送る事ができたのだが、ソウルコアしか置かれていなかったためにこちらの効果はほぼ不発に終わる。

「ふっ……痺れを切らしてようやく召喚してくれたわね。ターンエンドよ」

手札：4

場：【グレイモン】 LV1 (2) BP4000

【グレイモン】 [2] LV1 (1) BP4000

【勇気の紋章】 LV2 (1)

【八神太一】 LV1 (2)

バースト：【無】

王蛇の最も厄介な効果は去り、一先ず安堵したエールはそのまま2体のグレイモンをブロッカーとして残し、このターンをエンドとした。

次はオロチのターンだ。王蛇の召喚時効果を最大限に発揮できなかった事に対して、苛立ちを覚えているわけでもなく、今だ余裕な表情を浮かべながらそのターンシークエンスを進めていった……

「ターン07」オロチ

「メインステップ……オレのデツキは王蛇の召喚時に頼っているわけじゃねえ……面白いもん見せてやるよ。ブレイヴカード、スカル・ガルダを王蛇に直接合体するように召喚!!…効果で1枚ドロロー!!」

「!!」

1【仮面ライダー王蛇＋スカル・ガルダ】LV2（3）BP12000

まるで骨となった悪魔の使いのようなブレイヴが現れ、王蛇に纏わりついていく。その邪悪な鎧はより凶悪な姿へと変貌し、BPやシンボルも強烈に跳ね上がった強力な合

体スピリットとなる。

「バーストをセット!!……さらにミラーワールドのLVを2に上げてアタックステップ!!
……合体した王蛇で攻撃する!!」

王蛇が徐に首を回しながらエールに狙いを定める。そんな狙われた主人を護らんと、立ち塞がる2体のグレイモンだったが……

「王蛇のアタック時効果で第二のグレイモンのコア2個をリザーブへ!!……よって消滅

!!」

「!!」

ー【グレイモン「2」】(1??0) 消滅

王蛇がグレイモンを睨むだけで強い衝撃波が放たれる。第二のグレイモンはそれに吹き飛ばされ、たちまち消滅してしまう。

「さらにミラーワールドの効果でカードをオープン、アドベントカードならノーコストで発揮!!……………へっ、ファイナルベントだ」

「なッ……………!?!」

運が悪い事に、ミラーワールドの効果でファイナルベントがノーコストで発揮される。アスラを知っているエールだからこそ、そのカードがどれだけ強力なのかを理解しており……………

「効果で最初のグレイモンを破壊し、アタック中の王蛇に赤のシンボル1つを加える!!」
「くっ……………!!」

王蛇がベルトのカード束からカードを1枚引き抜き、それを杖の形をした武器に装填。

……………ファイナルベント!!

と、音声が流れると共に巨大な紫色をした大蛇が現れ、毒のブレスを吐きつける。王蛇はそれに流されるように勢いをつけ、グレイモンに強烈なキックをお見舞いした。グレイモンはたまらず爆散してしまう。

「そしてアタックは継続中!!…3点分のシンボルを食らいな!!」

「ツ……………ぐつ……………あああああ!!!」

へライフ4??1へ エール

グレイモンのみならずエールのライフをもその蹴り1つで破壊してしまう王蛇。今までとは比較のしようがない程のダメージに、エールは思わず膝をついた……………

「ターンエンド。どうしたスピリット空だぞ、もう終わりか?…もつと楽しませろ」

手札：4

場：【仮面ライダー王蛇＋スカル・ガルダ】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【有】

「ツ……………まだよ。まだ、諦めない……………!!」

「へへっ、期待してるぜ」

ライフは残り1。スピリットは全滅。誰がどう見ても絶体絶命なこの状況。だがここまで来て諦めるわけにはいかない。アイツなら、アスラならきつとまだ諦めたりしないと思いを馳せ、エールは再び立ち上がり、己のターンを開始していく。

「ターン08」エール

「メインステップ!!……太一のアグモンと第三のメタルグレイモンを召喚!!」

1 「太一のアグモン」LV2 (2) BP4000

1 「メタルグレイモン」[3] LV3 (4) BP11000

【進化】の効果で手札に戻っていたアグモンが再び場に現れると共に、地面から鋼鉄の体を持つグレイモン、メタルグレイモンが飛び出して来た。

「太一のアグモンの召喚時効果!!……よし、ウォーグレイモンを手札に!!」

「おお、来たか。赤のオメガ、その象徴」

召喚時効果も無事成功し、エールの手札に究極体、ウオーグレイモンが行き渡った。

「バーストを伏せてアタックステップ!!…第三のメタルグレイモンでアタック!!…効果で回復!!」

ー [メタルグレイモン [3]] (疲労??回復)

咆哮を張り上げながら走り出すメタルグレイモン。その直後に回復状態となり、二度目の攻撃権利を得る。

そしてこの瞬間に手札にあるウオーグレイモンのカードを構えるエール。煌臨を狙っているのだ。今煌臨を決めることができればオロチの王蛇を破壊し、一気に勝負を決める事ができるからだ……

しかし、そんな事はお見通しか、エールがウオーグレイモンのカードを切る前にオロチが手札にあるカード効果を発揮させた……

「オマエの狙いは手に取るようにわかるぜ……フラッシュ煌臨発揮!!…対象は仮面ライ

ダー王蛇!!」

「ッ……………!?!」

オロチが先に煌臨を發揮させる。そしてそのカードはエールにとつても因縁のあるカードであり……………

「待ち侘びたぞ……………来い、メタルガルルモン……………!!」

「ッ……………!!」

ー【メタルガルルモン＋スカル・ガルダ】LV2（3）BP18000

オロチの背後から飛び立った神獣の影が王蛇と重なり合う。その瞬間に眩い光を放ち、現れたのは鋼鉄の体を持つ究極体、メタルガルルモン。

煌臨元となった王蛇と合体していたスカル・ガルダの影響か、その身体には禍々しい邪骨が取り憑いていた。

「……………メタルガルルモン……………」

「紫のオメガ。その象徴だ……今となってはオレのデッキの双壁の1つ」

「それはアンタのカードじゃない!!……それは私たちオメガ家のモノよ!!」

「じゃあなんでこいつはオレを選んだ!!……オメガのカードはライダースピリットみたく使用者を選ぶんだろ?」

「ッ……!!」

確かに……

よく考えてみたら変な話だ。

なんでメタルガルルモンは……紫のオメガはオロチのデッキに入れられる。何故オロチはそれを使う事ができる。

いや、考えてもしょうがない。どちらにせよエックスの名にかけて取り返さなくてはならないのだ。エールはそう思いながら手札のウォーグレイモンを引き抜いた……

「フラッシュ!!……煌臨発揮!!……対象は第三のメタルグレイモンッ!!」

第三のメタルグレイモンが真っ赤な炎にその身を包まれていく。メタルグレイモンはその中でより強く、スマートな姿へと変貌していく……

「究極進化!!……ウオーグレイモンツツ!!」

エールが究極進化を、その究極体の名を叫んだ。炎に包まれたメタルグレイモンだったそれは腕に備え付けられた鉤爪のある籠手を振るい、その炎を吹き飛ばして姿を見せる。

そこにいたのは究極体スピリットにして、最強の竜戦士であるエールのエース、ウオーグレイモンだ。

ー「ウオーグレイモン」LV3(4)BP16000

「コイツがウオーグレイモン……峻るな」

「ウオーグレイモンは煌臨時、ブレイヴのBPを無視してBP15000まで好きなだけスピリットを破壊できる……けど」

「ああ、メタルガルルモンは効果で破壊されない。その効果は実質無効だ」

不本意な再会を果たす2種のオメガデツキの象徴。オメガ家には長い歴史があるが、

この2体の究極体が対峙して戦ったと言う記録は無い。

「破壊はできなくてもアタックは継続するわ!!…そして肝心のメタルガルルモンは疲労状態!!…このターンで倒す、頼むわよウオーグレイモンツ!!」

エールの指示でドラモンキラーと呼ばれる鉤爪の武器を構え、飛び出すウオーグレイモン。狙うは当然オロチのライフだ。

そしてエールの言う通り、オロチの場には疲労したメタルガルルモンのみであり、この攻撃を護ることができなくて……

「ライフだ!!……ぐっ」

へライフ4?!3へオロチ

ウオーグレイモンの両腕のドラモンキラーがオロチのライフ1つを切り裂いて見せた。

さらにまだまだ攻撃は終わらず……

「ウォーグレイモンのLV2、3のアタック時効果!!…トラッシュのソウルコアをウォーグレイモンに置き、アンタのライフ1つをボイドに送るわ!!」

「!!」

「…ガイアフォース!!」

ウォーグレイモンは両手を合わせ、その間隔を広げながら間にある火炎弾を形成、徐々に巨大化させていく。そして己よりも巨大になったその火球をオロチのライフへとぶん投げて見せた。

「ぐっ……………ぐおおおおお!!」

〈ライフ3?2〉オロチ

その豪快な火球はオロチのライフを直撃。それ1つは溶けるように消滅した。さらにエールの場にはまだアタックできるアグモンと、回復状態のウォーグレイモンが存在するため、フルアタックでオロチを倒す事ができるが……………

流石にそれだけで勝てる程オロチは甘くなくて……………

「へへっ…効いたぜ、今のはな!!」

「!!」

「バースト、絶甲氷盾!!…ライフ一つを回復させ、コストを支払いアタックステップを終了させる!!…………不足コストはミラーワールドから確保。よってLVが下がる」

〈ライフ2??3〉オロチ

又しても絶甲氷盾。オロチのライフが瞬時に回復すると共に、氷壁がエール達の前に立ちはだかる。それは彼女がこのターンのエンドを宣言しない限りは消える事はない。

「くっ…………ターンエンド…………」

手札：2

場：【ウオーグレイモン】LV3

【太一のアグモン】LV2

【八神太一】LV2 (5)

【勇気の紋章】 L V 2 (1)

バースト：【有】

致し方なくそのターンを終えるエール。巨大な氷壁が崩れるものの、次はオロチのターン。残念ながら彼女にアタックする権限は無い。

「ターン09」オロチ

「メインステップ、メタルガルルモンのL Vを3へ上げる」

1「メタルガルルモン+スカル・ガルダ」(3??4) L V 2??3

驚異的な攻撃性能を持つメタルガルルモンのL Vが上昇し、ウォーグレイモンと大きく差をつける。

さらにオロチは手札のカードを切って……………

「コイツの声を聞け……………月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム……………!!」

「ツー!!」

ー【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2(2) BPI0000

今度は紫のドラゴン。死神のような巨大な鎌を持つルナヘイズが咆哮と共にメタルガルルモンの横へと出現した。

「アタックステップ!!…やれメタルガルルモン!!」

「!!」

2体の強力なスピリットを眺める間もなく、オロチが突然アタックステップを宣言。メタルガルルモンがまるで操られているかのような眼光を放ってエールを睨む。

「効果でアグモンのコア2つをトラッシュに置き回復!!」

「!？」

ー【太一のアグモン】(2??0) 消滅

ー【メタルガルルモン＋スカル・ガルダ】（疲労??回復）

メタルガルルモンの強烈なアタック時効果が炸裂。アグモンが消滅すると同時に回復状態となった。エールはスピリットを消滅させられた挙句使えるコアを減らされてしまい……………

「終わりだ!!……………赤のオメガはオレがもらう!!」

「いやまだよ!!……………この瞬間を待ってた!!」

「ッ……………!?!」

しかしエールにはまだ抵抗する術がなくなったわけではない。伏せていたバーストカードを全力で反転させる……………

「アタック後のバースト、煌星銃ヴルムシューター!!」

「!!」

「効果でミラーワールドを破壊して1枚ドロ……………その後ブレイヴカードとして召喚

し、ウオーグレイモンと直接合体するわ!!」

エールのバーストが発動すると同時にミラーワールドの影響が消え、元の世界に変わる。

そして彼女の場には伝説のドラゴンの顔が元に造られた銃が天より降り注ぐ。ウオーグレイモンはドラモンキラーを消滅させ、それを強く握ると、黄色や橙色だったボディが真っ赤に染まり、強力な合体スピリットと変化した。

ー【ウオーグレイモン+煌星銃ヴルムシューター】LV3（5S）BP22000

「スカル・ガルダと合体しているメタルガルルモンのBPは20000!!…対するウオーグレイモンのBPはヴルムシューターとの合体で22000!!…：…ブロックよ!!」

遂に2体のオメガの象徴が正面衝突を繰り広げる。

ウオーグレイモンはヴルムシューターにガイアフォースの炎の力を込め、弾丸として連射するが、メタルガルルモンはそれを容易く噛み砕きながら突き進んで来る。

これでは通用しないとみたウォーグレイモンはメタルガルルモンの足元にガイアフォースの弾丸を発射。メタルガルルモンは態勢を崩し、前方に転がり込んでしまう。そしてその隙にウォーグレイモンは強烈な蹴りでメタルガルルモンを壁まで吹き飛ばして見せる。

トドメだと言わんばかりにヴルムシューターを向けるウォーグレイモンだったが、メタルガルルモンの起死回生のミサイルが被弾。今度はウォーグレイモンが吹き飛ばされてしまう。

「メタルガルルモンには悪いけど、ここは一度破壊させてもらおうわ!!」

「おい、何既に勝った気でいやがる………フラッシュマジック、ブレイヴサクリファイス!!」

「なっ!?!」

「不足コストはメタルガルルモンとルナヘイズのコア1ずつから奪う。よってLVが下がるが、効果でウォーグレイモンのブレイヴを破壊し1枚ドロー!!」

1 「メタルガルルモン+スカル・ガルダ」(4??3) LV3??2

1 「月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム」(2??1) LV2??1

これはバトルスピリッツ。単なるゲームだ。カードにそんな感情染みた事などあるわけがないのに……………

「メタルガルルモン……………」

「どうしたメタルガルルモン……………やれえ!!」

躊躇ったメタルガルルモンに、オロチが強い口調で命令を下す。メタルガルルモンはそれには逆らえなかつたか、口内から凍て付く冷気を溜め込み、それを放出してウォーグレイモンを破壊……………

するかと思われたが……………

「……………なに?」

その直前、オロチが目にしたのはウォーグレイモンの右手のドラモンキラー。それがメタルガルルモンの腹部に貫通しているのが見えた。

これが意味しているのは、ウォーグレイモンの勝利であるという事、エールが咄嗟に手札からカードを引き抜いていたのだ……………

「フラッシュマジック、ダイナパワー……ウオーグレイモンのBPを3000上げる……LVの下がったメタルガルルモンのBPは18000、ウオーグレイモンは19000」

「ッ……!?!」

「ウオーグレイモン」BP16000??19000

メタルガルルモンと合体していたスカル・ガルダはメタルガルルモンが破壊されると見て合体を強制解除してこの場から離脱する。メタルガルルモンは元の姿に戻るも、腹部の貫通が影響し、その機能が完全に停止、倒れ込んでしまうが、ウオーグレイモンがその身を担いでゆっくりと地面に下ろした。

その後、メタルガルルモンは粒子と化し、安らかに消滅していった……

「ごめんメタルガルルモン……でも必ず、必ずあなたを取り戻してみせるから……!!」「イライラする。茶番も茶番だな……だがどちらにせよオマエはこのターンで終わる、やれルナハイズ!!」

「!!」

メタルガルルモンを退けてもまだオロチの場にはルナヘイズが存在している。死神の鎌を手に持ち、エールのライフ目掛けて宙を舞う。

「フラッシュマジック!!……リミテッドバリア!!」

「……はあ!?!」

「不足コストはウオーグレイモンと勇気の紋章のLVを下げて確保!!……効果でこのターンはコスト4以上のスピリットのアタックでライフが減らない!!」

「ふざけんなアアアア!!!!」

メタルガルルモンが破壊されたからというもの、余裕がなくなつて来ているオロチ。エールが咄嗟に引き抜いて見せた防御マジックにまで怒りを露わにしている。

ルナヘイズが死神の鎌を振り、エールの最後のライフを斬り裂こうと試みるも、リミテッドバリアの影響でそれには傷一つつけられず……

「…………チイツ…………ターンエンドだ…………」

手札：3

場：【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV1

【スカル・ガルダ】LV1

バースト：【無】

怒り狂っていても致し方ないか、オロチは舌打ちしながらもそのターンをエンドとする。しかし彼の優先に変わりはない。場の状況、手札の枚数、ライフ差的にもエールは次のターンでどうにかしなければどちらにせよ敗北してしまうだろう……………

「オマエは負けるんだよおおお!!…どう足掻いてもここで、この場で!!……………10年前のオマエの母親みたいに腹に穴開けられて死ぬんだよおおお!!」

「……………哀れね」

「……………は？」

感情が昂り、今まで以上の狂気を放つオロチだったが、予想以上に冷静な物言いであげて来たエールに一瞬たじろいでしまう。

しかしその理由は直ぐにわかった。

エールの言葉はあの時……10年前にエレナが使った言葉と全く同じだった。エールの顔がエレナと瓜二つなのもあって、その記憶がより鮮明に蘇って来て……

「バトルが、戦うのが好きだったらなんで戦い終えた相手を殺すの？……それで勝ち続けてたら最終的には1人になっちゃうじゃない……可哀想」

「黙れえええええ!!……このオレを哀れんだ顔で見るんじゃねえ!!……見下すんじゃねえ!!……オマエはただオレと戦って殺されればいいんだよおおお!!」

「でもアンタは私の大事なモノをいっぱい傷つけて壊した……だから許さない。私は……アンタを倒す!!」

エールがそこまで言い切った、その瞬間だった……

何とも信じられない摩訶不思議な現象が発生したのは……

「!!」

「……………はっ？」

まるでエールの決意のある言葉に感化されたかの如く、突然オロチのトラツシュにあ

るメタルガルルモンや、彼の懐にしまっていた紫のオメガのカード達が淡い紫の光を放ちながら宙を舞い始めた。

そしてそのままそのカード達はエールの元まで飛んで行き……………

「おい、おいふざけんな!!…どこ行きやがる!!…オマエらはオレの所有物だろおがアアアー!!」

「……………紫のオメガ……………!!」

前例の無い現象。激怒するオロチ。

しかしエールは不思議と戸惑いよりも早く嬉しさが先走った。この時点でオロチに従っていたわけではなく、無理矢理扱わされていた事が判明したからだ。

「ごめん……………10年も辛い思いさせて……………お母様は、エレナ・オメガはもういない……………でも今度は私が、エール・オメガが絶対にアナタ達を守ってみせる……………!!」

だから……………

手を取り合って一緒に戦おう!!

「……………!!」

エールがそう告げながら、指先で紫のオメガのカード達に触れる。

すると、それらはエールのデッキに流れ込んで行き、赤と紫のオメガは1つのデッキとなった。その影響なのか、赤と紫の光がそのデッキから満ち溢れて来ていて……………
おそらくはデッキの進化の光であろう。

「返せエエエー!!……………そいつはオレの、オレの力だアアアー!!」

「違う!!……………これは私達オメガ家との絆で結ばれた大事なカード、アンタみたいに誰かを平気で殺す奴が使っているモノじゃない!!」

エールはオロチにそう言いながら己のターンシークエンスを進めていった。赤と紫のオメガが混ざり合った奇跡のデッキ、奇跡の進化をその身で体感する。

「ターン10」エール

「メインステップ!!…ウオーグレイモンのLVを3にアップ!!」

ー「ウオーグレイモン」(1??4) LV1??3

ウオーグレイモンのLVが再び3に戻る。ウオーグレイモンはそれを示すかの如く爆音のような咆哮を上げる。

そしてエールは徐に「アタックスステップ…ツ!!」と、宣言すると…

「ウオーグレイモンでアタック!!」

唯一のスピリットであるウオーグレイモンでアタックを仕掛ける。ウオーグレイモンは残った右手のドラモンキラーと左手を構える。

しかし……

「ルナヘイズの効果!!…回復して1枚ドロ!!」

1「月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム」(疲労??回復)

そのウォーグレイモンの行為に反応するように、疲労していたルナヘイズが起き上がってみせる。これでオロチの場にはスカル・ガルダ含めブロッカーが2体となる。

おまけに残りライフは3。この状態で逆転勝利を収めるのは絶望的な状況となった………

「ウォーグレイモン如きがこの壁を突破できるか!!……終わりだ、今度こそオマエはオレに殺される……次のターンでなアアアアア!!」

「いや、アンタに次のターンはない!!」

「ツ!?!」

エールはオロチに勝気な態度でそう言うと、圧倒的劣性の中、手札よりカードを1枚

引き抜いた……………

それはたつた今デッキが進化した事により生まれた、最強のカード、最強の切札
……………

「煌臨発揮!!……………対象はウォーグレイモンッ!!」

「何!?!…ウォーグレイモンが煌臨対象だと!?!」

エールが引き抜いたカードはなんとウォーグレイモンを対象にできる煌臨スピリット。
ト。

さらに驚きの連続は止まる事を知らない。今度はウォーグレイモンの右隣にメタルガルルモンが突如として復活を果たし、遂に2体のオメガの象徴がエールの場に並び立った。2体は雄叫びと咆哮をこれでもかと張り上げる。

「何だ……………さつきから何が起こっている……………なんだその力は……………!?!」

「アンタみたいな奴にカードバトラーとカードの絆なんて到底理解できないでしょうね……………」

「ッ……………エックス……………オマエ達はいつもそうだ。身分が高い、バトスピが強い、進化の

力が強い。ただそれだけの理由でいつも弱者を虐げる!!」

「それはこつちのセリフよ!!……そしてエックスなんて関係ない!!……お母様を、仲間を傷つけたアンタを絶対に私は許さない!!」

そこまで言い切ると、エールはそのスピリットの名を叫ぶ。

右に友情!!

左に勇氣!!

2つの勇姿重ね合う時、
すべての闇穿つ英雄となる!!

「……………2体のオメガが混ざり合っていくだと……………!?!」

ウオーグレイモンとメタルガルルモンは自身を模した腕のようなパーツに変化し、宙を舞う。そして光と共にそれらは混ざり合い、今こそ究極を超えた姿となって地上へと舞い戻る……………

そのデジタルスピリットの名は……………

究極をも超えるデジタルスピリット、オメガモン!!

1【オメガモン】LV3(4)BP21000

現れたのはウォーグレイモンを模した左腕、メタルガルルモンを模した右腕を持つ白き騎士型の超究極体デジタルスピリット、オメガモン。

元々センスのあったエールの感情が昂り、さらにそこに紫のオメガが加わり誕生した。正に絆を象徴するようなデジタルスピリットだ。

「オメガモン………はは、赤と紫のオメガが混ざり合うとこんなヤツが生まれるのか………ハッハ、欲しい、欲しいぞ!!………よこせエックスの女アアア!!」

「オメガモンの煌臨アタック時効果!!」

「!!」

「このスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊!!………対象はスカル・ガルダ!!」

エールはオロチの言葉を無視してオメガモンの効果を発揮させる。オメガモンはメタルガルルモンを模した右腕から砲手を発現させ、それをオロチのスカル・ガルダに向けて構える………

神獣の咆哮……ガルルキャノンツ!!!

エールがそう技名を叫ぶと、オメガモンはそこから巨大な大砲を放つ。狙われたスカル・ガルダは避ける間もなく被弾し、跡形もなく消し飛んだ。

「さらに効果発揮後、ターンに一度回復!!」

ー【オメガモン】（疲労??回復）

まだ効果が続くオメガモン。自力で回復状態となり、このターンは二度目のアタックを可能にしてみせる。

「煌臨スピリットは煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ!!…アタック中のウォーグレイモンから煌臨したオメガモンはアタック状態!!…さらにダブルシンボ

ルでライフを2つ破壊できる!!」

「ハツハツハアアアア!!……プロックしろルナヘイズ!!」

今度はウオーグレイモンを模した左腕から巨大な剣を発現させるオメガモン。ルナヘイズの元までマントを翻し飛び行く。

ルナヘイズは咄嗟に死神のような鎌を構えようとするも、オメガモンの速さにはついて来れなかったか、構えた瞬間にその剣で鎌ごと八つ裂きにされて爆散してしまう……

「回復したオメガモンで追撃!!……このアタックで終わらせる!!」

「馬鹿かオマエは!!……ダブルシンボルじゃオレの3つのライフは破壊できなねえ!!」

オメガモンは今一度左腕の剣を構えるが、彼の言う通り、ダブルシンボルでは一度のアタックで3つのライフを破壊する事はできない。それはバトスピを知る者なら誰でもわかる事だ……

しかし……

「馬鹿はアンタよ。さっき言ったはずよね?……『次のターンは無い』って」
「ッ……………!?!」

エールはこのタイミングでオメガモンの第二の効果を発揮させる……………

「オメガモンの更なる効果!!……………煌臨元になったウォーグレイモンを破棄する事で、敵のライフ2つを破壊する!!」

「……………何?!」

オメガモンの効果発揮宣言と共に、エールのBパッド上にあつたオメガモンの煌臨元からウォーグレイモンのカードがコストとしてトラッシュユへと破棄される。

これで通常のアタックに加えてさらに2点のダメージ、合計4点のダメージをオロチに与えられる……………

オメガモンはウォーグレイモンを模した左腕にある剣に赤々と燃え滾る炎を纏わせ……………

「最後まで諦めないのが……………私達のバトスピだアアアア!!!」

「ツ……………!？」

天下の豪剣……………グレイソードツ!!!

「ツ……………ぐツ……………ぐおおおおおおおおおお!!！」

へライフ3??1??0〓オロチ

炎纏う天下の豪剣を横一線に振り払ったオメガモンの渾身の一撃がオロチのライフに炸裂。そのライフを1つ残らず消炭にした。

これまでに無かった凄まじいバトルダメージをオロチは諸に受け、叩き伏せられる。

彼のBパッドからは「ピー……」と、彼の敗北を告げるような無機質な機械音が鳴り響いていた……………

これにより勝者はエール・オメガだ。土壇場で究極を超える力をその身に宿し、大逆転勝利を収めて見せた……………

「やつ……………やった……………ッ!!」

正直このオメガモンと言う存在が何なのかはわからない。

だが確かに勝った。勝って見せた。母親を殺害した後な紫のオメガを奪い、さらには仲間を傷つけたあの残虐なオロチを……………

オメガ家の者としてその無念を晴らしたのだ……………

「ガッ……………ハッ……………!?!」

そんな中、激しい痛みがオロチを襲っていた。まともに喋る事もできやしない。しかし、彼はこの状況下である事を思い出していた……………

「『なんであんな連中に虐げられないと行けない!?……この世界はバトスピが全てなんだろ!?……オレはマスターやエックスよりも強いんだぞ!?』」

「『ふふ、だったらこの私……ウイルの元へ来なさい。素晴らしい力の数々を貴方に与えましょう……存分にそれを振るうのです……強さだけでふんぞりかえる高身分者に見せつけてあげなさい』」

それは弱者として身分の高い者達に虐げ続ける日々、虚しくて苦しかった日常。なんで王蛇に選ばれ、なんでメタルガルルモンが使えたのかまでのルーツを、原点を一気に、より鮮明に思い出して……

「ツーーーー!!!」

「え?」

エールはその光景に鳥肌が止まらなくなった。

無理もない。突然オロチと、そのBパッド上のカード達が濃ゆい紫色の光を放ち始めたのだから……

そしてこれは紛う事なき進化だ。負けた途端限界を超え、オロチはデッキと共に、

カードと共に、感情や過去の記憶の何かがトリガーとなって進化したのだ。

「ああ、最高の気分だ。理屈は知らねーが体中から力が溢れて来る……………よくオレの力をここまで引き出してくれたな、エックスの女あ……………!!」

「ッ……………!?!」

「そのお礼だ……………盛大に殺してやるよ……………オマエの母親と全く同じ方法でな」

オロチは徐に立ち上がると、Bパッドに仮面ライダー王蛇のカードをセットし、召喚した。数々の鏡像が重なり合い、再び邪悪な紫のライダースピリット、王蛇が顕現する。さらにその王蛇はソードベントのカードをベルトから引き抜き、杖の形をした武器に装填、「ソードベント!!」の音声と共に大蛇の尾の形をした剣をその手に握る。

そして首をゆっくりと回すと、それを固く握りしめ、エールの元まで走り出した。10年前エレナ・オメガを殺した時のように、その剣で腹に大穴を開けるつもりなのだ。

「……………オメガモンッ!!……………っ!?!」

エールは咄嗟に場に残ったオメガモンで王蛇を退けようとするも、突如として謎の疲

労感や倦怠感がのしかかってきた。

それはこれまでのバトルによるダメージやストレスによる疲労感が原因だろう。エールは既に限界を迎えていたのだ。これでは到底究極体をも超える力を有するオメガモンを動かす事は出来なくて……………

「死ねエックスウウー!!!」

「ツ……………まだよ。まだ私は諦めたりしない……………!!」

最後まで生きる希望を捨てないエール。絶対に生き延びてアスラの所に帰りたい

……………

そう強く願った。

そしてその想いは今運命と結びつき……………

更なる奇跡を促した……………

「……………え？」

王蛇の剣がエールの腹部に突き刺さろうとしたその直後、その剣を誰かが脇で挟んで押さえ込んでいた……………

その正体は紛れもない……………

チビでバカでアホで、身分もコモンな上にソウルコアが使えない最弱の設定の持ち主……………だけどエールが心から信頼を寄せる最強の少年だ……………

「アスラ……………ッ!？」

そう。

それは紛れもないスーミのアスラ。前のバトルで怪我を負いながらも、何故かこの場所を突き止め、こうして王蛇の攻撃を抑え込んだのだ……………

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「っ!？」

アスラは気合を入れ、雄叫びを上げると、そのまま右の拳で思いっきり王蛇を殴り飛ばした。余の威力に王蛇はオロチの背後にある壁まで吹き飛ばされてしまう

.....
鋼鉄のような身を纏うライダースピリットを全力で殴った事により、アスラのその拳からは血が滴る。当然激痛が伴っているはずだが、彼はその拳をまた固く握り、息を大きく吸い込むと.....

へびヤロオオオオオオオオ
!!!!!!

オレの仲間を手エ出してんじやねええええええええ
!!!!!!

「オマエはお呼びじゃねえんだよクソチビイイー!!!」

激怒しているアスラの怒号と言う名の咆哮が洞窟中に響き渡る。その様子にお口にはまた苛立ちを覚え始めていて.....

進化の力が体中を駆け巡っているのか、常に紫色のオーラを纏い、完全に常人を逸し

たオロチに対し、アスラは勝ち目があるのか………

27コア 「龍騎VS王蛇!!……その身に宿すのは」

前回、紫のオメガを取り返し、究極体をも超える凄まじきデジタルスピリット、オメガモンで遂に宿敵オロチを撃破したエール。

しかし直後にオロチは不気味な紫色の光に包まれ、人の概念さえをも超越した更なる進化を遂げてしまう。オロチは高らかな気分のまま王蛇を使いエールを殺害しようと試みるも、そこに何故かアスラが現れ、それを阻んだのだった……

「アスラ………なんで……?!」

エールがアスラに訊いた。無理もない。そもそもここはオロチ以外は知らない場所だったのだから。

アスラはエールの方へ振り向くと……

「なんでもクソもあるかアアアー!!!……オマエ、何が急にさよならだ!!!……オレが頂点王になるまで見届けるんじゃないのか!」

「ツ……………べ、別に本気でさよならするつもりはなかったわよ!!……………あのヘビヤロウから紫のオメガを取り返したらさっさと帰って来るつもりだったし!!」

「じゃあ先にそう言えよ!?!…お兄様心配してたぞ!!」

「おバカなアンタに言ったら絶対にバレるじゃない!!……………え?…あのお兄様が私の事心配してたの?」

再開して早々いつものように軽く言い争いになる2人。しかし、これは心の底から信頼しあっているからこそできるものであり、決して仲が悪いわけではない。

そんな時、アスラは「あ、そうそう」と、何かを思い出したように呟くと……

「このデジタルスピリットスゲエなツ!!……………めちやくちやカツケエ!!……………オマエやつぱり見込んだ通りとんでもないヤツじゃねえか!!」

「ツ……………!!」

「オマエがここまで一人で頑張ってくれたんだ……………次はオレが頑張んねーとな……………ツ!!」

アスラにそう言われ、不本意ながら顔を赤くしてしまうエール。

何故この少年はここまで誰かに優しくできるのかと思えてしまうが、アスラ自身もエールの成長に背中を押されている事に違いはなくて……………

「つー事で、後はオレに任せろよ」

「だ、ダメよ!!…アンタじゃ勝てない!!…殺されちゃう……」

アスラがオロチとバトルすると言う兆候を見せるが、彼がいなくなる事を誰よりも恐れているエールは涙目になりながらも制止させようとする。

「……………オレは頂点王になるまで……………ロンやシイナよりも強くなるまで死なねーし、オマエとハナレバナレになったりもしねー」

「ッ……!!」

「だからもう二度とあのヘビヤロウには負けねー……………アイツぶつ倒したら何か旨い物でも食べにいこーぜ!!」

「……………アスラ……………!!」

エールの想い以上にアスラの決意は固い。止めても無駄だと悟ったエールは、展開し

ていたBパットを閉じ、バトルを行うアスラとの距離を置いた。その際にオメガモンが消滅する。

そしてアスラは進化の影響で常に紫色の光を纏っているオロチに視線を向けて

……………

「クソチビ……オマエなんでここがわかった?」

「理由全然わかんねえけど、オマエが持つていった龍騎を何となく感じたんだよ。それで病室から抜け出してわざわざぶつ倒しに来てやったんだ」

「へっ……ぶつ倒す?…オマエがオレにか?……そんなポロポロな身体で何ができる」

「うるせえええ!!……紫色に光ってるからって調子のんじやねえぞ!」

余り具体的な所はわからないようだが、アスラはオロチが奪っていった龍騎の感覚を辿ってここまで来た。確信がなかったため、彼自身もまさか本当にエール達がここにいる事に内心驚いている。

しかし、結果はオーライと言ったところ。コモンの身分でさらにソウルコアが使えない身体のアスラは、客観的にみたらどう足掻いても勝てないであろう、人外たる力を得ているオロチに対して堂々と啖呵を切って見せた。

「いいぜ。相手してやる……………ほらよ」

「ッ!?!」

オロチはそう言いながら懐より龍騎のカードを手に取り、アスラに投げ渡した。

「何のマネだ?」

「へっ……………そいつがないと面白くないからな……………」

「後悔すんじやねえぞ」

「どちらにせよこの力を試す丁度良い機会だ。オマエを殺した後はそのエックスの女を殺す!!」

「……………そんな事はさせねええ!!」

繰り広げられる言い合いの中、2人は己のBパットを展開。デッキをセットし、パットの準備を行う。

そして……………

……ゲートオープン、解放!!

広大な空間を有する洞窟の中、アスラとオロチの命を賭けたバトルスピリッツが幕を開ける。

先行はアスラだ。オロチを倒すべくそのターンシークエンスを進めていく。

「ターン01」アスラ

「メインステップ!!……マジック、アドベントドロ!!……2枚ドロしてエンドだ!!」

手札：6

バースト：【無】

アスラは汎用のドロマジックで手札を増やし、第一ターンを早々に終える。

「ターン02」オロチ

「メインステップ……水銀海に浮かぶ工場島を配置し、エンドだ」

手札：4

場：【水銀海に浮かぶ工場島】LV1

バースト：【無】

オロチは背後に不気味な工場島を出現させてそのターンを終える。アスラもこのネクサスの手札を破棄させる効果に苦戦したのが記憶に新しい。

だが……………

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!…………マジック、バスターランス!!」

「!？」

「効果で水銀海に浮かぶ工場島を破壊し2枚ドロ―だ!!」

ターン開始の刹那。

炎を纏った巨大な槍がオロチの水銀海に浮かぶ工場島に直撃する。水銀海に浮かぶ工場島はたちまち火祭りにされてしまい、消滅してしまった。バスターランスへRの

効果だ。アスラはさらに2枚のカードをドロ―し、オロチの手札に差をつける。

「どうだコノヤロオオオー!!…同じ手は二度もくわねえぜ!!…ターンエンド!!」

手札：8

バースト：【無】

昂つたテンションのままそう叫ぶアスラ。どうやらオロチのデッキに対してある程度の対策を練って来ているようである。しかしこのターンもマジックの使用のみにとどまり、結局スピリットを召喚せず終いでエンドとなった。

「へっ……このくらいはできるようになってなきや、わざわざこんな所来ないよな……!!」

オロチはこの時点で僅かながらにアスラの成長を理解しているのか、殺人鬼らしい不気味な笑みを浮かべながら己のターンを開始した。

「ターン04」オロチ

「メインステツプ……来いバイ・パイソン!!」

ー【バイ・パイソン〈R〉】LV2(3S)BP3000

このバトル初となるスピリットはオロチのバイ・パイソン。白い蛇の体に埋め込まれているアメジストが嫌でも目に入ってくる。

「アタックスステツプ……言つて来いバイ・パイソン。効果でソウルコアを払い2枚ドロー」

蛇のように地を這いながら突き進むバイ・パイソン。効果でソウルコアがトラッシュへと弾かれ、オロチに新たなカードをドロウさせた。

スピリットのいないアスラはこの攻撃をライフで受ける他なくて……

「ライフだ!!……ツ……ぐあっ!?!」

「ツ!?!…アスラ!?!」

〈ライフ5??4〉アスラ

バイ・パイソンの尾で叩きつける攻撃がアスラのライフをたった1つだけ破壊するが、そのたった1つで今まで以上のダメージを受けてしまう。まるで身体の中が爆発したかのような衝撃だ。

オロチが紫色に輝いている事と関係するのだろうか、それ以上にアスラ本人の肉体がとつくに限界を迎えているのが何よりも深刻的であり……

「どうした?……既にそんなんじゃないや話にならねーぜ。もっとオレを楽しませてみる……」
ターンエンド」

手札：6

場：【バイ・パイソン】 LV2

バースト：【無】

「うるせえ!!……こっからだ!!」

そのターンを終えるオロチ。アスラはボロボロな身体を奮い立たせながら己のターンを再び開始していく。

「ターン05」アスラ

「メインステップ、ゴラドンをLV2で召喚。でもってミラーワールドを配置」

ー【ゴラドン〈R〉】LV2（3）BP5000

ー【ミラーワールド】LV1

アスラの場に小さな怪獣ゴラドンが現れる。そして立て続けに龍騎達が戦うフィールド、ミラーワールドが配置。目に映る全ての光景が鏡像の姿へと切り替わった。

「オレはこれでターンエンド……!!」

手札：7

場：【ゴラドン〈R〉】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

「あのアスラがまだ攻めないなんて……」

「おいどうした?……オレの事がムカつくならさっさと来いよ」

「最高にムカついてるからこうやってんだ。いいから早くしろよ、オマエのターンだぜへびヤロウ」

どういわけかまたしてもアタックはせずそのターンを終えてしまうアスラ。彼としてはこの戦略は珍しい。エールも違和感を感じて来るが、オロチはそんなアスラをさっさと葬るべく己のターンを進めて行った……

「ターン06」オロチ

「メインステップ。まずはバーストを伏せ、ボーン・ダイルを召喚し、オレもミラーワールドを配置だ!!」

1【ボーン・ダイル】LV1(1)BP2000

Ⅰ【ミラーワールド】LV1

オロチの場に骨化したワニ型のスピリット、ボーン・ダイルが召喚されると共に、アスラ同様のネクサス、ミラーワールドが配置される。

そしてオロチは「そして………」と言葉を続けながら手札のカードをさらに切つて見せると………

「コイツの声を聞け、月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルムをLV2で召喚!!…不足コストは他のヤツらを殺して確保だ……!!」

Ⅰ【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2（2S）BP10000

オロチの場にいるバイ・パイソンとボーン・ダイルが消滅する。その後、彼の背後から美しい咆哮が聞こえて来たと思えば、そこから死神の鎌を手につつ流麗な紫のドラゴンが姿を見せ、新たに場へと現れた。

「ソイツの声なんかとつくに聞き飽きてんだよ!!」

「へっ、まあそう言わずに何度でも聞いとけよ!!……アタックステップ……攻撃だルナヘイズ!!……効果で手札1枚を裏向きで手元に置き、オマエのゴラドンをデッキの下に戻す」

「!!」

背中のブースターで宙を翔るルナヘイズ。そしてその死神の鎌を振り、アスラのゴラドンを斬り裂いて見せる。ゴラドンは堪らず粒子と化してこの場から消え失てしまう。

「アタックは継続中だぞ!!」

「くっ……ライフだ………がッ!?!」

へライフ4??3へアスラ

今度はアスラ自身がその死神の鎌の餌食となる。再び多大なバトルダメージが彼を襲った。意識がぶっ飛んでしまいそうになるが、彼はどうにか歯を食い縛り、意識を保った。

「ターンエンド……もうわかってるだろクソチビ。オマエじや逆立ちしたってこのオレには勝てねー」

手札：2

場：【月光死龍ルナヘイズ・ストライクヴルム】LV2

【ミラーワールド】LV1

手元：【裏向き】×1

バースト：【有】

オロチはターンを終えた直後、狂った殺人鬼らしく物騒な笑顔を向けながら、アスラに対してそう告げて来た。

限界を超え、謎めいた進化を果たし、人外じみたオーラをその身に纏うオロチ。もはやこの世の生物とは思えない程の力を発揮できるに違いない。そしてそれに対するはこの国で最も身分が低く、ソウルコアさえも使う事ができないアスラ。

確かに、誰がどう見ても彼に勝ち目はないように見える。

「わかるかよコノヤロー……オレはまだ諦めねー!!」

しかし、アスラがこの程度で根を上げたりはしない。彼はさらに気合を入れ、己のターンを進めていった……………

「ターン08」アスラ

「メインステップ!!……シヤムシーザー、ドラゴンヘッド、ゴラドンを連続召喚!!」

┆【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

┆【ゴラドン〈R〉】LV1(1)BP2000

アスラは溜め込んでいた多量の手札を切り、龍騎を獲得する以前から彼のデッキを支えて来たメンバーが一堂に集った。

「さらに!!……オレは龍騎サブイブをLV2で召喚だ……ッ!!」

「!!」

アスラの場合に赤きライダースピリット、龍騎が現れる。

その龍騎はベルトにあるカードデッキからカードを引き抜くと、瞬間に烈火の如く炎が燃え上がり、その中で龍を模した銃器にカードを装填……………

……………サバイブ!!

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(2)BP11000

龍騎はさらなる強化形態、仮面ライダー龍騎サバイブとなり、アスラの目の前に現れた。

「コイツでオマエに勝アアーツ!!……………アタックステップ…行け龍騎サバイブツ!!」

アスラの声を聞くなり、龍騎サバイブはその鉄仮面の奥に眠る赤き瞳を輝かせると、武器として手に持つ龍の頭部を模した銃を構える。

「アタック時効果でルナヘイズを破壊!!……………でもって赤のシンボルを1つ追加だアアアー

「!!」

龍騎サバイブの銃から烈火の弾丸が放たれる。ルナヘイズは鎌でガードしようとするも、烈火の弾丸はそれさえも容易に焼き尽くし、ルナヘイズを破壊した。

オマケに龍騎サバイブはこのバトル中一度のアタックで2つのライフを破壊できるダブルシンボルとなった。そして次はオロチの方へと銃を向けて……

「いいぞ来い!!……そのアタックはライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ5??3〉オロチ

二発目となる龍騎サバイブの烈火の弾丸が今度はオロチのライフを撃ち抜いて見せた。そのライフは一気に2つ砕け散るが……

それはオロチのあのバーストカードの発動条件でもあつて……

「ハツハツハアアア……学習能力無しかよテメエは!!……ライフ減少によりバースト

発動!!……仮面ライダー王蛇!!」

「ツ…………!!」

「効果によりバースト召喚だ……………来い、全てを飲み込む大蛇!!」

―【仮面ライダー王蛇】LV2（4）BP8000

オロチのバーストカードが勢いよく反転すると共に、邪悪なる鎧をその身に纏う闇のライダースピリット、仮面ライダー王蛇が出現する。

その驚異的な効果をアスラが忘れるわけもない。オロチは問答無用でその相棒の効果を發揮させる。

「召喚時効果ああ!!……………疲労状態の龍騎サバイブを破壊し、そのLVの数だけ上に乗っているソウルコア以外のコアをボイドに置く!!」

「ぐっ……………!!」

王蛇が鉄仮面の中に眠る紫の瞳を開眼させると、龍騎サバイブの足元から紫炎が立ち昇り、それを中に存在するコア事一瞬にして焼き尽くして見せる。

「そんな……龍騎サバイブが一瞬で……」

「ハツハツハアアアア!!……言っただろう!!……オマエじやオレには勝てねー!!……オマエはソウルコアも使えねークソザコだからなアアア!!」

アスラの勢いを止めたオロチが、高らかに叫んで見せる。その狂気はこの空間に滞りなく伝播したが……

アスラは何故かこの光景を目の前にしても笑みを浮かべていて……

「ソウルコアが使えなかるおーがクソザコだろうが関係ねえ!!……オレもオマエに勝つって言ったはずだ!!……シャムシーザーでアタック!!」

「!!」

龍騎サバイブを失って尚、希望の光を捨てないアスラは場に残った小型の一体、シャムシーザーでアタックを行う。

そして、このタイミングで手札にあるカードを引き抜いて……

「フラッシュマジック……ストライクベント!!」

「!？」

「不足コストはゴラドンから確保、よって消滅するけど………効果でBP8000以下のスピリット、王蛇を破壊だアアアー!!」

「……なにッ……!？」

ゴラドンが消滅してしまうが、アスラの場合に胴の長い赤き龍が出現する。そしてその赤き龍は口内から豪炎の炎を放ち、オロチの場に存在していた王蛇を跡形もなく焼き尽くして見せた。

「馬鹿な……オマエ如きがオレの王蛇を破壊するだど!？」

「同じ手は二度もくわねえって、これもさつきも言ったろ!!……アタックは継続中だ!!」

「ッ……フラッシュマジック、絶甲氷盾!!」

「!？」

「効果でそのアタックでアタックステップを終了させる!!……そのアタックはライフで受ける!!」

〈ライフ3??2〉オロチ

勢いに乗ったシャムシーザーの体当たりがオロチのライフを1つ砕いて見せるものの、彼が咄嗟に引き抜いたカウンターにより、直後猛吹雪が発生。アスラのその後の追撃を食い止めた。

「つしやあ!!……手応えあり!!……ターンエンド!!」

手札：3

場：【シャムシーザー】LV1

【ドラゴンヘッド】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

アタック自体は止められたものの、王蛇にやられた事を反省し、対策を練って来ていたのがわかる良いターンだったのは確かな事。確かな手応えを実感しながらそのターンを終える。

今だに消えない紫色のオーラをその身に纏いながら、殺人鬼オロチは己のターンを進めていった。全ては目の前のモノ全てを殺すために……………

「ターン09」オロチ

「メインステップ!!…手札より2枚、手元より1枚ずつ旅団の摩天楼を配置する!!…効果で3枚ドロ―だ!!」

―【旅団の摩天楼】LV1

―【旅団の摩天楼】LV1

―【旅団の摩天楼】LV1

メインステップ開始の刹那。オロチの背後に巨大な摩天楼が聳え立った。オロチの殺気と狂気も相まって、その存在はより不気味なモノとして目に映る。

「さらにネクサス、アイランドルート!!…追加で1枚ドロ―し、バーストをセット!!…ここらでエンドだ!!」

手札：2

場：【旅団の摩天楼】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

【No. 32 アイランドルート】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【有】

さらにネクサスカードとバーストを配置してそのターンを終えるオロチ。多量のネクスサスに多量のドロ〜……アスラとエールは彼が何かしらの下準備をしているように見えていて……

「なに企んでんのかしんねーけど、このターンで決めてやる!!」

アスラはオロチの残り2つのライフを破壊すべく、己のターンを開始した。

「ターン10」アスラ

「メインステップ!!……来い、仮面ライダー龍騎!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2

様々な鏡像が重なり合い、赤きライダー、仮面ライダー龍騎の姿となって場へ現れる。

「全てのカードのLVを2にアップ!!……そしてバーストを伏せてアタックステップだ!!
……言って来い龍騎!!」

オロチのライフ目掛け果敢に走り出す龍騎。スピリットがいないため、彼はこの攻撃を諸に受ける事になるのだが……

「ライフで受ける!!」

へライフ2?!ーオロチ

涼しい表情でその攻撃を受けるオロチ。龍騎の渾身の拳が彼のライフ一つを打ち砕いた。

しかし、オロチは事前に伏せていたバーストカードに目を向けると……………

「ライフ減少によりバースト、絶甲氷盾!!」

「!?」

「ライフ一つを回復させ、コストを支払いこのターンをエンドとする!!」

〈ライフ1??2〉オロチ

又しても絶甲氷盾に阻まれる。猛吹雪がアスラのスピリット達の足を止めてしまった。

「……………ターンエンドだ……………」

手札：2

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

【ドラゴンヘッド】LV2

【シャムシーザー】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

致し方なくそのターンをエンドとしたアスラ。オロチのターンが再び幕を開ける。

「いや実際。弱いつて虚しいよな、悲しいよな……オレはオマエの気持ちがよくわかる
ゼクソチビ〜」

「？」

「……だってオレも……コモンだからな〜」

「っ!？」

ターンが開始される前、オロチは突然己の身分を告白した……………

そう、彼はアスラやロンと同じ、この国において最も身分が低く、最も進化の力が弱く、最もバトスピのレベルが低いコモンだ。

その事実にあスラとエールに衝撃が迸る。

「オマエもコモン……!?!」

「ああ、昔はな……よくマスターやエックスの連中にビクビクしていた……けどな、ライダースピリットの王蛇を手に入れてから全てが変わった……仕返しのもりで連中をぶつ殺して来た。そしたらだんだん、少しずつ戦うのが好きになってな……もう次から次へと殺したくなって止まんねーんだよ!!」

オロチはコモン。

アスラやロンと同じく身分が上の者達から理由も無く蔑まれながら生きてきた。だが、彼の言う通り、ライダースピリットの王蛇を手に入れてから全てが変わった。

最初はただの復讐心からの殺害。しかし、それが今では快樂と化し、今の狂気に満ち溢れた彼がいる。

「オレとオマエは似ている!!…同型のライダースピリットに選ばれたのも納得だ!!」

最も身分が低いコモンで、同じようにレア含め、マスターやエックスの身分の者達から蔑まれてきたアスラと自分は似ていると主張するオロチ。

しかし……

「……………似てねえよ」

「ああ？」

アスラは拳と固め、唇を噛みしめながら高らかに咆哮を上げる……………

「似てねえよ!!……一緒にすんな!!……オマエ、なんでそんなに強いのにまともなやり方で見返そうとしなかったんだ!!……なんでそんなスゲエカードに選ばれたのにそんな這い上がり方しかできなかった!!」

「なッ!？」

「オレはオマエとはチゲエ!!……何がなんでも頂点王になって、必ずコモンでも、ソウルコアが使えなくても強くなれるって証明してやる!!」

「黙れエエエー!!……それはこの世界の主観が生んだ愚かな考え方だ!!……そして、そんな淡い希望を抱く者をぶっ殺す事ほど楽しい事はないッ!!」

アスラはオロチと自分は違うと反論する。その強い叫びの内容は正しく正論なのもあり、切羽詰まった様子で激しく怒りを露わにするオロチ。

怒りと狂気、進化の力である紫のオーラをその身に纏い、再び己のターンを進めていった……………

「ターンー」オロチ

「メインステップ!!…………マジック、コールオブロスト!!…………トラッシュより仮面ライダー王蛇を手札に戻し、これをバーストセット!!」

「!？」

ターン開始早々。オロチは回収マジックで破壊された王蛇のカードを手札に戻し、どう言う訳か、その名を宣言しながらバーストゾーンへとセットした。

そして、オロチは不気味に笑いながらまた別のカードを切った……………

それは、彼のデッキが進化した事により生まれた狂気の象徴……………

「さらにブレイヴカード……………蛇帝星鎧ブレイヴピオース!!……………召喚だアアアア!!!」

闇が空間を覆う。その中より雷鳴が轟いたかと思えば、黄金の鎧をその身に纏う巨大な蛇帝が姿を現した……………

その圧巻の存在感は洞窟全体を揺らしており……………

―【蛇帝星鎧ブレイヴピオーズ】LV1(1)BP5000

「な、なんだコイツ……………!?!」

「なんて禍々しい気配……………存在してるだけで息苦しい……………」

アスラとエールがそう言葉を漏らす、このブレイヴの真骨頂はここからだ。オロチはブレイヴピオーズの効果を発揮させる……………

「召喚時効果アアアー!!……オレのライフ1つをトラッシュユヘ置き、スピリット1体を破壊する!!」

「なに!?!」

「ライフを砕き、シャムシーザーを破壊!!」

〈ライフ2??1〉オロチ

オロチのライフのコアがトラッシュユへと送られ、残り1となってしまうが、これでブレイヴピオーズの効果コストは満たした。

ブレイヴピオーズから放たれた闇の光線がアスラのシャムシーザーを一瞬にして貫く。

そしてさらに、オロチの真の狙いはそこではなくて……………

「さらにライフ減少によりバースト発動!!…仮面ライダー王蛇ツー!!」

「ツー!?!」

1【仮面ライダー王蛇】LV2(5)BP8000

ライフ減少の条件を満たした事により、伏せたバーストカード、即ち王蛇のカードが反転する。

様々な鏡像が重なり合い、再び邪悪なるライダースピリット、仮面ライダー王蛇がオロチの場へと現れた。

「召喚時いい!!…疲労している龍騎を破壊し、そのLVの数分、2個のコアをボイドに置く!!」

「っ!!」

姿を見せるなり、紫の眼光を龍騎へと放つ王蛇。龍騎の身体からたちまち紫炎が立ち昇り、それをコアごと焼き尽くしてしまふ。

だがやられっぱなしではいられない。アスラも伏せていたバーストカードへと目を向ける。

「だけど召喚時のバーストはもらった!!…ネオ・コールオブロスト!!」

「!!」

「カードを2枚ドロ、さらにコストを支払いトラッシュから仮面ライダー龍騎サブイブを手札に戻す!!」

反転されたバースト効果により、アスラは減っていた手札をある程度回復させる。

だが、オロチはそんな事気にも留めず、己のターンを再び進行させて……………

「そんな事にもう意味はねー……ここからが本番だ……王蛇、ブレイヴピオーズ!!…闇を重ね合わせ、今こそ一つとなれッー!!」

「……………!!」

オロチの合体宣言と共に、ブレイヴピオーズの身体からは放たれる邪悪な黒い鞭が王蛇を強引に取り込んでいく。

Ⅰ【仮面ライダー王蛇+蛇帝星鎧ブレイヴピオーズ】LV3（6）BP18000

そして現れたのはブレイヴピオーズの禍々しい鎧をその身に纏った王蛇。身体から吹き荒れる黒いオーラはアスラのスピリット達により深い恐怖の感情を刻ませるには余りにも十分で……………

「…この力だ!!…この力さえあればもうオレは誰にも負けねえ!!…ああ、早く色んなヤツを殺してやりてえ!!!」

「うっせえってんだよ!!…その黒くて気持ち悪い鎧ごとオレがぶっ倒してやるッ!!」

「強がるのもその辺にしとけ!!……オマエが幾ら努力しようともオレには勝てないんだよおおお!!」

直後、オロチは「アタックステップ……!!」と、徐に宣言すると、遂にブレイヴピオーズと合体し、より禍々しい姿となった王蛇の力が発揮される……

「王蛇でアタック!!……効果でドラゴンヘッドのコアをリザーブへ置き、消滅!!」
「!!」

右腕から黒い闇の槍を放ち、アスラの場に存在するドラゴンヘッドを貫く王蛇。ドラゴンヘッドはたちまち消滅してしまう。

「さらにブレイヴピオーズの効果!!……貴様の手札を1枚破棄!!」
「!？」

黒い闇が今度はアスラの手札を覆い尽くし、それを1枚を消し済みにしてしまう。

「アタックは継続中!!…そしてダブルシンボル、ライフ2つを破壊する!!」
「ツ……ライフだ……!!」

迫りくる合体スピリットの王蛇。その纏うオーラから考えて、おそらくこれまで以上のバトルダメージが身体に与えられるのは明白だが、スピリットも全て破壊され、カウンターも打てないアスラは、この攻撃をまともに受けるしかない。

そして、王蛇は無残にも、拳に纏った闇をアスラのライフに叩きつけた……

「う、あああああ!!?」

へライフ3?! ーアスラ

これまでもないくらいの大なるバトルダメージに襲われ、身体が引き裂かれる程の痛みに苦しみがくアスラ。

そしてとうとう限界を迎えてしまったか……

彼は白眼を剥きながら身体がふらついてしまい……

「アスラ……そんな……!?!」

「ハツハツハアアアー!!……諦める!!……諦めるクソチビイイー!!……この世にはなあ、どう足掻いても届かないモノもあるんだよオオオー!!」

勝ち誇ったように叫ぶオロチ。エールにとってそれは絶望の咆哮。アスラは殺され、自分も殺されてしまい、今日この日、この誰も知らぬ洞窟で終わりを迎えてしまう

……

だが……

……まだだ!!!

「なっ!?!」

咄嗟に目の色を戻したアスラが雄叫びを上げる。

残った気力を振り絞り、ふらついていた足に力を入れ踏みとどまったのだ。その気迫と覇気から、微塵も諦めていない事が見取れる。

「なんだ。何なんだオマエは……何故諦めない!!……力の差は歴然としているだろうが!!
…何も面白くねえ…さっさとオレに殺されるよ!!」

「何度もうるせえって言わせんなよヘビヤロウ!!」

諦めるヤツが……

頂点王になれるわけねえだろうがアアアア!!!

「アスラ………そうよ、アンタなら勝てる!!……勝つてさっさとこんなところ出るわよ!!」

「おう!!……当然だアアアア!!」

場の状況は絶望的。実力の圧倒的な差。何よりもソウルコアが無い。

だがアスラはそれでもめげず、諦めず、仲間であるエールと共に、デツキのカードと共に、これまで培ってきた力の全てを出し切り、オロチにぶつかっていく……

「ターン12」アスラ

「メインステップ!!……バーストを伏せ、仮面ライダー龍騎サバイブを再召喚だアアア
!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV3(4)BP13000

再び真っ赤に燃える装甲を見に纏った龍騎士、仮面ライダー龍騎サバイブがアスラの場へと姿を見せ、復活を果たす。

「アタックステップ!!……このターンで終わらせる……アタックだ龍騎サバイブ!!」
「!!」

アスラの指示を聞くなり、龍騎サバイブは龍の頭部を模した銃を構え、その銃口から烈火の弾丸を放つ。

その弾道の行先は当然の如くオロチの残り1つのライフだが、守ろうにも肝心の合体している王蛇が疲労状態であるため、それが不可能。

しかし、オロチはそれを可能にすべく、気でも狂ったかのように不適に笑いながら最後の手札を切って見せて……

「諦めが悪いだけじゃオレには勝てんツ!!…オマエのそれはただの無謀と言うモノだアアアア!!…フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「!?」

「不足コストは王蛇のLVを下げて確保する!!…よつてこのターン、王蛇のBPを3000上げ、疲労状態でのブロックを可能にする!!…蹴散らせええええ!!」

「〔仮面ライダー王蛇+蛇帝星鎧ブレイヴピオーズ〕BP13000??16000

鉄仮面の奥に眠る不気味な紫の眼光を輝かせ、再び活動を可能を開始する王蛇。オロチに向かって放った龍騎サブイブが放った烈火の弾丸をまるで石ころでも蹴散らすかのように跳ね返す。

「ほんの一瞬でも、オマエがオレに勝てると思ったのか?…なあ、思ったのかアアアア

!!」

「!!」

……まだだ

……まだオレは諦めねえッ!!

龍騎サイブの爆発による爆煙。それに伴う土煙……………

それが晴れようとしていたその時、その瞬間……………

諦めず、己が勝利への道を信じるアスラが驚異とも呼べる覇気、気迫をピンピンに飛ばしていた。

そしてオロチはこの時、生まれて初めて恐怖という名の悪寒を感じ取る。不覚ながらも心の底から震え上がった。

目の前に存在するのはただのコモンで、ライフも残りたつたの1つで……………しかもソウルコアが使えないクソザコで、クソチビであると言うのに……………

だが、オロチを恐怖に震え上がらせていた正体はアスラ本人ではなくて、その背後で眼光を輝かせるまた別の何かだった……………

ライダースピリット……………

それは使い手をカード自ら選ぶと言う奇怪なスピリットの総称。それを得たものは絶対的な力が与えられると言われている。

……が、必ずと言っていいほどに、『何か別の力を宿している』

……その力は『神』『悪魔』『怪物』などと幅広く存在し、ライダースピリットによつ

てそれぞれ異なるが………

アスラを選んだライダースピリットに宿っていたのは………

コイツに宿っているのは……………

赤き龍でも……………

全てを飲み込む大蛇でもねえ………

大蛇をも焼き殺す、
黒き龍……!!

そう、その正体は龍を象った黒い炎。アスラの背後で鳥栖を巻き、咆哮を上げるその得体の知れない存在は、殺人鬼で怖い者知らずだったオロチに生まれて初めての恐怖を植え付けていた。

その後、その龍を象った黒い炎は消え失せ、アスラは自身のBパッドを勢い良く叩きつけると、事前に伏せていたバーストカードを反転させる……………

「バースト発動オオオー!!!」

赤き龍も宿す烈火の炎を柳葉型の剣に灯した龍騎はそれを合体している王蛇へと向けて縦一線に振り下ろして見せる。

王蛇は闇のオーラを盾にし對抗するが、燃え上がる炎の斬撃はそれさえをも焼き尽くし、遂に王蛇へと命中。これまで無敵を誇っていた王蛇だったが、流石にこれには耐えられず、力尽きて爆散してしまう。

その際に合体していたブレイヴピオーズが爆発による爆風から逃げ出すように飛び出して行った。

「諦めてる暇なんかどこにもねえんだよッ!!……オレの……オレとロンの辿る道筋に、オマエは邪魔だアアアア!!……第二の龍騎でアタックッ!!……効果で残ったブレイヴピオーズを破壊!!」

「!?」

止まらぬソウルコア無き者の怒涛の快進撃。第二の龍騎が再び剣を猛々しく構え直す。

逃げる事に成功したかと思えたブレイヴピオーズ。しかしその束の間、今度は横一線に放たれた第二の龍騎の炎の斬撃が飛び行き、命中。焼き尽くされてしまい、王蛇同様

「黙れえええええ!!」

「テメエよりも、切磋琢磨し合って来たオレ達の方が強いッ!!!!」

「ツーーー!!?!」

「ライフ1??0」オロチ

刹那。

第二の龍騎の三度目の炎の斬撃がオロチの最後のライフを斬り裂き、焼き尽くした。その瞬間に、敗北した事を示すかの如く、オロチに纏わりついていた紫の進化の力は消えてなくなり……………

「気持ちの昂ったアスラは己の拳を固く握りしめ、勝利を告げるような雄叫びを上げた

……………

28コア 「三王たる力!! 仮面ライダーカブトハイパーフォーム」

約10年前……

コモンの人間として身分が上の者達から虐げられて来た青年オロチは、ライダースピリットである王蛇を手に入れた事により性格が変わった………と言うよりは歪んだ。又は豹変したと言えばかりやすいか。

最初は単なる復讐心から身分が上の者達を片っ端から倒して来ただけであったが、徐々にその勝利への快感は快樂へと形を変え、今となってはただの殺人鬼と化していた………

しかし………

「何故だ………何故勝てないッ!?!………何故ここまで実力に差がある!?!…無敵になったオレのデツキだぞ?!」

「………可哀想」

「ッ………なんだよ、なんだその目は………オレを………このオレをそんな見下した目で

見るんじやねえ!!」

オウドウ都、その薄暗い路地裏。オロチはそこである人物とバトルを行なっていた。

それは当時最強の三王と言われていたオメガ家の当主にしてエールの母親、エレナ・オメガだ。この時の彼女は暴れまわっていたオロチをこの国の三王として退治しようとしていた。

その圧倒的な強さを前に、オロチは全く歯が立たず追い詰められていた。

「……バトスピは1人じゃできないわ。1人ずつ殺してしまったら最終的にバトルができなくなるわよ?」

「黙れ……」

「力は振りかざすモノじゃなくて示すモノよ。だからこそカラーリーダーや三王、頂点王の決まりがある」

「黙れ……」

「本当に可哀想……貴方はきつと、仲間にも恵まれなかったのね……」

「黙れえええええ!!」

エレナのお口チを哀れむ声が、遂に彼の怒りを爆発させる。お口チが操る王蛇が彼の指示で大蛇の尾を横した剣を固く握り締め、エレナを殺害すべく走り出した。

だが、エレナは身を守ろうとはせず、まるでそれを受け入れるかのように手を広げ、己の身でその攻撃を受けて見せた。その腹には大穴が開き、誰が見ても一目で分かるほどの致命傷だった……

「な、何でだ……なんでわざと攻撃を受けやがったアアアー!？」

「いつか、いつか分かるの良いですね……仲間の大切さ……」

「っ!？」

「きつと、もつと楽しくなれます……少なくとも人を殺す行いなんかよりもずつと……」

そこまで言い切ると、血を流し過ぎたエレナはその場で倒れ込んでしまう……この後に頂点王たる女性、シイナ・メザが到着するのだが、彼女はそのシイナに遺言を残して息を引き取る事になる……

「んだよソレ……結局何なんだよオマエはアアアー!?!？」

結局最後までエレナの考えていた事がわからないオロチはその後、気が狂ったかのよう
に発狂し、本能のままにエレナのBパッドから使用された紫のオメガのデツキを奪い
取り、この場から立ち去ってしまう。

…

それから約数時間が経過したか、息を切らしながら逃げ惑うオロチ。幾ら平気で殺人
を重ねる彼と言っても、その行い自体には自分に非がある事を心のどこかで理解してい
るのだろうか……

そんな中紳士のようなシルクハットとちよび髭を生やした男性と鉢合わせた。

そのシルクハットの男は不思議と立ち止まり、何故か薄い笑いを浮かべながらオロチ
を見つめて来た。

自分を追っているわけではない事を悟ったオロチは自分の胸の奥にある想いを余す
事なく伝えた……

「なんであんな連中に虐げられないと行けない!?!……この世界はバトスピが全てなんだ

ろ!?!:オレはマスターやエックスよりも強いんだぞ!?!」

この時は誰が相手でも良かった。自分の考えを聞いて欲しかった。

自分は強いのに何故マスターやエックスに虐げられなければならない。何故バトルスピリッツが全ての世界で強いヤツが従わないければならない。そう主張したかった。

「ふふ、だったらこの私……ウィルの元へ来なさい。素晴らしい力の数々を貴方に与えましょう……存分にそれを振るうのです……強さだけでふんぞりかえる高身分者に見せつけてあげなさい」

「ッー!!」

そのシルクハットの男の正体は当時のウィル。

この時はまだトウエンティやイバラも入団しておらず、彼はライダーハンターズのメンバー集めに勤しんでいた。

彼はオロチに目をつけ、最初のライダーハンターズとして雇った……

これが10年前の真実。オロチはエレナに勝ったと言っていたが、実際はバトルに勝ったわけではない。しかし本人は嘘を言っているつもりは無い。何せ、殺した時点で

勝ったと考えを改めていたからだ。

時は戻り現在。アスラは満身創痍な状態になりながらも遂に驚異の殺人鬼オロチを倒して見せた……………

「っしやあ!!どうだコノヤロー!!」

テンションがハイになっているのか、アスラは拳を天に掲げ、勝利のファイティングポーズを掲げながら雄叫びを上げる。

オロチの体を覆っていた紫のオーラは、彼が気を失うと共に消え失せた。その光景はまるで彼の敗北を告げるかのようで……………

「アスラ……………!!」

「うおっ!?!」

嬉しさと感動の余り、アスラを抱きしめるエール。今はとにかくオロチを倒してくれた彼に感謝したい気持ちでいっぱいだった。そんな彼女の気持ちを理解しているアスラは満面の笑みで笑って見せる。

「へへ……どうだ、ちゃんと勝つたろ？」

「ええ、凄いわアンタ……本当に……ッ」

「ん？」

ふと我に帰ったエール。自分の過ちに今更気がつく、その顔を真っ赤にしてしまい……

「何変な事考えてんのよオオオー!!!」

「何も考えてないけどオオオー!?……てかオレ怪我人……!?」

思わずアスラを突き飛ばしてしまう。既にボロボロなアスラは身体を支える力も残っていなかったのか、そのままコロコロ転がって行く。

その様子に今回ばかりは非を感じたのか、エールは「あ、ごめん」と、軽く謝罪した。

「まあようやくこれで終わりだ!!…約束通り帰って旨いモン買いに行こうぜ!!」

「ツ…………ええ」

「あ、いや待てよ、その前にあのヘビヤロウどうにかしねえと…………テンドウさんあたりに連絡するか?」

取り敢えずこの不気味な洞窟を出ようと思ってもライダーハンターズの1人であるオロチをそのままにはできない。

アスラとエールは体の大きい彼をどうやってライライ町まで運ぶか思考を張り巡らす……………

その時だった……………

「やれやれ…………ようやく見つけたと思ったら、このザマですか…………」

ー!!

「君にはガツカリしましたよ、オロチ」

「オマエ、確かウィルとか言うちよび髭シルクハット!!」

バトルのダメージで気を失っているオロチのすぐ横、アスラ達の対面に現れたのは、ライダーハンターズという謎の集団の主任、ウィル。

「またもう終わりみたいなタイミングで出て来やがって!!…なんなんだオマエは!!」

「せっかく紫のオメガを扱える力を与えてやったと言うのに、結局全て奪われた拳句、負けましたか……やはりコモンの人間は使えませぬね」

「無視すんな!!」

「……紫のオメガを扱える力を与えた？」

喧しいアスラの話を見無視しながらそう呟くウィル。エールは彼の言動からしてオロチに紫のオメガの力を扱えるようにしたのはウィルである事を何となく察するが、「与えた」と言うのがどうにも引つかかる。

「それってどう言う事？」

「……これはこれはオメガ家のエールお嬢様……今日もご機嫌麗しゅう」

「ええ……エールの話は聞くのかよ!!」

「バカスラはちよつと黙ってなさい!!」

「……………はい」

あんなに頑張ったと言うのにだんだん扱われ方が酷くなつて来るアスラ。取り敢えず話には入れそうにないため、と言うか理解できそうにないため、お口にチャックをしてみる。

「さて、質問についてですが。言葉の通り、私が彼に与えたのですよ。紫のオメガをも扱える進化の力をね」

「そのカラクリが聞きたいのよ!!」

「ふふ、そうは言っても、私にはその概念が理解できても、貴女みたいな普通の人間には理解できませんよ」

ウイルの言う進化の力とは、一般的に人間が持っているもので、デツキやカードに作りし、進化をもたらすもののだが、それを与えるのは聞いた事がない。

エールは別として、話についていけないアスラはこの時点で頭がパンクしそうだっ

た。

「私には特別な力がある。トウエンティのジオウ、アレも私が貸し与えたモノだ」

「……………なに!？」

ウイルからの急な告白。トウエンティのジオウは元々ウイルの物であった事が判明する。

「3年前だったかな。一途な男でね、愛する者のために命を賭けている。ふふ、お陰様で今ではあのオロチをも超えてライダーハンターズのトップだよ。言うても私含めてたったの4人だがね」

どう言う理屈なのかは定かではないが、どうやらあのちよび髭シルクハット、ウイルは他の人物に強大な力を与える事ができるらしい……………

「やっぱ……………やっぱそうなのか」

「?」

「オマエがトウエンティを唆したのか!!…オマエのせいでトウエンティはライダースピリット狩りなんて非情な事やってんだぞ!!」

「アスラ……………」

激情に駆られるアスラ。トウエンティは元々心優しい人物であるはずなのに、それをあそこまでめちやくちやにさせた張本人が目の前にいるのだ。いてもたってもいられなくなつたのだろう……………

「何を言ってる。彼自らがそれを望んだんだ。私は力を与えてやったに過ぎない……………それよりも貴様だ」

「!?!」

ウィルはアスラの叫びを適当に流すと、今度は彼がアスラを妬ましい表情で睨みつけた。

「何故だ。何故貴様みたいな神から見放されたような猿如きが……………黒の世界の力を、第7の属性を握る事ができる?」

「あ?…何の事だ」

「本来ならばその力は私の手に有るべきなのだ……やはり今ここで奪っておかないといけないみたいだな」

ウィルの口から出て来た黒の世界、第7の属性と言う聞き慣れないワードに戸惑うアスラとエール。しかし、それでも思うところはやはりこのウィルと言う人間はライダーハンターズの他の誰よりも危険で有ると言う事……

「へっ…なんかよくわからんが来るなら来い!!…相手になつてやる!!」

「アスラ、今度は私も力を貸すわよ!!」

「マジかエール!!…これで百人力だぜ!!」

「愚かな…そんなボロボロな身体で何ができる」

アスラの龍騎を奪おうとする姿勢を見せるウィルに戦闘態勢を取るアスラとエール。しかしながらその身体はとつくに限界を迎えており、ライダーハンターズとのバトルスピリッツに耐えられるかが怪しい状態。

しかも何となくの感覚ではあるものの、ウィルはあのオロチやトウエンティさえをも

「ギヤアアアアー!!!!…すんませんんんん!!!!」

現れて早々、メチャクチャ怖い顔でアスラを睨みつけるテンドウ。アスラは反射的に凄いい勢いで謝った。

「でもテンドウ、何でここが……………」

「ああ?…エール、オマエも何勝手に拐われたんだ。殺されたいのか?」

「ホントにアンタいつもそれだけよね!!」

確かに実際何でテンドウがこんな辺境まで来れたのか謎だ。テンドウは吸っていたタバコを地面に落として鎮火させると、その点を軽く説明した。

「小僧、パーカーの襟はし見てみる」

「え?…襟はし?………………つて、えエエエー何だこれ!?!」

「発信器」

「何勝手にそんなモノつけてんすか!?!」

「ああ?…何か文句あんの?」

「いえ、一切ございません!!」

どこまでも用意周到なテンドウ。必ずアスラが飛び出して行くことを読んで、事前に彼の服に小さな発信器をつけていたのだ。

だが結果的にオーライ。今こうして最大のピンチに駆けつける事ができたのだから
.....

「で、そこでぶっ倒れてるゴリゴリマッチョがオロチで、そのちよび髭シルクハットがライダーハンターズの親玉的なヤツ?」

「ハイハイイイ!!...そうなんです!!...一緒にぶっ飛ばしてやりましょオオオー!!!」

「はい熱苦しいくちよつと黙っててー」

「えええええ!!?」

偉そうな態度でこちらを見つめてきているウィルをさらに上から目線で睨みつけるテンドウ。今にも決闘が始まりそうな雰囲気だ.....

「成る程、その威圧感と堂々とした態度。貴方が三王のテンドウ・ヒロミで間違いなさそ

うだね」

「どーも。元弟子が世話になってるな」

「トウエンティの事かな？……ふふ、彼は実に良い人材だよ」

この会話の最中で、2人は互いを「食えない奴」だと認識する。ライダーハンターズの一員であるトウエンティは恋人であるカナの病気を治してもらうためにライダーハンターズにいるのだが、そのカナがテンドウの妹。

そう言う事もあり、テンドウとウイルには少なからず何かしらの妙な関連性があった
……………

「ふーん。まああの馬鹿弟子の事はどうでも良いんだけどよ。今回はウチの小僧とエールが世話になったみたいだし。オレが何もしないわけにはいかないよな……………」

そう言いながらテンドウは展開しつ放しだったアスラのBパッドを手に取り、展開し直した。自分のBパッドは今、絶賛迷走中であるエールの兄エレンが所有しているからである。

そしてこの行為が意味しているのは、バトルスピリッツの申し出。バトルに負けたら

大人しくしろと言う意味合いが特に強い。

「バトルですか……成る程これは光栄だ。いいでしょう三王テンドウ・ヒロミ。お手合わせいたします」

「ああ?…:テメエ丁寧語使うならもうちと謹んだ言い方しろや!!」

「おお、野蛮な事」

ウイルもカードバトルの端くれとして、これを断るわけにはいかないか、自分もまた己のBパッドを展開して見せた。

その表情はとてもではないが最強の三王を相手にする者とは思えないほど飄々としていて……

「テンドウ!!…私も戦うわ!!…もうダメージも軽くなって来たし」

「そうっすよ水臭いっす!!…オレも戦いまアアアす!!」

「アンタは休んでなさいよ!!…ボロボロじゃない!!」

皆ウイルに対する怒りは同じ。アスラとエールもこのバトルに参戦しようとするが

.....

「引っ込んでろ。ここはオレが美味しいところ持っていく展開だろが、殺すぞ!!」

「えええええ!!?」

凄く自分勝手な理由で一蹴してしまう。だがテンドウ・ヒロミとはそう言う男。どこまでも自分勝手な手、どこまで本気なのかわからない。

しかし.....

「だけど、まあオマエ達にしちや良くやったよ.....」

ー!!!

「後は任せな」

漢らしい背中を見せつけ、そう言いながらアスラとエールを黙らせるテンドウ。いつもどこまでが本気なのかよくわからない人物ではあったものの、これだけは本気で言っ

ているのが伝わって来て……………

「ふふ、それじゃ貴方だけでいいのかな?…………私は強いよ」

「元からそのつもりだ。さーして、久し振りに暴れてやるかな」

「良いでしょう。私の持つこの世界の理から離れた力を思い知らせてあげます」

「理ねえ…………別にソウルコアが使えないヤツもいるんだ。今更何やられても驚きやしねえよ…………んじゃ、行くか」

…………ゲートオープン、界放!!

ライダーハンターズの主任、ウイル…………

そしてこの国の最強である三王の1人テンドウ・ヒロミのバトルスピリッツがコールと共に幕を開けた。

先行はテンドウ。ターンシークエンスを進めて行く…………

「ターン01」テンドウ

「メインステツプ……変身!!…仮面ライダーカブト……!!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

「て、テンドウさんがライダースピリットに!?!…これつてトウエンティの時と同じ……!?!」

ターンが開始して早々。テンドウは赤き光をその身に纏い、赤い鎧と頭部の一角が特徴的なライダースピリット、カブトへと変身を遂げていた。

その光景を目の当たりにしたアスラは咄嗟にトウエンティのジオウの事を思い出した。

「配置時の神託……今回は3つ追加。ターンエンド」

手札：4

場：【変身!!仮面ライダーカブト】LV2(3)

バースト：【無】

「これが三王たるテンドウ・ヒロミの仮面ライダーカブト……お初にお目にかかるね。噂ではその性質も一級品だとか」

「そりやまた御立派な噂だな」

使用者自らがライダースピリットとなる変身のカードはカテゴリ上強力な創界神ネクススだ。かなり幸先の良いスタートを切れたことには間違いない。

このターンでアスラはよりこのバトルに目が離せなくなってしまう。『三王のテンドウがバトルしていることを自覚したからだ』……頂点王になるために何か一つでも己のためになる事はないか、盗めるものがないかと向上心を高めていたのだ。

そして次はウィルのターン。果たしてライダーハンターズの主任の実力はいかなものなのか……

「ターン02」ウィル

「先ずはドローステップ時……私は手札にあるライダースピリット、仮面ライダーウオズの効果を発揮」

「ツ……あのちよび髭シルクハットもライダースピリットを!?!」

「自身を手元に置く事でドロ―枚数を1枚増やし、その後1枚破棄する」
「ま、ライダーハンターズの親玉だつて言うなら1枚くらい持つててもおかしくないよな」

ウィルがターン開始のドロ―ステップで使用したのはライダースピリットの効果。
そのドロ―枚数を1枚増やし、その後1枚捨てた。

アストラとエールが驚愕する間もなく、ウィルはメインステップを開始して……………

「さあメインステップだ。最初はこのエイプウィップをソウルコアを使用して召喚」

ー【エイプウィップ〈R〉】LV1(1)BP1000

4本もの腕をはやしている緑色の猿型スピリット、エイプウィップが彼の場合へと出現した。このスピリットはソウルコアをコストとして召喚した際に強力な効果が発揮でき……

「召喚時効果。ボイドからコア1つをリザーブへ、さらにソウルコアを支払つての召喚

だった場合、さらにボイドからコア2つをトラッシュユに追加」

「め、めっちゃコア増えたあ!？」

瞬間。ウイルのBパッドに合計3つのコアが追加された。最初のターンでいきなりコアの総数に大きく差をつけられた事はテンドウとしても大きな痛手である事は間違いない………

「ワツハツハツハ!!!……なんだその猿はあ!!……変な顔〜」

「えええええ!?!……何で笑ってるんすかアアア!?!」

「相変わらず緊張感無いわね」

エイプウィップの間抜けな顔を見るなり腹を抱えて大きく笑っていたテンドウ。エールの言う通り確かに緊張感が感じられなくて……

「フフ、ターンエンド。確かにエイプウィップの顔はちよつとおかしいね。野蛮な君によく似ているよ」

手札：3

場：【エイプウィップ〈R〉】LV1

手元：【仮面ライダーウオズ】

バースト：【無】

「ああ!?!…んだとテメエ!!…その綺麗なちよび髭ぶち切ってやろうか!?!」

「ハッハッハ…やつぱり野蛮だ」

そんなテンドウを煽るウイル。テンドウはマフィアのボス顔負けの表情で彼を睨みつける。

何はともあれ、次は再びテンドウのターンだ。ターンシークエンスを進行して行く。

「ターン03」テンドウ

「メインステップ…：仮面ライダーカブト マスクドフォームを召喚」

1 【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】LV2 (3S) BPP6000

自身がライダースピリットと化したテンドウの場に重厚な鎧を着たライダースピリットが現れる。テンドウはそのスピリットの持つ召喚時効果により、2枚のカードを新たに手札へと加えた。

「ついでにバーストを伏せて……アタックステップ。マスクドフォームでアタック…さらに効果【キャストオフ】を發揮」

「!?!」

「この効果により、手札から仮面ライダーカブト ライダーフォームを召喚!!…弾け飛ぶ鎧が変顔猿を破壊する……!!」

マスクドフォームがベルトのレバーを横に倒すと、その重厚な鎧が弾け飛び、テンドウが変身したライダースピリットと全く同じ姿をした存在が現れる。さらに弾け飛んだ鎧がウイルの場に存在するエイプウィップを直撃し、爆散させた。

ー【仮面ライダーカブト ライダーフォーム】LV2 (3S) BP6000

これは仮面ライダーカブト特有の【キャストオフ】の効果だ。効果發揮時に相手BP

5000以下のスピリットを壊滅できる。

その躍動感ある変化に、アスラは目をギラギラと輝かせていて……

「うおおお!!……カッケエエエー!!」

「そんじゃ、いっちょ攻めときますか……言つて来いやライダーフォーム!!」

テンドウの指示を聞くなり綺麗な姿勢で走り出す仮面ライダーカブトのライダーフォーム。場のスピリット、エイプウィップを失ったウイルはこれをライフで受ける他なくて……

「良いでしょう。そのアタックはライフで受けます……ッ」

へライフ5?!4へウイル

ライダーフォームのカブトが勢い良く拳を叩きつけ、ウイルのライフ一つを木っ端微塵に粉碎して見せる。

「よし!!…先制点はテンドウが取った……!!」

「うおおお!!…この調子で頑張ってくださいイイイー!!」

一見テンドウが先制点を与えて有利になったかのように見える状況。アスラとエールはより彼の応援に熱が入るが……

ウィルの実力がここからより鮮明に浮き出て来て……

「フフ…御気楽な攻撃だね、三王のライダースピリットは……お陰様でこのカードを呼び出せる」

「?」

ウィルはそう言いながら己のトラッシュへと目を向けると、そこにある1枚のカードを引っ張り出した……

そのカードの正体は……

「私のライフが減った時、トラッシュにあるこのスピリットは2コストを支払い召喚できる!!……現れよ、ゴジラ!!」

「ツ……!!」

ー【ゴジラ（2004）】LV1（1）BP10000

蠢く地の底より、咆哮を張り上げながら現れたのは黒い体に大きな尾を持つシンプルな怪獣と言った見た目のスピリット、ゴジラ。

だが、そこから感じられる迫力やオーラは美しくも凄まじく、神にも匹敵すると言って過言ではない程だ。

「ご、ゴジラって……確かゴゴのおっちゃんが使ってたヤツか!？」

「いや、メカゴジラはコイツをモチーフに作られた単なる模造品だな。本物のゴジラは比較にならん程強いって確かどっかにの本に乗ってたよーな……あれ、ゴゴのジイさんから聞いたんだっただっけな?……どっちだったけエール?」

「知らないわよ!!」

「呑気な事言ってる場合っすかアアア!？」

圧倒的なサイズを持つ強力なスピリット、ゴジラを前にしてもいつものマイペースぶ

りを崩すそぶりさえ見せないテンドウ。寧ろ観戦しているだけのアスラとエールの方が慌てている。

「まあ良いや。今度Bパッドで検索してみよ。ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーカブト ライダーフォーム】LV2

【変身!! 仮面ライダーカブト】LV2(5)

バースト：【有】

「そうやって余裕でいられるのも時間の問題ですよ?…何せ既に私の実力はこの国の三王を容易く超えているのだからね」

「テメエ!!…テンドウさんがオマエみたいなヤツに負けるわけねえだろー!!」

「まあ、そりや伝説のレアカードたるゴジラがあるんだから、少なくともデツキのカードの質はオレのよりも上だろな」

「えええええ!!?…認めるんですか!?!」

自分は三王よりも強い事を豪語するウィル。アスラはそんな事あるわけないと反発

するが、当の本人たるテンドウはタバコを片手に少なくともデツキは自分の方が下だと
言うような発言を行った。

「バカ言え小僧、オレは自分が負けるとは一言も言ってねえ……………ただ、相手にとって不
足は無しだと思っただけだ……………まあ見てな」

「ッ……………!!」

「このゴジラを前にまだそんな強気な発言をしますか……………これ以上喋ると、貴方の三王
としての尊厳に関わりますよ」

「そいつはお互い様だと思っせ、ちよび髭シルクハット」

お互いがお互いを煽り合う中、次は強力無比なスピリット、ゴジラ・2004の召喚
を見事成功させたウィルのターン。

三王たるテンドウ・ヒロミを倒すべく、己のターンシークエンスを始めて行つた
……………

「ターン04」ウィル

「メインステップ、ゴジラをLV2に上げ、バーストをセット」

ー【ゴジラ(2004)】(1??2) LV1??2

ゴジラのLVが上昇し、そのBPが15000となる。ゴジラはその事を示すかの如く爆音のような咆哮を上げた。

「さらにアタックステップ。その開始時、手元にある仮面ライダーウオズの効果発揮
……!!」

「!!」

「コスト6以上のスピリットがいる時、ノーコストで召喚できる……LV3で現れなさい!!」

ー【仮面ライダーウオズ】LV3(6) BP12000

黒い一反木綿が球体を形成すると、その中より、緑色が特徴の赤属性のライダースピリット、ウオズが現れた。

これがおそらくウィルを選んだライダースピリットなのだろう……………

「4ターン目でBP15000と12000の2体を召喚するなんて……………」

この光景にエールがそう言葉を漏らした。認めたくはないが、やはりライダーハンターズの親玉だけあって、ウィルが相当な実力者だと言う事は確かなようであつて……………

「アタックステップは継続。ゴジラでカブト ライダーフォームを攻撃」

「ツ…………指定アタックか」

「その通り、さらにこの時、ボイドからコアが1つ増え、ゴジラは回復。さらに勝利した時赤のシンボル1つが追加される」

1【ゴジラ（2004）（疲労??回復）】

ゴジラの強力なアタック時効果が発揮される。テンドウの唯一のスピリットであるカブトのライダーフォームが標的にされるが、この時ウィルにはさらに発揮できる効果

があつて……………

「ついでに仮面ライダーウオズの効果を發揮。自身を疲労させる事により、ゴジラのBPを+10000。そして相手ライフ1つを破壊する」

「!!……………ッ」

「テンドウさん!?!」

へライフ5??4へテンドウ

仮面ライダーウオズが片膝をつく。その様子はまるでゴジラに忠誠を誓っているようにも見え、ゴジラのBPはさらにパンプアップされ25000となる。

そしてどう言う原理か定かではないが、テンドウのライフ1つが瞬間的に破壊される。

「バトルは続いてますよ……………やりなさいゴジラ!!」

ゴジラはカブトのライダーフォームを上から睨みつけると、身体を大きく回転させな

がら尻尾の一撃をお見舞いして見せる。カブトのライダーフォームはたまらず爆散してしまった。

さらにまだウィルの攻撃は終わらなくて……………

「今度は回復したゴジラで貴方に直接攻撃!!…2点分のダメージをくらいなさい!!」
「ッ……………!!」

〈ライフ4??2〉テンドウ

口内から放たれる、ゴジラの強烈な熱線がテンドウのライフを襲い、それを一気に2つ破壊した。だがテンドウはこの攻撃を受けても涼しい顔を貫いており、切り替えるように伏せていたバーストへと目を向けると……………

「ライフ減少のバースト……第二の仮面ライダーカブト ライダーフォーム」

「!?」

「よってコイツをノーコスト召喚」

1【仮面ライダーカブト ライダーフォーム】LV2(3S)BP7000

バーストが反転した途端に場に現れたのは第二のカブト ライダーフォーム。既に疲労してしまつたゴジラはこのスピリットを指定アタックできない。

ウィルはテンドウの場にこのスピリットを残してのエンドを選択するしかなくて
.....

「そうか。ならターンエンドです」

手札：3

場：【ゴジラ(2004)】LV2

【仮面ライダーウオズ】LV3

バースト：【有】

「ライフが3つも減らされたのに、なんて切り替えの早さ……しかもゴジラがアタックした後だから第二のカブトは指定アタックされない……」

「うおおお!!……流石テンドウさんだぜ!!」

アスラとエールも次のターンでのテンドウの大逆転劇に期待が高まる。そんな中カブトを成功したテンドウのターンが幕を開けて…………

「ターン05」テンドウ

「メインステップ…………まあ取り敢えずもう一度マスクドフォームを召喚して、ネクサスのカブトエクステンダーを配置して置くか」

ー【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】LV1(1) BP3000

ー【カブトエクステンダー】LV2(1)

テンドウの場に再びマスクドフォームが姿を表すと共に、横へと赤いバイク型マシンが配備される。

当然ながらバイクは乗る物だが、バトル中であるため彼はそれに跨ったりはしない。

「うおおお!!…バイクカッケエエー!!」

「男って大体ああ言うの好きよね」

そんな中、アスラはテンドウのカブトエクステンダーに目をギラギラと輝かせながら興奮するが、逆にエールは興味なさそうに言葉を吐いた。

「アタックスステップ。開始時にエクステンダーの効果でトラッシュのコア2つをマスクドフォームに戻し、そのLVを2までアップ」

ー【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】(1??3) LV1??2

カブトエクステンダーの効果だ。使用されたトラッシュのコアがマスクドフォームに置かれ、そのLVを上昇させる。

そしてテンドウがコアの回収だけでターンを終了させるわけがなくて……

「アタックスステップは続行、行って来い第二のライダーフォーム……効果発揮、【クロックアップ】」

「ッ!?!」

「このスピリットのソウルコアをリザーブへ置くとで、このスピリットはブロックされ

なくなる」

カブト独自の効果……その名も「クロックアップ」

その内容は特別なコアソウルコアを支払う事により赤属性らしかぬブロックされない効果を発揮すると言うもの。何より三王であるテンドウ・ヒロミの十八番の技でもある。

しかし、それが何だと言わんばかりにウィルは伏せていたバーストカードへと目をやると、それを反転させた。

「アタック後のバースト発動!!……ケルビモン・悪!!」

「ッ!!」

「効果によりコレを召喚!!……闇より現れ出でよ、究極体のデジタルスピリット……ケルビモン・悪!!」

ー【ケルビモン（悪）】LV3（7）BP20000

バーストが反転すると共に闇の塊で密閉された球体がウィルの場に現れたかと思え

ば、そこからこの世のモノとは思えない程残忍な顔つきをしたデジタルスピリット、ケルビモン・悪が姿を見せる。

「ここ、今度はデジタルスピリット……!?」

「ゴジラに加えてライダーとデジタルまで……アイツのデツキは一体どうなったのよ!?」

「フフ、だから言ったでしょう。この世界の理では私を測る事などできないと」

驚きを隠せないアスラとエール。無理もない、何せウイルのデツキは普通では先ず組むことができないカード達で構成されているのだから……

「ケルビモン・悪の召喚時効果!!：敵スピリット1体をBPマイナス10000し、0になれば破壊する!!：マスクドフォームを貫け!!」

「!!」

その手に雷の槍を握り、全力でマスクドフォームへと投擲するケルビモン。それは見事にマスクドフォームの肩部を貫き、爆散させて見せた……

しかし肝心のライダーフォームのアタックは継続しており……

「どんなに強いブロッカーを並べても無駄だ。クロックアップは全てをすり抜ける」
「!!」

……クロックアップ!!

第二のライダーフォームが腰にあるクロックアップの装置を叩くと、無機質な音声の流れ、時間の流れが信じられないくらい遅くなる。カブトはその中を凄まじい速度で走り出す。普通ならば誰もその速さについていく事は不可能だが……

ウィルのケルビモンだけは違った……

「フフ、ブロックしなさいケルビモン……!!」

「ん?」

時の流れが遅くなってしまったにもかかわらず俊敏な動きを見せるケルビモン。その巨大な体躯を活かし、両腕で第二のライダーフォームを捕らえると、それを地面に勢いよく叩きつけ、爆散させた……

突然の事にアスラやエール、涼しい表情だがあのテンドウまでもが理解できなくて

………

「わかっていないみたいだから説明させてもらおうか。ケルビモンはLV2か3の時、相手のアタック時効果を発揮できなくする」

「ふーん。それでクロックアップを無効にしたわけか……説明どーも……なら仕方ねー、エンドだ」

手札：4

場：【変身!! 仮面ライダーカブト】LV2 (7)

【カブトエクステンダー】LV2 (1)

バースト：【無】

大抵の強力なスピリットが持ち得るアタック時効果を無効にできるケルビモン。その存在はまさしく【クロックアップ】の天敵と言える。

結果的にまんまと返り討ちに合い、場のスピリットを全て失ったテンドウ。致し方なくそのターンをエンドとする。しかしその表情にはまだ余裕があり………

「ターン06」ウィル

「メインステップ……もうこの戦いに新しいスピリットはいらないようだ。ウオズのLVを2へ上げてアタックステップ」

ー【仮面ライダーウオズ】（1??3）LV1??2

既に勝ちを確信しているウィル。スピリットのLVを上昇させるのみでメインステップを終了させ、アタックステップへと移行した。

「行きなさいゴジラ!!……さらにフラッシュ。ウオズの効果で自身を疲労させ、ゴジラのBPをプラス10000。貴方のライフ1つを破壊」

ー【ゴジラ（2004）】BP15000??25000

「ッ………！」

へライフ2??1ンテンドウ

ウオズが片膝を付き、再び効果が発揮される。ゴジラはパワーアップを果たし、テンドウのライフが又しても1つ碎け散った。

これで残り1つ。ウィルのどのスピリットの攻撃を受けても彼の敗北と言う状況まで追い込まれてしまう。

「残念だよテンドウ・ヒロミ。この国最強の三王がこの程度の実力とはね」

「ウチのばあちゃんが言っていた」

「?」

「そう言う事をほざくヤツは大体負ける。フラグって言葉知ってる?」

大ピンチに陥っていると言うのにもかかわらず、余裕のある表情を見せるテンドウは、その手札からカードを1枚引き抜いて……………

「フラッシュマジック、リミテッドバリア」

「!?!」

「このターンの間コスト4以上のスピリットのアタックじゃオレのライフは減らない」

放たれたマジックによりテンドウの前方にライフバリアとは別のバリアが出現。ゴジラはそれ事テンドウのライフを噛み砕こうとするが、結果的に傷一つつけられず………

「成る程、防御マジックを持っていたか。ターンエンド………しかし次のターン、どちらにせよウオズの効果で貴方のライフはゼロになる……フフ、私の勝利は揺るぎませんね」

手札：4

場：【ゴジラ（2004）】LV2

【仮面ライダーウオズ】LV2

【ケルビモン（悪）】LV3

バースト：【無】

流石に致し方ないと見たウイルはそのターンをエンドとする。だが、デジタルスピリットやライダースピリット、終いにはゴジラを役する自分の圧倒的に有利なこの状況、余裕のある笑みを浮かべずにはいらなかった……

「オマエそう言えばさっき三王を既に超えてるとか言ってたよな?」

「ん?…それがどうしたと言うんだい」

「本当に超えてるっつーならよ。次のオレの攻撃を凌いで証明して見せろや……!!」
「ツ……!!?」

テンドウから放たれる異様な殺気と気迫。その凄まじい威圧にウィルは不覚ながら一瞬怯え、次のターンで彼の、三王たる者の本気の攻撃が来ると身構える……………
そして予想通り、次のターンからテンドウの本気だ。

「ターン07」テンドウ

「メインステツプ……第三の仮面ライダーカブト ライダーフォームを召喚」

ー【仮面ライダーカブト ライダーフォーム「3」】LV2（6）BP5000

テンドウの場に新しく現れたのは第三のナンバーを持つ仮面ライダーカブトのライ

ダーフオーム。

「先ずはオレに神託……召喚時。5枚見てその中のカブトと名のあるカードを1枚加える」

召喚時効果も成功。テンドウは新たなカブトを手札へと加えた。

「さーてと、コイツを使うのは結構久し振りだな……ちよび髭シルクハット。オレの本気、受け止めてみろや!!」

「ツー!!?」

「煌臨発揮!!……対象は第三のライダーダーフオーム!!……その際に効果でコストが6となる」

テンドウがソウルコアを支払い、スピリットを進化させる効果、煌臨を発揮させる。カブトの左腰にカブトムシ型のマシーンが新たに装着。カブトはそれに備わっているレバー式の角を下に倒すと……

……ハイパーキヤストオフ!!

と、音声の流れ、カブトはライダーフォームの姿でさらにキャストオフを行う。そして仮面ライダーカブトは最終形態である最強の姿、仮面ライダーカブト ハイパーフォームへと進化を遂げた……………

ー【仮面ライダーカブト ハイパーフォーム「2」】LV3（6）BP14000

「これがオレのエース、ハイパーフォームだ。よく覚えときな」

「フフ、確かに如何にも強そうな見た目だ。だがまさかたった1体のライダースピリットで残りライフ4つの、しかも強力なスピリットを複数従えている私に勝とうと言うのですか?」

「ああまあな。煌臨時効果……………BP20000以下のスピリット1体を破壊する。ケルビモンを消し飛ばす!!」

「!!」

カブトの最強の姿であるハイパーフォームは登場するなりベルトのレバーを横に倒す。するとそこから赤い電流が迸り……………

「ハイパーキック……!!」

……ライダーキック!!

テンドウはその技をハイパーキックと称するが、当のハイパーフォームのベルトの音声からはライダーキックと称され、何故か一致しなかった。

だが技自体は有効。ハイパーフォームは跳び上がり、強烈なキックをケルビモンへとお見舞いして見せ、それを見事に爆散させた。

「えええええ!!?…結局どっちが技名!？」

「うるせえぞ小僧!!…んなもんどっちでも良いだろうが!!」

そう。結果的にアタック時を發揮させないと言う強力な効果を使うケルビモンを破壊できたのだ、技名なんて別にどちらでも構やしない。

「さていつちよ決めますか……アタックステップ。ハイパーフォームでアタックだ……!!」

ハイパーフォームの青い複眼に睨み付けられるウィル。ハイパーフォームはそのライフ目掛けてゆつくりと歩みを進める。

さらにこの瞬間、テンドウは徐に「フラッシュ……!!」と効果の発揮を宣言すると………

「オレの効果!!……コア3つを取り除き、このバトル中ハイパーフォームのシンボルを赤の2つにする」

「!!」

「変身!! 仮面ライダーカブト」(9??6)

創界神ネクサスであるカブトの効果だ。これによりハイパーフォームは一時的に一撃で2つのライフを破壊可能なダブルシンボルスピリットとなる。

この効果の使用により、ウィルは彼の考えている事がある程度予想して………

「成る程。この後さらに変身のカードの【転神】の効果を使用。スピリット扱いとなった

自身にもダブルシンボルとなる効果を与え、2点と2点で合計4点のダメージを与えるつもりなのですね？」

「……正解!!」

「えええええ!!?…教えちゃったアアアア!!?」

本当に当たりなのかは定かではないものの、テンドウはウィルを指を刺しながらそう告げた。まさかの行為にアスラは思わずツツコンでしまう。

「フフ、本当にそうだとしたら貴方は私には勝てない!!…フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「!!」

「これによりこのターンの間、ゴジラのBPをプラス3000。さらに疲労ブロッカーの力を与える」

ー【ゴジラ(2004)】BP15000??18000

ウィルが引き抜いたマジックカードにより、疲労していたゴジラが白いオーラをその

身に纏い、事実上の活動状態となった。自力で「クロックアップ」を持たないハイパーフォームではブロックされてしまい、ひとたまりもないだろう……………

ただ、それは飽くまでテンドウと言うカードバトラーが普通からの話ではあるが

……………

「甘いな。フラッシュエンジン、第一の仮面ライダーカブト ハイパーフォーム……………!!」

「なに!?!」

「効果でウオズを破壊!!…そして攻撃中の第二のハイパーフォームと入れ替え、バトルを続行させる!!」

天よりハイパーフォームの手元へと飛来して来たのは巨大なエネルギー纏う剣。ハイパーフォームはそれを振るうと、衝撃波が空を斬り裂きながら突き進み、ウィルのライダースピリット、ウオズを一刀両断にして見せた。ウオズはたまらず爆散してしま

ー【仮面ライダーカブト ハイパーフォーム】LV3 (5) BPI8000

「さらに第一のハイパーフォームのアタック時効果。クロックアップを超えた「ハイパークロックアップ」を發揮……!!」

「!!?」

「これによりオマエはハイパーフォームをブロックできず、フラッシュ効果を使う際に3コストを払わないといけない」

「何だと……!?!」

遂に發揮されるカブトの最強奥義「ハイパークロックアップ」

これではゴジラに対して使用した光翼之太刀は無意味に等しい効果となった。

場の時がほぼ止まっている中、ハイパーフォームが剣を手にギリギリとウイルの元まで歩み寄る………

だが………

「その程度、要は3コストを余分に支払えと言う事でしよう?」

「!!」

「フラッシュマジック、3コストを余計に払い合計7コストでリアクティブバリアを使

用します!!」

ウィルはリザーブの残ったコア全てを支払い新たな防御マジックを使用する。それは白属性を代表する「アタックステップ終了系マジック」の効果をもつカードであり………

「そのアタックはライフで受ける!!………ッ」

〈ライフ4??2〉ウィル

ハイパーフォームの剣の一振りがウィルのライフを一気に2つ破壊する。残り2つまで追い詰めて見せるが………

「リアクティブバリアの効果。このアタックの終了が貴方のターンのエンドとなる!!」
「!!」

マジックカードの影響により、突如として猛吹雪が発生する。それはハイパーフォー

ムさえをも吹き飛ばし、テンドウの攻め手を削いで見せた……………

「貴方の負けですよ。三王テンドウ・ヒロミ……………さあ、ターンをエンドとするのです」

「そんな……………テンドウ……………!!」

「テンドウさん……………!?!」

「ま、仕方ねーか。ターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダーカブト ハイパーフォーム】LV3

【変身!!仮面ライダーカブト】LV2

【カブトエクステンダー】LV2 (1)

バースト：【無】

絶望的なエンドコール。その際によく猛吹雪が晴れるが、既にテンドウに攻撃する権利は残っていない……………

だが何故か今だに追い詰められているはずのテンドウはタバコを啜えながら余裕のある表情を浮かべていて……………

「私のターン……………ん?」

ウィルは己の第8ターンをスタートしようと試みるが、何故かBパッドが動かなかつた。いつもならば自動的にコアが増え、疲労しているスピリットも起き上がるというのに……………

彼は一瞬間の中にBパッドの故障が頭を過つた。

だがそれは全くの見間違い……………

その真の理由は……………

「おいおいどうしたちよび髭紳士野郎。まるで自分のターンが始められないみたいな顔してるな〜」

「ツ……………まさか……………!?!」

テンドウがウィルを揶揄うように話し出してきた。この瞬間。ウィルは咄嗟に自分のターンが始められない理由が脳裏に過つた。

それは紛う事なきテンドウ・ヒロミのせいなのではないかと……………

そしてそのヒラメキと直感は的中……………

「さつきオレはオマエに『オレの攻撃を凌いでみる』とは言ったが『オレの次のターンを凌いでみる』とは言っていないぞ」

「……………どう言う事だ」

「フツ……………第二の仮面ライダーカブト ハイパーフォームのアタック時効果。このターンのエンドステップ時、もう一度オレのターンを行う!!」

「ッ!?……………な、なんだと!？」

その度肝を抜かれる強烈な効果に、流石のウィルも冷や汗を感じてしまう。

テンドウを選んだ仮面ライダーカブトは時をも超越した効果を持つ稀有な存在。つまり、もう一度彼のターンが行われる。前のターンで使用された光翼之太刀やリアクティブバリアも効力を失い、もはや意味が無くなり……………

「ウチのばあちゃんが言ってたぜ。天の道を行くヤツはこう言う効果は最後の最後まで口にしない」

「す、スゲエ!!」

「確かに凄いいけど……………何かもうちょっとカッコいい事言えないのかしら」

「何はともあれ、もう一度オレはオレのターンを行う!!」

己の言い回しをエールにツツコミを入れられながらも、ウィルの計算を狂いに狂わせ
たテンドウのエクストラターンが幕を開ける……

「ターン08」テンドウ

「アタックステップ!!……これで終わりだぜ……行け、仮面ライダーカブト ハイ
パーフォームツ!!……」【神技】のフラッシュ効果でダブルシンボルとなるぜ!!」

(新たな防御マジックを打とうにももう使えるコアが足りない……!?)

ハイパーフォームの剣にトンボ、サソリ、ハチ型のマシンが次々に装着されていく。
そしてハイパーフォームはその剣をまるでエネルギー砲でも放つかのような構に切り
替えると……

「オレあ正直、オマエがどこで何しようがどうでもいいのよ、髭紳士野郎」

「!!」

「でもな。この先も身内に手エ出そうってんなら、オレは容赦なくテメエをぶちのめす!!……もちろん今、この瞬間もなあ!!」

「くっ……ここまでか……」

「くらいやがれ!!」

……マキシマムハイパーサイクロンツ!!

テンドウが技名を叫ぶと共に、ハイパーフォームはガンモードとなった剣から巨大エネルギー砲を発射。

地面を抉り抜きながら突き進むその先には当然ながらウィルのライフがあつて

……

「これが三王の力か……成る程、貴方の強さは理解できました。トウエンティが強いわけだ……」

「!!」

「……ライフで受ける」

△ライフ2??0△ウイル

その言葉を残すと、その凄まじいハイパーフォームの銃撃をライフで受けるウイル。とんでもない破壊力の巨大エネルギー砲が彼のライフへと直撃し、それら全てを難なく破壊し尽くした。風圧により生まれた土煙の中、勝利を確信したテンドウ……………しかし、不思議と倒したと言う手応えが無く、その土煙の中にはもうウイルはおろか気絶していたオロチさえも姿をくらましていて……………

「チツ…………逃げやがったか…………」

勝利こそしたものの、捕らえられな勝ったことにはらわたを煮えくり返すテンドウ。舌打ちが止まらない。

そして徐にBパッドを閉じると、自身にかけていた変身が強制解除され、場に残っていたハイパーフォームは姿を消滅させていった……………

「うおおお!!…………テンドオオオーキアアアん!!」

「!!」

「めっちゃカッコ良かったっす!!…スゲエっす!!…強かったっす!!」
「はいはい。ありがとよー」

アスラが目をギラギラと輝かせながらテンドウを労って来た。そのすぐ近くにはエールも確認できる。

ライダーハンターズの親玉は捕らえられなかったものの、テンドウは一先ずこの2人を守り抜く事ができた事にとりあえず満足して……………

「フン……………べ、別に助けてなんて言っていないんだからね!!」

「なんで上から目線?……………ま、いつか……………よし帰るぞテメェら!!」

「おっす!!……………つて、アレ…なんか力が入らね……………」

「ちよっ……………アスラ!」

さつきまではアドレナリンがドバドバと出ていたのか、安堵感で心を満たしたアスラは途端に倒れ込んでしまう。余程限界まで力を使っていたのが見て取れる。

その後、アスラはテンドウの背中で眠りにつきながら洞窟を出、黄色の町ライライ町へと帰っていった……………

これにて長くなつたライダーハンターズとの小競り合いも、一旦熱りが冷める事になる。再びアスラが最強カードバトラーの称号「頂点王」を目指す物語が動き出すのだ

.....

29コア 「オメガモンVSデュークモン!!」

「て、テンドウさん……その水取ってください……」

「ああ?…命令すんじゃねえ、自分で取れや!!」

「ええ!?!…見てわかるでしょ!!…オレこんなですよ!?!」

「関係ねえだろ、そのくらいの限界、今すぐこの場で超えてみせろ!!」

「ええええええ!?!」

ライライ町の病院。その一室にて、アスラは全身を包帯でグルグル巻きにされた状態でベットに横たわっていた。見ての通り、そのままでは1人で水を飲む事すらままならない。そしてすぐ横には新聞を読んでいるテンドウがいるものの、彼は一切アスラを助けてはくれない。

いわゆる全身筋肉痛だ。あの洞窟での戦いの後、力を出し切ったアスラは結果的にこんな状態になった。無理もない、何せあの人外じみた力を得ていたオロチと2回もバトルを行なったのだから………

「むえ〜」

「おつ、ムエ!!…オマエまさかオレに水を飲ませて……………」

「むむむむむえ〜」

「オマエが飲むんかい!!」

久し振りにオレンジの犬みたいな小動物ムエがアスラの目の前に現れ、ペットボトルの入った水をアスラに飲ませるのかと思えば、自分の短い前脚と後脚を器用に使い、ごくごくとそれを飲んで行った。

「ま、医者言うには後1日休んでれば包帯外れるみたいだし、それまで飲まず食わずで行けば。オマエ貧乏人だったんだからそれくらい余裕だろ?」

「扱いがひでえ!!」

おそらく今回の件では一番身体を張ったアスラだが、何故か扱われ方が芳しくない。もちろんテンドウとして彼の頑張りを無下に思っているわけではない……………多分。

「あ、そう言えばテンドウさん!!…………聞きたい事あるんですけど!!」

「オマエ、手足動かせねえくせにうるせえな……元氣君かよ……まあいいや。何？」
「黒の世界とか、第7の属性つてわかります？……あのウィルとか言うちよび髭シルクハットヤロウがオレの龍騎にそんな事言つてたんつすよ!!」

アスラはウィルが自分を選んだライダースピリット、龍騎について話した事をテンドウに伝えた。黒の世界、第7の属性。聞いた事もないワードだったが、三王であるテンドウなら何か知っているのではないかと思つたのだ。

「ああ？……んなもんオレが知るか。ぶっ飛ばすぞ」

「えええええ!!」

「黒だとか7だとか関係ねえ。オマエはオマエを選んだライダーを信じればいいんじゃない？……まあどうでもいいけど」

「!!」

テンドウの言葉を聞いたアスラは「確かに」と納得してしまう。

そうだ。何も悩む事じゃない。龍騎がウィルの物な訳ないし、あの時あの瞬間、諦めなかつた自分だからこそ選んでくれた龍騎だ。黒の世界の力とか見るからに悪き力な

わけがない。

「……………そうつすよね!!……………オレ、この龍騎と一緒に頂点王になってみせまアアアアア!!」

「ああうるせえ!!……………ここ病院だぞ、殺されてえのか!!」

「すみませんんんん!!」

病院でタバコ吸ってる人に言われたくねえ!!つとアスラは思ったが、口にしたら本当に殺されかねないので、敢えて凄まじい速度で誤った。

そんな時だ。病室の扉が勢いよく開いたのは……………

「邪魔するぞ」

「おつ、ツンデレお兄様……………元気……………あの時は無駄足だったみたいだけど」

「貴様の憎まれ口を聞きにきたんじゃないぞテンドウ」

現れたのはエールの兄、エレン・オメガ。彼は単身でエールを救出しようとして試みていたが、イバラが囮になったのもあり、結局はテンドウの言う通り無駄足となってしまっ

た。

しかし、彼はテンドウの憎まれ口を軽く流すと、ベッドの上で転がっているアスラの元まで歩み寄り……………

「あ、こんつちわ〜……………え〜つと、ご機嫌どうつすかねお兄様？」

「貴様にお兄様と呼ばれる筋合いはない」

「ええええええ!!」

気まずい雰囲気の流れる中、アスラは頑張って言葉を振り絞ってみるが、訳の分からないまさかの理由で一蹴されてしまう。

「おいおいツンデレお兄様よく…小僧に用件があつて来たんだろ? ……じゃあ早くすませろや」

「黙れ異国人」

テンドウが横から水を刺すが、それもまた厳しい言葉で一蹴。アスラには彼が何を考えているのかがさっぱりだった。

(……………本当にこのコモンの者があのオロチを倒し命を賭けてエールを救けたのか？
……………にわかには信じがたいが……………ここは一言礼とかを言うべきなのだろうか……………
しかしエックスで三王でもあるこの余がコモンに礼など……………)

実際は悩んでいた。アスラにお礼をするかしないかで。

正直してやつてもいい。しかし、そうすればこのコモンのドブネズミ……………しかも何
故か妹が好意を寄せる男を認める事になりかねない。

そう思うとどうしても言葉が出て来ない。しかし、それでもエレンはどうか言葉を
絞り出して見せ……………

「スーミ村のアスラ」

「は、ハイっす!!」

「オマエは頂点王になるんだったな。ならばこの余を超えてみろ」

「ツ!？」

「ただし、超えられるものならな」

エレンにそう言われて驚くアスラ。何となくだがエレンにも少しは認められた気がするからだ。

エレンのこの言葉はアスラをカードバトラーとしてある程度認めているが、妹の男としては全く認めていないという意味が込められている。もちろんアスラが彼の内心を知るわけもないのだが……

「おうつす!!…絶対アナタもテンドウさんもシイナも超えて頂点王になってみせまアアアアす!!」

「フツ……不細工な格好だな」

「ええ!?!…今そんなこと言う!?!」

包帯でグルグル巻きになっているアスラを鼻で笑うエレン。この2人も少しは打ち解けて来たのが伺える。

しかし、ここまで話すとエレンはある事に気がついて……

「ところでエールはどこだ。見当たらないが………いや別に会いたかったわけではない。ただちよつと気になっただけだ」

「会いたかったなら先にそう言えよ、このツンデレ兄貴」

「エールならさつき街に向かいましたよ!!」

「何!?!」

テンドウはここでようやく理解した。エレンはエールの様子を見に来たのだと。

だが、アスラがエールは街に行つたと口にした途端顔が青ざめて…………

「ふざけるなよ貴様ら!!…………オマエ達の役目は妹を守る事だろう!?!…………エールに何かあつたらどうする!?!」

「えええええ!?!…………別に大丈夫でしょ子供じゃないんだからアアア!?!」

「テンドウ!!…………貴様何故エールの護衛につかなかつた!?!」

「え。だって別に街に用なんてないし、それにアイツと一緒に街歩くと一々ガミガミガミガミうるせえもん」

「理由になつてないぞ!!」

その後エレンは「エールを探す!!」と力強く宣言すると病室を飛び出し、ライライ町の街へと向かつた…………

「……あの人結局何だったんすか……?」

「気にするな。ただの常軌を逸したシスコンなだけだ。寧ろ正常運転してるようで安心したぜ」

「ふーん。兄ちゃんって色々大変なんすね………てか暇なんでシリトリしましょうよ!!」

「は?……んだオマエ。元気君かよ………まあいいか、オレが買ったらタバコ買って来いや」

「えええええ!!……だからオレ今一人で歩けないんですけど!?!」

アスラとテンドウはその後男同士なんだかんだで楽しくやっていた。

ほぼ同時刻、エックスの身分を持つ少女、エール・オメガは黄色メインで彩るカラフルな街、ライライ町の中心である繁華街を歩いていた。

何も観光だけが目的で歩いているわけではない。今も激しいダメージが身体に残つ

ているアスラのために何かプレゼントでも渡せないかと思い、こうして所狭しと店が並ぶ繁華街を歩いているのだ。

身分が最高であるエックスの自分が底辺のコモンにやる事ではないのは百も承知だ。しかし、動けなくて不自由な時間が続くアイツが自分のプレゼントで喜ぶ顔が見れると思うと、不思議に足取りが軽くなるものだ……………

(いや、何考えてんのよ私っ!?)

妙な方向に向かっていた思考を止めるエール。どうやらこの夏の暑さで頭がおかしくなっているらしい。別にあんなバカでアホでチビでコモンで凄まじくポジティブなところだけが取り柄のアスラの喜ぶ顔が見たいわけではない。

(…………まあ、私のせいであんなになったわけだし、そのくらいはね…………)

少なからずエールはアスラがあんな状態になったのは自分のせいだと感じていた。そのため、こうして街を一人で歩きながら良さげな物をプレゼントしてやろうと思っっているのだ。

「見つけたぞエールツ!!」

「え?」

そんな時だ。ヤケに耳覚えのある声がエールの耳を通過した。彼女がその声の方へと振り返ると……………

「……………え、エレンお兄様!」

振り返った先には実の兄、三王のエレンだった。テンドウやアスラとの会話から近くに来ていたのは知っていたが、あろう事かまさか自分を探してこんな所まで来るとは思ってもいなかった。

「あ。えーっつと、アスラから聞きました。私の事を探してくれてありがとうございます!!……………お手数を煩わせました」

「むっ……………何の話だ。余はただオマエの持つ母上の形見、赤のオメガを失いたくなくなっただけだ」

「ツ……で、ですよね」

(いや違うウウウー!!!…めちゃくちや心配してたんだよオオオー!!!…無事でよかったアアアー!!!…そして本当ごめん!!…こんな言い方しかできなくてごめん!!)

妹想いがすぎるエレン。彼女を前にするとどうしても辛辣な言葉を浴びせてしまう。しかもその言葉で妹が傷ついたと思えば罪悪感が募る。

本当はそんな事を言いたいわけではない。昔のように仲良くしたいが、何故かこの定着したキャラがやめられないのだ。

「……ところでエール。母上の事、ヤツ本人から聞いたみたいだな……」

「あ。はい……」

罪悪感を堪え、話を切り替えるエレン。

彼は今まで、いや、正確には彼だけではなく、テンドウやシイナ。エールに関わって来た大抵の人物が彼女らの母親であるエレナの死の秘密、本当は事故ではなく、オロチに殺害されていたと言う事実を隠蔽していた。

「……………それに関しては……………その……………すまなかった」
「!?」

ここに来た時からそうする予定だったのか、意外にもここは素直に謝るエレン。というか素直に謝る事ができたエレン。

彼の意外な行動にエールは逆に戸惑う。

「テンドウから聞いた。オマエは一人で果敢にオロチに挑み、紫のオメガを取り返して見せた……………本当に強くなったんだ……………」

「ッ……………!!」

この瞬間。エールは直感的に気づいた。自分がようやく憧れだった兄に認められている事。決して兄から粗野に扱われていたわけではないと言う事を……………

そう思うと身体が固まってしまうほど嬉しくて……………

「だから……………えー……………その、なんだ……………これからも頑張れ。オマエの好きなように生きろ」

「ツ……………はい!!」

「……………ではさらばだ……………早く帰るんだぞ」

エレンは最後にそう告げるとエールの元を去っていく。そしてエールの顔が見えな
いくらいまで遠くに来ると……………

「……………よつしやあああああ!!……………久し振りにエールと喋れたあああああ!!」

喜びの声が轟く。喋れたのか喋れてなかったかで言うとは微妙なラインな気がしない
でもないが、確かにどちらにせよ2人の距離が縮まって来ていたのは間違いない事では
あつて……………

この日、エール・オメガはご機嫌だった。バカでアホでチビでコモンでポジティブな
ところが取り柄なアスラにプレゼントを上げてやっても良いと思える程に……………

何せ今日、あのエレンお兄様が自分を褒めてくれたのだから。こんなに嬉しい事はな

い。

「さあ〜と!!…さっさとあのバカスラにあげるプレゼントでも買って帰りますか!!」

上機嫌なエールが鼻歌交じりにスキップをしながら繁華街を駆けていると……………
またしても聞き慣れた声が聞こえて来た……………

「おっ!…だったら良い案があるよ!!」

「ツ!!……………し、シイナ様!?!…び、びっくりしたー」

「おっ久々…マリーナ海街以来だね〜!!」

「……………何て言うか……………シイナ様って結構どこにでもありますよね」

その声の主は他でもない。この国の頂点王シイナだ。ラフな服装と、明らかに観光気分なサングラスが頂点王たる威厳を完璧に隠している。

「いや〜…テンドウから最近ライダーハンターズたるヤバイ連中がエールちゃんを拐つ

たつて連絡あつてさく…それで颯爽とここまで来てみればもう終わったつて言うじゃない!?…それで、大丈夫だったの!?…もうお姉ちゃん心配でさく」

「は、はあ……顔が近いです………」

凄まじい勢いでエールに近づくシイナ。彼女がエールの事をかなり心配していたのかが伺える。

しかしながら相変わらずマイペースと言うか掴みどころのない性格をしている頂点王シイナ。エールも長らく彼女と一緒にいるがその点は未だによく理解できていないでいる。

「えーっつと……それでシイナ様。さつき言つてた良い案つて何ですか?」

エールがシイナに聞いた。良い案とはおそらくアスラにあげるプレゼントの事で間違いないのだが………

「それつてエールちゃんがアスラにあげるんでしょ?……だつたら簡単よ!!…自分の体にリボン巻きつけてー「私がプレゼントよ」つてやれば楽じゃん!!」

「は、はあああああ!?! ……そ、そそそんな事やるわけないじゃないですかあ!!」
「いやそこをなんとか!! ……私はエールちゃんとアスラの絡みが好きなんだ!! ……結ばれて欲しいんだ!!」

「さつきから何言ってるんですか!? ……わ、私はあんなバカスラなんてべ、別になんとも……!」

まさかすぎるシイナの提案。もとい要望。エールはそれを想像しただけで顔から耳までが真っ赤に染まる。

プレゼントにリボンを巻きつけた自分をプレゼントするなど絶対に好意があるのがバレてしまう。それだけは全力で阻止しなければならない。

「もー可愛いんだからエールちゃんはー ……何年君を見て来てると思ってるんだよ ……バレバレ!!」

「い、いや ……だから違いますって ……」

「よし!! じゃあ私とバトルしよう!! ……私がバトルに勝ったら自分にリボン巻いてアスラにさつきの言葉言っつてね!!」

「なんでそうなるんですか!? ……嫌ですよ!! ……なんで頂点王のシイナ様とバトルなんて

……私が負けるに決まってるじゃないですか!!」

ギラギラと目を輝かせながらエールにバトルを申し込むシイナ。こう言った表情はどことなくアスラに似てないでもない。

エールは当然そのバトルを断る。無理もない、相手がこの国で最強な上に負けたら恥ずかしい行為をしなければならぬのだから……

しかし……

「じゃあこうしよう!!……エールちゃんが勝ったらアスラの好きな女の子のタイプ。教えてちょう!!」

「なっ……!!」

さらにもう一つ条件を足してきたシイナ。その内容はアスラの親と言っても過言ではない彼女だからこそ提案できるもの。

しかし、アスラが好きな女の子の好みなど、普通の人ならばどうでもいい。と言うかそもそもな話あんな熱血ポジティブ男にそんなモノがあるのかと疑問がでるくらいだ。

だがエールは……

「し、仕方ないわね……シイナ様がそこまで言うならエックスのこの私が相手してやらなくてもないわ!!……べ、別にあのバカスラの女の子の好みが気になってるわけじゃないんだからね!!」

「よし来た!!……そうこなくちゃね!!……じゃあ一目の少ない公園でやろうか!!」

もう正直アスラの好みが気になってしょうがない。本能的にこのバトルを引き受けてしまう。

シイナはそんなエールを「わかりやすく可愛いく」と内心でコメントを残しながらもバトルする場所を提案した。

その後2人は一目の少ないライライ町の公園まで赴くと、お互いのBパッドを展開し、デッキをセット。バトルの準備を行った。

「それにしてもエールちゃんとバトルなんて久しぶりだなく……どのくらい強くなったのか、見せてもらおうか!!」

「フン……こう見えて最近すごい進化したんですよ!!……ひよつとしたらもうシイナ様なんて目じゃないかも!!」

「おお、言ってくれるね〜……私こう見えてこの国最強なんだけど」

エールの言う「すごい進化」とは、おそらくウオーグレイモンとメタルガルルモンが合体した奇跡のデジタルスピリット、オメガモンの事だ。

頂点王とは言え、普段はのほほんとしているシイナならばワンチャン勝てると思っ
ている。長年彼女を見てきたエールだからこそその考え方だろう。

「まあいいや。どちらにしたって楽しみだ……じゃあ、やろうか」

「はい!!」

……………ゲートオープン、界放!!

照りつける太陽の中、人目少ない公園にて、エックスの少女エール・オメガと、この国最強のカードバトラー、頂点王シイナのバトルスピリッツが幕を開ける。

先行はエールだ。彼女のBパッドの先端のランプが点滅し、ターンが進行されて行く。

「ターン01」 エール

「メインステツプ!!…先ずは勇気の紋章を配置!!…これでターンエンド!!」

―【勇気の紋章】 L V 1

エールの背後に擬似太陽とも言える代物が配置される。彼女はそれでターンを終え、次は頂点王シイナのターンとなる。

「ターン02」 シイナ

「メインステツプ……じゃあ先ずはブイモンを召喚しようかな」

―【ブイモン】 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

頂点王が颯爽と呼び出したのは小さな青き竜、ブイモン。彼女のデツキの筆頭とも言えるスピリットであり……

「召喚時効果……2枚見てその中の対象となるカードを1枚加えるよ……よし、ライドラモンを手札に!」

「!」

ブイモンの召喚時効果が発揮。頂点王シイナは新たなカードを手札へと加えた。そしてそのままそのカードを引き抜くと……

「でもって今加えたライドラモンの【アーマー進化】発揮!!…場の成長期スピリットを手札に戻して、コイツを召喚する!!」

「ッ……!!」

「現れろ、轟く友情ライドラモン!!」

ー【ライドラモン】LV1(1)BP5000

ブイモンの頭上に黒い瓢箪のような形をした何かを投下される。ブイモンは跳び上がり、それと衝突し、混ざり合って進化する。

そして、新たに現れたのは黒い鎧を纏う雷の獣、ライドラモンだ。

「出た。シイナ様のアーマー進化……」

「ライドラモンの召喚時効果!!…私のトラッシュユにコアを2つ追加!!」

現れるなり気高い雄叫びを上げるライドラモン。その影響で頂点王シイナのBパツド上にコア2つが新たに追加された。

【アーマー進化】とは、いわゆるドーピングに近い。成長期スピリットをあらゆるタイミングで進化させる事ができるが、それ以上の進化はできない。頂点王シイナのデツキはこの進化方法も多用している。

「さ、ライドラモンでアタックしても勇気の紋章で返り討ちに会うだけだし、ここはターンエンドとしておこうかな」

手札：5

場：【ライドラモン】 LV1

バースト：【無】

頂点王らしからぬ引き締まらない声でそのターンを締めくくったシイナ。次は再びエールのターンだ。

「ターン03」エール

「メインステップ……………2枚目のネクサス、友情の紋章を配置!!」
「!!」

ー【友情の紋章】LV1

今度は紫属性の紋章ネクサスがエールの背後に配置される。太陽のような勇気の紋章と並び、その様は正に壮大であった。

「さらにバーストをセットして、太一のアグモンを召喚!!」

ー【太一のアグモン】LV1(1)BP3000

赤のオメガの成長期スピリット。黄色い肉食恐竜をこれでもかどデフォルメした見た目のアグモンがエールの場に現れる。その召喚時効果も発揮させ、彼女はその中の対象カード1枚を手札に加えた。

「勇気の紋章をLV2に上げて、アタックスステップ!!…アグモンでアタック!!…友情の紋章の効果、完全体以下のデジタルスピリットのBPを3000アップ!!」

1【太一のアグモン】BP3000??6000

エールのアタックスステップが幕を開ける。友情の紋章の力により、アグモンのBPがシイナの場のライドラモンの5000を超える。

シイナも折角のアーマー体スピリットを破壊するわけにもいかななくて……

「よし、ライフで受けようか!!」

〈ライフ〉5??4

その攻撃をライフで受けた。アグモンの鋭い爪を振るう一撃が彼女のライフ1つを切り裂いた。

「ターンエンド!!」

手札：3

場：【太一のアグモン】 L V 1

【勇気の紋章】 L V 2

【友情の紋章】 L V 1

バースト：【有】

先制点を与え、勢いづくエールはそのターンをエンドとした。次は再び頂点王シイナのターンだ。まだまだ余裕のある表情を見せながらターンシークエンスを進めて行く。

「ターン04」シイナ

「メインステップ!!…手札に戻ったブイモンを再召喚!!」

ー【ブイモン】LV2(3)BP4000

シイナの場合、ライドラモンのすぐ横に「アーマー進化」の効果で手札に戻っていたブイモンが再召喚される。その召喚時効果も成功し、シイナは新たなカードを1枚手札へと加えた。

「さらにもう一度、『アーマー進化』発揮、対象はブイモン!!」
「!!」

「今度はオマエだ。燃え上がる勇気ライドラモンを召喚!!」

ー【フレイドラモン】LV2(3)BP9000

ブイモンの頭上にデジメンタルと呼ばれる赤くて丸い物体が投下される。ブイモンは跳び上がりそれと衝突し、混ざり合い進化を遂げる。

そして新たに現れたのは炎燃える竜人型のアーマー体スピリット、フレイドラモン。

「来た。シイナ様の相棒……」

「ふふ、結構久しぶりに使った気がするよ!!…:召喚アタック時効果、BP7000以下のスピリット1体を破壊して1枚ドローする!!」

「!!」

「当然アグモンを破壊だ…:くらえ、ナックルファイア!!」

炎の拳を弾丸として発射するフレイドラモン。エールのアグモンはそれに焼き尽くされ破壊されてしまう。

「バーストをセット。ライドラモンのLVを2に上げてアタックステップ!!…:言つて来いフレイドラモン!!」

1「ライドラモン」(1S??3S) LV1??2

攻勢に回るシイナ。燃える竜人フレイドラモンは指示一つでエールのライフ目掛けて走り出す。ブロッカーどころかスピリットもないエールはライフで受ける以外の選択肢が無くて…:…:

「ライフで受けるわ!!……ッ」

〈ライフ5??4〉エール

フレイドラモンの炎燃え盛る拳がエールのライフ1つを殴り砕く。さらにまだ攻撃は終わらない。今度はライドラモンの効果が発揮される……

「ここで!!……ライドラモンのLV2、3の効果!!……アーマー体か完全体以上のデジタルスピリットが相手のライフを破壊した時、追加でさらに1つのライフを破壊する!!」

「!!」

「プレイドラモンもアーマー体、よって効果適用!!……ブルーサンダー!!」

「ッ……ぐっ……!!」

〈ライフ4??3〉エール

ライドラモンの気高い雄叫びと共に落雷する青き稲妻がエールのライフを直撃。そのライフが1つさらに砕け散った。

この瞬間。エールは理解した。このままカウンターを打たなければライドラモンの追撃によってまた2つのライフが失う事を……………

それを防ぐべく、伏せていたバーストカードに目を向けると、勢いよく反転させた

……………

「バースト発動!!…アルティメットウォール!!」

「!!」

「バースト効果でアタックステップを終了させるわ!!」

バースト反転瞬間の刹那。場全体に猛吹雪が発生。エールは頂点王たるシイナのその後のアタックを凌いで見せた。

いくらシイナがこの国最強の頂点王と言えど、流石にこの状況はターンエンドと言わざるを得なくて……………

「あちゃ〜…………流石にこのくらいじゃビクともしないか〜…ターンエンドだよ」

手札：6

場：【ライドラモン】LV2

【フライドラモン】LV2

バースト：【有】

「いや、ビクともしてますよ!!……シイナ様強過ぎ、てか速過ぎ!!」

「ハツハツハ!!…そうかい、そりやまあ頂点王だからね!!」

シイナがそのターンをエンドとすると、絶甲氷盾によって吹き荒れていた猛吹雪は晴れ、エールのターンが幕を開ける。

まだエース級のスピリットがいないにもかかわらず異様な強さ、と言うよりかは速さを発揮する頂点王シイナ。いつもはのほほんとしているからすっかり忘れかけていたが、この人はこの国最強なんだとエールは改めて自覚する。

でもここまで来たからにはもう後には引けない。エールは自分の全力で頂点王シイナに挑んで行く。

「ターン05」エール

「メインステップ!!……よし、今度はコレで行くわ!!…ヤマトのガブモンを召喚!!」

「ツ……紫のオメガか！」

「召喚時効果!!…4枚見て対象となるカードを加える!!」

1【ヤマトのガブモン】LV3(4)BP6000

現れたのは立派な一角と獣の毛皮を纏う紫属性の成長期スピリット、ガブモン。紫のオメガのカードの1種。赤のオメガで言うところのアグモンと同じ立場だ。

召喚時効果も成功し、エールは手札を1枚増やした。

「ガブモンか、随分と懐かしいね……」

「？」

エールの場に呼び出されたガブモンを見ながら感慨深くそう呟く頂点王シイナ。彼女は今、エールの母親、エレナ・オメガの事を思い出していて……

「ごめんねエールちゃん。1人でオロチと戦わせちゃって……怖かったろうに……本当なら私が1人でやるべきだった」

「え？……なんでシイナ様がオロチを……」

シイナの言葉に戸惑いを見せるエール。彼女はエールの母親、エレナ・オメガの死ぬ間に居合わせていたのだ。エールはまだそれを知らなくて……

それ故にシイナはエールにオロチや紫のオメガの事を不本意ながら任せてしまった事に責任を感じていて……

だが………

「なんかよくわかりませんが、いいじゃないですか。こうして紫のオメガはここにあらうわけです」

「!!」

「関係ないですよ。終わったんです、因縁は。今を笑えたらそれでいいです」

そう言い切ったエール。

そうだ。もう何も誰かが気にする事はない。今こうして自分は無事でいて、紫のオメガも手元にある。それでいいではないか……

その言葉を聞くなり、若干暗がりだったシイナの表情はいつものように緩くなって行

き……………

「ふふ、なんかエールちゃん、アスラに似て来た？」

「え、ええ!？」

「アイツも多分同じ事言うと思うよ!!…もっとデカい声で」

「あ、あんなアホスラと一緒にしないでください!!」

「もう…照れちゃって」

「照れてないッ!!」

このやり取りでシイナの心の中にあつた曇りは少しだけ晴れた。少なくともエールが気にしていない事がわかったからである。言い方や考え方が前よりも凄まじくポジティブに感じるのにはやはりあのアスラのお陰だろう。

そう言った意味ではアスラとエールと一緒に旅をさせたテンドウの判断はかなりの英断であると思えて……………

「よし!!…話が長くなったね、存分にかかって来なさい!!」

「はい!!…ぶっ飛ばしてあげますよ!!…勇気の紋章と友情の紋章のLVを2にアップ

!!

「エールはそう言いながら立て続けに「アタックステップ……!!」と声を上げて宣言すると……………」

「ガブモンの【進化：紫】 発揮!!……………第二のガルルモンに進化!!」

Ⅰ【ガルルモン「2」】 L V 2 (4) B P 5 0 0 0

ガブモンが青白い光に包まれて行き、その中で進化を遂げる。やがてその光を弾き飛ばしながら現れたのは白銀の毛皮を纏う獣型の成熟期スピリット、ガルルモンだ。

「これが私の新しい力!!……………アタックステップは続行!!……………ガルルモンでアタック!!……………効果でライドラモンのコア1つをトラッシュに!!」

「!!」

雄叫びを上げるガルルモン。それにより、シイナのライドラモンはコアを1つ外さ

れ、LVが2から1へとダウンしてしまう。

そしてさらに、成熟期スピリットの本領発揮はここからであり……………

「さらに第二のガルルモンの【超進化・紫】発揮!!……………完全体、第三のワーガルルモンに進化!!」

「おお……………まだ来るか!」

1【ワーガルルモン】[3] LV3 (5S) BP12000

ガルルモンがさらに青白い進化の光を纏い、姿形を変えていく。そして光を拳で砕きながら現れたのは、二足歩行になったガルルモン。完全体のワーガルルモンだ。

「召喚時効果!!……………2枚ドロして、その後私の手札2枚につき相手のコア1つをリザーブに置く!!」

「なに?」

「私の手札は6枚!!……………よつてライドラモンから2つ、プレイドラモンから1つのコアを除去。コアが0個になったライドラモンは消滅する!!」

1【ライドラモン】(2??0)消滅

1【フレイドラモン】(3??2) LV2??1

鍛え上げられた拳を振り、そこから飛ぶ斬撃を発動するワーガルルモン。それらは真つ直ぐにシイナの場のアーマー体達に飛んでいき、命中。引き裂いて見せた。

フレイドラモンは辛うじて生き残るが、ライドラモンは堪らず消滅してしまった。

このターン、エールは強力な完全体スピリットを召喚しつつ、頂点王のスピリットを1体消し去り、ドローまで行った。この時点でかなりやり返したように見えるが

……

まだだ。まだエールはカードを1枚引き抜き、畳み掛ける……

「さらにフラッシュタイミング【煌臨】発揮!!……対象は第三のワーガルルモン!!」

「!!」

「ワーガルルモン、究極進化アアアア!!」

煌臨もとい究極進化を発揮させるエール。昔は何故かできなかつたが、今となっては

十八番となったこの戦術。ワーガルルモンが紫の光に包まれ、さらなる進化を遂げていく……………

「メタルガルルモンツ!!」

そしてその光の中で鋭い眼光を放つと共に気高い雄叫びを上げると、そこにいたのはワーガルルモンではなく、さらに進化した姿、鋼鉄のボディを持つ究極体のデジタルスピリットにして紫のオメガの象徴、メタルガルルモンだ……………

10年と言う長い年月の間、このカードはオロチの元にあつたが、今となってはオメガ家の、いや、エールにとってとても大事なカードであつて……………

1「メタルガルルモン」LV3(4)BP16000

「メタルガルルモン……………随分と久し振りだな……………!!」

シイナは懐かしさの余りまたしても薄ら笑いを浮かべる。エールがエレナの顔と瓜二つなのもあつて感動しているのだ。

この国のデジタルスピリットの三王の再来に……………

「行くわよメタルガルルモン……………アタック!!」

「!!」

躊躇なくアタックを仕掛けるエールのメタルガルルモン。その強力なアタック時効果を遺憾なく発揮させる。

「アタック時効果!!……………相手の場のスピリットかりザーブのコア2つをトラッシュに置き、回復!!」

「!」

「フレイドラモンのコア2つをトラッシュに置き回復!!……………よってフレイドラモンは消滅よ!!」

ー【フレイドラモン】(2??0) 消滅

ー【メタルガルルモン】(疲労??回復)

氷のブレスを放出するメタルガルルモン。フレイドラモンは炎の拳で迎撃しようとするも、炎ごとあつさり氷漬けにされ、堪らず爆散してしまった。

「メタルガルルモンはシイナ様にコアがある限りアタックし続ける!!……これで終わりです!!」

「ツ……ライフで受ける」

〈ライフ4??3〉シイナ

メタルガルルモンは頂点王シイナのライフを1つ噛み砕く。スピリットを全滅させられた挙句、ライフやコアまでもを失ったシイナ。

しかし、流石にやられっぱなしなわけではないか、いつものような爽やかで余裕のある表情を見せながらバーストを反転させて……

「残念だけど、そう簡単にはイカせない。ライフ減少後のバースト、私も絶甲氷盾だ!!」

「ライフ1つを回復。そしてアタックステップを強制終了」

〈ライフ3??4〉シイナ

汎用性の高い白の防御マジックを発動させる頂点王。その効果でメタルガルルモンにやられた分のライフを取り戻し、ついでのように猛吹雪も発生させ、エールのその後、攻撃を食い止めて見せた……………

「くっ……………やっぱりそう易々とは倒させてくれないか……………ターンエンドです」

手札：5

場：【メタルガルルモン】 LV3

【勇気の紋章】 LV2

【友情の紋章】 LV2

バースト：【無】

致し方なくそのターンを終えるエール。その瞬間に猛吹雪が止み、次は頂点王シイナのターンである……………

「ターン06」 シイナ

「メインステップ……それにしてもメタルガルルモン、やっぱめちやくちや強いな……ここはちよつと逃げるか……ネクサス、ディーアークを配置!!……リザーブのコアを有りつ丈このカードの上に乗せる!!」

ー「ディーアーク」LV2(8S)

シイナが配置したのは掌サイズの小さな機械。デジタルスピリットを操るテクノロジィがそこには凝縮されている。

彼女がリザーブのコアを全てそのディーアークに乗せたのは訳があり……

「メタルガルルモンはスピリットとリザーブのコア2つをトラッシュユに送って回復するけど、ネクサスのコアは取り除けないんだな……さらにバーストも再セットして、ターンエンドだよ」

手札：5

場：【ディーアーク】LV2
 バースト：【有】

様子見のつもりなのか、今回はネクサスの配置のみでそのターンを終える頂点王シイナ。それ程までにあのメタルガルルモンが強力なスピリットであるとも言えるが………

「ターン07」エール

「メインステップ……メタルガルルモンで連続アタックができないなら頭数を揃えるま
 でよ!!……第二のガルルモンとヤマトのガブモンを再召喚!!」

ー【ガルルモン】「2」LV2(2)BP5000
 ー【ヤマトのガブモン】LV1(1)BP3000

前のターンの連続進化により手札へと戻っていた紫の獣達がエールの場に揃う。

「ガブモンの召喚時効果!!……カードを4枚オープンして対象のカードを加えるわ!!」

当然のように発揮され、当然のように追加される手札。しかし、この何気ない行動がシイナの伏せていたバーストカードのトリガーであり……………

「その召喚時もらった!!……バースト発動、キングスコマンド!!」

「!!」

「バースト効果でカードを3枚引き、その後1枚捨てる……………そしてコストを払い追加効果!!……このターン、エールちゃんはコスト4以上のスピリットでアタックできない!!」

「くっ……………」

反転されたバーストの効果を遺憾なく発揮させる頂点王シイナ。それによりメタルガルルモンと第二のガルルモンの身動きが取れなくなってしまう。唯一動けるガブモンでアタックしても良いが、それだけではシイナの4つのライフは削り切れなくて

……………

「……………このターンはエンドです……………」

手札：4

場：【メタルガルルモン】LV3

【ガルルモン「2」】LV2

【ヤマトのガブモン】LV1

【勇気の紋章】LV1

【友情の紋章】LV2

バースト：【無】

動きを封殺され、そのターンをエンドとしてしまうエール。しかし今のこの状況は彼女の圧倒的優勢であり、頂点王シイナはメタルガルルモンの効果に苦戦していると言っても過言ではなかった……………

だが、それでもいつも余裕の表情を見せながらなんだかんだで勝利してしまうのが彼女と言う人間であり……………

「ターン08」シイナ

「メインステップ……ふふ、そんなじゃ少しだけ本気出しちゃおっかな〜」

「!!」

「ディーアークのLV2効果【カードスラッシュ】発揮!!…手札のデジタルスピリットを破棄する事で、そのカードのLV1BP以下のスピリットを破壊!!」

「なッ……!!?」

25の歳の女性とは思えない子供らしい無垢な表情を見せながらネクサスカードの効果を発揮するシイナ。そしてそのコストとしてトラッシュへと破棄されたのは「パイルドラモン」と「ギルモン」のカードであり……

「パイルドラモンのLV1BPは7000。ギルモンは3000。よってそれ以下のBPを持つガブモンとガルルモンは破壊させてもらうよ!!」

頑丈な甲虫の甲殻を持つ竜戦士パイルドラモンと、真紅の魔竜、成長期の姿ギルモンがシイナの場に現れたかと思えば、パイルドラモンは腰に備え付けられた二丁の機関銃を連射し、ギルモンは口内から炎の玉を吐き付け、それぞれエールのガルルモンとガブモンを破壊した。

その後、一時的に呼び出されていたのか、2体はその姿をゆつくりと消滅させていった。

「そして、本日三度目。ブイモンを召喚!!…ディーアークの効果でドロ、でもって召喚時効果もちゃんと使わせてもらおうよ!!」

1【ブイモン】LV1(1)BP2000

三たび現れるブイモン。その召喚時効果は又しても成功し、シイナは新たなカードを手札に加える。

そして今度は加えるだけでは終わらなくて……………

「ブイモンの追加効果、召喚時効果発揮後に2コストを支払い緑の成熟期スピリット、即ちステイングモンを召喚する!!」

「!!」

1【ステイングモン】LV2(3)BP8000

ブイモンの横に颯爽と現れたのは緑のスマートな昆虫戦士、ステイングモン。その召喚アタック時効果によりさり気なくコアが増える。

「さらに!!…デジタルブレイヴ、ズバモンを召喚してこのステイングモンに合体!!」
「デジタルブレイヴ!?!」

―【ステイングモン+ズバモン】LV2(4)BP11000

黄金の鎧を纏う小さな成長期のデジタルブレイヴ、ズバモンが現れ、ステイングモンと合体。ステイングモンの身体に自慢の甲殻に加えてズバモンの黄金の鎧が追加された。

「アタックステップ…ステイングモンでアタックしようか」

ステイングモンでアタックするシナ。効果で又してもさり気なくコアが増える。

エールの場合にはBP16000を誇るメタルガルルモンが存在する。それに対しそ

れ以下のBPを持つステイングモンでアタックするのは一見愚の骨頂に見えるが
.....

「ソウルコアを払いフラッシュ【煌臨】を發揮、対象はステイングモン!!」

「!?!」

「ステイングモンは6色の色を持つズバモンと合体している。よってコイツの条件も満たして………来い、デュークモン!!」

赤き輝きを纏うステイングモン。その中で姿形を大きく変えていく。そしてステイングモンだったソレはその輝きを力強く解き放つと………

ー【デュークモン+ズバモン】LV2(5)BP17000

白き鎧を装備し、赤いマントを靡かせる聖騎士型のデジタルスピリット、デュークモンに変わっていた。ズバモンとの合体の影響でその鎧はより刺々しくなっており、いつもの聖なる槍はビーム状のものへと切り替わっていた。

「で、出た……：シイナ様のエース、デュークモン……：！」

「ふふ、さあエールちゃんは残り3つのライフをこの私から守る事ができるのかな??
……：デュークモンの効果。トラッシュにあるギルモンのカードを手札に戻して回復」

ー【デュークモン+ズバモン】（疲労??回復）

エールをからかうような笑みを浮かべながらデュークモンのアタック時効果を発揮させるシイナ。これによりデュークモンはこのターンのみで2度のアタックを可能にした。

しかもメタルガルルモンのBPのそれを超えている。今度はエールが絶体絶命の状況に立たされてしまった……：……

……：かに見えた。

「フツ……：守りますよ、それも完璧に!!メタルガルルモンでブロック!!」

「？」

最強のカードバトラー頂点王を前にしてもいつになく自身に満ち溢れているエール。

メタルガルルモンがそんな彼女を守るべく迫り来るデュークモンに体当たりしていくが……………

やはり駄目か、デュークモンは強固な盾でメタルガルルモンの体当たりを止めると、それを難なく弾き返した。この時点で力の差は歴然。メタルガルルモンは破壊され、エールは敗北を喫してしまおう……………

だが、ここで負けじとエールは手札にあるあの最強のカードを引き抜いて……………

「見ててくださいいよシイナ様!!……………私の成長の証……………!!」

「成長の証?」

「ソウルコアを支払い【煌臨】発揮、対象はメタルガルルモン!!」

「ツ……………紫のオメガの究極体を煌臨対象に!」

既に究極体であるメタルガルルモンを対象としたエールの煌臨宣言。それだけでも十分驚愕に値するが、まだ信じられない事が続く。

今度はメタルガルルモンの左側にウオーグレイモンが上空から飛来して来た。赤と紫のオメガ、その究極体達は揃ったことによりさらに強い咆哮をあげる。

「煌臨スピリットはウォーグレイモンなのか??……いや違う……これは」

何かとんでもない存在が出てくる事を察するシイナを他所に、エールはあのスピリットの召喚向上を高らかに述べていく……

「右に友情、左に勇気!!……2つの勇姿重ね合う時、すべての闇穿つ英雄となる!!」

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは自身を模した腕のようなパーツに変化し、宙を舞う。そして光と共にそれらは混ざり合い、今こそ究極を超えた姿となって地上へと舞い戻る……

そのデジタルスピリットの名は……

「究極をも超えるデジタルスピリット、オメガモン!!」

┆【オメガモン】LV3(4)BP21000

現れたのはウォーグレイモンを模した左腕、メタルガルルモンを模した右腕を持つ白

き騎士型の超究極体デジタルスピリット、オメガモン。

元々センスのあったエールの感情が昂り、さらにそこに紫のオメガが加わり誕生した。正に絆を象徴する最強のデジタルスピリットだ。

「ツ……………ウオーグレイモンとメタルガルルモンが合体した!？」

「はいそうです!!…これが、これこそが今の私の全力、最強スピリット、オメガモンツ!!」

シイナがその凄まじき存在に驚愕する間もなくエールは「煌臨アタック時効果発揮!!」と高らかと声を張りオメガモンの効果を発揮させて……………

「このスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊してターンに一度回復する!!」

「ツ……………オメガモンのBPは21000……………て事は」

「当然、BP17000のデュークモンを破壊よ!!……………神獣の咆哮…ガルルキャノンツ!!」

メタルガルルモンを模したオメガモンの右腕から巨大な砲手が出現。オメガモンはそれを構え、デュークモン目掛けて派手にぶっ放す。

デュークモンはそれに直撃し、破壊……………
されるかと思われたが……………

「デュークモンが効果の対象になったそのタイミング、手札にある赤のブレイヴカード、グラニの効果!!」

「!!」

「これを1コスト支払い召喚!!…そうした時このターンの間デュークモンは効果破壊されない!!」

「なっ!?…………ガルルキャノンを防いだ!?!」

1【グラニ】LV1(1)BP6000

直撃の瞬間、デュークモンの前方に現れ、身代わりとなったのは真紅の身体を持つ飛行物体グラニ。弾幕には強いのか、ガルルキャノンの直撃でもその身体には傷一つ付かなくて……………

「だけど煌臨スピリットは煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ!!…

デュークモンとバトルしていたメタルガルルモンに煌臨したオメガモンはデュークモンとBPバトルを行わなければならない!!」

「!」

「行けオメガモン!!」

マントを翻し、ウォーグレイモンを模した左腕から聖騎士たる聖剣を発現させると、そのままデュークモンへと襲いかかるオメガモン。

デュークモンは迎撃すべく聖なる盾の中心部から極太のレーザーをオメガモンに向けて発射。しかしオメガモンはその聖剣でそれを斬り裂きながら凄まじい速度で接近。遂にデュークモン自身もその聖剣の一太刀を浴びてしまう。

流石にその痛みからは逃れられなかったか、デュークモンは力付き、倒れ爆散してしまふ。その際にデジタルブレイヴであるズバモンが逃げるように飛び出してきた。

「や………やった………シイナ様のデュークモンを倒した!!………この私が!!」

「あちやう………この私のデュークモンがやられるなんてね………にしても赤のオメガと紫のオメガが合体した究極を超えた存在オメガモンか………全く、昔から潜在能力はあると思っただけ、まさかここまで強いカードを進化させるなんて、凄いじゃないか

「……………」

「えへへ……………当然よッ!」

なんだかんだで憧れだった頂点王シイナに褒められ、頬を少し赤くしながらもそれを嬉しく思うエール。

実際凄まじかった。長年変わることのなかったオメガのカード達を進化させ、今の形を創り上げているのだから……………

エールはどうやら無自覚のようだが、これがどれだけ凄いことなのかは計り知れない。

「アタックできるスピリットは3体いるけど……………オメガモンがまだ動ける上に勇気の紋章が邪魔だ……………仕方ない、ここもターンエンドとしようかな」

手札：4

場：【ブイモン】LV1

【ズバモン】LV1

【グラニ】LV1

【ディーアーク】LV2

バースト：【無】

自信満々で呼び出したエースたるデジタルスピリット、デュークモンはあっさり返り討ちにされ、本当にエールにライフを守り抜かれたシイナ。妹的な存在だったエールの成長を嬉しく思いながらもそのターンをエンドとした。

次はエールのターンだ。デュークモンをも破ったオメガモンが再び動き出す。

「ターン09」エール

「メインステップ!!…今度はアンタの出番よ……来なさい、ウォーグレイモンツ!!」
「!!」

ー【ウォーグレイモン】LV1（1S）BP8000

エールの場合、オメガモンのすぐ左側に立ち上がる炎の柱。その中でそれを引き裂き現れたのは他でもない、エールのエースカード、鉤爪のような武器を持つ究極体のデジタルスピリット、ウォーグレイモンだ。オメガモンと並び高らかに咆哮を上げる。

「おおウオーグレイモンツ!!…メタルガルルモンとかオメガモンとかで見落としガチだったけど、エールちゃん遂に究極進化できるようになったんだね!!」

「残念ですけど、私なんか褒めてる暇ないですよ!!」

「!!」

「召喚時効果、BP合計15000まで好きなかだけ破壊!!…残った3体のスピリットを全て破壊する!!…大玉ガイアフオーズ!!」

昔から何故か究極進化が出来なくて苦勞したエールを思い出すシイナ。そんな彼女が今では己の手足のようになられていると思うとかなりの感動モノだが、

そんな干渉に浸る間もなくウオーグレイモンは両掌から巨大な火球を作り上げ、それを大きなモーションでシイナの場のスピリット達へと力強く投擲する。それは3体のスピリット全てに命中し、シイナの場を焼き尽くして見せた……………

「よし!!…行ける…アタックステップ!!…オメガモンでアタック!!」

エールの指示で再びオメガモンが動き出す。狙いは当然シイナの残り4つのライフ

だ。そしてそのオメガモンにはライフを一瞬にして破壊してしまう強力な技があつて
.....

「オメガモンは効果で回復!!……さらにフラッシュ!!……オメガモンは煌臨元になったコスト9のスピリットカードを破棄する事で、ライフ2つをフラッシュに送る!!」

「!!」

「煌臨元になったメタルガルルモンのカードを破棄し、効果適用!!……行くわよオメガモン……天下の豪剣……グレイソードツツ!!」

〈ライフ4??2〉シイナ

「おお……これはちよつと効いたな」

左手の豪剣に炎を灯し、シイナのライフへとそれを振るつたオメガモン。そのライフを一気に2つ葬り去つた。

「オメガモンはダブルシンボル!!……そしてシイナ様の場にプロツカーは0!!……これで終

わり!!」

完全に勢いに乗ったエール。確かにここまで来れば勝利への疑問は確信に変わってもおかしくない。

だが、やはりあの頂点王は甘くはない。シイナは眼前に迫るオメガモンを目に映しながら「仕方ないか」と口にし、手札のカードを切って……

「フラッシュマジック…デルタバリア!!」

「!!」

「これによりこのターンの間、コスト4以上のスピリットのアタックでも効果でもライフが0にならない……オメガモンのアタックは当然ライフで受けてあげるよ」

〈ライフ2?1〉シイナ

グレイソードでシイナのライフを斬り裂こうと試みるオメガモンであったが、結局その数を1より少なくできなかった。オメガモンは諦めてエールの場へと飛び戻った。

「くっ……!!」

「いや……今のは危なかったな……まさかデュークモンが破壊されるどころかデルタバリアまで切られるなんてね。でももうこのターンは無理でしょ」

「……………ターンエンドです」

手札：3

場：【オメガモン】LV3

【ウオーグレイモン】LV1

【勇気の紋章】LV1

【友情の紋章】LV2

バースト：【無】

デルタバリアの効力を無効にするためにはこのターンをエンドにするしか手はない。エールは致し方なくオメガモンとウオーグレイモンをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとした。

次はいよいよ追い込まれた頂点王シイナのターンだ。しかし、彼女は全く焦らずそのターンを進めていった……………

「ターン10」 シイナ

「メインステップ……ふむ。それじゃあここまで頑張ったエールちゃんのためにもう一体だけ私のエースを見せてあげよう」

「!?!」

一瞬聴き間違えたかと思った。

ただでさえ強いデュークモンをエースとしているシイナのデッキにさらにもう一体エースカードがあると言う。しかし、彼女がこの国最強の頂点王たる人物であるが故、その言葉にはとても信憑性と重みがあつて……

「来い皇帝竜インペリアルドラモン・ドラゴンモード!!」

「ツ!?!」

ー【インペリアルドラモン ドラゴンモード】LV2 (3) BP13000

シイナの場の上空から出現したのは背中に大砲、翼を持つ巨大なドラゴン。オメガモ

ンをも超えるサイズを持つそれは出現するなりエールのスピリット達を威嚇するように睨みつける……

「データーアークの効果でドロ……」

「これがシイナ様のもう一体のエース!?……た、確かに強そうだけどオメガモンよりB Pは下……ならまだ勝機はある」

「フン!!…別にオメガモンを倒してエールちゃんに勝とうとは思ってないよ!!」
「え?」

シイナはそこまで言う。「アタックステップ……い」と、徐に宣言してみせ……

「行けドラゴンモード!!……さらにこのフラッシュタイミング……ソウルコアを支払い再び【煌臨】を發揮。対象は言わずもがな、このドラゴンモード!!」

「ツ……シイナ様も究極体にさらなる煌臨を!」

突然のシイナの煌臨宣言。上空に激しい雷鳴を鳴り響かせる異次元の渦が現れたかと思うと、ドラゴンモードはそこに吸い込まれるように中へと向かい、姿形を大きく変

形させていく。

「インペリアルドラモン、モードチェンジ!!……現れよ、ファイターモードツツ!!」

ー【インペリアルドラモン ファイターモード】LV2(3) BPI5000

その異次元の渦から再び姿を見せたのはドラゴンモードではなく、竜型から人型へと形を変えたインペリアルドラモン。名をファイターモード。

「ファイターモード……これは進化じゃなくて姿の入れ替え??……まるでライダースピリットみたいな」

「さあシメるよ!!……ファイターモードの煌臨時効果、スピリットを10体疲労させる」「なツ!!」

「ウォーグレイモンとオメガモンを疲労!!……ポジトロンレーザー!!」

ー【ウォーグレイモン】(回復??)疲労)

ー【オメガモン】(回復??)疲労)

右腕に備え付けられた砲手から極太のレーザーを放つインペリアルドラモン・ファイターモード。ウォーグレイモンとオメガモンは咄嗟にそれをガードするも、膝をつくほどのダメージを受けてしまい、疲労状態となった。

「これでもうブロックはできない。攻撃は受けてもらおうよ」
「ッ……ライフで受ける!!」

〈ライフ3??2〉 エール

攻撃を防ぐ手段が無い。エールはそのアタックをライフで受けた。飛び立ったインペリアルドラモン・ファイターモードの拳の一撃が彼女のライフ1つを砕いた。

そしてこの瞬間、さらなる効果が起動してしまい……

「インペリアルドラモン・ファイターモードのもう1つの効果。相手のライフを減らした時、さらに2つのライフを破壊する……!!」

「なッ……2つ!!」

翼を広げ、上空に飛び立つファイターモード。そして腕にある砲手を胸部にあるドラゴンモードの頭部へと合体させると、そこから徐々にと膨大なエネルギーを溜めていき
.....

「行け、ファイターモード……超然の一撃……ギガデスツツ!!」

シイナの叫ぶ技名と共にエールのライフに向け、その膨大なエネルギーが溜まった巨大な弾丸を放つ。それは一直線に彼女の元へと飛び行き……

「ツツ……!!」

〈ライフ2??0〉エール

そのライフを木っ端微塵に破壊してみせる。エールのBパッドから敗北を告げるように「ピー……」と無機質な音が流れる。

ウォーグレイモンとオメガモンと言う強力なデジタルスピリットをエールの場に残

しながらも、頂点王シイナが勝利して見せた。

……………

「はあ……負けた……シイナ様強すぎ」

「ハツハツハ!!……そりやまあ頂点王だからね!!……因みに私はまだ実力の半分も出してないんだな」

「それはウソですね。多分8割くらい本気だったと思います」

「て、手厳しい……ま、まあ信じるか否かはエールちゃん次第なだけどさ」

バトルが終わり、楽しそうに談笑するエールとシイナ。

シイナは勝利こそしたが、妹に等しい存在であるエールの成長を誰よりも……いや、エレンの次くらいに喜んでいた。

「まあそれはさておき、リボンでも買いに行こうか」

「え?……なんでリボン?」

「だって私が勝ったからね!!……アスラの前で自分の身体にリボンを巻いて「私がプレゼ

ントよ!」って言ってよね!」

「なっ?!」

すっかり忘れてた。

そう言えばやったねそんな約束。

今思えばバカみたいだなって思うわ。あのバカスラの好みの女の子を知りたいがために頂点王に挑むなんて……

「し、シイナ様!!……ここはなんとか無効とかにできませんか!?!……もうめっちゃくちゃ嫌なんですけど!!」

「ええ……そうだな……よしじゃあ裸じゃなくて服の上からリボン巻いて良いよ」

「は、裸でやらせるつもりだったんですか!?!」

……

その後もなんだかんだあり、シイナとエールは買い物を済ませ、アスラとテンドウのいるライライ町の病院へと帰宅中だった。

もちろんリボン以外のモノもちゃんと買った。りんごとかそれっぽい果物とか色々。

「あつそうそう、アスラの好きな女の子のタイプだけど……私アイツが5歳になる年までしか一緒に暮らしてないからそこら辺はわからないんだよね」

「ええ!?……じゃあ騙したんですか!？」

帰り際、大量の買い物袋を手に脇に背負いながらシイナがエールにそう言って来た。シイナはエールにやる気を出させるためだけにウソをついていた。まあ結果としてはエールの成長した実力が見れて御の字だったのだが……

「いや〜……ごめんごめん!!……でもアイツはエールちゃんみたいな素直な子、好きだと思いますな〜!!」

「なあツ……アナタって人はまた……か、からわないでください!!」
「ハツハツハ!!……まあまあそう赤くなるなって!!」

顔から耳まで赤くするエール。

この自分よりも偉そうな女性には幼い頃からいつもいつも振り回されているが、それ

でもやはり一緒にいるのは楽しくて……………

そして夕暮れの時間帯。オレンジの光が病室に差し込む中、エールがアスラの病室に帰ってきた。もちろん頂点王シイナも一緒だ。

「今帰ったわよ」

「おおエール!!…お帰りイイイー!!……てかなんでシイナまでエエエー!？」

「頭しか動かせないくせに相変わらざるつさいわねアンタは」

「あつはは!!…久しぶりだねアスラ…随分とポロポロだ。また強くなったか？」

「おう!!…またシイナに、頂点王に一步近づいたぜ!!」

突然自分の親にも等しいシイナが現れて驚くアスラ。だが、育ての親にまたこうして会える事はやはり嬉しいか、笑顔を見せる。

「いや…テンドウさん途中でどつかいっちゃまってよく…話し相手がムエしかいなかった

たからなんか嬉しげく……てかエール。お兄様が探してたぞ」

「ああ、それなら会ったわよ。別に大した問題じゃなかったわ」

「むえ〜」

「なんか凄い既視感を感じるなこの犬」

テンドウは何やら仕事が入ってしまったらしく、アスラの病室を留守にしていた。それ故、アスラはそれなりの時間を「むえ」としか喋れないオレンジの謎の犬、ムエと一緒に過ごしていた。

「あのむさ苦しいテンドウのヤツがいなのは割と好都合な気がするな……よし、エールちゃん!!……今だ!!頑張れ!!」

「え……い、今ですか!?!」

「もち!!」

「ん?……何、何すんの?」

親指を上立てるシイナが言いたい事とはどのつまりプレゼントと言う名の自分を渡せと言う事だ。何をするのかわかっているエールは又しても顔を赤く染めてしまう

が、何が何だかわからないアスラは頭の上にある疑問符が取れない。

「そりやもう当然!!…今回頑張ったアスラにエールちゃんからの最高な贈り物だよ!!」
「ええ!?!…何、オレなんかもらえちゃうのかアアア!?!…なんか無駄にお金使わせてごめん!!」

わからないアスラに軽く説明を入れるシイナ。アスラは申し訳ないと思つて謝罪する。別に見返りは求めてないし、何なら自分のためと思つてやった事だ。ここまでされるとは思つてなかった。

が、当然嬉しくないわけではない。

「べ、別にいいわよ……お金なんて有りすぎて重たいだけだし」

「……………え、なにそれ……………リボン?」

エールはそう言いながら買い物より買ってきたプレゼント用リボンを取り出す。アスラはここで又しても疑問符が頭に立ち上がる。

そしてエールは恥ずかしそうにしながらも、それを適当に自分の身体に巻きつけた。

シイナはさらに「言って言って！」と、言葉を催促する。アスラの頭の上にはますます多くの疑問符が立ち上がった。

「ええつと……その、何て言うか……アンタが今回そんなになったのは私のせいだと思ってるから……」

「ん？……オレ別にオマエのせいとか思っていないけど」

「あ、アンタは良くても私はダメなの!!……それで、そ、その……わ、私がプレ、プレゼゼゼゼ……」

「私がプレゼントよ」と言いたいところだが、肝心なところでめちやくちや舌を噛むエール。恥ずかしさのあまり滑舌が回らないのだ。その後ろでシイナは既にご満悦のような表情を浮かべている。本当にこの頂点王は人が悪い。

するとそんな時だ。アスラが何かを思い出したように「あ、そうだ」と呟いたのは……

「そう言えばよ、オレもオマエにプレゼントあつたんだ」

「へ？」

「えーっつと、どこに閉まってたかな……………お、あつたあつた!!」

そう言いながら、アスラは包帯の隙間から小さなブローチをエールの前に出した。星の形をしていて、色が赤い。

突然の事にエールは驚きが隠せず、開いた口が塞がらなかった。

「なあッ……………こ、これどうしたのよ……………」

「ん?…ほら、テンドウさんと冬服買いにオウドウ都のデツカイ店行った時にさ、オレ、オマエからお金借りたじゃん?…そのお返し」

「いつ!?…いつ買ったの!」

「ライライ町のテーマパークたる所でオマエが機嫌を損ねた時」

アスラと言う人間はなんとも義理人情に熱い男だ。あの時のエールはお金を貸したのではなく、あげたのだ。別に返してもらおうと思っていなかった。

コモン故に貧乏な生活を続けていたアスラの事だ。きつと頑張って余らせたお金で買ったな違いはない。そう思うとエールは凄く嬉しくて……………

「いや〜……渡しそびれてたけど、なんとか思い出せて良かったぜ〜…ワツハツハ!!」
「あ、ありがとう……大事にするわ……!!」

(……………おお、アンタもプレゼント用意しようとしてたとはやるじゃんアスラ!!……ぶっちゃけ今まで鈍感天然たらしだと思ってたけど、流星は私の自慢の息子!!)

「……で、オマエからのプレゼントってなんだ?」

「へ?」

ギクツと、心の中でそんな音が響いてきたような気がしたエール。

こんな素晴らしいプレゼントを好きな男の子から貰えたのだ。今更リボンを巻いた私がプレゼントとは口が裂けても言えない。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「え、えー……つと……それは………ハツ!」

咄嗟に閃いたエール。身体中に巻いていたリボンを脱ぎ捨てると、買い物袋から真っ赤に染まったリングゴを取り出すと……

「これよ!!」

「おお!!リンゴか!!…流石エール、気が利くな〜」

「フン…当然、私はエックスよ」

(まあこれはしようがないよね〜…今日は私が悪かったよ、ごめんねエールちゃん)

食べ物で誤魔化す作戦に出た。普通ならばさつきまで存在していたリボンの意味が分からず混乱するであろう。しかしアスラはバカすぎてリボンのことなんてすっかり忘れてしまっている。

エールの気持ちを汲んだとは言え、2人を無理矢理くっつけようとしたシイナはその様子を見て内心でとても反省した。

「って言うかオレ今こんなだし、どうやってリンゴ食おう?」

「ツ…:…:しよ、しようがないわね!!…私が皮を切って食べさせてあげるわよ!!」

「おおマジ!!…サンキューな!!」

(な、成る程!!…その手があったかー!!…これはナイスだエールちゃん!!…切ったリンゴをアスラに「あ〜ん」して食べさせてあげればきつと2人の距離はもつと縮まってくる!!)

包帯で身体中をグルグル巻きにされ、芋虫状態のアスラはリンゴを食べられない。エールがリンゴを購入した時に一緒にいた小包丁を取り出し、皮を剥き始める……

シイナは感動していた。めちやくちやナイスな考えだと思っていた。しかし……

「……って言うかオマエリンゴの皮剥けたんだな!!」

「は?」

「いや……オマエって何て言うか、ガサツそうって言うか不器用そうって言うかさ……なんか女の子っぽい事できないイメーজだったんだよな!!」

「ちよ、ちよつとアスラ……そ、その辺にした方が……」

デリカシーの欠落したアスラの発言。エールは当然腹を立てる。何とかしてこの急激に悪くなった流れをとめたいシイナは制止を促す声を施すが、聞き取れないのか、アスラはさらに口を動かして……

「だってオマエめっちゃ力強いじゃん!……何回もオレをぶっ飛ばすしさ……ゴリラでも

んやかんやあつたが、やっぱり彼から貰えたプレゼントは嬉しかったようだ。

30コア「テンドウ・ヒロミの1日」

ここはオウドウ都。この国の中心都市であり、エックスの身分を持つ者達や三王、頂点王など、とにかく有力者達が一堂に集っている。

そんな中心都市、オウドウ都のさらに中心にある三王塔にて、三王の一人、テンドウ・ヒロミはある来客に対応していた。

正直なところその人物は面倒が臭いのか、ふてぶてしい表情をしながらタバコを吸っている事から、それが流暢に現れている。

「と、言うわけでテンドウ。儂ちゃんが開発したこの『異世界転送装置（仮）』を使わらんかーい！」

「何がと言うわけでだ。誰が使うかこのマッドサイエンスジジイ」

テンドウの来客は白くてくたびれた髭や髪、そして白衣が特徴的な年老いた男性。テンドウの言う通り、見た目は如何にもマッドサイエティスト。裏で怪しい発明をしていると言われたら信じられてもおかしくないような見た目をしている………いや、実

際しているのだが……

そんな彼がBパッドよりも小さいスイッチのようなものを手にしながら、それをテンドウに使えと気が抜けるような呑気な声で催促していた。

「まあまあ、そう言わずにさ……この間オウドウ都にやつて来た可愛いらしい2人の異世界人。その娘らが持つてた七罪竜とか言う妙なカードをお借りして、儂ちゃんがちよいのちよいで作り上げたんじやよ……信用せえ」

「だからできねえんだよ。ぶつ殺されてーのか白髭くたびれジジイ」

この来客は『ネコガイ又博士』と呼ばれるオウドウ都専任の開発者。街の構造やバトルにとつては欠かせないBパッドの開発までを担当している意外と凄い人物。

テンドウとはどうやら古い付き合いらしく、新しい発明をした際は先ず真つ先に彼の元へ行くのが彼の生活の一貫だった。そしてテンドウは毎度毎度その発明とやらのせいで酷い目に遭つて来ている。

しかも今回は『異世界転送装置』と言う名前からしてすごい物騒な代物であるのは間違いない。テンドウは意地でも関わりたくなかった。

「よく考えて見ろよテンドウく……今回の件で世界には様々な種類がある事を知った。つまり」

「つまり、なんだよ？」

「つーまーりー……この世にはまだ良い乳の娘がたくさんおるっちゅう事じゃろーなっはっはっは!!」

「完全に色欲に飲まれてんじゃねえか!!」

完全に頭がどつかいっっちゃつてるネコガイヌ博士。これでこの国の重要人物なのが少し腹が立つし、何よりの疑問だ。

「てか、そんなに乳のデカい女に会いたいなら自分で使えやこのエロジジイ。勝手に人を巻き込むんじゃねえ」

「バカ者く……異世界じゃよ異世界!!……何が起こるかわからんから三王のオマエをモルモットにしようと思っただんじやろが……い!」

「呑気な声でサラツと腹立つ事言うよなテメエ」

いい年こいて美女をはべらかしたいネコガイヌ博士。実はこの間不本意ながらオウ

ドウ都にやって来た金髪の少女と胸が大きな紫髪の少女の写真をこっそり隠し持っていたりする。

「ぶつちやけどこの世界に着くかわからないけど取り敢えずBパッドの外装に使う鉄とか取ってこい。この装置もまだ完全じゃないからの」

「おい。行く前提かよ。つか、やっぱまだ完成してねえんじゃねえか。信用できるかっての」

「ほんじや行くぞテンドウ」

「ツ……お、おい無視すんな。ちよつとま」

「ポチツとな」

「ツ!？」

勝手に話を進めた挙句、異世界転送装置たるスイッチをテンドウに向けて押したネコガイヌ博士。テンドウの身体はたちまち粒子と化してこの世界から消滅して行った。

「ほええええええ!!…やつぞい!!…実験は大成功じゃ!!…そんじや頑張れよテンドウ」

実験は大成功したと諸手を挙げて大喜びするネコガイヌ博士。スイッチー1つで人間一人を異世界に飛ばしてしまう装置を開発した彼はまさに天才博士と言えよう。

ただやはりそのテンドウ以上にマイペースすぎる性格にはどうしても難があるが
………

ここはアスラ達の住う世界とは全く違う世界。

文化も町並みも、人の在り方も、そして何よりバトスピもこの世界とアスラ達の世界とは全く異なるのだ。

これはそんな世界にある統一国家『真』^{しん}と呼ばれる国で起きた少し変わった出来事。

……………

ここは統一国家『真』にある職人街と呼ばれる場所。様々な職人達が今日も各々得意とする物を作り上げている。

そんな中、包丁を打っては研ぎ、打っては研ぎを繰り返す青年がいた。その名も鉄生^{てっしょう}。この辺ではとても有名な職人だ。彼の打った包丁はかなりの業物である事で知られている。

「ふうー……まあこんなもんかな」

数十回と繰り返して来た作業にようやく片が付いたか、鉄生はその出来栄を確認し終えると、一息入れるように肩の力を緩めた。

さすが何やら手が錆や鉄粉で汚れていることに気がついた。当然だ。何せ休まずに包丁を打っていたのだから。休みがてらそれを落とすために洗面所に向かった。

「……………暇だね……………実に暇だ。包丁を打っては研ぐ毎日。バトルの相手もアイツしかない……………はあく……………なんかこうもつと馬鹿げた事件とか起きねえかな」

鉄生はこの生活に退屈していた。

この世界にもバトスピはある。しかし、この世界においてバトスピカードとどれも希少価値のあるたいへん高価な物なのだ。自分は持っていても他の人達はそんな高価な

物に手を出すわけもなく食料や生活費に当てている。

自分と対戦できるのは精々知り合いのあの脳筋貴族女だけだ。

しかし、この彼の言葉をどこかで神が耳にしていたのか、その馬鹿げた事件が発生する……………

鉄生の目の前に何の前触れもなく瞬間移動のようにあのテンドウ・ヒロミが現れて……………

「……………」

「……………え?」

一瞬のうちに目が合う2人だったが、鉄生はこの訳のわからない状況に目眩を覚え、テンドウはネコガイヌ博士の強引なやり方に腹を立てているのか怪訝な表情を浮かべていて……………

「誰だオマエ……………取り敢えず殺していい?」

「えええええ!!」

オマエこそ誰だと言い返したい鉄生だったが、そのテンドウの如何にもと言った悪人ヅラを見たら怖くて何も言い返せなかった。

これがこの2人の最初の出会い。それはとても最悪な出会いだった。

……………

「……………で、あんたはそのくたびれた博士とやらに無理矢理この世界に飛ばされたと……………」

「ああ、たくつ、あのクソジジイ。今度あつたら覚悟してろよ」

くたびれたのはオマエもだろと思つた鉄生だったが、殺されそうだからその言葉も頭の中に保存しておく。

大方の事情を聞く限り、どうやらこの男はこことは違う別の世界から来たらしいが、そんな話にはわかには信じ難かった。しかしあの急に出現したのはどう考えてもただ事ではないため、今はその話を信じざるを得なかった。

「……………つて言うかここはどこだ」

「どこつて、そりゃ統一国家『真』の職人街だけど」

「ふくん。聞いた事ねえ……………やっぱ異世界なんだな……………まあ興味ないけど」

「興味ないなら聞くなよ」

「ああ!?!……………何オレに歯向かってんの鍛冶屋小僧。オレこう見えて向こうの世界じゃ一級品のカードバトラーよ?」

「(ぎ)めんなさい……………」

どこかのマフィアのボスのような顔つきのテンドウに物怖じする鉄生。未だかつてこんな理不尽な人間がいたのだろうかと思いを脳裏を探る。

正直迷惑なのはこっちの方なのだ。自分で退屈だと思っていてなんだが、早くこんな面倒事は終わらせたいのだ。

「……………て、あんたもカードバトラーなのか!?!」

「あ?……………それがなんだよ」

そんな時、彼の言葉から鉄生はテンドウもカードバトラーである事に気がついた。老

若男女問わずカードバトラーで溢れかえっている世界で過ごしているテンドウからしたら先ず聞かれることはない意外な質問であった。

どこの世界のどこの変人かは知らないが、カードバトラーと言うのであればやってもらうのはたつたーっだ。

「だったら俺とバトスピしないか!?…俺周囲にバトスピやつてる奴ほとんどいなくてさ
」

「ああそう。可哀想だな」

鉄生の事情はどうでもいいのか、顔の表情をピクリとも動かさずにそう言ったテンドウ。どう考えても可哀想と思っではないだろう。

しかし、彼とて異世界人のバトスピに興味がないわけではなくて……

「別にやってやっても良いけどよ。ただってのは面白くねえな……」

「ッ!？」

何やらバトスピで賭け事をしようとして来るのがわかる。理不尽極まりない彼の事

だ。きつととんでもないモノを賭けさせるに違いないと思う鉄生だったが……………

「……………ここは鍛冶屋だ。何か失敗作でもあつたらくれ。ウチのくたびれジジイが鉄を欲しがっててな〜」

「……………え」

そんなモノでいいのかと思つた鉄生。もつと大事なモノ……………例えばカードとか命とかを賭ける物だと思つていた。しかも売り物ではなくリサイクルする事しかできない失敗作を要求して来る辺り微妙に優しい。

「因みにオレが負けたらこのデツキあげる」

「ツ!？」

「因みにオマエにこのバトルを拒否する権利は無い」

「ええええええ!？」

堂々と己のデツキを鉄生に差し向けるテンドウ。鉄生は内心で思わず「価値が合わないだろ!？」と勘ぐつてしまう。

それもそのはず、自分の失敗作とバトスピカード……それもその束を賭け事に出されたのだから。この世界においてのバトスピカードの価値観を知らない事もあるだろうがいくらなんでもこれはやり過ぎだ。

「い、いやいくらなんでもそれは……………」

「オレが良いと言ったら良いんだよ。いいからついて来やがれ鍛冶屋小僧。バトルするにはここは狭すぎる」

「え?」

バトルするなら別にここでも良いのにとと思う鉄生だったが、逆らえば命は無いため、渋々彼の後ろを歩いて行った。

そしてテンドウは近場の広場にて足を止めると……………

「ほれ」

「!？」

テンドウは鉄生にバトスピ用端末Bパッドを鉄生に軽く投げつける。突然の事に鉄

生は慌てふためきながらもそれをキャッチした。異世界の人間である彼が当然その端末の存在を知っているわけがなくて……………

「え?……………これなんですか?」

「Bパッドに決まってるんだろ。殺すぞ」

「えええええ!!」

「……………オレらの世界にある端末だ。横にあるボタン押しな」

「……………ここか?……………うわっ!」

鉄生がBパッドのボタンを押すと、その端末は展開し、バトル台を形成した。鉄生はこの小さな端末に注ぎ込まれている凄まじい技術力を肌で感じていて……………

「と、言うわけでこれ使ってバトルするぞ……………デッキをセットしな」

「ッ……………は、はい」

テンドウも自身のBパッドを展開すると、鉄生にそう催促した。

お互いのデッキがBパッドにセットされ、準備は万端。いよいよバトルスピリッツが

始まる。

「よし。そんじや始めるか」

……………ゲートオープン、界放!!

三王テンドウ・ヒロミと、統一国家真の職人街に住む鍛冶屋の青年鉄生のバトルスピーリッツが幕を開けた。

先行はテンドウだ。タバコに火をつけ、それを口に加えた後にそのターンシークエンスを行った。

「ターン01」テンドウ

「メインステツプ……………ほんじや先ずは手始めに……………カプトエクステンダーを配置してエンドだ」

ー【カプトエクステンダー】LV1

「ツ……バトルフィールドじゃないのにカードが出た!？」

「やっぱそつちとこつちじゃバトスピの文化は結構違うみたいだな。まあ、気にすんな、今ので大体分かっただろ。こう言うことする機械なんだよ」

テンドウの横に現れる赤いバイク。その様子に驚く鉄生。自分たちの世界にも確かにこう言った事ができる場所はあるが、どここの場所でも実体化させる機械があるのは聞いた事がなかった。

「つーわけでさっさと自分のターン進めろや鍛冶屋小僧」

「鍛冶屋小僧じゃない。俺の名は鉄生だ!!」

「そ」

凄くどうでもよさそうに鉄生の自己紹介を受け流すテンドウ。彼は基本的に認め的人物以外は名前では呼ばない。現にアスラも未だに「小僧」と呼ばれている。

「ターン02」鉄生

「メインステップ、俺は創界神ヘファイトスを配置……!!」
「!!」

―【創界神ヘファイトス】LVI―

鉄生の背後に黒い巨人が現れたかと思えば、それは所謂造り物だったのか、半分に割れ、中から褐色肌で青髪の少年が姿を見せる。

その名は創界神ヘファイトス。世にも珍しい神のカードだ。テンドウはタバコを手にとり、口から煙を出しながらその感想を流暢に述べる。

「知らねーカード……つーかさっきのデケエオツサン誰？」

「神託の効果!!……デッキからカードを3枚落とす、その中の対象カード1枚につきコアを1つ追加!!」

テンドウの感想を無視しながら効果を進める鉄生。彼のデッキが3枚トラッシュへと落とされるが、その中のカードは全て対象圏内、しかも全て同じカードであり……

「へっ……運が良いんだか悪いんだか……対象カードは3枚。よつてヘファイトスにコアを3つ追加!!…そして今トラッシュに落ちた3枚のタイガーアイ・ゴレムの効果!!…ヘファイトスの効果でトラッシュへ落とされた時、そこからノーコスト召喚できる!!」

「!!」

- ー [タイガーアイ・ゴレム] L V 1 (1) B P 4 0 0 0
- ー [タイガーアイ・ゴレム] L V 1 (1) B P 4 0 0 0
- ー [タイガーアイ・ゴレム] L V 1 (1) B P 4 0 0 0

「さらにこの召喚でヘファイトスにさらにコアを3つ追加する」

鉄生の場に虎のような鋭い眼光を持つ黄金のゴレムが一気に3体出現する。ヘファイトスの上に置かれているコアもこれに伴い一気に6つとなった。

タバコを啜え直し、余裕ぶっこいているテンドウ。しかし、この時点である程度異世界のバトルの実力がそれなりに高い事を理解していて……

「アタックは無し。このターンはエンドだ」

手札：4

場：【タイガーアイ・ゴレム】LV1

【タイガーアイ・ゴレム】LV1

【タイガーアイ・ゴレム】LV1

【創界神へフアイトス】LV1

バースト：【無】

(……3体のスピリットを並べたにもかかわらず攻めないか………つー事はこいつもオレと同じワンキル型か)

折角3体ものスピリットを並べたにもかかわらず、攻勢に回らない鉄生を見て何となく彼がワンキル型のデッキを使用している事に勘付いたテンドウ。

そしてその勘は的中しており、鉄生はテンドウに無駄にコアを与えないために3体のタイガーアイ・ゴレムを防御に回したのだ。

「成る程。面倒だがオマエとは少し本気で相手してやるよ」

「ふっ…ああ、来やがれよおっさん!!」

「誰がおっさんだこらあ……オレは29だ。殺すぞ」

「えええええ!?……」

老け顔な見た目のせいで鉄生におっさん呼ばわりされて腹を立てるテンドウ。
そしてそんな彼のターンが再び幕を開けて……………

「ターン03」テンドウ

「メインステップ、オレは仮面ライダーカブト マスクドフォームを召喚……………ん
?」

テンドウはいつものスピリット。カブトのマスクドフォームのカードをBパッドに
叩きつけるが、何故だかそのカードは弾かれてしまい、彼の手札に戻っていく。

その現象を鉄生は説明して……………

「何のカードかわからないけどそいつ、召喚時効果を持つてるな。タイガーアイ・ゴレム

の効果であんたは召喚時効果を持つスピリットを召喚する時に1コスト余分に払わないと召喚できない。そしてそれが3体。つまりコアが足りないんだよ!!」

「ふーん」

マスクドフォームのコストは3。ネクサスで軽減で2。だけれどもそこでタイガーアイ・ゴレム3体分のコストがのしかかり、結果的に召喚コストは5。リザーブの数も5。上に乗せれるコアがないため召喚ができない。そう言う仕組みだ。テンドウはドヤ顔で説明して来た鉄生にどうしてもよさそうに受け流した。

「なら仕方ねえ。バーストをセット……さらにオレはこいつに変身する」

「!？」

「……………変身……………!!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

テンドウの腰にベルトが巻かれ、そこに赤いカブトムシ型のメカが装着される。そしてテンドウは掛け声と共に赤きライダースピリット、仮面ライダーカブトに変身した。

「……………変身……………見たことねえ……………それも創界神なのか？」

「まあ、カテゴリーはそうだな……………神託の効果でカードを落とす」

対象カードは2枚。よつて仮面ライダーカブトとなったテンドウ自身にコアが2つ追加される。

「さらに2枚目のカブトエクステンダーをLV2で配置……………これでエンドだ」

手札：2

場：【カブトエクステンダー】LV2

【カブトエクステンダー】LV1

【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

バースト：【有】

テンドウもここは攻めずにそのターンを終えた。本気を出した彼も終盤になったら一気に攻めるタイプなためだろう。言わば攻めに行くための準備期間と言える。

「ターン04」鉄生

「メインステツプ、凄いモノ見たな……でも俺のカードはもつと凄いで!!……神話ブレイヴ、人造神剣へファイトスを創界神へファイトスに直接合体!!」

「ツ……創界神ネクサスにブレイヴを合体」

ー【創界神へファイトス＋人造神剣へファイトス】LV1（7）

人によって造作された神の剣が天より鉄生の背後に突き刺さる。へファイトスが再び黒い巨人の中に籠り、それを動かすと、その黒い巨人の拳でそれを握った。

神話ブレイヴ……それはテンドウにはあまり聴き慣れないカードであって……

「んで、それでどうすんの?」

「ちよつと気づいた事がある。あんたと俺のデッキはちよいと似てる……溜めて溜めてドーンなタイプだろ?」

「説明下手かよ……けどまあ、そうだな」

「へっ……だったら誰かが殴らないと試合が動かない!!……バーストをセットしてアタツ

クステップ、行けタイガーアイ・ゴレム!!」

試合を動かしに来た鉄生がテンドウにアタックを仕掛ける。タイガーアイ・ゴレムは彼のライフを狙って走り行く。

だが、テンドウにはこれを防ぐ手段が無くて……

「ライフだ」

〈ライフ5??4〉テンドウ

タイガーアイ・ゴレムの黄金の拳がテンドウのライフ1つを破壊した。これで先制点は鉄生となるが、それでも有利に立ったとは言えない。テンドウは伏せていたバーストカードに目をやると、すぐさまそれを反転させた……………

「ライフ減少によりバースト発動……第二の仮面ライダーカブト ライダーフォーム」

「!?!」

「効果によりBP10000以下のスピリットを3体破壊しつつ召喚……………消え失せ

な、金ピカ鉄人形!!」

ー【仮面ライダーカブト ライダーフォーム「2」】LV1（1）BP5000

テンドウのバーストが反転した直後、赤い何かが目で追えないほどの凄まじい速さで3体のタイガーアイ・ゴレムを蹴散らした。

その正体は赤きライダースピリット、仮面ライダーカブトのライダーフォーム。そして走り終えたそれは人差し指を天に掲げ、かっこつけていた。

「残念、安直だったな」

「3体のタイガーアイ・ゴレムを一瞬で……でも良いや。折角のmana以外の相手だ。相手のデツキを回さなきゃつまらない」

「mana?…誰それオマエの女?」

兎に角スピリットを全て失った鉄生はそのターンを終える。次はテンドウのターン、そのターンシークエンスを進めて行った。

「ターン05」 テンドウ

「メインステツプ……ようやく召喚できるぜ。来い、仮面ライダーカブトマスクドフォーム」

ー【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】LV1(1)BP3000

前のターンでは召喚出来なかったが、重厚な鎧を見に纏ったライダースピリット、カブトのマスクドフォームが姿を見せる。そして本来であればその召喚時効果が発揮されるのだが……

「そいつがさっきの奴か!!……でも創界神ヘファイトスの効果でその効果は無効!!」
「!!」

そう。創界神ヘファイトスを中心とした造兵デッキはとことん召喚時効果を持つスピリットを潰す事ができる。

そんなヘファイトスの前では召喚時効果は無意味なのだ。

「たくつ……一々感に触るヤツだ。嫌がらせしかない男は女に嫌われるぜ？」

「これは俺のデッキの特徴だ、しようがねえだろ!!」

「マジック、ジユライドロー。赤のシンボルが4つあるから3枚引くぜ」

「聞けよ!!」

鉄生のカードにより思い通り動く事ができないテンドウ。軽くイライラを溜めながらも、増えた手札を見て作戦を立て直す。

「オレも合体と行くか。カプトクナイガンで第二のカプトライダーフォームに合体」

1 [仮面ライダーカプト ライダーフォーム「2」+カプトクナイガン] LV1 (1)
BP8000

銃やクナイなど、多機能を誇る高性能武器、カプトクナイガンは片手で強く握り締める。

「そんじやアタックステップ。その開始時にネクサス、カプトエクステンダーの効果。トラッシュユにあるコア2つをカプトに置く。それが2つ分、つまり4つを呼び戻す!!」

V 1?? 3
1【仮面ライダーカプト ライダーフォーム「2」+カプトクナイガン】(1?? 5) L

トラッシュユにある4つのコアがカプトのライダーフォームに舞い戻り、そのLVが急上昇した。

「アタックステップ継続。言って来いやライダーフォーム……!!」

カプトクナイガンを手を鉄生のライフ目掛けて走り出すライダーフォーム。カプトクナイガンの効果で又してもコアがトラッシュユより蘇る。

「カプトクナイガンの合体時効果でさらにトラッシュユからコアを戻し、ライダーフォームに赤のシンボル1つを追加する」

「ツ……ダブルシンボルって事かよ!?!」

専用武器であるカブトクナイガン。カブトであればどのスピリットでも強力なアタッカーに仕立て上げる代物だ。

鉄生はこの強力なアタックをかわす術はなく……

「ライフだ!!……ッ」

〈ライフ5??3〉鉄生

カブトクナイガンのクナイモードで振るったカブトの一撃が鉄生のライフを一気に2つ斬り裂く。

ライフの差を逆転されてしまうものの、鉄生も怯みはしない。負けじと伏せていたバーストカードへと目を向けると……

「こつちもライフ減少時のバースト!!……選ばれし探索者アレックス!!」

「!!」

「コイツを召喚。その後ドロし、アタックステップを強制終了させる!!」

1 【選ばれし探索者アレックス】LV2(2) BP8000

鉄生の伏せられていたバーストカードが勢い良く反転すると共に現れたのは紫色のフードを深く被った人型のスピリット、選ばれし探索者アレックス。

その効果でテンドウのアタックステップは強制終了となった。

「どうした!!…あんたも溜めて溜めて一気に仕掛けるタイプなんだろ!!…こんなやり方は性に合わないはずだ!!」

「いや、それなかったらこのターンで決める気だったんだけどな……まあ良いや、エンド」

手札：4

場：【仮面ライダーカブトライダークナイフォーム「2」+カブトクナイガン】LV3

【仮面ライダーカブト マスクドフォーム】LV1

【カブトエクステンダー】LV1

【カブトエクステンダー】LV1

【変身!!仮面ライダーカブト】LV2

バースト：【無】

鉄生はまだ知らないが、アレックスが無ければ変身のカブトの効果を駆使され、このターンで実はライフ5つを破壊されていた。

テンドウは「まあ上手いかなん事もあるか」と口にし、致し方なくそのターンをエンドとした。

「ターン06」鉄生

「メインステップ……よし、行くぞ」

「……ん？……なんか出すの？」

テンドウは三王としてのこれまでのこれまでの経験から鉄生が今から自身のデッキの最強カードを呼び出す事を何となく見抜く。

そしてそれは見事に的中。鉄生は準備は万端だと言わんばかりに手札のそれをBパッドに叩きつけた。

「蒼き鉄の巨人は全てを破壊する！『蒼造炉神ヴァルカン・ゴレム』を召喚だ！」

ー【蒼造炉神ヴァルカン・ゴレム】LV2（3）BP11000

地響き共にも地中から鉄生の場に現れたのは青きゴレム。ヘファイトスの化神とも呼ばれる存在、ヴァルカン・ゴレム。鉄生のデッキのエースカードでもある。

その迫力から発せられる強力なプレッシャーは周辺の空間を歪ませる程であり

……

「おお、やっぱデカいなヴァルカン・ゴレムは……」

「ふーん。つーかオマエ、さっきの蒼き巨人は全てを破壊するって何？……自分で考えたの？……ププー」

「笑うな!!……そこツツコムとこじやない!!」

まさかの召喚口上を笑い出すテンドウ。鉄生は少しだけ顔を赤くしながらもメインステツプを続行して……

「ヘファイトスに合体している神話ブレイヴ、人造神剣ヘファイトスをヴァルカン・ゴレムに付け替える!!」

ー【蒼造炉神ヴァルカン・ゴレム＋人造神剣ヘファイトス】LV2（3）BP160
00

ヘファイトスが神剣を空に向かって投げると、ヴァルカン・ゴレムはゴレムらしい太い手でそれを強く握り締め、強力な合体スピリットと化した。

「もう一度バーストを伏せてアタックステップ!!……合体したヴァルカン・ゴレムでアタック!!……そしてその効果、【解放】を發揮!!」

「!!」

ヴァルカン・ゴレムで攻撃を仕掛ける鉄生。そしてその効果を遺憾なく發揮させる。

「ヴァルカン・ゴレムはヘファイトスのコア2つを自身に置く事で神話ブレイヴの数プラス1枚、敵のデッキをオープンする」

「!?」

ヘファイトスのコアの一部がヴァルカン・ゴレムに移動。その際にLVが上昇すると同時に行われたのはテンドウのデッキのオープン。今回は人造神剣ヘファイトスが場にあるため、2枚のカードが2人の目に映った。

「さあ、そのカードの種類はなんだ!!」

「……………2枚ともスピリットだ」

「へっ……………だったら今回はそいつらはデッキの下に戻し、ヴァルカン・ゴレムに青のシンボルを2つ追加する!!」

「ッ……………4点のクアドラプルシンボルか…!!」

ヘファイトスの化神にして鉄生のエースカード、ヴァルカン・ゴレムは自身の効果でオープンされたスピリットの枚数1枚につき1つのシンボルを増やす。そして今回のアタックでは合体しているのもあって、一度に4つものライフを破壊するクアドラプルシンボルとなったのだ。

「まだだ、まだヴァルカン・ゴレムの効果は終わらない!!……アタック時、コスト10まで好きなだけスピリットを破壊する!!」

「!!」

「オマエの合体スピリットを破壊!!」

ヴァルカン・ゴレムの神剣を振るう一撃がテンドウの場のライダーフォームを襲う。ライダーフォームは呆気なく破壊され、合体していたカブトクナイガンは爆風と共に上空へと飛ばされてしまう。

「そして!!……人造神剣へファイテスの効果!!……コスト6以下のスピリット1体を破壊してコアブースト!!……残ったブレイヴを破壊」

「!」

神剣の二連撃を振るうヴァルカン・ゴレム。今度は上空に飛ばされたカブトクナイガンが木っ端微塵に砕け散った。これで一気に優位性は鉄生が強引にもぎ取ったが

……

「オレにはまだブロックできるマスクドフォームがある、そっち破壊した方が良かったんじゃない?」

そう。テンドウの場にはまだブロックできるスピリットがいる。いくら4点のクアドラプルシンボルのアタックとは言え、ブロックされて仕舞えば意味はない。

しかし、彼が何の計画も無しにブロックカーを残すわけがなかった。鼻で笑うと創界神へフアイトスの効果を発揮させる。

「それは計算済みだ!!…創界神へフアイトスの【ゴッドスキル神技】の効果!!…ターンに一度、自身のコア3つをボイドに置く事でヴァルカン・ゴレムを回復!!…さらにブロックされなくなる!!」

「!!」

―【創界神へフアイトス】(6??3)

―【蒼造炉神ヴァルカン・ゴレム+人造神剣へフアイトス】(疲労??回復)

へフアイトスの効果を得、疲労状態から回復状態となるヴァルカン・ゴレム。この

ターンは少なくとも二度の攻撃が可能となった。これでテンドウのマスクドフォームなどいようがいまいがどちらにせよライフを破壊する事が可能となった。

優勢な状況から一気に逆転され不利な状況に陥ったテンドウ。しかし、彼の表情からは何故か笑みが溢れており……………

「成る程、やるじゃねえか鍛冶屋小僧!!……………前のターンで鎌掛けた甲斐があつたぜ!!
……………フラツシユマジック、リミテッドバリア!!」
「!?!」

鉄生の實力を認めたのか、初めて彼の前で笑ったテンドウは手札の防御マジックを引き抜く。それは弱小スピリットよりも強力なスピリットの方がライフを破壊できなくなる不思議なカードだ。

「この効果によりこのターン、オレのライフはコスト4以上のスピリットのアタックじゃ減らん」

へライフ4??4へテンドウ

何度も何度もテンドウのライフに神剣を振るうヴァルカン・ゴレム。だが、そんな彼のライフには傷一つ入らない。

「くっ……まあ、一枚くらいは防御マジックを持っててもおかしくはないか……ターンエンドだ」

手札：2

場：【蒼造炉神ヴァルカン・ゴレム十人造神剣ヘファイトス】LV3

【選ばれし探索者アレックス】LV2

【創界神ヘファイトス】LV1

バースト：【有】

結果的に2体のブロッカーを残し、そのターンをエンドとする事になった鉄生。次はテンドウのターンだ。そのターンシークエンスを進めて行く。

「ターン07」テンドウ

「メインステップ……ほんじゃおっぱじめるか……こつからが本気だ……精々足掻けよ
鍛冶屋小僧……ッ!!」

「ッ……!?!」

テンドウから放たれるのはヴァルカン・ゴレム以上のプレッシャー。鉄生はその重圧に思わず膝を曲げたくなるが、「負けたくないという想い」でそれを堪え、真つ直ぐで真剣な表情をテンドウに向ける。そしてテンドウはその表情を見るとまた小さく笑みを溢すと、己のターンを再び進行して……

「オレは第三の仮面ライダーカブト　ライダーフォームを召喚……!!」

ー【仮面ライダーカブト　ライダーフォーム「3」】LV2（6）BP5000

現れたのは三番目のライダーフォーム。ヘファイトスの効果で強力な召喚時効果が封じられているものの、効果はそれだけではなく……

「でもってコイツを対象に【煌臨】を發揮させる。その際、第三のライダーフォームはコ

ストを6として扱う」

「!!」

「来い……第二の仮面ライダーカブト ハイパーフォーム……ッ!!」

第三のライダーフォームの腰にカブトムシ型のマシンが新たに装着される。ライダーフォームはそのレバーのような角を下へと倒すと、虹色の電流が流れ、さらなる進化を遂げて行く……

……ハイパーキヤストオフ!!

ー【仮面ライダーカブト ハイパーフォーム「2」】LV3（6）BP14000

その音声と共に現れたのは三王であるテンドウ・ヒロミ最強のスピリット、仮面ライダーカブト ハイパーフォーム。それが放つ強烈なプレッシャーが一瞬にして周囲に飛び交う。

「煌臨時効果。BP20000以下のヴァルカン・ゴレムを破壊する」

「!!」

「ハイパーキック!!」

ハイパーフォームは腰にあるカブトムシ型のマシンの角を再度下に倒し、必殺技を発動する。虹色の電流がハイパーフォームの翼となり、それを宙へと飛ばす力を与える。強烈な跳び蹴りをヴァルカン・ゴレムに浴びせる。

ヴァルカン・ゴレムは堪らず爆散。合体していた人造神剣ヘファイトスは爆風で舞い上がり、落下。地面に突き刺さってしまう。

「マジか、ヴァルカン・ゴレムが……一瞬で……!!」

「これだけじゃ終わらないぜ……アタックステップ、その開始時にカブトエクステンダーの効果でトラッシュのコアを戻す……そして第二のハイパーフォームでアタック」

エースであるヴァルカン・ゴレムの破壊に少なからずショックを受ける鉄生だったが、その暇はない。テンドウがさかさずアタックを仕掛ける。

「くっ……アレックスでブロッ……」

「ブロックはさせん」

「!？」

「フラッシュエンジを發揮、対象は第二のハイパーフォーム!!」

鉄生の2体のブロックカーにブロックさせる前に、テンドウは残った最後の手札を切り、フラッシュを宣言。それはライダースピリットなら殆どが使う事が可能なエンジの効果だ。

「この効果で残ったブレイヴを破壊……そしてアタック中の第二のハイパーフォームと入れ替える……来い、第一のハイパーフォームツ!!」

ー【仮面ライダーカブト ハイパーフォーム】LV2（4）BP12000

ハイパーフォームの手にエネルギー剣が握られると、そこにサソリ、ハチ、トンボ型のメカが飛び交い、それに装着されていた。

これこそハイパーフォームの必殺剣。三王たるテンドウ・ヒロミの切札だ。

「第一のハイパーフォームの効果【ハイパークロックアップ】……コイツはブロックされない。そしてフラッシュ効果を使いたければオマエは3コストを余分に支払わねーと行けなくなる」

「!?」

ハイパーフォームの効果【ハイパークロックアップ】……これにより残ったアレックスはブロックができず、ただただ鉄生のライフが破壊されるのを眺めるだけの木偶の坊と化してしまう。

「仕上げは変身したオレの【神技】……3つをボイドに送り、第一のハイパーフォームをダブルシンボルとする!!」

「……!!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】(6??3)

ここに来てテンドウの【神技】が炸裂。ハイパーフォームは一度の攻撃で2つのライフを破壊できる上にブロックされない強力なスピリットとなった。

「そのアタックはライフで受ける……………ッ!!」

へライフ3?!?1へ鉄生

ハイパーフォームはエネルギー剣を振り、鉄生のライフ2つを一気に一刀両断してみせる。

だが、まだ終わらないか。鉄生は今一度バーストゾーンのバーストカードへと目をやって……………

「ライフ減少後のバースト、選ばれし探索者アレックス!!」

「!!」

「効果でコイツを召喚してドロー!!…そしてこのアタックステップは強制終了となる!!」

1 【選ばれし探索者アレックス】LV2(2)BP8000

バーストカードが反転すると共に現れたのは又してもアレックス。その効果でテンドウのアタックステップが強制的に終了。エンドステップとなった。

「へっ……どこの異世界かは知らんが、確かにあんたは実力者みたいだ……けど、勝つのはこの俺だ!!……次のターンで決める!!」

「フツ……だったらさっさとその次のターンとやらを始めてみやがれ」

絶体絶命の大ピンチであると言うのに余裕のある声を発するテンドウ。鉄生は「言われなくとも!!」と言葉を続け、己のターンを開始しようとするが……

「ツ……あ、あれ。動かない!?!……おいどうしたんだよ、故障か!?!」

肝心のBパッドが全く作動しなかった。Bパッドの耐久性を知らない鉄生はそれが故障したのだと勝手に思い込んでしまったが、実はそうではなくて……

「フツ……ハッハッハ!!」

「!?!」

「オマエのターンは来ない!!……何たって、オレの終わった次のターンもオレのターンだからな!!」

「は、はあ!?!」

テンドウの高笑いからの雑な説明に驚愕する鉄生。つまり彼がもう一度ターンを行うから自分のが作動しなかったのだと咄嗟に推理したが、いったいどの効果でそれをやつてのけたのかが疑問だった。

そしてその答えをテンドウはようやく説明して……

「最初にアタックした第二のハイパーフォーム。その効果だ。アタックしたその瞬間、もう一度オレはオレのターンを行う事ができる」

「なッ……あの時で既に……!?!」

「てなわけでオレのターン!!」

今一度始まる驚異のテンドウのターン。前のターンよりもさらに強い威圧感を前面に飛ばしながらそれを行った。

「ターン08」テンドウ

「エクストラターン時はコアステップとメインステップがねえ……このままアタックス
テップだ。言っ来て来い第一のハイパーフォーム!!」

「!!」

「効果でブロックはされねえ!!」

青い眼光を輝かせ、必殺のエネルギー剣を構えると、今一度鉄生のライフまで走り出したハイパーフォーム。

鉄生としてはこの攻撃を防ぎたいのは山々だが、場に残った2体のアレックスは「ハイパークロックアップ」によって防御に間に合わない。

終わりだ。もはやその攻撃を受け入れる以外の選択肢が鉄生には無い。

「……なんだよこのおっさん……バカみてえに強い……」

〈ライフ1??0〉鉄生

ハイパーフォームのエネルギー剣が鉄生の最後のライフを粉々に斬り刻んだ。鉄生のライフは遂に0となつてしまい、彼の使用したBパッドからは敗北を告げるように「ピー…」と、無機質な音声がかたまりました。

「オレはおつさんじゃねえ……ノヴァ王国の三王、テンドウ・ヒロミだ」

これにより、勝者はテンドウだ。異世界でのバトルスピリッツでも見事に三王らしく華々しい勝利を収めて見せた。

……

「つー事で、こいつはもらつてくぜ〜」

「ああ、約束だからな。そんなモノで良かったらやるよ」

バトルも終わり、2人は鉄生の鍛冶屋へと戻っていた。テンドウは鉄生の失敗作、もとい鉄の塊を風呂敷に包み込み、それを背負っていた。ネコガイヌ博士の見上げにするつもりなのだ。

この行為はなんだかんだでテンドウがネコガイヌ博士に優しいようにも思えるが、彼はこの鉄の塊でネコガイヌ博士と取引するつもりなだけである。

「テンドウとか言ってたな……あんた、もうこの世界から出て行くのか？」

「ああ、帰り方わからんがな……まあ適当に見つけるわ」

「はは……でも今日はなんだかんだ本当に楽しかった!!……ありがどうな、また楽しくバトルしよう!!」

「おお、なんだよ急に素直じゃねえか」

いつもはマナと言う貴族の少女としかバトルをしない鉄生にとって、テンドウとのバトルスピリッツはたいへん貴重な体験だったのだ。

「そんじゃオレはここいらでおさらばさせてもらおうわ……じゃあな。オレもそれなりに楽しかったぜ、鉄生」

「!!」

テンドウは初めて鉄生を名前で呼ぶと、彼に背を向け、この場から立ち去ろうとした。

しかしその直後、テンドウは何かまだ聞きたい事があったのか、再び鉄生の方へと振り向くと……………

「そう言えばもう一個聞きてえんだが……………」

「お?…なんだよ、何でも聞いてくれ」

「(こ)こら辺に……………ツ!？」

「……………え?」

テンドウが鉄生に質問をしようとした直後。何故かテンドウの身体は粒子となつて一瞬のうちに消え去つてしまった。この信じられない現象は今に始まつた事では無いが、鉄生はめちやくちやテンドウが言いかけた質問を気にしており……………

「お、おいテンドウ……………なんだよ、結局何……………『(こ)こら辺に』の次は何!?!……………何て訊こうとしてたんだアアアー!!!」

職人街で鉄生の叫びがこだまする。結局は終始テンドウ・ヒロミと言う良い意味でも悪い意味でも豪快な漢に振り回されっぱなしな1日であつた……………

「おお!!……お帰りテンドウ!!」

「……………」

場所は戻って元の世界。三王塔に戻って来たテンドウが呑気な声を上げるネコガイ又博士に迎え入れられる。

「どうしやった!?!……どうじやった異世界は!?!……おお、それは鉄か!!……よくやった、最近は使える部品がなくなってきたから困つとつたんじやよ〜」

「せっかくあの鍛冶屋小僧に『こちら辺に美味しいタバコ』があるか訊こうと思つてたのに……何やつてくれてんだこのジジイ……っーかオマエは後で殺す」

「まあまあそんな固い事言わずに……無事じやつたんじやし、アレまだ試作品だし。オマエが戻ってきたのは単なる時間切れじやよ〜……これから調整しちゃうからさ〜」
「だから試作品をオレで試すなつての。良い加減治せその癖」

既に70を超えたご老体であるのに子供のようにはしゃぐネコガイヌ博士。余程今回の実験が上手くいったのが嬉しいのだろう。

テンドウはもうこの老人に構うのが面倒になり、取引の材料に使おうと思っていた風呂敷で包んだ鉄生の失敗作達を彼の方に放り捨てると、この場から立ち去って行く。

「おいおいどこ行くんじやテンドウ……実験成功祝いに久しぶりに一杯どうじゃ？」
「行かねータバコ吸ってくるだけだし……つーかあんたは頼むから世界だけは滅ぼすなよ」

テンドウは歩きながら、こことは違う異世界に住む鉄生との熱きバトルスピリッツを思い出し、胸に刻んでいた。

実際苦戦した。このライダースピリットの三王たるテンドウ・ヒロミが。これはかなり久しぶりの経験であり、正直ヴァルカン・ゴレムのアタック時には冷や汗が止まらなかった程だ。

そう思うと、テンドウは何故かニヤケ顔が取れなくなっていて……………

「フツ……………異世界かー……………今度はあの小僧共でも放り込んでやるか……………」

この国の三王、テンドウはその言葉を最後に、また懐からタバコとライターを取り出して一服入れるのであった……………

ミラーワールド篇

31コア「ナイトサバイブVSキングギドラ」

「まさかまた帰って来るなんてなオウドウ都……オレ達次の町に行くたびになんかここに戻ってきてない?」

「しようがないじゃない。怪我してても叙勲式は出ないと行けないんだし」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん!!……こうやって3人揃って歩けるんだからさ」

「むえ」

「ごめんごめん。ムエもだったね」

「でもシイナ様。バカスラの短足に歩幅を合わせるの難しいんですけど」

「悲しい事言うなアアア!!」

黄色の町ライライ町にいたアスラとエールは又しても中心都市オウドウ都に帰ってきていた。しかも今度は頂点王シイナと言うとんでもない大物を引き連れてのだ。まあ彼女はサングラスや南国のリゾート地で遊んでいるかのようなラフな格好をしているため、それらしき威厳は全く持って感じられないのだが……………

何故このような状況が出来上がったのかと説明すれば、3枚以上のカラーカードを獲得した人物を対象に毎年行われる「叙勲式」と呼ばれる催しにアスラが呼ばれたからだ。しかもその司会人がライライ町にいる4番目のカラーリーダーと来たものだ。アスラとしては是が非でもこれに参加しないと行けなくて……

しかし、仮に黄色のカラーリーダーに会えたとして、直ぐにバトルはできない。バトル自体はオウドウ都ではなく、ライライ町で行わなければならないし、何よりアスラの怪我がまだ完治していない状態であるからだ。

「て言うか、何人くらい来るんだろ、その叙勲式とか言うやつ」

「むー毎年いて1人くらいかな」

「そんなに少ねえの!？」

「そりやまあ強いからねウチのカラーリーダー。私の方が遥かに強いけど」

叙勲式に行った事ないアスラにシイナが説明する。

3枚以上のカラーカードを得るには相当な腕前が必要になるのは必然。地味にコモンの身分でそれを為し得たアスラは既にかなり凄い事を成し遂げていると言える。

ここは叙勲式が行われるスタジアム。ただ単にバトルをするためだけに作られたものではなく、榮譽ある事を成し遂げた者達を称賛するためのステージであり、叙勲式だけにあらず、新たにカラーリーダーや三王に就任する者を称えたりする場でもある。

そして今日はマスターやレアなどの身分の者達が大勢の観客となって、このスタジアムを彩っていた。

「HAY!!……紳士淑女の皆さん元気かい?……今年の叙勲式のMC……じゃなくて進行司会はこのライライ町、黄色のカラーリーダー……スピーカー・ヘブンがお送りするぜええええ!!」

ステージに立ち、マイクを片手にたやらとハイテンションで叫び倒す金髪のトサカ頭でサングラスの男性はこの国の黄色のカラーリーダー、スピーカー・ヘブン。

こう見えてヘブン家と呼ばれるマスターに属する。

単独でライブをする事もあり、他のカラーリーダー達よりも一線を画した人気を誇っている。そんな彼が今年の司会進行役なのもあり、スタジアムは大いに盛り上がってい

彼女の身分自体が平凡なレアと言う事もあるのか、スタジアムの空気はそれ程盛り上がってはいなかった。無理もない、いつもはマスターやエックスなどのバトルの強い者達だけが勝ち残るのだから……

「続いて2人目エエエー!!……オマエ身分以外はマジで羨ましいわ!!……手に入れたカラーカードは5枚、身分はコモン、スーミのロンだアアアー!!」

「……………」

スピーカーがそう説明し、やや癖毛の黒髪に、長身でイケメンの少年、ロンにスポットライトが当てられる。相変わらず無口だ。

「キヤーー!!……凄くイケメンじゃない!?」

「しかしコモンか……本当にカラーカードを5枚も集めたのか?」

彼の淡麗な容姿を見て一部の女性陣が沸く一方で、彼の身分が最も底辺であるコモンだと聞いて余りよく思っていないような声を漏らす人物も複数いた。

「コモンか。アタイよりも身分が下じゃねえか」

イカヅチもそう言葉を落とした。彼女は別に身分がどうか言って差別はしないし、その人物が強ければどうでも良いのだが、この国において、それ程までにコモンの人間自体がここまで勝ち上がると言うのはたいへん珍しい事なのだ。

「ラスト3人目エエエー!!!……オレは頂点王になる、諦めないのがオレのバトスピだアアアー!!……手に入れたカラーカードは3枚、身分は同じくコモン、スーミのアスラだアアアー!!」

スピーカーが3人目であるアスラの名前を呼ぶと、スポットライトが再び動くが、その向かった先には肝心のアスラが存在せず……

「あり?……HAYどうしたスーミのアスラアアアー!!」

スピーカーがマイクを片手にさらに大きな声でアスラを呼ぶ。すると、スタジオアムの端から大きな声が聞こえてきて……

「オレはここだアアアー!!」

ー!!

誰もがその声のする方へと首を向けた。スポットライトもそこへと向けられる。するとそこには急いできたかのように少し息の切れたアスラとエール、頂点王シイナの姿があった。

「間に合った……もう!!シイナ様が開始時間間違えるからですよ!？」

「いや〜ごめんごめん〜」

どうやら別に遅れて登場するのを狙っていたわけではなく、単純にシイナが開始時間を間違えて覚えていただけだったようだ。

「フツ……来たかアスラ、随分ボロボロだな」

「よお、久し振りだなロン!!」

「WOHHHHHー!!!!……エクセレントな登場の仕方だぜスーミのアスラ!!……さあ!!
ステージにカモン!!……後ろの連れの女性2人もせっかくだからカモンー!!」

「え?……私たちも!?!」

「スピーカーのヤツ、頂点王の私に気がついてないな」

アスラだけでなくエールとシイナもステージへと呼ぶスピーカー。シイナとはカ
ラーリーダーと頂点王と言う間柄であるため当然知り合いであるはずなのだが、彼女が
サングラスやラフな格好をしていたりするためか、まだ気がついてなかった。

何はともあれ、アスラ、エール、シイナの3人もロンとイカツチ、スピーカーが並ぶ
ステージへと足を運んだ。そんな中、エールはある人物の存在に気がついて……

「えっ……あんた確かイカツチ?!……なんで叙勲式に出てんのよ!?!」

「お、久し振りだなオメガ家。元気にしてたかい?」

「ノリ軽!!」

約1ヶ月振りの再会を果たすイカツチとエール。あの時のイカツチは仕事とは言え、
悪事を働く団体と手を組んでいたため、エールの認識や印象としてはあまり良くない。

「誰だこのおねーさん。エールの知り合いか？」

「バカスラはちよつと黙ってなさい」

「なんで!？」

少し気になったアスラがエールに質問するが、エールは軽くそれを一蹴する。

「そう怖い顔すんなよ。あんたに言われた通りもう賞金稼ぎは辞めた。それにアタイは単に強いヤツとバトリりたいだけだ。その上カラーカードはお金になる。だからアタイとしては一石二鳥なんだよ」

「だからってあんたねー」

「まっ、そう言う事だからあんたの彼氏とバトルする事になっても手は抜かねーぜ？」

「は……はあ!?!……か、かか彼氏じゃないわよ!?!……バツカじゃないの!?!」

「なんだ違うのか」

アスラとの関係を指摘されて顔を赤くするエール。肝心のアスラはイカツチの言ってる意味があまり伝わっていないのかキョトンとしている。

ロンはそんな彼らの様子に「騒がしい連中だ」と、客観的な感想を零す。

「おいロン!!…見ろよこれ、白のカラーカード!!…オマエと違ってゴゴのおっちゃんから全てのライフを破壊して手に入れたんだぜー!!」

「フツ…そうか。ついでにオレは既に5枚のカラーカードを獲得したぞ」

「はああっ!?!」

自慢げに白のカラーカードをロンに見せつけるアスラだったが、ロンは対抗するよう
に緑、青、白、黄、紫のカラーカードを見せつけて来た。これはロンが5番目の紫のカ
ラーリーダーまで勝利した何よりの証だ。

アスラは驚愕するが、不思議と直ぐに笑みが浮かんで来て……………

「へっ…………やるなイケメン天才コノヤロー…………でも絶対追いついてやるからな!!」
「フツ…………来るなら来い一点突破バカ。いつでも叩き落としてやる」

普段は笑わないロンだが、アスラの前だけでは少しだけ微笑む。そしてそんな中、久
し振りに対面したロンを見て、アスラは気付いた事があるようで……………

「てかロン。なんかオマエデカくなってない？」

「ん？……ああ、2センチ伸びた」

「なにイイイー!?…オマエ、何勝手に身長伸ばしてんだよ!？」

「フツ……オマエは相変わらずだな」

「なんだとコノヤロー!!…オレだって好きでチビになつてる訳じゃねえぞ!!」

旅が始まって以降。ロンはただでさえ高かった身長がまた少しだけ伸びていた。対するアスラは全く変化がない。悲しい。

「……なんだあの貧相な少年は」

「見窄らしいにも程があるだろ？」

「横にいる美人はもしやエツクスの子!?…なんであんな高貴なお方があのような者と……」

「カラーリーダー達に勝ったのもきつと何か不正を働いたに違いない」

刹那。周囲の人々からそんな声がアスラ達の耳まで届いて来た。アスラ達はコモン

だ。身分が低ければバトルも弱いと言う偏見もあって、実力があってもそれを信用しようとする者の数は少ないだろう。

「HAY HAY!! オーディエンス……野暮な口出しはNGでおねが……」

「ちよつと借りるわよ」

「え」

このざわつきを抑えるべく、スピーカーがマイクを手取るが、それを奪い去ったのは他でもないエール・オメガだった。

「ちよつとどこのレアだかマスターだか知らないけど、私は……エックスのオメガ家であるこの私は好きでコイツと一緒にいるのよ!!」

ー!!

エールの言葉に民衆がさらに騒つく。

「人の実力も見たことない癖に何自分の方が上とか偉そうな事言ってるのよ。身分とか才能とかそんなの関係ないわ!!……コモンのアスラもこうしてステージに立つ権利を得ている、それが何よりの証拠よ!!」

返す言葉を失うマスターやレアの民衆達。マイクを手にしているのが他でもない最高の身分、エックスであるオメガ家のエールだからと言う事が最も大きな因果だろう。

そしてさらにエールは声を張って……

「コモンとか最底辺とか関係無い!!……努力すれば誰だつて強くなれるッ!!」

エールの心からの渾身の叫びがマイクを通じてスタジアム中にこだました。そしてその言葉が少しずつ民衆の気持ちを変えていって……

「そ、そうだよな……確かに凄い……!!」

「コモンの身分でカラーリーダー達を倒して来た英雄じゃないか!!」

「片方はイケメンだしね!!」

マイナスだらけだった声が次第にプラスのモノへと切り替わっていく。エールの想いを乗せた言葉が他の人々に伝播し、伝わったのだろう……

「エール………ありがとな………!!」

「ふふ、やっぱり変わったなエールちゃん!!」

「ハツ……言うじゃねえか」

アスラやシイナ、イカヅチがそう言葉を落としたり。アスラはなによりも彼女の言葉に感動していたし、シイナは誰よりもエールの成長を感じていた。

だが、エールはまだマイクを離さず、演説を続けて……

「それに、この2人は他でもない。そこにいる頂点王シイナ様の息子よ!!」

ー!!

エールの言葉に「ええええええ!!」と言う言葉だけがスタジオ内を支配した。無理もない。あのコモン2人がこの国最強の頂点王の息子だと言われたのだから。無理も

しかも、しかもだ。彼女の言い振りからして直ぐそこに頂点王がいる事が示唆しれたのだ。黄色のカラーリーダーであるスピーカーは何かに気がついたようにハツと言葉を落とすと……………

「ま、まさか……………」

「ハツハツハ!!…そうだよスピーカー…私だ」

「ちよーーテンオーーーーーー!!?!?!?!」

スピーカーにそう言われ、サングラスを外すシイナ。遂にその正体を民衆に晒した。この国の英雄たる存在の急な登場により、観客達は爆音のような歓声を上げた。

「頂点王……………」

そんな折、さつきまで何にも興味を示さなかったイカツチが「頂点王」と言う言葉に反応するように目を見開いた。その眼光はまるで獲物を狩る虎、イヤ龍のようだった。

「やあ〜ロン久し振り〜相変わらずイケメンだね〜」

「そーいやロンはシイナに会うの10年振りじゃねえか!？」

「いや、旅先で何度か会った」

「え!?!…そうなのか!?!」

「本当にシイナ様ってどこにでもいるわね」

談笑を始めるシイナとアスラ、ロンにエール。因みにロンはアスラ達がここに来た時からシイナに気付いていた。幼い頃彼女に育てられた彼がサングラス程度の変装で見抜けないわけがなかった。

「よし!!…久し振りに3人揃ったんだし、今から家族水入らずでご飯でも食べ行く?…もちろんエールちゃんも」

「むえ〜」??自分も連れてけよ

「おお!!…良いなそれ!」

「いや、オレは早く最後の町に行かないと」

「まあそう言わずに来たって」

シイナは今回の叙勲式では必ずロンも来ると踏んでいたので、これを機に一度家族全

員顔を合わせようと密かに企んでいた。

叙勲式の途中で正体がバレるのは不本意だったが、その狙いは的中し、今ようやく10年振りにこうして家族3人揃った。

「えー……まあ、終わるか叙勲式。それどこじゃないしね。うん、そうしよう」

アスラ達の談笑を聞きながらスピーカーがそう言った。カラーリーダーである彼が頂点王であるシイナには逆らえないと言うのもある。

しかし、ここで又しても事件は起こった……………

「ハイ!!……………この国の頂点王シイナ!!」

「ん?」

「アタイの名はイカツチ!!……………相棒のギドラと共に強いヤツとのバトルを求める者だ!!……………そんなアタイからの挑戦、受けてくれよ!」

イカツチがシイナにそう言い出して来た。彼女の突然のバトル宣言に、今一度民衆達が騒つく。無理もない。何せ、6枚のカラーカードを集め切れてもない者が頂点王にバ

トルを挑んだのだから……

頂点王からバトルを仕掛けるのではなく、挑戦者側からバトルを仕掛けると言う行為はこの国においてどれだけ無礼な事であるのかは計り知れない。

「ちよ、ちよつと何また勝手な事言ってるのよあんだ!!」

「さあ、早くデツキとBパッドを抜きな!!」

エールの制止も耳には入らないイカツチ。彼女の闘争本能が余程頂点王シイナとバトルしたいらしい。

そんな中、シイナが優しい笑みを浮かべながら「しよーがないなー」と呟き、デツキを取ろうとした瞬間だった……アスラとロンが彼女の前に立ち塞がったのは……

「おいその金髪女コノヤロー……挑戦者の中で頂点王とバトルできるのは6枚のカラードを勝ち取って三王って言う凄い人達にも勝ったヤツだけだろうが」

「そしてこの頂点王に挑めるのはオレかこのアスラだけだ」

「!!」

見た目や目つき、オーラからでも圧倒的な強者であるのがわかるイカツチに堂々と啖呵を切るアスラとロン。そしてそんな中、さらにイカツチに近づいたのはロンだった………

「だが、どうしても戦いたいと言うなら先ずはオレとバトルして勝つんだな」

「ほお？」

「つておおい!?……ロン、オマエ何抜け駆けてんだ!!……バトルすんのはオレだろ!!」
「オマエの既にポロポロな身体じゃバトルなんかできないだろ」

「んなもん気合でどうにかしてやらアアアー!!」

イカツチにバトルを仕掛けるロン。結果的に自らが頂点王の盾となった。そしてロンのこの言葉を機に、イカツチは完全に気が頂点王シイナから彼へと移って………

「よし!!……いいだろう、スーミのロン!!……頂点王の前に先ずはオマエから相手してやる!!……実際オマエとも少し戦いたかったからな!!」

「あれ!?……オレは眼中に無い感じっすか!？」

「WOHHHHHー!!!……何か知らんが盛り上がりつつ来たなオーディエンス共オオオー!!!
……オレ様も実況魂に火が付いちまったぜ!!!……よってこのバトル承諾!!!……好き勝手暴
れまくれYEAHHHー!!!」

黄色のカラーリーダーであるスピーカーも乗り気になった。この言葉を聞くなり、ロ
ンとイカツチは互いにBパッドを展開し、そこにデツキをセットした。

「おお、なんか面白い事になったね」

「笑うところじゃないですよ!?!……あいつ変なヤツですけどかなりの実力者なんです」

「ふふ、だろうね……見ればわかるよ」

エールとシイナがそう会話した。エールはこの中で唯一カツチとバトルを行った
事があるため、彼女の圧倒的な実力がわかるのだ。

「それでも、ロンのヤツは必ず勝つ!!……なんたってオレのライバルだから!!」

「……アスラ……」

生涯のライバルであるロンの勝利を信じて止まないアスラ。そうだ。こんな所で負けていたら絶対に頂点王にはなれない。

そう思いながらアスラはロンのバトルへと目をやって……………

「さあ、オマエの力を見せてくれよ」

「ああ、嫌と言う程見せてやる」

「フツ……………残念だが、アタイとギドラは強いヤツを見て嫌だとは言わねえ!!」

「準備はOKかバトルジャンキー共オオオオ!!……………そんじや行くぜ、合言葉は……………」

……………ゲートオープン、界放!!

スピーカーの掛け声と共に、大勢の観客達が見守る中でロンとイカツチのバトルスピーリッツが幕を開ける。

先行はロンだ。クールな雰囲気を漂わせる彼はゆっくりとターンシークエンスを進めていった。

「ターンオー」ロン

「メインステップ、仮面ライダーナイトを召喚。効果で1枚ドロ」

1【仮面ライダーナイト】LV1（1）BP2000

「早速仮面ライダーナイトの素晴らしいサモンー!!!……なんだあ、自分はライダーに選ばれてると自慢したいのかー!!!」

現れたのは騎士型のライダースピリット、ナイト。世にも珍しいライダースピリットの登場に、観客と変な実況を行うスピーカーは大いに盛り上がった。

「成る程、ライダースピリット所持者か。コイツは楽しみだ」

「ターンエンド」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするロン。次は彼のライダースピリット、ナイトの存在によりバトルへと意欲を掻き立てられたイカツチのターンだ。

「ターン02」イカツチ

「メインステップ、先ずはネクサス、破壊された城をLV2で配置。これでエンドだ」

ー【破壊された城】LV2（2S）

イカツチの背後に何とも和風で立派なお城が聳え立つ。このネクサスは赤属性特有のドローステップ時にドロ一枚数を増やす強力な効果を持っている。

つまり対戦相手であるロンにとっては非常に厄介な存在となる。

「イカツチイイイー!!…早速お得意のネクサス戦法だYEAH H Hー!!」

「うっせええぞスピーカー!!…実況なんていらねえ、黙ってアタイのバトルを見てな!!」

「ええ!?!…オレ様の存在意義は!?!」

実況であるスピーカーを黙らせるイカツチ。因みに彼女は既に黄色のカラーリーダーである彼を撃破し、黄色のカラーカードを獲得している。

「ターン03」ロン

「メインステップ……魔界竜鬼ダークヴルムを召喚!!」

ー【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1（1）BP3000

ロンのターン。彼の背後から禍々しいオーラを纏う何かが地上へと降り立った。その正体は紫のドラゴン、ダークヴルム。

「召喚時効果。オレのライフを砕き、2枚のカードをドロ……ッ」

〈ライフ5?!4〉ロン

ダークヴルムが主人であるロンのライフを噛み砕いた。しかし、その代償により、口

ンは新たに2枚のカードをデッキから手に入れる。

「アタックステップ……ナイトとダークヴルム。2体で攻撃する!!」

「そりやそう来るよな!!……当然ライフだ!!」

〈ライフ5?!4?!3〉イカツチ

ロンの指示によりナイトとダークヴルムが動く。ナイトは剣で、ダークヴルムは牙で1つずつのライフを破壊した。

「ターンエンド」

手札：7

場：【仮面ライダーナイト】LV1

【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

バースト：【無】

そのターンを終えるロン。次はイカツチのターンだ。彼女は減ったライフのコアを

糧に動き出す……………

「ターン04」イカツチ

「ドローステップ。破壊された城の効果でドロー枚数を増やす」

イカツチもロンに負けじと手札を増強。そしてリフレッシュステップを終え、次なるメインステップを迎えると……………

「メインステップ、アルマジトカゲを2体、LV2で召喚!!」

┆【アルマジトカゲ】LV2(2)BP3000

┆【アルマジトカゲ】LV2(2)BP3000

アルマジロのような皮膚を持つトカゲのスピリット、アルマジトカゲが2体、彼女の場へと呼び出された。イカツチはさらに動くべく手札のカードを切つて……………

「さらにソウルコアを支払い、マジック、ソウルドロロー……デツキから2枚ドロロー。その後ソウルコアをコストに支払ったため、さらに1枚ドロローする」

つまりは3枚だ。イカツチはマジック1枚で合計3枚もの手札を加えた。

「そしてバーストを伏せ、このターンは終わる」

手札：5

場：【アルマジトカゲ】LV2

【アルマジトカゲ】LV2

【破壊された城】LV2

バースト：【有】

（あれだけ意気揚々とターンを進めた割には全く動かないな………何か狙いがあるのか？）

そのターンを終えるイカツチ。豪快な言動の割には消極的な事しかやっていない彼女に疑問を抱くロン。

しかし、こんな序盤で考えていても始まらないか。ロンは己のターンを開始した。

「ターン05」ロン

「メインステップ……アーマーバット、そして第二のナイトを召喚!!」

「ッ!!」

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

ー【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2)BP6000

鎧を被った小さな蝙蝠型のスピリット、アーマーバットが現れると共に現れたのは第二の仮面ライダーナイト。その効果は第一のナイトよりもより洗練されていて……

「召喚時効果。相手スピリットのコア2つをリザーブへ……消えるアルマジトカゲ!!」

ー【アルマジトカゲ】(2??0)消滅

第二のナイトがソードベントのカードを剣の取手部にあるバイザーに装填。「ソードベント」の音声と共に黒槍を手にすると、それに紫のオーラを纏わせ、斬撃を放つ。

イカヅチのアルマジトカゲの1体はなす術なくそれに斬り裂かれ、爆散した。

「消滅した事によりカードを1枚ドロ」

「やはり強いな!!……だがアタイのデッキはやられたら直ぐにやり返すぜ!!」

「?」

「スピリットの消滅によりバースト発動、ネクサスカード、大龍城・本丸!!」

事前に伏せられていたイカヅチのバーストカードが反転する。すると彼女の背後にもう一つ龍を象った巨大なお城が聳え立って……

「バースト効果により第二のナイトを破壊する!!……そして効果によりノーコスト配置する!!」

「!?!」

I 【大龍城・本丸】 LV2 (2)

龍口から放たれる火炎弾。それがロンの場に存在している第二のナイトに命中。あまりの威力にたまらず爆散した。

「へい!!……どうだいやるだろ?」

「くっ………ダークヴルムのLVを2に上げてターンエンドだ」

手札：7

場：【仮面ライダーナイト】 LV1

【魔界竜鬼ダークヴルム】 LV2

【アーマーバット】 LV1

バースト：【無】

このターンでは勝てないと見たロンはこのターンをエンドとする。次はバーストのみで第二のナイトを討ち取ったイカツチのターンだ。

そして、遂に待ちに待った彼女のエースカードが登場する事になる……………

「ターン06」イカツチ

「ドローステップ!!…破壊された城と大龍城・本丸の効果でドロー枚数を2枚増やす!!」
「くっ……」

大龍城・本丸も破壊された城と全く同じ効果を持つ。よってイカツチは一度のドローステップで3枚ものカードをドローして見せた。

「メインステップ……アルマジトカゲとネクサス達のLVをダウン………拝ませてやるよ、アタイのエースをな!!」

「ツー!?!」

イカツチの「エース」と言う言葉に警戒し、身構えるロン。そしてイカツチはそのエースたるスピリットのカードを全力でBパッドへと叩きつけて………

「天下の轟雷振り翳せツ!!…雷天雷神となりし金色の龍王………キングギドラ・1991を召喚だあツ!!」

イカツチの場に鈍い音を立てながら落雷する雷。そしてそれに伴う爆煙が覆う中、それを巨大な翼で吹き飛ばして見せたのは、黄金の体を持つ三つ首龍。その名はキングギドラ。イカツチが物心ついた時から共にバトルしているエースカードだ。

ー【キングギドラ】「1991」LV3（4S）BP13000

「出た、イカツチのエースカード……!!」

「うおおお!!……首3つあんで、カッケェー!!」

3体分の咆哮を張り上げるキングギドラ。エールはその様子を見て、マリーナ海街でイカツチとバトルした事を鮮明に思い出す。そしてアスラは一体誰の味方をしているのか、目をギラギラと輝かせながらキングギドラの逞しい勇姿に興奮していた。

「さあ、行くぞギドラ!!……召喚時効果、BP7000以下のスピリット3体を破壊する!!」

「なにッ!？」

「よってオマエの場にいる全てのスピリットを破壊だツ!!」

キングギドラの三つ首から放たれる電撃がロンの3体のスピリットをそれぞれ貫いていく。スピリット達は堪らず爆散、ロンの場は一気にゼロとなってしまった。

「アタックステップ!!……ギドラでアタック!!……そしてその効果【強襲・2】!!……破壊された城を疲労させ、ターンに二度まで回復!!」

ー【キングギドラ「1991」】（疲労??回復）

「ツ……赤のスピリットで【強襲】!?!」

「アタイとギドラにバトスピの常識は通用しない!!」

本来であれば青属性のスピリットしか持たない【強襲】の効果を持つキングギドラ。イカヅチが序盤からネクサスを重点的に配置し続けたのはこれが狙いだったのだと口には咄嗟に理解する。

「アタックは継続中だ!!」

「ツ……ライフだ」

〈ライフ4??3〉ロン

右側の首から放たれる電撃がロンのライフを1つを貫いた。だがこの程度では攻撃は終わらず……………

「続けて二度目のアタック!!……【強襲：2】で今度は本丸を疲労させて回復!!」

1【キングギドラ「1991」】(疲労??回復)

二度起き上がるキングギドラ。これでこのターンのみで3回の攻撃が可能となった。

「それもライフだ……………ツ」

〈ライフ3??2〉ロン

今度は左側の首より放たれる電撃。ロンのライフは又しても貫かれる。

「どうしたどうした!!……オマエこのままじゃ負けるぞ!!……アルマジトカゲでアタック!!」

キングギドラの三度目の攻撃はフィニッシュに取っておくつもりなのか、イカツチは一旦それを停止させると、今度はアルマジトカゲでアタックを行う。

……この攻撃をウィークポイントと見たロンは咄嗟に手札のカードを1枚引き抜いて……

「フラッシュマジック、ネクロブライト!!」

「ツ……!!」

「効果によりトラッシュからナイトをLV3で蘇生、効果でドロ―し、そのアタックをブロックする!!」

1【仮面ライダーナイト】LV3(4)BP6000

紫の輝きと共に蘇る仮面ライダーナイト。回転しながら突撃して来るアルマジトカゲを剣で一刀両断し、爆散させた。

「んだよ、やればできるじゃねえか、紛らわしいな。本当にこの程度で終わるかと思ったぞ」

「生憎、オレは誰にも負ける気はないからな」

「ハッ、クールだね〜……アタイはこれでターンエンドだ」

手札：7

場：【キングギドラ「1991」】LV3

【破壊された城】LV1

【大龍城・本丸】LV1

バースト：【無】

このターンではフィンニッシュまで持っていかないと見たイカツチは相棒であるキングギドラをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとした。

「ターン07」ロン

「メインステツプ、バーストを伏せ、ナイトにコアを追加。さらにソードール2体を連続召喚」

ー【ソードール】LV1(1)BP1000

ー【ソードール】LV1(1)BP1000

全身が剣でできた人形、ソードールが2体姿を見せる。

「アタックステツプ!!……仮面ライダーナイトでアタック!!」

自身を選んだライダースピリット、ナイトで攻撃を仕掛けるロン。そしてこの刹那のフラッシュタイムングにて、手札にある強力なカードを引き抜いて……………

「フラッシュ【煌臨】発揮!!……対象は仮面ライダーナイト!!……この時、ナイトはコスト5のスピリットとして扱う!!」

「ツ……何か来るか？」

「ああ、見せてやる。来い、仮面ライダーナイトサバイブッ!!」

ナイトはベルトにあるカード束から一枚のカードを引き抜くと、レイピア状の剣が瞬間にして騎士の剣を内蔵した青い盾に切り替わり、疾風の如く風が吹き荒れる……

……サバイブ!!

1【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3(6)BP16000

ナイトがその引き抜いたカードを青い盾のバイザー部に装填すると、その無機質な音声と共に強化形態、仮面ライダーナイトサバイブへと進化を遂げる……

「うおおお!!出たぜナイトサバイブ!!…行けロン!!」

「いいね〜倒し甲斐がありそうだ!!」

久し振りのナイトサバイブにそう言葉を漏らすアスラ。イカツチもナイトサバイブ

から放たれる強者のオーラに強い反応を示す。

だが、この瞬間。ロンは……………

ー…

ー『ナイトを託してすまない……………オマエなら……………オマエならきつと……………』
ー…

おそらく記憶の奥底に眠る自分の記憶なのだろうか……………

ロンの脳裏に焼き付くかのようにその記憶が再生される。傷だらけで今にも生き絶えそうな男性の声が生後間もない赤ん坊の自分にそう言っているが、その真意や意味が全く伝わって来ない。

伝わって来たモノと言えば必死な事だけだ。

「ツ……………またこれか……………！」

咄嗟に掌を額に当てるロン。もうこれで何度目だろうか、ここ最近はナイトサバイブを呼び出すたびにこの記憶が自分の脳裏に現れては消えていく。

ハッキリ言って不可解だったが、誰にも打ち明けられるわけもなく、彼はただ一人苦しんでいた。

「おいどうした頂点王の息子ロン」

「ツ……いや、何でもない。バトルを続ける」

イカツチにそう言われ、我を取り戻したロン。呼吸を整えると煌臨させたと煌臨させたナイトサバイブの効果を発揮させる。

「ナイトサバイブの煌臨アタック時効果。スピリットのコア2個をトラッシュユに送る

!!」

「ツ!!」

「キングギドラのコア2個をトラッシュユへ!!」

ー【キングギドラ「1991」(4S??2S) LV3??2

ナイトサバイブの疾風の斬撃がキングギドラの黄金の体を傷つける。その体内のコ

アが弾け飛び、LVを降格させられた。

「さらにナイトサバイブのLV2、3のアタック時効果。デッキの上から3枚のカードをトラッシュへ送り、ターンに一度回復する!!」

「ツ……二度連続攻撃!?!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

効果により二度のアタックを可能とするナイトサバイブ。ロンはイカツチを一気に追い詰めるべく、その効果を躊躇なく使用した。

「だったら真正面から相手してやるよ!!…迎え撃てギドラツ!!」

「WOHHHHH!!…遂に両名のエースの激突だYEAHHH!!」

ナイトサバイブの前に立ちはだかるキングギドラ。その光景はさながらドラ○ンク○ストみみたいだ。

そして実況は要らないと言われたスピーカーだったが、やはりやりたいのか、たびた

びさり気なくマイクを片手に叫んでいる。

「だがその程度、ナイトサバイブの敵じゃない!!」

キングギドラの三つ首から放たれる電撃をかわすか剣で斬り裂くナイトサバイブ。そして超近距離まで接近すると、刀身に疾風の風を纏わせ、ギドラの真ん中の首に一閃。見事にその首を斬り落としてみせる。

キングギドラも流石に首の切断は応えたか、その場に倒れ込んでしまう。

「よし!!……これで相手のエースはぶっ倒したぜ!!」

「いや……………まだよ」

「!?!」

ナイトサバイブの勝利に喜ぶアスラだったが、イカツチと言うカードバトラーを知っているエールは違った。

そう。まだ終わらない。イカツチのギドラと言うスピリットにはまだ隠された力があつて……………

「……………倒したはずのキングギドラが消えない？」

ロンも何か違和感に気づく。

通常、破壊されたスピリットは爆散するか消滅するかでこの場から消え失せる。しかしこのキングギドラは中心の首が跳ねられただけで、残り2つの首が未だにナイトサバイブとロンを睨んでいた。

「やっぱり強いな。単体でアタイがこのカードを引き抜く事になるとは思わなかったぜ!!」

「ッ!?!」

「アタイのギドラはそう簡単にくたばったりしないのさ!!……………今度は真の姿となってオマエを討つ!!」

そう言うのと、イカツチは手札にあるカードを抜き取り、それをBパッドに勢い良く叩きつけた。

「天の雷操りし黄金の龍王、その不動の魂を不屈の鋼へと昇華せよ!!…鋼鉄雷動の最強龍ツ!!…サイボーグ怪獣メカキングギドラ、LV2で機動ツ!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】LV2(3)BP15000

キングギドラは再び起き上がると、その身は白銀の光に包まれ始め、中央の首に鋼鉄のパーツが装着され始めると、キングギドラはメカキングギドラへと生まれ変わる。

両サイドの首から放たれるこれまでの龍の咆哮、そして中心にある鋼鉄の首から発せられる機械混じりの咆哮が不協和音を形成。観客の誰もがそれに震え上がっていた。

「復活しただと!？」

「ここからが本番だぜ頂点王の息子!!…メカキングギドラの召喚時効果。敵スピリット1体をデツキの上に戻し、BP10000以下のスピリット2体を破壊する!!」

「ツ……!!？」

「ナイトサバイブはデツキの上、ソードール2体は焼き尽くす!!」

鋼鉄となった真ん中の首より放たれる白い光線がナイトサバイブに命中。たちまち

デッキの上へと舞い戻される。そして今度は両サイドの首から電撃が放たれ、ソードー
ル2体が貫かれて爆散した。

ロンは自分のターンであるにもかかわらず、場のスピリットを再びカラにされてしま
まった。

「さあ!!……もつとアタイとギドラを楽しませろ!!」

「……………ターンエンドだ」

手札：4

バースト：【有】

致し方なくそのターンをエンドするロン。次はキングギドラを超えたメカキングギ
ドラでこの場を制したイカツチのターン。ロンの残り2つのライフを破壊すべく動き
出した。

「ターン08」イカツチ

「メインステップ、ネクサスのLVを上げ、ギドラにコアを3つ追加!!」

再びネクサスのLVが上がると共に、メカキングギドラにコアが追加。これでちよつとやそつとのコア除去では破壊できなくなってしまう……………

「アタックステップ!!…行つて来なギドラ!!…そして今のコイツは赤と白のダブルシンボルツ!!」

「!!」

「コイツを食らつたらロンの負けじゃねえか!!…おいロン、負けんじゃねえぞコノヤロー!!」

「アスラうるさい。言われなくともまだまだ余裕だ」

アスラの言葉を一蹴しながら、ロンはイカツチの攻撃を止めるために手札のカードを引き抜いた。

「フラッシュマジック、ガードベント!!」

「!!」

「オレのトラッシュにナイトが2枚以上ある時、このターンの間オレのライフは1つし

か減らない。よってその攻撃はライフで受ける!!……………ッ」

〈ライフ2??1〉ロン

三方向から襲い来る三つ首の龍王。しかし、ガードベントの影響か、そのライフはたったの1つしか砕く事ができず……………

「2枚のナイトだと?……………最初のナイトはサバイブと一緒にデツキに戻したはずだ。いったいいつトラツシユに送ったって言うんだい?」

「ナイトサバイブの効果だ。あの時、デツキから2枚目のナイトが落ちていた」

「ツ……………やつぱ一筋縄ではいかないみたいだなあ」

「フツ……………あんたもな。言うだけの事はある」

この激しくぶつかり合った数ターンで、ロンとイカツチはお互いの実力を認め始めていた。

「ターンエンド。さあ、どっからでもかかって来な!!」

手札：7

場：【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】LV2

【破壊された城】LV2

【大龍城・本丸】LV2

バースト：【無】

そのターンをエンドとするイカツチ。ロンは未だに涼しい表情を見せてはいるものの、あれ程強力な攻撃を何度も受けられるわけがない。

よって、勝負がつくとしたらこのターンだ。ロンは全身全霊を込めて己のターンを開始していった。

「ターン09」ロン

「メインステップ、アーマーバット2体、そして仮面ライダーナイトを召喚!!…効果で1枚ドロー」

1【アーマーバット】LV1(1)BP1000

1 「アーマーバット」LV1(1) BP1000

1 「仮面ライダーナイト」LV3(6) BP6000

2、3体目のアーマーバットと、デッキの上に戻されたナイトが召喚される。ナイトの召喚時効果により、ナイトサバイブのカードもデッキから手札に加わる。

しかし、当然その情報はイカヅチにも筒抜けであつて……

「アタックステップ、アーマーバットでアタック!!」

アーマーバットが飛翔する。目指すは当然イカヅチの残り3つのライフだ。

「オマエの考えてる事はわかる!!…アーマーバット2体の攻撃、ナイトサバイブの連続アタックで勝機を掴む気ではいるんだろ？」

「!!」

「それを分かつてて煌臨させる馬鹿はいねえよな!!」

堂々と構えるイカヅチは、そのまま手札にある奥の手だったカードを引き抜いた

………

「フラッシュマジック、レーザー引力光線!!」

「!!」

「不足コストはネクサスから確保。この効果でアーマーバット1体を手札に、さらにソウルコアをコストとして支払った場合、ギドラの名を持つスピリット1体を回復させる!!…起き上がれギドラ!!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】（疲労??回復）

レーザーがアーマーバット1体を貫き、たちまち粒子化させて手札へと強制帰還させた。さらにソウルコアの力が加わった事により、メカキングギドラがリブート。そしてイカツチの真の狙いはこの回復であり……

「アタイの奥の手、とくと味わいな!!…メカキングギドラさらなる効果!!…赤か白のスピリットが回復した時、このスピリットの召喚時効果を発揮させる!!」

「!？」

「残ったアーマーバットをデツキの上へ、そしてナイトは破壊する!!」

真ん中の首から放たれる白い光線がアーマーバットを貫き、両サイドの首から放たれる電撃がナイトを破壊した。

これで又してもロンの場合はガラ空き。煌臨元がいなければ切札のナイトサバイブも呼ぶ事ができない。イカツチのギドラデツキのカウンター能力には誰もが度肝を抜かれていた……………

ただ一人、このロンを除いてはの話だが……………

「フツ…………」

「ツ…………オマエ、何笑ってんだ」

「やはりな。これまでの戦い方からして、あんたのデツキがカウンター型である事は承知していた。そしてそれに伴う破壊を待っていた…………!!」

「なに!?!」

「破壊後のバースト発動、天冥銃アーミラリー・スファイア!!」

ロンが伏せていたバーストが遂に発動される。それはいわゆる銃ブレイヴと呼ばれ

る存在、魔法陣と共にそれは出現した。

ー【天冥銃アーミラリー・スファイア】LV1(6)BP3000

「効果でメカキングギドラのコア2つをリザーブへ!!」

「くっ……アタイのカウンターにカウンターを仕掛けるとは良い度胸してるじゃないか………だがその程度のバーストじゃアタイのギドラは倒れないッ!!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】(6??4)

紫のオーラがメカキングギドラに纏わり付く。そのコアが2つリザーブへと叩き出されるが、そのLVはまだ最大の2をキープしている。

「だろぅな。だからこそコレがある。【煌臨】発揮、対象は天冥銃アーミラリー・スファイア!!」

「ッ……ブレイヴを対象に煌臨だど!?!」

アーミラリー・スフィアのような銃ブレイヴには「装填」と言って、煌臨スピリットの煌臨元になる効果がある。今回はその効果が発揮され、ロンのナイトサバイブの煌臨が成立した。

さらに巨大な魔法陣が形成されたかと思えば、そこからメカキングギドラに倒されたナイトサバイブが復活を果たす。

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3(6) B P 16000

「さらに煌臨元となったアーミラリー・スフィア自身の効果でナイトサバイブと合体!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+天冥銃アーミラリー・スフィア】LV3(6) B P 19000

いつものナイトサバイブならば登場と共に青き盾に内蔵された騎士の剣を引き抜くが、今回はそれを行わず、代わりにアーミラリー・スフィアを握り締めた。

「まだまだ!!…ナイトサバイブの煌臨アタック時効果でメカキングギドラのコア2つをと

ラッシュユヘ!!

「ッ……!!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】(4??2) LV2??1

天冥銃を握るナイトサバイブの銃撃。疾風の力が込められた紫の弾丸は見事にメカキングギドラへと命中。そのコアが又しても打ち抜かれ、LVダウンに陥ってしまう。

「そしてアタック!!…再び効果を發揮させ、今度こそギドラを討ち取る!!」

「ッ……ギドラ!!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】(2??0) 消滅

放たれる二発目の弾丸。メカキングギドラは身体を中心に打ち抜かれ、その中に眠るコアを全て弾き出されてしまい、たちまち消滅してしまう。

「これでブロッカーは消えた!!…ナイトサバイブLV2、3の効果でカードを3枚ト

それにより、イカツチのBパッドから敗北を告げるように「ピー……」と無機質な機械音が流れる。

勝者はロンだ。誰もがそう認識した時、観客達から盛大な声援が上がって来た。その中には先程彼らをコモンだからと見下していた者もいた。その様子を見て、この国は少しずつ変わって来ているのだと、アスラとロンは自覚していた。

その後は叙勲式の続き……と言つてもこれまでの栄光を称えた小さなメダルをもらっただけだが、何はともあれ、それを終えると、今年の叙勲式は完全に終わりを迎えたのだ……

「ハッハッハ!!…負けた負けたー!!…やるな頂点王の息子、いやロン!!…カラーカードを5つも獲得してるだけの事はある」

「どつても」

時刻はすっかり夕焼けが小焼けする頃。バトルも叙勲式も終わり、一旦スタジアムを後にしていたアスラ、エール、ムエ、シイナ、ロン、イカツチ、スピーカー。

ロンを気に入ったのか、イカツチが彼の背中をバシバシ叩きながらそう言った。

「ロン、また強くなりやがってコノヤロー!!…絶対に追い抜くからな!!」

「フツ…来るなら来い。いつでも叩き落とす」

「さつきも聞いたわね」

アスラとロンの全く同じ会話の流れにエールがツツコム。しかしアスラだけでなく、エールもロンの成長速度に驚いていた。何せ自分と光黄2人がかりでようやく倒せたあのイカツチを単体で撃破したのだから……………

「そんじゃオレ様は先にライライ町に帰るぜ。オマエの挑戦待ってるぜスマールBOY!!」

「誰がスマールっすかぁー!!」

「ハツハツハ!!…GOODBYE!!」

スピーカーがハーレーのようなバイクに乗り、高らかにエンジン音を上げながら去って行った。

「ほんじゃ、アタイも次の町に行くとするか。じゃあな、次会う時はもつと強くなつとけよ」

「それはこつちのセリフだ」

「フツ…言うじゃねえか」

イカツチも最後にロンと話すと、この場を立ち去っていく。

「相変わらずぶっ飛んだヤツだったわね」

「でもなんか意外と良い人だと思っぞオレは!!」

「えーどうだろ」

小さくなっていくイカツチの背中を見ながら、アスラとエールがそう会話した。アスラは少なくともイカツチがただ純粹にバトルを楽しんでいるようにしか見えなかったため、これと言った悪い印象は無かったのだ。

(……ロンもそうだが、もう一人のアスラとか言うヤツ……あいつもアタイを楽しませ

てくれそうだね〜……やはり汚い仕事から足を洗って正解だったよ……こっちの生活の方が断然楽しいじゃないか)

歩いていくイカツチが内心でそう考えた。

そう。頂点王の息子はもう1人いる。イカツチは密かにロンだけでなくアスラにも期待していた。

「てなわけで!!……4人でライライ町戻るよ〜」

「むえ〜」

一段落したところでオレンジの小動物、ムエを抱えながらシイナが口を開いた。

「いや、だからシイナ。オレは最後の町に行かないと」

「ダメダメ!!…アスラのカラー戦見届けるまででは絶対逃さないぞー!!」

「相変わらず強引な」

無理矢理ロンの手を引っ張るシイナにエールがツッコんだ。しかし、ロンとて別にア

スラのカラー戦に興味がないわけではない。かなりの寄り道にはなるが、今のライバルの実力を見るのは悪くないと思えて来て……………

「……………仕方ない。このチンチクリンのカラー戦が終わるまでですよ」

「誰がチンチクリンだロンコノヤロー!!」

「ハツハツハ!!…よし、決まりイイイー!!…そんじや飯行くぞ飯!!…奢るよ」

喧嘩するアスラとロンの首周りに自分の腕を回しながらそう言ったシイナ。エールはそれを見て、シイナがどれだけあの2人を大事に思っていたのかがわかった。

そう思うととても微笑ましくて……………

「ハハ!…楽しそうですね、シイナ様!!」

「当然!!…よし行くぞ!!」

「つしやあ!!待ってるよ黄色のカラーリーダー、スピーカーさん!!…黄色のカラーカード、絶対オレも手に入れてやるぜ!!」

後1日でバトルができるくらいには回復できるアスラ。倒さなければならぬ強敵

はたくさんいるのは今日でわかったが、一先ずは目先のカラーリーダーを倒す事を目標に掲げ、そう叫ぶのだった……………

時同じくして、ここは国から外れた場所にある崩れ去った廃墟。そしてそこはライダーハンターズの隠れ家でもある。

あの洞窟での激闘から実に1週間経ったか、オロチは未だに気を失っていた。バトルスピリッツで二度連続敗北した事や、彼自身が謎の進化を遂げた事が大きな要因だろう……………

そしてその夢の中、彼はある事を思い出していた。それはあの時、アスラと激しいバトルを繰り広げながら言われた言葉だ。

……………

「『オレとオマエは似ている!!…同型のライダースピリットに選ばれたのも納得だ

!!
』

―『……………似てねえよ』

―『ああ?』

―『似てねえよ!!…一緒にすんな!!…オマエ、なんでそんなに強いのにまともなやり方で見返そうとしなかったんだ!!…なんでそんなスゲエカードに選ばれたのにそんな這い上がり方しかできなかった!!』

―『なツ!?!』

―『オレはオマエとはチゲエ!!…何がなんでも頂点王になって、必ずコモンでも、ソウルコアが使えなくても強くなれるって証明してやる!!』

―『黙れエエエー!!!…それはこの世界の主観が生んだ愚かな考え方だ!!…そして、そんな淡い希望を抱く者をぶっ殺す事ほど楽しい事はないツ!!』

―…

―『うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!…何故だ、何故だアアアー!!!!!!…オレは強くなつたんだ…他のヤツらから強力なカードを奪い、強くなつたんだアアアアアアー!!!!!!』

「……………？」

夢の中で大きな疑問を抱いたオロチ。しかしその途端にようやく目を覚ます。その目がゆっくりが開眼すると、そこにはライダーハンターズ最強の男、トウエンティがいた。

「よお、元気だったか。どうだ、このオレと戦わないかトウエンティ」

「フツ……………開口一番がそれか、オマエらしいな」

相変わらずなオロチに、トウエンティはそう言いながら彼のデツキを渡す。オロチはそれを受け取るなりある事に気がついて……………

「ツ……………王蛇がいねえ……………」

「ああ、何故か消えていた」

そう。己のデツキの象徴でもあった「仮面ライダー王蛇」のカードが消え去っていた。トウエンティがライダースピリット欲しさに奪った可能性もあるが、そうだとしたらこの場にはいないだろうし、何やり話し方からして嘘はついていない事は一目瞭然だった。

「まあ居なくなつてもしょうがねえか。オレは負け過ぎた。愛想尽かしたんだろうな
……………なあトウエンティ、オレ達は「仲間」か？」

「?……………何だそのオマエらしくない青臭い質問は」
「いや、単純に疑問を抱いただけだよ。どうなんだ？」

トウエンティはオロチからの妙な質問に少し戸惑いを見せながらも回答する。

「少なくともオレはオマエやイバラの事を仲間だと思つた事は一度もない。何せオレ達
はどちらが先にライダースピリットを20枚集めるか競争しているからな」

「フツ……………ああ、やつぱさそうだよな」

「?」

トウエンティの回答を耳に入れるなり、オロチは立ち上がる。

「じゃあなトウエンティ。オレは今日限りでライダーハンターズを辞める」

「なにつ!？」

「主任にはめんどくさくなつたとしても言つとけ、次はお互い戦場で会おうや」

衝撃的なオロチの発言。ついこの間まではここに居るから自分やウィルと言つた強敵といつてもバトルできるから楽しいだとか言っていたあのオロチがだ。トウエンティにとつてにわかには信じられなくて……………

「オマエ…………アスラに何を言われた…………!？」

「ああ?…それはあのクソチビの名前だったか?…………別に何もねえよ、ただバトルするたびに殺してたらそのうちバトルができなくなる事に気がついただけだ」

「ツ…………それを気づかせたのがアイツなんだろ!?!…………違うのかオロチ!!」

「その焦りよう、まるでオマエはアイツに何かを変えられたような言いぶりだな」

「ツ……………違う……………違うオレは…………!!」

オロチにそう言われ言葉を詰まらせるトウエンティ。オロチがアスラと接触していた事を知っていたため、無意識に言った言葉だったが、オロチの言う通り、確かにまるで己もあのソウルコアが使えない欠陥品のような少年に何かを変えられたと言っているようにも聞こえて……………

「取り敢えずオレは出るぜ、じゃあな」

「おい……………話はまだ終わってない。待てよオロチ!!」

トウエンティの制止は聞かなかつた。オロチは瓦礫の山を飛び越え、ライダーハントーズの隠れ家を……………いや、ライダーハントーズそのものを出て行った……………

そしてこれらのやり取りを物陰で眺めていた人物が1人……………それは誰が見ても絶世の美女と呼べる存在、イバラだった。

「トウエンティもオロチも、アスラ君に何かを変えられた……………ふふ、ますます興味が沸いて来たわ……………最近本当に楽しい。でも私が永遠の若さを手にしたら他のみんなは老けていくのかしら?」

最近、イバラは心のどこかで感じていた。

……『自分だけ永遠に生きていても良いのか?』と、確かにそれが自分の願いだ。しかし、せつかく仲良くなった……と、彼女が勝手に思っているエールやアスラもいずれは老けて死ぬ。

他の人にもそれは等しく言える。はたして自分だけが若く生き残っている世界は楽しいのかと密かに勘ぐっていた……

3 2 コア「黄カラー戦!! VS ホーリーエンジェモン&エンジェウーモン」

「色々あったけど、みんな今日は叙勲式お疲れ様〜…さあさあ私の奢りだよ〜!!…どんと食べておくれ〜!!」

「うおおお!!…ありがとうございまアアアす!!」

「うるさいぞアスラ」

ここはライライ町。その中にある超高級ホテル。そして時刻は夜。

オウドウ都での叙勲式を終えたアスラ、ロン、エール、シイナ、ムエの4人と1匹は今日をここで一泊する予定だ。もちろん費用は全て頂点王のシイナ持ち。

そしてその翌日には怪我を回復させたアスラが遂に4番目となるカラーリーダー、スピーカー・ヘブンに挑戦する。シイナが長いテーブルに所狭しと並べさせた料理の数々はその景気付けとも言える。

「うおおお!!…どれも味が高級過ぎてわからん!!」

「あんたもうちよつと黙って食べれないわけ?…まあいつもの事なんだけど」
「むえ〜」

「あつはは!!…アスラは昔から喧しいからな〜」

勢い良く食べ物にがつついていたアスラが目をキラキラと輝かせながら味の感想を述べる。おそらくこれらの食べ物は高級過ぎてアスラやロンなどのコモンは普通に生きていくだけでは決して味わう事はできないであろう。

「にしても明日はいよいよスピーカーとのバトルか。アスラ、何か作戦はある?」

「おお!!…んなもん気合と直感でドカーンよ!!」

「よし!!頑張れよ!!」

「いやいや、『よし!!』じゃないですよシイナ様…ちよつとバカスラ!!…あんた少しは何か考えないよ!!」

明日行われる黄色のカラーリーダー、スピーカー・ヘブンとの対決。アスラはいつもの直感でどうにかくぐり抜けるつもりでいた。非常に彼らしいと言えばそうだが、裏を返して言えば無鉄砲とも言える。

「スピーカーさんのデッキ知らないんだからしようがねえだろ。知つても何かずるい気がするし、そんな時になつたら考えるって」

お気楽な考え方であるアスラ。しかし、カラーリーダーの中でも有数の実力を誇るゴゴ・シラミネに勝利したとは言え、スピーカーにも必ずしも勝てるとは言い切れなくて……

「んー……そうだな。じゃあ一言だけ情報を教えておくと、カラーリーダーは3枚以上のカラーカードを持つ相手には本気のデッキでバトルするんだ」

「……………どう言う事?」

「ツ……そう言えばヘラクレスはエレンお兄様とバトルした時は間違いなく本気のデッキだったわね」

シイナからのちよつとしたアドバイス。カラーリーダー達はカラーカードの所持枚数が3枚未満の挑戦者には本気のデッキではバトルをしない。

今思えばそうだ。エールが思い出したように、最初にバトルした緑のカラーリー

ダー、ヘラクレスがエレンとバトルした時、彼はアスラ戦では使わなかった究極体、「ヘラクルカブテリモン」を使用した。おそらくあれが彼の全力だったのだろう。

「まあ要するに、スピーカーはカラーカードを3枚持つてるアスラには本気の全力で来るって事だね」

「あーはいはい。なるほどなッ!!…どつちにしろオレはカラーリーダー達に全力を出してもらいたいんだ!!…願ったり叶ったりだぜ………うおおお!!でも熱いバトルができると思ったら燃えて来たアアア!!…ロン、今からバトルの特訓手伝えよ!!」

「嫌だ」

「何で!?!」

「暑苦しいから」

翌日がバトルだと言うのに怪我が治った当日、前日の夜に特訓をしようとするアスラ。ロンはそんな彼のノリが嫌なのか、クールな表情を浮かべながらあっさり拒否する。

「じゃあエール頼む!!」

「嫌よ」

「オマエも!?!…じゃあシイナは!?!」

「アスラく頂点王には三王に勝ったヤツだけが挑んでいいんじゃないかなかったつけく?」

「ぐつ…そりやそうだ。じゃあねく朝っぱらに1人でやるか」

エールもシイナもアスラとの特訓を拒む。アスラは結局己のデッキを見直す程度の事しかできなかった。

「うおおおー!!!!…なんてデツケエお風呂なんだアアアー!!」

「アスラうるさい。頭に響く」

「スーミ村の実家にある風呂が可愛く見えちまうぜ」

夜の食事を終え、お次は入浴タイムだ。アスラとロンの幼馴染み2人は高級ホテルの男湯に来ていたのだが、それが凄かった。金箔がこれでもかと張り巡らされた広大な風呂場は、アスラが驚くには余りにも十分で。

「おい見ろよロン!!…アレってきつとアレだろ。噂で聞いた熱さの我慢比べするヤツ……………えーっつと……………サウザー!!」

「サウナな。そして熱さの我慢比べする場所でもない」

「何だっていいさ!!…っしやぁロン!!…そうと決まればあそこでどつちが我慢できるか勝負だアアアー!!」

「やらない」

サウナ室を見つけるなりロンとの対決を希望するアスラ。新しい物を見ては興奮する様子は正しく典型的な田舎の少年だ。

「……………ほほう。特訓に誘った時も思ってたけど、さてはオマエ、オレに負けるのが怖いな？」

「ッ……………!!」

アスラがロンを軽く挑発する。ロンの眉毛がピクリと反応した。そしてそれと同時に彼は自分がこのチビでバカなヤツに心底腹を立てている事を理解する。

「いいだろう。蒸発しても悪く思うなよ?」

「サウザーに入ったら蒸発すんの!」

……………「このバカな幼馴染みだけに負けるわけにはいかない」そう思いながら口
ンはアスラと共にサウナ室へと足を運んだのだった。その後は予測できる通り、男達の
文字通り暑苦しい対決が幕を開けて……………

「ふあああ〜……………いい湯だった〜!!」

時は少しだけ経ち、男湯と女湯の入口の狭間、そこにあるソファで湯上りのエールは
気の抜けた声が出てしまった。

さつきまではシイナとムエと入っていたが、未だに走り回って遊んでいたため、自分
だけ早々に湯船に漬かり、上がって、こうして待つことにしたのだ。

そしてワンチャン横の男湯からアスラが出て来ないかな……………と、思っていたり……………

(いや、まあ一応明日カラー戦だし……応援してやらなくもないわ……べ、別にあんなバカスラの事なんて何とも、何とも思っていないし……!!)

本当はバカで無鉄砲で真っ直ぐでカツコイイアスラが好きで仕方ないが素直になれないエール。

そんな時、男湯の扉が開いた。エールは出てきたのがアスラだと思い、咄嗟に声を上げるが………

「あ、アス………なんだあんたか」

「……確か、いつもアスラと一緒にいるエックスの女か。確か究極進化が出来ない」

「フン、そんな事とづくにできるようになったわよ!!……てか私の認知度低くない!?!私エックスよ!!」

「そうか」

出てきたのはアスラではなくロンだった。エールは内心で「期待して損した」と考えながら肩を落とす。

地味に彼らはこれまで関わった事はあるものの、一度も会話を交わした事がない。今回でようやく初めて言葉を交わす事となった。

「……て言うかロン……だったわね、アスラはどうしたのよ? ……一緒にお風呂入ってたんじゃないの?」

「アスラはオレとサウナで我慢比べの勝負をした結果気を失ったから水風呂に放り込んで来た」

「はあ!?! ……何やってんのよあんた達!?!」

「何って、熱さの我慢比べだけど……?」

「いや、それはわかるけど……」

あのサウナ室での決闘はロンの勝利だったようであり、ロンは敗北したアスラを水風呂に叩き込んだ後にごうしてようやく男湯から脱出を果たしたのだ。

「あんた、意外と負けず嫌いよね………そんなにあのバカスラに負けたくないわけ?」
「まあな」

エールがロンのアスラに対する対抗心に疑問を抱く。普段は口数の少ないロンだが、今回は初絡みであるエールに意外にもその理由と己の考えを語り出して……………

「オレとアスラは昔から一緒に暮らしていたからか、よく比べられていた……………そしてその全ての人はオレの方が凄く、優れていると言った……………生まれた時からライダースピリットに選ばれていたのが理由だろう。けど違う。本当に凄くのはオレじゃない……………あいつの方がだ」

「ッ!!」

「あいつは初めてバトスピした5歳の頃から自分はソウルコアが使えない事を知った。だが、あいつは曲げずに誰よりも努力をして今の自分を作り上げた。本当に凄くのはあいつだ。だからこそオレはあいつには負けない。あいつをも超えてオレは頂点王に立つ……………!!」

生まれた時からアスラを見てきたロンからの言葉。天才と呼ばれていた彼でもそれなりの葛藤があったのだとエールは感じる。そして改めてアスラの凄さを理解した。

ロンは天才だから強いのではなくて、何事も諦めたりしない不屈の魂を持つアスラと言う熱血漢と競い合ったからこそ強いのだと彼女の頭の中にスツと入って来た。

「……………ツ!？」

「え……………ちよ、ちよつと!？」

アスラの最大の好敵手であるロンの気持ちも少しだけ理解出来たエールだったが、その直後にロンは何故か気を失い、エールにもたれ掛かってしまう。エールはいきなり過ぎて思わず少しだけ顔が赤くなる。

だが、急に倒れた理由は直ぐに判明して……………

「こいつ体熱!?……………もしかしてアスラとサウナ室で我慢比べの勝負をした時に結構無理してたとか??……………だとしたらただけ負けたくなかったのよ……………」

アスラとの我慢比べでとつくに限界を迎えていたロン。エールはどうかして運びたいが、自分の力ではどうしても長身のロンは背負えない。取り敢えず自分が座っているソファに寝かせようとするが……………

そんな時、今度は女湯の扉からオレンジ色の小動物、ムエを頭に乘せている頂点王シイナが現れて……………

「ん？……エールちゃんにロン？」

「ああシイナ様。ちょうど良かった、こいつを運ぶの手伝ってください」

タイムリーだと思い、エールはシイナに助けを求めるが。シイナはその様子にニヤついで……

「あらあら……エールちゃん……まさかアスラからロンに!!……ふふ、いいよ……私はアスエーでもロンエーでもどっちでも楽しめちゃうよ!!」

「違うわよ!!……て言うかなんですかその略称!!」

エールの好意がアスラ以外の誰かに動くことは無いと思っているシイナだったが、この状況は美味しいと思い、彼女をからかう。

「オウドウ都からロンを連れてきて良かったよ……まさか3人の修羅場を拝めるなんて」「どうでも良いですから早く手伝ってください」

自分の息子的な存在であるアスラとロン。妹的な存在であるエールのドラマチックな場面に沢山遭遇できてとてもご満悦な様子である頂点王シイナ。

その後も彼らは楽しく高級ホテルでの一泊を満喫し、明日に控えたアスラの黄色のカラー戦に備えたのだった……………

翌日。遂にアスラの挑戦の時が訪れる。一行は昼頃に黄色のカラーリーダー、スピーカー・ヘブンの待つライライ町のスタジアムへと足を向ける。

そしてロンやエール、頭にオレンジの小動物、ムエを乗せた目標である頂点王シイナまでもが見ている状況の中、アスラはクシでトサカのような金髪を整えているスピーカーと対面した。

「HAYミニmamBOY!!…よくオレ様のスタジアムに来たな!!…もう怪我はOKかい？」

「誰がミニmamBOYですかアアア!!…怪我はこの通りイイイ!!…てゆうか昨日の時点で全然治ってましたアアア!!」

アスラは昨日まで包帯が軽く巻かれていた腕をスピーカーに見せつけながらそう叫んだ。オロチとの戦いでボロボロになったアスラの身体はここ数週間の休暇で完全に回復を果たしたようだ。

「WOHHHH!!……そいつは良かったぜBOY……そんじゃ早速、鉄壁の三番手、ゴゴ・シラミネを突破したそのPOWER、見せてもらおうか!!」

「おうっす!!……絶対に勝つてまた一歩、確実に頂点王に近づいて見せまアアアす!!」
「……………なんかあの2人が揃うと、より一層喧しいわね」

カラー戦のバトル前にテンションが徐々にハイになっていくアスラとスピーカー。大声で叫びながらもコミュニケーションを交わしていく2人にエールは軽くツツコミを入れる。

「さてと……スピーカーの黄デツキはある意味ゴゴのじっちゃんより厄介なんだよな」
「そうですね」

「??……どう言う事ですか?」

「まあ、エールちゃんも見てたらわかるよ……さあ息子アスラ。どう攻略して前に進む？」

「むえ〜」

スピーカーのバトルスタイルやプレイングを熟知している頂点王シイナがそう言った。彼とバトルを行ったロンは相槌からして理解しているようだが、エールはわかっていないようで、頭にハテナの疑問符を浮かべていた。

そして彼らでそのような会話が行われていた中、アスラとスピーカーは互いのBパッドを構え合い、己のデッキをセットした。これで準備は万端、いつでもバトルを開始できる。

「へへ、いっちょよそんじややりますか黄色のカラーリーダー様!!」

「OK!!…カラーカードを3枚持っている以上、オレ様はオマエに容赦はしないぜベイビー!!」

「ハナっから容赦してもらおう気もねえ!!…行くぜ!!」

……ゲートオープン、界放!!

最大のライバルロンや、目指すべき目標、頂点王シイナが見守る中、アスラとスピーカーの黄色のカラー戦がコールと共に幕を開けた。

先行はアスラだ。怪我のせいで対面でのバトルができず、ストレスが溜まりっぱなしだったここ最近。その鬱憤を晴らそうとするかの如く気合を入れ、凄まじい勢いでターンシークエンスを進めていった。

「ターンオー」アスラ

「へへ、久し振りにオレのターンだぜ!!……来い、ミラーワールド!!」

ー【ミラーワールド】LV1

アスラの配置したネクサスにより、周囲の景色が鏡向きに変更される。

「WOHHHH!!……聞いてた通り!!……オマエもこのロンと同じタイプのライダースピーリットを使うんだな!!」

「おうっす!!……このデッキと共に1番を取って見せまアアアす!!……ターンエンドッ!!」

手札：4

場：【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

何はともあれ先行の1ターン目はミラーワールドの配置とアスラの1番宣言で終わりを迎える。

次はこの国の黄色のカラーリーダー、スピーカー・ヘブンのターンだ。

「ターン02」スピーカー

「WOHHHH!!……オレ様のファーストステージ!!……オレ様は黄色の成長期スピリット、第二のプロットモンをサモンするぜHYEAHH!!」

「ツ……デジタルスピリット!!」

「な、何よアレ……か、可愛いじゃない……!!」

ー【プロットモン「2」】LV2（2S）BP2000

注目されるスピーカーの初手はデジタルスピリット、その内の成長期、犬型のスピリットであるプロットモンだ。その愛くるしい表情と仕草でエールは少しばかり胸を打たれる……………

「HAY!!可愛いだけじゃないんだなYEAH!!…サモン時効果でデッキの上から3枚をオーブンザカード!!…その中の対象カードをゲット!!」

第二のプロットモンに内蔵されている効果は成長期スピリットではよく見かけるサーチ効果。スピーカーはその効果を駆使し、デッキから新たなるカードを加えて見せた。

「さらにバーストを伏せ、ファーストステージはこれにて終了だぜい！」

手札：4

場：【プロットモン「2」】LV2

バースト：【有】

それだけで貴重なそのターンを終えるスピーカー。次は再びアスラの番だ。久しぶりのバトルに腕が鳴っているのか、如何にもいつもより果敢に攻めていきますつと言った表情のまま、そのターンシークエンスを進めていって……………

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!…………ミラーワールドのLVを2に上げ、ゴラドンと龍騎を召喚!!」

ー「ゴラドン〈R〉」LV1(1)BP2000

ー「仮面ライダー龍騎」LV1(1)BP2000

小さな怪獣ゴラドンと、赤きライダースピリット龍騎がアスラの場合に姿を見せる。

「龍騎の召喚時効果、カードを3枚オープンし、その中の対象カードを加える!!」

この効果で捲られたのは「龍騎サバイブ」「仮面ライダー龍騎」「2」「ガードベント」

.....
アスラはその中の「龍騎サバイブ」と「ガードベント」を手札に加え、残りはトラッシュへと破棄した。

「バーストをセットしてアタックステップ!!…龍騎でアタック、さらにミラーワールドの効果でデッキの上から1枚オープン。それがアドベントカードなら発揮できる!!」

ミラーワールドの効果が発揮される。アスラのデッキからオープンされたカードは「ストライクベント」………よってこの効果を彼は発揮させて………

「つしやあ!!…ストライクベントの効果でプロットモンを破壊して1枚ドロ―だ!!」
「!!」

龍騎はベルトからカードを引き抜き、その1枚を左腕のバイザーに装填。「ストライクベント!!」の音声と共に赤き龍の頭部を模したガントレットが右手に装備される。

そして龍騎はそれを前方に突き出し、火炎放射を放つ。プロットモンは焼き尽くされ、堪らず爆散した。

「よし!!」

『よし!!』じゃないわよ!?!:あんな何であんな可愛いスピリットを破壊したわけ!?!」

「バトルだからだよ!?!:てゆうかどっちの味方アアア!?!」

愛くるしかったプロットモンの破壊に少なからずショックを受けるエール。問答無用で倒したアスラに愚痴を零す。

そんな彼らが軽く言い争ってる中でも龍騎は果敢にスピーカーのライフを打つべく走っていて……………

「破壊にドロ、GOODなアタックだ!!:…いいぜ、それはライフで受けてやる!!
…………ツ」

へライフ5?!4!スピーカー

龍騎の拳がスピーカーのライフを1つ粉碎。ガラスが砕け散るような甲高い音がこだまする。

これにより先制点を与えたのはアスラだ。彼の優勢には間違いないかった。しかし、スピーカーは何故かそんな中でニヤリと口角を上げており……………

「HAY!!…エクセレントなアタックをサンキュー!!……………だけどバーストを全く警戒してないのはナンセンスだぜ!!」

「!!」

「ライフ減少のバースト、イマジナリーゲート!!……………これでオレ様は黄色のスピリットをノーコストでサモンできる!!」

勢い良く反転したスピーカーのバーストカード。アスラとて警戒していなかったわけではない。オロチとの戦いの経験から、序盤でそれを使わせてしまおうと思いつき、覚悟の上で龍騎でのアタックを行った。

しかしその結果としてスピーカーの持つ強力なスピリットの召喚を許してしまうわけだが……………

「手札からノーコストでサモン!!…黄色の完全体スピリット、ホーリーエンジェモン!!」
「!!」

1 【ホーリーエンジェモン】 LV 3 (3S) BP 12000

天空より現れし光のゲート。その中より現れたのは白き翼を羽ばたかせる優雅な大天使。右腕に装着された紫色の剣を構え、アスラとそのスピリット達と対峙する。

「……黄色の完全体のスピリット……カッケエなコノヤロー、ターンエンドだ!!」

手札：5

場：【仮面ライダー龍騎】 LV 1

【ゴラドン〈R〉】 LV 1

【ミラーワールド】 LV 2

バースト：【有】

明らかに強力な力を持つであろうホーリーエンジェモンの登場により、確実に劣勢に立たされた事を自覚するアスラだが、それと同時にバトルを楽しんでいるのか、目をキラキラと輝かせながらそのターンを終える。

おそらく強い相手を前にしてその闘志を熱く燃やしているのだろう。

「ターン04」スピーカー

「メインステツプ!!…オレ様のセカンドステージ!!…オレ様のデッキで強いのはホーリーエンジエモンだけじゃないぜYEAH!!」

どんどんテンションを上げていくスピーカー。その手札から新たなスピリットカードがBパッドに叩きつけられる。

そのスピリットはホーリーエンジエモンと並ぶ彼のデッキの双壁であり……

「ホーリーエンジエモンのLVを3から1に下げ、黄色の完全体スピリット、エンジエウーモンをサモン!!」

「ツ!?!…2体目の完全体スピリット!?!」

1【エンジエウーモン】LV1(1S)BP5000

上空より優雅に舞い降りながらホーリーエンジエモンの横に現れたのは大天使の1

人、まるで天女のような姿をした黄色の完全体スピリット、エンジェウーモン。

「思ってたより展開が速いな……アスラにはあの2体が揃う前にさっさとライフを破壊して欲しかったところだったけど……」

「？」

バトルを観ているシイナがそう言葉を落としました。エールはスピーカーと言う人物を知らないため、何が何だかわからなかったが……

その理由はまもなく判明する事になる。

「エンジェウーモンサモン時効果!!……LV1の相手スピリット全てを手札に戻し、その数だけライフを回復する!!」

「なに!？」

へライフ4??6<スピーカー

現れたエンジェウーモンの召喚時効果が炸裂。全身から放たれる黄色い波動にゴラ

ドンと龍騎が粒子となってアスラの手札へと帰還してしまう。

さらに効果はそれだけでは終わらず、スピーカーのライフを一瞬にして2つも回復させた。

「スピーカーの得意戦術はライフの回復。バトルが終わった時にあいつのライフが5を超えているなんてザラにある事さ」

「あだからゴゴ・シラミネより厄介……………」

「そう言う事。長期戦になればなるほど有利になる。逆に長期戦になるにつれ不利になるアスラの速攻テツキとは水と油みたいな感じだね」

シイナがエールに説明する。

スピーカーのバトルスタイルはライフの回復。アスラは速攻でライフを削り切らなければこのバトルが不利になる事を頂点王シイナは最初から見抜いていた。

「HAYEE!!…お待ちかねのアタックスステップ!!…言つて来いホーリーエンジェモン!!…効果でまたまたライフ一つを回復!!」

「ツ……………それでもライフ回復できんのかよ!?!」

〈ライフ6??7〉スピーカー

今度は最初に現れた完全体、ホーリーエンジェモンが攻撃を仕掛けるべく飛翔した。その瞬間にまたしてもスピーカーのライフが1つ回復する。

そしてメインステップの時点でアスラのスピリット全ては手札に戻されてしまったためブロックができなくて……………

「ライフで受ける!!……………ッ」

〈ライフ5??4〉アスラ

ホーリーエンジェモンの右腕の剣が一閃。アスラのライフ1つを斬り裂く。しかし、その行為はアスラのバーストの発動条件でもあつて……………

「今度はオレのバーストだ!!……………アドベントドロー!!」

「!!」

「効果でBP7000以下のエンジエウーモンを破壊!!…コストを支払って2枚ドロ
だ!!」

勢い良く反転されるアスラのバーストカード。隕石のような火炎弾が急降下し、エン
ジエウーモンを撃墜しようと試みるが……

「甘いぜベイビー!!…エンジエウーモンの効果!!…天霊スピリットが効果でフィールド
を離れる時、オレ様のライフをそのスピリットに置く事で場に残す!!」

「!?!」

〈ライフ7??6〉スピーカー

ー【エンジエウーモン】(1S??2S) LV1??2

スピーカーのライフが消滅。それはエンジエウーモンの前方に巨大な姿となつて再
び現れ、火炎弾より彼女を守る。

「WOHHHHH!!……その程度のカウンターじゃオレ様にこれ以上傷はつけられないぜ
YEAHHH!!……セカンドステージはこれで終わり、ターンエンド!!」

手札：3

場：【ホーリーエンジェモン】 L V 1

【エンジェウーモン】 L V 2

バースト：【無】

強力な効果を持つ完全体を2体並べ優勢に立ったスピーカーはこのターンをエンドとする。

次はアスラのターンだ。反撃するべく、そして全てのライフを破壊すべくそのターン
シークエンスを進行させていった……………

【ターン05】アスラ

「メインステップ!!……ゴラドン、龍騎。でもってドラゴンヘッド2体を召喚!!」

ー【ゴラドン〈R〉】 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

- ┆【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP2000
- ┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000
- ┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

アスラは手札に戻ったスピリット達を再召喚。さらにドラゴンの頭部のみで活動するスピリット、ドラゴンヘッドもその小さな姿を見せる。

そしてアスラは龍騎の召喚時効果で新たなカードを手札に加えた後に、立て続けに手札のカードを引き抜いて……………

「さらに!!…オレは龍騎サブイブをLV2で召喚!!…不足コストはミラーワールドとドラゴンヘッド2体から確保、よって消滅!!」

「!!」

アスラの場に赤きライダースピリット、龍騎が現れる。

その龍騎はベルトにあるカードデッキからカードを引き抜くと、瞬間に烈火の如く炎が燃え上がり、その中で龍を模した銃器にカードを装填……………

……サバイブ!!

1【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(2) B P 11000

龍騎はさらなる強化形態、仮面ライダー龍騎サバイブとなり、アスラの目の前に現れた。その大きなコストの対価に伴い、2体のドラゴンヘッドは消滅してしまう。

「へえ……アレがアスラのサバイブか……!!」

「そう言えば黄金の翼のカードってシイナ様が見つけたのよね?……どこで見つけたの?」

「ん?……ああ、コラボダンジョンでねちよろつとね」

アスラの龍騎サバイブを初めて拝める事となったシイナ。自分のあげた黄金の翼のカードがこんな強力なカードになるとは思ってもいなかっただろう。

「アタックステップ!!……ライフが増え続けるならそれ以上にライフを砕くだけで、龍騎サバイブでアタック!!……効果でホーリーエンジェモンを破壊!!」

龍騎サバイブは龍の頭部を模したシャッドガンから烈火の如く弾丸をホーリーエンジェモンに向けて射出するが……………

「破壊されるのはノーサンキュー!!…:エンジエウーモンの効果は他のスピリットにも及ぶ!!…:ライフを犠牲にホーリーエンジェモンを場に残す!!」

〈ライフ6??5〉スピーカー

ー【ホーリーエンジェモン】(1??2) LV1??2

再びスピーカーのライフのコアが消滅、フィールドに巨大化して現れ、今度はホーリーエンジェモンを烈火の弾丸から守り抜く。

「ツ……でも場に残すだけで破壊はした扱いだ!!…:龍騎サバイブに赤のシンボル一つを追加!!」

破壊がダメならダブルシンボルで攻めに出るアスラ。しかし、ダブルシンボルと化し

た龍騎サバイブの強力な攻撃が炸裂するかと思われたその時、スピーカーは手札にあるカードを1枚引き抜いて……………

「フラッシュ【煌臨】 発揮!! ……対象はエンジェウーモン!!」
「!？」

アスラでは決して使う事ができないソウルコアを支払うスピーカー。そしてその刹那の瞬間、エンジェウーモンが溢れんばかりの聖なる光に包まれていつて……………

「H A Y E E !! ……エンジェウーモンを究極体、ホーリードラモンにエボリューション!!」

1 【ホーリードラモン】 L V 1 (1) B P 8 0 0 0

光の中で大きく姿形を変化させたそれは遂にそれを解き放つと、そこにいたのは桃色の身体。10枚の翼を持つまるで神の使いのような神獣ホーリードラモン。

その気高き咆哮がスタジアム全体を包み込んだ。

「今度は究極体かよ……でもまだオレの龍騎サバイブの方が強い!!」

「YEAHHH!!……バトルはBPだけがオールじゃないぜ!!……ホーリードラモンのエボリューション時効果!!」

ホーリードラモンの存在にも果敢に銃を構える龍騎サバイブだが、カラーリーダーであるスピーカーがこんな意味のない場面で究極進化など行おうわけがなく、その効果を遺憾なく発揮させていく……

「煌臨元のエンジェウーモンを手札に戻し、このターンの間、相手スピリット全てのシンボルを0にする!!」

「なに、0?!」

「YEAHHH!!……そうさ。龍騎サバイブのシンボルが増えていようがホーリードラモンはそれを0にしちゃうZE!!」

ホーリードラモンは空間が揺れる程のハイパーボイスを放つ。龍騎サバイブをはじめとするアスラのスピリット達は全てそれに包み込まれてしまい、ライフを破壊するのに必要不可欠なシンボルを失ってしまう。

「龍騎サバイブのアタックはライフで受ける!!」

〈ライフ5??5〉スピーカー

龍騎サバイブがショットガンから烈火の弾丸を放つが、シンボルが無いため、スピーカーのライフはそれをまともに受けても傷一つなかった。

「HAYミニマムBOY……龍騎サバイブはバトル終了時、シンボル分だけ追加でライフを破壊するが、0じゃ意味無いよな」
「くっ………ターンエンドだ」

手札：6

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2

【仮面ライダー龍騎】LV1

【ゴラドン〈R〉】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

スピーカーの言う通り、龍騎サバイブは強力なアタック時効果を有するが、それはシンボルがあつてこそその効果。ホーリードラモンでシンボルにされたこのターンでは少なくとも無力。

アスラは悔しさに歯を噛みしめながらこのターンをエンドとした。

「龍騎サバイブでもライフを破壊できないなんて……」

「コモンで、しかもソウルコアが使えないとは言え、3番目のカラーリーダーを倒した時点で、アスラは他のカラーリーダー達からも一目置かれる。カラーリーダー達は初見殺しじゃ絶対に負けないように、必ず、確実に対策を練ってくる」

いつでも、どんな時でもエースとして敵のライフを破壊して来た龍騎サバイブ。その強力な攻撃が意図も容易く防がれてしまうのを見て信じられないように言葉を零すエール。

その横でシイナが言うように、カラーリーダー達は3番目のゴゴ・シラミネを倒した者に一目置く。4番目以降のカラーリーダー達はこれまでの挑戦者の情報を元に彼らの対策を練ってくるのだ。

「どちらにせよこの先一工夫、二工夫でもできるようにならないと上にはいけないぞ。どうするアスラ？」

アスラがここをどう潜り抜けるのかが楽しみなのか、小さく微笑みながらバトルの方へと目を向け直すシイナ。その横でロンも真剣な目つきでライバルであるアスラのバトルを見つめていた。

「ターン06」スピーカー

「メインステップ!!……オレ様のサードステージ!!……ホーリードラモンのLVを2にアップさせ、エンジェウーモンをデュアルサモン!!」

ー【ホーリードラモン】(1??2) LV1??2

ー【エンジェウーモン】LV2(2) BP7000

ホーリードラモンの煌臨時効果によって手札に戻っていたエンジェウーモンが再び

天女のように舞い降りて来た。

「サモン時効果!!…LV1のゴラドンと龍騎を手札に戻し、ライフ2つを回復!!」
 「くっ……またかよ!?!」

へライフ5??7へスピーカー

エンジェウーモンが全身から放つ光の波動が再びアスラのゴラドンと龍騎を粒子化させ、主人であるスピーカーのライフを大きく増やした。

「アタックステップ!!…ホーリーエンジェモンでアタックだYEAHHH!!…その効果でライフを1つ回復し、相手スピリット1体のBPをマイナス13000、0になったら破壊!!…龍騎サバイブを破壊するZE!!」
 「なに……サバイブ!?!」

へライフ7??8へスピーカー

1【仮面ライダー龍騎サバイブ】BP11000??0（破壊）

ホーリーエンジェモンがスピーカーのライフを回復させると共に、龍騎サバイブへと向けて剣を一閃。一瞬にして龍騎サバイブの腹部にエックスの文字を刻み込む。

龍騎サバイブは流石に堪らず力尽き、爆散してしまう。

「エース討ち取ってやったぜ Y E A H H ー!! …… アタックは継続中!!」

「ツ……ライフで受ける……ツ!!」

〈ライフ4??3〉アスラ

今度はアスラのライフを斬り裂くホーリーエンジェモン。さらにスピーカーはブロッカーのいないアスラの場合へと一気に攻め込んで……

「続けてホーリードラモンでアタック!! …… さらにフラッシュで効果を発揮!! …… オレ様のライフ一つをトラッシュに置く事で回復する!!」

「!?!」

△ライフ8??7△スピーカー

ー【ホーリードラモン】（疲労??回復）

畳み掛けるスピーカーのスピリット達。ホーリードラモンがスピーカーのライフを糧に動き出した。しかもこの効果はターンに一度ではなく、スピーカーのライフが存在する限りアタックをする事が可能だ。

しかしアスラとして防ぐ事ができないわけではなく、手札からその対処できるカードを切って見せた。

「フラッシュマジック……ガードベント!!」

「!!」

「効果でこのターン間、オレのライフは1つしか減らねえ!!…アタックはライフで受ける!!……がつ!!」

△ライフ3??2△アスラ

神の使いらしい気高き咆哮をあげるホーリードラモンがアスラのライフ一つを噛み砕いた。しかし、アスラの使用したガードベントのカードにより、このターン、彼のライフは一つしか減らない。

スピーカーのライフが多かろうが少なかろうがこのターンはライフを減らす事ができなくて……………

「……………WOHHHH!!…:…なかなかデキルじゃねえか!!…:…このターンはエンドにしてやるぜYEAHHH!!」

手札：3

場：【ホーリードラモン】LV2

【ホーリーエンジェモン】LV2

【エンジェウーモン】LV2

バースト：【無】

このターンでの勝利は不可能にされたものの、ノリノリな様子でそのターンを終えるスピーカー。

少しずつではあるがアスラは確実に不利な状況に立たされている。しかし、それを一

番感じているのは彼自身。このターンでそれを一気に挽回すべく、シークエンスを進めていった。

「ターン07」アスラ

「メインステップ!!……何回もごめんな!!……もう一度頼むぜゴラドン、龍騎!!」

ー【ゴラドン〈R〉】LV1(1)BP2000

ー【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP2000

エンジェウーモンで戻されたゴラドンと龍騎が三度目の召喚を果たす。アスラは再び龍騎の召喚時効果を使用し、アドベントカードの一種を手札に加えた。

「さらにマジック、コールオブロスト!!」

「!!」

「トランプシユから龍騎サバイブのカードを手札に戻す!!」

使用される回収マジック。ホーリーエンジェモンにより破壊された仮面ライダー龍騎サバイブのカードを手札へと戻した。

「でもってネクサス、燃えさかる戦場を2枚連続配置!!」

ー【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

ー【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

フィールド全体が赤々と燃えたぎる炎に包まれる。そしてアスラはここからが本番だと言わんばかりに手札にある回収したエースカードを再びBパッドへと叩きつけた。

「行くぜ、龍騎サバイブを再召喚!!…不足コストはゴラドンを消滅させて確保!!」

……「サバイブ!!」の音声が鳴り響き、燃えさかる戦場より龍騎の強化形態、サバイブが再び姿を見せる。しかしその代償としてゴラドンが消滅した。

ここまで来たら後は前のターンのリベンジを果たすだけだ。アスラはサバイブ再召喚の勢いに乗ったまま「アタックステップ!!」と強く宣言して……………

「龍騎サバイブでアタック!!…効果でホーリードラモンを破壊!!」

「それじゃあまだまだスイートだぜベイビー!!…ホーリードラモンもこう見えて天霊スピリット、エンジェウーモンの効果で守るZ E!!」

へライフ7??6へスピーカー

ホーリードラモンに向けて烈火の弾丸を放つ龍騎サバイブだったが、又してもエンジェウーモンの効果によるバリアで阻まれてしまう。

「くっ………だったらダブルシンボルでアタック!!」

破壊できないモノはしようがない。効果によりダブルシンボルとなった龍騎サバイブで果敢に攻めるアスラだが………

スピーカーにはまだそれを返り討ちにする手段が手札にあつて………

「フラッシュ【煌臨】發揮!!………今度の対象はホーリーエンジェモンだぜY E A H H I

!!

「なッ……二度目の煌臨?！」

アスラでは使う事ができないソウルコアがスピーカーのトラッシュユへと再び弾かれる。その刹那に溢れんばかりの光に包み込まれたのは完全体ホーリーエンジェモン。

完全体スピリットが煌臨対象となったと言う事はそれ即ち、究極進化だ。

「最高にCOOLなオレ様の時代到来!!……ホーリーエンジェモンを究極体、セラフィモンにエポリューション!!」

┌【セラフィモン】 LV1 (2) BP8000

ホーリーエンジェモンは光の中で姿形を変え、新たな姿へと昇華する。やがてその光を弾き飛ばしたかと思えば、そこから青き鎧、10枚もの黄金の翼を束ねる黄色の究極体スピリット、セラフィモンが地上へと降り立った。

「2体目の……究極体……青い鎧カッケェー!!」

「HAY!!…喜んでる場合じゃねえZE!!…エボリユーション時効果!!」
「!!」

「煌臨元となったホーリーエンジエモンを手札に戻す事で、相手スピリット全てのBPをマイナス10000する!!」

「なに!?!」

ー ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】BP17000??7000

ー ー【仮面ライダー龍騎】BP20000??0（破壊）

ホーリーエンジエモンのカードがスピーカーの手札へ戻ると同時に幾千もの光の礫がアスラのように降り注ぐ。龍騎サバイブは辛うじて生き残るも、通常の龍騎は堪えきれず、堪らず爆散した。

「WOHHHH!!…BPが下がった事でホーリードラモンより弱くなったな!!」

「!!」

「ブロックだ!!」

アタック中だった龍騎サバイブのブロックに入るホーリードラモン。圧倒的な体格の差と上空からの攻撃で龍騎サバイブを翻弄する。龍騎サバイブも負けじと烈火の弾丸を放ち応戦するが、その努力も虚しくホーリードラモンの口内から放たれた黄色い光線を諸に受け、又しても爆散してしまった…………

「サバイブが二度負けた……………」

「…………エースの二度目の破壊は…………キツイな」

周囲からアスラを見守るエールとシイナがそう呟いた。ただでさえ応えるエースの破壊や敗北。それを一度のバトルで二度も味わってしまうなど、バトルにとっては確かな心の傷になる。

「シイナの言う通り、確かにエースカードの二度目の負けは精神的に大きな負担になる……………」が、あの程度でへこたれるくらいならあいつはとつくの昔にオレのライバルなんてやめてますよ」

ロンがアスラに目を向けながらそう言った。エールとシイナもアスラ表情を伺う

が、それは負けを確信した目ではなく、挑戦者の勝利を懇願する眼差しそのモノ。

それはサバイブと言う絶対的エースが二度も破れ去った今でも負けを決めつけていない何よりの証拠であつた。

「ターンエンド!!……マジでめちやくちや強いなコノヤロー!!……でも負けねー!!……目標^{シイナ}が、ライバル^ロが見ている前で負ける姿なんて晒せない!!」

手札：4

場：【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

「GOODなガッツ!!……見上げたマインド!!……だったら次のオレ様のターンをどうにかしてみるんだな!!」

手強いカウンターを受け、場がガラ空きとなつてしまつたが、強気にそのターンをエンドとするアスラ。

スピーカーはアスラのそう言う心が強い面を評価しながらも、このバトルの決着を着けるべくターンシークエンスを進めていった……

「ターン08」スピーカー

「メインステップ!!……いよいよオレ様のファイナルステージだぜ Y E A H H ~!!!……手札に戻ったホーリーエンジェモンをデュアルサモン!!」

ー【ホーリーエンジェモン】LV2 (2) BP9000

セラファイモンの煌臨時効果によつて手札に戻されていたホーリーエンジェモンが今一度召喚される。スピーカーの場には強力な天霊スピリットが4体。アスラとの差は誰がみても歴然となった。

誰もが諦めても仕方ないと思えるこの状況の中、アスラの表情は曇る事は無く、ただ強い視線で前を睨んでいて……

「セラファイモンのLVを2に上げ、アタックスステップ!!……ホーリーエンジェモンG O ~!!!……効果でオレ様のライフをまたまた回復!!」

へライフ6??7へスピーカー

再び飛翔するホーリーエンジェモン。狙うは残りたった2つのアスラのライフ。圧倒的な戦力差だが、それでも曲げずに諦めない彼は、渾身の防御札を手札より切つて見せて……………

「まだだ!!…フラッシュマジック、ガードベント!!」

「what, s!?!…2枚目!?!」

「この効果でオレのライフはこのターン1つしか減らない!!…ホーリーエンジェモンのアタックはライフだ!!…ぐうっ!!」

へライフ2??1へアスラ

まさかまさかの2枚目のガードベント。ホーリーエンジェモンが右腕に装着された紫の剣でアスラのライフを斬り裂くも、このターンはそれ以上のライフの破壊は行えな
くて……………

「ファイナルステージはお預けかよ………まあ良い Z E。ライライ町、黄色のカラーリーダーのこの最強の布陣。突破できるモノなら突破してみろ Y E A H H ー!!」

手札：3

場：【ホーリーエンジェモン】 L V 2

【エンジェウーモン】 L V 1

【セラファイモン】 L V 2

【ホーリードラモン】 L V 2

バースト：【無】

「うおおおお!!……オレはこのバトルに勝って絶対ロンに追いつく!!」

致し方なくそのターンをエンドとしたスピーカー・ヘブン。次は絶賛崖っぷちのスーミのアスラ。このターンでどうかしななければ敗北は必至。

しかし、そんな事、一番理解しているのは彼自身。最後まで諦めない心を胸に、ソウルコア無しのその身体を突き動かす。

「ターン 0 9」 アスラ

「メインステップ!!…マジック、フェイタルドロー!!…効果でカードを3枚ドロー!!」

勝つか負けるかの運命を見定めるドローマジック。アスラは何の迷いもなく、デッキから勢いよくドローを行った。

そしてそのカード達を目に映した途端。口角がニヤリと上がって……

「シヤムシーザー2体を連続召喚!!」

ー【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

背中に白いトゲを生やす赤いトカゲ型のスピリット、シヤムシーザーがアスラの場合に現れる。弱小スピリットだけではどうしようもないが、狙いはそこではないと言わんばかりにアスラは手札のカードをさらに引き抜いて……

「でもってマジック……2枚目のコールオプロスト!!」

「!？」

「この効果で龍騎サバイブをもう一度オレの手札に戻す!!……そしてフル軽減、LV3で再々召喚だアアー!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV3(4)BP13000

二度目の復活。何度でも蘇る熱き不屈の闘志を胸に刻み現れたのはアスラの最強エースカード、龍騎サバイブ。

その奥に眠る赤き眼光がスピーカーの場に存在する4体の大天使達を睨みつける……

「オレと龍騎サバイブは何回何十回何百回何千回と負けようが何度でも立ち上がって見せる!!……シャムシーザーの力を使い、ミラーワールドをLV2にアップ!!」

シャムシーザーは消滅してしまうものの、ミラーワールドのLVが今一度2へと上昇。これで準備は万端か、アスラは再び「アタックステップ!!」と強く宣言して……

「龍騎サバイブでアタック!!…効果でエンジェウーモンを破壊だ!!」
「ツ……エンジェウーモンの効果でそれを防ぐ!!」

〈ライフ7?6〉スピーカー

龍騎サバイブのショットガンから烈火の弾丸が放たれるが、またエンジェウーモンのコアバリアに凌がれる。だが、アスラはそんな事は最早百も承知。狙いはそこではない
……

「でも龍騎サバイブに赤のシンボルが1つ追加!!……さらにミラーワールドの効果!!
……カードを1枚オープン、それがアドベントカードなら発揮できる!!」

「!!」

ミラーワールドによりオープンされるカード。非常に運頼みな効果ではあるが、まるでアスラとそのデッキの絆を見せつけるかの如く、最善最高のカードを彼は引き当てる

……

「っしやあ!!……ファイナルベント発動!!……BP15000以下のスピリット1体を破壊して赤のシンボルをまたまた追加!!」

「ツ………なんつークレイジーな引きの強さだYEAH!!」

アスラの見事としか言えないドローク力に思わず己もテンションを上げてしまうスピーカー。

龍騎サバイブはベルトからファイナルベントのカードを引き抜き、それを龍の頭部を模したショットガンに装填。

………ファイナルベント!!

の音声と共に赤き龍が現れ、一瞬にしてその姿を赤き武装龍へと変換。龍騎サバイブはその赤き武装龍の背へと飛び乗った。

「ファイナルベントの効果でエンジェウーモンを破壊だ!!」

「しかしそれでもまだまだスイート!!……エンジェウーモンの効果でその破壊から守る!!」

〈ライフ6??5〉スピーカー

ファイナルベントの効力により放たれる赤き武装龍の赤々と燃え滾る火炎弾。しかしそれさえもエンジェウーモンの展開したコアバリアで防がれてしまう。

「龍騎サバイブをトリプルシンボルにした所で関係ない!!……オレ様の勝ちだぜベイビー!!」

「いやまだだ!!……1枚じゃダメならこうするまでだアアアア!!!……フラッシュマジック、2枚目のファイナルベント!!」

「!?!」

ここに来てアスラがフラッシュユタイミングで使用したマジックはまさかの2枚目となるファイナルベントのカード。

「効果でもう一度エンジェウーモンを破壊し、龍騎サバイブの4つ目のシンボルを与えらる!!」

「だ、だがまだオレ様のライフは……………いやこれは……………」

再びエンジェウーモンに向けて放たれる赤き武装龍の火炎弾。スピーカーはこれをもつものようにライフを犠牲にして防ぎたいところであったが……………

「……………エンジェウーモンの効果は使わないぜYEAHH……………」

「え?…使わないの!?!」

スピーカーの選択にエールが意外だと言うように言葉を落とした。そしてフィールドでは遂に傷一つつけられなかったエンジェウーモンに赤き武装龍の火炎弾がヒット。エンジェウーモンは焼き尽くされ、堪らず爆散してしまふ。

「ここでエンジェウーモンの効果を使って仕舞えば、スピーカーのライフは4。シンボルが4つになる龍騎サブイブのアタックが通ればお終いだ。だからスピーカーは敢えてエンジェウーモンの効果を使用せず、破壊させたんだ」

「ツ……………成る程……………!!」

「そして多分、アスラはその隙を逃さない……………!!」

エールに説明するシイナ。

そうだ。彼女の言う通り、これでスピーカーのライフは5を維持。シンボル4つ。いわゆるクアドラプルシンボルと化した龍騎サバイブの貫通効果でもギリギリではあるが勝つ事ができない……………

だからこそ……………

アスラはフラッシュユで使える最後のカードをすかさず手札から引き抜いた……………

「へへ……………そう来ると思ったぜ……………フラッシュユマジック……………3枚目のファイナルベント!!」

「は……………はあぁっ!」

アスラがBパッドに叩きつけた3枚目のファイナルベントのカード。これまで余裕だったスピーカーは一気に焦り始める。

「効果でホーリードラモンを破壊だ!!」

「what, s!?!」

赤き武装龍の火炎弾が今度はホーリードラモンを襲う。破壊から守っていたエンジェウーモンはもうどこにも存在しないため、ホーリードラモンはそれを諸に被弾してしまい、撃墜され爆散してしまった。

「そして、オレの龍騎サバイブに5つ目のシンボルを与える……!!」

「……………i t, s クインテッドシンボル……!?!」

ファイナルベント3枚分の効果が上乗せされた龍騎サバイブ。そのシンボルの数は前代未聞のクインテッドシンボル。一撃で5つものライフを砕く事ができる。残り丁度5つのライフであるスピーカーとしてはこのアタックだけは絶対にブロックしなければならぬ。

「くっ……セラファイモンでブロック!!」

「ネクサス、燃えさかる戦場2枚分の効果でアタックしている龍騎サバイブのBPは19000!!……もらったアアアア……!!」

赤き武装龍から放たれる火炎弾がセラフィモンの黄金の翼に被弾。セラフィモンは撃墜させられ、地べたに這いつくばってしまう。そしてすぐさま主人を守るべく立ち上がるも、そこには既に赤き武装龍が変形したバイク型マシーンに搭乗した龍騎サバイブが眼前に迫っていて……………

「ドラゴンファイヤーストームツツー!!!」

アスラが技名を叫ぶと共に、龍騎サバイブが搭乗したバイク型マシーンがセラフィモンを貫いて見せる。セラフィモンは耐え切れず爆散する。そしてその背後にいるスピーカーもそれに轢かれ……………

「う……………ノ、ノオオオオオオー!!!」

へライフ5??0へスピーカー

残ったライフ全てを轢き切り、破壊し尽くした。スピーカーのBパッドからは敗北を告げる「ピー…」と言う無機質な機械音声流れる。そしてそれは同時にアスラの勝利

を告げる音でもあって……………

勝ったのだ。勝って見せたのだ。コモンの身で、ソウルコアが使えない身で、4番目のカラーリーダーに。

「……………いよっしやアアアー!!!」

勝利の雄叫びを上げるアスラ。それに合わせるように龍騎サブイブは誇らしげに銃を構え、赤き武装龍は轟音のような咆哮を上げて見せた。

「や、やった……………シイナ様!!…アスラが勝ちました……………つてあれ?」

「シイナならとつくにここを出たぞ」

「ええ!?!…いつの間に!?!」

「むえ〜」

アスラの勝利を喜ぶエールだったが、いったいいつから消えていたのか、シイナはその行方を晦ましていた。彼女がいたところには頭に乗せていたオレンジ色の小動物、ムエしかいなくて……………

ー……

時同じくしてここはアスラがバトルしていたライライ町スタジアムの前。そこには知らずのうちに姿を晦ましていたシイナがいた。

「ホントにもう2人とも立派になっちゃって……久し振りに家族揃ってそれっぽい事ができたから楽しかったよ……じゃあね。私は頂点で待つてるぞ」

スタジアムにいる息子2人の事を想い、頂点王シイナは少しでも名残惜しさを感じつつも、その笑顔を絶やす事なく離れて行った。

ー……

「ほい。約束のカラーカード……4番目のイエローカードだ。おめでとうYEAH H H H
!!」

「ありがとうございまアアアアアすYEAH H H H!!」

「言葉が移ってる……………」

場所は戻りスタジアムの中。黄色のカラーリーダー・スピーカー・ヘブんに勝利したアスラは4番目となるカラーカード、イエローカードを彼から授与された。

「まさかファイナルベントのカードをあそこまで溜め込んでるなんてな!!……………驚いたぞE!!」

「いやーそれ程でも〜」

「絶対偶然でしょ。何も考えてなかったわよね?」

「何言ってるんだエール!!…ちゃんと考えてたさ!!」

「あつそ……………でも……………まあその……………おめでどう……………」

「おう!!……………ありがとな!!」

照れ臭そうに祝福するエールに礼を告げたアスラが次に向かった先はライバルであるロンだ。自慢するように授与されたイエローカードを見せつける。

「どうだロン!!……………ちゃんと勝ったぜ!!」

「フツ……当たり前だ。オマエを倒せるのはこのオレだけだからな」

言葉を交わし合うライバル。上に行くのはこのオレだと言わんばかりの物言い。互いに強い視線を送り合う。

「HAY!!…水刺すようで悪いが、残り2人のカラーリーダーはソートーストロングだ
ZE!!」

「!!」

「5番目の紫のカラーリーダーは2番目。そして最後の赤のカラーリーダーはオレ様達の中で最も強い!!…オレ様ごときに手こずってるようじゃかなりヘビーなバトルが待ち受けると思うZE?」

スピーカーがアスラに助言するようにそう口にした。

実際彼の言う通りであり、アスラをこの先待ち受けるのはこの国で双壁と呼ばれる最強のカラーリーダー2人。アスラはこの2人を突破しなければ三王にさえ挑む事はできない。

「へビーなバトル上等!!……何度倒されたってかまいやしない!!……オレは、オレとオレのデッキは倒されても何度だつて立ち上がってやるぜ!!……そしていつか必ず頂点王になつてやるぞコノヤロー!!」

「おお!!……その息だけベイビー!!……よし、今日はGOODなバトルをしてくれたお礼だ。オレ様のライブチケットをプレゼントしてやる!!」

「うおお!!……なんかようわからんけどありがとうございまアアアす!!」

「いや、バカスラ。それ絶対この世で一番要らないヤツでしょ」

何度倒されても必ずそこから這い上がってみせる。

そう気合を入れるアスラ。集めなければならないカラーカードは残すところ後2枚

……………

ここはどこかの世界、どこかの場所。どこかの空間。そこには王を示すかのような玉座が設けられており、洗い容姿からおそらく40歳前後だろうか、とある1人の男性が堂々と歩みを進め、まるで自分はこの世界の王、いや神なのだと言わんばかりにその玉

座に腰を下ろした。

「ふっふっふっふっふ………はっはっはっはっはっは!!」

腰を下ろしたその男性は何かがおかしいのか、口角を上げ、高らかに笑い声を上げた。

「ここにいてもわかる。残り2枚は確実に我の元に近づいて来ている!!………15年だ。15年待ち侘びたぞ………遂に、遂に我の元に集う時が来たのだ………12枚の『ミラーライダーズ』が!!」

「………ボクもこの時を待ち侘びました。どうか御武運を………シスイ様………!!」

まるで彼に忠誠を誓っているかのように、玉座の横にはもう1人若い男性が存在していた。その若い男性が言うには玉座に座る男の名は「シスイ」………

………それは約15年もの間、この世界の玉座に居座る神だ。

そして彼の手には複数枚のカードが握られており、その中にはオロチの元を去って行った「仮面ライダー王蛇」のカードも存在していて………

33コア「ロンの記憶……龍騎&ナイトVS袖付き」

「ハアツ……ハアツ……!!」

夜。深い森の中、純白のドレスを来た少女がまるで誰かに追われ、逃げ惑っているかのように息を切らしながら裸足で地を蹴り続けている。

この少女の存在が、アスラとロンの持つライダースピリット、龍騎とナイトの秘密を知る鍵になる事は、まだ誰も知らなくて……

「……………ハア……………まだ着かないわけ？」

「むえ〜」

日差しが強い昼間。エールは胸元に抱き寄せているオレンジ色の小動物、ムエをより強く抱き寄せながら、ため息と共にそう言葉を落とす。ムエもずっとエールに抱き抱えられていて、自分で歩いていない割にはめんどくさそうな声を上げた。

そしてそんな彼女の前方にはソウルコアの使えない熱血少年アスラと、その最大のライバルである天才少年ロンがいて……………

「大丈夫だエール!!…多分もうちょいだ!!」

「あんたみたいな体力バカのもうちよいはあまり信用できないんだけど」

「エックスの女。オマエは体力がなさ過ぎる。このバカ程とは言わないが、少しは鍛えたらどうだ」

「うっさいわね!!…あんた達みたい田舎育ちじゃないのよ私は!!」

「てゆーか誰がバカだロンテメエー!!」

アスラ、エール、ロン。ついでにムエは、テンドウ・ヒロミに依頼され、ライライ町外れにある『メイキョウ旧領』と呼ばれる場所に向かっていた。

「いや〜でもメイキョウ旧領ってどんなところだろうなあ!!」

「そんなピクニック気分で行かう場所じゃないと思うけど……メイキョウ旧領、テンドウが言うにはマスターの身分を持っていた『メイキョウ家』の主人が自分の娘、そしてエックスの身分を持つ『アーサー家』の友人と共に姿を晦ました15年前の事件が起きた場所だ。それで今どうなっているかを私達に調査しろって言うのよ……勝手に、自分で行けばいいのに」

「いやいや、テンドウさんはきつと御多忙を極めてるんだろうよ!!……うおおお!!任せてくださいテンドウさアアアーン!!…このアスラが必ず事件の真相を暴いてみせますよオオオー!!」

「あんた私の話聞いてた？…調査しに行くのよ調査！」

15年前。あまり有力な名前ではなかったが、マスターの身分を持つ「メイキョウ家」とエックスの身分を持つ「アーサー家」が忽然と姿を消してしまった事件があった。消えてしまった人間は合計して4人程いるらしいのだが、その消息は15年と言う長い年月が経過した今でも判明してはいない。

そんな今では旧領という名が相応しくなくなった土地の調査にアスラ達3人が招集されたのだ。

「……………」

ロンはふと足を止めてしまう。今現在通っている並木道にどこか見覚えがあるような気がしたからだ。

不思議だ。自分はこの道は初めて来たと言うのに……………

「おい何してんだよロン。置いてくぞ」

「……………ああ」

ライバルの喧しい声が聞こえて来たところでふと我を取り戻したロン。再び歩みを始める。

そしてそのメイキョウ旧領と呼ばれる場所に到着したのはおよそ15分後の事だったろうか……………

……………

「うおおお!!…カッケェ!!…なんてデツカイお屋敷なんだ!!」

「そう?…別にこれくらいは持つてて普通でしょ」

「おのれエックスー!!!」

「アスラうるさい」

3人の前に聳え立つのは黒々とした巨大な屋敷。昼頃でなければホラースポットになりかねないような存在だ。

「おいインターホンあるぞ!!…押しているのか!？」

「誰も出るはずないでしょ」

「……………」

喧しいアスラに、それをツツコムエール。そんな彼らを目線に映しながらも、ロンはただ一人デジャヴに浸っていた。

赤ん坊の頃にスーミ村近辺で頂点王シイナに拾われて依頼、15になるまでスーミ村さえ出た事がないと言うのに……………こんな場所、来た事もないと言うのに……………

そんな彼が抱く妙な違和感を他所に、アスラとエールは屋敷に入っていく。ロンも置いていかれるわけにはいかないため、致し方なく彼らについていった。

……………

「なんか意外と中は明るいな……………」

「昼間だからね。電気を節約するために構造が工夫されてるのよ」

「ツ……………オマエの口から節約なんて言葉が聞ける日が来るとは……………」

「何よ、悪いわけ？」

長い年月が経ったがために腐り、柔らかくなつた床の上を歩く3人。そんな中ロンはただ1人廊下の側面にある扉に目が入り、少々気になつたか、その扉を開け、中に入った。

そこは廊下と違い、暗がりで見界もままならないが、どうやら研究室だつたようで、資料やら本やらが辺りに散らばつていた。ロンはその内の一冊を拾い上げて見るが、その表紙のタイトルを目に映すなり鳥肌が立つてしまった……………

そのタイトルとは……………

「……………ミラー……………ワールド……………」

そう。自分やアスラがライダースピリットに選ばれると共に授かつたミラーワールドのカード。この研究室は全く同じ名称のモノを研究対象としていたのだ。ロンはその冊子のページをめくるが、緻密な計算式や意味のわからない専門用語ばかりであり理解はできない。

「ッ……………!!」

今度は頭痛の痛みが進るロン。思わず頭に掌を置く。これは最近自分がナイトサバ
イブを召喚する度に現れる記憶の断片のようなモノに似ていた。

彼がそう思う間もなく、頭の中ではまた別の記憶の断片が鮮明に蘇って来た

.....

.....

ー『凄いぞシスイ!!…遂に行けるんだな、ミラーワールドに!!』

ー『ああゾン。これでようやく………ようやくだ………』

今から何年も前の話なのか、同じ研究室とは思えない程に明るくて研究室にいる研究者らしき人達は活気に溢れていた。そのうちの1人は分からなかったが、もう1人は最近よくナイトサバイブを召喚した時に見る自分にナイトを託した人物によく似ていた。おそらく同一の人物だろう。

そしてそんな研究室の端にまだ赤ん坊である自分がいた………

その横には年端もいかなない小さな女の子もいた。不思議そうな顔でこちらを見つめている。

……………

「ハア……………ハア……………」

痛みが引いていくと共に我に帰るロン。焦りや不安から呼吸が乱れる。

ナイトサバイブを呼び出してもいないのに何故こんな記憶が蘇ったのか不思議でならない。そんな中、まるで冊子のしおりになるように挟まっていた一枚のバトスピカードに目が止まった。

「おいロン。なんかあったのか？」

「……………アスラ……………いや、なんでもない」

部屋の扉からひよつこりとライバルが顔を覗かせて来た。無駄な心配はかけさせるまいと思ひ、ロンは咄嗟に嘘をつき、ミラーワールドのタイトルが刻まれた資料はデスクの上へと戻し、しおりになっていたバトスピカードは咄嗟に自分の懐にしまった。

「ハアツ……ハアツ……!!」

「ちよつとちよつと。逃げても無駄ですよユ様。貴女はボクに捕まる運命なんだから」

逃げ惑う白いドレスを来た少女。背丈はアスラよりも少し低いくらいか。そしてそれを追うのは赤い一つ目のモビルスピリット。その中で若い男性の声が聞こえて来る。

彼に見つかってしまってから早20分弱。少女は遂に体力の限界を迎え、過呼吸気味になりながら地面に倒れ込んでしまう……

「ほうら。言った通りになった。それじゃ大人しく一緒に帰りましょう……」

「ハアツ……ハアツ……ツ!!」

絶体絶命。赤い一つ目のモビルスピリットが少女を連れ去ろうと手を伸ばしたその瞬間だった……

「アスラ!!」

「おおエール、ロン!!……もう終わったぞ!!」

「え……………ロン!？」

一足遅れてロンとエールも到着する。だが、白いドレスの少女はアスラの口から「ロン」と言う名前を耳にするなり顔が青ざめてしまい……………

「あ、あなた達はここにいちやダメ!!……お願いだから逃げて!!」

「?」

「うん?……さつきから言ってる意味がわかんないんだけど……………」

「言葉の通りよ!!……あなた達があの人に捕まったら全てが終わる!!」

切羽詰まった様子でアスラとロンに訴えて来た少女。なかなか内容が見えて来ないが、必死さだけは異常に伝わって来る。

だが、その必至な訴えを遮るかのように、アスラにやられて粒子となつて消滅しきつた赤いモビルスピリットの影から若い男性が現れて……………

「全く……低コストとは言え、モビルスピリットを剣一本で斬り裂くってどうよ？……どんな運動神経してるわけ？」

「!!」

現れたのは長い金髪を靡かせる若い男性。どうやら彼がさっきのモビルスピリットを操っていたようだ。

「でもその剣を見てわかったよ。君ら龍騎とナイトの使い手だね？……しかもその身なり、コモンだ」

「……だったらなんだ金髪コノヤロー」

「……後ろのイユ様諸共いただこうか。そのためにボクはいる」

「……オマエもライダーハンターズの一員か何かか？」

「ライダーハンターズ？……ああ、あのチンケなコソ泥集団。生憎だが、ボク達はある連中に興味はない」

アスラとロン。金髪の若い男性が交互に言葉を入れあつていく。全く持つて話が見えて来ないが、どうやらこの男性は後ろの「イユ」と言う女の子を欲しがっているらし

い。

そして何故か龍騎とナイトも……………

「待って!!…私が囹になるからあなた達は早く逃げて!!」

「ん?…心配いらねえよ。なんかようわからんけど…あの金髪ヤローをぶつ飛ばせばいいんだろ?」

「!!」

「そう言う事ならわかりやすく助かる。手を貸せアスラ」

「おうよ!!…言われなくともそのつもりだぜ!!」

目の前の少女やそれを追いかける金髪の若い男性が何者であろうと、それを見過ごすわけにはいかないか、少女を庇うように前へと出るアスラとロン。

「大丈夫、どうせ勝つわよ」

「!!」

今度はエールが少女に寄り添う形で前に出た。

「特にあの小さい方は、ソウルコアが使えないクセにこの世界で一番努力した大バカよ。こんな所で負けたりしないわ」

「……ソウルコアが使えない………?」

イユと呼ばれる少女はエールの口から出たアスラの簡潔な説明に疑問符を浮かべる。

「……じゃあなんであの子は龍騎に選ばれたの?…ライダースピリットはそんな人を主人に選んだりはしないのに」

「………確かにそうね。でもあいつは選ばれた。耳で聞くより先ずは目で見届けなさい、あいつのバトルスピリッツを……!!」

ライダースピリットとはその進化の最終段階までには必ず言って良いほどにソウルコアの力を要求する。生まれながらにソウルコアが使えないと言うこの世の欠陥品のような存在であるアスラに龍騎と言うライダースピリットが宿るのはにはわかには信じられない出来事なのだ。

だがそれでもアスラが龍騎に認められたのは事実。エールとイユはこれ以上の会話

を交わすことはなく、前に出たアスラとロンに視線を送った……………

「ふーん。もしかしてこのボクにレイドバトルでもしようつての? ……まあ気持ちはわかるよ。1人じゃ絶対ボクに勝てないものね〜」

「2人で挑むのは早く終わらせたいからだ。貴様程度、倒すだけならオレ1人で十分だ」
「……………へえ。言うね……………このボクを『赤い軍師フリソデ』と知つての狼藉ろうぜきかい?」

「いや、そんな名前知らん!! ……てかローゼキって何!?!」

ロンの言葉に少々腹を立てるフリソデと言う金髪の若い男性。徐にBパッドを構え、アスラとロンを鋭い視線で睨みつける。常人であればたちまち怯んでしまうであろう視線だったが、かなり場慣れしているアスラとロンは臆する事なく堂々とした態度のまま自分達もBパッドを構え、デツキをセットした。

「やってやるかロン」

「ああ、ついて来いよ…………アスラ!!」

「それはこつちのセリフだぜ!! ……行くぞ!!」

……ゲートオープン、解放!!

3人のコールと共に1VS2のレイドバトルが幕を開ける。

先行はフリソデと言う金髪の若い男性だ。滑らかにカードをドロ―し、その後のターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン01」フリソデ

「メインステツプ……………ボクは母艦ネクサス、レウルーラをLV2で配置!!」

「!!」

ー「レウルーラ「UC」」LV2（1S）

フリソデの背後より深紅に染まった戦艦が姿を見せる。これはモビルスピリットならではの母艦ネクサスと呼ばれるモノであり、この存在がよりモビルスピリットを強くする。

「ターンエンド……このボクに喧嘩を挑むのは勝手なだけどき。早いとこサレンダーして龍騎とナイトを置いて逃げた方が身のためだよ。君らじゃ決してボクには勝てない。そう言う運命……定めなんだよ」

手札：4

場：「レウルーラ」「UC」LV2（1S）

バースト：【無】

「勝手な事言ってるじゃねえぞコノヤロー!!……上から視線もいい加減にしろよ、龍騎もナイトも後ろの女の子も絶対渡さねえ!!」

完全にアスラとロンを舐め切った発言をするフリソデ。アスラは激怒しながらも冷静さを失わず、ロンと共にターンシークエンスを行なっていく。

「ターン02」アスラ&ロン

「メインステップ…オレは仮面ライダー龍騎をしょ……」

「仮面ライダーナイトをLV2で召喚」

「え?」

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2S)BP4000

ターン開始直後。アスラが自慢のライダースピリット、龍騎を召喚しようとするが、その前にロンが自身のライダースピリットであるナイトを召喚して見せた。これはアスラはこのターン龍騎を召喚できない。

「効果でー枚ドロー」

「おいロンテメエー!!…何勝手にコア使ってるんだ!!…ここは龍騎だがアアアー!!」

「龍騎の召喚時効果を使っても確実に手札を増やす事はできないだろう。それにソウルコアが使えないオマエはこのターン中で龍騎をLV2にする事はできない。ならばナイトの出番だ」

「ぐぬぬ……………」

「やっぱりあいつら大丈夫かしら……………」

「ロンに割と正論を言われて言い返せないアスラ。確かに序盤はロンだけで動いた方

が効率が良い。アスラはソウルコアが使えないため、レイドバトル時でもそれは動かすことはおろか掴むことさえできない。

つまりコアが1つ少ない状況の中バトルをしなければならぬのと同義。

そのためロンのこの判断は英断と言える。

「さらにバーストを伏せ、ターンエンド」

アスラ手札：3

ロン手札：2

場：【仮面ライダーナイト】LV2

バースト：【有】

追加でバーストを伏せ、防御を盤石なものとし、このターンをエンドとするロン。次は再びフリソデのターン。ロンの作り上げた防御を崩すべくターンシークエンスを開始した。

「ターン03」フリソデ

「メインステップ……成る程、それが仮面ライダーナイトか。でもたかが召喚時ドロウの効果だけなら恐るるに足らないね!!……ボクはモビルスピリット、ドラッツエを2体、LV2で連続召喚!!」

「!!」

- 1 「ドラッツエ」〔袖付き〕 LV2 (2) BP2000
- 1 「ドラッツエ」〔袖付き〕 LV2 (2) BP2000

少女を追いかけ回していた赤いモビルスピリットが2体出現。0コストのスピリットと言えどもモビルスピリットか、母艦ネクサスと合わせてやはり強大な圧迫感はある……

「母艦ネクサス、レウルーラの効果!!……ターンに一度袖付きスピリットが召喚された時、1枚ドロウ」

母艦ネクサスの効果でドロウを決めるフリソデ。その後、余裕のある笑みを浮かべながら徐に「アタックステップ……!」と、宣言して……

「1体目のドラッツェでアタック!!…ドラッツェはLV2の時BPを1000上げる。さらにフラッシュ!!…レウルーラの効果!!」

「!!」

「レウルーラ自身を疲労させる事でBP4000以下のスピリット、つまりナイトを破壊する!!」

ー「レウルーラ「UC」(回復??疲労)」

ドラッツェが動き出すと共に、レウルーラの砲手からレーザーが照射される。ナイトはそれに撃ち抜かれ爆散してしまう。

「おいロン、ナイト負けちまったぞ!!…このあとどうすんだよ!」

「うるさいぞアスラ!!…言われなくてもその次の防御パターンはある!!…スピリットの破壊によりバースト発動!!…天冥銃アーミラリー・スフィア!!」

「!!」

「効果によりアタックしていないドラッツェのコアを2つリザーブへ、よって消滅!!…」

オレはカードを1枚ドロ―」

―【ドラッツェ「袖付き」】（2??0）消滅

ロンの伏せたバーストカードが反転すると共に、上空から紫の弾丸がドラッツェにヒット。コアを抜き取られ、堪らず消滅してしまう。

「そしてこの効果の発揮後これを召喚。アタックしているドラッツェをブロックする！！」

―【天冥銃アーミラリー・スフィア】LV1（1）BP3000

「ドラッツェは自身の効果でBPを1000アップさせ3000!!…相討ちだ」

アスラとロンの場に現れた魔法陣から銃が謎の浮力に従うままドラッツェの方へと飛び行き、激突して互いに爆発。バトルの勝負は引き分けの結果に終わる。

「……………ターンエンド。まあ少しはできるみたいだね。0コストのドラッツエに苦戦してるようじゃお先は見えてるけどね」

手札：4

場：【レウルーラ「UC」】LV2

バースト：【無】

ここまで駆け引きはほぼ互角。0コストのドラッツエでさえも強力なアタッカーに仕立て上げるフリソデを前に2人は「ここからだ」と言わんばかりに自分達のターンを開始していった……………

「ターン04」アスラ&ロン

「ネクサス、ミラーワールドを配置!!」

ー【ミラーワールド】LV1

ー【ミラーワールド】LV1

2人はほぼ同時にミラーワールドのカードを配置。周囲の風景や全ての物体が鏡向きとなった。

「アスラ。ミラーワールドは2枚配置しても効果は重複しないぞ」

「そつちこそ!!…なんで同じタイミングで同じカード配置すんだよコノヤロー!!」

またふとした事で喧嘩するアスラとロン。どうやらミラーワールドの同時配置は2人で考えた作戦ではなく、単なる偶然であったようだ。エールはそんな彼らを見て「息がびったりなんだか最悪なんだか……」と言葉を落とす。

「つたく、仕方ねえ。使えるコアねえし、このターンは取り敢えずエンドだ」

アスラ手札：3

ロン手札：3

場：【ミラーワールド】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

勝手に自分達のターンをエンドとするアスラ。次は今一度フリソデのターン。コモンのくせに何故か未だに余裕で呑気な2人を叩きのめすべく己のターンを進行させていった。

「ターン05」フリソデ

「メインステップ、ボクはクシャトリヤ・ベッセルングを召喚!!」

「クシャトリヤ・ベッセルング」LV1（1）BP3000

緑色のボディを持つ2体目のモビルスピリット。輝く一つ目がアスラとロンを睨みつける。

「レウルーラの効果でドロー。さらにベッセルングの召喚時効果でトラッシュユよりドラツツエを1枚手札に戻す!!」

フリゾデは母艦ネクサスと強力な召喚時効果により手札を一気に増やした。

「さらに2枚目のレウルーラをLV2で配置!!」

ー「レウルーラ「UC」 LV2（1）」

フリゾデの背後に又しても赤き母艦が飛来。そして彼はミラーワールド以外何もないアスラとロンを睨みつけ……………

「アタックステップ!!……………ベッセルングでアタック!!」

ベッセルングでアタックを仕掛ける。その胸部から極太のミサイルが彼らのライフへ向けて発射される。2人は当然このアタックは是が非でもライフで受ける他がなく
て……………

「ライフだ!!……………ッ」

「ッ……………!!」

〈ライフ5??4〉アスラ&ロン

被弾したミサイルがアスラとロンのライフを1つ砕く。2人分でダメージがある程度分散されているものの、それでも中々のバトルダメージが2人を襲う。

「……ターンエンド。さあ、来なよ。返り討ちにしてあげる」

手札：5

場：【クシヤトリヤ・ベッセルング】LV1

【レウルーラ【UC】】LV2

【レウルーラ【UC】】LV2

バースト：【無】

そのターンを終えるフリソデ。まるで2人を挑発するように手首を上にも曲げる。

「このターンはオレの好きにさせてもらおうぜロン!!」

「ああ、暴れて来い一点突破バカ」

「バカは余計だ、行くぞ金髪ヤロー!!」

どうやら今度はアスラがメインでターンを進めていくようだ。2人の中でもアスラの方が特に強い勢いのままにターンシークエンスを進めていった。

「ターン06」アスラ&ロン

「メインステップ!!…オレのミラーワールドをLV2へアップさせ、仮面ライダー龍騎を召喚!!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV2 (2) BP4000

様々な鏡像が重なり合い、赤きライダースピリット、龍騎がアスラの場に姿を見せる。

「これが仮面ライダー龍騎。聞いてた通り、赤いんだね」

「召喚時効果!!…対象のカードを加える!!」

龍騎の効果を発揮させるアスラ。その中の対象カードを2枚手札に加え、残りを破棄した。

「バーストを伏せてアタックステップ!!…言って来い龍騎!!」

龍騎で颯爽とアタックを仕掛けるアスラ。その際に彼のミラーワールドのカードが光り、その効果が発揮される。

「ミラーワールドの効果!!…デッキの上から1枚をオープンし、それがアドベントカードならノーコストで発揮させる!!」

アスラのデッキからオープンされた1枚のカードは「ストライクベント」……………

アドベントカードなので、発揮が可能だ。アスラは当然それを手に取り発揮させる。

「ストライクベント発揮だ!!…BP8000以下のクシャトリヤ・ベツセルングを破壊して1枚ドロー!!」

「!!」

龍騎はベルトからカードを引き抜き、その一枚を左腕のバイザーに装填。「ストライクベント!!」の音声と共に赤き龍の頭部を模したガントレットが右手に装備される。

そして龍騎はそれを前方に突き出し、火炎放射を放つ。クシャトリヤ・ベッセルングは焼き尽くされ、堪らず爆散した。

「よし!!」

腕を曲げ、ガッツポーズを見せるアスラ。

しかし……………

爆散による爆煙の中より、破壊されたはずのクシャトリヤが更なる装備を重ね、アスラの龍騎を一つ目の眼光で睨んでいて……………

ー【クシャトリヤ・リペアード】LV1(1)BP5000

「なに?!?……………破壊されてない?!?」

「いや……………破壊はされたさ。クシャトリヤ・ベッセルングの効果【零転醒】……………相手に

よってフィールドを離れる時代わりに転醒できるのさ」

「!!」

「これによりベツセルングはリペアードに強化。さらに転醒効果でトラッシュのコアを好きなだけ戻す!!」

ー【クシャトリヤ・リペアード】(1??4) LV1??2

使えないトラッシュのコアが全てクシャトリヤ・リペアードのカードに吸い込まれる。そのLVは1から2へと強化された。さらにフリソデはアスラの龍騎を迎撃すべく母艦ネクサスのカード効果を発揮させて…………

「やっぱりコモンのカードバトラーはこの程度みただね!!…母艦ネクサス、レウラーの効果!!…疲労させてBP4000以下の龍騎を破壊!!」

「ツ……オレ達のターン中でも使えたのか!？」

レウラーの砲手が今度はアスラの龍騎に牙を剥く。強力なレーザーが照射され、龍騎はそれに撃ち抜かれ、爆散してしまう。

「フン……………他愛もないね。やっぱりコモン如き、ボクに負ける運命みたいだ」

転醒を決め、龍騎を返り討ちにしたフリソデ。龍騎の爆発による爆煙を眺め、軽く微笑みながらコモンであるアスラを見下す発言をした。

だが、その爆煙が晴れた頃、ピンチであるにもかかわらず、口角を上げているアスラが彼の目に映って……………

「へっ……………やっぱ破壊して来たな!!」

「?」

「その破壊を待ってた!!……………バースト発動、第二の龍騎!!」

「何!?!…バーストの龍騎だと!?!」

アスラが勢い良く反転させたのは他でもないコラボダンジョンで入手した第二の龍騎のカード。強力なバースト効果を遺憾なく発揮させる。

「効果でもう一度クシャトリヤを破壊だ!!…バーニングセイバー!!」

「!？」

アスラの背後から飛び出して来たのは破壊されたはずの仮面ライダー龍騎。右手に構える柳葉型の剣に炎を灯し、それを振るって炎の斬撃を放つ。クシャトリヤはその炎の斬撃に胸部を斬り裂かれ、今度こそ力尽き爆散してしまった。

ー【仮面ライダー龍騎「2」】LV2(3)BP7000

「クシャトリヤ!!……くっ」

「さらに第二の龍騎でアタック!!……ミラーワールドの効果でオープンカードを手札に加えるぜ!!」

ようやくガラ空きとなったフリソデの場に再度攻撃を仕掛けるアスラ。ミラーワールドの効果で手札が増える。

第二の龍騎が剣を構え直して彼のライフへと突撃する。そして最早このアタックを防ぐ手段は無い。彼は苦渋に顔を歪ませながら致し方なく宣言を行う……

「ら、ライフで受ける……………ッ」

へライフ5??4へフリソデ

第二の龍騎の豪快な剣技が横一閃に放たれ、フリソデのライフがここに来てようやく斬り裂かれる。

「つしやあ!!…………どうだ金髪コノヤロー!!…………ターンエンドだ!!」

アスラ手札：5

ロン手札：4

場：【仮面ライダー龍騎「2」】 LV2

【ミラーワールド】 LV2

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【無】

「……………図に乗るなよ…………コモン如きがよくもボクのライフを砕いてくれたな!!」

「!!」

このターン。アスラはフリソデから確かな憎しみが向けられた。フリソデは比較的温厚そうだったさつきまでの印象とは打って変わって豪快にターンを進めていく。

全てはコモンと言う最弱の存在のくせに自分を傷つけたアスラを叩きのめすためだ。

「ターン07」フリソデ

「もう容赦はしない、メインステップ!!…ドラッツェ2体を召喚!!…レウルーラの効果でドロー!」

ー [ドラッツェ「袖付き」] LV1 (1) BP1000
 ー [ドラッツェ「袖付き」] LV1 (1) BP1000

赤いモビルスピリット、ドラッツェが再び2体彼の場に現れる。さらにこの際に行われたレウルーラの効果によるドローカードを見るなり、フリソデは目の色を変え、口角を上げた。

ちよつとおバカなアスラが見ても「彼のエースカードが来た」と言うのがわかる。

そして誰もが予想してた通り、フリソデは手札のカードのそれを引き抜き、己のBパッドへと叩きつけた。

「さらに赤き彗星の再来……シナンジュをLV2で召喚だ!!」

「!!」

ー【シナンジュ】LV2(3)BP13000

上空より飛来して来たのは正しく赤き彗星。

ドラッツエとは比較できない程、透き通るように澄んだ深紅のボディ。長いレーザービーム砲とボディと同じ色をした盾を所持する強力なモビルスーツ、シナンジュがここに顕現したのだ。緑色をした一つ目の眼光がアスラとロンを威嚇するように睨みつける。

「どうだい?……これがボクのエースカード、シナンジュさ。召喚時効果でこのターンの間、袖付きスピリットは相手の効果を受けない……当然このシナンジュも袖付きを持っているため、自身にも適用される」

「ッ……効果を」

「でもその真つ赤でイカしたモビルスピリットとドラッツェだけじゃオレとロンのライフは全て破壊できないぜ!!」

アスラがフリソデに言い返す。彼らのライフは4。確かに効果を受けないとは言え、このターン中にフルアタックをされたとしても0にする事はできないが……………

「君バカだね……このボクがそれだけで終わると本当に思ってるの?」

「!!」

「マジック、大人の特権。これによりパイロットブレイヴをシナンジュに直接合体するように召喚……………搭乘させるのはフル・フロンタルだ!!」

「……………パイロットブレイヴ!」

ー【シナンジュ+フル・フロンタル】LV3(3)BP19000

フリソデのBパッドに変な仮面をつけた金髪の男性のカードがシナンジュに重ね合わされる。場にはこれと言った変化は無いが、エースカードであるシナンジュは確実に

強くなっていて……………

「母艦ネクサスにパイロットブレイヴ。モビルスピリットを強くする上では欠かせない存在。そして相手をする際は必ず警戒しなければならぬ存在だよ。そんな事も分からないのかい?…………フル・フロンタルの召喚時効果。相手はスピリットを破壊しなければボクは2枚ドローする」

「ツ……………第二の龍騎は破壊させねえ!!」

「フフ……………その選択を後悔しない事だ。ボクは新たに2枚のカードをドロー」

パイロットブレイヴであるフル・フロンタルの召喚時効果が炸裂。アスラは咄嗟にスピリットを守る事を優先するが、その判断にフリソデは笑みを浮かべながらカードをドローしていて……………

「バーストをセットしてアタックステップ!!…フル・フロンタルの効果。袖付きスピリットのBPを5000上昇!!さらにシナンジュは赤のトリプルシンボルとなる!!」

「ツ……………トリプルシンボル!?!」

1 「ドラッツェ」[袖付き] BP1000??6000

1 「ドラッツェ」[袖付き] BP1000??6000

1 「シナンジュ+フル・フロンタル」 BP19000??24000

シナンジュと合体したパイロットブレイヴ、フル・フロンタルの効果で全体の士気が高まるモビルスピリット達。さらにシナンジュは一撃で相手のライフ3つを破壊できるトリプルシンボルとなった。

「さあ行けシナンジュ!!…合体したフル・フロンタルの効果で第二の龍騎に指定アタック!!…さらにシナンジュ自身の効果でブロックされた事により回復!!」

「なに!?!…指定アタックと回復!?!」

1 「シナンジュ+フル・フロンタル」(疲労??回復)

かなり手強いコンボを発揮される。第二の龍騎に向けて銃からレーザーを発射するシナンジュ。第二の龍騎は剣を振り、それを弾き返す。

「第二の龍騎は所詮BP7000。対するシナンジュのBPは24000!!……敵うわけがないよね!!」

「くっ……!!」

やられっぱなしではいられないと考えた第二の龍騎が剣を握り、果敢にシナンジュに挑みに行くが、縦一閃に振るった剣はシナンジュの深紅の盾に完封されるどころか完全に当たり負けして碎け散ってしまう。

その後ゼロ距離でレーザー光線を発射され、胸部を撃ち抜かれる。第二の龍騎は流石に力尽きて爆散してしまう……

「ほうら。やっぱり君たちはボクに負ける!!……ドラッツエ1体でアタック!!」

再び表情に余裕が帰ってきたフリソデ。今度はドラッツエでアタックを行わせる。最初に1点のみを破壊し、残りライフが3つになったところで最後にシナンジュのトリプルシンボルでのアタックを行う気なのだろう……

だが……

「おいロン!!…まだ生き残れるよな!!」

「ああ、当然だ。フラッシュマジック……リアクティブバリア!!」

「!?!」

「この効果によりこのバトルでこのターンは終わる……ドラッツェのアタックはライフで受けてやろう!!」

〈ライフ4??3〉アスラ&ロン

「……これでオレ達のライフは残り3つだが……アタックステップは終わる。いくら効果を受けないとは言え、この手の効果までは無効にできないだろう」

「くっ……」

ドラッツェの装備しているガトリングガンの連射がアスラとロンのライフを1つ破壊するも、ロンの発揮したマジック、リアクティブバリアの効果によってフリソデはこれ以上のアタックを禁じられた。

また自分より下の存在に一杯食わされたと思うと凄まじく腹立たしいが、このターンはどうしようもなくエンドとするしかなくて……

「まあ良い。次のターンで確実にシナンジユのレーザー砲が君らの喉元を貫くだろう………ターンエンドだ」

手札：5

場：【ドラッツェ「袖付き」】LV1

【ドラッツェ「袖付き」】LV1

【シナンジユ+フル・フロンタル】LV2

【レウルーラ「UC」】LV1

【レウルーラ「UC」】LV1

バースト：【有】

結果としてドラッツェ1体と、強力極まりないモビルスピリット、シナンジユをブロッカーとして残す事になったフリソデ。絶対的な優勢は変わらずであるため、その表情にはまだ確かな余裕が存在するが………

「次はオレの番だな……アスラ、オマエは休んでろ」

「!!」

「仮面ライダーナイトを……」

……連続召喚!!

ー【シャムシーザー】LV1(1) BP2000

ー【シャムシーザー】LV1(1) BP2000

ー【仮面ライダーナイト】LV2(3) BP4000

背中に幾千ものトゲを生やした赤いトカゲ型のスピリット、シャムシーザー2体と、仮面ライダーナイトが2人の場に現れる。

「さらにオレは、シャムシーザー2体から不足コストを確保し、仮面ライダー龍騎サバイブを召喚!!」

「アタックステップ!!…ナイトでアタック!!…さらにフラッシュ【煌臨】を發揮。仮面ライダーナイトを仮面ライダーナイトサバイブへと昇華させる!!」

「……………何……………サバイブだと!?!」

アスラの場に龍騎が復活。ナイトと背中合わせになり、互いにサバイブのカードを銃に、剣に装填……………

龍騎は烈火の炎、ナイトは疾風の風に包まれながら、強化形態である龍騎サバイブ、ナイトサバイブへと昇華して見せた。

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(2)BP11000

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2(3)BP11000

そしてそんな折、彼らの背後でそのバトルを見届けていた白いドレスの少女イユはそのライダースピリット2体を目に映すなり怯えるように唇を震わせていて……………

「お、黄金の翼のカードまで持つてるなんて……………」

「?」

彼女のすぐそばにいるエールはイユのその発言に疑問を抱いた。「何故この子はサバイブが黄金の翼のカードによる強化だと知っているのだろうか?」と……………

総合してもやはり意味深な発言が目立つイユとフリソデ。もしかして自分達はまた

何か相当厄介な事件に首を突っ込んでいるのではないかと勘ぐってしまった。

「サバイブのカード………フフフ………アハハハッハッハッハ!!………こりや凄いや!!さぞかしあの方も喜ばれる事だろう!!………必ずいたたくぞそのカード!!」

「テメエにあげるモノなんて1つもねえ!!」

「ナイトサバイブの煌臨アタック時効果!!………シナンジュのコア2つをトラッシュに送る!!」

「!!」

1 「シナンジュ+フル・フロンタル」(3??1) LV2??1

ナイトサバイブの疾風の風を纏った剣撃がシナンジュを襲う。その内部にあるコアが2つトラッシュへと弾き飛ばされ、LVを大幅にダウンさせてしまい、BPも19000から14000へとダウンした。

「しかし、その程度のコアシートでシナンジュは倒せない!!………BPもまだこちらが上!!………ブロックしろ!!」

「いや、その前にもう一度フラッシュユタイミングだ!!」
「!?」

アスラとロンは「ここだ」と言わんばかりにカードをBパッドに叩きつける。それは正しく必殺技とも呼べる最強のアドベントカードであり……………

「ファイナルベント発揮!!」

「なに!?!」

「ファイナルベント2枚分の効果。BP15000以下のスピリット2体を破壊し、アタック中のナイトサバイブに赤のシンボルを2つ追加する」
「!?」

龍騎サバイブとナイトサバイブはベルトからカードを同時に引き抜き、それをそれぞれのバイザー部へと装填……………

……………ファイナルベント!!

の機械音声と共に、龍騎サバイブの背後には赤き武装龍。ナイトサバイブの背後には

疾風の翼を持つ蝙蝠がそれぞれ姿を表す。2体のライダースピリットはその背中へと飛び乗り、上空へと飛び立った。

「破壊対象は回復状態のドラッツエとBPの下がったシナンジュ!!」

「くっ……………!!」

アスラがそう言うと、赤き武装龍は口内からこれでもかと火炎弾を発射。ドラッツエはそれに被弾してしまい、焼き尽くされ爆散してしまう。さらに疾風の翼が高速の翼撃をシナンジュに与え、それを腹部から一刀両断してみせる。シナンジュは堪らず爆散した。

この際、合体していたフル・フロンタルはカードとしては場に残る。しかし、パイロットブレイヴは単体では反映されないカードであるため、視認する事はできなかった。

「バトルは継続中!!…パイロットブレイヴはアタックとブロックができない。これでオマエを守るスピリットは全て消えた」

「ら、ライフで受ける……」

ブロックできるスピリットが消え失せ、2枚分のファイナルベントの効果によりトリプルシンボルと化したナイトサバイブのアタックを受ける事しかできなくなったフリソデ。

疾風の翼がバイク型のマシーンへと変形し、彼のライフへ向けて走り出した。

「疾風断!!」

ロンが技名を言い放つと、ナイトサバイブのなびく黒いマントがバイクごと包み込み、一本の巨大な黒槍を形成。そのまま突進していき、フリソデのライフへと激突。まるで紙切れのように難なく貫いて見せた……………

「ぐっ……………!!」

へライフ4?!1フリソデ

大量にあったライフも風前の灯となってしまったフリソデ。多大なバトルダメージにより身体がふらつく。だが、まだ勝負を捨ててはいないか、伏せていたバーストカー

ドの方へと目を向けると……………

「ライフ減少によりバースト発動!!…絶甲氷盾!!」

「!!」

「効果でライフ1つを回復!!……………どうだ、これで龍騎サバイブだけではライフを全て破壊できない!!……………やはり君たちはボクに敗北する運命……………定めにあるんだ!!」

〈ライフ1??2〉フリソデ

勢い良く反転されたバーストカード。その効果でライフ1つが蘇る。既に勝ち誇っているフリソデだが……………

本当はもう既に彼らに敗北していて……………

「運命とか定めとかうつせえんだよ。龍騎サバイブの効果……………ライダースピリットがアタックしたバトル終了時、そのスピリットのシンボル分だけライフを追加で破壊する

……………!!」

「……………はっ」

「直前のナイトサバイブのシンボルは3つ!!……よって3つのライフを追加で破壊する!!」

アスラの言っている意味がわからず、あっけらかんとした様子をみせるフリソデ。しかしもはや時既に遅し、今度は龍騎サバイブを乗せた赤き武装龍がバイク型マシンへと変形。フリソデのライフへ向けて走り出した。

「な、何だと……こんな事が……こんな事があつてたまるものかアアアア!!!」

「オレはロンにだけは絶対負けねえー!!!……行け龍騎サバイブ……ドラゴンファイヤー ストーム!!」

「……………ぐつがっ……………ぐおああー!!!」

へライフ2??0へフリソデ

アスラが力強く技名を叫ぶと、バイク型マシンは烈火の如く炎を纏い、フリソデのライフへと突撃……そして激突。そのライフを1つ残らず全て焼き尽くし、貫いて見せた……………

彼のBパッドからは敗北を告げる甲高い機械音声が流れる。そしてそれは同時にアスラとロンの勝利を表す音でもあつて……………

「つしやあ!!」

「……………!!」

「……………凄い……………あの2人、まさか組んだら無敵……………?」

バトルに勝利したことによる高揚感から、叫びながらガッツポーズをするアスラと黙つて拳を固く握りしめるロン。そんな2人を見ながらそう感想を口にするエール。

最初は全く息が合わなかったのに、シナンジュと言う強敵を前にした途端急に呼吸が合い、一瞬にして決着がついた様は正に「無敵の最強タッグ」とも呼べる光景だったのだ。

「ぐつ……………ぼ、ボクが負けただと……………このボクが……………コモンなんか……………ツ」

Bパッドの効果が消え、スピリットやネクサスなどがゆつくりと消滅していく中、ライフが砕け散る衝撃で地面に叩き伏せられたフリソデは悔しさと歯痒さに顔を歪ませ

ながらそう言葉を口にしたのちに気を失ってしまふ。

彼がどれだけ身分の高い人間なのかはわかったものではないが、相当格下に負けたのが悔しいらしい……………

「どうだロン!!…オレの龍騎サブイブがトドメを刺したぜ!!…この勝負はオレの勝ちだな!!」

「いや、ナイトサブイブの煌臨時効果が無ければファイナルベントであのモビルスピリットは倒せなかったし、何よりナイトサブイブのアタックあつてこそ龍騎サブイブの効果が使えた……つまりオレの勝ちだ」

「なんだとコノヤロー!!…結局龍騎サブイブがトドメ刺したのは変わりねえじゃねえかアアアア!!…オマエ昔からそう言う所あるよね!!」

バトルが終了した直後にまた喧嘩する2人。しかしこのワチャワチャを永遠と繰り返すわけにはいかない。アスラとロンは視線を倒れているフリソデの方へと向けると……………

「てか、コイツどうする?」

「取り敢えずライライ町の自警団にでも突き出しておくか……一応その女もな……聞きたい事もあるし」

「……………」

ロンがそう言いながらイユの方へと振り向いた。彼が彼女に向けたその視線は疑念に満ち溢れていて……………」

「おいおい!!…何疑ってんだよロン!!…この子あの金髪ヤローに追いかけてたんだぞ!?…そんな事する必要無いって!!」

「だがどちらにせよ事情は聞く必要がある……あの金髪とも知り合いなんだろう?…オマエ達はナイトと龍騎の何を知っている?」

「……………」

ロンに問い詰められ、困惑した様子をみせるイユ。確かに龍騎やナイトに関する何かを知っているのだろう。しかし、彼女として説明したいのは山々なのだが、いったいどこからどう説明すればいいかわからないため、言葉が出てこないのだ。

そんな時だ。熟成されたような渋い男性の声が届いて来たのは……………」

「やあ、ご機嫌よう。私の助手がお世話になったようだね」

ー!!

咄嗟に声のする方へと振り向く一同。そこには薄い青色のローブを被った男性がいた。顔からして年齢はおよそ40代くらいである事が窺える。彼が明言している「助手」とは、そこで気を失っているフリソデの事で間違いないだろう。

音もなく、誰にも気づかれずに接近して来た事から、彼がただ者ではない事は全員が察しており、限界まで警戒心を強めていた。そんな中、イユはその存在を知っているのか、見るなり身体が恐怖で小刻みに震えていて……………

「やあイユ。どうしたんだい急に家出なんて……………君はもうすぐ神になるんだ。こんな所で居なくなってもらっては困る」

「……………!!」

イユを神と称するローブの男性。全く会話の内容が理解できないアスラ達だったが、

恐怖に身体が支配されているイユを放って置くわけにはいかなくて……………

「おいローブのおつちゃん!!…何が何だかようわからんけど……………この子、めっちゃ怖がつてるぞ……………さっさとどっか行きやがれコノヤロー」

「スーミ村のアスラか。生憎、我は貴様みたいな突然変異の欠陥品には興味が無い。あるのはイユと……………」

「？」

そう言いながらローブの男性はロンの方へと視線を送る。どうやら彼の興味があるのはイユとロンらしい。その意味も意図も理解できないロンは疑問符を頭に浮かべる。

「やあロン。覚えてるかい?……………いや、覚えていないだろうね。あの時の君はまだ生後間もない赤ん坊だったのだから」

「ツ……………オマエ、オレの何を知っている?」

「君の出生から生い立ちから何やら何まで全て知っていると。何せ我は君の實の父である『ゾン・アーサー』の親友……………『シスイ・メイキョウ』なのだから」

ー!!

イユ以外の全ての人物に衝撃が走る。シスイ・メイキョウと言えば15年前に行方不明になったメイキョウ家の者だからだ。そしてロンは彼の言葉を耳にし、額に冷や汗をかきながらもメイキョウ旧領で断片的に蘇った記憶の事を思い出していた……

ー『凄いぞシスイ!!…遂に行けるんだな、ミラーワールドに!!』

ー『ああゾン。これでようやく……ようやくだ……』

研究室にいたこの2人のうち、今思い返せば1人は目の前にいるシスイ・メイキョウで間違いないだろう。つまり……もう1人の男性は……

「あれは……オレの本当の父親……!？」

そう。ナイトサバイブを召喚する度に見ていたあの記憶の中で赤ん坊の自分にナイトを託した今にも死に絶えそうな男。メイキョウ旧領で見た記憶の中の「ゾン」と呼ばれていた男はロンの実の父親……

「君の本当の名前はロン・アーサー……この国の数少ないエックスの一族の一人だ」

ー!!

「……ロンがエックス……!?」

とんでもない真実が明らかになる。ロンはコモンしか住まない村であるスーミ村にて育つたため、その身分はコモンとされていたが、その壮絶な過去を辿れば本当は最高の身分である「エックス」であると言う……

急には受け入れ難い衝撃の事実にも、ロンをはじめ、アスラやエールは驚愕と困惑する事しかできなくて……

「まあいい。どちらにせよ全てのミラーライダーズは手に入れなければならない。この場にいる全員を招待してあげよう……神の生まれし世界へと……!!」

ー!!

イユが全員に鬼気迫る様子で「逃げて!!」と叫ぶ前にローブの男性の身体が眩い光に包まれていく。それは一瞬にしてこの場全域に広がり、アスラ達はその中へと包み込まれて消え去ってしまった……………

34コア 「鏡の中の世界、アルケーガンダム追憶」

「……………ぐっ……………ん？」

15年前に行方不明となっていたはずのシスイ・メイキョウの口からロンの出生の秘密が語られた直後。謎の光に包まれたアスラ達。

アスラは目覚めると、自分がさっきまでいた森の中ではなく、ライライ町の繁華街にいる事に気がついた。しかし、人氣が無く、無人であり、どうにも違和感が拭えなくて……………

「あ……………みんなは……………エール!!」

「……………ツ……………ん？」

共に光に包まれたであろう仲間を探すべく四方八方に首を回すアスラ。そこにはエールとムエ。白いドレスを着た謎多き少女イユがいた。各々はそれぞれのタイミン
グで目覚めていくが、

何故かシスイとフリソデ、ロンはこの場にはいなくて……………

「アスラ……………ここは？」

「ライライ町の繁華街っぽいけど……………なんだろう、なんか変な違和感あるんだよな……………人が1人もいないからか??…でも見た事がある気もするし……………」

「むえ〜」

ライライ町の街並みの風景はアスラとて当然覚えている。娯楽を極めた町と言う肩書きもあるため、毎日のように街の人達は賑わっていた。

だがそれ以上に何かが変わった……………

そしてアスラの疑問に全ての事情を知っているイユが答えて……………

「……………ここはミラーワールド……………あなた達がいつもバトル中に配置している世界そのモノよ」

「!!」

アスラやロン。ライダーハンターズのおロチも使用するネクサスカード、ミラーワールド。イユはここがその世界そのモノであると言う。

彼女にそう言われ、戸惑いながらも、アスラは懐にある自分のBパッドやデツキのカード達を確認する。

「ミラーワールドって……え、えええええ!?……オレ別にBパッド展開してないし、ミラーワールドのカードも配置してないぞ!」

「……………でも、間違いなさそうね……………」

エールがそう言いながら所狭しと並ぶ店々へと指を刺した。アスラはそこへと首を向けると、看板などの文字や目印となるマークなどが鏡巻きになっていく光景だった。

アスラがこの景色に違和感を感じつつも、どこか見覚えがあると思っただけはそれが原因だ。

「ええ!?……………ちよつと待って、何がどうなってるの!?……てゆうかロンとかあのメイキョウ家のおつちちゃんはどこ行っただアアアー!!!……………チクシヨオオオー!!!……何が何だか全然わからん、頭が追いつかねええ!!!……だってオレバカだからアアアー!!!」

「うっさいわねあんたは!!…一々騒ぐな!!」

原理が理解できず、叫び倒す事しかできないアスラ。エールはそんな彼にツツコミを入れるが、彼女自身もアスラ同様内心では意味がわからないと思っっているし、戸惑っ
はいる。

しかし、この訳の分からない現象を唯一説明できるであろう人間を、エールは知っ
いて……………

「……………ロンも言っただけど、あなた達本当に何者?…なんで私達はこんな世界に連れ
て来られたの?」

「おいエール!!…オマエまでこの子疑ってんのかよ!!」

「あんたが疑わなすぎすぎなのよ。この子が善であれ悪であれ、どちらにせよ説明できる
ならしてもらわないと、この先どうにもできないわ」

エールの言っている事は正論だった。状況からして、イユは確かにどう見ても被害
者。しかし、今回の謎めいた事件の理論や理屈を誰よりも理解しているのは他でもない
彼女だ。

「……………わかりました。全てを話します」

漂う緊迫感と緊張感の中、イユは口を開き、遂にアスラとエールに今回の事件、ミラーワールドやミラーライダー、何故自分が追われていたのか、そしてロンの出生について話し始めた。

「……………ツ……………ここは……………オウドウ都!？」

一方、ロンは満ち溢れた光が過ぎ去った途端に目を見開くと、そこには見慣れたオウドウ都の繁華街の景色が広がっていた。目の前には三王達に挑む場である三王塔も伺える。

「ふむ。他の者達は違う場所に移動させてしまったか、やはり大人数での移動は難しいね」

「ツ……………オマエ」

ロンが声のする方へと振り向くと、そこには行方不明になったはずのマスター、メイキョウ家の人間で、おそらく自分達を今回の事件に巻き込んだであろう諸悪の根源、シスイ・メイキョウの姿があつた。

「龍騎を持つあの欠陥品やイユを違う場所に置いて来てしまったのは失態だが、まあいいでしょう。これでゆつくり2人でお話ができるね、ロン。ここには我ら以外誰もいないのだから」

「アスラ達をどこにやった……………そしてここはどこだ。ただのオウドウ都じゃないのはわかる」

まるで最初からロンと2人で会話するのが目的だったかのように、シスイはそう言葉落すとす。

そしてロンの質問に対して返答して……………

「ここはオウドウ都さ、鏡の中のね……………いつも君が配置してるだろ?…ミラーワールド

ドッ」

「なにっ?」

「ここが自分のデツキにもあるカード、ミラーワールドの中だと聞いて驚きを隠せないロン。信じられなかったが、よく見たら周囲の景色が鏡巻きになっていて驚きから、彼が嘘を言っていないのは理解できて……」

「ふふ……我に対する疑問は尽きないだろうからね。答えはバトルスピリッツの中で教えてあげましょう。君の持っているそのナイトのカードは回収しないといけないしね」

「ッ……!!」

「どちらにせよ君はここで戦わなければ生き残れない。さあ、デツキとBパッドを抜きなさい」

「そう言いながら懐よりBパッドを取り出し、それを展開してデツキをセットしたシスイ。やはり狙いはさつき金の髪の男、フリソデと同様に龍騎やナイトであるようだ。」

「しかしそれは百も承知していた所。ロンはまだ自分が実はエックスの身分を持つ者だったと言う衝撃が強く心と身体に刻み込まれているものの、それををもものともしな

い様子でシスイに対抗するように己のBパッドとデツキをセットした。

「ふむ。やる気は十分と言った感じですかね……そうこなくては面白くない。では、参りますか」

「……ああ」

…………ゲートオープン、界放!!

鏡の中の世界、ミラーワールドにて、ロンとシスイ・メイキヨウのバトルスピリッツがコールと共に幕を開けた。

先行はシスイだ。不気味に笑いながら己のターンを進行して行く。

「ターン01」シスイ

「メインステップ、先ずはネクサスカード、海底に眠りし古代都市を配置しようか」

1 【海底に眠りし古代都市】 L V 1

バトル開始直後の刹那。シスイの背後に壮大且つ静寂な大都市が配置される。

「ターンエンド。さあロン。我に見せてくれたまえ、エックスの身分を持つゾンの息子たる力をね」

手札：4

場：【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【無】

「……オレがエックスだとかゾンの息子とかは知らない。オレはオレだ……依然としてスーミ村のロンだ」

「見栄を張るのはやめたまえよ。君はゾンに愛されていた。彼は最愛の妻を亡くし、家族は君だけだったからね」

「……………」

「優しい男だったよ……最終的に我はそんな彼に心底呆れたがね」

ロンの血の繋がった本当の父親、ゾン・アーサーの事を懐かしみながらそうロンに囁

いたシスイ。その内容からして、どうやらロンの本当の母親は既に他界しているようだ。

シスイが自分に揺さぶりを掛け、動揺を誘っているのは明白。だがロンはそれに呑まれる事なく、全力で己のターンを開始して行った。

「ターン02」ロン

「メインステップ……ミラーワールドを配置!!……ターンエンドだ」

ー「ミラーワールド」LV1

ロンはお得意のネクサス、ミラーワールドを配置する。本来であればこの瞬間よりフィールドが鏡像を具現化させた形へと変貌するはずだが、今回に限っては元々ミラーワールドと言う事があるからか、これと言った変化は起きなかった。

「懐かしいねミラーワールドのカード。我とゾンは研究者の一面もあつてね、よく一緒に研究やそれに対する論争をしたものだよ。ミラーワールドもその研究対象のうちの

「一つで………」

「黙れ。オマエの話は聞かない……早くターンを進めろ」

「おやおや、せっかちなだね。言われなくとも、進めるのに」

滑らかな口調、どこか掴み所の無い言い回し。しかし彼の言っている事は不思議と嘘だとは思えないロン。おそらくこれまで無意識化で見て来た記憶の影響であろう。赤ん坊の頃に見ていた記憶と彼の証言はあまりにもマッチしている。

「それでは再び私のターンだ」

「ターン03」シスイ

「メインステップ：それではダーク・スクアアローXをLV2で召喚しよう」

「【ダーク・スクアアローX】LV2(2S)BP5000

このバトルでシスイが初めて呼び出したスピリットは剣と盾を構えるサメ型の青属

性のスピリット、ダーク・スクアアローX。

シスイはどうかやら青属性のスピリットを主軸としたデッキを使用しているようだ。

「配置していた海底に眠りし古代都市の効果でコアを1つリザーブに、そのコアをダーク・スクアアローXへと移動」

ここでシスイが前のターンに配置していたネクサス、海底に眠りし古代都市の効果が起動。系統に異合を持つダーク・スクアアローXが召喚された事でコアが追加される。

「アタックステップ。行きなさいダーク・スクアアローX。効果でさらにコアブースト、LV3にアップさせつつ、相手のデッキを2枚破棄し、シンボルを0にする」

「!!」

アタックステップに突入し、シスイのダーク・スクアアローXが飛び出していった刹那。ロンのデッキが青く点滅し、上から2枚がトラッシュユへと落とされてしまう。

しかし、この効果を発揮させたダーク・スクアアローXのシンボルは0。ロンがライフで受けても破壊する事はできなくて……………

「アタックは継続中。さて、どうする？」

「……………ライフで受ける」

〈ライフ5??5〉ロン

ダーク・スクアアロXが手に持つ剣でロンのライフを斬り裂こうと試みるが、当然斬り裂く事は叶わない。そのまま諦めてシスイの場へと帰って行った。

「オマエ。オレのライフを破壊する気が無いのか？」

「いえいえ……ありますとも。しかしながらまだ破壊する時ではないと判断しただけ、ダーク・スクアアロXはそのためのスピリットですからね。取り敢えずこのターンはエンドです。さあ、ロン、昔話に花を咲かせましょう」

手札：4

場：【ダーク・スクアアロX】LV3

【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【無】

まだ動くべきではないと言い放ちながら、そのターンをエンドとするシスイ。次はロンのターン。少なからずシスイの言動やプレイングに腹を立てているのが伺えるが………

「ターン04」ロン

「メインステップ……ライフが減らされないなら自分から減らせば良いだけだ。魔界竜鬼ダークヴルムを召喚!!」

「!」

1 【魔界竜鬼ダークヴルム】 LV1 (1S) BP3000

ロンの場に現れたのは大勢の死霊をその身に宿す紫のドラゴン。その鋭い眼光は対戦相手であるシスイではなく、主人であるロンに向けられて……

「召喚時効果。オレのライフ1つをトラッシュに置き、2枚のカードをドローする」

へライフ5??4へロン

ロンのライフバリアに噛みつくダークヴルム。それを一つ噛み砕くとともに、ロンは自分のデッキから新たに2枚のカードをドロウした。

「ほお。肉を切らせて骨を断つ戦法ですか。懐かしいですね、よくゾンも似たような戦法を取っていましたよ。やはり親子とはどうしても似てしまうものようだ」

「ツ……………アタックステップ、ダークヴルムで攻撃する!!」

まるでシスイの追憶の言葉が火種になったかのように、静かに怒りの灯火を燃やしなから攻撃を開始するロン。ダークヴルムが今度はシスイに牙を剥く。

「ふふ、意外と分かり易い子だ。ライフで受けるよ」

へライフ5??4へシスイ

ダークヴルムがシスイのライフを1つ噛み砕いた。しかし、シスイはそれに伴うであろうバトルダメージは一切感じていないのか、依然として涼しい表情を披露しており……

「……………ターンエンドだ」

手札：6

場：【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするロン。

次はシスイのターン、余裕のある笑みを常々浮かべながら己のターンを進行していく。

「ターン05」シスイ

「メインステップ……………ふむ。それでは少しだけ赴いてみるとしよう……………先ずは海底に眠

りし古代都市のLVを2にアップ。これによりダーク・スクアアローXのシンボルは青の2つとなり、軽減を確保」

「!!」

ネクサスカード、海底に眠りし古代都市の更なる効果が発揮。これにより、今現在シスイの場には青のシンボルが3つとなった。

彼はそれを利用し、手札にある強大なスピリットのコストを軽減、召喚して見せる
……

「参ります、バーストをセット。そして完全体スピリット、トノサマゲコモンをLV2で召喚!!」

「ッ……デジタルスピリット!?!」

ー【トノサマゲコモン】LV2(3)BP12000

折角LVを上げたネクサスやスピリットのLVが大幅にダウンしてしまうものの、彼の場合には巨大なカエルのようなスピリット、トノサマゲコモンが姿を見せる。体中に備

え付けられた楽器のホルンのような物の音色がかなり喧しい。

「海底に眠りし古代都市の効果でコアブースト。そのコアを使いトノサマゲコモンのLVを3にアップさせ、ターンエンド……さあ、どこからでも来るといい」

手札：3

場：【ダーク・スクアールX】LV1

【トノサマゲコモン】LV3

【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【有】

「……………これだけのスピリットを呼び出しておきながら何もしないだと？」

完全にロンを舐めてかかっているのか、このターンもスピリットの召喚のみで余裕のターンエンドを宣言するシスイ。

しかし、何がどうあれ、ロンのターンが再び幕を開けるのに変わりはない。彼はシスイの余裕を崩すべく、己のターンを進行して行った……………

「ターン06」ロン

「メインステツプ……バーストを伏せ、仮面ライダーナイトを召喚!!」

「ツ……来たか、ミラーライダー」

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2)BP4000

様々な鏡像が重なり合いながら、ロンの場に現れたのは、紫属性のライダースピリット、仮面ライダーナイト。そしてシスイはそんなナイトの登場を心待ちにしていたかのように目を見開いて……

「召喚時効果、カードを1枚……」

「ドローは無理だね。このトノサマゲコモンがいる間、相手は召喚時効果を発揮できない」

「なに?」

ナイトの十八番とも呼べる召喚時のドロー。しかしそれは今回に限りシスイのトノ

サマゲコモンに封じられる。

「ナイトとは15年ぶりの再会だよ……あの日、ゾンが勝手に持ち出して以来じゃないかな？」

「……………？」

「愚かな男だったよ。あのまま我についていけばいいものを……………勝手な倫理観に囚われて君にナイトを託し、スーミ村とか言うこの国の底辺の集落に置き去りにした……………そしてその後、のこのこと我に殺されに来た……………!!」

「ツーーーー!!」

実の父親であるゾンは既にシスイに殺されている事が明らかとなり、ロンの体中に衝撃が迸る。

徐々に口調が勢いに乗ってきたシスイは、直後にその己の抱いている野望を口にする。

「我はただ、このミラーワールドに眠る神を顕現させ、ミラーワールドだけでなく、表の世界も支配したいだけだったのにな!!」

ロンの心が憎しみと怒りで満たされていく中、シスイが語った己の野望。その内容はミラーワールドに眠る神たる存在を獲得し、このミラーワールドだけでなく、表の世界も支配したいと言うモノ。

「……………そんなクソみたいな野望、どうでもいい……………オレはオマエをぶっ倒す!!」
「おっ…やっぱり本当は父親の事をちゃんと想っているんじゃないか。健気な子だと、最初から素直になれば良いのに」

「黙れッ!!…ミラーワールドのLVを2に上げ、アタックステップ!!…攻撃しろナイト!!」

怒りに満ちたロンの指示を聞くなり、ナイトが剣を構え、地を駆ける。狙うは当然シスイのライフだ。そしてこの瞬間、ミラーワールドLV2の効果が発揮されて…………

「ミラーワールドのLV2効果!!…カードを1枚オープンし、それがアドベントカードならばノーコストで発揮できる!!」

怒りのままに己のデッキをオープンするロン。だがそのカードはアドベントカードではなく、何の変哲もないスピリットカード。ミラーワールドの効果でそのカードは手札に加えられるが……………

その瞬間をシスイは見逃さなくて……………

「手札の増加によりバースト発動、グリッドサンダー……………相手の手札が5枚以上の時、それら全てを破棄させ、その後2枚のカードをドロウさせる」

「……………!?!」

シスイのバーストカードが反転。その刹那に青き稲妻が迸り、ロンの手札をトラッシュへと弾き落とした。その中には最強のアドベントカードである「ファイナルベント」のカードが確認できる。おそらくロンはこのカードで一気にシスイを追い詰める予定だったのだろう。

「フツ……………ナイトの ATTACK はトノサマゲコモンでブロック……………そして返り討ち」

「……………いや、まだだ!!……………フラッシュマジック、ソードベント!!」

「!」

ロンがたった2枚の手札から引き抜いたカードはアドベントカードの一種である「ソードベント」……………

これによりナイトのBPを上昇させつつ、敵スピリットのコアを除去できる……………

はずだった……………

「効果で先ずはナイトのBPを……………」

「それは不可能……………!!」

「!!」

「トノサマゲコモンのLV3効果、アタックステップ中にマジックカードは發揮できない!!……………アドベントカードも飽くまでマジックカードの一種、よって無効!!…大人しく手札に戻しなさい!!」

「なにっ!?!」

トノサマゲコモンから青白い光が発光。その放たれた光の影響か、ロンのBパッドに叩きつけられたソードベントのカードが彼の手札へと弾き返される。

「残念だったね、ナイトは何もできずに破壊さ
くつ……………!!」

トノサマゲコモンの身体に備え付けられた数多くの楽器から奏でられる不協和音。
その凄まじい快音がナイトの身体を爆発させる。

「……………ターン……………エンドだ」

手札：2

場：【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【有】

怒りに身を置き、力任せに攻撃した結果返り討ちに遭ってしまったロン。ナイトを
早々に失ってしまっただけでなく、手札までもが大きく削がれてしまった。

今回の件を機に、ロンが心のどこかで思っていた自分の父の生存。しかし、その可能
性がシスイによって亡きモノにされていた事を知った事により、彼は徐々に冷静な判断

ができなくなってきた。

「脆い……………」

「!?」

「脆いね。まるで石ころを投げられただけで崩壊してしまう水面の月面のようだ」

「……………意味のわからん事を…………!!」

「まだまだ青二才だなと言う意味さ……………さあ、次は今一度我のターンだ……………ここから先のターンは手加減しないよ?」

さつきまで根暗だった目つきが鋭い眼光へと変貌するシスイ。ここからが本気のバトルスピリッツだと瞬時に悟ったロンは本能的に身構える。

「ターン07」シスイ

「メインステップ……………もう一度バーストをセット。そしてもう1体トノサマゲコモンを召喚!!」

「トノサマゲコモン」LV1(1) B P 10000

フィールドに現れたのは2体目となるトノサマゲコモン。巨大な体軀から放たれる視線の圧がロンを襲う。

「ネクサス、海底に眠りし古代都市の効果でコアを追加。そのコアでダーク・スクアールXのLVを2に上げ、アタックステップ。行きなさいトノサマゲコモン」

「ツ……ライフだ……がつ!!」

〈ライフ4??3〉ロン

召喚されたばかりのトノサマゲコモンがロンのライフ1つを叩き壊す。彼が本気を出して来た事もあってか、多大なバトルダメージがロンを襲う。

しかし、やられっぱなしでいるわけにもいかない。ロンは痛みを堪えながらも事前に伏せていたバーストカードを反転させる……

「ツ……バースト発動、ドラグーンシユート!!……トラツシユからナイトを蘇生!!」

┆【仮面ライダーナイト】LV2(2)BP4000

前のターンで破壊されたナイトがロンの場に復活を果たす。しかし、その効果はトノサマゲコモンの効果で封じ込められたままであり……

「無駄だよ。トノサマゲコモンの効果でナイトの効果は無効だ」

「コイツが……オレの相棒が復活しただけで十分だ!!」

いつになく、そしてガラにもなく鬼気迫る様子で熱意を叫んで見せるロン。余裕がなくなつて来ているのが伺える。

「ナイトが相棒ね……君はそいつの価値をわかっているのかい？」

「!？」

「ふふ、その様子じゃ分かっていなかったようだね」

そんなロンの熱意を冷ますかのようにシスイが口を開く。そしてその口から遂にナ

イトの秘密が明らかになって……………

「君の持つナイト。そしてスーミ村のアスラが持つ龍騎はこのミラーワールドに生きていたライダースピリット、ミラーライダーズの12体の内の2体だ」

「!?!」

「その内の11体が集う時、最強の12体目にして先程申した神たる存在、仮面ライダーオーデインが誕生すると言われている。我はそのカードを娘であるイユに宿らせたいと願っているのだよ」

「だからナイトと龍騎がいる……………!?!」

「ああ、その通りだ。神にも等しいオーデインのカード……………それを我が娘であるイユに宿らせ、ミラーワールドだけでなく、表の世界までもをこの我が支配して見せる!!…まあ宿らせたイユの魂はただでは済まないだろうがね!!」

龍騎とナイトのカードは元々このミラーワールド特有のライダースピリット、ミラーライダーズの1種だった。しかし、何らかの理由でバラバラになったそのカード達をシスイは収集していた。

全ては12枚目の最強のミラーライダーズ、オーデインを手に入れるため。

「自分が最強になるために、娘を無理矢理宿主にするつもりか!!」

「必要不可欠な犠牲だ。それに娘は私の所有物、大した痛手にもならない。それよりゾンを殺すことになった事の方が我としては大きな痛手だったよ」

「娘が所有物だと……オマエは……オマエはどれだけ人々をコケにすれば気が済むんだアアアアア!!」

ロンの見せる激しすぎる激昂。自分の本当の父だけでなく、己の娘までもを野望の糧とするシスイが許せない……………

その高なる感情が普段は他人に激怒したりしないロンをここまで激情にさせた。

「……オレのターンー!!!」

そして、その感情を胸に、ロンの怒りのターンが幕を開ける……………

「ターン08」ロン

「メインステップ!!…バーストを伏せ、スピリット達のLVを最大まで引き上げる!!」

ー【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1??3

ー【仮面ライダーナイト】LV2??3

バーストのカードがセットされると共にダークヴルムとナイトのLVが最大になる。そしてロンは残り少ない手札を固く握り、アタックステップを宣言して……………

「アタックステップ!!…ダークヴルムでアタック!!…その効果でLV1のトノサマゲコモンのコア1つをリザーブへ、よって消滅!!」

ー【トノサマゲコモン】(1??0) 消滅

ダークヴルムの吐き出した紫のブレスがトノサマゲコモンを包み込む。それにより1つしかないコアが逃げ出すように飛び出てしまい、トノサマゲコモン1体はたちまち消滅してしまった。

「フツ……しかしまだこちらにはLV3のトノサマゲコモンがいますよ？……ダークヴルムをブロックしなさい」

トノサマゲコモン1体を倒したのも束の間、最初に召喚されたLV3のトノサマゲコモンがダークヴルムに襲いかかる。

そしてトノサマゲコモンの強力なグーパンチがダークヴルムの腹部に直撃、堪らず爆散してしまう。その光景を目に映していたシスイは余裕の笑みを浮かべながら「他愛もない」と呟くが……

ここまでがロンの作戦であって……

「まだまだツー!!……まだオレは諦めない!!……破壊によりバースト発動、天冥銃アーミラリー・スフィア!!」

「!?!」

「バースト効果でダーク・スクアアローXを消滅させ1枚ドロ、その後召喚!!」

ー【ダーク・スクアアローX】(2??0) 消滅

ー【天冥銃アーミラリー・スフィア】LV1(3)BP3000

ダークヴルムの破壊をトリガーに、ロンのバーストカードが勢い良く反転。ダーク・スクアアローXの中に眠るコアがリザーブへと弾き飛ばされる。ダーク・スクアアローXは身体を維持できなくなり、消滅してしまふ……

そして対象的にロンの場には強力な紫の銃ブレイヴ、天冥銃アミラリー・スファイアが出現した。

「ほお。銃ブレイヴ……面白い、つまり狙いは……」

「煌臨だ!!……アタックステップは続行、アミラリー・スファイアでアタック!!……フラッシュ【煌臨】を發揮、対象はアミラリー・スファイア!!」

ロンのソウルコアがトラッシュシュに置かれ、發揮される【煌臨】……彼のデッキにおいて煌臨を持つスピリットは1体……

「来い、仮面ライダーナイトサバイブー!!!」

紫の魔法陣と共に仮面ライダーナイトの最強の姿、ナイトサバイブが黒いマントを靡

かせながら顕現。天冥銃アーミラリー・スフィアを握り締め、合体スピリットとしての登場だ。

ー【仮面ライダーナイトサバイブ＋天冥銃アーミラリー・スフィア】LV2（3）B
P14000

「ふふ……黄金の翼のカード、サバイブ……オーデインの力を最大限に引き出すためにはミラーライダーズと共に必要不可欠な存在」

「オレはこいつでオマエに勝つ!!……ッ」

ナイトサバイブの煌臨により威勢が増していくロン。しかし、その瞬間に又してもあの光景がフラッシュバックするように蘇ってくる……

ー……

ー『ナイトを託してすまない……オマエなら……オマエならきつと……』
ー……

そして心の中で憎しみと怒りの炎が交差し、ロンを激しく突き動かす。

「オマエは必ずオレが倒す!!……ナイトサバイブの煌臨時効果でトノサマゲコモンのコア2つをトラッシュに!!」

「!!」

ー【トノサマゲコモン】（4??2）LV3??1

ナイトサバイブの手に持つ天冥銃から放たれる疾風の銃撃がトノサマゲコモンの身体を貫く。そのコアが弾け飛び、LVが下がる。

「トノサマゲコモンのLVが下がった事により、マジックが有効!!……オレはソードベントを発揮!!……ナイトサバイブのBPを5000アップさせ、トノサマゲコモンのコア2つをリザーブへ置き、消滅させる!!」

「!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+天冥銃アーミラリー・スフィア】BP14000

??19000

ー【トノサマゲコモン】(2??0) 消滅

天冥銃を腰に装着し、余った右手で青き盾から騎士たる聖剣を引き抜くナイトサバイブ。そしてそれを振り疾風の斬撃を発生、トノサマゲコモンを腹部から斬り裂き、消滅させた。

これでシスイの場のスピリットは全滅。ここに来てようやくロンの圧倒的な優勢となつた……………

「さらにナイトサバイブのもう一つのアタック時効果、ターンに一度、デツキの上からカードを3枚トラッシュへ置き、回復するツー!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+天冥銃アーミラリー・スフィア】(疲労??回復)

ナイトサバイブが自身の効果で回復。これでこのターンは二度目の攻撃が可能となる。さらにそれに加え、今現在ナイトサバイブは合体によりダブルシンボルとなつてい

る。

シスイの残り4つのライフを消すには十分すぎる打点だ。

「うおおお!!……行け、ナイトサバイブ!!」

「いいね、その必死さ。君のそう言う顔を見たかったんだよロン……そのアタックはライフで受けてあげようか!!」

〈ライフ4??2〉シスイ

ナイトサバイブの一撃目。疾風を纏った聖剣の剣技が繰り出され、シスイのライフを一気に2つ斬り落とした……………

だが、敗北直前まで追い詰められたと言うのにもかかわらず、シスイは未だに余裕の表情を浮かべていた……………

無理もない。本当にまだ余裕があるのだから……………

「畏とは常に二重三重に仕掛けていくモノさ……………バースト発動、選ばれし探索者ア
レックス」

「!?」

「効果で召喚。カードを1枚ドロ……そしてこのターンのアタックステップを強制的に終了させる」

ー【選ばれし探索者アレックス】LV2(2)BP8000

バーストカードが反転すると共に現れたのは紫色のフードを深く被った人間型のスピリット、アレックス。

その効果で先ずは強制的にロンの攻撃が終了する事になるが……………

シスイはまだだと言わんばかりに手札にあるカードを徐に引き抜いて見せ……………

「さらに私のライフが減った事により、我が最強の僕……モビルスピリット、アルケーガンダムをLV3で召喚!!」

「ッ……………!?!」

ー【アルケーガンダム】LV3(5S)BP15000

上空から空気を切り裂くように飛来して来たのはモビルスピリットの一種、アルケーガンダム。

それは登場するなりロンとナイトサバイブを睨みつけ、大剣を荒々しく構えた。その動きの滑らかさはとてもではないが機械とは思えない程。

そしてトノサマゲコモンとは比較にもならないアルケーガンダムの圧迫感、緊張感にロンは襲われる。

「……………今度はモビルスピリットだど!?……………いやまだだ……………まだオレは負けない……………オマエみたいなヤツには絶対に負けない!!……………負けられないんだ!!」

手札：1

場：【仮面ライダーナイト】LV3

【仮面ライダーナイトサバイブ+天冥銃アーミラリ・スファイア】LV2 (3) BP14
000

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

しかし、どんなに敵が想像よりも遥かに強大であろうとも、ロンは負けるわけにはいかない。このバトルの中、自分は父に代わり、このシスイを倒さなければならぬと悟ったからだ。

……この時ばかりは頂点王になると言う夢を忘れ、ただ目の前のシスイを倒すためにそのターンをエンドとしたロン。

そして次は強大なアルケーガンダムを呼び出して見せたシスイのターンだ。「オーデインを目覚めさせ、表の世界をも支配する」と言う己の野望を叶えるべく、絶対的強者の余裕を見せながらそのターンを進行させて行った……

「ターン09」シスイ

「メインステップ……やはりモビルスピリットにはパイロットブレイヴがいないとね……パイロットブレイヴカード、アリー・アル・サーシエスをアルケーガンダムに直接合体!!」

「!!」

ー【アルケーガンダム＋アリー・アル・サーシエス】LV3（5S）BP22000

パワーアップを果たし、真の力が発現したのか、アルケーガンダム の4つの眼光から不気味な光が解き放たれる。

「さらにアリー・アル・サーシエスの召喚時効果、ブレイヴ1つを破壊……対象は合体した銃ブレイヴ」

「くっ……………」

1【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2(3)BP11000

アルケーガンダムが肩部から取り出した短剣をナイトサバイブへと投げつけ、腰に装着された天冥銃を正確に貫いて見せた。

「さあ最後のアタックステップと行こうか……………アルケーガンダムでアタック」

アタックステップに移行。アルケーガンダムに攻撃の指示を送った。そしてさらにアルケーガンダム の能力が解放されて……………

「フラッシュ……アルケーガンダムの効果。3コストまで支払い、3つの効果を適用。我は当然3コストを支払い、すべての効果を解放」

「!?」

「1つ目。コスト7以下のスピリットを破壊……仮面ライダーナイトを潰しておこうかね」

猛々しい動き、凄まじい速度でロンの場に現れるアルケーガンダム。その手に持つ大剣で仮面ライダーナイトを一刀両断した。

「続けて2つ目……アルケーガンダムを回復」

ー【アルケーガンダム+アリー・アル・サーシエス】（疲労??:回復）

又してもアルケーガンダムの4つの眼光が輝く。これは己が疲労状態から回復状態となった証拠。少なくともこのターンは二度目のアタックが可能となった。

「そして最後の3つ目!!……相手の手札1枚を破棄、ライフ1つを破壊、デッキの上から6枚破棄!!」

「ツ……一度にこれだけの効果を……ぐあつ!!」

〈ライフ3??2〉ロン

アルケーガンダムがロンのライフ1つを豪快に斬り裂く。その衝撃でロンの最後の手札とデッキのカードがトラッシュユへと叩き落とされた。

「さあロン・アースー!!……このアルケーガンダムのアタックをナイトサバイブでブロックしたまえよ!!……一騎討ちと行こうではないか!!」

「くつ……サバイブツー!!」

シスイの言いなりになるのは嫌だが、今はそうするしか手がない彼は致し方なくナイトサバイブにブロックの指示を送る。

対面するモビルスピリットとライダースピリット。アルケーガンダムが大剣を豪快に振り回し、ナイトサバイブに襲いかかる。ナイトサバイブは己の剣でその攻撃を防ぐ

ので手がいっぱいであり、徐々に徐々に追いつめられていく……………

「無駄だよ。サバイブ化したとは言え、ミラーライダーズの一端如きでは私のアルケーガンダムには勝てない!!……………決してねえ!!」

シスイの叫びと共にアルケーガンダムがさらに強く大剣を振るう。それを受け止めたナイトサバイブの剣は遂に崩れ去る。そしてナイトサバイブが反動で怯んだ刹那の一瞬、アルケーガンダムのさらなる一撃がナイトサバイブの身体を斬り裂いた。

このダメージを受けて限界を迎えたナイトサバイブは力付き、倒れながら爆散してしまつた……………

「やはり君は水面に映る月面だ……………美しく、それでいて脆い!!」

「ツ……………!!」

「砕け散るがいい!!……………アルケーガンダムでラストアタック!!」

……………「次はオマエだ」と言わんばかりにスピリットと言う名の盾を全て失つたロンを睨みつけるアルケーガンダム。

手に持つ大剣を振りかざし……………

ロンのライフへと向けて振り下ろした……………

「ぐっ……………ぐあああああ!?!」

〈ライフ2??0〉ロン

砕け散るロンのライフ。ガラスが砕け散るような音がこだました……………

余りにも強大なバトルダメージにより、力尽きたように倒れるロン。そのBパッドから敗北を告げるように「ピー……………」と言う無機質な音が流れ始める……………

彼は負けたのだ……………敗北したのだ……………

この世で最も負けてはいけない……………仇に。

倒れているロンを目に映すなり、シスイはBパッドを閉じ、彼の元までゆつくりと歩みを進めた。全ては長年の望みであるナイトを手にするためだ……………

「他愛もなさ過ぎる……………さて、約束通りナイトのカードをいただいて行くでしょう

……せめてもの情けだ。奪うのはサバイブのカードだけにしてあげるよ」

そう言いながら、シスイはロンのBパッドからナイトサバイブのカードを強引に剥ぎ取った。長年の願いに近づいた事により、その表情からは不適な笑みがこぼれ落ちる。

しかし、そんな時、足の裾を握られる感触が伝わって来て……………

「…………オマエ如きが…………オレの…………オレに託されたナイトに…………触れるな!!」

「呆れたよ。まだ動けたか…………エックスの身分らしからぬ薄汚さだ」

地面に這いつくばるロンは残った力を振り絞り、シスイの足を掴んで見せた。シスイはそんな彼の諦めの悪さ、執念深さに呆れ、足元にいるそれが自分の足を離すまで顔面や背中を逆足で蹴り続けた。

そしてロンは今度こそ完全に力尽き、気を失ってしまふ……………

シスイはその後、ナイトサバイブのカードを太陽に照らしながらゆつくりと眺めた……………

「美しい…………遂に手に入れたぞ…………ナイトとサバイブのカード!!…………これで後は龍騎と

エールは余りにもスケールの違う話に唾を飲み込んだ。

信じられなかった。今までアスラとロンを勝利に導いてきた龍騎とナイトがそんなヤツを蘇らせるための存在だった事に……………

しかし、これを聞いていたアスラは……………

「え……………つまりどう言う事だったんだ？……………龍騎とナイトみたいなのが11枚集まったら……………あれ、12枚だったっけ？」

「……………」

「ちよつとバカスラ!!…あんなんで今ので理解できないのよ!?!…あんたの話だったでしょうが!!」

イユの話を全然理解していなかった……………彼女からは白い目で見られ、エールからは叱れるようにツツコミを入れられる。

「……………んー…あんまパツと理解できないんだけどよ……………オマエが神になるんだつたらオマエが良い神様になれば良いじゃねえか？」

「それも無理。オーデインには意思がある。身体を乗っ取られたら絶対に逆らう事はで

きない……………」

アスラの質問にイユが答える。

シスイはイユをオーデインの依代としてミラーワールドも表の世界も支配しようとしていた。

発想を変えてみればイユがオーデインの力を制御してシスイを倒して仕舞えば確かに問題ないのかもしれない。

しかし、イユはそれが不可能な事、身体を乗っ取られた時に自分の心は死んでしまう事を理解していた。

だからこそ、ミラーワールドから逃げるの一択しかなかった。

この15年もの間、何度も逃げ出した。しかしダメだった。最早シスイを……………自分の父を誰も止められる者はいない……………彼女はそう確信していた……………

「なんで無理だつて決めつけるんだ？…実際に乗っ取られた事があるわけじゃないんだろ？」

「……………」

「ちよつとバカスラ!!…何あんた「いつペン乗っ取られたら？」みたいな感じな事言うの

よ!?!」

「んな事まで思ってたねえよ!?!……でも、諦めるのはダメだろ?」

「……………」

まるで確信を突いたようなアスラの発言に、イユは苦い表情ながら頭に血を昇らせ

……………

「あなたに何がわかるの?……諦めてないから逃げたんじやない!!…諦めてないからあなた達を逃そうとしたんじやない!!」

彼の無神経な発言に腹わたを煮えくり返すイユ。物静かだった彼女は一変、激昂の言葉をアスラに浴びせる。

「オマエもオレの事何も知らないだろ……オレだったら逃げずに真つ向から立ち向かう。例えば相手が父ちゃんだろうが迷わず自分の気持ちを全力でぶつける。こそこそなやり方は絶対しねえ!!」

「ツ……………!!」

言い返す言葉を失うイユ。

そうだ。彼の言う通り、自分は15年間も父親から逃げて来た。決して立ち向かう事はせず、ただただ恐れ、恐怖し、目の前から目線を逸らしながら逃げ続けていた。

それが事実だからこそ、言い返す言葉が何も無かったのだ。

アスラの最後の発言を機に続く沈黙。しかし、その時間はすぐさまある者達によって崩壊してしまう……………

「ツー!?!」

「な、何よこいつら!?!」

アスラとエールがその光景に目を丸くした。無理もない、その前方には3体もの異様な怪物がいたのだから……………

金色の蟹のような姿をした者に、青白い虎のような者、終いには白いサイのような者までが、アスラ達を威嚇するように雄叫び上げていた。

最初は誰かがBパッドを展開してスピリットを召喚しているものと思つて辺り一面

を見渡してみるが、それらしき人物は1人もいない。そんな中、戸惑うアスラとエールを見て、イユが物静かな口調で三体の怪物達について説明した。

「……アレはミラーモンスター……ミラーライダーズに宿る怪物達……あなたの龍騎にもいるでしょう？……きつとオーデインの器である私を捕らえに来たんだけわ」

「あ、ああ……あの赤い龍ね……いや、そんな事より先ずは逃げるぞ!!」

迫り来る3体の怪物達。アスラ達は正反対の方向へと走り出した。

「あなた、さっき言った事と矛盾してる……結局逃げるんじゃない」

「いやごめん!!……めっちゃごめん!!……逃げるのすつごく大事でしたー!!」

「カッコつかないわね!!……どうすんのよバカスラアアアー!!」

アスラとてこの状況をどうにかしないとイケない事はわかっている。しかしながら今は逃げる以外の選択肢がなかった。

「つてアレ……エール、ムエは？」

「え?」

走りながら、アスラがオレンジの小動物、ムエの存在がいなくなっている事に気がつく。エールとアスラは辺り一面を見渡し、ムエを探す。

そして見つけ出した……………

繁華街のドーナツ屋のドーナツを貪り食っているムエを……………

「むんえ〜〜」??ドーナツうんめえ〜〜

「何やってんだクソ犬コノヤロー!!!」

(……………か、かわいい)

こんな時でも呑気にドーナツを食べるムエに激怒するアスラ。そんな中、エールはムエの可愛らしい仕草に萌える。

「おい!!…いいから早く逃げるぞ!!……………てゆーかオマエちゃんとお金払ったのかアアアー!!」

「むえ、むえ〜!!」??ああ、まだドーナツが〜!!

「ああ、まだドーナツがく見たいな事言ってるじゃねえ!!」

ドーナツから無理やりムエを引き離そうとするアスラ。しかしムエはそれを全力で拒む。無我夢中でドーナツを貪りながら必死にドーナツの山にしがみつく。

「お金ならいっぱいあるわよ。別にいいじゃない」

エールがそう言いながら金貨が大量に詰まった小袋をドーナツ屋のレジにごっそり置いた。

「いや多すぎ!!…オーバーキルすんな!!…だあ!!!なんだこの状況オオオ!!」

烏合無象の怪物達が迫り来る中、呑気にボケ合いツツコミ合う2人と1匹。余りにもカオスすぎる状況にアスラは混乱する。

だが、怪物達がそんな彼らの様子を見て、逃すわけもなく、ボケもツツコミもしていないイユの方へと狙いを定めた。

「ツー!!」

三体の怪物達がイユに飛び掛かった直後、危機を感じたイユはその瞳を閉じる。

しかし、体は怪物達の生々しい感触どころか何も感じなかった。イユはその目をゆつくりと開眼させると、そこには龍騎のソードベントで得られる柳葉型の剣を握り、自分を守らんとする様子で怪物達の攻撃を抑え込んでいたアスラがいた。

「……………あなた……………何で……………」

「オレの目指す頂点王ってのはな……………みんなを守るためにあんだよ、だからオレは、オマエの事も諦めねえ……………1人じゃ逃げちまうって言うなら、一緒にどうかしようぜ

!!」

!!」

アスラはそう叫びながら三体の怪物達を剣で斬り裂いた。大きすぎるダメージを受けたからか、三体の怪物達はこの場からゆっくりと消滅してしまう……………

「あれ……………消えた?」

「ミラーワールドにおいて、ミラーモンスターは死なない……時間が経てばまた蘇るわ……」

イユがアスラにミラーワールドのミラーモンスターについて説明を入れる。しかし、アスラは「そんな事より……」と言葉を続け……

「おい、大丈夫か!?!…怪我とかない!?!」

「ツ……べ、別に何ともないけど……」

「そっか……よかったな!!」

嘘偽りなく心配してくれたアスラ。その真っ直ぐな笑顔に、イユは思わず顔を赤く染めた。

そして直後、ようやくドーナツ屋から足を離れたムエと、それを胸元に抱き抱えてるエールが帰って来た。

「取り敢えず、今はここを離れるわよ、Bパッドの通話も繋がらないから応援を呼べないし、何より先ずは敵から隠れた方がいい」

「おう、そうだな」

「むえ……………」??ドーナツ…………

エールがそう言った。アスラもこの意見に賛同する。

だがそんな時だった。又しても眩い光が出現し、この事件の元凶たる男、イユの父親でもあるシスイが現れたのは……………

突然の事に、アスラ達は思わず身を構える。

「ツ……………オマエ、何でここに!?!」

「……………お父様……………!!」

「やあイユ。そんなに怯えないでくれ、今回はこれ運びに來ただけさ……………」

シスイはそう言いながら片手に担いでいたロンをアスラ達の方へと投げた。気を失い、ボロボロなロンを見るなり、アスラ達は彼に駆け寄った。

「……………ロン?……………おいロン!!……………どうしたしっかりしろ!!……………テメエー!!……………オレのライバルに何しやがったアアアー!!」

「そう怒るな欠陥品。我はナイトサバイブのカードを回収しただけ、死んではない………フフ、後1枚だ。貴様のミラーライダーズもいただくぞ………そのうちな!!」

ロンに手を加えたであろうシスイに怒り、睨みつけながら歯を噛み締めるアスラ。

「我が娘イユ!!………そいつらに付くのは勝手だが………それを続けたらどうなるか、分かっているよね………!!」

「………!!」

イユに脅しをかけるようにそう言葉を言い放つシスイ。15年味わって来た恐怖の前に、イユは体中が震え上がる………

「まあ良い。今は引いてあげますよ………残り1枚になって、今はとても機嫌が良いんだ………さらばだ、表の世界のゴミども!!」

「!!」

シスイはそこまで言うと、アスラの龍騎を奪おうとする事はなく、再び光と共に姿を

消した。

このミラーワールドでの戦いはまだ始まったばかり……………

35コア「集結のミラーライダーズ、そして変貌」

鏡の中の世界、ミラーワールド。

それはカードだけでなく、本物が実在していた。

15年前にそれを発見したパイオニア、マスターの身分を持つシスイ・メイキヨウは、ミラーワールドに封印されし神、仮面ライダーオーデインを目覚めさせるべく、その世界に元々あったと言われる他の1枚のミラーライダーズを集め始めた。

そして残すところは後1枚。生まれながらにソウルコアが使えない少年、スーミのアスラが持つ龍騎を残すところとなった。

ミラーワールドのライライ町、繁華街の中、アスラはシスイに完全敗北を喫し、ボロボロの状態となったロンを背負い、無人の道を歩きながら仲間達と共に一先ず身体を休ませる宿を探していた。

そんな中、仲間の1人であるエール・オメガは、オレンジ色の犬みtainな小動物、ム

エを胸元に抱き抱えながらある一抹の不安を感じ取っていた。シスイやミラーライ
ダーズ、さらには神のカードであるオーディンの事も当然ながら不安に感じるが
……………
ただそれ以上に……………

(……………な、なんか……………近くない?)

あのミラーモンスターと言う怪物達に襲われて以降、イユが妙にアスラに近い。現に
今彼女は彼の側を歩き、その袖を掴んでいる。15年間父親に怯えながら過ごして来た
イユのこの行動から、相当アスラに安心感を覚えているのが伺える……………
そんな光景を見ていたエールは何故だか不安と言う感情が湧き出ていたのだ。

「……………ねえイユ……………その……………さつきから近くない……………バカスラに」

「バカスラじゃない……………アスラよ」

「……………そうね……………」

「うおおお!!…イユ!!…オマエオレの変なあだ名を否定してくれるのか!!……………なんか初め
てだそう言うの!!」

「……………」

イユを褒めるアスラに少しばかり腹を立てるエール。アスラは全く気が付いていないが、やはりさつきからイユはアスラに優しいと言うか心を開いたと言うか、妙に好意的になっている。

「……………ねえ、アスラはエールの事どう思ってるの？」

「ん？」

アスラとエールの関係が気になったイユが物静かな口調でアスラに質問した。どうやらエールだけでなく、イユもエールに同じような感情を抱いていたようだ。エールはこの時点でイユがアスラに恋愛的興味がある事を完璧に悟った。

「仲間だ!!」

アスラが誇らしげに目をキラキラと輝かせながら返答した。どうやら鈍感すぎてイユに恋愛的感情を向けられているのに全く気がついていない様子。

そんな彼の返答に、イユは「そう……」と、納得したような言葉を漏らし、今度はエールの方へと顔を向けると……………

「エールはどうなの？」

「え？」

「……アスラの事、好きなの？」

「なッ……………!？」

確信を突くようなイユの発言に、エールは顔を真っ赤に染める。

実際は好きか好きじゃないかで問われると、本人も信じられないくらい好きだが、素直になれない彼女はそれを全力で否定し、見栄を張って……………

「ふ、ふんっ……………なわけないでしょ!!……………誰がこんなチビスラなんか……………私はこの国で一番上の存在、エックスよ!!」

「だから身分は関係ないだろオオオー!!」

「関係大有りよ!!……………バツカじゃないの!？」

「困みにオレはオマエの事好きだぞ!!……………つええし、かつこいいし!!」

「ツ?!…………ま、真顔で何言ってるのよ!!!」

「ぐはああああー!!!」

口論の結果、恥ずかしさのピークに達したエールがロンを背負っているアスラごとぶつ飛ばした。

その光景を目の当たりにしたイユは「…………そっか」と、全てを悟ったように言葉を落とした。その言葉はどこか物寂しそうなものがあつて…………

ここはミラーワールドの三王塔。本来の世界であればここは最強のカードバトラー集団、三王が挑戦者達を待ち構える場所であるが、

ミラーワールドにおいてのこの場所はシスイ・メイキョウとその助手であるフリソデが住う場所となっている。

「フフ…………いよいよ残るは龍騎のみ。15年と言うかなり長い年月を費やしましたが、これで遂に最強のミラーライダーズであるオーデインを手にする事ができる!!」

「……しかしシスイ様。何故あの時一緒にあのコモンの龍騎を奪わなかったのですか？
…イユ様もまだあの連中の中にいるのでしょうか？」

ロンから奪ったナイトサバイブのカードを上機嫌に眺めているシスイに、フリソデが意見を申した。

確かにロンをも倒す実力を所持するシスイがアスラから龍騎を奪わなかったのはい
ささか疑問が残る。

「別にいいのですよフリソデ。ここまで来たら放って置いても勝手に私の手に龍騎サバ
イブは流れて来ます……あの娘は昔から、優しい娘だからね」

「？」

まるで未来を見据えているかのようなシスイの発言。意味のわかっていないフリソ
デは疑問符を浮かべている。しかし、長年シスイの助手として付き添って来た彼はこの
予測は当たると確信していて……

「フフ、それにしてもフリソデ。まさか君があのだ陥品如きにトドメを刺されるなんて

ね、意外だったよ」

「ツ……すみません……油断しました……ですが次こそは必ずボクがあのだ陥品から龍騎サバイブを奪って見せます。そう言う運命……定めです」

「頑張ってください。でなければあの日、ゴミ溜めから君を拾った私の行為の意味がなくなる」

実はフリソデ、アスラ、ロンのレイドバトルを監視していたシスイ。下だと見下していた者に敗れたフリソデはこれを恥とし、5年前、シスイに拾われた時の事を思い出しながら気持ちを変えようとする。

そんな彼の熱意が伝わって来たのか、シスイは口角を柔らかく上げながら「期待しているよ」と微笑んだ。

だが、そんな彼らの一幕を遮るかのように別の誰かの声が一室にこだました。

「お話の途中失礼しますよ、メイキョウ家……相変わらず部下にはお優しいのですね……とても実の娘を神の器にしようとしている者の言動とは思えませんでしたよ」

「む……おやおや、これはこれはライダーハンターズの主任様ではありませんか……あの間は仮面ライダー王蛇を我にプレゼントしてくれてありがとう。お陰様で残りは

龍騎だけだ」

そこに現れたのはまさかのライダーハンターズをまとめる主任、ウイル。

シスイの言葉から察するに、どうやらオロチの王蛇を持ち去ったのは彼のようだ。どう言うわけか、ウイルは他のライダーハンターズには内緒でシスイ達に協力しているようである。

「やれやれ、それにしても龍騎を目の前にしてそれを奪わないとは随分と余裕ですねメイキョウ家」

「ツ……貴様、シスイ様を愚弄する気か!!…このコソ泥め!!」

余裕の様子を見せるシスイに対して嫌味のような言葉を口にしたウイルに対して怒るフリソデ。シスイの事を余程尊敬しているのが真摯に伺える。

そんな彼の肩に手を置き、「落ち着きなさい」と言わんばかりに制止させるシスイ。ウイルの方へと目を向けると……………

「王蛇の代わりにミラーワールドの食料やカードは好きだけ持っていつでも良いと言

う約束ですが、我々のプライバシーを覗く行為は御法度ですよ主任さん。相変わらず得体の知れないお方だね」

「それはお互い様ですね……この私にここまで言い返せるとは、やはり神を指す者は違う……しかし気をつけてくださいね、油断していると嘯まれますよ？」

お互いを食えない奴だと認識し合うウィルとシスイ。ウィルはその後、「まあ私は今回の件は全く興味がないので」と、不気味な笑みを浮かべながらそう言い残し、Bパッドのワームホール機能を使い、どこからともなく姿を消した。

「よし、ロンはここで寝かせておくか」

一方、時刻は夜。ライライ町にあるホテルに到着したアスラ達は、その部屋の一角を借り、ロンをその部屋のベッドへと寝かせた。余程痛みつけられたのか、悪夢でも見ているかのように苦しんでいるロンの表情、心配ではあるものの、今はそつとしておくしかない。

「つしやあ!!…ロンが回復次第、戦いに行くぞ!!…取り敢えず今は寝ようぜ!!」

アスラが拳を固め、掲げながらそう告げた。

「じゃああなたはロンの部屋で寝てなさい。私達は隣の部屋で寝るわ」

「おう!…明日な!!」

エールがそう言った。男女の寝床を分けるのは至極当たり前の事。エールはムエとイユを連れて隣の部屋へと移動しようとするが……………

「…………いや、アスラと寝る」

「!!」

イユはアスラの袖を掴んで離さなかった。余程アスラの隣を離れたくないらしい。彼女のこの行為に対してもアスラはこれといって照れている様子はないが、エールは大

きく取り乱している。

「は、はあ!?!…何考えてんのよあんだ!!」

「何って、アスラと寝たいって考えてるだけ」

「バカスラはどうなのよ!?!」

「おういいぞイユ!!…一緒に寝ようぜ!!」

「なッ……!?!」

イユのリクエストに應えるアスラ。いつもと変わらない堂々とした振る舞いから、やはりまだイユが自分に抱いている好意を理解していないらしいが、それをわかっていてもエールは腹立たしく思っ……

「か、勝手にしろ!!」

「何で怒ってんだよ?」

結局エールは2人とは別の部屋で寝る事になり、アスラとイユは2人つきりで夜を過ごす事になった。

……………

静かな夜。ホテルの一室にて、イユは布団の上で、アスラは床の上で布団に包みながら、就寝につこうとしていた。

「ねえ、アスラはなんで頂点王になりたいの？」

「証明するためだ!!…コモンでもソウルコアが使えなくても最強になれるってな!!」

仰向けで月明かりに照らされた天井を眺めながらイユがアスラに訊いた。アスラは目をギラギラと輝かせながら堂々と己の野望を語った。

「……そ、なんかかつこいいねそう言うの」

「そうか?…夢なんか持つてて当たり前だろ?」

「私、4歳の頃から15年間ミラーワールドでの生活を虐げられて来たから、夢とかあんまり無くて………て言うか、なかった」

「え?…4歳から15年間って事は……イユは今19歳なのか!？」

「そうだよー……アスラよりも4つも歳上」

意外と衝撃的な事実を聞かされたアスラ。イユが自分よりも身長が低い事や、顔が童顔なのもあって、彼は彼女が歳上だと考えてもいかなかった。

「ま、マジか……わりい、今までめっちゃタメ口だった……イユさんって呼べばいいか？」

「タメ口で良い、寧ろタメ口じゃないと嫌。イユって呼んで」

「そう？……んー……まあいつか!!」

会話が盛り上がるアスラとイユ。そんな彼らの一室の向こう側にはエールが布団に身を包み、ソワソワしながらドア越しで会話を聞こうとしていた。その頭の上にはオレンジ色の小動物、ムエも確認できる。

盗み聞きなど高貴なエックスらしからぬ行いだが、イユとアスラの関係が気になってしょうがないのだ。いてもたってもいられない。だが、ドアの壁が厚すぎて中々会話が聞き取れなくて……

「ううー……全然聞こえないじゃない……あーヤダヤダ、何でもまだ敵か味方かわからない女と一緒に寝れるわけ？……どんな神経してるのよ、これだから低俗な愚者は……でもまああいつの事だから別に発展したりはしないんだろうけど……いや別にあんなチビの事なんてどうとも思っただけ……あいつが誰とどうなるうがどうでもいいんだから……」

「むえ〜」??かわいい奴め

アスラの愚痴をこぼしながらも、結局はドアの壁に耳を必死に傾けるエール。心は素直に成れなくても、本能は己に正直なようだ。

彼女の頭の上に乗っかっているムエはそれを察しているかのような鳴き声を上げた。

……

時刻はあれから少し経った頃、アスラは喋り疲れて眠ってしまった。その部屋のドアの向かい側ではエールも寝落ちしてしまっている。

そんな中、イユはただ一人眠っていなかった……いや、眠りたくなかったと言えばいいか。アスラの横に入れる時間を少しでも長く感じていたのだ。今日起こった

様々な出来事はイユの中に根強く残っている。

「不思議。君といるだけで信じられないくらい勇気が湧いてくる」

イユがいびきを掻きながら眠っているアスラに顔を向けながらそう言葉を落とした。自分の中でアスラと言う男の子の存在がどれだけ大きくなっていたのかを再認識する。

そしてそれと同時に「巻き込んでダメだ」と言う気持ちを強く現れてしまう……自分もいたらアスラは夢を追えなくなるかも知れない。それだけは嫌だった。

イユは立ち上がると、アスラの懐を探り、あるカードを一枚抜き取った……………

それは紛う事なき彼のエースカード、黄金の翼のカードと龍騎のカードが混ざり合った龍騎サバイブのカードであって……………

イユはそのカードを固く握り締め、紙と鉛筆で彼らにメッセージを残し、窓から逃げるように飛び降りた。そして向かった先はシスイのいるオウドウ都の三王塔。彼女はアスラ達に勇気ももらい、オーデインを復活させる覚悟を決めたのだった……………

翌日、鳩さえも鳴かない早朝にて、アスラは軽く寝ぼけながら起き上がった。横にいであろうイユに「おはよう」と声をかけようとするも、そこに彼女はおらず、布団の上には手紙だけが目に入った。

何かを察したアスラは眠気が覚め、その手紙を手にとった。そしてその手紙の内容から、イユが覚悟を決めた事、自分の龍騎サブイブのカードを彼女が持つていった事を把握した……………

「ま、マジか……………」

予想していなかった緊急事態に混乱するアスラ。「取り敢えずエールに相談しよう」と考え、勢い良く部屋を出ると、直ぐそこに起きたばかりのエールがいて……………

「あれ?…………エール、オマエなんでこんなところにいんだよ?」

「ツ…………べ、別に…………あんたには関係ないわ」

エールが何故部屋の前で眠っていたのかはさて置き、アスラはイユの手紙をエールに見せた。

……………

ここは別の部屋。ベッドの上で寝かされたロンはまるで悪夢でも見ているかのように苦しんでいた。

昨日のシスイとのバトルで敗北を喫した事や、実の父であるゾン・アーサーが既に殺されていた事が原因だろう。

その悪夢の中で実の父がこう言った……………

『何故シスイに負けたのだ』と……………

『せっかくナイトを託してやったのに何故負けたのだ』と……………

何度も何度も繰り返してやっただけなのに、彼らの因縁に、ロンは血筋以外の繋がりはないと言うのに……………

そしてロンは、悪夢から解放され、遂に目を覚ました。この時はもう既に朝だった。カーテン越しから射し込んでくる光がそれを証明している。

「……………どこだ……………どこにいるシスイ!!……………オレと戦え!!」

ここがどこなのか定かではなかったが、ロンのやる事はただ一つ、亡き父のためにシスイを討つ事だけ……………

頂点王になると言う己の野望を忘れ、責任感のみに囚われた彼は、覚束ない足取りのまま、ホテルの一室を抜け出した。

そしてその直ぐ横にはちょうどイユの手紙を読み終えたエール、アスラがいて……………

「ロン!!……………あんた、もう大丈夫なわけ!？」

「シスイはどこだ!!……………あいつだけは、あいつだけはこのオレが倒さないといけないんだ!!」

「落ちて着けよロン!!……………今はテメエのわがままに付き合うわけにはいかないんだ!!……………オレの龍騎サバイブも盗られちまった!!……………ここはオレ達3人で協力して……………」

「協力はいらない!!……………オレー人で奴を倒す!!」

「バカヤロウー!!……………あのフリソデってヤツだって復活してるかもしれねえんだぞ!!」

出会うなり口論が絶えないアスラとロン。ロンは拉致があかないと考え、アスラと

エールを突き放しながらホテルから出て行った。

そしてそれをアスラが追う。昨日のダメーჯがまだ残っているからか、覚束ない足取りだったロンに追いつくのは容易だった。

「おい待ってっ!!…オレ達もイユから事情は全部聞いたんだ、オマエがどこで生まれて、赤ん坊の時に何があったのかも全部!!」

「ツ……オマエに、オマエに何が分かる!!」

—!!

ロンの肩に手を置き、制止させるアスラ。しかし、自分の事を知ったように言われ腹わたを煮えくり返した彼は、そんなアスラを突き飛ばした。

だが、ロンはこの行為の後、咄嗟に我に帰った。アスラの事を悪く言ってしまった事に罪恶感を覚え、その場で膠着してしまう。

そしてアスラはロンとの距離を詰め直し、その胸ぐらを全力で掴み、叫んだ。

ああ、そうだよ……わかんねえよ!!

オレはオマエと違って血の繋がった人達を知らないし、オマエの込み上げてくる怒りも全部は理解してやれない!!

でも……………

でもこれだけは言える!!

オマエにとっての親はシイナで、兄弟はオレだけだろうがアアアー!!!

「ツ……………!!!」

下から見上げて来る驚異的な視線、迫力に鳥肌が立った。

そうだった。思い出した……………

そして理解し直した……………自分は一人ではなかったという事、例え最悪の過去だったとしても、それに伴って出来上がった最高の未来を迎えられたという事を……………

心に安らぎと余裕を得られたロンは、口角を上げ、笑みを浮かべる。

「フツ……………ああ、すまない……………だが、頂点王になるのはオレだぞ、アスラ……………！」
「へっ……………やつといつもの調子に戻りやがったな、イケメン天才コノヤロー！」

ようやくいつもの雰囲気を取り戻せたライバル2人。そんな光景をエールは微笑ましく見つめていた。

……………

場所は変わり、オウドウ都の三王塔。そこにはシスイ・メイキヨウとその娘、イユがいた。彼女は父親であるシスイの念願、龍騎と黄金の翼のカードが混ざり合った龍騎サバイブのカードを手渡して……………

「……………よくやったイユ。君は昔からそうだ。他人より、自分が傷ついた方が楽なものね……………さあ、オーデイン復活の準備に取り掛かろう!!」

「はい。お父様……………ですが私はお父様が望んでいるような兵器にはなりません!!……………絶対にオーデインを従わせて見せる……………!!」

「フフ……反抗期はまだ抜けないか」

イユが実の父親に見ている目は反抗の眼差し。

アスラ達に勇気をもらい、覚悟と決意を固めた彼女は、自分の力でオーデインを制御するつもりでいた。そしてオーデインが使い物にならないと考えたシスイが元の優しい父親に戻ってくれると信じていて……………

「では早速始めよう!!…神を呼ぶ儀式を!!」

「!!」

シスイがそう叫ぶと、彼の懐から、集められた神を除く11枚全てのミラーライダーズのカードが宙へと飛び交う。やがてそれらはイユを囲むように光線を放ち、球体を形成。

イユは途中で静かに眠りについた。

遂に、シスイの念願であったミラーワールドの神、仮面ライダーオーデインの復活の儀式が幕を開けたのだった。

|……

そこからさらに少しだけ時が経ち、アスラ、ロン、エール、さらにその頭の上に乗ってかっているムエの3人と1匹はイユ達がいるであろう三王塔に来ていた。

「本当にここにイユがいるの?」

「ああ、何となく龍騎サバイブを感じる……………オロチに奪われた時と同じだ」

「オレもナイトサバイブの存在を感じる……………理屈はわからないが、あそこに全てが詰まってるんだろうな……………」

いざ決戦の時。アスラ達は龍騎サバイブとナイトサバイブを感じ取り、ようやくこのオウドウ都の三王塔前まで辿り着いた。

正直確信していたわけではなかったが、それはすぐさま確信へと変わる。ロンが「その証拠に」と呟き、三王塔の扉の方へと指先を刺すと、他の2人も同じ方向に目を向ける……………

そしてその先にはシスイ・メイキョウの助手であるフリソデが仁王立ちで構えていて

……………

「君たちのその執念には呆れたよ。サバイブを奪われてもまだ立ち向かって来るなんてね」

「フツ……オマエもオレ達にこつ酷くやられておきながらよく堂々と顔を見せられたものだな」

「ツ……何……この落ちぶれエックスが……!!」

ロンの言葉に腹を立てるフリソデ。懐から取り出したBパッドを取り出し、デツキをセツトした。バトルスピリッツで迎え撃つつもりなのだろう。

ロンも負けじとBパッドを取り出すが、その前にそれを制止させるかの如く、アスラの短い腕が伸びて……

「待てよロン……ここはオレに任せて、オマエとエールはさつさと上に行け」

「!!」

「リベンジすんだろ?……仮にもこのオレのライバルが二度も負ける事は許さねえ……!!」

アスラの熱き言葉に、ロンは口角を上げると……………

「オマエ、腕短いな」

「今それ関係ないだろコノヤロー!!!…いいから早く行けよ!!」

「アスラ!!!…負けたら承知しないわよ!!!…絶対に勝つて上に来なさい!!」

「おう、任せろエール!!」

アスラを軽く罵り、激励すると、ロンとエールは走り出し、フリソデを通り抜け、三王塔の中へと侵入した。この扉の前に残されたのはフリソデとアスラのみとなった。

「君さ、本当に身の程知らずだよね。コモンのクセに、ソウルコアが使えないクセにこのボクに立ちはだかるなんて、そしてもうサバイブも無いのにどうやって勝とうって言うのさ」

「オマエこそ勝手な偏見聞かせんじやねえよコノヤロー……オレはコモンだろうが、ソウルコアが無かろうが、サバイブが無かろうが頂点王になる。オマエとのバトルは単なる通過点だ」

「フフ……君が頂点王?……笑わせないでくれるかな?……君は今ここでボクに負

け、ボロ雑巾になる運命、定めだよ!!」

「その運命や定めをぶち壊すのがオレだアアアー!!!」

……………ゲートオープン、界放!!

互いに互いを鋭い眼光で睨むつげながら、バトルスピリッツを開始したアスラとフリソデ。

先行はフリソデだ。その敬愛するシスイ・メイキョウのため、己のターンシークエンスを進行していく。

「ターン01」フリソデ

「ボクのメインステップ!!…母艦ネクサス、レウルーラとガランシエールを配置!!」

ー【レウルーラ【UCC】LV1

ー【ガランシエール】LV1

「ツ……2枚の母艦ネクサス……!?!」

昨日の赤い母艦だけではない。シャープなディテールに黒いボディを持つ母艦までフリソデの背後へと出現した。

この一手だけで今回のフリソデがどれほど気合いを入れているのか見て取れる。

「これでターンエンド!!…さあ、君はサブイブ抜きでどこまで戦えるのかな…!!…せめてソウルコアが使えたらまともなバトルができたかもねー!!」

手札：3

場：【レウルーラ「UC」】 LV1

【ガランシエール】 LV1

バースト：【無】

アスラに嫌味染みた発言をしながらそのターンをエンドとするフリソデ。そんな罵詈雑言聞き慣れている事もあつてか、アスラはそんな彼の発言に怒りを覚えることはなく、冷静な表情で己のターンを進行していく。

「ターン02」アスラ

「メインステップ!!…レウルーラの効果は4000以下のスピリットを破壊するだったよな!!…だったたらコイツだ…来い、ゴラドン!!」

1「ゴラドン〈RV〉 LV2 (3) BP5000

アスラが呼び出したのは小さき怪獣ゴラドン。そのLV2のBPは5000。前のバトルで苦しめられた母艦ネクサス、レウルーラの効果もこれで事実上の無効にできる。

「へえ、小さな脳味噌なりに頭を捻ったみたいだね。まあボクが勝つ運命からは逃れられないけど」

「アタックステップだ!!…言っつて来いゴラドン!!」

ゴラドンがフリソデのライフ目掛けて走り出した。レウルーラで破壊できない以上、フリソデはこの攻撃をライフで受ける他なくて……

「ライフで受ける!!……………ッ」

へライフ5??4へフリソデ

ゴラドンが体当たりでフリソデのライフフーツを粉碎。前のバトルではアスラにライフを破壊されてムキになっていたフリソデだが、今回はそのような様子は見られない。寧ろ余裕の表情を浮かべており、ゴミを見るような目でアスラを見つめていた。

「っしやあ……………先ずは1点、ターンエンドだ」

手札：4

場：【ゴラドンへRVへ】LV2

バースト：【無】

先制点を与え、そのターンを終えるアスラ。フリソデはそんな彼を叩き潰すべくターンを進めていった。

「ターン03」フリソデ

「君のデツキは知ってるよ。サバイブさえいなければBPの弱いザコしかない、その程度のザコを幾ら並べたところでボクの前では無意味である事を教えてあげるよ!!」

「ッ……!!」

「メインステツプ、レウルーラのLVを上げ、ギラ・ズール・ギルボア機、そしてギラ・ズール・アンジェロ・ザウパー専用機を連続召喚!!」

ー【ギラ・ズール「ギルボア機」】LV1(1)BP3000

ー【ギラ・ズール「アンジェロ・ザウパー専用機」】LV2(2)BP5000

1つ目のモビルスピリット、ギラ・ズール。その中の2種がフリソデの場に舞い降りる。一機目は緑色の装甲を持つギルボア機、二機目は紫色の装甲を持つアンジェロ・ザウパー専用機だ。

「母艦ネクサス、レウルーラの効果でドロ……さらにギルボア機の召喚時効果でデツキからカードを4枚オープンし、その中の対象カードを1枚手札に加え、残りは下に戻

す」

母艦ネクスラスや召喚時の効果で減った手札を取り戻すフリソデ。そのままアタックステップへと移行する。

「アタックステップだ。ギルボア機でアタック!!…さらにここでアンジェロ・ザウパー専用機の効果、自身を疲労させる事でBP7000以下のスピリット、即ちBP5000のゴラドンを破壊!!」

「!!」

「ギラ・ズール「アンジェロ・ザウパー専用機」(回復??疲労)

効果発揮の宣言と共にスナイパーライフルを取り出し、それを低姿勢で構え、アスラ
のゴラドンに向けて発砲。ゴラドンは胴体を撃ち抜かれて爆散してしまう。

「ギルボア機のアタックは継続だ!!」

「ツ……ライフで受ける!!……ぐっ……」

へライフ5??4アスラ

緑色の装甲を持つギルボア機がアスラのライフを殴り壊す。

「ターンエンド!!…フフ、僅か3ターン目で力の差がハッキリと出て来たね」

手札：4

場：【ギラ・ズール「ギルボア機」】LV1

【ギラ・ズール「アンジェロ・ザウパー専用機」】LV2

【レウルーラ「UC」】LV2

【ガランシエール】LV1

バースト：【無】

「うるせえコノヤロー……オレのバトルスピリッツはまだまだこれからだ!!」

拳を固め、気合いを入れ直すアスラ。己のターンシークエンスを進めていく……………

「ターン04」アスラ

「メインステツプ、ミラーワールドを配置!!」

ー【ミラーワールド】LV1

龍騎やナイトをはじめとするミラーライダーズを支えるネクサス、ミラーワールドが配置される。いつもであれば周囲の光景が全て鏡向きに変貌するが、今回は元々の場所がミラーワールドであるためか、そのような変化は一切見られなかった。

「さらにシールド・ドラゴンをLV2で召喚!!」

ー【シールド・ドラゴン】LV2(2) BP4000

アスラの場合に重厚な鎧、大きな盾、槍を携える竜騎士が出現。シールド・ドラゴンはまるで主人であるアスラを守らんとするように大きな盾を前方に掲げている。

「フツ……BP4000のザコ。レウルーラの射程圏内だね」
 「オレはこれでターンエンドだ!!」

手札：3

場：【シールド・ドラゴン】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

このターンのアタックは行わず、ネクサスの配置とスピリットの召喚のみでそのターンを終えるアスラ。今一度フリソデのターンが幕を開ける。

「ターン05」フリソデ

「メインステップ……遊びは終わりだ、全てのカードのLVを1まで下げ、不足コストを確保。赤き彗星の再来……シナンジュをLV2で召喚!!」
 「!!」

1 【シナンジュ】LV2 (3) BP13000

上空より飛来して来たのは正しく赤き彗星。

透き通るように澄んだ深紅のボディ。長いレーザービーム砲とボディと同じ色をした盾を所持する強力なモビルスピリット、シナンジュが再びアスラの前に顕現した。緑色をした一つ目の眼光が又しても彼を睨みつける。

「召喚時効果はわかってるよね?…袖付きスピリットはこのターンのみ相手の効果を受けなくなる!」

シナンジュから放たれる赤いオーラが他のモビルスピリットに伝播していく。これによりこのターンはアスラが使用するカードの如何なる効果を遮断できて……………

「アタックステップ……シナンジュでアタック!!…さらにフラッシュ、レウルラの効果、自身を疲労させる事でBP4000以下のスピリット1体を破壊する!!」

「!」

「対象はもちろんシールド・ドラゴンだ!!」

ー「レウルーラ「UC」」（回復??疲労）

母艦ネクサス、レウルーラに備え付けられた無数の砲手から有りつ丈のビームやミサイルが発射される。シールド・ドラゴンはそれに被弾、呆気なく爆散……………するかと思われたが……………

「シールド・ドラゴンの効果!!…効果で破壊された時、同じ状態で場に残る!!」
「なにつ!」

爆発による爆煙の中、前方に大きな盾を構えたシールド・ドラゴンがその姿を覗かせる。

「シナンジュのアタックはシールド・ドラゴンでブロック!!…さらにブロック事効果で自身をゲームから除外!!」

「!?!」

「これによりこのターンの間、オレのライフは1つしか減らされない!!」

全身が塵屑となって消滅してしまおうシールドダー・ドラゴン。しかしその消滅は無駄ではない、ブロックした事によりシナンジュのアタックを止めただけでなく、アスラのライフにこのターンのみ1つしか減らない力を与えた。

「くっ………だったたらその1つはいただくよ。アンジエロ・ザウパー専用機でアタック!!
…効果で1枚ドロ」

「ライフだ!!………ッ」

〈ライフ4??3〉アスラ

ギラ・ズール・アンジエロ・ザウパー専用機を持つスナイパーライフルの銃撃がアスラのライフを襲う。そのライフが1つ碎け散るものの、シールドダー・ドラゴンの活躍でこのターンはそれ以上の数は削られなくて………

「チツ………相変わらず小細工の仕込み方が上手いね………だけど延命しただけでボクに負ける定めは変わらないよ?………ターンエンドだ」

手札：5

場：【シナンジュ】LV2

【ギラ・ズール「ギルボア機」】LV1

【ギラ・ズール「アンジェロ・ザウパー専用機」】LV1

【レウルーラ「UC」】LV1

【ガランシエール】LV1

バースト：【無】

「偉そうに決めつけてんじゃねえ!!…オレのターンだ!!」

シールダー・ドラゴンのお陰で厄介な母艦ネクサス、レウルーラが疲労している今が好機だとみたアスラはより一層気合を入れ、ターンシークエンスを進行していく。

「ターン06」アスラ

「メインステップ、ミラーワールドのLVを2に上げて、シャムシーザー、ドラゴンヘッド、龍騎を召喚!!」

- 1 【シャムシーザー】 LV1 (1) BP2000
- 1 【ドラゴンヘッド】 LV2 (2) BP2000
- 1 【仮面ライダー龍騎】 LV2 (2) BP4000

幾数もの白いトゲを背中に生やしている赤いトカゲのようなスピリット、シャムシーザー、竜の頭部に翼が生えたスピリット、ドラゴンヘッド、そして赤きライダースピリット、龍騎がアスラの場合に現れる。

龍騎の召喚時効果も発揮される。今回は「ストライクベント」のカードが手札へと加えられた。そしてアスラはすぐさまそれを発揮させて…………

「マジック、ストライクベント!!…:BP8000以下のスピリット、ギラ・ズール・アンジェロ・ザウパー専用機を破壊して1枚ドロウ!!」

龍騎がベルトよりカードを1枚引き抜き、それを左腕のバイザーに装填、「ストライクベント!」の音声と共に赤き龍の頭部を模したガントレットが龍騎の右手に装備される。

龍騎はそれを前方に突き出し、火炎弾を発射。それに被弾したアンジェロ・ザウパー専用機は堪らず爆散してしまった。

「バーストをセットしてアタックステップ!!…龍騎でアタック、そしてこの瞬間ミラーワールドの効果!!…デッキから1枚をオープンし、それがアドベントカードならノーコストで発揮できる!!」

止まらぬアスラの猛攻。ミラーワールドの効果でオープンされた1枚は「ソードベント」のカード。これは紛う事なきアドベントカードの一種であり……

「ソードベント発揮!!…龍騎のBPを5000上げ、敵スピリット1体のコア2つをリザーブに置く!!…今度はギルボア機を破壊だ!!」
「ッ……!!」

再びベルトからカードを1枚引き抜き、左腕のバイザーに装填する龍騎。「ソードベント!」の音声と共に柳葉型の剣がその手に握られる。

そして龍騎はそれを振り、炎の飛ぶ斬撃を発生させ、ギラ・ズール・ギルボア機の緑

色の装甲を焼き切った。

「コモン如きにギルボアが全滅させられただど!？」

「龍騎のアタックは継続中だ!!」

ギルボアを全滅させられ、焦った様子をみせるフリソデ。しかし、まるでアスラを嘲笑うかのように、その表情はすぐさま笑みへと切り替わり……………

「まあ、それも想定内だけどね!!…フラッシュユマジック、白晶防壁!!」

「!!」

「不足コストはシナンジュより確保!!…効果でシャムシーザーを手札に戻す」

放たれるフリソデのマジックカード。シャムシーザーの身体が粒子と化してアスラの手札へと強制的に帰還してしまう。

さらにこれだけでは終わらなくて……………

「ソウルコアを支払った事により追加効果!!…このターン、ボクのライフもーっしか減

らない!!……龍騎のアタックはライフで受けるよ!!」

へライフ4??3へフリソデ

龍騎は剣を振り、フリソデのライフ1つを一刀両断にしてみせるが、白晶防壁の効果はシールド・ドラゴンの効果とほぼ同等……このターンアスラが残ったドラゴンヘッドで攻撃しても彼のライフはこれ以上減らせなくて………

「……クソ……ターンエンドだ」

手札：1

場：【ドラゴンヘッド】LV2

【仮面ライダー龍騎】LV2

【ミラーワールド】LV2

バースト：【有】

マジックカード1枚で動きを止められたアスラ。苦い表情を見せながらそのターンのエンドとなってしまった。

そして次はフリソデのターンだ。生き残ったシナンジュの一つ目の眼光がアスラを睨みつける。

「ターン07」フリソデ

「諦めな……君とボクとじゃ目指しているものが違う」

「？」

メインステップ開始前、フリソデがアスラに語りかけて来た。

「君はさつき頂点王になるとか言ってたけど、ボクの夢はそんなものよりも遙か先、全世界の支配者になる事だ」

「ツ……全世界の支配者？」

「そう。シスイ様と共に絶対的な強さを持つオーデインを手に入れ、何もかもを支配する!!…頂点王なんてちっぽけなモノに囚われている君如きがはじめからこのボクに勝てるわけなかったのさ!!」

フリソデの野望はシスイと同じ……………

確かに「一国の頂点王」と「全世界の支配者」……………どちらの立場が上かと言われれば誰もが口を揃えて「全世界の支配者」と答えるかもしれない……………

アスラの目指しているモノは、フリソデのそれよりも小さいモノなのかもしれない……………

だが……………

「……………オマエそれってシスイとか言うヤツの『ついでに』強くなって、『ついでに』支配者になろうとしてるのか？」

「？」

「仮にそんなんで強くなれたとしても、オマエは多分、いや確実に弱いままだぞ」

「……………要点が見えないく……………コモンの薄汚いゴミ小僧……………もつとわかりやすく説明しておくれよ」

アスラの言葉に苛立ちを覚えるフリソデ。敢えてもう一度聞き直した。

「他人から便乗してもらったモノで強くなっても意味はねえつつつてんだ……………シスイ

がそのオーデインとか言うのを手に入れただけで自分も強くなった気でいるんじゃないかねえよ、この自惚れヤロー……!!」

「ツ……あの落ちぶれエックスは本当に口が悪いと思ってたけど……君も大概だよね!!……そんなにボクにぶつ殺されたいのかい!？」

アスラの言葉に真つ当な反論ができないフリソデ。それ程までにアスラの言葉を的を射ていた。

シスイが強くなったついでに自分も強くなった気であるなど、自惚れ以外何者でもない。言い返す言葉がないからこそ頂点まで腹わたを煮えくり返したフリソデは、メインステツプを開始し、手札のカードを1枚引き抜いた……

「メインステツプ!!……パイロットブレイヴ、フル・フロンタルをシナンジュに直接合体する様に召喚!!……シナンジュもLV2にアップだ!!」

「!!」

1 「シナンジュ+フル・フロンタル」 LV2 (3) B P 1 9 0 0 0

前のバトルでも使用されたパイロットブレイヴ、フル・フロンタルがシナンジュに合体される。シナンジュの姿は特に変わらないが、その性能は少なくとも3倍に膨れ上がっていて……………

「フル・フロンタル召喚時効果、相手はスピリット1体を破壊しなければボクは2枚のカードをドロロー!!」

「……………ドロローはさせねえ、悪いドラゴンヘッド!!」

フル・フロンタルの効果でスピリットの破壊を要求されるアスラ。ドラゴンヘッドが対象に選ばれ、その肉体が消滅してしまう……………

「アハハハハッハッハッハ!!……………君のライフは残り3つ!!……………シナンジュはフル・フロンタルとの合体中は赤のシンボル3つとなる!!……………このターンで終わりだ!!」

このターンでの勝利を確信したフリソデ。

しかし、その刹那の一瞬……………

炎の飛ぶ斬撃がシナンジュの体を横一線に引き裂き、焼き切った……………

シナンジユは耐えられず、堪らずフリソデの目の前で爆散してしまった……………

「……………はっ？」

突然の出来事に声が詰まるフリソデ。何が起きたのか全く理解できなかったが、アスラがその説明を入れる……………

「スピリット破壊後のバースト、第二の龍騎……………最もBPの低いスピリット1体を破壊、その後召喚。オマエの場はシナンジユしかないからそれを破壊させてもらったぜ、自惚れ金髪ヤロー」

「ッ……………しまっ……………」

1 【仮面ライダー龍騎「2」】 LV1 (1) BP5000

アスラの場には第二の龍騎が現れており、どうやらそれから放たれた炎の斬撃がシナンジユを斬り裂いたようだ。

このバーストは前のバトルでも使用した……………つまりフリソデはこのバースト効果を

認知していたはずである。

痛恨のミスだった。怒り任せに強引なプレイングをしてしまった結果、対処できたはずのバーストを踏んでしまった……………

「誰かに便乗して達成される夢は、夢とは言わねえ!!……………夢は死ぬものぐるいで、必死になって自分の力で追いかけるモノだ!!……………んな事も知らねえ teme エが頂点王を語るなッー!!」

「貴様如きがこのボクに知ったような口を聞くな、この欠陥品……………底辺のゴミ虫……………!!」

拳を固め、咆哮を上げるアスラ。悔しさに歯を噛み締めるフリソデ。プライドの高い彼は、下に見ていた者に逆に下に見られるのが余程恥なのだろう。

一方でここはミラーワールドの三王塔内部、ロンとエールは上の階にいらるであろうシスイとイユの元へと辿り着くため全力で階段を駆け上がった。

そして丁度ライダースピリットの間へと辿り着いた時、次なる間への道筋を遮るかのようにある者たちが彼らを待ち構えていた……………

それはミラーワールドに存在する生物、ミラーライダーズに宿るミラーモンスターだった。その数実に8体、その中にはアスラに倒された者も確認できる……………

「こいつらは……………」

「ミラーモンスターね……………あんたのどこのあの蝙蝠みたいなヤツと同じよ」
「成る程」

この上にシスイヤイユがいる事は明白。ロンは前方にいるミラーモンスター達を薙ぎ倒そうと、己のBパッドを構え、スピリットを召喚しようとするが……………
彼がBパッドを構える前に、エールが彼の目の前に出ると……………

「先に行きなさい。ここは私が引き受けるわ」

「むえ」??任せろ

「!」

エールが自分のBパッドを展開、デッキをセットしながらロンに先に行くように催促した。彼女の頭の上に乗っかっているムエも誇らしげに鳴き声を上げる。

「勘違いしないでよね。2人であいつらの相手する方が効率悪いと思っただけよ……わかつたらさっさと行きなさい」

「ああ、すまない……ここは頼むぞ、エックスの女」

「……………あんた、良い加減そのエックスの女って呼び方やめてくれる? ……私の名前はエール・オメガ……………エールと呼びなさい」

「フツ……………なんで偉そうなんだか……………わかった、任せたぞ、エール……………!!」

「ええ!! ……任せなさい!!」

初めてエールの事を名前で呼ぶと同時に走り出すロン。黄金の蟹のようなモンスターの頭をジャンプ一つで飛び越え、先の階段へと登り始める。ミラーモンスター達はそんな彼の背中を追いかけんとするが……………

その行方を阻んだのはエールが召喚したウオーグレイモンだった。その鋭い鉤爪の武器を振り、近寄って来たミラーモンスター達を片っ端から吹き飛ばした。

「ここから先は、このオメガ家、エール・オメガが行かせないわ!!」
「むえー!!」?? そうだそうだー!!

三王塔の中にて、エールのスピリット達とミラーモンスター達のバトルが幕を開けたのだった……………

「母艦ネクサスのLVをアップさせる……………ボクはこれでターンエンド……………」

手札：4

場：【フル・フロンタル】LV1

【レウルーラ【UC】】LV2

【ガランシエール】LV2

バースト：【無】

アスラとフリソデのバトルスピリッツは続く。アスラの第二の龍騎によってエースカードであるシナンジュを破壊されたフリソデは、一度体勢を整えるべく、アタックも

ブロックも行えないパイロットブレイヴを残し、そのターンをエンドとした。

「ターン08」アスラ

「メインステッパー!!……シヤムシーザー2体を連続召喚!!」

ー【シヤムシーザー】LV1(1) BP2000

ー【シヤムシーザー】LV1(1) BP2000

アスラの場合に2体のシヤムシーザーが召喚される。これで彼の場合には第一、第二の龍騎と合わせて4体のスピリットが揃った。

「第二の龍騎をLV2へ上げてアタックステップ!!……第二の龍騎、いけえ!!……効果で残ったフル・フロンタルを破壊!」

「くっ……!!」

剣を構える第二の龍騎。効果により、フリソデのBパッドからフル・フロンタルの

カードがトラッシュユへと送られた。

さらにこの瞬間、ミラーワールドの効果が適用されるが、今回はアドベントカードではなく、通常のカード。よってそれはアスラの手札へと加わった。

「レウルーラの効果、疲労させてBP4000の第一の龍騎を破壊！」

ー「レウルーラ「UC」」（回復??疲労）

母艦、レウルーラに備え付けられた数多くの砲手からレーザーが照射。それは第一の龍騎を貫き、爆散させた。

これでアスラの攻め手は減少するも、フリソデのライフは残り3つ。第二の龍騎と2体のシャムシーザーのアタックだけで十分であって……………

「第二の龍騎は止まらねえー!!」

「ツ……………ライフだ……………ぐあっ!?!」

へライフ3?!?2 フリソデ

第二の龍騎から振り下ろされた斬撃がフリソデのライフ一つを斬り裂く。

「シヤムシーザーでアタッカー!!」

すかさず一体目のシヤムシーザーで攻撃を仕掛けるアスラ。この攻撃に加えて2体目のシヤムシーザーの攻撃も通ればアスラの勝利で終わるが……………

「フラッシュ、ガランシエールのLV2効果!!」

「!？」

「自身を破壊する事で、このバトル中、ボクのライフは減らない!!」

「なに!？」

〈ライフ2??2〉フリソデ

フリソデの母艦ネクサスの一つ、ガランシエールが塵となって消滅する。しかし、その影響なのか、フリソデの前方にライフバリアとは別のバリアが出現。シヤムシーザー

が体当たりをしてそれを砕くが、フリソデのライフを減少させるには至らなかった。

「……………ターンエンドだ」

手札：1

場：【シャムシーザー】 LV1

【シャムシーザー】 LV1

【仮面ライダー龍騎「2」】 LV2

【ミラーワールド】 LV2

バースト：【無】

残ったシャムシーザーだけではフリソデのライフを全て破壊する事は不可能。アスラはそのターンをエンドとするが、彼の攻撃を咄嗟に凌ぐためにガランシエルと言う奥の手まで使わされたフリソデの表情は苦しそうで……………

(……………こいつ、強い……………ガランシエルまで切らされた……………不味い、このままじゃ負ける……………よりにもよってエースカードもソウルコアもないクソザコのコモン野郎に……………たった一度のミスしただけでこんな……………!!)

あの第二の龍騎のバーストを誤って踏んでしまったのが大きかったか、このバトルはアスラの流れにあるのは間違いなかった。

確実に自分が追い詰められている事を悟るフリソデ。このままでは自分がギリ貧になつてアスラに敗北を喫する事は明白だった。

(……嫌だ。負けたくない……あんな欠陥品に、嫌だ。ボクは支配者になる男だぞ、そのためにシスイ様に従つてここまで来たのに……)

仮に自分がアスラに負けたとしても、シスイの計画に支障がでるわけではない。しかし、彼は心のどこかでシスイに使い捨ての雑巾にされる事を予想していた。

それ故に、このバトルで勝ち、自分は役に立つと、証明しなければならぬと、本能的に自覚していた。

「ターン09」フリソデ

ターン開始の刹那。フリソデはカードをドロウするが、この状況を一変させられるも

のではなく、また苦い表情を見せる。

敗北する……………

そう思ったフリソデはアスラに向かって口を開けると……………

「……………なあ、スーミ村のアスラ……………だったよな?」

「ん?」

「さっきまではボクが悪かったよ……………どうだ、このボクと手を組まないか?」

「!?」

「一緒にシスイを倒そう」

敗北が確定したフリソデが取った行動は、アスラとの取り引き。態度の急な変貌ぶりに流石のアスラも戸惑いを見せる。

「いや、本当……………さっきまでは悪かったって……………ボクさ、昔コモンのヤツに両親を殺されてね。だからコモンのヤツに偏見持ってた。でもわかったよ、君みたいに心優しいコモンもいるんだって」

「……………」

フリソデはシスイ側からアスラ側につき、自分の居場所を新たに作ろうとしている。ついさつきまで敵だったのだ、普通の人間ならば先ず話は聞いてくれないだろう。しかし、言動や行動からして情に熱いであろうアスラならばきつと優しい手を差し伸べてくれると考え、フリソデはこの手を使ったのだ。なんとも汚い生き残り方だ。

「あつ……なんならこの袖付きのデツキを君に渡しても良い。ソウルコアが無い君でも使えるし、高額なカードばかりで非常に強いデツキだ……悪い話じゃないだろう!?」
ボクも君の仲間に入れてくれよ!」

カードバトラーの魂とも呼べるデツキまでもアスラに委ねようとするフリソデ。その分生き残るために必死なのが見て取れるが……

アスラの判断は……

「オレと同じコモンのヤツがオマエの父ちゃんや母ちゃんを殺したって言うならゴメン……ホントにゴメン……でもオレは、仲間を平気で裏切るようなヤツは信用できねえ……!!」

「なっ!？」

当然答えはN oだ。アスラは自分の損得で動くような男ではない。

確かにフリソデには同情しているが、いくらそれを盾に訴えかけられても、シスイと
言う仲間を平気な表情を浮かべながらあつさり裏切ろうとするフリソデが信じられな
かった。

(……………んだよ。何なんだよ……………この手のバカは情に訴えかければどうにかなると思っ
たのに……………!!)

「ターンはエンドか?……………オマエには悪いけど、このバトルはさっさと決着をつけさせ
てもらうぜ。早く仲間のところに行かないといけないからな」

不味い。このままでは負ける……………

そして居場所も失う。いく宛もなくなる。

(嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!……………ここで負けたらまたあの野

「……さっきの言葉無しね!!……やっぱり君はこのボクに負ける運命、定めにあるみたいだ!!」

「……!!」

調子のいい事をほざくフリソデ。とてもではないが、敵である自分の悲しき過去に同情してくれた心優しいアスラに対する発言とは思えない。

そしてそんな歪んだ性格を持つ彼は、アスラを倒すべく、止まっていた自分のターンを再び進行させた。

「メインステップ!!…先ずはドラッツェ2体を連続召喚!!…レウルーラの効果でドロ―!

ー [ドラッツェ [袖付き] LV1 (1) BP1000

ー [ドラッツェ [袖付き] LV1 (1) BP1000

赤き装甲を持つ最軽量の袖付きスピリット、ドラッツェがフリソデの場に2体出現す

る。

さらにその召喚の際に発揮されるレウルーラによるドローカードを見るなり、フリソデの口角はより上へと上がる。その行動はデッキが進化した事によつて生まれた新たなカードをドローした何よりの証拠であつて……………

「次は大人の特権!!…手札にあるパイロットブレイヴ、2枚目のフル・フロンタルを召喚し、君のシヤムシーザーを破壊!!…さらに召喚時効果で、君がスピリットを破壊しなければボクは2枚のカードをドローする」

「くっ……………残つたシヤムシーザーを破壊だ」

1 「フル・フロンタル」 LV1 (0) BP6000

アスラの場に居座る2体のシヤムシーザーが塵となつて消滅すると共に、フリソデはパイロットブレイヴであるフル・フロンタルを召喚。パイロット・ブレイヴは場には反映されないものの、これで強力なモビルスピリットをいつ召喚しても合体できる準備が整つて……………

「さらに見せてあげるよ!!…ボクの進化した袖付きデッキ…進化したシナンジュを!!」

「!!」

「召喚!!…シナンジュ、ロケット・バズーカ装備!!…そしてフル・フロンタルと合体!!」

ー【シナンジュ「ロケット・バズーカ装備」＋フル・フロンタル】LV3（4S）B
P19000

フリソデの場に飛来してきたのは、アスラが倒したはずの赤き彗星。

まるで彼に復讐を果たさんと言わんばかりに、重厚で巨大なバズーカ砲を手に持ち、パワーアツプして再度現れた。そしてこれがデッキの進化で得た、フリソデの新たな力であって……………

「さあ、お待ちかねのアタックスステップだ!!…言つて来いシナンジュ!!…効果で1枚ドローして、フル・フロンタルの効果で第二の龍騎に指定アタック!!」

第二の龍騎がシナンジュの一つ目の眼光の眼差しに捕らえる。第二の龍騎もそれに気がつき、戦闘態勢に入る。

「忘れてないだろうね〜!!…フル・フロンタルは袖付きスピリット全てのBPを5000アツプさせる。今のシナンジュのBPは24000だ!!…第二の龍騎は敵じゃない!!」

第二の龍騎がシナンジュに向かって炎の飛ぶ斬撃を放つが、シナンジュの深い赤の装甲はそれをものともしない。

このままでは圧倒的なBP差で敗北を喫するであろう第二の龍騎。しかし、アスラはそれを回避すべく、手札にある最後のカードを引き抜いた……………

「フラッシュマジック、ファイヤーウォール!!」

「!!」

「第二の龍騎を破壊する事で、この攻撃でアタックステップを終了させる…!!」

火柱が第二の龍騎の足元からほとばしる。第二の龍騎はその業火に焼却されてしま

うものの、シナンジュとのバトルを回避しただけでなく、このターンの攻撃を全て止める事に成功した

はずだった……………

「詰めが甘いねー!!……………これだからコモンのゴミは!!……………ロケット・バズーカを装備した、新たなシナンジュの効果!!……………アタックしたバトルの終了時、ブロックしたスピリットが破壊、消滅していれば、このスピリットのシンボル1つにつき1つのライフを破壊する!!」

「なッー!?!」

「このテキストにはファイヤーウォールによる破壊も当然含まれる!!……………そしてシナンジュは今、フル・フロンタルとの合体により赤のダブルシンボル!!……………よって2つのライフを破壊する!!」

重厚で巨大なバズーカ砲を構え、アスラのライフへと照準を合わせるシナンジュ。そしてその重たい引き金を引き、それを発射した。

「ぐっ……………ぐあああああ?!」

ハ——！！……君さつき言つてたよね〜!?…『誰かに便乗して達成される夢は、夢とは言わねえ!!……夢は死ぬものぐるいで、必死になつて自分の力で追いかけるモノだ!!』つて!!……どうしよう必死にやってみたら叶っちゃつた、叶っちゃつたよー!!」

己の力、及びバトルスピリッツのセンスを自慢するかのように、気を失つたアスラに叫ぶ、気の狂つたフリソデ。

もう彼は自分の居場所を必要とはしていない。それ以上に大事だと思える力を手にしたからだ。世界を支配して仕舞えば、そんなちつぽけな悩み、どうとでもできる。

「何が自惚れヤローだ。君の方がよっぽど自惚れじゃないか!!……コモンで、ソウルコアが使えなくて、今ではエースカードも使えない!!……手札も場のスピリットも全滅させられた、哀れで情けない底辺の極み!!……君みたいなゴミがこのボクに勝てると思つていただけでも罪だ。所詮君は、この世界では上に行かないし、何者にもなれない……生まれながらの負け犬なんだよオオオオオオオー!!」

余りにも滑稽で、笑いが止まらないフリソデ。

彼にとって、底辺ながらも努力や鍛錬を積み重ねて来たアスラは滑稽にしか映つてい

ない。しかし皮肉な事に、この世界では才能の差と言うものが流暢に現れる。その証拠に、アスラはフリソデのたった一度の進化にここまで追い詰められている……………

確かに、フリソデに限らず、側から見ればアスラの努力など、滑稽にしか見えないのかもしれない……………

だが……………

「さあ、君はターンを進められないみたいだし、強制的にもう一度ボクのターンだね……………
さあて、どんな攻撃で終わらせてあげようかな？」

その瞬間だった。

「……………!？」

アスラのデッキがまるで倒れている彼の心臓の鼓動に呼応するかの如く、黒く点滅し始めたのは……………

それから感じ取れる得体の知れない殺気に、フリソデは思わず半歩足を後退させてし

まう。

そしてその得体の知れない黒い光は徐々に徐々に強さを増していき、空気や空間を震撼させていく。今までとは比べ物にならない程のプレッシャーがフリソデを襲った

.....

.....黒

それは強力過ぎるが故に、別の世界に追放された、バトルスピリッツ第7の属性

.....

そしてアスラの龍騎に宿っているのは.....

神をも焼き殺す、黒き龍.....

36コア 「仮面ライダーリュウガ」

「…………アレ…………どこだ……?」

アスラが目を覚ますと、そこは一寸先どころか永遠に広がっている闇の中だった。光と言う名の温もりの無い場所であるからか、どこか寒気がする場所だった。

しかし、アスラは何故かここに何度か来ているような気がして…………

「えーっつと…………確かオレ、あの金髪ヤロウとバトルしててそれで…………あ」

アスラは自分がフリソデとのバトルの中で窮地に陥り、力尽きて倒れてしまった事を思い出した。

そして氣を失った直後にこの暗闇の世界に来たのだ…………

ひよっとして…………

「え、イヤイヤ、ウソウソ…………オレってまさか死んで…………!?!」

アスラが声のする方へと身体を向ける。

そこにいたのは……………

「ブワあああああ!!……………なんだオマエエエエー!!」

巨大な龍の形を形成している黒い炎だった。まさか本当にこの世のモノではない者の登場に、アスラは驚愕して慌てふためく。

「ゼゼゼ……………こっちの姿で会うのは初めてだな」

「いや、何その前も出会ったみたいない方!!…………オマエみたいな黒くて気持ち悪いヤツは断じて知らん!!」

「つれねえなー……………これでもオレはオマエを誰よりも近くで見えて来たんだぜ?」

アスラは記憶が抜けているようだが、この声に語り掛けられた事が二度ある。一度目はユキカイ町の宿で、二度目はオロチに敗れ、病院で眠っている時だ。

「ゼゼゼ……………自己紹介がまだだったな、オレの名前はオニキス。黒の世界にいる『ブラッ

クフオース』の1人」

「ツ……黒の世界!?……それってあのちよび髭シルクハットが言つてた……オマエ、いったい!?!」

オニキスと名乗る黒い炎。そして彼の言葉から聞き取れた「黒の世界」と言う単語はアスラにも聞き覚えがあった。それは以前、ライダーハンターズのウィルが口にした言葉であり……

「まあ、不本意なタイミングだが、オレが現世に出るまたとないチャンスに違いはねえ……ゼゼゼ、いただくぜ、その身体!!」

「ツ……!!」

突然アスラを襲い始める龍の形を象つた黒い炎。尾でアスラを捕らえようとするが、彼は凄まじい反射神経でそれを寸前のところで躲して見せる。

「テメエコノヤロー!!……いきなり何しやがんだ!!」

「なあに、悪い話じゃねーさ……あの人間に勝ちてーんだろ?」

「!」

「オレに任せとけつて、叶えさせてやるからよ」

黒い炎が言う「あの人間」とは、おそらくフリソデの事だろう。どうやらこの黒い炎はアスラに変わってフリソデと戦う気にいるらしい。

確かに、この得体の知れないバケモノなら、デッキを進化させたフリソデにも確実に勝つ事ができるだろう……

しかし……

「うるせえええ!!……誰がオマエみたいな黒くて気持ち悪いヤツに任せるかアアア……オレは自分自身の力でアイツに勝つんだッー!!」

アスラのプライドがそれを許そうとはしなかった。意地でも自分だけの力でフリソデに勝利する気である。

「おいおい。どんだけ頑固なんだよオマエは……あーだこーだと言つてないで、さっさとオレに意識を委ねろ。それだけでアイツに勝てるんだつて……オマエみたいなアリ

ンコじや逆立ちしたって勝てやしねーよ」
「!!」

黒い炎がそう言いながら、炎でできた己の体を自在に伸ばし、アスラの体を縛り上げた。不思議と熱くない炎だったが、これで彼にできる事は精々口を動かすことくらいになっけてしまい……………

「ぐうツ…………アリンコなめんなよツー!!…………どこへだつてよじ登つてやるぜ!!」
「ゼゼゼ…………登れない場所もある。諦めな」

アスラに諦めろと催促する黒い炎。しかしアスラはそれでも曲げずに力を振り絞り、己を縛っている炎を解こうともがく……………

「いや!!…………オレは絶対に登る!!…………アリンコだろうが、コモンだろうが、ソウルコアが使えなかるーが関係ねえ!!…………オレ自身が決めた事なんだ!!」

「!!」

腹の底から放たれるアスラの咆哮。それは空間を裂くかのように暗闇に亀裂を生じさせていく。そしてその割れ目から眩い光が差し込んできた……………

誰に何を言われようが、どう思われようが知ったこつちやねえ……………

オレは……………オレは絶対……………

絶対……………

……………

絶対に、諦めねえええー!!!

「ツ……………」

舞台は戻り、ミラーワールドのオウドウ都、三王塔の扉前。

進化したフリソデに追い詰められたアスラは、そう叫びながら立ち上がって見せた。そのデッキは彼の心臓の鼓動に呼応するかのように黒く点滅している。

(……………な、なんだ、あれ程のダメージを受けてなんでこんな直ぐに立ち上がった?……………ツ!)

直後、フリソデはアスラが立ち上がった直後に、空気が重く変わっている事と、自分の指先が震えている事に気がついた。震えていると言う事は恐怖していると言う事、そしてその恐怖の対象は今のアスラ以外、何もなくて……………

(な、何?!……………ビビってるのか?……………恐れているのか?……………あのコモンでソウルコアが使えないゴミに……………いやいや、あり得ないでしょ、ボクは進化して最強になったんだよ!)

フリソデの目の前にいるのはこの国で最も弱いと言われているコモンで、しかもソウルコアが使えない欠陥品。

しかし、彼から放たれている妙な黒いオーラと殺気がフリソデを密かに恐怖させていたのだ。

「オレのターンだ……ッ!!」

「!!」

立ち上がったアスラが口を開く。その放たれた言葉に凄まじい重圧と威圧を感じたフリソデは、恐怖の対象がアスラであると完全に自覚する。

だが認めたくはなかった。こんなコモンで、しかもソウルコアが使えない惨めな奴に自分が恐れをなしている事を……………

「か、勝てるわけないんだ!!……ここから、この状況から!!……手札もスピリットも、ソウルコアもないオマエ如きが、進化して最強になったボクに勝てるわけがないんだ!!」

手札：2

場：【シナンジュ「ロケット・バズーカ装備」＋フル・フロンタル】LV3

【ドラッツェ「UC」】LV1

【ドラッツェ「UC」】LV1

【レウルーラ「UC」】LV1

バースト：【無】

自分の恐怖を誤魔化すためにベラベラと喋りだすフリソデ。

確かに、側から見ればアスラが勝てる見込みなど、ゼロに限りなく近いのかも知れない……

しかし、得体の知れない存在感を放つ今のアスラは、これさえも容易く覆してしまおう事だろう……

「ターン10」アスラ

ターンシークエンスの過程の中でカードをドロウするアスラ。その手札は0から1になるが、その1枚は自分のデッキにはさつきまで存在していなかったカードであった……

しかし、彼はそれが何なのかを気に留める事はなく、それを堂々と己のBパッドへと叩きつけ、名を叫んだ。

「メインステップ……オレはコイツを召喚する、来い……」

仮面ライダーリュウガ!!

1 【仮面ライダーリュウガ】 LV3 (5) BP12000

様々な鏡像が重なり合い、一人の戦士がアスラ場に姿を現す。そしてその姿は

……

「……………く、黒い龍騎!?!…リュウガ!?!…なんだ、聞いた事がない。なんだそのミラーライダーは!?!」

その見た目は正しく仮面ライダー龍騎だが、色が黒く、目が禍々しく吊り上がっており、通常の姿よりも異端な存在である事が窺える。

得体の知れないカードバトラーが召喚した得体の知れないライダースピリットを前に困惑を覚えるフリソデ。しかし、彼が驚愕する間もなく、アスラはその「リュウガ」と呼ばれるスピリットの効果を発揮させて……………

「召喚時効果ツー!!…スピリット全てのコアを2つずつリザーブに消し飛ばすツ!!」
「なに!?!」

リュウガはベルトからカードを引き抜き、それを左腕のバイザーに装填……………
……………アドベント!!

と、いつもの音声よりも太いテイストで響き渡ると、リュウガの背後に神をも焼き殺す黒龍が咆哮を上げながら出現。赤い眼光を放ち、フリソデやそのスピリットを睨みつける。

「み、ミラーモンスターまで……………黒く……………ぐ、ぐおおおお!!!」

- 1 「ドラッツェ」[UC] (1??0) 消滅
- 1 「ドラッツェ」(UC) (1??0) 消滅
- 1 「シナンジュ」[ロケット・バズーカ装備] (4S??2S) LV3??1

黒龍の口内から放たれる黒炎がフリソデのモビルスピリット達を襲う。コアの少ないドラッツェ達はたちまち消滅してしまい、合体してより強力な効果を有するシナンジュでさえもそのLVを大幅にダウンさせてしまった。

「さらに消滅した数だけカードをドロー……2体のドラッツェが消滅した事で、オレは2枚のカードをドローする」

「ッ……って、手札が回復した!」

2体のドラッツェが消滅した事により、合計2枚のカードをドローするアスラ。たった1枚のカードで一気に形成を逆転させた。

「アタックステップ……」

「だ、だがそいつのシンボルは紫の1つのみ……ボクのライフは……」

「リュウガでアタックツーー!!」

「ボクの2つのライフは決して0にはできないー!!!」

アタックステップに移行され、リュウガに攻撃の指示を送るアスラ。

しかしそのシンボルはたったの1つ。残りライフが2つもあるフリソデのライフは0にはできない……………

だが、これは第七の属性、黒の力で強化された龍騎の力……………

その程度の常識が罷り通るわけがなくて……………

「リュウガのアタック時効果!!……………コア2個以下のスピリット1体を破壊し、ライフ1つをボイドに送るツーー!!」

「は、はああつ!?!」

「シナンジュを破壊……………そして効果とアタックで、オマエの残った2つのライフ全てを破壊するツーー!!」

リュウガが再びベルトからカードを引き抜き、それを左腕のバイザーに装填。

「ぐっ……ぐあああああ!?!」

△ライフ2??1??0△フリソデ

刹那……

黒炎を纏ったリュウガの強力なキックがシナンジュを貫き、その勢いのまま、フリソデのライフをも破壊した……

凄まじいバトルダメージがフリソデを襲う。彼が力尽きて仰向けで倒れると共に、Bパッドからは彼の敗北を告げるかのように「ピー……」と、甲高い機械音が鳴り響き始めた。

これにより、勝者はアスラだ。謎多き黒い力を従え、見事に勝利を収めて見せた。

「……オレの勝ちだ。先に行かせてもらおうぜ」

力尽きて倒れたフリソデに、アスラがそう告げた。そしてその直後、最後に場に残つ

た仮面ライダーリュウガが黒い炎に姿を変え、この場から消滅。Bパッドにあるカードも同様の方法で消え去った。

「何だったんだ……でもなんか凄い力だったな。まるで体中の血が燃え盛る炎になったような……ん？……てかオレ気を失ってる時に誰かと喋ってなかったか……？」

消え去るリュウガとそのカードを眺めながらそう呟いたアスラ。どうやら夢の中でオニキスと名乗る黒い炎と戦った事を忘れているようである。

そんな時、力が抜き取られたかの如く力尽きて倒れているフリソデが唯一動ける口を動かした……

「ず、ずるいだろ……」

「？」

「卑怯だろ!!……自分だけこんな凄い力を使いやがって!!……ふざけんなアアア!!」

動かすものが口しかないフリソデ。悔しさと歯痒さで大粒の涙を零しながらアスラにいちやもんをつけた。

はつきり言つて惨め極まりなし。この力が何なのか、いつ手に入ったのかもアスラはわからないと言うのに……………

「…………自分の運命や定めを捻じ曲げられたくないなら、諦めるなよ…………言い訳する前に、努力して、何度でも立ち上がれよ!!」

「!!」

「そうやって来たから、こんなオレでも仲間ができて、ここまで来れた……………諦めなけりや、前を向いて走れば運命なんていくらでも変えられるんだよ!!」

腹の底から想いを叫ぶアスラ。コモンで、しかもソウルコアが使えないからこそ言える言葉だった。

「…………オマエ達コモンはいつもそうだ…………虐げられるだけの存在のくせに自分勝手な偏見だけで偉そうに物を言う!!」

「お、オマエ…………それ自分にブーメランだぞ…………!?!」

「黙れええええ!!…………何が『諦めるなよ』だ。諦めてないわアアア!!…………てゆうか負けてないし、オマエみたいなコモンでソウルコアが使えないヤツなんかはこのボクが負け

るわけない……!!」

アスラの言葉に聞く耳を持たないフリソデ。自分の考え方が間違っていないと信じて止まない。

しかしその時だった……

フリソデの足元から空間を繋ぐワームホールが出現したのは……

「は？……な、何?!……う、うああああ?!」

「!!」

重力に従い、そのままワームホールの中へと落下していくフリソデ。彼を吸い込むように現れたワームホールはその後、何事もなかったかのように閉じられた。

「……あの穴って……確かトウエンティとかが出してる……まさかアイツらも関わってるのか?!」

トウエンティやウィルなどのライダーハンターズが同じモノを使用していたのを思

い出すアスラ。何のためにフリソデを落としたのかは定かではないが、どちらにせよ彼らが関わっている事は間違いないさそうで……………

「くっ…………取り敢えず今はロン達のところに行かねえと…………待つてろよ」

ボロボロになってしまった身体を無理矢理突き動かし、アスラはロン達が入っていた巨大な塔、三王塔へと足を踏み入れた……………

一方ここは三王塔内部、その最上階にある頂点王の間。ここがミラーワールドと呼ばれる異世界とは言え、本来であれば6人のカラーリーダーと3人の三王を全て倒した者だけが到達できる場所にロンは辿り着いた。

そこには当然シスイ・メイキヨウ、ミラーライダーズのカード達に囲まれ、気を失っているイユ・メイキヨウもいた。

ロンはそんなシスイと睨み合いを続けて……………

「フフ……ロン。まさかサバイブを奪われてもまだ我に挑んで来るとはね……身の程知らずもゾン譲りのようだ」

「……残念だが、その身の程知らずはゾンじゃなくてライバルから譲られたモノだ……そんな事より、さっさと返してもらうぞ……ナイトサバイブとその女をな」

「ほお。イユもか?…昨日も言ったが、我が娘は我自身の所有物だ。残念ながら渡す事はできないね」

言い合いながら緊迫する状況の中、ロンは己のBパッドを展開してバトル台を形成させる。この行為が意味するのは当然、シスイにたいするバトルスピリッツの要求だ。

そんな彼の様子を見て、シスイは不気味な笑みを浮かべながら、自分のBパッドを取り出した。

「いいだろう……オーディンが蘇るまでまだ時間もある。その余興に君とのバトルスピリッツはもってこいだ……!」

「オーディンは復活させない。そしてオマエ達メイキョウ家は……オレが救う!!」

「……救う?」

ロンから放たれた言葉にシスイは耳を疑った。昨日あれ程父親を殺された事を知って激昂した少年が今日はそんな者達を救うと言ったのだ。無理もない……………

「……………私の耳が腐っているのかな……………今君は救うと言ったのか?……………この我も」

「……………ああ、そうだ。オレはオマエ達メイキョウ家を救う」

「昨日あれ程までに激昂していた青二才が、いったいどう言う風の吹き回しだい?」

「オレが記憶で見たあんたはゾンと親友だった。心の底から……………だが15年前、あんたはオーデインの力に魅せられ、力に溺れた。だからオレはそんなあんたをオーデインの呪縛から解放する……………ゾンもオレがそうする事を望んでナイトを託したんだと、今は思う」

「ッ……………!!」

「それに、復讐がどうか言ったら、オレの最大のライバルにぶん殴られるしな」

ロンの言葉を聞き、シスイは15年前の事を思い出し出していた。

確かに、ロンの言う通り、ゾンはオーデインの力に溺れたシスイを解放しようとした。彼は本当に心優しい人間だった。最後の最後までシスイを親友だと信じていた……………

しかし、それをシスイは裏切った。

親友を裏切ったと言う自覚があるからこそ、シスイはロンのその言葉が、姿がゾンと重なり合った。それは彼にとってとても腹立たしい事であり……………

「本当…………イラツと来ますね。せめてもの情けだと思つて生かしておきましたが、もう容赦はしない…………ゾン・アーサーの息子、ロン・アーサー…………目障りな貴様を今ここで我が消す!!」

「…………オレの名前はロン・アーサーじゃなくてスーミ村のロンだ。そしてこの名前は未来の頂点王になる名だ!!」

お互いのBパッドにデツキがセットされ、バトルの準備が整う。

そして…………

…………ゲートオープン、解放!!

世界の命運を左右するロンとシスイのバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける。

先行はシスイだ。腹わたを煮えくり返しているが、それでもロンを葬り去るべく、余裕を持つてそのターンシークエンスを進行させていく。

「ターン01」シスイ

「メインステップ、海底に眠りし古代都市を配置……バーストを伏せ、ターンエンド」

ー【海底に眠りし古代都市】LV1

前のバトルとほとんど同じ光景だ。シスイの背後に深海深くに眠る立派な古代都市が姿を見せる。

「ターン02」ロン

「メインステップ、来い、仮面ライダーナイト!!」

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2)BP4000

様々な鏡像が重なり合い、騎士型のライダースピリット、ナイトがロンの場に出現す

る。

「召喚時効果でドロロー」

「フフ、安易な召喚だ……バースト発動、双翼乱舞!!」

「!!」

「我は効果で2枚ドロロー!」

ナイトの召喚時で誘発するシスイのバースト。その効果でナイトの効果を上回る2枚のドロローをシスイは行った。

「アタックステップ、ナイトで攻撃する!!」

しかし、シスイのバーストなど気に留める事はなく、そのままアタックステップでナイトに攻撃の指示を送るロン。ナイトがレイピア型の剣を構え、シスイのライフ目掛けて走り出した。

この攻撃をシスイはかわせる手段は無く………

「ライフで受ける！」

〈ライフ5??4〉シスイ

余裕のライフで受ける宣言。ナイトは彼のライフ1つを斬り裂き、破壊した。

「ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV2

バースト：【無】

そのターンをエンドとするロン。再びシスイのターンが幕を開ける。

「ターン03」シスイ

「メインステップ、まだ手札が欲しいところですね……マジック、ソウルドローを使用。カードを2枚ドローし、コストにソウルコアを使った事により、さらにもう1枚ド

ロー……最後にもう一度バーストを伏せてターンエンドだ」

手札：7

場：【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【有】

まだ動かないシスイ。マジックによるドロートバーストのセットのみで余裕のターンエンド宣言を行った。

「ターン04」ロン

「メインステップ、アーマーバットと魔界竜鬼ダークヴルムを召喚！」

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

ー【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1(1)BP3000

鎧を身につけた蝙蝠型のスピリットと、獯猛な紫のドラゴンがロンの場に召喚される。そしてその紫のドラゴンは主人であるロンを睨みつけると……

「ダークヴルム召喚時効果。オレのライフを破壊し、2枚のカードをドロー」

〈ライフ5?!4〉ロン

そのライフバリアを噛み砕いた。しかしそれはロンのデッキに力を与え、新たに2枚のカードを新調させた。

「バーストを伏せてアタックステップ。ナイトでアタック!!」

第一のナイトがレイピア型の剣を手に今一度地を駆ける。狙うは当然シスイのライフだ。2ターン連続で手札の増加に努めた彼はこの攻撃をライフで受ける他なくて………

「ライフでもらおう!!」

〈ライフ4??3〉シスイ

ナイトの剣にライフを斬り裂かれるシスイ。ロンの速攻を受けて間違ひなくピンチのはずだが、彼の表情はやけに余裕が窺える。

そしてその理由は伏せていたバーストカードにあつて……

「ライフ減少後のバースト、選ばれし探索者アレックス」

「!!」

「効果で自身を召喚。その後コア1つをリザーブに追加し、このターンのアタックス
テップを終了させる」

1 【選ばれし探索者アレックス】LV2(2)BP8000

シスイのバーストカードが反転すると共に現れたのは、紫色のフードを深く被った人型のスピリット、アレックス。

その効果でこのターンでできるはずのアタックをロンは封じられた。

「……………ターンエンド」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV2

【アーマーバット】LV1

【魔界竜鬼ダークヴルム】LV1

バースト：【有】

アタックステップを止められてしまつては致し方ないか、ロンはそのターンをエンドとする。

そして次はそんな彼の攻撃を難なく凌いだシスイのターンだ。

「ターン05」シスイ

「メインステップ、ダーク・スクアーロX2体を連続召喚。海底に眠りし古代都市の効果でコアを2つ追加!!」

ー【ダーク・スクアーロX】LV2(2)BP5000

ー【ダーク・スクアーロX】LV2(2)BP5000

サメ型のスピリット、ダーク・スクアアローXが2体、シスイの場に出現。

「アタックステップ。2体のダーク・スクアアローXでアタック……効果でコアブーストし、君のデッキを4枚破棄させ、2体のシンボルは0となる」

「!!」

2体のダーク・スクアアローXにそれぞれ1つずつのコアが追加されると、さらに微量だがロンのデッキからカードが破棄される。

これによりシンボルがなくなつて、ライフを破壊する事ができなくなるが、シスイの狙いは初めからコアブースト。そもそもロンのライフをこのターンで破壊する気はな
く………

「アタックはライフで受ける」

へライフ4?!4?!4?4?ロン

2体のダーク・スクアアローXが短剣でロンのライフを斬り裂こうと試みるも、失敗。泳ぐようにシスイの場へと帰還していった。

「我はこのターンでコアを4つも増やしました。さあ、うかうかしているとやられてしま
うよ?……前のあの惨めなバトルみたいだね!」

手札：6

場：【選ばれし探索者アレックス】LV2

【ダーク・スクアアローX】LV2

【ダーク・スクアアローX】LV2

【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【無】

「フツ……ああ、確かに。あのバトルはオレの人生の中で一番恥をかけたバトルだった
な」

「……随分と余裕だね。何か秘策でもあるのかな?」

「そんなモノはない。さつきから行き当たりばったりだ……でも関係ない。それでもオ
レが勝つからな」

コアを大量に増やし、そのターンをエンドとするシスイ。ついでのようにロンを煽るが、ロンはそれで取り乱すような様子はなく、まるでこのバトルを楽しんでいるかのよううに小さく笑っていた。

そんな彼に、またシスイは密かに腹を立てていて……

「ターン06」ロン

「メインステップ、ナイトとアーマーバットのLVをそれぞれ3と2にアップ!!」

1 「仮面ライダーナイト」(2??4) LV1??2

1 「アーマーバット」(1??2) LV1??2

Bパッド上にあるカードにコアが追加され、スピリットのLVが上昇した。

「アタックステップ、ナイトでアタック!!……さらにフラッシュマジック、ファイナルベント!!」

「!!」

「この効果でアレックスを破壊し、ナイトに赤のシンボルを1つ追加する!」

ナイトがベルトからカードを引き抜き、それを剣のバイザー部に装填……………

……………ファイナルベント!!

と、無機質な音声が流れると、ナイトの背後に黒き翼を持つ巨大な蝙蝠が出現。ナイトは宙に跳び上がり、それと一体化し、巨大な黒槍となる。

そのままアレックスを貫き、爆散させた。

「これであなたのブロッカーはゼロ。この連続アタックで終わらせる」

「終わらせる?……………フツ、見通しの甘さまで父親譲りか!!」

「!？」

このターンで決着をつけようとしていたロンに対抗するかの如く、いや、寧ろそのまま決着をつけると言わんばかりの様子で、シスイは己のBパッドにあるカードを叩きつけた……………

それは己のデッキの中に眠る最強のエースカードであり……………

「来なさい。我が最強の僕、アルケーガンダムツ!!…不足コストは2体のダーク・スクアローXをLV1まで下げて確保し、LV3で召喚する!!」

「……!?!」

┆【ダーク・スクアローX】(3??1) LV2??1

┆【ダーク・スクアローX】(3??1) LV2??1

┆【アルケーガンダム】LV3(5) BP15000

アレックスの破壊が引き金となり、上空から空気を切り裂くように飛来して来たのはモビルスピリットの一種、アルケーガンダム。

それは登場するなりロンを睨みつけ、大剣を荒々しく構えた。その動きの滑らかさはとてもではないが機械とは思えない程。

つい昨日、ロンはこのアルケーガンダムに敗北を喫したが、この破壊後のタイミングで登場して来た荒々しい機械兵に疑問を浮かべる。

「………そいつ、確か昨日はライフ減少後のタイミングで召喚したはず」

「フフ、そう言えば説明がまだでしたね。我が最強の僕アルケーガンダムは互いのスピリットの破壊、そしてライフの減少時に1コストを支払い召喚できる。今回はアレックスの破壊がトリガーとなったのだよ……そして、続行しているナイトのアタックはこのアルケーガンダムが引き受けますよ!!…敵う事はないがね!!」

「!!」

召喚からブロックまでを流れるように行うシスイ。

そんな彼の指示に従い、豪快な剣技でナイトを振り払うアルケーガンダム。さらにこの時発揮できる効果が発揮されて……………

「さらにフラッシュ、アルケーガンダムのアタックブロック時効果。2コストを支払い、コスト7以下のスピリット、ダークヴルムを破壊して回復!」

「!!」

ー【アルケーガンダム】(疲労??回復)

アルケーガンダムは取り出した短剣をダークヴルムへと投げつける。ダークヴルム

はそれに腹部を貫かれ、力付き爆散してしまう。

しかもアルケーガンダムは回復状態となり、この後のブロックも可能となった。

「いくら心に余裕を覚えたとは言え、サバイブを無くした貴様如きがこのアルケーガンダムに勝てる事はない!!」

アルケーガンダムとナイトの剣の打ち合い。金切り音がそこら中でこだまする中、それを制したのはアルケーガンダム。ナイトは首から腰を袈裟斬りにされ、爆発四散した。

「……………ターンエンド」

手札：5

場：【アーマーバット】 LV2 (2) BP2000

バースト：【有】

アーマーバットだけではアルケーガンダムに太刀打ちできない。ロンは致し方なくこのターンをエンドとした。

「ターン07」シスイ

「メインステップ、3体目のダーク・スクアアローXを召喚。海底に眠りし古代都市の効果でコアを増やし、2枚のストロングドローを使用、デッキの上からカードを3枚ドロー、その後破棄するを二度行う」

ー【ダーク・スクアアローX】LV1(1)BP3000

今回で3体目となるダーク・スクアアローX。シスイはその後、青属性の汎用マジック、ストロングドローで手札の回転率を向上させた。

そして準備は万端だと言わんばかりに手札からバーストを伏せると……

「バーストを伏せてアタックステップ!!…我が最強の僕、アルケーガンダムよ、飛べ!!」

アルケーガンダムがシスイの指示で飛び上がる。狙いは当然ロンの残り4つのライフだ。

アタックすればシンボルがなくなるため、実質アタッカー向きではないダーク・スク
アークXだが、このアルケーガンダムさえいればロンの残りライフ全てを破壊できて
……………

「フラッシュユ、アルケーガンダムのアタックブロック時効果!!…今度は3コストを支払
う!!…アーマーバットを破壊し、アルケーガンダムを回復!!」

「!!」

ー「アルケーガンダム」（疲労??回復）

アルケーガンダムが大剣を振り、その風圧だけでロンのアーマーバットを吹き飛ばし
て爆散させた。さらに回復状態となり、このターンだけで少なくとも二度のアタックが
可能となった。

さらに3コア目を支払った際の効果もまだ残っていて……………

「さらに自分のアタックステップであれば、相手の手札1枚、ライフ1つ。デッキのカー
ド6枚を破壊するツ!!」

「ぐっ……!!」

〈ライフ4??3〉ロン

一気にロンとの間合いを詰めたアルケーガンダム。その手に持つ大剣を再び豪快に振り、彼のライフだけでなく、手札とデッキまでもを破壊して見せる。

「フツ、他愛もないね。やはり君は水面に映る月面だよ……そもそもサバイブ有りでも我には敵わなかったのだ。もう諦めろ」

まだロンのライフは3つも残っているが、このターンでの勝ちを確信するシスイ。

確かにロンがいくは天才と言われるほどのカードバトラーであっても、強力なモビルスピリット、アルケーガンダムを所持しているシスイのデッキに対してサバイブの無いナイトだけでは太刀打ちする事もできないだろう……

しかし飽くまでも無かったら話ではあるのだが……

「滑稽だな、シスイ・メイキョウ」

「?」

「そう言うセリフはこのオレに勝つてから言え、小物臭いぞ」

「なに!?……貴様は、貴様はこの我を小物だと称するのか!?……この神たる我を!!」

「神だからとかは関係ない。小物は小物だ」

唐突に口を開き煽りまくるロン。シスイは自分より下だと思っていた者に煽られ、怒りを露わにする。

「ぐうっ!!……貴様の方がよっぽど小物だろうが、この落ちぶれエックスめ!!……いいからさっさと諦めろ!!……諦めて死ねー!!」

「フツ……残念だがそれはできない。オレもあのソウルコアが出せないクソチビと同じで、諦めないのがオレのバトルスピリッツだからな!!」

「!!」

「二度でも諦めたら、オレはアイツを超えて頂点王にはなれない!!」

……バースト発動!!

ロンはそこまで言い切ると、己のBパッドを勢い良く叩きつけ、事前に伏せていたそのバーストカードを反転、発動させる。

そしてそのカードは……………

「騎士の霸王ソーディアス・アーサー!!」

「ッ!?……………な、何だと、そのカードは……………」

「効果により3体のダーク・スクアアローXよりコアを1つずつトラッシュへ送る!!…
よって全滅!!」

「ぐっ!!」

ー【ダーク・スクアアローX】(1??0) 消滅

ー【ダーク・スクアアローX】(1??0) 消滅

ー【ダーク・スクアアローX】(1??0) 消滅

バースト反転と共に、フィールド全体に紫の波動が散らばる。それらはシスイのダーク・スクアアローX達へと纏わり付き、その内部に眠るコアを弾き飛ばした。3体は立ち所に消滅してしまった。

そんな中、シスイはロンの発動したバーストカードの名前と効果に衝撃を受ける。
無理もない、何せそのカードは……………

「何故だ。何故ゾンのカードをオマエが持っている、スーミのロン!!」

そう。このソーディアス・アーサーのカードは紛れもないゾン・アーサーのカード。
エックスの身分を持つアーサー家の家宝とも呼べるカードだったのだ。

「表の世界。そこでオマエとゾンの研究室を覗いた時に見つけた……………やはりこれはゾンのカードをだったんだな」

「研究室だと……………何故そんな所に己のカードを……………まさか奴は息子が見つけてくれる
と想像していたのか……………!?!」

「そんな事はどうでも良い。事実なのは、これがオマエを追い詰める秘策だと言う事だ
!!」

「!!」

表の世界、メイキョウ旧領にてロンが本の葉として挟まっていた……………いや、今思え

ば葉ではなく、隠されていたカード……………

それがこの騎士の霸王ソーディアス・アーサー。

今となっては何故ゾンがそこに置いていたのかは定かではないが、今、確実にそれはロンの力になって……………

「騎士の霸王ソーディアス・アーサーの更なる効果!!…バースト効果発揮後、このスピリットをノーコストで召喚する!!」

「……………」

「永き時を眠った聖剣に選ばれし霸王、今こそ目覚めの時だ!!…現れろ、騎士の霸王ソーディアス・アーサー!!」

ー【騎士の霸王ソーディアス・アーサーへR】 LV3 (4S) BP21000

巨大な紫のシンボルがロンの場に現れる。さらにそこに亀裂が生じ、砕け散ると、その中より巨大な聖剣を構え、誇り高き騎士の霸王の姿があった。

その名はソーディアス・アーサー……………

ロンの血の繋がった父親、ゾン・アーサーの切札で、今はロンを守る強靱たるスピリッ

ト……………

「ソーディアス・アーサー、アルケーガンダムをブロックだ……!!」
「くっ……!!」

登場したソーディアス・アーサーに決闘を挑むかの如く襲いかかるアルケーガンダム。その手に持つ大剣をソーディアス・アーサーへと振るうが、ソーディアス・アーサーも対抗してその聖剣を振るう。

その力は拮抗しているかに見えたが、直ぐにそれは破られる。ソーディアス・アーサーが気高き眼光を放つと、アルケーガンダムを振り払う。

吹き飛ばされたアルケーガンダムはその後地に足をつけ、体勢を整えようとするが、ソーディアス・アーサーはその隙を逃さない。アルケーガンダムとの間合いを一瞬にして詰め、強力な一閃をアルケーガンダムに浴びせる。

流星のアルケーガンダムもこの一撃は耐える事が出来なかったか、堪らず爆発四散してしまった。

「貴様。確かさつき我に秘策は無いと言ってなかったか？」

「フツ……オマエ馬鹿だろ。秘策って言うのは「秘密」の「策」と書いて秘策なんだ。敵に教えるわけないだろ?」

「……………ここまでコケにされたのは何十年振りだろうか……良いだろうスーミのロン。我の本気で貴様に引導を渡してくれる!!」

「だろうな。これで本気なわけがない」

アルケーガンダムの爆発による爆炎も爆煙の中、鋭い視線で睨み合う2人……………

そして、最強のミラーライダーで、ミラーワールドの神、オーデインの復活が刻一刻と迫る中、因縁の対決は遂に終盤を迎えていくのだった……………

37コア 「転醒するナイト」

「我はこれでターンエンド……ソーディアス・アーサー、まさか15年振りにその姿を拝める事になるとは思わなかったよ」

手札：4

場：【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【無】

ミラーワールドの神、オーデインの復活が刻一刻と迫る中、ロンとシスイの因縁の対決は続く。

ゾンのエースカードであったソーディアス・アーサーの登場により意表を突かれ、場のスピリット全てを失う事となったシスイは、致し方なくそのターンをエンドとした。

次は実の父親のカードで勝機を手にしたロンのターン。まだまだ油断しているのか、冷静でクールな表情を浮かべながらそのターンシークエンスを進行させていった。

「ターン08」ロン

「メインステップ、マジック、リターンズモーク。トラッシュユからナイトを蘇生……効果でドロ」

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2)BP4000

紫の煙がロンの場に漂う。それを斬り裂き、中より仮面ライダーナイトが再び姿を現した。

「アタックステップ、ソーディアス・アーサー、駆ける!!」

ロンの指示に従い、ソーディアス・アーサーが再び聖剣を構え、地を駆ける。狙いは当然シスイの残り3つのライフだ。

「性懲りもなく……ライフで受けよう!!」

〈ライフ3??2〉シスイ

ソーディアス・アーサーが豪快に聖剣を振り、シスイのライフを斬り裂く。

これからナイトの攻撃も来るのだろうか、シスイはそれを止めるべく、すぐさま己のバーストカードを反転せて……………

「ライフ減少のバースト、選ばれし探索者アレックス」

「……………2枚目か」

「効果で召喚しコアバースト、さらにアタックステップは終了!!」

1 【選ばれし探索者アレックス】LV2(2)BP8000

バーストが反転すると共に紫色のフードを深くかぶった人型のスピリットが場に現れる。シスイはその力によりコアを増やしつつロンの追撃を防いだ。

「……………ターンエンド」

手札：6

場：【仮面ライダーナイト】LV2

【騎士の霸王ソーディアス・アーサー】LV3

バースト：【無】

結果としてナイトをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとする事となった口
ン。無表情のままターンをシスイへと返した。

「ターン09」シスイ

「メインステップ、魂鬼を召喚！」

「……紫のスピリット？」

ー【魂鬼】LV1(1S)BP1000

シスイがターンの開始に召喚したのはまさかの紫のスピリット。鬼の顔を写した霊
体が出現した。

「我程のカードバトラーになれば色属性の概念など無いに等しいのだ!!…マジック、デッドリイバランス!!」

「!!」

「効果で互いのプレイヤーはスピリットを1体ずつ破壊しなければならぬ!!…我は魂鬼を破壊!」

「……オレはナイトだ」

すぐさま引き抜かれたシスイのマジックカード。お互いが自分のスピリットを指定すると、その途端に爆散してしまう。

「魂鬼の効果、破壊時にソウルコアが置かれている時にドロ…さらに、スピリットが破壊された事により、手札にある2枚目のアルケーガンダムの効果発揮!!…コストを支払い召喚する!!」

「!!」

1 [アルケーガンダム] L V 3 (5) B P 1 5 0 0 0

先の見えない天井から空を切り、凄まじい音を立てながら飛来してきたのは、今回2体目となるアルケーガンダム。冷徹な機械兵らしい冷たく鋭い眼光をロンへと向ける。

「あの程度でアルケーガンダムを倒せたと思つていたか!!……このお気楽で間抜けな弱者め!!……さらにブレイヴ、雷神砲カノン・アームズを召喚!!」

┆【雷神砲カノン・アームズ】LV1(1)BP5000

アルケーガンダムに立て続けてシスイの場に出現したのは、雷神砲と呼ばれる龍の頭部を模した砲手を装備しているゴレム。ブレイヴであるそれが召喚されたという事は、それ即ちスピリットとの合体を示唆して……

「そして、アルケーガンダムにこのカノン・アームズを合体!!……見よ、滑膜せよ!!……これぞ我が最強の僕、アルケーガンダムの真の姿ツアー!!」

┆【アルケーガンダム+雷神砲カノン・アームズ】LV3(5)BP20000

カノン・アームズの雷神砲が、巨大なモビルスピリット、アルケーガンダムの右腕に装備される。鋼鉄の鎧を持つカノン・アームズ自身も分解され、アルケーガンダムの装甲に各所装着されていき、遂に真の姿を露わにした。

「仕上げはこれだ。マジック、マーキュリーゴブレット」

「ッ!!」

「この効果で最もコストの低い相手スピリット1体を破壊………貴様の場合はソーディアス・アーサーのみ、よってそれを破壊する!!………消え去れ、過去の遺物よ!!」

追撃で放たれるシスイのマジック。その影響でソーディアス・アーサーの全身が青い光に包まれていき爆散。これで再びロンのスピリットは全滅してしまふ。

「アタックステップ!!………合体したアルケーガンダムでアタック!!………雷神砲カノン・アームズの合体時効果!!………貴様のデッキを1枚破壊。そのカードと同じ色のカードを貴様はこのバトル中発揮できない!!」

「!!」

右手に装着された雷神砲より雷の塊を放つアルケーガンダム。ロンのデツキが1枚吹き飛ばされる。そしてそのカードは「仮面ライダーナイト「2」」のカード……………

「これにより、貴様は紫の効果を手札より発揮できない!!……………まだ終わらないぞ、フラッシュユ、アルケーガンダムの効果発揮!!…3コストを支払い、自身を回復。追加で貴様の手札、ライフ1つ。デツキを6枚破壊!!」

「ツ……………ぐっ!」

ー「アルケーガンダム+雷神砲カノン・アームズ」(疲労??回復)

〈ライフ3??2〉ロン

ロンに追い討ちをかけるかのように発揮される強力な効果。

左手一つで大剣を豪快に振うアルケーガンダム。その風圧がロンの手札、ライフ、デツキを同時に吹き飛ばした。これでロンのライフは残り2つ。合体したアルケーガンダムの攻撃を一度でもまともに受けて仕舞えば終わりの状況と言う絶体絶命な状況に陥ってしまう。

「どうだ!!……これで貴様は何もできない!!……これで、これでえええええ……」

……………『これで終わりだ』

シスイがそう言いかけた時だった。絶体絶命な状況にいるにもかかわらず、冷静な表情を浮かべながら、ロンが手札のマジックカードを切ったのは……………

「フラッシュマジック、ガードベント」

「何!？」

「これは紫のカードではなく、白のカードだ。効果によりこのターン、オレのライフは1つしか減らされない……………アルケーガンダムのアタックはライフで受ける……………ッ」

〈ライフ2?1〉ロン

発揮されるロンのアドベントカード。余りにも躊躇なく宣言され、シスイは言いかけた言葉を詰まらせてしまう。

そして刹那の一瞬にて、アルケーガンダムが修羅の如くロンに斬りかかって来たが、

そのライフは効果によって1つしか斬れなくて……………

「これで……………なんだ?……………オマエは一体何が言いたかったんだ?……………戯言ならこのオレに勝つてから言え。さつきも言ったよな」

「くっ……………ターンエンド……………ッ!」

手札：1

場：【アルケーガンダム+雷神砲カノン・アームズ】LV3

【選ばれし探索者アレックス】LV2

【海底に眠りし古代都市】LV1

バースト：【無】

カノン・アームズの効果で無力化した紫のカードではない、白のガードベントで攻撃を止められては致し方無しか、ロンに煽られながらも、シスイはそのターンをエンドとした。

(……………コイツ……………本当に昨日と同じ奴なのか!……………まるで別人じゃないか……………だが無理だ。ソーディアス・アーサーを失った時点で我のアルケーガンダムに勝てるスピリット

は消えたはず)

たったの1日で様変わりしたロンに戦慄を感じるスイ。しかし、デツキのパワーなどを考えれば考えるほど自分が負けるヴィジョンが見えない。

ソーディアス・アーサーを失ったロンに勝ち目があるわけなどないのだ……………

「ターン10」ロン

「……………」

ターンシークエンスの過程の中でカードをドローするロン。そのカードを見るなり、不思議と口角が低く上がって……………

「フツ……………コイツを使う時は三王や頂点王と戦う時だと決めていたがな……………いいぜ、オマエが出ることを望んでいるのであれば、今すぐ出させてやる!!」

「……………何を出そうが無駄な事。ソーディアス・アーサーを失った貴様に、もはや勝ち目などありはしない」

「オマエはオレを「水面に映る月面」だと言ったな。それは脆い、とも………確かにその通りだったよ。だが知ってるか? ……水面に映る月面は脆いが、どんなに崩され、壊されても、立ち所に美しい姿に戻る」

「!？」

「誰に何かを言われようが、負けようが、諦める事なく何度でも立ち上がる………ただ唯一月と違う事は、戻った時には同じじゃなくて、さらに強くなっているという事だ」

以前、ロンはシスイに「水面に映る月面、故に脆い」と称された。

確かにそうかもしれない。少なくともあの時のロンは脆かった。亡き父の話をしただけで動揺が隠せなくなり、余裕がなくなってしまったのだから………

しかし、最早それは最強のライバルであるアスラによって吹き飛ばされた………

再び頂点王になるという夢を掲げ改めたロンは、遂に己の最強の切札を手札より引き抜き、それをBパッドへと叩きつけた………

そのカードの名は、当然あのライダースピリットだ。

「召喚、仮面ライダーナイト!!」

「!!」

1【仮面ライダーナイト】LV3(4S)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、紫属性の騎士型ライダースピリット、仮面ライダーナイトがロンの場に出現。

そのカードは彼がシイナに捨て子として拾われた時から所持していた第一のナイトでもなく、己で進化させた第二のナイトでもなくて……………

「召喚時効果。2枚ドロ……………」

「何だそのナイトは……………そんな効果、コストのナイトなど、我は知らぬぞ!!」

シスイがこの仮面ライダーナイトを知らないのも無理はない……………

何せこれはロンが努力や鍛錬の末に手に入れた、ナイトの究極とも呼べる姿なのだから……………

そして、彼が手にしている力はこれだけではない。ロンはさらに手札からカードを引き抜いて……………

「来い、ブレイヴカード……………ダークウイング!!」
「なツ!?……………ミラーモンスターを召喚だど!?」

ー【ダークウイング】LV1(1)BP4000

仮面ライダーナイトがベルトからカードを引き抜き、それを剣のバイザー部に装填
……………

……………アドベント!!

と、音声が流れると、甲高い雄叫びを上げながら黒き翼を持つコウモリ型のミラーモ
ンスター、ダークウイングが姿を見せる。

ロンがカードとしてそれを召喚するのを見るなり、シスイは驚愕の余り開いた口を閉
じる事ができなくなった……………

だが、彼が驚愕するのも無理はない事なのだ。ライダースピリット、使用者をカード
自らが選ぶという奇怪なカード達の中には神や悪魔にも匹敵できる程の何かが宿って
いる……………しかし、ライダースピリットのカードだけでなく、その内に宿る何かも使役
する事ができるカードバトラーなど、一握りしかないライダースピリット使いの中で
も、さらに一握りなのだから……………

「驚くのはまだ早い!!……仮面ライダーナイトとダークウイングを合体し、アタックス
テップ……ナイトで攻撃する!!」

「!!」

ナイトにアタックの指示を送るロン。そしてこの瞬間より、ロンの新しいナイトの効
果の数々が発揮されて……………

「仮面ライダーナイトの効果。まずは合体時、ターンに一度、スピリットのコア2つをリ
ザーブに置き、回復!!」

「!？」

「オレはアルケーガンダムから2つ取り除く。よってアルケーガンダムのLVは3から
2へダウン!!」

1 【アルケーガンダム+雷神砲カノン・アームズ】(5??3) LV3??2

1 【仮面ライダーナイト+ダークウイング】(疲労??回復)

紫のオーラがナイトとアルケーガンダムを包み込む。アルケーガンダムはそれによりコアを取り除かれてしまうが、ナイトは逆に回復状態となり、このターンは二度目のアタックが可能となった。

「だがその程度のコアシユートでは我が最強の僕、アルケーガンダムは倒せない!!」

「ああ、そうだな。だからこそこの効果も発揮させる!!」

「!？」

「……仮面ライダーナイトの更なる効果、【零転醒】!!……手札にあるアドベントカードを破棄する事で、仮面ライダーナイトを新たな姿へと昇華させる!!」

「な、何……ミラーライダーで転醒だど!？」

「ああ、そしてこれがオレの最強スピリット!!……来い、仮面ライダーナイトサバイブ!!」

「!？」

ロンは手札よりアドベントカードである「ソードベント」のカードを破棄。その行いにより、ナイトの効果が適用。

ナイトはベルトからカードを一枚引き抜く。その瞬間に疾風の風が吹き荒れ、ナイト

の武器も黒い剣から青い盾へと変更される。そしてその青い盾のバイザー部にそれを装填……………

……………サバイブ!!

と、音声が届り響くと共に、仮面ライダーナイトは更なる強化形態、仮面ライダーナイトサバイブへと進化して見せた。疾風の風で黒いマントが靡く中、青い盾の中に内蔵された聖剣を引き抜く。

「……………お、黄金の翼のカードも無しでサバイブだ?!……………何がどうなっている!?!……………いったい何をしたと言うのだ!?!」

「特別な事は何もしていない……………オレはただいつも通り、ナイトを、デツキのスピリットを信じていただけだ!!……………転醒時効果。互いはスピリット1体を指定し、残さなければならぬ」

「なっ!?!」

「さあアレックスを残すか……………それともアルケーガンダムを残すか、答えは二つに一つ」
「くっ……………アレックスを破壊し、アルケーガンダムを場に残す」

ナイトサバイブが手に握る聖剣を翳すと、ロンとシスイの場の狭間に、スーパーセル

とも言える程の巨大な黒い竜巻が発生。シスイのアレックスはそれに吸い込まれ、姿を消してしまふ……

そしてそれが収まる頃にはナイトサバイブとアルケーガンダムの一騎討ちの状況が出来上がっていて……

「ナイトがナイトサバイブへと進化した事により、黒き翼ダークウイングも、疾風の翼ダークレイダーへと進化を遂げる!!」

ナイトがサバイブへと進化した事により、ダークウイングが甲高い雄叫びを上げながら一瞬にして鋼鉄の翼を持つダークレイダーへと進化して見せた。

「来い、ダークレイダー!!……今こそナイトサバイブと一つとなりて、研ぎ澄まされた怒涛の疾風へと生まれ変われ!!……ミラージュ!!」

「!?」

「現れる……ナイトサバイブ・レイダー!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】LV3（4S）BP15000

ダーククレイダーが分離。それがナイトサバイブの身体に各所装備されていき、仮面ライダーナイトサバイブはサバイブをも超えた「ミラージユ」と呼ばれる究極の形態へと強化された。

その瞬間に、疾風をも超えた怒涛の突風が追い風になるように吹き荒れ……………

「み、ミラージユ??…馬鹿な……………ミラーモンスターを召喚するだけでなく、合体させただど!?!…知らない、そんなミラーライダーの力など、我は知らんぞ!!」

「だろろな。オマエ如きに見破られるナイトではない!!……………合体したダーククレイダーの効果!!…トラツシユにあるアドベントカードを手札に戻し、スピリットのコア2つをトラツシユに送る!!」

「ツー!!」

「効果は当然アルケーガンダム!!…さらにLVをダウンさせてもらおう!!」

「〔アルケーガンダム+雷神砲カノン・アームズ〕(3??1) LV2??1

ナイトサバイブ・ライダーは手に持つ聖剣を振り、研ぎ澄まされた怒涛の疾風の斬撃

を放つ。それはアルケーガンダムの右肩の装甲の一部を斬り裂き、弱体化させた。

「アタックは当然継続中だ!!……貴様のライフは2!!……サバイブレイダーのシンボルも2つ!!……是が非でもアルケーガンダムでブロックしてもらおうぞ!!」

「くっ……ブロックせよ、我が最強の僕アルケーガンダムツ!!」

戦わなければ生き残れない状況に陥ったシスイはアルケーガンダムにブロックの指しを送った。それを聞き入れるなりサバイブレイダーとの距離を一気に詰め、その首に容赦なく大剣を振るうアルケーガンダムだったが、サバイブレイダーから放たれる疾風の風に吹き飛ばされてしまう。

近接戦は無理と見たアルケーガンダムは、合体により取り付けられた雷神砲をサバイブレイダーへと向け、電撃の塊を放出。しかし、サバイブレイダーは手に持つ聖剣を振り、それを難なく斬り落として見せる。

以前とは真逆の戦況。サバイブレイダーがアルケーガンダムを圧倒していく中、シスイはアルケーガンダムに反撃させるべく、手札のカードを切った……………

「…………フラッシュマジック、ディアマントチャージ!!」

シスイの渾身の一撃だった青き輝きも、難なく弾き返し、無効としてしまうサバイブレイダー。

最早シスイに打つ手はない……………合体し、真の姿となったアルケーガンダムを破壊され、残り2つのライフの破壊を待つばかりとなつて……………

「ぞ、ゾン……………オマエの息子は……………オマエの息子はいつたい何者何だ……………何故ここまで私の予測を飛び越える……………何故だ……………答えるゾン……………何故だ、何故だアアアアアアアアアア!!」

「サバイブレイダー……………アルケーガンダムごと、ライフを斬り裂けえええええ!!」

……………黒翼疾風剣!!

気でも狂つたかのように、ここにいもしない親友、ゾン・アーサーの名を叫ぶシスイ。そんな彼に耳は貸さず、ロンはトドメの技名を叫ぶ。

サバイブレイダーはそんなシスイとアルケーガンダムにトドメを刺すべく、聖剣を構えると、そこに黒き翼が伸び、巻きつき、それを極限まで巨大化……………

そしてロンの叫びと共に振るわれたその剣の一撃は、アルケーガンダムの鋼鉄のボディと共に、シスイのライフを斬り裂いて……………

「ぐっ……………ぐあああああ!?!」

〈ライフ2?!0〉シスイ

凄まじいバトルダメージの発生により、塔の壁際まで吹き飛ばされるシスイ・メイキョウ。その壁に頭を強くぶつけたのか、気を失い、ぐったりと倒れ込んでしまう……………

これにより、勝者はスーミ村のロンだ。昨日とは打って変わり、終始落ち着いた様子を見せながらシスイに完勝して見せた。今回こそ、天才且つ努力も欠かさない彼の真の実力なのだろう。

「昨日までのオレだと思ふな……………オレは今も、これからも進化を続けていく。全てはシイナをも超え、頂点王になるためだ」

ロンはもう迷わない。これからは自分の価値を疑わず、アスラと同じように頂点王を目指す事だろう……………

「さて、後はあのイユとか言う女をどう助けるか……………」

バトルが終了し、ナイトサバイブやダークレイダーが消滅していく中、ロンはそう言葉を落とした。ミラーライダーの力により光の繭とも呼べる代物に閉じ籠ってしまつたイユを助ける方法が全く見つからないのだ。

その方法を知っているであろう肝心のシスイは気絶しているため、八方塞がりだった。

そして追い討ちをかけるように、ロンの耳から不愉快な声が聞こえてきて……………

「やあ。スーミ村のロン……………久し振りだね」

「ツ……………オマエ、ちよび髭シルクハット……………!?!」

ロンが声のする方へと振り向くと、そこには黒いシルクハットと黒いちよび髭が特徴的な男性、シスイと軽い契約を交わしていたウィルだった。ロンはライライ町でライ

ダーハンターズの仲間になれと勧誘された時以来の再会であり……………

「また強くなったみたいだね。感心感心。尚更君をライダーハンターズに入れられなかったのを悔いているよ」

「……………なんでオマエがミラーワールドにいる？」

「ふむ。無視か。まあ良いだろう……………ここで欲しい物は全て手に入った事だしね」
「!!」

ウイルはシスイのBパッドから彼のデッキを取り除きながらそう告げた。どうやら彼が欲していた物は、シスイのデッキにある強力なスピリットカードであったようだ。

「ふふ、アルケーガンダム……………やっぱり良いカードだ。あんな異常者のデッキより、私のデッキにこそ相応しい」

「……………オマエも中々の異常者だと思っけどな」

シスイの最強の僕、アルケーガンダムを見るなり不気味な笑みを浮かべるウイル。

「…………オマエ達の狙いはライダースピリットじゃないのか？…………何故モビルスピリットなんかを奪う？」

「…………強ければ良いさ。これで私のデッキはまた一つ至高の高みへと向上した…………私が強くなれば、あの方々もさぞかしお喜びになる事だろう」

「…………あの方々…………？」

誰かを敬うような二人称を使用するウィル。これが意味するのは、ウィルよりも上がいると言う事であり……………

「何はともあれ、この世界での私の仕事は終わりだ…………本当はオーデインの力も手に入れて置きたかったところだけど、残念な事に私では扱いきれないみたいだ…………それじゃあねロン。前も言ったけど、邪魔立てだけはしないでくれよ」

「それはこっちのセリフだと、オレも前に言った」

「ふふ、相変わらず強情ですね」

ウィルはその言葉を最後に、Bパッドからワームホールを発生させ、その中へと姿を消していった。

彼の行いや言動の意味がまるでわからなかったロンだったが、少なくとも彼の中にとってもなく深い闇があるのは理解して………

だがそんな時だ。11枚のミラーライダースのカードに包まれていたイユの体が眩い光に包まれて行ったのは………

「ツーー!!」

一歩遅かった。

ロンは光に包まれながらそう考える。この謎めいた現象は間違いなく最強のミラーライダース且つミラーワールドの神、オーデインの復活の鼓動に違いないと本能的に悟ったからだ。

「ぐっ………ッ」

そして塔の最上階が眩い光に包まれる中、バトルに敗北し、一時的に気を失ってしまっていたシスイが目を覚ます。

彼の感情は、ロンにバトルで敗北したことの悔しさよりも先に、神であるオーデイン

の復活の嬉しさの方が勝っていて……………

「お、おお!!……………遂に、遂に来たか、仮面ライダーオーティン!!……………さあ、我に従い先ずはあのゴミどもを滅ぼせ!!」

眩い光の流れに逆らうように光源へと突き進むシスイ。差し伸ばされたその手は神への切符を握ろうとしている。

15年間待ち望んでいた神たる力を手にし、今こそミラーワールドだけでなく、表の世界も支配しようとしているのだ……………

しかし……………

「……………グハツ?!」

光源に辿り着いたかと思ったその瞬間。シスイは何者かの足に腹部を蹴られ、吹き飛ばされてしまう。

そして、彼を蹴った人物の正体は、1人しかいなくて……………

「……ありがとう。貴様の役目は終わったよ……シスイ・メイキョウ」

眩い光が完全に消え去ると、そこにはイユがいた。11、いや、12枚となつたミラーライダーズを束ねたデツキも手に握っている……

しかし、何かが違つた……

雰囲気や言葉遣いもそうだが、何よりも声……イユの声とは別に、他の誰かの声になるように聞こえてくる……

「……その声は……ひよつとしてオーデインの意思なのか？」

「ああ、如何にも……我こそ、ミラーワールドの神、最強のミラーライダー、オーデインだ」

「!!」

その声の主はオーデイン。彼はイユの体に乗っ取り、こうしてシスイとロンの前に立っているのだ。

確かにオーデインのカードには他のライダースピリットよりも強い意思があつた。ミラーワールドにいるだけでイユがそれを感じ取る事ができた程に……

だが、その意思が蘇る瞬間に、生贄として捧げた人物の魂に宿るのは研究者であった
シスイでも考え難い現象だった。

「……感謝するよ。ミラーライダーズを集めてくれた事、そしてこの肉体を贈呈してく
れた事をな……貴様の娘を依代に選んで正解だった」

「ふざけるな……所詮貴様は、ただのカード……我に従え!!」

「頭が高いぞ人間。このオーデインを復活させただけで従えられるとも思っていたの
か?……笑止千万!!」

ミラーワールドに眠る意思だったオーデインは、最初からイユの肉体を得る事が目的
だった。ただのライダースピリットから超越した生物になるため、シスイ同様、ミラー
ワールド以外の世界を支配するために、それが必要不可欠だったからだ。

だが……

「だが足りない!!……まだ、ナイトと龍騎の本体となるカードがこのオーデインの手に
握られていない!!」

「!!」

「ナイトの宿主、先ずは貴様のナイトを奪う……このオーデインと戦え!!」

凄まじい圧をロンにかけるオーデイン。シスイはナイトサバイブや龍騎サバイブのカードだけで十分と考えていたらしいが、どうやら彼の力を発揮するにはまだ不十分なようである……

(……………コイツには多分勝てない……………)

ロンは悟る。強者であるからこそ、今の自分ではこのオーデインに勝つ事が不可能である事を瞬時に理解する……………

しかし、それを理解していても、不思議とロンの表情からは余裕が感じ取れる程の笑みが溢れていた……………

その理由は……………

聞こえて来たからだ……………

ヤツの……………最大のライバルの走る足音が……………それはとても騒々しくも鬱陶しく、それだけで逞しい……………

「おいロオオンツー!!!……勝って来てやったぞコノヤロー!!!……そつちはどうだアアアー!!」

「フツ……たつた今一人で勝てない敵が出て来た所だ……手を貸せ、アスラツ!!」

アスラが金属製の扉を蹴破り、遂に最上階にいるロンに追いついてみせた。アスラはロンの横に行くと、その勝てない敵とやらがイユである事を視認して……

「ツ……イユ、なのか!？」

「ああ。多分、オーデインとか言う肩書きが神のヤツに身体を乗っ取られている」

「……マジかよ……おいイユ!!……オレだ、アスラだ!!……こんな騒々しいヤツの顔を忘れたとは言わせねえぞ!!」

「……わかつているとも、貴様は龍騎の宿主だな。ハハ、これは好都合、一気に2人、かかって来ると言い!!」

悲しい事に、イユの意識は最早存在しないのか、アスラの言葉は一切届きはしない。

オーデインはイユのBP Bパッドを取り出し、己のデッキをそこにセットし、バトルの準備を行った。全ては残り2枚のミラーライダーズを手にするためだ。

「つしやあ……行くぜロン」

「ああ……これがラストバトルだ」

当然このバトルの誘いを断るわけがない……アスラとロンもBパッドを展開させ、デツキをセツトするが……

「無理だ!!……無謀にも程がある!!……古文書や逸話によれば、ヤツは全てのミラーライダーズを従える事ができる!!……その断片の力しか持たぬオマエ達で敵う敵じゃない!!」

シスイがそう言った。

ミラーライダーズのトップに君臨するオーデインに、そんじよそこらのライダースピリットを扱う子供如きが、勝てるわけない……そう思った。

しかし……

「うるせえよコノヤロー……第一オマエのせいでこんな事になってんじゃねえか……オ

「マエのせいで、オマエのせいでイユがあんなになったんだぞ!!」
「!!」

オーデインに乗っ取られたイユを指差しながら、アスラが吠える。

「アイツは言ってた……マスターにしては地位の低い、メイキョウ家を成り上がらせるために、お父様は必死だったって!!……本当は支配者になりたいんじゃないやなくて、ただこの世界に認められたいだけだったって!!……もがいて、もがいて、もがき抜いた末に、ミラーワールドのオーデインに頼る事になってしまったって!!」

「黙れ……黙れコモン……オマエが我ら家族の何がわかる……」

「わかんねえけど、黙らねえ!!……いつか、昔の優しいお父様に戻ってくれるって、アイツは心の底から信じてたんだぞツ!!」

「ツ……!!」

アスラの言葉に、シスイは何も言い返せなかった……

その通りだった。妻を亡くし、娘のためにミラーワールドを研究した。そこにある力が、神の力がどうしても欲しかった。娘の将来のため、どうしてもメイキョウ家を上位

のマスターへとしたかった。

いつからだろう。いつたいつから娘の将来の事も考えず、己の支配欲を満たしたいだけの愚かな人間になってしまったのだ……

イユがそんな事を考えていた事はわかっていた。わかっていたのだ。親友だけでなく、そんな父想いな優しい娘の想いさえも自分は無下にして来た……

「何年も何年も努力して足掻く事ができるくらい、スゲエ努力できるのなら、このバトルに、オレ達に賭けてみやがれ!!……そんなくらいの度胸見せろよ!!……んでもって、後でちゃんとイユと、ロンの父ちゃんに謝れッー!」

「……………ッ」

自分より30以上歳下のアスラに半ば強引に説得されるシスイ。黙らざるを得なかった。こうなってしまうのは自分の責任だが、どうしても謝りたくなってしまった

……………

だから賭けてみる事にしたのだ。生まれながらにソウルコアが使えない子供と、親友の息子に……………

「フフ……余興は終わりか？……待ち侘びたぞ、小僧共」

「オレ達は絶対にオマエに勝つ」

「イユも、オレ達の世界も渡さねー!!」

そして今、コールと共に幕を開ける……………

……………ゲートオープン、界放!!

ミラーライダーズの頂点にして、ミラーワールドの神、オーデインと、ミラーライダーズの一部を持つ少年2人による、世界を賭けたバトルスピリッツが始動する。

先行はオーデインだ。

「ターン01」オーデイン

「メインステップ……ミラーワールドを配置してエンドとする」

ー「ミラーワールド」LV1

オーデインが配置したのは、ミラーワールド。ミラーライダーズのホームとも呼べるカードだ。

そんなミラーライダーズの神たるオーデインが、それを所有していないわけがなかった。

「アスラ、オマエはソウルコアが使えない。なら最初はオレから行くぞ」
「おう」

アスラは、ソウルコアが使えない。レイドバトルにおいてソウルコアを動かす事ができない。そのため、最初は主にロンがターンを進行させていく。

「ターン02」アスラ&ロン

「メインステップ、仮面ライダーナイトを召喚!!…効果で1枚ドロ」

1【仮面ライダーナイト】LV2(2S) BP4000

「フツ……何千年ぶりだ仮面ライダーナイトよ……このオーデインが眠っている間にこんなチンケな小僧に宿っているとは思わなかったぞ」

アスラとロンの場に現れたのは、騎士型のライダースピリット、ナイト。その効果でロンは手札の枚数を維持する。

「アタックステップ……ナイトで攻撃ー」

ナイトが剣を握り、オーデインのライフ目掛けて走り出した。前のターン、ネクサスの配置のみにコアを費やしたオーデインはライフで受ける他なくて……………

「ライフで受ける……ッ」

〈ライフ5?!4〉オーデイン

ナイトの剣がオーデインのライフバリアを斬り裂いた。

「つしやあ!!……先制点はもらったぜ!!」

「うるさいアスラ。オマエは何もやってないだろ……オレはこれでターンエンドだ」

アスラ手札：3

ロン手札：3

場：【仮面ライダーナイト】LV2

バースト：【無】

そのターンをエンドとするロン。手札を維持しつつ、ライフにダメージを与えた良いターンであったと言えるだろう……

しかし……

「ライダースピリットとは儂く、愚かな者よ」

ー!!

オーデインがアスラとロンに語り掛けるように口を開いた。その表情はどこか寂し

そうにも見えて……………

「何故自ら主人を選ぶ。何故そこまでして人間に仕えようとする。人間など、ただの欲望と肉の塊であると言うのに…………ライダースピリットこそ、至高の存在であるのだ」

ライダースピリットとは、時代ごとに人間の中から主人を選ぶ習性がある。しかし、このオーデインは自分達こそ至高の存在、何故人間如きに仕えなければならないのかと思ひ、それを好まなかった…………

「このオーデインが肉体を手にした今!!…………人ではなく、ライダースピリットが生きる世界を創る!!…………オマエ達過去の遺産は今ここで滅びるべきだ」

「言ってる意味全然わからんわコノヤロー!!…………つーか過去の遺産はオマエだろ!!」

オーデインの望む世界は、人ではなく、ライダースピリットが頂点に君臨する世界。それを完遂させるため、己のターンを進行させていく。

「ターン03」オーデイン

「メインステップ……ミラーライダーズ、シザースとインペラーを召喚!!」

―【仮面ライダーシザース】LV1(1)BP3000

―【仮面ライダーインペラー】LV1(1)BP4000

―!!

様々な鏡像が重なり合い、現れたのは12種のミラーライダーズの中の2種、深い黄色をしたシザースと角と茶色の毛皮を生やしたインペラー。

ライダースピリットは本来であれば1人一種しか使用できない。

だが、今回の敵はミラーライダーと言う集団を束ねる神。その程度の常識は通用しなくて………

「なんとなく予想してたけど、やっぱライダースピリット複数待ちかよ……トウエンテイみたいだな」

「その程度で驚いていては後先持たんぞ。インペラーの召喚時、他のミラーライダーが

いる時、コアを2つ追加。さらにそのコアを移動させ、ミラーワールドのLVを2にアツプ!!」

ー【ミラーワールド】(0??2) LV1??2

インペラーの効果でコアが追加され、ミラーワールドのLVが上昇。その効果は当然ながらアスラとロンも知っていて……………

「バーストを伏せ、アタックステップ。その開始時に、このオーデインのライフが貴様らのライフを下回っているため、インペラーは疲労する」

ー【仮面ライダーインペラー】(回復??疲労)

折角のアタックステップだと言うのに、その場で胡座をかいて座り込んでしまうインペラー。戦闘に参加するのが面倒くさいようだ。

だが、まだ場には同じくミラーライダーのシザースが残っていて……………

「アタックステップは続行。シザースでアタック!!……ミラーワールドの効果でカードをオープン、それがアドベントカードなら発揮できる……オープンカードはアドベントドロ……カードを2枚ドロし、その後3枚オープン、それらを破棄する」

オーデインがシザースに攻撃の指示を送るなり、ミラーワールドの効果が発揮。オーデインはデッキから2枚のカードを増やしつつ、トラッシュのカードを肥した。

「アタックは継続中!!」

ー!!

〈ライフ5??4〉アスラ&ロン

唯一のスピリットであるナイトは疲労状態、この攻撃はライフで受けざるを得ない。シザースの拳が2人のライフバリアを一つ砕く。

「ターンを終える」

手札：4

場：【仮面ライダーインペラー】LV1

【仮面ライダーシザース】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【有】

そのターンを終えるオーデイン。

次はアスラとロンのターン……………

ここより逆襲が幕を開ける……………

「ターン04」アスラ&ロン

「行くぜロン……………」

「ああアスラ……………メインステップ……………！」

オレ達はミラーワールドを連続配置!!

1 「ミラーワールド」 LV1

1 「ミラーワールド」 LV2 (2)

2人は同時にBパッドにミラーワールドのカードを叩きつけ、配置して見せる。その内、アスラのミラーワールドは効果の発揮に備えて、既にLVは2だ。

「さらにオレはバーストをセット!!」

「アタックステップ、ナイトで攻撃する!!」

アスラがバーストカードをセットし、その直後にロンがナイトにアタックの指示を送る。

「ミラーワールドの効果!!…テツキの一番上がアドベントカードの時、ノーコストで発揮する!!…よし、オレがめくったのはトリックベント!!…よってコア2個以下のスピリット、シザースを破壊!!」

「!!」

ナイトがベルトからカードを引き抜き、それを剣のバイザー部に装填……………
……………トリックベント!!

と、音声が鳴り響くと、仮面ライダーナイトが2人に分身。華麗なるコンビネーションで見事にシザースを斬り裂き、爆散させた。

「ナイトのアタックは継続中!!」

「甘いな…………フラッシュマジック、ストライクベント!!」
「!!」

「効果でナイトを破壊し、1枚ドロ」

インペラーがベルトよりカードを引き抜き、それを膝にあるバイザーに装填……………
……………スピアベント!!

と、音声が鳴り響くと、足の先にドリルのような角が発現。インペラーをそれを突き立てながら跳び上がり、ナイトの腹部を串刺しにする。流星に耐えられなかったか、ナイトはその場で爆散してしまう。

「フツ…………他愛もない。ナイト如きが複数のミラーライダーに勝てるわけがないだろ

う

「いや、タアイもないのはオマエの方だぜ、肩書き神ヤロウ!!」

「この破壊を待ってた……行けアスラ!!」

「おう!!……破壊後のバースト、第二の龍騎!!」

「!!」

「効果でインペラーを破壊しつつ、召喚!!」

1【仮面ライダー龍騎「2」】LV1(1)BP5000

ナイトの破壊に反応し、アスラのバーストカードが反転。様々な鏡像が重なり合い、第二の龍騎が柳葉型の剣を手に、姿を見せる。

そしてその剣から放たれた、炎の飛ぶ斬撃が、インペラーを焼き切った。

「絶妙なタイミング……阿吽の呼吸……貴様らは兄弟か何かか?」

「チゲエー!!……でもオレ達は15年、一緒にあり続けた……兄弟同然の存在だ!!」

「このバカが何を考えているのか、オレには一目瞭然なんだよ」

アスラとロンの息ピッタリな戦い方に兄弟なのかと疑問を浮かべるオーデイン。それ程までに信じ難いコンビネーションだった。とてもではないが即席のプレイングとは思えない。

「オレは落ちぶれたエックス」

「オレは生まれながらにソウルコアが使えないゴミヤロウ!!……でもってついでに、オマエとのデツキの格差はヤベエー!!」

でも………

それでもオレ達は………

オマエに勝つ、男だ!!

アスラとロンの咆哮が塔の最上階全域に響き渡り、オーデインの耳にも入って来る。オーデインは非常に喧しいと思いつつ、口を開く………

「成る程、騒々しい上に身の程知らず、それでいて厄介な連中だ……今潰しておくに越した事はないな……!!」

オーデインの2人に対する殺意が強まる中、イユと世界を賭けたバトルスピリッツはさらに激化していくのだった………

38コア「激突のミラーライダーズ、神をも焼き殺す黒い龍」

「行きなさい、ウオーグレイモン!!……ガイアフォー스터!!」

三王塔の2階でエールの叫びがこだまする。

ウオーグレイモンが手の平から高熱の火球を繰り出し、並みいるミラーモンスター達を次々と焼き尽くして行った。

しかし、焼き尽くされた直後に、そのモンスター達は何事もなかったかのように元の姿に戻っていく。

「くっ、きりが無い……やっぱりアスラに残ってもらったほうがよかったかも……」

このミラーモンスターとリアルなバトルスピリッツを繰り広げてからおおよそ数十分。ここまでなんとか一人で持ち堪えていたが、何度も再生と輪廻を繰り返すモンスター達に、エールは疲弊していた。途中でアスラがここまで登って来た時に、協力してもらお

うとも考えたが、上での戦いが最優先なため、彼女はアスラを先に行かせたのだ。

「いや……これで良かった……上のイユを助けるのが最優先。アスラ達ならきつと勝つわ……それまで、持ち堪える!!」

アスラやロン、イユ達のためにも、こんな所で根を上げるわけにはいかない。
そう想いを馳せながら、エールは再びBパッドに手を置くが……

「きやつ?!……コイツ、離しなさいよ!!」

その直後に山羊を人型にしたようなモンスターがエールの背後に回り込み、腕を押しえ込んだ。これでは新たにスピリットを召喚する事ができない上に、今召喚されているウオーグレイモンも他のミラーモンスターとの戦闘でエールを助けに行けない……

それを気に、蟹、虎を人型にしたようなモンスター2体がエールに近づいて来る。おそらくはエールを殺すか、捕らえるために違いない。

「くっ……!!」

エールは諦めていないような強気な眼差しをモンスター達に向けるが、それでモンスター達の足が止まるわけがなく、絶体絶命的なこの状況。数十分と言う長きに渡った戦いも、ミラーモンスター達の勝利で決着がつくかと思われた……………

その直後……………

「ライダーキック」

「え」

刹那。

とある技名が聞こえて来た途端に、赤い何かが凄まじい速度でミラーモンスター達を一匹、また一匹と、次々に爆散させて行った。

まるで意味がわからないこの状況だったが、エールはその技名を告げた声色の正体は知っていて……………

「うそ!?!……………なんでアンタがここに……………!?!」

は起動中のBパッドがぶら下がっており、変身のカードで変身しているのが窺える。

ミラーワールドには人が1人もいない。故にテンドウがこの世界に存在するわけがないのだが、何故か彼はエールをここまで助けに来ており……

「調査に向かわせたただけなのにオマエらの連絡が余りにもないもんでな。エレンに頼まれてオレが代わりに調査に向かつて来たわけよ。そんであの旧領で色々漁ってたらミラーワールドとか言う資料を見つけてな。もしかしたらと思ってここまで来てみました」

「はあ!?……だからってそんな……ええ?……ここってそんな簡単に来れる場所なわけ!」

「まあ……オレの知り合いにはその手に精通したクソジジイがいるのよ。一歩間違えたら世界を滅ぼしそうだけど」

「なんでアンタの知り合いそんなやばい奴しかいないのよ!」

テンドウの言う知り合いとは、ネコガイヌ博士の事だ。テンドウはミラーワールドの資料をネコガイヌ博士に見せ、自分をミラーワールドへ向かわせるよう指示したのだ。

「今はそんな呑気な事言っていないで、さっさとあいつらをぶっ殺した方が良さそうぞ。」

小僧共は上なんだろ？」

「!?」

テンドウがそう言うのと、耳を覆いたくなる程の金切音と共に、ミラーモンスター達全員が復活を果たす。

テンドウに負けじと、エールは立ち上がり、再び己のBパッドを手取る。そして、テンドウとエールはミラーモンスター達と戦っていくのだった……

「行け、第二の龍騎!!」

一方ここは三王塔最上階。シスイ・メイキヨウが見守る中、イユの体を手に入れたライダースピリット、オーデインとアスラ、ロンのバトルスピリッツが続く。

第二の龍騎が柳葉型の剣を手に入れたオーデインのライフへと駆ける。その際にミラーワールドの効果でアスラは手札を1枚増やす。

「いいだろう。その攻撃、このオーデインのライフで受けてやる」

〈ライフ4??3〉オーデイン

龍騎の剣撃がオーデインのライフバリアを1つ斬り裂く。

「つしやあ!!……残り3つ!!」

「頭が高いぞ人間。余り調子に乗らない事だ……ライフ減少のバースト、仮面ライダー王蛇!!」

ー!!

オーデインが伏せていたバーストカードがここで反転。それはアスラとロンも知っているあのカードであり……

「効果により自身を召喚!!」

1 【仮面ライダー王蛇】 LV1 (1) BP5000

様々な鏡像が重なり合い、紫の鎧を持つミラーライダー、王蛇がアスラとロンの前に姿を見せる。

「……これって、あのヘビヤロウのライダースピリット………そっか、ミラーライダーが全部揃ったって事はコイツも手に入れたって事になるのか……」

「そこにいるシスイ・メイキヨウとライダーハンターズのちよび髭シルクハットには繋がりがあつた。多分それ関係だろ」

「マジ!?……てかロン、なんでオマエヘビヤロウの事まで知つてんの?」

「オマエには関係ない」

「なんだとコノヤロー!!」

ロンもオロチの事を知っている点に反応を示すアスラ。ロンは一度ライライ町でオロチとバトルを行なっているため、王蛇の事も当然熟知していた。

「ああ、我はミラーライダーを手にするためにライダーハンターズのウィルと交渉をし、

王蛇を手に入れた」

王蛇の存在に、シスイが説明を挟む。因みに、オロチ含め、トウエンテイやイバラもこの交渉の事は何も知らない。全てウイルの独断で行った事だ。

「ほう。王蛇を知っているか。ならこの効果も知ってるな、召喚時、疲労状態のスピリットを破壊し、そのスピリットのLVの数だけコアをボイドに送る……対象は当然第二の龍騎!!」

「ぐっ……!!」

ソードベントカードを杖型の武器のバイザー部に装填する王蛇。その影響でドリルのような剣をその手に取り、第二の龍騎へと接近。腹部を串刺しにし、破壊。さらに内部に眠っていたコアも一つ砕いた。

「相変わらずばらばらにつえー……」

「フツ……どうしたアスラ?…その程度で諦めるのか?」

「へっ……何言ってるやがるこのイケメン天才ヤロー……ちようど面白くなって来たって

思った所だ!!……このターンはエンドにしてやる!!」

アスラ手札：3

ロン手札：3

場：【ミラーワールド】LV1

【ミラーワールド】LV2

バースト：【無】

お互いを煽り合い、鼓舞し合い、そのターンをエンドとするアスラとロン。再び神たるオーデインのターンが幕を開ける。

「ターン05」オーデイン

「メインステップ、ミラーワールドのLVを下げ、この場に新たなミラーライダー……ライア、ファム、ゾルダを召喚つかまつ仕る」

「!!」

ー【仮面ライダーライア】LV1

┆【仮面ライダーフナム】LV1

┆【仮面ライダーゾルダ】LV1

王蛇に並ぶのは新たな3体のミラーライダー。

1体目は赤のライダーライア。2体目は純白のボディを持つフナム。3体目は緑色の重圧な装甲を誇るゾルダ。

これでアスラ、ロン目の前に龍騎やナイトと同等の存在が4体も並んだ事になる。

「ライアの召喚時効果。デッキから3枚オープンし、その中にあるアドベントカードを全て回収する……この中のアドベントカードは2枚。よって2枚を回収し、残りは破棄。さらにフナムの召喚ブロック時効果、ボイドからコア1つをこのスピリットに追加。LV2へ上昇」

┆【仮面ライダーフナム】(1??2) LV1??2

「さらにゾルダの効果。自分のミラーライダーは敵のスピリット、ネクサスの効果を受けない」

次々と発揮されるミラーライダー達の効果。アスラ達は少しずつだが確実にカードのパワーの差を感じ始めて来ていた。

「バーストを伏せ、アタックステップ。ゾルダでアタック」

オーデインの指示でゾルダが小さめのシャッドガンの銃口をアスラ達に向ける。当然ながら、彼らの残り4つのライフを撃ち抜く気であるのだろう……………

「フルアタックは流石にマズイ。ここは止めるアスラ」

「なんでオマエがオレに命令すんだよ!!……………フラッシュマジック、ガードベントを使用!!」

「!!」

「これによりこのターンの間、オレ達のライフは1つしか減らされない……………そのアタックはライフで受けてやる!!……………ッ」

〈ライフ4??3〉

ゾルダの銃弾がアスラとロンのライフに命中。1つ撃ち碎かれるが、アスラが発揮させたマジックカード、ガードベントにより、このターンはどう足掻いてもオーデインは彼らのライフをこれ以上破壊できなくて……

「……………ターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダーライア】 LV1

【仮面ライダーファム】 LV2

【仮面ライダーゾルダ】 LV1

【仮面ライダー王蛇】 LV1

【ミラーワールド】 LV1

バースト：【有】

ガードベントの効力を消すため、そのターンをエンドとするオーデイン。今一度アスラとロンのターンが幕を開ける。

「ターン06」アストラ&ロン

「ドローステップ!!」

ターンシークエンスの過程の中、2人はほぼ同時に己のデッキからカードを1枚引き抜く。しかし、その当たりは芳しくなくて……

(くっ……転醒ナイトをドローできない。初期手札が少ないレイドバトルが仇になったか)

(……クツソ……金髪ヤロウの時みたいに、もう一度あの黒い龍騎の力があつたら……)

2人は直後に前のバトルでの光景を頭に思い浮かべる。強力な効果を持つ転醒ナイトと、直ぐにカードごと消滅してしまった黒い龍騎……今の彼らの中で、神たるオーデインを出し抜き、尚且つ倒すためには、それら以外の方法が思い浮かばなかった……

「フツ……アスラ、オマエのその顔、何か良い策でもあるのか？」
 「へっ……ロン、オマエだつて……でもお互いにそれは引けてないみたいだな。つか
 そもそもオレの切札は今はデッキにないんだけど」

絶体絶命な状況の中、アスラとロンの表情はまるでバトルを心の底で楽しんでいるかのように、どこか余裕があつた。

お互いがお互いを信用している何よりの証拠だ。その後、2人は同時に手札のカードを引き抜き、同時にBパッドにカードを叩きつけた……

「来い、オレの相棒……第一の龍騎!!」

「現れる、第二のナイト!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(2)BP4000
 ー【仮面ライダーナイト「2」】LV2(2S)BP6000

様々な鏡像が重なり合い、龍騎士たる赤き仮面ライダー龍騎と、紫の闇騎士、仮面ライダーナイトがアスラとロンの場に出現した。この時、第二のナイトの召喚時効果によ

り、スピリットのコアを除去しつつドローを行えるが、オーデインの場に存在するミラーライダー、ゾルダの効果により、それは無効。発揮されなかった。

「次はオレが行くぞアスラ!!」

「おう!!」

「第二のナイトでアタック!!……そしてこの瞬間、ミラーワールドのLV2効果!!……デッキ上のアドベントカードを発揮させる!!」

ロンの指示で剣を構えるナイト。その瞬間にミラーワールドの効果が発揮。オープンされたカードはアドベントカードの一種である「ソードベント」……

よって、その発揮が可能だ……

「そのゾルダとか言うミラーライダーはスピリットとネクサスの効果を無効にする。だが、マジック、いや、アドベントカードまでは無効にはできない!!」

「!!」

「ソードベントの効果!!……アスラの龍騎のBPを5000アップさせ、ゾルダのコア2つをリザーブへ送る!!」

1【仮面ライダー龍騎】BP4000??9000

ナイトがベルトのカード束からカードを1枚引き抜き、それを剣の取手にあるバイザー部に装填……………

……………ソードベント!!

と言う音声と共に、ナイトは巨大な黒槍を装備。それを全力で振り、飛ぶ黒い斬撃を発生させ、重圧な装甲を誇る仮面ライダーゾルダを引き裂いた見せた……………

「そしてこの瞬間より、オマエのミラーライダー全て付与されていた効果無効能力は消える。よって、第二のナイトのアタック時効果が適用!!」

「!?!」

「コア2個以下のスピリット、王蛇を破壊する!!」

続け様に二撃目の飛ぶ斬撃を放つ第二のナイト。今度は王蛇を斬り裂き、爆散させた。BPの弱い龍騎のBPを高めつつ、最も厄介な敵のスピリット2体を除去した口。見事なプレイングだと言える……………

しかし、それでもまだ神には届かなくて……………

「…………スピリットの破壊によりバースト発動、トリックベント!!」
「!!」

「効果により破壊された王蛇をこの場に蘇生させる!!」

1 【仮面ライダー王蛇】 L V 1 (1) B P 5 0 0 0

オーデインのバーストカードが反転。再び様々な鏡像が重なり合い、仮面ライダー王蛇が復活を遂げる。

「その後コストを支払い、フラッシュ効果を適用。コア2個以下の龍騎を破壊!!」
「ぐっ…………!!」

王蛇の再誕と共に龍騎が紫色の靄に包まれていき爆散。2人は攻め手を一つ失ってしまふ……………

そして、オーデインはこのタイミングであるカードを1枚、手札より切る。

それはアスラとロンもよく知っているあのカードであり……………

「フラッシュ【煌臨】を發揮する。対象は仮面ライダー王蛇」

ー!!

「現れる、仮面ライダーナイトサバイブ!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV1（1）BP8000

オーデインがソウルコアを支払うと、王蛇の上からさらに様々な鏡像が重なり合い、全く別のミラーライダーであるナイト、そのサバイブ体へと変化を遂げて見せた。

ロンは己のエースカードと面と向き合った事になり……………

「…………ナイトサバイブ…………ツ!!」

「ナイトサバイブの煌臨時効果。貴様らのスピリット1体からコアを2つトラッシュへと送る。消え去れ、第二のナイト!!」

「!!」

自分のエースが敵として登場した事により、複雑な心境に陥るロン。しかしそれも束の間、ナイトサバイブの疾風の斬撃が第二のナイトに飛びかかる。第二のナイトは己の剣で弾こうと試みるも、それごと体を切断され、爆散してしまう。

アスラとロンは返り討ちに遭い、再び場のスピリットを0にされた。

「おいどうすんだよロン!!……やつばナイトサバイブめちやくちやつえー!!」

「その割には顔が楽しそうだなアスラ……フツ、まあオレも人のこと言えないが……この程度は想定内の範囲だ。サバイブごとぶっ倒すぞ、アスラ」

「おう!!……オレ達はこれでターンエンド!!」

アスラ手札：2

ロン手札：3

場：【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

予想していたとは言え、流石にエースの登場は一瞬彼らの動揺を誘ったが、すぐさま

それはエースと対決できる楽しみに変わる。

2人はターンをエンドとし、敵であるオーデインのターンとなる。

「ターン07」オーデイン

「メインステップ……仮面ライダー龍騎サバイブを召喚仕る」

「!!」

「〔仮面ライダー龍騎サバイブ〕LV2(2)BP11000

様々な鏡像が重なり合い、赤きミラーライダー、龍騎の最強形態、龍騎サバイブがオーデインのフィールドに現れる。ライア、ファム、そして同等の存在であるナイトサバイブと並び立つ姿は圧巻の一言。

「……龍騎サバイブ……正面からでもやっばカッケエ……!!」

そんな事を言っている場合ではない事は理解しているアスラだったが、己のエース

カードの別アングルからの眺めは最高を極めており、感動を覚えてしまう。

「この神を前にして、なんと愚かな人間共だ。ナイトサバイブのLVを2へ上げ、アタックステップ。行くのだナイトサバイブ」

1【仮面ライダーナイトサバイブ】(1??3S) LV1??2

ナイトサバイブは剣を手に、アスラとロンのライフへと駆ける。

「龍騎サバイブの効果……使用していた貴様ならわかるだろう。ライダースピリットのバトル終了時、シンボル分だけライフを破壊する……このターンで終わりだ。涅槃へ沈むがいい」

「ネハンってなんだコノヤロー!!」

「そう簡単にはくたばらん!!……フラッシュユマジック、ガードベント!!」

今度はロンがガードベントを放つ。これにより、このターンも2人のライフは1つしか減らされない。例えそのライフを討とうとしているのが、ライフを貫く効果を持つ龍

騎サバイブであつても、決して破壊される事はない……………

「くっ……ナイトサバイブの効果。デッキよりカードを3枚トラッシュへ送り、回復」

―【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

「ナイトサバイブのアタックはライフで受ける……ッ」

〈ライフ3??2〉アスラ&ロン

ナイトサバイブは目にもとらえられない速さで剣を振り、2人のライフを1つ破壊するも、ガードベントでこれ以上のライフは破壊できず、そのままオーデインの場へと帰還した。

「……………しぶとい。だが、カードのパワー差は歴然としている。このオーデインの勝利は決して揺るがない……ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダーライア】LV1

【仮面ライダーファム】LV2

【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2

【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

アスラとロン、2人の執念としぶとさを感じつつも、勝利は揺るがないと確信しながらそのターンをエンドとするオーデイン。

劣勢を強いられつつも、2人のターンが始まろうとするが……

（クツツ~~~~~！……黒い龍騎のカードがあればどうにかできるのに……さつきどうやってアレを出したっけ??）

アスラは黒い龍騎の事を考える。やはり、圧倒的なカードパワー差を埋めるためには進化したシナンジュをも葬り去った黒い龍騎において他にいなかった……

(あん時は確か、めっちゃゴボゴボにされて、そんで死にかけて、立ち上がった……あつ、そうか、死にかければいいのか!!)

あの時の事を順序よく思い出しながら黒い龍騎をデツキに呼び覚まそうと考えるアスラ。その過程でもう一度死にかければいいと思いつくが、それは直ぐに選択肢から外れて……

(ツて!!……そんな事できるかアアア!!……それは単なる無謀で無策ってヤツだ……ダアアア!!……チツクシヨオオオ!!……何も思いつかねええ!!……だつてオレバカだからアアア!!)

「さつきから何を喰ってるんだアスラ。バカのくせに」
「バカだから喰ってんだよコンチクシヨオオオ!!」

何も思いつかないアスラ。それを白々しい目で眺めるロン。アスラは今存在しない、又は扱えない力に頼つてもしようがないと考え改め、己のデツキへと目を向けるが……

その時だった。

……ゼゼゼ……

……さっきの力が欲しいか、アリンコ。

「ツーン!!」

声が出た。まるで体の中から響いてくるような感覚がアスラを襲った。それはこの世のモノとは思えないほどに太く、人を恐怖に震え上がらせるには十分過ぎるものだった。

しかし、アスラはこの声をどこかで耳にした覚えがあつて……

「……そうだ。覚えてる、この声……今まで何度もオレに話しかけて来た……確か、黒い……」

「……アスラ？」

アスラは全てを思い出した。得体の知れない何かが自分の中にいる事を、それしてそれが今まで何度も何度も自分に語りかけて来ていた事を……

ロンは明らかなアスラの異変に疑問を抱くが、その声を聞く事ができない彼では何も解決はできない。これはアスラと声の主の問題だ。

……ああそうだ。オレは黒の世界……オニキスだ……!!

……もう一度あの力を使うか？

……オマエ自身は単なる人間だ。アレを連続で使うと、代償が付き纏うぜ……!!

アスラに囁き続ける黒き声。

どうやら、あの黒き力にはアスラにも相当な負担や代償が伴うようだ。メリットとデメリットを天秤に掛け、考えなければならぬ……

だがアスラは……

「構わねえ……頼む!!」

即答だった。

力の代償というデメリットをモノともせず、黒き声にあの時の力を求める。

「たとえその代償とやらで腕や足が消し飛ばうが、オレは今ここでアイツに勝たねーと行けねーんだ……いつか絶対に頂点王になる……でもその前に、イユを助けられる男になりたいんだ……ツ!!」

「……スーミ村のアスラ……!」

周囲にはアスラが突然独り言をしているようにしか見えない。しかし、それでも本気度は伝わってくる。シスイ・メイキヨウはアスラのイユに対する気持ちに心を震わされる。

……ゼゼゼ……

……いいだろう与えてやる。これは神をも焼き殺す、黒い炎だ。

……先に言つとくが、どうなっても知らねーぜ？

交渉は成立した。その言葉を最後に、黒い声は途絶える。そしてその直後、アスラのデツキから異様な程に黒い炎が立ち昇って……

ー!!

アスラを除き、神たるオーディンさえもそのデッキから吹き荒れる黒炎に驚愕する。明らかに異常なのを本能的に理解したのだ。

「アスラ……オマエ……」

「悪いロン、待たせたな。このターンはオレが仕切る……でもって、一気に決めるぞ!!」
「ツ……ああ。オマエに仕切られるのは癪だな」

「なんでえ!？」

ロンはアスラに何があったのかわからない。しかし、そのライバルのいつもの前向きな姿勢と表情を見るなり、いつものアイツだと、大丈夫だと認識。

。。。そうだ。どちらにせよやる事は変わらない。神を倒して自分達の実力を示すだけ
。。。。。。

「ターン08」アスラ&ロン

アスラはターンシークエンスの過程の中で吹き荒れる黒炎よりカードをドロ

………
そしてそれを召喚する………

「メインステツプ……来い、仮面ライダーリュウガ!!」

ー【仮面ライダーリュウガ】LV2(3)BP10000

様々な鏡像が重なり合い、赤ではなく、黒い仮面ライダー龍騎、仮面ライダーリュウガがその姿を露わにする。

「………黒い龍騎……!?!」

「………なんだその龍騎の姿は……知らぬ。知らぬぞ、この神たるオーデインでも……」

仮面ライダーリュウガの存在は、ミラーライダーを統べるオーデインでさえも認知していないようだ。

だとすれば………

この仮面ライダーリュウガは………

アスラ達が神に勝つための唯一無二の切札となり得る事になる。アスラは手を前方に翳し、その効果を問答無用で発揮させる。

「リュウガの召喚時効果……敵スピリット全てのコアを2つずつリザーブに叩きつけるッ!!」

「!!」

「やれッー!!」

リュウガはベルトからカードを引き抜き、それを左腕のバイザーに装填……

……アドベント!!

と、いつもの音声よりも太いテイスツで響き渡ると、リュウガの背後に神をも焼き殺す黒龍が咆哮を上げながら出現。赤い眼光を放ち、オーデインの場のミラーライダーズへと黒炎を口内より放出。

1 【仮面ライダーライア】(1??0) 消滅

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】(2??0) 消滅

1 【仮面ライダーナイトサバイブ】(3S??1S) LV2??1

「ぐっ……ファムはスピリット、マジックの効果を受けない。故にその効果は効かん」
「だけど、ライアと龍騎サバイブは消滅した。オレはカードを2枚ドロウする」

放たれた黒炎に焼きたくられるライアと仮面ライダー龍騎サバイブ。ナイトサバイブは辛うじて生き残るも、そのLVを降格させられてしまう。

「アタックステップ!!……仮面ライダーリュウガでアタック!!……さらに効果発揮。コア2個以下のスピリット1体を破壊する事で、ライフ1つをボイドに送る!!」

「なに!?!」

「オレはこの効果でナイトサバイブを破壊し、オマエのライフを破壊する……ブラックドラゴンキック!!」

リュウガが再びベルトからカードを引き抜き、それを左腕のバイザーに装填。

……ファイナルベント!!

と、無機質で太い音声で鳴り響くと、リュウガの背後で鳥栖を巻く黒龍が口内から冷

気のブレスをナイトサブパイプに向けて放出、その足元はたちまち凍り付き、身動きを奪われる。

そしてリュウガは謎の浮力で軽く浮かび上がり、キツクの構えを取ると、黒龍はその背に向かって火炎弾を発射。リュウガは黒い炎の弾丸となつて、身動きが取れないナイトサブパイプへと飛び向かい、そのままそれを貫き、爆散させた…………

そしてその爆風と爆炎による被害はオーデインのライフにも及んで…………

「…………ぐつ、ぐおおおおおー!??!」

〈ライフ3??2〉 オーデイン

「リュウガのアタックは継続中!!」

「……………ただのミラーライダー如きがこの神たるオーデインが操るミラーライダーズを、しかもサブパイプ体を破壊するだと…………許さん。貴様ら人間如きに奇跡など起きない事を証明してやる!!…………ファムでブロック!!…………その効果でコアを1つ増加!!」

アタック中の仮面ライダーリュウガと相対するのは女性型の白きミラーライダー、

ファム。そのBPは5000。リュウガの10000とは比較のしようもない程に劣っている……………

しかし、オーデインは神。その程度のBP差。どうとでもできて……………

「フラッシュマジック、ソードベントを發揮!!」

「!!」

「効果によりファムのBPを5000アップさせ、黒い龍騎のコアを2つ取り除く!!」

ー【仮面ライダーファム】BP5000??10000

ー【仮面ライダーリュウガ】(3??1) LV2??1

ファムはソードベントのカードを、ナイトと同様、剣の取手にあるバイザー部に装填
……………

……………ソードベント!!

の音声と共に稲妻のような形をした槍をその手に握る。ファムはそれを迫り来るリュウガに振り、フラッシュの文字を刻むようにダメージを与える。リュウガそれによりLVダウン。BPは6000まで下がってしまった。

形成は逆転。オーデインの方が一枚上手だった。アスラは自分も理解できていない、または及んでいない力を発揮させてまで奮闘したが、今の彼ではここが限界なのだろう。

ただし、彼一人ではの話であるが……………

「フラッシュマジック、ソードベント!!」

「!!」

「これにより、アスラの黒い龍騎のBPを50000上げる」

「ロン……………ツ!!」

「フツ……………言っただろうアスラ。オマエに仕切られるのは癪だと……………その黒いのは知らんが、どちらにせよオレを忘れるな!!」

ー【仮面ライダーリュウガ】BP60000?11000

絶体絶命な状況に陥るリュウガに与えるかのように落下して来たのは、ナイトがソードベントのカードで呼び出す黒槍。リュウガはそれを手に握り、反撃に転ずる。

「へっ……ロン、忘れてなんかいねえよ……だってオレは……オマエを超えて、いつか頂点王になる男だからなアアアア!!!」

……ブラックドラゴンスラッシュ!!!

気合を入れ、アスラが咄嗟に考えた技名を叫ぶ。リュウガはナイトの黒槍に己の黒い炎の力を流し込み、ファムへと一閃。彼女の握る稲妻のような形をした槍ごと、体を斬り裂き、爆散させた。

「ば、馬鹿な……貴様ら如きが……この神たるオーデインのミラーライダーズを全滅させただど?!……龍騎!!……神たる我が眠っていたこの長い時の中で、貴様にいったい何があつたと言うのだ!!」

「……どうだこのヤロー……ターンエンドだ……ぐっ、ぐうっ!!」

アスラ手札：4

ロン手札：2

場：【ミラーワールド】LV1

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

ー!!

ターンが終わり、ここに来てようやく優勢に立てたと思えた直後。アスラはまるで体の中が引き裂かれるような痛みを感じた。そしてそれと同時に、仮面ライダーリュウガはこの場よりカードごと姿を消滅……………

「おいアスラ!!…大丈夫か!？」

「お、おう……………珍しく心配するじゃねえかロン。まだまだ……………この程度でくたばれねえ……………何度でも立ち上がってやる……………」

アスラはひよつとしたらこれがオニキスの言っていた「代償」ではないかと勘ぐっていた。その真実は定かではないが、限界を超えて状況を覆して見せたのに変わりはない。

「ぐっ……………や、やめろ……………出てくるな……………人間如きが神の支配から出ようとすな……………」

ぐっぐおああー!!!」

ー!!

「……お、お願いアスラ!!……私を殺して!!」

「ツ……イユなのか!?!」

「イユ……!!」

追い詰められた事が幸いしてしまったのか、突然苦しみだすオーデイン。そして、その意識は彼からイユへと移り変わった。イユはこの時間が短いのを理解しているのか、開口一番でアスラに酷な要求をする。

「……さっきの黒い龍騎の一撃がアイツの支配を弱めたのか……?」

ロンはイユの意識が戻った事をそう考え、推理した。しかし、アスラとシスイはそんな事考える余裕など無くて……

「殺してって……んな事できるかアアアー!!……オレはわざわざオマエを助けるためにここまで来たんだぞお!!……そんなバッドエンド認められっか!!」

「無理。オーデインはもう私から離れないし、このバトルでオーデインが負ければ私も死ぬ。そしてオーデインが勝ったらこの世界も終わる……だったら……」

「……だったらいつそ自分が死んで仕舞えば良いと思つてんのかよ」

イユの気持ちを感じたアスラ。その考えは的中しているのか、イユはアスラのその言葉に首を縦に振り、頷く。

「イユ……」

「お父様、申し訳ございません……オーデインは貴方の思ったようには動きませんが、どうやら私にも従えるのは不可能だったようです……ごめんなさい、ごめんなさい……私にはただ、もう一度貴方と一緒に家族として暮らしたかったです……!」

「謝るのは私の方だ!!……もう二度と手放したりしない、だから頼むイユ、戻って来てくれ!!……頼むウウウー!!」

シスイはこれまで自分がやって来た事を憂い、涙を流しながらイユに謝罪するが、そ

れに対してイユは今度は優しく首を横に振った。たとえ愛する父であっても、その望みが叶えられない事を誰よりも知っているからだ。

この瞬間より飛び交うのはバッドエンドのムード。イユが死ねば鏡の中での戦いは幕を閉じる事になる……そして、それにより表の世界は救われるのだ……

だが、それを認めていない人物が一人……

「んだよこの雰囲気、ふざけんなよ……」

「アスラ……」

「イユ、オマエ本当は死にたくないんだろ!?……じゃあなんでこんなお別れみたいな雰囲気醸し出してんだコノヤロー!!」

ブチ切れるアスラ、その咆哮が轟く。それはイユの生きたいと言う気持ちを理解しているからこそであって……

「わかってよアスラ……私を殺してよ、それ以外に手はないの!!……もう覚悟は決まっている!!……私だけの命で他の人達の命が救われるのなら安いものだわ!!」

「うるせえええ!!……そんな覚悟、勝手に決められても困る!!」

「!!」

「なんでオーデインの力は信用してるのにオレ達の力は信用してくれない!!…オレ言つたよな、オマエの事も諦めねえって!!」

アスラの言葉に少しずつ動揺が表れるイユ。それは彼の優しさに再び決意と覚悟が揺れている証拠であって……

「それにオレも、たった今、オマエも表の世界も救けるって覚悟を決めた!!」

「……お願い、お願いだからアスラ……貴方は頂点王になるんでしょう?……こんなつまらないところでその命を無駄にしないで!!」

「…オマエを助けられるくらいに男じゃねえと、オレは頂点王にはなれねえし、仮にオマエの命を犠牲にして頂点王になれたとしてもなんも嬉しくねえ!!」

「!!」

決して揺らぐ事のないアスラの覚悟。

そんな彼の雄叫びがイユの涙を誘う……

「あ、アスラ……私……」

「オマエ、夢が無いって言ったよな。夢ってスゴいんだぜ。それになりたいって思うだけで力がグワツって湧いてくる!!…夢が無いなら、先ずは明日を生きる事を夢にしようぜ………ほんの少し先でも良い、想像して見ろよ、未来の自分を!!」

「ツ……アスラ……私、私生きたいよ、アスラやお父様と一緒に………最後の最後まで……!!」

「へっ……おう!!…オレも手助けするから、もう少しだけ頑張ろうぜ!!」

イユは大粒の涙を流しながらアスラに懇願する。その願いが、想いが、この場にいる全員に届いた。

アスラが変えたのだ………

しかし、そんな時間も束の間、遂に神が今一度蠢いて………

「……い、良い加減にしろ………小娘………オマエはこの神の依代なのだ………それは15年前から決まっていた事………貴様はもう死んだのだ………この神の意志の中で………!!」

「貴様らとの戯れもここまでだ。終わらせてくれよう……この、神たる我自身の力で!!」
オーデインはそう宣言すると、己のBパッドにカードを勢い良く叩きつけ、そのカードの名を叫ぶ……………

我、仮面ライダーオーデイン……………

……………ここに降臨仕る!!!

ー!!

彼の場に降り注ぐ黄金の羽の数々。その一つ一つが可憐に地上へと墮ちる中、様々な鏡像が重なり合い、黄金のライダーズピリット、ミラーライダーの頂点に立つ神たるスピリット、仮面ライダーオーデインが腕を組み、仁王立ちで姿を現わして……………

ー【仮面ライダーオーデイン】LV3(5)BP24000

「さ、これがオーデイン……………」

「ナイト達を司る存在……」

神たる存在感。アスラとロンは圧倒されざるを得なかった。

「やはりこの娘の才能は本物だった……神たる私の目に狂いはなかったのだ……ふふ、後はほぼ死に体となった龍騎とナイトを回収するのみ!!」

実体化した己を目に映しながら、イユに取り憑いたのは正解である事を悟るオーディン。真の力を取り戻すべく、アタックステップへと進行させて……

「アタックステップ……神たる我でアタック!!……そしてその効果【タイムベント】を發揮!!」

ー!!

「我がトラッシュにあるー1枚のミラーライダーズをゲームから除外する事で、貴様らのコアを初期状態に戻す!!」

「なに!!?」

オーデインのトラッシュから踊るようにミラーライダーのカード達が飛び交い、消え去っていく。それでコストは成立したのか、場にいる仮面ライダーオーデインはベルトにあるカードデッキからカードを一枚ドロし、それを杖型の武器に装填……………

……………タイムベント!!

と、音声が鳴り響くと、まるでバトルを遡っていくかのように、アスラとロンのBパッドからコアが次々と消え去って行き……………

「オレ達の合計コアが……………」

「たったの4つに!?!」

「これが神たる我、オーデインの力だ!!…貴様らの龍騎とナイトさえ戻れば、我はバトル中だけでなく、現実でもタイムベントが使用できる!!……………さあ、早く渡せ!!」

オーデインがそう言い放つと、スピリットとしての仮面ライダーオーデインがアスラ達に迫り来る。

彼らはこの攻撃をライフで受ける他なくて……………

「ぐっ……」

「ぐあああ?!?!」

△ライフ2??1△アスラ&ロン

仮面ライダーオーデインの金色の拳が2人のライフバリアを1つ粉砕。それに伴うバトルダメージが2人を襲うが、それは今までの比ではなくて……

「……まだ、立てるか……アスラ!!」

「……おう……イユと約束したんだ……今更くたばるわけにはいかねえ!!」

「ほお、まだ立ち上がるか。並の人間ならとうに諦めているところだろうな……しかし、最早万策尽きた筈だ。そのコア数でなにができる?……ターンを終えよう」

手札：1

場：【仮面ライダーオーデイン】LV3

【ミラーワールド】LV1

バースト：【無】

諦めるわけにはいかない……………

そう意志を固めているアスラとロンは、相手が神だろうが何であろうが何度でも立ち上がる。

しかし、コアの総数は次のコアステップを考えても僅か6個。誰がどう見ても勝てるわけがなくて……………

ここは意識の中、まるで海のような場所だった。オーデインに意識と身体を奪われたイユは、その中でゆっくりと沈んで行っていた。

おそらく、日も当たらない場所まで沈んで仕舞えば、イユの意識は完全に死んでしまおうのだろう……………

……………アスラ……………

沈みゆく中、日の光が遠ざかって行く中、イユが頭の中で真っ先に思い浮かべたのは、

他でもないスーミ村のアスラ。

最初はただの怖いもの知らずでバカだと思った。だが、一緒に居るうちにどんどんその逞しさと優しさに惹かれて行った……………

暖かかった。ずっと一緒にいたいと思っただけ……………

父以外でそんな事を思っただけは彼が初めてだった……………

そんな彼にこう言われた……………

「『オマエ、夢が無いって言ったよな。夢ってスゴいんだぜ。それになりたいて思っただけで力がグワツて湧いてくる!!……………夢が無いなら、先ずは明日を生きる事を夢にしよやぜ……………ほんの少し先でも良い、想像して見ろよ、未来の自分を!!』」

15年もの長い間ミラーワールドにいた自分にとって、夢など遠い存在だったし、見ようとするだけでも行けない事だと思っただけ……………

だけど違った。意味を変えてくれた……………あの背中の小さな男の子に……………

ああ、そうだ……………

……私は生きたい!!

……もつともつと!!

……お父様やアスラともつと長く生きるんだ!!

……それが私の叶えたい夢、必ず叶えて見せる……たとえ行けない事でも、私自身が決めた事なんだ!!

……諦めたくない、諦めない

……最後まで生きる事だけは絶対に諦めるもんかあああああ!!!

意識の中で、イユはアスラやシスイと共に暮らす絵を想像すると、それを力に変え、叫ぶ。その願いは白く眩い、一筋の光となりて……

「生きたい」と言うイユの願い。それは現実にも反映される……

それは正しく奇跡とも呼べる超常現象であり……

—!!

「がっ……な、なんだ!?……ぐっ、ぐがおあー!!?」

イユの身体を乗っ取ったオーデインが苦しみだすと、その身体より白い光が溢れ出てくる。そしてそれは何があんなにかわからないまま、アスラの身体へと集結して行く。その様子は、まるで彼に新しい力を与えたかのようであつて……

「イユなのか??……へっ……アイツもまだまだ諦めてねえんだな……伝わって来たぜ、なんとなく!!」

「ぐっ……あの小娘、また何かしたと言うのか……だがしかし、どう足掻いた所で結果は変わらぬのだ。貴様らは負け、世界は我々ライダースピリットのモノとなる!!」

「そんな事はさせねえ!!……オレは頂点王になる、でもその前に世界もイユも救けられる男になってやる!!……行くぜロン!!」

「フツ……オマエの言ってる事は半分嘘になるぜアスラ。何せ、頂点王になるのはこのオレだからなツ!!」

イユから希望を貰い受け、2人は再び立ち上がると、自分達のターンを開始して行く

……

全てはこの国最強たる頂点王になるため、世界とイユを救けだすためだ……

「ターン10」アスラ&ロン

イユが与えた力は、アスラのデッキをさらに進化させていた……

そして、アスラはその力を存分に使用する……

「メインステップ……行くぜイユ……見てくれよ、オレの……変身!!」

「!!」

「オレは!!……オレ自身を仮面ライダー龍騎に変身させる!!」

刹那。その気合の入った宣言と共に、アスラの腰にベルトが巻かれる。さらに彼はBパッドの上に置かれたデッキのカードを全てベルトに差し込む。

そして、まるでその行いが合図になったかのように、様々な鏡像がアスラの身体へと重なり合った……

I 【変身!! 仮面ライダー龍騎】 L V I

それらが完全に重なり合うと、アスラは赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎へと姿を変えていた。その姿に周囲の誰もが驚愕して……………

「な、何?!……………貴様が龍騎になっただ?!」

「フツ……………やはり、オレのライバルはオマエしかないな、アスラ……………!!」

「勝負はこれからだぜオーデイン……………諦めないのがオレのバトスピだアアア!!」

龍騎に変身したアスラが龍の如く咆哮を上げる。それにより三王塔の最上階が軋む中、3人のバトルスピリッツはさらに限界を超えて行くのだった……………

39 コア 「未来へのドラゴンライダーキック」

「メインステップ……………行くぜイユ……………見ててくれよ、オレの……………変身!!」

「!!」

「オレは!!…オレ自身を仮面ライダー龍騎に変身させる!!」

刹那。その気合の入った宣言と共に、アスラの腰にベルトが巻かれる。さらに彼はBパッドの上に置かれたテツキのカードを全てベルトに差し込む。

そして、まるでその行いが合図になったかのように、様々な鏡像がアスラの身体へと重なり合った……………

ー【変身!!仮面ライダー龍騎】 L V 1

それらが完全に重なり合うと、アスラは赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎へと姿を変えていた。その姿に周囲の誰もが驚愕して……………

「な、何!?……貴様が龍騎になっただど!？」

「フツ……やはり、オレのライバルはオマエしかないな、アスラ……!!」

「勝負はこれからだぜオーデイン……諦めないのがオレのバトスピだアアア!!」

龍騎に変身したアスラが龍の如く咆哮を上げる。それにより三王塔の最上階が軋んで行く。

遂に限界を超えたバトルスピリッツが終わりを迎えようとして……

「配置時の神託を発揮!!……カードを3枚トラツシユに送り、その中にある対象カードの数だけオレにコアを追加!!……今回は2枚、よってコアを2つ追加!!」

「オレ達はこれでターンエンドだ」

アスラ手札：4

ロン手札：3

場：【変身!!仮面ライダー龍騎】 L V 1

【ミラーワールド】 L V 1

【ミラーワールド】 L V 1

バースト：【無】

龍騎に変身したアスラにコアが追加されるのを見るなり、そのターンをエンドとするロン。タイムベントによって減ってしまったコアを鑑見ての判断なのだろう。迂闊に動けばコア不足で即死だ。

「つてかオレ変身したらちよつと身長高くなってね!?!……ロンと目線同じだもん!!」

「黙れ。腹が立つ」

「なんでだよ!?!」

ここでようやく変身した自分を客観的に見るアスラ。身長はおよそ180センチに近づいており、170後半はあるロンと全く変わらない目線になっていた。

ソウルコアが出せない事よりも身長が低い事を気にしていた彼にとって、これほど嬉しい事はない。そんな事を考える時ではないとわかつてはいるが、どうしても口がでしゃばってしまう。

「変身………まあ良い。ミラーライダーズの一端に変身した所でミラーライダーズを統べる神たる我には敵わぬ」

既に仮面ライダーオーデインを召喚しているオーデインは、勝ちを確信しているのか、確かな余裕があつた。

「ターナー」オーデイン

「メインステップ……は、もう要らぬ……このアタックステップで終いだ。神たる我自
身で攻撃する!!」

ー!!

オーデインの掌から放たれる光弾。それは残り1つしかないアスラとロンのライフへと真つ直ぐに飛び行く。

しかし、イユを救けると覚悟を決めたアスラに、それは通じなくて……

「まだだ!!……フラッシュマジック、リミテッドバリア!!」

「なに!?!」

「そのアタックはライフで受ける。リミテッドバリアの効果でこのターン、オレ達のラ

イフは一つも減らねえ!!」

〈ライフ1??1〉アスラ&ロン

アスラが放ったマジックにより、オーデインの放った光弾は弾かれてしまう。リミテッドバリアはこのターンの間、コスト4以上のスピリットの攻撃から身を守る事ができる。

コスト13という高コストなオーデインでは、少なくともこのターンはアスラ達を倒せなくて……………

「小癩、極まり無し!!……………まだ足掻くか……………良い加減諦めろ、もうオマエ達にこれ以上の奇跡は起きぬ!!」

「それでもイユは起こした!!」

「!!」

「体を引き裂きたいくらい辛かったのに、それでも生きるために、必死に足掻いて、もがいてもがいてもがきまくって、オレに変身の力を……………希望を与えてくれた!!……………奇跡つてーのは、勝手に起きるモノじゃねえ!!……………自分自身が限界を超えて、手繰り寄せ、引

き起こすモノだ!!」

「それを今、オマエに証明してやる!!」

「戯言を……………この下等種族が……………やれるモノならやってみるが良い!!」

アスラとロンのターンが再び幕を開ける。手札的にもおそろくこれがラストターン。この機を逃すと、勝てない上にイユも救げられないという悲しきバッドエンドを迎えてしまう事だろう……………

「ロン、頼みがある」

「……………なんだ」

「アイツの、オーディンのBPを超えるスピリットを用意してくれ……………少ないコアしかねえけど何でもいい……………頼む!!」

ロンにそう懇願するアスラ。オーディンに勝てる方法と、イユを救い出す方法。その2つを引き起こすためには、それ以外の方法が考えつかないのだ。

だが、ライバルの必死の頼みを、ロンが応えないわけがなくて……………

「フツ……オマエの小ちやい脳味噌で考え抜いた作戦か……面白い、乗ってやる」
「へっ……オマエはいつも一言多いし、余計なんだよな!!」

……行くぜ、あの神黙らせるぞ!!

……オレ達のターン!!

限界を超えた2人の最後のターンが力強く宣言される。全てはオーデインを倒すため、イユを救うため……

このターンで全身全霊の攻撃を叩き込む……

「ターン12」アスラ&ロン

ターンシークエンスの過程の中でカードをドローするロン。そしてようやくあのカードが引けたか、その口角を小さく上げ、笑みを浮かべる。

「メインステップ……ようやくおでましか、来い……ダークウイング、転醒ナイト!!」
「!!」

┆【ダークウイング】LV1(1) BP4000

┆【仮面ライダーナイト】LV1(1S) BP4000

ロンの場に現れたのは黒き翼を持つダークウイングと、仮面ライダーナイト。この終盤にて、遂にシスイをも倒した布陣を整えて見せる。

「召喚時効果で2枚ドロロー！」

「さらに対象のスピリットが召喚された事により、オレにコアを追加!!……LVアップだ!!」

┆【変身!!仮面ライダー龍騎】(2??4) LV1??2

「無駄だ……何度も言わせるな、何をしようとも、この神たるオーデインは倒せぬ……その少ないコアでは最早それ以上の動きはできまい!!」

「一々うるせえええー!!」

……バトスピってーのは、強力なスピリットでも、

……ましてやコアでやるモノでもない!!

……諦めない心でやるモノだ!!

「転醒ナイトにダークウイングを合体してアタックステップ、合体スピリットとなった転醒ナイトで攻撃する!」

2人で頂点王シイナの教えを叫びながら、最後のアタックステップを開始するアスラとロン。先陣を切るようにロンが転醒ナイトで攻撃を仕掛ける……

そしてこの時、この瞬間、数々の効果が発揮されて……

「転醒ナイトのアタック時効果、オーデインのコアを2つリザーブに置き、回復!!」
「!!」

ー【仮面ライダーオーデイン】(5??3) LV3??2

ー【仮面ライダーナイト+ダークウイング】(疲労??回復)

転醒ナイトとオーデインの身体が紫色の光に包まれる。その間に、転醒ナイトは回復状態となるが、オーデインはコアを外され、そのLVを降格させられてしまう。

「まだあるぞ!!……アドベントカードをコストに【零転醒】を発揮……転醒ナイトを、転醒ナイトサバイブへと昇華させる!!」

「なに!?……神たる私の力を貸さずともサバイブ化するだ!?」

ロンは手札よりアドベントカードである「ソードベント」のカードを破棄。その行いにより、ナイトの効果が適用。

ナイトはベルトからカードを一枚引き抜く。その瞬間に疾風の風が吹き荒れ、ナイトの武器も黒い剣から青い盾へと変更される。そしてその青い盾のバイザー部にそれを装填……

……サバイブ!!

と、音声が鳴り響くと共に、仮面ライダーナイトは更なる強化形態、仮面ライダーナイトサバイブへと進化して見せた。疾風の風で黒いマントが靡く中、青い盾の中に内蔵された聖剣を引き抜く。

「ナイトがナイトサバイブへと進化した事により、黒き翼ダークウイングも、疾風の翼ダークレイダーへと進化を遂げる!!」

ナイトがサバイブへと進化した事により、ダークウイングが甲高い雄叫びを上げながら一瞬にして鋼鉄の翼を持つダークレイダーへと進化して見せた。

「来い、ダークレイダー!!……今こそナイトサバイブと一つとなりて、研ぎ澄まされた怒涛の疾風へと生まれ変われ!!……ミラージュ!!」

「!?!」

「現れろ……ナイトサバイブ・レイダー!!」

1〔仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング〕LV2(2S)BP12000

ダークレイダーが分離。それがナイトサバイブの身体に各所装備されていき、仮面ライダーナイトサバイブはサバイブをも超えた「ミラージュ」と呼ばれる究極の形態へと強化された。

その瞬間に、疾風をも超えた怒涛の突風が追い風になるように吹き荒れ……………

「サバイブレイダー……ロン、オマエいつの間にかこんなスゲエカードを……流石オレのライバルだぜこの天才イケメンヤロー!!」

「フツ……オマエにオレは超えさせないぜ、アスラ!!……ダーククレイダーの合体時効果、トラッシュのアドベントカードを回収し、オーデインのコア2つをトラッシュに送る!!」

「くっ……!!」

1 【仮面ライダーオーデイン】(3??1) LV2??1

サバイブレイダーから放たれる紫色のオーラがオーデインを包み込み、そのコアをさらに除去する。オーデインは遂に最低レベルの1までダウン。

そのBPは12000。そして、ナイトサバイブレイダーのBPも同じく12000だ。

「約束は果たしたぞアスラ……行け!!」

「おう!!」

アスラは叫ぶと、己のベルトにあるデッキからカードを1枚ドロウ。それを左腕のバ
イザーに装填する……………

……………ファイナルベント!!

と、音声が鳴り響く。

「オレは、変身したオレの効果を発動!!…ミラーライダーがアタックした時、そのスピ
リットのBP以下のスピリット1体を破壊する!!」

「なに!？」

「神たるオマエだったらもうわかるだろ?…オレは!!…ナイトサバイブレイダーと同
じBPを持つ仮面ライダーオーデインを破壊……来い、赤き龍!!」

アスラがフィールドへと赴くと、龍騎に宿る赤き龍が鳥栖を巻き、アスラの背後へと
現れる。

「行くぜ……………オレの……………ドラゴンライダーキック!!」

アスラは赤き龍と共に跳び上がり、華麗に舞うと、キツクの構えを取る。そしてそのまま赤き龍の火炎弾に背中を押され、ミラーライダーの神たるオーデインへと飛び込んでいく……………

しかし、オーデインはこの程度では破壊されない。黄金の羽を操って束にし、火炎弾と化した龍騎のライダーキックをガードして見せる。

「うおおおおおおお!!」

「負けない…………敗北を喫するわけがない!!…………この神たる我が!!…………貴様みたいなただの人間に!!」

「ただの人間なめんなツ!!」

オレは!!

頂点王になる男だ!!

ただの人間だろうがなんだろうが、今持てる全ての力を使って、先ずはオマエを超える!!

「ツ!!……コイツ……また黒く……!?」

オーデインの黄金の羽と激突する中、龍の如く咆哮をあげるアスラ。それに応えるかのように、その身体の色が赤から黒に塗り替えられていき、龍騎の姿からリュウガとなる。

身体に燃え上がる赤い炎も、次第に黒い炎に変貌を遂げる。その威力も増していき、黄金の羽が徐々に焼き焦がしていく。

「うおおおおおおお!!……諦めないのが、オレのバトルスピリッツだあああ!!!」

そして、黄金の羽全てが焼き尽くされ、遂にアスラのキックがオーデインに炸裂。神たるオーデインは流石に力尽き、前のめりに倒れ、爆散した。アスラは着地と共に色が黒から赤に戻る。

「……この神たるオーデインが……貴様ら如きに……ぐっ……ぐあああああ!!!」

「!!」

フィールドにいたオーデインがアスラのキックで爆散した直後。変身龍騎の力なのか、イユの身体を乗っ取っていたオーデインに異変が発生、イユの身体から霊体のような金色の塊が抜き出した。そしてイユの身体はぐったりと倒れて……

「馬鹿な……小娘との憑依が強制的に切り離されただ?!……何故だ、何故だ……ここまで来て、こんな……!!」

「オマエの本当の姿が、そんな惨めな金の塊ヤロウだったとはな……!!」
「!!」

飛び出した金色の霊体は、オーデインの意思の正体。そして目の前にはアタック中のナイトサブライダーが存在していて……

「やめろ……やめろんだナイト!!……我は神、オマエ達を統べる存在だぞ?」

「……神は他を統べる存在じゃない。他を見守る存在だろ……行けナイト!!」

命乞いも虚しく、ナイトサバイブレイダーは、ロンの宣言で剣を構え、霊体のみとなったオーデインのライフバリアを無慈悲にも斬り裂いた。

「ぐっ……ぐあああああ!!!」

〈ライフ2?0〉オーデイン

ライフがゼロにされ、凄まじいバトルダメージがオーデインを襲う。布切れが解けていくかのように身体が少しずつ消えようとしていた。聞こえてくる息使いで、もがき苦しんでいるのがよくわかる。

「な、何故だ……龍騎、ナイト!!……何故この神たる我を、オマエ達を総べる存在であるこのオーデインを差し置いて、何故そんな下等種族の人間達に手を貸す!!……何故だああー!!」

神たる自分の敗北の現状を受け入れたくないオーデイン。消えゆく中、龍騎となったアスラが眼前に現れる。

「……なあ、知ってるかオーデイン。バトスピって楽しむモノなんだぜ？」

「!?」

「ライダースピリットは主人を自分で選ぶ。龍騎とナイト……他のライダースピリットは……面白いヤツを選んで、バトスピを楽しみたいだけなんだと思うんだ。そりゃ、人間を支配したいだけのオマエの世界なんて、行きたくないよな」

「……………」

「オマエには一緒にバトスピしたいって思えるヤツ、いないのかよ」

アスラは今まで色んなライダースピリットを見てきて、そう考えていた。

ロンのナイトを始め、テンドウのカブト、トウエンティのジオウでさえ、彼から見たらバトルを楽しんでいるように見えていた。

「今更こんな事言ったらアレだけだよ。オレ、オマエとのバトル、スツゲエ楽しかったぜ!!……今度は世界なんか賭けないで、楽しくバトルやろう!!」

「……………そうか。良き主人に恵まれたのだな……龍騎とナイトは………ならば、神たる我が最後にやる事は一つだ……………」

—!!

アスラの言葉に、何かを気づかさされ、悟ったような発言をするオーデイン。ミラーライダーのカード達を遥か彼方へと解き放った……………

ミラーライダーのカード達はしばらく周囲を飛び交うと、再び主人を求め、どこかへ飛んで行った……………

その中でもサバイブのカード達は、再びアスラとロンのデッキへと収納される。やはりそこが一番落ち着くのだろう。

「そうだ……………それで良いのだ。良いのだろうか……………そうか、バトルスピリッツとは、楽しむモノか……………神たる我の部下達が、良き人間との出会いに、幸あらん事を……………ッ」

オーデインはそのまま消滅した。人間に何か恨みでもあるような発言をしていたバトル中とは正反対に、最後はアスラとロンを認めたような発言をしていたあたり、最後の最後で救われたのだろう。

アスラの想いは届いたのだ……………

「アイツ……死んじまったのか？」

「いや、スーミのアスラ……ライダースピリットに命の概念は無い。時が来れば、またいつか蘇る事だろう……」

「そっか……またいつかバトスピやろうな、オーデイン!!……今度は楽しく!!」

オーデインの消滅に、少なからず罪悪感を覚える阿斯ラ。イユの明日を救うために、別の命を犠牲にしたと思うたからだ。

しかし、シスイが言うように、ライダースピリットは死なない。いつかきつと復活を果たす事だろう……

今度は良きスピリットとなって……

「勝ったんだな、阿斯ラ」

「おうロン、やったな!!」

「フツ……当然だ」

阿斯ラの龍騎の変身が解けていく中、ロンが阿斯ラにそう告げてきた。2人は勝利を

その身に嘯みしめながら、拳を合わせた。

その後、アスラとシスイは直ぐに倒れているイユの方へと向かう。

「……………ん、ツ」

「よっ！……………終わってたぜ、イユ」

「……………アスラ……………!!……………勝ったんだね」

「ああ!!……………これで明日も生きれるな！」

微笑ましく笑い合うアスラとイユ。その間に、改心し、イユを心の底から心配していたシスイが現れ……………

「イユ……………すまなかった……………今は兎に角この言葉以外が出てこないよ」

「いいんです、お父様……………また一緒に暮らしましょう……………もちろん、このミラーワールドじゃなくて、表の世界で……………！」

「ああ……………ああ……………!!」

直後にロンがアスラの横にひよっこり姿を見せ、絆を取り戻した親子のやり取りを微

笑ましく眺める。

だが、その時だった。アスラとロンが知っている声が聞こえてきたのは……………

「そう言うわけにもいかねーんだよな。シスイ・メイキョウ」

ー!!

聴き慣れたワイルドな声。アスラ達はその声のする方へと振り向くと、そこには無事ミラーモンスター達との戦闘を終えたテンドウと、エール、その頭の上に乗っかっていゝるムエがいて……………

おそやくオーデインが最後にミラーライダーを解き放った事により、ミラーモンスターもこの場から消滅したのだろう。自由になった事で、ミラーライダーと共に主人を求めて旅立ったのだ……………

「エールに……………テンドウさん!?……………なんでここに……………」

「その話は後だ小僧。今はその鏡マンの話が先だ」

テンドウは基本的に人を渾名で呼称する。鏡マンとは、おそらくシスイの事だろう。

「大体の話はエールから聞いたぜ。なんだ、殺人やらライダースピリットの強奪やら色々悪事を働いたそうじゃないの、表の世界も壊そうとしたんだって?……おつかねえな」

「……………」

「ぶつちやけ。死刑は免れないんじゃないかね?」

「!!」

「ええ!?!……死刑って……そんな……いくらなんでも」

「まあ、オレは裁判官じゃねえから、どうなるか知らんけど。飽くまで推測……いくら猛省してるとは言え、三王としてオマエをみすみす見逃すわけにもいかねーんだな。やって来た事のけじめくらいつけろ。男ならな」

タバコを片手に吸いながらそう言葉を落とすテンドウ。言い訳はできない。言い返す言葉もない。自分が今まで多くの人々を傷つけ、悪事を働いて来た事は事実なのだか

ら…………

寧ろ死刑でも足りないとも思える…………

だが、そんなシスイを庇うように前に現れたのは他でもない、イユだった。

「……………違います……………お父様は確かにミラーライダーを奪って来た……………けど、殺してない!!……………誰も、親友だったゾン・アーサーも!!」

ー!!

「なに!?!」

必至な様子で語られるイユの証言。衝撃の事実。それによれば、彼は親友だったロンの実の父親、ゾン・アーサーを殺してないと言う……………

そしてその証言に真つ先に反応を示したのは、当然ロンであり……………

「どう言う事だ……………!?!」

「……………ただ、生きていると言う保証もない……………あの時はロン、君を追い詰めるために嘘を

ついた。我はゾンを倒したが、殺してはいない……まあ、今更信じてはもらえないだろうが」

「だからお願い……お父様を連れて行かないで!!」

イユの懇願。テンドウは無表情のまま吸っているタバコを取り出すと、再び口を動かした。

「だからと言って手を引く程三王は務まらねえ……その鏡マンはオレが連行する……そんなにお父様好きだったら待ってる……娘のオマエに出来る事なんて、精々その程度だろうよ」

「ッ……待ちます!!……何年だろうが、私はお父様と一緒に暮らすまで、生き続けます!!」

「……イユ……!!」

さつきまで死のうとしていたとは思えない程の、健気なイユの決意に、涙ぐむシスイ。その涙は、彼自身が今回の件を15年の時を経て猛省していると言う、確かな証拠になつて……

「あーあー……ヤダヤダ、なんかオレが敵みたいじゃん。親子の愛情を確かめ合うのはこのくらいにして、さっさとこの世界から出してくんね？……この世界全部鏡向きで気持ち悪いんだけど」

「ああ……それだったら私のBパッドで………」

「取り敢えず一見落着か？」

「落着じゃないわよ!?!…あんたまた無駄に怪我して!!」

「いや〜…頑張りました〜」

テンドウが無表情のままそう言うと、シスイが自分のBパッドを取り出し、このミラーワールドから出ようとする。アスラとエールがたわいもない会話をし始める。

しかし………

ここでアクシデントは起こった………

「………変だ。表の世界への扉が開かない………何故?」

「ああ?……さてはオマエ、まだ何か企んでるな?……オレを騙そうだったってそうはいかねえよ?」

「ち、違う本当だ!!……本当に機能しないんだ!!……ッ」

シスイが何かの異変に気づき、声を荒げたその直後だった。周囲の空間や建物がまるで鏡のようにひび割れ、砕けていったのは……

ー!!

それが示す事はただ一つ……この世界、ミラーワールドの崩壊だった。

「ええ!!……何々!!……あつちこつちで割れてますよおおく!!?」

「ッ……まさかオーデインが消えた事でミラーワールドはその存在を維持できなくなっているのか!」

慌てふためくアスラ達。咄嗟に脳裏で浮かんだシスイの推測は、おそらくほぼ的中している。

ミラーワールドの中核だったオーデインが失われた事により、ミラーワールドは今にも崩壊しようとしていた。

「ええええええー!!……どうすんですかあああー!!……せつかく良い感じに終わろうと
してたのに!?!」

「うっさいわねバカスラ!!……ちよつと黙ってなさい!!」

「エール、だからバカスラじゃない。アスラよ。ちゃんと呼んで」

「なんでアンタは逆に冷静なわけ!?!」

アスラとエール、イユが漫才を繰り広げる中、ミラーワールドの崩壊は進んでいく。
もうダメかと思ったその時、テンドウが「あ」と、言葉を漏らすと、ポケットの中から
小さなスイッチのある機械を取り出す。

「そうだ。そう言えばあのクソジジイがこれをオレに渡してたんだ……強制異世界転移
装置……これでワンチャン戻れる」

「ワンチャン!?!……テンドウ、それ本当に大丈夫なわけ!?!」

「ああ多分。どちらにせよ押してみねえと始まらねえ……ポチつとな」

ー!!

テンドウは落ち着いた様子でネコガイヌ博士から手渡された胡散臭いスイッチを入れる。すると、テンドウを起点にし、近場にいたエールとイユがこの場から消えて

……

成功だ。少なくとも3人はミラーワールドを脱出したに違いない。残ったのはアスラとロン、シスイだけだ。

「おお消えたスゲエ!!……っしやあ、オレ達も脱出するぞ!!」

……
実験の成功に盛り上がるアスラ。しかし、ここでロンに重要な事を気付かされる

「あのスイッチごと表の世界に戻ったが、この先どうやって帰るんだ?」

「……………あ」

……………そうだったあああー!!

「ダメじゃん!!…どうしよう!!」

「取り敢えず5秒後の自分に任せてみるか」

「何言ってるのオマエ!?!…なんでこんな時にスマートな顔してボケれんの!?!」

アスラとロンが漫才を繰り広げるが、実際はそんな事をしている場合ではない。

そして束の間の一瞬、シスイの足場が消え去ってしまい……………

「う、うあああああああ!!!!」

ー!!

時空の狭間に落下しようとするシスイの身体。悲鳴しかあげられないこの状況に絶望を感じるシスイだったが、その手を誰かが掴み、落下を阻止した。

その手は他でもないロンの手だった。そして彼の体をアスラが一人で支えている。

「ロン……………ッ!」

「シスイ、アンタに勝手に消えてもらっては困る。しっかり生きてもらわないと、状況的

に胸糞悪い」

普段はクールなロンも、イユにあれ程言われたシスイがここで死んでしまつては感じが悪いようだ。もちろん、助けたのは本能的であり、それだけが理由ではないだろう………

「ロン。何故だ……何故助ける……我はオマエの父を、ゾンに苦しめた事に変わりはないのだぞ？」

「フツ……そんな事か、オレは赤ん坊の頃の記憶があるらしくてな。その中のゾンの性格だと多分、「娘のためならしょうがない」とか言つて笑い飛ばすさ」

「!!」

「それに最初に言つただろう。オレはメイキョウ家を、オマエも救けると」

ロンはとうにシスイに対する怒りなど超越している。寧ろ今ここで助けてやらないといけないとまで考えている程だ。

だが、そんな中、シスイはまるで諦めたかのように腕の力を弱めて………

「……いいんだロン。もういいんだ……ゾンだけじゃない。多くの人々を傷つけた、私の罪は重い……いつそ、いつそこで死んだ方がまだ我は救われる」

自分の罪の重さを誰よりも理解しているシスイ。いつそこで死んでしまう事を心のどこかで望んでいて……

しかし、それに対して反論して来たのが、上で二人分の身体を持ち上げ続けているアスラで……

「バカヤロウ!!……だったらイユはどうなる!?!…アンタのためにアイツは一生懸命生きただぞ!!」

「!?!」

「娘があそこまで気張ったんだ。父ちゃんのアンタが頑張らないでどうする!?!…罪が重いから死ぬって言うのは償いじゃねえ、ただ逃げてるだけだ!!…仮にも誰かの父ちゃんだって言うなら、そんな罪くらい、背負ってでも生き続けるよ!!」

「スーミのアスラ……」

アスラの叫びを心で受け止めるシスイ……

その心が前向きに立ち直ろうとした直後、悲劇は起こる……………

ー!!

重要だったアスラの足場も崩れ去ってしまったのだ。3人は声を荒げながら表の世界とミラーワールドの間に生まれた時空の狭間へと落下していった……………

ここは表の世界の三王塔。ミラーワールドとは違い、何事もなかったこの世界にて、テンドウとエール、イユは帰還して……………

「ちよつとテンドウ!?…アスラ達が帰って来てないじゃない!」

「んー失敗だったみてーだな」

「呑気な事言ってる場合!」

「お父様、ロン、アスラ…………!!」

イユが3人の身を案じ、両手を合わせ、神に念じたその瞬間だった……………
まるで鏡が割れるような甲高い音がこの空間に響いて来たのは……………

ー!!

空間をガラスのように割って現れたのは、龍騎に宿る赤い龍と、ナイトに宿る黒き翼
ダークウイング。赤い龍の口にはアスラが咥えられ、ダークウイングの背中にはロンと
シスイが乗っていた。

どうやら、狭間に落下する寸前で、アスラとロンのデツキに宿る2体が3人を救出し
て見せたようだ。

「アスラ、ロン!!」

「アイツは確か龍騎とナイトの……………」

テンドウがそのモンスターの正体を見破る中、アスラ達の安否を確認し、エールはた
ちまち笑顔になる。ロンとシスイはダークウイングの背中から飛び降り、アスラは赤い
龍の口から離され、落っこちる。

「ぐへっ!!」

「……ダサ」

「おいロンコノヤロー!!…今なんて言いやがった!!」

華麗に着地する二人と違い、アスラは頭から落ちつた。非常ににかっこ悪いが、逆に非常に彼らしいとも言える。そしてその間、アスラとロンの懐に入れたデッキが光る。2人は光るデッキを取り出し、光源を突き止める……

……それは他でもないミラーワールドのカードであつて……

……それらのカードはたちまち消滅してしまった……

「ミラーワールドのカードが消えていく……」

「ミラーワールドが閉じたからか」

2人はその姿を最後に、ミラーワールドのカードを見る事はなかった……

「ミラーモンスター……オマエ達までこの我を許すと言うのか……?」

自分たちを救出した赤い龍とダークウイングを目に映しながら、シスイがそう呟いた。

無理もない、シスイは最初、ミラーモンスターを道具としてしかみていなかった。それはアスラの龍騎に宿る赤い龍も、ロンのナイトに宿るダークウイングも知っていた筈だ。

しかしその間、赤い龍とダークウイングは何かをシスイに告げるかの如く、咆哮と雄叫びを上げて……………

「……………気にしてないって言ってるぜ、多分だけど」

「!!」

「確かによ、自分で許せない事ってあるかもしれないねー…それで心がバラバラになりかける事も……………でも抗ってみようぜ、アンタをこうやって許してくれる人達もいるんだから」

「……………アスラ……………君は本当に凄い男だな……………」

「おう!!……………何てったって、オレは頂点王になる男だからな!!」

シスイは決して報われたいと思っではない。罪を償いたいとは思っているが、この先どう足掻いても償いきれないのかもしれない。

だが、生きてみようとは思った。諦めずに何度でも挑んで行こうと……その考え方を、この目の前にいる16もいかなない歳の少年に教えてもらった。

「イユ……我は罪を償ってくる。それまで少しだけ待っていてくれ……」

「はいお父様。先程も申し上げましたが……私はいつまでも、いつまでもお待ちします!!」

シスイは最後、イユにそう告げると、テンドウの所へと赴いた。彼に逮捕されるため、そして自分の罪を裁いてもらうためだ……

テンドウは彼の手に手錠を掛ける。

「……やっぱこの鏡マン弁護するの面倒なんだけど、誰か変わってくんね?」

「あんたは空気を読みなさいよ!!」

テンドウがエールにツッコまれる。

そしてその間に、赤い龍とダークウイングがカードとなり、主人の元へと帰還する。帰還すると言つても、アスラは赤い龍のカードを初めてその手で握つて……………

「……………そうか、それがオマエの名前だったんだな……………」

アスラはそのカードを視認するなり、そう呟いた。

ライダースピリットはその中に何か別のモノを宿す。そして、それをカード化できるカードバトラーはさらに希少である。

アスラも晴れてそんな希少なカードバトラー達の仲間入りを果たしたと言える

……………

「これからよろしくな……………ドラグレッダー!!」

赤い龍のカード、ドラグレッダーを天に掲げ、そう告げるアスラ。

鏡の中の世界、ミラーワールドでの戦いはこれにて幕引きとなるが、彼が頂点王になる物語は、まだまだ続く……………

ああ……………腹立たしい……………

本当にムカつく。あのゴミコモン……………

ソウルコアも使えないくせに……………何が諦めるんだ。努力するんだ……………

ふざけるな……………

ボクの方が強いに決まってるんだ……………

……………

「……………」

「やあ、お目覚めかい?……………フリソデ君」

「ツ……………オマエはライダーハンターズのシルクハット……………何故オマエが!?!……………どこだよ

コアは?」

「……………ここは私のお気に入りの場所さ。他のライダーハンターズも知らない……………綺麗だろ?

……………ここに誰かを連れて来たのは君が初めてさ」

アストラとのバトルに負け、不本意ながらその姿を眩ましていた金髪の青年、フリソデは、小さな孤島で目を覚ました。そのすぐ横にはライダーハンターズの主任ウィルが存在している。

周囲には様々な色のコスモスの花が咲いており、目の前には断崖絶壁の崖に広大な海が広がっていた。

「メイキョウ家は負けたよ」

「ッ!?!」

「結局のところヤツは見栄を張るだけの単なるつまらない男だった。あわよくばあのソウルコアも使えないゴミを始末して欲しかったんですけどね……まあ良い、欲しいモノは全て手に入れた……このアルケーガンダムと、君さ、フリソデ君」

ウィルがシスイから奪ったアルケーガンダムのカードを見せつけながらフリソデにそう告げる。

「ぼ、ボクを……何故だ」

「貴方も苛立つんでしょ?…腹立たしいんでしょ?…あの憎たらしいコモンのゴミが……ラッキーだけでこの世界で勝利を重ねていくあの自惚れが」

「!!」

ウイルが誰の事を言っているのか、フリソデにはすぐにわかった。

間違はなくアスラとか言うゴミだ。コモンの癖に、ソウルコアも使えない癖に元マスタ―である自分に、モビルスピリット使いの自分に偉そうな事ばかり言うアイツに違いない……

思い出ただけで腹立たしい、ぶん殴ってやりたい……

「ああ……ムカつく……殺してやりたい……運だけで全てを手に入れたあのゴミを……ボクも……ボクもアイツみたいな黒い力さえあれば負けるわけがない……!!」

「フフ……良い憎しみだ。君に目をつけていた甲斐があつたよ……ならプレゼントしてあげよう……その黒い力」

「なに!？」

ウイルからの提案。アスラの事を思い出すだけで憎しみを燃やし続けるフリソデは

目の色を変える。

「ただし条件がある。君は時が来るまでここに待機していて欲しい……なあに、そんなに時間はかからない……そして、目的を達成するため、私に協力してくれないかね？」

「……………ハッ、なんだそんなそんな事か。その程度、お安い御用だ……………フフフ……………アハハハハハ!!……………そっか、やっぱりボクはあのゴミには負けない運命なんだ!!……………待つていろよ、いつか必ずオマエに復讐してやる……………その時が来るまで、精々呑気に頂点王になるだのとほざいているんだな……………スーミ村のアスラ!!」

「フフ、期待しているよ」

孤島に響き渡ったのは、復讐心が剥き出しのフリソデの雄叫び。

そしてウイルは他のライダーハンターズには秘密でいったい何を企んでいると言うのか……………

それが明かされるのは、まだまだ先の話……………

40コア「紫のカラーリーダーと黒き代償」

鏡の中の世界、ミラーワールドでの戦いは終わった。人間に恨みを持つライダースピリット、オーデインが表の世界にいる人間たちを根絶やしにしようとする目論むも、それはアスラとロンが阻止。結果的に2人はこの世界を救った事になったが、その栄光を知る者は限りなく少ない。

そして、事の発端となったメイキヨウ家の父娘があれからどうなったかと言うと………

ー……

「ねえ、バカスラ、あんたさ。何回病院で療養すれば気が済むわけ？…流石に怪我しすぎでしょ」

「いや……うん。何回もすんません」
「むえ〜」??もっちゃり、もっちゃり

オウドウ都、ライライ町側にある小さな病院。アスラとロンはここでミラーワールドでの戦いで傷ついた身体を癒していた。もつとも、ロンはアスラよりも一日早く退院し、今日はオウドウ都の街をふらついているそうだが……

エールにそう言われ、アスラはそれなりに彼女に迷惑をかけている事を自覚し、謝罪の言葉を述べる。そしてオレンジ色の小動物、ムエは山のようなドーナツをもつちやりもつちやりとその口の中に頬張っていた。

「……にしても、よかったな。シスイのおっちゃん、死刑になんなくてよ」

「そうね。三王のテンドウが証人だったのもあって、どうにかなったわね……まあ、それが不安要因でもあったけど……これでイユも幸せに暮らせるわね……いや、別にあの女の事を心配しているわけじゃないけど……／＼」

素直になれないエールが今ここにはいないイユに対して照れ臭そうに言葉を落としたり。

メイキョウ家、シスイ・メイキョウは、ゾンを殺していなかった事実や、テンドウのテコ入れもあり、どうにか死刑を免れ、懲役で済んだ。しかし、その懲役が何年かまではアスラ達は知らない。

だが、生き続けると言う覚悟を決めたイユならば必ずシスイの罪が拭えるまで待ち続ける事だろう……………

「つしやあ、オレも今日で退院だし、明日には次の紫のカラーリーダーがいる街に行こうぜ」

「ええ……そう言えば、前にテンドウが紫のカラーリーダーは厄介で面倒くさくて、それでいてカラーリーダー達の中でも赤のカラーリーダーと双璧を成す強さを誇るとか、なんとか」

「へっ……誰が相手だろうと関係ねえ!!……オレはこの龍騎と一緒に、絶対残り2枚のカラーカードをゲットして三王に挑戦する権利をもらう!!……でもって絶対シイナも超える頂点王になるッ!!」

アスラは自分の相棒、仮面ライダー龍騎のカードを天に掲げ、高らかに宣言する。ミラーワールドでの戦い以後、アスラのデッキには新たにイユとの絆で生まれた変身龍騎、龍騎に宿るミラーモンスターのドラグレッダーが加えられただけでなく、サバイブのカードも取り返した。

最早彼のデッキはそんじよそこのライダースピリット使いのデッキを軽く凌駕す

る仕上がりとなっており、いくらソウルコアが使えないとは言え、徐々に、それでいて確実に、アスラの頂点王になると言う夢は現実を帯び始めて来ていた。

しかし、そんな会話を繰り広げる彼らの前に、ある人物が現れる。それはアスラもエールもよく知っている人物であり……………

「誰が、誰を超えるって?…………アスラ!!」

「ツ…………シイナ!!」

「シイナ様……………なんですか、その格好」

アスラの病室に現れたのは他でもない、頂点王シイナだ。多忙を極める中、ようやく時間を作り、こうしてアスラ、エール、ロンに会いに来たのだ。

ナースの格好で……………

「何って、ナースの格好に決まってるじゃないかエールちゃん。まずは形から入らないとね」

「いや、オレもう今日で退院なんだけど…………」

「エールちゃんの分もあるよ!!…………着る?」

「嫌よ」

「ふっふっふ……拒否権はないんだな〜これが!!」

「え……ええ!?!…ちよつとお!?!」

何事も形から入るシイナ。エールを強引に別の場所へ連れて行き、強引に服を剥いで着替えさせていく。

そしてナース服を着たエールがアスラの前に現れて……

「なんでエックスの私がこんな格好を……」

「うんうん。似合う似合うよ〜…さあアスラ!!…今のエールちゃんを見た感想をお聞き願おうか!!」

「いや〜…なんか今日も平和だな〜って感じツす」

ミラーワールドでの苛烈な戦いは僅か2日であったが、随分と長くこの平和な感覚を味わってなかったと感じるアスラ。シイナの奇怪な行動が凄く懐かしく思えてしみじみと感想を述べる。

「てゆうかあんた達さ。私が目を離すとなんですぐ変な事件に遭遇するかな。私さえいればものの数秒で解決したのに」

「あながち否定できないのがちよつと腹立つわね」

シイナが物難しい顔でそう呟いた。確かにシイナがミラーワールドにいたらシスイどころかあのオーデインでさえもあっさりと撃破してしまっていた事だろう。

「そうそう、さつきロンをお墓の方で見かけたよ。多分本当のお父さんの所だろうね。死んでないけど」

「え……シイナ、ロンの事聞いたのかよ」

「うん。テンドウからね……まあ、どちらにせよ私は頂点王だからこの情報は耳にしていたと思うけど」

どこか寂しそうな声を零すシイナ。ロンの育ての親であるシイナは、今回のロンの生い立ちの話を聞いた際に、複雑な心境に陥っていた事だろう。

だが……………

「てか、そうそう!!……ロンの身分エックスなんだってね!!……凄くない!？」

そんな事はなかった。全然気にしてなかった。めちやくちや元気な声で喋るし、なんなら本当はエックスだった息子のロンを自慢するような口ぶりだった。

「そうなんすよ!!……ロンがエックスだったって事は、あいつと同じ日にシイナに拾われたこのオレもひよつとしてエックスだったのかもしれないと思うと夢があるよな」

「ないね」

「ないわね」

「むえ〜」??ないね

「……………」

アスラのエックス説を問答無用で切り捨てるエールとシイナ、ムエ。

マスターやエックスは基本的に容姿端麗だ。ぶつちやけ高身長でイケメンなロンがコモンではなく、実はエックスだったと言われても違和感がない。

だが、アスラは真逆の低身長で見た目も明らかに見窄らしい。どこをどう見てもコモンにしか見えないのだ。

「……そんなドストレートに言わなくても……」

「ハッハッハ!!……ごめんて」

流石にちよつとへこむアスラ。そして彼を慰めるシイナ。そんな光景が見える病室に、また新しい人物が加入して来て……

「お、お邪魔しまーす」

「ツ……イユ!!」

「今日退院するって聞いたから、遊びに来ちゃった……お取り込み中だった？」

「そんな事ないない!!……入りなよお嬢さん!!」

「いやシイナ。ここオレの病室なんだけど……別にいいんだけどさ」

それはイユだ。アスラが退院する〓もうすぐまた旅に出る。と考え、居ても立つても居られなくなり、こうして病院まで足を運んだのだ。

「教会に住まわせてもらえるんだっけ?……よかったわね」

「うん。私は私なりに強く生きてみる……それが私にできる償いだから」
「オマエはそんなに悪い事してないだろ？」

たわいもない会話を繰り返すアスラ、エール、イユ。

イユはミラーワールドでの一件以後、住む場所を探していた。三王のテンドウの協力もあつて、ようやく小さな教会に住まわせてもらう事が決定。シスターと共に子供達の世話をしている。

「それでアスラ、今日で退院って事はやつぱり、もうオウドウ都は出るの？」

「おう……早く紫のカラーリーダーに挑戦したいからな！」

「そっか……じゃあもうお別れなんだね」

「なあに。また遊びに来てやるさ」

目をギラギラと輝かせながらそう言うアスラを目に映すなり、どこか物寂しそうな表情になるイユ。

やはり、折角友達になれたのに、離れてしまうのが少しだけ悲しいのだろう。

「アスラ……その、最後にお礼しても良い？」

「ん？……お礼？……いや、オレなんかにお金使わなくてもいいぞ？」

アスラにお礼をしたいイユ。対するアスラは貧乏故の発想か、お金を自分に使わせてしまう事に自己嫌悪を感じるため、それを拒否するが……

「お金なんか使わないよ……」

イユはそう言いながらベットの所で腰を下ろしているアスラに近づき、その頬に唇を着けた……

所謂キスだ。

！！！

流石にこの光景は衝撃だったか、キスされたアスラを含め、エールもシイナも驚愕の様子。

「助けてくれて、ありがとう!!」

「え?え?……お、おお!!……どういたしましてええー?!」

「ちよ……え?……なっ、なっ、なっ、なあ~~~~~!!」

「わ~~~~~!……良い!……こう言う展開良い!!……ご馳走さまでした!」

キスされた左頬に手を置きながら流石に照れるアスラ。驚きのあまり髪の毛が逆立ち、困惑するエール。そしてシイナはめちやくちやイユに感謝した。

その後、まさかまさかの急展開の熱りが冷めた所で、アスラ達はイユと別れ、ロンのいるであろう、墓地へと向かった。

「ねえアスラ~~~~~:どうだったキスのお味は?」

「ツ!!……変な事聞くなよ」

墓地へ向かう途中。シイナがイユにされたキスの事を、凄くわざとらしく、それでいていやらしい言い方で聞いてきた。

「じゃあ今度はエールちゃんがアスラにやる番だね〜」

「なあッ!?!…なんでそうなるんですか!?!」

「そりゃ、イユちゃんと言う強力なライバルが出現したし、ここらでエールちゃんも頑張らなきゃ」

「だからそんなんじゃないですってば!!」

「??…2人ともなんの話してんだ?」

「バカスラは黙ってなさい!!」

「なんで!?!」

シイナがエールを揶揄うが、アスラは鈍感過ぎてその話の内容が理解できない。

そんなこんなでボケ有りツツコミ有りで街中を突き進み、ようやくオウドウ都、ライイ町側の墓地へと到着した。広大な土地に多くの墓石が所狭しと敷き詰められており、墓地らしく、どこか虚しさを感じさせるものがあつた。

「あ。ロンいた」

しかし、この時期は人数が少ない事もあり、その中からロンを見つけるのは容易だった。

……………

「……………あんたを本当の父親だとは思っていない。だが、このカード、ソーディアスアーサーは使わせてもらう。オレの夢のためにな」

『アーサー家の墓』と、刻まれた墓石に、そう誓いの言葉を告げるロン。その手にはアーサー家のカード、騎士の霸王ソーディアスアーサーのカードが握られていた。それは15年前まではロンの血の繋がった父親、ゾン・アーサーが持っていたモノだ。

「よおロン!!…もう用はすんだのかよ!」

「おう、チビスラ。オマエもようやく退院か?…オレはオマエよりも1日早く退院したぞ」

「誰がチビスラだあー!!……………オマエの方が早く退院した事なんて知ってるし!!」

アスラがロンに声を掛ける。それを機に、シイナとエールも2人に近づいて…………

「やあロン。今回は色々大変だったね。全部テンドウから聞いたよ……辛かった？」
「いや。関係ないし、辛くもないし、それで変わる事はない。オレはただあなたを超えるだけだ」

「ふふ、それを聞いて安心したよ」

慰めを掛けるかのうなシイナの言葉。しかし、ロンは既にそんなモノ超越している。

結局、やる事はこれからも変わらない。ソウルコアも使えないバカな幼馴染みで、ライバルのアスラと競い合い、育ての親でもある頂点王シイナを超えるだけだ。

「つしやあロン!!…:そんなじゃ、今どつちが上か勝負しようぜ!!…:こいつも試したいしな!!」

「あんたね。退院した直後にバトルやる気?」

「おう!!…:早く新しいデッキを試したいんだ!!」

アスラが新しいカード、ドラグレッダーのカードをロンに突き付けながらバトルを仕

掛けてきた。怪我が治った直後にバトルすると言うアスラのバトル好きに、エールは呆れた声を漏らす。

しかしそんな時だ。

別の誰かがその試合に水を刺すように話しかけて来たのは…………

「あつ…………シイナお姉様じゃないですか!!」

「げつ…………」の声は…………」

その声を聞くなり、頂点王シイナは最中が痒くなるのを感じた。4人がその声のする方へと首を向けると、そこには長い紫色の髪を一つに結っている女性がいた。

その人物は、シイナだけでなく、アスラとエール、ロンも認知している存在であり…………

「あ…………あああ!!…………あんたまさか、カゲミツ姐さん!」

「む?…………おお!!…………アスラじゃないか!!…………それにエール!!…………どうして2人がこんな所に…………」

「それはこつちのセリフよ。あんた、レイデル森の別荘に住んでるんじゃないわけ?」

「いや、飽くまであれは別荘。実家は違う街なのさ」

そこにいたのはカゲミツ。アスラとエールは一度だけ、彼女の別荘で一泊お世話になった事がある。バトルもしており、彼女はライダースピリットに選ばれる程の実力者だ。

「2人は既にカゲミツと知り合いなの？」

シイナがエールとアスラに聞いた。エールが難しそうな顔をしながら、「んーちよつとね」と、言葉を返す。

「いやくん!!…シイナお姉様あ!!…今日もご機嫌麗しゆう!!…私を嫁にしてえ!!」

「だあ!!…くつつくな、離れなさい!!…あんたね。私はそう趣味はないって何度言えばわかるんだよ!」

「カゲミツ姐さん、この間はテンドウさんを婿にするとか言っただけでなかったか？」

「む?…テンドウが私の婿で、シイナお姉様が私の夫、何か問題でもあるかアスラ？」

「え……何言っただよ姐さん」

カゲミツの意味深過ぎる発言に困惑し、ドン引きするアスラ。

「こいつ、昔からこんなんだから、苦手なんだよな。強い奴見つけると直ぐ「嫁候補」だの「婿候補」だの、めんどくさいいったらありやしない」

「シイナ様がツツコミ側に回るのは凄く新鮮ね」

カゲミツ・ブゲイ言う人間はバトルの腕前含め、あらゆる事に関して天才である。

しかし、天の神様は他の人間達と釣り合うようにするためか、どうしようもない程に彼女は変態だった。どこまで本気かはわからないが、彼女は性別を問わず、彼女より強い人間を好きになる習性があった。

そんな中、カゲミツはこの面倒くさい状況から逃げ出そうとしているロンを視界に入
れて……………

「ああ!!……………ロンだ、ロンもいるではないか!!」

「……………」

「え……………カゲミツ姐さん、ロンとも知り合いなのかよ」

2人にも面識がある事を知り、驚くアスラとエール。そんなカゲミツはロンの所へとスタスタと駆け寄り……………

「久しいなロン!!……………我が婿候補よ!!」

「……………知りません、そんな奴……………オレの名前はナイト・オブ・スペルタンです」

「ネーミングセンス!!……………逃げようたつてそうは行かないぞ!!……………もう一度私と血の滾るようなバトルをしようではないか!」

「嫌です」

カゲミツは猛烈にアピールしていくが、尽く仏頂面で返事をされる。このやり取りで、それなりの知り合いなのだ、アスラとエールも認識して……………

「おいロン!!……………オマエもカゲミツ姐さんと知り合いなのかよ!」

「……………極力再開したくない相手だったが、まあな。それに、この人はこう見えてこの国の紫の、5番目のカラーリーダーだ」

「ふ……………ん……………ん?」

紫のカラーリーダー……………?!

誰が?!

……………カゲミツ姐さん!!?!

「ええええ!!?!……………う、ウソだろ!!?!」

「カゲミツが紫のカラーリーダー!!?!」

「ふひひ……………バレたか。オマエが紫の町に来る時まで内緒にしておこうと思ったのだがな……………そうだ、アスラ、エール。私こそが、この国の紫のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイだ!」

気持ち悪い笑い声をあげながら、カゲミツがそう言った。

そう。森で出会ったこのカゲミツ・ブゲイこそ、アスラが倒さなければならない相手、カラーリーダーの内の一人。しかもそのナンバー2の実力を誇る強者である。

ロンは既に彼女に勝利を収め、紫のカラーカードを獲得しているため、彼女の事も知っていたし、婿候補にもなってしまうているのだ。

「し、信じられねえ……………いやでも実力は確かにたけえし、納得かも」

「私はまだ信じられないわ。こんな変態がカラーリーダーだなんて」

ちやつかり毒舌なエール。しかし、カゲミツはそんな彼女の言葉など全く気にせず、アスラの方に詰め寄って……………

「アスラ!!……………オマエ、カラーカードはスピーカーまで倒して、今は4枚あるんだってな。最近のカラーリーダー会議で聞いたよ……………どうだ。今ここでやるかカラー戦」

「!!」

「丁度ここは墓地。死を超越し、司る紫属性のカラー戦にはピッタリな場所だ」

カゲミツからのバトルの誘い。突然の宣告に、アスラは一瞬だけ戸惑うが、すぐさま口角を大きく上げて……………

「やる!!……………今ここで、5番目のカラーカードをもらいます!!」

「ふひひ……………威勢が良いじゃないか。オマエはレイデル森で会った時から目をつけてたんだよね……………楽しませておくれよ」

そこまで言うと、バトルを行うアスラとカゲミツ、それを観戦するエール、シイナ、ロン、エールの頭の上にいるムエは、墓地にある空きスペースへと赴く。
到着すると、アスラとカゲミツは、すぐさまBパッドを展開。デッキをセットし、バトルの準備を行った。

「最初に私と出会った時、オマエはまだヘラクレスしか倒していないかった。だが今は全カラーリーダー、三王、そして頂点王のシイナお姉様にも注目される程になっている。その実力を、この場で確かめさせてもらおう!!」

「おうカゲミツ姐さん!!……行くぜ、あの時とは比べ物にならない程強くなったオレの実力、存分に堪能してくれ!!」

……ゲートオープン、解放!!

エール、ムエ、シイナ、ロンが見守る中、2人のバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける……

……先行はカゲミツだ。

「ターン01」カゲミツ

「メインステツプ……先ずはネクサス、大天空寺の地下を配置!!」

1 「大天空寺の地下」LV1

バトル開始早々、カゲミツの背後に現れたのは、目玉のようなマークが刻まれた石碑。

「配置時効果發揮。もつとも、オマエは既に知っているだろうアスラ……デツキから3枚オーブンし、その中から対象となるライダースピリット、即ちゴーストを1枚手札に加え、残りはトラツシユへ落とす」

カゲミツはゴーストと言うライダースピリットに選ばれている。ネクサスの効果でそのカードを1枚回収した。

「これでターンエンド。さあ次はオマエの番だ。どこからでもかかって来い!!」

手札：5

場：【大天空寺の地下】LV1

バースト：【無】

「おう!!…行くぜ、オレのターン!!」

カゲミツのエンド宣言の直後、アスラがすぐさま己のターンを開始していく。

「カゲミツは変態だが、実力は三王に限りなく近い。このバトルであんたの真価が問われると言っても過言じゃないぞ、頑張れアスラ」

このバトルを傍観するシイナがそう言葉を落とした。カゲミツの事は煙たがっているが、彼女のバトル腕前は認めている様子。

「ターン02」アスラ

「メインステップ!!…つしやあ来い、ドラグレッタダー!!」

ー【ドラグレッダー】LV1(1)BP6000

空間が鏡のようにひび割れ、そこから赤き龍、ドラグレッダーがアスラの場合に鳥栖を巻き、出現。自分の新しい力に、アスラはその目をギラギラと輝かせており……

「うおお!!…カツケエ!!……でも今回はんな事言ってる場合じゃねえ、出し惜しみは無しだ。アタックステップ!!…翔ける、ドラグレッダー!!」

「ライフで受けよう……ッ!」

へライフ5??4<カゲミツ

ドラグレッダーが颯爽と飛翔し、口内から火炎弾を放出。カゲミツのライフルつを焼き払った。

「オレはこれでターンエンド!!」

手札：4

場：【ドラグレッダー】LV1

バースト：【無】

「ふひひ……成る程、何度かデツキが進化を繰り返しているようだな。そうではなくては面白くない！」

今のアタックでより気合が入ったか、カゲミツは己が楽しむためにターンシークエンスを進めていく。

「ターン03」カゲミツ

「メインステップ!!……一つ面白いモノを見せてやろう、私は!!……私自身を仮面ライダーゴーストに変身させる!!」

「!!」

……覚悟!!

……ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!

1 【変身!!仮面ライダーゴースト】LV1

陽気な音声に合わせ、パーカーが踊るように飛び交う。それは最終的にカゲミツの体に被さり、彼女はその瞬間から一本の角が生えたライダースピリット、ゴーストへと変身を遂げた。

「カゲミツ姐さんが変身?!」

「ふひひ……良い感じに驚いてるな。配置時の神託の効果……対象カードは1枚、よって1つのコアを追加!」

1 【変身!!仮面ライダーゴースト】(0??1)

「さらにこのカード、ゴースト オレ魂を召喚!!」

1 【仮面ライダーゴースト オレ魂「2」】LV2(3)BP4000

カゲミツは自分と全く同じ姿をしたライダースピリット、ゴーストのオレ魂を召喚。

その召喚により、変身している自身にコアを1つ追加した。

「一先ずはこれでターンエンド!!……もう一度オマエのターンだぞアスラ、存分に活用するがいい!!」

手札：4

場：【仮面ライダーゴースト オレ魂「2」】LV2

【大天空寺の地下】LV1

【変身!!仮面ライダーゴースト】LV1

バースト：【無】

変身と言うカードでアスラを驚愕させるも、このターンはあまり動かず、エンドとしたカゲミツ。

だが、変身できるのは彼女だけではなくて……

「ターン04」アスラ

「メインステップ!!……よし来た。見ててくださいい姐さん!!……オレの変身!!」

「!!」

「オレは!!……オレ自身を仮面ライダー龍騎に変身させる!!」

変身には変身だと言わんばかりに、アスラは変身龍騎のカードをBパッドに叩きつける。これでアスラは赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎に変身し、ゴーストに変身したカゲミツと対等な試合ができる……………

……………はずだった。

「え……………アレ?」

イユとの絆で生み出された変身龍騎のカード。ミラーワールドの神、オーデインを倒せたのもこのカードのお陰であったが、何故か今一度それをBパッドに置いてても反応が無く、アスラは龍騎の姿へと変身できなくて……………

「どうしたアスラ?…変身と言うのはハッターか?」

「い、いや違うっす!!……オレやれるんす!!……でも、なんでだ?」

考えてもキリがない。違和感は拭えないが、アスラは使えない変身のカードの事は一度置いておき、このバトルに集中し直す。

「まあいいや!!…だったらオレは、ドラゴンヘッドをLV2で召喚!!」

┌【ドラゴンヘッド】LV2(2)BP2000

変身龍騎のカードを手札に戻し、アスラは龍の頭部だけと言う小さなスピリット、ドラゴンヘッドを呼び寄せる。

「でもって残ったリザーブのコアをドラグレッダーに移動させてアタックステップ!!…頼むぜドラグレッダー!!」

「ライフで受けよう!!…:ツ」

〈ライフ4?!3〉カゲミツ

ドラグレッツダーの火炎弾が再びカゲミツを襲う。だが、ブロッカーのいるカゲミツの場を、アスラはこれ以上攻める事ができなくて……

「ターンエンド」

手札：4

場：【ドラグレッツダー】LV1

【ドラゴンヘッド】LV2

バースト：【無】

「どうしたのかしらアスラ。変身がどうかで騒いでたけど」

「あいつそんなカード持ってたっけ？」

「……………」

アスラがターンを終える中、エール、シイナが妙な違和感に気づき、そう呟いた。唯一アスラの変身を見ているロンは、何を考えているのか、ただ真剣な眼差しでこのバトルを眺めていて……………

「ターン05」カゲミツ

「メインステップ……は無し!!……シイナお姉様に良いところも見せたいし、そろそろアタック行くぞ、オレ魂で攻撃だ!!」

メインステップでは何も行動せず、そのままアタックステップへと移行するカゲミツ。その理由はトラツシユと言う名の墓地に理由があつて……

「フラツシユ、トラツシユに眠るガンガンセイバーの効果!!……ゴーストのアタック時に自身を召喚!!……そのままオレ魂と合体させる!!」

「!!」

【仮面ライダーゴースト オレ魂「2」+ガンガンセイバー】LV2(3)BP7000

フラツシユタイミングでオレ魂の手に剣脊が太めの剣が装備され、強力な合体スピリットと成り上がった。

「これでダブルシンボル!!…アタックも当然継続だ!!」
「ツ……ライフだ……ぐあっ!!」

〈ライフ5?!3〉アスラ

オレ魂が振るうガンガンセイバーの一撃が、アスラのライフを一気に2つ斬り裂く。
余の威力にアスラは身体が蹠踉めく。

「どうだアスラ。死を超越したゴーストのカード達。手札だけでなく、トラッシュの警戒を怠らない事だ、ターンエンド」

手札：4

場：【仮面ライダーゴースト オレ魂「2」+ガンガンセイバー】LV2

【大天空寺の地下】LV1

【変身!!仮面ライダーゴースト】LV1

バースト：【無】

「へっ……やっぱりカゲミツ姐さんはべらぼうに強いな……でも勝つのはオレだ!!」

それなりの攻撃を行い、そのターンをエンドとするカゲミツ。
バトルも中盤戦に突入。アスラもここで負けじと攻めに転ずる……

「ターン06」アスラ

「……よし、メインステップ!!……行くぜ相棒、仮面ライダー龍騎をLV2で召喚だ!!」
「!!」

ターン開始の刹那。

アスラは果敢に攻めるべく、己の相棒、最初に出会った第一の龍騎をこの場に召喚しようとする。

だが………

「……アレ……おい、どうした龍騎!!……召喚だ、来い!!」

アスラは幾度となく仮面ライダー龍騎の名を呼び、そのカードをBパッドに叩きつける。しかし、幾らやっても龍騎はこの場に呼び出されなくて……………

「大事なバトルなんだ!!……………頼む!!……………りゅ、龍騎?」

アスラは龍騎に、いや、自分自身に何か変化が起こっていた事を察したのか、力尽きたようにその名を呼ぶのをやめてしまう。

明らかな異変に、エールやシイナ、ロンと言った仲間達も緊張感を感じはじめて

……………

「ど、どうしたのよアスラ……………あんたさつきからちよつと変よ!」

「できないんだ……………」

「?」

「龍騎を……………召喚できなくなってる……………!?!」

—!!!

アスラは青ざめた表情でエールにそう告げた。

ミラーワールドから帰還し、ようやく気がつく自分に起きていた異変、変化。

そう。アスラは己を選んだライダースピリットである龍騎を召喚、変身する力を失っていた。衝撃過ぎる異常事態に、ロンはおろか、頂点王のシイナまでもがその額に汗を流している。

「龍騎を召喚できなくなっているだろ?……どう言う事だ」

「……それは……わかんねえ……」

対戦相手であるカゲミツにそう言われ、アスラは何故龍騎を使えなくなってしまったのかを考える。

そうしたら一つだけそれらしい原因が思い浮かんで……

……

「『もう一度あの力を使うか?』」

「『オマエ自身は単なる人間だ。アレを連続で使うと、代償が付き纏うぜ……!!』」

……

—!!

これはミラーワールドで自分が黒い龍騎の力を欲した時に囁かれた黒き謎の声。確かにあの時、代償が付き纏うと口にしていて……

「おい!!……オレの中にいる黒くて気持ち悪いの!!……あの時オマエが言ってた代償ってこれの事か!?!……そうなのか、おい!!」

「……アスラ!?!」

「なんとか言ってみろよ、この黒キモヤロー!!」

切羽詰まった様子で己の中に存在するそれに訴えかけるアスラ。しかし幾らやってもオニキスと名乗るそれは反応を示さない。エールも焦るアスラを心配そうに見つめる。

「どう言う事?……ロンは何か知ってる?」

「わかりません。龍騎と言うライダースピリットが本当にアスラを見限ったなら、もう既にカードそのものがどこかへ飛び去ってると思えますし、何より龍騎の中にいた赤い龍、ドラグレッダーを使えるのも不自然だ……何か、別の力が働いているんでしょうね」

シイナがロンに疑問を投げる。同じくライダースピリットに選ばれている彼は、経験となんとなくの感覚でアスラが龍騎に見放されているわけではない事を悟る。

「……どちらにせよ、今のあいつはライダースピリットを使う事ができなくなっているのは事実です」

「……ソウルコアが使えない、あいつの唯一の希望も振るう事ができなくなるなんて……」

幼い時のアスラを見てきたシイナは、この光景にショックを隠せなかった。あれだけ努力して積み上げて来たと言うのに、ソウルコアがなくても頑張つて来たと言うのに……

何故ここまで世界はアスラを見放すのだろうか……

「哀れだな」

「!!」

「オマエに期待した私がうつけだった。ソウルコアも使えないコモンの小童。オマケにライダースピリットも扱う事ができなくなったのであれば、私はもうオマエに興味は無い」

カゲミツから言い渡されたのは身体の芯までもが凍りつくような冷たい言葉。あれだけ優しくしてもらえたアスラからしたらかなり辛くて……………

「ライダースピリット無しでこの私に勝つ事など不可能だ。諦めろ。生まれながらの負け犬……………さっさとコモンしかない辺鄙な村にでも帰郷するがいい!!」

「……………」

重く……………

その言葉はどこまでも重くアスラにのし掛かって行く……………

コモンで、しかもソウルコアが使えないと言う致命的なハンデを生まれた時から背

負ったアスラは今まで、普通では考えられない程努力を繰り返して来た。

そしてその努力の末手に入れた相棒のライダースピリット龍騎。

それさえも消えた。積み上げて来た物がなくなる失望感は計り知れない。

消えて初めて自分がどれだけ龍騎に頼っていたかがわかる。諦めたい。もうどうでもいい。そう考えてもおかしくはない……………

だが……………

そうだとしてもアスラは……………

オレは、帰らねえし、諦めねえ!!!

「!!」

諦めなかった。アスラの信念の籠もった咆哮が墓地全体に響き渡る。

「カゲミツ姐さんはオレの夢知ってるだろ!!……オレは頂点王になるまで、カラーリダー、三王、ロン、シイナを超えるまで、もう二度と、絶対に諦めねえ!!」

「!!」

「この世界がどうしてもオレを頂点王にさせてくれねえって言うなら、オレはそれを全部飛び越えてやる!!……コモンだろうが、ソウルコアが使えるなろうが、ライダースピリットが使えるなろうが、関係ねえ、オレは頂点王になる!!……オレが諦めるのは、あの時で最後だ!!」

アスラはあの時、旅立つ前に龍騎に選ばれた瞬間の事を思い出していた。

あの時は諦めかけた。

しかし、踏みとどまり、最後まで諦めなかったからこそ、龍騎に選ばれたのだ。その時に誓った。もう二度と諦めたりしないと、自分の価値を疑ったりしないと……

「……………そうよ、あんたはそう言う奴よ……………絶対に頂点王になりなさい！」

エールが目には涙を浮かべながらアスラにそう言葉を落とした。彼女は最初こそアスラみたいなコモンのネズミが頂点王などなれるわけがないと考えていた。しかし、今では彼が未来の頂点王になる事を信じて止まない。

「フツ……………だからこそ、オレはオマエを倒したい、アスラ!!」

幼馴染みにして親友にして最大のライバル、ロンがそう言った。その言葉には彼に対する尊敬の念も込められている。

「……………そうだよなアスラ。ここでそれを言わないとあんたじゃない……………私は信じているよ、あんたがロンと一緒にもつと強くなるって事を」

最後に育ての親で彼らの目標でもある頂点王シイナが言った。元々彼のために得たような地位。そうだとっても彼らの中でその地位が大きな存在になっている事が嬉し

くてしようがなかった。

「オレはドラゴンヘッドにコアを追加してターンエンド!!……さあカゲミツ姐さん、カラー戦はまだ終わってねえ!!……どっからでも掛かって来やがれ!!」

手札：5

場：【ドラグレッダー】LV1

【ドラゴンヘッド】LV2

バースト：【無】

紫のコアシユート対策を施し、そのターンを終えるアスラ。ドラグレッダーには4つ、ドラゴンヘッドには5つのコアが置かれている。

最後まで決して諦めないアスラを見て、カゲミツは何を考えたのか、その口角を大きく上げると……………

「ハッハッハッハッハ!!」

ー!!

何がおかしいのか、天を大きく見上げながら高笑いした。しかし、それはたいへん彼女らしい理由であり……………

「やっぱりオマエは面白いヤツだアスラ。勝ち確定の勝負とわかってここまで血が滾つたのは生まれて初めてだ!!……………いいだろう、その無謀な挑戦、敢えて受けて立とうではないか!!」

アスラを見直し、己のターンを再び進行して行くカゲミツ。その圧倒的なプレッシャーは、アスラが今まで感じたどのカラーリーダーよりも鋭く、凄まじくて……………

「ターン07」カゲミツ

「メインステップ!!…マジック、双翼乱舞を使い、カードを2枚ドロ」

汎用的なマジックカードで手札を増やすカゲミツ。そしてそのカードを目に映すなり、笑みがこぼれ落ちて……………

「ふひひ……これを待っていたんだ……アタックステップ!!……ガンガンセイバー付きのオレ魂で攻撃する!!」

攻撃を仕掛けるカゲミツ。そしてこの瞬間より、手札からカードを一枚引き抜く……

それは彼女のデッキの中にある最強のエースカードであり……

「諦めなかった褒美だ!!……最後に良い物を見せてやるぞアスラ!!……フラッシュ、煌臨を發揮!!……対象はアタック中のオレ魂!!」

「!!」

「来るか、カゲミツの最強のゴーストが……!!」

何が来るのかを悟るシイナ。その直後に、オレ魂が無限の文字が描かれた光に包み込まれて行き、その中で姿形を変化させて行く。

「来い、仮面ライダーゴースト ムゲン魂!!」

00
 1 【仮面ライダーゴースト ムゲン魂+ガンガンセイバー】LV2 (3) BP150

その光が晴れると、そこには仮面ライダーゴースト最強の姿、仮面ライダーゴーストムゲン魂が現れていた。圧倒的過ぎる存在感がこの墓地全体を包み込む。

「す、スゲエ……これがカゲミツ姐さんの切札……めちやくちやカッケエ」

「お褒めの言葉は良い!!…身構えなアスラ!!…煌臨時効果、スピリット1体のコアを3つリザーブに置く!!」

「!!」

「私はこの効果でドラグレッダーのコアを取り除く!!」

1 【ドラグレッダー】(4??1)

カゲミツが効果発揮の宣言を行うと、アスラのドラグレッダーからコアがリザーブに戻される。しかし、1つ残ったため消滅は免れた。

しかし、それこそが彼女の狙いであり……

「その後、この効果でスピリットが生き残った場合、このターンの間、ムゲン魂はブロックされない!!」

「ツ……アンブロッカブル効果!？」

「ムゲン魂は元よりダブルシンボルのスピリット、ガンガンセイバーとの合体でトリプルシンボル!!……オマエの残りライフは3!!……これで終わりだ!!」

アスラの残りライフを一撃の元に葬り去ろうとするカゲミツ。ドラグレッツダーとドラゴンヘッドが動かない今、アスラに残された手はただ一つ……

「頼む、アドベントカードは発動してくれ!!……フラッシュマジック、ファイナルベント!!」

「この効果でBP15000以下のスピリット1体を破壊、オレはBP15000のムゲン魂を破壊する!!」

龍騎を得た共に得たアドベントカード。龍騎の使用が不可となった今、このカードが使用できるかも怪しかったが……………

「ツ……………よし、使える!!」

ファイナルベントの効果により、龍騎の額にある龍の紋章を象った炎がカゲミツのムゲン魂へと突撃していく。どうやらアドベントカードはならば問題なく使用できるようだ。

しかし……………

それが使えたとしても、三王に限りなく近い実力を誇るカゲミツの壁は遠く、分厚くて……………

「信じていたぞ、オマエなら逆転の手を叩き出してくると……………しかし、それではまだ勝たしてあげられない!!……………ムゲン魂のさらなる効果!!」

「!？」

「私の手札を2枚破棄する事で、ムゲン魂を対象に発揮された効果を無効にする!!」

「なにツ!!」

ムゲン魂に激突した龍の紋章を象った炎。しかし、ムゲン魂はそれをモノともせず、弾き飛ばしてしまった。

「如何なる効果であっても、私の手札がある限り、ムゲン魂は死なん!!」

「くっ…………!!」

「今度こそ……………終わりだ!!」

ドラグレッダーとドラゴンヘッドを素通りし、アスラのライフへゆつくりと歩み寄るムゲン魂。そして眼前まで近づくと、その手に握るガンガンセイバーにムゲンの力を溜め込んで……………

へライフ3??0へアスラ

振り切った。アスラの残ったライフは立ち所に全て消滅。

これにより、勝者は紫のカラーリーダー、カゲミツだ。圧倒的な実力の差をアスラに見せつけながらの勝利となった。仮にアスラが万全だったとしても、勝っていたのは彼

女かもしれない……そう思える程の差であった。

「……私の勝ちだ。今の心境を聞こうか、スーミ村のアスラ」

Bパッドを閉じながら、カゲミツがアスラにそう聞いた。スピリットやネクサスが消滅していく中、アスラは顔を上げて……

「もうっ最高だぜ!!……どんだけ強いんだよ姐さんは!!……マジスゲエ!!……でも次は必ずオレが勝つ!!……もつと強くなって出直して来ます!!」

笑いながらそう言い返した。最後まで自分が頂点王になれる事を疑わないアスらしいセリフだった。その応答に、カゲミツもまた口角を小さく上げると……

「ふひひ……そうだ、その返事だ。オマエは決してスタート時点に戻されたわけじゃない……ライダースピリットが無くなるのが、オマエと言うカードバトラーは確実に成長している……だがまだ足りない、もつと強くなれアスラ!!……私は紫の街で成長したオマエを待ち続けてやろう」

「おうっす!!…楽しみにしててください!!」

カゲミツは自分が思っていたアスラの最高の返事を耳に入れるなり、この場から去って行った。その表情はどこか満足しているようで、満足し切っていないようにも見える。

「……………っしやあ!!……………オレはまだまだ全然弱い!!…やるぞ、オレは絶対もつと強くなってやるあああ!!…修行だあああ!!」

「うっさ!!…負けた早々からうっさいのよあんたは!!」

カゲミツの背中が見えなくなると、より気合の入ったアスラは、改めて強く宣言した。この行為は彼が敗北して落ち込んでいるわけではないという何よりの証拠でもあつて……………

「うおお!!…修行には修行相手が付き物!!…ロン、行くぜ、修行だああー!!」
「嫌だ。というか、なんで無駄にテンション高いんだ」

「えええ?!…そりや、あの展開は身体が熱くなるだろ!?…え?ならない感じ!」

「あつはっは!!…あんたらのこの絡み好きだわ〜」

1人だけテンション高いアスラをロンとエールが冷たく接する。漫才みたいなやり取りに、シイナは1人大爆笑。

その光景はとてもではないが選ばれたライダースピリットが使えなくなったと知った直後の出来事とは思えなくて……

そしてそんな時だ。又しても聴き慣れた声色がアスラ達の耳を通過して……

「なんだ、修行相手を探してんのか小僧」

「ツ……テンドウさん!？」

そこに現れたのは三王の1人テンドウ・ヒロミ。ヘビースモーカーな彼は今日もまたタバコを口に咥えている。

「テンドウ。あんた、さては最初からいたな。カゲミツと絡みたくないからって言う理由でこっそり隠れて傍観してたろ」

「当然だ。誰があんなバイオレンスお嬢様と顔を合わせるかってんだ。一々媚になれだ

のうるせえ」

「あいつ結構嫌われてるのね」

テンドウが実はずっとこちら辺に隠れていた事を看破する頂点王シイナ。どれだけカゲミツが2人から煙たがれているのかがわかる。

「え……てか、テンドウさん!!……ひよつとしてテンドウさんがオレの修行の相手してくれるんですかアアアー!!」

アスラが目をギラギラと輝かせながらテンドウにそう聞いた。テンドウは啞えてたタバコを手に取り、口から煙を吐きながら返答して……

「まあ、それでも良いけどな……だが、ひよつとすれば、もつとうつてつけの相手がいるかもしれないね」

「え!?……三王のテンドウさんより修行相手に相応しい相手!?!」

まだ自分に相応しい修行相手がいる事に驚くアスラ。他と言えどもう残りは頂点王

のシイナくらいしか頭に浮かんで来ない。

その後、テンドウは巨大な手でアスラの頭に手をポンつと置くと……………

「おう、そんじゃ修行相手を探しに、いっちょ異世界行くか、小僧!」

「……………え」

そう告げて来た。

彼の言葉の意味がわかっていないアスラは頭の上にハテナマークをポカンと浮かべた。

七つの大罪竜篇

4-1 コア 「憤怒の竜、ドラグノ出陣」

「……テンドウさん……なんすかここ？」

「つべこべ言わずにさっさと入れ、ただのイカレジジイの実験施設だ」

「何よそれ。エックスの私もそんなところに入れるつもり？」

龍騎を召喚する力を失ったアスラ。

その力を取り戻させるべく、テンドウが案内したのは、オウドウ都にある小さな「ネコガイヌ研究所」と呼ばれる実験施設。そこから噴き出ている怪しげなオーラに、アスラとエールは思わず足を止める。

「つーかよー…エール、ムエ、シイナはわかっけど、なんでオマエも来てんだよロン!!…呼ばれたのはオレだぞ!!」

「三王の修行場所、単純に興味がある」

「まあまあ!!…良いじゃんアスラ!!…家族旅行みたいで楽しそうだし!!…こう言う展開

待ってたんだよね〜」

「オレ今から修行しに行くんだけど!？」

母に近い存在である頂点王シイナの緊張感の無い発言に、ツツコミを入れるアスラ。シイナは母親らしい事を彼らにした事があまりないため、異世界とは言え、3人でどこかへ行けるのが楽しみなようだ。

「まあ何人来てもいいわ。取り敢えず行くぞ」

「おうっす!」

テンドウが鉄製でできた研究所の扉を開き、中へと進んでいく。アスラ達一行もそれに続いて行った……………

中は予想通りのオンボロ研究所だった。明かりが薄暗く、それでいて気味が悪い雰囲気。気が漂っていた。それに加え、失敗作なのか、鉄の塊がゴロゴロ転がっているし、引きちぎれた謎めいたコードが辺りに散らばっていて、その気味の悪さに磨きがかかっている。

「おお!!……ここがイセカイって所かー!!」

「アスラ、多分違う」

「何なのよここ、汚いしこわー……」

異世界が何なのかを理解していないアスラに、ロンが白々しい目を向けながらそう告げた。

しかしそれは致し方ない事でもある。日常で異世界などと言う奇想天外な言葉など出てくるわけがないのだから。

「おお!!……やつと来よったな。待つとつたぞーい!!」

「??……ジイちゃん誰だ?」

「むっ……人を名乗らせたいなら先ずは己から名乗らんかい、チビ助!」

「ええ!?!……あんたの方が小ちやいよ!?!……スーミ村のアスラって言います!!」

そんな小さくて汚い研究所にいたのは他でもない、白い髭にくたびれた年寄り、ネコガイ又博士だった。

「誰よテンドウ。このお爺さん」

「前も言ったろ、世界を滅ぼしそうなジジイだよ」

テンドウがエールにネコガイ又博士の説明をする中、ネコガイ又博士は美人なエールとシイナを見るなり興奮して……………

「おお!!……………綺麗な女の子が2人も!!……………でかしたぞテンドウ!!……………これでおっぱい沢山揉み揉みできるぞ……………い!!」

シイナとエールに対して下心丸出しのネコガイ又博士、それに対して静かにブチ切れたエールの正拳突きが無言で炸裂。あまりの威力に地べたに這いつくばってしまう。

「ええ!!……………おいエール、何やってんの!?!」

「はあ?……………見てわからないわけ?……………制裁よ」

「いやいや、なんかその人すごい人っぽいや!?!」

「この世に逆らってはいけない人間がいる事を教えてあげるわ」

「ギヤアアア!!……………でもちよつと幸せえ!!」

その後もエールは追い討ちをかけるかの如く、倒れているネコガイヌ博士を長くて綺麗な足で何度も踏みつける。

しかし、ネコガイヌ博士は何故かそれを受けても笑っていて……

……………

その後、少しだけ時間が経ち、エールにボコボコにされたネコガイヌは体中にシツプを貼りながらも、ようやく話を進めた。

「……………で、異世界転送装置がいるんじやったな」

「おう。完成させたんだろ？」

「まあね〜!!…ワシちゃん天才だからのおお〜」

自慢気に語るネコガイヌ博士に、白々しい目を向けるエール。どうやらさつきの変態チックな発言もあり、彼を信用できていないようだ。

その後、ネコガイヌ博士はテンドウの手に小さな機械である異世界転送装置を渡す

が。

「ほれ。完成形異世界転送装置じゃ」

「……………なんか前と全然変わってなくね？」

「いやいやテンドウよ。舐めてもらっては困る、ちゃんと行き先も決められるし、前みたいな時間制限もない!!……………こう見えて完璧なのじゃよ」

「あんたが言うといマイチ信用性に欠けるんだが……………まあいいか。ほんじゃオマエら、今から異世界旅行行くぞ」

「散歩に行く感覚で異世界旅行とか言うのね」

テンドウがエールにツツコミを入れられながらも、完成形異世界転送装置をネコガイ又博士を除いた全員に向ける。

そんな中、アスラはこれから向かう世界にワクワクして……………

「……………楽しみだぜイセカイ!!……………オレは絶対もつと強くなる、待ってるよ修行相手!!」

アスラの言葉を最後に、テンドウが転送装置のスイッチを押した。すると、アスラ、口

ン、エール、ムエ、テンドウは鮮やかな虹色の光に包まれながら姿を消して行った。それを見送るかのように、取り残されたネコガイヌ博士は手を振っていて……………

ここはアスラ達が冒険をしている世界とはまた異なるとある世界。日が照りつける昼間のリアルな街並が広がる河川敷にて、2人の男女が決闘でも行うかのように向かい合っていた。

「今日と言う今日こそ、俺はお前に勝つ！…そしたら、俺と付き合ってくれ!!」

「お前のそれは聞き飽きた。いいからとっとと掛かって来い、どうせ勝つのは俺だ」

アスラ達よりもやや年増な茶髪の少年が、同じくらいの年齢の強気な少女に指を差し向けながらそう宣言する。

バトルに勝ったら付き合う。非常に意味深な話だが、これは彼らの中では常識中の常識。

「上等、今度こそ対策はバツチりなんだ！…目にももの見せてやるぜ光黄！」

デツキを構える二人。そんな彼らの側には、まるで相棒であるかのような小さなドラゴンが一匹ずつ……………

そして、遂に決戦の火蓋が切って落とされようとしたその瞬間だ……………

彼らの間に割って入るかのように、虹色の光と共にアスラ達一行が出現したのは……………

ー！！

「お、おお……………ここがイセカイってヤツか……………」

「あんた絶対異世界の意味わかってないでしょ」

初めての異世界体験に、アスラが感想を述べ、それに対してエールがツツコミを入れる。

そんな彼らを知っているのか、光黄はクールな外観からは想像できないくらい目を見開いて……………

「エール?……それにアスラも」

「え……光黄!」

「光黄さん!」

「え……誰?」

不本意な再会に、思わず顔を合わせるアスラ、エール、光黄の3人。光黄がアスラ達の世界に訪れた事があるため、面識があつたのだ。そんな中、唯一知らない烈我はキョトンとした表情を見せる。

「光黄久し振り!!……まさかまた会えるなんて!!」

「ああ、俺も思ってたよ」

『わあああ!!……エール様ああ!!……お久しぶりでございます!!』

「あなたの再会は別に嬉しくないわ。黙ってなさい」

『何故でございますかああ!?!』

ある一件以来、友情が芽生えていたエールと光黄。感動の再会を果たす中、女好きの

翼竜、ライトが美人なエールに飛びつくが、エールはそれを軽くあしらった。

「ああ、君確か、マリーナ海街でエールちゃんといた女の子!!…元気だった?」

「むえ〜」

「あ。どうも」

『まあ何と素敵な女性なんでしょう!!…私ライトと申します!!…以後お見知り置きをお嬢さん!!』

「はは、お嬢さんと呼ばれる年齢じゃないんだけどな」

一度光黄と会っているシイナとムエ。光黄は軽く頭を下げて挨拶を交わす。

その間にシイナを見た女好きのライトが凄まじい勢いで彼女に詰め寄った。25の年齢であるシイナ、お嬢さんと呼ばれるのに少しかだけ違和感を覚える。

「でもなんでお前達が俺達の世界に?」

「ああ……うん。それはこのバカスラから説明した方が早いわ」

「オレ、もつと強くなるため、このイセカイに修行しに来たんす!!」

アスラが拳を固め、目をギラギラと輝かせながら堂々と答えた。

そして、アスラの光黄に対する物言いに反応したのは、このライトだけじゃなくて
.....

「おいお前」

「??」

「なんかよくわからんけど、修行相手なら、光黄じゃなくてこの俺が引き受けてやるぜ
！」

「.....だ、誰だあんた.....?」

烈我がアスラにそう告げてきた。烈我の存在を初めて認知したアスラは頭に疑問符
のマークを浮かべる。

「オレは天上烈我!!...光黄の幼馴染みで、ライバルだ!!」

「幼馴染みでライバル??...オレ達で言うところの、ロンの感じの人か?」

「いやアスラ。そうだとしたら多分オレじゃなくてオマエがこの人的な存在だと思う
ぞ。熱苦しい感じとかそっくりだし」

堂々と自己紹介する烈我。アスラは彼の発言からロンと同じ立ち位置にある存在だと認識するが、ロンから見たらその逆。アスラが烈我的な存在だと感じていた。

確かに言われてみれば、熱血なアスラと烈我。クールなロンと光黄。一般的な感性からすれば烈我はこの世界でのアスラ的な存在であると言える。

『おい烈我。俺を忘れてもらったら困る』

「ッ!?…犬……なのか?」

『犬じゃねえよ!!…噛むぞこのチビ助!!』

「だから誰がチビだ!!…オマエの方が小ちやいよ!」

「こいつはバジユラ。光黄のとこのライトと同じで、七罪竜の支柱。でもって、俺の相棒だ」

烈我の横から飛び出して来たのは、赤い肉食恐竜をこれでもかとデフォルメしたような姿をしたドラゴン。その名はバジユラ。烈我の相棒であり、憤怒を司る七罪竜だ。

「うおお七罪竜!?!…マジ!?!…じゃああんたも相当バトル強いんだな!!」

「おう!!…もちのろんだぜ!!」

「俺には一度も勝った事ないけどな」

「ぐっ……いいよ、いつか絶対勝ってみせるし」

自慢気になる烈我に光黄の鋭い言葉が突き刺さる。

天上烈我と黄空光黄。幼馴染みでライバル関係にある2人だが、アスラとロンの関係同様、烈我は光黄に一度もバトルで勝てた事が無い。

バトルに勝利し、光黄と付き合うのを目標にしている烈我であるが、その目標は近くも、遠い存在なのである。

「へえ……光黄さんの方が強いのか!!……じゃあやつぱり、修行相手は光黄さんで!!……バトルお願いしまアアアアアす!!」

「いやいや待って待て!!……バトル相手は先ず俺からってさつきも言っただろ!」

「え?……でもあんた、この光黄さんよりかは強く無いんだろ?……オレは今、できるだけ強い人とバトルやりてーんだ。もつともつと強くなつて、超えたい人達がオレにはいっぱいいる!!」

自身の相棒とも呼べるカードである龍騎が使えなくなったアスラ。早く強くなりた

いと言う焦りから、烈我よりも強者である光黄とのバトルを求める。しかしその言い方に、烈我とその相棒であるバジユラは腹を立てて……………

「なに……オレと戦う道は遠回りとても言いたいのか……舐めんじゃねーよ、このチビ！」

『その言い方だとこのバジユラ様があの色欲魔より劣つてるとでも言いたげだなこのチビ助！』

「そこまで言つてねー。ただオレはもつと強くなりたいたいだけだ！…強くなるための近道なんてあるとは思つてねーけど、わかつてる範囲でできるだけ近道行きてーだろうがコノヤロー！」

「それを舐めてるつて言うんだよ！」

目線から火花が散り合う2人の主人公達。似た者同士であるからこそ、どこか食い違ふ事もあるようだ。

「なんか揉めてるね」

「揉めてるわね」

「揉めてますね」

「むえ〜」??揉めてるね

今にも喧嘩になりそうな両者に、そう言葉を呟くシイナ、エール、光黄、ムエの女子陣。そんな中、エールはある事に気がついて……………

「あの烈我って言う奴、どつかあのバカスラに似てるわね……………あ、じゃあ光黄が好き
な人ってひよつとして……………」

以前光黄が自分達の世界に訪れた際に自分だけに話してくれた想い人の話。その特徴が余りにもアスラと似ていた事を思い出すエール。

事実、その直感と予感は的中していた。

「そもそも。本当は今日、俺が光黄とバトルする約束してたんだ!!…急に現れた奴は引っ込んでろよ!…大体テメエ光黄になれなれし過ぎだろ!!」

『おうそうだ!…本当はあのクソ翼竜をぶっ飛ばす予定だったんだよ!』

「ああそうかよ!!…じゃあそのバトルが終わった後にオレが光黄さんとバトルさせても

らうぜ!!」

「それはそれで嫌だ!…光黄を倒した後は俺がお前をぶつ倒す!!」

「なんでそうなるんだよ!!…この茶髪ヤロー!」

「茶髪は悪口に入らねーだろ!!…テメーこそなんだその汚い灰色のツンツン頭は!!」

「これは生まれつきだアアア!!」

剥きになった2人の口喧嘩が本格的に始まる中。そんな彼らの間に、ある人物が割って入って来て……………

「はいはい、そこまでな。オマエ達のどんぐりの背比べ的な言い争いは見るに耐えないので、オマエ達自身で決着着けちゃってくださいーい」

ー!!

その正体はテンドウ・ヒロミ。タバコを啜えながら、無表情で彼らにそう告げて来た。実際最もな意見である。揉め事はバトルスピリッツで解決するのは、どこの世界も同じだ。

「て、テンドウさん!!…なんでこんなヤツらとバトルしなきゃいけないーんすか!?!」

「ああ!?!…なんだ小僧、オレの意見に従えねーとでも言うのか?…そもそもこの世界に
来れたのは誰のおかげだと思ってる?……テメーだけこの世界に置き去りにしてもい
いんだぞ」

「ギヤアア!!……すみませんでしたアアアア!!……だから頭ニギニギすんのやめ
てえええ!!」

生意気な口を聞いて来たアスラの頭を鷲掴みにし、握力だけでその頭を握り潰そうと
するテンドウ。異世界に置いていかれる前にあの世に逝きそうな予感がアスラの頭を
過ぎる。

「へへっ……怒られてやんのー」

そんなアスラを見て、少しいい気になる烈我だったが…
彼にも破壊神の魔の手が迫っていて…

「テメーもだよ、この小僧異世界バージョン。そもそもテメーがあーだこーだどつべこべ言つたせいでこうなつたんだろ。殺すぞ？」

「俺も!?!:ギャアア頭がアアアア!?!!!」

テンドウの余つた手で頭を握られる烈我。2人の主人公は揃いも揃つてこのテンドウには敵わないタイプであるらしい。

その後、テンドウの拘束より解放された2人は、バトルしないとテンドウに殺されてしまう事をお互いに悟り……………

「仕方ねー…:だつたら先ずはお前をぶつ倒してから光黄とバトルしてやる!」

「それはこつちのセリフだアアア!!」

取り敢えず今は目の前に現れた敵を倒す事だけを考える2人。そんな中、テンドウは又してもアスラに物申す。

「おい小僧。オマエ、まさかその使えね^{龍騎}カードがいっぱい入つたデッキでバトルするわけ?」

「え？……あ、まあ。龍騎がいないとデッキ40枚にならないし」

アスラは今、己を選んだライダースピリットである仮面ライダー龍騎を使用する事ができない。

故に、デッキ内にある龍騎のカード達は今正に使えないカード「死に札」と言っても過言ではない状況に陥っている事になる。

「仕方ねー。ほい、あげるわ」

「??」

テンドウはそう言いながら、懐より数十枚のカードを取り出し、アスラに手渡した。少々タバコ臭いそのカードをアスラは目に映す。

「それはオレが何年も前、まだカブトを持っていない時に使っていたカードだ。仕方ねーからくれてやるよ。持ってもあんま高価なカードはないし」

「ま、マジっすか!?!…テンドウさんのお下がり!!」

「モノの捉え方が気持ち悪いんだけど」

尊敬するテンドウよりカードを授かり、大喜びするアスラ。早速デッキの中にある龍騎のカード達を抜き取り、代わりにそのカード達を投入する。

「龍騎……待つてろよ。いつか絶対、またオマエに相応しいバトラーになってやるからな!!」

アスラは龍騎との思い出を思い出し、誓いの言葉を告げながら、それをズボンのポケットにしまった。

そしてその間、烈我が待ちくたびれているかのように軽く足踏みをしながら待機して
いて……………

「……………もういいか?……………じゃあやるぞ、バトル!……………来いバジユラ!」
『おうよ!!……………いっちょ暴れてやるぜ!!』

伝説のカード、七罪竜の石柱、バジユラがバトスピのカードの姿になると、烈我のデッキに装填。これで彼の準備は整った。

「おっ……やっぱそいつもカードになるんだな、カッケエぜ……よし、そんじゃ先ずはBパッドを……」

アスラがバトルを行うべく、懐より己のバトル用端末、Bパッドを取り出し、展開しようとしたその瞬間だった。

「Bパッド??……なんだそれ、そんなもんなくったって、バトルできるよ」

「え?」

「ゲートオープン、界放!!」

烈我がアスラにそう告げると、取り出した小さなキューブを地面に向かって軽く投げつける。

すると、辺り一面に眩い光が広がり、それはアスラと烈我を吸い込んで行って

……

……

「……………な、なんだよここ!？」

「ここはバトルフィールド、その名の通り、バトルスピリッツを行うフィールドだ」

溢れんばかりの光量に目を閉じていたアスラ。光が無くなると共にその目を開けると、そこには荒地のような光景が広がっていた。

ここはバトルフィールド。烈我達の世界では彼らとその敵対する団体の戦いにおいて使用される戦いの場だ。

「凄い……………光黄達は毎回こんな所でバトルしてるの?」

「毎回と言うわけでもない。一般のバトルフィールドはまた別にあるし」

エール、光黄、ライト、ムエ、シイナ、テンドウ、ロン。他の面々は、元の場所でのキューブから映し出される映像からアスラ達を視認していた。

「へー……………凄く広そうだね」

「フィールドの形ダンゴムシに似てない?」

これだけ広大なバトルフィールドを見ても流石に驚くそぶりすら見せない頂点王シイナと三王テンドウ。彼の言う通り、確かに丸まっついていないダンゴムシに見えなくもない……………

「おい。あんた、光黄とか言ったな。さっきのバジユラとか言うヤツはなんだ？」

『おい、その黒髪ノツポ!!…あなたたちよつと光黄様に馴れ馴れしいぞ!!』

「この羽トカゲもカードになるのか？」

『誰が羽トカゲですかアアア!!』

ロンは唯一、異世界のカードである七罪竜の情報を知らずにこの世界に来了。シイナやテンドウは役人故にどうしても情報が流れて来るが、彼は単なるカードバトラーであるからである。

そんな中、光黄はロンの質問に答えて……

「落ち着けライト。実際羽トカゲで間違ってないだろ」

『そんな、光黄様アアア!!』

「喧しくてすまないな。質問に答えよう、七罪竜って言うのは、ザックリ言うと、凄まじい力を持った7体のスピリットの事だ。7体全て揃えた者の願いを叶えると言われてる」

「ヘーあんだ、そんな凄い力あるのね」

『そうなんですよエール様!!…私凄いです!!…認めてくれましたでしょうか!!』
「いや別に」

七つの大罪と呼ばれるこの世で最も罪深き大罪。七罪竜とは、それらを一つずつ司る7体の竜の事である。バジユラもライトもその内の一種。

因みに、バジユラは憤怒で、ライトは色欲だ。2体ともその罪に準じた性格となっている。

「要するに、強いスピリットって事か」

「まあそうだな。ライトを褒めるように嫌だが、そんじよそこのスピリットでは先ず歯が立たない」

『そうですとも!!…私は光黄様のために存在する無敵のスピリットなのです!!』

「そこまで言っつてない」

「ふーん。まあどうでもよかったけど」

『何ですとこの黒ノツポ!!…ちよつと顔が良いからつて調子に乗るんじやありませんよー!!』

「だから寄せライト」

ロンに怒るライト。それを抑える光黄。バトルフィールド外の面々はその後もそれなりに和気藹々としていた。

「……そう言えば他のみんなはこのバトルを観てるのだろうか……?」

「おいチビ。先行は譲つてやるよ、さつさとかかって来い!」

舞台は戻りバトルフィールドでは、他のみんながどうなったか気になるアスラに対し、烈我が煽るようにそう告げて来た。

「なんだよ。余裕じゃねーか、茶髪コノヤロー……いいぜ、さつさとかかって来てやる。見せてやるよ、オレのバトルスピリッツを!!……オレのターン!!」

堂々たるアスラのターン開始宣言。遂に主人公2人の熱きバトルスピリッツが開幕する。

しかし、その一瞬。アスラはある事を閃いて……………

「ハッ……………待てよ、ここはイセカイとか言う場所のバトルスピリッツ。いつもみたいにBパッドは使っていない……………つまり……………ひよつとしてオレはここだとソウルコアが使えたりするのか!」

ここは異世界。Bパッドでバトルを行うのが普通であるアスラ達の世界とは違う。つまり、アスラはもしかしたらここであれば自分もソウルコアが使えるのではないかと期待に胸を膨らませ、バトル台を勢い良く見下ろす……………

……………しかし……………

「……………ねえええええええ!!」

もはやお約束か。

バトル台に赤くて大きいソウルコアは無く、青色の通常コアが4つ。やはり、この世

界のバトルスピリッツでも、アスラはソウルコアが使えなかった。

「何だよお前。ソウルコア使えないのかよ……どーなってるんだ？」

「うるせえ!!…ねーものはねーんだよ!!」

非常にコミカルな表情で怒り、涙するアスラ。ソウルコアが使えないと言う彼の謎めいた奇病は、先程彼と喧嘩していた烈我さえも同情心を誘う。

「……………そんなんでまともにバトルできんのかよ……一旦止めるか？」

「……………何言ってるんだあんた……一度始めたからには止める選択肢なんてねーよ……それに言っただろ?…オレにしかできないバトルスピリッツを見せてやるって?」

「ッ……………!」

アスラから感じる威圧。小さくて、ソウルコアも使用できないと言う最弱の設定であるはずなのに、何故か烈我は彼から恐怖と言う名の悪寒を感じ取ってしまう。

しかし、それは同時に彼の興味へと移り変わって……………

「へへっ……面白れー……じゃあきつさと始めてもらおうか！」

「おう!!…言われるまでもねえぜ、改めてオレの第一ターンだッ!!」

改めてターン開始を宣言するアスラ。前置きが長くなつたが、ここでようやく2人のバトルが本格的に始動する。

異世界での初めてのバトルと言う事もあり、アスラは気合を入れ、ターンシークエンスを進めていく。

「ターン01」アスラ

「行くぜ、メインステップ!!……来いドラゴンヘッド、シラムシーザー!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV2(2) BP2000

ー【シラムシーザー】LV1(1) BP2000

アスラの場合に龍の頭部と翼のみで活動が続ける小さなスピリット、ドラゴンヘッドと、幾本もの白いトゲを生やした赤いトカゲのようなスピリット、シラムシーザーが姿

を見せる。

この時点では今までの普通のアスラのスピリット達だ。
しかし、ここから一風変わったカードを使用し……

「へへっ……テンドウさん、早速使わせてもらいますよ……転醒ネクサス、決闘者たちの
戦場を配置！」

「ッ……転醒のカード!？」

ー【決闘者たちの戦場】LV1

アスラの背後に配置されたのは、熱く燃え滾る戦場。その炎は正しくアスラの闘志そ
のモノだとも言えて……

「オレはこれでターンエンド!!…さあいらっしやいませ、茶髪コノヤロー!!」

手札：2

場：【ドラゴンヘッド】LV2

【シャムシーザー】LV1

【決闘者たちの戦場】 LV1

バースト：【無】

アタックできない先行の第一ターンを終え、エンドとするアスラ。次は異世界の少年、烈我のターンだ。

「一々コノヤローコノヤローって喧しい奴だぜ」

『ガハハ!!…烈我、お前それ人の事言えないぞ!!』

「うるせえバジユラ!!…てかお前も一々喧しいだろが!!」

ターン開始の直前。デツキの中に眠るバジユラの声が烈我に届く。七罪竜と、その七罪竜に選ばれた者達は、バトル中にそうやってコミュニケーションを取って行くのだ。

「何はともあれ、同じ赤デツキならより負けらんねー!!…俺のターン!!」

ターンシークエンスを進めていく烈我。コアを増やし、デツキからカードをドロースる。

「ターン02」 烈我

「メインステップ、ライト・ブレイドラ召喚！」

ー【ライト・ブレイドラ】LV1（1）BP1000

烈我の場に薄青色の小さなドラゴンが姿を見せる。

「ツ……あんたも赤か」

「おうよ……負けないぜ、そっちが転醒ネクサスなら、こっちは創界神ネクサスだ!!……来い、創界神ネクサス、アポローンを配置!!」

「ツ！」

ー【創界神アポローン】LV1

烈我の背後に薄らと出現したのは、神たる存在アポローン。その手には敵を射抜くた

めの弓と矢が携えられている。

「配置時の神託を發揮!…今回の対象カードは1枚、よってアポローンにコアを1つ追加!」

ー【創界神アポローン】(0??1)

創界神ネクサスの特徴とも言える効果、神託の發揮により、烈我のトラッシュにはカードが、アポローンにはコアが追加された。

さらにこれだけでは終わらせないか、烈我はさらに手札にあるカードを引き抜いて
 ……

「まだ行く!!…俺は吟遊詩竜オルフェスタードラゴンをLV1で召喚!!」

ー【吟遊詩竜オルフェスタードラゴン】LV1(1S)BP4000

烈我の場に追加で召集されたのは、琴を手に持つ銀色のドラゴン、オルフェスター。

対象スピリットの召喚により、アポローンにコアが追加されると共に、それが持つ強力な召喚時効果が発揮される。

「召喚時効果!!…:BP7000以下のスピリット2体を破壊!!…:俺はこの効果でお前のドラゴンヘッドとシヤムシーザーを破壊する!!」

「なにっ!?!」

琴の線を弾くオルフェスタードラゴン。そこから奏でられるメロディーが具現化し、アスラのドラゴンヘッドとシヤムシーザーに直撃。それらを爆散させる。

「まだ終わらない!!…:その後、トラッシュユにある界渡、化神を持つスピリット1枚をトラッシュユから回収!!…:俺はキースピリットのこいつ、リユキオースを手札に加える!!」

「ぐっ…:神託の効果でトラッシュユに送られたカードか…:…」

烈我は己がキースピリットと呼称するカードを手札に加える。キースピリットと聞いて、当然強いカードであると判断するアスラ。より一層その手札を警戒する。

「アタックステップ!!…アタックだ、ライト・ブレイドラ、オルフェスター!!」

2体のドラゴンが宙を地を駆ける。場のスピリットを全て破壊されたアスラはこれをライフで受けるしかなくて……

「2つともライフだ!!……ッ」

〈ライフ5??4??3〉アスラ

ライト・ブレイドラの体当たりが、オルフェスターの琴から弾かれる具現化するメロデーが、それぞれ1つずつアスラのライフを葬り去った。

「よし!!…俺はこれでターンエンドだ!!」

手札：3

場：【ライト・ブレイドラ】LV1

【吟遊詩竜オルフェスタードラゴン】LV1

【創界神アポローン】 L V 1

バースト：【無】

そのターンを終える烈我。僅か1ターンで圧倒的優勢に立ったのは間違いない。しかし、彼の実力の高さを知ったアスラはその闘志に火をつけて……

「ターン03」アスラ

「メインステップ……行くぜ、オレの新しい仲間!!……ドラグノ突撃兵をL V 2で召喚!!」
「!!」

1【ドラグノ突撃兵（R）】 L V 2（3） B P 6 0 0 0

手札のカード1枚を手に取り、それを勢い良くバトル台に叩きつけると、アスラ場に竜人スピリット、ドラグノ突撃兵が出現。

その手には自身の身の丈程ある巨大なハンマーが握られており、アスラはその勇姿に歓喜する。

「うおお!!…カツケエ!!…流石昔テンドウさんが使ってたスピリットだぜ!!」

「ドラグノ??…聞いた事ないスピリットね」

「まあどこにでもある安物のカードだからな。エックスのお嬢様は知らないだろうよ」

ドラグノスピリット。その昔、テンドウ・ヒロミがライダースピリットであるカブトに選ばれる前に使用していたカード群である。彼の言う通り、一枚一枚のほとんどが安く、高価なカードしか持っていないエールからしたら縁の無いカード達である。

「っしやあ!!…行くぞ突撃兵、アタックステップだ!!…突撃兵はその効果でドラグノスピリット全てをBPプラス3000する。さらに配置された決闘者たちの戦場の効果で、起幻を持つスピリットにもBPプラス3000!!…よってそのBPは12000だ!!」

「なッー!?!…BP12000!?!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】BP6000??9000??12000

3コストのスピリットでありながら凄まじいBPアップを果たす突撃兵。そしてその名前の通り、アスラは突撃させて行く。

「突撃兵でアタック!!…LV2効果でカードを1枚ドロ、そして決闘者たちの戦場のさらなる効果で、ライト・ブレイドラに指定アタックだ!!」

「!!」

ここで決闘者たちの戦場のもう一つの効果が適応。突撃兵は視線の先に烈我ではなく、ライト・ブレイドラを映すと、重圧なハンマーを振り回しながら、それ目掛け走り出した。

「BPは当然オレの方が上だアアア!!」

「くっ……!!」

ライト・ブレイドラは突撃兵のハンマーに潰され、爆散してしまう。

「だが!!…この程度じゃ俺はビクともしねえぜ!!…アタックにより疲労したドラグノ

突撃兵はこれ以上のアタックができない、次のターンで一気に決めさせてもらう!!」

まだ烈我の場にはオルフェスタードラゴンがおり、次のターンで手痛い反撃を喰らうのは明白。

しかし、アスラはまだ止まらない。

「まだまだ!!…オレのスピリットは、まだ動く!!」

「!?!」

「ドラグノ突撃兵、【追撃】の効果発動!!…もう一度アタックだ!!…効果でカードを1枚ドロ―し、決闘者たちの戦場の効果でオルフェスタードラゴンに指定アタック!!」

「なにツ―!?!」

このターンは動けないと思われた突撃兵だったが、ライト・ブレイドラを倒した直後にまさかの鳴動。今度はオルフェスタードラゴンにハンマーを振るう。直撃したオルフェスタードラゴンは吹き飛ばされ、爆散した。

アスラのまさか過ぎるこの攻撃に、テンドウ以外の誰もが驚愕していて……………

「どうなってるんだ……なんでドラグノ突撃兵はもう一度アタックができたんだ!」

「ドラグノ突撃兵の効果【追撃】は、疲労状態から重疲労状態にする事でもう一度アタックができる!」

「ツ……疲労から重疲労!」

「ああそうだ!……オレは突撃兵を重疲労状態にしてもう一回アタックしたんだ!」

疑問を抱く烈我に、アスラが説明する。その間にドラグノ突撃兵は疲れ切ったのか、ハンマーを地面に下ろし、膝を突いた。

「疲労状態からのアタック………なんか、バトルを諦めない、あいつそのモノみたいな効果ね」

エールがバトルフィールドのアスラとドラグノ突撃兵を目に映しながらそう呟く。確かに、疲労しても諦めず、攻撃を繰り返すのは、アスラのバトルを体現していると言える。

「成る程【追撃】か……それには驚いたぜ」

「おう!!…でもまだ終わらせねえ!!!」

「!?」

「自分の赤のスピリットが相手スピリットを破壊した事により、決闘者たちの戦場の効果!!…【転醒】!!」

「ッ……このタイミングで!？」

「ああ……スピリットとして転醒せよ、ドラグノ決闘者!!」

ー【燃え盛るドラグノ決闘者】LV1（1）BP6000

アスラの背後にある決闘者たちの戦場から飛び出して来る何か。それがフィールドへと足を着けると、決闘者たちの戦場はたちまち消滅した。

現れたのはドラグノ決闘者。4本の腕にそれぞれ剣を構え、烈我を威嚇するように咆哮を上げる。その間、【零転醒】以外の【転醒】を始めて目の当たりにしたエールは思わず驚きの声が漏れる。

「ネクサスがスピリットに!？」

「ドラグノ決闘者は、自分のアタックステップ中、起幻を持つスピリット全てのBPプラ

ス5000。さらに突撃兵の効果で3000プラスされ、今の決闘者のBPは……………」

ー【燃え盛るドラグノ決闘者】BP6000??11000??14000

「れ、LV1でBP14000!」

「そう言う事だ……………行け決闘者!!」

凄まじいBPとなった決闘者。4本の剣を構え直し、烈我のライフへと飛び掛かる。烈我の場には突撃兵によってプロツカーは消去されていて……………

「ライフで受ける……………ッ」

〈ライフ5??4〉烈我

ライフ1つが斬り裂かれる。烈我は余の勢いに半歩蹠跟めく。

「エンドステップ、この瞬間、突撃兵と決闘者の効果が消え、BPは元に戻る!!……………これで

ターンエンド!!…どうだ、諦めないオレのバトルスピリッツ!!」

手札：4

場：【ドラグノ突撃兵へR】LV2

【燃え盛るドラグノ決闘者】LV1

バースト：【無】

前の烈我のターンにも負けるとも劣らない怒涛の攻撃を見せたアスラ。エンドステップも豪快に宣言して見せる。

「やるな……だけど俺もバトルは最後まで諦めねえ。さっきも言ったよな、俺が手札に加えたのは……」

「ツ……キースピリッツのカード……ツ！」

烈我がアスラにそう告げると、反撃に転ずるべく、彼は己のターンシークエンスを進行させて行く。

「ターン04」 烈我

「メインステップ……見せてやるぜ、俺のキースピリット!!……こいつを前に絶対はねえ、鉄壁の壁だろうが無敵の相手だろうが一撃必中必殺の矢を叩き込めッ!……龍星の射手リユキオース、LV1で召喚ッ!!」

「!!」

フィールドから吹き上げる火柱、それらは美しく、滑らかに左右へと分かれ展開。そしてその狭間より現れ出たのは、白獣に跨って駆け抜ける龍、リユキオース。彼がバジユラと出会う以前から使用し続けているキースピリットだ。

┆【龍星の射手リユキオース】LV1(1S)BP6000

「召喚時効果【スーパードレフト超祈願】!!……アポローンにコアを3つ追加!!」

┆【創界神アポローン】(2??3??6)LV1??2

召喚されたキースピリット、リユキオースの効果により、凄まじい速度でコアを増や

して行くアポロン。

そしてさらにリユキオースの効果はこれだけではなくて……

「まだ行くぜ、こつちが大本命だ!!…【龍射撃】発揮!!…BP20000以下のスピリット1体を破壊する、この時、如何なる効果であつても、防ぐ事はできない!!」

「!!」

「ドラグノ決闘者を破壊だ!!」

龍星の射手。その名に恥じない強烈な炎の矢がリユキオースより放たれる。ドラグノ決闘者は4本の剣を盾にそれをガードするも、龍星の力を得た炎の矢は、束ねられた4本の剣を、ドラグノ決闘者諸共撃ち抜いた。

屈強たる竜戦士、ドラグノ決闘者もこれには堪らず力付き、爆散してしまう。

「バーストをセット。もう容赦はしないぜ、アタックスステップ!!…行けリユキオース!!…さらにこのフラッシュタイミング、創界神アポロンの【神技】!!…自身に置かれてあるコア2つをボイドに送る事で、BP6000以下のスピリット1体を破壊して1枚ドロー!!」

「!!」

「お前のドラグノのスピリット達は自分のアタックステップ中のみBPを上げる。けど俺のターンだとそれは発揮されない!!…ドラグノ突撃兵、もらったぜ!!」

リュキオースが跨っている白獣と共に駆ける瞬間。今度は創界神であるアポロンの炎の矢が放たれる。ドラグノ突撃兵はそれに胸部を貫かれ、ドラグノ決闘者同様爆散してしまった。

(…:…クソ…:…こんな時、第二の龍騎があれば…:…カウンターに次ぐカウンターで一気に勝負を決められるのに…:…!!)

この瞬間、アスラが不本意ながら思い浮かべてしまったのは、今は使えないバースト龍騎、又の名を第二龍騎。

確かにあれがバーストで伏せられていたら、烈我のリュキオースを破壊し、アスラが優位に立っていた事だろう。しかし、使えないモノは使えない。とつくの前にそう割り切っているアスラは、すぐさま心を切り替えて…:…

「そのキースピリットのアタックはライフで受ける!!……ぐっ!!」

へライフ3??2へアスラ

リュキオースの炎の矢が、今度はアスラを襲う。そのライフは1つ射抜かれ、遂に残り2つへと陥った。

「ターンエンド。どうだ、これが俺のキースピリット、リュキオースの力だ!!」

手札：3

場：【龍星の射手リュキオース】LV1

【創界神アポローン】LV1

バースト：【有】

「……つえー……でもオレは負けらんねー!!……絶対このバトルに勝って、頂点王にまた一歩近づいて見せる!!」

七罪竜と呼ばれるバジユラを使用せずとも、この実力の高さを誇る烈我の強さに痺れ

るアスラ。その闘志はさらに熱く燃え上がる。

「ターン05」アスラ

「メインステップ!!…ドラゴンヘッド2体と、2体目のドラグノ突撃兵を召喚!!」

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

┆【ドラグノ突撃兵(R)】LV1(1)BP4000

アスラの場合に2体のドラゴンヘッドと、2体目のドラグノ突撃兵が招集される。そしてアスラは立て続けに手札を引き抜き、それをバトル台へと叩きつけて……………

「さらに来い、ドラグノ総軍団長!!」

┆【ドラグノ総軍団長】LV1(2)BP4000

赤いシンボルが砕けると共に爆誕したのは、ドラグノの指揮官的存在。座椅子に腰を下ろしていたそれは、重たい腰をゆっくりと立ち上げると、4本もの腕があるからこそ握れる3本の剣を構え、烈我を威嚇するように咆哮を上げた。

「総軍団長??:…何、偉いわけ?」

「ああ。渡したカードの中では、一番強いな」

総軍団長と言う言葉に疑問を浮かべたエールに対し、テンドウがそう答えた。アスラのデッキに龍騎がない今、このドラグノ総軍団長は事実上のエースカードと言っても過言ではない。

「アタックスステップ、その開始時、総軍団長の効果発動!!…トラッシュにあるコアを5個までオレのスピリットに追加!!」

「ツ……コア回収効果か」

「オレは!!…トラッシュにあるコア3つを総軍団長、突撃兵にそれぞれ1つと2つずつ追加し、L V 2にアップさせる!!…さらにこの時、総軍団長以外のドラグノスピリットにコアが2つ以上追加された時、デッキからカードを2枚ドロウする!!…ドラグノ突

撃兵にコアが2つ置かれた事により、オレは2枚ドロー!!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】(1??3) LV1??2

ー【ドラグノ総軍団長】(2??3) LV1??2

コアを無駄なく循環させ、手札の数も取り戻して行く。

「アタックステップは当然継続!!…頼むぜ突撃兵!!…効果で1枚ドロー!!…総軍団長のLV2効果、ドラグノがアタックした事により、さらに1枚ドロー!!」

「ッ……マジかよ、こんだけスピリットを展開してのに手札が減ってない??…寧ろ増えてやがる」

アタックしながらも増え続けるアスラの手札。烈我がその驚異的なプレイングに驚愕する間もなく、ドラグノ突撃兵がハンマーを振り回しながら攻め込んで来ていて
………

「ライフだ!!……ッ」

へライフ4??3〕烈我

突撃兵のハンマーが烈我のライフを1つ打ち砕く。

「まだまだ行くぜ!!…〔追撃〕だ、突撃兵!!…アタック時と総軍団長の効果で2枚ドロ
!!」

ここでドラグノ突撃兵の〔追撃〕が再び発動。重疲労状態になりつつ、もう一度アタックへと赴く。その間でさらに2枚のカードをドロし、遂に手札総数は7枚に突入した。

初めて扱うカード達であるにもかかわらず、それらを使いこなし、怒涛の攻撃を行うアスラを目の当たりにしている仲間たちは驚かざるを得なくて……

「す、凄い……なんで渡されたばかりのカードを手足のように使いこなせてるの!？」
「当然だ。オレは使いこなせないヤツにカードは渡さね……今まで散々修羅場を潜り抜けて来たあいつだったら、このくらい余裕だわな」

驚くエールに、テンドウは無表情でタバコを吸いながらそう告げた。少なくとも成長したアスラの実力を認めているのが窺える。

そんな中、バトルフィールドではアスラが増えた手札の中からカードを1枚引き抜いて……………

「フラッシュマジック…ストライクベント!!…BP8000以下のスピリット1体を破壊できる!!」

「!!」

「オレはこの効果であんたのキースピリット、リユキオースを破壊だ!!」

アスラの場合より放たれる火球。それは烈我の場に存在するキースピリット、リユキオースを焼き尽くし、爆散させた。

「……………スゲエ……………マジでスゲエゼドラグノ。こんだけ召喚して、アタックしてるのに、手札が全く減らないし、応用が効く……………オレのやりたい事がスムーズにできる!!……………龍騎じや見えなかったモノが、このカード達には見える!!」

アスラは思っていた以上に、自分のプレイスタイルと、このドラグノデッキが噛み合っている事に気がつく。

そして前のターンから一転、一気に形成を逆転された烈我だが、これ以上好き勝手にやられるわけにはいかないか、カード効果の発揮を宣言し、反撃に出る。

「やられっぱなしでいられるかよ!!…アポロンの【神技】!!…BP6000以下のドラゴンヘッドを破壊して、1枚ドロロー!!」

「!!」

アスラのターンでも使用できるアポロンの【神技】

炎の矢が、2体のドラゴンヘッドの内1体に炸裂。撃墜させられ、爆散してしまう。

「さらにドラグノ突撃兵のアタックはライフで受けてやるぜ!!……ッ」

〈ライフ3??2〉

ドラグノ突撃兵【追撃】の攻撃。それもライフで受ける烈我。彼の残りライフも遂に2へと陥る。

しかし、そのピンチに呼応するかのように、前のターンで伏せられていたバーストカードが勢い良く反転する……………

「決めさせないぜ!!…ライフ減少によりバースト発動!!…ドラグーンシユート!!」

「ツ……紫のバーストマジック!？」

「効果により、トラツシュからコスト6以下のスピリット1体をノーコストで召喚する!!……蘇れ、リュキオース!!」

1 【龍星の射手リュキオース】 LV3 (4S) BP10000

紫のオーラを放つ魔法陣が出現すると、その中からストライクベントによって破壊されたリュキオースが再び烈我の場へと復活を果たす。

もちろん、その召喚時効果は健在であって……………

「召喚時の【龍射撃】!!…ドラグノ突撃兵を破壊するぜ!!」

「ツ……アタックが終わった突撃兵を対象にするのか!？」

再び放たれるリュキオースの炎の矢。それは何故か【追撃】の効果で二度のアタックを終えたドラグノ突撃兵に命中。爆散し、姿を消してしまうが、単純にアスラの攻めてを減らしたのであれば、ドラゴンヘッドかドラグノ総軍団長を対象にするべきだったはずで……

「だけどこれでフルアタックしても俺のライフは0にできない。お前はターンを終了せざるを得ないはずだぜ!」

「ツ……ああ、オレはこれでターンエンドだ」

手札：6

場：【ドラグノ総軍団長】 LV2

【ドラゴンヘッド】 LV1

バースト：【無】

B Pの高いリュキオースが出て来た時点で攻めるにも攻め辛くなったアスラ。致し方なくそのターンをエンドとする。

「なあ、テンドウ。あの子のプレイング。単純なミスだと思うか？」

バトルを見届けている頂点王シイナ。烈我のプレイングについてテンドウに聞いた。彼は啞えたタバコを口から離し、煙を吐き出した後に返答する。

「いや、違うだろうな。アレはどう見ても狙ってやったな。あの小僧異世界バージョンが何を企んでんのか知らねーが、少なくともミスじゃねー」

「……バジユラだ。烈我の奴は七罪竜、バジユラの効果を最大限に活かすために、敢えてブロッカーを残すプレイングを行ったんだ」

頂点王シイナや三王テンドウが烈我のプレイングをミスではないと悟る中、光黄がその口を開いた。彼のデッキをある程度熟知している彼女だからこそわかる事である。

「バジユラってあの恐竜みたいな奴？」

「ああ。まあ見ていればわかる」

エールがバジユラの存在を思い出し、そう言葉を落としたりした。そして再び注目される2人のバトルスピリッツ、烈我が勢い良くターンシークエンスを進行させて行く。

「ターン06」烈我

「メインステップ、先ずはライト・ブレイドラを召喚!!」

メインステップ早々、本日2体目となるライト・ブレイドラがフィールドへと出陣。そしてまた新たな手札に手を掛け、口角を上げる……………

「待たせたなバジユラ!!…一緒に暴れようぜ!!」

『待ちくたびれたぜ烈我!!…さっさと暴れさせろ!!』

「おう!!…行くぜ!!」

烈我は声を荒げ、高らかにその驚異的な存在、七罪竜をこの場に呼び寄せる。

「罪を背負いし怒りの竜…憤怒の炎、烈火で地獄さえも焼き尽くせ…爆我炎龍バ

ジユラブレイズ、LV3で召喚ツ!!」

ー【爆我炎龍バジユラブレイズ】LV3（5S）BP12000

大気が震え、空は一瞬にして暁色に切り替わったかと思うと、空より降り注ぐ無数の流星群、ある一帯を除いて流星は地面を抉り、まるでステージのような土台を作り上げると、土台の上に注ぐ巨大な火球、炎より眼光を輝かせてバジユラブレイズがその姿を見せる。

『グルアアアアアアアアアアツ!!!』

「不足コストはライト・ブレイドラから確保!!」

今まで召喚されて来たドラゴン達とは比べ物にならない程の咆哮を上げるバジユラブレイズ。その気迫だけで空気を震撼させ、地を抉る。

「こ、これがバジユラブレイズ……めちやくちやカッケエ……!」

『そうだろうチビ助。憤怒の罪竜の力、存分に味わっていきな!!』

「おう!!…その上で、オレが勝つ!!」

鋼の鎧と兜を身に纏い、そして両手に炎を纏いし龍、バジユラブレイズ。場の空気を一変させるバジユラに思わず戦慄が走るが、それでも尚、臆せず、怯まず、寧ろ笑ってみせるアスラ。

その間、烈我は本当のバトルはここからだと言わんばかりにアタックステップを開始して……………

「行くぞバジユラ、アタック!!…その効果【火力促進^{ヒートアップ}】を發揮、このバトル中BPをプラス5000。さらに手札を1枚破棄する事で、お前はこのアタックを必ずスピリットでブロックしなければならない!!」

「ツ……頼む、ドラゴンヘッド!!」

ー【爆我炎龍バジユラブレイズ】BP12000??17000

赤属性特有の【激突】の効果に似た効果を發揮するバジユラ。アスラは咄嗟にドラゴンヘッドでブロックするが……………

『この程度、相手にもならんなッ!!』

上空を飛び回るドラゴンヘッドを驚掴みにし、地面へと叩き落とすバジユラ。ドラゴンヘッドは最後には着地と同時に踏み潰され、爆散してしまふ。

これでアスラの残ったスピリットはドラグノ総軍団長のみ……………

「【火力促進】を使用したバジユラがスピリットを破壊した時、回復する!!」
「!?」

「もう一度行け!!…再び手札を1枚破棄して【火力促進】だ!!」

【爆我炎龍バジユラブレイズ】（疲労??回復） B P 1 2 0 0 0 ?? 1 7 0 0 0

二度目となるバジユラの攻撃。アスラは当然これもブロックしなければならぬ。そして今、ブロックが行えるのはドラグノ総軍団長だけ……………

「くっ……………ブロックだ、総軍団長!!」

4本腕を活かし、3本の剣を構え、バジユラブレイズへと斬りかかって行くドラグノ総軍団長。しかし、バジユラはその3本の剣を炎を纏わせた拳の一撃のみで粉々に粉砕してみせる。

『どうした!!……この程度か竜人野郎!!』

武器を失った総軍団長を全力でぶん殴るバジユラ。ドラグノ総軍団長は4本の腕を前に突き出し、一度はガードしてみせるが………

『オラオラオラオラオラオラアアアアアア!!』

その後、何度も何度もドラグノ総軍団長を殴りつけるバジユラ。遂にその4本腕のガードを崩し、その土手つ腹をぶん殴り、焼き尽くしてみせる。

ドラグノ総軍団長は流石に耐えられず、堪らず爆散。アスラのスピリットはここに来て再び全滅となった。

「【火力促進】の効果で回復!!…バジユラで再アタック、そしてこれで三度目のアタック……よって、バジユラの第二の効果【超爆火力】オーバーヒートを發揮!!」

「オーバーヒート!?!」

「そう、オーバーヒートだ。もうバジユラは止められない!!…アタックステップ中、バジユラが3回以上アタックしていた場合、このターンの間、バジユラのBPを5000上げ、回復させる!!」

「ツ……また回復しやがった……!!」

ー【爆我炎龍バジユラブレイズ】BP 12000?? 17000?? 22000

憤怒を司る七罪竜、爆我炎龍バジユラブレイズの効果【超爆火力】……

自力で三度のアタックを行わないと行けないと言う厳しい条件があるものの、それさえ満たせて仕舞えば無限にBPを上げながらアタックを行える強烈なインパクトのある効果。

烈我はこの効果を使うために、前のターン、アスラの場合にブロッカーが2体残るように立ち回ったのだ。

「もうお前の場にブロッカーはいない!!…ライフで受けてもらおうぜ!!」
 「ぐっ……ライフだ!!……ッ」

へライフ2?!1へアスラ

バジユラの炎を纏った正拳突きがアスラのライフを砕く。

「これでトドメだ!!…行けバジユラ!!…【超爆火力】でBPプラス50000してドロ、回復だ!!」

00 ー【爆我炎龍バジユラブレイズ】(疲労??回復) BP17000??22000??270

再び発揮されるバジユラの【超爆火力】……

そのBPが飛躍的に上昇すると共に回復。最早そこらへんのスピリットでは対処ができない……

そして、アスラの手札にも、もうこの状況を打開する手立ては残っていない……

だが、それでもアスラは悔いの無い笑顔を烈我、バジユラへと向ける……………

「スゲエ…………スゴ過ぎるぜ赤の七罪竜バジユラ、その使い手烈我さん!!…………オレ、ここに
来て本当に良かった……………!!」

『ああ!!…………だつたら最後は潔く叫びな!!』

アスラが感動を言語化する中、バジユラがトドメを刺すべく、その拳に今一度炎を溜
め込む。そしてアスラは大きく息を吸い込み、吐き出した……………

「おう!!…………ライフで受ける!!」

へライフ1??0へアスラ

アスラのラストコールと共に放たれるバジユラの渾身の一撃。鈍器で殴られたよう
な音がこだまし、その最後のライフは碎け散った。

これにより、勝者は烈我とバジユラだ。

バトルフィールドから元の場所に戻ったアスラと烈我。敗北を喫したアスラは、力尽きたか、思わず地面に寝転んでしまうが、その表情はたいへん嬉しそうで、楽しそうだ。

「たは~~~~!!……負けちまつたぜ!!……あんたべらぼーにつえーな!」

「お前も、ソウルコアが使えないのが信じられないくらいだぜ!!……凄い努力したんだなってバトルだった!!」

『筋は悪くねえ。だが、この俺をもっと怒らせるためにはまだまだ足りねえな!!』

バトルが終わり、すっかり打ち解けあつた2人と1匹。

互いを褒め称え合う中、アスラは勢い良くトンボ返りで立ち上がると、烈我に向けて勢い良く指を刺して……

「よし決めた!!……オレはこの修行中、あんたに勝つまで帰らねえ!!……もつと腕磨いて、今度はオレが必ず勝つ!!」

「おう!!……良い意気込みだぜ、名前はアスラだったよな……これからよろしくな!!」

「おう烈我さん!!…お世話になりまアアアす!!」

「さん付けは要らない、俺の事は烈我でいいよ」

「ん、そう?…じゃあ烈我で!!…よろしく!!」

互いを認め合った主人公2人。硬い握手が交わされる。

「何か仲良くなったね」

「仲良くなってるわね」

「仲良くなりましたね」

「むえ〜」??仲良くなったね

そんな熱血な彼らの光景を見て、再びシイナ、エール、光黄、ムエの順番で言葉を落とした。そして、アスラのライバルであるロンもまた感想を呟いて……………

「バカと天才は紙一重、バカとバカが紙一重なのは当たり前か」

「おいこらロン!!…聞こえてるぞコノヤロー!!」

「デメエさつきから結構口悪いよな、何なんだ!？」

「オレはロンです。よろしくお願ひします、一点突破バカ2号」
「誰が一点突破バカ2号だ!!」

烈我を煽りまくるロン。しかし、本心では、アスラのライバル枠を彼に取られたように感じ、嫉妬しているだけだ。それ故に無駄に口が攻撃的になっている。

いや、そうでなくとも口はいつも攻撃的なのだが……………

「まあ、つーわけだ。ここでの修行相手はオマエ達七罪竜とか言う犯罪トカゲを操る連中に決まったわけだが……………」

『誰が犯罪トカゲだこのムキムキゴリラ!!』

『そうですよこの不清潔男!!』

「ああ!?!:誰がムキムキ不清潔ゴリラだ、焼き殺されてーのかこのトカゲ共」

言い合いになるテンドウとバジユラ、ライト。ギャングのボス顔負けの強面であるテンドウが彼らを睨みつけるが、流石は伝説の七罪竜か、全く物怖じをしない。

「まあ良いや。後であのトカゲ共は殺すとして……………さっさと他の使い手共を紹介しても

らおうか、小僧異世界バージョン、金髪ツツン女」

「!!」

テンドウの目線はバジユラ達から烈我、光黄に向けられる。その間にアスラがテンドウに「バジユラとライトを殺しちやったら修行しに来た意味がないじゃないですかアアアアー!!」と叫ぶが、すぐさま頭を握られて黙らされる。

「お、おい光黄。アスラ達とはかく、この人は本当に大丈夫なのかよ……スゲエ顔怖いんだけど……」

「この人は一応エール達の世界ではかなりの権力者だ。どこまでが本気でどこまでが巫山戯ているのかわからないけど……まあ信用はできると思う……それより烈我。俺はアスラ達に他のみんなを紹介してあげたい」

「ツ……ああ、それは俺もだ!」

裏でコソコソと会話する2人。テンドウの粗暴で不道德な面が彼らにとって凄く悪目立ちしているが、エール達との会話から彼がそれなりに信用されているのがわかる。

それに、やはりアスラ達に他の仲間達を紹介してあげたいと言う気持ち強い

.....

意を固めた烈我と光黄は、アスラやテンドウ達の方に目を向けると……

「わかったぜ、紹介するよ俺たちの仲間!!……きつと気にいると思うぜ!!」
「絵瑠も、アスラとエールにまた会いたいと言っていたしな」

ー!!

これで成立した。アスラ達一行はしばらくこの世界で厄介になる事になる。
全てはもつと強くなるために……

42コア「もう二度と負けない」

「……おお!!……これが烈我の言つてたカードショップつてヤツか!!」

「おうよ、凄いだろ!」

アスラと烈我のバトルから約数十分。他の七罪竜の使い手と出会うべく、彼らが連れて来られた場所は、何の変哲もない少し広めのカードショップ。しかし、それはアスラの世界には無い代物。

ショーケースに所狭しと並ぶカード、テーブルを囲んで向かい合うカードバトラー達、そしてバトルフィールド転送装置がアスラの目に真っ先に飛び込んで来る。

「なんか窮屈な場所ね」

「なにいつてんだエール!!…スツゲエ広いじゃねえか!!」

「オメガ家の城の方が広いわよ」

自宅が城なエール。多くの人々で賑わっているカードショップは窮屈に感じるそう

だ。

そんな中、アスラはある事に疑問を抱いて…………

「……………なあ烈我。みんなテーブルで何やってんだ？」

「え？……………バトスピだけど？」

「バトスピ??……………バトスピって立ってやるモンじゃないのか？」

「うーん。そっちがどうだかはわからないけど、俺達の世界は基本的に座ってやるかな」

ここで異世界出身故に起こる文化の相違が発覚する。

アスラ達の世界はBパッドを使用し、立ちながらバトルするのが当たり前だ。しかし、烈我達の世界はバトルフィールドを使わなければ、このシヨップにいる人々のように座ってバトルを行うのが一般的。

「座りながらのバトルねー……………タバコ吸いながらバトルできるのはデカイな」

「あんたは別に座ってようが立っていようがいつもタバコ吸ってるじゃない」

「しかも……禁煙だし」

「細けー事はいいんだよツンツン女×2」

タバコを吸いながら発言するテンドウに、エールと光黄がそれぞれツツコム。

「座つてのバトル……………この世界は随分と怠けてるな」

「こらこらロン。口が悪いぞ、いいじゃないか別に〜お菓子食べながらバトルしても許される優しい世界じゃん!!」

「シイナ様、別にお菓子を食べながらバトルするために座つてるわけじゃないと思いませんけど」

アスラ最大のライバルであるロンは、この光景を見て、何やら不満気味に呟いた。それを聞いたシイナが宥めるが、それを聞いたエールが彼女の独特な考え方にまた一つツツコム。

そして皆が和気藹々とし始めた頃だ。このシヨップへと新たに来店して来た客が、アスラとエールを発見するなり声を荒げて……………

「あツツ!!……………アスラにエール!？」

「ツ……絵瑠さん!!」

そこにいたのは「絵瑠」と呼ばれる烈我達と同年代くらいの歳の紫髪の少女。その横には黒髪のチャライ印象を受ける少年と、年齢はアスラ達と同じ程度か、中世的な顔立ちをした緑色の髪の小柄な少年もいる。

「うおおお久しぶりです絵瑠さん、ご無沙汰してまアアアアアす!!」

「烈我に呼ばれて来て見たら、まさかアスラ達に会えるなんて……どうアスラ?…頂点王とやらにはなれた?」

「いや、まだまだ遠いっスけど、いつか絶対になつてみせますよツ!!」

「うん!!…その意気その意気!!…それでこそ私の知ってるアスラだ!!…絶対になれるよ頂点王!!」

光黄に加えてこの絵瑠は、以前アスラ達の世界に迷い込んだ事があり、絵瑠は特にアスラとは仲良くなっている。

そんな彼らの姉弟のような掛け合いに、エールは少なからず嫉妬していて………

「なんか……仲良さそうね」

「え？……そりやアスラとはオウドウ都の城ですつとバトルしてたからね……なんか弟ができたみたいで嬉しかったな」

「いや、絵瑠さん強過ぎて結局一回しか勝てませんでした」
「でもその一回の勝利はすつごく劇的だったと思うよ」

エールの嫉妬心など全く気がつかず、2人だけで会話を繰り返していくアスラと絵瑠。その様子を見て頬を膨らませるエール。そしてさらにその様子を見て笑顔を浮かべているのが、他人の恋愛が大好物な頂点王、シイナだった。

「わく……これひよつとしてエールちゃんにまたまたライバル出現!?……これはまた美味しい展開だわ。名前もエールとエールで近いし」

「何のライバルだよ」

頂点王シイナの発言に、今度はテンドウが無表情な面構えでツツコミを入れる。

因みに、絵瑠は決してアスラに恋愛的行为を抱いているわけでは無い。精々「年下の可愛い子分」程度の認識だろう。アスラに関してももほぼ同様である。

「そう言えばシュオンは？…見当たらないっすね」

「ああ、シュオンは今カードになってるよ、七罪竜を人目のある場所で晒すわけにはいかないからね」

アスラが気にかけてしたのは、絵瑠の相棒シュオン。「暴食」を司る七罪竜の一体であり、絵瑠とは一悶着あつて、今では最高のパートナーとなっている。

七罪竜は基本的に一般の人の目に止めてはならない。それ故に、このように人が集まる場所ではカード化する事も少くない。

現にバジユラとライトも今はカードとなっている。まあ、伸び伸びしたいという理由で小さな姿でどうにかやり過ごす時もあるのだが……

「なあなああ烈我。あの人達は？」

「ああ、光黄と絵瑠が行った異世界で仲良くなった人達らしい。それで今度は向こうからこつちに来たんだと」

「ふくん。成る程」

チャライ印象を受ける黒髪の少年が、友人である烈我に聞いた。すると彼はアスラ、ロンを視界から外し、真っ先にエールの方へと向かっていくと……………

「やあ、異世界の素敵なお嬢さん。これから俺とお茶でも飲みに行かないかい？…君に似合うであろううってつけの店があるんだけど……………」

「失せなさいネズミ」

「……………」

エールをナンパしようと試みていたようだが、エールは基本、自分に言い寄る男には全て白々しい目を向けながら辛辣な発言で対処する。今回もそれがいつものように炸裂した。

「おいエール!!…なんて事言うんだアアアア!!……………すんません髪の毛の黒い人!!」

「いや、良いんだ。別に気にしてないし……………そうか、俺はネズミだったのか」

「気にしてるー!!……………絶対気にしてるよこの人ー!!」

「構わなくていいよアスラ。多分本当に気にしてないから……………コイツの名前は牙威きばいミナト。見ての通り、ナンパ大好きチャラ男だ」

「おいおい烈我。もうちよつとかっこいい紹介の仕方ないわけ？」

烈我の紹介で、彼の名前がミナトであると判明する。アスラは彼を見て、緑のカラーリーダーであるヘラクレスを思い出していた。彼もミナトに負けず劣らずのナンパ大好きチャラ男である。

そんなチャラ男に怒り、エールを庇うように全力で前に出たのは、他でもない絵瑠だった。

「おいミナト!!…お前はまた……エールは素直な上にめちゃくちゃ可愛いんだぞ!!…お前みたいな尻軽男とじゃ釣り合うわけないだろ!!」

「へえく…なら絵瑠となら俺と釣り合う感じ？」

「ツ……ち、違う!!…そういう意味じゃない!!…てゅーか釣り合わないし!!…お前の事は何があつても絶対に許さないからな!!」

エールを庇うように現れる絵瑠だったが、唐突な彼の発言に顔を赤く染めてしまう。やり取りからして、どうやらこの2人は過去に何かあったようだ。しかし、それはアスラ達を知る由もない話。

そしてその光景を見て、何かを察したシイナはまたしてもニヤついていて……………

「ハッ……………これってひょっとして三角、いや四角関係なのでは!？」
「多分違います」

アスラ、エール、絵瑠、ミナトの関係を絶対に勘違いしている頂点王シイナに、今度はロンが無表情でツツコミを入れた。

「……………僕と同じ歳ぐらいの男の子……………」
「?」

そんな中、アスラは小柄で緑色の髪の子の視線を感じ取っていた。

折角この世界に来たアスラ達と仲良くしたいようだが、彼はどうやら引つ込み思案なところがあるようで、中々話しかけられないでいた。

しかし、アスラはそんな彼であつても容赦はしない。いつもの調子で堂々と挨拶をして……………

「オレアスラ!!…オマエは!？」

「え!?!…あ、僕は星七…緑仙星七せなです……そ、その……よろしくお願いします……」

「おう星七!!……よろしくな!!」

アスラが目をギラギラと輝かせながら星七と握手を交わす。大人しくて引つ込み思案な彼と早くも打ち解けあったようだ。

「なんかアスラ君って……」

「アスラでいいぞ!!」

「え?…じゃあ、アスラってちよつと烈我に似てる気がするな」

「ん?…烈我と?」

この世界の熱血少年、天上烈我に似ていると星七に言われ、首を傾げるアスラ。自分では自覚していないのが窺える。

「そんなに似てるか?…どの辺だ……?？」

「俺もわかんね……顔や身体つき、髪型も全然似てないと思うけど……」

星七の発言に頭を悩ませる主人公2人だったが、他の面々は「わかるわー」と内心で心を揃えていた。

そんな中、口を開き、話題を変えたのは他でもない三王であるテンドウ・ヒロミだ。

「まっ……っ……つーことでオマエ達七罪竜とか言う犯罪トカゲ共の使い手呼び出したのは他でもねー。この小僧の修行相手をつけてもらうためだ」

「!!」

「いや〜お願いします〜」

テンドウがそう言うのと、アスラが頭の後ろに片手を置き、照れ隠ししながら修行相手を懇願する。

だが、そんなテンドウの申し出に違和感を覚えた式音絵瑠は……………

「修行相手だったら私達なんかよりあの世界にもっと相応しい人がいたんじゃないですか?……………例えば……………そうだな……………エールのお兄さんだったり!」

「ああ!?!…あいつはいつも忙しいんだよこのハツラツ女。つーかオレもあいつと同じ三

王なんだけど?…候補に入れてくれないとオレのガラスのハートが傷ついちゃうよ?
…意外と脆いのよオレ」

「え?…ハツラツ女??:…あ、はい、す、すみませんでした?」

「何困らせてんのよテンドウ。あんたはいつも仕事放つたらかしてギャンブルしかしてないじゃない」

どう見ても傷ついていない事がわかる無表情のままそう言い返すテンドウ。エールの言う通り、彼は基本的にエールの兄であるエレンに三王の殆どの仕事を任せっきりである。

因みに、この世界に修行をしに来た本当の理由として、アスラ達挑戦者達は全てのカラーリーダーを倒さなければ三王とのバトルに臨めないため、致し方なく新鮮なバトルスピリッツができるであろう異世界に足を運んだのだ。

「ふーん……よし、それじゃ手始めにこの俺が相手してあげようかなあ?」

ー!!

そんな中、拳手をしたのは烈我の友人で、同じく七罪竜を使うチャライ少年、ミナト。

「その……えーつと、チビスラ君だっけ?…君の相手をやればいいわけだ」
「誰がチビスラだアアアアー!!」

アスラの名前がうる覚えなミナト。全力で否定する言葉が飛んでくる。そしてミナトはデツキを懐から取り出すと……

「光黄ちゃん程じゃないけど、俺はそこそこ強いぜ?…行くかキラー」

『おうよ!!…バトルの時間か!!…誰かは知らんが、この俺様こそがナンバーワンである
』
と思いい知らせてやるぜ!』

「!!」

物静かな言動ながらも静かに湧き出て来る溢れんばかりのオーラ。デツキから聞こえて来る七罪竜であろうドラゴンの声。第一印象はチャライ印象だったが、アスラはこの時点で彼がそれなりの実力者である事を悟る。これからそんな彼とバトルができると思うと背筋がゾクゾクして来る。

だが、そんな2人の間に割って入って来る人物が1人……

「そのバトル、ちょっと待ってもらおうか」

「ッ……ロン!？」

その正体はロン。彼は冷め切ったクールな表情をライバルであるアスラではなく、ミナトの方へ向けると……………

「このバトル、アスラではなくオレが受ける」

「はあ!?!…なに言ってるんだオマエ!!…これはオレの修行だぞ!!」

「この際だから正直に言おうアスラ。オマエだけ三王の修行場所に行けるとかズルい」
「なんじゃそりや!!」

テンドウの修行場所に行けるのを羨ましく思っていたロン。それ程までにこのアスラに負けたくないのが窺える。

「それに確かめたい事もある」

「あ?…確かめたい事?…いや、どうでも良いわアアア!!…テンドウさんそこら辺

いつものコールで試合を始める……

……ゲートオープン、界放!!

コールと共にミナトとロン、2人はバトルフィールドへと転送され、残った面々はその様子をショップ内のモニターで見守る。

……

「ここがバトルフィールド……オレ達のBパッドとは違う、異世界の戦場」

「一々大袈裟だな。まあ、物の見方って言うか、価値観が違うんだろぅけどさ……取り敢えず先攻は譲るからさっさとかかって来な」

「ああ、わかった。七罪竜とか言うカードの力、見せてもらおう……オレのターン……」

無駄な会話はしないロン。そんな彼の先攻でバトルは幕を開ける。

「ターン01」ロン

「メインステップ、マジック、ヴァイオレットフィールド。紫のスピリットカードを手札から捨てる事により、オレはデッキから3枚のカードをドロウ……その後ヴァイオレットフィールドは場に残る。さらにバーストを伏せ、ターンエンド」

手札：5

場：【ヴァイオレットフィールド】

バースト：【有】

デッキを掘り進めつつ、防御用のバーストを伏せ、初ターンにしては盤石の状況を作り上げたロン。次はアスラ達としては注目が集まるミナトのターンだ。

「ターン02」ミナト

「メインステップ……先ずは異海人シャークマンをLV2で召喚！」

「ツ……また青か」

ー【異海人シャークマン】LV2(2)BP4000

サメを擬人化したような荒々しい青のスピリット、シャークマンがミナトの場に水飛沫と共に現れる。この時点でミナトが青属性の使い手であると発覚、ロンは脳裏に性格が悪かった頃のシスイ・メイキョウの姿が浮かぶ。

「召喚時効果、手札にある青のコスト4以下のネクサスカード1枚をノーコストで配置、その後コア1つを青のネクサス1枚に追加する。No. 36バーチャスアイランドを配置してそれにコア1つを追加だ」

1【No. 36バーチャスアイランド】LV1

「まだまだ終わらないぜ……マジック、ストロングドロー……効果で3枚引き、2枚捨てる。ここで配置したバーチャスアイランドの効果、ターンに一度手札が破棄された時コア1つを追加。さらにバーストをセットだ！」

まだ後攻の最初のターンであると言うのに、目まぐるしい程にデッキを回転させ、コアを増やすミナト。そしていよいよアタックステップへと移行して……

「さあ、異世界の可愛い子、エールちゃんに良い所を見せたいし、そろそろアタックステップだ！…シャークマン、アタックを頼むよ」

エールの名前を出したミナトの指示で拳を構えて走り出すシャークマン。前のターン、マジックの使用のみでターンを終えたロンはこれをライフで受ける他なくて……

「ライフで受ける………ッ」

〈ライフ5??4〉ロン

シャークマンの拳がロンのライフバリアを砕く。しかし、それはロンの伏せられたバーストが火を吹く条件でもあって……

「………緩い痛みだ………ライフ減少によりバースト発動!!…騎士の霸王ソーディアス・アーサー!!」

「!!」

「効果により、シャークマンのコア全てをトラッシュに送る!!」

【異海人シャークマン】(2??0) 消滅

バーストカードが反転されると共に、シャークマンの体内に宿るコアが全て弾け飛ぶ。コアの無いスピリットは生きる事ができない、よってシャークマンはたちまち消滅した。

「そしてこの効果発揮後、このカードを召喚する………今こそ目覚めの時だ、現れる、騎士の霸王ソーディアス・アーサー!!」

ー 【騎士の霸王ソーディアス・アーサー】 L V I (1) B P 1 0 0 0 0

瞬時に現れた巨大な紫のシンボル。それに亀裂が生じ、やがて散っていくと、その中より威風堂々たる立ち振舞いで騎士の霸王であるソーディアス・アーサーが出陣した。

「………こっちのスピリットを除去しつつ、強力なスピリットを召喚か………こりやしてや

られたな……ターンエンド」

手札：2

場：【No. 36バーチャスアイランド】LV1

バースト：【有】

早速ロンの強烈なカウンターを貰ってしまったミナト。致し方なくそのターンをエンドとする。しかしその直後、ロンは何かを悟ったかのように、それでいて呆れたように口を開いて……

「やはりな……」

「？」

「不注意且つ緩い攻撃だった。思っていた通り、オマエ達のバトルスピリッツはレベルが低く過ぎる」

「……あまり要点が見えて来ないな。つまり君は何を言いたいわけ？」

「ここはオレの修行する場所に相応しくない……そう言いたいんだ」

アスラが三王であるテンドウ・ヒロミと修行すると聞いて来てみれば、自分に

とつてレベルの低いカードバトルばかり。ロンは失望していた。それでもそのまま思った事を口にするのは良くない。

「ロンのヤツ、勝手について来たくせに何言つてやがんだ!!」

「なあエール、アスラのライバルとか言うあいつは、いつもあんな感じなのか?」

アスラがモニター越しでロンに怒りを露わにする中、光黄がエールにロンの事を聞いた。

「まあそうね。基本煽つて来るかも。対戦相手がアスラの時とかは特に……よくよく思い返してみたら今までで一番何を考へてるか分からない奴かも」

「どうでもいいけどさっさとミナトの奴負けちゃえばいいのに」

エールが光黄に返答する中、モニター越しのミナトを睨みつけながら絵瑠がそう告げた。余程彼の事が嫌いらしい……

そして再びバトルフィールドへと舞台は戻つて……

「まだバトルは始まったばかりだぜ？…そんなに煽り散らしたら敵を作るだけだぞ」
「敵ができたら倒す。それだけの話だ」

この世界のカードバトラーは皆弱いと言わんばかりのロンの発言。普段は懐が広いミナトも流石に芳しく無い表情を浮かべる。

「オレ達の世界のバトルは、いつも命懸けだ。勝てば上へ行き、負ければ下に落ちる事を誰もが理解しているからな。だけどオマエ達のバトルは違う。オレからしたら単なるお遊びにしか見えない。オレはこのカードショップとやらに來た時にそれを強く感じた」

「お遊びね…：…そりゃこっちではバトスピは娯樂の一種。けど、そっちでは随分と重みが違うんだな」

「こんな場所が三王テンドウの修行場所なのは聞いて呆れる。この印象を覆したければ、オレに一泡でも吹かせてみるんだな」

ロンはまるでまだミナトを試すような発言をしながら、己のターンを進行させていく。

「ターン03」ロン

「メインステップ。再びバーストを伏せ、アーマーバット2体とキャメロット・ナイトXを召喚。キャメロット・ナイトX2体の効果でカードを2枚ドロ……」

ー【アーマーバット】LV1

ー【キャメロット・ナイトX】LV1

ー【キャメロット・ナイトX】LV1

鎧を来たコウモリ、アーマーバットと、ロンのデツキの新たなスピリット、ナイトの名を冠する小さな騎士型のスピリット、キャメロット・ナイトXが2体現れる。

しかし、その効果はミナトのバーストを誘発させて……

「お前も結構不注意なんじゃないか？……召喚時のバースト、キングスコマンド！」

「!!」

「効果により3枚引き、1枚捨てる。さらにバーチャスアイランドの効果でコアブース

トー」

手札とコア。バトルスピリッツにおいて最も重要なその両方の要素を次々と増やしていくミナト。だがロンは彼のキングスコマンドなど予想の範疇だったのか、特に気にする事なくアタックステップへと移行して……………

「アタックステップ。2体のキャメロット・ナイトXとソーディアス・アーサーでアタック！」

ロンの指示を受け走り出す3体の騎士達。この攻撃をそのまま受けてしまうと大ダメージだが、ブロッカーのスピリットがないミナトはこれをライフで受けるしかなくて……………

「ライフで受ける!!…………ツ」

△ライフ5??4??3??2△ミナト

キヤメロット・ナイトX達による小さな槍の刺突、ソーディアス・アーサーによる聖劍の一太刀がミナトのライフを粉碎。そのライフは一気に半数以下まで減少する。

「ターンエンド」

手札：4

場：【アーマーバット】LV1

【キヤメロット・ナイトX】LV1

【キヤメロット・ナイトX】LV1

【騎士の霸王ソーディアス・アーサー】LV1

【ヴァイオレットフィールド】

バースト：【有】

これ以上の攻撃は禁物だと考えたか、ロンはアーマーバットをブロッカーとして残してそのターンをエンドとした。

『この印象を覆したければオレに一泡でも吹かせてみる……か。正直別に異世界の人の価値観なんてどうでもいいんだけど、歳下であろうイケメン君にそこまで煽られたら

俺もそれなりにやってやらないとな」

『おう!!…そうだけミナト!!…そのために早く俺を呼べ!!』

「はいはい。わかったよ…いつも苦勞するんだぜ。お前コスト高めだからさ」

ミナトの頭に直接話しかけて来たのは、おそらく七罪竜と呼ばれるスピリット。彼の扱う属性からして、その色は青だと推察できる。

そしてミナトはロンのこの世界のカードバトラーは弱いと言う印象を覆すべく、己のターンを進行させていった。

「ターン04」ミナト

「メインステップ、2体目のシャークマンを召喚。その効果で今度は海帝国の秘宝を配置し、コアブースト!」

1 【異海人シャークマン】 LV2 (2S) BP4000

1 【海帝国の秘宝】 LV1

止まらない展開。2体目のシャークマンと2枚目となるネクサスカードがミナトの場に姿を見せる。

そして彼は「待たせたな」と呟くと、手札にある1枚のスピリットカードを引き抜いて……………

「神をも恐れぬ大胆不敵の傲慢な王よ! ……牙を研いでその傲慢な野望を実現させろツ! ……海牙龍王キラーバイザーク、LV3で召喚!」

「来たか……………」

【海牙龍王キラーバイザーク】LV3(4)BP16000

深海に蠢く巨大な影、眼光を輝かせながら海面へ一気に飛び出し、空中に飛び上がる。同時に強大な咆哮を響かせる。その正体はサメのような鱗を持ちつつ、龍のような風貌をした傲慢を司る七罪竜、キラーバイザーク。

『待ち侘びたぞミナト!! ……さあ俺を使え!! ……上手にな!!』

「ああわかつてる。2人で勝つぞ」

「傲慢の七罪竜。成る程、それっぽい性格だ」

彼のエースカードであろう七罪竜、キラールバイザーク。ロンはそのカードを活かして怒涛の攻撃が来る事を予想していたが……

「キラールの効果【潜水】……潜れ、キラール！」

『おうよ!!』

「!？」

地面を水中のように変化させ、その中へと潜り込むキラールバイザーク。何かの攻撃かと思っただが、キラールバイザークが場から消えただけでそれらしい行動は全く行わず……

「何が狙いだ?？」

「……さあ……アタックステップ。2体目のシャークマンでアタックだ」

「ライフで受ける……ッ」

〈ライフ4??3〉ロン

シャークマンの拳がロンのライフ1つを砕く。そしてロンは何をしでかすかわからないキラークバイザーを颯爽と仕留めるべく、手札にあるマジックカードをこのタイミングで引き抜いて……………

「オレのライフが減った事により、手札にあるこのマジック、デスタメントを發揮させる」

「!!」

「このカードはオレのライフが減った時、トラッシュに紫一色のカードがあればノーコストで使用できる。その効果はコアが3個以上置かれたスピリットの破壊……………対象は当然コアが4つ置かれたキラークバイザー、どこに消えたかは知らないが、まだ場にいるならこの効果で破壊させてもらう!!」

發揮される強力なマジック。コアが4つ置かれたキラークバイザーでは先ず呆気なく爆散してしまう事だろう、ロン含め、バトルフィールド外のアスラ達は七罪竜が破壊されたと思っただが……………

それは飽くまで対象に取れた場合の話であつて……………

「ツ……………なんだこの感じ、破壊した手応えが全く感じられない!？」

全く感じられない手応え。その時ロンは咄嗟に悟つた。これこそがキラールバイザーの効果なのであると……………

「キラールの効果〔潜水〕は、キラールを上置き置かれたコアごとフィールドから消す効果。この状態の時はアタックもブロックもできないが、フィールドにいないため、一切の効果を受けない。いや、そもそも対象に取る事さえできないんだよ」

「……………!!」

これこそキラールバイザーの真骨頂。フィールドにいないければデスタメントの対象に取る事はできない。よつてロンのこのマジックの効果は不発となる。

「一旦これでターンエンドだ。どうだいいケメン君、少しは見直してくれたかな?」

手札：1

場：【異海人シャークマン】LV2

【No. 36 バーチャスアイランド】LV1

【海帝国の秘宝】LV1

バースト：【有】

「破壊から逃げるためだけの効果じゃどちらにせよオレには勝てないぞ」

「手厳しいね……だけど、いつ『逃げるためだけの効果』って言った?」

「!？」

ミナトの言葉に、キラークライザーにはまだ隠された能力がある事を悟るロン。しかし、立ち止まってはられない、彼はミナトを倒すべく己のターンを進行させて行った……

「ターン05」ロン

「メインステップ……仮面ライダーナイトをLV1で召喚！」

「仮面ライダーナイト」LV1（1）BP4000

「召喚時効果で2枚ドロ……」

「ふくん。それがお前のキースピリットってわけか」

様々な鏡像が重なり合い、ロンの場に新たに現れたのは転醒の力を得た黒騎士、仮面ライダーナイト。小さいながらも、ソーディアス・アーサー以上に際立つその圧倒的な存在感に、ミナトはそれこそが彼のデッキで一番強いカードなのだと自覚する。

「でやがったなナイト。相変わらずクソカッコいいぜ」

「黒い騎士……確かにカッコいいね!!」

「実はオレも持つてんだぜ。あんな感じの騎士。黒じゃなくて赤だけど」

「ええ凄い!!…今度バトルフィールドで僕にも見せてよ!」

バトルフィールド外でアスラと星七の会話が盛り上がる。その最中でアスラの騎士のカードに興味を持つ星七だったが……

「ああ悪い星七。今は訳あって使えねーんだ……てゆーかオレの自業自得なんだけどよ」

「??」

「でもそうだな。いつか絶対星七にも見せてやるよ!!……めちやくちやカツケエからさ！」

今は黒い力の代償とやらで龍騎が使えないアスラ。そもそも龍騎が再び使えるようになるくらい強いカードバトルになるための修行でもある。

星七はアスラの言っている意味が分からずキョトンとした表情を浮かべていたものの、彼の激しく熱い情熱が伝わったのか、「うんわかった!……楽しみにしているよ!!」と、力強く言葉を返す。

そして舞台は戻ってバトルフィールド内。仮面ライダーナイトの召喚により、事前に伏せていたミナトのバーストカードが疼いていて………

「確かに強そうなスピリットだ。だけど、また召喚時のバーストはもらったぜ!!……2枚目のキングスコマンドだ!!」

「!!」

「効果により3枚引いて1枚捨てる。バーチャスアイランドの効果でコアを増やし、さらに今度はフラッシュ効果も発揮。このターンの間、お前はコスト4以上のスピリットでアタックが行えない」

再び発揮される青のバーストマジック、キングスコマンド。これにより、ロンはこのターンのみ、転醒ナイトやソーディアス・アーサーと言った強力無比なスピリットでのアタックを行えなくなる。

しかし、彼の場合にはまだコスト4を下回っている2体のキャメロット・ナイトXや、アーマーバットが健在で……………

「だったらコスト3以下のスピリットで勝負を決めるまでだ。キャメロット・ナイトXで攻撃」

このターンでの決着を望むロン。ミナトのライフは2であるため、3体の内2体のアタックが通れば望んだ通りの結果となるが……………

ミナトも、そんな彼を選んだ傲慢を司る七罪竜キラーも甘くはなくて……………

「その考えは甘いぜイケメン君。浮上しろキラール!!」
「!!」

キヤメロット・ナイトXの突撃に反応するようにミナトがキラールに指示すると、水面から眼光を輝かせ、キラールバイザークが再び姿を見せる。

「コイツ……このタイミングで復活できるのか!？」

「どうやらちよつとした思い違いをしてたみたいだな!!……【潜水】しているキラールはフラッシュの好きなタイミングで復活できる。キヤメロット・ナイトXを、獲物を狩り尽くせ!!」

『待つてたぜミナト、その言葉をなああ!!』

狙った獲物は逃さない。キラールバイザークが雄叫びを上げながらキヤメロット・ナイトXを噛み砕く。

そして、まだもう一つだけ、このキラールバイザークには効果が存在して………

「ここでキラールの最後の効果。アタック、ブロックしたバトルの終了時、回復して【潜水】

を發揮させる！」

「!!」

「キララー、再び潜れ!!」

ミナトの指示を聞くなり二つ返事で再び水中と化した地中へと姿を消すキララー。これにより再び効果の対象に選ばれなくなる。

強力なキララーバイザークの効果「潜水」そしてそれを活かす他の効果、カードバトル。だが、その全貌を目の当たりにしても、ロンの余裕は一切崩れなくて……

「…成る程、キングスコマンドはBPの弱いスピリットでのアタックを誘導させるためのカードでもあったのか」

「御名答……これでオレの実力、少しは認めてくれたかな?」

「そうだな……少なくとも牙威ミナト、オマエの実力だけは認めてやる。ほんの少しだけだけ」

「おお意外。腹立つ言い方だけどそこは認めてくれるのな」

キララーバイザークの【潜水】……

フィールドから消えるという扱い辛そうな効果。それを巧みに使いこなすミナトを見て、ロンは少なからず彼が七罪竜と言う伝説のカードに選ばれただけはあると言わんばかりの上からな物言いだ認める。

しかし……………

「だが宣言しよう、このバトル、このオレ、スーミ村のロンの圧倒的実力差で幕を閉じる！」

「なに?」

最早どつちが傲慢か、わかったものじゃない。

ロンの内心では、ライバルであるあいつの前では負けられないと言う思いが常に渦巻いている。そして彼は涼しい表情を見せながらアタックステップを続行して……………

「2体目のキヤメロット・ナイトXで攻撃」

「ツ…………キラーの効果を知っても尚仕掛けてくるのか!」

「あなたのライフは残り2。どちらにせよ浮上せざるを得ないだろう?」

「くつ…………戻って来いキラー…………そしてキヤメロット・ナイトXをブロック!」

浮上したキラーバイザーがロンのキヤメロット・ナイトXを再び噛み砕く。ここで再び【潜水】の効果が発揮されるかと思いきや、この効果は1ターンに一度しか使用できないため、キラーバイザーはその場に留まる事となった。

その隙を突くかのようにロンはアタック可能なアーマーバットに攻撃の指示を送って……………

「アーマーバットでアタック！」

「ツ……………ライフで受ける！」

〈ライフ2??1〉ミナト

上空から繰り出されるアーマーバットの体当たりが炸裂。ミナトのライフは遂に残り1つまで追い込まれた。

「ターンエンド」

手札：5

場：【アーマーバット】LV1

【騎士の霸王ソーディアス・アーサー】LV1

【仮面ライダーナイト】LV1

【ヴァイオレットフィールド】

バースト：【有】

圧倒的な自身に満ち溢れた表情を浮かべながら、そのターンを切るロン。ミナトのターンが始まるその前に、バトルフィールド外で頂点王シイナが言葉を落とす。

「アスラは全然変わらないけど、ロンはだいぶ変わったよね」

「え？……いやいやシイナ。あいつも変わんねーよ。口は悪いし、髪は黒いし腹立つくらいイケメンだし」

アスラと違い、ロンは変わったと言う頂点王シイナ。それは10年振りに彼らを見たからこそ考え至った感想であり……

「いや変わったよ、間違いなく。昔からそこそこ口は悪かったけど、私の知っているロン

は自分に自信が無かったのか、いつもあんたの後ろにいた。けど、今はたった1人の力で、誰の力にも頼らず、頂点王になると言う夢を叶えようとしている」

「??」

「あんまり分かってないって顔だな。まあ要するに、ロンを変えたのはあんたのその諦めない気持ちだって言いたいんだよ」

シイナが頂点王になったあの日、アスラとロンは2人でその存在を目指す事を誓った。しかし、ロンは生まれた時からライダースピリットに選ばれた天才と言うプレッシャーもあり、何度も何度もその夢を諦めそうになった。

だが、ソウルコアが無くても、前向きにそれでいて直向きに努力を重ねるアスラを見て、ロンは諦めない気持ちを学んだ。

だからこそ、ロンはアスラを超えたいのだ。そんな彼に勝って、自分が一番強いのだと証明したいのだ。もちろん、アスラにロンの気持ちはわからない。彼はいつも無自覚で周囲の仲間やライバル達を熱く滾らせる。

そしてバトルフィールド内ではいよいよ佳境となるミナトの第6ターンが幕を開けて……………

「ターン06」ミナト

「メインステップ。さあ、仕上げの時間だ!!」

「!!」

メインステップ開始直後、ミナトはそう言いながら手札の1枚に手を掛け、それをバトル台へと叩きつける。その様子や言動からして、七罪竜意外な大物が場へとやってくる事をロンは瞬時に悟って……………

「三つ首の獣、本能のままに叫び!…敵を威圧する咆哮を!…勝利への雄叫びを上げるろ!!…戌の十二神皇グリードッグ、LV3で召喚ッ!」

フィールドに出現する煉獄の門、青き炎を灯しながら煉獄の門を開くと中には鎖に繋がれた獣の姿。鎖に繋がれた三つ首の獣は吠え立てながら鎖を力一杯引つ張り、鎖を強引に引き千切ると、煉獄の門を飛び出す獣、グリードッグは一気にフィールドへと駆け抜けて行く。

1 【戌の十二神皇グリードック】LV3 (5S) BP21000

「BP21000の大型スピリットか……」

「驚くのはそのBPの高さだけじゃない!!…アタックステップこそ、俺のグリードックの真骨頂さー!」

そう言いながらミナトはこのターンのアタックステップを宣言する。

「アタックだグリードック!!…その効果【封印】で、グリードックのソウルコアを俺のライフに!!」

「ツ……ソウルコアをライフに置くだど!?!」

〈ライフ1??2S〉ミナト

攻撃の指示と共に吠えるグリードック。その瞬間に赤きコア、ソウルコアが主人であるミナトのライフへと移動。ライフが回復しただけでなく、封印状態と言う特別な状態となった。

さらに、このグリードックには、封印状態の時のみ発揮できる特別な効果が存在して
いて……………

「さらに封印時、グリードックのさらなる効果【強奪】を発揮!!…それにより、お前の手札を全て見させてもらうぜ!」

「!!」

グリードックの効果で青い輝きと共に宙を舞うロンの手札。ミナトはその彼の手札の中にあつた1枚のマジックカードを見逃さなかった……………

「へー…良いカード持つてんじゃん。俺はその中にあるマジックカード、シュタイン・ボ
ルグ・ユニヴァースを破壊し、俺が発揮させたマジックとして使用できる!」

「!!」

「本来はお前のカードだし、効果はぶつちやけ説明要らずだよな。相手スピリット全ての
のコアを1個ずつリザーブに送る!…偶然にも、お前のスピリットのコアは全て1つの
み!!…よって全滅する!!」

ー【騎士の霸王ソーディアス・アーサー】(1??0) 消滅

ー【仮面ライダーナイト】(1??0) 消滅

ー【アーマーバット】(1??0) 消滅

ロンの場に放たれる紫の波動。場のスピリット達はそれによりコアを抜き取られ、立ち所に消滅してしまう。

「グリードックの効果、相手の手札が減った時、三回まで回復する!!…起き上がれグリードック!」

ー【戌の十二神皇グリードック】(疲労??回復)

ロンの手札を奪った挙句、さらには回復まで行う三つ首の獣グリードック。

そしてミナトは追い討ちを掛けるように、このタイミングで再びあの効果の発揮を宣言して……………

「そしてフラッシュ、キラアの【潜水】!!…潜れキラア!」

『ああ!!』

「……また不意打ちを仕掛けるつもりか」

「いや、これは保険だ。まだ確認できていない、お前のバーストカードが開くまで、キラには待機してもらおう!」

再び水中に潜るキラバイザー。

グリードックでロンの手札を全て確認し、バーストカードが何もなければこのターンでの勝利を自覚。仮にバーストが発動して、痛い反撃を貰ったとしても、今度はキラバイザーが飛び出してくる。これはミナトの鮮やかなプレイングだった。

どちらにせよ、スピリットを全て失い、絶体絶命のロン。三つ首の獣、グリードックのアタックはライフで受ける他なくて……

「アタックはライフで受ける!!………ッ」

〈ライフ3?!2〉ロン

三つ首の獣がロンのライフを1つ噛み砕く。しかし、それはロンの伏せたバーストの

発動条件に違いない。

このターンの攻撃を止めるべく、それを展開する。

「ライフ減少のバースト、絶甲氷盾！」

「!!」

「ライフを1つ回復。その後コストを支払い、このターンのアタックステップを終わらせる」

〈ライフ2??3〉ロン

砕けたロンのライフが1つ蘇ると、ミナトの場がたちまち氷壁に覆われ、スピリット達の行手を阻む。これは少なくともこの氷壁は、ミナトのエンド宣言がなければ溶ける事はなくて……………

「成る程、絶甲氷盾だったか……………これはキラアの【潜水】を先に使っておいて正解だったな。ターンエンドだ！」

手札：3

場：【戌の十二神皇グリードック】LV3

【異海人シャークマン】LV2

【No. 36 バーチャスアイランド】LV1

【海帝国の秘宝】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするミナト。その表情には少しばかり余裕が窺える。おそらく、ロンのスピリットを全滅させた挙句、2体のプロツカーを残り、【潜水】で効果を受
けず、オマケに浮上して不意打ちも可能なキラーまで備えているのだ。

これを盤石と言わずして、なんと呼ぶか……………

だが、彼はロンと言うアスラの最大のライバルである、天才的なカードバトラーの事
をまだ知らない……………

「ターン07」ロン

「メインステップ。アーマーバット2体を連続召喚」

ー【アーマーバット】LV1(1) BP1000

ー【アーマーバット】LV1(1) BP1000

下準備だと言わんばかりに、ロンは己の場に2体のアーマーバットを召喚する。そして手札にあるカードを1枚引き抜き……

「さらにマジック、リターンズモーク……ソウルコアを支払い、発揮させる」
「！」

「効果により、トラッシュからコスト4以下のスピリットを蘇生。この時、コストにソウルコアを支払っていた場合、その上限コストを6に上げる……よって、コスト6の仮面ライダーナイトを復活させる!!」

ー【仮面ライダーナイト】LV3(4) BP8000

紫色の煙がロンの場を覆う。それが微かな微風に流されると共に姿を現したのは、前のターンで破壊された仮面ライダーナイト。堂々たる復活を果たした。

これだけでは終わらない。ロンはまだ手札より展開する。

「効果により2枚ドロロー。ミラーモンスター、ダークウイングを召喚し、仮面ライダーナイトと合体!!」

「ツ……ここに来てスピリットを強化する存在、ブレイヴの御登場かよ」

ー【仮面ライダーナイト+ダークウイング】LV3(4)BP11000

上空より、甲高い鳴き声を発しながら現れたのは、黒き翼ダークウイング。仮面ライダーナイトの頭上を旋回し、攻撃まで待機する。

「アタックステップ!!…仮面ライダーナイトで攻撃!!」

遂にアタックステップが幕を開ける。この瞬間、ダークウイングと合体した仮面ライダーナイトにはいくつかの効果があつて……

「合体したナイトのアタック時効果、相手スピリット1体のコアを2つリザーブに置き、回復する!」

「!」

「グリードックのコア2つをリザーブに置き、回復しろナイト!!」

ー【戌の十二神皇グリードック】(4??2) LV3??2

ー【仮面ライダーナイト+ダークウイング】(疲労??回復)

ナイトより放たれる紫の斬撃と、ダークウイングから放たれる超音波がミナトのグリードックを襲い、その体内に眠るコアを2つ消しとばした。グリードックは耐えなくも、そのLVは降格し、弱体化してしまった。

「くっ……だがまだBPはグリードックの方が上だ……」

「それはどうかな?……ここで仮面ライダーナイトもう一つの効果【零転醒】を發揮。手札にあるアドベントカード、ソードベントを破棄する事で、新たな姿へと昇華させる!!」
「ツ……転醒だ?!」

仮面ライダーナイトは一瞬にして武器を一新させる。それは腕に装備された青い盾。ナイトはさらに、ベルトよりカードを引き抜き、それをその青い盾のバイザー部に装填

……

……サバイブ!!

と言う音声が鳴り響き、仮面ライダーナイトは自身を強化した姿、仮面ライダーナイトサバイブへと昇華して見せる。

「サバイブの転醒時効果、相手はスピリット1体を指定。その後、サバイブと指定されたスピリット以外は全て破壊される!!」

「なに!?!……くっ……俺はグリードックを指定……」

「これにより、2体のアーマーバットと指定されなかったシャークマンは破壊される!!」

転醒直後。青い盾から騎士たる証の聖剣を引き抜くナイトサバイブ。それを天に掲げると、スーパーセルとも呼べる竜巻が発生。ロンの2体のアーマーバットと、ミナトの場の指定されなかったシャークマンはそれに吸い込まれていき、呆気なく爆散してしまふ。

「まだだ。まだ終わらない……………ナイトのサブパイブ化により、ミラーモンスター、ダークウイングはダークレイダーへと進化を果たし、ミラーライダーと一体化する!!」

竜巻が収まった刹那。ダークウイングはナイトサブパイブと共鳴するように甲高い鳴き声を上げ、鋼鉄の翼を纏うダークレイダーへと進化を果たす。

そして……………

「来い、ダークレイダー!!……………今こそナイトサブパイブと一つとなりて、研ぎ澄まされた怒涛の疾風へと生まれ変われ!!……………ミラージュ!!」

「こ、これは……………」

「現れる……………ナイトサブパイブ・レイダー!!」

ー【仮面ライダーナイトサブパイブ+ダークウイング】LV3（4S）BP15000

ダークレイダーが分離。それがナイトサブパイブの身体に各所装備されていき、仮面ライダーナイトサブパイブはサブパイブをも超えた「ミラージュ」と呼ばれる究極の形態へと

強化された。

その瞬間に、疾風をも超えた怒涛の突風が追い風になるように吹き荒れる。

「これいつは単なる合体じゃないのか……!?!」

「これこそ、仮面ライダーナイト最強の姿、仮面ライダーナイトサブライダー。効果により、オレの場に他のスピリットがいなければ、このスピリットは相手の効果を一切受け付けない」

仮面ライダーナイトの究極の姿、サブライダーに驚愕の声を漏らすミナト。大袈裟にしているだけで、実のところは単なる合体である。しかし、どちらにせよこのスピリットが強い事には変わりはない……

「合体したダークレイダーの効果発揮、トラッシュにあるアドベントカードを1枚手札に戻し、相手スピリット1体のコアを2つトラッシュに送る！」

「なッ……ここにきてまたコアシユート?!」

「トラッシュにあるソードベントを回収し、グリードックのコア2つをトラッシュに送る。よってグリードックは消滅!!」

ー【戌の十二神皇グリードック】(2??0) 消滅

サバイブレイダーの聖剣から放たれる疾風の斬撃。それが遂に強敵、グリードックを斬り裂いた。グリードックは堪らず爆散する。

「これでオマエのスピリットは全て消えた。このアタックで終わりだ！」

これで今現在存在するスピリットはロンのサバイブレイダーのみ。ダブルシンボルであるため、一撃の元でミナトの残りライフを粉碎できる……………

だが……………

「甘いぜ！…俺にはまだキラーがいる事を忘れたか!!……………浮上しろキラー、そしてサバイブレイダーをブロックだ!!」

『まちに待たせやがって!!……………あの黒騎士野郎が今日の獲物か!!』

「!!」

水面より飛び上がり、ナイトサバイブレイダー目掛けて急降下するキラーバイザーク。強靱な顎、牙とその聖剣がぶつかり合う。

「キラーのBPは16000!!……対するサバイブレイダーのBPは15000!!……勝
負あつたな!!」

キラーバイザークが徐々にサバイブレイダーを押ししていく。あのシスイ・メイキヨウのアルケーガンダムをも圧倒したサバイブレイダーを押し勝っているあたり、さすがは伝説の七罪竜の一体であると言える。

しかし……………

天才的な実力を持つロンが、この程度の事を想定に入れていないわけがなくて……………

「……………キラーバイザークを倒すなら、この一瞬しかない。最初に効果が判明した時点で
そう確信していた」

「!?!」

「フラッシュマジック、アドベントカード、ソードベントを發揮!!……………これによりサバイ

ブレイダーのBPを5000上げ、対するキラーバイザークのコア2つをリザーブに送る!!」

「な、なんだと!?!……ここまで来てまたコアシユート効果!?!……こいつ、まさかここまで
の展開を最初から全て読んで……!?!」

「御名答だ」

一振りで突風を巻き起こす剣撃がキラーバイザークの鮫肌に炸裂する。その体内のコアはいくつか弾け飛び、キラーバイザークは喘ぎ声を上げると共にLVダウンに陥った。

『ガアツーー!?!……この仮面野郎!!』

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】BP15000?20000

ー【海牙龍皇キラーバイザーク】(4?2) LV3?1

負けじと再びサバイブレイダーを噛み砕かんと迫り来るキラーバイザーク。しかし、そのBP差は最早圧倒的。サバイブレイダーの気迫とオーラだけで跳ね返されてしま

う。

「行けサバイブレイダー、キラールバイザークを、七罪竜をぶった斬れ!!」

背中の黒いマントを伸ばし、聖剣に宿すサバイブレイダー。黒き大剣と化したそれを全力でキラールバイザークに振り下ろす。

伝説の七罪竜、傲慢を司るキラールバイザークも流石にそれには耐えられなかったか、堪らず爆散してしまう……………

長いターンを重ね、ロンとナイトは遂に強敵だったキラールバイザークを倒して見せた。

「くっ……………キラール……………ッ!!」

相棒の破壊を目の当たりにし、流石にシロックが隠せないミナト。しかし、その破壊による爆煙、爆風の中、ロンのサバイブレイダーが彼にトドメを刺すべく、ゆつくりと姿を現して……………

「牙威ミナト。ラストアタックの前に一つだけ教えてやる」

「??」

「オレは天才なんかじゃない……………ただオレは負ける事が死ぬ程嫌いなだけだ。アンタにも、あの一点突破バカにも負けないと言う想いがオレをさらなる高みへと誘う!!」

「ぐっ……………!」

「ラストアタックだ……………ナイトサバイブレイダー!!」

ロンがそこまで言い切ると、サバイブレイダーがその聖剣を全力でミナトへと振り下ろす。

キラーバイザーを失った今、最早彼にこの攻撃を止める術は無くて……………

「成る程……………単なるイケメンの坊ちゃんかと思つてたら、どうやら、思つてる以上に逞しい奴みたいだ……………ライフで受けてやるよ……………ッ」

〈ライフ2S??0〉ミナト

ミナトの最後のライフが砕け散っていき、バトルが終了した。勝者はロンだ。激しい

読み合いの末、天才的な実力を発揮しての大勝利であると言えよう。

「この先…如何なる強敵が現れても…それが例え三王だろうが頂点王だろうが…あの一点突破バカだろうが…オレはもう二度と負けない」

敗者であるミナトの消えたバトルフィールドにて、ロンは静かにそう口ずさんだ。そんな彼の気持ちに応えるかのように、唯一場に残ったサバイブレイダーは、勝鬨の声を表現するかのように、聖剣を天に掲げた。

……………

バトルの終了に伴い、元の場所であるカードショップに帰還する2人。彼らをアスラや烈我達が出迎える。

「おいロン!!…ちゃんと勝てたな!!」

「当然だチンチクリン。この程度、オレの敵じゃない……………まあ、修行するくらいなら、少しはいてもいいかもな。退屈しのぎにはなるし」

「……てゆうかオマエ、ソーディアス・アーサーなんてスゲエカードいつの間に手に入れたんだよ?」

「拾った」

「ウソつけええ!!」

少しはミナトを、と言うかこの世界のカードバトルの事を認めたのか、それらしい発言をするロン。

それと因みに、騎士の霸王ソーディアス・アーサーのカードはメイキヨウ旧領で偶然発見したため、ロンの「拾った」と言う発言はあながち間違つてはいない。

「いや〜完敗だったよ。ロンだったか?…お前やるなくモテるだろ?」

「はい。モテます」

「うわ〜そこしつかり言うタイプか〜:ちよつと悔しい」

『オイこの黒髪!!…次にやる時は俺が勝つ、必ず俺の方が上だと証明してやる!!…覚えろよ!』

「そう言う事言うヤツは大体次も負けるぞ」

『なんだとおお!!…噛まれてえのか!?!』

「あつはは。悪りいなチビスラ君。今のバトルで疲れたから今日は無理かな」

「えええ?!?!…じゃあオレのこのやる気はどこに向ければいいんだ?!?!…てゆーかチビスラじゃねえし!」

ロンとのバトルで疲れ果てたミナト。アスラとのバトルを断る。だが、ミナトとは別の人物がアスラの元に歩み寄り……

「じゃ、じゃあ僕とバトルしようよアスラ……!」

「ツ……星七!!…そっかオマエも持つてるんだったな七罪竜!!…っしやあやろうぜ!!」
「うん!!」

その正体はアスラと同じ歳くらいの少年、緑仙星七。彼もまた七罪竜に選ばれた者の1人。修行の相手に値する人物であるのは間違いない。

完全にやる気になったアスラ。星七とバトルせんとグッズを取り出そうとするが、その間に光黄が割って入って来て……

「ちよつと待て、今日はもう日が暮れるし、バトルは……と言うか修行は明日にしたらど

うだ?」

「ええ!?!…ちよつと光黄さん、オレ今日一回しかバトルしてませんよ!」

「はは……じゃあ明日いっぱいバトルしようよ」

烈我達はアスラ達と違って、自分達の世界を旅しているわけではないし、カラーリーダーのいる街を目指したりしない。実家、及び帰る場所があり、七罪竜に関する事を除けば、基本的に何の変哲もない普通の生活を送っている。

「そう言えばさ。アスラ達はこの世界にいる間どこで寝泊りするの?」

「あ。そう言えばそうね……」

紫髪の少女、絵瑠がそう告げ、エールは頷いた。確かに野宿をするわけにはいかない。寝床の確保は何よりも優先すべき、大事なことだ。

そんな中、呆れたようにテンドウ・ヒロミが口を開いて……

「ああ?…んなもん、オマエらの家に決まってるだろうが」

—!!!

テンドウの放った言葉に誰もが驚愕する。しかし、言動からしてどうやら本気のようなのだ。

「ちよつと待てよ、いくらなんでもそんな急な話……」

「なんだ小僧異世界バージョン。オレに逆らう気か？」

「い、いやそんな事滅相もありません!!」

「烈我に恐怖が刷り込まれてる……」

流星にそれはないだろうと言わんばかりの烈我の発言だったが、テンドウに逆らえば命が無い事を知っているため、直ぐに諦める。似たような経験をしたアスラにはわかる。

こうして、アスラ達は散り散りになり、この世界のカードバトラー、天上烈我や黄空光黄の自宅に泊まる事となった……

明日からまた修行と言う名のバトルスピリッツが幕を開ける。

43 コア 「アスラVS怠惰な樹龍」

「うおおお!!」

時は夕暮れ。

なんの変哲もない家の中。三角頭巾を頭に被ったアスラが掃除機を使って床のゴミを着々と吸い上げていた。そして全ての床が綺麗になったかと思えば、その後すぐに凄まじい速さで濡れた雑巾を使って床を拭き上げていく。

「アスラくん!…床終わったらトイレ掃除と洗濯物お願いね」

「はいるみかさん!!…このアスラにお任せくださいアアアアア!!」

家の中でアスラに声をかけて来たのは、おそらく家主であろう人物。彼女の指示に、アスラは目をギラギラと輝かせながら応答する。

長い茶髪で、非常に綺麗な容姿をしているが、ふしだらな服装から、日常的にズボラな人物なのであると推理できる。

そんな彼女の名は「天上るみか」……………

この世界の熱血少年、七罪竜のバジユラブレイズに選ばれた天上烈我の実の姉である。そう、アスラは今、天上家にお世話になっているのだ。その結果、まるで召使いのように扱われていて……………

「おい姉ちゃん。仮にもお客さんだぞ?…なにこき使ってたんだよ」

「えくだつて自分から進んでやりますつて言つて来たんだよ…良い子だよね…あつ、アスラくん!…料理はできる?」

「できませんよ!!」

「じゃあお願いね〜!」

「少しは遠慮しろよ!」

烈我は姉のるみかと2人暮らし、いや今はバジユラを含めての3人暮らしである。るみかの遠慮の無さに、弟の烈我は半ば呆れる。

……………

そこから少しだけ時は経って夕飯を食べ終わった頃、食事の終わった皿をアスラが鼻歌交じりに洗っている時だ。ソファにだらしなく寝転がっているみかが彼に質問して来たのは。

「ねえ、アスラ君。弟から聞いたんだけどさく君って凄い壮大な夢を見てるんだって？」
「ツ……そうっすよ!!……頂点王って言っつて、オレ達の世界で一番強いカードバトラーなんですけど、オレはそれになりたいんす!!」

るみかにそう言われ、アスラが目をギラギラと輝かせながら己の野望を答えた。そんな彼の夢にるみかは少しばかり心を打たれたかのように感動して……………

「おおく……かつこいいじゃん!………それに比べてウチの弟と来たら……」
「んだよ!……人の夢は関係ないだろ!？」

『ガハハ!!……まあ、お前の夢は他の奴らと比べたら妙ちくりんだからな!!』
「うるせえぞバジユラ!!」

アスラの夢と烈我の夢を比べるるみか。烈我の横にいるバジユラも大笑いする。こ

ここにいて唯一烈我の夢を知らないアスラは、彼の夢の内容が気になっていて
.....

「ん?.....烈我の夢ってなんなんだ?.....そんなに面白いのか?」

『ああ、聞いたら腹抱えちまうぜ』

「なんだよそれ、めっちゃ気になる!!...教えてくれよ烈我、オマエの夢!!」

「.....笑わずに聞いてくれるか??」

「おう!!」

烈我は少しでも照れ臭そうにしながら、アスラに己の野望の事を話した。

その内容は.....

「俺の夢は.....その.....光黄にバトルで勝って、結婚する事だ」

「!!」

光黄。烈我の幼馴染みにして最大のライバルでもある彼女。彼女は幼い時、烈我にバトルで勝てたら結婚すると言う約束を交わしていた。それを10年以上経った今でも

引き摺り、烈我は打倒光黄でバトルの腕を磨いているのだ。

彼のこの夢を聞いた時、大抵の人物は大笑いするかドン引きする。

しかしこのアスラは違った……………

「…………へ〜良い夢だな!!…頑張れよ!!」

「お前、おかしいと思ったりしないのか?」

「確かにちよつと変わった夢だと思っではいるけどさ、そんだけで人の掲げてる夢をおかしいと思ったり、馬鹿にしたりしねーよ」

アスラの頂点王になると言う夢もよく「オマエになれるわけがない」「身の程を知れ」などと言われる。それ故に、アスラには烈我の夢をおかしいと思える感覚がなかった。

『んだよ、その言い方じゃあ烈我の夢を聞いて笑いこけた俺が変みたいじゃねえか』

「人の夢笑つたらダメだぞバジユラ」

『ああ!?!…んだとこのチビ助』

「誰がチビ助だアアアアア!!…だからオマエの方が小ちやいだろが!!」

『バトルフィールドだと俺はデカいんだよ、オマエなんかよりも遥かにな!』

「うおおお!!…論破されたアアアアア!!?」

「あつはつは!!…なんかバジユラ君とアスラ君、漫才コンビみたいで面白いね」

咄嗟に漫才じみた展開になるアスラとバジユラ。それを見たるみかが大笑いしている中、烈我は口角を上げ……ソファの上から立ち上がると、アスラの方へと詰め寄って行き……

「アスラ」

「ん?」

「頑張ろうな。オマエは頂点王。俺は光黄を超える、その両方の夢、叶えてやろうぜ!」
「へへ……おうよ烈我!!…どっちが先に己の夢を叶えるか、競争だ!!」

2人はそう言葉を掛け合い、グータッチでさらなる友情を深めた……

時同じくして場所は黄空光黄の自宅。彼女の自宅にはエール・オメガととシイナ・メ

ザが泊まり込んでいた。

3人は同時に光黄の部屋の扉を開け、ライトとムエのみが存在するその部屋へと入る。

「いや〜良い湯だったね〜」

「お風呂狭くてすみませんね」

「まあ3人で入れば狭く感じるわよね」

3人とも風呂上りなのか、光黄とエールは髪をタオルで巻いており、シイナは髪を団子状に作り上げていた。

そんな彼女らの姿に色欲を司る七罪竜ライトは興奮して……………

『ワーオ!!…御三方ともなんてビューティフルなんでしょう!!…光黄様は毎日見てるから言わずもがな、エール様!!…お嬢様らしい清楚な佇まいに加え、滴った髪、最高で(こげ)います!!』

「どうでもいいから黙っててくれる?」

『シイナ様!!…団子になった髪から大人の女性らしさを感じます!!』

「あらあらく…お世辞上手だねライト君はく」

『お世辞などではありません!!…私、美しい女性には嘘なんてつきませんよ!!』
「ライト。もういいからお前はムエと遊んでろ」

光黄がそう言うと、オレンジ色の小動物ムエが「ツツテケテ」と足音を立てて怒りながらライトに迫る。

「むええええ!!」??オマエがいると会話が進まないんだよおお!!

『むおつ!?!…またこのワンワン!!…いつぞやの決着を今ここに!!』

「むえええ!!」??焼き鳥にしてくれるわああ!!

始まったのは伝説の七罪竜とオレンジ色の謎の小動物の激闘。暴れ回った弾みで光黄の部屋を飛び出していく。

これで邪魔者はいなくなった。一瞬間を置いた途端に頂点王シイナが話題を変える。

「ところで光黄ちゃんと烈我君ってどこまでいったの?」

「ツーーー!?!」

(いきなりそこ聞くのね……流石シイナ様……デリカシーが無いと言うか何というか……ここら辺はあのバカスラに似てるのよね……)

彼女の問い掛けに思わず吹き出してしまう光黄。

「ど、どこまでつて……ふ、普通に高校までですよ!……大学は知らん!」

「へへ……友達以上、恋人未満って感じか」

「ツーー!?!」

(……サイコパス)

なんとか誤魔化そうとする光黄だが、恋愛脳な頂点王シイナにそんなモノは通じない。彼女が喋るたびに彼らの関係性を的中させていく。エールは思わず光黄に同情し、シイナの事をサイコパスだと思ってしまう。

「ふっふっふっ……私から逃れようたつてそうはいかないよ光黄ちゃん、さつさと本当のことを白状した方が身のためだよ?」

「い、いや……だから……」

「さあ!!」

「そ、その……」

「さあ!!」

「そう言うんじゃない……」

「さあ!!」

光黄に詰め寄るシイナ。こればかりはエールでもどうしようもできない。何せ、相手はアスラ以上の直感を持ち、エレン以上の強さを持つ最強のカードバトラー、シイナ・メザなのだから………

光黄は大人しく本当の事を伝える事しかできなかった………

「……………」

「ふむふむ。成る程成る程………つまり烈我君はめちやくちや光黄ちゃんにアプローチを掛けてくるけど、光黄ちゃんは気持ちに全然素直になれないと?」

「ま、まあ………そんな感じですよ………」

烈我と光黄の関係性、その原因となる過去の約束まで全て知ったシイナ、エール。シイナはそれらの事情を頭の中で高速で分析すると……………

「いやまあまだ良いよねー…要は光黄ちゃんが烈我に好きって言えたらハッピーエンドなわけでしょう?」

「…………いや、まあ必ずそうとは限りませんけど」

「ウチのエールちゃんなんてアスラの事が好きって言うバレバレな気持ちさえ白状した事がないし、まだ光黄ちゃんとかの方が進展してるよね〜」

「なツ!?!…………だ、だからそんなわけないじゃない!!…………誰があんなチビでコモンなヤツ!!」

「うんうん。でもそこら辺がエールちゃんの良い所だね。見てて楽しい」

「…………お前もいつも苦労してるんだなエール…………」

兎に角ツンツン少女2人をからかつてはおちよくるを繰り返すシイナ。エールと光黄はその夜間で昼間以上の疲労感を得てしまうのだった……………

そんなヒロイン軍団が恋愛話に花を咲かす……いや、シイナによって無理矢理花を咲かされている事などつゆ知らず、深夜。誰もが寝静まる時間帯にて、アスラは1人家の庭に出ていた……

何やらBパッドを展開しており、その手にはあるカードが握られていた……

「行くぜ……仮面ライダー龍騎を召喚!!」

Bパッドにそのカードの名を叫び、叩きつけるアスラ。それは自身を選んだライダースピリットである仮面ライダー龍騎。

少しは強くなれた今ならその召喚が可能なのかと試したわけだが……

その赤き姿は又しても拝める事は出来なかった。Bパッドはカードに反応を示さず、龍騎は召喚されなかった。虚しさだけが空間を覆う。

「やつぱまだダメか……でも諦めねえぞ。オレには超えたい相手が山程いるんだ……」

アスラの頭の中には常に超えなければいけない相手達が浮かび上がってくる。それは残りのカラーリーダーや三王、頂点王はもちろん、一番は最大のライバルであるロン

だ………

今日見た七罪竜を倒して且つ勝利を掴んだ彼を見て、少しだけ焦りを感じているのだから。

「だから、だからオレは絶対もう一度オマエを……」

改めて龍騎を召喚して見せると意気込むアスラだったが、その瞬間に聴き慣れた太い声が自分に向けて声を発して………

「何も考えずにバトルしても、強くはなれないぜ小僧」

「ツ……テンドウさん」

現れたのはライダースピリットを司る三王、テンドウ・ヒロミ。本日何本めか、タバコを吸い、煙を吐きながらの登場だった。

「考えずにバトルしても強くなれないって……オレだってちゃんと考えてますよ、戦略とかイメトレとか」

「ふくん。脳味噌筋肉君もイメトレとかすんのな」

「誰が脳味噌筋肉君ですかあ!!」

テンドウは軽くアスラを揶揄うと話を切り替えて……………

「つーかオマエ、ライダースピリットは使えなくなつたのに、それに関連するマジックカードはまだ使えるのな。なんだっけ、あのロイヤルベンチとかストライキベンチとか」

「いやファイナルベントとストライクベントっす!!…どんだけベンチにこだわり持つてんすか!!」

冗談だと思ってしまう程に名前を覚ええないテンドウ。ツツコミに回るのが面倒くさく思い、兎に角呆れるアスラ。Bパッドを見つめ直し、特訓に戻ろうとするが……………

「……………話はそんだけっすか?…じゃあオレは特訓に戻りますよ」

「まあ最後まで話を聞けよ小僧。ここでとっておきの情報を教えてやる」

「ツーー!!」

三王テンドウ・ヒロミからのとっておきの情報。その言葉に顔色を変えるアスラ。きっと自分がライダースピリットを使えなくなった真の理由や、強いカードの情報に違いない。

そう期待したのだが……………

「……このタバコと酒…美味いぞ」

「あんたいったい何しに来たんだアアアー!!」

タバコと酒美味しさを未成年に自慢するテンドウ。結局なんの利益も無い情報だけを口ずさんだだけでアスラの特訓の時間を奪っただけだった。

本当に彼は頼もしい時と頼もしく無い時の差が天と地程激しい。そう痛感するアスラであつた……………

翌日。その昼間。

伝説のスピリット、七罪竜に選ばれし者達に修行をつけてもらうべく、アスラは再びカードシヨップを訪れていた。そこには昨日集まったメンバーが集っていたのだが、その中に唯一シイナだけはいなくて……

「アレ?…エール、シイナは??…一緒に光黄さんと泊まったんじゃないのかよ?」

「ああ。シイナ様なら早朝に用があるって言ったつきりどっか行ったわ……」

「……てか、オマエなんか疲れてない??」

「あんたには関係ないわ。黙ってなさい」

「なんで!」

どこか疲れが見えるエール。

決してアスラも関係ないわけではない。エールと光黄は深夜までシイナに恋愛話に付き合わされたため、寝不足なのだ。

「光黄、お前もなんかしんどそうだな……大丈夫??…何か温かい飲み物でも」

「自分で買う、お前が心配する事じゃない」

「そ、そう?」

光黄を心配する烈我。アスラとは違いちゃんと彼女を気遣った発言をするが、クールな表情で光黄はそれを受け流す。

「……全く同じ光景が2つもあるとは……」

「あの2人、関係性まで似てるんだな」

ミナト、絵留の順でそう言葉を落としていく。似た者同士の烈我とアスラだが、烈我に光黄がいる事は言わずもがな、アスラにはエールがいる事を悟る。

そんな中、三王の1人、テンドウ・ヒロミは懐から徐にタバコを取り出すと……

「そんじゃ、後はオマエらで勝手にバトルしとけやクソヤロー共。オレはこの世界について勉強してきまーす」

「絶対タバコ吸いたいでしょアンタ」

そう言いながらテンドウはカードショップの外に出てタバコを吸い始める。意外にもしつかり禁煙ルールは守るようだ。

「で?…今日は誰とバトルするわけ、バカスラ?」

「おうよ。今日はもちろん、昨日約束した星七だぜ!!…やってくれるよな?」

「うん、もちろんだよ!…この日のためにデッキを調整したんだ!…行くよエヴォル!」
『うむ。承知したぞ星七!』

アスラがそう言うと、中性的な顔立ちの緑色の髪の少年、星七がやる気満々にデッキを向ける。その瞬間にエヴォルと呼ばれる、おそらくは七罪竜の一体であろう声が聞こえて来た。

その強そうな声色に、アスラはバトルに対するモチベーションを上げる。

「っしやあ!!…燃えて来たぜ。オレは絶対ライダースピリットを召喚できるくらい強くなつてやらあ!!…行くぞ星七!!」

「うん!!…負けないよアスラ!!」

……ゲートオープン、界放!!

気合は十分。2人はコールと共にバトルフィールドへと向かい、テンドウ曰くダンゴムシに似てる場所へと辿り着いた。

その様子を残った他の面々が眺めていて……………

「アスラ、勝てるかしらね……」

エールが隣にいたロンに聞いた。

「勝ってもらわないと困る。あいつはオレのライバルだから」

「……………あんたって結構ツンデレよね」

「オマエにだけは言われたくない」

「何よ偉そうに!!…私はエックスよ!？」

「オレもなんだが？」

マウントの取り合いになるエールとロン。そんな彼らを光黄やミナトが宥めようとした直後に、アスラと星七、2人のバトルスピリッツが幕を開けて……………

……………

「先行はオレだ。スタートステップ」

互いに期待し合い、胸を高鳴らせる中、アスラの先攻でバトルが始まる。

「ターン01」アスラ

「メインステップ……最初はオマエだ、ドラグノ突撃兵!!」

「!!」

1 【ドラグノ突撃兵〈R〉】 LV1 (1) BP4000

アスラの場合に颯爽と洗われたのはテンドウから譲り受けたカードの1枚、巨大なハンマーを手を持つ竜人ドラグノ突撃兵。

「赤属性のスピリット……やっぱりアスラは烈我にそっくりだな」

「おうよ……生まれた時からオレは赤属性だせ、これでターンエンド!!」

手札：4

場：【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV1

バースト：【無】

先行の最初のターンは攻撃ができない。アスラは突撃兵をブロッカーとして残し、そのターンをエンド。星七のターンへと移り変わる。

「ターン02」星七

「メインステップ、僕はこのカード、エイプウィップを召喚！…コストにソウルコアを支払うよ！」

ー【エイプウィップ〈R〉】LV1(1)BP1000

「ツ……ちよび髭シルクハットと同じカード!？」

「え?…ちよび髭?!…誰?…まあ取り敢えず気を取り直して、エイプウィップの召喚時効果!…ポイドからコア一つをリザーブに置き、召喚コストにソウルコアを使用し

ていた場合、さらにボイドからコア2個をトラッシュに置く！」
「おお……やつばめちやくちやつええ！」

星七が召喚したのは4本の腕が生えた自然味溢れる猿型のスピリットエイプウィップ。以前ライダーハンターズの主任、ウィルが使用していたものと全く同じである。

星七はその効果で合計のコア数を一気に3つも増やした。

「さらに僕は創界神ネクサス、サラスヴァティーを配置！」

「ツ……また出た神様カード！」

「【創界神サラスヴァティー】LV1

弦の張った楽器を手に持ち、緑色の長い髪を靡かせる女性の創界神、サラスヴァティーが星七の背後に出現。さらにこの時、配置時の信託も同時に発揮。今回の対象内のカードは2枚。よってサラスヴァティーにコアが2つ追加された。

「最後にバーストをセット!!…僕はこれでターンエンドだよ！」

手札：2

場：【エイプウィップ〈R〉】LV1

【創界神サラスヴァティー】LV1（2）

バースト：【有】

大量のコアバースト、創界神ネクサスの配置。さらにはバーストカードまでセットし、最初のターンで既に盤石の耐性を整えた星七。

それを崩すべく、アスラが動き出す。

「ターン03」アスラ

「メインステップ！…シヤムシーザーを召喚して、決闘者たちの戦場を配置だ!!」

ー【シヤムシーザー】LV1（1）BP2000

ー【決闘者たちの戦場】LV1

アスラの場に赤い体表に白いトゲを幾つも生やしたトカゲ型のスピリット、シヤム

シーザーが現れ、背後には熱い炎で燃え滾る戦場が出現する。

「さらにマジック、フォースブライトドロー!!」

「!!」

「この効果により、オレは手札を4枚になるまでドロウする。今の手札は2枚、よって2枚のカードを新たにドロウだ!!」

赤属性特有のドローマジックで一気に手札を回復させるアスラだったが……………

ここで星七の伏せていたバーストカードが疼き出して……………

「その効果もらったよ…手札増加後のバースト、千枚手裏剣を発動だ!!」

「!?!」

「効果により、ボイドからコア2つをリザーブに追加し、相手スピリット2体を疲労!!…ドラグノ突撃兵とシヤムシーザーには疲労してもらおう!!」

星七の宣言に反応し、勢い良く反転するバーストカード。それによって巻き起こされる旋風がアスラの場合に存在するドラグノ突撃兵とシヤムシーザーをアタックもブロッ

クもできない状態、疲労状態へと追いやった。

「よし、これでこのターンのアタックは凌いだ！」

メインステップの時点でアスラのスピリット達は全て疲労。このターンの攻撃は無いと安堵する星七だったが……

アスラのスピリットはまだ動く。

「その考えは甘いぜ星七!!…アタックステップ、ここでオレはドラグノ突撃兵の効果【追撃】を發揮!!」

「追撃!?!」

【追撃】は疲労状態から重疲労状態にする事で、アタックができる!!」

「なツ!?!…じゃあドラグノ突撃兵は1回だけならアタックが可能!?!」

「その通りだ!!…行け突撃兵!!…自分と決闘者たちの戦場の効果でBPプラス6000されているため、そのBPは10000!!…さらに決闘者たちの戦場もう一つの効果でエイプウィップに指定アタック!!」

「ツーー!?!」

1 【ドラグノ突撃兵】 BP 4000?? 7000?? 10000

その名の通りハンマーを手に持ち、星七の場に突撃していく突撃兵。狙う先は彼のラ
イフではなく、場に存在するエイプウィップ。

エイプウィップは突撃兵の一撃を4本の腕で防御しようと前方に固めるが、突撃兵の
一撃はそれごとあつさり粉碎。エイプウィップは堪らず爆散してしまう。

「オレはこれでターンエンド!!…どうだ星七、これがオレの諦めねえバトルスピリッツ
だ!!」

手札：4

場：【ドラグノ突撃兵】 LV1

【シャムシーザー】 LV1

【決闘者たちの戦場】 LV1

バースト：【無】

「あれ?…決闘者たちの戦場をドラグノ決闘者にしないの?」

勢い着いたアスラがそのターンをエンドとする中、バトルフィールド外でエールがその言葉を落とす。確かに、赤のスピリットであるドラグノ突撃兵が星七のエイプウィップを破壊したタイミングで決闘者たちの戦場はスピリットとして転醒でき、さらなる追撃が可能だった。

そんな中、エールの横にいる光黄がクールな佇まいを見せながら口を開いて……………

「転醒してもこのターンで勝負を決められるわけじゃない。だったら指定アタックで場をコントロールしようって言う戦法だろうな。アスラ……………昨日も思ったけど、最初に会った時と比べてかなり考えて動くようになってるな」

「でもそれだけじゃ星七には……………いや、星七とエヴォルには勝てない」

光黄がそう言うと、烈我がその言葉を落とす。それは星七とその相棒である伝説の七罪竜、エヴォルを知っているからこそ言える言葉であって……………

「コアは十分溜まった……………これで君を召喚できる、行くよエヴォル!!」

『うむ。儂に任せろ星七!!』

次ターン開始の刹那。ジジ臭い喋り声が星七の頭に直接語りかけて来る。そんな彼こそ、星七のパートナーであるエヴォルであり……………

「ターン04」星七

「メインステップ!!…アスラ、君の【追撃】には驚かされた、けど今度は僕が君を驚かせる番だ!!」

「ッ……………来るか!!」

いったい何が現れるのか、アスラでも予想ができた。その後、星七は召喚口上を述べながらバトル台にそのカードを優しく添えて……………

「数万年の時より生きし伝説!…怠惰なる龍!…あらゆる環境、困難さえも己が進化する糧としろ!…樹進超龍エヴォルグランド!…召喚ッ!」

地響きと共に大地が揺れ、巨大な亀裂を走らせる。そして地表が大きく盛り上がり始

めたかと思うと、ソレは生物の背、まるで鳥のような甲殻を持つ龍の姿、怠惰を司る七罪竜、その名をエヴォルグランドだ。

ー【樹進超龍エヴォルグランド】LV3(4S) BPI5000

「うお、スツゲエ!!…これが星七の相棒かあ!!」

『お主が例の小さき者か。その力、どれ程のものか、見定めてもらおうぞ』

「誰が小さき者だアアア!!…つーか喋り方ジジ臭え」

バジユラやキラー、ライトと違い、どこか年寄り臭い喋り方をする怠惰を司る七罪竜、エヴォル。星七はそんなエヴォルとアスラの会話に苦笑いすると、気を取り直して「アタックステップ!」と、宣言して……………

「創界神サラスヴァアティーの効果【転神】を發揮!…このターンの間、サラスヴァアティーはスピリットとなり、アタックが可能になる!」

「!」

「サラスヴァアティーとエヴォルでアスラにアタックだ!!」

創界神サラスヴァアティーのカード上に置かれていた2つのコアが消え去る。途端、サラスヴァアティーとエヴォルはアスラのライフを目掛けて宙を舞い、走り出す。

前のターン、無理をしてアタックを行ったアスラにはこの攻撃を凌ぐ手立ては無くして

………

「2つともライフで受ける……………ッ」

へライフ5??4??3へアスラ

サラスヴァアティーは弦を弾き、具現化されたメロディーで、エヴォルは強靱な顎で、それぞれアスラのライフを1つずつ砕いた。

「僕はこれでターンエンド!!」

手札：2

場：【樹進超龍エヴォルグランド】LV3

【創界神サラスヴァアティー】LV1(0)

バースト：【無】

「ターンエンド!?…エヴォルグランドを、七罪竜の効果を何も使わないのか!?」
「ふふ、それは多分、今に分かると思うよ」

アスラはこのターン。星七がエヴォルグランドを使い、何かしらの効果で一氣に自分のライフやスピリットを叩くものだと思っていた。

しかし当の本人はアタックさせただけでこのターンをエンド。アスラにとっては何かあると考えざるを得なかった。

（くそ……エヴォルグランドの効果はなんだ??……いや、だったら効果を使われる前にオレが倒す!）

やられる前にやると言う思考に思い至るアスラ。己のターンを開始する。

「ターン05」アスラ

ターンシークエンスの最中でカードをドローするアスラ。それを見て口角が上がる。何か良いカードが引けた証拠だ。

「来たぜメインステップ……行くぜ星七!!」

「!!」

「地響きと共にただいま見参!!……ドラグノ攻城兵をLV2で呼ぶぜ!」

ー【ドラグノ攻城兵】LV2(3)BP10000

アスラの場の地中より飛び出してきたのは、赤い体表を持つドラグノスピリット、ドラグノ攻城兵。

「ドラグノ攻城兵は相手の場にネクサスカードが存在する時、コスト4として召喚できる!」

「コスト6のスピリットをコスト4のスピリットとして召喚?」

「よし、コイツでエヴォルグランドを倒せるぜ。バーストをセットしてアタックステップ!!……ドラグノ突撃兵と決闘者たちの戦場の効果により、ドラグノスピリット全てはB

Pプラス6000!!」

┆【ドラグノ突撃兵へR】BP4000??7000??10000

┆【ドラグノ攻城兵】BP10000??13000??16000

「ツ……BP10000と16000の2体」

アタックスステップの開始に伴い、アスラの場のドラグノスピリットのBPが一気に上昇。その後、アスラはすぐさまドラグノ攻城兵のカードに手を置き……………

「行くぞドラグノ攻城兵、決闘者たちの戦場の効果でエヴォルグランドに指定アタックだ!!…アタック時効果でさらにBPプラス5000!…よつて合計BPは21000だ!!」

┆【ドラグノ攻城兵】BP16000??21000

ドラグノ攻城兵が狙う先は星七のライフではなく、伝説の七罪竜、エヴォルグランド。

連携により跳ね上がったその驚異的なBPで破壊できるとアスラは踏んでいたが
 ……………

「相手の効果の対象になる時、エヴォルグランドの【エヴォルグランド進化】の効果を発揮！」
 「なに!?!…このタイミングで!?!」

判明していなかったエヴォルグランドの効果が指定アタックされたこのタイミングで発揮される。その内容はアスラが驚愕せざるを得ないものであり……………

【進化】は、相手の効果が発揮される前に、エヴォルのコストを20にするか、BPを10000上げるか、アルティメットにするかのいずれかを発揮させる!…今回は最後に言ったアルティメット化を発揮!…よってエヴォルはアルティメットとなり、指定アタックを無効にする!」
 「ツ……アルティメット!?!」

七罪竜の一体、エヴォルグランドの特質すべき効果は【進化】によるその対応力。効果が発揮される前にコスト、又はBPが上がったり、さらにはアルティメット化まで可

能。

今回はスピリットにのみ指定アタックできる決闘者たちの戦場の効果を自身がアルティメット化する事で無効にしたのだ。

本来であれば生物は時間を掛けて進化していくが、このエヴォルはそれを一瞬にして行ってしまう。それこそがエヴォルグランドの大きな罪。

「だけど、指定アタックを透かしたただけだ、ドラグノ攻城のアタックは続いているぜ!!」

「うん。だからそれはこれで止める!!」

「!!」

「フラッシュマジック、バインディングメロディ!…アタック中で疲労状態のドラグノ攻城兵をデッキの下に戻す!」

「ツ……攻城兵!」

星七の背後から放たれた具現化されたメロディが突き進むドラグノ攻城兵を包み込み、アスラのデッキの下に戻した。

「どうだアスラ!…これがエヴォルの【進化】の効果、どんな効果でこようとも、エヴォ

ルはそれに対応する！」

「くっ……でもアタックステップはまだ終わってねえ……ドラグノ突撃兵、【追撃】だ!!
…シヤムシーザーも行け!!」

せつかくのアタックステップを無駄にはできないか、アタック可能なスピリットを総動員し、星七のライフへと走らせる。

未だにライフ5の星七。ここは余裕のある表情で宣言する……

「ライフだよ！………ッ」

〈ライフ5??4??3〉星七

ドラグノ突撃兵のハンマーの重たい一撃が、シヤムシーザーの体当たりがそれぞれ1つずつ星七のライフを破壊した。

「オレはこれでターンエンドだ」

手札：3

場：〔ドラグノ突撃兵（R）〕 L V 1

〔シャムシーザー〕 L V 1

〔決闘者たちの戦場〕 L V 1

バースト：〔有〕

ライフ2つを破壊したものの、エヴォルグランドの「進化」により、劣勢は変わらな
い。だが、そんな劣勢な彼に対しても、星七は容赦しなくて……

〔ターン06〕 星七

「メインステップ。行くよアスラ。エヴォルの次は僕のキースピリットを見せてあげる
よ」

「!!」

「星七はそこまで言い切ると、手札にある1枚のカードを抜き取って……」

「女神より生み出されし蒼白の獣……美麗なるその姿をいざ現せッ……神聖天獣ガーヤ

トリー・フォックス、LV2で召喚！」

遙か後方からゆっくりと歩む獣の影、そして天から指す日差しがその影を映したかと思うと、その正体は蒼白な体を持つ、女神サラスヴァティーの化神と言い伝えられるスピリットの姿、ガーヤトリー・フォックス。

ー【神聖天獣ガーヤトリー・フォックス】LV2(3)BP10000

「おおー……なんて綺麗なスピリットなんだアアアー!!」

その優雅な姿に心震わされるアスラ。目をギラギラと輝かせながら感動の意を示す。しかし、現実の話、そんな悠長な事を言っている場合ではなくて……

「ガーヤトリー・フォックスの召喚時【界放】の効果を発揮!…サラスヴァティーにコアを2つ追加し、さらにコア1つをガーヤトリー・フォックスに置く事で、このターンの間アスラはバースト効果を発揮できない!」

「ツ……バーストが使えない!?!」

気高い雄叫びを上げるガーヤトリー・フォックス。召喚タイミングと合わせて合計3つのコアがサラスヴァティーに追加。その後、内1つがガーヤトリー・フォックスに移動。アスラはセットしたバーストカードの発揮が不可能となる。

「さらにマジックグラントロー。効果で2枚のカードをドロー！」

赤属性のマジックカードで手札を増強したところで、星七はアスラにトドメを刺すべくメインステップからアタックステップへと移行する。

「アタックステップだ!!…お願いしますガーヤトリー・フォックス!…アタック時効果で自身とサラスヴァティーにコアを1つずつ追加！」

滑らかなフォルムで走り出すガーヤトリー・フォックス。その瞬間に自身とサラスヴァティーにコアが追加される。

「サラスヴァティーは自身か遊精を持つスピリットのバトル終了時、コア3つをボイド

に置いて回復できる……この効果でガーヤトリー・フォックスを2回攻撃させて、僕の勝ちだ!!」

アスラのライフは残り3。エヴォルの攻撃と含めてこれで終わりかと思われたその直後。負けじとアスラが手札にあるカードを引き抜いて……

「バーストが使えないなら手札のカードで凌ぐまでだ……フラッシュマジック、ファイヤージュール!!」

「!!」

「効果でシャムシーザーを破壊し、このアタックでこのターンのアタックステップを終了させる!……ガーヤトリー・フォックスのアタックはライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ3??2〉アスラ

効果によりシャムシーザーが粒子と化して消え去る。そしてそんな事に気も止めずガーヤトリー・フォックスがアスラに全力で体当たり、そのライフ1つを砕く。

しかしその直後、シャムシーザーの犠牲により生まれた炎の壁が吹き上がり、エヴォ

ルやガーヤトリー・フォックスの道を塞ぐ。これにより、星七はこのターンのアタックが行えなくなってしまう……………

「…………バトル終了時に発揮できるサラスヴァティーの効果は使わないよ。これでターンエンド」

手札：3

場：【樹進超龍エヴォルグランド】LV3

【神聖天獣ガーヤトリー・フォックス】LV2

【創界神サラスヴァティー】(3) LV2

バースト：【無】

星七のターンエンド宣言。それに伴い、ファイヤーウォールによる炎の壁が消え去って行く。

「この攻撃を凌ぐなんて凄いよアスラ！」

「オマエもな星七!!…自慢の二大スピリット、超カッコいいぜー！」

『ほっほ。儂も褒めてくれるのか?』

「当然……凄く強いぜ七罪竜!!……でも負けねえ。このバトル、勝つのはこのオレ、スーミのアスラだ!」

「ツ……この気迫、物言い……やっぱり似てるな、烈我に!」

断崖絶壁の逆境に立たされたアスラ。しかし、次のターンより彼の逆襲が始まる。その事を誰よりも星七は感じた。

この似たような状況になると、アスラ同様凄まじく強くなる人物を、彼は知っているからだ。

「ターン07」アスラ

「つしやあ行くぜ、ドラグレッダーとドラグノ総軍団長を召喚!!」

ー【ドラグレッダー】LV1(1) BP6000

ー【ドラグノ総軍団長】LV2(3) BP7000

アスラの場に龍騎に宿る赤い龍、ドラグレッダーと、ドラグノスピリットの重鎮、ド

ラグノ総軍団長が出現。今現在疲労状態で存在するドラグノ突撃兵と合わせ、場のスピリットは合計で3体となる。

「このターン、星七自慢の二大スピリットを倒しつつ、このオレが勝アアアーっ!!…アタックステップ、その開始時にドラグノ総軍団長の効果。トラッシュにあるコア5個をスピリットに置く。オレは突撃兵に3つ。総軍団長に2つ追加…よつてLV2と3にアップ、ドラグノ総軍団長以外のドラグノにコアが2つ以上追加されたため、さらにカードを2枚ドロ―!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】(1??4) LV1??2

ー【ドラグノ総軍団長】(3??5) LV2??3

コアの追加とそれに伴うLVアップ。さらにはドロ―まで行うアスラ。ここまです得たアドバンテージは相当な物だが、勝利宣言している通り、まだまだ終わらず
 ……

「アタックステップ続行!…行け総軍団長、転醒ネクサス、決闘者たちの戦場の効果で

「ガーヤトリー・フォックスに指定アタックだ！」

「ツ……ガーヤトリー・フォックスを!？」

走り出すドラグノたちの重鎮ドラグノ総軍団長。狙う先は星七のライフではなく、彼のキースピリットであるガーヤトリー・フォックス。アスラはドラグノ総軍団長の効果でさり気なくカードを1枚引く。

先手必勝であると言わんばかりに3本の剣を4本の腕でガーヤトリー・フォックスに振るう総軍団長だったが、ガーヤトリー・フォックスはそれを軽やかに回避。戦闘が始まる。

「今の総軍団長のBPはドラグノ突撃兵と決闘者たちの戦場の効果でBPプラス6000されている、よって13000の指定アタックだ!!」

「くっ……ガーヤトリー!」

ー【ドラグノ総軍団長】BP7000??10000??13000

ガーヤトリー・フォックスのBPを軽く超えている総軍団長。ガーヤトリー・フォッ

クスは反撃に出るべく緑色の火の玉を幾つも放つが、総軍団長はそれら全てを斬り捨てる。そして遂にはガーヤトリー・フォックスそのものに迫り、一閃。容易く爆散させた。

「ドラグノ総軍団長の勝ち!!…そしてこの時、決闘者たちの戦場の【転醒】の効果を発揮!!」

「ッ……今度はいったい!!」

「このカードは、自分の赤のスピリットが相手の赤のスピリットを破壊した時、スピリットとして転醒できる……赫焉の戦場より現れる、燃え盛るドラグノ決闘者!!」

ー【燃え盛るドラグノ決闘者】LV1(1)BP14000

アスラの背後にある決闘者たちの戦場から飛び出して来る何か。それがフィールドへと足を着けると、決闘者たちの戦場はたちまち消滅した。

現れたのはドラグノ決闘者。4本の腕にそれぞれ剣を構え、星七を威嚇するように咆哮を上げる。

「凄い……アスラの場に次々とドラゴンたちが集まって行く……!!」

「おうよ、コイツらで一気に決めるぜ、今度は突撃兵で【追撃】のアタック！…効果で一枚ドロ、ドラグノ総軍団長の効果でさらにドロ！」

ドラグノ突撃兵が自身の身の丈程はあるハンマーを背負い、走り出した。その瞬間にドロ効果再び発揮され、アスラは2枚のカードをドロするが……
それを目に映すなり口角が上がって……

「来たぜ、七罪竜、エヴォルグランドを破壊できるカード!!」

「!？」

『この儂を倒すじゃと?!』

絶対的な自信。仮にも伝説のスピリットである七罪竜、エヴォルグランドを破壊できるカードなど、そうはいない。

しかし、偶然にもアスラはそれを攻略できるカードを持っていたのだ。今こそそれを手札より引き抜き、全力でバトル台へと叩きつける。

「ああ当然。相手の一番強いスピリットを倒してこそ、真の勝利だからな!!……フラッ

シユマジック、草薙ノ轟炎!!」

「!!」

「コストは総軍団長をL V 1に下げて確保……………この効果はB P 3 0 0 0 0以下のスピリット、又はアルティメットを破壊できる!」

アスラが放ったたった一枚のマジックカード。一見すると大きなコストに見合ったそれらしい破壊効果であり、すぐさまエヴォルグランドの【進化】の効果で無効にされると思われた……………

しかし、使用者である星七は悟る……………

「ま、まさかその効果は……………」

「ああ。いくらエヴォルグランドのコストが20になろうが、B Pが上がって25000になろうが、ましてやアルティメットになろうが関係ねえ……………B P 3 0 0 0 0以下のスピリット、アルティメットを破壊できる!!……………くらえ草薙ノ轟炎!!」

アスラの背後から螺旋の炎が飛び行く。狙われているのは当然七罪竜エヴォルグランド。巨大なが外れるわけもなく、その森のように大きな甲羅ごと貫かれ、焼き尽く

される。

『…………ぐおっ!?…………まさかこの儂をたつた一撃で……………』

「そんな…………エヴォル!!」

「突撃兵のアタックは続行中だぜ!!」

エヴォルの激しい断末魔が轟く中、アスラのドラグノ突撃兵が今度は星七のライフへと狙いを定める。

「突撃兵のアタックはライフで受けるよ!!…………ツ」

〈ライフ3??2〉星七

全力でハンマーを振るう突撃兵。その重たい一撃が星七のライフを遂に2まで追い詰めた。さらに追撃すべく、アスラは燃え盛るドラグノ決闘者のカードに手を構えて

……………

「次だ、行つてこいドラグノ決闘者!!」

アスラの指示に、ドラグノ決闘者は4本の腕から握られる4本の剣を構えながら走り出した。狙うは残り2つとなった星七のライフだ。

しかし、彼も負けてはいられないか、まだ負けられないと言わんばかりに、手札にあるマジックカードを引き抜いて……

「フラッシュマジック、リミテッドバリア!!」

「!!」

「この効果によりこのターン、コスト4以上のスピリットのアタックでは僕のライフは減らされない!!……ドラグノ決闘者もドラグレッダーもいずれもコスト4以上!!……このターンは凌いだよ!!」

汎用性の高い防御マジックの1枚リミテッドバリア。星七はそれを発揮させる。これにより、アスラは残ったスピリットで総攻撃を掛けても彼のライフを破壊できない事になる……

筈だった。少なくともドラグノ決闘者いなければ……

「いや、是が非でもそのライフはいたたくぜ星七!!…ドラグノ決闘者のもう一つの効果を發揮!!…1ターンに一度、相手が使った白マジック1つを無効にする!!」

「なツ!？」

火山が噴火するような大きな咆哮を上げるドラグノ決闘者。星七の場で發揮していたリミテッドバリアの効力が消え失せ、そのままトラッシュに送られた。

これにより、バリアは張られず、星七のライフを総攻撃で0にする事が再び可能となった。

「このターンで、決まりだアアアー!!」

「!!」

アスラがそう叫ぶ。それに合わせるようにドラグノ決闘者が4本の剣を星七に向けて振るった……………

絶体絶命に陥った星七。しかし、彼にもまだ奥の手が存在して……………

「まだだよアスラ。君がバトルを最後まで諦めないように、僕も最後までバトルを諦めない……………烈我みたいになるって決めたんだ!!……………フラッシュ【音速】を発揮!!…音獣エイトーンラビット!!」

「ツ……………音速?!」

ー【音獣エイトーンラビット】LV3(4)BP4000

アスラにとっては予想外となる星七のフラッシュ宣言より現れたのは、耳が音符の形になっているウサギ型のスピリット、エイトーンラビット。

「【音速】は赤か緑の創界神ネクサスかりザーブのコアを使ってフラッシュタイミングで召喚できる効果。今回はサラスヴァティーのコアじゃなくてリザーブのコアを使わせてもらったよ」

「くっ……………まさかこのタイミングでスピリットを召喚するなんて……………」

「さらにエイトーンラビットの召喚時効果でドラグレッダーを疲労!!」

「!!」

ー【ドラグレッツダー】（回復??疲労）

エイトーンラビットの音符のような形をした耳から奏でられるメロディーがアスラのドラグレッツダーを混乱させる。宙を待っていたドラグレッツダーは飛べなくなり、地に手をついた。

「ドラグノ決闘者のアタックはこのエイトーンラビットでブロックさせてもらうよ!!」

ドラグノ決闘者の攻撃も凌ぎに行くエイトーンラビット。強力な効果を持つこのスピリットだったが、BP勝負では流石にドラグノ決闘者に敵うわけがなく、あっさりとは斬り捨てられる。

しかし、星七のライフは十分守り切り……………

「へへ……マジかよ星七。ここ耐えるのかよ……ますます面白くなって来たぜ!……ターンエンドだ!!」

手札：6

場：【ドラグノ突撃兵へR】LV2

【ドラグノ総軍団長】 L V 2

【燃え盛るドラグノ決闘者】 L V 1

【ドラグレッツダー】 L V 1

バースト：〔有〕

「僕もだよ。まさかエヴォルが倒されるなんて思ってもいなかった！…流石烈我に似ているだけはあるね！」

「あつはは。烈我好きだな星七は」

「君はドロローでこの戦況をひっくり返した…次は僕がひっくり返す番だ！」

全力だったこのターンの攻撃を防がれたものの、気分は上々なアスラ。このバトルそのものを楽しんでいるのが窺える。

次はどうか踏みとどまった星七のターン。大きく深呼吸し、そのターンを進行させて行く……………

「ターン08」 星七

このターンのドローステップ。星七はそのカードを見るなり優しく口角を上げる
 ……

頭の悪いアスラでもわかる。来たのだ。このターンで決着をつけられるカードを

……

「メインステップ!!…赤のマジック、コールオブロストを使用!」

「ツ……そいつは、トラッシュからスピリットを戻すカード!!」

「そう。この効果で僕は前のターン破壊されたエヴォルをトラッシュから手札に戻し、そのまま再召喚!!…もう一度お願いしますエヴォル!!」

『うむ。良かろう星七……今度こそ小さき者のライフ、全て討ち取って見せようぞ!』

1 【樹進超龍エヴォルグランド】LV3 (4) BP15000

星七の呼び声に応えるかの如く、再び大地を揺らして爆誕する伝説の七罪竜、エヴォルグランド。今度こそアスラのライフを全て奪うと豪語する。

「アタックステップ、その開始時に創界神サラスヴァティーの効果【転神】により、この

ターンの間、自身をスピリットとしても扱う！」

ー【創界神サラスヴァティー】LV1(2)BP3000

最初のアタックステップの際も使用したサラスヴァティーの【転神】の効果。これにより、星七の場にはエヴォル含め、2体のアタックできるスピリットが生まれた事になる。

「アタックだサラスヴァティー!!」

「ツ……………ライフで受ける……………ぐっ」

へライフ2?!1へアスラ

創界神サラスヴァティーの弦から奏でられるメロディーが具現化され、アスラのライフを砕く。いよいよ残り1つ。星七は精一杯声を張り、宣言する……………

「これでラストアタックだ!!……………お願いしますエヴォルウウー!!」

「星七の指示に「任せろ」と言わんばかりに太い咆哮を上げ、走り出すエヴォルグランド。その狙う先はアスラの最後のライフ。

アスラの場合のスピリットは全て疲労。そして手札にもバーストにも最早反撃の術は残っていない……………

「終わりだ。そう思うと悔しさが脳裏を過るが、それ以上にアスラには笑顔がこぼれ落ちて……………」

「へへ……………この修行の中で烈我以外にもまた目標ができちまつたな……………来いよ星七!!」

大地を揺らしながら再び地を駆けるエヴォルグランド。アスラの場合にいる大勢のスピリット達が主人であるアスラを心配そうに見つめるが、アスラは笑いながら……………

「まだだ。まだ足りねえ……………もつともつと努力して、オレは必ず頂点王になる!!……………そのラストアタック、ライフで受けるぜ!」

へライフー??0へアスラ

エヴォルグランドがアスラの最後のライフを噛み砕く。その瞬間にバトルフィールド外に飛ばされるアスラ。

これにより、勝者は緑仙星七だ。エヴォルグランドと顔を見つめ合い、勝利した瞬間を分かち合った。

「……また負けちゃった。まだまだテンドウさんから貰ったカード達の力を全然引き出せてねえ気がする」

「そりゃ、貰って2日で100%使いこなせたたら苦労はないわよ」

バトルも終わり、カードショップ内に戻ったアスラと星七。エールが寄り添う中、アスラは敗因は何かと考えながら己のデッキを見つめる。

「フツ……また負けたかアスラ。オレは昨日、別の七罪竜使いとのバトルに勝ってるぞ」「知ってるわアアアー!!…何嬉しそうにしてんだロンコノヤロー!!」

「あいつ、さつきは『勝ってもらわないと困る』とか言ってたくせに……結局どっちだったのよ？」

いつものようにアスラにマウントを取りに行くロン。バトル開始直後の彼の発言を覚えていたエールは、今の彼の発言を疑問視する。

「でもいつか絶対に追いつく……いや追い抜く。星七にも烈我にも……でもってオマエもな！」

「そうだそうだアスラ!!……もつと言ってやれ、こんなイケメン野郎ぶつ飛ばしちまえ!!」

「よく言ったアスラ!!……それでこそ私の弟分だ!!」

「応援ありがとうございまアアアアす!!……不肖アスラ、精一杯頑張りますアアアアす!!」

いつものようにアスラがロンに人差し指を指しながらそう宣言すると、相槌を打つように烈我と絵瑠もそう言葉を落として来た。

その直後、星七がアスラに声をかけて……

「アスラ、良いバトルだったよ……またやろう！」

「おう星七!!……こちらこそサンキューな!……次は負けないぜ!」

硬い握手を交わす兩名。さっきのバトルでより友情が深まったのが見て取れる。

「つしやあ!!……今日はまだまだまだ時間あるし、いっぱいバトルするぞ!!……星七の次は………」

まだまだ沢山のバトルを行いたいアスラ。先程のバトルによる疲れを全く見せず、次なる対戦相手を考え、烈我達伝説の七罪竜に選ばれた5人のバトルー達を見渡すが………

その直後に、アスラ達や烈我達にとって聞き慣れた声が聞こえて来て………

「修行もいいけど、それだけじゃ面白くないと思わないかい?……我が息子よ」

「ツ………シイナ!?!」

「バトルもいいけど、それだけじゃ満足できるわけないよね?……我が弟よ」

「姉ちゃん?!?」

突如として襲来したのは、アスラとロンの育て親、シイナ・メザと、天上烈我の姉、天上るみか。この2人がどこで知り合ったかは定かではないが、息ピッタリ、阿吽の呼吸でアスラと烈我、2人に問いかけて来て……………

「いやシイナ。別にオレは修行だけでも楽しいぞ!…もつと強くなれるし!」

「黙らつしやい!!…それじゃ私達が面白くないのよ!!」

「えええ!!?!…自分で聞いて来たくせに!!」

「姉ちゃん。また変な事考えてるんじゃないだろうな?」

「何だ弟よ。この姉を疑うのかね?」

「つーかなんだよそのキャラ」

妙なテンションに取り憑かれているシイナとるみか。戸惑いを隠せないアスラや烈我達だったが……………

「なあに、私達は単なる吉報を用意して来ただけよ。無論、貴方達にとってのね」

「しつぽ?!…るみかさん、なんで尻尾なんて用意したんすか!?!」

「バカスラ。しつぽじゃなくてきつぽうよ。良い報告って意味よ、そんな事も知らない

わけ？」

やはり、何かしらの企みがあつて来た事は間違いないシイナとるみか。単刀直入にその吉報の内容を彼らに告げる……………

「まあ冗談はまだまだ続けるとして」

「まだ冗談続くんかい」

「明日。この街に新しく大きなアミューズメントパークが開店するじゃない？」

「ああ、駅前に行けるデツカイヤツね。それがどうしたんだよ？」

「いや〜〜実は明日そこでアスラとエールちゃん。烈我君と光黄ちゃんにお使いを頼もうと思つてさ〜！」

—!!!

「Wデート、頑張つてね!!」

—!!!

シイナとるみかの言葉に、顔を赤く染めるエール、烈我、光黄の3人。
理由はこれだった。お使いの人選からして、2人が楽しむためののが見え見えである。だが、ただ1人気がついていない人物がここにいて……………

「なあんだお使いかよ。それならそうと直ぐに言ってくればよかつたのに……………つかWデートってなんだ？」

アスラだけはこの危機的状況に気がついていない。いや、彼にとってこれは危機的状況とは言えないのかもしれない……………

何はともあれ、明日はさらに過酷な予感を感じてしまうエール、烈我、光黄の3人であつた……………

44 コア 「驚異のWデート!?!:オメガモンVS色欲の七罪竜」

伝説のスピリットカード、七罪竜の使い手達との修行を終えたその日の夜。

アスラは明日のお使いに向け、天上家にて準備を進めていた。無論、それがシイナと天上るみかの策略だとは気付いていなくて……………

「いや〜明日のアミューズメントパークとやらがどんな場所か楽しみですな〜」

「ああ、俺も光黄とデートできて幸せだぜ」

「弟よ、この私に感謝するが良い」

「だからなんだよ姉ちゃんそのキャラ」

アスラはデートと言う言葉をあまり理解していないが、烈我は違う。アスラとエールがもれなく付いて来るとは言え、光黄と一緒に新設のアミューズメントパークに行ける事を楽しみにしていた。

そんな中、烈我の相棒、七罪竜のバジユラが話しかけて来て……………

『お前らだけずるいじゃねえか。俺様にも行かせろよ、その何とかパークとやらに』
「バジュラ君は今度私と行こうねー…明日はカードになってデツキの中でお留守番しててちょうだい」

『フン。わーつたよ、邪魔なんだろう?…だったらとことん黙つといてやるよ。だが、俺だったら黙つといてやれるが、あの色欲魔はどうだろうな』

バジュラが光黄の相棒にして同じ七罪竜、ライトの事を思い浮かべながら口にした。確かにライトの性格なら明日のWデートの邪魔をしかねない。

「ところでさくアスラ君はエールちゃんだっけ?…あの子とどう言う関係なの?」

「ん?…エールっすか?」

るみかがアスラに興味津々な様子でエールの事を聞いて来た。彼女が期待していたのは当然彼らの恋愛に関する事だったか……

「あいつは一番信頼してる仲間っす!」

「あ……うん。そうなんだ」

目をギラギラと輝かせながらそう答えるアスラ。まあ別に予想していなかった訳ではなかったが、やはりアスラの恋愛感ほほゼロに等しい。るみかはアスラの言葉でそれを確信する。

「取り敢えず、明日アスラ君はエールちゃんに会ったら先ずあの子の服を褒める事。オツケー？」

「え？……エールの服を褒めるんすか？……なんで？」

「いいからいいから。せつかくあんなに可愛い子が振り向いてくれるのに、君がそんなんじや台無しだよ？」

「いったい何が台無しなんですか!?!…オレはあいつの服を褒めない事でそんなに損を!?!」

「おそらく心配するベクトルが違うアスラ。やっぱりエールの気持ちには気がつかない。」

「服か〜…そういうや明日何着て行こうかな〜…飛び切りカッコいい服あったかな〜」

『浮き足だつてるぞコイツ。明日死ぬんじゃないやねえか?』

「浮き足だつてるって言うか最早浮いてるし。空回りしないといいけどね」

兎に角光黄とアミューズメントパークでデートするのを楽しみにしている烈我。楽しみにしている過ぎて体が宙にふわふわと浮いている。

るみかはそんな弟を見て、どうにも失敗しそうな予感が止まらなかった。

アスラ達が着実と明日の息抜きに向けて準備を進めていく中、同時刻。エールとシイナのお世話になっている黄空光黄の自宅、彼女の部屋にて……………

光黄の相棒たる七罪竜、ライトはどこか気難しそうな顔を見せていた。理由は当然、明日のお使いの件であつて……………

『解せぬ……………このライト、解せぬのです光黄様、エール様』

「何がよ」

『何で……何でこのライトはお使いに参加してはいけないのですかアアア?!』
「そんな事だろうと思っただわ」

色欲を司る彼らしい発言。相変わらずな様子にエールは呆れる。

「ライト。明日行くのは新設されたアミューズメントパークだ。当然人も多い、明日は大人しくデッキに入っている」

『ぐぬぬ……ですがあんな野蛮な連中にお美しい光黄様とエール様を渡すわけには……!!』

どうしても光黄とエールを烈我とアスラに渡したく無いライト。しかしその後、頂点王シイナが部屋に入ってきて……

「じゃあ代わりにライト君は今度、いや明後日でもいいや。どこかに遊びに行こうか! ……もちろん光黄ちゃん、エールちゃんも連れて! ……ライト君のハーレムタイムって事で!!」

『不肖ライトボルディグス。明日はどんな事があってもデッキの中で沈黙してしましよ

うともー!」

「変わり身はつや!!」

明後日のハーレムタイムを餌にされ、シイナに手懐けられるライト。これで少なくとも明日はどんな事があってもデッキの中にある事が約束された。

その後、シイナは「これでよし」と言わんばかりな笑顔をライトに向けると、次はその顔をエールへと向けて……………

「ところでさエールちゃん!!…明日何着て行く!？」

「え?…何って、いつもの服着て行きますけど?」

「ダメダメそんなんじや。折角のデートなんだからちゃん完全装備して行かなきゃ!

…いつもと違う事しなくちゃアイツに意識されないよ?」

「べ、別にあんなバカスラに意識なんてされたくないわよ!!」

「へく…私アイツとは言ったけど、アスラだなんて一言も言っていないけど?」

「ツー!?!」

エールをからかい続けるシイナ。エールがアスラを意識し始めてからはよく見る光

景である。

『はあ……なんでエール様みたいな超絶美少女が、あんな薄汚くて馬鹿煩いチビ助の事をこんなにも想っているのでしょうか……』

「だから何とも想ってないって言ってるでしょうが!!……そもそもシイナ様、絶対私達と一緒に行かせて楽しみたいだけですよね!」

モテるアスラの事を考え、ライトがショックを受ける中、エールがシイナに聞いた。アスラ意外の全員が気がついていて、明日のお使いはシイナとるみかによる策略。

4人のお使いもとい、Wデートを見て楽しみたいだけなのだ。しかしそれを表立って言うわけにもいかないか、シイナは下手くそな口笛を吹きながら誤魔化す。

「いやいやそんな事ないよ〜」

「じゃあ明日のお使い、何を買ってくればいいんですか?」

「え?…それは明日決めるよ」

「確信犯!」

誤魔化し切れないシイナ。何故事前にお使いを頼もうとしているのに買って来る物を明日決めるのか……………

(……………明日、烈我と買い物……………か)

エールとシイナがそんなやり取りをしている中、光黄はクールな表情を見せながらも、内心ではそれなりに明日の事を緊張していた。

翌日。待ちに待ったお使いタイムが幕を開ける。本日開店のアミューズメントパークには当然ながら若者を中心に多くの人々が集まっており、あっちこっちのアトラクションから声が飛び交い、大いに賑わっているのがわかる。

そんな中、待ち合わせの入り口近辺にて、アスラと烈我の2人はエールと光黄を待ち続けていた。

しかし……………

「なあ烈我。なんでこんなに早く待ち合わせ場所に来たんだよ、まだ1時間前だろ?」
「いやごめん。楽しみ過ぎて待ち切れなかった……でも光黄達を待たせるわけにもいかねえだろ?」

そう。今は約束の1時間前。光黄とアミューズメントパークでデートできると烈我が浮き足だった結果、こうなった。

だが、烈我のこの行為は無駄ではなくて……………

「なんだ、もう着いていたか、早いじゃないか烈我、アスラ」

「光黄!!」

「おはようございます光黄さん!!」

「ああ、おはようアスラ」

現れたのは光黄とエールのペア。烈我達程ではないが、彼女らも中々の早さで待ち合わせの場所に到着していた。

「光黄、まだ1時間前だぞ、どうしたってそんな早く……」

「それを言うならお前達こそなんでそれ以上の早さで来た」

「あ、いや俺はその……お前と行けるのが楽しみで……」

「フ、フン……相変わらず子供な奴だ」

「ええ!?!」

烈我にそう言われ、照れ臭そうにする光黄。しかし出て来る言葉は彼を突き放すようなモノ。鈍感な烈我にとつての感触はイマイチだった。

「よっ……エール」

「おはようバカスラ」

アスラとエール。何気ない挨拶から始まる会話。だが、エールもどこか照れ臭そうにもじもじしながらアスラに言葉を落として……

「ど、どう!?!この服……コモンじゃ見た事ないでしょ!?!」

「ん?。」

恥ずかしさを押し殺し、頑張つてエールがアスラに自分の服を見せつけながらそう告げた。白いブラウスやブロンドのガウチョパンツが良く似合っている。そんな折、アスラは昨日るみかに言われた言葉を思い出し、彼女の顔が頭に浮かんで来る。

―……

―『取り敢えず、明日アスラ君はエールちゃんに会ったら先ずあの子の服を褒める事。オツケー?』

―……

(危ない危ない、そうだった……で、具体的にどう褒めるんだったっけ?)

この日のエールの着て来た服を褒める事。それがるみかに課せられたアスラのノルマ。彼はさらに記憶の中を辿つて如何にして彼女の服を褒めようか探ってみる……すると、再び昨日るみかに言われた事を思い出して……

―……

―『え?…服の褒め方がよくわからない?…もうアスラ君てばウブなんだから…そ

んなの簡単簡単♪……………」

……………」

「おう似合ってるな! ……ずっとオマエだけを見ていたいぜ!!」

「なツ!?!」

るみかに言われた通りの褒め言葉を、目をギラギラと輝かせながらそのままエールに告げるアスラ。

余りにスムーズに褒められた事で、エールの顔は真っ赤になってしまい……………」

「な、何見てんのよこのバカスラアアアア!!」

「ブワアアアア!! ……自分で見ろって言ったクセにイイイイ!?!?!」

思わず手が出てしまう。アスラは遥か上空へと吹き飛ばされる。実際エールの服自体は本当に似合っていると思っていたが、褒めたらぶん殴られるのは予想外だった様子。

「こ、光黄の服も似合ってるな、すごく!」

「いや、俺に関してはいつもとそんなに変わらないだろう」

「そんな事ないって!……なんだろうな、いつものボーイツシユな服装とはまた違うボーイツシユさがあるって言うか………兎に角可愛い!……凄まじく可愛いです!」

「ツ………ほ、褒めるな。いいからさっさと行くぞ」

「ええ!?……ちよつと待ってくれよ光黄!」

落ち着きがなく、覚束ない様子だったが、烈我に褒められた事で頬を染める光黄。照れ臭さを隠すように1人入り口の方へと向かって早歩きする。

それを烈我、エール、丁度上空から帰還したアスラが追って行き、お使いと言う名のWデートが幕を開けたのだった。尚、当然の如くアスラだけは全くそれを意識していない。

そしてそんな4人の様子を見守るように物陰から2人の姿が見えた………

「始まったわねシイナさん」

「始まったねるみかちゃん」

そこにいたのは他でもないアスラの母親的存在シイナ・メザと、烈我の実の姉、天上のみか。変装のつもりなのか、2人とも黒いサングラスを掛けている。

「いや、服褒める作戦上手くいったと思ったんだけどな…まさかぶん殴られるとは、ごめんねアスラ君」

「はっは。アレがウチのアスラとエールちゃんさ。可愛いでしょ?…でもお宅の烈我君と光黄ちゃんも中々やりますな…もう側から見たらウブな恋人にしか見えないんですけど。アレで付き合っていないの?」

「アレで付き合っていないんですシイナさん…面白いでしょ?」

「面白い!!…さあ、今日はとことん見物するぞ〜!」

「おお!!」

声を揃えて気合を入れ合う2人。どうやら目的はWデートの見学のようである。今のところ4人には気づかれていないようだが、側から見たら裏でこそそそしている変質者であるためか、小さな子供達に後ろ指を刺されていた。

それから約数十分。アスラ達4人はアミューズメントパーク内に存在するデパートの中にいた。アスラの手には買い物袋が握られている事から、どうやらお使いを済ませたようである。

「よおつし!…じゃがいも、にんじん、玉ねぎ、シャンプー、トイレットペーパー!!…全部買えたぜ、これでお使い完了だ!」

「て言うかこれ別にこんな所じゃなくても買えたでしょ」

お使いを完了させて喜ぶアスラ。そんな彼を他所にエールはやはりこれがエールとるみかによる策略だと再確認する。

「まあいいじゃねえかエール、これで買い物は終わりだ………そんじゃ帰るか」

「ええ!?!…ちよつと待てよアスラ、せつかくここまで来たんだから遊んで行こうぜ!」

「え?…でもここには遊びに来たんじゃなくてお使いしに来たんだろ?」

「いや、うんまあそうなんだけどよ」

「真面目なんだな」

「そんなにバカスラを褒めなくても良いわよ光黄。アレはただ頭がカッチカチなだけなんだから」

「誰が頭カッチカチだエールコノヤロー!!」

お使いが完了した事で、一人帰宅しようとするアスラ。それを烈我が全力で止めに入る。

そして止めに入ったのは烈我だけではなくて……………

『そうだぞチビ助!!…Wデートの意味わかってんのか!?!…お前は今日その偉そうな女連れて楽しく遊べば良いんだよ!』

『ちよつとバジユラ!!…何勝手に喋ってんですか!?!…せっかくこの私が我慢して黙って……………と言うかWデートと言う言葉を考えないようにしていたのに台無しじゃないですか!?!…ああもうやだ光黄様アアアア!!』

「おいバジユラ、お前今日黙ってる約束だったろうが!」

「ライトもだ」

2人のデツキ越しから居ても立っても居られなくなったバジユラとライトの音が響

く。

「おお、Wデートって楽しく遊ぶって意味だったのか……」
「って言うか偉そうな女って私の事？」

バジュラの言葉でWデートの意味をやや違う解釈で覚えるアスラ。男女の交流という意味では絶対に捉えていないだろう。

「このアミューズメントパーク、バッティングセンターとかボウリング場があるみたいだしさ、取り敢えず一回そこ行ってみないか？」

「おお!!…なんだバッキングセンターとボーリングジョーって!!」

烈我が施設のパンフレットをアスラに見せながら言った。一瞬にしてそちらに興味
が振り向くアスラ。バッティングセンターとボウリングに興味津々だ。

その後、4人は先ずバッティングセンターに赴く。その裏でこっそりとシイナとるみ
かも彼らを追いかけるように移動していく。

ボールが打たれる音がこだまする。ここはバッティングセンター。言葉の通り、バットでボールを打つ場所だ。

4人もまたそれぞれの配置につき、バッターボックスに立ってその白球を全力で打とうとしていた。

(ここは光黄に良いところを見せるチャンスだ。ホームラン目指すぞ！)

天上烈我は内心でそんな事を考える。と言うか彼の頭の中は常に黄空光黄と言う才色兼備な少女の事でいっぱいいっぱいだ。

そんな彼はバットを強く固く握りしめ、ストライクゾーンに飛んでくる白球を狙い打とうとするが……………

「ふん……………ハッ!!……………とあつ!!……………当たんねえ……………擦りもしねえよ……………」

その全てが空振り三振だった。実を言うとき余り運動そのモノは得意な方ではない。

初めてのバツティングセンターの2人。困惑するアスラが片手でバットを振り、身を守るように白球を弾き返していくが、その弾道が度々エールの方へと飛んで行っていた。

そんな彼らのやり取りを烈我はなんとなく羨ましく思っていて……

ボールの転がる音、ピンが弾け飛ぶ音が流れて来る。ここはボウリング場、散々バツティングセンターでバツティングした彼らは次にこのボウリング場へと訪れていた。

烈我、アスラ、エールが座る中、光黄の出番がやって来た。バツティングセンターの時同様、プロ顔負けの美しいフォームでボールを転がし、見事全てのピンを倒してストライクを取って見せた。

「おお凄いぜ光黄さん!!…なんかよくわからんけども!」

「うん。何故かしら、なんか今のが凄いつて言うのはわかる気がするわ……」

そもそもボウリングと言うものを知らなかったアスラとエールの2人。しかし、そん

な彼らでも凄いとわかるくらい光黄は天才だった。

「いや別に、これくらい普通さ。さあアスラ、次はお前の番だぞ」
「おうっす！」

肩を回しながら準備運動を始めるアスラ。その手にボウリングの玉を握り締め、ピンに狙いを定める。

「要はあれだろ？……あの白いヤツ全部ぶっ倒せば良いんだろ？」

「まあそうだな」

「へへっ……だったらこっちの方が絶対効率が良いぜ！」

「？」

……うおおりやあああー!!!

ー!!

通常。ボウリングはアンダースロー。下投げが主な投法だ。しかし、このアスラはあらゆる事かそのボウリング玉を上投げ、オーバースローで豪快にぶん投げてしまう。凄まじい速度で宙を駆けるボウリング玉は見事に全てのピンを弾き飛ばした。

「よしっ!」

「よしじゃねえ!?!…お前どんな怪力してんだ!?!…人間技じゃなかったぞ!?!」

「いや〜…オレ昔身体鍛えたらソウルコア出るんじゃないかと思つてめっちゃくちや鍛えたことあるんですよ〜…今でもしよっちゅうやりますよ筋トレ」

「だから人間技じゃねえんだよ!?!…どんな鍛え方したらそんな事できるんだあ!?!」

アスラの信じられない怪力に驚愕する烈我。一方でエールはツツコムのが面倒くさくなったか、タピオカとやらを飲みはじめ。その味が美味しいのか、「何よこれ、美味しいじゃない!!」と内心で叫びながら夢中になって飲み進めていく。

「はっは。ボウリングでオーバースローする奴初めて見たよ。やっぱり面白いなアスラは」

「どうもありがとうございまアアアアアす!!」

「!!」

そんな中、アスラを面白い奴だと笑いながら称する光黄。それを聞くなり、烈我は少しばかりムキになってしまい……………

「お、俺だってオーバースローで投げれるし……………」

「え?…おい烈我、何ムキになって……………」

不本意ながらアスラが光黄を笑わせたのが府に落ちなかつたか、光黄が止めようとしてもはや烈我は止まらない。1人ボウリング玉を手を持ち、アスラ同様野球のピッチャーの如く構える。そして振りかぶって全力でそれを投げた……………

しかし……………

「ぐはああ!!?」

「烈我!?!」

ボウリング玉はピンの方向ではなく、まさかの少し真上に飛び、烈我の頭に落下。脳

天に直撃した烈我はそのまま気を失って倒れ込んでしまう……………

「おい!!大丈夫か烈我!?!」

「ダメだな。暫くは起きそうにない……………済まないがアスラ、この近くに医務室がある、烈我をそこまで運んで行ってくれないか?」

「わかりました!!……………漢アスラ、烈我の命を救うためならなんだってやるぜ!!」
「いや別に死なないでしょこの程度で」

エールからツツコミを受けながらも、アスラは烈我を背負い、飛ぶように走って行った。光黄とエールだけがこの場に取り残された直後、光黄が無茶をして気を失った烈我に対して言葉を落とす……………

「バカ烈……………別にあんな事しなくてもいいのに……………」
「?」

エールにも聞こえないくらい小さな声でポソツと呟いた光黄。エールはそれを聞き取れなかったが、光黄と2人きりになれた事により、ある事を閃いて……………

「そうだ光黄、せっかくだからあのバカ達が戻ってくるまでバトルしない!?」
「!」

「ここに来た時から絶対に光黄とバトルしたいって思ってたのよね〜」

『そうですねエール様!!：是非私達と優雅なひと時を過ごしましょう!』

「別にあんたとバトルはしたくないわ」

『酷い!』

光黄のデツキからライトの声がこだまする。エールは光黄がこちら側の世界に来た時から彼女といつかバトルしたいと思っていた、その願いをこの場で果たそうと言うのだ。

そんな彼女の想いに応えない光黄ではなくて……

「ああ、いいだろうエール。俺でよければ相手になつてやるよ」

「決まりね!…それじゃ人通りが少ない所に行きましょう!」

『わーい!…エール様とバトル!!』

「ライトはまだ黙ってる」

こうして2人はバトルが出来そうな場所を求めてボウリング場から移動を始める。4人ともボウリング場から姿を消したわけだが、そんな4人を眺めて楽しんでいたシイナとるみかは……………

「どうしよう、カップリングが変わってしまいましたね……二手に別れちゃったし、私達も別々で行動しますかシイナさん？」

「……………私もボウリングやって良い？」

「シイナさん？」

ボウリングに興味津々なシイナ。肩を回しながら準備運動を始めている。ここら辺の仕草などは本当にアスラによく似ている。

こうして、エールと光黄は2人だけでこっそりとバトルを行う事になった……………

「……………なら丁度良いかもね」

アミューズメントパークの中でもかなり人気の少ない場所を見つけたエールと光黄。ここならバトルフィールドに向かつても誰にも見つからなそうだ。

「さあ、待ちに待ったわー…始めましょう光黄、私達のバトルをー」

「ああ。ライト共々、全力で相手させてもらうよ」

『お相手さんが超絶美人なエール様でも手加減はしませんよ!!』

……………ゲートオープン、解放!!

光黄がバトルフィールドへと誘える小さなキューブを足元に投げると、2人はこの世界のバトルフィールドへと身を移す。そしてコールと共にバトルスピリッツが幕を開ける。

先行は光黄だ。飄々とした様子でターンを進めて行く。

「ターン01」 光黄

「メインステップ、俺は先ずはガトープレパスを召喚。続けてバーストを伏せる、これで

ターンエンド」

手札：3

場：【ガトーブレパス】LV1

バースト：【有】

翼の生えた牛のようなスピリット、ガトーブレパスが青い鬘靡かせながら出現。以前、光黄とタッグを組んで戦った経験のあるエールはこのスピリットの効果を熟知している……………

「早速来たわね、ライフを破壊したら自分のライフを回復できる【聖命】の効果を持つスピリット……………」

序盤はライフを回復して行くのが光黄のバトルスタイル。このガトーブレパスはその序盤においての象徴とも言える。エールは警戒をしながらも己の最初のターンを開始した。

「ターン02」エール

「メインステップ……ネクサス、勇気の紋章をLV2で配置してターンエンド！」

手札：4

場：【勇気の紋章】LV2

バースト：【無】

エールの背後に太陽を模した巨大な紋章が現れる。エールが光黄のカードをある程度知っているように、光黄もある程度エールのカードの事を知っている。そのため、この勇気の紋章が自分にとってのメタカードである事は瞬時に理解できて………

（赤のネクサス、勇気の紋章………確か自分のライフが減った時にBP5000以下のスピリットを破壊する効果だったな。成る程、これでガトーブレイパスは【聖命】を發揮した途端に破壊されるわけだ………）

内心でそう勘ぐる光黄。この最序盤にて、エールの勇気の紋章と言うカードは厄介極まりなかった………

しかし………

(だが、この程度の戦略で詰む俺じゃない……!)

満ち溢れた自信を持つ光黄の2度目のターンが幕を開ける。

「ターン03」光黄

「メインステップ……2枚のネクサス、創界神ラーと黄金の鐘楼を配置!」

1 【創界神ラー】LV1

1 【黄金の鐘楼】LV2 (2)

効果の背後に配置されたのは、仮面を装着したエジツトの最高神ラーと、黄金に光り輝く鐘楼。

「ラーの神託。デッキの上からカードを3枚トランプシユへ……今回の対象カードは1枚、よってコアを1つ追加」

ー【創界神ラー】（0??1）

ラーにコアが置かれた直後、「これで下準備は終わりだ」と言わんばかりの気迫に満ちた表情を見せ、光黄は攻めに転ずる。

「アタックスステップ、ガトーブレパスで攻撃する」

「来たわね……ライフで受ける……ッ」

〈ライフ5??4〉エール

ガトーブレパスの渾身の体当たりがエールのライフバリアに炸裂、1つだけ砕け散った。

そしてこの時、ガトーブレパスの真価が発揮され……

「ガトーブレパス【聖命】の効果、ボイドからコア1つを俺のライフに」

〈ライフ5??6〉 光黄

光黄のライフが光り輝き、初期の数を越えた6となる。だが、それも束の間、今度はエールの配置したネクサス、勇気の紋章の効果が発揮されて…………

「ライフの回復はそれで最後にしてもらおうわ!…:勇気の紋章の効果、私のライフが減った事でBP5000以下のスピリット1体を破壊する!」

「!」

「これにより、ガトープレパスを破壊!」

太陽を模した巨大な紋章より放たれる火球。それがガトープレパスに直撃。BPは貧弱なガトープレパスがそれに耐えられるわけもなく、あっさりと焼き尽くされた。

しかし……………

「その効果の発揮を待っていた」

「!」

「ここまでを計算に入れていない光黄ではなくて……………」

「黄金の鐘楼LV2の効果、互いのアタックステップ中に【聖命】を持つスピリットが破壊された時、俺のライフを1つ回復する」

「え!?!…このタイミングでまたライフを回復!?!」

「ライフ6??7」光黄

再びライフが光り輝き、その数が増える。さらに光黄が狙っていたのはそれだけではない。今度は事前に伏せていたバーストカードが勢い良く反転する。

「さらにスピリットの破壊後によるバースト、双光気弾!」

「ツ……赤のバーストマジック!」

「お前も使った事あるから、効果は知ってるよな。俺はカードを2枚ドロ……………その後、コストを支払う事で相手ネクサス1つを破壊する……………不足コストは黄金の鐘楼のLVを下げて確保。勇気の紋章にはここで退場してもらおう!」

放たれる2つの気弾がエールの勇気の紋章を粉碎した。黄色使いの光黄から赤のカードが使用される事は、エールにとっては完全に予想外だった。

「俺はこれでターンエンド」

手札：4

場：【創界神ラー】LV1（1）

【黄金の鐘楼】LV1

バースト：【無】

「流石にやるわね……まさかこんなに早く勇気の紋章を攻略されるなんて……」
「フツ……その効果は知っていたからな」

このターン、エールの勇気の紋章を逆手に取り、自分のライフを7まで増やし、手札も増強、挙げ句の果てには勇気の紋章を破壊まですると言う偉業を成し遂げた光黄。

そんな彼女の實力の高さを改めて知ったエールはより気合を入れて己のターンを進めて行った。

「ターン04」エール

「メインステップ……私も創界神ネクサス、八神太一と石田ヤマトを連続配置！」

ー【八神太一】LV1

ー【石田ヤマト】LV1

「ツ……赤と、紫の創界神ネクサス？」

「2枚分の神託を發揮！……今回の対象カードは2枚ずつ、よってコアを2つずつ追加！」

ー【八神太一】(0??2)

ー【石田ヤマト】(0??2)

特に変化はないが、光黄のラー同様の創界神ネクサスを配置するエール。赤の八神太一ならまだしも、紫の石田ヤマトと言うネクサスに光黄は反応を示す。

無理もない、何せ彼女はエールが紫のオメガを手にする前に出会っているのだから

……

「さらに太一のアグモンを召喚！」

┆【太一のアグモン】LV1(1)BP3000

「召喚時効果、4枚オープンしてその中の成長期を除いたデジタルスピリットを手札に加える！…私はこのカード、ウォーグレイモンを手札に加えるわ！」

「ウォーグレイモンか」

肉食恐竜をこれでもかとデフォルメした可愛らしい成長期のデジタルスピリット、アグモン。その召喚時効果でエールのエースカード、ウォーグレイモンが手札に行く。

「そしてアグモンの召喚により八神太一と石田ヤマトにコアが1つずつ追加される。私は八神太一の効果を使ってカードを1枚ドロウ」

┆【八神太一】(3??0)

減って来た手札を創界神ネクサスの効果で補うエール。その後すぐさまアタックス
テップを宣言して……………

「アタックステップ！……1つでも多くのライフを破壊するわよ……行きなさいアグモン
！」

「ライフで受ける！」

〈ライフ7??6〉光黄

アグモンの鋭い爪による一撃が光黄のライフ1つを切り裂く。しかしその数はまだ
初期の5を上回っており……………

「私はこれでターンエンド！」

手札：4

場：【太一のアグモン】LV1

【八神太一】LV1(0)

【石田ヤマト】LV1(3)

バースト：【無】

(…：…どうやら、アスラと同じように、エールも以前のエールとは異なるようだ…：…：…こ
れは倒し甲斐があるな！)

知らないカードの配置。それだけでエールの成長を感じ取る光黄。己のターンを再び開始して行く。

「ターン05」 光黄

「メインステップ…：…黄金の鐘楼をLV2に戻し、ガトーブレパス2体を連続召喚！」

ー【黄金の鐘楼】(0??2) LV1??2

ー【ガトーブレパス】 LV1

ー【ガトーブレパス】 LV1

勇気の紋章で破壊したばかりのガトーブレパスが追加で2体も光黄の場に召喚され

る。

「さらに神託によりラーにコアを2つ追加。コストを支払い、ラーの【神技】……デッキからカードを3枚オープンしてその中の想獣スピリットをコスト8まで手札に加える……俺はこのカード、想竜王ジュランを手札に！」

「ツ……私が知らない光黄のスピリット!？」

ー【創界神ラー】(3??0)

ラーの効果を使用し、光黄が手札に加えた1枚のカードは、以前彼女とタッグを組んだ経験のあるエールでもわからないカード。

警戒するエールだったが、それだけで光黄のこのターンの攻撃が終わるわけなくて

……

「アタックステップだ。2体目のガトープレパスで攻撃する」

「ツ……石田ヤマトの【神技】!!」

「!!」

「ターンに一度、コア3つをボイドに置き、コア3個以下のスピリット1体を破壊する。
2体目のガトープレパスを破壊!」

ー【石田ヤマト】(3?!0)

反射的に効果を発揮させるエール。アタック中のガトープレパスが紫の輝きに飲み込まれ、堪らず爆散した。

「成る程、それが紫の創界神ネクサスの力か。でも黄金の鐘楼LV2効果で再び俺のライフは1つ回復」

「くっ!」

〈ライフ6?!7〉 光黄

防御したのも束の間。光黄のライフは再び7となる。そして彼女の場にはまだ3体目となるガトープレパスが残っていて……

「3体目のガトーブレパスでアタック！」

「……ライフで受ける！」

〈ライフ4??3〉エール

3体目のガトーブレパスの体当たりがエールのライフ1つを砕く。それに伴い、再びあの効果が適用され……

「ガトーブレパス【聖命】の効果。俺のライフ1つを回復」

〈ライフ7??8〉光黄

「ライフ8………！」

回復を続ける光黄。そのライフは8。残りライフ3のエールと比べると、実に5もの差をつけて見せた。

「俺はこれでターンエンドだ。どうしたエール?…俺の知ってるお前はまだやれる筈だ」

手札：4

場：【ガトープレパス】LV1

【創界神ラー】LV1（0）

【黄金の鐘楼】LV2

バースト：【無】

「やっぱ凄いわね光黄は……烈我が倒したいと思うわけだわ。でもそう、あなたの言う通り、私はまだやれる!……ここから一気に逆転よ!」

「フツ……そうこなくてはな」

この序盤は完全にエールの敗北。しかし、バトルはまだ始まったばかり。ここからが自分の本気であると言わんばかりに、エールは己のターンを再び進めて行く……

「ターン06」エール

「メインステップ……ネクサス、友情の紋章をLV2で配置！」

ー【友情の紋章】LV2（1）

勇気の紋章と対を成す存在、友情の紋章を配置する。彼女の背後に友情を表す紫の紋章が出現した。

「さらに第三のメタルグレイモンを召喚するわ！」

ー【メタルグレイモン】「3」LV3（3）BP9000

エールの場、アグモンの横に出現したのは半身が鋼鉄でできたグレイモン、メタルグレイモン。これで攻撃の準備は整った。エールはアタックステップを開始する……

「バーストをセットしてアタックステップ！……第三のメタルグレイモンでアタック！！
…アタック時効果で自身を回復。BP10000以下のスピリットガトープレパスト
ネクサスの黄金の鐘楼を破壊！」

「!」

「メタルグレイモン」〔3〕（疲労?!?回復）

メタルグレイモンが回復状態となると共に、左手にある鋼鉄のアームを一直線に伸ばし、ガトーブレパスと黄金の鐘楼を貫こうと試みる……

しかし、ガトーブレパスは貫かれ、堪らず爆散してしまうものの、黄金の鐘楼だけは違った……

「ツ……黄金の鐘楼が破壊されない!?!」

「残念だったな。黄金の鐘楼は相手のターン中、自分のネクサスが黄一色の場合破壊されない……LV2の効果、「聖命」を持つガトーブレパスが破壊された事によりライフ1つを回復」

「!!」

〈ライフ8?!?9〉 光黄

破壊されなかった黄金の鐘楼の効果が適用。そのライフは二桁に限りなく近い数値となる。だが、この程度でエールはへこたれない。手札にある最も信頼できるカードをこのタイミングで切って見せる……………

「だったらこれで一気にライフを削る……フラッシュ【煌臨】を発揮!!…対象は第三のメタルグレイモン!!」

「ッ……………来るか」

コストとして、エールのリザーブにあるソウルコアがトラッシュへと弾かれる。そして第三のメタルグレイモンは真っ赤な炎に身を包み、その姿形を大きく変化させて行く……………

「究極進化!!……………現れなさい、ウォーグレイモンツォー!!」

ー【ウォーグレイモン】LV2(3)BP12000

完全にその姿が切り替わり、周囲の炎を手装着されたドラモンキラーと呼ばれる武

器で切り裂きながら現れたのは、グレイモン系の頂点、最強の竜戦士ウォーグレイモン。

「出たな。待っていたぞウォーグレイモン」

「これで一気にライフ差を詰める!…煌臨スピリットは煌臨元となったスピリットの全
ての状態を引き継ぐ、よってウォーグレイモンはアタック中!!」

アタック中のウォーグレイモン。光黄のライフ目掛けて走り出す。ライフが多いと
は言え、今の光黄はそれを防御する手段が何も無くて……

「ライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ9??8〉 光黄

ウォーグレイモンのドラモンキラーによる一撃が光黄のライフ1つを紙切れのよう
に斬り裂く。

さらにエールは畳み掛ける。ウォーグレイモンのアタック時効果の発揮を宣言して

……

「ウオーグレイモンのLV2、3のアタック時効果……トラッシュにあるソウルコアをウオーグレイモンに置く事でライフ1つをボイドに送る！」

「！」

「ガイアフォースツーン!!」

「ぐっ……!!」

ー「ウオーグレイモン」(3??4S) LV2??3

へライフ8??7へ 光黄

ウオーグレイモンは両手を合わせ、その間に火球を形成。間隔を開けると共にそれを巨大化させて行く。身の丈以上の大きさまで肥大化させるとそれを全力で光黄のライフに叩き込む。光黄のライフ1つは一瞬にして消し炭となる。

「まだまだ!!…一気に行くわよ、ウオーグレイモン、アグモン!!」

「そのアタックもライフだ………ッ！」

〈ライフ7??6??5〉光黄

まだまだ続くエールの攻撃。煌臨元が回復した第三のメタルグレイモンだったため、二度目の攻撃が可能だったウォーグレイモンと、太一のアグモンが光黄のライフ1つずつを切り裂いた。

「よし!!…これでライフは振り出しに戻った、ターンエンド!!」

手札：1

場：【太一のアグモン】LV1

【ウォーグレイモン】LV3

【八神太一】LV1(2)

【石田ヤマト】LV1(2)

バースト：【有】

ようやく光黄のライフを初期の数値に戻したエール。ブロッカーを一切残さないままそのターンをエンドとした。

「ターン07」 光黄

「メインステッブ……ウオーグレイモン、確かエールの家系に伝わる伝説のカードだったな……相手にとって不足は無い。全力で叩きのめさせてもらう」

「!!」

アスラと共に並いるカラーリーダー達を見て来たエールだったが、光黄の放つ気迫はそれらに勝るとも劣らない、いや、ひよつとすればそれ以上かもしれない……

そしてエールが身構えた直後、光黄もまた手札にあるカードを構える……

「新しき時代の王者……可能性秘めしその無限の翼で飛び上がれ……想竜王ジュラン、LV2で召喚ッ！」

ー【想竜王ジュラン】LV3(3) B P 10000

黒雲立ち込める空の下、眼光を光らせながら舞い降りる幻獣、否、幻竜とも言うべき

ジユラン。ヴィーナ・ルシファーに並ぶ光黄の新たなキースピリットだ。

「これが光黄の新しいエースカード!!」

「想竜王ジユランの召喚時効果、LV1のスピリット2体をデッキの下に戻す」

「!」

「この効果でアグモンをデッキの下へ!」

鳴り響くジユランの咆哮。それに吹き飛ばされたアグモンは粒子と化してエールのデッキの下へと送り込まれてしまう。

だがこの効果はエールのバースト発動条件でもあつて……

「だけどその召喚時効果はもらったわ!…バースト発動、双翼乱舞!」

「!」

「効果でカードを2枚ドロ、さらにウォーグレイモンから不足コストを確保し、メイン効果も發揮!!…追加で2枚のカードをドロ!」

ー【ウォーグレイモン】(4S??3S) LV3??2

勢い良く反転して発揮されたバーストカードは双翼乱舞。ウォーグレイモンのLV
ダウンと代償に、エールは新たなカードを4枚ドロウする。

しかし、その手札に臆する事なく光黄は動き続けて……………

「アタックステップ……………ジュランで攻撃する……………アタック時効果、俺のライフを1つ
回復」

「ッ……………また回復!？」

〈ライフ5??6〉光黄

羽ばたき飛翔する想竜王ジュラン。その瞬間に又しても光黄のライフに光が灯され
その総数は6となる。

だがこの効果は強力ではあるものの、オマケに過ぎない。光黄の狙いはその後発揮
させる別の効果であって……………

「……からだ。ジュランのもう一つのアタック時効果【転醒】を発揮!」

「ッ……転醒!？」

「黄のコスト5以上のスピリットがアタックした時、ジュランは真の姿……火山竜王ジュランとなる!!」

アスラやロン、兄であるエレンも使っていた【転醒】の効果。光黄のエースカードであるジュランもまたその効果を所有している。

ジュランは翼を大きく広げたかと思うと、鳴き声を上げながら、まるで力を溜め込むように光を放ちながら身を収縮、羽ごと体を丸め始める。

そして次の瞬間、その光を解き放つと同時に巻き起こる爆発、否、例えるなら宇宙を創造する為の超新星。

そして爆風と光が完全に晴れ始めると、より強大な翼を広げる赤き龍の姿、その姿こそジュランの真の姿、想竜王ではなく火山竜王ジュランとして転醒した姿である。

ー【火山竜王ジュラン】LV3(3)BP14000

「凄い……これが光黄の転醒スピリット、ジュラン!」

「驚く暇は与えないぞエール……火山竜王となったジュランの転醒アタック時効果、シ

ンボル1つの相手スピリット1体を破壊する！」

「!!」

「対象は当然ウオーグレイモンだ!!」

ウオーグレイモンに向けて両手を翳し、そこから火炎弾を放つ火山竜王ジュラン。ウオーグレイモンは咄嗟に背中にあるシールドを盾に防御の構えを取るが、火炎弾はそれごと貫き、ウオーグレイモンに直撃、爆散させた。

しかし……………

「この程度で倒される私のウオーグレイモンじゃないわ!!…ネクサス、友情の紋章LV2の効果、手札にあるカード1枚を破棄する事で破壊されたウオーグレイモンを疲労状態で場に残す！」

「!」

5枚ある内の1枚のカードをトラッシュユへと破棄するエール。すると場にデジタルゲートが出現。ウオーグレイモンはそこから飛び出して行き復活を果たした。

「やるな。だけどそのネクサスが無ければウオーグレイモンに耐性は無い!!…フラッシュユ、火山竜王ジュランの更なる効果を發揮!」

「!!」

「相手のネクサス一つを破壊する事で回復する!」

「なっ!?!」

―【火山竜王ジュラン】（疲労??回復）

ジュランが再び両手を翳し、向けた先はエールの背後に存在する友情の紋章。ジュランは強力な火炎弾を爪の先から発射し、それを焼き払った。

しかも次いでのように回復状態となったため、ジュランはこのターンだけで二度のアタックが可能となる。

「火山竜王ジュランは赤と黄のダブルシンボル。その二回攻撃で今度こそウオーグレイモンを破壊しつつ俺の勝ちだ」

「ッ!」

両爪を構え、エールのライフを狙い飛び出す火山竜王ジュラン。絶体絶命の窮地に立たされたエール。しかし、まだ彼女には隠された奥の手が存在していて……………

「ふふ……………遂にこの時が来たわね……………」

「？」

「見てなさいよ光黄、強くなったのはあなただけじゃない!!……………これが私の得た最強のカード!!……………【煌臨】発揮!!……………対象はウォーグレイモン!!」

「なに!?!……………煌臨したウォーグレイモンをさらに煌臨させるだ?!」

ー【ウォーグレイモン】(3S??2) LV2??1

エールがウォーグレイモンを対象に煌臨を宣言すると同時に、デジタルゲートが新たに開かれ、そこから紫のオメガの究極体、鋼鉄に身を包んだ神獣メタルガルルモンが現れる。

メタルガルルモンは登場するなりウォーグレイモンと共に大きく雄叫びを上げると、エールはあのスピリットの口上を述べ始める……………

「右に友情、左に勇氣!!……2つの勇姿重ね合う時、すべての闇穿つ英雄となる!!」

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは自身を模した腕のようなパーツに変化し、宙を舞う。そして光と共にそれらは混ざり合い、今こそ究極を超えた姿となって地上へと舞い戻る……………

そのデジタルスピリットの名は……………

「究極をも超えるデジタルスピリット、オメガモン!!」

1 「オメガモン」 LV2 (2) BP17000

現れたのはウォーグレイモンを模した左腕、メタルガルルモンを模した右腕を持つ白き騎士型の超究極体デジタルスピリット、オメガモン。

元々バトルスピリッツにおいてセンスのあったエールの感情が昂り、さらにそこに紫のオメガが加わり誕生した。正に絆を象徴する最強のデジタルスピリットだ。

「オメガモン!?……………なんだこいつは……………」

「これが私の最強スピリット……ウオーグレイモンとメタルガルルモンが合体した無敵のデジタルスピリット、オメガモンよ！」

見た目や風格、物静かな佇まいからしてオメガモンと言う存在がどれだけ驚異的なモノなのかを悟る光黄。

そしてその驚異的なデジタルスピリットはすぐさま彼女に牙を向ける。

「オメガモンの煌臨アタック時効果、このスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊して回復する！」

「なに!？」

「対象に取るのは当然BP14000の火山竜王ジュラン!!……行きなさいオメガモン……神獣の咆哮、ガルルキャノン!!」

―【オメガモン】（疲労??回復）

メタルガルルモンを模した右腕から巨大な砲手を出現させるオメガモン。それを向かってくる火山竜王ジュランへと静かに、それでいてゆっくりと向け、強烈なエネルギー

ギー弾を放つ。

火山竜王ジユランは避け切れずに被弾。その余の威力に堪らず爆散してしまう。

「転醒したジユランが一撃で……なんてスピリットだ……」

「どう光黄?…成長したこの私の実力は!…もつと褒めなさいよ」

「ああ、凄いよ。アスラも相当強くなったと思っていたが、それ以上だ。あれから色々あったんだな」

「ツ……何よ素直に褒めてくれるのね」

思ってた以上に素直に褒められたエールは思わず照れ臭そうにする。

だが、いくらエールのオメガモンが難敵であろうとも光黄にサレンダーの文字は無い。
い。

「あのバカ烈もそれくらい強くなってくれたら良いんだけど……悪い、話が逸れたな、このターンはターンエンドだ」

手札：4

場：【創界神ラー】LV1（1）

【黄金の鐘楼】LV2（2）

バースト：【無】

「？」

ほんの少しだけ抑え切れなくなり、サラツと自分の願望を口ずさみながらそのターンをエンドとする光黄。エールは最初こそ疑問符を頭に浮かべるが、その理由を直ぐに直感と推理で理解して……………

「……………まあ強くなるんじゃない？…烈我つてあのバカスラに似てるし。あいつも最初は意味がわからないくらい雑魚の小ネズミだったわ。その時から頂点王になるだのなんだのと喧しかったし」

「はは……………随分と根拠の無い自信だな」

おそらく無意識だろう、えらく楽しそうにアスラの話をするエール。「本当に彼の事が好きなんだな」と感じた光黄は思わず苦笑い。

「何はともあれ、次はお前のターンだエール。オメガモンの効果、それだけじゃないんだろっ？」

「ええ。見せてあげるわ…オメガモンの真骨頂を！…私のターン！」

軽い余談は終わり。再びバトルスピリッツへと意識を向ける2人。オメガモンを呼び出して見せたエールの第8ターンが幕を開けた。

「ターン08」エール

「メインステップ…オメガモンのLVを3にアップさせ、グレイモンを2体召喚！」

- 1 【オメガモン】 (2??3S) LV2??3
- 1 【グレイモン】 LV1(1) BP4000
- 1 【グレイモン】 LV1(1) BP4000
- 1 【八神太一】 (3??4??5) LV1??2
- 1 【石田ヤマト】 (3??4??5) LV1??2

メインステップ開始直後、エールの場に立派な頭角を持つ肉食恐竜のような見た目の成熟期スピリット、グレイモンが2体見参。

神託の効果で創界神達にコアが置かれLVが上昇していく中、エールはそのカードの効果発揮も忘れずに発揮させていき……………

「八神太一の効果…………コア3個をボイドに置き、1枚ドロ…………」

「〔八神太一〕(5??2) LV2??1

破壊される事のあまりない創界神ネクサスの効果で減った手札を潤していくエール。そのまま勢いに乗ってアタックステップを宣言する……………

「アタックステップ!!…………オメガモンでアタックするわ!」

ウォーグレイモンを模した左腕からグレイソードと呼ばれる聖剣を発現させ、マントを翻し光黄のライフへと突き進むオメガモン。そしてこの時、オメガモンの強力過ぎるアタック時効果がいくつも発揮されて……………

「オメガモンのアタック時効果で自身を回復!…さらに究極体のスピリットが回復した事により、石田ヤマトの【神域】の効果!…相手ライフ1つを破壊する!」

「ツ……………」

ー【オメガモン】(疲労?!回復)

へライフ6??5へ 光黄

オメガモンが回復状態となると同時に光黄のライフが1つ紫の光と共に砕け散る。そして、まだまだこんなモノではないと告げて来るかのようにエールはオメガモンの更なる効果を發揮させて…………

「フラッシュユ!!…オメガモンのアタック時効果、煌臨元になったウォーグレイモンを破壊する事で相手ライフをさらに2つ破壊する!!」

「ツ……………今度は2つを…………!!」

「食らいなさい!!……………天下の豪剣…グレイソードツッー!!」

「ぐっ……………」

〈ライフ5??3〉光黄

左腕のグレイソードに炎の力を込め、それを横一線に振り斬撃を放つオメガモン。それは光黄のライフ2つを瞬く間に焼き斬り裂いた。

どちらの効果も凄まじいカードパワーを誇るオメガモンの強さに光黄は思わず「なんてデタラメなパワーだ………」と声を漏らす。

「オメガモンは赤と白のダブルシンボル!!…2回の攻撃でこのバトルは私の勝ちで終わるわ!!」

勝ちを確信するエール。しかし、まだまだ光黄の壁は越えられなかったか、彼女は手札から1枚のカードを淡々と引き抜き、使用する。

「フラッシュタイミング、マジック……シンフォニックバーストを使用!」

「!」

「これにより、このバトル終了時、俺のライフが2以下の場合、アタックステップを強制終了させる!?!…そのアタックはライフで受ける!?!…ぐあつ!」

へライフ3?!?! 光黄

マジックを放った束の間、オメガモンがグレイソードを振り下ろし、そのライフ2つを一気に破壊。遂に残りライフ1となってしまうが、ライフが1となった事により………

「残りライフは1。よってシンフォニックバーストの効果は適用!!…アタックステップは終了だ!」

「くっ……やつと残り1まで追い詰めたのに……ターンエンド……」

手札：3

場：【オメガモン】LV3

【グレイモン】LV1

【グレイモン】LV1

【八神太一】LV1(2)

【石田ヤマト】LV2 (5)

バースト：【無】

シンフォニックバーストにより光の波動がエンドステップまで光黄のライフを守り続ける。エールは致し方なく苦渋のエンド宣言を行う。

だが、ライフ差や盤面は圧倒的にエールが優勢である。一般的に見たら光黄がここから逆転するのは厳しいモノと思われる。

(油断はしない。次のターンを凌いで絶対に勝つ！)

内心でそう呟いたエール。普通のカードバトラーだったら先ず勝った気になってしまい、気を緩めてしまうだろうが、相手が七罪竜の使い手黄空光黄と言う事もあり、エールはまだ警戒心を怠らないでいる。

そして回って来る光黄のターン。アスラの最大のライバル、ロンを見ているかのような余裕を感じさせる涼しい表情を見せながら淡々とそれを進めて行く。

「ターン09」 光黄

「ドローステップ!!……よし」

「!?」

ターンシークエンスの過程の中でドローカードを視認し、そう呟く光黄。普段からクールでポーカーフエイスな彼女だが、エールでもそのドローカードが良きモノであった事だけは真つ先に理解できて……

「メインステップ!!……これで勝利のピースは全て揃った。行くぞエール……俺の全力を受け取るがいい!」

「ツ……ええ、かかって来なさい光黄!!」

お互いがお互いのバトルへのモチベーションを高め合う中、光黄はこのターンでドローしたカードをバトル台に叩きつけ、口上を述べる……

「煌き羽ばたく墮天の龍よ! 地に墮ちしその身を再び天へと羽ばたき降臨せよッ! 墮天神龍ヴィーナ・ルシファー、Lv. 3で召喚ッ!!」

空を覆う黒雲、雷鳴が響き渡る中、唯一黒雲から差し込む光、その光よりゆっくり地へと舞い降りる龍の姿、龍の降臨を祝福するかのようになり注ぐ雷と雷鳴。そして龍、否、ヴィーナ・ルシファーは鳴り止まぬ雷鳴を掻き消すほど強大な咆哮を上げ、黒雲をも吹き飛ばして見せた。

【墮天神龍ヴィーナ・ルシファー】 L V 3 (5) B P 1 0 0 0 0

このヴィーナ・ルシファーこそ、光黄の最初のエースカード。どんな時でも一緒に戦った戦友とも呼べる存在である。

「出た……ヴィーナ・ルシファー……確か召喚する時、場だけじゃなくてトラッシュのカードでも軽減できるスピリット」

「その通りだ。よってフル軽減されーコストで召喚できた……さらに俺はここでブレイヴカード、光翼の神剣エンジェリックフェザーを召喚し、ヴィーナ・ルシファーに直接合体!!」

「!!」

1 【墮天神龍ヴィーナ・ルシファー+光翼の神剣エンジエリックフェザー〈R〉】LV
3 (5) BP15000

天より降り落ちる一本の剣、エンジエリックフェザー。振り落ちるその剣を掴み取ると、合体スピリットとなり咆哮を唸らせる。

「アタックステップ!!…翔けるヴィーナ・ルシファー!!…合体したエンジエリックフェザーの効果でグレイモン1体のBPをマイナス5000。0になった事により手札に戻す!」

「ッ!!」

「次いでにヴィーナ・ルシファーは回復する!」

1 【グレイモン】BP4000??0

1 【墮天神龍ヴィーナ・ルシファー+光翼の神剣エンジエリックフェザー〈R〉】(疲労??回復)

羽ばたくヴィーナ・ルシファー。直後にエンジエリックフェザーを振り、その先から放たれた光のエネルギーがエールのグレイモンに直撃。力尽きて粒子となり彼女の手札へと帰還して行った。

「そして……でフラッシュユ!!……ヴィーナ・ルシファーの合体アタック時効果。スピリットカードを破棄する事で、デッキからマジックカードが出るまで破棄……最後に出したそのマジックカードをノーコストで発揮させる。今回は妖雷スパーク……よってヴィーナ・ルシファーのBPを2000アップさせ、1枚ドロロー!」

「【墮天神龍ヴィーナ・ルシファー+光翼の神剣エンジエリックフェザー〈R〉】BP
15000? 17000

立て続けにヴィーナ・ルシファーの効果を発揮させ、BPと手札の質を高める光黄。
だが……………

「だけどもまだ私のオメガモンの敵じゃない!!……ブロックよ!!」

ヴィーナ・ルシファーを迎え撃つは最強のデジタルスピリットオメガモン。右腕の砲手と左腕の聖剣を発現させ、ゆっくりと歩みながら迎撃に向かう。

上空に佇むヴィーナ・ルシファーはエンジェリックフェザーを構え、オメガモン目掛けて急降下。しかしオメガモンは左腕のグレイソードを軽く振るった風圧だけでそれを吹き飛ばしてしまう。

「いくら回復状態になろうが、このバトルで破壊して仕舞えば全て無駄に終わる!!」

「フツ……逆に言えばここで勝てば俺の勝ちに等しい……フラッシュ【天雷】を發揮!!行くぞライト!!」

『はい光黄様!!…お待ちしていましたよこの私の出番!!』
「!!」

圧倒的な実力でヴィーナ・ルシファーを追い詰めるオメガモン。そんな中、それに対抗すべく光黄は手札からあるカードを引き抜いた。

それは自分を選んでくれた最高の相棒であり……

「瞬光雷進！ 色欲の咎を持つ雷竜！ 戒めのない自由な天を舞い、地上の敵に轟雷の光を下せッ！ 雷光天龍ライトボルデイグス、天雷召喚ッ!!」

正しく刹那の一瞬。

稲妻の如く光の速さで場へと飛来して来たのは8枚の翼を束ねる伝説の七罪竜、名を雷光天龍ライトボルデイグス。

ー【雷光天龍ライトボルデイグス】LV2（4）BP9000

『どうですかエール様!!…改めてこの私の本当の姿を見たご感想は!!…惚れてくれましたも構いませんよ!』

「……………なんか羽の生えたトカゲって感じ」
『酷い!!』

いくら本来の姿で召喚され、サイズアップしても中身は変わらないライト。その事を知っているエールは彼を軽くあしらう。

「ふざけてる場合じゃないぞライト。バトルに集中しろ」

『はい光黄様!!…お相手がエール様と言えども手加減は致しません!!』

光黄にそう言われると、バトル中の相手であるエールのオメガモンに目を向けるライト。ヴィーナ・ルシファーと共にそれに立ち向かっていく。

「既に知つてると思うが、七罪竜、ライトボルディグスの【天雷】はフラッシュタイミン
グで疲労状態で召喚する事により、バトルに加勢する事ができる。そしてそのBPは
ヴィーナ・ルシファーと合わせり、合計26000だ！」

「ー」

エンジエリックフェザーを構え、空を刺すような突撃がオメガモンに繰り出される
が、オメガモンは難なくそれを回避。

しかしその横からすぐさま突撃して来るライトボルディグス。オメガモンに飛び乗
り、その装甲を爪で引き裂こうと試みるが……

『硬ッ!!…何なんですかこの鉄人は!?!…うおおお!!?』

装甲の硬さにリアクションする間もなく、オメガモンに引き剥がされ、ガルルキャノンを発射されるライトボルディグス。一撃喰らえば一溜りもないのは目に見えているため、全力且つ無我夢中でそれを回避する。

「ふふ……光黄、私がライトの効果の存在を忘れたとでも思ってたの??……寧ろこれ待っていたわ!!……あなたのエースカードと相棒を一網打尽にできるこの時をね!!……フラッシュユマジック……フルーツチェンジ!!」

「ツ……なに、お前も黄色のマジックを!?!」

「ええ、不足コストはオメガモンから確保。よってLVは下がり、BPは12000となるわ」

ー【オメガモン】(3S??1S) LV3??1

「でもそれで良い。フルーツチェンジの効果、このバトルはBPが下回っている方が勝つ!!」

「!」

ここに来てまさかまさかのエールの手札から黄色のマジックカードが発揮される。

オメガモンは飛び掛かって来るヴィーナ・ルシファーとライトボルディグスに対し、グレイソードとガルルキヤノンを巧みに使い、一切無駄の無い動きで返り討ちにしていく。

圧倒的な力の差に隙を見つけられるわけもなく、ヴィーナ・ルシファーとライトボルディグスは苦戦を強いられる。

「これで勝負あったわね……決めなさいオメガモン!!」

エールの指示に、オメガモンがその眼光を瞬間的に強く輝かせたと思えば、グレイソードとガルルキヤノンを駆り低空飛行で駆ける。狙う先は光黄の2体のスピリット達。

だが……………

「俺は信じていたぞエール。お前がこの状況から強力な一手を繰り出す事を……………」
「!?!」

「だけどこの勝負、勝つのは俺だ」

それだけで語る程、黄空光黄と言う人間は甘くはなかった。仮にこの程度で勝てたとしたら、天上烈我はとうの昔に彼女に勝てていた事だろう……………

「これが最後のフラッシュユタイミングだ。マジック、ペガサスフラップ!!……………このバトルはBPを比べずに終了する!!」

「なッ!?……………バトルを強制終了了!」

光黄の最後の手札から放たれた最後のマジックカード。それがオメガモンの足を止めさせ、ヴィーナ・ルシファーとライトボルディグスを救う。

そしてそれだけでは終わらない。

「さらにペガサスフラップの更なる効果、このバトル終了時、スピリット1体を回復」

「!」

「起き上がれライト!!」

ー【雷光天龍ライトボルディグス】（疲労??回復）

【天雷】の効果で疲労状態で召喚されていたライトボルディグス。ペガサスフラップの効果で回復状態となり、更なる攻撃が可能となった。

「エンジエリックフェザーの効果で回復したヴィーナ・ルシファーで再アタック!!…エンジエリックフェザー合体時の効果でグレイモンのBPをマイナス5000。0になるため手札に戻す！」

「!!」

ー【グレイモン】BP4000??0

再び発揮されるエンジエリックフェザーの効果。剣先より放たれる光の波動がグレイモンを貫いて肉体を粒子化。エールの手札へと強制帰還させられる。

これでエールのブロッカーはいなくなつた。合体によりダブルシンボルとなつているヴィーナ・ルシファーが牙を剥く。

「さあメインのアタックはどうする？」

「くっ……オメガモンはもうブロックできない………ライフで受ける!!………ッ」

〈ライフ3?1〉 エール

ヴィーナ・ルシファアがエンジェリックフェザーを用いて強烈な刺突を繰り出す。それによりエールのライフは一気に2つを貫かれ、いよいよ残り1となってしまう。

「最後はお前で決めるぞ。行けライト!!」

『承知しました光黄様!!……このライト、光黄様の執事としてお役に立って見せましょう!!』

ライトボルディグスが再び羽ばたく。ブロックにより疲労状態となったオメガモンを横切り、エールのライフへと迫る。

その間にエールはこのバトルでの敗北を悟って……

「……負けか……でも楽しいバトルだったわ光黄!」

「ああ、俺もだエール」

「ライフで受ける!!」

へライフ1?!?0へエール

ライトボルディグスが光の速さで強烈な一撃を繰り出す。それにより、エールは最後のライフを砕かれ、このバトルでの敗北が確定。

勝者は黄空光黄。オメガモンの圧倒的な力に翻弄されながらも最後には素の実力を見せつけ、エールに勝利を収めて見せた。

ー……………

「もう一歩だと思ったんだけどなく…やっぱり強いわね光黄は」

「いや、冗談抜きで危なかった。次やったらこっちが負けるかもな」

「またやりましょう!」

「ああ。俺でよければいつでも相手になるよ」

バトルも終わり、アミューズメントパークに戻った2人。そろそろアスラ達も帰って来ている頃だと思い、ボウリング場へと足を運びながら軽く談笑していた。

「さて、光黄の好きな烈我は無事かしらね？」

「ツ……それは余計なお世話だ」

「はは。ごめんごめん!!……」

珍しく光黄をからかうエール。恥ずかしがり、赤面した光黄に謝りながらも辿り着いたボウリング場の扉を開ける。

「え」

しかし、そこには……

「うわアアアまたガーター?!……なんで、何で私のボウリング玉はいつもあらぬ方向へ!?!」

「あつはは!!……シイナさん下手過ぎ、どれどれ、今度はこの私が……」

「ボウリング玉割るのだけは勘弁してくれよ姉ちゃん」

「え!?!…るみかさんこの硬いボール壊せるんすか!?!…カツケエ!!」

戻っていたアスラと烈我だけでなく、どう言う訳か、シイナとるみかもいた。シイナはどうやらボウリングが下手くそなようで、転がしたボウリング玉は全てガーターだった。

「あつ!?!…エールと光黄さん!!…2人ともどこ行つてたんだよ!?!…ボーリングつて楽しいな!」

「2人もやろうよ!」

「あ。そう!?!…まあシイナ様達がどこかにいるのは最初から何となく分かつてたけど」

「ああ、俺もだ」

ナチュラルな感じで2人に絡んでくるアスラとシイナ。全てが面倒臭くなったエールはツツコミを拒否する。

そんな中光黄は面倒臭くなったエールに同意しながらも、さっきの出来事で頭に大き

なタンコブを作った烈我の横に座り、声を掛ける。

「そ、その……怪我は大丈夫か烈我？」

「おう……この通りだぜ！」

「そうか。それはまあ……良かったな」

「まさか……俺の事心配してくれてたのか!? ……めちやくちや嬉しいぜ！」

「ツ……そ、それは無い。俺がお前の事なんて心配する訳ないだろ、このバカ烈」

「ええええええ!!」

本当はめちやくちや心配していたが、やっぱり素直になれない光黄。そんな彼らのやり取りを見てニヤニヤするシイナとるみか。

「はいじゃあ次はエールちゃんね。これ投げて」

「え? ……私ですか?」

るみかにボウリング玉を渡されるエール。レーンの前に立ち、凄腕だった光黄の見様見真似で構えるが……

グ玉となったアスラは全てのピンを倒し、見事ストライクを取って見せた。
そんな彼らのやり取りを見て、他の面々も大笑いしたのだった。

45コア「頂点王の実力」

アスラ達の世界でも、烈我達の世界でも無い、とある世界……………

そんな世界の辺境に聳え立つ罪狩^{デッドリーハンターズ}猟団と言う一つの巨大な組織が巢食う宮殿。その中で、鋭い目付きが特徴的な青年がまるで上の者から呼ばれているかのように歩いていた。多くの者達が同じような隊服を見に纏う中、彼は私服であるため、それなりに高い地位にいる人物である事が推測される。

そして、おそらく上司がいるであろうドアを蹴破りながら入室する。

「俺に何の用だボス」

「やあ、待つていたよドレイク」

掴み所の無い笑顔を浮かべながらドレイクと呼ばれる青年を待ち構えていたのは、彼の上司であり、この宮殿の組織をまとめ上げている重鎮「ルディア」……………ドレイクからは常に「ボス」と呼ばれている。

「つまらん仕事だったら即刻帰らせてもらおうぞ」

「まあまあ、そう急かささない急かささない。今回、君には極秘にやつてもらいたい事があつてね」

「極秘に？」

例え相手が上司であるルディアに対しても鋭い態度を止める事は無いドレイク。しかし、今回はいつもとは違った依頼だと悟った彼は、微かにその内容へと興味を示す。ルディアは表面だけ優しそうな表情を浮かべながらその詳細を述べていく。

「情報部からなんだけど、最近七罪竜を持つ少年少女達の元に、とある人物達が来訪して来たそうなんだ」

「？」

ルディアはそう言いながらアスラ、ロン、エール、シイナ、テンドウのこっそり盗撮された顔写真をテーブルに並べる。

「それがどうした」

「問題なのは彼らがいた場所さ。以前も話しただろ?…ライダーハンターズと呼ばれる小さな組織のいる異世界の事を、彼らはどうやらその世界からやって来たみたいだね」
「……………」

以前、少しかだけライダーハンターズの面々と関わりがあったルディア。組織の幹部であるドレイクがその話を聞いていない訳がない。

しかし、アスラ達が異世界の人間だと知つてもなお、ドレイクは顔色を一つ変えない。何も異世界人など今更驚く事でもないからだ。

「だったらなんだってんだ、この中にいる誰かでもスカウトしろつてのか?」

「うーっ、まあ間違つてはいないんだけどね…：僕が気に掛けてるのはこの子さ」
「?」

ルディアはそう言うと、アスラの顔写真に指を指す。頭の後ろに腕を回し、呑気に笑っている写真と言う事もあり、ドレイクがアスラに抱いた第一印象は「バカそう」だった。

「フツ……このアホ面がお気に入りに入りつてか？…… 罪狩猟団のボスともあろうお方が随分と見る目がねえな」

「情報部によれば、彼はどうやら、生まれながらにソウルコアを使う事ができないみたいなんだ」

「!!」

アスラの素性を聞くなり、顔色を変えるドレイク。無理もない、そんな奇天烈な話、生まれて一度も聞いた事があるわけないのだから……

「……だったら尚更こんな奴……」

「いや僕は確信しているよ。神は人間を平等に作り上げる。彼はおそらく、その身にソウルコアが無いことと引き換えに、別の何かをその身に宿しているに違いない」

「ツ……別の……何か？」

流石は七罪竜を狙う敵組織のボスと言ったところか、その目は既にアスラの中に眠る謎の生命体「オニキス」の存在を認知しているようである。

「彼とお話してできるのが楽しみで仕方ないよ。カードバトラーの最大の武器であり最大の脅威、ソウルコアを生まれ持つて使う事ができない少年なんて……世界中、いや全ての世界を渡り歩いても見つからないからね。きつと幼少期は周囲の人間から蔑まれて来たに違いない……僕には痛い程その気持ち的理解できるよ……君もそうだろう、ドレイク？」

「ツ……俺をこんなアホ面と一緒にすんな。取り敢えずコイツを拉致していけばいいんだな？」

これまでのルディアの依頼の要件を纏めると、「アスラを連れて来い」と言うモノ。ドレイクは理解し、早速彼らの元へ急行しようとするが……

「おつとごめんどレイク。やる気になってくれたのは嬉しいけど、注意事項が1つだけある」

「？」

「写真のこの女の人、そう。オレンジの女の人さ……彼女にだけは戦いを挑まない方が
良い。なるべく避ける事だ」

ルディアが頂点王シイナ・メザの写真をドレイクに見せつけながらそう言い放った。ここで言う戦いを挑まない方が良いと言うのは、バトルスピリッツを行つてはダメであると言うこと。

つまり、ルディアはドレイクよりもシイナの方が強いと言っている事に差し違えなくて……………

「この華奢な女が俺よりも強いだと?……………フツ……………そんな馬鹿な話があるか」

「僕の見立てではね。おそらく罪狩猟団のみんなが束になってかかっても誰も勝てない……………この僕も返り討ちに遭うだろうね」

「なに!？」

ルディアのまさかの敗北宣言。罪狩猟団のボスとして、その名に恥じない圧倒的なバトルの腕前を持つルディアだが、そんな彼が戦う前から負けを認めるなど、ドレイクには考えられなかった……………

「……………だが関係ない。誰が相手だろうと軽くぶつ潰すだけだ」

「うんうん……………君だったらそう言ってくれると思つていたよ……………それじゃあ頑張つて

ね！」

どこまでが本気でどこまでが偽りなのかハッキリしないボス、ルディアの表情を最後に見届けると、ドレイクはアスラ、烈我達がいる世界へと急行して行つた。

とある平日、場所はとある公園。

平日と言う事もあり、人一人見当たらず、今なら遊具や芝生を独占できる格好のタイミングであつた。

そしてその格好のタイミングにアスラ、エール、シイナ、ムエ、色欲を司る七罪竜の一体、ライトは来ていて……………

「さあライト君。待ちに待つたハーレムタイムだよ……………今日はこのだだっ広い公園でゆつくり遊んで来な〜」

『いやいやちよつと待つてくださいしイナ様!!…ハーレムって言いましたもお美しい女性には貴女とエール様だけで後はこのわんわんとチンチクリンだけじゃないですか!!』

「誰がチンチクリンだライトコノヤロー!!」

「喧しいわね。せつかくこの私が来てあげたんだからもう少し静かにしてなさいよ」

「むえ〜」

一昨日だったか。昨日のWデートの際にライトを黙らせるためにシイナが咄嗟に今日という日を設けたわけだが、

平日だったと言う事もあり、光黄や絵瑠は学校。るみかも用事があるそうで、結局来れたのはエールだけ、しかも最初は行きたがらなくて、苦肉の策にシイナはアスラを無理矢理引っ張り出す作戦に出た。

アスラさえ来ればエールは向かわざるを得ない。「し、仕方ないわね、行つてあげるわよ」と素直になれない見栄を張りながら渋々ついて来てくれた。

結果、今のこのハーレムとは言えない状況が出来上がってしまったっているわけだ。

「よし。じゃあ私はこのベンチで一眠りしておくよ。みんなは適当に遊んで来ておくれ」

昨日のWデートの際にボウリングをやり過ぎたシイナ。余り寝てないため、ここらで

一度仮眠をとる事にした。そんな彼女を他所に、アスラ達は公園のグリーンゾーンまで赴くと……………

「つしやあ!!…烈我達のガツコウとやらが終わるまでオレ達は自主練だ!!…バトルやるぞエール!」

「嫌よ、て言うか何でこの私がアンタみたいな熱苦しい奴とバトルやらなくちゃいけないわけ?」

「えええ?!?!…まあいつか。じゃあライト、オレとバトルやろうぜ!」

エールにバトルを拒まれるアスラ。しかしすぐさまライトへと視線を移す。実際、本当はエールはアスラとバトルスピがしたくて、内心では「もうちよつとしつこく誘いなさいよ!」と呟いていた。

だがそれを口に出して言えるわけもなく、今度はライトが口を開いた。

『嫌でございます!…折角ここまで来たのになんで貴方みたいな野蛮人の相手しなくちゃいけないのです!…私はもつとエール様やシイナ様と戯れたい!』

「何をお!!…オレとタワムレたって良いじゃないかアアア!」

「あんた戯れの意味わかってる？」

当然ながらライトの答えはN o。男性でしかも品の無いアスラと色欲を司る伝説の七罪竜のスピリットである彼がバトルをするわけがなかった。

「まだ三王を倒してないオレが頂点王のシイナとバトルするわけにもいかねえしな………つて言うか起こすのも悪いし………仕方ねえ、一人で自主練でもしとくか」

誰もバトルしてくれないアスラ。仕方なく一人で自主練しようと懐からBパッドを取り出そうとしたが………

その直後だ。アスラやエールにとって見知らぬ声が聞こえて来たのは………

「バトルの相手だったらこの俺がいつでもしてやる」

「おっ！……マジっすか助かります!!………つて言うかアンタ誰？」

『ツ………コイツは!!』

声のする方へと振り向く面々。そこには一人の青年が存在していた。アスラやエー

ルは知らない人物だが、ライトは違う。彼を見るなり目の色を変えて反応して見せる。

『むさ苦しい男の名前は覚えたくなかったのですが、奴に関しては覚えざるを得ませんでした。奴の名はドレイク。私たちと敵対している組織の幹部でございます』

「ツ……コイツが!?!」

烈我達から話には聞いていた七罪竜を狙う組織。その重要な役割を担うであろう幹部が今、アスラとエールの目の前に立ちはだかっているのだ。

『まさか私を狙っているのですか?……男に捕まるなんてごめんですよ。私を捕まえたければミコさんやデイストさんでも連れて来てくださいな』

「逆にその人達が来たら捕まるの?」

『冗談です!!』

ドレイクに対して強気な発言をするライトだが、異常に緩い条件にエールが思わずツツコミを入れる。彼はその後直ぐに冗談であると言いつが果たして………

「七罪竜ライトボルディグス、黄色のお前に興味は無い。今回の獲物はお前だ、アホ面」
「誰がアホ面だアアアー!!……え、でも何でオレ?」

「アスラが標的!?!」

「むええええ!?!?なんてこった!」

ドレイクが「アホ面」と評して指を刺したのは他でも無いアスラ。どうやらドレイクが今回狙っているのは七罪竜であるライトではなく、このアスラらしい。

何故何の関係もない自分を狙うのか………本人も当然戸惑うが、アスラの横にいるエールやムエも驚きを隠せない。

「ま、まさかオマエ達もオレの龍騎を狙ってんのか!?!…だったらゼツテエ渡さねえぞ!」
…龍騎はオレの、オレだけのカードだ!」

「龍騎?…ライダースピリットとか言うカードの事か?…生憎、俺はその程度のカードに興味が無い。そもそも貴様を連れて来いと言ったのは俺達のボスだ。ソウルコアが使えないのが珍しいようだな」

「ツ……オレがソウルコアを使えないのもお見通しかよ」

本来、余り乗り気ではなかった仕事と言う事もあったのか、何故アスラを狙っているのかの経緯を余す事なく伝えるドレイク。

「……まあ、世界中どこを探したってソウルコアが使えないなんて小ネズミ、アンタくらいでしょうからね……珍しがるのも無理ないわ」

「何ちよつと悲しい事言っただアール!!…もう一人くらいいたっていいじゃねえかアアアー!!」

エールに白々しい眼差しを向けられるアスラ。確かにこの世でソウルコアが使えない人間など世界の中をどれだけ探し回ってもこのアスラだけであろう。

「まあ……つーわけで身柄を拘束させてもらうぞ。無論、バトルスピリッツでな………悪く思うなよ、これも仕事なんぞな」

「ツ………!!」

言葉と共に馴染み出てくるドレイクのオーラと気迫。アスラは彼からどこかライダーハンターズのトウエンティに似た気配を感じた。

それ故に、彼がただ者ではない事も瞬時に悟る。だが、バトルを挑まれて逃げるような真似は決してしない。やる気を見せるようにデツキを構えようとするが……………その直後だった。オレンジの長い髪が目の前を通過したのは……………

「ちよつとそのバトル、待つてもらおうか」

「ツ…………シイナ！」

「コイツは……………」

間に割って入って来たのはオレンジの長い髪を靡かせる頂点王シイナ。トウエンティは彼女の顔を見るなり、この女こそがボス、ルディアさえも戦いを避ける存在である事を思い出す。

「君さ……そう言う事やられると困るんだよね。アスラだけをどつか連れて行っちゃやとエールちゃんとかくつつける事できないでしょ……何のために私が頑張ってると思ってるわけ？」

「なあッ!!……何言ってるんですかシイナ様!!」

相変わらずなシイナ。どう考えてもドレイクに対して怒るところはそこではない。

「ん？……いや待てよ。いつそエールちゃんも連れて行かれたら2人はその先で結ばれるのでは？………よしその君!!……このエールちゃんも一緒に拉致してくれるならアスラの拉致も許そう!!」

「何言ってるんだアンタアアアア!!……助けに来てくれたんじゃないんですかアアアア!!」
『シイナ様、そう言う天然な所も素敵でございます』

止まらないシイナのボケにアスラがツツコミを入れる。その横で、ライトは反対にシイナをベタ褒めする。どうやら本人の顔が良ければいいらしい。

そんな写真から予想できるレベルのアホな会話に、ドレイクは………

(………コイツら、写真で見たまんまのアホな連中じゃねえか。特にこの女………コイツ本当にボスよりも強いのか?)

疑問を抱く。

当然だ。ボスであるルディアも確かに顔や体格だけを見れば対して強そうには見え

ないが、彼には何故か強者のオーラが静かに滲み出ている。そのため初見でも強い事は理解できたのだが……………

この女はどうだ。どこをどう見たってただの変態じゃないか。

しかし、仮にもルディアが戦いを避けるべきとまで言わせた女。ドレイクは彼女を試そうとするように、デッキを構えると……………

「俺はお前達に興味は無いが、お前のバトルには興味がある」

「？」

「俺とバトルしろ。俺達のボスを圧倒できる程の実力を今ここで示せ」

「ん？……………シイナ、この人達のボスと知り合いなのか？」

「いや知らないけど」

ルディアとドレイクの会話を聞いていないアスラ達には彼の言っている事は理解できない。しかし、そんな彼のバトルをしたいと言う気持ちだけは伝わって来たか、一国の頂点王であるシイナは口角を上げながら自分もまたデッキを取り出して……………

「まあ良いや……………頂点王って言う職業柄、全然バトルしないから色々鈍ってると思うし

……ドレイクだったっけ？……この私で良ければ相手になるよ」

「……そうこなくてはな」

「おおシイナのバトル……何やかんや見るのは初めてかしんねえ」

シイナがスーミ村を発つたのは自分が5歳の頃。それ故に、シイナのバトルを今までアスラは一度も見た事がなかった。

アスラが今から行われるバトルに興味津々になる中、シイナは懐からBパッドを取り出し、それをドレイクに向かって投げつけた。ドレイクは顔色一つ変えずにそれをキヤツチする。

「………なんだこの薄っぺらい機械は」

「それはBパッド。私達の世界で使われるバトル用端末だ。ボタンを押して見な？…バトル台が出来上がるからさ」

言われるがままにBパッドのボタンをプッシュするドレイク。するとBパッドは角の部分から脚立が飛び出し、バトル台を形成した。シイナもまた同様に自分のバトル台を形成させた。

2人はその後、己のデッキをバトル台へとセット、上から4枚のカードをドローし、完璧にバトルの準備を終えた。

「それじゃあやろうか。本気でかかって来いよ」

「こつちのセリフだ」

…………ゲートオープン、界放!!

アスラ、エール、ムエ、ライトが周囲で見守る中、頂点王シイナと罪狩猟団の帝騎と呼ばれる幹部の1人、ドレイクのバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける。

先行はドレイクだ。鋭い眼光をシイナに向けながらそのターンシークエンスを進めていく。

「ターン01」ドレイク

「メインステップ! ……俺は創界神ネクサス、アヌビスとスサノヲを連続配置!」

「おお創界神」

ー【創界神アヌビス】LV1

ー【創界神スサノヲ】LV1

「成る程。この薄っぺらい機械は、外でも擬似的なバトルフィールドを形成できると言う事か」

ドレイクの背後に配置される2体の創界神。黒い甲冑を見に纏うアヌビスと、豪快な印象を与えるスサノヲだ。その後ドレイクはBパッドがどう言う端末なのかを大方理解すると共に、創界神ネクススの神託をそれぞれ発揮させ、アヌビスに1つ、スサノヲに2つのコアを乗せる事に成功した。

「これでターンエンド。次は貴様の番だ、さあ来い」

手札：3

場：【創界神アヌビス】LV1（1）

【創界神スサノヲ】LV1（2）

バースト：【無】

「オツケー！」

シイナを挑発しながらそのターンをエンドとするドレイク。しかしそれを間に受けるそぶりを見せないシイナ。余裕の笑顔を浮かべながらそのターンを進行させていく。

「ターン02」シイナ

「メインステップ……あ、そうだその前に決めとかないと」

「？」

「このバトル、何を賭ける？……何かを賭けあった方が楽しいからね」

シイナが要求して来たのはまさかの賭博。ドレイクは考えるまでもなく即答する。

「だったらそのアホ面をもらう。元々そう言う仕事だからな」

「いいよー」

「オイイイイー!!!…何あつさり承諾してんだアアアー!!!」

『別に貴方なんて居ても居なくても対して変わらないからいいじゃないですか』
「何言ってるんだライト!!…変わるだろ!?!…オレ主役よ!?!」

バトルの勝利にはアスラの身柄を要求するドレイク。シイナはそれを勝手に許可した。そして彼女もまた賭ける物を選択する。

「いったい何が賭けられるのか身構えるドレイクだったが……………」

「よし、じゃあ私が勝ったらドレイクにドーナツを奢ってもらおう」

「……………は?」

「だからドーナツだよドーナツ。るみかちゃんに教えてもらった美味しいドーナツ屋に今日行く予定だったからさ。そのドーナツの代金を支払ってもらおうって事!」

……………何言ってるんだこの馬鹿は。

ドレイクは思わずそう考えた。やはりこんな能天気な奴がルディアをも倒せる実力を保有しているとは思えない。何かの間違いであると……………

「むえ、むええええ!!」??やったね、ドーナツ!!

「シイナ様最近ますますおバカになって来てない？」

「オレはドーナツと同価値だったのか……………」

エールに抱き抱えられているドーナツ大好きムエ、シイナの勝利時にはドーナツを食べられると思い、テンションを上げる。

そしてお互い賭ける物が決まったところで、バトルスピリッツが続行される。

「それじゃあ改めてメインステップ。緑の成長期スピリット、ワームモンを召喚」

ー【ワームモン】LV1(1)BP3000

現れたのは芋虫をこれでもかと可愛くしたスピリット、ワームモン。それを見たドレイクの反応は……………

(…………緑のスピリット……………って言うかなんだこの弱そうなスピリットは……………)

ワームモンの弱そうな姿に、又してもシイナに落胆していた。そんな中、シイナは

ワームモンの召喚時効果を発揮させて……………

「ワームモン召喚時効果。デツキから2枚オープンしてその中の対象となるカード1枚を手札に加える……………おつとラツキー、パイルドラモンを加えて残りはトラツシユに……………これでターンエンドだよ」

手札：5

場：【ワームモン】 L V 1

バースト：【無】

カードを手札に加えてそのターンをエンドとするシイナ。2体の強力な創界神を並べたドレイクのターンと比べてかなり消極的なターンだった。

次はそんなドレイクのターン。シイナをやはり自分が思っていた通りの弱者と認識したのだが、それでもバトルでは手を抜けないか、全力でターンを進めた。

「ターン03」ドレイク

「メインステップ。マジック、エクスキャベーションを使用。メイン効果により、トラツ

シユから地竜スピリットを3枚手札に戻す！」

1枚のマジックカードでトラッシュから3枚ものカードを回収してみせるドレイク。選り取り見取りとなったその手札の中からスピリットカードを1枚引き抜き、Bパッドへとそれを叩きつけた。

「続けてコイツ、恐龍同盟ステゴラールを召喚！……神託によりアヌビスとスサノヲにコアを1つずつ追加！」

1【恐龍同盟ステゴラール】LV1(1)BP2000

現れたのは四足歩行で背中にいくつもの刺を生やした恐竜のようなスピリット、ステゴラール。オマケのように創界神達にコアが追加されていく中、ドレイクはさらに仕掛ける。

「アタックステップ!!……ステゴラールでアタックする!……効果によりBPを3000

アップさせ1枚ドロ―！」

―【恐龍同盟ステゴラール】BP2000??5000

先手を取らんとステゴラールに指示を送るドレイク。その効果でカードを新たに加える。

そして「さらに！」と告げるたかと思えば創界神スサノヲが腰に備え付けられた刀を構えていて……

「フラッシュユ、スサノヲの【神託】の効果を発揮！……コア3個をボイドに送る事で合体を無視したコスト6以下のスピリット1体を破壊！」

「あらら」

「消し飛べワームモン！」

ドレイクの背後から放たれるスサノヲの飛ぶ斬撃。赤と青のエネルギーの混ざったその強烈な一撃は一瞬にしてワームモンを斬り捨てた。

これでいいなのブロッカーは0。ステゴラールのアタックは是が非でも受けなばな

らなくて……………

「アタックは継続中！」

「ライフで受けるよ……………ッ」

〈ライフ5??4〉シイナ

ステゴラールの渾身の体当たりがシイナのライフに炸裂。先制点はドレイクが力を見せつけながらもぎ取って見せた。

「ターンエンド……………歯応えが無い。無さ過ぎる……………やはり貴様は単なる雑魚だったようだな」

手札：6

場：【恐龍同盟ステゴラール】LV1

【創界神アヌビス】LV1

【創界神スサノヲ】LV1

バースト：【無】

「何を〜！…そこまで言うんだったら少しだけ本気出しちゃうぞ〜」

コミカルな表情で怒るシイナ。とてもでは無いが本気でドレイクに対して怒りを露わにしているようには見えない。

「ターン04」シイナ

「メインステップ。まずはブイモンを召喚しようか」

1 「ブイモン」 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

小さな青い竜、ブイモンがシイナの場に姿を見せる。見た目は静寂な印象を与えるが、強力な召喚時効果を有していて……………

「ブイモンの召喚時効果。デッキからカードを2枚オープン、その中の成熟期、完全体スピリット1枚を手札に加える……………よし、私は成熟期スピリットのステイングモンを加

えよう」

「ブイモンのカード効果でまた1枚手札を増やすシナ。しかし、これだけでは終わらなくて……………」

「ブイモンの追加効果。その後、手札にある緑の成熟期スピリット1枚を2コスト支払って召喚できる……………よって私はさっき加えたこのカード、ステイングモンを召喚！
…召喚アタック時効果でコアを1つ追加」

1 「ステイングモン」 L V 1 (1??2) B P 5 0 0 0

瞬く間に現れたのは緑色のスマートな昆虫戦士ステイングモン。その召喚時効果でさり気なくボイドからコアが1つ追加され、上に置かれるコアが2個となる。

「これで準備はオツケーだ。アタックステップ、ステイングモンでアタック！…召喚アタック時効果でまた1つコアを追加してL V 2にアップ！」

1 【ステイングモン】(2??3) LV1??2

構え、走り出すステイングモン。LVが上がったため、シイナはステイングモンの更なるアタック時効果を発揮させて……………

「ステイングモンのもう一つのアタック時効果【超進化・緑】を發揮、ステイングモン自身を手札に戻す事で進化……………来い、パイルドラモン！」

「！」

1 【パイルドラモン】 LV2 (3) BP10000

ステイングモンが緑の輝きを放ち、その間に姿形を大きく変化させていく。最後にその輝きを吹き飛ばしながら現れたのは竜の母体に甲虫の甲殻を得た至高の竜戦士。パイルドラモン。

「……………す、すげえ……………これがシイナのデジタルスピリット……………！」

「こんなんで凄いとか言ったらアンタいつまで経っても頂点王なんてなれないわよ。」

シイナ様のデッキにはまだまだ比べ物にならないくらい強力なスピリットが入ってるんだから」

「おお……いつかそいつらを全部蹴散らして必ず頂点王になってやる！」

パイルドラモンを強力なスピリットであると感じ取ったアスラは喜びの声が漏れる。シンプルに憧れの存在であるシイナのバトルがこの目で見られて嬉しいのだろう。

そしてそんな中、シイナは進化したてのパイルドラモンでドレイクを攻撃して
……………

「パイルドラモン召喚時効果。コスト7以下のスピリット1体を破壊する」

「！」

「対象は当然ステゴラールだ。いけパイルドラモン……デスペラードブラスター!!」

腰に備え付けられた機関銃をドレイクのステゴラールに向けて連射するパイルドラモン。弾丸を避けられるわけもなく、ステゴラールは被弾し、爆発四散してしまう。

「そして、パイルドラモンでアタック。効果でコアを2つ増やし、ターンに一度回復す

る」

ー【パイルドラモン】(3??5) LV2??3 (疲労??回復)

今度はドレイク自身に攻撃を仕掛けるパイルドラモン。効果でコアを増やしつつ回復し、このターンの二度目のアタックを可能にした。

ブロッカーのいないドレイクはこの攻撃をライフで受けるしか他なくて……

「ライフだ………ッ」

へライフ5??4◇ドレイク

甲殻を纏っているパイルドラモンの右拳がドレイクのライフ1つを玉砕する。そしてパイルドラモンは「まだ終わらない」と言わんばかりの勢いで今度は左拳を構えると………

「パイルドラモンで再アタック……効果でコア2つを増やす!」

「それもライフだ!……ッ」

ー【パイルドラモン】(5??7)

へライフ4??3へドレイク

飛んで来た左拳の一撃が続けざまにライフ1つを粉碎。オマケにライフの差も逆転して見せた。

「取り敢えずこれでターンエンド。どうよう…私結構やるだろ?」

手札：5

場：【パイルドラモン】LV3

【ブイモン】LV1

バースト：【無】

コアブーストを行いつつ、ドレイクのライフを破壊した頂点王シイナ。前のターンとは違い、普通に強めのターンであったと言える。

しかし、それを受けたドレイクの表情はどこか余裕が見られ…………

「本気で……………こんなモノか。失望したぞ」

「？」

「興奮めだオレンジの女。お前はこのターンで俺が倒す」

パイルドラモン程度ではまだドレイクの腹に収まりきれないようである。

彼のターンが幕を開けるが、ラストターンを宣言しているため、このターン、より強い攻撃が来る事はシイナはもちろんの事こと、周囲のアスラ達も理解して…………

「ターン05」ドレイク

「メインステツプ……………2体目の恐龍同盟ステゴラールを召喚。アヌビスとスサノヲに神託」

1 【恐龍同盟ステゴラール】LV2(3)BP3000

前のターン、パイルドラモンに破壊されたステゴラール。その2体目がドレイクの場合に出現する。創界神であるアヌビスとスサノヲにコアが追加されていく中、彼はさらにターンを進めて……………

「バーストを伏せてアタックステップ!!……………ステゴラールで攻撃する。効果でBPを上げつつ1枚ドロロー」

攻撃の指示を煽られるステゴラール。しかしシイナのライフへと向かって走る事はせずその場で待機。その理由はドレイクの手札とステゴラールの更なる効果にあつて……………

「そしてこのフラッシュタイムニングでステゴラールを対象に【煌臨】を發揮!……………この瞬間、ステゴラールの更なる効果により、ソウルコアを支払う代わりに手札1枚をコストとする!」

「ええ!……………ソウルコアを支払わずに煌臨!……………なんて羨ましい効果なんだアアア!!」
「一々うっさいわねアンタは!!……………黙って見れないわけ!」

ステゴラールは自身に煌臨される際、ソウルコアをトラッシュに置く代わりに手札1枚をコストとできる。故に、ソウルコアは必要では無いのだ。

ソウルコアが使えないため、ソウルコアを使用して効果を発揮する【煌臨】に憧れがあるアスラは、羨ましそうにそう言葉を落とす。そんな彼の事情など知った事ではないと言わんばかりにドレイクは己のバトルを続けて……

「ステゴラールに煌臨……現れる、恐龍同盟アクロカントレックス!!」

ー【恐龍同盟アクロカントレックス】LV2(3)BP10000

赤き輝きに包まれたステゴラール。その中で新たな姿へと昇華、硬質な鎧のような皮膚をその身に纏った獰猛な肉食恐竜、アクロカントレックスとなって再び場へと顕現した。

「おー……強そうだね」

「貴様の余裕は間もなく消える……アクロカントレックスの煌臨時効果……相手の場のBP10000以上のスピリット1体を破壊！」

「!」

「パイルドラモンを噛み砕け!」

登場したてのアクロカントレックスの口内から放たれる豪炎。それがパイルドラモンを飲み込み、焼却して見せる。

「さらにフラッシュ、アヌビスの【神技】……BP3000以下のスピリット2体を破壊
!……今度は貴様だブイモン!!」

「あれま」

1 【創界神アヌビス】(4??1) LV2??1

創界神であるアヌビスが懐に納めている剣を抜刀。それに伴う衝撃波がシイナのブイモンを斬り裂き、爆散させた。

そして、ドレイクは爆発による爆煙を見届ける中、「これで終わりだと思ふなよ」と、まだまだ自分の効果の発揮が続くと思わせるような発言して……………

「アクロカントレックスのもう一つの効果!…手札1枚をアクロカントレックスの煌臨元に追加する事で、もう一度煌臨時効果を発揮させる!」

「!」

「俺は3枚目のステゴラールを煌臨元に追加し、煌臨時効果を発揮!…BP10000以上のスピリット1体を破壊する!」

煌臨元カードが追加され、今一度発揮されるアクロカントレックスの効果。しかし、散々破壊され。シイナのスピリットは今や0。アクロカントレックスの効果は不発に終わる……………

はずだった……………

「なんでわざわざ手札を減らして効果を無駄に使ったの!？」

『いや、エール様。アレがあああの男の戦い方です……………気をつけてくださいシイナ様!!』

「オツケー!」

「いや軽いな!？」

唯一、ドレイクの戦い方を知っているライト。シイナを案じるように声援を送る。危

険な空気がピリピリとする中でも能天気さは変わらないシイナを他所に、ドレイクは更なる手札を切って……………

「これで仕上げだ……………フラッシュタイミング……………【煌臨】発揮……………対象はアクロカントレックス！」

「！」

「敵を砕け……………壊せ!!……………ぶつ潰せ!!……………本能のままに蹂躪し尽くせツ!!……………暴双恐龍スーパードライラノスツ！」

煌臨宣言と共にアクロカントレックスを包み込む炎、それはその身をさらに巨大で強大な姿へと変化させると、炎を振り払って上下に二つの頭を有する巨大な地竜、スーパードライラノスが地上へと姿を見せる。

ー【暴双恐龍スーパードライラノス】LV2(3)BP10000

「で……………デツケエ……………これがアイツのエースカードか!？」

「スーパードライラノスの効果。地竜スピリットに常時BPプラス10000……………当然、

「自身も対象内だ」

「!」

ー【暴双恐龍スーパーデイルノス】BP10000??20000

登場した途端に空気が張り裂けるような咆哮を上げ、BPを急上昇させるスーパーデイルノス。アスラ達はその咆哮により両手で両耳を塞ぐ中、シイナはただ一人、笑顔を浮かべていて……………

「成る程。ちゃんとした勝ち筋が考えられている良いデツキだな……………どうやら私が思っていた以上に君は強いらしい」

「今更気が付いても遅い!!……………煌臨スピリットは煌臨元となったスピリットの全ての情報を引き継ぐ……………アタック中のアクロカントレックスに煌臨した事により、スーパーデイルノスもまたアタック中だ!」

「ライフで受ける!……………ッ」

へライフ4?!3シイナ

シイナ目掛けて走り出すスーパーデイラノス。その極太の両腕を彼女のライフに打ち付け、それを一つ粉碎する。

この瞬間。ドレイクは勝利を確信。その理由は当然、スーパーデイラノスの効果にあつて……

「スーパーデイラノスのアタック時効果……バトル終了時、このスピリットの煌臨元カード一枚につき、敵ライフ一つを破壊する！」

ー!!

「へく……この時のために煌臨元カードを無駄に溜め込んでいたのか」

周囲が驚愕の余り言葉が出ない中、シイナは感心するようにドレイクを褒める。

そう。ドレイクはこのスーパーデイラノスの効果でバトルの最後を飾るべく、アクロカントレックスの効果をおざと空振りにしてまで使用したのだ。

「煌臨元カードの合計は3枚!!……よって貴様の残った3つのライフを全て破壊する!!
……これで終わりだ、失せろ弱者ツツー!!」

「!」

極太の両腕でシイナのライフバリアを掴み、二頭の口内より獄炎の炎を放とうとする
スーパードायラノス。これを受ければシイナの負けであると誰もが考える中……

頂点王シイナは1枚の手札を切った。

「相手の効果によってライフが減る時、手札からリアクティブバリアの効果を発揮」

「なに?」

「これを破棄する事で、ダメージを1に絞る……随分と涼しい炎だな」

〈ライフ3??2〉シイナ

咄嗟に切られたマジックカードにより、シイナのライフバリアの目の前にさらなるバ
リアが出現。それがクツションとなり、シイナのライフ減少数は1にまで抑えられた。

「……………ターンエンドだ。偶然にも使える防御カードを手札に持っていたか……………だが、たつたの1ターン延命したに過ぎん。次のターンで今度こそ終わらせてやる」

手札：2

場：【暴双恐龍スーパーデイラノス】LV2

【創界神アヌビス】LV1(2)

【創界神スサノヲ】LV1(3)

バースト：【有】

このターンでの勝利は逃してしまったものの、圧倒的優勢に変わりはない、ドレイクは余裕のある表情を浮かべながらターンをエンドとする……………

だが……………

「ホント、良いデツキ良いカードバトラーだよ君は。赤のカラーリーダーに空きがあったらスカウトしたいくらいだ」

「？」

『『偶然にも使える防御カードを手札に持っていた』……………か。丁度身体が温まって来た頃だ。じゃあ試して見る？…この私のドロー力が偶然かどうか』

「ッー?!?!」

「この私の本気、アンタは何ターン耐えられるか、楽しみではないよ」

空気が変わった。重たくなった。

この目の前のチンチクリンな女が確かに変えた。ドレイクだけでなく、周囲のアスラ達もそう感じていく中、頂点王シイナが遂にドレイクへと牙を向ける……………

「ターン06」シイナ

「メインステップ……………先ずは【超進化】の効果で手札に戻っていたステイングモンを再召喚。効果でコアブースト」

ー【ステイングモン】LV3(5??6)BP10000

「くっ……………ハツタリかましてんじやねえぞ……………相手の召喚時発揮後によりバーストカード、双翼乱舞を発動……………バースト効果によりデッキから2枚ドロー、さらにコストを支払い、もう2枚ドローする!」

再び緑のスマートな昆虫戦士ステイングモンが姿を見せるが、その召喚時効果に反応するようにドレイクが汎用性の高いドローマジック双翼乱舞で手札を一気に回復。

だが、頂点王シイナはそれを気に掛けず、己のターンを全力で進めて行く……………

「ハツタリかどうかは自分の目で確かめるんだな。デジタルブレイヴ、ズバモンを召喚し、ステイングモンに直接合体！」

ー【ステイングモン+ズバモン】LV3(6)BP13000

黄金の鎧を見に纏うデジタルブレイヴ、ズバモンが呼び出される。それはステイングモンと一体となり、彼に黄金の鎧を着せた。

しかし、まだこの程度で終わらせる気はないか。頂点王シイナはさらに手札からカードを引き抜いて……………

「そして【煌臨】を発揮、対象はズバモンと合体したステイングモン」

「！」

「来い、赤き究極体……デュークモン!!」

ー【デュークモン+ズバモン】LV3（6）BP21000

黄金の鎧を装備したステイキングモンが赤き光に身を包んで行く。その中で急激な変化を遂げる。

やがてその光を解き放ちながら出現したのは赤いマントを翻す白い鎧の聖騎士。デュークモンだ。ズバモンと合体しているためか、右腕の槍はビーム状になっており、その姿はより刺々しい印象を与えさせる。

「……………なんだこのスピリットは……………今までコイツは猫を被っていたとでも言うのか??……………ボスの言っていた事は本当だったと言うのか!?!……………いや信じん。そのスピリットごと俺が貴様をぶっ潰す!」

「フツ……………やれるモノならやってみなよ。久し振りに潰し甲斐のある相手と出会えたんだ。嬉しい限りだね」

徐々に頂点王たる頭角を表して行くシイナ。時やターンが進むにつれ、その鋭さを増

して行く。

だが、ドレイクも引けない。己が更なる強さの高みへと向かうためにも、全力で目の前の化け物を始末する姿勢を見せる。

そんな中、頂点王シイナは圧倒的な空気に言葉が出てこないアスラの方へと首を向け
て……………

「アスラ。今からオマエが見るのは、オマエが倒すべき相手のほんの一部の力に過ぎない……………よく見ておけ」

「ッ……………おう……………!!」

頂点王シイナは息子であるアスラにそこまで言い切ると、アタックステップを宣言し、遂に攻撃に転ずる。

「バーストをセットしてアタックステップだ……………行けデュークモン!!……………アタック時効果でシンボル2つ以下のスピリット1体を破壊する!」

「なに!?!」

「残念だったね。いくらBPが高かろうが関係無い……………消え去りなスーパーデイラノス

「！」

ビーム状となった槍を天高く伸ばし、スーパードイラノスへと振り下ろすデュークモン。スーパードイラノスは極太の両腕で咄嗟に守りを固めるが、所詮は無駄な足掻き、デュークモンの槍はスーパードイラノスを真つ二つに切断、スーパードイラノスは堪らず爆散してしまう。

「アタックは継続中。ダブルシンボルのアタックだ」

「……………だがシンボルはたったの2つ……………この程度のアタックでは俺の3つのライフは破壊し尽くせない！」

「フツ……………その考えは甘い。フラツシユ、デュークモンの更なる効果発揮。トラツシユにある滅龍スピリット1枚を手札に戻す事で、デュークモンはターンに一度回復する」
「なッー!?！」

「トラツシユからギルモンを手札に戻し、起き上がれデュークモン!!」

「【デュークモン+ズバモン】（疲労??回復）」

回復状態となるデュークモン。これでダブルシンボルで2回のアタックが可能となった。

この二度のアタックを受けて仕舞えば敗北する事を悟ったドレイクは焦ったように「まだだ!!」と言い放つと、手札から1枚のマジックカードを放つ。

「フラッシュタイミング、マジック……双光気弾!!」

「!」

「効果により、合体しているブレイヴ1つを破壊……ズバモンを破壊し、そのシンボルを2から1に下げる!」

1【デュークモン】LV3(6)BP18000

彼の背後から飛び交う2つの気弾。デュークモンに纏わり付き、その中に眠るズバモンを体内から引き摺り出すと、それを爆散させる。

ズバモンが消え去った事により、デュークモンの姿は元に戻り、一度に破壊できるライフ数も1となった。

「そのアタックはライフで受ける!!……………ぐおっ!？」

〈ライフ3??2〉ドレイク

ズバモンを失つても尚ドレイクのライフへと進み、そのライフを鋼鉄の素材に戻った右腕の槍で貫くデュークモン。ドレイクのライフは残り2つとなる。

「ターンエンド……………よく凄いだね。次のターンもそんな感じで頑張ってくれよ」

手札：2

場：【デュークモン】LV3

バースト：【有】

「ふざけるなッ!!……………上から目線も大概にしやがれ!!……………言っただろう、次のターンで確実に貴様をぶっ潰す!!」

「フフ……………私の見立てだと、君はもう1枚くらい奥の手があるんだろう?……………出し惜しみせずに使つて来なよ」

明らかにドレイクを嘗め切ったシイナの態度に激昂するドレイク。彼女をつぶすべく、既に読まれているその「奥の手」を使用する……………

「ターン07」ドレイク

「メインステップ!!……………来い恐竜人ティラノイド、暴双龍デイルノス!!」

┆ 【恐竜人ティラノイドへR】 LV2 (3) BP5000

┆ 【暴双龍デイルノスへR】 LV1 (1) BP3000

ドレイクの場に現れたのは人のような体格をした恐竜、ティラノイドと、スーパーデイルノスを少しだけサイズダウンさせたような外観を持つデイルノス。

「ティラノイドは自分の場のスピリットが2体以下の間最高LVとなり、デイルノスは全ての地竜スピリットのBPを5000上げる!」

┆ 【恐竜人ティラノイドへR】 LV2??3 BP5000??8000??13000

「【暴双龍テイラノス（R）】BP3000??8000

次々とパワーアップを果たして行く2体の地竜。そして遂に攻撃へと転ずるのか、ドレイクはその鋭い眼光を未だ余裕を崩さない頂点王シイナへと向けて……………

「アタックステップ!!……………恐竜人テイラノイドでアタック!!」

主人であるドレイクの指示を聞くなり、咆哮を上げるテイラノイド。ここでドレイクはさらに「奥の手」であるカードを手札から切つて……………

「フラッシュ【煌臨】を發揮!!…対象は恐竜人テイラノイド!…この瞬間、テイラノイドの効果で自身のコストは5となる」

「!」

「王も神もあらゆる全てを超えて全てを統べる覇者となれ!!…恐竜覇者ダイノブライザーをテイラノイドに煌臨ツ!!」

テイラノイドに集う巨大な炎の火柱、幾度も生まれ変わって行くその姿も遂に極地へ

と至り、赤い眼光を輝かせながら、火柱より姿を見せるのはまさしく絶対的王者と成り得るスピリット……その名をダイノブライザー。

赤き装甲、両刃の槍を携え、今この地上へと脚を着けた。

―【恐龍覇者ダイノブライザー】LV2(3)BP21000

「成る程。これが奥の手って訳ね……その力、たつぷりと堪能させてもらおうか」

「ハナツからそのつもりだ!!…俺はさらにここでマジック、ジユラシックスピアを使用

!!」

「!」

「手札にある地竜スピリット2枚を場の地竜スピリットの煌臨元に追加する!!……俺は2、3枚目の暴双龍テイラノスのカードを、ダイノブライザーの煌臨元に追加!!」

限界以上の全力を見せるドレイク。その証拠に残った手札のカード全てが奥の手であるダイノブライザーへと追加された。

これでダイノブライザーの煌臨元カードの合計は3枚。これにより発揮できる効果がダイノブライザーにはあつて……

「これで下準備は終わった!!……フラッシュ、ダイノブライザーのアタック時効果!!……このスピリットの煌臨元カード3枚を破棄する事で、このターンの終了後、もう一度俺のターンを行う!!」

「おお……強いね」

「テンドウさんのカブトと同じ、エクストラターン効果!？」

ドレイクのダイノブライザーが発揮した効果は、三王テンドウ・ヒロミの所持するライダースピリット、カブトと同等かそれ以上のエクストラターン効果。

その効果が如何に強力なのかは最早言うまでもなくて……

「これで、例え貴様が如何なる防御マジックを持っていようが、トドメをさせる!!……奴を叩き潰せ、ダイノブライザー!!」

「仕方ない、そのアタックはライフで受ける……ッ」

へライフ2?!1へシイナ

ダイノブライザーが咆哮を上げながらシイナのライフへと突き進み、その両刃の槍でライフ一つを斬り裂く。

遂に限界であるライフ1まで追い込まれたシイナ。オマケに次はエクストラターン、もう一度ドレイクの攻撃がやって来る。絶体絶命の崖っ淵の状況に間違いはなかった………

しかし、そんな彼女の表情からは未だに余裕が絶えなくて………

「ダイノブライザーか……強いスピリットだ。でも、エクストラターンを決めるならもうちょっと先を見通せるようにならないとね……私の知ってるエクストラターン使いは後二三手先は軽く読んで来るよ」

「何?」

「フフ……でもパイルドラモンとデュークモンだけじゃなくてコイツまで呼び出させるくらいだったら上々の強さだね……バースト発動!!」

「!?!」

シイナのライフの減少に反応し、伏せられていたバーストカードが発動、勢い良く反転して見せる………

そしてその聞いたこともないような恐ろしい効果がこの場で発揮されて……………

「その効果により、相手の創界神のコア1つにつき、相手のスピリットのコアを1つトラッシュに置く」

「なッ!？」

「フフ……理解できたかい? ……君の場にいる2体の創界神、アヌビスとスサノヲ……2体の上に置かれているコアの合計は足し合わせて11………よって君の場のスピリットから11個のコアを取り除く!!」

1 【恐龍覇者ダイノブライザー】(3??0) 消滅

1 【暴双龍ディラノス(R)】(1??0) 消滅

突如とひて赤い稲妻を纏い吹き荒れる黒い竜巻。それがダイノブライザーとディラノスを飲み込んでいき、その体内からコアを弾き飛ばし、消滅させる。

これでドレイクの場のスピリットは全て消滅。彼のエクストラターンがやって来たとしても攻めるスピリットも手札も殆ど無い事になる。

そして、頂点王シイナはダイノブライザー達を消滅させたバーストカードを手に取り

り、この効果発揮後に使える更なる効果を発揮させて……

「ば、馬鹿な……俺のダイノブライザーが……」

「その後……効果を使ったこのスピリットを召喚できる……」

「!」

「聞け!!魔王の轟く怒号を……そして慄き戦慄せよ!!……来い、ロード・バロン!!」

ー【ロード・バロン】LV3（4）BP16000

赤黒い稲妻が落雷し、場へと迸る。その中心より立ち上がり、姿を見せたのは紛う事無き魔王たる姿をしたスピリット……

その名もロード・バロン。登場するなり、禍々しいオーラを解き放ち、敵であるドレイクにこれまでとは比べ物にならない程の大きなプレッシャーを与える。

「こ、コイツは……なんだ!」

「これはデュークモンに次ぐ私のエースカードさ。最も、大抵の場合はデュークモンだけで勝てるから召喚できる相手は限られるんだけどね」

「シイナ様のもう一つのエースカード……デュークモンと比べて、余りにも禍々し過ぎる……」

「……………スゲエ」

エール達がシイナのロード・バロンに驚く中、アスラはこのバトルに釘付けになった。魅了されていた。

これが自分の超えるべき存在なのであると改めて痛感していた……………

「さあドレイク。君のエクストラターンでバトルを再開しようじゃないか」

「ツ……………俺はターンを終了し、ダイノブライザーの【連覇】の効果でもう一度俺のターンを行う……………」

手札：0

場：【創界神アヌビス】LV2（5）

【創界神スサノヲ】LV2（6）

バースト：【無】

聞いた当初は強力に思えたエクストラターンも、ロード・バロンの存在のせいで霞ん

で見えてしまう。

それでもまだ勝つのを諦めきれないドレイクは全力でダイノブライザーが残していったエクストラターンを実行して行くが……………

「ターン08」ドレイク

「メインステップ……………俺は暴双龍テイラノスをLV3で召喚……………ターンエンド」

手札：0

場：【暴双龍テイラノス〈R〉】LV3

【創界神アヌビス】LV2（6）

【創界神スサノヲ】LV2（7）

バースト：【無】

たった1枚の手札でデュークモンとロード・バロンが並び立つ状況を打破できるわけもなく、ドレイクは2体目となる暴双龍テイラノスを召喚したのみでそのエクストラターンを終えてしまう……………

(強い……強過ぎる……デツキの構築力、引きの強さ、プレイング、カードのパワー……そして前のターンから次々と溢れ出て来るバトラーとしての気迫……カードバトラーとして必要不可欠なスペック全てが規格外だ……しかも今ならわかる……コイツはまだ真の本気を出しちやいねえ……遊ばれてる……帝騎であるこの俺が……!!)

ボスであるルディアの言っていた事をここに来てようやく骨の髄まで理解したドレイク。

今の自分がどう足掻いたところで、この目の前に存在する化物には敵わないと悟ってしまう……

「私のターンだね」

「！」

そしてそんな化物のターンが再び幕を開ける……

「ターン09」 シイナ

「メインステップ……は、もう要らないか。アタックステップ……ロード・バロンでアタック……その効果で相手の場の最もBPは高いスピリット1体を破壊！」

「！」

「君の場のスピリットは1体だけ……消し飛ばす！」

武器である巨大な魔剣を振り飛ばす斬撃を発生させるロード・バロン。それをテイラノスが避けられる訳もなく、斬り裂かれ、爆散されてしまう。

「アタックは継続中！」

「ら、ライフで受ける……ぐおっ！」

へライフ2?! 1ドレイク

再び魔剣を振り、今度はドレイクのライフを斬り裂くロード・バロン。そのライフ数をとうとう1まで追い詰める……

そしてこれで終わりだ。シイナはBパッド上に存在するデュークモンのカードに手を掛けると、それを横向きに捻る。

「ラストアタック……行けデュークモン!!」

「クソ……クソが……ライフで受けてやる!!………ッ」

へライフ1??0へドレイク

デュークモンによるトドメのアタック。右腕に備え付けられた聖なる槍より放たれる強烈な刺突が、彼の最後のライフを奪い去る………

これにより、勝者はシイナだ。終盤から頭角を表していき、最終的にはドレイクに完勝して見せた。

「よし私の勝ち………これでドーナツを奢って貰えるのが確定したね」

「あ………本気出してもメインはやっぱりそっちだったのね………」

先程までドレイクを戦慄させてしまう程の気迫はどこへ行ったのやら、バトルが終わるなりけろつと元に戻るシイナ。

その後Bパッドを仕舞うと、片膝をつくドレイクの方へと歩み寄り………

「まあ、私にロード・バロンを出させる程だし、なかなか筋は良いと思うよ。十分やって行ける強さはあるんじゃないかな？」

「黙れオレンジ女……………俺に七罪竜が……………バジユラがあれば貴様など……………」

烈我のバジユラを狙うドレイク。余程悔しかったのか、負け惜しみをここで口にしてしまう。

「……………七罪竜ね……………一応、頂点王としてこれだけは言わせてもらおうよ……………カードバトルの強さはカードの強さや、ソウルコアの有無で決められる程単純じゃない」

「！」

「バトルは最後まで諦めない心でやるモノだ。君はとつくの昔にその事を理解してるんじゃないかな？」

「ツ……………ほざけツ!!……………どちらにせよ、次やる時は必ず俺が勝つ!!…首を洗って待っていやがれ!!」

苛立ちながら小さな機械のスイッチを押し、空間に穴を開けると、ドレイクはそこに

飛び込んで何処かへと去っていった……………

シイナはそんな彼の背中をどこか寂しそうに眺めていて……………

『シイナ様アアアー!!……………凄かったでございます!……………貴女のような可憐なお方が最強のカードバトルだとお伺いした時は正直耳を疑いましたが、このライト、ますますシイナ様に惚れてしまいました!』

「はっは、素直だねライト君は!」

ドレイクが姿を消すなり飛び出して来たのは七罪竜のライト。その次にムエを抱えたエール、アスラが寄って来て……………

「結局ドーナツ奢って貰えず終いでしたね」

「あ……………うっかり」

ドレイクから帰る前にお金くらいもらっとけば良かったなとシイナが考えると、アスラと目が合ってしまう。

その時のアスラの表情は予想以上に暗かった。いずれ戦うかも知れない最大の壁を

目の当たりにしたのだ。無理も無いが……………

「ようアスラ。どうだった私のバトルスピリッツは？……………実力が桁違い過ぎてビビってるのか？」

「……………へへ、まさか……………その逆さ。武者震いが止まんねえよ……………こんなにゾクゾクしたのは初めてだ……………オレはいつか絶対にアンタに勝つぜ、シイナ!!」

「ふふ……………来なよ。さっきのドレイク以上のバトルを期待してるよ」

シイナのバトルを見て、彼女とのバトルが楽しみで仕方なくなっていたアスラ。早く強くなりたいと願いながらも、彼女に向かって笑いながらそう告げた……………

「……………にしても、あのドレイクってヤツ……………ちよつと心配だな」

「え？……………なんでよ、アイツ敵じゃない」

ふとアスラがその言葉を落とすと、エールがすぐさま言い返した。

その後、アスラは淡々とその理由を述べて……………

「アイツ、なんかトウエンティに似てるんだ。必死さつて言うか、余裕が無い所がと言うか……………」

「まあドレイクについては何とかしてくれるさ。異世界人の私達が手を出していい話じゃ無い」

シナがアスラにそう言い返して来た。

ドレイクは別の世界の烈我達の敵であるため、自分が関わって来るのは違うとは思っているものの、どうしてもアスラは彼の行末が心配であつて……………

舞台は移り変わり、ここはアスラ達の住む世界、その辺境にある崩れ去った瓦礫の山々。

ここはライダーハンターズの隠れ家である。団員である青年トウエンティと見た目だけは究極の美女イバラの2人はそこで何も言わずに佇んで……………

「ねえさトウエンティ〜…なんかアンタ最近全然ライダースピリット使いを奪って来ないんじゃない？」

「……………」

「前は五里霧中ー!! って感じですつとライダースピリット使いを追いかけ回してたのにさ〜…どう言う風の吹き回しな訳よ？」

「それを言うなら無我夢中だ…別に追いかけて回さなくなった訳じゃない。オマエこそ最近は全然集まっていないように見えるが？」

「じよ、冗談はカンニングね!!…面倒がくさいだけよ」

オロチがアスラに負け、ライダーハンターズを辞めて以降、2人だけでここにいる時間が増えた。

主任であるウィルがここ最近姿を見せていないのもそうだが、何より2人はあの日以来、ライダースピリットを収穫しに行く時間が格段に短くなっていたのだ。

その理由は、彼らでもわからない。

天然が過ぎるイバラは兎も角、トウエンティの場合、本当は気がついているのかもしれないが、それを認めたくはないのか、敢えてその感情を押し殺しているようにも見える。

「あ……じゃあさ暇ならオロチが今どうしてるか当てっこしない？」

「なんでそうなる」

「なんでって、私達3人友達でしょ？」

「そんな訳あるか。オマエらはオレが蹴落とすべき競争相手だ。最も、もうオロチはいないがな」

「えー……まあいいや。私の先攻ね、オロチは力持ちだったから、孤児院で正体を隠しながら頑張ってると思うんだよね」

「……………」

イバラとの時間が増えつつあったトウエンティだが、未だに彼女との会話が成り立たない。

意味がわからなさ過ぎる。

もうお手上げだと思ったトウエンティ、ここから一旦出ようと思った直後。耳覚えのある足音が奥の方からこだまして来て……………

「やあ。久し振りだねトウエンティ、イバラ」

「ウイル……」

「あつ!!…ウイルじゃんお久く!!…元気だった?…相変わらずイカした帽子とお髭だね」

「ふふ、君も相変わらずだね」

現れたのはライダーハンターズの主任であるウイル。2人と会うのはオロチがライダーハンターズを抜けて以降、初めてだった。

「ウイル……今までどこに行ってた。オロチはライダーハンターズを辞めたぞ」

「ああやっぱりね。そうなると思っていたよ」

「あの時、オロチのデッキから王蛇が消えていた……オマエ、今までオレ達に黙ってどこに行っていた?」

口振りからして、オロチのライダースピリット、王蛇を盗んだのはウイルであると推測しているトウエンティ。

実際その根拠の無い推理は的中している。が、ウイルは慌てるそぶりを全く見せずに

……

「まさか私を疑っているんですかね？……ふふ、まあ仕方ないですけどね……一応、用事があったので、しばらくそちらにお伺いしておりました」

「用事………何のだ」

「まあまあ良いじゃん良いじゃん!!…よしとしましょう!」

拳を固め、今にもウイルに殴りかかって行きそうなトウエンティをイバラが咄嗟に止める。ウイルはそんな光景を目に映しながらも、不敵な笑みを浮かべると……

「2人とも最近仕事してないみたいですね」

「ギクリンチョ!!」

「ふふ……でも良い話がありますよ……強いカードも手に入れられて、あのゴミも始末できる千載一遇のチャンスだ」

「………アスラの事か」

ウイルの言う「ゴミ」とは、即ちスーミ村のアスラの事。どうやら何か情報を掴んでいるみたいだ。

「2人とも、異世界からやって来た罪狩猟団と言う愚か者共を覚えていますか？」

こうしてウィルはその「良い話」とやらをトウエンティとイバラに聞かせるのだった

.....

46 コア「熾烈なタッグバトル!…グランドジオウVS エルドラシユオン!」

「はい注目ー」

ー!?

ある日、アスラがカードショップにて、七罪竜の使い手である烈我達に修行をつけてもらっていた頃。

三王テンドウ・ヒロミがひと休み入れるかのように話題をふって来た。

「急にどうしたんすかテンドウさん」

「どうもこももねえ。小僧、オマエに関する事だ」

「オレに?」

アスラに聞かれるなりテンドウはその内容を淡々と説明していく。

「オマエが気になるって言ってた「黒い力」……つい昨日までオレは元の世界でそれぞれ々と調べ尽くして来たんだよ」

「!!」

「しばらく見ないと思ってたら……珍しく仕事してるじゃない、テンドウのクセに」「いやまあこう見えて気になった事は直ぐに調べる癖あるからなオレ」

エールの言う通り珍しく仕事してるテンドウ。余程アスラの事を気に入っている節が見受けられる。

「あ、ありがとうございますございますテンドウさん!!……それでその黒い力って何なんですか!？」

感謝するアスラ。テンドウはその本題へと入るかのようになり、一度咳き込むと……

「オウドウ都立の図書館にあった本によれば「黒」って言うのはここみたいな異世界、「黒の世界」って場所から来た、バトルスピリッツ第七の属性。これはオマエもあの髭帽

子紳士ヤロウから聞いているよな」

「おうっす」

ここで言うテンドウの「髭帽子紳士ヤロウ」とはライダーハンターズの主任、ウィルの事を指している。

「そんで、黒属性なんてカードが実際にあるわけではなく、黒はカードに寄生し、それを限界まで強化できる色らしい。オマエの龍騎も黒くなったが色そのモノは紫だったんだろ?」

「ー」

バトルスピリッツ第七の属性「黒」……………

その力はアストラを見ての通り実在するが、黒属性のカードそのモノは存在しない。龍騎から派生したリュウガを見れば分かり易いか、言わば「黒い龍騎」と評されるリュウガだが、そのカード属性は黒ではなく、紫だ。

「本の空想上で語られている事だから定かじゃねえが、黒の世界でライダースピリッツ

トに寄生できる程強力な力を持った連中は『ブラックフォース』と呼ばれていた」

「!!」

「どいつもこいつも身体の実態が無く、別の世界に現れるためには余程イレギュラーな事態が起きない限りは不可能らしい」

……………『ブラックフォース』

その名に耳覚えがあるアスラは思わず目を見開いた。

それもそのはず、何せ、以前自分の龍騎に取り憑いているであろう黒の力はそう名乗っていたのだから……………

「もちろん空想上の生き物とされているが、ブラックフォースを構成しているメンバーは4人。それぞれ名前はヘタマイト、シャーマン、オブシディアン、そしてオニキス」

「ツ……………そいつだ。オニキス!!……………そいつが龍騎の、いやオレの中にいるんだ!」

やはりその構成しているメンバーの中に自分の知っているオニキスはいた。そしてさらにテンドウは言葉を続けて……………

「でもって、黒の代償とやらの理屈もオレには何となく読めたぜ」

「!!」

「黒の力は進化とは違う。黒の力によって生まれたカードは全てコピーのようなモノ……オレの言ってる意味わかる?」

「いえ、全然わかりません!!」

実は少し前から話についていけなくなっているアスラ。何となく理解はしていたものの、理解していなかったらテンドウに殺されるかもしれないため、黙っていた。

「まあ要するにだ。オマエの言う黒い龍騎、リュウガつつてたつけ?…それはそのオニキスとか言う奴が龍騎の力をコピーして作り上げた偽物……別のライダースピリットって事だ……そして、ライダースピリットは1人につき1種類しか使えない」

「!!」

「頭の悪いオマエでも察したか。そうだ、ミラーワールドでの過酷な戦いの末、オマエは今、龍騎ではなく、そのリュウガに選ばれちまっている。だから龍騎は召喚できねえんだよ。でもってリュウガもバトルの終わりにはカードごと消える……こう言った事から結果的にライダースピリットを扱える力が無くなったかのように見せられていたっ

て訳。まっ飽くまでオレの推理……予想……感……みたいなもんだけど」

飽くまでテンドウの推理ではある。しかし、余りにも説得力があり過ぎる。

アスラは今龍騎ではなく、別のライダースピリットであるリュウガに選ばれている。確かにそれだったらアドベントカードがまだ使える事も説明できる。何せリュウガは龍騎のコピー。アドベントカードも当然多用するのだから。

「じゃ、じゃあテンドウ。アスラはもう二度と龍騎を召喚できなくて、そのリュウガだけしか召喚できないの!？」

「いや。そうとも決まった訳じゃねえ……少なくともオレは複数のライダースピリットを扱える奴を1人知ってる……オマエらも散々相手しただろ？」

ー!!

話について行けていない烈我達を他所に、アスラとエール、ロンのみが察する。確かに1人だけいた。複数のライダースピリットを扱えるチート級の力を持った人物が

……

「トウエンテイ……!」

「ああ。だからこそ、ライダースピリットの複数持ちは少なくとも不可能ではない事を言っておくぜ」

トウエンテイの持つライダースピリット「ジオウ」……

あのカードは何故か本来デッキに1種類しか入れられないライダースピリットの共存を可能にする。イレギュラーな存在なのは確かな事だが、テンドウの言う通り、確かに龍騎とリュウガ。2つの力を扱うのは不可能な話ではないかもしれない。

「……………うおおお!!」

「うっさー!…どうしたのよ急に!」

「いやなんかさ!…色々謎だったモノの理屈とか理由とかがわかるとテンションが上がっちゃって……オレはいつか絶対龍騎もリュウガも扱えるヤツになれるって思うと叫ばずにはいられねえよ!」

「……………そ。ま、まあ精々頑張る事ね」

新たな目標を掲げるアスラ。彼に対する想いに素直になれないエールは照れ臭そうにそう告げた。烈我達この世界も面々もその光景を温かい目で見守る。

「盛り上がってる所悪いが、オレとそこの頂点王は今日でここを立つぞ」

「え……………私聞いてない……………」

「ええ?!…2人とも帰っちゃうんですか?!」

「ああ。エレンの野郎が早く戻って事務作業をしろつてうつせえからな」

ここ1週間程はこちらの世界にいたテンドウとシイナ。本来、頂点王や三王が全うしなければならぬ業務は全てエレンがたったの1人でこなしていた。

最も、テンドウとシイナはギャンブルに逃げ出したり、何処かへ勝手に出かける事が多いため、そもそも最初からエレンがほとんど1人でやっていたのだが……………

「で。戻ってどうすんの?…エレンに頭下げて事務作業手伝うの?」

頂点王シイナがテンドウに聞いた。テンドウはライターでタバコに火をつけようとしながら答える。

「ああ?…事務作業?…んなモンやる訳ねえだろ。エレンにちよつと顔見せたらトンスラこかせてもらうぜ」

「……………戻る意味とは?……………まあ私も逃げるけど」

「お兄様が気の毒だわ……………」

エレンには戻った報告だけを行い、後は適当にギャンブルに行くと言げるテンドウ。エールは咄嗟に実兄が必死に頑張っている姿を頭に思い浮かび上がり、悲しくなる。

そしてテンドウはその後、小さくてすごい機械、異世界転送装置の予備をアスラに手渡して……………

「ほれ小僧。転送装置の予備だ。無くすんじゃないぞ。後、オマエらも後1日くらいで元の世界に帰って来い」

「ええ!?!…後1日!?!…なんでですかアアアア!?!」

「ああ?…小僧オマエ、この作者が主に技術的な面においてこれ以上人様のキャラ借りて小説なんて書けるわけねえだろ」

「ドユコトオオオアア!?!」

テンドウの口から言い放たれる突然の宣告。今からテンドウとシイナは元の世界へと帰還するが、アスラ、エール、ロンもまた明日には帰らなければならなくなった。急な別れの決まりに、烈我達も騒つく。

「そんな……折角仲良くなれたのにもうお別れかよ……」

「残念だが、まあお互い別世界の人間だしな。こればかりはしょうがない」

「エールちゃんとはもうちよつと親睦を深めたかったな」

「お前は黙ってる！」

「あつはは……」

セリフはそれぞれ烈我、光黄、ミナト、絵瑠、星七の順番。相変わらず女好きミナトを絵瑠が黙らせる。

「よし。そんじゃ帰るぞ頂点王」

「へーへー……じゃあねみんな……機会があつたらまた遊ぼう！」

そう告げながらカードショップから去っていく頂点王シイナと三王テンドウ。その後は元の世界へと帰って行く事だろう。もう会う機会はそう訪れないであろう烈我達5人は軽く手を振って彼らを見送った。

「つーかオレ達も後1日か。正直龍騎を召喚できるようになるまで残りたかったんだけどな」

「まあ、しょうがないわよ……異世界人の私達がずっとここに残るのもね」

まだ一緒にいたいのはアスラとエールとて同じ事。しかし、この世界に存在し続けるのもまた難しい話である。

そんな中、この世界に対して未練も全く無いロンがアスラに話しかける。

「アスラ。明日オレとバトルしないか?」

「!」

「散々修行した成果。このオレに見せつけてみる……強いヤツじゃないとオレはライバルとは認めない」

「へへ……またそれかよ。ユキカイ町で決戦した時もそんな事言ってたよな。ああいい

ゼロン！…明日の最後のバトルは烈我にでもらう予定だけど、その前にオマエをぶっ倒してやるぜ！」

「フツ……それはこっちのセリフだ。負けたからって泣いて叫くんじゃねえぞ」

「誰が泣いて叫くかアアアー!!…っーか勝つし、勝つてやるし!!」

久し振りにライバル同士、目線の間で火花を散らし合う2人。

そんな2人の好敵手関係を目の当たりにするなり、星七、ミナト、絵瑠は言葉を落として……………

「そう言えばあの2人ってライバル同士でしたね……お互いを高め会える存在ってなんか羨ましいです」

「確かに。しかもこの手の話にありがちな性格も真逆な設定だし」

「そればかりはミナトに同意かなー…ロンはイケメンでクール、天才だけど、反対にアスラはバカそうで熱血、秀才って感じだもんね」

「あれ絵瑠さん。ひよつとしてオレの事少しデイスってる？」

絵瑠に「バカそう」と言われて少しショックを受けるアスラ。絵瑠的にはアスラを褒

めてるつもりだったようだ。

「どちらにせよ、頑張れよアスラ!!…ロンにお前の今の實力を見せて、最後に俺と決着だ!」

「おう烈我、この1週間での特訓の成果。全部ぶつけてやるぜ!」

修行の中で烈我を超えるのが目標だったアスラ。彼と築き上げて来た熱い友情を確かに感じながらもその闘争心に火をつけていく。そしてそれはロンとて同じ事。

「何寝ぼけた事言ってやがる一点突破バカ1号、2号」

「誰が一点突破バカだアアア!!」

「フツ……明日のバトル、油断はしない。勝つのは当然、このオレロンだ」

ロンの中で烈我の蔑称は「一点突破バカ2号」である。

何はともあれ、別々の世界でそれぞれ絆を紡いで来たアスラ達、烈我達。その最後のバトルスピリッツが明日行われる……………

その日の夜。アスラが寝泊まりしていた天上家にて、アスラは烈我の姉であるるみかにお別れの挨拶をしていた。

「えええ!?…アスラ君もう帰っちゃうの!?…アスラ君が居なくなったらいったい誰が掃除洗濯家事育児するのよ!」

「凶々し過ぎるだろ。後育児はやらせてないだろ…つか誰の育児だよ」

「いや〜…本当もうお世話になりましたアアアー!!」

『カツ……テメエが居なくなると思うと精々するぜ』

アスラが居なくなる事を悲しく思うるみか。もちろん家事全般を任せられなくなつたからと言うのは冗談である。

「まあいつか…次に会う時には立派な……立派な……なんだっけ、超電動になつて来るのよ!」

「頂点王つするみかさん!!…ハイもちろん!…オレは絶対に頂点王になるアアアー!!」

いつもの事だが、改めて頂点王への夢を叫ぶアスラ。そんな中、今日のテンドウの話で引つかかっていた烈我は、その点をアスラに聞いて来て…………

「そう言えばオマエ。身体の中に変なのがあるんだっけ?…………黒くてヤバいの」
「ん?…………ああオニキスの事か」

「お前、そんなヤツが中において平気なのか?…俺だったらもう怖くて夜も眠れねえよ」
「そっか?…まあ死にかけるのは慣れっ子だしな」

「……………壮絶だな、お前の人生」

烈我が気に掛けていたのはオニキスの存在だった。確かに身体の中にそんな怪物がいたら恐怖を感じるのが一般的な考え方であろう。

しかし、アスラにこれと言った恐怖がないのを理解すると、安心したように烈我は笑顔を浮かべて…………

「明日までに最高のデッキ組みよ。ロンに勝った後は俺と決着だからな!」
「おう!!…何回も言うぜ、オレはオマエに絶対勝つ!!」

2人はそう言い合いながら今まで培って来た絆を示すかのように、己の右拳を合わせたのだった。

翌日。アスラ達と烈我達が最初に出会った河川敷にて、ライバル同士であるアスラとロンはBパッドとデツキを構え、視線を向け合いながら、今にもバトルを始めようとしていた。

「バカスラ……負けたら承知しないわよー!!」

「むくえく」??承知しないぞく

「わかってるよエール!!……このバトル、絶対勝つぜ!!」

「フツ……アスラ、オマエがこのオレに一度でも勝てた日があつたか?」

「へへっ……だつたら今日がオマエの敗北記念日だぜ」

烈我達やエール達の応援もあり、2人のやる気は既にマックスを超えていた。Bパッ

ドにデツキをセツトし、颯爽とバトルを開始する……………

が、その時だ。視線の外れた先、遙か後方よりそのバトルを止めんとする声が聞こえて来て……………

「そのバトル、待つてもらおう…………!!」

「ヤッホー…アスラ君にエールちゃん、おっひさ〜!!」

…………!!

「トウエンティに…………イバラ!?…………なんでオマエ達がこの世界にいるんだよ!」

そこにいたのはライダーハンターズのトウエンティとイバラ。なんの前触れもなく突然現れた彼らにアスラやエールは驚きを隠せない。

「…………あの時のライダースピリットを複数枚使える顔色の悪いヤツか」

「あらあら…まさかアレが噂のロン君!?…すつごくイケメンじゃない…しくよろ〜」

コラボダンジョン以来の再会であるロンとトウエンティ。イケメンであるため、初対面のイバラから猛アピールを受ける。

「エール。この人達は誰だ…知り合いなのか？」

『素敵な女性もいらつしやるではないですかアアア…私にも是非是非お教え下さいエール様アアア…!!』

「へへアレが噂の七罪竜?…嬉しい事言ってくれるのね…まあ当然だけど♡」

光黄がエールに聞いた。その横で彼女の相棒である色欲の七罪竜ライトは余りにもイバラが美人過ぎるがために、いつもより興奮しているようである。

イバラとトウエンティが七罪竜と呼ばれるカード達を認識していく中で、エールは光黄の質問に対して答える。

「あの2人はライダーハンターズ。その名の通り、ライダースピリットを狙ってハントする存在…アスラの龍騎も幾度となく狙って来た連中よ…まさかこの世界に来ていたなんて…」

「今回はライダースピリットだけではない。ウィルの命令で、その七罪竜とやらもいたたく」

「ツ……エヴォル達も!?!」

トウエンティの言葉に誰よりも強く反応を示したのはまだ5人の中でも比較的幼い星七だった。

力が強力過ぎるが故か、ライダーハンターズの主任であるウィルは烈我達の持つ七罪竜までもを標的にして………

「トウエンティ……オレはユキカイ町でオマエに『オマエの夢のために頑張れよな』って言った……けどそれは決してオレの龍騎や、バジユラやライト、他の七罪竜達をくれてやっても良いってわけじゃないぞ」

アスラが前にながら、トウエンティにそう告げた。

ユキカイ町でトウエンティと共闘したあの日。アスラはトウエンティの事情を知った。恋人であるテンドウ・カナを謎めいた病気から救うべく、奮闘する彼にアスラは同情しているが、それは決して龍騎を手放す理由にはならない。

トウエンティも当然それを理解していて……………

「分かっている。だから今ここで、オレと決着を着けるアスラ……力の限りオレと戦え……オマエをぶつ潰してオレは……オレはもう一度……」

「??」

ユキカイ町でのアスラとの一件以降、急がなければならないと言うのに、本気でライダースピリット狩りに専念できなくなっていたトウエンティ。

間違いなく原因であるアスラを倒す事ができればまた再び非情且つ残忍なライダー狩りトウエンティに戻れると信じていて……………

アスラとトウエンティによる1対1のバトルスピリッツが展開されるのかと思われた直後。そこに横槍を入れて来たのは同じくライダーハンターズのイバラだった。

「ちよいウエイト……………このバトル、私も参加しちゃう。せつかくだからタッグバトルでもしようよ…………アスラ君も誰かもう1人指名しちゃって〜」

まるで遠足の自由時間みたいなノリで提案して来たイバラ。冷徹なトウエンティが

横にいるためか、非常に温度差が目立つ。

「だったらオレが行く」

「ツ……ロン」

「向こうもライダースピリットの使い手が来てくれたら文句はないだろ……あのトウエ
ンティとか言うヤツにも借りがあるからな」

「わ……イケメンロン君が相手してくれるの……?……感激なんですけど!」

そんな中、アスラの横に立ったのは最大のライバルであるロン。コラボダンジョンに
てトウエンティになす術なく敗れかけたロンは、この場でその借りを返そうと言う気概
を見せている。

しかし……

「ちよつと待つてもらおうか!」

「?」

「絵瑠さん!?!」

突如として2人の間に割って入って来たのは、紫色の髪色が特徴的な七罪竜の使い手の1人、式音絵瑠だった。

「ロンじゃなくて、この私がアスラと一緒に戦うよ」

「なに？」

「今回は七罪竜もバトルに賭けられている……自分達の問題は自分達で解決したい。と言うわけでさつき5人でジャンケンしたら私が勝ったので私が来ました」

「よおっし頑張れよ絵瑠さん！」

「頑張ってください絵瑠さん！！」

「今日も可愛いよー！！」

「なんでアンタだけ関係無い事言ってるのよ」

烈我や星七、ミナトが彼女に大きな声援を送る。ただ1人関係ない事を叫んだミナトは横にいるエールからツッコミを受ける。

「癪だが……まあいいや。勝てよ」

「もちろんだ!!…絶対アスラの力になってあげるよ！」

「うおおお!!…めちやくちや心強いぜ絵瑠さん!!」

己のBパッドを絵瑠に託し、意外にもあっさり引き下がったロン。この約1週間の修行の中で、彼らとある程度の信頼関係を結べた証拠である。

『……俺の出番のようだな絵瑠。丁度、飢えていた頃だ』

「うんシユオン。行こうか……!」

絵瑠の背後からこっそりと顔を出したのは、暴食を司る七罪竜の一体シユオン。彼は現れるなりカードへと姿形を変え、絵瑠のデッキへと宿った。

「絵瑠さんとシユオンが一緒なら向かう所敵無しだぜ!!…行くぞトウエンティ、イバラ!!…タッグバトルで決着だ!」

「望む所よアスラ君、折角だから楽しくいきましょ」

「ライダー狩りの始まりだ」

……ゲートオープン、界放!!!

4人はBパッドを展開、その上にデッキをセットし、早々にバトルスピリッツを行った。

そして今回のバトルスピリッツはタッグバトル。いつもとは少しだけ違ったルールで行われる。

「ターン01」アスラ&絵瑠

「つしやあ絵瑠さん、オレ達のターンっすよ!」

「え?...一緒にターンを進めるの?...別々じゃなくて?」

「何言ってるすか?...タッグバトルもレイドバトルもパートナーと一緒にやるもんっすよ!」

当然ながら、住む世界や地域によって文化が異なる。バトルスピリッツも例外ではない。

バトスピの基本的なルールはどの世界でも共通なようだが、タッグバトルなどの特殊なルールは変わっているようで、アスラと絵瑠にタッグバトルの認識に違いが生じる。

「前に私と光黄でレイドバトルって言うバトルをやったでしょ?…基本的にはそのルールに等しいんだけど、その時と違って私たちのタッグバトルはタッグパートナーのカードでコストを軽減できないの」

「ふーん。一緒にターンを進めて一緒にバトル…なんか楽しそうだね」

エールが光黄達にタッグバトルのルールを簡単に説明、ミナトが興味深そうな感想を零す。

彼女の言う通り、基本的にレイドバトルのタッグ側が両サイドに増えたモノだと言える。ただし、初期手札はタッグそれぞれ4枚ずつであり、同じ色であってもタッグパートナーの軽減シンボルでコストの軽減は不可能だ。

「ルールはオツケー?…じゃあ改めてターンをどうぞお二人さん♡」

「よし、じゃあお互いの本気をぶつけ合って必ず勝とうアスラー!」

「おうよ!…このバトルで今のオレがどれだけ強くなったのかをトウエンティに見せつけてやる!」

ルールをある程度把握したところで絵瑠は勢い良くターンを進めていく。

「メインステップ！…まずは私から、ネクサス、No. 32 アイランドルートを配置！…配置時効果でドロー！」

「さらにオレがバーストをセットしてターンエンドだぜ！」

アスラ手札：4

絵瑠手札：5

場：【No. 32 アイランドルート】LV1

バースト：【有】

最初のターンから息のあったコンビネーションを見せるアスラと絵瑠。

絵瑠がネクサス配置とドロー、アスラがバーストのセットでそのターンは幕を閉じる。次は絵瑠にとっては未知数なトゥエンティ&イバラのターンだ。

「ターン02」トゥエンティ&イバラ

「メインステップ、オレは……………」

「私は湖に咲く薔薇を2枚ポンポンつと2枚配置するわ〜!」
「!?」

―【湖に咲く薔薇】LV1

―【湖に咲く薔薇】LV1

トウエンティのプレイングを遮るかのようにイバラの配置したのは、巨大な赤い薔薇。生き物のように蠢くそれは絵瑠にも大きなプレッシャーを与えるが……

「……………何の真似だイバラ。オレのライダー狩りを邪魔するつもりか?」

「ノンノン!!…そんな怖い顔しないの。トウエンティも知つての通り、湖に咲く薔薇はコアブースト効果がある。パートナーのカードで軽減できないタッグバトルにおいて、この手の効果は重宝するでしょ?……………まあその分次のターンは勝手に動いていいわよ。ほれほれアスラ君、ターンを進めちゃって〜」

トウエンティ手札：5

イバラ手札：3

場：【湖に咲く薔薇】LV1

【湖に咲く薔薇】

バースト：【無】

身勝手にコアを使ったのには、どうやら彼女なりの作戦があつての事のようにである。何はともあれ、お互いの最初のターンは終わり。再びアスラと絵瑠のターンが幕を開ける。

「ターン03」アスラ&絵瑠

「メインステップ……来いオレのドラグノ突撃兵！」

ー【ドラグノ突撃兵（R）】LV1（1）BP4000

アスラが動く。ドラグノ族の勇敢なる戦士、ドラグノ突撃兵が姿を見せる。

昔は三王であるテンドウ・ヒロミが使用していたドラグノ突撃兵を視認するなり、トウエンティは……

「…………ドラグノ??…何故オマエがテンドウのドラグノを持つている?」

「そーいやオマエ、テンドウさんの元弟子だったな……………コイツらは譲ってもらったんだよ。龍騎が使えなくなった時に」

「ツ…………なに、使えなくなっただど!?!…………アスラ貴様」

龍騎が使えなくなった事実をトウエンティ達に告げるアスラ。

トウエンティはジオウのカードを持つが故に、ライダースピリットを持つ者がある程度感知する力を持つが、その人物のデッキの中にあるかまではわかり得なかった。

「……………あらあら…………アスラ君龍騎使えなくなったの…………じゃあちようだい」

「やらん…………龍騎はオレに色んな事を教えてくれた大事な存在だ…………オマエ達には絶対に渡さねえ!」

「あら、いけずね」

「ライダースピリットをお守りにしてるつもりか。龍騎も使えない貴様に、カードバトルとしての価値は無い」

「自分の価値は自分で見出すモノだ。オマエが勝手に決めつけるもんじゃねえ……………それにオレはいつか絶対にまた龍騎を使えるようになって見せるし、仮にもう一生使えな

いんだとしても、必ず頂点王になる!!」
「……………!!」

溢れんばかりの気迫に満ちたアスラの表情を目に映すトウエンティ。思わず慄き、半歩下がる。だが、すぐさま苛立ちを覚えたかのように歯を軋ませ睨みつけて……………

「…………オマエはいつもそうだ。どんなにうちのめされ、災難に見舞われても曲げずに立ち向かってくる。身の程も知らずにな……………本当に腹立たしい」

「へっ…………それがソウルコアの無い、オレの唯一無二の取り柄だからな……………あの時のリベンジはここでキツチリとやらせてもらおうぜ……………これでターンエンドだ!」

アスラ手札：4

絵瑠手札：6

場：【ドラグノ突撃兵へR】 L V I

【No. 32 アイランドルート】 L V I

どこまでも真っ直ぐな気持ちと考え方を持つアスラ。トウエンティへのリベンジを誓いながら、2体のスピリットをプロッカードし、そのターンをエンドとする。

「アスラー!…私達がいる事忘れるなよ?…バツチリ活躍してやるからさ。頼りにしてよね!」

「モチロンですとも絵瑠さん!…シュオン含めて3人で、必ずこのバトル勝ちましょう!!」

アスラと絵瑠がそう言葉を交わし合う中、トウエンティとイバラのターンが再び幕を開ける。

トウエンティはその中でも特にアスラに敵対心を剥き出しにしているかのような表情を見せながらターンシークエンスを進めていく。

「ターン04」トウエンティ&イバラ

「メインステップ。イバラ、今度はオレが好き勝手やらせてもらおうぞ」

「いいわよん…イケメン君の頼みは断れないしね」

「オレは、仮面ライダークローズを召喚!」

1【仮面ライダークローズ】LV1(1S)BP4000

トウエンティの場にアスラでも見た事が無いライダースピリット、クローズが姿を見せる。

そしてこの瞬間、イバラが前のターンで事前に配置していたネクサスの効果が起動して……………

「うふ。6色のスピリットであるクローズが召喚された事により、私が配置した湖に咲く薔薇の効果、コアを1つこのカード自身に追加。それが2枚分あるため、2回行う」

緑のコスト4以上のスピリットが召喚された時にコアブーストを行うネクサスカード、湖に咲く薔薇。仮面ライダークローズは全ての色を持つ。故にその身に緑の力を宿しているため、今回のコアブーストに繋がった。

「湖に咲く薔薇に置かれたコアをクローズに置き、クローズのLVを1から2にアップ。バーストを伏せてアタックステップ。その開始時に仮面ライダークローズの効果、トラッシュにあるコア2つをライダースピリットに。クローズへと追加し、さらにLV3

にアップ」

ー【仮面ライダークローズ】(1S??5S) LV1??3

イバラのサポートの甲斐あって、最大LVまで自身を強化されたクローズ。そのBPはアスラのスピリット達を超えた10000。

当然、アタックを行わないわけがない。

「クローズでアタック!…効果でオレはデッキから1枚ドロウする」

拳を固め、走り出す仮面ライダークローズ。しかし、その1枚ドロウをする効果は、アスラの伏せていたバーストカードの発動条件であって……

「甘いぜトウエンティ!…手札増加後のバースト、千枚手裏剣!」

「ツ……緑のバーストカードだ?!」

「効果により、スピリット2体を疲労させ、リザーブにコアを2つ追加するぜ!」

「……アスラが僕と同じカードを……!」

勢い良く反転させられたバーストカード。それに強く反応を示したのは対戦相手のトウエンティやイバラよりも観戦していた星七だった。

アスラがこのカードを使用したのは、彼と散々修行を行ったための結果であった。

「だが、クローズはアタック中により既に疲労状態。この攻撃は止められない!」

「そんなもん百も承知だぜ!」

「ライフで受けるよアスラ!」

「おう!……ライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ5??4〉アスラ&絵瑠

クローズの拳により砕かれるアスラと絵瑠。だがその砕かれたコアは次のターン、千枚手裏剣の効果で増えたコアと共に彼らの力となる。

「……オレはこれでターンエンドだ」

トウエンティ手札：5

イバラ手札：4

場：【仮面ライダークローズ】LV3

【湖に咲く薔薇】LV1

【湖に咲く薔薇】LV1

バースト：【有】

パートナーであるイバラの宣言は聞かずに、トウエンティはターンを終了させる。対してアスラと絵瑠のペアが再びターンシークエンスを進めていき……

「ターン05」アスラ&絵瑠

「メインステップ!!…先ずはクリスタニードルを2体連続召喚!」

ー【クリスタニードル】LV1(1)BP1000

ー【クリスタニードル】LV1(1)BP1000

ターン開始の刹那。アスラと絵瑠の場に小さな蛇、嫌龍のようなスピリット、クリス

タニードルが鳥栖を巻いて2体出現……………

だが、これは彼女にとって下準備でしかなくて……………

「そして出番だ、行くぞシユオン！」

『ああ、食らってやるぜ』

ー！！

笑顔を浮かべる絵瑠より放たれる異様な気配。トウエンティとイバラが感じ取ったそれは紛う事なき七罪竜のモノ。

絵瑠は手札からカードになったそれを引き抜き、Bパッドへと叩きつける。

「決して潰えぬ常闇の影、全て無に帰す暴食の闇で何もかも喰い尽くせッ!!!…召喚、闇影夜龍エルドラシユオン……………2体のクリスタニードルから不足コストを確保して、LV2
！」

たった今召喚された2体のクリスタニードルが消滅すると、闇の瘴気が一気に広がっ

ていく、どす黒い瘴気はその周囲を完全に覆い隠す。

そして静かに闇が晴れて行くと、姿を見せたのはどす黒い体表に覆われ、鋭い牙と爪を掲げる黒龍。その姿こそ、「暴食」を司る七罪竜エルドラシユオンの真の姿。

―【闇影夜龍エルドラシユオン】LV2(2S) BPI1000

「ワーオ、これが七罪竜のマジマジの姿。お目にかかれて光栄太郎です」

エルドラシユオンの真の姿を目前にしてもいつものマイペースさを崩さないイバラ。トウエンティもそれは同様か、特に驚愕したり動揺する素振りは見せない。

『防御は俺と絵瑠に任せろ。アスラ、お前は存分に攻めていけ』

「おうよシユオン!!…頼りにしてるぜ……バーストをセットしてアタックステップだ!!
…行け、突撃兵!!」

七罪竜が一体、エルドラシユオンの効果を把握しているアスラ。バーストを伏せると共に、ドラグノ突撃兵で攻撃を仕掛ける。

前のターン、唯一のスピリットであった仮面ライダークロースをアタッカーに回した
がために、トウエンティ&イバラにはライフを守る存在はおらず……………

「ライフで受ける」

〈ライフ5??4〉トウエンティ&イバラ

身の丈程はある巨大なハンマーを振り、トウエンティ&イバラのライフを破壊するド
ラグノ突撃兵。

だが、まだまだこんなモノでは終わらなくて……………

「まだ行くぜ……………【追撃】だ突撃兵!!…重疲労状態にする事でもう一度攻撃!」
「わー、仕事熱心ね……………ライフで受けるわ」

〈ライフ4??3〉トウエンティ&イバラ

今一度巨大なハンマーを振うドラグノ突撃兵。再びそれを破壊して見せた。

重疲労状態になっても攻撃を止めないドラグノ突撃兵に「仕事熱心」と称するイバラ。トウエンティはこの効果を知っていたためか、ノーコメント。

「よし決まった、怒涛の二連続攻撃!」

「どうだトウエンティ、イバラ!!…これでオレ達はターンエンドだ!!」

アスラ手札：4

絵瑠手札：4

場：【ドラグノ突撃兵へR】LV1

【闇影夜龍エルドラシユオン】LV2

【No. 32 アイランドルート】LV1

バースト：【有】

攻めるアスラ。守備に徹する絵瑠。息のあったコンビネーションのまま勢い付き、そのターンをエンドとする。

次は今一度ライダーハンターズの2人のターンだ。

【ターン06】トウエンティ&イバラ

「メインステツプ……オレは……」

「ちよい待ちトウエンティ!!…マジック、フルアツド。不足コストはクローズから確保して、これを2枚使用しちゃうわ!」

「!?!」

「フルアツドの効果はネクサス1つを指定して、そのネクサスのLVか1つ上になるようにボイドからコアを追加する効果。対象は当然湖に咲く薔薇、LV2の維持コア数は5。よって2枚のフルアツドを使用した事により、合計10個のコアをボイドから追加よ!」

1 【湖に咲く薔薇】 (0??5) LV1??2

1 【湖に咲く薔薇】 (0??5) LV1??2

イバラを無視して己のみでメインステツプを始めようとしたトウエンティだったが、その前にイバラがマジックの効果で大量にコアブーストを行つて見せる。

「どうよトウエンティ。さつきよりもコアが増えたわ。これで存分に暴れてもオケオケ

よ」

「……さっきからオレのサポートばかり。なんの真似だイバラ、オマエらしくない」
 「なあに言っちゃってんのトウエンティ。これはタッグバトル。どちらかがサポートに徹するのは当たり前前の太郎じゃない」

いつものイバラであれば、全力で自分のスピリットを展開していくはずだ。こんなサポート寄りのプレイングを見せる訳がない。

そんな彼女にちよつとした違和感を感じつつも、トウエンティは非情なライダー狩りへと戻るべく、ターンを進めていく。

「コアが追加された湖に咲く薔薇よりコストを確保し、召喚。来い、仮面ライダージオウ

！」

「!!」

カメーローンライダー!!

ジ、オーウ!!

1【仮面ライダージオウ】LV2(3)BP7000

甲高い音声と共にトウエンティの場合へと現れたのは、ライダースピリットを複数扱えると言うチートじみた力を持つ強力なライダースピリットジオウ。

特にその基本形態である通常の姿は、これのデッキの核のような存在である。6色のスピリットであるため、又してもイバラの配置したネクサス、湖に咲く薔薇にコアが追加された。

そしてこのカードを対象に、トウエンティは更なるカードをこのメインステップ中に切って……………

「さらに【煌臨】を發揮!!……………対象は仮面ライダージオウ!」

「ツ……………メインステップ中で煌臨って事は……………」

「来い、煌臨せよ。仮面ライダーグランドジオウ!!」

グ・ラ・ン・ド!

ジオウ!!

1 【仮面ライダーグランドジオウ】LV2 (3) B P 1 2 0 0 0

歴史ある20体のライダースピリットの力を宿した黄金の仏像をその身に纏い、仮面ライダーグランドジオウが場へと煌臨した。

「来やがったなグランドジオウ!…そいつをぶつ倒して、今度こそ勝つ!」
「言ってる、そんな日は絶対に訪れん!」

このスピリットは本意ながらトウエンテイがアスラと共闘を行った際に入手した、現在のジオウの最強形態、即ち、トウエンテイの最強切札であって……………

「クローズのLVを2に戻し、アタックステップ。その開始時にクローズの効果。トウエンテイにあるコア2つをグランドジオウに追加!…自身以外にコアが置かれたため、クローズの更なる効果でドラグノ突撃兵を破壊!」
「!」

1 【仮面ライダークローズ】(1??2) LV1??2

ー【仮面ライダーグランドジオウ】（3??5）

闘魂を纏ったクローズの拳の一撃。その闘魂のエネルギーは弾丸のように撃ち放たれ、アスラのドラグノ突撃兵に直撃。堪らず爆散した。

だが、その直後。トウエンティの勢いを削ぐかのように発言して見せたのはアスラのパートナーである絵瑠だ。

「だけどアタックスステップ開始時にシユオンの【闇影^{シャドウ}】を発動!!……アンタのスピリットを全て裏向きにさせてもらおう!!」

「なに?」

絵瑠の宣言と共に、口内からドス黒い闇を場全体へと放出するエルドラシユオン。その解き放たれた闇は瞬間にトウエンティの2体のライダースピリット、クローズとグランドジオウを包み込んでいった。

「見たかシユオンの力……さらに【闇影^{シャドウ}】の効果を受けて裏向きになったスピリットでアタックを行う場合、裏向きのカードをランダムに選び、そのカードでアタックを行わさ

せる!」

「成る程。つまりこの場でアタック宣言を行なっても、必ずしも狙ったスピリットでアタックできるわけではないと」

「何か闇鍋みたいでワクワクする効果ね〜」

エルドラシユオンの効果を自慢気に語る絵瑠。しかし、見慣れない効果に対しては場慣れしていると言う事もあつてか、トウエンティとイバラは対して動揺を見せてはおらず……

「アタックステップは続行。アタックだスピリット!」
「!」

動揺を見せるどころか躊躇なくアタック宣言を行うトウエンティ。

そしてアスラ達を攻撃すべく闇の中から選ばれ、抜け出してきたのは「仮面ライダーグランドジオウ」だ。この時、トウエンティはエルドラシユオンの【闇影^{シャド}】のもう一つのメリットに気がついて……

（手札のライダースピリットを煌臨元に追加してそのスピリットのアタック時効果を發揮できるグランドジオウの効果が起動しない……成る程、アタック直後でカードが表に戻るためか……だがこの程度、どうとでもできる）

エルドラシユオンの【闇影】が即時發揮タイプのアタック時効果を事実上の無効にできる事を悟るトウエンテイ。しかし全く持つて揺らぐ事はなく、グランドジオウの更なる効果を發揮させて……

「フラツシユタイミング、グランドジオウのアタック時効果！」

「なッ!?…フラツシユタイミングでスピリット効果を!?!」

「グランドジオウの煌臨元にあるライダースピリットを召喚。そうした時、1点のダメージを貴様達に与える……オレはグランドジオウの煌臨元から仮面ライダージオウを召喚!……1点のダメージだ!」

「!!」

1 【仮面ライダージオウ】 L V 1 (1) B P 5 0 0 0

へライフ4??3へ アスラ&絵瑠

グランドジオウが額にある己の仏像をタッチ。すると「2019」と書かれた扉が出現。そこから仮面ライダージオウの通常の姿が場へと飛び出して行き、アスラと絵瑠の2人のライフを蹴り飛ばして見せる。

「フラッシュタイミングで召喚されたこの仮面ライダージオウは七罪竜エルドラシユオンの【闇影】の効果は受けない」

「!!?」

「考えが甘かったな。ライダースピリットの殆どはフラッシュタイミングで真価を發揮する。が故に、アタックステップの開始直後しか縛れないエルドラシユオンの効果は通らない」

絵瑠は一度、このエルドラシユオンを巧みに操り、アスラの龍騎デッキをほぼ完封して見せた事がある。しかしそれは龍騎がライダースピリットにしては珍しい、フラッシュに強いデッキではないため。

本来であれば、この状況の通り、フラッシュタイミングで多く動けるライダースピ

リットはエルドラシユオンの最大の天敵となり得るのだ。

「さあ、アタックはどう受ける？」

「くっ…ライフで受ける…ぐっ！」

〈ライフ3??2〉アスラ&絵瑠

グランドジオウの拳がアスラと絵瑠、2人のライフを砕く。そのライフ数は遂に半数を下回ってしまうが、この瞬間にアスラの伏せていたバーストカードが発動して………

「ライフ減少のバースト、絶甲氷盾!!」

「!!」

「効果によりライフを1つ回復！」

〈ライフ2??3〉アスラ&絵瑠

再び勢い良く反転していくアスラのバーストカード。その効果でライフを3に戻す。

「ターンエンド」

トウエンティ手札：4

イバラ手札：3

場：【仮面ライダークローズ】LV2

【仮面ライダーグランドジオウ】LV2

【仮面ライダージオウ】LV1

【湖に咲く薔薇】LV1

【湖に咲く薔薇】LV2

バースト：【無】

これ以上の追撃は無意味と見たトウエンティはそのターンをエンドとした。エルドラシュオンの【闇影】により放たれた闇が消えていく中、アスラと絵瑠は会話し合っていて………

「ごめんアスラ、助かった」

「いいって事つすよ！…そんな事より次のターン、オレに任せて欲しいっす」

「ツ…：…うん、わかった！…全力でぶつかって行け！」

「おう！」

作戦会議は終わり。アスラは今の全力をトウエンテイにぶつけるべく、ターンシーク
エンスを進めていくのだった。

「ターン07」アスラ&絵瑠

「メインステップ!!…ドラゴンヘッド2体と、2体目のドラグノ突撃兵を召喚！」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【ドラグノ突撃兵(Ｒ)】LV1(1)BP4000

エルドラシユオンの周囲に、アスラのいつものスピリット達が次々と場を埋めてい
く。

「次いでにネクサス、決闘者たちの戦場を配置!」

―【決闘者たちの戦場】LV1

周囲が赤々と燃え滾る炎に包まれていく。これにより、アスラの一部のスピリットは相手の場のスピリットに指定アタックが可能だ。

そして、まだだと言わんばかりに、アスラは最後の手札を切つて……

「そして、これが今のオレのエース!!…現れる、ドラグノ総軍団長!!」

―【ドラグノ総軍団長】LV2(3)BP7000

赤いシンボルが砕けると共に爆誕したのは、ドラグノの指揮官的存在。座椅子に腰を下ろしていたそれは、重たい腰をゆつくりと立ち上げると、4本もの腕があるからこそ握れる3本の剣を構え、トウエンティ達を威嚇するように咆哮を上げた。

「アタックステップ！…その開始時にドラグノ総軍団長の効果、トラッシュにあるコア5つまでを好きなだけオレの赤のスピリットに追加！！…オレは4つあるコアを突撃兵と総軍団長にそれぞれ追加してLVアップだ！」

┆〔ドラグノ突撃兵へR〕(1??3) LV1??2

┆〔ドラグノ総軍団長〕(3??5) LV2??3

「さらにこの時、他のドラグノスピリットにコアが2個以上置かれていたなら、オレはデッキからカードを2枚ドロロー！」

コアの回収と0になってしまった手札の補充。無駄のないプレイングを周囲の面々に見せつけていくアスラ。

この戦い方、戦法こそ、この修行の中でアスラが新たに得たモノであると言える。後にはここに龍騎が加わりさえすれば万全なのだが……

「アタックステップは続行！！…言って来いドラグノ突撃兵！！…決闘者たちの戦場の効果でクローズに指定アタック！！…でもってアタック時効果と総軍団長の効果で合わせて

2枚のカードをドローだ!!」

「クローズ、攻撃をブロックしろ」

準備は万端。ドラグノ突撃兵が巨大なハンマーを振り回しながらトウエンテイのクローズへと向かって駆けていく。

「アタックステップ中、ドラグノ突撃兵と決闘者たちの戦場の効果が合わさり、オレのドラグノスピリットのBPは全てプラス6000だ!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】 BP6000??9000??12000

ー【ドラグノ総軍団長】 BP11000??14000??17000

「先ずはクローズを討ち取る!!」

ぶつかり合うエネルギーを纏ったクローズの拳とドラグノ突撃兵の巨大なハンマー。しかし、その差は歴然。力は拮抗する事なく、クローズは吹き飛ばされてしまう。そしてトドメを刺すべく、ドラグノ突撃兵は今一度吹き飛ばされたクローズを追うが

……

カウンターを打つべく、トウエンティは手札から1枚のカードを切つて……

「フラッシュチェンジ、仮面ライダーオーズラトラーターコンボ！」

「！」

「効果により、コスト4以下のスピリット2体を破壊。消え去れ、ドラゴンヘッド、ドラグノ突撃兵！」

上空より唸り、放たれる稲妻。それがドラゴンヘッド1体とドラグノ突撃兵に直撃。クローズへの勝利を目前に爆散してしまう。

「その後、このスピリット、仮面ライダージオウと入れ替える。この時、トラッシュユにあるソウルコア以外のコア全てをジオウへ移す……来い、仮面ライダーオーズラトラーターコンボ！」

ー【仮面ライダーオーズラトラーターコンボ】LV2（9）BP7000

仮面ライダージオウが粒子となりトウエンティの手札へと帰還した直後、姿を現したのはアスラも知らないトウエンティのライダースピリット、仮面ライダーオーズラターコンボ。黄色い体からアスラ達を威嚇するかにように稲妻が弾け飛ぶ。

「ドラグノ突撃兵が消えた事で、ドラグノ総軍団長のBPは3000下がる」

「でも、まだオマエのグランドジオウを倒す分には十分だぜ!!…行け総軍団長!!…決闘者たちの戦場の効果でグランドジオウに指定アタックだ!!…次いでにドロロー!」

未知のライダースピリット、未知の戦法を使われたくらいではアスラは怯んだりはない。勇猛果敢にグランドジオウへと指定アタックを行う。

ドラグノ総軍団長が圧倒的な体格差を活かしてグランドジオウへと斬りかかる。グランドジオウはそれらを全て紙一重でかわし続けるが、その内斬り裂かれて爆散するのは時間の問題である。

だが、当然ながら自身の最強カードであるグランドジオウの破壊をトウエンティが見過ごす訳がなくて……………

「言っただろう、オマエがオレに勝てる日は絶対に来ない!!…フラッシュマジック、ソ

ウルオーラ！」

「!!」

「効果によりこのターンの間、スピリットのBPをプラス3000。これでグラウンドジオウはドラグノ総軍団長のBP14000を超えたBP15000となる！」

ー【仮面ライダーグランドジオウ】BP12000??15000

トウエンティの放った1枚のマジックカードにより劣勢をひっくり返すグラウンドジオウ。時を操り、四方からの目にも止まらない連続攻撃でドラグノ総軍団長を追い詰めていく。

「そのカード達は皆テンドウ・ヒロミのカード。仮にも弟子だったこのオレが理解していない訳がないだろう」

「!」

「これで終わりだ!!」

トウエンティがそう言い放つと、グラウンドジオウはジカンギレードと呼ばれる剣状の

武器を生成。その切っ先をドラグノ総軍団長へと向け、一閃。

ドラグノ総軍団長は耐えきれず、堪らず爆散……………

するかと思われたが……………

「……………なに?」

トウエンティは訪れたその光景に目を疑った。

無理もない。何せ、ドラグノ総軍団長は咄嗟に龍騎がソードベントのカードによって得られる柳葉型の剣を手に、グランドジオウの攻撃をガードしていたのだから……………

「へへ、トウエンティ……………確かに、テンドウさんのカード達だけなら総軍団長は負けてたぜ……………でも忘れんなよ?……………これはオレのバトルスピリッツ!!……………今まで培って来た全部がここに詰まってんだ!!」

「?!」

「フラッシュマジック、ソードベント!!……………これによりドラグノ総軍団長のBPを5000アップ!!……………よってその合計BPは……………」

「ドラグノ総軍団長」BP14000??19000

「い、19000だと!？」

「その通りだ、いっけえええ総軍団長!!…これが今のオレにできる全力の一撃だアアアー!!!」

龍騎の剣を手にしたドラグノ総軍団長はアスラの声に反応を示すかのように眼光を輝かせると、4本となった剣を巧みに扱い、グランドジオウを吹き飛ばして見せる。

そして怯んだグランドジオウにさらに高速で走り寄り、一閃。グランドジオウは流石に耐えられなかったか、遂に爆散してしまった……………

「よっしやアアアアアアアー!!!」

「アスラがトウエンティのグランドジオウを倒した!!」

「フツ……………」

グランドジオウへの勝利に歓喜の声を上げるアスラ。そんな中、仲間であるエールも喜んで見せる。

アスラのライバルであるロンも、嬉しかったのか、「当然だ」と言わんばかりに、この光景を鼻で笑った。

「どうだトウエンティ!!…こつちにはまだ絵瑠さんの相棒、シユオンもいる!!…これでターンエンドだ!!」

アスラ手札：4

絵瑠手札：5

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【ドラグノ総軍団長】LV3

【闇影夜龍エルドラシユオン】LV2

【決闘者たちの戦場】LV1

【No. 32 アイランドルート】LV1

バースト：【無】

「やったねアスラ、凄いいじゃん!!…めつつちや強くなってるよ!」

「ありがとうございまアアアアす!!…この調子で一氣に大勝利だぜ!」

グランドジオウを破壊した事により、完全に勢いついたアスラと絵瑠。そして自身の最強カードが破壊されてトゥエンティは……

「……………オレのグランドジオウを破壊したか……………フツ、だが図に乗るなよ?…オレのデッキにはまだまだ強力なスピリットが大勢いる事を忘れるな」

「おうよ、負けないぜ!!」

不思議と笑っていた。無意識のうちにバトルを楽しんでいるのであろう。やはりアスラと一緒にいると彼の何かが狂わされてしまうようで……………

そしてそれにいち早く気がついたイバラは……………

「うっふふ、なんか楽しそうねトゥエンティ」

「!!」

ストレートに伝えた。トゥエンティも自覚がなかったが故、今更自分がアスラとのバトルを楽しんでいたことに気がつく……………

「…………別に楽しんではいない。オレはアイツの持っている龍騎のカードが欲しいだけだ」

「あらあら強がつちやつてく…そういうところ可愛いわよね」

「強がつてないし、可愛くもない」

本人は否定こそしているが、それは真つ赤な嘘。素直になれないだけである。

本当はもう気がついていているのだ。アスラとバトルしている時はライダー狩りの事や、カナの病気を治さないといけないと言う使命を忘れて楽しんでしまっている自分がいると…………

しかし認めたくはないのだ。カナを忘れてバトルを楽しんでしまっている自分がいる事に…………

そもそも、バトルを楽しんでもいいわけがない。自分は非情なライダー狩り、トウエントイなのだから…………

「……………何度も言うが、オレは、オマエやオロチの事を仲間や友達だとは思っていない」
「ん?」

完全に忘れていたわけではないが、己の使命を思い出し、自覚し直したトウエンティは、同じライダーハンターズであるイバラに対して口を開いた。

「だが、敵は強敵。致し方ないが、オマエと一時的に手を組んでやる」

「うっふふ……素直になればいいのに……まあ私は最初からそのつもりだったんだけどさ」

このバトルに勝ちたいと言う意欲のためか、自分からイバラに協力を要請するトウエンティ。

本人は仲間だと思っていないとは言っているものの、少しは仲間意識があった何よりの証拠と言える。

イバラは改めて手札を構え、これから存分にバトルを楽しんでやろう………

そう思った直後だった。

彼女の身体に異変が起きたのは………

「えっ……なに……う、うあああああああ!!!?!」

ー!!!

突然もがき、苦しみだすイバラ。その身体とデッキからは黒いエネルギーがこれでもかと溢れ出て来て……

ここはアスラ達の世界。瓦礫の山で囲われたライダーハンターズのアジトの中、ライダーハンターズの主任であるウィルは偉そうに腰を下ろし、足を組みながら、まるでイバラの異変を悟ったかのように言葉を落とした……

「遂に来ましたか、これで2人目……あと1人……ふふ、あと1人であの方々が全て揃う!!」

ウィル以外は誰もいないこの空間。これまでにない不気味な笑みを浮かべながら、嬉

しさの余韻に浸っていくのだった……………

「オロチは驚異的な精神力で支配を拒んだが、イバラはどうでしょうね〜??……………
ふっふふ」

場所は戻り、烈我達の世界。バトル中に苦しみ出したイバラは、体の中から自分とは違う何者かの意味が迫ってくるのを感じて……………

(な、何これ……………いったい何がどうなって……………)

……………ジジジ……………この身体は僕がもらうよ♡

ー!!

直接脳内に入れてきたその声を聞いたのを最後に、イバラは意識を失った……………

そして……………

「ふ〜くん。ここひよつとして表の世界じゃない感じ?…ジジジ…まあいいや!…面白そうなバトルが目の前にあるみたいだしね」

突然もがき苦しむのをやめたイバラ。何事もなかったかのように喋り出したかと思いきや、随分とズレた発言が目立つ。

それだけでなく、声や喋り方もイバラの者とは全くの別人であり、不思議な事に、周囲の面々は皆今日の前に存在しているのはライダーハンターズのイバラではない事を理解した。

そんな中、冷や汗を流しながらも、トウエンティがその得体の知れない存在に対して口を開いた……………

「……………オマエは誰だ。イバラじゃないな……………」

「あ〜〜…やつぱり気付く?…気付いちやうよね〜!!……………ジジジ、でも今僕の名前教えても知ってる人いるのかな〜?」

その後、イバラの中にいたであろうその得体の知れない存在は「でもやっぱり教えちゃお!…自己紹介は大事だよね♡」と口にする、己の名前を立て続けに言い放つ……

「僕の名前はヘタマイト!!……黒の世界、ブラックフォースの紅一点だぞ♡……よろしくね〜」

「ツ………く、黒の世界だって!」

アスラを中心にテンドウの話をして耳にしていた誰もがその場で驚愕した。

そう、このイバラの身体を乗っ取り、目の前にいるのは、アスラの中に宿るオニキスと同等の存在……

その名もヘタマイト……

「でも、なんたつてそんなヤツがイバラの中に……!」

「ジジジ……その小っちゃい君!!…君の中にオニキスがいるね〜……アイツは元気にしてる〜?」

「うっせえ!!…どうでもいいけどさっさとイバラの中から出て行けよコノヤロー!!」

「え〜この身体スタイル良いから結構気に入ってるんだけどなく…でもそんな事より折角現世に出られたんだから〜…僕と血みどろの戦いをしようよ!!…ねえ、オニキス!!」

アスラの中にいるオニキスの名を叫びながら、イバラの身体を乗っ取った黒の世界、ブラックフォースのヘタマイトは己のターンシークエンスを進めて行く。

「ターン08」ヘタマイト&トウエンティ

「ジジジ…ドローステップ!!…ん?…あつちやく…このデッキが弱いのかな?…進化させてもそんなに強くないカードしか生成できないや」

不敵な笑みを浮かべながら黒々と光っているデッキよりカードをドロウするヘタマイト。そのカードの弱さにつかりした様子を浮かべるが……………

「まあいいや。しつかり僕のバトルについて来てよね、パートナー君♡」

「ツ…………誰が貴様のパートナーだ…………おいイバラ!!…誰よりも私の強いオマエが何して

る、早くそんなヤツ引っ剥がしちまえ!!」

「ジジジ……無駄無駄。どんなに叫んでももう彼女に声は届かないんだな……だってこれはもう僕の身体だから♡」

トウエンテイの声どころか最早誰の声であつてもイバラには届かない。

ヘタマイトは周囲が戦慄、及び恐怖するような笑みと言う名の凶相を浮かべると、己の黒の力で無理矢理進化させたそのカードをBパッドへと叩きつけた。

「現れる……千年杉・ヤクーツオーク!!」

ー!!

あらゆる方向から密集していく緑色のエネルギーと木々。それらは1つの完成形態へと辿り着く。

それは太陽の日光さえをも遮ってしまう程に巨大なモノ。その木でできた不気味な口元から放たれる雄叫びは正しく自然界の力そのものであると言える………

その名はヤクーツオーク。ヘタマイトがイバラのデッキを黒の力で進化させた事で

誕生した驚異のスピリットである。

ー「千年杉」ヤクーツオーク」LV3 (10) BP25000

「……い、いくら何でもデカ過ぎだろ!?!」

「今はリアクションしてる場合じゃない……来るぞアスラ!!」

身構えるアスラと絵瑠。その直後に、ヤクーツオークを召喚して見せたヘタマイトは更なる行動を取り……………

「アタックステップ!!……………」と、言いたいところだけど、その前に先ずパートナー君の場にいるライダースピリットから全てのコアを外しちやいまーす♡」

ー!!

ヘタマイトの宣言と共に場を共有しているトウエンティのライダースピリット、クローズとオーズラトラーターコンボのコアが全てリザーブへと戻り、たちまち消滅して

しまう。

これにより、2人の場に残ったのはヤクーツオークのみとなったが、もちろん、何も考え無しで消滅させたわけではない。

「ジジジ……これでその黒いドラゴンの【闇影】とか言う効果は事実上の無効だね♡……だっていくらアタックするスピリットを分からなくしたところで、最初からヤクーツオークだけだったら嫌でもそのスピリットでアタックする事になるからね♡」

「くっ……………!!」

「アタックステップ!!」

今度こそアタックステップを宣言するヘタマイト。直後にエルドラシユオンが口内から闇を解き放つが、ヤクーツオークはそれを体内へと吸い込んで行き、無効にしている。

「あは♡……黒いのは僕たちだけで十分だよ。さあ、アタックだヤクーツオーク!!……その効果でシンボルは緑の4となる!!」

「なに!?……シンボル4点!」

「こんなの食らったら絵瑠達は一撃で終わるぞ?!」

ヤクーツオークの魔の手がゆつくりと迫る。その驚愕の能力に対して真っ先にリアクシヨンしたのは烈我と光黄。

残り3つのライフしかないアスラと絵瑠は是が非でもこのアタックはブロックしなくてはならなくて……………

「シユオンを犠牲にするのは不味い……………ここはオレのドラゴンヘッドでブロックだ!!」

「ツ…………アスラ!!」

咄嗟にドラゴンヘッドにブロックの指示を送るアスラ。勇猛果敢にヤクーツオークへと飛び立つドラゴンヘッドだったが、そのBPは高々1000。木でできた腕を振るった風圧だけで吹き飛ばされ、呆気なく爆散してしまう。

「…………すまねえドラゴンヘッド…………でも助かったぜ」

犠牲になったドラゴンヘッドに謝罪を込めて感謝の言葉を送るアスラ。

しかし、ヘタマイトが進化させたヤクーツオークはこの程度で終わるスピリットではなかった……………

「盛り上がつてるとこ悪いけど、ヤクーツオークの更なる効果……………BP比でスピリットを破壊した時、このスピリットのシンボル分のダメージを与える♡」

「ツ……………なに!？」

「じゃ、じゃあ効果でシンボルは4つになっていたから……………」
「そう♡……………4点のダメージで君たちは死んじゃう♡」

ヤクーツオークが再びその木でできた巨大な腕を振るう。狙う先は当然アスラと絵瑠2人のライフ。

この効果ダメージを受けて仕舞えば一環の終わり。周囲の面々がアスラと絵瑠の名前を荒げ、身を案じる中、この攻撃を凌がんと手札のカードを切って見せたのは絵瑠だった……………

「まだだ!!…………アスラを負けさせる訳にはいかない!!…………効果によるダメージが発生する

時、手札のマジックカード、リアクティブバリアの効果を発揮!

「?」

「このカードを破棄する事で、そのダメージを1に抑える!!」

咄嗟に防御用マジックを切った絵瑠。これで少なくともこのターンでの敗北は回避できた。

しかし、ダメージを受ける事に変わりはなくて……………

ヤクーツオークの木でできた巨大な腕がしなり、2人のライフを叩きつけた
……………

「ぐっ…………ぐあああああ!!!」

「うあああああー!!!」

へライフ3??2へアスラ&絵瑠

「あ、アスラアアアー!!」

『絵瑠!!』

「絵瑠ウウウー!!」

そのダメージ数は僅か1であると言うのにこれまでに受けた事のない凄まじいダメージがアスラと絵瑠の2人を襲う。

思わず膝を突いてしまう程のダメージを受ける彼らの身を最も案じたのはエールと絵瑠の相棒シユオンと彼女の事を想っているミナトだった。

「ジジジ……ターンエンド。流石にこのくらいは耐えてもらわないと面白くないよね」
 「♡」

ヘタマイト手札：3

トウエンティ手札：5

場：【千年杉】ヤクーツオーク】LV3

【湖に咲く薔薇】LV1

【湖に咲く薔薇】LV1

バースト：【無】

余裕のターンエンドを宣言するヘタマイト。

「でももつと強くなつてくれないと面白くないな〜…ねえチビ君。君の中にいるオニキスを出してよ!」

「!?」

「僕、オニキスと久し振りに戦いたいな〜」

自身の欲求を満たすべく、突然オニキスを要求して来たヘタマイト。しかし、アスラはそもそもどうやってオニキスを出せばいいのかもわからない。

「何がオニキスだ!!…今のオマエの相手はオレと絵瑠さんだろコノヤロー!!…あんなクロキモヤローの力がなくなつたつて勝つてやらあ!」

「よく言つたよアスラ!…2人で絶対あの人の身体を取り戻そう!」
「おう!」

敵がどんなに驚異的で得体の知れない存在だとしても、決して諦めずに、それでいて尚強気にそう宣言して見せるアスラと絵瑠だったが……………

「ねえオニキス。僕の声、聞こえるんでしょ？……オプシディアンが言ってたんだけどさ……君、僕たち他のブラックフォースを憎んでるんだって？……まさかその理由ってアイツらを滅ぼしたから？……ジジジ……だったら滑稽だね、あのオニキスがそんなくだらない理由で僕たちに復讐しようだなんてさ」

「……何言ってるんだよオマエ……!?!」

アスラ達には1ミリも伝わらないヘタマイトの煽りを含んだ言葉。おそらく同じ黒の世界、ブラックフォースのオニキスならば伝わるのだろう。

そして彼女はまだ言葉を続けて……………

「でもさ……僕的にはアイツらは死んで当然だったと思うよ？……だってゴミだもん……弱いヤツ程この世に要らないものはないよね」

淡々と煽り散らかすヘタマイト。やはり言っている意味を理解できないアスラ。

しかしその時だった……………

聞き慣れたあのドスの聞いた声が脳内から聞こえて来たのは……………

……ふぎけるな……

「?!」

アスラだけが聞き取れるこの聞き慣れた声は紛う事なきブラックフォースのオニキスのモノ。だが、いつもの余裕がある感じとは違って、怒りがあるからか、どこか切羽詰まっているように感じて……

……憎い……

……許さない……

……殺してやる……

殺す 殺す 殺す 殺す

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

野獣のような咆哮を張り上げるアスラ。最早普通の人間が発している音量ではなくなっている。タッグパートナーである絵瑠の声など片耳にも入れやしない。

おそらくヘタマイトの言葉に怒りを露わにしたオニキスが暴走してしまい、結果的にアスラも釣られて暴走してしまったのだろう。

「ジジジ………待ってたよオニキス。さあ、もつと怒ってよ、そしたらもつと強くなって僕を楽しませてくれるよね♡」

オニキスの怒りで暴走するアスラを見るなり、不気味な笑みを浮かべて喜ぶヘタマイト。

最早ライダースピリットや七罪竜を賭けた単なる戦いでは終わらなくなったこのバトル。アスラ達の運命や如何に………

47コア 「赫焉の龍騎サバイブランザー!!」

場所は単なる平凡な町並みの中にある、単なる平凡な河川敷。

だが、そこで行われているのはバトルスピリッツという名の死闘。イバラの身体を乗っ取った黒の世界のブラックフォースの1人、ヘタマイトがアスラの中に眠るオニキスを刺激するように煽ると、彼女に怒りや憎しみを持つオニキスはアスラを無理矢理暴走させたのだった……………

「ヴ……………ヴ……………」

「アスラ!?!…どうしたのよ急に、しつかりなさい!!」

「ど、どうしたんだよアスラの奴!?!…まさか、アレがアイツの中にいるオニキスって奴の力なのか!?!」

オニキスの暴走により闘争本能のみが剥き出しになるアスラ。人語も忘れ怒り狂ったように雄叫びを上げる。

最早エールや烈我、仲間たちの声も届きやしない。

「くっ……何やってんだアスラー!!…さっさと目を覚ませッ!!」
「…………アスラ……オマエ、その力は一体……!?」

最大のライバルロンや、敵として前に立ちはだかつているトウエンテイまでもがこの異様な光景に戸惑いを隠せない。

そんな中、イバラの身体を乗っ取っているヘタマイトは唯一余裕のある笑みを浮かべながら口を開き……………

「ジジジ……………やっと出て来てくれたねオニキス♡…………成る程、今の僕みたいに身体を完全に支配できるわけじゃないんだね。でも言葉を交わさなくても伝わって来るよ、君の憎しみや怒り、殺意や憎悪。全ての悪意がね♡」

「ヴ…………ヴウ…………ヴウウウ…………ガアアアアアアアア!!」

不気味過ぎるヘタマイトの声を聞くなりさらにその憎しみや怒りを強めるアスラ、いやオニキスは遂に己のターンを開始して行く。

その驚異的且つ圧倒的で悍しい存在感に、トウエンティでさえも出す言葉を見失ってしまう。

「ジジジ……それがオニキスが自らの力で作り上げた黒のスピリットか……いいねえ！
…勝負しようか、この僕が作ったヤクーツオークと!!」

「ヴ……ヴ……ヴ……ガアアアアアアアア!!」

手を翳し、仮面ライダーリュウガの召喚時効果を發揮させる暴走アスラ。リュウガの召喚時効果は相手スピリット全てのコアを2つずつリザーブへと叩き出すモノだが……

「コア除去か!!……でも残念、その程度じゃヤクーツオークのLVは下がらないんだな♡」

ー【千年杉】ヤクーツオーク（10??8）

仮面ライダーリュウガの眼光より放たれる紫の衝撃。しかし、太陽の日光さえをも遮る程巨大な体格を持つヤクーツオークには微々たるダメージしか入らない。

「ヴ……ヴ……ヴ……ガアアアアアアアアアア!!!」

加速する怒りや憎しみは止まる事を知らず。

アタックステップに入ったのか、暴走アスラが雄叫びを上げ、掌を翳すと、仮面ライダーリュウガは黒い炎をその身に纏いながら全力でヘタマイトのライフを打たんと走り出す。

「いいよ来て♡……ライフで受ける!」

特に防御を施す様子はなく、ライフで受ける宣言をするヘタマイト。仮面ライダーリュウガが黒い炎をその右拳に宿らせ、そのライフを殴りつける。

3つある内の1つは焼き尽くされ、爆散する………
かと思われたが………

「ジジジジ………」

〈ライフ3??3〉へタマイト&トウエンティ

「ら、ライフが減ってない!？」

リュウガの攻撃を受けても尚碎かれないへタマイトのライフバリア。驚愕する絵瑠だが、そのライフバリアをよく見てみると、それは半透明且つ神秘的なベールに包まれていて……………

「ヤクーツオークLV3の効果。相手ターン中、アタックによつて減るライフはマイナースーとなる……………これでシンボルが1つしかないリュウガの攻撃は実質無効♡」
「そんな!?!…黒い龍騎でもダメージを与えられないの!？」

ライフバリアを包んでいる神秘のベールはへタマイトが操るヤクーツオークが発生させたもの。これではリュウガはおろか、ドラグノ総軍団長やエルドラシユオンの攻撃も無効にされてしまう。

つまり何も対策できなかったこのターンは、少なくとも全てのアタックは無効となるのだが……………

「ヴ…………ヴ…………ヴ…………ガアアアアアアア!!」

「アスラ!?!」

暴走アスラからアタックの指示を受けたのか、3つの剣を4本の腕で構え、ドラグノ
総軍団長がヘタマイトのライフ目掛けて地を駆ける。効果で1枚ドロローでできるものの、
ほぼ無意味なこのアタックはオニキスのヘタマイトに対する怒りを表しているようにで
……………

「ジジジ…………暴走で我を失ってるんだね。ライフで受ける」

へライフ3??3へヘタマイト&トウエンティ

ドラグノ総軍団長がライフを斬りつけるも、当然そのライフは減らない。

「ヴ…………ヴ…………ヴ…………ヴ……………」

アスラ手札：5

絵瑠手札：5

場：【仮面ライダーリユウガ】LV3

【ドラグノ総軍団長】LV3

【闇影夜龍エルドラシユオン】LV2

【決闘者たちの戦場】LV1

【No. 32アイランドルート】LV1

バースト：【無】

結果的に。

己がコントロールできる全てのスピリットを使い、無意味なアタックを繰り返したアスラ。人語は喋れないが、そのターンをエンドとしたようで、次は再びヘタマイトとトウエンティのターンが幕を開ける……………

最も、実質的にヘタマイトのみがターンを行うわけだが……………

「ターン10」ヘタマイト&トウエンティ

「メインステップ。マジック、ソウルドローを使用、コストにソウルコアを支払った事に

より、合計3枚のカードをドロー！」

手始めと言わんばかりに3枚ものカードをデッキからドローして見せるヘタマイト。そしてそのカード達を目に映すなり不気味な笑みを浮かべ……………

「マジック、バインディングメロディ。効果で疲労状態のドラグノ総軍団長をデッキの下に」

「!!」

具現化されたメロディがアスラのドラグノ総軍団長を包み込み、消滅へと追いやる。これでアスラと絵瑠の場合はそれぞれユウガとエルドラシユオンのみとなった。ヘタマイトが狙っているのは当然残りのスピリットの全滅であり……………

「今度は光速三段突を使用……エルドラシユオンをデッキの下へ！」

「ツ…………シユオン!!」

『ぐあっ?!?』

次に狙われたシユオン。目で追えない速さで放たれる三本の光の剣がシユオンの身体へと突き刺さって行く。

『ぐっ……すまない絵溜。俺はここまでのようだ。でも諦めるな……俺のパートナーであるのなら、アスラを信じて、最後まで戦え……』

「シユオン……ああ、あとは任せろ!」

遺言を残すかのように消えて行くシユオン。これで2人の場は遂に疲労した仮面ライダーリユウガのみとなってしまった。

そして当然それもまた狙われる……

「さらにキラータレスコープ……効果によりこのターン、僕のスピリットは疲労状態の敵スピリットを指定アタックできる♡」

「ヴ……ヴ……ヴ」

「僕のやりたい事なんて頭の良い君ならお見通しだよねオニクス……直接対決しちゃお♡……アタックステップ、ヤクーツオークで仮面ライダーリユウガを指定アタックだ!!」

1 【仮面ライダーリュウガ】BP12000??17000

1 【千年杉】ヤクーツオーク】(8??6)

「成る程、良い効果だね。でもギリギリヤクーツオークのLVは下がらないし、BPも遠く及ばない!!」

「ぐおおおおおお!!!!」

「!？」

勝ちを確信するヘタマイト。しかしその直後に暴走アスラはさらにBパッドへとカードを叩きつける。

その効果により、リュウガは2本目の剣を得る。つまり、アスラは2枚目のソードベントを発動させたのだ。

1 【仮面ライダーリュウガ】BP17000??22000

「同じマジックの同時発揮。これでリュウガのBPは22000まで上昇。さらにヤクーツオークのLVは2に下がり15000までダウンか………何も考えない獣に

なっていたかと思っていたけど、そう言う訳じゃなさそうだね♡」

合計2枚のソードベントの恩恵を受けたりユウガが再び黒い斬撃をヤクーツオークへと放ち、そのLVを下げようとする。

この状況を見た絵瑠とトウエンティも暴走アスラの勝ちを内心で確信する。

だが……………

「ジジジ……でも例え知性があったとしても君は僕に勝てない!!…手札のリーフジャマーの効果!」

「!」

「相手がマジックカードを使った時にこのカードを破棄、コストを支払う事で、そのマジックカードの効果は無効にする!……つまり、2枚目のソードベントは無効!!…リユウガのBPは17000に戻り、ヤクーツオークのLVは3のまま!!」

「【仮面ライダーリユウガ】BP22000??17000

ヘタマイトの放った1枚のマジック。その影響で大量の葉が嵐のように舞い上がり、

リュウガが破壊された事によるためか、暴走していたアスラは黒い輝きから解放される。しかし肉体が限界だったか、本人は直後に気を失い前のめりに倒れ込んでしまう。そんなアスラにタッグパートナーである絵瑠はすぐに駆け寄る。呼吸もある事から、どうやら命に別状がある程重症ではないと確信した彼女は取り敢えず一安心。しかし、アスラの暴走はリュウガの敗北により終わったとしても、まだバトルスピーリッツそのものが終わってわけではなくて……

「さあオニキス、これでトドメだ。ヤクーツオークのアタック時効果。BP比でスピーリッツを破壊した時、このスピーリッツのシンボル相手にダメージを与える」

「くっ……またその効果」

「ヤクーツオークは自身のもう一つの効果で緑のシンボルが4となっている。つまり前のターンと同じく4点のダメージを与える!!」

圧倒的巨躯なヤクーツオークが次に目をつけたのはアスラと絵瑠のライフバリア。上から見下ろしながらその木々でできた巨大な拳を振り下ろす。

彼らの残りライフは2。この一撃を受ければひとたまりもない。だが、絵瑠はアスラ

を負けさせまいと手札のカードを切ってみせ……………

「手札から2枚目のリアクティブバリアの効果!!……………そのダメージを1に抑える!!」

「……………は？」

「ぐ……………ぐあああああ?!」

〈ライフ2??1〉アスラ&絵瑠

気を失い、倒れているアスラを庇う絵瑠。1に抑えたものの強大なダメージが彼女の方に襲いかかる。

だがどんなに苦痛を受けても、彼女は折れない。いや、折れるわけにはいかないのだ。

「……………負けさせない。アスラはこんなところで負けちゃダメだ!……………もちろん私もここで終わるわけにはいかない!」

「……………何それ、キモ。弱い癖に1ターン凌いだくらいで良い気にならないでくれる?……………わかった、そんなに早く消えたいならオニキスよりも先ずは君から消してあげよ。ターンエンドだ」

ヘタマイト手札：2

トウエンティ手札：6

場：【千年杉】ヤクーツオーク】LV3

【湖に咲く薔薇】LV1

【湖に咲く薔薇】LV1

バースト：【無】

絵瑠を邪魔者と認識するヘタマイト。怒りを覚え、倒す標的をアスラから彼女に変更する。

しかしこのターンはもう何もできないためそのままターンエンド。一時的にアスラ絵瑠のターンとなるが、アスラは氣を失ったまま。絵瑠がどうにかするしかない。

「このバトルは絶対に負けない!!…アスラは絶対にまた立ち上がる、それまでに持ち堪える!!」

「ジジジ……それってハナツから僕に勝てないって言ってるのと同じだよね♡」

ヘタマイトにつべこべ言われるが、氣にするそぶりを見せずに、絵瑠はアスラが再び

立ち上がる事を信じ、己のターンを開始した。

「ターン1」アスラ&絵瑠

「メインステップ!!……3体目のクリスタニードルを召喚して、2枚目、3枚目のアイランドルートを配置!……効果でカードを2枚ドロ―!」

1 「クリスタニードル」LV1

1 「N032アイランドル―」LV1

1 「N032アイランドル―」LV1

空になった場には3体目のクリスタニードル。背後には2、3枚目のアイランドルートを配置する絵瑠。そして効果によるドロ―カードを見るなり口角を上げて……

「よし……抗う事の出来ない死への呪縛、今こそ絶望のカウントダウンを下す!……召喚、辰の十二神皇ウロヴオリアス!!」

天より降り注ぐ黒き稲妻、閃光による落雷は大地を穿ち、衝撃によつて龍皇がその目を覚ます。地面に爪を突き立て、闇の中に眼光を光らせながらフィールドに姿を現し咆哮。

―【辰の十二神皇ウロヴオリアス】LV3（5）BP21000

「また黒いドラゴン。だから黒いのは僕たちだけで十分だつてば〜」

「先ずはライフを回復する……………召喚時の【封印】の効果。リザーブのソウルコアを私たちのライフに置く!」

「ソウルコアをライフに?……………へ〜変わった効果だね」

神皇のスピリットが持つ特有の効果【封印】……………

それは文字通りソウルコアをライフに封印する効果。本来であればこれは大きなメリットになり得る有益な効果のはずだったが……………

「あ、あれ……………ソウルコアがライフに行かない!?……………なんで、發揮宣言はしたのに……………」

Bパッド上には確かに存在するソウルコア。だがいくら絵瑠がウロヴォリアスの【封印】を發揮してもそれはライフには行かない。

不思議に思う絵瑠だったが、その理由にトウエンティが一早く気がついて……………

「……………まさかソウルコアが使えないアスラがタッグパートナーになった事でライフをソウルコアに置けなくなったと言うのか!？」

「!!」

すぐ様横で倒れているアスラに視線を送る絵瑠。

そう。アスラとタッグを組み、ソウルコアをライフに置くと言う事はアスラのライフにもソウルコアが置かれるという事。それ故に、封印そのものが無効となる。飽くまで推測の域を出ないが、この状況からそう決定付けるしかない。

そんな中、アスラの『ソウルコアを使えない』と言う謎めいた特性を初めて耳にしたヘタマイトはある事を察して……………

「……………ソウルコアを使えない?!……………そこのチビ君が?!……………へえ……………ジジジ……………成

る程そう言う事か。あのオニキスが気に入って住み着く訳だ」

一人納得し、興味深そうに気絶するアスラに対して笑みを浮かべるヘタマイト。どうやら彼はアスラに関する事で何かを知っているのが伺えるが、今の絵瑠やトウエンティ達にはそんな事を考える余裕は無い。兎にも角にもこの状況を如何にして乗り越えるかが先決。

「ブレイヴカード、死骸銃ドラグヘッドを召喚し、そのままウロヴオリアスと合体!!」

0 ー【辰の十二神皇ウロヴオリアス+死骸銃ドラグヘッド】LV3(5)BP2500

拳銃型のブレイヴ、ドラグヘッドが場に現れたかと思えば、大砲のような形にすぐさま変化、ウロヴオリアスの背中に装着される。そして絵瑠はそのままアタックステップへと移行して……

「アタックステップ!!…合体したウロヴオリアスでアタックだ!!…そして今、ドラグ

ヘッドとの合体でダブルシンボル!!…ヤクーツオークがアタックダメージを1減らすなら、ダブルシンボル以上のスピリットでアタックすれば問題ない!!」

ヘタマイトに少しでも多くのダメージを与えるべく、合体したウロヴオリアスにアタックの指示を送る絵瑠。これならヤクーツオークの能力下においても1つだけならライフを減らす事が可能。

しかし、その程度の単純な戦法ではヘタマイトが進化させたヤクーツオークを攻略したとは言えなくて……

「君が僕からライフなんて奪える訳ないでしょ♡……フラッシュマジック、リミテッドバリア!!」

「!!」

「このターンの間、コスト4以上のスピリットのアタックじゃライフは減らない!!……合体スピリットのアタックはライフだよ♡」

〈ライフ3?!3〉ヘタマイト&トウエンティ

ウロヴオリアスの口内から放たれる闇のプレス。しかしそれはヘタマイトが使用した1枚のバリアによって防がれてしまう。

「くそッ……………ターンエンドだ」

絵瑠手札：2

アスラ手札：3

場：【辰の十二神皇ウロヴオリアス＋死骸銃ドラグヘッド】LV3

【クリスタニードル】LV1

【No. 32アイランドルート】LV1

【No. 32アイランドルート】LV1

【No. 32アイランドルート】LV1

【決闘者たちの戦場】LV1

バースト：【無】

残ったクリスタニードルでアタックしてもヤクーツオークの効果で防がれるだけ。絵瑠は歯痒い思いをしながらもそのターンをエンドとした。

「ターン12」ヘタマイト&トウエンティ

「メインステップ。マジック双翼乱舞、効果で2枚ドロロー♡」

メインステップ開始直後に使用されるドロローマジック。常に黒い光を放っているデッキから引き抜かれるカードはもちろん強力なモノしかなく……………

「僕ね。君みたいに弱い癖にお口だけが達者な子嫌いだからさ……………このターンで潰しちゃうね、全力で♡」

「ツーー!?!」

絵瑠はヘタマイトの不気味な笑みから殺気と気迫が解き放たれたのと、それに伴って空気が怯えるように震撼したのを感じる。そしてヘタマイトは双翼乱舞でドロローした2枚のカードをBパッドへと叩きつけて……………

「ヤクーツオークの2体目、3体目を同時召喚!!」

「な……………3体のヤクーツオーク!?!」

1 「千年杉」 ヤクーツオーク L V 3 (6) B P 2 5 0 0 0
 1 「千年杉」 ヤクーツオーク L V 3 (6) B P 2 5 0 0 0

最初に呼び出されたヤクーツオークの両端から現れる2、3体目のヤクーツオーク。圧巻が過ぎる威圧感と驚異的な存在感はまるで自然界そのものを敵に回したかのよう

……

「アタックステップ♡……ヤクーツオーク1体目でアタック!!…効果でシンボルは4つ、ブロックされても貫通効果で終わりだよ!」

「くっ……クリスタニードルでブロック……」

絵溜の指示を受け、彼らを守るべく飛び出したクリスタニードル。だがそのBPは僅か1000。驚異的なBPを持つヤクーツオークの敵になる訳がない。そして最早絵溜にこの攻撃を凌ぐ手立てもない。

目指す先はヤクーツオークのライフ貫通効果でゲームエンド……それは望まざる結末。

しかし、それを避けるべく、手札からカードを引き抜いて見せたのは他でもない敵であるはずのトウエンティだった。

「フラッシュマジック、絶甲氷盾」

ー!!

「不足コストはヤクーツオークのLVを1に下げて確保。これにより、このバトル終了時がおれたちのターンのアタックステップ終了となる……そしてヤクーツオークのライフ貫通効果はLV2以上の時にしか発揮できない」

「味方の場に絶甲氷盾を!」

ー「千年杉」ヤクーツオーク(6??2) LV3??1

LVが下がってもBPは高い。飛びついてきたクリスタニードルを握り潰すヤクーツオーク。しかしお得意のライフ貫通効果はこの時点で失われているため発揮できなかった。

さらに極寒の猛吹雪が立ち込め、ヘタマイトのヤクーツオーク達はこのターンでの攻撃を禁じられて……………

「ちよつとパートナー君。邪魔しないでくれる?……………もうちよつとであの女を始末できたのに」

「馬鹿言え。オレはどここの馬の骨とも知らん貴様のパートナーになったつもりはない……………オレにとって、アスラよりも貴様の方がよっぽど邪魔だ」

「へく……………意外と言うね。ジジジ……………じゃあこのバトルが終わったら今度は君を殺しちやおっかな♡」

トウエンティを脅すように不気味な笑みを見せつけるヘタマイト。しかしトウエンティはそのヘタマイトに対して物怖じせずに睨み返す。

「あ、ありがとう……………トウエンティだったよね、助かったよ」

「例を言われる覚えはないぞ異世界人……………オレもオマエと同じでそこで倒れている奴を負けさせたくないだけだ」

「は……………やっぱアスラと仲良いじゃん」

「それだけはない」

トウエンティの協力もあつてなんとか凌いだこのターン、しかし、絶対的に不利な状況は変わらない。

トウエンティがヘタマイトとタツグパートナーになっている関係上、やはりライフを破壊するにはアスラの力が必要不可欠で……………

トウエンティと絵瑠がヘタマイトの攻撃を止めるのに全力を費やす中、気を失ってしまったアスラは息が詰まるようなドス黒い闇の空間の中で静かに眠っていた。

そしてそこからだまして来るのは敗北を喫したオニキスの怒りの叫び……………

負けたじゃねえか

オマエが弱いからだ

弱いから負けた。弱いからオマエは龍騎もリユウガも使いこなせない

早く……………

早くその身体をオレに寄越せ……………ツ!!

「……………オ……………ニキス……………?」

オニキスの声にアスラが微かに意識を取り戻す。

彼にいつものようなアスラを小馬鹿にする余裕はない。ヘタマイト含めた他のブラックフォースに強い恨みがある彼のその言動から、アスラは悲しさと虚しさと切なさを同時に感じていて……………

「ツ……………何だったんださっきのは……………オニキス、オマエいつたい……………そ、そうだバトルは!？」

「あ、アスラ!!…よかった気がついたんだね!」

「え、絵溜さん……………ツ!!」

ようやく目を覚ますアスラ。だがその絵溜のボロボロな身体や1体でも厄介なヤクーツオークが3体も場にいる事で絶体絶命の崖つ淵に追いやられている事と、それらが自分のせいで招いてしまった事だと思ってしまう罪悪感と自己嫌悪に陥る。

「(ズ)……………(ズ)めん絵溜さん。オレのせいでこんな……………」

「別にアスラのせいじゃないよ！」

「どちらにせよすみません……今オレもバトルに加わって………ツ?!」

バトルに加勢すべく、再び立ち上がろうとするアスラだったが、暴走した時で既に体力は限界を迎えていたのか、立ち上がるうにも腕に力が入らず、立ち上がる事ができなかつた………

「く、クソツ……なんでこんな時に動かないんだよ、今は寝てる場合じゃないんだオレの身体!!……もう一度……頼むからもう一度絵瑠さんの横で戦う力をくれ………!」

「……無理はするなアスラ、大丈夫だよ。後は任せてくれ………絶対勝つかから!」

「!」

誰よりも戦う力を懇願するアスラ。その横で誰よりも彼の限界を知っている絵瑠は心配そうな眼差しを彼に向けながらそう告げた。どう考えても1人でどうにかできる状況ではないと言うのに………

そんな事考えるまでもなく理解しているアスラはどうかして立ち上がろうと試みるも、何度やっても失敗してしまふ………

しかし、そんなアスラに喝を入れんとする者が一人……………

「おいアスラ、いつまでそこで寝てやがる!!」

「ツ…………トウエンティ…………!?!」

それはこれまで自分の龍騎を幾度となく狙ってきたライダー狩りトウエンティ。彼は怒るように言葉を続けて……………

「オマエ、ユキカイ町でオレが倒れた時に言ったよな…………『他の誰かのためじゃない、カ
ナのために立って戦えよ』と!!」

「ツ!!」

「オレにそう言っておきながら貴様はこのザマか…………オマエの頂点王になりたいと言う
夢は、願望は所詮その程度だったと言う事だな」

「頂…………点王…………!!」

トウエンティにそう言われ、アスラの脳裏に頂点王シイナを始めとし、今まで戦って
きたカラーリーダー、三王、一緒に旅して来たエール、ムエ。

そして最大のライバルであるロンの顔が真っ先に浮かび上がってきて……………

「そうだ。オレは頂点王になる男……………そしてあの天才イケメンヤローが見てる前で立ち上がれないなんて事、絶対にあっちゃいけねえ……………そうだ立て、立って戦えよオレ!!…立ち上がって今まで培って来たもん全部ぶつけて証明しろ!!…どんなヤツでも最強になれる事を!!」

自分に言い聞かせるように言葉を落とすと、それを聞いたロンは、彼のライバル故か、クールな表情ながらも軽く口角を上げて笑みを見せる。

そして……………

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!

残りの気力と体力、根性を極限まで振り絞り、アスラは立ち上がる。硬くなつて軋む身体を無理矢理奮い立たせ、己を鼓舞するかのように雄叫びを上げ続ける……………

そして身体はふらつきながらも、敵であるヘタマイトを鋭い眼光で睨みつけて……………

「ジジジ……中々おもしろい茶番だったね……でももう手遅れ、何をしても無駄。君たちにはもう僕の作り上げたヤクーツオークを倒す手段は無い!!」

「うるっせえよこのジジジャロー!!……オレは絶対に諦めねえし、負けねえ!!」

トウエンティに瀉を入れられ、気合とど根性で立ち上がるアスラを嘲笑うヘタマイト。だが、彼の味方は絵瑠やトウエンティだけではない。

「おおそうだアスラ!!……頑張れ、そんな奴ぶつ飛ばして、俺との決着をつけるぞ!!」

『その通りだぜ。俺様の本気の怒り、ぶつけさせろ!!』

「烈我……バジユラ……!!」

絶望的な状況でも必死に立ち上がり、勝つ事を諦めないアスラに胸を打たれ、全力で応援する烈我とバジユラ。もちろん彼らだけでなく、エール達含め、他の仲間達も同様の気持ちだ。

そしてそんな時だった……

アスラが己の懐に入れていた仮面ライダー龍騎のカード達が、まるで彼らの想いに応えようとするかの如く、赤い光を纏いながら踊るように宙へと飛び出して行ったのは

……

「ツ……………龍騎!?!」

最初に出会った第一の龍騎。コラボダンジョンで偶然見つけた第二の龍騎。黄金の翼のカードで進化させ、エースとしても愛用していた龍騎サバイブ。そしてミラーワールドでの戦いの中生み出された変身龍騎のカード。

思い出深い4枚のカード達、それらはやがて集合していき、まるで太陽のように赤々と光輝いていく。

「……………これは進化の光!?!…しかもオニキスの黒い力でもない、チビ君自身の!?!」

「この赤い光……………似てる。スーミ村で最初に龍騎と出会った時と……………そうか……………また一緒に戦ってくれるんだな龍騎!!……………っしやあ、行こうぜ。オレとオマエならどこへだって飛べる!!」

驚愕するヘタマイトを他所に、アスラは最初に龍騎と出会った日の事を思い出す。そして、アスラがその一つに纏まった龍騎のカードに触れると、それは彼のデッキへと吸

い込まれていく。

「このターン、オレと絵瑠さんの全身全霊をぶつけて……勝つ!!」
「うんアスラ!!…決めるよ!」

遂に完全復活を遂げたアスラ。このバトルの決着を着けるべく、仲間達が見守る中、己のターンを進行していった……

「ターン13」アスラ&絵瑠

ターンシークエンスの過程の中でドロークしたカード。それは紛う事なき仮面ライダー龍騎の新たな姿。アスラはそれを見るなり口角を上げるとそれをBパッドへと全力で叩きつけた……

「メインステップ……来いオレの相棒、仮面ライダー龍騎!!」

1 【仮面ライダー龍騎】LV2(4)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、龍の影を纏う赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎が場へと姿を見せる。この龍騎はアスラに応えるべく、今までの龍騎達が合体した結果爆誕した最後の龍騎である。

アスラの久し振りの龍騎召喚はエールや星七、絵瑠など、多くの仲間達から感動を誘って……………

「……………龍騎!!…やつと復活したのね!」

「これがアスラの仮面ライダー龍騎!!…赤くてカッコいい!」

「最強コンビ復活だな!」

エール、星七、絵瑠の順でそう言葉を告げていく。使用者であるアスラも当然喜びや感動の笑みを浮かべるが、それ以上にエール達は喜びの笑みを浮かべていた。

「行くぜ仮面ライダー龍騎……………進化したオマエの力、アイツに全部ぶつける!!……………オレは手札からミラーモンスター、ドラグレッターを召喚!!…龍騎と合体だ!!」

「ツ……………ライダースピリットの専用ブレイヴカード……………」

1 【仮面ライダー龍騎+ドラグレッダー】LV2(4) BPI3000

龍騎はベルトに装着されたデッキからカードを1枚引き抜き、それを右腕のバイザーに装填……………

……………アドベント!!

の音声と共に、龍騎に宿し赤き龍、ドラグレッダーが飛来して来た。そして準備は整ったと言わんばかりの勢いでアスラはアタックステップを宣言し……………

「アタックステップ!!……………仮面ライダー龍騎でアタック!!……………2つのアタック時効果でヤクーツオークと湖に咲く薔薇1体ずつ破壊!!」

「なに!?!」

「ドラグクローファイアー!!」

今度はストライクベントのカードを装填する龍騎。音声と共にドラグレッダーの顔を横したガントレットが装着される。

そしてその口部からドラグレッダー本体と同時に火炎放射を発射。巨軀たるヤク

ツオーク1体と、湖に咲く薔薇を容易く焼き尽くした。

「そして効果により2枚ドロし、回復!!」

―【仮面ライダー龍騎+ドラグレッダー】（疲労??回復）

「あは♡……良い効果だね……でもまだ僕の場合には2体もヤクーツオークがいる!!
……その程度のBPじゃ返り討ち、つまり僕の勝ちって事。君たちはここでオニキス諸
共死んじやうって事♡」

「死なねえし、死なせねえ!!……そのためにオレと龍騎がいるんだ!!……オレと龍騎、み
んなの絆の力は、黒をも塗り潰す!!」

「!?!」

「相手のスピリット、ネクサスを破壊した事で、仮面ライダー龍騎の【零転醒】発揮!!……
サバイブへと強化される!!」

「アスラが転醒を!?!」

アスラ意外の他の面々が彼の転醒の行為に驚愕する中、場の龍騎はベルトに「サバイ

「ブ」のカードを装填……………

……………サバイブ!!

と言う音声と共に強化形態、サバイブへと変化を遂げる。そう、この龍騎はロンのナイトと同様、サバイブへと転醒する力を持っていたのだ。

「さらにこの時、赤き龍ドラグレッツダーは赤き武装龍ドラグランザーへと進化を果たして、今こそ龍騎と一つとなる!!」

「!!」

龍騎がサバイブへと強化された事で、赤き龍ドラグレッツダーも一瞬にして強化形態、赤き武装龍ドラグランザーへと変化を遂げる。

「来いドラグランザー!!……今こそ龍騎サバイブと共に赤々と光り輝く赫焉の烈火へと生まれ変われ!!……ミラージュ!!」

「!?」

「爆誕せよ!!……仮面ライダー龍騎サバイブランザー!!」

「〔仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー〕LV3(4)BP17000

ドラグランザーは分解されていき、ただでさえ強力な龍騎サバイブをさらに強化せんと各々様々な箇所へと装着されていく。

そして最終的に完成したのは仮面ライダー龍騎がミラーライダーの至高の姿、ミラージュへと昇華した仮面ライダー龍騎サバイブランザー。

「これって、ロンのナイトと同じ!?!」

「ああ、アイツならできて当然だ。何せ、このオレが認める、唯一無二のライバルだからな」

鎧から吹き上がる龍騎サバイブランザーの烈火の炎。それを見届けながらそう言葉を落としたのはエールとロン。

そう。これこそが仮面ライダー龍騎の最強形態、アスラの新たなるエースカード、仮面ライダー龍騎サバイブランザー。両腕に備え付けられたドラグランザーの顔を模したブラスタ―が反射で光り輝く。

初陣となるこの戦場で、遺憾無くその力を発揮していく……

「龍騎サバイランザーの転醒アタック時効果!!…相手の最も低いBPのスピリット1体を破壊する!!」

「ツ……確定除去効果!？」

「この効果で2体目のヤクーツオークを破壊だ……メテオバレットミラージュ!!」

両腕に備え付けられた龍の顔を模したブラスタ。それをヤクーツオークへと向け、連射する龍騎サバイランザー。何十発と放たれたその赤々と光り輝く炎の弾丸は瞬く間に2体目のヤクーツオークを貫き、焼き尽くした。

「さらにスピリットを破壊した事により、相手ライフに1つのダメージを与える!!」

「ライフ貫通効果?…でも残念、ヤクーツオークでその効果は無効に……」

「いや、ヤクーツオークはアタックによるダメージを回避できても、効果によるダメージは無効にできない!!……大人しくこのダメージは受けてもらうぜ!!」

「何!?!……ぐっ!」

〈ライフ3?!?2〉ヘタマイト&トウエンティ

ヤクーツオークのLV3効果で常にライフバリアを神秘のボールで守っているヘタマイト。しかしそれで防げるのはアタックによるモノだけ。龍騎サバイランザーの炎の弾丸は神秘のボールをも貫き、ライフ一つを木っ端微塵に粉碎した。

「そして、龍騎サバイランザーの更なる効果で、最後に残ったヤクーツオークに指定アタック!!」

発揮される指定アタックの効果。龍騎サバイランザーの眼差しは最後に残ったヤクーツオークへと向けられるが……

「ジジジ……自らやられに来るとはね。ヤクーツオークと龍騎サバイランザーのBPは25000と17000!!……だから言ったでしょ、もう遅い、何をしても無駄だって!!」

「無駄なんかじゃねえ!!……龍騎サバイランザーの更なる効果、ブロックされた事により、オマエにもう一つダメージを与える!」

「ッ!!」

〈ライフ2?!1〉へタマイト&トウエンティ

再び両腕のブラスターより放たれた龍騎サバイランザーの炎の弾丸がへタマイトのライフを撃ち砕く。

だが、効果を受けても尚、そのライフは未だ残っており、このまま龍騎サバイランザーとヤクーツオークのBPバトルは続行される。ヤクーツオークが木々でできた両腕を地面に当て、巨大な根を蠢かせ、操り、龍騎サバイランザーを襲う。

その巨大な根に一瞬にして縛りつけられ、身動きを奪われる龍騎サバイランザーだったが、背部から赤々と燃え滾る紅蓮の翼を展開し、それらを焼き尽くす事で生還。

「今のは良いダメージだったね!!……でも結果は変わらない!!……どう考えても僕、へタマイトの勝ちだ!!」

「いや、アスラは勝つ!!……そのためにこの私が、今ここにいる!!……フラツシュタイミン
グ、マジック……スネークビジョン!!」

「!?!」

「効果で相手スピリット全てのコアを1個だけになるようにリザーブに置く!!……これ

でヤクーツオークのLVは強制的に1だ!!」

ー「千年杉」ヤクーツオーク（6??1）LV3??1

咄嗟に放った絵溜のマジックカード。それによりヤクーツオークのLVがここに来て大きく後退。LV1のBPは13000。ここに来てようやくアスラ達のスピリットがヤクーツオークのBPを上回った……………

「信じてたぜ絵溜さん!!……………やっぱアンタ達七罪竜の使い手は最高のカードバトラーだぜ!!」

「飛べアスラ!!…頂点王を目指して!!」

「おう!!……………これで終わりだ、ぶちかませ龍騎サバイランザー!!」

「へくく……………ジジジ……………なんだ君たち、強いじゃん♡」

アスラと絵溜の強さに魅入られたかのように不敵な笑みを浮かべるヘタマイト。だがアスラはそんな事お構いなしに龍騎サバイランザーの技名を叫ぶ……………

………ドラッグフレアストーム!!

龍騎サバイランザーは両腕のブラスターからこれまでとは比べ物にならない大きな龍を模した火炎弾を発射。それは最後のヤクーツオークの土手っ腹に大きな風穴を開ける。流石に耐えられなかったか、ヤクーツオークは力尽き、大爆発を起こす。

アスラ達は遂にヘタマイトの操る強敵、ヤクーツオークを全て撃破したのだ。そしてこれで終わりだ。スピリットを破壊した事により、龍騎サバイランザーの効果が適用される………

「そして、龍騎サバイランザーはスピリットを破壊した時、ライフダメージを与える……!!」

「ッ!!」

へライフ1??0へヘタマイト&トウエンティ

ヤクーツオークの爆発の余波がヘタマイトとトウエンティを襲う。そのライフは0となり、彼らの敗北を告げるように「ピー………」と言う甲高い音がBパッドから流れ出

した。

「ジジジ……強いじゃんチビ君……いやアスラ君だったっけ?……僕、君の事好きになりそうだな」

「そうかよ。オレはオマエみたいなヤツ大嫌いだ……さつさとイバラの身体から出て行きやがれ」

だがライフを0にされても尚、イバラの身体を使って不気味な笑みを浮かべ続けるヘタマイト。アスラはそんな不気味な彼女に対して物怖じせずに堂々と言い返す。

「あは♡……言われなくても出て行くよ、この身体じゃ僕の真の力を扱う事はできなさそうだしね……でもその前に聞きたい事があるんだけどさ……君ひよつとして自分は何者なのか知らないの?」

「?!」

「ああ、その顔じゃ本当に知らないんだね……ジジジ……まあいざれ分かると思うよ……じゃ、また僕と遊ぼうねアスラ君……できれば今よりもっともおおつと強くなつてね

♡」

へタマイトは最後に意味深な言葉を幾つか残しつつも、黒い闇の姿となり、一瞬にして姿を晦ました。

身体を乗っ取られたイバラはその場で倒れ込んでしまいが、トウエンティが彼女を抱え、無事を確認した。

「……イバラは大丈夫そうだ」

「そっか……良かったぜ……ッ」

イバラが無事である事に安心したアスラはこれまでの疲れが現れ、倒れそうになるが、それを支えたのはタツグパートナーとして彼共に戦い抜いた絵瑠だった。

「絵瑠さん……」

「やったなアスラ、凄いじゃん!!…龍騎も遂に大復活だね!」

「いやホント、絵瑠さん達七罪竜の使い手の皆さんのお陰っすよ」

最後の最後で龍騎を使ったのは絵瑠や烈我達のお陰であると感謝の言葉を贈るアス

ラ。その言葉に絵瑠は嬉しくなって照れ臭そうに頬を掻く。

そしてアスラは今度はトウエンテイの方へと顔を向けると……………

「なあトウエンテイ。悪いな、バトルを、決着を有耶無耶にしちまって……………今からもう一度やるか？」

「バカ言え。その状態の貴様を倒して龍騎を得ても、オレのプライドがそれを許さない。決着ならまた次回着けてやる」

「はは……………そっか、なんかごめんな」

トウエンテイはそう告げると、己のBパッドを操作し、ワームホールを形成。イバラを抱えながら元の世界へと帰還するつもりなのだろう……………

だがその前にもう一度アスラの方へと首を向けて……………

「アスラ……………何度もオマエとバトルして、わかった事がある……………オレはオマエとバトルしている時だけは己に課した使命を忘れていた……………バトルを、その本質を心より楽しんでいた」

「!!」

「だからオマエとの決着はいつか必ず着けたい、オマエが万全な状態でな………カード
バトラーとしての本性がオレにそう訴え掛けている」

トウエンティがここに来てようやく本音をアスラにぶつける。どうしても聞き
かたつたトウエンティの心の声に、アスラは思わず笑う。

「へへ………そつか!!…おうわかつたぜトウエンティ!!…その時は今よりもっと強く
なって、いつか一人でオマエに勝てるようになってやらあ!!」

「……………フツ」

アスラの宣言に、思わず鼻で笑つたトウエンティ。お互いがお互いを認め合つていた
事を確認すると、トウエンティはイバラを抱えながらワームホールの中へと姿を消して
行つた……………

アスラと絵瑠はその後ろ姿が消えるまで眺めると、今度は烈我達が彼らの元へ駆け寄
る。

「よおアスラ。よく頑張つたな、お前本当に凄い奴だぜ!」

「へへ…そんな事ねえよ烈我。絵瑠さんが居なかったらとつくに死んでたと思うぜ」
「フン……全くアンタはいつもいつも無茶ばかりして……やっぱり私が一緒に戦ってあげないとダメね」

「?!…オレエールと一緒にタッグ組んでもボロボロになるけど?」

「うっさいわね!!……いやまあ無事でよかつたけど……」

「ん?…なんて言った?」

「な、なんでもないわよこのバカスラ!!」

絵瑠がアスラとの距離が近すぎるため、少なからず嫉妬しているエール。しかし鈍感な2人はそんな彼女の様子に気が付きもしない。

そしてそんな中、この1週間の修行の中で最も一緒に過ごし、最も親しくなった烈我がアスラに再び声をかけて……

「決着着けたいけど、俺もあのトゥエンティって奴と一緒に、ボロボロなお前と試合したくないしな。やっぱり万全じゃないと」

「そうだな、決着は次回に持ち越しって事で!……またいつかこの世界に来てやるからよ、その時までには光黄さんに勝てよ!」

「おうよ!……お前も頂点王になれよ!!」

「ああ約束だぜ烈我……オレは頂点王に」

「オレは光黄に勝って結婚!」

……どつちが先に自分の夢を叶えるか、競争だ!!

2人は互いにそう誓い合いながら、己の夢と野望を乗せた拳を合わせる。

「アスラ、なにオレ以外のヤツと拳を合わせて約束してやがる」

「……な、何恥ずかしい事言ってるんだあのバカ烈は……」

嫉妬して怒るロンと恥ずかしがる光黄が各々アスラと烈我に意見を零す。その後、彼らはもう少しだけ烈我達と楽しいひと時を過ごす、やがて異世界転送装置の予備のスイッチを押す。

そして培ってきた絆と友情を残し、次に会う時は己の夢を叶えた時であると信じ、元の世界へと帰って行ったのだ……

ライダーハンターズ決戦篇

48コア 「図書館の魔法使い：VSウイザード」

ここはバトルスピリッツの勝敗や優劣が全てのとある世界。

バトルにおいて重要な役割を担う「ソウルコア」を生まれながらに生み出せない少年アスラは、気合と最後まで諦めないド根性でライダースピリット、「龍騎」に選ばれ、カラーリーダーを始めとした並いる強敵達に挑み続ける。

全ては弱くても、ソウルコアが使えなくても最強である頂点王になれると証明するた
めに!!

「むえ〜」

異世界での激しい激闘を終えて、早数日と言ったところか……

小柄でツンツン頭の少年アスラと、この国最高の身分エックスの少女エールは国の中

心都市、オウドウ都を歩いてきた。オレンジ色の犬みたいな生き物、ムエは何を考えているのか、エールに抱き抱えられたままいつもの変な鳴き声を上げている。

そんなムエの鳴き声など気にも留めず、アスラは己のデッキの中にある1枚のカードを見ては嬉しそうに満面の笑みを浮かべていて……………

「……………えへへ〜」

「…アンタ最近ずつとそれね。笑い方気持ち悪いからやめてくれる?」

「いやだつてさエール、見ろよこの新しい龍騎!!」

「……………もう何万回も見ただよ、このバカスラ」

アスラがエールに見せつけたカードは己を選んでくれたライダースピリット、「仮面ライダー龍騎」……………

これは異世界で進化を果たした転醒の力を持つ特別な個体である。アスラはその事に対していつまでも喜んでいるようで……………

「何度見てもカッケエオレの龍騎!!……………次のカラーリーダー戦で早く使ってえ!!」

「バツカみたい。直ぐ調子乗るんだから……………でも変な話よね、4枚のカードが合体し

て1枚のカードになるなんて。もう他の龍騎はないんでしょ？」

エールがアスラに聞いた。

事実、異世界での戦いで第一の龍騎、第二の龍騎、龍騎サバイブ、そして変身龍騎のカードが合わさり、転醒龍騎が誕生した。もうこの世のどこにも4枚の龍騎は存在しないのである。

今まで一緒に戦ってきたカード達の消失、アスラが当然それにショックを受けないはずはないが……………

「ああ、確かにもう他の龍騎は無い。けどオレにはわかる！……この転醒龍騎にオレ達の違いの全てが詰まってるって!!…オレはこの転醒龍騎と一緒に必ず頂点王になる！」

「…………ハハ、アంతらしいわね」

アスラは新たな切札、転醒龍騎を手に、改めて夢である頂点王になる事を誓う。アスラらしい解答に、エールは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「そう言えばアంత、オニキス……………だったっけ?…アイツのせいでこの間暴走したみた

いだけど、あれから本当に身体は大丈夫なわけ？」

「ん？…おお、別に問題ないぜ。暴走してる時の記憶もないし」

「それはそれで問題だけどね」

アスラの中に宿っている黒き力を持つ存在「オニキス」……………

異世界での戦いでは同類のヘタマイトと言う人物が登場し、恨みでも持っているのか、暴走してしまい、それにアスラも巻き込まれてしまっていた。

その暴走の象徴とも言える黒い龍騎、仮面ライダーリュウガも消え去った事もあり、今では鳴りを潜めている。

「……………アイツ、あのヘタマイトって言うヤツに何かスツゲエ憎んでるみたいだった……………何の訳あってか知らねーけど、どちらにせよいつかアイツのそんな心の蟠りも治せたらいいなって思う」

「……………アスラ……………」

心優しいアスラ。おそらく自分を利用する事しか考えてないであろうオニキスにでさえも尽力を尽くそうと考えている。

そしてふとそんな時、エールが閃いたように口を開き……

「……あつ、そうだ」

「？」

「この間テンドウがオウドウ都立の図書館に行つて黒の世界について学んだつて言つてたでしょ？……ちやうど近いと思うし、私たちもその黒の世界について書かれた本、見てみない？」

「おお……いいなそれ！」

「むえっ！」??いいなそれ！

エールの提案。アスラは黒の世界について知る機会があると思ひ、エールに指を指して大いに賛同してみせる。その頭の上でムエも賛同するように短い手をエールにピシッと向ける。

そんなアスラの賛同の言葉を耳に入れるなり、エールは「じゃあ決まりね！」と声を上げる。こうして、2人は国で最も大きな都立の図書館に行く事が決定した。

ここは国の中心都市オウドウ都の中にある都立の図書館。至る所に本が所狭しと並んでおり、先ず置いてない本は無いと言われている程である。

そしてそんな華やかな雰囲気醸し出す図書館に、アスラとエール、ムエは来ていて………

「うおおお!!…広ええ!!」

「むえええ〜!!」??広ええ!!

「ちよつとバカスラ!!…図書館でデツカイ声出すな!」

「え?…あ、そうなの?…いや〜ごめんごめん。オレ図書館どころか本も読んだ事ないからさ〜」

「むえ………」??ごめんなさい……

「田舎者………と言うかそう言う問題?……あ、別にムエは騒いでいいのよ、可愛いから」
早速喧しいアスラを制すエール。ここは図書館である。当然ながら他の読者のためにも静寂を保っていないといけない。

「……こんな広い所からどうやって一冊しかない本を探すんだよ……」

「まあテンドウはここで見つけたって言うんだし、徹底するしかないわね……一度二手に分かれて探しましよ」

「おう、そうだな」

このままでは余りにも効率が悪い。アスラとエールは二手に分かれて本を探す事にした。ムエはエールに連れ、アスラは一人行動して行く。

「……」

「本か………本って高いし昔から縁はなかったな。図書館ってのも名前しか聞いた事なかったし」

「両手を頭の後ろに回しながらのんびりと図書館内を歩くアスラ。コモンと言う貧しい身分故、本と言う物を生まれてから読んだ事もないし、買った事もない。

幸い文字書きはシイナから学んでいるが、それはバトルスピリッツをプレイするためによった事、特別本に興味があるわけではない。

「…………取り敢えず黒の世界に関する本を……………ツ！」

兎にも角にも、黒の世界、オニキスやヘタマイト、ブラックフォース達に関する本を探さなければとアスラが自覚した直後、その考えを吹き飛ばす本が目に入って来た。

その本の背表紙にはアスラがこの世で最も欲するモノが記載されており……………

「…………し、『身長が伸びる秘訣』……………だって〜!?」

そう。アスラがこの世でソウルコア以上に求めているモノ、それは身長。棚の一番上にあるその本のタイトルは「身長が伸びる秘訣」……………

正しく、アスラがこの世で最も必要とする本であった。

一刻も早く黒の世界が記載されている本を探さなければならぬが、この機を流してしまうと次に図書館を訪れるのはいつかわからない。アスラは猛烈な速度でその棚まで近づくと、その『身長が伸びる秘訣』のタイトルの本を取ろうとする……………

しかしここで障害が……………

「と、届かねえ!!……だってオレチビだから〜!!」

届かなかった。全然届かなかった。軽く飛んでみても大きくジャンプしてみてもだ。届かない理由は言わずもがな、彼がチビだからだ。チビ故に棚の一番上にある本を取れない。あの本はチビを解消するための本なのに……

「うおおー……ここで諦めてなるものかああー!!……ここで身長が伸びたらいつも横を歩くエールやあのクソムカつく天才イケメンヤロー、ロンも見上げさせられる!!……この機会は逃せねえ!!」

アスラは今、猛烈に想像している。背が高くなった自分を……

そしてそれを見て憧れの眼差しを向けるロンとエールを……

そんな光景を妄想すると変な笑いが止まらなくなる。

だが届かない。圧倒的に身長が足りない。腕も短い。今すぐ欲しい。そう思った直後だった。アスラの上方から別の手が伸びてその目当ての本を取り上げたのは

……

「この本が欲しいのかい？……少年よ」

「ツ…………お、おお…………ありがとうございます…………??」

「あと、図書館で大きな声を出してはいけませんよ。他の方々の迷惑になるからね」

「あつ…………そ、そうだった…………す、すみませんでしたああー!!」

「…………うーん。君、僕の話聞いてた？」

現れたのは狐の面を被った長身の男性。熟成された声色からして少なくとも30代以上の人物である事は理解できる。

アスラは一度はその不気味な狐の面に驚くも、見かけで人を判断しない彼はすぐさま大きな声で反省の言葉を告げる。

「おお…………これが身長が伸びる秘訣の本。この魔法の本があればオレもチビを卒業できるのか〜」

「あつはは…………君面白いね…………因みにその本に書いてある事は全てデタラメだよ」

「…………え？」

狐の面の男性にそう言われアスラの表情は青ざめる。

アスラはすぐさま元気を取り戻し、その質問に答える。

「ああ、オレ達、黒の世界って言って、この世界とは別??…のイセカイについて知りたいんす」

「黒の世界??…:…:…おお、それならグッドタイムイングだ!…:…:…僕はこう見えてもこの図書館に通い詰める常連でね、その本ならちょうどこに…:…:」

「!!」

余りにもタイムリー。

狐の面の男性はぶら下げているカバンから『黒の世界』と言うタイトルが刻まれた本をアスラに提示する。

「ま、マジっすか!!…:…:…タイミング良すぎてビビるぜ…:…:…その本にブラックフォースとかオニキスの事とか載っているのか!?!」

(ツ…:…:…既にブラックフォースやオニキスの事を知っているのか!?!)

アスラの口からブラックフォース、オニキスと言うワードが出てきた途端に狼狽、顔色を変えた様子になる狐の面の男性。

だがすぐさま冷静さを取り戻し、立ち直ると……………

「ふふ、この本が欲しいかい少年よ」

「はい!!…めっちゃ欲しいですー!!…喉から手が出る程!!」

「はっはー……そうかそうか!…そんなに欲しいのか。でもタダとは言いづらいな僕も今からこの本を借りて置きたいんだ。この本には壮大な昔話が刻まれているからね」

「!!」

「君がこの本を手にするためには僕にバトルスピリッツで勝つ事。それが条件だ。君もこの世界に生まれた人間なら、当然理解はあるだろ?」

「へへっ……おうっす!……ちようどカラーリーダー戦前に調整した新しいデッキを回したいと思つてたところっす!」

「ふふ……成る程、カラーリーダーに挑戦する者だったか」

本の所有権を得るためには狐の面の男性にバトルスピリッツで勝利する事が絶対条件となったアスラ。カードバトラーとしての本能がバトルをしたくてウズウズしてい

るのか、その表情からは笑みが溢れる。

「じゃあ場所を移そうか。図書館内でのバトルは禁止されているからね」

「おうっす！」

「……あつバカスラ。黒の世界に関する本、見つかった??」

「あ、エール」

「ちょうど図書館を出ようとした直後。アスラに声をかけたのはエール。その腕にはムエがぬいぐるみのように大事に抱き抱えられている。」

「聞いて驚くなよエール!……本はなんとこの狐の面のおっちゃんが持つてたんだぜ!」

「狐の面……って、ええ!？」

「あつはは、ごめんごめん、びっくりさせちゃったかいお嬢さん」

狐の面の男性の不気味な狐の面に驚くエール。だが彼のその優しそうな声色から直ぐに慣れる。

しかし、狐の面の男性はここで墓穴を掘る。

「へへっ……自己紹介がまだだったな狐の面のおっちゃん!!……オレはアスラ!!……いつか絶対頂点王になる男だ!!」

「おお頂点王か、壮大な夢だね。せつかく名乗ってくれて悪いんだけど、僕の本名は明かせなくてね、今は『仮面Z』……とでも呼んでくれ」

「うおおお!!……『仮面Z』!!……なんてカッコエ名前前の響きなんだ!!」

「え?…あ、そう??…そこまで褒められるとおじさん照れちゃうなく」
「いやどう聞いてもダサイでしょ」

B パッドを展開し、バトルの準備をしながら己の自己紹介をするアスラと仮面Zと名乗る男性。

その仮名をアスラは猛烈に高く評価するが、エールは酷く評価する。まあ普通に考えたらちよつとダサイ。

「よし。本を賭けようなんて言い出したのは僕だけど、全力で楽しもうか少年……いやアスラ!」

「おう乙のおつちゃん!!…互いの全力を尽くしあおうぜ!!」

展開したBパッドに己のデッキをセットし、初期手札を構える両者。これでバトルスピリッツの準備は完璧……………

そして……………

……………ゲートオープン、界放!!

エールとムエが見守る中、コールと共にアスラと仮面乙によるバトルスピリッツが広場の草原にて行われる。

先行はアスラだ。開始早々勢い良くメインステップまでトップスピードで駆け抜ける。

「ターン01」アスラ

「メインステップ!!…オレはドラグノ突撃兵を召喚!!」

「ドラグノ突撃兵（R） LV1（1） BP4000

アスラの場合に颯爽と現れたのは今や彼のデッキでは絶対的なアタッカー、ドラグノ突撃兵。巨大なハンマーを構え、バトルに対してのやる気を見せている。

そしてこの瞬間に、仮面乙はある事に気がついて……

（……Bパッドにソウルコアが無い……この子は……）

「あつ……気がつきました？……えっへへ、すみません、オレ昔から何故かソウルコアが使えないんつすよね〜！」

仮面乙が察する中、アスラは己の境遇について軽く説明した。ソウルコアが無いと言う事は手抜きも同然なので、事前に使わないのではなく、使えない事を説明しなければならぬのだ。

しかし、普通なら驚くか笑われる事だが、仮面乙はそんなそぶりは一切見せず……

「……成る程。アスラ、やっぱり君は面白いね」

「??:…とりあえずオレはこれでエンドっす!」

手札:4

場:〔ドラグノ突撃兵へR〕 L V I

バースト:〔無〕

すぐさまアスラのソウルコア無しスタイルを受け入れる仮面Z。アスラは今までにない不思議なりアクションに疑問を抱きながらも、そのターンをエンドとした。

「ターン02」 仮面Z

「メインステップ:…おじさん結構久し振りなバトルだからね、張り切って行っちゃおうかな?」

「!」

そう独り言を溢しながら、仮面Zは己の手札から1枚のカードを引き抜き、それをBパッドに叩きつける。

それはアスラやエールも驚愕するであろうカードであり……

「変身。仮面ライダーウィザード……………!!」

「ツ……………ライダースピリット!？」

「しかも一握りのライダースピリットしか持っていない変身のカード!？」

……………シャバドウビタツチヘンシーン!!

……………シャバドウビタツチヘンシーン!!

……………ヒー! ヒー! ……ヒーヒーヒー!!

【変身!! 仮面ライダーウィザード】 L V 1

右側から赤い魔法陣が仮面Zを通り過ぎると、仮面Zは黒い衣装に赤い宝石のような仮面を装着した魔法使いのようなライダースピリット、仮面ライダーウィザードへと変身を遂げた。

一握りしかない変身のカード。そのカード達が如何に強力かはアスラもこれまでの経験で痛いほど理解できて……………

「……どうだい?…これが僕の相棒、仮面ライダーウイザードだよ……カッコいいだろ?」

「お、おお!!…まさかまさか過ぎるけどドチャクソカッコいいぜZのおつちゃん!!」

「ふふ、神託の効果でデツキからカードを3枚トラッシュへ……今回の対象カードは3枚。よって3個のコアを僕に追加するよ」

ー【変身!!仮面ライダーウイザード】(0??3) L V 1??2

配置時に行われる神託により、すぐさまレベルアップを果たす変身のカード。そして変身した仮面Zは小さく笑い声を上げながらも1枚のカードをBパッドへと叩きつけて……

「さらに僕はこのネクサスカード……アンダーワールドをL V 1で配置するよ!」
!?

ー【アンダーワールド】L V 1

仮面乙が配置したネクサスカード。しかし、それは普通のネクサスカードではないのか、その影響で、眩い光と共にバトルする場所はすぐさま変更される。

一瞬にして場所が変わって一早くリアクションしたのはエールだった……………

「……………どこよここは？……………えらく小さな家々ね。でもちよつと風は優しくて気持ちいいかも……………」

「……………」

「ふふ、君なら知ってるはずだよねアスラ……………」

「え？」

エールが疑問を抱く中、アスラは唯一この場所を知っていた。

いや、知らないわけがない。何せここは……………

「……………す、スーミ村だ……………オレを育ててくれた村だ……………」

「ええ!? ……そうなの!？」

「久し振り過ぎてビックリしたぜ……………でもなんで?？」

そう。アスラとその最大のライバルロンの故郷、スーミ村であった。当然ながら単なるネクサスカードが何故スーミ村になったのかについて疑問を抱くアスラ。

そしてその疑問を仮面Zは軽く説明していく。

「このネクサスカード、アンダーワールドは対戦相手の過去を少しだけ覗く。その人物にとつて一番大事な思い出が詰まった場所をバトル中のみ実体化させてくれる」

「……へえ〜…変わったネクサスだな……おつ、懐かしいな…見ろよエール、あの小さな家でシイナとロンと一緒に暮らしてたんだぜ！」

「へ、へー…べ、別にどうでもいいけど」

アンダーワールドと言うネクサスカードはその人物にとつての思い出の場所が蘇る。アスラにとつてはそれはスーミ村だったのだ。

昔話をするアスラに、エールはどうでもいいといいながらも、顔を赤らめ、興味津々にその話を聞いていた。

「(……ロン。そうか、やはりアスラ君は……) ……ターンエンドだ。存分にかかってくるといい！」

手札：3

場：【変身!! 仮面ライダーウィザード】LV2

【アンダーワールド】LV1

バースト：【無】

「おう!!…久し振りにスーミ村を見せてくれてありがとなZのおつちゃん!!…でもバトルはバトル!!…手は抜かないぜ!!」

アスラの口から出た『ロン』と言う名に、少なからず反応を示す仮面Z。一応このターンはエンドとし、次はアスラのターンとなる。

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!…ドラグノ突撃兵のLVを2に上げてアタックステップ!!…ドラグノ突撃兵はアタックステップ中BPプラス3000だ!」

1【ドラグノ突撃兵へR】LV1??2(1??2)BP6000??9000

アスラのデッキにおいて序盤のエースアタッカーを担うドラグノ突撃兵。LVアツプもアタックステップ開始時に伴いそのBPを大きくパンプアップさせていく。

「でもってアタックだ突撃兵!!…LV2効果でデッキからカードを1枚ドロ―!」
「……成る程、攻めが得意な赤属性らしい判断だね。ライフで受けようか」

〈ライフ5??4〉 仮面Z

ドラグノ突撃兵が全力で仮面Zにハンマーを振り、そのライフを1つ砕いた。
そしてこの程度では済まず……

「へへっ……まだ行けるよな突撃兵…【追撃】の効果で重疲労させる事でもう一度アタック―…効果で1枚ドロ―!」

「ツ……単機で二度のアタックを……仕方ない、それもライフだ」

〈ライフ4??3〉 仮面Z

再度その巨大なハンマーを振るうドラグノ突撃兵。仮面Zのライフへと直撃し、再びそれを一つ粉碎した。

「つしやあああー!!…決まったぜ連続攻撃!!…オレはこれでターンエンドだ!!」

手札：7

場：【ドラグノ突撃兵へR】 LV2

バースト：【無】

ドラグノ突撃兵は一度の回復でも疲労状態のままである重疲労状態に陥ってしまうものの、このターンだけで2枚のカードドロート、2つのライフを破壊したアスラ。

幸先の良いスタートを切り、そのターンはエンドとした。

だが、仮面Zのウィザードデッキの真骨頂はここからであり……

「ターン04」仮面Z

「メインステップ。仮面ライダーウィザードフレイムスタイルを召喚！」

「!」

「……ヒー! ヒー! ……ヒーヒーヒー!!」

「【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】LV2 (2) BP4000

再び赤い魔法陣が仮面Zの場を横切ると、その通り過ぎた跡地から変身した姿と全く同じ姿をした赤いウィザードが姿を見せる。

「先ずは神託で変身のカードにコアを置いて、フレイムスタイルの召喚時効果。デッキから3枚のカードをオープン、その中にある「仮面」「導魔」を持つ赤、緑、青、黄のカードを1枚ずつ手元に置く」

「手元!? ……手札じゃなくて!?!」

「カードをオープン!! ……オープンされたのはウィザードハリケーンスタイル、ウォータースタイル、ランドスタイル! ……それぞれ緑、青、黄色の「仮面」「導魔」を持つカードなので全て手元に置くよ」

「召喚時効果で手札ではなく手元を増やすウィザード。しかし、それが仮面ライダーウィザードの特徴の一つとも言える。仮面Zがウィザード達を手元に置く様はいささか魔力の供給にも見える。」

「さらに今や手元に追加した仮面ライダーウィザードハリケーンスタイルを召喚！」

……フー！フー！…フーフー、フーフー！

「〔仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル〕LV1（1S）BP2000

真上から魔法陣が通り過ぎて行き、その中から緑色のウィザード、ハリケーンスタイルが姿を見せる。」

「神託で僕自身にコアを置き、ハリケーンスタイルの召喚時の効果でコア一つをフレイルムスタイルに追加。さらにそのコアを使い、手札からブレイヴカード、ウィザードソードガンをフレイルムスタイルに合体だ！」

ー【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル＋ウィザードガン】LV2(2) B
P7000

コアブースト直後、そのコアを無駄なく活用してみせる仮面Z。銃剣一体の合体であるウィザードガンがフレイムスタイルへと装備される。

「アタックステップ!…さっきのお返しだよアスラ。合体したフレイムスタイルで攻撃だ!…ウィザードガンにより、そのシンボルは黄色のダブルシンボル、一撃で2つのライフを破壊するよ!」

「ッ!…ライフで受ける!…ッ!」

へライフ5??3へアスラ

颯爽と、それでいて華麗に剣を構え、飛び出したウィザードフレイムスタイル。アスラのライフを見事な剣技で一気に2つ斬り裂いて見せた。

「……ハリケーンスタイルはブロッカーとして残し、このターンはエンドとしようか」

手札：2

場：【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル＋ウィザースwordガン】LV2

【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】LV1

【変身!!仮面ライダーウィザード】LV2 (4)

【アンダーワールド】LV1

バースト：【無】

ドラグノ系スピリットによる【追撃】を警戒しての事か、緑色のウィザード、ハリケーンスタイルをプロットカーとして残し、そのターンをエンドとする仮面Z。

そして次はコアの増えたアスラの反撃だ。

「ターン05」アスラ

「メインステップ！……先ずはドラゴンヘッドを2体召喚！」

ー【ドラゴンヘッド】LV1

ー【ドラゴンヘッド】LV2

下準備と言わんばかりにアスラは2体のドラゴンヘッドを場へと呼び出す。

そして手札にあるカードをさらにもう1枚引き抜いて……………

「行くぜ、ライダースピリットにはライダースピリットだ!!……ドラグノ突撃兵から不足コストを確保!!……来いオレの相棒、仮面ライダー龍騎!!」

「!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV1 (1) BP5000

ドラグノ突撃兵がレベルダウンし、肩をすくめるが、直後に様々な鏡像が重なり合い、龍の影を纏う赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎がアスラの場へと見参して見せる。

「……………仮面ライダー龍騎……………か」

「行くぜZのおっちゃん!!……アタックステップだ!」

仮面乙が龍騎の存在を懐かしむように言葉を落とすが、アスラはその言葉を全く耳に入れず、勝利をもぎ取るために己のアタックステップへと移行する。

「行け仮面ライダー龍騎!!…アタック時効果でネクサスカード、アンダーワールドを破壊して回復だ!」

「!」

仮面ライダー龍騎はベルトに備え付けられたデッキからカードをドロウ。それを左腕の龍の頭部を模したバイザーに装填……………

……………ストライクベント!!

と言う音声と共に、同じく龍の頭部を模したガントレットを装備。龍騎はそれを上空へと突きつけ、火炎放射を発射する。

「……………いいのかい?…アンダーワールドを破壊すると言う事は、ここはもうスミ村ではなくと言う事だよ?」

「へへっ……………もう十分さ、そんな小さい事に拘ってたらバトルなんて勝てねー!」

ー【仮面ライダー龍騎】（疲労??回復）

上空へと放たれた火炎放射はやがて空間に紫の亀裂を生じさせ、そこを中心に全体に綻びが出て行き、スーミ村、もといアンダーワールドは崩壊した。

そして舞台は再び図書館前の広場。原っぱへと戻り……………

「行くぜ!!…オレの龍騎の真骨頂はここからだ!!…相手のネクサスカードを破壊した事により【零転醒】発揮!」

「!」

「現れる、仮面ライダー龍騎サバイブ!!」

仮面ライダー龍騎はアンダーワールドの破壊をトリガーに、ベルトからサバイブのカードを引き抜き、それを新たに出現させた龍の頭部が描かれたショットガンに装填……………

……………サバイブ!!

と言う力強い音声と共に、烈火、龍騎サバイブへと強化を果たした。

「〔仮面ライダー龍騎サバイブ〕LV1(1)BP7000

「ほおこれは珍しい。転醒まで使えたか」

「おうよ！…この新しい龍騎でオレは勝つ!!…転醒アタック時効果、最もBPの低いスピリット1体を破壊だ！」

「！」

「今、Zのおっちゃんの場合で1番BPが低いのはハリケーンスタイル!…よってそれを破壊させてもらうぜ!…メテオバレット!!」

転醒直後にショットガンより放たれる龍騎サバイブの烈火の弾丸。それはウィザードハリケーンスタイルに命中し、瞬く間に焼き尽くして見せる。

「さらにまだアタックは継続中だ!…このターンで一気に勝負をつけさせてもらう！」

今の仮面ライダー龍騎サバイブは回復しており、このターンのみで最低2回の攻撃が行える。

仮面Zのライフは残り3。【追撃】で攻撃できるドラグノ突撃兵や2体のドラゴン

ヘッドの存在により、このターンでのアスラの勝利は明確かと思われた……………
だが……………

「凄い勢いだ。だけど、おじさんもまだまだ若い子には負けちゃいけない年齢なんですね。大人気ないけどいかしてもらうよ!!……………フラッシュマジック、手元にある仮面ライダーウィザードランドスタイルの効果!」

「ツ……………フラッシュマジックでライダースピリットの効果!」

仮面乙がカウンターとして放ったのはマジックカード。しかしそれはライダースピリットでもある一風変わった存在……………

「ランドスタイルのマジック効果は、このターンの間スピリット1体のシンボルを0にする。対象は当然龍騎サバイブだ」

「!!」

「そしてそのアタックは当然ライフで受けるよ……………0だから減らないけどね」

直後に龍騎サバイブが一瞬のみ閃光に囚われる。無事ではあるものの、ライフを破壊

するのに必要不可欠なシンボルを奪われる。

仮面乙のライフを破壊するには至らなかった。

「僕を選んでくれたライダースピリット、仮面ライダーウィザードの1番の特徴は大半のスピリットがマジックカードでもあると言う事。スピリットとして扱うか、はたまたマジックカードとして使うかは僕次第だ」

「スピリットでもあり、マジックでもあるライダースピリット……へへっ……面白くなって来たぜ」

ウィザードの一風変わった特徴を聞かされるアスラ。目の前の仮面乙は意外にも強敵である事を知ると、笑みを浮かべて再びアタックへと意識を向ける。

「【追撃】の効果でドラグノ突撃兵を重疲労させてアタックだ！」

「今度は3体のスピリットによる波状攻撃が狙いかい？……でもそうはいかない。フラッシュ、変身した僕の【神技】を發揮！」

「!!」

「コア3つをボイドに置き、トラッシュに眠るライダーマジックカードを手札に戻す

……僕はさつき君が破壊してくれた仮面ライダーウィザードハリケーンスタイルを手札に戻すよ」

ー【変身!!仮面ライダーウィザード】(5??2)

創界神ネクサスである変身カードの効果。それにより緑色のウィザード、ハリケーンスタイルが手札へと帰還する。

このタイミングで戻すと言う事は、このウィザードも当然ながらフラッシュ効果が使えると言う事であり……………

「フラッシュマジック、今戻したハリケーンスタイルの効果を発揮!!……………コスト3以下のスピリット3体を疲労させる」

「ッ……………なに!？」

「この効果でドラゴンヘッド2体を疲労だ」

ー【ドラゴンヘッド】(回復??疲労)

ー【ドラゴンヘッド】(回復??疲労)

吹き荒れる緑色の風。それらが上空で飛び交っている2体のドラゴンヘッドを疲れさせ、地へと追いやる。

「ドラグノ突撃兵のアタックはライフで受けるよ！」

へライフ3??2へ 仮面Z

1人立ち向かうドラグノ突撃兵。三度そのライフバリアを自慢のハンマーで1つ砕く。

だが、これ以上アスラに攻め手は無くて……

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【ドラグノ突撃兵へRへ】 L V 1

【ドラゴンヘッド】 L V 1

【ドラゴンヘッド】 L V 2

【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV1

バースト：【無】

結果的に、仮面ライダー龍騎サバイブをブロッカーとして場に残り、そのターンをエンドとする事になったアスラ。

次は特殊なライダースピリットであるウィザードを見事に使いこなして見せた仮面Z。華やかにそのターンシークエンスを進めていく。

「ターン06」仮面Z

「さて、楽しい時間だったけど、そろそろフィナーレと行こうか」

「ふい、ふいなーれ……ってどう言う意味だエールううく?!」

「終わりって意味よこのバカスラアアアー!!……ちゃんとバトルに集中しなさいよ!」

エールに叱れるアスラ。その様子に幸せそうな優しい声色で笑い声を上げると、仮面Zは己のBパッドに最強のウィザードのカードを叩きつけて見せる……

「変身した僕の【神域】により、トラッシュユにあるカードでもウィザードは軽減シンボルを満たす事ができる……よってフル軽減で現れる……仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル!!」

「ツ……!!」

……インフィニティー!!

……インフィニティー!!

ヒースイーフードー、ボウザバビュードゴーン!!

0
 ー【仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル】LV3 (3) BP1600

魔法陣から美しいダイヤモンドでできた白銀のドラゴンが現れ、天高く舞い上がったかと思えば、地へと急速に落下。それは砕け散って行き、中から仮面ライダーウィザードの最強の形態、仮面ライダーウィザードインフィニティースタイルが出現した。

その鎧はダイヤモンドで光り輝き、その手には斧のような、はたまた剣のような武器が握られている。

「……………す、スゲエ……………」

余の優雅さ、美しさにアスラもそれ以上の言葉が出ない。そして仮面Zはそのウィザードインフィニティースタイルの力を存分に発揮させて……………

「インフィニティースタイルの召喚時効果。トラッシュにある全てのライダーマジックカードを僕の手元に置く」

「なツ!?…全て!?…じゃあさっきのターンで使ったヤツも全部復活!」

「その通り!!……………インフィニティースタイルが存在する限り、魔力は尽きない!!……………トラッシュに眠るハリケーンスタイル1枚と、ランドスタイル3枚を僕の手元へ!!」

インフィニティースタイルの強力な召喚時効果により、低コストスピリットを疲労させる効果を持つハリケーンスタイルが1枚。龍騎サバイブのシンボルをも消して見せたランドスタイルが3枚、手元に置かれる。

「さらに、場のフレームスタイルに合体しているウィザードソードガンをインフィニ

「テイースタイルへと付け替える！」

1 【仮面ライダーウィザードフレームスタイル】LV2 (2) BP4000

1 【仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル+ウィザードソードガン】LV
3 (3) BP19000

ウィザードフレームスタイルが銃剣、ウィザードソードガンを上空へと投げると、インフィニティースタイルは跳び上がりそれをキャッチ。元々あつた武器と並べて二刀流となつた。

これで準備は整つた。

「そう言わんばかりに仮面乙はアタックステップを宣言して……………」

「アタックステップ！…アタックだインフィニティースタイル！…そしてこのフラッシュタイミング、手元に存在する仮面ライダーウィザードウォータースタイルの効果！」

「!!」

「このターンの間、ウィザード1体のLVは最大となる…けど、今のウィザード達は既

にLVが最大、この効果は無駄に終わる」
「え？……だつたらなんで……」

青いウィザード、ウォータースタイル。その効果でLVが最大となれるが、今は特に必要な時ではない……

だが、飽くまでもインフィニティースタイルがいなければの話ではあるが……

「だけどこの瞬間、インフィニティースタイルのアタック時効果を発揮……マジックカードを使用した時、このスピリットは回復し、ブロックが不可となる！」

「ツ……そうかこのためにわざわざ無駄にマジックを……」

「ようやく、理解できたようだね。このターンで僕の勝ちだよ」

二本の剣を構え、アスラに斬りかかるウィザードインフィニティースタイル。ブロッカーである龍騎サバイブもその素早い動きを見切る事ができない。

絶体絶命のピンチ。コアとライダーマジックカードがある限り、インフィニティースタイルは幾らでもアタックができる。

しかし、アスラはそれを止めるべく、逆転へのマジックカードを1枚、己のBパッド

へと叩きつけて……………

「まだだ、まだまだああー!!…フラッシュマジック!!…リアクティブバリア!!」

「!!」

「不足コストは龍騎サブイブを除いた、全てのスピリットから確保!!…力を借りるぜ、みんな!!」

ドラゴン突撃兵、2体のドラゴンヘッドが全てのコアを取り除かれた事により消滅してしまいが、これで白の防御マジック、リアクティブバリアが発揮される……………

「リアクティブバリアの効果で、このバトルの終了がこのターンのアタックステップの終了だ!!…そのライダースピリットのアタックはライフで受ける!!」

へライフ3?!1アスラ

インフィニティストアイルの二刀流の二撃がアスラのライフを一気に2つ穿つ。だがこの瞬間、リアクティブバリアの効果が発揮され……………

「リアクティブバリアの効果でZのおっちゃんのアタックステップは終了する!!」

「……ふむ。ファイナルとはいかなかったか……なら仕方ない、アタックは終わろう。ただどエンドステップ。インフィニティースタイルの更なる効果、エンドステップにこのスピリットの召喚時効果を発揮させる」

「!」

「さつき使用したウイザードウォータースタイルをトラッシュユから手元へ移動、これで真正正銘ターンエンドだ。さあ来たまえアスラ、この最強の布陣を超えられるモノならね」

手札：3

場：【仮面ライダーウイザードフレイムスタイル】LV2

【仮面ライダーウイザードインフィニティースタイル+ウイザードソードガン】LV3

【変身!!仮面ライダーウイザード】LV2(3)

手元：【仮面ライダーウイザードハリケーンスタイル】

【仮面ライダーウイザードウォータースタイル】

【仮面ライダーウイザードランドスタイル】

【仮面ライダーウイザードランドスタイル】

【仮面ライダーウィザードランドスタイル】

リアクティブバリアにより、強制的にターンエンドまで追い込むも、アスラの不利な状況は変わらない。

低コストでアタックすればハリケーンスタイルに疲労させられ、多くのシンボルをもつスピリットでアタックすればランドスタイルによって0にされてしまう。正に八方塞がり、難攻不落。

だが、当然の如くこの程度で諦めるアスラではない。

「行くぜオレのデツキ。次のターンが正念場だ……い！」

最後まで諦めない志を胸に、己のターンを全うして行く。全ては頂点王になるために

……

「ターン07」アスラ

「ドローステップ……ドロー!!……ッ」

ターンシークエンスの過程の中、ドロウを行うアスラ。そしてそれはこの絶体絶命な状況を覆す可能性を秘めたカードである。

アスラはそのカードに望みを託し、一気にメインステップまで駆け上がる。

「メインステップ!!……召喚だ。来いミラーモンスター、ドラグレッダー!!」

ー【ドラグレッダー】LV1(3)BP6000

空間の裂け目から現れたのは胴の長い赤き龍。仮面ライダー龍騎に宿るミラーモンスター、ドラグレッダーだ。だがその姿は場の龍騎サバイブの影響なのか、一瞬にして赤き武装龍ドラグランザーへと姿を変える。

「そして、場の仮面ライダー龍騎サバイブと合体だ!!……赫焉の烈火へと生まれ変われ!!……ミラージュ!!」

アスラが龍騎サバイブとドラグランザーに向かってそう叫ぶと、ドラグランザーは

パーツを分解して行き、それらを龍騎サバイブの各所へと装備させて行く……

「現れる!!……龍騎サバイブランザー!!」

―【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】LV3(4)BP17000

そして完全に合体が完了すると、新たに誕生したのは仮面ライダー龍騎最強の形態、仮面ライダー龍騎サバイブランザー。両腕に備え付けられたドラグランザーの顔を意匠したプラスターが光り輝く。

「おお……文字通りの合体。そんな裏技を隠し持っていたとは」

「おうよ……これがオレの切札、仮面ライダー龍騎サバイブランザーだ!!……行くぜ乙のおっちゃん!」

これで決める。と言う気概と勢いのまま、アスラは切札である龍騎サバイブランザーと共にアタックステップへと突入する。

「龍騎サバイブランザーでアタック!!…その効果で最もBPの低いスピリット1体を破壊!…BP4000のウィザードフレイムスタイルを破壊だ!…メテオバレットミラーージュ!!」

両腕のブラスターから放たれる赫焉の火炎弾。それはウィザードフレイムスタイルを焼き尽くし、爆散させた。

そしてここで終わりではないのが龍騎サバイブランザーの凄いところである。

「龍騎サバイブランザーは相手のスピリットを破壊した時、相手に1点のダメージを与える!」

「ツ……ライフ貫通効果!?!……ぐっ」

へライフ2?!1へ 仮面Z

ウィザードフレイムスタイルの爆発の余波が仮面Zを襲う。そのライフは遂にアスラ同様の1となってしまった。

「この効果があればランドスタイルのシンボル0は関係ねえ!!…更なる効果でウィザードインフイニティースタイルに指定アタックだ!!」

「なに?…:龍騎サバイブランザーのBPは17000。対するウィザードインフイニティースタイルはウィザードソードガンとの合体でBP19000…:自ら破壊を望んでいるのか!?!」

BPが劣っているスピリットからの唐突な指定アタック。龍騎サバイブランザーはインフイニティースタイルに赫焉の火炎弾を撃ち放つが、インフイニティースタイルはダイヤモンドのような装甲でそれらを全て弾きながら突き進んでいく。

まだ刃を交えていないと言うのに感じるスピリットとしての圧倒的な力の差。このままでは間違いなくアスラの龍騎サバイブランザーは破壊されるであろう…:…:

しかし…:…:

これを見越していないアスラではない。龍騎サバイブランザーの最後の効果を発揮させる…:…:

「撃ち抜くのはインフイニティースタイルじゃない…:龍騎サバイブランザーはブロックされた時にも相手ライフを一つ破壊する!」

「ツ…………それを狙って指定アタックを…………!!」

「戦う必要はねえ!!…Zのおっちゃんのリライフを撃ち抜け、龍騎サバイブランザー!!」

再びインフィニティースタイルを狙って放たれたと思われた龍騎サバイブランザーの火炎弾。だがそれはインフィニティースタイルを横切り、彼の主人である仮面Zのリライフへと叩きつけられる…………

「…………成る程ね。アスラ、強いな君は……………」

〈ライフ1??0〉 仮面Z

仮面Zはそう言い残すと、被弾した龍騎サバイブランザーの火炎弾が遂にライフを撃ち抜き、そのライフを全て破壊して見せる。彼のBパッドからは敗北を告げるように「ピー…………」と言う甲高い音声が鳴り響いた。

そして同時にその音はアスラの勝利を告げる音でもあつて…………

「つしやあ!!…これがオレの新しい龍騎、龍騎サバイブランザーの力だ!!」

アスラが勝鬨を上げるようにそう叫ぶと、龍騎サバイブランザーもそれに応えるかのように両腕のブラスターを構えた。

これにて、黒の世界が記載されている本を賭けた図書館前のバトルスピリッツはアスラの勝利に終わった……

「いったた。効いたよ……流石、カラーリーダーに挑み続けているだけの事はあるね。とてもじゃないけど、おじさんじゃ敵わなかったよ」

「いやいや!!…Zのおっちゃんもめっちゃ強かったぜ!…結局最後までインフィニティースタイルを倒せなかったし!」

バトルも終わり、お互いを称え合う2人。龍騎サバイブランザーの効果でアスラは勝利こそ取めたものの、仮面Zのエースカードであろうインフィニティースタイルを倒せなかったのが心残りのようだ。

「はい。約束の本だ。と言っても神話、おとぎ話の本だから、宛になるかはわからないけどね」

「おお……ありがとうございまアアアアア！」

「ふふ、図書館の本だからね、期限が来たらしつかり返すんだよ」

目をキラキラと輝かせながら約束の本を貰い受けるアスラ。これで黒の世界についてわかるのかと思えば、ほんの少し嬉しくなる。

「ようやくゲットね。期限はまだまだ先だし、次の紫のカラーリーダー……と言うかカゲミツがいる町、シエン町に向かいながら読みましょうか」

「おう……そうだな」

エールがそう提案すると、アスラもそれに賛成する。紫のカラーリーダーカゲミツ・ブゲイ。彼女の住う町の名前がシエン町と呼ばれるのだ。

「……ほお、次はこの国で2番目に強いカラーリーダーと言われているカゲミツ・ブゲイ様とのバトルなのか。手強いだろうけど、アスラならきつと勝てると思うよ、自信を

持って頑張ってるね」

「はいZのおっちゃん!!…いつか必ずまたバトルしましょオオオ!!」

この少ない僅かな時間の中で、大きな信頼関係を築き上げたアスラと仮面Z。硬い握手をお互いに交わすと、アスラとエールは次の目的地、シエン町へと向かっていった。

仮面Zはそんな2人が見えなくなるまで手を振り、完全に別れるまで見届けた。

やがて1人になると……………

「……………まだ、僕が必要な時ではないな……………いつか必ず、貴女との約束を果たして見せます……………」

少しだけズレた狐の面を戻しながら、悲しそうな声色でそう呟いた仮面Z。彼はいたいたい何者なのだろうか……………

49コア 「三ツ首龍大進行」

5つ目の紫のカラーカードを求め、オウドウ都を出てシエン町へと向かって森を歩き続けるアスラとエール、次いでにオレンジの小動物ムエ。

その道中、エールは図書館から借りた黒の世界について描かれた本を読書していたが

……………

「……………ダメね。幾ら読んでもブラックフォースの詳しい情報は無さそう……………テンドウが言つてた以上の情報は得られないわ」

「そっかく……………まあしょうがないよな」

本と言つてもかなり薄く、その物語は非常に浅い。内容を分かり易く要約すると……………

場面1：大昔に4人のブラックフォースが暴れ回った。

場面2：ブラックフォース達は神々の鉄槌を受け全く別の世界に放り込まれ、その肉体を失ってしまった。

場面3：その世界は『黒の世界』と名付けられ、ブラックフォース達は神々が選んだ一族によって監視させられたのでした……………

これでめでたしめでたしで物語は幕を閉じている。なんとも言えない簡素な昔話である。

「うーむ。アレか？…じゃあ今この世界にオニキスとかがいるって事は、その神様を選んだ監視役の一族がいなくなったから？」

「どうだろ、昔話だからね」

監視役の一族が黒の世界から消えたからこそ今オニキス達ブラックフォースが目覚めつつあるのではないか……………

そう思うアスラだが、結局真相は闇の中のままである。

「まあ、今はそんな難しい事考えてもしようがないよな。先ず目の前のカラーリーダー戦に集中だ!!」

「カゲミツよね。正直今までのカラーリーダー達とは格が違うって感じがするわ。まさかあんなに強かったなんてね」

次の目標である紫のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイの事を頭に思い浮かべるアスラ。実は一度龍騎が使えなかったからとは言え、圧倒的な力の差で大敗を喫している。その強さは頂点王シイナからも折り紙付き。いくら転醒龍騎の力を駆使したとしても、そう易々と勝たせてくれる相手ではないだろう。

「へへ。確かにカゲミツ姐さんはメツチャ強い……一回負けたし……けどあの天才イケメンヤロー、ロンが勝ったんだ。アイツにやれて、オレにやれない事なんてねえ……絶対勝つてオレも5枚目のカラーカードをゲットしてやる！」

「むえ〜」??その意気や良し

「……そ。ま、まあ応援してやらなくもないわ……」

アスラが志を口にする、その頭の上に乗っかっているオレンジの犬みたいな小動物ムエもまた応援しているかのように鳴き声を上げる。エールも照れ臭そうにしながらもアスラを応援する。

だがそんな時だ。彼らの道を唐突に遮るように現れ、アスラ達に、いや、アスラは除き、エールだけに喋りかけて来た人物が一人……

「やあ、その素敵なお嬢さん。その身なり服装、かなりの高身分者と見た……………是非是非、このしがない私と一戦……………」

「誰よアンタ」

「コイツどつかで……………ッ」

生暖かくて気味の悪い声色。長髪に額から右目に掛けて存在する大きな傷痕。アスラはこの人物をどこかで見た事があるような気がしてならなかったが、すぐさま思い出して見せた……………

この人物は……………

「そうだオマエは……………いつかのライダースピリット盗人ヤロー!!」

「あ?……………あつテメエはあの時のソウルコアが使えないクズチビ!!…後オレの名前はそんな長つたらしい名前じゃなくてクサリだ!!」

「オレもクズチビじゃねえ、アスラだ!」

アスラが思い出した直後にそう言い放つと、向こうもアスラを認識する。

やはりこの人物はおよそ一年前、アスラがまだ龍騎に選ばれていなかった頃、ロンのナイトを狙い、彼を襲って来たモスラデツキの使い手、『舞蛾のクサリ』で間違いなかった。

「ロンの次はエールのカードか!!……こりねえヤツだな!」

「テメエもな!!……つーかなんでテメエみたいなコモンの薄汚いガキが高身分者の女と一緒にいやがる!」

「仲間だからに決まってるんだろコノヤロー!」

「理屈になってねえよ」

当然の如く口論になる2人。あの日以来、やはり因縁があるようだ。

「……誰よこの汚いの。アンタの知り合い?」

「おうよエール、メチャクチャ悪いヤツだ!……こんなヤツ、オレがぶっ飛ばしてやるぜ!」

「ほお、1年前はオレに偶然勝てただけの癖にまた懲りずに挑戦するつもりか??……果てても知らないぜ?」

「へへ……オレもあの時と同じだと思っただら大間違いだぜ」

何かと再び始まるうとしているアスラとクサリのバトルスピリッツ。距離を置き、己のBパッドを展開、エールが興味なさそうに欠伸をしながら見守る中、遂に因縁の対決が幕を開けようとした……

……直後だった。

そのバトルを制止させるべく割って入って来た人物が1人……

「へい!!……良い空気のところ悪いがその勝負、代わりにこのアタイがやってやろうじゃないか!」

ー!!

「イカツチ……!?!」

彼女の名をエールが零す。

そう、現れたのは金髪でワイルドな女性、イカツチ。昔は賞金稼ぎとして名を馳せて

いたが、とある事情でバツサリ止め、今ではアスラ、ロンと同じカラーリーダーに挑む者として日夜バトルに勤しんでいる。

尚、凄まじくバトルジャンキー。

だが、そのイカツチをよく見てみると、彼女の腰を離すまいと抱きしめている人物がいて……………

「あ~~~~ん、イカツチお姉様アアア!!……………啖呵を切るところもお美しゆうございますウウウ~~~~!!」

「だからオマエは引っ付いてくんじゃねえぞカゲミツ!!」

「……………カゲミツ姐さんまで……………何がどうなってんだよ」

おそらくイカツチにストーカー行為を繰り返しているであろうこの人物は他でもなく紫のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイ。彼女は自分より強い者の「婿」になろうとしたり「嫁」になろうとする変態である。

イカツチはその腰に引っ付いているカゲミツごとアスラ達に身体を向けると……………

「よっ!……………久し振りだなオメガ家と……………なんだっけ、チビスラ?」

「チビスラじゃねえ!!…バカスラだアアア!!…あ、間違った…アスラだアアア!!」

普通に挨拶して来た。

だが、彼女に引っ付いているカゲミツはアスラ達に気づかず自分の愛をイカツチにぶつける。

「あゝん、私はイカツチお姉様のお側を片時も離れたくはございません〜!」

「そうそう。コイツどうにかしてくれよ。私がバトルで勝った後からずっとコレなんだよ」

「ツ…：…イカツチさん、アンタカラーリーダーのカゲミツ姐さんにバトルで勝ったのか!?!」

「ん?…ああ当然さ。アタイとギドラに敵はない」

変態だがバトルの腕前はカラーリーダー達の中でも2番目に強いと言われるカゲミツに勝利したと告げるイカツチ。

カゲミツの実力を知るアスラは、この時点でイカツチと言う人物の得体の知れなさを改めて理解し直す。

「イカヅチ?! …… ああ、確か賞金稼ぎの女か」

「おつ…なんだアタイの名前を知ってるのかい、だったらアタイが今からアンタにやろうとしている事はわかるよな?! …… 絶賛指名手配中の盗賊「舞蛾のクサリ」……!」

盗賊であるため指名手配中のクサリも、元賞金稼ぎのイカヅチも互いの存在を認識している。

つまりイカヅチの狙いはクサリの首に掛けられている懸賞金に他ならなくて……

「ちよつとイカヅチ、アンタ賞金稼ぎは辞めたんじゃないやなかつたわけ!」

「オメガ家よ、前にも言ったが、アタイはただ強いヤツとのバトルを求めている。その本質はこの先、アタイがどこで何をしようが変わりはしない」

「理由になつてないんだけど……」

イカヅチは鬪争本能が剥き出しになっているのか、狂気的笑みを浮かべながらクサリに向かつてBパッドを展開。アスラに変わってバトルスピリッツを始めようとする。

クサリもまたやる気なのか、己のBパッドをアスラからイカヅチの方へと構え直す。

「イカツチお姉様…:Bパッドを展開するご様子も素敵です」

「ああつたく。オマエはいい加減どいてろ！」

「いや〜〜ん」

目がハートになっているカゲミツを驚掴みにし、その剛力を持つてして全力で彼女をぶん投げるイカツチ。

変態であるカゲミツは、幸せそうな笑顔のまま、アスラ達の方へと転がった。

「おつ、アスラとエールじゃないか！…ここにいてるつて事は遂に私に挑戦かい？」

「アンタよくこの流れで平然と私達に声掛けたわね」

「お久し振りですカゲミツ姐さん！…5番目のカラーカードをもらい受けますよ!!」

「ハツハツハ!!…良いだろう良いだろう、イカツチお姉様のバトルを見届けたらその挑戦受けてやろうじゃないか！」

ようやくアスラ達の存在に気付いたカゲミツ。あれだけ腑抜けてたクセに急に引き締まった様子になり、威厳のある声色で話しかけてきた。

そして、そんな彼らの他愛もない会話の中で、イカヅチとクサリは完全にバトルの準備を終えて……………

「クッククック……………後悔すんなよ。ご自慢のギドラとやらを完膚なきまでに叩き潰してくれる」

「フツ……………アンタの盗賊としての強さ。このアタイとギドラ達に教えてくれよ」

……………ゲートオープン、解放!!

アスラ、エール、ムエ、そしてメロメロでぐったりしているカゲミツが見守る中、元賞金稼ぎイカヅチと盗賊のクサリによるバトルスピリッツが幕を開ける……………

先行はクサリだ。手慣れた手付きでターンを進めていく。

「ターン01」クサリ

「クッククック。メインステップ……………モスラ幼虫を召喚……………効果でコアブースト」

1【モスラ（幼虫）】「1992」LV1（1??2）BP2000

早速地中よりクサリの場合へと出現してみせたのは巨大な芋虫。虫という事もあり見窄らしい姿をしているが、どこか神秘的な雰囲気を漂わせる不思議なスピリットである。

「オレはこれでターンエンド。さあ、どつからでもかかって来いよ」

手札：3

場：【モスラ（幼虫）】「1992」LV1

バースト：【無】

やれる事が最低限に限られる第一ターンと言う事もあり、幼虫の召喚のみでこのターンをエンドとしたクサリ。

次はアスラ達も注目するイカツチのターンだ。

「ターン02」イカツチ

「メインステップ……どつからでもかかって来ていいんだとよ。だつたら好きに暴れてやれ、アタイの可愛いギドラ!!……召喚、宇宙超怪獣キングギドラ!!」

ー【宇宙超怪獣キングギドラ】LV1(1S)BP3000

ー!!

「ツ……4コストのギドラ!?!……こんなにも早くギドラの名を持つスピリットが出るなんて……」

「おお……やっぱ首三つカツケエ………」

「イカツチお姉様のギドラ素敵〜」

雷鳴と共にイカツチが呼び出したのは言わずもがな黄金の三つ首龍キングギドラ。だが、そのサイズはいつも彼女が召喚していたものとは別の個体のためか少し小さい。いつもとは違うカードの登場に、イカツチのバトルを見た事があるエールとアスラは、この時点で何となく彼女のデッキがより精錬されているのを理解して………

「バーストをセット。そしてお待ちかねアタックステップ!!…宇宙超怪獣キングギドラでアタック!…その効果でBP5000以下のスピリット1体を破壊」

「!」

「ハハ!…対象は当然モスラ幼虫!!…次いでにソウルコアが上に置かれているため、デッキからカードを1枚ドロォーだ!」

飛び立ったキングギドラの三つの口から放たれる黄金の稲妻。それは瞬く間にモスラ幼虫へと直撃。耐えられるわけもなく爆発四散した。

「アタックは継続中!」

「チ……ライフで受ける……ッ」

〈ライフ5?4〉クサリ

三つの首を叩きつけ、クサリのライフ1つを砕くキングギドラ。先制点をイカツチにもたらしせて見せた。

「これでアタイはターンエンド。おいおいどうした？…それなりの賞金首だったらもうちとアタイを満足させてみな！」

手札：4

場：【宇宙超怪獣キングギドラ】LV1

バースト：【有】

「……先制点を与えたくらいで調子に乗りやがって……オレのモスラの実力を見せてやる」

次はクサリのターン。イカヅチに煽られ、腹を立てながらも己のターンシークエンスを進行させて行った……

「ターン03」クサリ

「メインステップ！…バーストを伏せ、カッチュウムシと守護神獣モスラを召喚！」

1【カッチュウムシ】LV1（1）BP1000

1 【守護神獣モスラ】LV1(2S) BP3000

バーストを伏せた直後に召喚したのは、文字通り甲冑を来た甲虫、カッチュウムシと彼には似ても似つかわしくない程に色鮮やかな翅を持つ巨大な蛾のスピリット、モスラ。

そしてさらにクサリは動く。手札にある1枚のカードを抜き取って……

「さらにブレイヴ、オオツツナナフシを召喚し、モスラに合体！」

1 【守護神獣モスラ+オオツツナナフシ】LV1(2S) BP5000

筒のような細い体を持つ虫型のブレイヴカード、オオツツナナフシ。場へと現れるなり華麗に宙を舞うモスラの背中へとドッキング。合体スピリットとなり強力なスピリットとなった。

しかもオオツツナナフシの効果の真骨頂はここからであり……

「オオツツナナフシの召喚時効果。残った1枚の手札を破棄。そうした時、オレは相手

の手札の枚数分カードをドローできる」

「！」

「今のオマエの手札は4枚。クッククック、よってオレも4枚のカードをドロー！」

残った1枚のカードをトラッシュユへと捨て、クサリはイカツチの手札と同じ枚数、4枚になるようにデッキから新たにカードを引いた。

その4枚のカードは余程強力なカードなのか、クサリは思わず品の無い笑顔を見せる。

「クッククック……それじゃさっきの仕返しにアタックステップと行きますか。行けモスラ!!…アタック時効果でコアブーストし、LVを2に。さらにソウルコアが上に置かれているため、BPプラス3000！」

1 【守護神獣モスラ+オオツツナナフシ】 LV1??2 (2S??3S) BP5000??
10000

オオツツナナフシを背に乗せたモスラがイカツチ目掛けて飛翔する。手札、コアも増

え、BPも上げて、クサリの場合は万全なように見える。

しかし、それをあっさりとかウンター一つで覆してしまうのがイカツチの恐ろしいところであって……………

「フツ…………ライフで受けてやるよ!」

へライフ5??4へ5??4

鼻で笑いながら合体しているモスラの体当たりを受け止めるイカツチ。そのライフバリアが一つ碎け散ってしまいが……………

これは彼女が伏せていたバーストカードの発動条件でもあつて……………

「待ちに待つたぜ、アタイのライフ減少がこのバーストのトリガーだ!!…………バースト発動!!」

「ツ…………!!」

「効果によりこのカード自身をノーコスト召喚…………来い、死をも超越せし魔獣…………宇宙超魔獣デスギドラ、バースト召喚!!」

ー【宇宙超魔獣デスギドラ】LV1(1)BP6000

地表より噴き上がるマグマ。その中より姿を現し、キングギドラの横に並び立ったのは黒い体表を持つこれまでとは一風変わったギドラ、その名をデスギドラ。

2体のギドラは共鳴し合うように咆哮を上げた。

「召喚時効果、BP5000以下のスピリット全てか、BP15000以下の緑のスピリット全てを破壊する！」

「なにッ!？」

「モスラはその全てが緑のスピリット!!……これでオマエの場は全て消える!……失せな蛾共!!」

咆哮を上げたデスギドラの三つの口から放たれる赤い熱線。それはカッチュウムシと合体したモスラの貫き、あつという間にそれらを爆散させた。モスラと合体していたブレイヴ、オオツツナナフシは逃げるようにモスラとの合体を解き、生き残った。

「……さあどうする舞蛾のクサリさんよ……もつともつとスピリットを出して来ても良いんだぜ?」

「くっ……この賞金稼ぎ如きが……ターンエンド」

手札：4

場：【オオツツナナフシ】LV1(1) BP2000

バースト：【有】

悔しさに歯を軋ませ、そのターンをエンドとする舞蛾のクサリ。イカヅチの容赦の無いターンが幕を開ける。

「ターン04」イカヅチ

「メインステップ……キングギドラのLVを2に、デスギドラのLVを3にアップ!!」

1 【宇宙超怪獣キングギドラ】(1S??3S) LV1??2

1 【宇宙超魔獣デスギドラ】(1??4) LV1??3

LVが跳ね上がる2体のギドラ。それをアピールするように、総数6本の首から爆音のような咆哮が放たれる。

さらに手を緩めず、イカツチはすかさずアタックステップへと移行して……………

「アタックステップ!!…この時、デスギドラのLV2、3の効果!!…アタイのギドラスピリット全てに赤のシンボルを1つ追加する!」

「ツ……………2体のギドラがダブルシンボルだと!?!」

クサリが隠し得ない驚愕の効果。デスギドラはマグマのような赤い光をその身に纏うと、キングギドラにもそれが伝播、2体はダブルシンボル、即ち一撃で2つのライフを破壊できる存在になって……………

「覚悟しな!!…キングギドラでアタック!!…効果で残ったオオツツナナフシを破壊してカードを1枚ドロ!」

大きな翼を広げて飛び出すキングギドラ。三つの首、その口々から放たれる稲妻がクサリの場に残ったブレイヴ、オオツツナナフシを貫き爆散させた。

「さあどう受ける!!」

「くっ……ライフだ……ぐっ!」

へライフ4?!2くサリ

再び三つの首をライフバリアに叩きつけるキングギドラ。デスギドラの力でパワーアップしているため、今回はそれを2つ破壊した。

そして知らぬのうちに、イカツチはデスギドラでアタックを仕掛ければ勝てる状況になっております……

「ハイ……どうした舞蛾のクサリ、この程度かい?……ガツカリだねくもうちとやると思ってたからさく」

「……………」

完全に追い詰められたクサリ。確かに2種類のギドラが並んでしまったこの盤面の突破はかなり困難を極める……

しかし……………

クサリはそれでも並大抵の人間では思わず背筋が凍ってしまうような、気味の悪い笑顔
顔を浮かべて……………

「クツクツク……………この程度??:……………ハハ、残念だがそう思ってるのはコツチなんだよな」

「!!」

「!」

「オマエはバカだ!!……………その田舎者と同じ、何も考えずに攻撃を仕掛けてきやがる!!
……………だからオレみたいな賢い人間の罠に引っかかるんだよ!!」

クサリはそこまで強気に言い放つと、伏せていたバーストを勢いよく発揮させる
……………

「ライフ減少後のバースト、烈翔降臨を発動!!……………ライフが2以下の時、緑のスピリット1
体をノーコスト召喚できる……………そう、どんなに大きなコストを持つヤツでもな!!」

「!!」

「現れる、オレの最強の僕、鎧モスラ!!」

1【鎧モスラ】LV2(3) BP15000

銀色の鱗粉を撒き散らしながら出現したのは、身体全体が外骨格のようなモノで覆われた特大のモスラ。アスラもスーミ村で戦った際に一度対面したクサリのエースカード、鎧モスラだ。

「おお鎧モスラ……懐かしい」

「……BP15000……これでイカツチはアタックができなくなった」

アスラが鎧モスラを懐かしむ中、エールがそう察した。

彼女の言う通り、イカツチの今のスピリット達ではクサリの鎧モスラを超える事は出来ず、必然的にターンエンドせざるを得ない状況に追い込まれていた。

「……………フツ、なんだい、少しは骨があるじゃないか。まあ、その程度で満足されても困るけど。これでターンエンドだ」

手札：5

場：【宇宙超怪獣キングギドラ】LV2

【宇宙超魔獣デスギドラ】LV3

バースト：【無】

「クツクツク……余裕ぶっこいてられるのも今のうちだ。直ぐに楽にしてやる……やがてそのギドラもおレの物だ」

結果的にデスギドラをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとする事になったイカツチ。

己のエースカードである鎧モスラを相手のターンに召喚してみせたクサリのターンがそれと同時に幕を開ける……

「ターン06」クサリ

「メインステップ。もう貴様ではオレを止められない……マジック、モスラの羽化!!」

「!」

「クツクツク……この効果により先ずはデスギドラを疲労、そしてオレのライフが2以

下のため、手札からノーコストでモスラスピリットを召喚!!…現れる2体目の鎧モスラ!!」

┆【宇宙超魔獣デスギドラ】（回復??疲労）

┆【鎧モスラ】LV2（3）BP15000

巨大な繭がクサリの背後に出現したのかと思えば、その繭の糸はほつれていき、次第に2体目の鎧モスラが中より姿を見せる。2体目の鎧モスラの羽ばたきが旋風を巻き起こし、イカツチのデスギドラは行動不能の疲労状態に陥ってしまう。

そしてクサリはさらに手札のカードを引き抜いて……………

「この程度で終わったと思うなよ……2枚目のモスラの羽化を使用!!…手札から3体目の鎧モスラを召喚する!」

「!」

「3体の鎧モスラ!?!」

┆【鎧モスラ】LV2（3）BP15000

声を荒げて驚いたのは鎧モスラの実力を知っている他でもないアスラだった。再び巨大な繭がクサリの背後に出現、その繭の中より3体目となる鎧モスラが飛び出して行った。

「こんなに巨大なスピリットが3体も……イカツチと言えども流石にこれはキツイわね……」

「……いや、多分それは無いな……仮にもこの私とのバトルに勝ったあのイカツチお姉様だ……今に見ている」

イカツチの実力を知っているエル。しかし、この状況は流石に不利が過ぎると感じてしまう。

だがそれを否定したのは紫のカラーリーダーカゲミツ。飽くまで勘の域を出ないが、彼女は客観的に見てクサリ程度のバトラーに負けるイカツチではないと察していて……

「クツクツク……これがオレの真の実力、オマエのギドラ程度じゃ到底敵わない……」

アタックステップ、2体目の鎧モスラで攻撃!!…ダブルシンボルにより一撃で2点のダメージを与えるぜ〜」

「……………」

遂に突入されるアタックステップ。羽から銀色の鱗粉を落としながら、鎧モスラがイカツチのライフ目掛けて飛び立った。

3体全ての鎧モスラが当然ながらダブルシンボルであるため、この状況は実に6点ものダメージを奪える状況にあった。

だが、この攻撃を全て通すイカツチではない。余裕の笑みを浮かべ、手札より防御用のマジックを切った。

「キングギドラから不足コストをもらい、フラッシュマジック…スクランブルブースター!!」

「!」

「このバトル中、キングギドラは疲労状態でのブロックが可能……迎え撃て!」

「チ……………またそのカードで防がれるか」

イカヅチの放ったマジックにより、レベルダウンに陥りつつも、勇猛果敢に鎧モスラに挑みに行ったキングギドラ。三つの口から電撃を放つが、それは鎧モスラの強靱な外骨格の前に全て弾き返されてしまう。

そしてそのまま巨大な羽で一刀両断。キングギドラは大爆発して散って行った……

「鎧モスラのアタック時効果!!…オマエのライフルつをもらおう!」

「ッ……!」

〈ライフ4??3〉イカヅチ

破壊するのはキングギドラだけにあらず、鎧モスラはそのままイカヅチのライフルをもその羽で切り裂いた。

「クツクツク……どうだ。どんなにブロツカーを並べても鎧モスラはその全てを貫く……これでオマエのギドラも、そのソウルコアが使えないクズの持っているライダースピリットも……全てオレのモノだ!!」

余裕を見せ、大きく高笑いを決めるクサリだったが……………

イカツチもまた余裕のある笑みを見せつけると……………

「フツ……………成る程ね、たった今完璧に理解したよ」

「ああ……………何がだ」

「当然、アンタがアタイとギドラを満足させるに値しない存在だって事がさ」

クサリの実力の無さを理解してしまったイカツチ。軽く失望しながらも手札からあるカードの効果を発揮させて……………

「手札からこのスピリット、サイボーグ怪獣メカキングギドラの効果発揮!!」

「何、このタイミングで手札からスピリット効果!?」

「ギドラが破壊された時、ノーコストで召喚……………来い、天の雷操りし黄金の龍王、その不動の魂を不屈の鋼へと昇華せよ!!……………鋼鉄雷動の最強龍ツ!メカキングギドラ!!……………L V1で機動!!」

1【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】LV1(1)BP10000

キングギドラが破壊された爆煙の中、キングギドラは大半が機械化され復活を果たす。そしてその強力無比な召喚時効果はこのタイミングでも発揮が可能であり……

「メカキングギドラの召喚時効果!!…スピリット1体をデッキの上に戻す」

「なッ……デッキの上だと!?!」

真ん中の機械化された首から放たれるレーザー光線。それが鎧モスラー1体に命中。堪らず粒子化され、クサリのデッキの上へと強制的に送還されてしまう……

「ハッ…だが1体処理したくらいで良い気になるなよ!!…こつちにはまだ2、3体目の鎧モスラーが……」

「そんなモノ、ずっと残つてられると思うなよ?…アタイはさらにこのタイミングで2、3体目のサイボーグ怪獣メカキングギドラの効果を誘発させる!」

「……………はっ」

「再びノーコスト召喚だ……機動せよ、最強龍達!!」

ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】LV1(1S)BP10000
ー【サイボーグ怪獣メカキングギドラ】LV1(1)BP10000

イカツチの後方、遙か彼方より出現し、この場に顕現して見せたのはまさかまさかの2、3体目のメカキングギドラ。その圧巻の存在感はこの場にいた誰もが震え上がってしまい……………

「おお……………これで首の数は合計12本……………カッケェ!!」

「いやバカスラ、首の数は関係ないでしょ」

アスラが目をギラギラと輝かせて感動する中、デスギドラと合わせて首の合計が12本となったギドラ達はその効果を遺憾なく発揮させる。

「2、3体目のメカキングギドラの効果で残った2体の鎧モスラもデツキの上へと戻す!!」

「……………ば、バカな……………そんな事が……………」

メカキングギドラ達より放たれるレーザー光線が全ての鎧モスラを撃退させる。これで遂にクサリのスピリット達は0になってしまい……………

「だから言ったろ、もうちとやれると思つてたつて……………場のスピリット0。手札も0。さあどうするよ舞蛾のクサリ……………この状況から反撃できるんならやってみな」

「くっ……………ターン……………エンドだ」

手札：0

バースト：【無】

悔しさに歯を軋ませながらもそのターンをエンドとしたクサリ。

もう誰がどう見ようとも彼の負けは確定。圧倒的な実力を見せつけたイカヅチの最後のアタックを待つのみとなった……………

「ターン07」イカヅチ

「メインステップはもう要らん。アタックステップ、行って来いメカキングギドラ!!…

デスギドラの効果でトリプルシンボル!!」

「ウソだ。このオレが……このオレがこんなヤツにまで!!……………ぐ、ぐあああああ!?!」

へライフ2??0くサリ

メカキングギドラの口々から放たれる電撃もレーザー光線がクサリの残った全てのライフを打ち砕いた。吹き飛ばされるクサリ、彼のBパッドからは敗北を告げるように「ピー……」と言う無機質な音が鳴り響く……………

これにより、このバトルの勝者はイカツチだ。結果的に終始彼女が圧倒した一方的な試合展開となった。

「イカツチ……アイツ、また強くなって……」

ポツリとそう呟いたのはエールだった。最後に見たのは叙勲式の際にロンとバトルした時であったが、イカツチの実力はその時より格段に上がっていた。

どうやらアスラが異世界で修行をしていた中で、強くなっていたのは彼だけではないらしい。

……………

バトルも終わり、クサリが巻き起こした一悶着もようやく決着が着いた。気を失ったクサリを縄で縛りながら、イカツチが元気をなくしながら言葉を落とす。

「はあ……………全く持ってつまらないバトルだった。これでアタイとギドラ達にどう満足しろってんだい」

「だったらこの私とバトルしましよーよカゲミツお姉様く〜!!」

「オマエは変態だから却下」

飛び込んでくるカゲミツをかわしながら、彼女からの好意とバトルを拒否するイカツチ。直後にアスラの方へと顔を向ける……………

「アスラ……………だったな、確かロンのライバルの……………少し見ない間に随分と顔付きが変わったじゃないか」

「ん?…そうっすか??……………まあでもこう見えてテンドウさんとネコガイヌ博士のお陰様

でイセカイとやらで修行して来たし……………」

「ツ……………ちよつとバカスラ!!」

色々ベラベラと話すアスラにチョップをかますエール。アスラを呼び出し「あの出来事は私達だけの秘密でしょ」と耳打ちする。

確かに、あの出来事は公にはできない。そもそも異世界に行つてたなどとトンチンカんな話を誰かが信用するとも思えない。

(……………ネコガイヌ??……………噂で偶に聞く、ロクでもない発明ばかりやつてる偏屈な爺さんか??……………実在すんの?)

アスラの言葉をバツチリ覚えていたイカツチ。この件が後々、アスラ達がお世話になった天上烈我、黄空光黄を始めとした七罪竜の使い手達に色々ご迷惑をお掛けしてしまう事は、また別のお話である。

「まつ……………取り敢えずアタイはコイツをオウドウ都の上層部に換金……………じゃなかった突き出して来るか」

「……………今コイツ換金って言わなかった？」

やはり目当ての半分くらいはお金だったと悟るエール。そもそもイカツチがあんな咬ませ犬の塊みたいなクサリに自分からバトルを挑んで行く話自体、おかしい事だと思っていた。

「じゃあなオメガ家、アスラ。次いでにカゲミツ」

「あーっ！ん！…行ってしまおうのですかイカツチお姉様く〜!!」

「うるせえな。オマエは仕事しろってんだ。挑戦者が目の前にいるだろうが……………つた、アタイはなんでこうも面倒くさい女にばかり絡まれるんだ？」

再び臍抜けになってイカツチにゴネル紫のカラーリーダーカゲミツ。これでカラーリーダーのナンバー2だとは到底思えない。

さらにイカツチは別れ際、もう一度アスラの顔を見て……………

「オマエには期待してるぞアスラ。今度会った時はアタイのギドラ達の餌にしてやるよ」

「おうっ！…オレもいつかアンタとバトルができるのを楽しみにしてるぜ！」
「フツ…じゃあな。最後の赤のカラーリーダーを倒した先で待ってるぞ」

強気な物言いで言葉を返し合う両者。イカツチはその後アスラの返答に鼻で笑いながらも、縄で縛り上げたクサリを引き摺りながらこの場から去って行った……
アスラはイカツチの姿が見えなくなるまで手を振り、見届けると……

「……やっぱあの人結構良い人だよな。メチャクチャ強い上にカッケェし」

「むっ……なんか楽しそうね」

「ん？…何が？」

まだバトルこそしていないものの、同じカラーリーダー達に挑む者としてイカツチを意識するアスラ。

当然ながらそこにそれ以外の感情はなく、色恋沙汰なんてものは存在しないのだが、それをわかっていてもエールは少しばかりイカツチに嫉妬してしまう。

「むう。イカツチお姉様……豪快でワイルドで素敵なお方でした……よし、そんじや

アスラ、エール、シエン町に行こうか。この紫のカラーリーダーがバツチリ挑戦を受けてやろうではないか」

「おうつすカゲミツ姐さん!!…散々修行つけてもらったオレの実力、とくと味わつてくれ!!」

「フフ……そう簡単にロンやイカツチお姉様と同じ道を歩めると言うなよ?」

名残惜しそうにイカツチの事を想うカゲミツ。

だがその心はすぐさまアスラとのバトルへとシフトされる。まだ試合は始まってもないと言うのにもかかわらず、闘争心を燃やしている2人の目線からはバチバチと火花が飛び散っていた。

とある辺境。荒廃した城の瓦礫の山が重ねられたここはライダーハンターズの隠れ家。抜け出したオロチを除き、トウエンティ、イバラ、ウイルの3人が出揃っていた。

ウイルに対して何か言いたげな表情を見せるトウエンティ。ウイルは彼の言いたい事を把握しているのか、不敵に笑みを浮かべている。

緊迫感のある状況が続く中、初めて発言したのは見た目だけは絶世の美女であるイバラだった。

「はいはい。私ライダーハンターズ辞めまーす！」

ー!!

まさかの第一声がノリノリの辞職宣言。流石のトウエンティも眉を潜めて驚きを隠し得ない様子。

「辞めるだと?」

「だってく…なんか飽きちゃったし。ライダースピリットハントの競争もどうせトウエンティが一番になっちゃうだろうしさく…え?…何トウエンティ、私がどっかいなくなっちゃうのが嫌な感じ?」

「それだけは無い」

「フフ…照れ屋さんなんだから♡」

異世界での激闘でオロチやイバラに対しても仲間意識が芽生え始めて来ていたトウエンティ。口ではそう言っているものの、実際は少しだけ寂しさを感じているに違いない。

「ねー……オツケーでしょウイル。抜けた後の行き先も実はバツチリ決めてあるし、何よりアスラ君達を見てたら、私ももつと自由な場所で、楽しく暮らしたくなっちゃったのよねん！」

「フフ……そうですか。自分の好きな所に居て、自分の好きな事をやってこそ人間は輝く。好きにきなさい」

「わーい……流石、話しがわかるわねん！」

ウイルもイバラの辞職をあつさり承諾。その口ぶりからライダーハンターズに労働の強制力はなかったものと思われる。

その後、イバラは懐から数枚のカードを取り出し、それをトウエンティへと託した。

「はいトウエンティ。上げるわ」

「……………ツ……………ライダースピリット!?……………何故オレに!？」

「だってもう要らないし〜元々レアカードは興味ナツシングって言うか〜…だったからトウエンティに上げた方が良いかなくって思ってます」

自分の持っていたライダースピリットのカードをトウエンティに託したイバラ。これでトウエンティの所有するライダースピリットはジオウを含めて『16枚』……残り4枚で20のライダースピリットカードが揃う事になる。

「それじゃあねトウエンティ。なかなか楽しい時間だったよ。素敵な恋人ちゃんにしくよろねん！」

「あ、おい！…まだ貰うとは……」

いきなり4枚ものライダースピリットを譲り受けるこの行為は卑怯だと感じ、返そうとするトウエンティだったが、

最後にそう言い残すと、イバラはBパッドのワームホール機能を使い、空間を移動。颯爽と何処かへと姿を消してしまう。

「まあ良いじゃないかトウエンティ。イバラを無くしたのは大きいが、君にとってはこ

れで残り4枚のライダースピリットで君の恋人は病から解放されるのだから……」

「……………ウイル、オマエには一つ聞きたい事がある」

「ほう。なんだね？」

イバラやオロチは仲間であると認識していても、紳士の皮を被った下衆であるウイルの事は信用していないトウエンティ。

異世界での激闘で感じた違和感を彼に告げていく。

「……………異世界とやらでバトルをしている時、イバラは不思議な力に操られ、暴走した……その操った人物は黒の世界、ブラックフォースのヘタマイトであると名乗っていた……………オレの推測が正しければ、オマエはイバラの中にあの化物がいた事を知っていたはずだ」

「……………」

「オマエはいつたい、オレ達に何を隠している?」

何故かイバラの身体のいたと言うブラックフォースのヘタマイト。トウエンティはその事をウイルは初めから知っていたのではないかと勘繰っていた……………

しかし……………

「フフ……………知りませんね〜…黒の世界?…お初にお目にかかる言語だ」

「惚けるな!!」

「仮にだ。トウエンティ……………仮にその黒の世界とやらを私が知っていたとして、君はどうする?……………どちらにせよ君は私の言う事を聞かざるを得ない……………何せ、恋人を治さなくちゃいけないんだからね」

「ッ……………!!」

「彼女の重たい病気を治せるのはこの私と、20枚のライダースピリットだけだ」

確実に嘘をついているようにしか思えないウィルの返答。

実際、嘘はついていて、ウィルは一度アスラとエールの前で『黒の世界』や『第七の属性』などと失言している。

バトルを仕掛け、ウィルに白状させると言う手もある。その薄汚い性根をこの手で成敗したくしょうがない……………

だがトウエンティにはそれができない。何せ、彼の恋人『テンドウ・カナ』の重たい病を治せる唯一の鍵がこの得体の知れないちよび髭シルクハット、ウィルなのだから

……

トウエンティは一旦冷静になり、ウィルに対して込み上げていた感情を押しさえ込む。その様子を見たウィルは不敵な笑みを浮かべながら提案するように言葉を彼に送る。

「フフ……わかつたらこれからもライダースピリットを狩り続ける事だ。丁度最近、新しいコラボダンジョンが発見された。そこに向かってみるのも有りかもね」

「……コラボダンジョン……」

コラボダンジョン。

それはこの世界に偶に見られる言わば古墳のような存在。宝の山で溢れかえっている場合もあるが、その分古代人が仕掛けた罠がある事も多い。

トウエンティはそのコラボダンジョンの名を聞いて、アスラ達と最初に激闘を繰り広げた事を思い出した。今思えば自分が変わり始めた、いや戻り始めたのはあの瞬間からなのかも知れない、そう彼は改めて感想を抱き……

「残り4枚。これで本当にカナの病気は治るんだな……オマエを、信用していいんだな？」

「フフ……ああ、もちろんだよ、トウエンティ」

仮に、目の前にいる存在が、この世界を脅かす悪魔だとしても、トウエンティはそんな彼に手を貸さざるを得ない。

他でもない大事なカナの命が関わっているのだから……

50コア 「紫カラー戦!! VS ゴースト」

「着いたぞ。ここが我が故郷、紫の町シエン町だ」

「おお、本当に紫だ……これ全部霧つすか？」

「むえ……」?? 綿飴みたい……

「ワツハツハ!!……ここは年中こんな感じだ、不気味だけど、毒ガスじゃないから安心してくれ」

「……にしても視界がこれじゃあちよつと歩きづらそうね……」

オウドウ都から歩き続けて約3時間程度、紫のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイの案内もあり、アストラ達一行は紫の町、シエン町へと辿り着いた。今までの町とは違い、人口密度があるとは言えず、人氣が全く感じられなかった。

初見では思わず竦んでしまう紫色の霧。そのせいでたいへん見え辛い、中央にはいつものバトルスタジアムが聳え立っている。

「まあそう気にするでない、構造は単純明快。ここを真っ直ぐ歩けばバトルスタジアム

だ。たまーに人が通るから気を付けて歩きなよ」

「おうっす!」

とは言ってもカゲミツ曰く一本道のようで、アスラ達は特に迷いもなく歩き出した。

「て言うかなんでこんなずっと毒ガスみたいな霧が出てるんすか?」

歩きながらアスラがカゲミツに聞いた。

「ああ、これは地下に巨大な綿飴製造機があるからな」

「むえッ!?」??ホントに綿飴だった!?

「いや、綿飴製造機があるだけでこんな事にはならないでしょ、どんな綿飴作ってるのよ」

「でも見てみてエエエー!!」

「フフ……シエン町のシエン綿飴はこの名物だからな、カラー戦が終わった後にでもゆっくり見学に行ってみるといい」

この町の地盤の底に存在するのは実に50メートルはある巨大な綿飴製造機。その機械から作られる『シエン綿飴』はカゲミツの言う通りこの町の名産物である。

その作る過程の中で紫のガスが漏れ出て霧のようになっていいるのは些か迷惑を極めているとも言えるか、次いでに、その巨大な綿飴製造機を作成したのは他ならぬ『ネコガイヌ博士』だったりする。

アスラの質問に答えたカゲミツ。今度はこちらが質問する側だと言わんばかりにエールの方へと振り向いて……………

「そんな事より、綿飴の話は置いておいて……………ずっと思ってたのだが、エールはアスラの彼女か何かか？」

「ツ……………な、なあ?!」

サラツと凄い事を聞いて来た。エールは直後に猛烈な勢いで顔を真っ赤にしながらかも、それを全力で否定する。

「な、なななななな訳ないでしょ?!……………だつてあのバカスラよ!?…バカよ!?…アホよ!?…コモンよ!?!…エックスの私と釣り合う訳ないじゃない!!!」

「……………おお」

この時、カゲミツは分かり易過ぎるエールにトキメキを覚えていた。

可愛い。応援したい、愛でてやりたい。

歳上という事もあり、珍しくそう言う感情が芽生えて…………

「よしよし、エールよ…………お姉さんが幾らでも応援してやるからな。頑張れよ」

「はあ!?…何言ってるのよアンタ…………バカスラからも何か言ってる……………つてアレ、アスラは??」

「?」

ふと辺りを見渡してみるエールとカゲミツ。そこにはアスラの姿は無く、同時に彼の頭の上に乗っかっているムエも姿を消していた。紫のガスの事もあり、探すのは困難を極めていた…………

俗に言う『迷子』に彼はなっていて…………

「アスラのヤツ、一本道だったのにどうやって迷子になったんだ?」

「あのバカ!!…私のムエまで一緒に迷子になっちゃったじゃない!」

「……何はともあれ、良かったな。さっきの話を聞かれなくて」

「う、うっさいわね!…どうでもいいわよそんな事!!」

本当はどこか少しがっかりしている自分もいるエールだったが、取り敢えず迷子になったアスラとムエをカゲミツと一緒に探す事にしたのだった……

「うーーーーーむ。オレ達ずっと真っ直ぐ歩いてたはずなんだけどな……」

「むえ……」

「でもなんて素敵な噴水なんだアアア!!…カツケエー!!」

場面は変わり、迷子になったアスラとムエサイド。何故かエール、カゲミツと離れ離れになってしまい、広場へ突入。そこにある巨大な噴水を眺めていた。

アスラはその噴水を見て感動を覚える。

「あつ……見惚れてる場合じゃねえ……早くスタジアムに向かわないと……」
「むえむえ」??うむうむ

しかしこうしてもいられない。ムエも賛同しているように、早いところエールとカゲミツが向かっているであろうバトルスタジアムに自分も行かなければならない。

今一度噴水の周囲を見渡すアスラ、するとそこには1人の男性が噴水を眺めているのが見えた。

「おつ……人発見、現地の人が?……丁度良いや、スタジアムの道を教えてもらおう」

「むえ……」

「あの、すんませエエェん!!…道をお尋ねしたいんですけど!!」

現地の人らしき人物にバトルスタジアムの場所を聞くべく、アスラは噴水の周囲を歩きながらそう叫んだが……

「……ああ!?!…おいチビ。オレに道を聞くとか何様だよ」

「ええ!?!…怒られたアアアー!?!」

そこにいたのは赤髪靡かせる青年。整った容姿を持つ彼だが、非常に目付きが悪く、ガラが悪いようで、アスラを怒鳴る。

アスラはどこかテンドウに似ていると認識してしまい、思わず身体が竦んでしまう。

「いいかチビ。人に何か質問したいのであれば、先ずは金だ。金を寄越せ……」

「えええええ!!……お金エエエー!!」

「そうだな。道を聞きたいのであれば、3万で教えてやろう」

「そしてメツチャクチャ高エエエエエー!!!……そんなに払えるかアアアー!!……オレコモンよ?……貧乏なのよ!」

「じゃあ交渉は決裂だな。一生この町を彷徨つてろ」

「性格悪いイイー?!?!」

とんでもなく歪んだ性格の持ち主である赤髪の青年。普通、道を教えるくらいなら無償で教えてあげても良いだろうに……

だが、アスラの全力の喧しいツツコミが幸いしたのか、後方からエール達の声が聞こえて来て……

「ん?……今なんかアイツの声が聞こえたような……おーい、バカスラアアアー!!
……ここにいるの!?!」

「ツ……エールの声だ!!……助かった……後は声のする方へ行くだけだ」

「チツ……折角の金蔓が」

「金蔓って言った!?!……今アンタオレの事金蔓って言った!?!」

完全にアスラの財布の金を持っていくつもりでいた赤髪の青年。まあそれでもアスラは彼が本当に悪い人物ではないと感じていたのか、笑顔を見せると……

「そんじゃあな赤い髪の人!!……オレアスラって言います!!……アンタは!?!」

「オマエに名乗る名前はない……」

「はは、まあそう来るよな……じゃあまた会いましょう!!」

「むえ〜」

アスラはそう告げると、頭の上に乗っかっているムエと共にエールの声がする方へと向かって行った。この町の地理に詳しいカゲミツもいる事からその後のバトルスタジ

アムへの道のりはそう険しいものではなかった。

そんな彼を一応最後まで見届けた赤髪の青年は……

「……完全にオレと友達にでもなつたかのような言い草だったな。生意気なクソチビだぜ。やっぱりオマエの息子だな、メザシ」

そう意味深な言葉を言い残すと、彼もまた噴水広場を離れて行った……

ほんの少しだけは時は進み、ここはシエン町のバトルスタジアム。建物の中だが、何かここにも微かに紫のガスが漏れ出ているいる。

その中にあるバトル場にて、挑戦者であるアスラと紫のカラーリーダーカゲミツが互いの間隔を開け、今にもバトルスピリッツを……カラーリーダー戦を始めようとしていて……

「いや……さつきはホント助かりました……いったいどうなのかと思ったぜ……」

「本当に反省してんのアンタ?…アンタが迷子になろうが知った事じゃないけど、私の可愛いムエまで巻き込まないでよね」

「ええ!?!…扱いヒデエ!?!」

エールがオレンジ色の犬みたいな小動物、ムエを大事そうに胸元に抱き抱えながらそう告げて来た。

「まあいいじゃないかエール。こうして無事見つかって、カラー戦ができるんだし…:…なあアスラ。私はこの時を楽しみに待っていたぞ…:…レイデル森で初めて会ったあの時からな」

「おうっすカゲミツ姐さん!!…:…オレの今の全力全てを捧げて、アンタに勝つ!!…:…でもってシイナに、頂点王に近づいて見せる!!」

「ハハ…:…私のシイナお姉様にそう簡単に近づけると思うなよ!!…:…行くぞ!」

…:…:…ゲートオープン、界放!!

互いのBパッドを展開し、デッキをセット。バトルの準備を整え、2人は開始のコー

ルを同時に宣言、遂に5番目のカラー戦、マスターの身分も持つ、カゲミツ・ブゲイトの試合が幕を開けた。

先行はアスラだ。己の夢のためにターンを進行していく。

「ターン01」アスラ

「行きますよカゲミツ姐さん!!…メインステップ、まずはネクスス、決闘者たちの戦場を配置!」

1 「決闘者たちの戦場」 LV1

アスラの背後に、戦火を再現したかのような燃え盛る戦場が出現。転醒ネクススカードであるこのカードだが、転醒龍騎の【零転醒】の効果の関係上、その【転醒】の効果を使用する機会は少ない事だろう……

「オレはこれでターンエンド!」

手札：4

場：【決闘者たちの戦場】LV1

バースト：【無】

先行の第一ターンはアタックステップが無い。アスラはそのターンをエンドとする。
次は紫のカラーリーダー、カゲミツのターン。5番目と言う順番もあり、圧倒的な強者のオーラを纏いながらそのターンを進めていき……

「ターン02」カゲミツ

「メイנסテップ……ふふ、心躍るなアスラよ。このバトル、最初から全力で行かせてもらうぞ!!……変身、仮面ライダーゴースト!!」

「!!」

バツチリミナー!!

バツチリミナー!!

カイガン、オレ!!

カクゴ、ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!

ー【変身!!仮面ライダーゴースト】L V 1

カゲミツが腰にベルトを装着すると、妙なパーカーが宙を舞って行く。それはやがてカゲミツへの被さり、カゲミツの姿をライダースピリット、仮面ライダーゴーストの姿へと変身させた。

「出たな変身のカード……へへ、そうこなくちゃ」

「随分と余裕だな。配置時の神託の効果、今回の対象は1枚。よってコアを1つ、私自身に追加!!」

ー【変身!!仮面ライダーゴースト】(0??1)

神託によりカゲミツのトラッシュユが肥える。彼女のライダースピリット、ゴーストはトラッシュユを自在に操る能力があるため、警戒しなければならない。

そしてさらにカゲミツは手札からカードを引き抜いて……

「次いでにこのカード、ユルセンを召喚。その効果で維持コアは0。アタック、ブロックできず、相手の効果を受けない」

「!」

「ツ……出たユルセン……相変わらずちよつと可愛いよね……」

ー【ユルセン】LV1(0)BP1000

現れたのは可愛らしい小さな幽霊ユルセン。その存在に最も強く反応を示したのは他でもないエール。

この可愛いらしいユルセンだが、バトルで敵に回すとかなり厄介であり……

「最後にバーストをセットしてエンドステップ。ユルセンの効果、デッキからカードを3枚オープンしてゴーストを回収、残りはトラッシュへ……よし、ゴーストムゲン魂を手札に加え、ターンエンドだ」

手札：3

場：【ユルセン】LV1

【変身!!仮面ライダーゴースト】LV1(2)

バースト：【無】

「ツ……ムゲン魂……カゲミツ姐さんのエースカード……」

ユルセンの強力なサーチ能力が炸裂。カゲミツは毎度エンドステップにこの効果を發揮できる。

しかも今回手札に加えられたのは彼女の最強カード、【仮面ライダーゴーストムゲン魂】……………

アスラは一度そのカードが決定打となつてカゲミツに敗北した事を思い出し、思わず半歩足を後退させるが……………

「どうした臆したかアスラ？」

「へへ……まさか、臆したりしねえ……出すなら出してくださいムゲン魂!!…オレは攻めて攻めて、攻め抜くだけだ!!」

「よし。そうでなくてはアスラは面白くない……!」

気合を入れ直すように攻め抜くと宣言するアスラ。異世界で修行した日々を思い出

し、己のターンシークエンスを進行させていった……………

「ターン03」アスラ

「メインステップ……………来い、ドラグノ突撃兵!!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】LV2(3)BP6000

現れたのはアスラデッキの特攻隊長であるドラグノ突撃兵。巨大なハンマー肩に担ぎ、この試合へのやる気を見せる。

「アタックステップ!!…………ドラグノ突撃兵と決闘者たちの戦場、双方の効果でBPプラス6000!!」

ー【ドラグノ突撃兵へR】BP6000??9000??12000

「コスト3でBP12000!?!」

「おうよ!!…行けドラグノ突撃兵!!…効果でオレは1枚ドローだ!!」

巨大なハンマーを構えて走り出すドラグノ突撃兵。創界神ネクサスである変身のカードや、アタックやブロックができないユルセンを召喚、配置したカゲミツはこの攻撃をライフで受ける他なくて……

「いいだろう。ライフで受ける……ッ」

〈ライフ5??4〉カゲミツ

ライフバリアをハンマーに打ち付け、その1つを砕いたドラグノ突撃兵。だが彼はまだ終わらない。まだまだ仕事を熟す。

「【追撃】の効果、もう一度行け突撃兵!!…オレももう1枚ドロー!!」

「ッ……それもライフだ!」

〈ライフ4??3〉カゲミツ

そのハンマーを二度振り回すドラグノ突撃兵。カゲミツのライフは一気に3まで減らされるが、それは許すまじと言わんばかりにカゲミツは伏せていたバーストカードを発揮させて……………

「ライフ減少によりバースト、絶甲氷盾を発動。私のライフを1つ回復」

へライフ3??4へカゲミツ

流石に一筋縄では行かないか。ライフを瞬時に1つ取り戻して見せた。

ドラグノ突撃兵に「追撃」の効果で無理をさせてしまったアスラはこのタイミングでのエンド宣言を迫られて……………

「そう簡単に多くのライフはやらんぞ」

「へっ……………でも絶甲氷盾は切らせた!!……………オレはこれでターンエンドだ!」

手札：6

場：【ドラグノ突撃兵へR】LV2

【決闘者たちの戦場】 L V 1

バースト：【無】

前向きな考え方を示しながらそのターンをエンドとするアスラ。

だがそれは決して前のターンにカゲミツの手札へと加えられた【仮面ライダーゴーストムゲン魂】の事を警戒していないわけではなくて……

「ターン04」カゲミツ

「メインステップ。ふひひ……さあここからだぞアスラ、ここからが証明の時間だ……
本当にあれから強くなったのであれば、この私に食らいついて見せろ！」

「!!」

変な笑い方をするカゲミツから放たれるのは溢れんばかりの強者のオーラ。それは最早殺気さえも感じてしまうとてもないモノ。

流石は5番目のカラーリーダーと言ったところか、やはりこれまでのカラーリーダー達とは訳が違う。

「行くぞアスラ、先ずはロクテンハヤブサをLV2で召喚!」

「え?…緑のスピリット!?…カゲミツ姐さんは紫のカラーリーダーのはずじや…!」

┌「ロクテンハヤブサ」LV2(3S)BP6000

黄泉の世界よりハヤブサのようなスピリットがカゲミツの場に出現。

アスラは彼女が召喚して見せたそのスピリットに思わず少し驚いてしまう。

別にそのハヤブサのようなスピリットが強い訳ではない。ただ色が緑色なのだ。今相手しているのは紫のカラーリーダー、意外性の塊すぎるが故にアスラは驚きを隠し得なかつたのだ。

今まで汎用性の高い白のマジック等は使ってくる事もあったが、それ以外の、しかもデッキの回転に直結するスピリットカードはこのカゲミツが初である。

「フツ…:…カラーリーダーも一発芸でやっているわけじゃない。召喚時効果、紫のスピリット2体にコアを1つずつ追加。ユルセンと、LV2なら紫としても扱えるロクテンハヤブサにコアを追加!!」

「!!」

緑のスピリットらしいコアブースト効果を発揮するロクテンハヤブサ。カゲミツはその増えたコアを使いながら、アスラを倒すべく己のやりたい事をやっていく。

「アタックステップ!!…その開始時にトラッシュにあるゴーストオレ魂の効果、コストを支払い召喚する……!!」

カクゴ!!

ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!

ー【仮面ライダーゴーストオレ魂「2」】LV2（3）BP4000

妙な音声と共に現れたのは、変身したカゲミツと全く同じ姿をしたライダースピリット、仮面ライダーゴーストオレ魂。立派に生えた一角が光輝く。

核となるスピリットの登場。だが余韻に浸る事はなく、カゲミツはアタックステップを続行する。

「オレ魂でアタック!!……さらにフラッシュユタイミング、トラッシュユにあるガンガンセイバーの効果、コストを支払い、オレ魂に合体！」

「!」

00
ー【仮面ライダーゴーストオレ魂「2」+ガンガンセイバー】LV2(3)BP70

散々肥えたトラッシュユからの蘇生に蘇生を重ね合わせ、合体スピリットを誕生させるカゲミツ。これこそゴーストの奇怪な墓場戦法。

しかしこれだけでは終わらない。カゲミツはさらにソウルコアを支払い、遂にあのスピリットを呼び寄せる……

「そして今のオレ魂のコストは7!!……このスピリットに煌臨できるー！」

「ツ……ウソだろ!?!…まさかそんなに早く!?!」

「ああ、来い。私の持つ最強のライダースピリット……仮面ライダーゴーストムゲン魂!!」

その直後に、オレ魂が無限の文字が描かれた光に包み込まれて行き、その中で姿形を変化させて行く。

00
00
「〔仮面ライダーゴースト ムゲン魂+ガンガンセイバー〕LV2(3)BP150

その光が晴れると、そこには仮面ライダーゴースト最強の姿、仮面ライダーゴーストムゲン魂が現れていた。圧倒的過ぎる存在感がバトルスタジアム全体を包み込む。

たったの4ターンでの早期召喚に、バトルしているアスラとそれを見ているエールも驚いていて……………

「この間は手を抜いていたからな。本気になればこの程度、朝飯前ならぬ手洗い前さ」

「その例えはわからアアあん!!!」

「煌臨時効果、スピリットのコア3つをリザーブへと落とす!!…消え去れドラグノ突撃兵!!!」

「ツ……………突撃兵!!!」

ー【ドラグノ突撃兵（R）（3??0）消滅

ムゲン魂から放たれる紫の衝撃。それがドラグノ突撃兵を吹き飛ばして消滅させる。そしてムゲン魂はガンガンセイバーを構え、ゆつくりとアスラの元まで歩みを進めていき……

「ムゲン魂は元よりダブルシンボルのスピリット、そしてガンガンセイバーとの合体でトリプルシンボル!!…オマエのライフを3つ破壊する!」

「くっ……今防ぐ手段はねえ……ライフで受ける!!……ぐ、ぐああああ!!」

（ライフ5??2）アスラ

振り下ろされたガンガンセイバー。その重たい一撃はアスラのライフを一気に半数以上を撃破した。

余のバトルダメージに思わず片膝を突くアスラ。だが直ぐに立ち上がりカゲミツの場を見つめ返す。その気合に、カゲミツは闘争本能から背筋がゾクゾクして来て……

「いいないなあくく!!…その諦めない、食らいつくという意思を感じるその目だ。その目で戦うオマエを私は待っていたんだ!!…さらにロクテンハヤブサでアタック!」
「それもライフだ!!…うぐつ」

へライフ2??1へアスラ

ロクテンハヤブサが飛び立ち、アスラのライフにつつく攻撃を繰り返す。彼のライフはレッドゾーンの1に突入する。

「たったの1ターン、4ターン目でアスラのライフが1に……」
「むえ」

カゲミツの実力の高さを改めて強く認識するエール。普段は「嫁」だとか「婿」だとか言っている変態のカゲミツとは到底思えなくて……

「エンドステップ。ユルセンの効果でゴーストを1枚手札に……これでターンエンド。」

どうしたアスラ??…まだまだここからだよな?」

手札：3

場：【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】LV2

【ロクテンハヤブサ】LV1

【ユルセン】LV1

【変身!!仮面ライダーゴースト】LV2(4)

バースト：【無】

「おう。当然だぜカゲミツ姐さん……ソウルコアの無いオレに全力で来てくれてサンキューな。行くぞオレのデツキのスピリット達!!」

当然ながらアスラは諦めたりしない。強力無比なスピリットであるカゲミツのゴーストムゲン魂を倒すべく、己のターンを進めていった。

「ターン05」アスラ

「メインステップ!!…シャムシーザーとドラグレッダーを召喚!!」

ー【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【ドラグレッダー】LV1(1)BP6000

アスラの場合へと新たに召集されたのは赤い体表に白いトゲトゲを生やしたトカゲのようなスピリット、シヤムシーザーと、龍騎の中に宿る赤き龍のブレイヴ、ドラグレッダー。

そして『まだだ』……………

アスラはそう言わんばかりに手札にあるカードをさらに抜き取り、それを己のBパツドへと叩きつける。

「さらに召喚!!……オレの相棒、仮面ライダー龍騎!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(4)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、場へと姿を現したのは龍の影を纏う赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎。

「フツ……やはり復活していたか龍騎……この血が滾つて来たぞ」

「オレ達の今できる全力で、カゲミツ姐さんのゴーストムゲン魂を討ち取る!!…龍騎にドラグレッダーを合体だ!!」

ー【仮面ライダー龍騎+ドラグレッダー】LV2(4)BP13000

龍騎の背後で鳥栖を巻くドラグレッダー。これで戦闘準備は万端。アスラはアタックステップへと移行する。

「アタックステップ!!…龍騎でアタック!!…合体時効果でロクテンハヤブサを破壊してカードを2枚ドロ―!」

龍騎がストライクベントのカードをベルトからドロし、左腕のバイザーに装填。するとドラグレッダーの顔を模したガントレットが右腕に装備される。そして龍騎はそのガントレットから、ドラグレッダーは自身の口から火炎放射をロクテンハヤブサに向けて発射。

大火力になす術なくロクテンハヤブサは焼き尽くされてしまう。
そしてアスラの龍騎の効果はまだ続き……………

「でもってこの龍騎は相手のスピリットかネクサスが破壊された時に転醒できる！」

「ッ……………転醒!!」

「【零転醒】発揮、仮面ライダー龍騎を、仮面ライダー龍騎サバイブに!!」

今度はサバイブのカードを引き抜き、それをドラグレッダーを模したショットガンに装填する仮面ライダー龍騎。燃え上がる烈火の炎が吹き荒れると同時に、強化形態、仮面ライダー龍騎サバイブへと姿を変えて見せた。

さらにそれと同時に赤き龍ドラグレッダーが龍騎のサバイブ化に伴い、赤き武装龍ドラグランザーへと進化を果たす。

「来いよドラグランザー!!……………今こそ龍騎サバイブと一体となりて、赫焉の烈火へと生まれ変われ!!……………ミラージュ!!」

「!!」

アスラが龍騎サバイブとドラグランザーに向かってそう叫ぶと、ドラグランザーはパーツを分解して行き、それらを龍騎サバイブの各所へと装備させて行く……………

「現れる!!……………龍騎サバイブランザー!!」

「〔仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー〕LV3(4)BP17000

そして完全に合体が完了すると、新たに誕生したのは仮面ライダー龍騎最強の形態、仮面ライダー龍騎サバイブランザー。両腕に備え付けられたドラグランザーの顔を意匠したプラスターが光り輝く。

その圧巻の勇姿に、カゲミツの闘争本能はより刺激を受けて……………

「お……………おお!!……………なんたる勇姿、なんたる迫力!……………よもやここまで進化していたなんてなアスラ、仮面ライダー龍騎!!」

「龍騎サバイブランザー転醒アタック時効果、相手の最もBPの低いスピリット1体を破壊!!」

「!」

「効果を受けないユルセンを除外して考えると、今のカゲミツ姐さんの場で一番BPが低いのはゴーストムゲン魂!!…よってそれを破壊するぜ!…メテオバレットミラー
ジュ!!」

両腕のブラスタから火炎弾を同時に数発放つ龍騎サバイランザー。それらが飛び行く先は当然ゴーストムゲン魂なのだが……

「良い効果だ。だがこの程度で倒れるゴーストムゲン魂ではない。手札にあるカード2枚を破棄する事で、ムゲン魂はその効果を受けない!」

「!」

カゲミツが手札にある3枚の内2枚をトラッシュユへと破棄すると、ゴーストムゲン魂は自身に向かって飛んで来た火炎弾を全てガンガンセイバーで斬り落とす。

完全無欠のこの効果だが、今のカゲミツの手札は1枚。少なくともこのターンでもう一度その効果を使用する事はできない。アスラが狙っていたのはこのタイミングだ。

「でもこれでムゲン魂の効果はもう使えねえ!!…龍騎サバイランザーの更なる効果で

ムゲン魂に指定アタック!!…ブロックされた事により姐さんに1点のダメージを与える!」

「!」

〈ライフ4??3〉カゲミツ

龍騎サバイブランザーはゴーストムゲン魂に戦闘を挑むべく目をそちらへと向けるが、その瞬間にカゲミツのライフが1つ破壊される。

これも龍騎サバイブランザーの効果の1つ、ブロックされた時、スピリットを破壊した時に1点のライフダメージを与える。

「龍騎サバイブランザーのBPは17000!!…対するゴーストムゲン魂のBPは15000!!…この勝負はもらったぜ!」

「フラッシュ!!」

「!?!」

「変身した私の【神技】を發揮、コア3つを支払い、デッキの上からカードを2枚トラッシュへ送る事でスピリット1体のコア1個をリザーブへ…対象は当然龍騎サバイブ

ランザー!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】(4??3) LV3??2

ここに来てようやく発揮、判明される変身ゴーストの効果。一瞬紫の光に覆われてしまい、龍騎サバイランザーはそのLVを3から2へとダウン。BPも15000と、ゴーストムゲン魂と同等になってしまった。

「これで相打ち!!…道連れにしろゴーストムゲン魂!!」

両腕のプラスターから火炎弾を放っていく龍騎サバイランザー。

しかしゴーストムゲン魂はガンガンセイバーを振り、それらを斬り裂き、撃ち落としながら龍騎サバイランザーの元へと急接近して行く。

そんな中、アスラは更なるフラッシュタイミングで負けじと手札のカードを引き抜き
……

「まだ行ける!!…オマエの力はそんなモノじゃないぜ龍騎サバイランザー!!…フ

ラッシュマジック、ソードベント!!」

「!」

「この効果でゴーストムゲン魂のコア2個をリザーブに置き、龍騎サバイブランザーのBPを5000上げる!!」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】BP15000??20000

ー【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】(3??1)LV2??1

ここにきて形成逆転。

龍騎サバイブランザーはソードベントの効果を受け、両腕のプラスターから短剣を展開、自身に向かって来るゴーストムゲン魂へそれを向け、構える。

勝負は一瞬だった。龍騎サバイブランザーはその一瞬の内にゴーストムゲン魂のガンガンセイバーを弾き飛ばし、その胸部から腹部に掛けて強烈な剣撃を刻み込んでいて………

これには流石のゴーストムゲン魂でも耐えられなかったか、力尽きたように倒れ、爆散した。

「ほお。倒したか、最強のゴースト、ムゲン魂を」

「龍騎サバイブランザーの効果でさらに1点のダメージを与える!!」

「ツ……………」

へライフ3??2へカゲミツ

すかさず龍騎サバイブランザーより放たれた火炎弾。カゲミツのライフをまた一つ奪っていった。

だが不思議とアスラはカゲミツの余裕を感じていた。エースカードを破壊され、彼女は圧倒的に不利であると言うのに……………

だがその余裕の理由はやがて訪れる彼女のターンで明らかにされる事になる……………

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】LV2

【シャムシーザー】LV1

【決闘者たちの戦場】LV1

バースト：〔無〕

どちらにせよ、まだバトルは終わっていない。カブトの尾を締める気持ちでアスラはそのターンをエンドとした。

次は龍騎サイブランザーの強烈な一撃を受けても尚余裕の表情を浮かべるカゲミツのターン。その過程をゆっくりと進行させていく……………

「ターン06」カゲミツ

「メインステップ…………アスラよ。よくぞ身につけたその力を、よくぞ倒して見せたムゲン魂を…………だがそう易々と私が倒れてしまつては面白くない…………このターンで見せてやろう、不滅のライダースピリット、ゴーストの力を!!」

「ツ…………へへ、望む所ですよ!」

身分が最底辺のコモンで、しかもソウルコアが使えないアスラの実力を認める、マスターの身分を持ち、紫のカラーリーダーでもあるカゲミツ・ブゲイ。

遂に本気を出すのか、溢れんばかりのオーラを解き放ち、アスラへと襲いかかる。

「トラツシュよりネクサス、大天空時の地下をLV2で配置!!」

―【大天空時の地下】LV2（1）

カゲミツの背後に巨大な目のようなマークが刻まれた墓石が配置される。このカードは手札だけでなくトラツシュにある時でも配置が可能な特別なネクサスカード。これにより、カゲミツは手札を消費せずにネクサスを配置できるのだ。

「配置時効果でデッキから3枚オープン、その中のゴーストを1枚手札に加える!!」

効果も成功。カゲミツの手札は1枚増加し、合計3枚となる。

そしてここからアタックステップへと移行し……

「アタックステップ!!……そしてその開始時、再びオレ魂の効果を発揮、ガンガンセイバーから不足コストを確保させ消滅させつつ、オレ魂を召喚!!」

1【仮面ライダーゴーストオレ魂「2」】LV2（5）BP4000

ブレイヴの特性として場に残っていた剣のブレイヴ、ガンガンセイバーが不足コストの確保のために消滅した直後、再び仮面ライダーゴーストオレ魂が姿を見せる。

「アタックステップは続行!!……さらにこのフラッシュユタイミングでトラッシュに送ったガンガンセイバーの効果……コストを支払いオレ魂に合体!!」

00 1【仮面ライダーゴーストオレ魂「2」+ガンガンセイバー】LV2（5）BP70

今度は剣のブレイヴガンガンセイバーがトラッシュの底より蘇って見せる。オレ魂の手に握られ、カゲミツは再び合体スピリットを作成した。

「くっ………だけどもゲン魂になれないんだったらオレ魂の合体くらい………」

「どうしたアスラ、察しが悪いな?!………言っただろう、仮面ライダーゴーストは不滅のライダースピリットである!!」

「ツ……まさか……!!」

アスラはようやくカゲミツの考えている事、やろうとしている事を察した。
そうだ。

仮面ライダーゴーストとは死をも超越した、又は乗り越えた不滅のライダースピリット。いったいいつからかトラッシュの底より蘇って来るのがオレ魂だけであると思っていたのか……………

もう遅い。

この国の紫のカラーリーダーであるカゲミツ・ブゲイはトラッシュの底よりあのスピリットの効果を發揮させる……………

「私はトラッシュから仮面ライダーゴーストムゲン魂の効果を發揮!!……………トラッシュからゴーストを対象に焔臨する!」

「……………や、やっぱり……………トラッシュからの焔臨!?!」

「輪廻せよ、仮面ライダーゴーストムゲン魂!!」

今一度、オレ魂が無限の文字が描かれた光に包み込まれて行き、その中で究極のゴ-

スト、ムゲン魂へと再び進化を遂げる。

そう。ゴーストが蘇生できるのは起点になるオレ魂だけではない。この卓越された究極のムゲン魂もまた何度でも蘇る事ができる。

例え何度敵に負け、破壊されようが、煌臨元になるスピリットさえ居れば、撃ち砕く敵さえ存在すれば……………

何度でもその姿を地上に晒すのだ。

0
 1【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】LV3(5)BP1800

「ウソ……………トラッシュのカードだけでムゲン魂を復活させるなんて……………!?!」

「凄すぎるぜカゲミツ姐さん……………やっぱアンタ最高のカラーリーダーだ!」

「ふひひ……………強くなつたなアスラ。この状況で、まだ笑える余裕があるとは!!……………ムゲン魂の煌臨時効果、龍騎サバイブランザーのコア3個をリザーブに送る!!……………よって消滅!」
 「ツ……………龍騎サバイブランザー!!」

1【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】(3??0)消滅

唐突に復活して見せたムゲン魂に驚愕する間もなく、その神々しい眼光から紫の衝撃を解き放つゴーストムゲン魂。

龍騎サバイブランザーは避けられずに直撃。体内のコアを全て吐き出され消滅させられてしまう。その際に合体していたブレイヴ、ドラグレッダーが合体を解き、脱出飛び出していった。

「さらに変身した私の【神技】!!…今度はシャムシーザーのコアを1個リザーブに、よって消滅!!」

「くっ……!!」

1【シャムシーザー】(1??0) 消滅

止まらない。止められないカゲミツ・ブゲイの勢い。今度は変身カードの能力でアスラのスピリット、シャムシーザーを消滅に追い込んだ。

これでアスラの場合に残ったのは疲労状態のドラグレッダーのみ。ムゲン魂がアタック中である事もあり、完全に追い込まれてしまった……

「さあ、この一撃、オマエならどう受ける。スーミ村のアスラアアア!!」
「ツ……アスラ!!」

カゲミツの叫びと共に迫り来るムゲン魂。それを心配したエールがそう声を荒げる。
だがアスラもまだ諦めてはいない。手札にあるカード1枚を咄嗟に抜き取り、それをBパッドへと全力で叩きつけた。

「オレはまだ、戦える!!……フラッシュユマジック、リミテッドバリア!!」

「!!」

「不足コストはドラグレッツダーを消滅させて確保!!……よってこのターン、オレのライフはコスト4以上のスピリットから減らされない!!……攻撃は当然ライフで受ける!!」

へライフ1??1へアスラ

ゴーストムゲン魂が合体したガンガンセイバーを手に、アスラのライフを斬りつける瞬間。ライフバリアとは別の巨大なバリアが前方に展開。

ゴーストムゲン魂はその巨大なバリアに阻まれ、アスラの最後のライフを破壊するに至らなかった。

「エンドステップ。ユルセンの効果でデッキからゴーストを手札に加える……………良い。良いぞアスラ!!…その調子で次のターンも全力で来い!!…そしてもつとこの私を楽しませてくれ!!……ターンエンドだ!!」

手札：4

場：【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】LV3

【ユルセン】LV1

【変身!!仮面ライダーゴースト】LV1(0)

【大空時の地下】LV2

バースト：【無】

切札だった龍騎サバイブランザーは復活したゴーストムゲン魂に消滅させられ、不足コストで敢えなくドラグレッダーも消滅。

絶対絶命の崖っ淵に立たされたアスラ。この果てしなく巨大な壁を乗り越えなければ最後のカラーリーダーに挑む事はできない。

だが、そんな状況でもアスラは笑みを浮かべていて……………

「絶対絶命の崖っ淵……………場のスピリットの差は圧倒的で、しかもオレにはソウルコアがねえ……………何度も味わって来たこの状況……………でもオレは負けねえ……………今回も絶対覆して、勝つて、オレはロンと同じ道を進む!!」

決して勝負を捨てないアスラの気概。逆境だからこそ吹き上がるモチベーションは彼を更なる高みへと誘う。

その証拠に、そんな彼の気持ちに應えるかのように、デッキが黒く光輝いて……………

「ツ……………デッキが黒く……………!?!」

紛う事なき異変に目を鋭くし、そう呟くカゲミツ。だがアスラはそんな事お構い無しに、自分が今までやって来た努力を信じ、ターンシークエンスを進行させていく……………

「ターン07」アスラ

「ドローステップ!!……ッ」

ターンシークエンスの過程の中で黒く輝くデッキからカードを引き抜くアスラ。そのカードは毎度の如くあのスピリット。

何故、今この場で出現したのかは定かではない。いつも聞こえて来たアイツの声は聞こえない。

「………そっか。一緒に戦ってくれるんだな………つしやあ行こう、今日からオマエも、オレの相棒だ!!」

だが、これも自分の得て来た力の1つなのだと自覚し、アスラはメインステップに入。その力を使う………

「メインステップ!!………先ずはドラゴンヘッドを3体連続召喚!!」

1 [ドラゴンヘッド] L V 1 (1) B P 1 0 0 0

1【ドラゴンヘッド】LV1(1) BP1000

1【ドラゴンヘッド】LV1(1) BP1000

手始めに並んでいく小さなドラゴン達。そしてアスラは手に握るその存在をBパッドへと全力で叩きつけて……………

「行くぜカゲミツ姐さん!!……………これが今のオレにできる全力の一手!!……………現れろ、黒きライダースピリット、仮面ライダーリユウガ!!」

「!!」

1【仮面ライダーリユウガ】LV3(5) BP12000

様々な鏡像が重なり合い、アスラの場合へと出現したのは黒いライダースピリット、仮面ライダーリユウガ。

推測の域を出ないが、おそらくブラックフォースであるオニキスが作り上げた龍騎とは別のライダースピリット。

「え……黒い龍騎!?…アスラ……」

「黒い龍騎……良いぞアスラ!!…オマエの全力を持ってこの私にぶつかって来い!!」

戸惑うエールに、闘争本能をさらに掻き立てられるカゲミツ。

そんな中でもアスラは完全にデッキの仲間となった仮面ライダーリュウガの召喚時効果を発揮させて……

「よおっし!!…召喚できた!!…行くぜリュウガ!!…オマエとオレの力、カゲミツ姐さんに見せつけてやろうぜ!!…召喚時効果、相手スピリット全てのコアを2個ずつリザーブに送る!!」

「!!」

リュウガはベルトからカードを引き抜き、それを左腕のバイザーに装填……

……アドベント!!

と言う凶太い音声と共に黒いドラグレッタダーが鳥栖を巻きリュウガの背後へと出現。その口内から黒炎の炎をゴーストムゲン魂へと放つ。

ゴーストムゲン魂はこの攻撃を受けて仕舞えばレベルが2までダウンしてしまうの

だが……………

「ムゲン魂のレベルを下げるのが目的か、だがその効果は受けん!!…手札のカード2枚を破棄してその効果を無効にする!!」

当然、無効にして来る。4枚の内2枚の手札がコストとなり、ゴーストムゲン魂はその黒炎を自身の体から眩い光を解き放ち吹き飛ばしていく。

しかし今のアスラの勢いはこの効果無効だけでは止められなくて……………

「アタックステップだ!!……………仮面ライダーリユウガ、攻撃だアアア!!」

その鉄仮面の奥に眠る黒き眼光が光、アスラの指示を引き受ける仮面ライダーリユウガ。カゲミツの残り2つのライフを目掛けて走り出した。

幸いにも今現在彼女の場にはブロックできるスピリットはいない。普通ならばその後の3体のドラゴンヘッドのアタックも含めればアスラの勝ちではあるが……………

普通でないのがカラーリーダーであるカゲミツのバトルであり……………

「甘い!!…ムゲン魂を突破できない勝利など、この私が認めんぞアスラ!!…フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「!!」

「不足コストはムゲン魂のレベルを2に下げて確保。よつてこのターンの間、ムゲン魂のBPを30000アップさせ、疲労状態でのブロックを可能にする!!…黒い龍騎、リュウガを迎え撃て!!」

0
 ー【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】BP15000??18000

カゲミツの2枚ある内の1枚から放たれるマジックカード。それにより、ムゲン魂のBPはLVダウンと差し引いてもプラスマイナスゼロとなり、しかもこのターンの間疲労状態でのブロックを可能にした。

それが示す事は即ち、このターンもまたゴーストムゲン魂を突破しなければアスラの勝利は無いと言う事であつて……

「アスラのリュウガのBPは12000……カゲミツのムゲン魂のBPは18000

「!」

フラッシュユタイミングで轟くアスラの咆哮。それに応えるかのように黒い龍騎、仮面ライダーリュウガは両拳をクロスさせその一振りを抑え込んだ。

そしてアスラはそれを見越し、手札にある最後の1枚を引き抜いて見せ……………

「まだまだオレは進む!!……………例えどんなに凄い数の障害があつたとしても、オレは頂点王になるまでそれに挑み続ける!!……………フラッシュマジック、ソードベント!!」

「ツ……………2枚目!?!」

「不足コストはドラゴンヘッド1体より確保!!……………よって、この効果でリュウガのBPをプラス5000。さらにゴーストムゲン魂のコア2つをリザーブに置く……………ゴーストムゲン魂は手札2枚をコストに対象になる効果を受けなくできる……………けどカゲミツ姐さん、今やアンタの手札はたったの1枚、この効果は防げないぜ!」

「くっ……………!」

1 【仮面ライダーリュウガ】BP12000??17000

1 【仮面ライダーゴーストムゲン魂+ガンガンセイバー】(4??2)LV2??1

3体いる内1体のドラゴンヘッドが消滅する中、腕をクロスさせて受け止めた攻撃を弾き返すと、その手には黒い柳葉型の剣が握られる。リュウガはそれをゴーストムゲン魂に向けて振り、黒い斬撃波を発生、ゴーストムゲン魂はそれに被弾してしまい、そのLV、及びBPを大幅にダウンさせられてしまう……

「……………何と言う事だ。光翼之太刀の効果を含めても、レベルの下がったムゲン魂のBPは14000……」

「そう。つまりオレが……オレのリユウガが勝ち!!……いつけええりユウガ……ブラックバーニングセイバアアアアア!!!」

黒い炎を剣に纏わせ、ゴーストムゲン魂の元へと突っ込んで行く仮面ライダーリュウガ。そして一瞬の内に通り過ぎつつ一閃。

目にも留まらぬ早技でゴーストムゲン魂の胸部に一太刀を浴びせる。耐えられなかったか、ゴーストムゲン魂は力付き、再度爆散してしまった……

「……………これが龍騎に眠る黒龍の力……不滅のゴーストをも打ち破るとは」

その際に合体していたブレイヴ、ガンガンセイバーが爆風で宙へと飛んでいき、虚しくも地面に突き刺さる。そのムゲン魂の敗北したさまに、カゲミツは己の敗北を強く受け入れるかのようにその瞳を閉じる……………

「来いアスラ。悔いはない……………私にトドメをさせ……………」

「ああ……………これで最後だ……………言つて来い2体のドラゴンヘッド!!」

アスラの指示を聞き、2体のドラゴンヘッドが宙を駆け抜ける。負けを認めたカゲミツは何も言わずにその攻撃をただただ受け付けて……………

「ライフで受ける……………」

△ライフ2??1??0▽カゲミツ

2体のドラゴンヘッドによる渾身の体当たりが遂に紫のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイのライフを討ち取ったのだった……………

彼女のBパッドから彼女の敗北を告げるかのように「ピー……」と言う音声の流れて行く。そしてそれは同時にアスラの勝利を意味しており……

「……………よし……………よし!!……………やった……………やった……………勝ったぜ、やっと、ようやく……………あのカゲミツ姐さんに!!」

一度は敗北を喫したカラーリーダー、カゲミツに勝利した事で大いに喜びを見せるアスラ。そしてふと冷静になり、己のBパッドに置かれている仮面ライダーリュウガのカードを手に取るとある事に気がついて……………

「……………あ、アレ。リュウガが消えない……………いつもならここで黒くなってカード事消えるのに……………龍騎のカードも一緒にまだ使える……………!?!」

不思議と、いつもとは違う現象が起こっていた。仮面ライダーリュウガが消えていないのである。まるでアスラを真の仲間であると受け入れたかの如く、仮面ライダーリュウガのカードは彼のデッキに留まり続けていて……………

「へへ……なんかようわからんけど、烈我達との特訓の日々は無駄じゃなかったんだな……!!」

これを異世界での特訓の成果だと認識するアスラ。異世界でできた仲間達の事を思い出し、思わず嬉し笑い。

そんな時、エールが彼の元に寄ってきて……

「アスラ。先ずはおめでとうって言いたいところだけど、その黒い龍騎を使っても大丈夫だったわけ……!?!」

「おおエール!!……応援サンキューな!!……なんかようわからんけどちゃんと無事だぜ!」

「そ………な、なら良いんだけど」

「むえ〜」??おめ

リュウガを扱うアスラを見て、今までに無い彼を見ているような感覚を味わっていたエールは、いつもの何気ない彼を見てホッとした様子を見せる。

そして今度は敗北したカラーリーダー、カゲミツが彼の所へと歩み寄る。

「……………出し切った。良いバトルだったなアスラ……………やはり私の目に狂いはなかった。コモンだろうが、ソウルコアがなからうが、オマエは最高のカードバトルだ」

「カゲミツ姐さん……………」

「きつと、天の神は自分の境遇に言い訳せず、ただひたすらに前を向けるオマエだからこそ、ソウルコアの力を授けなかったのかもしれない……………ほい、約束のカラーカード。紫だからパープルカードだ。受け取れ」

「ツ……………ありがとうございまアアアアす!!」

完全にカゲミツからも認められたアスラ。紫のカラーカード、パープルカードを受け取りながら大きな声で感謝の言葉を送った。

これで今回の話は終わり。また次回のお楽しみに……………と、言いたいタイミングだったが……………

「……………ところで、オマエはこのバトルに勝利した事で私、カゲミツの「婿」になる権利を得たわけだが……………」

「なあ!？」

「ん?……:そういうムコってなんすか?…:姐さん結構その言葉使ってましたよね?」

変態モードに突入するカゲミツ。アスラを媚にしようと言い寄るが、アスラ本人は全くそれに気がついていない様子。

ただエールの方が反応を強く示して……:

「ちよ、ちよつと!!…:そ、それはダメよ!!」

「ほお?…:なんでだエール。答えて見ろ」

「な、なんでつて……:それは……:」

本能的に思わず止めに入るエールだったが、逆に質問されて言葉を詰まらせてしま
う。

「なんだそこで詰まるのか。そう言う時くらい素直に「アスラは私の媚になるから」とか
言えないのか?」

「?!」

51コア 「嵐を呼ぶ滅亡迅雷」

スーミ村近辺でシイナ・メザに拾われたアスラとロン。2人の壮大な物語が始まるお
よそ13年前の話……………

当時9歳だったライダーハンターズの最強格トウエンティは、普通な「レア」の身分
であったが、早くで両親を失い、独り孤独な生活を送り続けていた。

若すぎた故働き口もなく、ただただ痩せ衰え、弱っていった。身体が衰弱していくの
を感じ、脳が「生きろ」と命令して来るが、それ以上に本能がもう生きるのを諦めてい
た。

いつそ死んでしまった方が楽になる。

そう考えた当時のトウエンティは誰にも見られないであろう町の裏側、路地裏にて
ひっそりと身を潜めていた。いずれ来る死をただ待ち侘びていた……………

しかし……………

そんな彼にも救いの手は差し伸べられた……………

「……………ねえ君。なんでそんな所にいるの??…こんな汚い所にいたら服が汚れちゃうよ？」

「……………」

「??…まあいいか、ちよつと待っててね!!」

現れたのはブロンドヘアの長い髪の少女。歳は自分と同じくらいだった。

「おーいバカ兄貴〜!!」

「……………ああ?…んだよクソ妹。また変なモノ見つけたんじゃないだろうな?…何度も言ってるが犬や猫は飼わんぞ」

「違うよ…人だよ人!!…男の子がそこでずっと座ってるの!」

「ああ?」

少女が誰かを呼ぶようにそう叫ぶと、2人目の人物がこの場にすぐさま現れる。黒髪の若い男性。二十歳には到達していないくらいか。自分と同じ無表情で、何を考えているかわからなかった。

「おいオマエ。何そんな所に座ってんだ……ああアレか。親父とお袋が乳繰り合ってる
せいで家に帰れないってか?」

「……………」

「オレの熱烈ジョークを無視すんな小僧、殺すぞ?」

意味のわからない彼の冗談を無視するトウエンティ。

いつそ本当に殺して欲しかった。今ここで死ねば楽だとどれほど考えていた事か

……………

「……………まあ来るとこないならオレと一緒に来るか?……ここで死んじまったら余った寿命
の数だけ人生損するだけだぜ」

「……………嫌だ。生きている方が意味ない……………」

臆気なからにそう呟くトウエンティ。

生きていても意味がない。生きている時間こそが無意味なのだ、本気で思っていた

……………

「うーん……よし、じゃあ私たちと一緒に旅しない？」

「!?」

「今ちようど国のあつちこちを周らないといけないんだー!……一緒に旅していたら絶対見つけられるよ、生きる意味!」

「おい何言つてんだクソ妹。オレは嫌だぜ、こんなヤツ」

「バカ兄貴に決定権はありません!!」

少女からの突然の提案に驚きを隠せないトウエンティ。その後、少女は座り込んで、彼の手を無理矢理引っ張り立ち上がらせると……

「ねえ君、名前は?」

「!!」

その名前を問いかけた。トウエンティは照れ臭そうにしながらも答える。

「……………名前……………トウ……………トウエンティ……………」

「トウエンティ!!…名前長いねー!!…私はカナ!!…テンドウ・カナ!!…こっちはバカ兄貴!!」

「誰がバカ兄貴だこのクソ妹。オレはテンドウ・ヒロミだ…三王のサイコパスババアがムカつくんでこの国の頂点王にでもなつてやろうと思つてまーす」

その正体は当時16歳だったテンドウ・ヒロミ。そして一緒に連れていた少女はその妹のカナである。

この時のテンドウはまだ三王ではなく、単なる挑戦者。

三王であり、エール・オメガの母でもあった『エレナ・オメガ』を倒すべく、妹のカナと共に旅をしていた。彼の言う『サイコパスババア』とは無論彼女の事である。

異国の者だが、本気でカラーリーダーを全員倒して、三王に挑むつもりだったのだ。

半ば強引なやり方ではあったが、トウエンティはそんなテンドウ兄妹の手に救われ、共にこの国を旅していく事になる。

最初こそ気乗りしなかったが、次第にテンドウの強さに憧れを持ち、カナに好意を抱いていった事で、この旅はトウエンティにとっては何よりの宝物となり、決して忘れる事のできない掛け替えの無いモノとなった。

この2人こそが自分の生きる意味なのだと考えを改める事ができた……………

後にテンドウはカラーリダーこそ全員倒すも、エレナには敗れ、彼女のスカウトで自身がこの国の三王となってしまい、そこで旅は終わってしまうのだが、トウエンティは彼の妹、テンドウ・カナと恋仲になり、一緒にこの国で幸せに暮らしていた……………

はずだった。数年後、彼女が謎めいた病に陥るまでは……………

「ふーん。原因不明の病ねー…まあ人間生きてればそういう事もあるだろうよ」

「何呑気な事言ってるんだテンドウさん!!…病にかかったのはアンタの妹だぞ!!」

「……まあそれがアイツの寿命って事だろ。だったら残り少ない人生、オマエが楽しませてやれ」

「……………なんで……………なんでそんな事言えるんだよ!!…死ぬんだ、死んじやうんだぞ!!…カナが!!」

精神的に大人が故に、テンドウはかなりの余裕を見せているが、トウエンティから見

たら既に彼は妹であるカナの事を諦めているように感じていて……………

「だったらオレがカナを救う!!……この身がどうなるうとも、必ずオレが救う!!」
「ワハハハハ!!……なんだオマエ、医者にでもなるうってか？」

今度は自分がカナを救う番だ。そう己に言い聞かせ、トウエンティは悪魔に魂を売る事になってしまう。

それこそがウイル、ライダーハンターズだ。病に落ちた恋人カナを救うため、トウエンティはこうして今もライダーハンターズを続けている……………

時は戻り現在。

ライダーハンターズの1人トウエンティは主任であるウイルに言われるがまま、赤の町外れに新たに発見されたとされるコラボダンジョンに足を運んでいた。

最も、オロチを始め、イバラもライダーハンターズを辞めたため、団員はこのトウエンティのみなのだが……………

「……微かに感じる……この奥に眠るライダースピリットの力を……そしてもう一つ……」

コラボダンジョンの扉の前でそう呟くトウエンティ。ただ、もう一つ気になる気配があるようで、茂みの方へと目を向ける……

「そこにいるのはわかっている。いい加減様子見はやめて出てきたらどうだ……スーミ村のロン」

「……………」

トウエンティにそう言われ、茂みの方から姿を見せたのは、アスラの永遠のライバル、ロン。トウエンティと同様にクールな表情を一切崩さない。

敵対する関係にある両者、暫く睨み合いが続くと、先に口を開いたのはトウエンティだった。

「フツ……オレを尾行して、気づかれないとも思ったのか？」

「尾行したんじゃない。偶然見つけたから興味本位で後ろをついて行っただけだ」
「それを尾行と言うんだがな」

2人がこのような場で出会ったのはどうやら偶然のようである。ロンは言葉を続け
て……………

「オマエとは一度決着を着けておきたいと思っていた所だ……………ミナト達の居た異世界では結局何もできなかったが……………オレ達以外に誰も居ないこの状況なら」
「決着を着けられる……………と？」

「デッキを向けながらそう告げるロンに、トウエンティが察しそう言い返した。それに対してロンも首を縦に小さく振る。」

「ハッ……………生憎だが、貴様との決着は既に着いている。青の町、ナミラ町近辺で発見されたコラボダンジョンでな」

「……………」

ロンの中では忘れもしないあのバトル。あの時のバトルでは手も足も出ずにトウエンティに敗北した。

だが、今のロンは違う……………

「決着は既に着いている? ……これを見てもまだそれを言えるか?」

「……………なッ!」

ロンは懐からカードを取り出し、それをトウエンティへと見せつける。

そのカード達は所謂『カラーカード』……………

カラーリーダー達に勝利した証としてもらえる強者の証。

そして、ロンはその内の1枚も欠かさず、最後にして最難関と呼ばれる赤のカラーカード『レッドカード』までもをトウエンティに見せつけて……………

これ即ちロンはもはや三王に限りなく近い実力をトウエンティに示しているに他ならなくて……………

「貴様……………6枚のカラーカードを……………」

「ああ。三王に挑む前の特訓でオマエとまたこうして巡り合うとは思ってもいなかった

ぜ」

ロンのこの行為で空気が一変する。

彼の実力の高さを知って、バトラーとしての本質が燻ったのか、トウエンティはバトルに対してやる気を見せつけるかのようにデッキを取り出す。

「……いいだろうスーミ村のロン……コラボダンジョンに行く前に先ずは貴様のライダースピリットをハントするのも悪くない」

「フツ……そうかなくてはな」

さらにはBパッドまでもを取り出し、いよいよアスラのライバル同士である2人の決闘が幕を開ける……………

かと思われたその直後。

ロンとトウエンティの頭の中に直接流れ込むように誰かの声が聞こえてきて……………

……………ザザザ……………誰だ。私の力を求める者は……………？

ー!!

ドスの聞いた男の笑い声。流れ込んで来たその声は2人の動きを止め、バトルへのモチベーションを消失させる。

「…………この声…………まさかこのコラボダンジョンから…………」

「何者かは知らないが、バトル中に声を掛けられるのも面倒だな。どうだ、ここは一時休戦してこの中にいるヤツを黙らせてから決着を着けるのは」

ロンがトウエンティにそう提案する。他の誰もいないと思っていたこの空間。ロンは誰の邪魔もされずにトウエンティとの決着を着けたいようで…………

だがそれはトウエンティにとっても好都合。一度デッキとBパッドを懐にしまいながらそれに賛同して…………

「…………それは同意見だ。この勝負、いったん預ける…………だが、この中にあるであろうライダースピリットをもらうのはこのオレだ」

「フツ……好きにしろ、オレはオマエの目的に興味はない」

お互いに承諾を得た所で、2人は青銅でできたコラボダンジョンの扉を開け、中へと進んで行った……

……………

古びた煉瓦の積まれたダンジョンを歩いていく中、2人はある者達と対面していた。

「……ケモノか」

「丁度良い。準備運動がてらに蹴散らしてやる」

その正体は黒い煙の怪物『ケモノ』……………

コラボダンジョンにおいては「罨」として数多く存在し、コラボダンジョンにある最も貴重な物を守るために奔走する。

その正体は過去に生きていたとされるバトスピ生命体。つまりバトスピで倒せば消える。ナミラ町のコラボダンジョンでも数多く出現した。

2人はデツキとBパッドを構え、セットし、それぞれと対面しているケモノとバトルを行なっていく。

ケモノもBパッドに酷似した物体を黒い煙で作り上げ、対抗するが、無論2人と比べたらケモノの実力は大したことはない。それが故に……

「行け、ナイトサバイブ!!」

「やれ、ジオウII!!」

黒いマントを靡かせる騎士型のライダースピリット、ナイトサバイブの凄まじい剣撃と、時を操る仮面ライダージオウ、その第二段階であるジオウIIの強烈な蹴りがケモノの最後のライフをそれぞれ打ち砕く。

(……ジオウ……時を操る力と、他のライダースピリットを統べる力……成る程チートだな)

(……ナイトサバイブ。成る程、本当に口だけじゃないようだ……それにコイツはまだ本気じゃないな)

敗北により消え去っていくケモノ達を眺めながら、互いに互いのバトルに対する感想を内心で述べていく両者。

「……先を行くぞ」

「ああ」

その関係性もさる事ながら、会話を全くしないロンとトウエンティ。コラボダンジョンのさらに奥まで突き進んでいき、やがて最奥部へと辿り着いた……………

……………

「……がこのコラボダンジョンの奥か」

「……おい、オレ達を呼んでいたのは誰だ!!……隠れてないで姿を見せたらどうだ!!」

到着するなり、先程の声を呼び出すべく叫ぶトウエンティ。

その声が古びた煉瓦に反射して響き渡ると、こだまするようにその声は再び聞こえて来る……………

「ザザザ……来たか…迷える子羊君達」

「……ケモノ？」

「イヤ……コイツは何か違うな……まあケモノ同様、コラボダンジョンの罠には変わりなさそうだが」

現れたのは黒い煙の姿をした何か。そこから声が聞こえてくるのは間違いないのだが、ロンからして見ればどう見てもさつきバトルで戦ったケモノにしか見えなかった。

「ザザザ……ここにきて早15年。そろそろ『約束』の時かと思っていたが、成る程、おそらくこの銀髪の方だな」

「オレ?……約束とは何だ？」

「ザツザ……まあそんなに気にするな……貴様がバトルに勝てば、私の持つライダースピリットを授けよう……その数、4枚だ」

「ツ……4枚だと!？」

その数に驚愕するトゥエンティ。無理もない、何せ今現在16枚のライダースピリッ

トを所持しているトウエンティはそのバトルに勝利するだけで目標だった20枚に手が届くのだから……

俄然、気合が入る……

「さあ来い。約束通り汝が私に相応しいか、試して見ろ」

黒い煙はそう告げながらケモノ同様のBパッドもどきを展開。その上にデッキを乗せる。

「邪魔立てするなよロン……これはオレのバトルだ」

「……わかってる。そう言う約束だからな」

2人の中でバトルに挑むのは黒い煙直々に指名が下ったトウエンティ。ロンはそんな2人のバトルを見届けまいと、後ろに下がる。

「ザザザ……これはバトルではなく、試練。そう思って挑んで来い、行くぞ選ばれし者よ」

「何でも良い。誰が相手だろうと、このバトルは勝つ……そして必ず20枚のライダースピリットを得る」

……全てはカナのために!!

そう内心で叫びながら、己のBパッドを展開し、デッキをセットするトウエンティ。これで互いにバトルの準備は完了。

そして……

……ゲートオープン、解放!!

この誰にも見つけられなかったコラボダンジョンにて、恋人のために悪魔に魂を売った男トウエンティと、謎の生命体によるバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける。先行は黒い煙だ。実態がないため、カードを宙に浮かし、ターンを進めていく。

「ターン01」黒い煙

「メインステップ……ザザザ……先ずはネクサス、衛星アークを配置」

「！」

「【衛星アーク】 L V 1

彼の後ろに現れたのは巨大な衛星。その名もアーク。

「配置時効果でデツキから3枚をオープン。その中の対象となるスピリット1枚を手札に加える……私は『仮面ライダー雷』を手札に加え、残りをトラッシュに破棄」

「……早速来たかライダースピリット」

「私はこれでターンエンド……汝のターンだ」

手札：5

場：【衛星アーク】 L V 1

バースト：【無】

おそらく己を選んだであろうライダースピリットをデツキから手札に加え、そのターンをエンドとする黒い煙。

次はトウエンティのターンである。目標が眼前に迫っているため、やや前のめりな気

持ちが現れているものの、そこは幾戦もの戦いを乗り越えたプロフェッショナル。心を落ち着かせ、冷静な表情を見せながら己のターンを進めていった。

「ターン02」 トウエンティ

「メインステップ……オレは仮面ライダージオウに変身する!!」

「ほお、変身か」

……カメー……ンライダー……!!

ジ、オーウ!!

ー【変身!!仮面ライダージオウ】L V 1

背後に時計のようなモノが浮かび上がると、トウエンティの身体はみるみる内に仮面ライダーとなっていく、全てのライダーを司る存在、仮面ライダージオウへと変身して見せた。

「配置時の神託を發揮!…対象カードは3枚、よつてコアは3つ追加!!…：そらにオレは仮面ライダーWサイクロンジョーカーを召喚、効果でコアブースト!」

…サイクロン!

…ジョーカー!!

ー【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】LV1(1S)BP2000

紫電纏し疾風が吹き荒れ、中より半分緑で半分黒のライダースピリット、仮面ライダーWサイクロンジョーカーが出現。その効果でトウエンティのコアを増やす。

「ライダースピリットの召喚でオレに神託。バーストをセットし、最後にネクサスカード、パンドラボックスを配置してアタックステップ…：オレはWサイクロンジョーカーで攻撃する!!」

最初のターンであるにもかかわらず、颯爽と攻撃を仕掛けるトウエンティ。Wサイクロンジョーカーが地を駆けていくが、その間に彼はさらなるアタッカーを供給して

.....

「フラッシュ……変身したオレの【転神】を発揮!!……このターン、オレもスピリットとしてアタックを行う事ができる！」

「！」

ー【変身!!仮面ライダージオウ】(4??1) BP3000

Wサイクロンジョーカーが疾走する中、自身も場へと赴くジオウに変身したトウエンティ。怒涛の連続攻撃が幕を開ける。

「Wサイクロンジョーカーのアタックはライフで受ける……」

へライフ5??4へ 黒い煙

嵐の力を乗せたWサイクロンジョーカーの拳の一撃が黒い煙のライフバリアを1つ打ち砕く。

「続けてオレ自身で攻撃する……!!」

「それもライフで受けよう」

〈ライフ4??3〉 黒い煙

続け様にジオウに変身したトウエンティの拳がライフを殴り壊す。これでこのターンで出来る事を全て終えたトウエンティはこのターンのエンドステップを迫られて

……

「オレはこのターンをエンドとする……!!」

手札：1

場：【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】 LV1

【変身!!：仮面ライダージオウ】 LV1 (1)

バースト：【有】

そのターンをエンドとするトウエンティ。怒涛の連続攻撃をを決め、守りの要である

バーストカードも伏せた事により、かなり幸先の良いスタートを切れたと言える………
だが次は黒い煙のターン。彼の操るカードが蠢き出して………

「ターン03」黒い煙

「メインステップ……ザザザ……成る程、良い攻撃だった。かなり洗練された腕前だ。
興味深い、非常に面白い個体だよオマエは」

「長々と貴様の会話に付き合う気は無い……早くかかって来い」

「おおおお、怖い怖い……じゃあ始めるとするか」

何者かも知らない黒い煙を急かすトウエンティ。黒い煙はジオウの驚異的なスペックを理解しながらも、不気味で冷たい笑い声を零しながらターンを進めていく。

「衛星アークのLVを2に上げ、このスピリット、仮面ライダー雷をLV2で召喚………

！」

！」

┆【衛星アーク】(0??2) LV1??2

┆【仮面ライダー雷】LV2(2S) BP6000

紫のシンボルが砕け散り、中より現れたのは2つの剣を持つ赤黒いライダースピリット、その名も雷。

「ザザザ……雷の召喚時効果でWサイクロンジョーカーからコアを1つリザーブへ……よって消滅！」

「!」

┆【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】(1S??0) 消滅

雷は登場するなり2つの剣を打ち鳴らしながら電気力を溜めると、それを一気にWサイクロンジョーカーへと向けて発射。Wサイクロンジョーカーはたちまちコアが消失し、消滅した。

しかし……

一見有効打に見えるこの効果はトゥエンティの伏せていたバーストを踏んでしまう

条件でもあって……………

「それが貴様のライダースピリットの力か……………この程度ならオレの敵ではない!!…:相手の召喚時効果発揮後によりバースト発動、第二の仮面ライダークウガライジンググマイティ!!」

「!」

「バースト効果によりシンボルが1つの雷を破壊し、このスピリット自身を召喚!」

1〔仮面ライダークウガライジンググマイティ「2」〕LV1(1S)BP6000

Wサイクロンジョーカーを葬った雷。しかし直後に反転したトウエンティのバーストカードの効果により、足元から火柱が吹き荒れ、それに飲み込まれてしまった。

対するトウエンティの場には赤きライダースピリット、仮面ライダークウガライジンググマイティが新たに出現。

複数のライダースピリットを有する事ができるトウエンティの形成逆転

……………

かに見えたが……………

「ザザザ……今度は赤属性のライダースピリットか。良い効果してるな」
「……………なに!?……………何故雷が場に残っている!？」

消えて行く火柱の中より姿を見せたのはまさかの対象になったはずの仮面ライダー雷。クウガライジングマイティの効果を受けて尚生き残って見せたのだ。

当然カラクリがないわけではなく、黒い煙はそれをトウエンティに説明して行く。

「ネクサス、衛星アークのLV2の効果だ。カード名「滅」「亡」「迅」「雷」を含む自分のスピリットが相手の効果で破壊される時、同じ状態で残る」

「!!」

「そう。この効果で雷は効果で破壊されても尚、生き残った」

仮面ライダー雷のその驚異的な生命力の秘密はネクサスカードである衛星アークにあった。これにより、雷はLV2の衛星アークが存在する限り、決して効果破壊効果を受けない。

「そしてそのライダースピリットにもご退場願おうか………衛星アークのLVを2にダウンさせ、雷のLVを3にアップ」

ー【衛星アーク】(2??0) LV2??1

ー【仮面ライダー雷】(2S??4S) LV2??3

仮面ライダー雷のLVをマックスの3に上昇させる黒い煙。直後に堂々とアタックステップを宣言して見せ………

「アタックステップ………雷でアタック。アタック時効果でクウガライジングマイティに指定アタック！」

「なに!?!」

「驚いたか?…雷はコアが2個以下のスピリットを指定してアタックができる」

紫で指定アタックを行える特異なスピリット雷。その2つの剣に稲妻を迸らせ、トウエンティの場のクウガライジングマイティを容易に斬り裂く。クウガライジングマイティは堪らず爆散してしまった。

「……………くっ」

「ザザザ……………少なくともこのターンの閲ぎ合いは私の勝ちだな。ターンエンド」

手札：5

場：【仮面ライダー雷】LV3

【衛星アーク】LV1

バースト：【無】

(……………コラボダンジョンの最奥部の罠だけあって流石になかなかやる。だが見逃さないぞ、オレのクウガライジングマイティを破壊するために衛星アークのLVを下げた事を……………！)

衛星アークのレベルがダウンし、雷の耐性が無くなっているこの一瞬隙をトウエンティは逃さない。雷を破壊して優勢に立つべく、その巡って来たターンシークエンスを進めていった。

「ターン04」トウエンティ

「メインステップ……まずは仮面ライダービルドラビットタンクフォームを召喚！……召喚時効果でデッキからカードを3枚オープン、その中のライダースピリット、クウガラ イジングペガサスを手札に加える」

……鋼のムーンサルト、ラビットタンク!!

ー【仮面ライダービルドラビットタンクフォーム】LV2（3S）BP6000

鳴り響く音声と共に、赤と青が特徴的なライダースピリット、ビルドラビットタンクフォームが姿を見せる。その効果でトウエンティの手札を潤す。

「神託でコアを追加し、アタックステップ……ビルドラビットタンクフォームで攻撃する！」

反撃開始であると言わんばかりのトウエンティの攻撃。そのフラッシュタイミングで手札からさらにカードを1枚引き抜いて……

「フラッシュエンジン、ビルドラビットタンクフォームを対象に、今加えた仮面ライダークウガライジングペガサスを発揮!!……BP10000までスピリットを好きにだけ破壊」

「!」

「仮面ライダー雷を破壊する!!……そしてその後対象となったビルドラビットタンクフォームと回復状態に入れ替える!!……現れる!」

「仮面ライダークウガライジングペガサス」LV2(3S)BP7000

放たれる疾風の矢。それは黒い煙の場に存在する雷の腹部に命中。その身体はたちまち風化してしまい、この世を彷徨った。

トウエンティィの場ではビルドラビットタンクフォームがデジタル粒子に変換。分解と結合を繰り返し、新たなライダースピリット、仮面ライダークウガライジングペガサスへと姿を変えた。その新たな姿で場がガラ空きとなった黒い煙に容赦なく襲いかかる。

「アタックは継続中!!……このターンのフルアタックでオマエは終わりだ!!」

「ザザザ……冗談でしょ?……まだまだ楽しませてもらうぞ……そのアタックはライフで受ける」

〈ライフ3??2〉 黒い煙

クウガライジングペガサスの放つ矢が黒い煙のライフバリアを撃ち抜く。だが、それは彼の伏せたバーストを反転させる条件……

「ライフの減少でバースト発動……絶甲氷盾」

「!」

「ライフ1つを回復し、コストを支払う事でこのターンのアタックステップを終了させる」

〈ライフ2??3〉 黒い煙

反転させたバーストカードでライフを回復するだけではなく、フィニッシュまで持つ

て行けたであろうトウエンティのアタックスステップを強制的に終了させる黒い煙。

「ツ……………ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダークウガライジングベガサス】LV2

【変身!!仮面ライダージオウ】LV2(3)

【パンドラボックス】LV1

バースト：【無】

歯痒い思いをするトウエンティ。苛立ちを覚え、眉間にシワを寄せてはいるが、バト
ルに対する冷静さを失う事なくこのターンをエンドとする。

「ターン05」黒い煙

「ザザザ……………やはりオマエの攻撃は重たいな」

「??」

「覚悟があるヤツにしかできない攻撃だ。何かを成し遂げると覚悟を決めた者の一撃は

重たい……オマエはいつたいどんな覚悟を決めてこの場に立っている？」

ターン開始直後の刹那。黒い煙は不気味な声でトウエンティに語りかけて来た。

彼の覚悟と言えば、当然ながら身の危険を冒してでも恋人であるテンドウ・カナを救う事だ。しかしそれを目の前の異常生命体に説明する義理もない。

「……貴様とお喋りをする気はないと、前のターンも言ったはずだ」

「釣れないね……仕方がない、少しでも本気を出す事にしよう」

「！」

「メインステップ……」

メインステップを開始する黒い煙だったが、

次に彼が召喚したのは驚きを隠し得ないものであつて……

「現れる。第二の仮面ライダー滅!!」

「!？」

1 【仮面ライダー滅ステイングスコピオン「2」】LV1（1）BP7000

凝縮された闇の力がライダースピリットの姿となって地上に現れる。その正体は仮面ライダー滅。先程の雷同様、強力なライダースピリットではあるが、トウエンティとロンが驚愕するのはそこではなくて……

「……オレのジオウと同じ……貴様も複数のライダースピリットを扱えるのか!」
「何を言ってる。我々ならこのくらい当たり前さ」

そう。別種のライダースピリットを操れる力が黒い煙にはある事に驚愕せざるを得なかった。

ミラーライダー限定で複数操る事ができるオーデインに似ているのかとロンは内心で推理するが、口振りからしてそう言うわけでもなさそうだ。

……何か別のカラクリがあるのか？

2 人が同時にそう考えた直後。黒い煙は召喚した強力なライダースピリット、仮面ラ

イダー滅の召喚時効果を發揮させて……………

「ザザザ……………滅の召喚時効果!!…相手のコア3個以下のスピリット3体を破壊し、衛星アークがある時はさらに追加で相手の創界神ネクサスを破壊する!」

「!!」

「気がついたようだな……………厄介なオマエの変身を解除させてもらおうか」

アーチェリーのような武器を手に持つ滅。そこから強烈な一矢を放つと、それは瞬く間に場のクウガライジングペガサスを貫き……………

そしてジオウに変身したトウエンティをも貫いて……………

「ぐ……………ぐあああああ?!」

「ツ……………トウエンティ!!」

余のダメージ量に変身が解け、その場で思わず片膝を突いてしまうトウエンティ。変身の解除のダメージはライフで受ける時よりも過多である。ロンの想像を絶する痛みが今正に彼を襲っていた。

「ターンエンド……ほお、変身を解除されても尚、まだ動けるか……やはりかなりの覚悟がある者だと見た」

「……だ、黙れケモノが……勝負はこれからだ」

「おいオマエ、そんな身体で大丈夫なのか!?!」

「オマエに心配される程、オレはやわじやない。そこで指を加えて見ていろ」

明らかかな痩せ我慢。強がりを見せるトウエンティ。

損なわれた体力を振り絞りながら己のターンを開始して行く……

「ターン06」 トウエンティ

「メインステツプ……2枚目のパンドラボックスを配置し、手札に戻ったビルドラビツトタンクフォームを再召喚……効果で3枚オープンし、ライダースピリット1枚を手札に加える……!」

1 「パンドラボックス」LV2 (1)

1【仮面ライダービルドラビットタンクフォーム】LV2 (3) BP6000

再召喚されるビルドラビットタンクフォーム。その効果でトウエンティイは使えるライダースピリットを探索するも、いずれもこの状況を打破できるモノではなくて……

「オレはこのライダースピリットを手札に加え、残りは破棄……1枚目のパンドラボックスのレベルを上げ、ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダービルドラビットタンクフォーム】LV2 (3) BP6000

【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

バースト：【無】

「どうした？……もう打つ手無しか」

「黙れケモノ……さっさとターンを進めろ」

「ザッザ……強がるね」

う。 どう足掻いても覆せないこのターン。 トウエンティは屈辱のターンエンド宣言を行

次はジオウ同様に複数のライダースピリットを扱える力を持つ黒い煙。 どこから発しているかもわからない不気味な嘲笑を上げると、己のターンを開始して行く。

「ターン07」黒い煙

「メイ NSTEPP……魂鬼を召喚……そして3枚目のライダースピリット、亡をここに
呼ぶ」

「!!」

1 【魂鬼】LV1 (1S) BP1000

1 【仮面ライダー亡】LV1 (1) BP4000

手始めと言わんばかりに人魂ならぬ鬼魂と言えるスピリット、魂鬼が姿を見せると、突如として狼の遠吠えが響き渡る。それがなり終わると同時に場へと参上したのは青白いライダースピリット亡。黒い煙が扱えるライダースピリットの1体であるように

……

「召喚アタック時効果……他の自分のスピリット1体を破壊……さつき召喚した魂鬼を破壊」

亡は登場するなり腕に備え付けられた鍵爪で魂鬼を斬り裂く。一見無駄に見えるこの効果だが、当然ながら大きなリターンが待っていて……

「その後、破壊したら相手は相手のスピリット1体を破壊しなければならない」

「ツ……オレの場にはビルドラビットタンクフォームのみ」

「そう。つまりそれが消える」

トウエンティの場に存在するビルドラビットタンクフォームに高速で斬り裂く仮面ライダー亡。ビルドラビットタンクフォームは堪らず爆散……

「魂鬼の破壊時効果、ソウルコアが置かれていれば1枚ドロ……さらに2体目の仮面ライダー雷を召喚」

1【仮面ライダー雷】LV1(1)BP4000

このバトル中では2体目となる雷を呼び出す黒い煙。これで彼の場には合計3体のライダースピリットが揃った。フィールドには軽減用のネクサスしかないトウエンティと比べるとかなり差が開いて来た。

「仮面ライダー滅のLVを2にアップさせアタックステップ……」

「ツ……来るか……」

1【仮面ライダー滅ステイングスコピオン「2」】(1??2)LV1??2

場には強力なライダースピリットが3体。敵のスピリットも効果で滅殺した……遂にライフへの直接攻撃が来るか……??

そうトウエンティは内心で予測を立てるが……

彼の取った行動は……

「ザザザ……………アタックは無し。これでターンエンド」

「なに!?……………この状況でアタック無しだと!?!」

まさかのエンド宣言。攻撃に切り替えるには正にこれ以上に打ってつけの状況などなかったと言うのに……………

「貴様……………オレを嘗めているのか!!」

「ザツザ……………そう思いたくばそう思っている……………こちらとしてはまだ準備が足りてないんでね」

(……………ぐっ……………オレは今、いったい何とバトルしているんだ……………!)

得体の知れない煙と声だけの怪物。じわじわと来る力の差。

実態が無いこともあり、トゥエンティは一瞬自分が何と戦っているのかを見失いかけるが、それでも力ナのためにと己に巡ってきたターンを進めて行く。

「ターン08」トゥエンティ

「ドローステップ!!……………くっ」

力を振り絞り、デッキからカードを引き抜くも、デッキの回転が良くないのか苦い表情を浮かべるトウエンティ。

「メインステップ……………3枚目のパンドラボックスを配置してターンエンドだ」

手札：2

場：【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

バースト：【無】

結局ほとんど何も出来ず、そのターンをエンドとしてしまうトウエンティ。防戦一方な状況が続く、再び黒い煙のターンが幕を開ける……………

「ターン09」黒い煙

「メインステップ……4種目のライダースピリット、仮面ライダー迅バーニングファルコンを召喚!!」

「!!」

「召喚時効果でコア1つを追加」

ー【仮面ライダー迅バーニングファルコン】LV2(2??3)BP8000

吹き荒れる炎。それが弾け飛び去って行くと、中より鷹をモチーフにしたライダースピリット、迅バーニングファルコンが姿を見せる。

「ザザザ……これで揃った、アタックスステップ……」

遂にトウエンティのライフを破壊しに向かうのか、アタックスステップを宣言する黒い煙。

そして今現在、彼の場には名称「滅」「亡」「迅」「雷」を持つライダースピリットがそれぞれ1体ずつ存在していて……

「行け、滅……攻撃しろ」

「ッ……やつと来たか、だが4体のライダースピリットのシンボルはそれぞれ紫の1のみ……ライフ5のオレのライフを0にはできない」

「いや、もうオマエは詰んでるよ……滅のアタック時効果。カード名「滅」「亡」「迅」「雷」を含むライダースピリットが1体以上存在する場合、相手ライフを2つボイドに置く」
「なに!？」

「今までオマエのライフを減らさなかったのは単なるミスでも手抜きでもない。ただ減らしても意味がなかったのだ。このターンでどちらにせよ勝負を決めれるのだから……!!」

発揮される仮面ライダー滅の効果。亡、迅、雷からエネルギーが滅へと流れ込んで行き、滅はその力を乗せた矢を放つ。

その強烈な一撃はトウエンティのライフ2つを跡形も無く玉砕して……………

「ぐっ……………ぐあああああ?!」

△ライフ5??3△トウエンティ

変身解除の時とは比べものにならない痛みがトウエンティを襲う。激しい苦痛と共に、目の前の黒い化け物の実力の高さを思い知らされる。

「ザザザ……変身解除を耐えたオマエでも、この痛みは流石に堪えるようだな……滅のアタックは継続中だ」

「くっ……まだまだ。まだ……オレは戦える……例え目の前にいる敵が人智を超えた化物てまあろうと……カナのために……！」

カナの病気を治すために勝つ……

屈するわけにはいかないんだ……

そう何度も自分に言い聞かせながら、モチベーションを高め、効果の発動を宣言する

……

「オレのライフ減少によりバースト発動!!」

痛みで朦朧とする意識の中、気を強く保ち、高らかにライフ減少のバースト発動の宣言をするトウエンティ……………

だが……………

「ライフ減少のバースト??……………戲事を抜かすな。オマエのバーストゾーンにはバーストなど無いではないか」

そう。

今現在、トウエンティのバーストは伏せられていない……………

それが故に、バースト発動を宣言する事自体、あり得ない事なのである……………

しかし……………

「戲事を抜かしてるのは貴様の方だ……………トラッシュに存在する仮面ライダーネクロムの効果、ゲーム中に一度だけ、トラッシュから自身のバースト効果を発動できる!!」

「ツ……………トラッシュからバースト効果だと?」

「効果によりスピリットのコアを2つをリザーブに置く……………消え去れ仮面ライダー亡、

雷!!」

1 【仮面ライダー亡】(1??0) 消滅

1 【仮面ライダー雷】(1??0) 消滅

仮面ライダー亡と雷の足元から突如として噴き出す紫の波動。それは彼らを飲み込み、体内のコアを除去。消滅へと追い込んだ。

「その後、このスピリットを召喚する……黄泉の底より現れる、仮面ライダーネクロム
!!」

1 【仮面ライダーネクロム】LV3(6)BP8000

トウエンティイの場、地中より噴き出す緑色の水捌き。その中より現れ出たのは白い体に頭部に一角を備えたライダースピリットネクロム。

トラッシュで効果を発揮できる特異なライダースピリットである。ただ、このネクロムと言えども滅のアタックは止められなかったか、彼のアタックそのモノは未だ継続中で……

「滅のアタックはライフで受ける!!……ッ」

〈ライフ3?!2〉トウエンティ

再び放たれる滅の矢はトウエンティのライフをさらに1つ破壊して見せる。そのライフは遂に2まで追い詰められるが、少なくともこのターンで黒い煙がフルアタックを仕掛けたとしてもそれは決して0にはできなくて……

「ザザザ……やるな。だがこの程度は耐えてもらわないと困る……ターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダー滅ステイングスコوپイオン】「2」 L V 2

【仮面ライダー迅バーニングファルコン】 L V 2

【衛星アーク】 L V 2

バースト：【無】

「強い……しかもまだ本気を出していないのがわかる……まるであの時の化物見たい

な…………ツ…まさかコイツは……………」

ターンをエンドとする黒い煙。激しい攻防が繰り広げられる中、ロンは禍々しい気配を常に漂わせている黒い煙のバトルを、異世界で戦ったヘタマイトに重ねていた。そしてその正体に一人勘付いて……………」

「……で決める…………オレのターン!!」

しかしトウエンティはそんなロンを気にする様子はない。反撃を開始すべく無我夢中で己のターンを進めて行った……………」

「ターン10」トウエンティ

「メインステップ…………クウガタイタンフォームのチェンジ発揮!!…………衛星アークを破壊

!」

「!」

ターン開始直後にトウエンティが放ったのは相手のネクサスカード1つを破壊する「仮面ライダークウガタイタンフォーム」のチェンジの効果。これにより、衛星アークは内部から爆発、滅亡迅雷のスピリット達は効果破壊による耐性を失ってしまう。

「その後の入れ替えはせず、ネクロムを対象に【煌臨】を發揮!!」

ソウルコアをコストとしてトラッシュユへと移動させ、スピリットを更なる姿へと進化させる効果【煌臨】……………

ネクロムは黄金の光をその身に纏い、姿形を大きく変化させて行く……………

「現れる……………仮面ライダークランドジオウ!!」

グ・ラ・ン・ド!

ジオーウ!!

―【仮面ライダークランドジオウ】(6)BP20000

やがて黄金の光を解き放ち現れたのは、仮面ライダージオウの強化形態、仮面ライダーグランドジオウ。

その威厳ある風格に満ち溢れた姿は正しくライダースピリットの王であり……

「グランドジオウ……ザザザ……まだ足りてないようだな」

その圧倒的な存在感を放つトウエンテイのグランドジオウを見て尚、不気味な笑みを浮かべながらそう意味深な言葉を呟く黒い煙。

だがトウエンテイは止まらずにグランドジオウで攻撃を仕掛けて……

「アタックステップ!!……グランドジオウでアタック!!……そのアタック時効果で手札にある最後の1枚、仮面ライダーオーズプロティラコンボを煌臨元に追加し、そのアタック時効果をグランドジオウのアタック時効果として使用!!」

「!!」

グランドジオウは左腕の上段にある仏像をタッチすると、光と共に獯猛な肉食恐竜を象った紫色の斧のような武器を手取る。

そしてそれを黒い煙の場に存在する迅バーニングファルコンへと向け……………

「オーズプトティラコンボのアタック時効果……………コスト4以下のスピリット1体を破壊する……………さらにこの時、オレの場のカードの数だけ破壊上限のコストを1上げる」

「ほほお……………今場には3枚のバンドラボックスとグラウンドジオウ……………つまり破壊上限はプラス4コスト……………コスト8以下のスピリットを破壊できるわけだ」

「そう言う事だ!!……………迅バーニングファルコンを破壊!」

……………プ・ト・ティラーノヒツサーツ♪

陽気な音楽と共に斧を振り下ろすグラウンドジオウ。そこから発せられた紫の衝撃波が、黒い煙のライフを守るブロックとして残っていた迅バーニングファルコンを破壊して見せる。

これで黒い煙の場には滅のみ。そしてブロックできるスピリットはいない……………トウエンティは締めめだと言わんばかりにグラウンドジオウの更なる効果を発揮させる。

「グラウンドジオウ更なる効果!!……………フラッシュタイミングで1コストを支払い、煌臨元の

ライダースピリット1体を召喚し、相手ライフに1つのダメージを与える！」

「！」

「オレはこの効果を二度使用し、仮面ライダーネクロムと仮面ライダーオーズプトティラコンボを召喚!!…貴様に合計2点のダメージを与える！」

「ッ……………」

1 【仮面ライダーネクロム】LV1(1)BP4000

1 【仮面ライダーオーズプトティラコンボ】LV1(1)BP7000

△ライフ3??2??1△ 黒い煙

グランドジオウが手を翳すと、時を超越した時空の扉が今開く。

その中より仮面ライダーネクロムと、紫色の獰猛なライダースピリット、仮面ライダーオーズプトティラコンボが飛び出し、そのまま黒い煙のライフを打ち砕いて行く。

これで残りライフは1。しかもグランドジオウのアタックは継続中であり…………

「グランドジオウのアタックは続いている…………これで終わりだアアア!!」

鬼気迫るトウエンティの勢い。そんな彼の必死さが伝わって来たのか、黒い煙は又しても余裕のある笑い声を上げると…………

「ザザザ…………成る程、糧としては上々じゃないか…………ライフで受ける」

〈ライフ1??0〉黒い煙

刹那。

その瞬間。トウエンティの想いを乗せた、グランドジオウは強烈な拳の一撃で黒い煙の最後のライフを殴りつけ、粉々に粉碎して見せる。

これにより、勝者はライダーハンターズのトウエンティだ。最後は意外にも呆気ない幕引きとなってしまったが…………

「オ…………オレの勝ちだ…………早く…………早くライダースピリットを寄越せ!!…貴様がバトルで使用した4枚のスピリットを!!」

そう。

これでトウエンティはウィルとの約束であった、合計20枚のライダースピリットを揃える事ができる。

およそ3年。ようやくカナを不治の病から助け出す希望を手に握る事ができる。激闘を終えて体力の限界を迎えつつあったトウエンティは、息を切らしながらも黒い煙にその残りの4枚のライダースピリットを差し出せと要求する……

しかし……

「そう急くな……ザザザ……よく試練に耐えた……お望み通り、くれてやろう……ライダースピリットだけじゃない。私の『黒の力』もな!!」
「なに!?!」

突如として滅亡迅雷のライダースピリットカードと共に飛び出して来た黒い煙は、トウエンティの身体に纏わり付いて来た。そして少しずつだがその身体の中に浸透していき……

「ぐっ……ぐあああああ!?!」

「トウエンティ!!……おいクロキモヤロー……今黒い力つて言ったな……やつぱりオマエは……」

トウエンティが窮地に落ち入る中、ロンは黒い煙に問い掛ける。彼はトウエンティを取り込もうとしながら、その質問に返答して……

「ザザザ……そうだ。よくわかったな……私は『オブシディアン』……黒の世界、ブラックフォースの1人にして最強の力を持つ者!!……待っていた、ずっとこの時を待っていたぞ……ウイルの育てた使い手を!」

「!!」

そう。

黒い煙のその正体とはオニキスやヘタマイト同様ブラックフォースの1人、しかもその中でも最強の力を持つと言われている「オブシディアン」……

その口からは何故かウイルの名が出てくる。何かしらの関係があるのだろうかと勘ぐってしまうが、今はそれどころではない。

「くっ……おいトウエンティ!!…そんなヤツに負けるんじゃないわねえ!」

「ぐっ……ぐうう!!」

「無駄だ。もうすぐコイツは私の傀儡となる」

ロンがいくらトウエンティに問い掛けても、トウエンティはもがき苦しんでいる声を上げるのみ……

「お、オレは……カナを……」

「ああ、オマエの中に入る事で、オマエの記憶が私にも伝わって来る!!……そうか、恋人のために身を削ってまで……ザザザ……だがそれも徒労に終わる!!……オマエの身体は私の身体、今日からオマエの力は全て私がもらう!!」

「ふ、ふざけるな……ぐっ……ぐああああ?!」

「トウエンティ!!」

今思えば最初からトウエンティを待ち続けていたようなオブシディアンの発言の数々。トウエンティの身体を得て何をしようと言うのか、黒い煙を再び漂わせ、その中より姿を眩ましてしまう……

そのコラボダンジョンの最奥部には、ロンがただ1人残された。

「何だったんだ今のは……………くっ」

トウエンティが取り込まれてしまった事に少なからず責任を感じているロン。普段は自分が強くなる事しか考えていない彼だが、目の前であんなモノを見せられたら黙っているわけにはいかない……………

颯爽とコラボダンジョンを出て行き、オウドウ都の方へと歩き出した……………

52コア「真紅のモードチェンジ」

ここは王国の中心都市オウドウ都。

最高の身分を持つエックスの者達が故郷とする巨大な都市であり、最強のカードバトル集団、三王と頂点王が挑戦者達の最大の難関として立ち塞がる場でもある。

そんな三王、頂点王が身を置く三王塔にて、この国の頂点王であるシイナ・メザはただっ広い空間にちよこんと備え付けられたデスクの上で珍しく事務作業を行っていた。この間身勝手に異世界に遊びにいった罰だ。これが終わるまでは自由になれない……………

「えーっつと何々??:…土地の売買?:…商業承諾?:…まあいいや。全部承諾しちやえ」

およそ何千枚と山積みされている承諾書の数々。いちいち読んでいるのも面倒くさいため、シイナは適当に押印していく。

だが次第に疲れて来たか、30枚目程でその手を置いた。そして辺りに誰もいないか

キヨロキヨロし始めると……………

「……………よう」

誰もいない事を確信。すぐさまデスクから立ち上がり、窓の方へと移動……………

その窓を開け、逃げ出そうとしているのか、足を一本、窓の外側へと踏み出す。

だがこの瞬間、後方より見知った声が聞こえて来て……………

「オイ逃げるなよ頂点王」

「ツ……………え、エレン……………」

青ざめた表情で声のする方へと首を傾けると、そこにはエックスの中でも最高峰の強さを誇る偉大なオメガ家且つ、この国のモビルスピリットを司る三王、エレン・オメガ。

「い、イヤだなエレン……………逃げ出さないよう……………ちよつと疲れて来たしき。気分転換に窓を開けたただけだって！」

「ほお。じゃあ窓の外を出たその足はなんだ？」

「ツ……………あはは……………行儀の悪い足だね……………」

「……………いいからデスクに戻れ、仕事をしろ。この異邦人頂点王」

「ちえつ……………私ばかり、テンドウは探さなくていいの？」

「何度追いかけても逃げられる……………と言うかヤツを追いかけている間に貴様に逃げられたら元も子もないからな」

二兎追う者は一兎も得ず。

逃げ隠れするのが妙に上手いテンドウを無理に探すよりも、こうして1人だけを捕まえて拘束した方が仕事は捗る。1人でやるよりも何倍もの効率で作業は進んでいく。

その後は言われるがまま。

この国の最強カードバトラー、シイナ・メザはお叱りを受けて渋々とデスクに戻っていった。

「ねえエレン。実はもうすぐアスラとロンが16の誕生日なんだけどさ……………何かプレゼント渡したいな……………なんて」

「……………」

「だから街で買い物して来たいな……………なんて」

「……………」

「母親らしい事したいな〜…なんて」

「……………」

「…………ごめんなさい。仕事します」

「それでいい」

何とか理由を付けて懇願してみるシイナだったが、エレンから発せられる無言の圧には敵わず……………

実はもうすぐ誕生日なアスラとロン。今年で16歳になる。その月日とは12月18日なのだが、それはシイナに拾われた日。

彼らが5歳の頃にオウドウ都へと旅立ってそれっきりとなってしまうたシイナとしては、今年こそはどうしても2人に誕生日に何かしてやりたかったのだ……………

「誕生日と言えばさ〜…………エールちゃんも誕生日近いよね〜…………12月24日!…………何か渡すの?」

「何も渡す気はない…………あの娘は甘えさせてはダメだ」

「またまた〜…………ここ10年分くらいの誕プレを渡し切れずに倉庫にしまつてあるくせ

に

「ッ……………な、何を言っている」

実はエレンの妹、エールの誕生日も近い。

普段は冷静沈着。時折冷酷な面を見せる三王エレンだが、その実態はとんでもないシスコン。

エックスや三王としてのプライドがあるため、表立ってそれを露わにする機会は少ないが、エール以外の周囲にはバレバレである。シイナの言う通り、誕生日プレゼントはここ10年買っては渡せず倉庫にしまっている。

長い付き合いと言う事もあり、そんな彼の気持ちを完璧に理解している頂点王シイナはさらに口を開いて……………

「いい加減素直になつたら？……………男のツンデレは需要がないぞ」

「何の話だ。と言うか誰がツンデレだ」

「あつはは……………まあでも、本当エールちゃんは強くなつたよね〜」

少しふざけた後、急に真面目な表情を見せ、エレンにそう告げた頂点王シイナ。

エールがアスラと旅を始めた頃は究極体を召喚する力も無かった。だが幾多の試練をアスラ達と共に乗り越えていき、今ではオメガモンと言う最強級のデジタルスピリットを呼べるまでに至っている。

「確かにエールは強くなった……認めている。しかし今のエールはあのウツケ者の後ろをただついて行っているだけに過ぎない……一人で強くなれる程のカードバトラーになれないのであればそこまで。これ以上強くなれる事はないだろう」

「あつはは……それってただエールちゃんにアスラの所を離れて欲しいだけだろ？」
「ち、違う!!……余はただ実妹の更なる成長を願ってだな……」

エレンも何となく変わった気がする。昔はエールの言葉に耳も貸さなかったのに……

エールが強くなったのもあるが、それ以上にアスラの存在が大きい。彼の存在が、熱い想いが伝播し、次から次へと人の心を変えて行っている……

そうシイナが実感し始めた頃だ。さらに別の声が聞こえて来たのは……
それは望まれざる客であり……

「…お邪魔しますよ…三王エレン。そして頂点王シイナ様

ー!!

「フッフ…お初にお目にかかります」

神経を逆撫でするような気味の悪い声色。マジシャンのようなシルクハットと、整ったちよび髭が特徴的な男性、ウイルがそこにはいた。

2人は直接的に彼に出会った事こそないが、これまでの得て来た情報から、直ぐに彼がライダーハンターズの主任、ウイルであるという事を理解できた。

「貴様は…ウイルだな。ライダーハンターズの…何しに来た？」

「これはこれは光栄ですね。まさかエックスで、しかも三王の貴方がこの私の名前を覚えてくださったとは」

「余の質問に答えろ…貴様に拒否権はないぞ」

「まあまあもうちよつと落ち着いて話聞こうよ…で、用件は何?…話は聞こうじゃないか主任さん」

溺愛するエールを連れ去った事もあるライダーハンターズ。それをエレンが許さわけもない。いつも以上にわかりやすく怒りを露わにしている。

対して頂点王シイナはよく言えば余裕。悪く言えば呑気な態度でエールに接する。

そして彼らの質問に対し、エールは不気味な角度で口角を上げると、返答して行く

……

「フッフ……いや実はですね、もうすぐ完了するんですよ、私の計画。15年という長い年月を費やして積み立てて来た私の努力が遂に報われる時が来ましてね」

「ふーん。よかったね」

「……それで、主任よ、そのやって来た努力とはなんだ？」

意味深なエール。その発言の内容は当然ながら三王、頂点王である2人でも理解できない。

「………黒の世界。分かりますかな？」

「！」

「そこにいるとされるブラックフォースと呼ばれる4人の集団。あの方々の力全て覚醒させる事が私のすべき事でした……だから作った、ライダーハンターズと言う組織を……ブラックフォースを覚醒させる事のできる3人のカードバトラーを」

「……………何を言っているんだ？」

説明するウイルだが、その内容が余りにも壮大過ぎてエレンは頭が理解が追いつかない……………

ウイルがライダーハンターズを結成した理由は最初からブラックフォースの覚醒だった。オロチ、イバラがバトルの際に謎めいた力を持つて覚醒した理由もそれだ。最初からあの2人はブラックフォースの力を知らずのうちにウイルによって埋め込まれていたのだ……………

「そして遂に、先程……揃った。約束通りトウエンティの身体を得たあの方が遂に覚醒した……だがここで、間違いなく最大の障害となるのは頂点王シイナ、貴女だ。だからこそ今ここで貴女を殺さなければならぬ……私はそう思ったわけですよ」

「ふーん……じゃあライダースピリットを20枚集めたら願いを叶えるとか嘘ついてたわけね」

要するに……………

要するにだ。自分の努力して来た事が水の泡にならないよう、今ここで最大の難敵であらう頂点王を消し去ってしまおう……………

そう言うわけだ。サラツと言っているが、とてもではないが普通の人間が考える事ではない……………

「無礼にも程があるな……………このエックスであり三王でもあるこの余を差し置いてこんな腑抜けた頂点王の軽い命を狙おうなど」

「フッフ……………残念な事に、覚醒したブラックフォースは貴方方三王程度では倒せませんよ……………もちろん、この私にもね」

「……………世迷言を……………テンドウ如きに負けた貴様が余に勝てるわけないだろう……………」

言い合うエレンとウィル。だが、それを制止させたのは頂点王シイナだった……………

「まあ待てよエレン。あちら様は私をご指名のようだ……………なら私がちゃんと相手してやらないとな」

「！」

「ほお……わかってますね。流石はこの国の偉大なる頂点王様だ」

「1バトルくらい、どうって事ないさ。要はラスボスを倒しに来たって事だろ？……じゃあ始めようよ。どうやったって私には勝てないと思うけどね」

Bパッドを展開し、デッキをセットしながらそう告げるシイナ。その風格と口調は正しくラスボスそのモノであって……

「フッフ……ではお言葉に甘えて、バトルと行きましようか。先に言っておきますが、私の実力はライダースピリットの三王、テンドウ・ヒロミさんとバトルした時よりも数段、いや数十段上がっている事をお忘れなく。甘く見ていると足元を掬われますよ？」

「あつはは……心配ご無用さ。だって私はテンドウの100倍は強いからね」

お互いに減らない口数。

ウィルもまたシイナに対抗するように己のBパッドを展開、デッキをセットした。

「下がってるエレン。これは私のバトルだ」

「良からう……ただし、負けるなよ？……貴様を叩きのめすのはこの余だけなのだから」
「わかってるって……そんじややろうか主任さん」

「ええ、始めましょう……」

……ゲートオープン、界放!!

三王エレンが見守る中、この国の最強カードバトラーシイナ・メザと、ライダーハンターズの主任ウイルによるバトルスピリッツがコールと共に開始される……
先行はウイルだ。頂点王を倒すべく己のターンを進めて行く……

「ターン01」ウイル

「メインステップ……先ずは転醒ネクサスカード、命の果実原種を配置！」

1【命の果実―原種―】LV1

颯爽とウイルの背後に現れたのは生命力に満ち溢れた果実を実らせた大木。

「命の果実原種が場に存在する限り、貴女のアタックステップ中では私に対する一切の効果ダメージを無効にし、私のライフが減るたびに私はデッキから1枚ドロウできる……以上、これでターンエンドでございます」

手札：4

場：【命の果実―原種―】 L V 1

バースト：【無】

「なある程転醒ねー……少しばかりは楽しめそうだな」

そのターンを終えるウィル。頂点王シイナは王らしい威風堂々とした立ち振舞いを見せながら己のターンを進めて行く。

「ターン02」シイナ

「メインステップ……青の成長期スピリット、ブイモンを召喚！」

ー【ブイモン】LV1（1S）BP2000

シイナの場合に小さな青い竜、ブイモンが元気な姿を見せる。

頂点王が扱うスピリットだが、ブイモンに突出した力はなく、その効果は至って平凡。

「召喚時効果。2枚オーブンしてその中の対象となるデジタルスピリットを1枚手札に加えて残りは破棄する……よし、私はアーマー体、ライドラモンを手札に加える」

効果は成功。頂点王シイナは新たなカードを手札に加えると、それをすぐさまBパッドへと叩きつけ、効果発揮の宣言を行う。

「1コストを支払い【アーマー進化】を発揮、対象はブイモン!!……轟く友情、ライドラモンをLV1で召喚！」

ー【ライドラモン】LV1（1S）BP5000

行われたのは成長期スピリットを完全体と同等のレベルまで進化させる事ができる

アーマー進化の効果。

上空から友情のデジメンタルと呼ばれる黒い物体がブイモンへと落下。ブイモンはそれと混ざり合い、黒いボディを持ち、一角から青い稲妻を放つ獣、ライドラモンへと進化を果たした。

「ライドラモン召喚時効果でボイドからコア2個をトラッシュに追加……一先ずこれでターンエンド」

手札：5

場：【ライドラモン】 L V 1

バースト：【無】

いつになく真剣な表情を見せるシイナ。ライドラモンをブロッカーとして残し、そのターンをエンドとした。

「頂点王シイナ……この日のために私はちゃんと貴女の事をとことん調べ尽くして来ましたよ。その生い立ちから今までをね……例えば、貴女はその楽観的な性格とカリスマ性で、この国に多くあった差別問題の解決に大きく貢献しているとかね」

「?……なに、私のストーリーカー?……偶にいるんだよね、どうせならもうちよつとイケメンな人によってほしかったな」

「フッフ……私のターンだ」

この王国にある身分による差別問題。だがそれは近年では余り目立って散見されない。それらはこの頂点王シイナが行った活動が大きく影響している。

倒すべき敵は研究し尽くすタイプのウィル。相手が頂点王であろうとも、余裕の意味も込められた不気味な笑みを浮かべ、己のターンを進めて行く。

「ターン03」ウィル

「ドローステップ時、手札にある仮面ライダーウオズの効果を使用……このカードを手元に置く事で、ドローステップでドロースる枚数を2枚とし、その後手札を1枚破棄」
「たしかテンドウの報告にもあつたライダースピリット」

自身のライダースピリットであるウオズの特異な効果を發揮させるウィル。効果でその手札をより回転させる。

「そしてメインステップ……ソウルコアを支払い、エイプウィップを召喚」

ー【エイプウィップ〈R〉】LV1(1)BP1000

現れたのは4本の腕を生やした猿型のスピリット、エイプウィップ。弱々しい見た目だが、その効果は非常に強力なモノで……

「召喚時効果。ソウルコアを支払っての召喚であった場合、リザーブに1つ、トラッシュユに2つのコアをブースト！」

コアを増やした数、合計3つ。シイナのライドラモンよりも上回って見せる。

「私はこれでターンエンドです……さあ、貴女のターンですよ……サジット王国出身のシイナ・メザさん？」

「！」

サジツト王国出身……………

その言葉を耳にするなり、シイナは僅かばかり癩に触ったかのように眉間にシワを寄せる。

「言つたでしょう？……………貴女の事、とことん調べたと……………そう、貴女は強者が集うとされるサジツト王国の異端児……………」

「……………」

サジツト王国とは、ウィルの言う通り、この国とは隣国関係に当たる王国。その人口の約9割が強者で締めくくられていると言われる。

因みにこの国の名前はノヴァ王国である。

「私のターンだ……………」

「どつどつ」

強靱なメンタルを持つ頂点王。険しい表情になりながらも己のターンを進めていった。

「ターン04」シイナ

「メインステツプ……手札に戻ったブイモンを再召喚。召喚時効果発揮、対象のデジタルスピリット1枚を手札に加える」

1 「ブイモン」 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

再び呼び出されるブイモン。だが、ウィルは又しても口を開いて……

「貴女は生まれながらにして、天性のバトルセンスを持っていた……まるでこの世の神にでも愛されたかのように、プレイング、直感、そして引きの強さ……その全てが規格外だった」

「……ブイモンの召喚時の追加効果で、2コストを支払い、緑の成熟期スピリット、スティングモンを召喚」

1 「スティングモン」 L V 1 (1 ?? 2) B P 5 0 0 0

語りかけて来るウイルに受け答えせず、シイナはブイモンの効果で緑のスマートな昆虫戦士、ステイングモンを召喚。その効果でさり気なくコアが増える。

「アタックステップ……ステイングモンでアタック！……効果でコアを増やし【超進化：緑】……パイルドラモンを呼ぶ！」

ー【パイルドラモン】LV2(3)BP10000

ステイングモンが緑の輝きを放ち、その間に姿形を大きく変化させていく。最後にその輝きを吹き飛ばしながら現れたのは竜の母体に甲虫の甲殻を得た至高の竜戦士。パイルドラモン。

「パイルドラモンの召喚時効果でエイプウィップを破壊」

静かな効果発揮宣言。パイルドラモンは腰に備え付けられた機関銃を連射。ウイルの場に存在していたエイプウィップをそれで容易く蹴散らす。

そしてパイルドラモンが次に討たんと竜の眼差しを向けたのはウイルだった。

「パイルドラモンでアタック!…効果でコアを増やして回復」

ー【パイルドラモン】(3??5) LV2??3 (疲労??回復)

レベルを上げつつウイルの元へと走り出すパイルドラモン。今は防御する手段がないのか、ウイルは手を大きく広げ、その攻撃を受け入れる……

「ライフで受けましょう!」

〈ライフ5??4〉ウイル

その甲殻を纏った拳で彼のライフを全力で殴りつける。だがそれは彼の配置したネクスカード、命の果実原種の効果を起動させる行為でもある。

「転醒ネクサス、命の果実原種の効果、私のライフが減った事により、デッキからカード

を1枚ドロ―」

「関係ない、もう一度だ！」

「それも受けましょう！……ッ」

へライフ4??3へウイル

立ち止まる暇もなく、再びその拳でウイルのライフを粉砕するパイルドラモン。余りに強烈な攻撃だったか、ウイルは衝撃で半歩後退させられてしまう。

しかしその表情は未だ余裕で……

「フッフ……命の果实原種の効果で1枚ドロ……さらにトラツシュに存在するゴジラの効果！」

「！」

「2コストを支払い召喚する……現れなさい！」

1【ゴジラ(2004)】LV1(1)BP10000

蠢く地の底より、咆哮を張り上げながら現れたのは黒い体に大きな尾を持つシンプルな怪物と言った見た目のスピリット、ゴジラ。

だが、そこから感じられる迫力やオーラは美しくも凄まじく、神にも匹敵すると言って過言ではない程……………

「これもテンドウから聞いたな……………伝説のスピリットゴジラか……………ターンエンド」

手札：5

場：【ライドラモン】 L V 1

【ブイモン】 L V 1

【パイルドラモン】 L V 3

バースト：【無】

伝説と謳われるゴジラを前にしても平然とした態度でそのターンをエンドとするシイナ。

だが次のターン、このゴジラの猛攻を受ける事は間違いなくて……………

「ターン05」ウィル

「メインステップ……常軌を逸した強さを持つ貴女を、周囲の人間は妬んだ。そればかりで貴女は蔑まれた……実の両親にも「化物」「鬼神」であると忌み嫌われた」
「……………」

メインステップ開始直後に再びシイナの隠された過去を暴露するウィル。
そう。

誰もが欲するシイナの強さをサジツト王国の者達は妬んだ。それ程までにシイナは強かった……圧倒的に恵まれていたのだ……

「マジックストロングドロ……デッキから3枚をドロして2枚を破棄」

流れるようにターンを進めるウィル。デッキを掘り進めて行く。

「さらに2体目のエイプウィップをソウルコアを使って召喚。効果でリザーブに1つ、トラッシュに2つのコアをブースト」

┌【エイプウィップ〈R〉】LV1 (1) BP1000

本日2体目となるエイプウィップ。効果で又しても3つのコアをブーストした。

「ゴジラのレベルを2に上げてアタックステップ……その開始時、手元に置かれた仮面ライダーウオズの効果を発揮、コスト6以上のスピリットがいる時にノーコストで召喚できる……LV2で現れなさい」

┌【ゴジラ(2004)】(1??2) LV1??2

┌【仮面ライダーウオズ】LV2 (3) BP8000

黒い一反木綿が球体を形成すると、その中より、緑色が特徴の赤属性のライダースピリット、ウオズが現れた。

「アタックステップは当然続行!……ゴジラでアタック、効果でパイルドラモンを指定アタック!……さらにそうした時、コアを1つゴジラに追加し、回復!」

「!」

「これでゴジラは貴女のスピリットを破壊し尽くすまで止まりませんよ！」

ー【ゴジラ（2004）】（疲労??回復）

ウィルの命令でパイルドラモンに迫り来るゴジラ。そのBPは圧倒的であり、数秒もしないうちにパイルドラモンは破壊されてしまう事は間違いない……………

それだけではなく、回復するため、シイナのスピリットを全滅させる事も可能……………だが、流星にそんな美味しい状況を味合わせるわけにはいかないか、シイナは手札からカードを1枚引き抜き、それを止めに行く。

「フラッシュマジック、リアクティブバリア！」

「！」

「不足コストはパイルドラモンから確保、よつてLV1までダウン…効果でこのアタックの終了をアタックアタックステップの終了にする」

鉄板の白の防御マジック。これにより、ゴジラとパイルドラモンのBP差はさらに開く事になったが、少なくともこのターンでの敗北は免れる。

しかし……………

「止められましたか！…だがまだ終わりませんよ！…仮面ライダーウオズの効果、自分のフラッシュタイムングで自身を疲労させ、ゴジラのBPをプラス10000、さらにライフを1つ破壊します！」

「!!」

ー【仮面ライダーウオズ】（回復??疲労）

ー【ゴジラ（2004）】BP15000??25000

へライフ5??4<シイナ

ゴジラに忠誠を誓うかのように膝を曲げる仮面ライダーウオズ。その瞬間にゴジラは高らかに咆哮を上げ、それが爆音波となり、シイナのライフを1つ砕いた。

「そしてパイルドラモンはゴジラにより破壊!!」

腰に備え付けられた機関銃でゴジラを迎撃するパイルドラモン。だがその程度の威力ではゴジラの黒々としたボディに傷一つ付けられない。

直後に長い尾で攻撃され、そのまま壁に激突。なす術なく爆散してしまう。

「……リアクティブバリアの効果でアタックステップは終了だ」

「……ターンエンドです」

手札：5

場：【仮面ライダーウオズ】 LV2

【ゴジラ（2004）】 LV2

【エイプウィップ（R）】 LV1

【命の果实―原種―】 LV1

バースト：【無】

リアクティブバリアによってアタックステップを終了させられ、そのターンをエンドとするウィル。

次は頂点王シイナのターン。シークエンスを進めて行く……

「ターン06」シイナ

「メインステツプ……バーストを伏せ、ブイモンとライドラモンのLVを最大に」

1 「ブイモン」(1??3) LV1??2

1 「ライドラモン」(1??4) LV1??3

守りのバーストを伏せ、場に残ったスピリット達のレベルを最大に引き上げるシイナ。

しかしそれだけではウィルの強力なスピリット達には太刀打ちできない。さなるスピリットを場へと投入する……

「さらに真紅の魔竜、成熟期の姿、グラウモンをLV3で召喚！」

1 「グラウモン」LV3(4) BP7000

白い髪、二本の角を生やした赤い身体の魔竜、グラウモンがシイナの場に現れる。

「アタックステップ……グラウモンでアタック……その効果で相手のネクサスカード、命の果実原種を破壊」

「だが、命の果実原種は相手によってフィールドを離れる時、ボイドからコア1個をこのネクサスに置いて転醒できる……現れなさい命の果実の精ドライアッド！」

1 【命の果実の精ドライアッド】 L V 1 (1) B P 6 0 0 0

命の果実原種を焼き尽くさんと炎の息を口内から放つグラウモン。命の果実を実らせる大木は堪らず焼き尽くされるが、その瞬間に森の中から木でできた狼のようなスピリットが代わりに場へと飛び出して来る……

それは命の果実原種に宿っていた精、ドライアッド。

「転醒されるくらいお見通しき……こっちは【超進化・赤】を發揮、グラウモンを完全体、メガログラウモンに進化！」

1 【メガログラウモン】 L V 3 (5 S) B P 1 2 0 0 0

グラウモンはその体格をさらに肥大化、且つ体にも赤い鋼鉄を見に纏わせる。そして爆誕したのは真紅の魔竜、完全体の姿、メガログラウモン。

「ふむ。また新しい完全体……」

「メガログラウモンは相手の効果によりコアを外されない……アタックステップは続行、立ち向かえメガログラウモン！」

早速メガログラウモンでアタックで攻撃を仕掛けるシイナ。その数々のアタック時効果を発揮させる。

「アタック時効果、2枚ドロしてシンボル1つのスピリット、ゴジラを破壊」

「！」

「アトミックブラスタ―！」

メガログラウモンの胸部から放たれる極太のレーザーがパイルドラモンの機関銃でも傷一つ付けられなかったゴジラの皮膚を貫通。流石のゴジラもこれには堪らず爆散

してしまった。

しかし……………

「スピリットが破壊された事により、手札のアルケーガンダムを1コスト支払って召喚

！」

「！」

ー【アルケーガンダム】LV2（3）BP12000

ゴジラが破壊された直後……………

上空から空気を切り裂くように飛来して来たのはモビルスピリットの一種、アルケーガンダム。鏡の中の世界、ミラーワールドでウイルがシスイ・メイキヨウから奪い取った驚異的なスペックを持つモビルスピリットである。

そしてそれはメガログラウモンやライドラモン、仮面ライダーウオズでさえも霞んでしまうような存在感を見せつけながら、メガログラウモンを迎え撃つ……………

「アルケーガンダムでブロック！……さらにフラッシュタイミングでアルケーガンダムの

効果、1コストを支払い、コスト7以下のスピリット1体を破壊する」

「!」

「フッフ……貴女にフラッシュで使えるカードがないのでアレば、私はこの効果を三度使用……メガログラウモン、ブイモン、ライドラモンを破壊します!」

身の丈程の巨大な大剣を振り、暴れ回るアルケーガンダム。その強烈な一太刀一太刀にブイモン、ライドラモンと次々と破壊されていき、仕舞いにはメガログラウモンまでもがその大剣に引き裂かれ、爆散して行った……

「ターンエンド……」

手札：5

バースト：【有】

アルケーガンダムに無双され、ターンを明け渡さざるを得なくなったシイナ。冷静且つ真剣な眼差しをウィルに向けながらそのターンをエンドとする。

「ターン07」ウィル

「……周囲から妬まれ、忌み嫌われ、蔑まれた貴女は半ば逃げ出すようにサジツト王国を出た……生きる意味を探すため、こうして今このノヴァ王国にいる……違いますか？」
「……………」

沈黙するシイナ。否定も肯定の声も上げないその様子は、必然的に肯定している事と差し違えない。

「ふふ……あつはは、そうだよ……アンタの言う通りだ」

「シイナ・メザ……」

何を思ったのか、堪えきれなくなつて乾いた笑いを見せるシイナ。その悲しそうな様子にエレンも思わず彼女の名を呟く。

「私は逃げた……苦しくて、どうしようもなくて……なんで自分だけこんな強いんだろ うって……強いが何でいけないんだろ うって思ってたよ……でも私は変わった……吹雪の日、赤ん坊だったアスラとロンを見つけてから」

「……………」

「2人が私を母にしてくれた。生きる意味を教えてください。この強さの有り所を教えてください。だから今私はこの三王塔で、最強の頂点王としてここに立っている」

1人孤独だったシイナを救ったのは偶然見つけたアスラとロン。最初は単なる成り行きで育てただけだったが、次第にそれが生き甲斐となり、仕舞いには彼らのために頂点王になってしまう始末。

どれだけ溺愛していたかは計り知れない。

「ふむ……………成る程。要は神に選ばれた天性の子供が、赤ん坊を見つけて母性に目覚めたと……………つまりらないですね。心底呆れましたよ……………同情こそしますが、もうちよつと共感できるものもあると思っていましてよ……………所詮貴女も人間のメスの個体と言うわけですか」

「ふふ……………そりゃ私は人間のメスの個体だからね」

ウィルは彼女の返答に何を期待していたのか、わかりやすく不機嫌になる。

「……………メインステツプ……………エイプウィツプを除いた全てのスピリットのレベルを最大にアツプさせます」

―【アルケーガンダム】（3??5）LV 2??3

―【仮面ライダーウオズ】（3??6）LV 2??3

―【命の果実の精ドライアツド】（1??3）LV 1??2

場のスピリットを壊滅させられたシイナに対して余りにも無慈悲で理不尽なレベルアツプ。

圧倒的な戦力差を見せつけるかのようにレベルアツプさせた後は当然ながらトドメを刺すべくアタックステツプへと移行して……………

「アタックステツプ……………行きなさいアルケーガンダム！」

「フラツシユマジック、リミテッドバリア！」

「！」

「これにより、このターンの間私のライフはコスト4位上のスピリットのアタックでは

減らない」

颯爽と放たれる白の防御マジック。これにより、又してもこのターンでのフィニッシュを凌がれる事が確定……………

だが、ウィルもやれる事がなくなったわけではなくて……………

「アタックでライフが減らないのであれば、効果でライフを減らすだけです……………フラッシュユ、アルケーガンダムの効果、3コストを支払い、自身を回復。相手のデッキを6枚、手札を1枚、ライフを1つ破壊します」

「！」

ー【アルケーガンダム】（疲労??回復）

ーへライフ4??3シイナ

豪快に大剣を振り回すアルケーガンダム。それが巻き起こす突風がシイナの手札やデッキ、ライフを破壊して行く……………

だがこのライフの減少はシイナが伏せていたバースト発動の条件でもあつて
.....

「ライフ減少後のバースト、ロード・バロン……！」

「！」

「効果でこれを召喚する」

バーストゾーンで勢いよく反転したカードは、ロード・バロンのカード。一度場に出して仕舞えばアルケーガンダムでさえも目じやない強力なスピリットだが……

そんな強力なスピリットの召喚をウィルが許すはずもなくて……

「ちよつとお待ち下さい……相手のバーストが発動する時、手札にある超星使徒スピッツアードドラゴンの効果を發揮！」

「！」

「手札から1コストを支払つてこのスピリットを召喚……そしてそのバーストカードを発動前に破棄」

1 【超星使徒スピッツアードラゴン】LV1(1)BP5000

眩い赤と紫の輝きの数々。それらは密集していき、次第に一体のドラゴンを形成。超星使徒スピッツアードラゴンとして場へと姿を見せる。

さらにその超星使徒スピッツアードラゴンの影響か、シイナの発動寸前だったバーストカード、ロード・バロンはたちまち灰となってこの場から消滅してしまう。

「さらにコアを2つこのスピリットにブースト……」

1 【超星使徒スピッツアードラゴン】(1??3)LV1??2

バーストを発動直前に破棄する特異なスピリット、スピッツアードラゴンを駆使して見事シイナのロード・バロンの召喚を食い止めたウイル。

さらには仮面ライダーウオズの効果も発揮させ……

「そして仮面ライダーウオズの効果で自身を疲労、アルケーガンダムのBPを10000アップさせ、再び貴女のライフを1つ貰います！」

「くっ……………」

〈ライフ3??2〉シイナ

白の防御マジック、リミテッドバリアの効果が適応中であると言うにもかかわらず、効果のみで次々とライフを減らされて行くシイナ。

しかし彼の猛追もここまで、強制的にターンエンドを迫られる。

「……………ターンエンドです」

手札：5

場：【アルケーガンダム】LV3

【仮面ライダーウオズ】LV2

【超星使徒スピッツアードラゴン】LV2

【命の果実の精ドライアッド】LV2

【エイプウィップ〈R〉】LV1

バースト：【無】

致し方なくエンドとするが、それは決してシイナが優勢に立ったわけではない。未だ状況的には絶対的に不利だ。何もできなければ間違はなく次の彼のターンで敗北を喫して仕舞う事だろう……………

だがこれでも彼女は頂点王。かなり場数、及び修羅場を潜り抜けてきた彼女にとって、この程度の状況はへでもない。笑顔と言う名の余裕を見せながら己のターンを進めて行った……………

「ターン08」シイナ

「メインステップ……………質問に答えてやった返しとして聞きたいんだけどさ……………アンタなんでその黒い人達を覚醒させようとしてたわけ？」

メインステップの開始直後。今度はシイナがウィルに聞いた。

ウィルは少し考えるように沈黙を続けると、質問に答えるべく再び口を開く。

「……………彼らは私にとって神にも等しい存在だ。何もなかった私に救いの手を差し伸ばしてくれた……………その恩はここで返さなければならぬ……………貴女にとっての息子達

が、私で言うブラックフォースのお三方だったのですよ」

「……………」

「例えあの方々がこの世界を滅ぼす悪魔だとしても、私は彼らに忠誠を誓うのみ」

「成る程。それがアンタなりの礼儀ってか」

「余には都合の良い事を言っているようにしか見えぬがな」

ウイルがここで言うブラックフォースのお三方とは、アスラの中にあるオニキスを除いた3人だろう。彼らとウイルの間には何か深い繋がりがあるに違いない……………

そんなウイルの恩から来る絶対的な忠義には共感こそするが、当然それで負ける理由にはならない。頂点王シイナは再び全力でターンを進めて行く。

「私からの質問は以上……………そんなじゃ、改めてメインステップ……………赤のアーマー体スピリット、燃え上がる勇氣、フレイドラモンをLV2で召喚だ！」

ー【フレイドラモン】LV2(6)BP9000

シイナ場で燃え上がる炎。その中からそれを消し去りながら姿を見せたのは、炎を

操るスマートな竜人の戦士、フレイドラモン。彼女のお気に入りスピリットである。

「フレイドラモンの召喚時効果、BP7000以下のスピリット1体を破壊……エイプ
ウィツプだ！」

「！」

炎を纏わせた拳で空を殴るフレイドラモン。その纏っていた炎はウィルのエイプ
ウィツプまで飛び行き被弾。瞬く間に焼き尽くして見せる。

「破壊に成功したら1枚ドロ……さらに【煌臨】……対象はこのフレイドラモンだ」

「このタイミングで煌臨……まさか」

「ああ、そのまさかだ……現れる赤の究極体、デュークモン！」

1【デュークモン】LV3(6)BP18000

フレイドラモンが赤々と輝く光の中に包み込まれると、その中で姿形を大きく変換。
強靱な白い鎧、槍、盾を揃え、赤いマントを靡かせる赤の究極体、聖騎士型のデジタル

スピリット、デュークモンがその姿を見せた。

このスピリットは誰もが知る頂点王シイナのエースカードである。

「アタックステップ……行くぞデュークモン、攻撃だ……効果でシンボル2つ以下のスピリット、命の果実の精ドライアッドを破壊……ロイヤルセーバー!!」

「くっ……!」

デュークモンの槍先から放たれる全力のレーザー光線。それが木でできたドライアッドを貫き爆散させる……

しかし、ドライアッドを失っても尚、ウィルの場には強力なスピリット達が現在であり……

「今更究極体を出そうとも無駄ですよ……見なさいこの私の強靱で無敵なスピリットの数々を……!」

余裕を見せるウィル。確かにこの状況は最早デュークモン単体ではどうにもできないが、シイナはそんな彼に対して反論するように言い返す。

「勘違いするな。バトスピは強いスピリットでやるモノでも、センスでやるモノでも、ましてやソウルコアでやるモノでもない……諦めない心でやるモノだ……!」

「!!」

「フラッシュチェンジ……デュークモンを対象に効果発揮!」

「なに……デジタルスピリットを対象にチェンジだ?!」

己の格言を口にする、すぐさまカードを展開。それはデジタルスピリットには珍しいチェンジの効果。

その効果は頂点王のデッキの中で最強の一角。通常では考えられない程のパワーがそこには詰まっ……

「まずはチェンジの効果。シンボルの合計3つまで好きなだけ相手スピリットを破壊!」

「なに!?!……今の私のスピリットのシンボルの合計は3つ……!?!」

「そうだ。アルケーガンダム、仮面ライダーウオズ、超星使徒スピッツアードラゴン……そいつらを全滅させる!!」

シイナの背後から龍の形を象った真紅のエネルギーが吹き荒れる。それは場へと飛び行き、仮面ライダーウオズ、スピッツアードラゴン、そしてアルケーガンダムまでもを飲み込み、次々と焼き尽くして行く……………

これでウィルの築き上げてきた盤面は壊滅。しかもその直後にチェンジの真価、入れ替え効果が発揮されて……………

「そしてその後、対象のスピリットと入れ替える!!」

真紅のエネルギーは最後にシイナの場のデュークモンへと降下。そして衝突する。しかし、デュークモンはそれに焼き尽くされることはなくて……………

「燃え上がれ紅蓮の聖騎士!!…真なる深い紅をその身に纏い、邪悪なる者皆照らし破れッ!!」

真紅の炎の中で、デュークモンの聖なる槍と盾、赤いマントが消失する。デュークモンの白い身体は燃えるような深い紅に染まっていき、さらには同じ色の外装が新たに

所々取り付けられていく。背にはマントの代わりに10枚の白い羽が出現する。

「デュークモン、モードチェンジ!!……クリムゾンモード!!」

┌「デュークモン クリムゾンモード」LV3(6)BP21000

シイナの叫びと共にその炎を突き破って現れたのは、デュークモンの進化形態。頂点王シイナの切り札。クリムゾンモード。赤々と燃えたぎるような真なる深い紅の鎧と白い羽はこの薄暗がりな場を明るく照らしていた。

その存在に、ウィルは驚愕せざるを得なくて……

「……なんと美しい……こ、これがデュークモンクリムゾンモード……究極体を越えた、超究極体!!」

「余も初めて見た……これがヤツの本気か」

基本的にはデュークモンや他のスピリットだけで試合を終わらせて仕舞う頂点王シイナのバトル、クリムゾンモードの召喚はあの三王であるエレンでさえも知らぬ事で

あつたようで……

「クリムゾンモードはチェンジの効果で回復状態……アンタのライフは3つ。これで終わらせる……神剣ブルトガング、神槍グングニル！」

「!!」

シイナがそう叫ぶと、クリムゾンモードは聖なる光の力で右手に神剣、左手に神槍を形成。それを強く握り、10枚の白き翼で飛翔して行く。

「無敵剣インビンシブルソード！」

「くっ……ライフで受けます……ぐあっ」

へライフ3?! 2 ヲイル

その剣撃は正に神技。

右手に装備した神剣でウイルのライフを斬り裂くクリムゾンモード。ウイルのそのライフは残り2となり、スピリットの全滅も相まって絶体絶命の状況に陥って仕舞うが

……

「だがまだ負けない……私のライフが減った事でトラッシュのゴジラの効果、再び蘇生する！」

そう。

彼にはまだこの手がある。確かにゴジラならばフィジカル面を活かしてクリムゾンモードに対抗できるかもしれない……

だが実際は最早手遅れ、シイナはクリムゾンモードの更なる効果を発揮させて……

「出してもいいけど、無駄に終わるよ……クリムゾンモードのアタック時効果、アタックしたバトル終了時、相手のトラッシュにあるスピリットカードの数3枚につき1つ、相手のライフを破壊する」

「なッ……なんだと!？」

「アンタのトラッシュには今7枚のスピリットカード、ゴジラを出しても6枚……よつて2点のダメージ……終わりだ……神槍の一撃……クオ・ヴァデイス!!」

神槍を構えるクリムゾンモード。そこに赤々と輝く光を掻き集め、強烈なレーザー光線を発射。それは瞬間にウィルのライフバリアに届いて…………

「こ、これが頂点王シイナ…………私の前に立ちほだかる神が用意した最後の難関…………ぐツ…………ぐおああ!!」

〈ライフ2??0〉ウィル

最後の一撃、クオ・ヴァデイスにより全てのライフを打ち砕かれ、転げ回るウィル。彼のBパッドからは彼の敗北を告げるように「ピー…………」と無機質な音声が行く…………

よってこのバトル、勝者はシイナ・メザだ。見事自分を殺害しに来たライダーハントーズの主任ウィルを返り討ちにして見せた…………

「私の勝ちだ。一応手柄は拘束させて欲しいな…………なんかアンタ危険だし」

「ハアツ…………ハアツ…………フッフ、そう言う訳には行きませぬ…………私は今から蘇ったであろうあの方に会いに行かねばならないのですからね…………」

バトルによる敗北で流石に疲れ切ったか、息を切らしながらそう言葉を返すウイル。蘇ったあの方とはおそらくブラックフォースの誰かであろう。

「そして私は今回のバトルで掴みましたよ……貴女の攻略法を……ハッハッハ……攻略するのが楽しみだ……ハ、ハッハッハ!!……全てはブラックフォースのために!!」

そう告げながらウイルはB独自で開発したパッドのワームホール機能を使い、この場を立ち去って行く。この三王塔に頂点王シイナと三王エレンのみが取り残される……

「報告にもあったブラックフォースとか言う連中の復活と覚醒……まさかそれをヤツ1人で計画して行っていたとは……しかし、ヤツの言っている事は本当だったのか？」

「さあ?……でも少なくとも今までのアスラ達の話からしてブラックフォースが本当にいる事は明らかだ」

ブラックフォースと言う未知な存在を見た事がないため、ウィルの言っていた事を確かめる事はできない。

だが、どちらにせよウィルを見過ごす事はできない。

「ライダーハンターズね……いい加減面倒くさいよなアイツ……なあエレン」

「なんだ」

「テンドウは私が探して来るから今すぐ三王会議の手続きをして来てくれ……ライダーハンターズの壊滅に本腰を入れようか……私の息子……アスラとロンの夢の道に、アイツは邪魔だ」

「ツ……ああ……わかった」

深みと凄みのある頂点王シイナの声色と表情に圧倒されながらも頷くエレン。

遂にライダーハンターズ達との最終決戦、その下準備が始まるうとしていた……

53コア 「綿飴大決戦、オメガモンVSビオランテ」

ここはオウドウ都の周囲に存在する6つの町、その内の1つである紫の町シエン町。この町の地下にはおよそ50メートルの巨大な綿飴製造機が存在し、そのせいか、常に紫色のガスが吹き荒れ、町を覆っている。因みにガスには毒性は無い。

そしてこの町のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイを倒したアスラは、次なる目標である赤の町へ向かおうと思っていたのだが……………

……………

「シエン祭り??」

《そうだ!……………見ものだぞ!》

アスラとエールが滞在していた旅館。今にも出発しようとしていたが、それはカゲミツによる一本の着信で止められてしまう。

「見ものって……カゲミツ姐さん、いったい何が見ものなんですか？」

《まあ来て見ろ。今にわかるから》

「何か嫌な予感しかないんだけど……」

「むえ……」

Bパッドからの着信に応答するアスラ。その横で話を聞くエールとオレンジ色の小動物ムエ。

基本変態なカゲミツの事だ。何か企みがあつての事であると推察できる。

《それじゃあな。この間オマエが迷子になった噴水公園で待つてるぞ》

「あ、ちよつと姐さん!？」

カゲミツは話したい事だけ好きなだけ話し、アスラ達の否応を聞かずに着信を切つた。

「……で、どうすんのよアスラ。行くの?……正直胡散臭いんだけど」

「まあそう言わずに行ってみようぜ、カゲミツ姐さんには色々お世話になつたしな!」

「お気楽ね」

カゲミツに対する恩義からそのシエン祭りへと赴く事にしたアスラ。だが、今回の祭りで一番大変な思いをするのは他でも無いエールである事は、まだ2人は知らない
………

シエン町の噴水広場。ガスによる視野の関係上、基本的に人だかりの少ないシエン町であるが、この日に限ってはおよそ百数人と言った大勢の人々で賑わっていた。

中でも目についたのが十数メートルはある巨大な綿飴だ。殆どの者達がこれを見にやって来ている。虹色に輝いた不思議なその綿は最早芸術品に近い。

「す、スゲエ!!……なんてデツカイ綿飴なんだアアア!!」

「むえ、むえむえむえ!!」??食べたい食べたい食べたい!!

そのサイズと芸術的作品とも呼べる美麗さに感動するアスラ。そしてそれを食べた

いと言わんばかりにヨダレを垂らしながら、エールの頭の上で気が狂ったようにヨダレを垂らしながら発狂するムエ。

この巨大な綿飴はこの町の地下にある綿飴製造機で1年間、じっくりゆっくりと作られたものである。大層立派な虹色の巨大綿飴はこうして人々の目に口へと触れる事ができるのだ。

「おっ………いたいた、おーいアスラ、エール」

「カゲミツ姐さん……おはようございます!!」

そんな折、紫のカラーリーダー、カゲミツがアスラ達を見つけ出す。元気の良いアスラは目をギラギラと輝かせながら挨拶をした。

「どうだアスラエール、このシエン町が誇る特大虹色綿飴は!」

「もう感動つす!!……人つてすごいですね!!……なんでも作れるんすね!!……今日来てホント良かったです〜!!」

「確かにスゴイけど、誰があんな無駄にデツカイ綿飴食べるのよ」

率直な疑問をカゲミツにぶつけるエール。確かにこれ程までに大きな綿飴を平らげるのは至難を極める。

そんなエールの疑問に対し、カゲミツは怪しげで不敵な笑みを見せると……………

「ふひひ……そりや当然オマエだエール、なんてったってそのためにオマエを呼んだんだからな」

「え」

ここに来る前から感じていた嫌な予感的中した……………そんな嫌な音がエールの頭の中を通過して行く。

「実はこの後、あの巨大な綿飴を賭けたバトル大会があるのだが、是非是非エールにはそれに出場して欲しい。そしてこの私にも絶品とされるあの綿飴を分け与えて欲しい」

「はあ!?…何よそれ!!…そんな事のために私たちを呼んだわけ!?…大体食べたかったら自分で出ればいいじゃない!!」

「無理。私は強過ぎて出禁になった」

カゲミツがアスラとエールを………と言うかエールを呼んだ理由はこの巨大且つ絶品な綿飴だった。

昔からカゲミツは毎年のようにこの祭りのバトルに参加しては綿飴を掻つ攫つて行ったため、今では出場不可の烙印を押されているのだ。

「はいはい!!…じゃあオレが出ますよおお!!…是非一口食べてみたいっす!!」

「オマエもダメだアスラ。これ女性限定の大会」

「なにいいいー!!」

勢い良くアスラが挙手して見せるが、大会の出場条件で即却下される。

当然ながらエールもあまり乗り気ではない。

「なあエールく……この通りだよ……お小遣いやるからさく……いくらならオツケー? ……50万までは許容範囲よ?」

「えええええ!!? ……、50万くくく!!?」

「別に要らないわよそんなはした金」

「えええええ!!」

流石エックスと言ったところか、エールは50万という信じられない額を差し出されても「はした金」と称して速攻でお断りする。

今に始まった事でもないが、アスラはそんな彼女達の狂った金銭感覚に繰り返し度肝を抜かれる。

「頼むよ……オマエしか頼れるヤツがないんだ！」

「むえむえ……!!」??食べたい……!

「む、ムエまで…………」

愛くるしいムエまでもがエールに参加しろと要求するように鳴き声を上げる。ムエの頼みとあらば参加したくなるし、誰かに頼りにされると言うのも正直悪くない………だがこんな綿飴を賭けたバトルなどあまり気乗りしないのもまた事実………

だがそんな時だ。後方から耳覚えのある声が聞こえて来たのは………

そしてそれはエールにとって耳障りな嫌な声でもあり………

「あら……アスラ君にエールちゃんじゃない……!」

ー!!

「ご機嫌お無沙汰〜!!」

「い、イバラ!?!」

そこに現れたのは緑色の長い髪を靡かせる絶世の美女にしてライダーハンターズの紅一点だった女性イバラ。アスラ達とは異世界での戦い以来である。

ヘタマイトと言うブラックフォースの1人に彼女が身体を乗っ取られて大変な事になったのは記憶にも新しい。

「い、イバラ……アンタもう身体大丈夫なわけ?」

「あらあら……心配してくれるのエールちゃん!……やっさしい〜」

「ち、違うわよ!!」

「まあでも元氣そうで良かったぜ」

「まつ!……アスラ君まで心配してくれるの?……嬉しみの極み〜」

何だかんだでイバラの身を案じていたアスラとエール。いつも通りマイペースな彼女の様子に一安心。

「つて言うか何しに来たのよ。またアスラの龍騎が狙い？」

「ああ、もうそれはいいわ……だって私辞めたしライダーハンターズ」

……………え

……………えええええ!?

「次いでに結構前にオロチも辞めちゃったわ」

……………えええええ!?

イバラから次々と語られるエピソードに驚愕し続けるアスラとエール。

そう。既にライダーハンターズは主任のウィルとトウエンティのみ。オロチとイバ

ラは勝手に組織を脱退したのだ。

「や、辞めたってなんで!？」

「だって今更ライダースピリットを集めた数でトウエンティに追いつくとか無理無理の無理だし……それにこの間変なのに取り憑かれちゃったし……あつそう言えばこの間は助けてくれてありがとちよんまげ〜!」

「アンタって人は本当、相も変わらず身勝手ね……」

「そして何故ちよんまげ……」

非常に自由気ままなイバラ。その性格が幸いして彼女は結果としてライダーハンターズを抜けた。言われてみれば現実的に狩ってきたライダースピリットの数はトウエンティが圧倒的に上だったし、得体の知れない生命体、ブラックフォースに取り憑かれてしまったのだ。

喋り方こそおかしいため、まともに見えないが、よくよく考えてみると割とまともな理由で辞めている気もしないでもない……

「うっふふ……まあせつかく自由になったから今日のこの祭りに顔出したってわけ」

「顔出したってわけって……アンタ絶賛この国で指名手配中なのよ?……それにここには紫のカラーリーダーだって……」

そう言いながら、エールはカゲミツの方へと首向ける。

今やライダーハンターズはその全員が国の指名手配にかけられている。国の守神の役割を担っているカラーリーダーならば当然彼女の身柄を捕らえる事を優先しなければならぬのだが……………

「いや〜ん!!…素敵なお顔のお姉様〜!!…イバラお姉様と呼ばせてくださいませ〜!!」

「……………」

「いいわよん…ところであなた誰？」

捕まえる気無し。

変態な性格な彼女は絶世の美女であるイバラの魅力に一目惚れしてしまい、腑抜けになっってしまった。エールは呆れて声も出ない。

「それじゃあこの綿飴を賭けたバトル大会、私も出るから、お互い優勝目指して頑張りましょうねん〜」

「ちよ、ちよつと!!…私はまだ出場するなんて……………」

一旦立ち去ろうとするイバラ。彼女もどうやら今回の大会に参加するようだ。参加する決めかねているエール。

しかし、次にイバラが放った一言がエールをやる気にさせる事になって……………

「今日、本当はね…………アスラ君の事、誘惑しに来・た・の・♡」

「ツ…………なツ!？」

エールの耳元でそう囁いたイバラ。エールの顔は一気に真っ赤になってしまい……………

「じゃあねんく!!…アスラ君私の応援よろしく!!」

「?!…………おう!…なんか知らんけども頑張れよな!」

「ああ〜行つてしまわれるのですかイバラお姉様く!!」

去っていくイバラ。アスラは取り敢えず手を振つて見送り、カゲミツは残念そうに軽く涙を流した。

「でせ。結局エールはどうすんだ?……大会………」

話がひと段落した所でアスラがエールに聞いた。その答えは……

「出るわよ!!……出るに決まってるじゃない!!……負けないわあんなヤツに!!」

「お……おお……どうしたんだよスゲエやる気だな………」

「よくぞ言ってくれた、流石我らがエール!!……応援してるぞ!」

「むえ、むえむえ!!」??やった、綿飴綿飴!!

当然YES。そう言われて黙れっぺいられるわけがないとエールの本能は語っている。エールの参加に喜ぶカゲミツとムエ。特にムエはヨダレをあちこちに垂らしながら大いに感激していた。

こうして、エールはひよんなことからシエン町の綿飴祭りに参加する事となったのだ。

そして今年の女性限定のバトル大会は、エールとイバラを含め、実に総勢16名での開催となったのだが……

……………

「さあ今年の特大虹色綿飴を賭けたバトル大会もいよいよ大詰め、勝ち残ったのは気品溢れる可愛らしいお嬢さんと、とてもではないがこの世の人間とは思えない程の超絶美人さんだああ!!」

この大会の司会者であろうリーゼントの若い男性がマイクを片手にそう言い放つ。「気品溢れる可愛らしいお嬢さん」「とてもではないがこの世の人間とは思えない超絶美人」……………

それらが指しているのは言うまでもなく、エールとイバラである。

お約束……………

と言うか当たり前と言うか……………

エールとイバラは並いる対戦者を次々と撃破していき、大会はあつという間に彼女らの決勝戦を迎える事となっていた。

「と、言うわけでお2人さん!!…バトルの舞台へGO!!」

マイクを片手に取った司会者がそう告げると、2人はバトルの舞台へと上がって行き、ようやく顔を合わせる。

「やつぱり決勝まで来たわねエールちゃん……流石エックスのオメガ家、バトスピの腕前も一流なんだ……さあ楽しんでいきましよう」

「……そ、そんな事よりアンタ、さつき言ってた事はどう言う意味な訳？」

「さつき？」

「と、惚けないでよ!!……あ、アスラを誘惑するとか、なんとか……」

バトル開始直前、観客には聞こえない声で会話する両者。エールは大会中もイバラの「アスラを誘惑する」と言う言葉が引つかかかっていてしようがなかった。

「あくその事……そのままの意味よ……異世界で変なモヤモヤに意識を取られた時に……ボンヤリだけど必死になって戦うアスラ君を見て一目惚れしちゃったの！」

「なアツ!!」

「あの時のアスラ君かつこよかつたな……だからこの後優勝商品の綿飴と一緒に貰っ

ちやうわ!」

「な……だ、ダメよ!!……つて言うかそれ多分一目惚れじゃないし!」

「ええ……でもそうよね……当然アスラ君を取ろうとするとエールちゃんが立ち塞がるわよね……エールちゃんアスラ君の事大好きだし」

「そ、それはないわよ……誰があんなチビスラ……!!」

異世界での戦いでアスラに惚れてしまっていたイバラ。

普通の男にとっては絶世の美女と高身分のお嬢様2人に好意を抱かれると言うかなり美味しい展開なのだが、会話が歓声に掻き消されている事もあり、とうのアスラはそれに気がついていない……

取り敢えず呑気にエールと、なんだかんだ仲良くなってしまうイバラの2人をカゲミツと共に応援していた。

「残念だけど、アナタにその拒否権はないわエールちゃん!!……さあ、アスラ君を賭けてバトルよ!」

「ッ!!」

また勝手にアスラを賭けの対象にするイバラ。バトルを始めんとBパッドを展開し、己のデッキをセットする。それに合わせてエールもBパッドを展開してデッキをセット。

そして……………

……………ゲートオープン、界放!!

百数人の観客達が見守る中、エールとイバラによる巨大な綿飴とアスラを賭けたバトルスピリッツが幕を開ける……………

先行はイバラだ。颯爽とターンシークエンスを進めて行く。

「ターン01」イバラ

「メインステツプ……………先ずは湖に咲く薔薇を配置しちゃうわ」

1 【湖に咲く薔薇】LV1

「出たわね、湖に咲く薔薇」

「私はこれでターンエンド。さあエールちゃんのターンよ……せつかくだから楽しく行くましょー！」

イバラの背後へと颯爽と現れたのは彼女の十八番とも呼べるネクサスカード、湖に咲く薔薇。コスト4以上の緑のスピリットが召喚される度にコアが増えるその薔薇は静かに開眼して行く。

「ターン02」エール

「メインステップ!!…創界神ネクサス、八神太一と石田ヤマトを配置!…効果で神託!」

ー【八神太一】LV1(1)

ー【石田ヤマト】LV1(3)

エールはデジタルスピリットをサポートする創界神ネクサスカードの2枚を連続配置する。場にも背後にも、特にこれと言った変化はないが、初動でこの動きはかなり有

益なものである。

その神託も今回は八神太一が1つ、石田ヤマトが3つ成功。それぞれ1つと3つずつコアが追加された。

「これでターンエンド!!…いいわよ、どこからでもかかって来なさい!…エックスのこの私が相手になってやるわ!」

手札：3

場：【八神太一】LV1（1）

【石田ヤマト】LV1（3）

バースト：【無】

「あらあらく…やつぱりアスラ君の事になると必死の中の必死になるのねんく…やつぱりかわいいわエールちゃん」

このバトルには絶対勝つと言わんばかりに強気なエール。それに対して常にマイペースなイバラ。そんなある意味正反対とも呼べる2人のバトルは折り返しを迎え、再びイバラのターンとなる。

「ターン03」イバラ

「メインステツプ……ミツジャラシちゃんを召喚しちゃう！……効果でコアブースト
！」

ー【ミツジャラシ】LV2（1??2）BP5000

イバラの場に蜜蜂のようなスピリット、ミツジャラシが現れる。ミツジャラシはその
召喚時効果でさり気なくコアを1つ増やし、LVアップを果たした。

「コスト4以上の緑のスピリットが召喚された事により、湖に咲く薔薇の効果でさらに
コアブースト！」

「！」

早速開始されるイバラの基本戦法。ミツジャラシから湖に咲く薔薇へとコアブー
ストの連鎖が続いて行く。

「ラストにバーストをセットして、ターンは終わ終わの終わよ」

手札：3

場：【ミツジヤラシ】LV2

【湖に咲く薔薇】LV1

バースト：【有】

意外と戦略を考えているのか、アタックステップは控え、まだ攻勢には回らないイバラ。エールにターンが渡る……………

「ターン04」エール

「メインステップ！…太一のアグモンとヤマトのガブモンをそれぞれLV1と2で召喚！…：創界神達に神託を行いつつカードをオープン、その中のデジタルスピリットを手札に加えるわ！」

1【太一のアグモン】LV1(1)BP3000

ー【ヤマトのガブモン】LV2(2) BP5000

現れたのは獯猛な肉食恐竜をこれでもかとデフォルメしたスピリット、アグモンと、猛獣の毛皮を被った幼き獣ガブモン。それらの効果でエールは新たなデジタルスピリットのカード「レオモン」と「オメガモン」を手札に加えた。

「アタックステップ!!…その開始時にヤマトのガブモン【進化・赤／紫】を發揮!…現れなさいレオモン!」

ー【レオモン】LV1(2) BP5000

ガブモンが光り輝き新たな姿レオモンへと進化。獣王に相応しい鬣を靡かせるこのスピリットは、数多く存在するデジタルスピリットカード達の中でもかなり汎用性に富んでいる。

「アタックステップは続行、レオモンでアタック!…効果でBP10000以下のスピリット、ミツジャラシを破壊!」

拳を空に殴りつけ闘魂の塊を放つレオモン。それがイバラのミツジャラシに被弾。ミツジャラシは堪らず爆発する。

「あらあら……手痛い」

「これだけじゃない……その後レオモンは自身を対象に如何なるデジタルスピリットにも煌臨できる力を得る！」

「！」

「現れなさい……デジタルスピリットの頂点に立つ英雄、オメガモン!!」

レオモンがデジタルスピリットカード達の汎用カードと呼ばれる由縁。それは成熟期でありながら完全体を飛ばし、条件を無視しつつ究極体に煌臨ができると言う特異な効果を持つためである。

レオモンは粒子となつて散り散りになるが、その粒子は新たに再結合を果たす。こうして現れたのはエールのデッキ最強のスピリット、オメガモン。純白のボディに右腕の紫の砲手、左腕のオレンジの聖剣が一眼見ただけで何よりも印象に残る。

ー【オメガモン】LV2(2)BP17000

「あれ?…ひよつとしてこれヤバヤバのヤバって感じ?」

「今更気がついても遅いわよ!…オメガモンの煌臨アタック時効果、ターンに一度、このスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊して回復!」

ー【オメガモン】(疲労??回復)

驚異的なスペックを誇るエールのオメガモンを認知していなかったイバラ。その強大な力を今ここで目の当たりにする事になる。

「究極体が回復した事で石田ヤマトLV2の効果発揮!…アンタに1点のダメージを与えるわ!」

「ツ……いった!」

へライフ5??4イバラ

オメガモンの回復に連動するようにイバラのライフバリアが紫色に点灯。そのまま破裂するように1つ破壊される。

「オメガモンは赤と白のダブルシンボル!!…そして回復状態!!…この二連撃で私の勝ちよ!」

エールがそう言い放つと、表が白、裏が赤いマントを翻し、残り4つのイバラのライフへと急行するオメガモン。走りながら右腕のガルルキャノンと呼ばれる砲手を構え、そこから巨大な大砲を発射する。

今のイバラを守るスピリットは0。これは甘んじて受けるしかなくて……

「ライフで受ける………ッ」

へライフ4?!?2へイバラ

被弾したライフが一気に2つ碎け散った。それでもう一度行動できるオメガモンで追撃を行えば勝てる。

そうエール確信したが、イバラも早々に勝ちを譲ってくれないようで……

「痛かったお返しにバースト発動よん！」

「!?」

「翔烈降臨!!…ライフが2以下の時、手札から緑スピリットをノーコストで召喚できちゃう……そう、それが例え高コストのドデカスピリットだとしても！」

「ッ……!!」

オメガモンに対抗すべく反転されたイバラのバースト。その効果の思うがままに、イバラは己の手札からカードを1枚引き抜いて、それをBパッドへと堂々叩きつける。

「今日もよろしくやっちゃって♡……バイオ怪獣ビオランテちゃんをLV3で召喚しちゃうわ!!」

ー【バイオ怪獣ビオランテ】LV3(6)BP27000

地の底より蠢く何か。

その何かは不気味すぎる咆哮を上げると、地を突き破りその姿を見せる。それはイバラのデッキの中で最強のスピリット、バイオ怪獣ビオランテ。以前エールがイバラとバトルした際にも別のビオランテと対面したが、今回のビオランテはそれの比較にもできない程巨大であり、全長5メートルはあるオメガモンでさえも小さく見えてしまう。

「BP27000!?……ここ、これがイバラのエーススピリット、これじゃオメガモンでも手が出せない……!」

「うっふふ。どうするのエールちゃん……ここで決めないと大事なアスラ君は私の彼になっっちゃうわよ〜!」

「た、ターンエンド!」

手札：3

場：【オメガモン】 LV2

【太一のアグモン】 LV1

【八神太一】 LV2 (5)

【石田ヤマト】 LV2 (7)

バースト：【無】

オメガモンのマックスBPは21000。対するピオランテは27000。太刀打ちできないが故にエールは一旦このターンを切る。

次は見事にオメガモン以上のパワーを誇るピオランテを召喚して彼女のターンを止めたイバラの番だ。アスラを手中に収めるべく、それを進行させて行く。

「ターン05」イバラ

「メインステップ……グランドベンケイちゃんを召喚〜」

1「グランドベンケイ」LV1（1）BP4000

背中に多くの刀を携えた大型の虫のスピリット、グランドベンケイがイバラの場に姿を見せる。かなり体格は大きい、それでもピオランテと比較すると小さく見える。

「グランドベンケイちゃんの召喚時効果……エールちゃんは手札1枚を選んで破棄よん

♡」

「ッ……これを破棄するわ」

グランドベンケイの効果で手札の破棄を迫られたエール。「進化」により手札に戻っていた「ヤマトのガブモン」のカードをトラッシュユへと送った。

「さあお待ちかねのアタックステップ…：ビオランテちゃんやつちやつて〜」
「!」

遂に動き出すバイオ怪獣ビオランテ。その強力な効果がエールの場のスピリットを襲う。

「バイオ怪獣ビオランテちゃんのアタックブロック時効果、コア2個以下のスピリット1体を疲労させる事で回復する!」

「!？」

「対象は当然オメガモンちゃんよ!」

―【オメガモン】（回復?? 疲労）

―【バイオ怪獣ビオランテ】（疲労?? 回復）

地面に己の蔓を忍ばせ、オメガモンの足を縛るビオランテ。自身は逆に回復状態となり、前のターンのオメガモン同様、二度目の攻撃権利を得た。

「うつつふふ、しかもビオランテちゃんはオメガモンちゃん同様ダブルシンボル、一度に2つのライフを木っ端ミジンコよ！」

「くっ……太一のアグモンでブロック」

ここでライフで受けて仕舞えば、今度は回復状態のアグモンを糧に三度の回復を許してしまう。そのため、このアタックは今の内にアグモンでブロックするしかない。

ビオランテへと果敢に立ち向かうアグモンだったが、BPの差は歴然。蔓のムチに吹き飛ばされ呆気なく爆散してしまった。

「うつつふふ、これでエールちゃんのブロックカーは0!!……グランドベンケイとビオランテちゃんであタックよ！」

「ツ……ライフで………キャアアア!!」

へライフ5??4??2へエール

グランドベンケイの一角を突き出した突進が、ビオランテの強靱な蔓のムチがそれぞれ1つと2つ、合計3つのライフをエールから奪い取って見せる。

思わず膝をつくエールだが、苦い表情を見せながらも、負けまいとすぐさま立ち上がる。

「ターンエンドよん〜」

手札：2

場：【バイオ怪獣ビオランテ】LV3

【グランドベンケイ】LV1

【湖に咲く薔薇】LV1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするイバラ。次はエールのターンとなるが、その前に彼女は再び口を開いて……………

「本当に楽しいわエールちゃん……こう言う自由なバトル、やって見たかったのよねん」

「はあ？……いつもアンタは自由にやってるじゃない」

「ほら、私って昔はマスターの身分だったじゃない？」

「いや、知らないけど」

イバラは実はマスターの身分を持つ者である。その事をエールは初めて知るも、どうでも良さそうな表情で軽く受け流す。ただそんな事意に介さず、イバラはまだ喋り続けて……

「なんか実家に居た時はこうした自由なバトルってなかったのよ……規則とか、掟とか面倒なモノばかり上に乗っかっちゃってね。だからこうやってこんな大きな舞台でお友達とバトルできるのってちよつと憧れの極みだったわけ」

「……………」

彼女が生まれた家柄はかなり規則や原則が厳しく、イバラはその中でたいへん窮屈な生活を強いられていた。友達とバトスピなんて持った他である。

だからこそ彼女は家を抜け出してライダーハンターズとなった。そして今度はそこさえも抜け出し、自分が求めていた真の自由をようやくこの手に掴み取ろうとしている。

「べ、別にアンタとは友達じゃないけど……でも、それはちよつとわかる気がする……私もずっと自由じゃなかったから」

そんなイバラに同情するエール。自分もずっと城の中にいた。シイナとテンドウ兄妹意外と遊んだ試しもない。

きつとイバラは昔の自分のように寂しかったのだろう。そう思った。

「正直寂しかった……だけどそんな私を外の世界に連れ出してくれたヤツがいた……そいつはバカで、これでもかかって言うくらいお人好しで、自分にそぐわない大きな夢を掲げてて……最初は私も「叶えられるもんか」「絶対無理」って思ってたけど、一緒に旅をしているうちに、知らない間に応援している自分がいた……」

「アスラ君ね」

ついこの間までは敵だったイバラに対してもアスラへの想いや思い出を楽しそうに語って行くエール。口頭では彼の名前を口にはしていないものの、人一倍感の良いイバラには直ぐにアスラの事であるとバレた。

「私にとつてアイツはもう凄く大事な存在になった……だからアイツをアンタにやる訳にはいかないわ！」

「うっふふ……いいえエールちゃん……アスラ君は私のものよ！……さあバトルの続きといきましょうか！」

気を引き締め直し、遂にエールのターンが幕を開ける。どんな理由があれ、決してアスラを渡したくないと言う強い想いを胸に、そのターンシークエンスを進行させて行く。

「ターン06」エール

「メインステップ、オメガモンのLVを3に上げ、創界神ネクサス、八神太一の【神技】……コア3個をポイドに置き、1枚ドロするわ！」

「!」

「オメガモン単体じゃBioランテには勝てない……でも、あのカードさえくれば……ドロー!!」

この状況を突破するべく覚悟を決めたエールの渾身のドロー。それが上手いかわけがなく、目当てのカードをドローして見せた。

エールはそれを見るなり口角を上げると、勝利への道筋は決まったと言わんばかりにそれをBパッドへと叩きつける。

「行くわよイバラ……転醒マジック、シーズグロリーを使用!」

「!」

「効果でバイオ怪獣BioランテのBPをマイナス7000するわ!」

ー【バイオ怪獣Bioランテ】BP27000??:20000

エールの背後より突如として放たれたのは神をも貫く雷の槍。それは瞬く間にBioランテの身体を貫いて見せ、そのBPを大幅にダウンさせた。

破壊できていないため、一見無駄に見えるエールの行為だが、こうする事で、ピオラントはオメガモンのBPを下回ったため、かなりの有効打なのである。

「まさか本当に覆しちゃう一手を引き当てちゃうなんてね」

「これでピオラントはオメガモンには勝てない!…アタックステップ、オメガモンでアタック!…効果でバイオ怪獣ピオラントを破壊して回復!…石田ヤマトのLV2効果でライフも奪うわ!」

「ツ……ピオラントちゃん!」

「神獣の咆哮、ガルルキャノン!!」

ー【オメガモン】(疲労??回復)

へライフ2??1へイバラ

弱ったピオラントにすかさず右腕のガルルキャノンを放つオメガモン。その余の破壊力にピオラントは被弾後すぐさま爆発四散。その爆発の余波はイバラのライフまで届き、それさえをも1つ砕いた。

「さらに今度は石田ヤマトの【神技】でコア3個以下のグラントベンケイを破壊！」
「!?」

次に狙われたのはイバラの最後の砦グラントベンケイ。紫色のオーラにその身を包まれていき爆散してしまった。

これでイバラの身を守るスピリットは全て消えた。後は決めるだけだ……………

「うつつふふ、楽しかったわ〜……………流星はエックスのオメガ家……………ライフで受けるわよん」
「これで最後よ……………オメガモン、そのライフを斬り裂け!!……………天下の豪剣、グレイソー
ドツーー!!」

へライフ1??0へイバラ

オメガモンはトドメと言わんばかりに左腕の聖剣に炎を纏わせ一閃。1つだけ残っていたイバラのライフは跡形もなく消し飛んだ。その瞬間に沸き上がる歓声、それは何よりも真つ先に彼女の勝利を告げているようで……………

これにより、エールは優勝商品である虹色特大綿飴を得るのであった。

……………

「ええええええ!!?!……………ウソ?!」

大会も終わり、無事虹色特大綿飴を得てムエとカゲミツ、アスラに与えるエールであつたが、イバラが自分に対して告げてきた言葉に衝撃を受けていた。

そのウソとは「アスラの事が好きになった」と言う点であり……………

「そうよく……………アスラ君はカワイイ顔してるし、体はゴツくて良いと思うんだけど…
やっぱり私とは身長が合わないし〜」

「よ、良かった……………またライバルができたかと思つてたじゃない……………」

「んー…ライバルがなんだって?」

「ツー!?!」

思わず口に出してしまった言葉。それに対してからかうスタンスに入つたイバラの
言い草に顔を赤くしてしまう。

因みにここで言うライバルとは「イユ・メイキョウ」の事である。あろう事か彼女はアスラのアーストキスマでも奪っており、エールにとってはある意味宿命のライバルと言える存在。

「な、なんでもないわよ!!……て言うかなんでそんなウソついたわけ!」

「だってそう言わないとエールちゃんやる気になつてくれないでしょ?…私は今日エールちゃんと決着つけにこの大会に参加したんだからやる気になつてくれないと困るの極みだし」

「ツ……べ、別に決着くらいいつでもつけてあげたわよ!!」

「え……マジマジのマジ?」

アスラの事が好き。と言うのは真つ赤なウソ。

なんとイバラはいつの日か中断になってしまったエールとのバトルの決着をつけるためだけにこの大会に参加したそうだ。

優勝を争った女2人がそう語り合いながらも、アスラやムエ、カゲミツは絶品とされる全長50メートルの虹色特大綿飴にカジリついて……

「おほおおお、うめええ!!……マジでうめえですよカゲミツ姐さん!!」

「むえええ!!」??うめえええ!!

「そうだろうそうだろう!!……絶品だろうコイツは!!……私も出禁にされてから全く食べれてなかったからなく……これはエールに感謝だな」

「お〜い!……エールも見てないで一緒に食べようぜ!……これマジでうまいからよ!」

バカでアホでチビなヤツの喧しい声が自分を呼んでいる。

声色だけでバカ度が伝わって来るその声にどこか安心を覚えて思わず笑みを零すエール。自分もそこに行こうとしたが……

「じゃあ私達も行きますよ………つてアレ、イバラ?」

ふと辺りを見渡してみるとさつきまでそこにいたはずのイバラが既に姿を消していた。相変わらずの神出鬼没さである。

「……ま、いつか。旅をしていればまたいつか会えるでしょ………今度こそ、自由になると良いわね………で、でもいくら自由になれたからって、バカスラだけは渡さないか

ら。だ、だってアイツは私の……………」

エールは忽然と姿を消したイバラに対して照れ臭そうにそう告げながらアスラたちの元へと歩みを進めた。

彼女とは色々と右往左往した関係だったが、最後の最後に少しだけ仲良くなれた気がしていた。

「あれエール、イバラお姉様は?!」

「どっか行ったわよ」

「ええー!!…せつかく一緒に食べられると思ってたのに〜」

残念そうに言葉を落とすカゲミツ。その声色や表情からはバトルをしている時の迫力や凜々しきは微塵もない。

こんな変態がカラーリーダーなのだから世も末である。

「つーかさエール。バトル中イバラと何話してたんだ?」

「ツ……………あ、アンタには関係ないわよ!」

「ええ!？」

本当は凄く関係あったが、当然ながら説明できるわけもなく、エールは顔を赤らめながらもその口を固く閉じた。

「ところでムエは？」

一緒に巨大な綿飴を食り食っていたムエの事を思い出し、エールはアスラに聞いた。

「ああムエだったらさつきからずっとモグラみたいに綿飴の中に入ってるぞ」

「むえええええ!!!!」?? 幸せえええええ!!

「か、カワイイ……………」

余程楽しみだったのか、ムエは凄まじい勢いで綿飴を食していた。泳ぐように綿飴の中を食べながら突き進んでいた。全ての可愛いが詰まっているムエのこの行動にエールは思わず悶える。

そしてそんな時だ。アスラのBパッドから一件の着信があったのは。アスラは片手

に握り取った綿飴を持ちながら、もう片方の手でそれに応答した。

「はいもしもしアスラっす」

《あ、小僧?……オレオレ、テンドウ》

「ああテンドウさん!!……ご無沙汰してまアアアす!!」

《うるせえ!……端末越しにデケエ声出すな、殺すぞ?》

「すんません!!」

着信を寄越したのは他でもないこの国の三王の一人、テンドウ・ヒロミ。何故かオレオレ詐欺みたいな口調である。

アスラは思い出す。テンドウのお陰で異世界に行けた事、その甲斐あって龍騎をもう一度使用できるようになった事、そしてそのお礼をまだしていないと言う事に……

「そうだ聞いてくださいテンドウさん!!……オレまた龍騎が使えるようになったんすよー!!……色々ありがとうございましてアアア!!」

《あ、そう。良かったねー》

「えええええ!!……なんかリアクションが軽いーッ!?」

低リアクションなテンドウ。しかし特に驚いていないのは、アスラが再び龍騎を使えるようになる事は当たり前であると思っていたに他ならない。

そして、テンドウはそんなどうでも良い報告を聞きにアスラに着信を寄越したわけではなくて……

《エールもそこにいるな?……だつたらさつきとオウドウ都の三王塔に来やがれ》

「え……な、なんで三王塔なんすか!?…オレまだ5枚しかカラーカード持ってませんよ!?…まだテンドウさんやエールの兄ちゃんにも挑めませんよ!?」

《オマエとバトルするためじゃねえ。何早とちりしてんの?…良いから早く三王塔に來い。来なかつたら殺す》

「ええええええ!?」

自分の要件だけを勝手に押し付け、一方的に着信を切るテンドウ。通話の最後が「殺すぞ」は流石に怖すぎる。

「アスラ、テンドウは何て?」

「……………オウドウ都の三王塔に來いって」

「はあ!?!…またオウドウ都!?!…さっさと赤の町に行きましようよ。一々寄り道するからアンタはロンよりカラーカードの枚数が少ないのよ?」

「むー…それを言われると何も言い返せないけど…来なかつたら殺されるしな……………」

再びオウドウ都に召集されるアスラとエール。来なければ間違いなくテンドウにぶち殺されるので無視するわけには行かない。一行は最後となる赤のカラーリーダーへの挑戦の前に一先ず中心都市オウドウ都へと戻る事にした。

ただ……………

この時の2人はまだこれから起こる悲劇をまだ知らない。

54コア 「選ばれるための一撃」

ノヴァ王国の中心都市オウドウ都。その中にある三王塔と呼ばれる巨大な鉄塔はその言葉通り、最強のカードバトラー集団三王とそれさえをも超える存在、頂点王の職場である。

本来であれば6枚のカラーカードを獲得していなければ何人たりとも入る事を許されないこの場所に呼ばれたアスラとエルは最上階である頂点王の間を指し階段を上がっていた。

「ねえバカスラ。なんでまたテンドウは私たちを呼んだのかしら？」

一段一段と歩みを進めながらエルが前を進んでいるアスラに聞いた。彼は頭に乗っかっている謎のオレンジ色の生物、ムエゴと振り向いて答える。

「うーん、アレじゃないか？…またイセカイに行くとか」

「また光黄達の世界に？…この間あんなに盛大に別れたのに、また直ぐに会うのもね」

要件は言わず、オウドウ都の三王塔に來いとだけ言われた2人。いつも以上に真剣だったテンドウの声色から考えるに、今回は相当重要な事であると勘ぐれるが……

「まあ正直なんだっていいさ……あのテンドウさんに呼ばれたんだ！……どんな願い事でもバツチリ引き受けてやるぜ！」

「呑気ね……尊敬できる程凄くないわよテンドウって……いつもタバコばかり吸ってるし、賭博しに行くし」

「そんな事ねえよ……凄い人じゃねえか……この間だってちよび髭シルクハットからオレ達を守ってくれただろ？」

「まあそりややる時はやるけど」

同じ赤いライダースピリットを使うからか、テンドウを尊敬しているアスラ。幼少期から彼のだらしなさを見てきているエールはそんなアスラの感情があまり理解できなかった。

そして2人は会話しているうちに、頂点王の間の門前まで辿り着いた。アスラは青銅でできたその扉をゆっくりと開け、中へと入室して行く……

そこに居たのは……………

「あ、来た来た……おい、アスラ、エールちゃん！」

先ずは現在の頂点王シイナ・メザだ。頂点王の間であるので、ここに彼女がいるのは当然の事。

「やっと来たか、遅いぞ小僧。殺されてえのか？」

「すみません!!……でも結構早めに来ました!!」

「オマエ、誰に口答えしてんの？」

「えええ!?!」

アスラに恐怖の顔面で詰め寄って来たのは他でもないライダースピリットを司る三王テンドウ・ヒロミ。アスラ達を呼んだのは彼なので、当然彼もここにいる。

「エレンお兄様まで……いったい何が始まろうって言うのよ」

「エールよ、久し振りに会った実の兄に挨拶の一つもできないとはな」

「あ……………ごめんなさいお兄様……………ご無沙汰しております」
「フン」

エール・オメガの實の兄にして、モビルスピリットを司る三王、エレン・オメガもそこに居た。エックスと言う最高身分、三王と言う最高位に最も近い存在である彼は妹であるエールに対しても常に仏頂面であるが……………

（し、しまったく……………!!……………またエールに変な事言ってしまったく……………!!……………違、違、うのだエールよ……………これはただ挨拶されなくて寂しかっただけなのだ……………許してくれえええええ!!）

内面でそう叫ぶエレン。

その正体は極度のシスコン。エールに対しても外面ではクールで冷静なフリをしている彼だが、本当は妹であるエールが好き過ぎるだけなのだ。

つまり彼の生態をわかりやすく説明すると、ツンデレシスコン三王。

「す、すげえ……………三王の2人だけじゃない、シイナまで居るなんて……………」

錘々たる面々。いずれ超えなければならぬ相手達が目の前にいるためか、思わずテ
ンション、闘争本能の高まりを感じるアスラ。

口角を上げて笑みを浮かべるが……………

彼としてはもう一つ気になる事があって……………

「つーかなんでそこにオマエがいるんだよロン!!!」

「よおアスラ」

その方角へと全力で指を刺すアスラ。その先には彼の幼馴染みにして因縁、永遠のラ
イバル、スーミ村のロンの姿があった。相変わらずアスラとは違い、クールでイケメン
で背が高い。

「なんでオマエ平然とこんな凄い人達の中に混ざり込めるわけ!?……………て言うかなんだ
さっきの「よおアスラ」って!!……………カッコつけてんじやねえコノヤロー!!」

「まあそりゃオマエよりはカッコいいし」

「何だとオオオー!!…遠回しにオレの事ブサイクって言うんじやねえコノヤロー!!」

口喧嘩になると「コノヤロー」しか言えなくなるアスラ。
だがこの口喧嘩や罵り合いはこの2人にとって普通な事。お互いをよく知り、よく理解している2人にしかできない会話である。

「そう言えばオマエ、紫のカラーリーダー……カゲミツさんにリベンジは果たしたか？」
「ツ……おおそうだったぜ、見ろよコレ!!……バッチリ勝つて来たぜ!!……何か知らんけど黒い龍騎、リュウガのカードも一緒に使えるようになったしな!」

「……へえ」

ロンにそう言われると、アスラは勝ち誇ったような表情を見せながら懐より紫のカラーリーダーに勝利した証であるパープルカードと仮面ライダーリュウガのカードを彼に見せつける。

「どうだイケメン天才コノヤロー!……オマエに追いついてやったぜ!」

「フツ……その程度で追いついた気になってるとは、お気楽だな、一点突破バカ」

「な、なにい!?!」

ロンは小さく笑みを浮かべると、自身も懐からカラーカードを取り出した。それはこれでもかと言わんばかりに赤々と光輝いていた……………

それを目に映すなり、アスラや、その横にいたエールも思わずして言葉を詰まらせる。そう、ロンが見せつけて来たこのカードは……………

「ろ、ロンオマエ……………ひよつとしてそのカード……………最後の」

「ああその通りだ。最後のカラーカード、レッドカード……………これでオレは全てのカラーリーダーを倒した証を手に入れ、三王への挑戦資格を得た」

「!!」

鳥肌が止まらない。

因縁、永遠のライバルである彼が強くなったと言う喜びと、常に前を行かれると言う悔しさが同時にアスラを襲った。

だがアスラはそれさえも己の糧とするかのように笑みを浮かべると……………

「はは……………クソおめでどうだぜイケメン天才ヤロー……………だけど、オレも直ぐに追いつい

てやるからな！」

「フツ……その言葉何回目だ一点突破バカ……来るなら来いよ。オレは先に行く」

「へへ……」

どちらが先に頂点王になれるかを競い合っているアスラとロン。そんな2人の競争もいよいよ佳境を迎えようとしているようだ。

そしてその間に割って入るように口を挟んで来たのは他でもない三王テンドウ・ヒロミ。

「オマエ達の乳繰り合いはその辺にしとけ、本題に入るぞ」

「誤解されるような言い方はやめてください」

「そうだテンドウさん!!……なんでオレ達呼ばれたんすか!?!……しかもロンまで!!」「うるせえ。本題に入るって言うてんだろ」

頂点王シイナ、三王のテンドウ、エレンだけではない。アスラロンエールまでもがここに集められた理由を、このテンドウが語って行く。

「まあアレだ。単刀直入にぎっくり説明しちゃうと、今からライダーハンターズ潰しに行くぞって事だ」

ー!!

これ以上にはわかりやすい説明をするテンドウ。

「つ、潰しに行くって、アイツらの場所わかるんすか!？」

「バカヤロー小僧、オレを誰だと思ってる。ちゃんと調べて突き止めてやったよ」

「おおスゲエ!!…流石テンドウさん!」

「……………まあやったのはテンドウじゃなくてテンドウの部下なんだけどね」

アスラが目をギラギラと輝かせながら興奮すると、シイナが捕捉する。

そして今からライダーハンターズを倒しに行くと思うと感情が昂ったエレンはその拳を強く固め……………

「だがこれでヤツらを一網打尽にできる。いつもはこちらが後手に回っていたが、今回

は我らが先手に回る時だ」

「それでアイツらを倒すためのメンバーを集めるためにアスラ、オマエが選ばれたってわけだ」

「ツ……オレが選ばれた!?!」

ロンがアスラに言った……………

そう。アスラがこの場に召集された理由。

それがライダーハンターズを一網打尽にする作戦に加えられたからである。

「ああ。オマエとイケメン天才君は今まで幾度となくアイツらとぶつかって来たからな……………次いでにカラーカードの枚数も申し分ねえ、そこらへんのカラーリーダーを連れていくよりかはそっちの方が良い」

「うおおお!!…メツチャ光栄ですテンドウさん!!…頑張ります!!」

「はい暑苦しい…ちよつと黙って」

「ええええ!?!」

テンションのアスラが声を荒げるが、テンドウが一瞬で黙らせる。その後、テンドウ

は今一度口を開き、今回のメンバーを改めて発表していく。

「と、言うわけで今回のメンバーはオレ、ツンデレエックス……」

「誰がツンデレだ、この異邦人」

「そんで元はエックスのアーサー家だったイケメン天才君に、ソウルコアの使えない小僧の4人だ」

「……………」

彼のつける妙な渾名をなしでメンバーを上げると、「テンドウ」「エレン」「ロン」「アスラ」の4人が今回のメンバーである。改めて指名された事でやる気を見せるかのような表情を見せるアスラだったが、その反面、呼ばれなかったエールの表情はどこか暗くて……………」

そんな中、肝心の最強カードバトラー、頂点王であるシイナの名前がない事にアスラが気付く。

「アレ??……………シイナは?」

「あつはは……最初は行く気満々だったんだけどエレンに止められちゃった」

「貴様がここを離れたら誰が最後に国を守ると言うのだ……それにライダーハンターズのウィルは貴様の攻略法を見つけたと言っていたしな。念のためだ」

今回はお留守番の頂点王シイナ。彼女に勝てるカードバトラーなど先ず存在しないため、連れて行けば間違いなくバトルに勝てるのだが、用心深いエレンは念のために彼女をこのオウドウ都に残して置く作戦に出た。

「じゃ、私はエールちゃん、ムエと一緒にここでお留守番かな……麻雀でもする?」

「15のエールにそんなモノを教えるな」

「まあまあ良いじゃないかエレン。エールちゃんはもうすぐ16歳だよ?」

「そのラインは関係ないだろ!」

妹のような存在であるエールと久し振りに遊べると思っただけでテンションが高いのかふざけまくる頂点王シイナ。これから味方が敵軍に攻め込むと言うのにまるで緊張感がない。

「まあ正直エールちゃんとなら何やっても良いんだけどさ。何して遊ぶ?」

「……………わ、私は……………」

エールは少し黙り込むと、内に秘めていたその感情を正直に吐露する。

「シイナ様、私は……………いや私もこの作戦に同行させてください！」

「……………」

「アスラと、みんなと一緒に戦いたい！」

「エール……………」

今まで幾度となく死線を潜り抜けて来たのはアスラとロンだけではない。このエールもまた共に戦い抜いて来た。今更自分だけが置いていかれるのは嫌だと言わんばかりに主張する。

そんな彼女に同情するアスラもまたシイナに向かって頭を下げると…………

「オレからも頼むぜシイナ……………エールはめちやくちや強え……………絶対オレ達の力になる！」

「アスラ……………」

それを見て聞いたエールもまたシイナに向かって頭を下げる。

正直、シイナは最初からエールがそう言う事はわかっていた。頂点王の権限で無理矢理叶えさせてやっても良い。いや、叶えさせてあげたい。

だが……………

例えこの国の最強カードバトラー「頂点王」がゆるしても、彼が決してそれを許さない……………

「頂点王とは言え、相手は異邦人だぞエール。仮にも誇り高きエックスなら頭を下げるな」

ー!!

「余はオマエの同行は認めん。オマエが居ては足手まといだ」

「お、お兄様……………」

そう。

誇り高きエックスのオメガ家にしてこの国の三王の一人、エレン・オメガ。

エールの実の兄であり、誰よりも彼女の事を大事に思っている彼がそれを許すわけがないのだ。

「待てよエールの兄ちゃん……エールだつてもう立派なカードバトラーで、これ以上はないオレ達の最高の仲間だ……一緒に行くくらいいいじゃねえですかアアア！」

「貴様に口を開く権限はないぞコモン。そこで黙っている」

「またそれかアアア！！」

物申すアスラをエレンは黙らせる。

「そんな固い事言わなくていいんじゃないやねえのツンデレお兄様。オマエも知ってるだろエールのオメガモン。ありやオレ達三王が所持するスピリットを上回るスペックを持つ。それが使えるエールは多分それなりに戦力になる……正直オレは連れて行ってもいいぜ」

「ツ……テンドウ」

「テンドウ貴様……ツ！」

反対のエレンとは裏腹に、エールの同行は賛成であるテンドウ。エレンから反感を買う事を知っていながらも堂々と己の意見を述べた。

そして今度は頂点王であるシイナが前に出ると……………

「私もエールちゃんの好きなようにやればいいと思うけど……………やっぱり危険な場所に向かうわけだし、心配かな」

「シイナ様……………」

「だから、本気で行きたいと言うのであれば、今ここでエールちゃんの実力を示して欲し

い

「！」

証明しろと言わんばかりの意見。実際実力がなければ本当に足で纏いになるだけ……………彼女の意見は最もである。

「実力を示す？…ならばこの余が相手だ。完膚なきまでに叩きのめしてわからせてやる」

妹とのバトルに名乗りを上げるエレンだったが……………

「いや、ここは私が決める。なんてつたつて頂点王だからね……………ロン！…アンタがバトルをしろ」

「……………オレが？」

「そう。オレだ」

シイナが頂点王たる者の権限で指名したのは他でもない、息子であるロン。

その選択に不満があるのか、アスラは反発していく。

「なんでオレじゃなくてロンなんだよシイナ!!…そう言う話ならオレにやらせてくれよ！」

「アンタはまだカラーカード5枚しか集めてないでしょ。ロンは全部のカラーカードを集めたから三王のエレンも納得だろ？」

「……………確かヤツはエックスの身分でありながらコモンの住む辺境で暮らしたんだっただな。良かろう、余の代わりにエールを叩きのめして見せよ」

「別にアンタのためにもアンタの妹のためにもバトルはしない。オレはただ、シイナに言われたからやるだけだ」

エレンにそう言い放ちつつ己のBパットをエールに向けて展開するロン。すぐさまデツキもセツトし、準備を整える。

対するエールも当然やる気だ。懐からBパットとデツキを取り出す。

「つしゃあ！……負けんなよエール！……ロンに勝って一緒に行こうぜ！」

「ええ、アンタに言われるまでもないわ!!……行くわよロン！」

「ああ。来いエール・オメガ……オレは正直どっちでもいいから手は抜かないぞ」

アスラからの声援をもらい、俄然やる気を出すエール。Bパットを展開し、デツキをセツトした。

そして……

……ゲートオープン、界放!!

三王塔の頂点王の間にて、三王の2人と頂点王、スーミ村のアスラが見守る中、ライダーハンターズ討伐メンバーの仲間入りを賭けたエールとロンのバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける。

先行はエールだ。相手はあのアスラが一度たりとも勝てた事がない因縁のライバル。だがそれでも負けられないと強気にターンを進めていく。

「ターン01」エール

「メインステップ、ネクサス、勇気の紋章を配置……これでターンエンド」

1 【勇気の紋章】 LV1

エールの背後に配置されたのは太陽を模した紋章。

防御などのサポートに特化したこのネクサスカードで一先ずは様子を見る作戦だろう。

しかし……

このロンを相手に後手に回る事がどれだけ茨の道なのかを身を持って痛感する事に

なる……………

「ターン02」ロン

「メインステツプ……オレはアーマーバット3体を連続召喚！」

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000
ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000
ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

鎧を装着したコウモリ型のスピリット、アーマーバット。颯爽と上限の3体がロンの場へと姿を見せる。

その後、ロンは己の手札からさらに1枚を引き抜き……………

「さらにオレのライダースピリット、転醒する仮面ライダーナイトをLV2で召喚！」

「なッ!?!…最初のターンで転醒のナイト!?!」

「不足コストは3体のアーマーバットから確保。よつて消滅」

1 【仮面ライダーナイト】 LV2 (2) BP6000

召喚されたばかりだが、すぐさま消滅していく3体のアーマーバット。その代わりに様々な鏡像が重なり合い、闇夜に輝く黒騎士、仮面ライダーナイトが姿を見せる。

このスピリットはロンのデッキの中でも最強と呼べるスピリット。対戦相手であるエールが警戒を怠っていたわけではないが、まさか最初のターンで召喚してくるとは思ってもいなかった。

「召喚時効果で2枚ドロ……アタックステップ、転醒ナイトで攻撃する」

手札をリカバリーさせた直後、ナイトで攻撃を仕掛けるロン。その瞬間、ナイトには強力な効果を発揮する。

「ナイトのアタック時効果、【零転醒】手札のアドベントカードを破棄する事でナイトはナイトサバイブへと昇華する！」

「!!」

仮面ライダーナイトは一瞬にして武器を一新させる。それは腕に装備された青い盾。ナイトはさらに、ベルトよりカードを引き抜き、それをその青い盾のバイザー部に装填
……………

……………サバイブ!!

と言う音声が届り響き、仮面ライダーナイトは自身を強化した姿、仮面ライダーナイトサバイブへと昇華して見せる。

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2(2)BP9000

「最初のターンでいきなりナイトサバイブだなんて……………」

「ロンオマエ……………」

「言ったはずだエール。容赦はしない」

黒いマントを翻し、地を駆けるナイトサバイブ。前のターンでネクサスの配置にコアを費やしたエールはこの攻撃をライフで受ける以外の選択肢ない。

「ライフで受ける……ッ」

〈ライフ5?!4〉エール

ナイトサバイブの引き抜かれた聖剣の一撃がエールのライフバリアを斬り裂く。たった一つ減らされたライフだが、この時点で実力の差をエールは感じて……

「ターンエンド。来いよエール・オメガ……こんなモンじゃないだろ、せつかくのオマエとのバトルだ、さっさとオメガモンとか言う究極体のデジタルスピリットを呼べ」

手札：2

場：【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2

バースト：【無】

「ッ……オメガモンを……!?!」

「ああ。それがオマエの最強なんだろ？……今のオマエの全力をオレに見せてみる。じゃなければオマエはアスラと同じ場所に立てない」

「!!」

エールにオメガモンの召喚を要求するロン。どうやら彼女の本気が見たいらしい。

ここまで煽られてはやるしかない。速攻でオメガモンを場に立てるべく、返つて来た己のターンを進めていく。

「ターン03」エール

「メインステップ、オメガモンを要求した事、後悔しないでよね!!……第二のアグモンを召喚!」

1「アグモン」[2] L V 2 (3) B P 5 0 0 0

手始めに召喚したのは赤属性の成長期スピリット、獰猛な肉食恐竜をこれでもかかどデフォルメしたようなスピリット、アグモンがその姿を見せる。

「アタックステップ、アグモンの【進化:赤】発揮、手札に戻し、猛き獣レオモンを召喚

！」

┆【レオモン】LV2（4）BP10000

アグモンは溢れんばかりの青白い光をその身から放ち、その中で姿形を大きく変化させていく。やがてその光を解き放つと、アグモンは赤属性の成熟期スピリット、猛き獣戦士レオモンに姿を変えていた。

「進化したレオモンでアタック!!…その効果で手札にあるオメガモンをレオモンに煌臨で重なる!!」

「……………来るか」

「全てのデジタルスピリットを超えた英雄、オメガモンをここに煌臨!」

┆【オメガモン】LV3（4）BP21000

登場したばかりのレオモンは粒子となって散り散りになるが、その粒子は新たに再結合を果たす。こうして現れたのはエールのデッキ最強のスピリット、オメガモン。純白

のボディに右腕の砲手、左腕の聖剣が一眼見ただけで何よりも印象に残る。

「うおおお!! 出たぜエールのオメガモン!! …頑張れエールウウウ! …ロンなんかぶつ飛ばしちまえ!! …でもって負けんよロン!!」

「うるせえぞ小僧。テメエどっちの味方してんだ」

無表情なテンドウがタバコを吸いながらアスラに軽くツツコミを入れる。アスラは仲間としてエールに、好敵手としてロンに勝利して欲しいのか、やや情緒不安定気味。

「これがエールのオメガモン……確かに見事なモノだ。よくここまで成長した……しかし、それでもあの落ちぶれエックスにどこまで通用するか……」

「なにエレン。やっぱ心配なの?」

「バカ言え異邦人頂点王……願わくば余はエールの敗北を望んでいる」

「それ本当?」

「……………」

頂点王シイナとモビルスピリットの三王エレンもそう何気ない会話を繰り広げてい

く中、エールとロンのバトルは続行される。

おそらく頂点王シイナのデジタルスピリットに勝るも劣らない力を持つオメガモンがロンに牙を剥く。

「オメガモンの煌臨時効果、オメガモンのBP以下のスピリット1体を破壊し回復！」

「だがナイトサバイブは自分の場がこのスピリットのみの場合効果を受けない」

「そうよね。でも回復はできる！」

ー【オメガモン】（疲労??回復）

右腕のキャノン砲から放たれる強烈な砲撃。普通ならば被弾して仕舞えばひとたまりもないが、ナイトサバイブは手に持つ聖剣でそれを一刀両断。背後で爆散させてそれを凌ぐ。

しかし、それでもオメガモンのダブルシンボルの2回攻撃までもを防げるわけではなくて……………

「そしてオメガモンのアタックは継続中!!」

「ライフで受ける……………ッ」

〈ライフ5??3〉ロン

オメガモンの左腕から伸びる聖剣グレイソード。その一太刀がロンのライフを大きく削る。

そしてもう一撃……………

「いけオメガモン!!」

「それもライフだ……………ぐっ」

〈ライフ3??1〉ロン

グレイソードの二太刀目がロンのライフを風前の灯である残り1つまで追い詰めた。エールの勝利は目前まで近づいたと言えるが……………

「ターンエンド!!……………どうよロン、オメガモンの……………私の力は!!」

手札：3

場：【オメガモン】 LV 3

【勇気の紋章】 LV 1

バースト：【無】

「成る程。オマエの実力はわかった………かなりのモノだ………だが緩い………この程度じゃオマエは行った先で死ぬ」

「!？」

強力なオメガモンの力を見せつけられたにもかかわらず、ロンは冷徹な表情でそうエールに告げた。

「行った先で死ぬ?…そんなわけないでしょ!?!…って言うか残りライフルでよくもそんな事堂々と言えたわね」

「だったらこのターンで見せてやるよ………オマエが如何に愚かなのかを………」

「!？」

アスラとはまた違うロンの纏うオーラ。

「ターン04」ロン

「メインステツプ……オレはナイトサバイブのLVを3に上げ、ミラーモンスター、ダークウイングを召喚、ナイトサバイブと合体……ミラージュユせよ！」

「!？」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】LV3（4）BP15000

龍騎とナイトを始めとしたミラーライダー達の最強形態、ミラージュユ。

ナイトの中に宿るミラーモンスター、ダークウイングが甲高い鳴き声を上げながら姿を見せると、その姿を鋼の翼、ダークレイダーへと一変……

ダークレイダーはナイトサバイブと一体化して行き、ナイトをその最強形態、ナイトサバイブレイダーへと昇華させて見せた。騎士から王に近づいたようなその圧巻の姿にエールは思わず半歩下がってしまう……

「アタックステップ……駆けるナイトサバイブレイダー!!…効果でトラッシュユにあるソードベントを回収し、オメガモンのコア2つをトラッシュユへ」

「!？」

ー【オメガモン】(4??2) LV3??2

合体しているダークウイングの効果がここで適用。ロンはカードを手札に戻しつつ、オメガモンのコアを2つ、使用不可ゾーンであるトラッシュユへと追いやった。

「まだまだ……フラッシュユマジック、ソードベント!!……効果でナイトサバイブレイダーのBPを5000上げオメガモンを消滅!!」

「な………オメガモン!？」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】BP15000??20000

ー【オメガモン】(2??0) 消滅

手に持つ黒き聖剣から放たれる紫の衝撃波。それをエックスの字になるように二度

放つナイトサバイブレイダー。

オメガモンは避けられず被弾。胸にエックスの文字を刻まれ力尽き、溜まらず爆散してしまった……………

今まで幾度となくオメガモンを頼って来たエール。どんなバトルであつても決して破壊される事がなかったそれが破壊された事で大きくショックを受ける。

「そ、そんな……………私のオメガモンがたったの1ターンで……………」

「ナイトサバイブレイダーの効果、アドベントカード使用後に回復する……………どうした、もう戦意喪失か？」

「ツ……………ライフで受ける!!……………ぐっ!!」

1〔仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング〕(疲労??回復)

へライフ4??2へ エール

今度はエールのライフに向けて衝撃波を放つロンの最強スピリット、ナイトサバイブレイダー。ダブルシンボルであるその攻撃はエールのライフを残り2つまで追い込ん

だ。

「ライダーハンターズのトウエンティ……ヤツはブラックフォースの1人「オブシディアン」に体に乗っ取られた」

「え……」

「トウエンティが……オニキスと同じブラックフォースに!？」

「ああ、そしてそいつとウィルとか言うちよび髭野郎はブラックフォースと何か深い関係があるそうだ」

回復状態となったナイトサバイブライダーでトドメを刺しに行く直前。ロンはエール、そしてアスラに向けてそう告白した。

自分が見て来た光景と、何故ここに自分も来たのかを……

「ヤツはオレの目の前で体に乗っ取られた、このままじゃ目覚めが悪いんで……だからこうしてオレはここに来た。わかるか?…エール、オマエが今から行こうとしている場所はそんなブラックフォースがいる場所なんだよ」

「!？」

「命をドブに捨てたくなかったらとつととサレンダーでもするんだな」

今までの事情を話すロン。

かなりキツイ言い方ではあるが、これは彼なりの気遣い。死闘へと道連れにするのは自分と三王、後ついでにアスラで十分だと考えている。

しかしエールは……………

「嫌よ…………サレンダーなんてしないし、諦めもしない…………王国の危機なのに最高身分のエックスを持つ私が、ただ指を咥えて見てるだけなんて、そんなの許されるわけがない

!!

!!

「ミラーワールドでも、異世界でも私はただ他の誰かのバトルを眺めてるだけだった…………嫌よそんなの、どんなに命を賭けてもいい…………どんなに辛い思いをしてもいい…………私はアスラと、みんなと一緒に戦いたい!!」

「エール……………」

勇気を振り絞り、啖呵を切るエール。その覚悟を乗せた声は対戦しているロンだけで

なく、アスラや三王、頂点王にも届く……

そしてそれを聞いた頂点王シイナはエレンに対して言葉を告げていき……

「なあエレン……もうアンタが目くじら立てなくても、エールちゃんは強いよ……大丈夫、いざとなったらアスラとロン。私の2人の息子たちがエールちゃんを守ってくれるよ」

「……………」

彼女の言葉を聞きなり、静かに目を瞑るエレン。

迷っているのだ。エールを同行させるかさせまいか……

本当は少し前から、いや初めから必ずエールが強くなる事はわかっていた。しかし、いくら強くなったとは言え、危険な場所に行かすのは話は別……

当然だ。エールは唯一の肉親、大切な妹なのだ……

「行くわよロン!!……オメガモンがやられようが関係ない!!……ここからが私のバトスピよ」

「おうよく言ったぜエール!!……頑張れ!!頑張つて一緒にトウエンティを助けに行こう

ぜ!!」

「ええ!!」

強く意気込むエール。ただ、忘れては行けないのは……………

今、ターンを行なっているのがロンであるという事、ナイトサバイブレイダーの一撃でエールは敗北してしまうという事……………

「覚悟があろうとも手を抜く理由にはならない……………決めろ、ナイトサバイブレイダー!!」

「負けない、私もアンタ達に食らいついていけると証明するまでは……………絶対!!……………フ
ラッシュマジック、リミテッドバリア!!」

「!!」

「このターン、コスト4以上のスピリットのアタックでは私のライフは穢されない……………攻撃はライフで受ける」

〈ライフ2?2〉エール

「よし止めた!!」

ガッツポーズを見せるアスラ。

エールは手札にあった防御マジックで見事にロンのナイトサバイブレイダーの攻撃を止めて見せた。

「……ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】LV3

バースト：【無】

ライフ残り1。ブロッカーはゼロ。

そんな状況でも顔色一つ変えずそのターンを終えるロン。おそらくその残り少ない手札に防御マジックが控えているのだろう……

だがそう思い至ってもエールは一步も背を向けたりしない……

「私は負けない……お母さまから貰ったこのデッキがある限り、アスラから貰ったこの

勇気がある限り!!……誇り高きオメガ家長女、エール・オメガは決して……負け
ない!!」

止められないし……

止まる気もない……

どこまでも前へと突き進んでいくエール。もう城に閉じ込められていた時の自分ではない。そう言いたげに言い放つ……

そしてその時だった……

エールのデツキが真っ赤に燃えるような光で充満し始めたのは……

「……………これは……」

「デツキが進化している……エールちゃんの強い想いで……」

エレンがリアクションし、シイナがそう言葉を落とした。

三度目となるエール・オメガのデツキの進化。彼女のエックスとしての類稀なる才能

と尽きる事のない勇気が、また彼女を強くする。

「エールの進化は、これで三度目か。普通カードやデッキの進化ってーのは人生で一度起きるか起きないかくらいの確率だ……凄いなアイツ」

「当然だぜテンドウさん……なんてつたつてエールは、この頂点王になるオレの仲間だからな!!……それを思いっきりロンにぶつけてやれエール!!」

「ええ……行くわよ、私のターン!!」

背中を押されるかの如くそうアスラに言われると、口角を上げ、己のターンを開始していくエール。

進化したカード、デッキと共に突き進んでいく……

「ターン05」エール

「ドローステップ!!」

真つ赤に光輝くデッキの中からカードをドロースするエール。そのカードは当然なが

「何も知らない、さっきまでデッキには存在しなかったカード……………」

「リフレッシュステップ、メインステップ!!……………第二のアグモン、そして創界神ネクサス、八神太一を配置!」

┆【アグモン〔2〕】LV3（6）BP8000

┆【八神太一】LV1

「まずは進化の効果で手札に戻っていたアグモンと、デジタルスピリットを限界までサポートできる創界神ネクサス、八神太一が召喚、配置される。

そしてそのままエールはロンの最後のライフを破壊すべくターンを進めていき

……………

「アタックステップ……………第二のアグモンで攻撃!!」

「鋭い爪を立て、ロンの方へと走り行くアグモン。この攻撃が通れば念願のロンを倒す事ができるが……………」

彼もまだ折れない……………

いや、折れるわけがない。仮にもロンはあのアスラの最大のライバルなのだから……………

「フラッシュマジック、ナイトサバイブレイダーからコアを確保し、光翼之太刀を使用……………このターン、ナイトサバイブレイダーは疲労状態でブロックできる」

「！」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ダークウイング】BP12000??15000

このターンのみ永遠とブロックが可能となったロンのナイトサバイブレイダー。それは間違いなく絶対的な防御力を有しており、アグモンの相手など容易い……………

だが、エールはそれさえをも突破する。彼女は進化したての新しいカードを手札から切って……………

「フラッシュ【煌臨】を發揮、対象はアグモン!!…この時、私のライフが3以下ならコストにソウルコアを必要としない!!」

「ッ……アグモンに煌臨だど!？」

成長期スピリットであるアグモンを対象に発揮されるエールの新しい煌臨。

通常、デジタルスピリットのデッキとは、最上級の究極体しか煌臨を持たない。しかも対象にできるのはその最強に限りなく近い完全体のみ……

つまり、このアグモンを対象にしての煌臨は明らかにイレギュラーなのである……これは、この世のイレギュラーとも呼べるアスラと共に歩みを進め、成長していったエールだからこそ手に入れる事のできた……

エールだけの進化……

「アグモン究極進化!!……勇気の想いは、世界を変える!!」

「……………」

「現れなさい、アグモン……勇気の絆!!」

灼熱の炎にその身を包んでいくアグモン。その中でこれまでとは比較の仕様もない進化を遂げていく……

やがてその灼熱の炎を弾け飛ばしながら現れたのは、新たなるアグモン。グレイモン

の頭角、人形の姿、どこまでも伸びそうな三つの尾を持つ究極体、アグモン・勇気の絆がその姿を見せる……………

ー【アグモン・勇気の絆】LV3（6）BP20000

「こ、コイツは……………」

「なんつーかつこよさだよ、流星だぜエール…………!!」

勇気の絆のその圧倒的な存在感に思わず声が出るロンとアスラ。

そして容赦なく、エールは勇気の絆の効果を発揮させて……………

「勇気の絆の煌臨アタック時効果……………BP15000以下のスピリット1体を破壊、ナイトサバイブレイダーは破壊よ!!」

その効果は強烈な上限のBP破壊効果。

しかし……………

「ナイトサバイブレイダーは相手の効果を受けない……よってその効果も無効になる」

そう。

ナイトサバイブレイダーは場の自分のスピリットがこれだけの時、一切の効果を受けない。当然この勇気の絆の効果も受け付けない……

はずだった。

「いや、まだよ。勇気の絆は自分の場に八神太一が存在する場合、相手の効果を受けない効果を無効にする!!」

「!!」

「よってナイトサバイブレイダーの効果は無効!!……さらに第二の効果、アタック中にスピリットを破壊した時、相手のライフ一つも同時に焼き尽くす!!」

「な、なんだと……!?!」

決して突破できない壁を突破するべく生み出されたその力は、効果を受けない効果を無効にする力。

終わりだ。このエールを止められる者はもういない……

「いけ……夢想の炎……レッドリーマアアア!!」
「!!」

勇気の絆の両拳から放たれる螺旋の炎が、覚醒したエールの力が今、ナイトサバイブ
レイダーごとロンのライフを焼き尽くしていく。彼に最早これを止める手立てはない
……
やる事と言えば、それを受け入れる事のみ……

〈ライフ1??0〉ロン

ライフが全て砕け散ると、彼のBパッドから「ピー……」と言う敗北を告げる甲高い
音が流れ出る。

これにより勝者はエール・オメガだ。圧倒的な力を見せつけながらも、勇気の想いの
強さで進化し、勝利をもぎ取って見せた……

「か、勝ったの……!?!」

「お……おおエール!!……オマエ勝ったんだよロンに!!……スゲエぞ!!」
「アスラ……私勝った……勝ったわよ!!」

バトル終了に伴いスピリットが消え行く中。未だにあのロンに勝てた事が信じられない様子のエール。

誰よりも喜ぶアスラ。そんな中でもロンの方へと歩みを進め……

「おいロン。いくらカラーカードを全部集めたつつてもまだまだだな!」

「フツ……次やる時は勝つさ。よれよりも強いな、オマエの仲間は」

「おう……絶対リベンジしようぜ、でもって先ずは邪魔な連中全員ぶつ倒す!」

「ああ」

拳を合わせる幼馴染み且つライバルの2人。エールを含めてその3人の青春の時を眺めていた三王2人と頂点王は……

「決まりだな。エールを含めた5人で行くぞ、ライダーハンターズ潰し。カラーカードを集め切ったヤツに勝ったんだ、文句は言わせねえぞ」

「ああテンドウ。余も異論はない……………ただ……………」

そう言いながらエレンはアスラとロンの元に近づいていき……………

「貴様ら、死んでもエールを守り抜けよ。エールが傷付いたら殺される前に余が制裁を下す」

「おお、任せてくれお兄様!!」

「ム……………だから貴様にお義兄様と呼ばれる筋合いはないと何度言えば……………」

「アスラ、面倒くさいんだな、兄妹って」

エールには聞こえないように予め2人に鍵を刺していくエレン。その後エールの方へと振り向くと……………

「実力は見させてもらったぞ我が妹エール・オメガ……………覚悟があるのならば、エックスの者としてこの余と共に王国を守り抜け、そして必ず勝利を齎して見せよ」

「お兄様……………ハイッ!!」

認めてくれた兄の言葉を嬉しく思い、より気合が入った挨拶を送るエール。その光景に頂点王シイナ、アスラムも思わず笑顔を見せる。

「ちえ。結局は私だけお留守番か」

「むえ〜!」??私も!

「あ、ムエもだったね〜」

愚痴るシイナの元によちよちと歩いて来たオレンジ色の小動物ムエ。シイナと共に今回はお留守番だ。

「よし。そんなじゃ改めてメンバー発表だ……先ずはオレ、ツンデレエックス、天才イケメンくん。元気小僧……そしてエール。この5人で黒いヤツとかちよび髭紳士とかぶっ殺しに行くぞ」

「なんかアンタが言うのと一々締まらないのよね……」

改めてメンバー発表をするテンドウ。その締まりのなさにエールが軽くツツコミを入れる。

何はともあれ、これでメンバーは揃った。王国を守るため、5人の勇姿がウィルとオブリディアンに戦いを挑みに向かう……………

ここはどこかの辺境。崩れ去った城壁の中、とある一室がライダーハンターズの秘密基地だ。

だが、そこにはもう最強の殺人鬼オロチも最強の天然美人イバラはもういない。皆それぞれが思いがそこを抜け出していった……………

残されたのはトウエンティだ一人……………

だが、そこにいるのは最早トウエンティではない……………

「やあトウエンティ。私が紹介したコラボダンジョンはどうでした?……………さぞかし、有意義だったでしょう……………なんと云ったって、ライダースピリットがようやく20枚揃ったのですから」

「……………」

現れたのはライダーハンターズの主任ウィル。いつもとは明らかに違う雰囲気を漂わせるトウエンティに声をかける……………

「ずっとこの日を待っていた……………貴方の身体に、我が主人、ブラックフォースのオブシディアン様が宿るその時をね……………お疲れ様トウエンティ、安らかにお眠りなさい」

「……………ザザザ……………この身体への別れは終えたかウィル」

「はい。オブシディアン様……………如何でしたでしょうか、私共が用意した器は」

「ああ、完璧だよ。よくやった……………全盛期とまでは言わないが、私もかなり力を取り戻せた」

「ありがたきお言葉でございます」

トウエンティの身体に居るのはブラックフォースの1人、最強の黒を持つオブシディアン。
やはりウィルとは何か深い繋がりがあるようで……………

「シャーマンとヘタマイトの魂はどうした。この世界で目覚めさせる事はできたか？」

トウエンティの身体を乗っ取ったオブシディアンがそうウィルに聞いた。シャーマン、ヘタマイトとは、黒い怪物、ブラックフォースのメンバー。

アスラの中に眠るオニキスもその1人。イバラの身体にいたヘタマイトとのバトルは記憶に新しい。

「お気になさらずオブシディアン様。シャーマンは凶悪の殺人鬼オロチが、ヘタマイトは絶世の美女イバラがそれぞれ目覚めさせてくれました。かなり私も苦労しましたがね」

「ザッザ……成る程、上出来だ」

ブラックフォースのシャーマン、ヘタマイト。その復活を手助けしたのはウィルだと言う。おそらく殺人鬼オロチが一度戦いの最中で進化を果たしたのはそのシャーマンが原因だと推測できる。

「で。その2人の蘇った魂はどこへ行った？」

「ええ。すっかりちゃんとした器に入れておきましたよ……出て来なさい」

ウィルがその人物を呼ぶと、誰かの足音が響き渡る。その人物は………

「やあ。貴方が噂のオブシディアン様ですか？……僕の名前はフリソデ。ウィルさんにブラックフォースのシャーマンを宿してもらった特別な人間です」

「ほお。シャーマンを汝が」

そこに現れたのはアスラ達とミラーワールドで激闘を繰り広げた青年フリソデ。生き残るためには手段を選ばない彼はウィルにしがみつき、アスラ達への復讐を叶えるべくこうして今ここにいます。

「ここにはいませんがヘタマイトさんの魂も既に器の人間の中にいます。その人間もかなりの素質を持ちます」

「ほお。それは楽しみだな」

「そんな事よりさ。時は来たって感じなんじゃないの？」

ヘタマイトの話をする中、その身にブラックフォースを宿したフリソデがそう言い放った。

「フフ……ああそうさ。フリソデ……決戦の日は近い……全てはオブシディアン様、そして我が野望のために！」

ウィルがそう言葉を落とす。正の力が結成していく中、こうして蠢き続けていた闇の勢力も拡大していたのだった……………

55コア「カブトVS黒の頂点」

いざ、決戦の時来たる。

ここは王国の外から離れた辺境。

茂る密林の中、聳え立つのはボロボロで崩れ去った城壁。紛れもなくそこはライダーハンターズの隠れ家。

そんな隠れ家の目の前に、アスラ、ロン、エール、テンドウ、エレンのライダーハンターズ討伐メンバーはいた。

「ここがライダーハンターズの隠れ家……」

「なんか如何にもって感じの場所ね」

「どちらにせよ、ここにトウエンティ達がいるんだろ……なら、行くつきやねえ」

「待てよ元氣小僧」

アスラが先走ってその城壁内に侵入しようとするが、それを三王テンドウ・ヒロミが言葉で制止させる。

「何も考え無しに突っ込んでいくんじゃねえ。打ち合わせ通り、ここは二手に分かれる。三王組とクソガキ組にな」

「呼ばれ方ヒドイ!!」

「貴様、エールまでクソガキ呼ばわりする気か」

「まあいいじゃねえかつンデレお兄様」

淡々と作戦の内容を確認するテンドウ。エールまでクソガキ呼ばわりされては黙っていられないエレンは耳打ちで脅しにかかる。

テンドウはそんな彼を軽く受け流すと無愛想な表情で作戦の説明に戻る。

「いいかクソヤロー共、敵は2人。あのちよび髭紳士とオブシディアンに身体を乗っ取られたトウエンティだ……ただの人間のちよび髭紳士は兎も角、ブラックフォースのオブシディアンは化け物だ。だからクソガキ組はバトルするなら極力ちよび髭紳士と戦え、トウエンティはオレらに任せろ」

「了解であります!!」

気合が入ったかのように敬礼するアスラ。ロンとエールもその作戦には賛同なのか、無言で首を縦に振った。

「よし、行くぞ皆の者……奴らを駆逐し、王国に平和を齎す」

エレンがそう言い放つと、5人は二手に分かれて行動をしようとしたが……

その時だ。トウエンティの身体を乗っ取ったオブシディアンでもライダーハンターズ主任のウイルでもない……

しかしそれでいてアスラにも聞き覚えのある声が聞こえて来たのは……

「ねえ。その作戦に僕の討伐予定はあるの？」

ー!!

誰もが思わず背後を振り返る。そこには満面の笑みを浮かべた癖毛且つ金髪の青年がいた。

アスラが忘れるわけがない……

その青年は紛れもなく……………

「オマエ、フリソデ!？」

「フツ……僕の事、覚えてたんだなコモンのドブネズミ」

「ミラーワールドに居たヤツか」

「でもなんで今度はここに!？」

そう。その名もフリソデ。

ミラーワールドでシスイ・メイキヨウに従い、アスラやロンと戦いを繰り広げた。結果は敗北してしまい、そのまま姿を眩ましてしまったが……………

今、こうして再び彼らの前に立ち塞がっている。

「このもじやもじや金髪誰？」

「フリソデ……確かミラーワールド事件の話で聞いた、シスイ・メイキヨウの付き人だった男だ……だがヤツが何故」

三王の2人もフリソデの存在を疑問視する中、偉そうな態度で彼はそれを説明する

.....

「僕が何故ここにいたって!?!……そんなの決まってるじゃないか、復讐するためだよ、僕をコケにした君たちにね!」

「!」

「そのために僕はウイルさんに懇願し、力を手に入れた……そして手に入れた力がこのブラックフォース、シャーマンだ!!」

「な……オマエもブラックフォースの中に!」

「ああ。オマエと同じだよドブネズミ。これで対等……対等であればこの僕が君なんかに負けるわけがないんだ」

ブラックフォースのシャーマンをその身に宿していると言うフリソデ。

余程ミラーワールドでオニキスの力を使ったアスラに負けたのが悔しかったのだと思われる。

「この先にいるウイルさん達に会いたいんだったら、先ずはこの僕を倒す事だね……まあ、そんな事、運命が捻じ曲がっても不可能だけど」

「くっ……やるしかねえのか!？」

正直、フリソデとはバトルをやりたくないアスラ。あの日、突然消えてしまった彼の身を案じていたがためだ。

しかし、ブラックフォースをその身に宿す者同士、ここは自分がやるしかないと痺れを切らし、懐からBパッドを取り出そうとするが……

その前にBパッドを展開したのは、他でもないモビルスピリットの三王エレン・オメガだった。

「待てコモン。ここは余が引き受ける」

「ッ……エールの兄ちゃん!？」

「お兄様!？」

「フリソデ。この余が相手になろう……心して掛かって来るがいい」

「へ……この国のエックスで三王のアンタが相手か……これはこれは光栄だね」

フリソデもまたエレンに対して己のBパッドを展開。バトルの準備を行う。

「簡単な話だ。敵は2人ではなく3人だったと言う事……ここは先に行け、三王組はテンドウ1人になるが、まあ良からう。貴様はどうせ死なん」

「へ、わかってるじゃねえかツンデレお兄様……よし、ここはこいつに任せて先に行くぞクソヤロー共」

「お、おうつす……ありがとうございますございますエールの兄ちゃん!!」

「貴様に礼を言われる筋合いはない」

「囷作戦に移行する討伐計画。どちらにせよブラックフォースの相手をアスラ達には任せられないため、エレンかテンドウに任せるのが的確と言える。」

「皆が城壁へと入っていく中、最後にエールがエレンに向かって言葉を発し……」

「お兄様……どうかご無事で!!」

「なツ……!?!」

走りながらだが、何気ない妹のその一言に不意を突かれるエレン。声が可愛すぎて一瞬失心仕掛け、クラクラする。

その後、ようやくエレンと2人きりになったところでフリソデが彼に語りかけてき

た。

「おいおいどうした三王でエックスのいけすかないエレン様。足元がふらついてるぜ」
「フツ……そう見えたのなら、この勝負、この時点で貴様の負けだ落ちこぼれ……余は今、幸せの絶頂に立っている……さつさと終わらせ、余も城壁に足を踏み入れる!!」
「ああそう……行けるといいね〜」

そう言葉を言い合いながらバトルの準備を終えていく2人のカードバトラー……
そして……

……ゲートオープン、解放!!

コールと共に2人のバトルスピリッツが幕を開ける。そしてこの戦いこそがこれから続く死闘の始まり……

黒の力を有するブラックフォース、シャーマンをその身に宿したフリソデに、エレンは勝利する事ができるのか……

崩れ去っている城内の中、作戦通りアスラ達と分かれ、テンドウはただ一人走っていた。

目的はライダーハンターズの討伐、もとい確保。だがそれと同時にテンドウには熟さなければならぬ責務があつて……

「やあ、汝が三王のテンドウとか言う者か？……思つてたよりも随分と体が厳ついんだな」

「馬鹿弟子……いや、ブラックフォースのオブシディアンか、テメエに一番会いたかつたぜ……！」

「ほお。そこまで知っているなら話は早い……もらおうか、カプトの力を」

彼を待ち受けていたのはオブシディアンに身体を乗っ取られたトウエンティ。

先程のフリソデと言い、どうやらオブシディアン達は彼らが攻めに来る事を知っていたようだ。そしてそんなオブシディアンが求めているのはテンドウを選んだライダースピリット、カプト。

「やる気になってくれるならこつちとしてもありがたいぜ。その身体は返してもらわないとな……オレは別にどうでもいいんだけど、生憎、そいつの帰りを求めているヤツがいるもんでな」

「ザザザ……テンドウ・カナの事か」

「!!」

「そう驚くな。私はこの身体の記憶を全て覗いた。大した男だよ、この肉体も、汝もな」
「男の記憶覗いたのかよ、まさかそう言う趣味?……ひくわー」

どんな時でも緊張感のないテンドウ・ヒロミ。最大の黒と呼ばれているオブシディアンを前にしてもまだ余裕である。

だが、それは決して油断しているわけではない……

「ザザザ……見た通り、減らない口だ……来い、もらうぞその力!!」

「取れるモンなら取ってみやがれこの乗っ取り野郎……オレからこれ以上何も取れると思うなよ?」

互いを牽制し合いながらデッキとBパッドをセットする両者。バトルの準備を終え

ると口を揃え……………

……………ゲートオープン、界放!!

戦闘開始の合図を行う。奪うため、奪い返すため行われたバトルスピリッツ。

先行はテンドウ・ヒロミだ。トウエンテイの身体を取り戻すべくそのターンを進めていく。

「ターン01」テンドウ

「メインステップ、ネクサス、カプトエクステンダーを配置してターンエンド」

1「カプトエクステンダー」LV1

テンドウのすぐ横に赤いバイク型のマシン、カプトエクステンダーが配備される。これは彼の操るライダースピリット、カプトのデッキでは欠かせない存在である。

先行の最初のターンでできる事は精々この程度。テンドウはそのターンを終えると、

今度はトウエンティの身体を乗っ取っているブラックフォース最強のオブシディアンがそのターンを行なっていく。

「ターン02」オブシディアン

「メインステップ……ザツザ……仮面ライダーWサイクロンジョーカーを召喚、効果でコアブースト」

ー【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】LV1（1）BP2000

……サイクロン、ジョーカー!!

勇ましい音声と共に、突如として現れた紫電纏う竜巻の中から右半身が緑、左半身が黒のライダースピリット、Wサイクロンジョーカーが姿を見せた。

「さらにネクサスカード、パンドラボックス……これを手札から2枚連続配置、不足のコアはサイクロンジョーカーから確保、よって消滅」

ー【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】(1??0) 消滅

ー【パンドラボックス】LV1

ー【パンドラボックス】LV1

すぐさま消え失せるWサイクロンジョーカー。しかしそれを糧として火星の力が込められた小箱、パンドラボックスが2つ出現。

「最後にバーストを伏せてターンエンド……汝のターンだ」

手札：1

場：【パンドラボックス】LV1

【パンドラボックス】LV1

バースト：【有】

動けるだけ動かし、そのターンをエンドとするオブシディアン。再びテンドウにターンが渡る。

「ターン03」テンドウ

「メインステップ……そんじやいっちょやりますか……変身!!……仮面ライダーカブト
!」

「!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

テンドウの腰にベルトが巻かれ、そこに赤いカブトムシ型のメカが装着される。そしてテンドウは掛け声と共に赤きライダースピリット、仮面ライダーカブトに変身した。

「ほう。それが仮面ライダーカブト……だが所詮一ライダーの力では複数のライダーを操る力を持つ私のジオウには敵わない」

「ああ、ジオウってオマエのカードなの……オレやあてつきりあの髭紳士のカードだと思つたたぜ、神託の効果でデッキから3枚をトラッシュ、対象カード1枚につきコアを1つオレに追加」

1 【変身!!仮面ライダーカブト】(0??3) LV1??2

対象カードの枚数は3枚。変身のカードにコアが3つ追加される。その後、薄気味悪い笑顔を浮かべながらオブシディアンはジオウについて話し…………

「そう。ジオウとは本来この私オブシディアンのカード…………この世界に来る時に大半の力を失ったのでね、ウィルに頼み、見合った器を探してもらおうと同時にジオウの力を少しずつ戻してもらっていたのだよ。無論、ライダースピリットを集める事だね」

「成る程、だからライダーハンターズを名乗ってライダースピリット集めをさせていたわけね……………んでその過程の中で他のブラックフォースも次々復活したと」

「察しが良くて助かるよ」

「わかりやすい説明ごころーさん。取り敢えずオレの馬鹿弟子が愚かだつて事はわかったわ」

トウエンティは最初からオブシディアンの器にされる予定であった。

無論、本人はそれを知らず、本気で恋人であるカナの病気を治してもらえると信じて

止まなかった。結果、予定通り20枚のライダースピリットを集め、ジオウ本来の力を取り戻してしまった挙句、オブシディアンの器になった。

「ザザザ……本当に愚かで健気だよこの器は。お陰でこんなに早く力を取り戻せた」
「……………カプトマスクドフォームを召喚！」

―【仮面ライダーカプトマスクドフォーム】LV1(1)BP2000

重厚な鎧を見に纏うカプトの最初の形態、マスクドフォームがその姿を見せる。神託により変身した自身にコアを置くとテンドウはその効果を使用する。

「召喚時効果。3枚オープンしてその中の対象カードを手札に加える……オレはこの2枚を手札に加えるぜ」

「ザザザ……ならその召喚時効果に対してのバースト、双翼乱舞を発動……効果で2枚のカードをもらう」

テンドウがマスクドフォームの効果で手札のカードを手札に加えると同時にオブシ

ディアンに伏せられたバーストカードが反転、双翼乱舞で彼もまた2枚のカードを得る。

「アタックステップ、その開始時にネクサス、カブトエクステンダーの効果でトラッシュのコア2つをマスクドフォームに」

1【仮面ライダーカブトマスクドフォーム】(1??3) L V 1??2

テンドウはトラッシュのコアを回収しつつスピリットのレベルを引き上げる。そしてそのままアタックステップは続行させて……

「アタックステップ続行、行って来いやマスクドフォーム」

「ライフでもらおうか………ッ」

へライフ5??4へオブシディアン

マスクドフォームの重厚な拳の一撃がオブシディアンのライフバリアを玉砕。見事

先制点をもぎ取った。

「ターンエンド」

手札：5

場：【仮面ライダーカブトマスクドフォーム】LV2

【変身!!仮面ライダーカブト】LV2(4)

【カブトエクステンダー】LV1

バースト：【無】

こちらもできる事は全てより終え、ターンを返す。どこまでも嘲笑うかのような余裕の笑みを浮かべ続けているオブシディアンにターンが巡る。

「ターン04」オブシディアン

「メインステップ……第二の仮面ライダーWサイクロンジョーカーを召喚する」

1【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】「2」LV1(1)BP4000

再び姿を見せる仮面ライダーWサイクロンジョーカー。しかしその効果は前のターンに呼び出されたモノとは異なる。

「召喚時効果、リザーブにコアを1つ追加し、相手の手札が5枚以上ならさらに1つトラッシュに追加」

今現在、テンドウの手札はちょうど5枚。よってオブシディアンはその効果で一気に2つのコアを増やす。

「3枚目のパンドラボックスを配置し、バーストをセット。さらにマジック、フォースブライトドロワー……デッキから手札が4枚になるようにドロワー、私の手札は1枚、よって3枚のカードを新たにドロワーする」

ー【パンドラボックス】LV1

止まらないカードラッシュ。

次々と場のカードとコアを増やし、手札を補い続けるオブシディアン。しかしそれは彼自身のデッキではなく、トウエンティがライダーハンターズとして少しずつ積み上げ、築き上げて来たものであつて……

「ザザザ……良いデッキだ、アタックステップ。第二のサイクロンジョーカーで攻撃しようか」

「……そりゃ馬鹿弟子にはオレのデッキ構築技術の全てを教えて叩き込んでやったからな………ライフで受ける………ッ」

ーへライフ5??4<テンドウ

サイクロンジョーカーによる風に乗せた拳の一撃がテンドウのライフバリア一つを砕く。

ブラックフォースのオブシディアンの影響でダメージの威力が通常よりも跳ね上がっているため、激痛がその身体に走っているはずだが、テンドウの表情は何一つ歪む事はない。

「ターンエンド。汝の番だ不潔男」

手札：4

場：【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】〔2〕 L V 1

【パンドラボックス】 L V 1

【パンドラボックス】 L V 1

【パンドラボックス】 L V 1

バースト：【無】

「人の身体奪ってるヤツに不潔言われたかねえんだが」

ライフの差は対等となり、再びライダースピリットを司る三王、テンドウのターンが始まる。

【ターン05】テンドウ

「メインステップ、カプトライダーフォーム、ブレイヴカードカプトクナイガンを召喚。オレに神託し、そのまま合体する」

1 「仮面ライダーカブトライダーフォーム+カブトクナイガン」LV1(1S)BP
7000

変身したテンドウと全く同じ姿をしたライダースピリット、カブトライダーフォーム
が出現、武器であるカブトクナイガンをその手に握る。

「アタックステップ。開始時にカブトエクステンダーの効果でトラッシュのコア2つを
ライダーフォームに、よってLVアップ」

1 「仮面ライダーカブトライダーフォーム+カブトクナイガン」(1S??3S)LV1
??2

再びバイク型マシン、カブトエクステンダーの効果が適用。ライダーフォームもま
たそのLVが引き上げられる。

「アタックステップ続行。ライダーフォームでアタック、合体しているカブトクナイガ

ンの効果でトラッシュのもう一個をこのスピリットに追加、さらにライダーフォームの「クロックアップ」……ソウルコアをリザーブに置き、このバトル中相手はブロックできない」

ー【仮面ライダーカブトライダーフォーム+カブトクナイガン】(3S???)

カブトライダーフォームが目で捉えることもできないほどの速度で地を駆ける。そもそもブロックができないオブシディアンはこれをライフで受ける他はない。

「ライフだ……………」

〈ライフ4??2〉オブシディアン

カブトクナイガンのクナイモードでそのライフバリアを一気に2つ切り崩す仮面ライダーカブトライダーフォーム。残りライフもまた2つ。テンドウが圧倒的優勢に立ったかに見えたが……………

このタイミングでオブシディアンの伏せていたバーストが反転して……………

「ライフ減少後のバースト、絶甲氷盾!!」

「!」

「ザツザ、効果で私のライフ1つを回復……コストを支払いアタックステップも終了させる」

〈ライフ2??3〉オブシディアン

ライフが回復すると共に場に猛吹雪が発生。これによりテンドウの攻撃の手は止まらざるを得ない。

「ターンエンド」

手札：4

場：【仮面ライダーカブトマスクドフォーム】LV2

【仮面ライダーカブトライダーフォーム+カブトクナイガン】LV2

【変身!!仮面ライダーカブト】LV2(5)

【カブトエクステンダー】LV1

バースト：【無】

滞りなく進まないライフの破壊。テンドウがターンを終えると、またオブシディアン
のターンが幕を開ける……………

散々溜まったコアの数々を使い、彼が何か仕掛けてくるのは明白であり……………

「ターン06」オブシディアン

「メインステップ……………時は満ちたぞ強き人間」

「何そのイタイ台詞。ひよつとして厨二病？」

明らかに様子が変わるオブシディアン。こんな時でも緊張感のないテンドウだが、そ
れは歴戦を潜り抜けてきた三王であるが故……………

ただ、そんな彼を前にしても一切臆す事なくオブシディアンはそのカードを切り、B
パッドへと叩きつける。

「歴戦の力を統べる孤高の魔王よ……………今ここに顕現せよ!!……………オーマジオウ!!」

「!!」

………祝福の時!!

………最高最善!!

………最強王!!!

1 【仮面ライダーオーマジオウ】LV2(3) BP30000

地獄の門でも開かれたかのような獄炎が地を這って行く。その中心で確かな力の根源が姿を見せた。

その名は仮面ライダーオーマジオウ。

トウエンティの使用していた仮面ライダージオウの最強の形態であり、尚且つライダースピリットを統べる存在……これなくしてライダースピリットはない。

「おいおいマジかよ、ちよつとBP30000は洒落にならんぜ……これホントにジオウ?」

「ああ、ジオウさ。そしてこれが本来の姿……トウエンティが使っていたジオウはこれ

の単なる残滓に過ぎない……召喚時効果、コスト20以下のスピリット1体を破壊する

！」

「！」

「消え去れカブトライダーフォーム！」

ライダースピリットの頂点に立つ存在オーマジオウ。カブトライダーフォームに向けて掌から黒い衝撃を解き放つ。一ライダースピリットに過ぎないカブトライダーフォームがその攻撃に耐えられるわけはなく、あっさり爆散してしまった。

合体していた武器、カブトクナイガンはブレイヴの性質により地面に突き刺さり場に
残る。

「3枚のバンドロボックスのLVを2に上げ、バーストセット……アタックステップ、
オーマジオウで攻撃する」

強力な召喚時効果を発揮した束の間、そのオーマジオウで攻撃を仕掛けて来る最強の
ブラックフォースオブシディアン。

そしてここでオーマジオウ第二の効果が発動する……

「フラッシュ……オーマジオウのアタック時効果、ライダースピリットの【チェンジ】効果を1コスト支払って発揮できる」

「なに……!?!」

「私は仮面ライダービルドラビットタンクハザードの【チェンジ】効果を使用し、B P 1 4 0 0 0 以下のスピリットを全て破壊する!!」

「ぐっ……!」

オーマジオウが両掌を天に翳すと赤と青の竜巻が巻き起こり、テンドウの場を荒らしていく。マスクドフォームと場に残ったカブトクナイガンはそれに巻き込まれライダーフォームと同様に爆散して行った。

ビルドラビットタンクハザードの【チェンジ】の効果は本来であれば7コストもの負荷がかかる大技。しかしこのオーマジオウさえいればそれはただの1コスト……この力こそ、ライダースピリットの原点に相応しい効果であると言って……

「その後1枚ドロー……ザッザ……これがライダースピリットの原点にして頂点!!……赤と紫のダブルシンボルの一撃を受けるがいい!」

「……………ライフで受ける……………ぐ、ぐおお!!」

〈ライフ4??2〉テンドウ

カブトライダーフォームを葬り去った黒い衝撃が再び放たれ、テンドウのライフバリ
アが2つ砕け散る。本気を出したブラックフォースによる多大なダメージに流石にタ
フなテンドウも声を荒げてそのダメージを物語らせる。

「ターンエンド……………そうだこの力だ……………ようやく、ようやく私はあの時の力を取り戻
したのだ!!」

手札：3

場：【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】LV2

【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

【パンドラボックス】LV2

バースト：【有】

「なんか穏やかじゃなくなつて来たな……ライダースピリットを統べる王ね……王はあのチンチクリン頂点王だけで十分だぜ」

王や頂点と言う言葉を聞き、頂点王であるシイナの顔が脳裏に浮かぶテンドウ。実際は絶体絶命の状況でありながら、平然とした様子で己に巡つて来たターンを進めていく。

「ターン07」テンドウ

「メインステップ……そう言えやよオマエは結局の所力なんか取り戻して何がしたいわけ？」

メインステップ開始直後。テンドウがオブシディアンに聞いた。未だに見えてこない彼らの目的が何かを探ろうとしているようだ。

「ザザザ……言えないな、まあ直にわかる事だ。そう気にするな」

「気にもするさ……そりやだって今からテメエはオレに負けて消えるんだからな」
「!!」

……
……
……
……

「第三のカブトライダーフォームを召喚！」

ー
〔仮面ライダーカブトライダーフォーム〔3〕〕LV2（6）BP5000

新たに現れたのは3の名を持つカブトライダーフォーム。そしてこれはライダースピリットを司る三王であるテンドウ・ヒロミの必勝パターンの第一歩でもある。

「オレに神託し、召喚時効果、5枚オープンして対象のカブトを手札に加える……待たせ
たな、オレはこの第二の仮面ライダーカブトハイパーフォームを手札に加えるぜ！」

「……ハイパーフォーム……!?!」

召喚時効果のサーチも当然成功。テンドウの行動はまだまだ続き……………

「メインステップ中に【煌臨】を發揮、対象は第三のカブトライダーフォーム……………この時、第三のカブトライダーフォームは自身の効果でコスト6となる」

「コストを変更して無理矢理煌臨の対象にしただと……………」

「今日にモノを見せてやるぜ乗っ取り真っ黒ヤロウ……………本当に一番強いライダースピリットがどっちなのかをな!!……………来い、第二の仮面ライダーカブトハイパーフォーム!!」

テンドウがソウルコアを支払い、スピリットを進化させる効果、煌臨を發揮させる。カブトの左腰にカブトムシ型のマシーンが新たに装着。カブトはそれに備わっているレバー式の角を下に倒すと……………

……………ハイパーキャストオフ!!

と、音声の流れ、カブトはライダーフォームの姿でさらにキャストオフを行う。

そして仮面ライダーカブトは最終形態である最強の姿、仮面ライダーカブト ハイ

パーフォームへと進化を遂げた……………

ー【仮面ライダーカブトハイパーフォーム「2」】LV3（6）BP14000

「煌臨によりまた神託」

「ザザザ……それが汝のライダースピリットの最強の姿か。いいだろう、その力、存分に私に振るえ」

「言われなくてもやってやるよ、それはテメエの身体じゃねえんだ……一々小刻みに口を開くな」

カブトの最強の姿、ハイパーフォームの登場。それはより2人のバトルを加速させるのは間違いない事であって……………

そして今、テンドウ・ヒロミが本腰を入れて王国のため、妹であるカナのため、最強のブラックフォース、オブシディアンに殴りかかっていく。

「アタックステップ!!……第二のハイパーフォームでアタック!!……その効果でオレはエクストラターンを得る!!」

「ツ……なに、エクストラターン……もう一度貴様のターンを行うと言うのか!？」

最強のオブシディアンでさえも驚愕せざるを得ない無敵の効果エクストラターン。テンドウはこの時点でこのターンのエンド時に二度目のターンを行える。

しかし……

「だが、そのライダースピリットのシンボルはたかが1つ!!……二度のターンを得ても私の3つのライフを潰える事は不可能!!」

そう。今のカブトハイパーフォームでは二度のターンで二度の攻撃を行ってもオブシディアンの3つあるライフを全て破壊する事は不可能……

ただし、それはテンドウがその後にもしめない事に限る。

「馬鹿かオマエ、この後味の良いスパイスを加えるに決まってる……フラッシュチェンジ、第一のカブトハイパーフォーム!!」

「!!」

「効果で第二のWサイクロンジョーカーを破壊し、回復状態で第二のハイパーフォーム

と入れ替える！」

足元から塵と化し、消え行くWサイクロンジョーカー。

そしてすぐさまハイパーフォームの手にエネルギー剣が握られると、そこにサソリ、ハチ、トンボ型のメカが飛び交い、次々と装着されていった。

これこそハイパーフォームの必殺剣。三王たるテンドウ・ヒロミの真の切札。

「第一のカプトハイパーフォームの【ハイパークロックアップ】でテメエはブロックできず、フラッシュユタイミングで効果を発揮する際に3コストを余分に支払わねえと使えない！」

「……アンブロック効果……オマケにコスト負担を」

「さらにさらに変身したオレの【神技】!!……コア3つをボイドに置き、このバトル中、第一のカプトハイパーフォームのシンボルを赤の2つにする!!」

ー【変身!!仮面ライダーカプト】(7??4)

変身したテンドウの強力な神技も発揮。これでこのバトルのみであればハイパー

フォームは一撃で2点のライフを破壊できる強打者となった。

現在、オブシディアンの場合はオーマジオウのみだが、「ハイパークロックアップ」の効果でブロック宣言が封じられている上に疲労状態のため、そもそもブロックができない。

つまりこの一撃は残り3つのライフで受ける他なくて……………

「くっ……………ライフで受ける……………ぐ、ぐあっ!!」

へライフ3??1へオブシディアン

多大なエネルギーを内包した剣を握りしめ、そのままオブシディアンのライフを斬り裂いていく第一のハイパーフォーム。そのライフ数を一気に残り1まで追い込んでみせた。

チェンジにより回復しているため、そのまま再度攻撃し、決着をつける予定だったテンドウだが……………

その宣言の前に奇しくもオブシディアンのバーストが勢いよく反転して見せて

……………

「……………ライフ減少によりバースト発動、絶甲氷盾!!」

「!」

「効果で再びライフを回復し、フラッシュ効果でこのターンのバトルは終了する!」

〈ライフ1?3〉オブシディアン

バースト発動と共に回復していくライフ。しかもその後にテンドウのアタックス
テップを無理矢理終了させる。

本来であればこれはかなり隙のない効果。食らえば一溜まりもなくターンを明け渡
さざるを得ない。

しかし……………

テンドウのカブトが持つエクストラターン効果はそれさえをも軽く凌駕する。

「エンドステップ!!……………ワハハハハ!!無駄だぜ、第二のハイパーフォームで得たエク
ストラターンでその効果は実質無効だ!!」

「ぬう……………!!」

テンションがハイになっているのか、笑い方が最早オブシディアン以上に悪役になって来ているテンドウ。

まさか1人の人間がここまで脅威的なスペックを誇るライダースピリットを所有し、使いこなしているとは思ってもいなかったのか、らしくもなくその顔を歪ませるオブシディアン。

それ程までにこのテンドウと言う人間が凄まじいとも取れる。

「ターン08」テンドウ

「エクストラターンで得たターンはコアステップとメインステップが行えねえ、そのままアタックステップ!!……行って来いや第一のハイパーフォーム!!……変身したオレの神技で再びダブルシンボルにしてやる!!」

ー【変身!!仮面ライダーカブト】(4??1) LV2??1

すぐさま第一のハイパーフォームで攻撃を仕掛けるテンドウ。オブシディアンの残

リライフは2つであるため、変身の効果と合わせてこの一撃で終わり……………
とは、そう簡単にはいかなくて……………

「フラッシュマジック、ブリザードウォール!!」

「!!」

突然のフラッシュ宣言、オブシディアンは第一のハイパーフォームの「ハイパーク
ロックアップ」の効果で3コストを余分に支払い、強引に手札からカードを切ってみせ
た。

すると、場全体に猛吹雪、所謂ブリザードが吹き荒れて……………

「効果によりこのターン、アタックによるライフダメージは1となる!!……………それはライ
フで受ける!!」

へライフ2?! 1! オブシディアン

再びエネルギー剣でオブシディアンのライフを斬りつける第一のハイパーフォーム

であったが、ブリザードウォールの影響でそれを軽減されてしまい、そのダメージを最小限に抑え込まれてしまう……………

「ザザザ……………成る程、汝の技術、そしてライダースピリットの強さは理解できたぞ……………だが……………」

「……………ターンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーカブトハイパーフォーム】LV3

【変身!!仮面ライダーカブト】LV1

【カブトエクステンダー】LV1

バースト：【無】

まるで今までの苦しい表情がウソであったかのように嘲笑するオブシディアン。

そして三王テンドウ・ヒロミの必勝パターンであった第二、第一のハイパーフォームによる連携攻撃をも凌ぎ切り、再び彼にターンが巡ってくる……………

「ターン09」オブシディアン

「メインステップにバーストを伏せ、アタックステップ!!…オーマジオウでアタックする!」

すぐさまバーストだけを準備すると、残り2つのテンドウのライフを討つべくオーマジオウを出撃させる。そしてこのタイミングでもその強力無比な力を発揮させて
……………

「アタック時効果、フラッシュタイミングでライダースピリットのチェンジを使い1枚ドロウする!!…先ずは仮面ライダーオーズプロティラコンボ!!…効果でハイパーフォームを破壊!!」

「!!」

オーマジオウがハイパーフォームに向けて手を翳すと、そこから紫のオーラでできた恐竜達の顎が発射される。ハイパーフォームは避けられずそれに直撃。噛み砕かれて爆散してしまう……………

「さらに使うぞ!!……仮面ライダー鎧武イチゴアームズ!!……トラッシュのコア一つを我がライフに!!」

「あらあら回復まですんの?……それはちよいと穏やかじゃないな」

〈ライフ1??2〉 オブシディアン

場を荒らすだけに終わらず己の減ったライフまでもを補うオブシディアン。全く隙のない戦術にテンドウは内心では余裕な表情を見せながらもピンチであることを理解しているのか、冷や汗がその顔からは流れている。

だが、オブシディアンの猛攻はまだまだこんなモノでは終わらなくて……

「まだ終わらない!!……マジック、ゴッドブレイク!!……その効果で汝の変身を強制的に解く!!」

「なに!?!」

「ザザザ……神をも砕くその一撃、食うがいい!!」

オブシディアンが次に放ったのは一枚のマジックカード、しかしそれは創界神ネクサ

スを破壊すると言う奇怪且つ強力なモノ。

当然ながら変身のカードもまた創界神ネクサスの一種……………

その影響を受ける事になる。

カプトに変身したテンドウに神をも砕く鉄槌が降り注ぎ……………

「ぐっ……………ぐあああああ!!」

それをまともに受けたテンドウは赤きライダースピリット、カプトの変身を強制的に解除されつつ、人体に多大なダメージを与えられてしまう。

辛うじて倒れずに立ち上がっているが、飽くまでも辛うじて……………

彼がいくらアスラやトウエンティ以上にタフな男であるとは言え、これ以上のバトルを続ける事は……………

「ザザザ……………その後一枚ドロ……………流石だな、まだ立つだけの力があるか」

「ああ……………こう見えて結構しぶとい性格してるんだ……………その身体返してもらうまで、オレは倒れないぜ」

三王の1人として、そしてトウエンティの師として気力を振り絞って立ち上がり続けるテンドウ……………

しかし、そんな彼を嘲笑うかのようにオブシディアンは顔を歪ませて……………

「確かに汝は強い。バトルの技術も、戦術も、どんな状況でも冷静さを忘れない卓越された精神力でも私は汝に劣っているのだろうな」

「……………」

「だが、たった1つ……………たった1つの力の差で汝はこの私には勝てない!!……………黒の力と言う絶対的な力が私にある限り!!……………トドメだ、オーマジオウ!!」

埋まる事はできない絶対的な力の差……………

確かに存在するそれを見せつけつつ、オーマジオウにトドメを命じる最強のブラックフォースオブシディアン。

だがテンドウはその表情に一点の曇りを見せず、余裕の佇まいで手札にあるカードを切ってみせ……………

「フラッシュマジック、リミテッドバリア!!」

「なに!？」

「このターンの間コスト4以上のスピリットのアタックではオレのライフは減らない……その攻撃は当然ライフだ!!」

へライフ2??2へテンドウ

オーマジオウの拳の一撃。それはテンドウの残り2つのライフを容易く木っ端微塵にできる程のパワーを秘めていたが、咄嗟に放たれたテンドウのリミテッドバリアがそれを凌ぐ。

そしてその防御を回避する手段が今のオブシディアンにはなくて……

「……………ザザザ、まあいい。その程度の防御マジック、一時的な延命に過ぎん……………ター
ンエンドだ」

手札：5

場：【仮面ライダーオーマジオウ】 LV2

【パンドラボックス】 LV2

【パンドラボックス】 LV2

【パンドラボックス】LV2

バースト：【無】

「へっ……ウチのバアさんが言っただけ、そう言う事言う奴は大体次のターンに負け。盛大な死亡フラグご苦労さん、一級死亡フラグ建築士真つ黒黒介……!!」

「ザッザ……戯言だな。不可能だ……私の黒の力を凌駕する程の力を汝は持たない!!」

どちらにせよ、これがテンドウに巡ってくる最後のターンである事に違いはない。己の命をも賭けたテンドウの渾身のターンが開始される……………

「ターン10」テンドウ

「メインステツプ!!……第三のライダーフォームを再召喚!!」

ー【仮面ライダーカブトライダーフォーム「3」】LV2（4）BP5000

現れたのは前のターンに煌臨元となり、チェンジの効果で手札へと戻っていた第三の

カブトライダーフォーム。

「召喚時効果で5枚オープン。その中のカブトのカードを1枚手札に……オレは第一のカブトライダーフォームを手札に。さらにオープンされたカブトクナイガンは自身の効果で手札に加えられる！」

発揮される召喚時で合計2枚の手札を新たに加算するテンドウ……

しかし、それはまたしてもオブシディアンのバーストが勢いよく反転して……

「その召喚時効果でバーストが発動!!…甲竜封絶破!!」

「!!」

「効果で第三のライダーフォームをデッキの下へ、コストを支払いオーマジオウを回復！」

ー【仮面ライダーオーマジオウ】（疲労??回復）

バースト発動と同時、第三のライダーフォームは身体を粒子に変換され、テンドウの

デッキ下へと戻されてしまう。それどころかBP30000を誇るオーマジオウがブロッカーとして復活し、さらに追い込まれてしまう……………

しかし、その反撃と言う名の火種が消されても尚、テンドウの燃え盛る闘志が消える事はなくて……………

「これで終わるかよ!!…第一のカブトライダーフォームとブレイヴ、カブトクナイガンを召喚!…そのまま合体させる!」

1〔仮面ライダーカブトライダーフォーム+カブトクナイガン〕LV2(3S)BP
9000

本日2枚目となるカブトライダーフォームとカブトクナイガン。

テンドウはこの己の戦術の原点回帰とも呼べる古参のやり方でオブシディアンを討つべくアタックステップを開始させる。

「アタックステップ!!…ネクサス、カブトエクステンダーの効果でトラッシュの2コアをライダーフォームに!!」

000
 1【仮面ライダーカプトライダーフォーム+カプトクナイガン】(3S??5S)BP9

「でもってアタックだ、決めて来いライダーフォーム!!…カプトクナイガンの効果でダブルシンボルになり、トラッシュシュのコア2つを追加!!…さらに自身の効果【クロックアップ】でソウルコアをリザーブに置く事でオーマジオウのブロックを封じる!!」

1【仮面ライダーカプトライダーフォーム+カプトクナイガン】(5S??7S??6S)

ダブルシンボル化に加えてブロックの無効。オブシディアンの残りライフは2であるため、この一撃で勝負を決める事ができる……………
 しかし、セオリー通りに終わるわけがなく……………

「ザザザ……フラッシュマジック、双光気弾!!……合体したブレイヴ、カプトクナイガンを破壊する!!」

「!」

ー【仮面ライダーカブトライダーフォーム】

吹き荒れ輝きを放つ2つの炎。それがクロックアップ中のカブトの手に持つクナイ型の武器、カブトクナイガンを奪い去り、焼き尽くしていく。

これで、カブトライダーフォームはダブルシンボルのスピリットではなくなってしま
い……………

「今のライダーフォームがダブルシンボルなのはカブトクナイガンがあつてこそ!!…それをなくした今、私のライフをゼロにはできない!!…次のターンで……」

「次のターンなんかもうやらねえよ!!…フラッシュマジック、ライダーキック!!」
「!？」

「効果でリザーブのソウルコアをライダーフォームに置き、このバトル中ダブルシンボルにする!!」

ー【仮面ライダーカブトライダーフォーム】（6S??7S）

まるでここまでの展開を全て見越していたかのように……

初めからこうなる事がわかっていたかのように……

手札から一枚のマジックカード、『ライダーキック（仮面ライダーカプト）』を切り、Bパッドに叩きつける三王テンドウ・ヒロミ。その行動は伝説のブラックフォースであり、尚且つジオウの所持者、オブシディアンでさえも予測できないモノであつて……

「……………ば、バカな……………何故だ、何故貴様はここまで前を向いて走つていられる!？」

「この私が絶望の淵まで叩きつけてやっていると言うのに!!」

「何また意味のわからねえことボヤいてんだこの真つ黒ボヤツキー……………オレは仮にも三王だ。三王つてのはな、他の誰よりも強くないと務まらねえんだよ……………あの小僧共が挑んで来る前に、どこの馬の骨とも知らないヤツに負けてのたれ死ぬわけにはいかねえ!!」

「ツ……………!!」

オブシディアンは生まれて初めて何かに恐怖を覚えた。震え上がった……………

目の前に存在するのはただの人間。触れれば脆い塵芥。ゴミも同然……………

いく……………

「ぐっ…………ぎや、ぎやあああ!!?!」

これにより勝者は三王テンドウ・ヒロミ。見事に未知の生物であるブラックフォースの1人を倒してみせた。

溢れんばかりのダメージに耐えられなかったのか、トウエンティの中にいたオプシディアン、もとい黒い靄は激しい断末魔を上げながら彼の身体から飛び出していき、消滅していく……………

「……………やつと終わりやがった。全く、しつこい黒カビヤロウだつたぜ」

テンドウはそれを見届けると確かな勝利を実感する。ポケットから取り出したタバコを啜えながら倒れるトウエンティの元へとゆっくりと歩み寄る。

「よお、元気?」

「……………テンドウ……………なんでオレなんか助けた!?!……………こんな、こんな愚かなオレなんか

………

「勘違いすんなよ。オレは三王としてヤバイヤツをぶつ殺したただけだ」

意識は取り戻しているトウエンティ。しかし、どこか自暴自棄気味。

無理もない。自分は恋人であるカナのためであるとは言え、師であるテンドウの信頼を裏切り、ウィルの言われるがままライダースピリットを狩っていたのだから……

「まあ、それはそれ、これはこれだ。いい加減阿保みたいな事してないで戻って来い。身内サービスで少しくらい罪は軽くしてやるぜ」

「は？………何言って………アンタ、オレの事許すって言うのかよ!？」

話に一区切り付け、トウエンティの事を許すかのような発言をするテンドウ。その言葉にトウエンティは信じられないような表情を見せるが………

「許すも何も、時偶にぶつ殺したくなるけどオマエ一応オレの弟子だし。それに、カナもあの元氣小僧もオマエに会いたがつていたしな、今度顔くらい合わせてやれ」

「………だが、オレの罪は重過ぎる、今のカナに合わせる顔など………」

「奪ったカードならさっさと返して来い。オマエに拒否権はないぞ、行かなかつたら殺す」

タバコを吸いながら堂々とした様子で物申すテンドウ。その後も彼の口は止まらない。今度はトウエンティにとっての最大の朗報を声に出して……………

「あ、そうそう。カナの病気なんだけど……………治るんだってさ」

「……………は、はあああ!？」

今世紀最大に驚愕するトウエンティ。顎が外れるかと思われるくらい口を大きく開けてしまう。

そう。テンドウはこれが伝えたくてトウエンティに会いたかった。

恋人、カナの病気は治るのだ。ライダースピリットのカードを20枚集めなくとも、普通に医学の力で……………

「う、ウソだ!!……………だってカナの病気は不治の病であると医者が」

「いやそれが最近の医療だと治るんだと、凄いやなく……………手術費用クソ高かつたからど

うしようかと迷ったけど」

「て、テンドウ……アンタ、カナの事を諦めてたんじや……」

「誰が諦めるつつつてたよ。実兄としてはどうにかしようとするでしょ。三王だから金はあるし」

トウエンティはテンドウの事が嫌いになっていた。

カナが病気になった際に彼がそれに対して「まあそう言う事もあるよな」と発言した際にすれ違いが生まれ、結果トウエンティはライダーハンターズになった。

ひよっとしたらテンドウもそれを知っていたからこそ責任を感じ、トウエンティを追いかけていたのかもしれない。

「クソ妹に合わせる顔がないなら、作れクソ弟子。と言うかちやんと向き合え。これも拒否権はない」

「テンドウ……オレは……」

「謝る必要もねえ、取り敢えず今は一緒にあの詐欺師シルクハットをぶっ殺しに行くぞ」

「ツ……ああ！」

長きに渡ったテンドウとトウエンティの師弟による仲違い……………

それはどうやら今回の一件で一先ずは取り戻せたようだ。

「さてと。やる気のあるような発言しちやっただけど一番強いと思ってた真つ黒黒介はオレがぶっ殺してやったし、ちよび髭ヤロウは正直小僧共だけで十分だし……………うーん、タバコも切れそうだしやつぱ帰ろうかな」

「アスラも来ているのか!？」

「ああ、どうするトウエンティ?…オマエだけ行く?」

「いや、来るならアンタも来いよ……………全くアンタはいつもいつも面倒くさがりで……………」

元の師弟の関係に戻り、温かな会話を繰り広げていくテンドウとトウエンティ。テンドウは帰ろうと言っているが、それは冗談。本当はこの愛弟子であるトウエンティと共に加勢する気である……………

そのはずであったのだ……………

ザザザ……………話は済んだか？

「ツ……………!？」

「オブシディアン!？」

突如……………

一瞬の出来事だった。テンドウのすぐ横、地面の底から黒い靄が声を発しながら現れたのだ……………

そしてそれは間違いなく先程倒したはずの最強のブラックフォース、オブシディアン
……………

オブシディアンは直後に今度はトウエンティではなくテンドウの身体の中へと潜り込んでいく、テンドウはその痛み、苦痛にもがき、苦しむ。

「ぐ、ぐおおお!?」

「ザザザ!!……………ウイルを叱らねばならんな。こんな近くにここまで適正の高い器が存在していたのだから!!……………もらうぞ、カプトだけではない!!その逞しい肉体ごと!!」

「クソ、オレとした事が……………油断した……………ッ」

「オブシディアン、貴様さっきのバトルで消滅したんじゃないのか……………!?!」

「馬鹿め!!……………どんなにバトルスピリッツで圧倒しても、我らブラックフォースは黒の力以外では死なん!!……………何度でも甦り続ける!!」

黒の力以外では消して消えない不死身体を持つオブシディアン。

どうやらあれだけ苦労して彼のライフを破壊し切ったテンドウの渾身のバトルも全て徒労に終わっていたよう……………

黒の力……………

絶体絶命の状況に陥ったテンドウはその言葉を聞くなり真つ先に脳裏に浮かんで来たのはアスラの顔……………

察した。この一連の事件を収束できるのはブラックフォースのオニキスを宿したアスラしかない……………

「あちゃー……………やっちゃったか。聞いてないぜそんなチート能力。こりゃ本格的にヤバイな……………トウエンテイ、オマエに小僧、スーミ村のアスラを任せるぞ」

「ツ……………アスラを!」

「ああ。それと最後に1つ……………ウチのバアさんが言ってた……………」

二兎追う者はなんだかんだどっちも取れる……………

「肝に銘じておけ。テンドウさん最後の格言だ。次はカナだけじゃねえ、オマエが望むモノ、どっちも取れるよう……………精進しやがれクソ弟子」

「何が最後だ……………何で弱気になってんだ!!……………そんなヤツ、アンタならどうにか出来る

んだろ!?……テンドウ……テンドウさアアアーン!!」

「へっ……クソ弟子に「さん」付けで呼ばれるのは……久し振りだ……な」

いつものように笑って、ふぎけて、トウエンティを励まそうとしたのか、最後に意味深な事を呟き、その目を閉じるテンドウ……………

そしてその目が再び開眼すると、その白眼部は黒く染まり、顔つきや目つきがブラツクフォースのオブシディアンのモノになっていて……………

乗っ取られたのだ。最強カードバトラーの一角、三王であるテンドウ・ヒロミが……………

「て、テンドウさん……ウソだ……だってアンタは……………」

「ザザザ……………最高に良い気分だ」

「!!」

少しでもテンドウのままであると信じていたトウエンティ。「ザザザ」と言う奇妙な笑い声と共にその淡い希望は消し飛んでいく……………

今日の前に存在しているのは紛う事なきあのオブシディアンだ。

「最後までふぎけた人間だった。二兎追う者はなんだかんどっちも取れる?……ザザザ、そんなモノただの妄言、戯言!!……宣言しようトウエンティ!!……汝は二兎を追つてもどちらも取れない!!……それがもうすぐわかるだろう」

「……黙れ……黙れ黙れ黙れえええ!!……テンドウさんを、オレの師匠を返しやがれえ!!」

「ザザザ……だから今言っただろう……二兎とも取れない……そもそもオーマジオウさえ手に入れば汝は用済み、これからだ。これからが楽しみだ!!……ザザザ」

ザザザ……………

ザザザ……………

ザザザザザザザザザザザザザザザザ
!!!!!!

いくらトウエンティが怒ろうがもう取り戻すことはできない。

オプシディアンは最後、高笑いを繰り返しながら、黒い靄へと姿を変え、この場から、トウエンティの目の前から消えていく……………

せつかく恋人であるカナが救う道が得られたと言うのに、今度は大事な師匠が自分の

目の前から消え去ったのだ……………

「テンドウさん……………テンドウさアアアーン!!!」

悲しき戦士、トウエンティの咆哮が巨大な城内にこだました。その手に残されたのはオーマジオウの残滓、己と今まで戦って来たジオウのカードのみ……………

そして、悲しみの連鎖は続いていく……………

それをまだトウエンティはもちろんの事、アスラ達もまだ知らない……………

56コア 「三大スピリットを統べる者ウィル」

ここは三王塔。王国の中心に象徴として聳え立つその中には本来、3人の三王とこの国で一番強いカードバトラー、頂点王が挑戦者を待ち構えている。

が、今回に限ればその中にいるのは頂点王のシイナのみ。「むえ」としか話せないオレンジ色の犬みたいな生き物、ムエと一緒に留守番中だ。

「うーうーむ。暇だ、実に暇だ」

「むーえーむー」

デスクの上でそう言葉を漏らすシイナ。ムエはその膝の上で呑気に寝転がりながら共感するように鳴き声を上げた。

「てゆうか思ったんだけど、明日アスラとロンの誕生日じゃん。色々ごたついてすっかり忘れてた。エールちゃんも来週くらいに誕生日だし………何かプレゼントとして渡せるモノあったかな」

エールは兎も角、離れて暮らしていた事もあり、アスラとロンには全くプレゼントを渡していなかった……………

唸るように考えていると、ふと窓の外から景色が見えた。如何にももうすぐ雨が降りそうな黒雲が立ち込めていて……………

「……………なんか留守番飽きたし、みんなに傘でも届けに行こうかな」

「むえ!」??マジ!?

「よしよし、うん、そうしよう。暇だし、テンドウとエレンもいるからヤバイ事はないだろうけど、もしかしての可能性もあるしね」

傘立てから傘を取り出し、今にも現地に向かおうとするシイナ。エレンの忠告もあり、今回は出動できなかったが、今まさに合理的な理由を勝手に作り出し、それを無視しようとしているのだ。

「ムエも行く?」

「むえ」??いやいや

「なんだ行かないのか、留守番そんなに楽しい？」

ムエも連れて行こうとするシイナだが、ムエは短い首を横に振り、それを拒否。そしてシイナは支度を完全に終わると……………

「よし、んじや行きますか！…みんながピンチだったら久し振りにシイナお姉様は凄
いって事を知らしめてあげよう！！…ワハハハ！！」

「……………むえ」

扉を閉め、部屋から出て行くシイナ。ムエはその姿をただ見届ける事しかできなかつ
た……………

本当は止めなければならなかったと言うのに……………

決戦の時は来たのだ。

ライダーハンターズの主任であるウィルを拘束すべく、王国の頂点王、三王から選抜されたメンバーであるアスラ、ロン、エールの3人は彼らのアジトである廃墟と化した城の中を走っていた……………

「テンドウ……………1人で大丈夫かしら？」

走りながらエールがアスラに聞いた。

本来であればもう1人の三王であるエレンと共にテンドウはブラックフォースであるオブシディアンを討伐する予定であったのだが、同じくブラックフォースをその身に宿したフリソデの加入により、分断。

テンドウはたったの1人でオブシディアンを相手する事になったのだ。

「大丈夫だよ……………だってテンドウさんだぜ!!…オレの挑戦を受けてくれる前に誰かに負けたりはしねえよ！」

「……………そうね、そうよね!……………だってテンドウだもの」

「2人とも、通路が見えて来たぞ」

アスラの言葉に安堵するエール。ロンがそう言うと、長かった通路が終わり、1つの場所へと飛び出した。

そこにはその入り口以外の道はない。どうやらここで行き止まりのようだ。しかし、それは逆にゴールであるとも捉える事ができて……………

「……は……………」

「……は昔、罪人を裁く際に使用していた処刑場ですよ」

「……!!」

「ツ……………テメエ、ちよび髭シルクハット!!」

そこで3人を待ち構えていたのはシルクハットを被った紳士を装った詐欺師、ウイ
ル。

「いい加減その無粋なネーミングセンスで私の事を呼ぶのをやめたまえ、コモンのドブ
ネズミ」

「オレもドブネズミじゃねえ!!…アスラだ!!」

「オマエが第七の属性、黒、それを操るブラックフォースを蘇らせて何かを企んでるのはわかってている。無様に負けたくなかったら大人しく拘束されるんだな」

ロンがそう言うと、ウィルは苛立ったのか、わかりやすくその表情を歪めて……

「相変わらず、貧相で品のない餓鬼共だ………3人いるからと既にこの私に勝てる気になってる」

「アンタの力はブラックフォース達程じゃないんでしょ?……だつたら私たちで余裕よ!

……何てつたつて私たちには今まで努力で培つて来た力があるのだから!」

「………エール・オメガ。いい加減その顔も目障りだ………」

「ツー!?!」

エールの淡麗な顔に何か因縁でもあるのか、ウィルはどこか恨むような目で彼女を睨みつける。

今思えば彼はエールの顔を最初に会った時から知っていた……

その事ともあり、エールはウィルの言葉には違和感が拭えない。だが、それを聞くの

は彼を拘束してからでも十分。

「オマエ達の言う今まで培って来た力と言うのは高々一年程度のモノでしよう？……この私は、何年……何年間培って来たと思ってる！……目的を達成するために何年耐えて来たと思ってる!!」

ー!!

確かな信念と庄。アスラ達が三王や頂点王に託された想いで負けられないのと同じく、ウィルもまた負けられない理由があるようだ。

だが、それで王国が脅かされるのはどう考えても間違っている。だからこそ、アスラ達はウィルを倒すために前を向く……

「いいでしょう、3人でかかって来るといい!!……まとめて殺してあげます!」

……こちとらハナっからそのつもりだ!!

ウィルがそこまで言い切ると、彼を含めた4人は同時にBパッドを展開、己のデッキをスタンバイして行く。

そして……………

……………ゲートオープン、界放!!!

アスラ、ロン、エール、ウィルによる3対1のレイドバトルが幕を開ける。3人と言う人数に伴い、アスラ達3人の初期手札はそれぞれ1枚ずつでのスタートだ。一見不利に見えるが、ドローステップで3倍の数ドロースる事を踏まえると些か問題にはならない。

先行はウィル。未だに何がしたいのか、目的がなんなのかがハッキリしない彼のターンが幕を開ける……………

「ターン01」ウィル

「メインステップ、先ずはモビルスピリット、ガンダム・キュリオスを召喚」

ー【ガンダム・キュリオス】LV1（1）BP2000

「ヤツの新しいモビルスピリットか……」

「召喚時効果でコアを増やしてターンエンド。さあかかって来なさいムシケラ共」

手始めと言わんばかりにウイルが召喚したのはモビルスピリットキュリオス。その効果でコアを増やし、ターンがアスラ達同年代3人組に巡って来る。

「ターン02」アスラ&ロン&エール

「メインステップ!!…先ずは私から行くわ、創界神ネクサス、八神太一と石田ヤマトを配置!」

ー【八神太一】LV1

ー【石田ヤマト】LV1

大事な足場作りが欠かせない最序盤で先陣を切ったのはエックスの身分を持つオメ

ガ家の少女エール。

場には影響はないが、赤としても紫としても扱える安定の足場を配置する。

「それぞれの神託で八神太一に2つ、石田ヤマトに1つのコアを追加！」

「さらにバーストを伏せ、ターンエンド」

アスラ手札：2

ロン手札：1

エール手札：0

場：【八神太一太一】LV1(2)

【石田ヤマト】LV1(1)

バースト：【有】

ロンが守りの要、バーストカードをセットすると、3人のこのターンは幕を閉じる。

【ターン03】ウィル

「参りましょうか。ドローステップ時に手札にある仮面ライダーウオズの効果、この

カードを手元に置く事でドロ一枚数をプラス1枚、その後1枚破棄
 「出たなちよび髭シルクハットのライダースピリット」

ウィルは自身を選んだライダースピリット、ウオズの効果を活用。カードを手元に置き、その手札の質をより向上させた。

「メインステップ……ソウルコアを支払い、エイプウィップを召喚！」

ー【エイプウィップ〈R〉】LV1(1)BP1000

全高5、6mはあるモビルスピリット、キュリオスの横に出現したのは小さな猿型のスピリット、エイプウィップ。

しかし、小さいながらもその効果は強力なモノで……

「エイプウィップの召喚時効果、ボイドからコア1つをリザーブに……そしてソウルコアを支払っての召喚の場合、さらにトラッシュにコアを2つ追加」

エイプウィップの力で一気に合計コア数を3つ増やすウィル。不敵な笑みを浮かべつつ、今度はBパッド上にあるキュリオスのカードに手を伸ばし……………

「アタックステップ……………愚かな子供に力を見せつけてあげなさいキュリオス、効果でコア1つを自身に」

ウィルの指示に従い、手に持つ機関銃でアスラ達3人を射撃するモバイルスピリット、キュリオス。

前のターン、バーストのセットと創界神ネクサスの配置のみでそのターンを終えた彼らはその攻撃を守る手段はなくて……………

……………ライフで受ける!!

へライフ5?!4へアスラ&ロン&エール

声を合わせて攻撃を受け入れる宣言をした3人に撃ち放たれた弾丸。それは瞬く間にライフバリアを貫通。

だが、これまで幾度となく試練を乗り越えて来た3人は一切怯まない。このタイミングでソウルコアを使えない少年アスラが颯爽と手札にあるカードを切った。

「この瞬間、オレは!!…手札にある赤のマジックカード、ペネトレイトフレイムの効果を発揮!」

「?」

「トラッシュに赤一色のカードがあれば、ライフの減少時にノーコストで発揮できる!…今回はエールの創界神の神託で落とされたカードに赤一色のカードがあるため条件はクリアだぜ…:BP12000まで相手スピリットを好きなだけ破壊する!」

「!!」

「キュリオスとエイプウィップを焼き払え!」

アスラが発揮させたペネトレイトフレイムのカード。その影響で吹き荒れる豪快な炎がウィルのキュリオスとエイプウィップを焼き尽くしていった。

さらにカウンターだけには終わらない。今度はロンのバーストカードが反転する。

「ライフ減少後のバースト、絶甲氷盾…:ライフ1つを回復」

〈ライフ4??5〉アスラ&ロン&エール

すぐさま回復する3人のライフ。これでさっきの攻撃は差し引いてゼロ。それどころかスピリットを一掃された事で、一気にウィルが窮地に立たされた状況となった。

「どうだちよび髭ヤロウ!!」

「ふふ、そう来なくては……少しくらいできなくては余興にもならないからね、ターンエンド」

手札：3

バースト：【無】

手元：【仮面ライダーウオズ】

ウィルがこの程度は想定内と言わんばかりにターンを締めると、再びアスラ達3人のターンが巡って来る。

「ターン04」アスラ&ロン&エール

「メインステップ!!…つしやあ今度はオレの番だ!!」

「ええ行きなさいアスラ!!」

エールにも背中を押され、アスラが手札の2枚のカードを切り、それをBパッドに叩きつける。

「おお…オレはドラゴンヘッドと仮面ライダー龍騎をLV1ずつで召喚だ!」

1 「ドラゴンヘッド」 LV1 (1) BP1000

1 「仮面ライダー龍騎」 LV1 (1) BP5000

アスラが呼び出したのはいつもの布陣。

ドラゴンの頭部だけで活動続ける小さなスピリットドラゴンヘッドと、龍の影を纏う赤きライダースピリット龍騎が出現した。

「バーストをセット」

「アタックステップだ!!…行け龍騎！」

ロンが再びバーストを伏せると、アスラが召喚した龍騎で攻撃を仕掛けて行く。

スピリットの存在しないウィルの場。この攻撃はまともに受ける他ならない

………

ただしそれはセオリー通りではの話。

今の彼にセオリーなどと言った言葉は通用しない、それはアスラ達も今から彼が呼び出すスピリットを見る事で体感していく………

「そんな単調な攻撃がブラックフォースの御三方に力をお裾分けしてもらった私に届くわけがないでしょう？」

「力をお裾分け!？」

「今にわかる!!…フラッシュ、このスピリットカードの効果でコスト8以下のスピリットを手札に戻す!…失せなさいドラゴンヘッド！」

「!？」

ウィルはまたしても意味深な事をほざくと、手札にあるカード効果の発揮を宣言。

途端にアスラの場のドラゴンヘッドが粒子となり消え去って行く……………

「そして、この効果でスピリットを手札に出した時、コイツを2コストの召喚コストで呼びだす！」

発揮されたその強力な効果は単なる召喚条件に過ぎない。ウイルはさらにその後、発揮させたスピリットカードを己のBパッドに叩きつける……………

その今から呼び出されるスピリットはアスラ達からしたら驚愕しかできない稀有な存在。ウイルも口角を鋭く上げ、高らかに召喚を宣言する。

「進化の頂点に立つ新世界の神よ……今こそ愚かなる猿共に裁きの鉄槌を!!……仮面ライダーエボル ブラックホールフォーム、LV2で召喚！」

ー【仮面ライダーエボル ブラックホールフォーム】LV2 (2) BP10000

邪悪な黒い霧が現れたかと思うと、ゆつくりとそこから場へと足を踏み入れたのは、白いボディとこれでもかといふデイトール。仮面スピリットを名乗るには余りに

も禍々しいスピリット……その名をエボル。仮面ライダーエボル。

そして何より、ウィルが使用する2枚目のライダースピリットだ。本来であればそれは限りなく不可能に近い所業。アストラ達はそのスピリットの登場に驚きが隠せない。

「どう言う事なの!?!」

「に、2体目のライダースピリット!?!…アイツを選んだライダースピリットはウオズつて言うヤツじゃないのか!?!」

「フッフ……私はね、ブラックフォースの方々選ばれ、彼らから少しだけお力をいただいている。それ故に私もまだ半端ながら黒の力を扱えるに至っている。そして黒の力の前にライダースピリットの使用制限など無意味。君も2種のライダースピリットを扱える経験はありませんか?」

「!!」

ウィルはオニキスを除いたブラックフォース、オブシディアン、シャーマン、ヘタマイトの3人から力を授かっている。

そしてそんな彼の口から言い放たれる黒の力の効果の一部。ライダースピリットの1人1枚しか使えないと言う使用制限は黒の力で無効にできる。

アスラは今、何故自分がどちらかしか使えなかった龍騎とリュウガを両方従える事ができたのかを理解した。そしてエールもまた察して…………

「まさかオロチが紫のオメガ、メタルガルルモンを使えたのも…………」

「ええ、私とその黒の力を貸し与えたから。もつとも既に回収してますがね」

アスラ達と激闘を繰り広げた殺人鬼オロチ。彼は何故かオメガ家の中で選ばれた者しか使えないオメガのカードを使った。

その理由もまた黒の力。黒の力は全ての問題を解決する。

「素晴らしい力だよ黒の力は!!……これさえあれば世界は我が手のモノとなる!!」
「!!」

「龍騎のアタックをブロックしたまえエボル!……その効果でコア2つをリザーブに置き、消滅!……そしてこの効果で消滅したスピリットはトラッシュには行かず、ゲームから除外される!!」

「なに…………龍騎!!」

さり気なく己が野望を口にするウィル。

しかしアスラ達が気にする間もなく龍騎の目の前に新たなライダースピリット、エボルが出現。エボルは片手でブラックホール形成。龍騎はその中に吸い込まれ、たちまち消滅した。

通常破壊、消滅されたスピリットはトラッシュシュに送られる。しかしエボルの効果で消滅したスピリットは皆トラッシュシュではなく除外されてしまう。除外されたスピリットはもうこのバトル中に戻って来る事はない。

「クソ……おいちよび髭ヤロウ……世界を自分のモノにするってどう言う事だコノヤロー！」

「そのままの意味だよ……悲願の願いだった。私は一度この腐りきった世界を一から創り直す！」

「世界を……創り直す!?!」

「アスラ、ヤツの難しい話を間に受けるな。今はこのバトルに勝つ事だけを考えろ」

「ツ……ロン……ああそうだな……オレ達はこれでターンエンドだ！」

アスラ手札：1

ロン手札：1

エール手札：1

場：【八神太一】LV1（2）

【石田ヤマト】LV1（1）

バースト：【有】

ライダーハンターズのウィルは最早単なる化け物である。

お裾分けとは言え、黒の力を3種もその身に宿しているのだから……

オマケにその野望もまた壮大極まりない。今までとは違うスケールの大きさを実感するアスラ達であったが、どちらにせよバトルに負けられない事には変わりはない。

「ターン05」ウィル

「メインステップ、ソウルコアを支払い2体目のエイプウィップを召喚。効果で再びリザーブに1つ、トラッシュに2つのコアを追加」

1【エイプウィップへR】LV1（1）BP1000

前のターン、キュリオスと共に葬ったエイプウィップが再び出現。その効果でウィルはまたコアを増やす。

「アタックステップ、その開始時に仮面ライダーウオズの効果。コスト6以上のスピリット、エボルが存在するため、手元からノーコストで召喚」

1 【仮面ライダーウオズ】LV2 (3) BP8000

突如現れた黒い一反木綿が球体を形成すると、その中より、緑色が特徴の赤属性のライダースピリット、ウオズが姿を見せる。

そしてそれはアスラ達を倒さんとエボルと肩を並べ眼光を輝かせていて……………

「アタックステップは続行、行きなさい仮面ライダーエボル! ……そしてこのフラッシュタイミング、ウオズの効果。自身を疲労させてエボルのBPをプラス100000…オマエ達に1点のダメージだ」

1 【仮面ライダーウオズ】(回復?!!疲労)

ー【仮面ライダーエボル ブラックホールフォーム】BP100000??20000

……ぐあああああ!!

へライフ5??4へアスラ&ロン&エール

エボルに忠誠を誓うかのように膝を曲げるウオズ。その瞬間にエボルは体の底から力をみなぎらせ、アスラ達のライフは何故か1つ碎け散った。

「さあ、エボルの本命のアタックだ！」

「ライフで受ける!!」

へライフ4??3へアスラ&ロン&エール

気迫みなぎるエボルの拳の一撃が3人のライフを打ち砕く。一気に劣勢に立たされた彼らだが、その中で息を吹き返さと言わんばかりにバーストカードを反転させたのはアスラ最大のライバルロンだ。

「ライフ減少により、2枚目の絶甲氷盾を発動！」

「ツ……2枚目か」

「ライフ1つを回復。さらにコストを支払いアタックステップを終了させる」

〈ライフ3?!4〉アスラ&ロン&エール

瞬時に回復すると、ウィルのアタックステップを強制終了。いくら強力なスピリット達を従えている彼とて、これは受け入れなければならない。

「ターンエンド」

手札：2

場：【仮面ライダーエボル ブラックホールフォーム】LV2

【仮面ライダーウオズ】LV2

【エイプウィップ〈R〉】LV1

バースト：【無】

致し方なくそのターンをエンドとするウィル。だがこの程度はまだ計算のうちなのか、彼の余裕のある表情は一切綻びがない。

そしてターンが巡って来る直前、ロンがアスラとエールに対して口を開き……

「次はオレが行くぞ、アスラ、エール……オレがこのクソ喰らえな流れを変える」

「おうよ……行けロン！」

「このターンは任せたわ」

「フッフ……スーミ村のロン。いくら君がバトルの才能に秀でているからとて、この私に勝てるわけがないだろう？」

「オマエも強いスピリットを並べたくらいでいい気になるなよ……このバトル、勝つのはオレ達だ」

軽く啖呵を切った所で、ロンをメインとした同期組3人のターンが幕を開ける。

「ターン06」アスラ&ロン&エール

「メインステップ…転醒する仮面ライダーナイトを召喚！……効果で2枚のカードをド

ロー！」

ー【仮面ライダーナイト】LV3(4)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、ロンの生涯を分かち合った相棒である闇騎士、仮面ライダーナイトが出現。

特にこのナイトは強力な効果【転醒】を有した強い個体である。

「アタックステップ…：行け、仮面ライダーナイト!!…：アタック時効果【零転醒】!!…：手札にあるアドベントカード1枚を破棄する事で、ナイトはナイトサバイブへと昇華する

!!」

!!」

仮面ライダーナイトは一瞬にして武器を一新させる。それは腕に装備された青い盾。ナイトはさらに、ベルトよりカードを引き抜き、それをその青い盾のバイザー部に装填

………

………サバイブ!!

と言う音声が鳴り響き、仮面ライダーナイトは自身を強化した姿、仮面ライダーナイトサバイブへと昇華して見せる。

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3（4）BP12000

「ナイトサバイブの転醒事効果、相手はスピリット1体を指定。その後、指定されたスピリットとこのスピリット以外のスピリット全てを破壊する!」

「………私はエボルを指定」

「だったらそれ以外のスピリット、ウォズ、エイプウィップには消えてもらおう!」

聖剣を天高く突き上げるナイトサバイブ。するとそこを起点に所謂スーパーセルと呼ばれる大竜巻が発生。ウィルの場に存在するウォズとエイプウィップはその中へと吸い込まれて行き消滅した。

「よし、これでアイツの場にブロッカーはいないぜ!」

「やっっちゃいなさいロン！」

「言われなくともそのつもりだ！……アタック続行、行けナイトサバイブ!!」

アスラとエールに背中を押され、ロンがナイトサバイブにそう指示を送ると、ナイトサバイブは仮面の奥に挟ませる青い眼光を輝かせる。

未だライフ無傷のウィルの場へと攻め込もうとした……

しかしその直後だった……

ウィルがこのタイミングでたった2枚の手札から1枚を取り出してBパッドへと置いたのは……

「スピリットが破壊された事で手札にあるこのモビルスピリット、アルケーガンダムを1コスト支払い、LV3で召喚！」

「ツ……シスイ・メイキヨウのカード……やはりデッキに投入してたか」

―【アルケーガンダム】LV3（5）BP15000

ナイトサバイブの行く道に立ちはだかるのは彗星の如く現れた強力なモビルスピ

リットアルケーガンダム。

ミラーワールド事件にて、その時間の発端となった男シスイ・メイキヨウからウイルが略奪したカード。

それに唯一対面したロンはその強さを身を持って持つて体感している。

「アルケーガンダム、ブロックを」

「くっ……………」

大剣を振り、ナイトサバイブに襲いかかるアルケーガンダム。ナイトサバイブも聖剣で応戦するものの、体格差もありジリジリと押されていく。

「アルケーガンダムのBPは15000。対するナイトサバイブのBPは12000
……勝負ありましたね！」

「いやまだだ……フラッシュマジック、ソードベント！」

「!!」

「効果でこのターンの間ナイトサバイブのBPを5000上げ、仮面ライダーエボルのコアを2個取り除く。よってエボルは消滅、さらにナイトサバイブは自身の効果でアド

ベントカードを使用した時回復する！」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）BP12000??17000

ー【仮面ライダーエボルブラックホールフォーム】（2??0）消滅

起死回生とも呼べるロンの一手。効果により息を吹き返したナイトサバイブはアルケーガンダムを強引に振り払い、紫の斬撃をその聖剣より放つ。それに飲み込まれたエボルは敢えなく消滅。

そしてアルケーガンダムもまた……………

「オレの……………いやオレ達の勝ちだ!!……………いい加減倒れる!!」
「ー！」

極限まで風の力を溜め込んだ聖剣の刺突がアルケーガンダムに突き刺さる。鋼の体は凄まじい速度で風化し、たちまちこの場から消え失せる。

アルケーガンダムとエボルが今のウィルの最強カードであると予想していたアスラとエールもここでガッツポーズ。

だが……………

「スピリットが破壊された事により手札のアルケーガンダムの効果、これを召喚」
「なに……………2体目だど!?!」

ー【アルケーガンダム】LV3(5)BP15000

その破壊が又してもトリガーとなり、2体目のアルケーガンダムがナイトサバイブの前に姿を見せる。

BPそのモノはソードベントによりナイトサバイブが勝っているが、アルケーガンダムの効果を考慮するとブロッカーに残すしかない。

「……………ターンエンド」

アスラ手札：2

ロン手札：1

エール手札：2

場：【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3

【八神太一】LV1 (2)

【石田ヤマト】LV1 (1)

バースト：【無】

「いい加減倒れるだど？……それはこちらのセリフだ。特にスーミ村のアスラ。特にオブシディアン様の命令により、貴様だけは確実にここで息の根を止めなければならぬ」

「ツ……オブシディアンつてトウエンテイの体に乗っ取ったブラックフォースの事か!? ……なんでそんなヤツがオレの命狙ってんだよ」

「そんな事知らん。いや聞く必要もない。オブシディアン様は私に知恵と力を与えてくたさった神にも等しい存在。彼がやれと言ったら私はそれを実行するのみ」

オブシディアンはウィルに「アスラを殺せ」と命令しているようだ。

それ即ち、『オブシディアンはアスラを恐れている』……

とも考えられるが、今得られている情報だけでは余りピンとは来ない。

そしてそんな中、ウィルがアスラ達3人を仕留めるべく本格的に動き出して……

「ターン07」ウィル

「メインステップ……マジック、フォースブライトドロワー……効果で手札が4枚になるまでドロウを行える。今の私の手札は0枚、よって4枚のカードをドロウ」

アルケーガンダムが生き残ったウィルの盤面。それに伴い失ってしまった手札を補うべく、ウィルはフォースブライトドロウで可能な限り手札を増やした。

「成長期のデジタルスピリット、ハックモンを召喚！」

ー【ハックモン】LV2(2)BP5000

「ツ……今度はデジタルスピリットか」

ゴーグルや赤いマントと言った装備を着用した白い小さな竜の姿をした成長期のデジタルスピリット、ハックモンを召喚するウィル。

今までのカード同様にこれも当然破格の効果を持っていて……

「召喚時効果、デッキから5枚オープンし、その中の対象カードを手札に加える!……ふふ、私は究極体『ジエスモン』『ケルビモン(悪)』のカードを手札に加え、さらにオープンされた『アルテミックシールド』の効果、白のカード効果でオープンされたこのカードもまた手札へと加わります」

たった1枚のカードで3枚ものカードを回収するハックモン。これでさつきまで0枚だったウィルの手札は6枚となる。

そしてまだ彼の展開は止まらなくて……

「バーストをセット、そして【煌臨】を發揮、対象はハックモン!……この時、ハックモンの効果、ボイドからコア3つを追加」

白き光がハックモンへと集約されて行く。ハックモンはその中で姿形を大きく変換させて行き……

「現れよ白き騎士、白き究極体ジエスモン!!」

Ⅰ【ジエスモン】LV3(5) BPl4000

やがてその白き光を解き放ち場へと姿を見せたのは白い鎧に手足が剣となっている究極体のデジタルスピリット、ジエスモン。

その周囲にはオレンジ色の4つのオーラが存在しており、よりその異端さを際立たせている。

「さあお待ちかねのアタックスステップだ。行きなさいアルケーガンダムー!」

アルケーガンダムとジエスモン。2体の強力なスピリットを従えたウィルはここでアタックスステップを仕掛ける。

その声に応じてモビルスピリット、アルケーガンダムが低空飛行で駆け抜ける。狙うは当然アスラ達3人のライフ。ウィルはアルケーガンダムの強力な性能で一気に勝負をつける気であるようだ。

しかし、この程度で3人が諦めるわけではない。

この攻撃を止めるべく、手札の1枚を引き抜いたのは他でもない、エックスのオメガ家、エール・オメガだった。

「フラッシュ【煌臨】を發揮！……対象はナイトサバイブ！」

「ッ……なに!？」

ロンのナイトサバイブを煌臨対象とするエール。その行為にウィルは驚く反面、アスラとロンは「来たか」と言わんばかりにニヤリと口角を上げる。

今こそ大反撃の狼煙だ。エールは自身の持つ絆のカードをBパッドへと叩きつけて

……

「アグモン・勇気の絆を煌臨!!」

ー【アグモンー勇気の絆ー】LV2（4）BP15000

足元から吹き荒れる炎に身を包まれて行くロンのナイトサバイブ。その中で姿形を大きく変換させると、中より炎を吹き飛ばしながら現れたのはアグモン・勇気の絆。

エールの才能と努力が実り、誕生した新しい赤属性の究極体である。

当然ながらウィルはこのカードの情報は知らなくて……

「何だこのデジタルスピリットは……これもオメガのカードであると言うのか?！」

「ええそうよ。これはアスラやみんなと一緒に育んで来た絆の象徴。アンタみまいなヤツには負けないわ」

「くっ……母親譲りの才能か、忌々しい」

「煌臨アタック時効果。BP15000以下のスピリット、アルケーガンダムを破壊!

……レッドドリーマー!!」

「!!」

炎を纏わせた両拳を前方に突き出し、螺旋の炎を放つ勇気の絆。それに逃れる術はなく、アルケーガンダムは鋼鉄の体をそれに貫かれ、堪らず爆散してしまった。

しかし、攻撃の起点となったアルケーガンダムを失っても尚、ウィルの攻撃は衰える事を知らず……

「ジエスモンでアタック。その効果で勇気の絆を手札に戻す!」

「!」

同じく究極体のデジタルスピリット、ジエスモンの両腕の刃から放たれる白い斬撃波。それが勇気の絆を斬り裂き、粒子化させる。

勇気の絆のカードはエールの手札へ、その煌臨元となっていた仮面ライダーナイトのカードはロンの手札へとそれぞれ帰還して行った。

「ジエスモンのアタックはライフで受けるわ……………ッ」

へライフ4??3へアスラ&ロン&エール

堂々とライフで受ける宣言をするエール。ジエスモンの両刃がまるで紙切れのように3人のライフバリアを切り刻んだ。

だがそれでも尚彼らに決めてとなるほどのダメージは負わせられず……………

「ターンエンド……………しぶとい。しぶと過ぎる……………腹立たしい。こっちは世界三大スピリットを従え、デッキのカードパワーを底上げしていると言うのに、何故早々に勝てないのです……………」

手札：4

場：【ジエスモン】 LV3

バースト：【有】

「やいやアアアいちよび髭シルクハット!!……ずっと気になってんだけど、オマエひよつとして黒の力で世界を創り直すとか意味わかんねえ事しようとしてんのか!?!」

「!」

ウイルの苛々が募る中、アスラが彼に聞いた。これまでの話を総合して何となく導き出した質問である。

「……君にしては鋭いじゃないか。そうだよ。具体的にはこの黒き力で一度世界をリセットする……そしてそこから新しい世界を創造してやり直す。私は新世界の神となるのだ」

「世界をリセットって……そんな事できるわけ……」

「いやできるのさ。ブラックフォースが4人揃えばね」

今まで語られていなかったウイルの大いなる野望。

それはこの世界のリセット。一から全てをやり直そうと言うのだ。このバトルの中で3人もなんとやくそれを察していたものの、改めて口に出して言われてみると実感が湧かない。

「黒の力って……カードが進化したり、強くなったりするだけじゃねえのかよ」

「バトルスピリッツ第七の属性『黒』……大昔に多くの生物から恐れられた。そのため、神はそれを扱うブラックフォースごと黒の世界と名付けられた世界に閉じ込めた。私の言ってる意味、わかるかな？」

「……………つまり、それ程力が強かったって事……!?……………それこそ世界を変えてしまうような……………」

「その通り。流石エックスの令嬢。頭のできがいいですね」

アスラ達も図書館の借りた本でその物語は知っている。実話かは定かではないが、ブラックフォースそのものは確かに存在するため、ウィルの話も嘘だとは断定できない。

しかし、アスラはこれまでのウィルの話し方から、なんとなく彼がウソやハツタリではなく、本気で世界を創り変えようとしているのを察して……………

「でもブラックフォースが4人全員必要なんだろ?……1人はこのオレの中にいるぜ。なんでいるかは知らんけど」

「ああ、裏切り者のオニキスか……そうだね、彼が私に協力してくれるわけがない……そう。だからこそ私は……貰ったんだ、黒属性の力を……5番目のブラックフォースになるために……!」

「な……オマエがブラックフォースに!」

「ふふ……まだ不完全ですがね」

驚きの連続。止まらないウィルの告白。

そうだ。オニキスがいないければブラックフォースは世界をリセットする事はできない。だからこそウィルは黒属性の力を分けてもらい、これまで他のブラックフォース達の復活や己の力を増大させる事に尽力を尽くしていた。

「ふざけんな!!……そんな事のためにトウエンティにライダー狩りやらせてたのかよ!!」

「もう御託はいいでしょう。さっさとターンを始めなさいムシケラ共よ……そしていい加減世界をリセットさせてくれ……」

……そんな事させるわけないだろ！！！！

疲れたように言葉を告げるウィル。それに反発するように3人が絶叫しながらターンを開始させて行く……

「ターン08」アスラ&ロン&エール

「メインステップ！……先ずはアグモンを召喚！」

1「アグモン」LV2(3)BP5000

赤のオメガ、その最初の姿とも言える小さな恐竜のスピリット、アグモンを召喚するエール。創界神である八神太一と石田ヤマトにもそれぞれコアが増える。

さらにエールはそれを消費し、横にいるアスラをサポートして行く。

「八神太一の【神技】！……コア3個をボイドに置き、このターン中BP破壊の上限を5000上げ、カードを1枚ドロウ！！……そしてこのドロウ効果の対象はアスラ！！」

「!」

「見せてあげなさいバカスラー!…アンタの引きの強さを!…ソウルコアが無くても勝てるって事を!」

「おう!…行くぜ、ドロー!!」

エールの創界神ネクサス、八神太一の効果により全力でカードをドローするアスラ。そして当然それはこの場面において間違ひなく最高のカード。

手札から引き抜き、その名を叫ぶ……

「ドラゴンヘッドを召喚、そして黒の力を呼び起こせ!!…仮面ライダーリュウガも召喚だアアア!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【仮面ライダーリュウガ】LV2(3)BP10000

いつものドラゴンヘッドが宙を舞い現れると、地上では様々な鏡像が重なり合っている、黒い龍騎、リュウガがこの場へと出現する。

「……………出たな。黒き力……………やはり少しだけ扱えるようになっていたか……………」
 「リュウガの召喚時効果で相手スピリット全てのコアを2個ずつリザーブに！」
 「！」

ー【ジエスモン】（5??3）LV3??2

登場するなりリュウガの眼光が邪悪に輝く。するとたちまちジエスモンの体内からコアが弾け飛んでいき、そのLVは降格する。

「アタックステップ!!…………リュウガでアタック！」

アスラの指示により、颯爽と飛びかかって行くリュウガ。狙うは当然ながら未だに削られていないウィルの残り5つのライフであるが……………
 その攻撃は彼のバーストを反応させるモノであり……………

「愚かな……………私のバーストにはこれがある事を忘れたか!!…………アタックによりバースト、

ケルビモン・悪!!」

「!!」

「効果によりこれを召喚!」

1【ケルビモン(悪)】(7) BP20000

バーストが反転すると共に闇の塊で密閉された球体がウイルの場に現れたかと思えば、そこからこの世のモノとは思えない程残忍な顔つきをした究極体のデジタルスピリット、ケルビモン・悪が姿を見せる。

これはウイルがテンドウとバトルをした際にも見せたカード。アスラとエールがその強力な効果を知らないわけがなくて……

「召喚時効果……相手スピリット1体のBPをマイナス10000!!……よってドラゴンヘッドを射抜く!」

「!」

1【ドラゴンヘッド】BP10000??0

ケルビモンより放たれる稲妻の槍が上空のドラゴンヘッドを射抜く。堪らず爆散してしまおうドラゴンヘッド。

そんなモノに目もくれず、ケルビモンはアタック中であるが故にこちらに向かってくる仮面ライダーリュウガを睨みつけて……………

「ケルビモンのBPは20000……その程度の黒き力では太刀打ちできまい！」

ここでのウィルの判断は当然ブロックの模様。

そもそのもののスペックの相性もさることながら、アスラの持つリュウガではケルビモンを討つ事は決してできない。

ただし、アスラのみでの話ではあるが……………

……………フラッシュタイミング!!

……………煌臨を發揮!!

「なに?!……………2人同時に煌臨だと?!」

その時、アスラの両サイドにいるエールとロンの2人が叫んだ。アスラと共に戦い抜いて来た2人はそれぞれ煌臨の効果を起こさせたのだ。

「アグモンを対象に勇気の絆を……」

「リュウガを対象にナイトサバイブを……」

……………煌臨!!

ー【アグモンー勇気の絆】LV2 (3) BP15000

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV2 (3) BP14000

アグモンとリュウガの姿がみるみるうちに変化して行く。アグモンは前のターンに手札に戻された究極の姿、勇気の絆になり、そしてリュウガは闇夜の騎士、仮面ライダーナイトサバイブへと昇華を果たしてみせた。

その煌臨はさながらアスラが2人にバトンタッチしたかのよう……………

「勇気の絆はライフが3以下の時、アグモンにソウルコアを使わずに煌臨できる」

「頼んだぜ2人とも！」

「当然だ……ナイトの煌臨時、ジエスモンのコアをさらに2個トラッシュに送る！」

「！」

1【ジエスモン】(3??1) LV2??1

ナイトサバイブの聖剣から放たれる疾風の斬撃がジエスモンを斬り裂き、その体内にあるコアを2つ弾き飛ばして見せる。

そして次はエールの勇気の絆だ。

「勇気の絆、煌臨アタック時効果……BP15000以下のスピリット1体を破壊する！」

「馬鹿め、ケルビモンのBPは20000!……最早破壊できるスピリットなどいないのですよ！」

「馬鹿はアンタよ……八神太一の【神技】の効果でこのターン中のみBP破壊の上限を5000上げている！」

「な……………」

「つまり15000以下ではなく、代わりに20000以下のスピリットを破壊!!……
撃ち抜け、レッドリーマー!!」

勇気の絆の両拳から放たれる螺旋状の炎。ケルビモンはそれに対抗するように暗黒の力を広げてバリアを形成するが、その炎はそれを容易く照らし、ケルビモンの体ごと貫いて見せる。

堪らず爆散するケルビモン。その爆煙の中ウイルのライフを突き進んで来たのはアタック中のリュウガに煌臨してみせたナイトサバイブだ。

「ナイトサバイブのフラッシュ効果、ターンに一度デッキ上から3枚のカードを破棄して回復!」

「そして創界神ネクサス、石田ヤマトの【神技】でコア3個以下のジエスモンを破壊!」
「!!」

―【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

コアが減り、ダメージこそ負っているが、唯一残ったジエスモン。しかしそれもエールの創界神ネクサスである石田ヤマトの効果により粒子化し、消滅して行く。

3人の息のあった連携攻撃によりブロッカーを失ったウィルは舌打ちをしながら手札のカードを引き抜いて……

「チ……フラッシュマジック、アルテミックシールド……このバトルがアタックステップの終了となる」

「だがナイトサバイブは止まらない!!…斬り裂け!!」

前のターンに手札へと加えていた白の防御マジック、アルテミックシールド。これにより、このバトルのみでアタックステップを終わらせる事ができるが………
今まで嫌っていたライフの減少を受け入れなければならなくて………

「ライフで受ける………ッ」

〈ライフ5?4〉ウィル

遂にその鉄壁が崩壊する。ナイトサバイブの聖剣による一撃はウィルのライフバリ
ア1つを紙切れのように斬り裂いた。

「ターンエンド!!…どうだちよび髭ヤロウ!!…これがオレ達の方だ!!」

「アスラ、オマエは何もしてないだろ?」

「同感。コモンのバカスラのクセに」

「なんか扱い酷い!!」

アスラ手札：2

ロン手札：2

エール手札：3

場：【仮面ライダークnightサバイブ】LV2

【アグモン―勇気の絆―】LV2

【八神太一】LV1

【石田ヤマト】LV1

バースト：【無】

アルテミックシールドの効果でアタックステップが終了して行く中、アスラが誇らし

げに叫ぶ。

それに欠かさず罵るロンとエールの2人だが、それはアスラだからこそ言える事。彼らの絆の強さを表している会話であると言える。

しかし、その緊張感がなく、幸せそうな様子もまたウィルを苛立たせる理由になって
 ……………

「全く、高々ライフを一つ破壊できたくらいではしやいで……………これだから子供や身分の低いゴミは嫌いなんだ……………弱いクセに、未来を見据えているかのように勝手に戯言を口にする……………そんな事、いくら頑張ってもできやしないのにね」

「ー」

「遊びは終わりだ……………ここからは本気の中の本気……………シャーマン様、ヘタマイト様、そしてオブシディアン様よりいただいたこの黒き力を解き放つー」

「ツ……………目が……………黒く!？」

これまでの己の大きな夢や野望に向かってガムシヤラに突き進んでいくアスラ達の行動は、どういう訳か、ウィルにとっては感に触るよう……………

苛立ちがピークを迎えたその時、今まではずっと手を抜いていたのか、彼のデッキか

らは黒い光がこれでもかと鈍く光り、ウィルの白眼までもが黒に染まって行く……
 その禍々しが過ぎる姿は最早人間と呼べるモノではない……………

禁忌の力に手を染めた、悪魔に近い……………

そしてその人智を軽く凌駕した彼の力が本格的に3人を襲う……………

「ターン09」ウィル

「メインステップ、先ずはシキツル3体を連続召喚、効果で合計3枚のカードをドロ
 ー！」

ー【シキツル】LV1(1)BP1000
 ー【シキツル】LV1(1)BP1000
 ー【シキツル】LV1(1)BP1000

現れたのは折り紙の鶴のようなスピリット、シキツル。ドローができるだけの単なる弱小カードではあるが、そのドローがウィルに力を与えて……………

「さらにネクサス、百識の谷を配置」

ー【百識の谷〈R〉】LV1

ここに来てようやくウィルもネクサスカードを配置。背後に深い谷底が見える巨大な谷が出現した。

そして、その後も手札を1枚引き抜くと……………

人智を超えたスピリットをまたしても召喚する……………

「死をも恐れぬ勇者よ……………今こそ輪廻を超越し、永遠の恐怖を知らしめよ……………仮面ライダーエターナル、LV2でここに！」

「!!」

ー【仮面ライダーエターナル】LV2(2)BP10000

……………エターナル!!

そう言う機械音声が鳴り響くと、まるで地獄からの死者でも現れたかのように風と共に姿を見せたのは白い装甲を見に纏う紫属性のライダースピリット……………

……………その名もエターナル。今までウィルが召喚して来たウオズやエボルと比べてエターナルはかなりこじんまりとしているが、その体から溢れ出てくる威圧感はまだモノではない事を3人に認識させたいく……………

「ここにきて3体目のライダースピリット……………」

「いいねこの力、最高じゃないか……………今なら何が相手でも負ける気がしないよ……………無論、世界もね!!……………バーストを伏せてアタックステップ、エターナルでアタック!」

早速試すようにエターナルに攻撃の指示を送るウィル。その強烈な効果が彼ら3人に牙を剥いていく。

「エターナルのアタック時効果、まずはシキツルを破壊して2枚ドロウ、紫のシンボルを1つ追加!」

3体いるうちの1体のシキツルが消滅。しかしそれはエターナルの糧となり、その力をより大きなモノへと増大させる。

そしてまだ別途でアタック時効果を有して………

「さらにエターナルの効果、トラッシュにあるスピリットカード1種類につき1つ、相手スピリットのコアをリザーブに戻す！」

「!!」

「今のスピリットカードの種類は9種類、よってオマエ達のスピリット全てのコアを消し去り、消滅!!」

1 【仮面ライダーナイトサバイブ】(3??0) 消滅

1 【アグモンー勇気の絆】(3??0) 消滅

短剣を手に握りしめ、飛び交って行くエターナル。目にも止まらない早技で勇気の絆とナイトサバイブを斬り刻んで爆散に追い込んだ。強大な2体のスピリットをあつという間に倒してしまうその姿は正に狂気そのモノであると言える。

そしてこれでアスラ達のブロッカーはゼロ。オマケにエターナルはダブルシンボル

の上、シキツル2体のアタックもまだ残っている……

「ウソ……勇氣の絆とナイトサバイブが一瞬で……!？」

そう声を上げたのは他でもないエール。あれだけ苦勞して並べたエーススピリット達がたった1体のスピリットによりあっさり撃破されてしまったのだ、無理もない。

所謂絶体絶命の状況だ。このバトルの殆どを強力なスピリット達との戦闘に身を捧げ続けたアスラ達3人の手札はもう限界、エターナルを倒す手段などもう残っていないのだ……

「今までオマエ達が築き上げて来たモノなど所詮はそれっぽっちの些細なモノであったと言う事ですよ。己が強くなれると過信し、自惚れ続けた結果がこの敗北だ、諦めるんだな」

迫り来るエターナル。それは正しく絶望への道のみであると言えるが……

ウイルがふと顔を伺ってみると、3人はまだ諦めてはいないような真剣な表情を見せていて……

ロンとエールに関して言えば、昔だったらとつくの昔に諦めていた事だろう。アスラがいた事で2人は大きく変わった。どこまでもソウルコアが使えない自分の価値を信じ続け、曲げずに前を向いて来た彼が居たからこそ、2人もまたアスラ同様に諦めない………

その様子がウィルのはらわたを煮えくり返す………

ああ、目障りだなあ………

キモいなあ………

鬱陶しいなあ………

ありもしない希望にしがみつこうとしているその目が………

最後まで喰らいつこうとするその口元が………

手札を強く握るその指先が………

結果はもうどう足掻いても変わらない!!!

オマエ達は今から負けて死ぬ!!!

いい加減絶望しろよ、私にこうべを垂れろよ!!!

淡い期待を持つとうとするな、オマエ達のそう言うところがずっと嫌いだったんだ

よおおお!!

発狂するように叫び倒すウィル。今までどれ程までに怒りを我慢をし、計画を進めて来ていたのかがわかる……………

「チツ……………ここまで来て……………」

「諦めない。だって約束したんだもの、絶対に勝つて……………」

「ロン、エール……………」

一方で内心ではもうアタックを仕掛けられれば負けてしまう事はわかっているのか、諦めない心に反して弱音を吐いてしまうロンとエール。

2人のそんな様子や、1人最強のブラックフォースに挑んだテンドウ、足止めを勝手にしてくれたエレンの事を思い出して、アスラはある決断をする……………

……………おい、聞いてるんだろ?……………このバトルも見てるんだろ?……………

オニキス!!!

一度瞳を閉じ、心の中でその名を呼ぶと、アスラは誰かのイメージの中に吸い込まれたかの如く、精神のみが暗闇の中へと移動していた。

無論、彼をそこに連れ出して来たのは他でもない、ブラックフォースのオニキス。それらしき黒い龍がその中を飛び回っている。今まで何度も見て来た光景だ。

「オニキス……………」

「ゼゼゼ……………どうしたアリンコ。またオレの力が欲しいとおねだりする気か?……………そりやそうだよな。あのちよび髭が言ってた通り、黒属性に勝つには黒属性を使うしかない。ライダースピリットも黒の力の前では紙切れも同然だ」

黒の力に勝てるのは黒のみ……………

ここにきて初めて得られた情報。アスラとて、何故か使えるようになった黒の力、リュウガを使ったが、その力が弱いからか、ロン、エールと力を合わせてもまるで歯が立たなかった……………

だからこそ、それがもつと欲しい……………

「正直、また借りてえ……………このバトル、負けるわけにはいかねえんだ。でもその前にオマエ、なんで他のブラックフォース達を憎んでんだ？」

「!!」

「この間、イセカイって場所であつたブラックフォースにスゲエ怒りをぶつけてたよな……………オマエも何か理由があるんだろ？……………オレの中にいないといけねえ理由が」

「黙れ……………オマエがオレに質問するな」

アスラからの意外な質問にオニキスは拒絶するように拒んでいく。

異世界での戦いで流れて来たオニキスの憎しみと怒りと悲しみの感情。それがアスラにとっては忘れられなかった。だから一度こうして聞いてみたかったのだ……………

「オレはいつか、オマエの心の中にワダカマリってヤツも取っ払ってやりてえと思ってる……………でもその前に先ずはこのバトルに勝たなきゃいけねえ……………オマエだけじゃねえ、ロンやエール。今まで出会って来た、ソウルコアを使えないこんなオレでも受け入れてくれた大事な人たちを守るために力を貸してくれ!!……………そのためなら、オレの腕

の一本や2本、足だつてオマエにくれてやる!!」
「……………」

確かな決意。死をも恐れない覚悟。

だが、言われるまでもなく、アスラにその心意気が最初からある事をオニキスは知っている。なんと云つてもアスラは……………」

「ウゼエ……………ウザすぎんだろオマエ。まあいい、どちらにせよオマエにここで死んでもらつたら困る……………貸してやろうじゃねえか……………オレの黒の力をな……………!」

「ツ……………!!」

……………

「!!」

気がつくつと、アスラは元の場所に戻っていた。かと言つて状況が変わるわけもなく、ウイルにトドメを刺される事に変更はない……………」

だが、その絶望的な状況を希望に変えるためにブラックフォースのオニキスと交渉して来たのだ。播らぐことのないアスラのバトルスピリッツがこの状況を一変させる
.....

「くたばれ……ゴミ共がアアアア!!!」

「フラッシュマジック、フレイムスパーク!!」

「!!」

「効果でBP5000までスピリットを好きにだけ破壊、2体のシキツルを破壊だ!」

希望のマジックフレイムスパーク。稲妻纏った炎がシキツル達を巻き込んでいき散らせて行く。これによりウィルの場にはエターナルだけが残った。

しかし、一先ずこのターンの敗北はないものの、エターナルがいる限りアスラ達の不利は続く……

それが故にアスラは……

「フレイムスパークの更なる効果、破壊に成功した時、トラッシュからスピリットを手札に呼び戻す!」

「トラッシュシユからスピリットを?……フツ……またあのリュウガとか言うチンケな黒属性を復活させる気ですか?」

「いや……オレが対象に選ぶのは……」

エールのトラッシュシユにあるウオーグレイモンのカードだ!!

「え……」

「今だけ借りるぜエール!!」

フレイムスパークのスピリット回収効果。その対象はまさかのエールのトラッシュシユに落ちていたウオーグレイモンのカード。

確かに今はレイドバトル。ルール上、アスラのパートナーであるエールのトラッシュシユからスピリットを自分の手札に戻す事は可能だが……

「馬鹿が!!……ウオーグレイモンを戻してなんの意味がある?……貴様如きコモンで、ソウルコアも使えない愚かな薄汚い少年がオメガのカードを扱えるモノか!!」

「いやそれでいい……そうだろ、オニキス!!」

「ツ……オニキスって……」

「アスラオマエ……」

ウオーグレイモンのカードが手札へと戻って行く。その間にアスラがオニキスの名を口にした事で、ロンとエールは彼がオニキスの力を借りた事を悟る。

そしてアスラはオニキスからの助言を思い出しながら、ウオーグレイモンのカードを強く握って行く……

ー『ゼゼゼ……いいかアリンコ。この力は今までオマエに貸して来た力の10倍はある』

「ぐ、ぐおおおお!!!!」

ー!!!

アスラの右手に黒の力が集約して行く。その中で握られていたウオーグレイモンの

カードは赤から黒へと変色して行く。

その力こそ、紛う事なきオニキスの黒の力。リュウガが呼び出された時とは比べものにならないそれが今アスラの右手に宿っている。彼はその力に取り込まれそうになるも、なんとか力づくで御し、それをウォーグレイモンへと注ぎ続けている。

「『だが、黒の力を持つモノには常に代償が付き纏う。これだけの黒の力を使えばオマエが一番大事なモノを失うだろう。肝に銘じておけ……………』」

しかし代償もまた大きい。今度使えば龍騎やリュウガを使えなくなるだけではすまないかもしれない。本当に腕や足、オニキスに身体を奪われるかもしれない……………

これは一か八かの賭けだ……………
だがアスラは行く、このバトルに勝つために……………

「『後は勝ちやがれ、オブシディアンのヤツが育てて来た人間なんかには負けんじやねえぞ……………勝て、勝つためにオレはオマエの中にある事を忘れんな!』」

「ああそうだ……………勝つき。オレは絶対に諦めねえ……………みんなのために、そしてオレが頂

点王になるために!!」

そこまで言い切ると、その手に握られていたウォーグレイモンは最早完全に別のカードに変換。オニキスの力が込められたそのカードをアスラは全力でBパッドに叩きつけ、その名を叫ぶ……………

ソイツは絶望をも黒に染める!!

ブラックウォーグレイモン、召喚!!

どここらともなく、地を抉り、空を震撼させながら出現したその姿は紛う事なきウォーグレイモン。

しかし色が違う。

黒い……………

「ブラックウオーグレイモン」LV2(2) B P 1 0 0 0 0

「黒いウオーグレイモン……だと!？」

「オマエも黒の力でオロチにメタルガルモンを使わせたんだろ?……だつたらオレにも、いやオレとオニキスにも同じ事くらいできらあ……決着着けようぜちよび髭ヤロウ……今オレにできる事全部を詰め込んで、テメエに勝つてやらあ!!!」

未だ驚愕が隠せない他3人。それ程までにアスラが召喚したブラックウオーグレイモンが脅威なのだと言える。

登場するなり巨大な咆哮を上げるブラックウオーグレイモン。アタック中のエターナルと対峙する。

想像以上に壮絶を極める4人のバトル。それもいよいよ後半に差し掛かって行く。果たしてこのバトルスピリッツが齎すモノは善か、それとも悪か……

57コア 「ダブルドラゴン」

アスラ……………

オマエはオレと同じ場所に捨てられていた。そしてシイナの元で、コモンの民が集う、王国の隅っこ、スーミ村で兄弟同然に育てられた……………

シイナが頂点王になったあの日、オレ達2人も後を追うように必ず頂点王になると誓った。ソウルコアの無いオマエが直向きに努力を重ねるその姿はいつしかオレの中で励みになっていた……………

オマエは言う。身分やカードの力は関係ない。諦めないのが強さだと、諦めずに努力を重ねればいつかどんなヤツでも最強になれると……………

オレはそんなオマエを誇りに思っている。そして思った、絶対にオマエが追いつけないくらいの強さを持ったライバルになると……………

だが旅の途中、オレの正体は『アーサー家』

つまりエックスの身分を持つ者である事が発覚した。正直ショックだった。オレはオマエと同じではなかったのだから……………

だが、それはもう吹っ切れた。オマエの言う通り、身分など関係ないんだ。オレの兄

弟はオマエで、母親がシイナ・メザ。それだけで十分だ。そんなオマエだからこそ、エックスの身分を持つエールはオマエに寄り添うんだろうな。

しかし……………

未だに解せない事もある……………

それはオマエの正体……………

あの日、何故オマエはエックスの身分だったオレと一緒に捨てられた？

何故……………

オマエはたびたび悍ましい黒い力を操る……………!?

オマエがオレの兄弟には変わりはない。掛け替えの無い大事な存在だ……………

だからこそ尚更、オマエは一体何者なんだアスラ!?

……………

終盤を迎えたアスラ、ロン、エールとウィルの3対1のバトルスピリッツ。命をも賭けた激闘の中、対面するアスラが召喚した黒いウォーグレイモン、ブラックウォーグレ

イモンとウイルのライダースピリット、エターナル。

突如人智を超え、新たなライダースピリットを召喚したウイル。それに対抗すべく同じようにオニキスから力を借り、悍ましい程の黒き力を右手に宿したアスラ。

幼い頃からずっとアスラを見て来たロン。およそ半分程バケモノと化したアスラに、大きく内心を揺さぶられる……

「悍ましい黒い姿……これが私の、お母様の形見のウォーグレイモンなの……!？」

それはエールも同様、これまで幾度となく黒の力と関わりを持って来たが、今回の件は余りにも異常過ぎる。緊張感が蔓延るせいで口にする事さえできないが、本当にアスラは大丈夫なのかとどうしても勘繰ってしまう……

しかし、現状、己の最強カードを倒された2人は今のアスラに頼る事しかできないのがどうしても歯痒くて……

「その力……貴様まさかオニキスと交渉して力を?……フフ、だがブラックフォースにも力の序列がある。知っているか?……オニキスは4人いるブラックフォースの中でも最下位、つまり一番弱いと言う事。他の御三方から力を受け継いだこの私とその程度の

存在に負けるわけがない」

「……………言いたい事はそれだけかよ」

「!!」

「ブラックフォースの序列?…知らねーよそんなモン、今戦ってるのは、オマエとオレ達だ。オニキスでも、他のブラックフォースでもねえ!!…ブラックウオーグレイモンの召喚時効果発揮、BP12000以下のスピリット、エターナルを破壊!」

「なぐ!!」

ベラベラと口を動かすウィルを静かに黙らせると、アスラが召喚したばかりのブラックウオーグレイモンの効果を発揮させる。

ウオーグレイモンとは違い、赤い炎ではなく黒い炎を両掌で形成するブラックウオーグレイモンはそれをそのまま仮面ライダーエターナルへと投擲。それに直撃したエターナルは堪らず爆散した。

黒の力を操るブラックフォースの力の差。本来であれば、ウィルの言う通り、アスラの中にあるオニキスはその中の最も下に値する。だが、今度はアスラの言う通り、今戦ってるのはブラックフォースではなくアスラ達自身。ブラックウオーグレイモンのこの一撃はまるでそれを証明するかのような攻撃であって……………

「オニキスの力如きでエターナルを破壊しただと………ターンエンド」

手札：6

バースト：【有】

結果として場のカードを全て破壊され、バーストをただ一枚残してのターンエンドとなったウイル。しかし追い詰められているものの、その授かった黒き力は健在なのか、未だに白眼が黒く禍々しく染まっている。

そして次はオニキスの力を借りたアスラのターン。ブラックウオーグレイモンを起
点に攻めて行く………

「ターン12」アスラ&ロン&エール

「メインステップ!!………ネクサス、燃えさかる戦場を配置!」

┆【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

アスラ達の背後に轟々と燃えさかる炎。その力はアタックするスピリット達の力を上昇させる。

さらにターンを進めるアスラ。手札を引き抜き、新たな力を呼び出す。

「ブレイヴ、牙皇ケルベロードを召喚!!……ブラックウオーグレイモンと合体!……さらにLV3にアップ!」

「ツ……青のブレイヴ!?!」

ー【ブラックウオーグレイモン+牙皇ケルベロード】LV3(4)BP20000

現れたのは鉄のヘルムに黒き体を持つ獣、ケルベロード。現れるなり巨大な黒き翼の姿となりてブラックウオーグレイモンの背部に装着される。

より強力な合体スピリットとなったブラックウオーグレイモンはこれでもかと言わんばかりに強い咆哮を張り上げる……

「アタックステップ!……行け、ブラックウオーグレイモン!!……ケルベロードの合体時効果でオレのデッキを5枚破棄する事でターンに一回回復!」

「な……ダブルシンボルのスピリットを回復させると!?」

ー【ブラックウオーグレイモン+牙皇ケルベロード】（疲労??回復）

アスラのデッキが破棄されるものの、それはケルベロードの糧。ブラックウオーグレイモンは回復状態となり、このターン2回のアタックを可能にする。

ウイルの4つのライフを全て破壊するにはダブルシンボルの2回攻撃で余りにも十分である。

「打ち込め、ブラックウオーグレイモン!!」

「ライフで受ける!!……………ぐっ」

へライフ4??2へウイル

空を滑空し、鋭い鉤爪でウイルのライフを一気に2つ斬り裂くブラックウオーグレイモン。その強烈なダメージにウイルは初めて仰反る。

だが、この攻撃は彼のバーストの逆鱗に触れて……………

「ライフ減少によりバースト発動、選ばれし探索者アレックス！」

「！」

「効果で召喚し、アタックステップを強制終了。さらにコア1つを増やす！」

「なに……アタックステップを!?!」

ー【選ばれし探索者アレックス】LV2(2)BP8000

バーストが反転すると共に姿を現したのは紫色のフードを深く被った人型のスピリットアレックス。その効果でコアを増やしつつ、アスラのアタックステップ、及びブラックウオーグレイモンの追撃を不可能とした。

「クソ……ここまでやってまだ届かねえのかよ。ターンエンドだ」

アスラ手札：0

ロン手札：3

エール手札：4

場：【ブラックウオーグレイモン+牙皇ケルベロード】LV3

【八神太一】LV1

【石田ヤマト】LV1

【燃えさかる戦場へR】LV1

バースト：【無】

オニキスから借りた力を全開で使用して猛攻を仕掛けたアスラであったが、このターンは惜しくもトドメを刺せず……………

「……………アスラ……………今のアンタは本当にアンタなの……………!?!」

バケモノじみた力でウィルに対抗するアスラに対し、震えた声で小さくそう呟いたエール。

今まで幾度となく見て来たアスラ。しかし、今はその内に宿っている黒の力とやらで彼が彼自身ではなくなってしまうたのではないかと勘繰ってしまっていて……………

それ故にエールは怯えている。大好きなアスラを失う事に抵抗を覚えているのだ

……………

「……ブラックフォースの中で一番力が弱いオニキス……そんな雑魚の力で私のライフを傷つけるなど……許さない、許さないぞ……このゴミが!!」

すっかりロンとエールが置き去りになってしまったレイドバトル。実質アスラ対ウィルのバトルは再びウィルのターンで開始される……

アスラに対し、より強い怒りや憎しみを持ったウィルは己のターンを進めていく。勝つために、

そして第五のブラックフォースとなるために……

「ターン13」ウィル

「メインステップ!!…タمامツシュをLV2で召喚、効果でコアを2つ増やす」

1【タمامツシュ】LV2（6）BP5000

現れたのは玉虫型の緑のスピリットタمامツシュ。その効果でコアが2つ増える。そしてウィルは新たに手札へと手を掛ける……

「な、なんだコレは……」

「黒の力が集まってる!?!」

その行動だけで黒い瘴気が場を漂い始め、1つの巨大な核を形成していく。

ウイルは召喚する気なのだ。自分が召喚できる、最強にして最高、最悪のスピリットを……

驚愕するアスラ達だが、それを止める術はない。大人しくそれが現れるのを待つ事しかできなくて……

「時は満ちた……照覧あれ、紛いモノの世界を消し去れ……時の監視者ロンバルディア……LV2で召喚!」

「!」

┆【時の監視者ロンバルディア】LV2(6)BP14000

黒き核が弾け飛び、中より黒き屈強な身体、黄金の鎧も持ち合わせ、さらには背中に

生えた二頭の龍を従える強大なスピリットロンバルディアが姿を見せる……………

これまでのスピリット達とは訳が違う圧倒的な存在感と圧迫感を放つ。

これこそ、ウィルの最終兵器。この激闘の中黒の力で生まれた究極のエースカード。又はウィルそのモノの信念、執念の塊とも呼べる。

「ゾゾゾ……………これだこの力こそ、世界を破壊、創造する真の力……………この力がずっと欲しかったんだ私は!!」

「ゾゾゾってオマエ……………」

その身体からさらに強い黒の力が飛び出していくウィル。さらには笑い方までブラックフォース特有のモノに変化。

これら彼のブラックフォース化は確かに近づいていると言う事。もう彼は後戻りできない状態にまで黒の力をその身に侵食させている何よりの証拠。

「アタックステップ……………ロンバルディアでアタック。効果で最もコストの高い相手スピリット1体を破壊」

「な……………」

「じゃあ消えなさいブラックウオーグレイモン!!…さらに破壊に成功したロンバルディアはバトル中ブロックされない!」

ロンバルディアが支持をするように手を翳すと、背後の二頭の龍の首が伸びる。それはブラックウオーグレイモンの身体を食いちぎっていき、破壊、爆発に追い込んだ。

その際に合体していたケルベロードが逃げるように合体を分離させ生き残るが、ロンバルディアの効果でブロックもできなくて……

「そしてこれがロンバルディア本命のアタック!…さっさと受けろムシケラがアアアア!!」

「……ライフで、受ける!……ぐっ、ぐあ!!」

「アスリアアアア!!」

へライフ3??2へアスラ&ロン&エール

アスラにだけ向けられたその攻撃。ロンバルディアの拳、背中 of 龍達が1つのライフバリアを破壊し尽くす。

これまでとは比べモノにならないダメージに、アスラは思わず膝を突いてしまう。
だが……………

ウイルの猛攻はまだまだ終わらなくて……………

「まだまだ。まだオマエには苦痛を受けてもらうぞ!!…………ロンバルディアの【転醒】の効果
を發揮、進化を果たせロンバルディア!!」

「なに…………龍騎やナイトみたいに転醒まで使えるのか…………!?!」

スピリットをさらなる高みへと誘う効果【転醒】をも持ち合わせていたロンバルディア。
ア。ウイルがその効果の宣言をすると、再び黒き核にその身を包んでいき、進化の準備
を加速させていく……………

「あんなチンケなスピリットの転醒と一緒にするな……………全てを破壊する時の破壊者
……………その名もロンバルディア・Ω!!……………今こそ世界を破壊し、創造を!!」

「!!」

―【時の破壊者ロンバルディア・Ω】LV3(6)BP30000

黒き核から再び姿を現したロンバルディア。その姿は最早単なるバケモノ。より巨大化した肉体、黄金の翼、4本になった足。

ただでさえ敵わなかったロンバルディアが転醒によりさらに強くなったのだ。それが与える絶望感は半端なモノではない……

しかし、そのロンバルディア「Ω」と言う名前に反応したのは他でもないエールだ。

「ッ……………Ω!?……………ウソ、ひょっとしてそのカード、オメガのカードの力が入ってる……
!？」

ー!!

「よく気がつきましたね……………そう。これは黒の力と我が師であり、アナタの母親でもあるエレナ・オメガの紫のオメガの力が融合して生まれた力……………今までゆっくりとこの力を育てて来たんですよ」

「ッ……………お母様とアンタが師弟!？」

「!!」

サラツと衝撃の事実を告白するウィル。エールだけでなく、アスラとロンも驚愕に顔を歪ませる。

そう。ウィルとエールとエレンの母親であり元三王、エレナ・オメガは師弟の関係にあった。

「ゾゾゾ……あの人には何度も何度も私の思想を語った。この狂った世界を救うには一度リセットするしかない……共感して欲しかったが、いつも答えはNO。『破壊して何になる』といつも返答されたよ」

「そりやそうだろコノヤロー……テメエの方がよっぽど狂ってんだろ」

「ゾゾゾ……だから殺した。私が殺人鬼オロチを差し向けるように動かしただ」

「!!」

「死に掛けたらあの女、きつと必死に命乞いでもするのかと思っただけで楽しみにしてました……いやはや、本当に最後まで意味がわからない事ばかりほざいて笑いながら死んだ。ああ……思い出しただけでも腹立たしいよ」

手口までは定かではないものの、10年前、殺人鬼であるオロチをエレナに差し向け

たのは他でもないウィル。

エレナ殺害後にオロチをライダーハンターズに勧誘した事から、全ては彼が仕組んでいた事なのが窺える……………

「オマエが……………オマエがお母様を!!」

「ゾゾ……………おっと、誤解しないでください。私は一切の手を加えてませんよ。殺ったのは他でもないあのドブ汚いコモン、オロチだ」

当然の如く、怒り心頭に発するエール。無理もない。理不尽な理由で殺人鬼を差し向けられ、母親を殺害されてしまったのだと知ってしまったのだから……………

エールだけでなく、その気持ちを痛いほど理解しているアスラとロンもさらなる怒りで表情を歪ませている。

しかしウィルは……………

「私にとって、母親に似た君の可憐な顔はずっと目障りだった……………ゾゾゾ、だから今日ここで殺してあげますね?……………お仲間と一緒に、全部まとめて」

確かな殺意をエール、アスラ、ロンに向ける。その顔は最早人間ができるモノじゃない。ブラックフォースと言うバケモノになったからこそ言える言葉、できる表情である。

そして己のターンを終わらせる事なく、また進めていき……………

「ロンバルディア・Ωは転醒する際に効果で回復している。よって2度目の攻撃が可能だ。やりなさい!!」

「!」

「その効果で今度はケルベロードを粉碎!」

より強力になった双頭の龍がケルベロードを喰いちぎり喰らい尽くす。これでアスラ達3人のブロッカーは0。

「さらにロンバルディア・Ωは青と紫のダブルシンボル!!…オマエ達のライフも残り2つ!!…ゾゾゾ…さあ、塵と化せ!!」

「クツソ……………!!」

オニキスの黒き力を得ているアスラだが、最早その手札には打つ手立てが残っていない……

万事休すか。

しかしそう思われた直後……

声を荒げて手札のカードをBパッドに叩きつけたのは、今までずっと一緒に旅をして来たエールだった。

「フラッシュマジック、シーズグロリー!!…効果でタمامツシユのBPをマイナス7000して破壊!」

「!」

ー【タمامツシユ】BP5000??0（破壊）

正義の名の下に、眩い光がタمامツシユを包み込み、爆散させる。

そしてシーズグロリーの効果はまだ続き……

「この効果で破壊した時、シーズグロリーはブレイヴカード、ロンゴ・ミアスに転醒

する！……現れなさい！」

1【天醒槍ロンゴ・ミニアス】LV1(1)BP5000

天空より場へと突き刺さったのは全てを穿つ槍、ロンゴ・ミニアス。ブレイヴカードではあるものの、転醒した時の効果を備えていて……

「転醒時効果、このターン中、私達のライフはアタックによって1しか減らされない！」

「なに……」

「その攻撃はライフで受けるわ!!……ッ」

へライフ2??1アスラ&ロン&エール

転醒したロンゴミニアスが放つ聖なる光。それがアスラ達3人のライフバリアを包み込む。

ロンバルディア・Ωが背中の双頭の龍と拳で連続攻撃を叩き込むも、それは1つしか破壊されない。

「何弱気な顔してんのよアスラ……アンタはこの程度で諦めるヤツじゃないでしょ?」
「!」

「いくらオニキスの黒い力……そんな意味のわからない力が溢れ出ていようと、アンタはアンタ……私の知っているアスラはこんな所で諦めたりしないわ」

「エール………」

「わかつたらさっさとターン進めて、勝つわよ。復讐なんてお母様は望まない。けど私はどうしてもアイツの顔を引っ叩いてやりたい」

アスラを鼓舞するようにそう言葉を口にするエール。その言葉が再びアスラを奮い立たせる。

いつもはアスラの後ろにいたエール。その後ろ姿にいつも勇気をもらっていた。そのお返しであると言わんばかりに今度は、一瞬だけではあるものの、彼女がアスラの前で勇気を分ける。

「おお……勝とうぜエール。オマエの母ちゃんのためにも一発アイツをぶん殴ってやろう!」

再び活力を取り戻すアスラ。その右手にオニキスの黒い力がより強く光を放つ。そんな中、唯一無二のライバルであるロンは変わらないアスラの様子に「フ……」と鼻で笑う。

「ゾゾゾ……何勝手に盛り上がっている。もうオマエ達に勝ち目などないのですよ。絶望の淵に沈む事しかオマエ達に選択肢はない」

「ゾゾゾゾゾゾつてうるつせえぞコノヤロー!!……オレは、オレ達は勝つ!!……世界もぶっ壊させやしねえ!!」

ほぼブラックフォースと化したウィル。それに対抗するように叫ぶアスラ。

そして、3人にとってこれがラストターン。残り2つのライフを穿つべく、ウィルのロンバルディア・Ωとアレックスに立ち向かっていく……………

「ターン14」アスラ&ロン&エール

「アスラ……」

「ん?……何だよロン」

大事なメインステップに入ろうとした直後。ロンがアスラに話しかける。

「オマエが何者であろうとも、オマエはこれからもオレのライバルでいてくれるか?」

そう問いかけて来た。

これまでも幾度となく繰り返されたアスラの謎めいた黒き力。ライバルであるからこそ「オマエはこれからも変わらないのか?」とも聞くように……………

ロンにとって、アスラは大事な存在。エールと同様に失いたくないのだ。

「へっ……何意味のわからねえ事言ってるんだ天才イケメンヤロー、急に気持ち悪い……………変わる訳ねえだろ。オマエはオレの幼馴染で親友で、いつか超えたいオレのライバル。でもって相棒だ」

「フ……………だよな。それでこそオマエだ。悪い、野暮だったな……………このバトル、勝つぞ」「おお。上等だぜ」

互いの友情を再確認する2人。そしてメインステップへと移行し、まずはロンが動き出す。

「メインステップ!!…仮面ライダーナイトを召喚!」

ー【仮面ライダーナイト】LV3(4)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、闇夜に輝く騎士型のライダースピリット、ナイトが出現。転醒する強力な個体だが、エールのシーズグロリーにより転醒カウントが増えたため、もうそれを行う事ができなくなっている。

しかし、強力な効果は転醒だけに非ず……………

「ナイトは召喚時カードを2枚ドロウする……………この効果でドロウするのはオマエだアスラ!!」

「!!」

「引けよその黒くなった手で……………掴めよ勝利を!!」

「ああ……………行くぜ、ドローツツ!!」

何の躊躇いもなくアスラにカードをドローさせるロン。その意思を感じ取り、全力でカードを引くアスラ。

そしてこの2枚のカードがこのバトル、逆転劇へと導いていく……………

「オレはマジック、コールオブロストを使う！…それによりトラッシュからリュウガを手札に戻し、それをLV3で召喚だ!!」

「ツ…………黒きライダースピリットを復活させたか」

1【仮面ライダーリュウガ】LV3(4)BP12000

様々な鏡像が重なり合い、今度は黒い龍騎、リュウガが再び姿を見せる。

並び立つた仮面ライダーリュウガと仮面ライダーナイト、アスラとロンの2人の最強カード。その2体はロンバルディア・Ωに敵意を向けるように気迫と視線を送る。

「リュウガの召喚時効果、相手スピリット全てのコアを2つずつリザーブに送る！…これにより、アレックスは消滅、ロンバルディア・ΩはLVダウンだ!」

「ゾゾゾ……馬鹿め、ロンバルディア・Ωは敵の効果を受けない!!…その程度、弾き飛ばせいで!!」

ー【選ばれし探索者アレックス】(2??0) 消滅

その鎧から垣間見える黒く鋭い眼光から黒い瘴気を放ち、アレックスの体内に眠るコアを叩き出すリュウガ。

しかしアレックスは倒せたものの、ロンバルディア・Ωはそれを己が気迫だけで弾き返し、無傷でその場を凌ぐ。

だがそれで彼らのターンが終わったわけではない。今度は再びロンが行く……

「エール、オマエが残したブレイヴを貰うぞ」

「ええ!…さっさとあんなヤツぶっ倒しちやいなさい!!」

「ナイトにロンゴ・ミニアスを合体!!」

ー【仮面ライダーナイト+天醒槍ロンゴ・ミニアス】LV3 (4S) B P 1 3 0 0 0

地に刺さったロンゴ・ミニアスを手に取る仮面ライダーナイト。強力な合体スピリットとなる。

そして3人は疲労状態となっているロンバルディア・Ωしか場にスピリットを置いていないウイルのライフを狙い、アタックステップへと移行していく……………

「合体したナイトでアタック！…ダブルシンボルにより一撃で2つのライフを破壊する！」

ロンゴ・ミニアスを構え、走り出すナイト。この攻撃が通れば3人の勝利で幕を閉じる事となるが……………

そんな簡単にウイルが幕を閉じさせるわけがなくて……………

「甘い。フラッシュマジック、ホワイトポーション!!…ロンバルディア・Ωを回復!…そしてナイトをブロック!」

「!!」

―【時の破壊者ロンバルディア・Ω】（疲労??回復）

使用したのは白のマジック。ロンバルディア・Ωは再び活動を開始し、向かって来るナイトを迎撃する準備に入る。

ロンゴ・ミアスと元々所有している剣を振り、果敢に攻めるナイトだが、そのBP差は圧倒的。双頭の龍が軽くあしらい、ロンゴ・ミアスを弾き飛ばすと、最後はロンバルディア・Ω自身の拳がナイトを殴り潰し、爆散させた。

「言っただろう。もうオマエ達は勝てない。絶望の淵に沈むだけだど!!」
「誰が絶望するかアアアー!!……行くぞリユウガ!!」

ナイトの爆発による爆煙の中姿を見せる仮面ライダーリユウガ。アスラの指示により動き出すが……

「ソイツのシンボルはたったの1つ!!……ゾゾ、それでは私の2つのライフは破壊できませんね!!」

そう。

さっきのナイトとは違い、リュウガのシンボルは1つしかない。だが、当然アスラ達も何の考えもなく攻撃するわけもない。

「今だロン!!!」

「!!」

アスラが叫んだ。そうすると、ロンが息を合わせるように手札にあるカードをBパッドに叩きつける。

「フラッシュマジック、ブレイヴフラッシュ!!」

「緑のマジック……?」

「この効果でアタック中のリュウガに場のロンゴ・ミアスを合体させる!」

「何だと!?!」

1 【仮面ライダーリュウガ+天醒槍ロンゴ・ミアス】LV3 (5) BP20000

主人であるナイトを失ってしまった事により、再度地に刺さっていたロンゴ・ミア

スを引き抜くりュウガ。

これでナイト同様にダブルシンボル。一撃で2点のライフを破壊する事ができる。

「行くぞ仮面ライダーリュウガ……黒き力で全てを塗り替える……」

ブラックドラゴンスピーア!!

技名を叫ぶアスラ。リュウガはロンゴ・ミニアスに黒い炎の力を纏わせると、ウィルのライフへ向けて投擲。

肝心のロンバルディア・Ωは疲労状態につきブロック不可能。

これでアスラ達の勝利に終わる………

かに見えた。

「フラッシュマジック、ブレイヴデストラクション!」

「!」

「効果でブレイヴのロンゴ・ミニアスを破壊!」

黒い炎を纏ったロンゴ・ミアスが直撃する直前。ウイルスはマジックカードでそれを破壊。

リュウガは又してもシンボル1つへと戻ってしまう。これでは結局ウイルスのライフは1つまでしか破壊できない……………

「ゾゾゾ……………良かったか?…希望と言う味は?…甘味であったか?……………ゾゾゾ、だがそれを味わえるのもここまで。次のターンでこの私の勝ちだ!!……………世界を、この世の何もかもがこの手の中に!!」

勝利を確信するウイルス。

だが絶望的なこの状況でまだロンとエールは諦めていない。無論理由は絶対に諦めようとならないアスラがそこにいるからだ……………

これが最後のフラッシュマジック。そう告げるかのようにアスラはBパッドにカードを叩きつける……………

「フラッシュマジック、ファイナルベント」

「ッ……!!」

「この効果でアタック中のリュウガに赤のシンボルを1つ追加する」

「……シンボルを1つ追加……だと?」

ここにきてようやく本気で余裕の表情が消え失せるウィル。

アスラが使用したマジックカードはこれまで幾度となく彼のバトルを支えて来たアドベントカードの一種『ファイナルベント』……

そしてそれが今回も炸裂する。様々な鏡像が重なり合うと、そこにリュウガと相反する赤の力を持つライダースピリットにしてアスラの相棒、龍騎が呼び出される。

「……龍騎とリュウガ……アスラの2体のライダースピリットが揃った!!」

「フ……行け、アスラ!」

「おお!!」

エールとロンがそう声を上げる中、龍騎とリュウガはベルトにあるカードデッキの中よりカードを1枚ドロ。そしてそれを左腕にある龍の頭を模したバイザー部に装填

……

△ライフ2??0△ウイル

クロスの文字を描くようにドラゴンライダーキックを放つ龍騎とリュウガ。「ダブルドラゴンキック」と名付けられたそれは、ブラックフォースとなったウイルの残り2つのライフを掻っ攫っていった……………

……………
ピー……………

ウイルのライフが0になった直後、彼のBパッドからそんな甲高い音が鳴り響く。これこそアスラ達にとって勝利の音色。

勝ったのだ。遂にライダーハンターズの主任ウイルとの決着をつけて見せたのだ。集大成とも呼べる必殺技「ダブルドラゴンキック」で……………

「ゾ……………ゾ、ガ……………」

余のダメージにその場で倒れ込んでしまうウイル。アスラがオニキスの黒い力を借りていたからこそそのダメージなのは間違いない。彼の場で唯一生き残ったロンバル

ディア・Ωも苦しみながら消滅して行く。

これでバトルは終わり、龍騎とリュウガ2体のライダースピリットが顔を見合わせながらゆつくりと消滅していくその間に、アスラ達は自分達が勝利したのだと実感していき……………

「勝った……………」

「勝ったの……………」

「ああ、アスラエール、オレ達の勝ちだ」

「やった……………アスラ、私たち勝ったのよ!!」

「ああ……………へへ、もう身体が動かないや」

勝利したアスラ達。見事必ず勝つと言う三王2人との約束を果たしてみせた。

「全くアンタはいつも無茶ばかりして……………す、少しは人の気持ちも考えなさいよね」

「ん?…なんか言ったかエール?」

「べ、別になんでもないわよ!!」

エールがアスラに対してツンケンして、それにアスラが天然の鈍感ぶりを発揮するいつもの光景。

ようやく長かった緊張感も終わり、少し平和が戻って来たのだ。

しかしそれは単なる錯覚であり……

……………

「アナタの成そうとしている事は間違っている」

「……………それは偏見ですエレナ師匠。歴史を動かす人物と言うのは時には道德観念を捨てる事も厭わないべきだ」

「何故わからないのですウィル。アナタはその歴史ごとなかった事にしようとしているのですよっ」

今から20年も前の話だ。ウィルは気絶しながらそんな昔の話思い出していた。

師であるエックスにして三王、エレナ・オメガとの記憶。

何故理解してくれない。何度訴えかけても貴女は協力さえしてくれない。

いや、理由なら知っている。貴女はエックスだ。一番上だ。だからこそリセットされるのを、築き上げて来た地位が崩れ去るのを恐れている。

なんと浅はかで愚かな師だ。

いや、愚かなのはこの世界、人間たちだ。7つの欲望で満ち溢れた世界など、この私が消し去ってくれる……………

だからこそ、こんな所で負けてなどいられないのですよ……………

私は!!!

……………

「ゾ…………ゾ、ぐ、うおおお!!」

—!!

場所は戻り現在。はち切れるほどの想いを胸にウィルは立ち上がってみせる。その目に映るのはアスラ達3人。

「オマエはまだ動けるのかよ……!」

「戦え、私ともう一度戦うのだ!!」

「もう一度……そんなポロポロのヤツともう戦えるか!」

「綺麗事を!!」

完全に余裕の無くなっているウィル。アスラはさっきまで敵対していたとは言え、流石にここまでポロポロになったウィルとバトルをする事はできない。

だがそれでも諦めたくないウィルは己のBパッドにカードを1枚叩きつけて……

「オマエが来ないのなら、こっちから行く……召喚、アルケーガンダム!!」

—!!

「ヤツを……ヤツを殺せ!!」

現れたのはモビルスピリットの1体、アルケーガンダム。ウィルはそんなアルケーガンダムに指示を送る……

アスラを殺すのだと……

「いや、アスラアアアア!!」

「逃げろアスラアアア!!」

「!!」

迫り来るアルケーガンダム。アスラは逃げようにも黒の力の反動が大き過ぎてもう一歩だつて動く事はできなかつた……

そしてアルケーガンダムの剣による一突きがアスラの腹部を貫く……

はずだった。本当なら……

「……………え」

アスラが閉じた目を開けると、そこにいたのは他でもない頂点王のシイナであった。本来であれば誰よりも心強い助っ人。

だが……………

アルケーガンダムの一撃にシイナはアスラを庇って代わりに腹部を貫かれていて……………

「ぐふっ……………」

「し、シイナ様……………!?!」

「シイナ……………」

「ゾゾゾ……………よく来たな、頂点王……!!」

シイナがやられ、吐血する様子に啞然とするアスラ達3人。それに対して余裕を取り戻したように笑みを浮かべるウィル。まるでその顔は最初からこうなる事を想像していたかのよう……………

「お、おいシイナなんで……………」

「……………ん？…なんか雨降りそうだったから傘持って来た。まあ間に合って良かった良かった。この城内部構造がぐちゃぐちゃでさ〜」

腹を貫かれ、吐血し、血の流血が絶えない状態であるにもかかわらず平然と喋るシイナ。

アスラ達にいつもの優しい顔を見せると、すぐさまアルケーガンダムを睨みつけ……………

「……………失せろよ」

頂点王だからこそこできる圧倒的な威圧感に、機械兵であるアルケーガンダムでさえも思わず剣を引き抜き、怯えるように後退。そのまま逃げるように消滅していく。

「……………ぐっ」

「シイナ様!!」

しかし流石の頂点王もその致命傷になり得る攻撃に耐えられるわけがない。大量出血によりその後すぐに膝を突き、エールとロンが思わず駆け寄っていく。

「ゾゾゾ……わかっていたよ頂点王シイナ。貴女なら必ず現れる。息子を庇うためにね」

「？」

「この世界に貴女をバトルスピリッツで倒す方法はない。だからこそ私は貴女の息子、妹のような存在であるその3人を狙った……ゾゾゾ、そう。これが貴女の攻略法。貴女の唯一の弱点は母、姉である事だ」

「ベラベラと……いいから消えろよ」

シイナ・メザとはおそらく全人類最強のカードバトル。ことバトルスピリッツにおいては誰も彼女に敵う者はいない。

そう思ったウィルはバトルスピリッツ以外の方法で彼女を取り消そうとした。その結果がこれだ。おそらくバトルに敗北した事以外は全てウィルの想定通りの未来だったのだろう。

そして緊張感乱れるこの時間の中、あの男も姿を見せる。

「ザザザ……やあウィル。どうやら目的は完全に達成してはいないものの、それなりの戦果を挙げたようだね」

「ツ……………この声」

「て、テンドウ……!?!」

現れたのはトウエンティの代わりにテンドウに乗り移り、それを己が肉体とした最強のブラックフォース、オブシディアン。

ウィルを含め、一同は戸惑いを見せる。

「お初だな。私はオブシディアン……トウエンティの代わりにこのテンドウと言う人間の身体を貰った」

「そうか。やはりオブシディアン様」

「そんな、テンドウ!!」

「テメエ、テンドウさんを返しやがれ!!……つーかトウエンティはどうしやがった!!」

「ザザザ……この身体は実に素晴らしいよ。その死にかけている女と言い、この時代の人間はなんと逞しい」

シイナやテンドウの状態から、余りにも最悪過ぎる事態が起こりつつある事をその身
に実感させられるアスラ達3人。

なんとかテンドウを助けてやりたいが、さっきのバトルで身体はボロボロ。奮い立た
せようにもどうにもできない上にそもそも敵うかもわからない……………

いや、仮に立ち向かえたとしてもきつとオブシディアンには勝てないだろう。彼は他
のブラックフォース達と比較しても強過ぎるのだから。

(トウエンテイやこの男の記憶で何度も見たこの少年……………やはりヤツらの……………ザッ
ザ、だがその程度の力しかないのなら、恐るるに足りないな)

最早立ち上がる事もできないアスラを見ながらそう内心で呟くオブシディアン。ど
うやらオブシディアン達ブラックフォースはアスラについての何かを知っているよう
であり……………

「おいテンドウ……………天下の三王がなんつーザマだ。いいからさっさと起きろよ」

「!!」

テンドウに直接訴えかけるように静かな怒声を言い放つ頂点王シイナ。

その声に反応し、オブシディアンの中に眠るテンドウが少しだけ意識を取り戻したのか、体の指先がピクリとだけオブシディアンの予想だにしない方向へと動いて…………

「ザザザ……………ここは一時引こうかウイル。オマエの力はきつといつか我々を超える。何より私もこの身体に慣れるのに時間がかかるようだ」

「……………はい」

「待つてテンドウ!!」

オブシディアンが黒いワームゲートを瞬時に作り出すと、そこからウイルと共に逃亡を果たす。エールが後を追うように追いかけてようとすることも、ロンが彼女の左肩に手を置き、それを制止させる。

そんな事よりも今はシイナだ。いくら肉体的に強い彼女と言えど、腹に穴を開けられてしまつてはもう限界だ。

シイナはこれで最後だと言わんばかりに疲労困憊で座り込んでしまつているアスラの前に座り込む。そうすると必然的にすぐ横にエール、ロンも集まつて来る。

「シイナ様……先ずは血を止めないと……」

「いや、いいよ。どうせもう私は長くない……」

「ツ……な、なんでそんな事言うんですか!!……まだ……まだ……ツ！」

「シイナ……！」

もうシイナは手遅れだ。ダメージが酷過ぎる。いくら応急的に止血を試みようとしても止まる事はないだろう。

目に涙を浮かべるエール。悔しがるロン。アスラは現状を余り理解できずに、いや、どちらかと言えばそれを理解したくないと言うのが的確か。呆然と何の言葉も出せない。

「明日。ロンとアスラの誕生日なんだよな……おめでとう。ごたついてて誕プレ用意出来なかつただけど、良かったらこれを受け取ってくれ」

「！」

アスラとロンに一枚ずつカードを手渡ししていくシイナ。それらには血が染み付いて

おり、もう彼女が生き残る事ができない事をより鮮烈に印象付けさせた。

「エールちゃんも1週間後には誕生日なんだけどね。ごめん、何もあげるモノがないや」「イヤですください!!……いつも見たいにください!!……私はエックスよ。この国で一番身分が上なのよ!?!……だから生きてよ!!……生きて何か寄こしなさいよお……シイナ様アアアー!!」

「どんどん生力を失い、弱々しくなっていくシイナの声色。エールはただ一人涙しながら必死でシイナを引き止めようとする。

しかし、そんなモノが上手くいくわけがない。

「エールちゃんは優しいな。昔からそうだ。ツンケンとしている割に、本当はどこか寂しがり屋で、努力家で、どここの誰よりも女の子してる。昔からバケモノ呼ばわりされていた私なんかの妹でいてくれてありがとう……!」

シイナはエールを左腕で軽く抱きしめながらそう告げる。エールの涙が悲しさと思いで溢れ返っていく中、彼女は次にロンの方へと首を向けて……

「ロン。オマエが一番変わったな。小さい頃から「ライダースピリットを使うバトルの天才」だって言われてて、でもそれがプレッシャーになってき。でもよくそれを跳ね除けて頑張ったよ……アスラと同じ、アンタも自慢の私の息子さ。いつか絶対頂点王になりな」

「……シイナ……オレは、オレはッ！」

オレはアンタのいない世界なんて考えられない。そう告げようとしたロンだが込み上げて来る何かがそれを詰まらせる。

満身創痍のシイナは最後の力を振り絞り、両腕に力を入れ、真ん中にいたアスラをエールとロン事抱く。

「そしてアスラ。オマエに言う事はただ一つ……諦めるな。ソウルコアがなからうがコモンだろうが、オマエは強くなれたじゃないか、きつといつか頂点王にだってなれる……頑張れ。頑張れ」

「……………」

「ああ、暖かいな。本当はもつとずっと一緒に居たかったんだけど」

唾然としているアスラはシイナに、母に対して何も言い返せず、ただそれを聞くだけ。そしてシイナはその後、まるで天に登ろうとするように身体が光の粒、粒子に変わっていき……………

……………こんな私を、母と、姉と想ってくれてありがとう……………
……………ああ、生きてて良かったな……………

最後にそう言葉を残し、事切れると、身体は完全に光の粒に変換。やがて消え去って行く。

普通。人間は死ぬ時にこんな現象は起きない。常識から考えれば光の粒になって消えるなど余りにも異常過ぎる光景である。

だが、残された3人にとって、そんな事はどうでも良かった。

エールはただ1人涙し、地に伏せ、これでもかと悲痛な泣き声を上げていた。

ロンは悔しさに歯を噛み締めている。

アスラはこの現実が未だ受け入れられないのか、呆然と口を開けていた。

そして、この瞬間。少しだけ思考を動かしたアスラは……………

オニキスに言われ続けていた、ある言葉を思い出した。

「『オマエ自身は単なる人間だ。アレを連続で使うと、代償が付き纏うぜ……………!!』

「『だが、黒の力を持つモノには常に代償が付き纏う。これだけの黒の力を使えばオマエが一番大事なモノを失うだろう。肝に銘じておけ……………』

……………一番大事なモノ……………!?

オレの一番大事なモノ……………

今度はシイナの顔、そして記憶を思い出すアスラ。ロンと3人で過ごした子供の頃の話や、大きくなって再会した時の事、それからの事。

自分の道の前には常にシイナが、母がいた。だが、それはもういない。何せ、自分が「代償」として支払ってしまったのだから……………

そうだ。アスラにとって一番大事なモノはシイナ。それであるが故、彼女は代償として支払われた。

いったいいつ失うモノが「龍騎」だと言われた!?
いったいいつからそう錯覚していた!?

ああ……………

そうだ。

そうじゃねえか……………

オレがシイナを殺したんだ……………

そこまで思い至ると、アスラはオニキスの力を酷使した影響で力尽き、泣きながら絶していた。

受け入れられない現実。支払った代償はもう戻す事はできない……………

この日、生まれて初めてアスラの心は折れた。その手には最後にシイナに手渡された「デュークモン」のカードが握られており、それはまるで共に涙を流しているかの如く彼の涙で濡れていた。

一方、ほぼ同時刻。ライダーハンターズのアジト場外にて。

内部では熾烈極めた戦いが行われていた中で、ここでは三王のエレンと金髪の青年フリソデのバトルが行われている。

元々はシスイ・メイキヨウの助手を務めていたフリソデであったが、今ではブラックフォースの力に魅了され、最早ウィルの犬と化していた。

そんな2人のバトルはフリソデがブラックフォースの「シャーマン」を宿した事もあつてか意外にも拮抗していた。だがそれでもモビルスピリットの戦い方を極め、洗練されたエレンのバトルには敵わないか、徐々に徐々にフリソデは追い詰められていて……

「ハアツ……ハアツ……流石はモビルスピリットの三王。同じモビルスピリット使いとして敬意を表するよ」

「全く敬意を表しているようには見えんな。いいから早くターンを進めろ。余は早くこの中に入らなければいけないのだ」

力の差は圧倒的。モビルスピリット同士の戦いとなればエレンの右に出る者はいない。

ただ、それは人の力だけの話。

ここに黒属性の力が加わるとなればまた違う話であり……

「へ〜……じゃあ早いところ終わらせようか。もちろん、僕の勝ちでね！」

「ッ……！」

フリソデの身体とデッキから吹き荒れる黒いオーラ。

それは紛う事なき黒属性の力。フリソデは遂にその内に宿らせたブラックフォース「シャーマン」の力を解き放ったのだ。

「そんじや行くよシャーマン。寄こしてよ、ドブネズミだろうがどんなモノでも強者に変える黒の力を……！」

……ズズズ、その言葉を待ってたぜフリソデく！

フリソデの黒いオーラから聞こえて来る不気味な笑い、不敵な男の声。

エレンはこれまでの情報と経験、状況から、それがブラックフォースの声であると判断する。ブラックフォースの力が常軌を逸している事は重々承知している。そのため、より手札を強く握り、それを警戒する。

そしてフリソデはターンを進め、メインステップまで行くと、黒で強化したそのカードを己のBパッドに叩きつけて……………

「メインステップ……………来い、転醒シナンジュ!!」
「!」

上空から飛来してきたのは真つ赤なモビルスピリット、シナンジュ。その見た目は彼がいつも使用しているそれと何ら変わりはないが「転醒」と言う言葉にエレンは警戒心をより強め……………

「ハツハツハツハツハツハー!!……………いいね黒の力!!……………こんなに良いモノだったなんて知らなかったよ!!……………それじゃあ行くね三王のエレン!!……………アタックステ……………ん?」

しかし、フリソデがアタックステップに入ろうとしたその直後だ。彼の脳から直接伝言のような言葉が流れて来て……………

おそらくはオブシディアンのモノだろう。彼からは「目的達成、帰還せよ」とだけ伝えられた。

「え〜マジかよ。今からが面白いとこだったんだけどな……………折角身分の強さだけでふんぞり返ってるエックス様をこの手で痛ぶるチャンスだったのに」

それを聞いたフリソデは少しだけつまらなさそうに不敵されるも「まあ仕方ないか」と言葉を付け足し、Bパッドとデッキを片付け、懐に仕舞う。その際バトルが強制終了された事により、転醒シナンジュはゆっくりと消滅して行く。

「何の真似だ？……まさか逃げ出すわけじゃあるまいな？」

「ハツハツハ……エックス様ちよつと勘違いしてない？……あのまま続けてたら死んでたのは君だよ？……まあ今は精々この城の中で絶望する事だね」

「……なに!？」

「じゃ、そう言う事で」

それだけ言葉を残すと、フリソデはBパッドの端末を弄り、ワームホールを出現させると、そのままそれを使用し、その場から離れて行く。

その言葉から、エレンは不安と焦りに気持ちを支配され……

「くっ……中でいったい何があったと言うのだ……だが今はしのごのと言っつていられぬ。無事でいろよ、エール……後ついでに他の面々」

走り出し、城内に入って行くエレン。

そして当然ながらそこで得た情報はテンドウがオブシディアンに身体を奪われた事と頂点王の死。デジタルスピリットの三王がいけない事もあり、結果として彼は三王頂点王の中で唯一の生還者となってしまうのだった。

さらにそのおよそ1時間後、王国は前代未聞の大豪雨に苛まれる事となる。それはまるで頂点王シイナの死を世界が悲しみ、涙しているかの如く……

オニキス篇

58コア「ディアボロモン」

ライダーハンターズとの激闘の末に、ノヴァ王国のライダースピリットの三王、テンドウ・ヒロミがオブシディアンの器にされ、頂点王、シイナ・メザが息子を庇って致命傷を負い、死んだ。

目的の1つであったトウエンティの保護には成功したものの、危険人物であるウィルは異世界のバケモノ、ブラックフォースの領域に片足を突っ込み、最強のブラックフォース、オブシディアンと共に逃走。

結果的にプラスかマイナスで言うと、マイナスだ。バトルにこそ勝利はしたが、ライダーハンターズを討伐するべく編成されたメンバー達の事実的な大敗であると言える。

シイナ様が消えてから2日が経った。「頂点王が死んだ、三王が誘拐された」なんてニュースを世間に流せば大混乱になるのは目に見えているからか、未だその情報は世間

にリークされてはいない。

ただ、この世界にウソを通す事はできないのか、まるで世界はシイナ様の死を嘆き悲しみ、涙するかのように、前人未踏の大豪雨で国を濡らし続けていた。

戦いの後、ロンは「修行に出る」と言葉を残し、どこかへ去って行った。相変わらずの無表情だったけど、でも何となく悔しそうにしていたのはわかった。そりやそうよね……

トウエンティは疲弊こそしていたものの軽症。

エレンお兄様は唯一残された三王として彼ら、ブラックフオース達の情報を集めている。凄いわよね。あんな事があったのにもう立ち直って前を向いているなんて……

それに比べて私、エール・オメガと来たら……

あの日からずっと眠り続けているアスラの顔も見ることができない……

……

「……………」

「むえ〜」

病院の中。その一室の扉の前。エールは一房の花束を手に持ちながらも、その扉を開くのを戸惑っていた。

理由は単純。激闘の果てに体に大きな負担を掛ける黒の力を多量に使い、シイナが亡くなった事で体力的にも精神的にも弱り果ててしまったアスラ。最後に気を失って以降、それ以来ずっとベットのう上だ。

それを自分のせいだと自己嫌悪しているからである。

「むえ、むえむえむえむえ、むえ〜」??まあ、元気だせよ…エールちゃん来たら絶対アイツ喜んで復活するって〜

足元で小さなオレンジ色の犬みたいな生き物、ムエが励まそうと必死に鳴いているが、今のエールには一切響かない。

そしてその直後、病院の床から足跡が聞こえて来た。エールが首だけをその方向に動かすと、そこには顔を見知った人物がいて……

「トウエンティ……」

「エール・オメガ……………」

そこにいたのはトゥエンティだった。顔のあちこちに絆創膏が貼られており、未だに傷は完治はしていないのが窺える。

「アスラの病室はここか？」

「ええ、そうだけど……………アンタわざわざ見舞いに来たの？」

「……………まあな」

トゥエンティも事件の関係者。今回の件はエレンを通じて話を聞いている。

本来罪人である彼は先ず先に罪を裁かれねばならないのだが、事が事であるため、解決するまではこうして解放されている。

「……………オマエこそ、何故扉の前で立ち止まっている……………アスラの仲間なのだろう？」

今度はトゥエンティがエールに聞いた。エールは花束を強く握り締めながら答える。

「……見たくないのよ。今のアイツの顔……辛そうで、悲しそうで……ッー」
「……………」

本当は「見たくない」と言うよりかは「見る事ができない」と言った方が正しい。
それを聞くなりトウエンティは彼女に向かって頭を下げて……………

「すまなかつた」

「!!」

「頂点王とテンドウさんを失わせたのは全てオレの責任だ。オレがウィルの口車に乗せられ続けた結果……………オマエ達の心に傷を……………ッ」

……………『心に傷を負わせてしまった』

深々と反省の意を示しているトウエンティがそう口にしようとした直後だ。怒りを抑えきれなくなったエールが彼の胸ぐらに掴み掛かる。

「ふざけんじやないわよ……………みんな必死でアンタを助けようとしてた!……………テンドウも、アスラも!!……………トウエンティはカナさんを助けるために頑張ってるだけだ」って言う

てた!!」

「……………」

「だから謝らないで!!…私はアンタのためにテンドウがブラックフォースの器にされたりとか、アンタのためにアスラがあんなになっちゃったとか……………アンタのために……………アンタのためにシイナ様が死んだなんて思いたくない!!」

「!」

「……………アスラの病室に入りたければ勝手に入れば?……………私はもう帰るわ」

散々怒り散らした後、花束を強く握り締め、軽く溢れ出て来た涙を拭いながら病室を後にするエール。その後ろをムエが待つと言わんばかりに「むえく」と鳴き声を上げながら追いかけて行く……………

叱咤されたトウエンティは、何か気が付いた事でもあったのか、顔を伏せながら、アスラの病室の扉を見つめていて……………

「……………」

「むえく」

豪雨の中、外を飛び出したエール。雨に濡れながら病院の壁に力尽きたようにもたれ掛かり、下を向く。それを心配しているのか、ムエは小さくエールに向かって鳴き声を上げる。

それに気づいたエールはムエを抱きしめながら……

「……バカだよね。イラついてるからって他の人に当たって……本当はトウエンティだって私達に対してどうして接していいかもわからない筈なのに」

「むえ」

「ねえ聞いてムエ。昨日三王塔で最上階、シイナ様の仕事部屋に行つたの………そしたら………」

シイナ様の匂いがした

無くなっちゃうのかな!?

本人が居なくなったら、匂いも一緒に消えちゃうのかな!?

そしたらその本人の事も忘れちゃうのかな!?

これからこんな戦いが続いたら、アスラや他のみんなも私の前から消えちゃうのかなあ

!?
作つて来た思い出も全部消えちやうのかなあ!?

豪雨に打たれながら胸に秘めた悲痛な思いを全て吐露するエール。その大きく綺麗な瞳から涙がこれでもかと溢れ出てくる。

きつと、ずっと我慢し続けていたのだろう。

その気持ちを痛い程理解しているムエは「なんかごめんな」と言うように「むえ」と鳴き声を上げるのだった。

……

一方ここは病院の中。トウエンティはアスラの病室の中に入り、未だに目を覚さない彼の容態を確認していた。

エールが言うように本当に弱り切った顔をしており、これまでの彼からは想像もつかない。彼女が見たくないと思うのが理解できる。

そんな中、トウエンティは一人ベットの前にある小さな椅子に腰掛けると……

「アスラ……オレは今まで、カナのためだけにライダースピリットを集めて来た。言われるがままに。オマエなど、ライダースピリットを得るための獲物としか思っていなかった………」

最初にアスラ達と対面したトウエンティは本当にそうだった。まるで殺戮マシンの如く無感情のまま彼らに襲いかかり、ライダースピリットを狩るためにバトルを行っていた。

だが、それ以降、何度もぶつかり続けた結果。トウエンティは少しずつだが元の彼を取り戻していった。しかしそれがカナを助けなければならぬと言う気持ちとぶつかり合い、彼の悩みの種の一つとなっていたのは言うまでもない。

「正直オレはオマエに謝りたい。全身全霊を持って……だが、オマエの仲間に叱咤されてしまった。理解したよ。ここで頭を下げるのは、死力を尽くしてオレのために戦ってくれたオマエ達にとって無礼であるという事………」

返事が帰って来るわけもないアスラに対し、そう言うトウエンティは立ち上がりながら………」

「だから必ずオレー人でヤツらを倒して見せる。例え差し違えてもな……それがオレなりのケジメだと思ってる。邪魔立てはしないでくれよ……いや、オマエの事だ。オレの行動を知った途端、血相変えて止めに来るに違いない。だがその時、オレはオマエを容赦なく潰す。もう一度ここに送りつけてやる………」

決意を口にするトウエンティ。

秘策と言う秘策があるわけではない。ただ、差し違えてでもウイルとブラックフオースを葬り去る事が、自分のできるアスラやテンドウ達にできる恩返しだと思っ
てい
て
……

「じゃあな。オレはもう1つ行く場所がある……オレはもう、大事なモノを何1つとして失いたくないんだよ。今のオマエならその気持ち、わかるだろ?……母を失った、オマエなら……」

最後にそう呟くと、扉を開け、病室を後にするトウエンティ。

そして傘を手に持ち、次の行先は恋人であるカナの入院する病院。こことは違う支部

である。正直、カナに合わせる顔がないのはわかっている。

だが、この間の戦いで気が付いた。それはただ怖がっているだけであると。だからこそ彼は勇気を持って、実に3年ぶりに彼女に会うと決意を固めていたのだった。

ここは三王塔。王国最強のカードバトラー集団、三王が6枚のカラーカードを揃えた挑戦者を待ち構える場所。

しかし今となつてはエレンただ1人。デスクに向かって黙々と事後処理を進めていた。

だが、こんな状況でも脳裏から頂点王シイナと同じ三王であるテンドウの顔が頭から離れない。少し前まではあんな連中と一緒に仕事などしたくないとも思っていたにも関わらずだ。

「三王塔とはこんなに広い場所だったのか……………」

失つてからわかる寂しさ。自分がどれだけあの喧しい2人を仲間として接していた

のかが理解できる。

(頂点王シイナ……最初は貴様のような異国の者を頂点王などとは認めたくはなかった)

そう。エレンは最初、出会い方も出会い方なだけあって、シイナが頂点王になった事を認めたくはなかった。

この時の彼が身分絶対主義だったのもあるのだろう。

だが……………

(だがオマエは、母上が亡くなり、多忙を極めてしまった余の代わりにエールに寄り添ってくれた……………今思えば、その時から既に余はオマエの事を認めていたのかもしれない)

シイナに感謝していた。エールの姉として接してくれた事に……………

それがどれだけあの時の幼いエールに影響を与えていたのかは計り知れない。彼女がいなければ今のエールは居ないだろうとエレンは考えていて……………

（このエレン・オメガの名に掛けて母上の弟子であったと言うウイル、そしてブラックフォースを必ず駆逐し、必ずテンドウを救い出す………気にするな、別に貴様のためではない。ただ余はエールを悲しませたヤツらが許せんだけだ）

エックスにして残された唯一の三王、エレン・オメガ。エールを盾に内心で言い訳しているものの、その目は敵討ちとテンドウの救出に燃えていた。

アスラが療養している病院とはまた別の区にある病院。ここでライダースピリットの三王であるテンドウ・ヒロミの妹、トウエンティの恋人であるテンドウ・カナが入院している。

トウエンティは高鳴る鼓動を内に潜めながら一歩ずつ彼女の病室へと足を運んでいった。

無理もない。あの戦いの中、兄であるテンドウ・ヒロミはこう言ったのだ。

……『カナの病気は治る』と……

自分を助けるために命を張ったアスラ達に頭を下げるのは無礼だと知ったが、カナは特別だ。絶対に謝りたい。そしてその後、必ず師であるテンドウ・ヒロミを助けに行くことに誓っていた。

そして、遂にその扉前に辿り着く。トウエンティは一度深呼吸をし、そこへと入室して行った。そこには当然ベツドの上に腰を掛けているカナがいて……

「カナ……」

「トウエンティ……トウエンティ……ッ!!」

互いに顔を合わせたのは実に3年ぶり。愛する人物が急に目の前に現れた事により、カナは目に涙を浮かべながら思わずその胸に飛び込んで行く。

「ごめん。中々会いに来れなくて……」

「バカ……バカトウエンティ……今までどこ行ってたのよ……ッ!」

「ごめん……」

「ずっと心配してたんだから。兄さんに聞いても何も言ってくれないし、私貴方が何か危険な事に巻き込まれたんじゃないかってずっと思ってたのよ!？」

「ごめん……………」

トウエンティの事を心配しながらも心の奥底でそれを閉まっていたカナ。3年と言う月日を超え、ようやく帰って来たその姿に涙ながら声を荒げる。

申し訳ない気持ちでいっぱいになったトウエンティはただただ「ごめん」としか口にできなかった。

「わあああああ!!……………もう離さない、離さないんだからアアアー!!」
「……………ごめん」

抱きしめ合う恋人同士の2人。もう離さないとは言っているが、本当にずっと抱きしめ合うわけにはいかない。

カナの涙が収まるまでトウエンティは彼女を抱きしめ続けた……………

……………

およそ5分くらいか。カナが泣き止むと、2人は病室のベッドの上で腰を掛け、落ちて着いて話をする。

「それでカナ。テンドウさんから聞いたんだが、君の病気は本当に治るのか？」

「うん。もうすっかり元気だよ。もう少しで退院だつて」

「ツ……………そうか、よかつた……………よかつたな」

「何泣いてるのよ。男でしょ？」

「これが喜ばずにいられるか……………よかつたなカナ」

「ふふ、そうね」

本当に治るのだとカナ自身の口から聞いた事で、ようやくホツとするトウエンティ。その目から涙が少しだけ溢れる。

ライダースピリットを奪うと言う今まで自分がやって来た所業の愚かさを自覚した。本当に愚か極まりない。そしてやはり、その罪を拭うためには自分のせいで復活してしまつたと言つても過言ではないブラックフォース達をこの手で葬るしかないと改めて思った。

カナはトウエンティが身の危険を顧みず、ライダーハンターズで自分のためにライダースピリットを狩っていた事実をまだ知らない。だが、トウエンティが自分のために危険な場所へと身を置いていた事はなんとなく理解はしているようで……

「どうしたのトウエンティ？……さつきから何か難しい顔してるけど……」

「ツ……ああいや別に。何でもない」

「……………」

勘の鋭いカナはトウエンティがまたそんな危険な場所に行くのではないかと思っているのか、心配そうな表情でそう聞いて来た。悟られそうになったトウエンティは慌てて表情を元に戻す。流石に命を賭けてカナの兄テンドウ・ヒロミを救い出し、邪悪なバケモノを倒しに行くなんて突飛な発言はできない。

そして……………

そんなトウエンティを見て思い詰めたようにカナは……………

「ねえトウエンティ……………私、今ここで貴方に伝えないと行けない事があるの」

「？……………なんだ？」

実は………

実は僕、カナじゃなくてブラックフォースのヘタマイトなんだ〜〜
!!!

「……………は？」

その質問に突如として一変される空気。暖かな空気は冷え上がり、トウエンティに衝撃を与える。余りの異常な発言に思考が追いつかず、思わず声が漏れる。

声色こそ変わらないが、声質と喋り方が豹変したカナ。口角が狂人とも呼べる程以上に上がり、とてもではないがあのお淑やかな彼女の顔には見えなかった。

今の質問は本当に目の前のカナから発せられた言葉なのかと勘繰ってしまうトウエンティ。無理もない。

「ジジジ……ねえねえトウエンティ………久し振りに会ったんだから、血みどろで、楽しいバトルをしようよ〜!!」

「……………な、何を言ってるんだ………カナ!?!」

「どこからどう見ても君の恋人のカナちゃんだったでしょ〜!!……僕ってば名演技〜!!」

鳥肌と冷や汗が止まらない。何かの悪い夢であつてくれと、トウエンティがどれ程懇願したかは計り知れない。

だが、いくら祈ろうとも現実是不変ならない。

今のカナは紛れもなくブラックフォースの紅一点「ヘタマイト」なのだ。

「う、ウソだ………な、なんでオマエがカナの中に………いつたいいつから……」

「いつからって言われると………3年前からかな」

「!!」

「カナちゃんがんばりで病気になつてたかわかる?………ウィルとか言うヤツが僕の黒の力を馴染ませるためにこの子に注いだからだよ」

「な、なんだと………!?!」

「ジジジ………急に病気が治つたつて言うのもそう言う事。本体の僕が入つた事でその症状は消えた。つまり君は最初からソイツの手の平で踊らされていたんだよ」

発覚する衝撃の事実の数々。

カナの掛かつていた不治の病。その原因はヘタマイトの黒の力だった。おそらく

ウィルは生まれつき体の弱かったカナを無理矢理ブラックフォースの器にさせるためにそうしたのだろう。

そしてそうする事で、本来オブシディアンの器にする予定だったトウエンティも手駒にできる。正に完璧な計画であったのだ……………

最終的にはオブシディアンの器はテンドウ・ヒロミに変更されたが、こうして結果的にトウエンティとカナの身体を器にしたヘタマイトが対面する事になった。

「全て敷かれたレールの上を全力で走っていたんだよ……面白いね? ……ね、面白いね!!」

「黙れええええ!! ……カナの身体から出て行け、このバケモノがアアア!!」

余裕がなくなり、激情に駆られたトウエンティはカナ、もといヘタマイトに向けて己のBパッドを展開。バトルを要求した。

その反応に、ヘタマイトは又しても「ジジジ……」と笑い声を上げると……………

「ジジジ……そうこなくちゃね。あー……この今から戦いになる感じ好き♡……ずっとここで待ってた甲斐があったよ。決めてたんだ……ちゃんとした器に入ったら先ず

君を殺るってね」

「黙れと言った。早くオレと戦え、ヘタマイト!!」

自分もまた夥しい闇の力を固め、展開したBパッドの形を形成。デッキをセットした。

そして……………

……………ゲートオープン、界放!!

病室の中、トウエンティとヘタマイトのバトルスピリッツが幕を開ける。

先行はヘタマイトだ。他のどのブラックフォースよりも闘争を求める彼女は狂気の表情のまま己のターンを進めて行き……………

「ターン01」ヘタマイト

「メインステップ……………ああ私の本当のデッキ使うの久し振りだなく……………ジジジ、それじゃあ先ずはケラモンを召喚だ」

1【ケラモン】 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

ヘタマイトが放った最初のスピリットは群青色の体色に体がいかにのように数本の足でできている成長期スピリット、ケラモン。不気味なその笑みはまるでこの世の破壊を楽しんでいるかのよう。

「デジタルスピリット……?!?」

「そうそう。これが本来の僕のデツキ……ターンエンド。さあ全力で来てよトウエンテイ！」

手札：4

場：【ケラモン】 L V 1

バースト：【無】

そのターンをエンドとするヘタマイト。次はトウエンテイのターン、烈火の如く怒る彼は、カナの身体を取り戻すべくターンを進めていく。

「ターン02」トウエンティ

「メインステツプ!!…オレは仮面ライダージオウに変身する!」

……………カメー…ンライダー!!

……………ジ、オーウ!!

ー【変身!!仮面ライダージオウ】LV1

ジオウドライバーを腰に装着し、トウエンティは時を操るライダースピリット、仮面ライダージオウへと変身を果たす。その際に神託が発揮。今回は2枚が対象であるため、変身ジオウのカードに2個のコアが追加された。

「あー、オーマジオウの抜け殻か、まだ持ってたんだ。言っとくけどね、黒は黒じゃないと倒せないし、オブシディアンがオーマジオウのカードを復活させた今、それは最早なんの力も持たないただのカード。僕を倒すのになんの役に立たない」

「うるさい。未知のデジタルスピリットを使おうが、貴様は今ここで倒す、そしてカナも

テンドウさんも取り戻す!!……ネクサス、タイムマジーンビークルモードを配置して
ターンエンド」

手札：3

場：【変身!!仮面ライダージオウ】LV1

【タイムマジーンビークルモード】LV1

バースト：【無】

背後に未来的な乗り物を出現させ、そのターンをエンドとするトウエンティ。次は一
周回ってヘタマイトのターンであり……

「ターン03」ヘタマイト

「メインステップ……ケラモンのLVをアップ。ジジジ、少しだけ小突いてみようかな
?……アタックステップ、ケラモンで攻撃!」

「!」

早速仕掛けて来たヘタマイト。ケラモンのアタック時効果はデジタルスピリットら

しい進化の効果。

だが、その進化は他の成長期スピリットとは一線を画するものであって……

「アタック時の【超進化】発揮、成長期ケラモンを完全体インフェルモンに進化！」

「ツ……成長期から成熟期を飛ばして完全体に進化させるだ?!」

「インフェルモン」 LV3 (5S) BP10000

ケラモンが0と1のコードに身を包まれ、その中でインフェルモンと呼ばれるデジタルスピリットに進化を果たす。

その姿はまるで白い蜘蛛と言ったところか、不気味な鉄の面がデジタルスピリットとしての異端さをより際立たせている。

「僕のケラモンは特別でね、成長期だけど【超進化】の力を持っている。黒の力を営めないでほしいな」

「バケモノが………!」

「ジジジ……今までそのバケモノの力に縋っていてよくそんな事言えるね!!……アタツ

クステップは続行、行けインフェルモン!!」

「ッ……ライフだ………ぐっ」

へライフ5??4へ トウエンティ

長い手足を体の中に収納させ、白い弾丸のような姿に変わったインフェルモンはその姿のままトウエンティに特攻。彼のライフフーツを打ち砕いた。

ブラックフォースから繰り出されるライフダメージに、トウエンティは思わず膝を突いた。

「ターンエンド。どうしたのトウエンティ??……このくらいで痛がる君じゃないよね? ……ほら立ってよ。立って僕をもっと楽しませて!!」

手札：5

場：【インフェルモン】LV3

バースト：【無】

「くっ……カナの顔で、口で、声で、これ以上喋るな……!!」

怒りを原動力に立ち上がるトウエンティは自分のターンを進めていく。全ては自分のせいで酷い目にあつたカナを取り戻すために……

「ターン04」トウエンティ

「メインステップ!!……仮面ライダージオウをLV2で召喚!」

1 「仮面ライダージオウ」LV2(2) BP7000

出現したのはトウエンティが変身した姿と全く同じ姿をしたライダースピリット、仮面ライダージオウ。最初はオーマジオウの力の抜け殻としてトウエンティに渡されていたカードであるが、激戦を共にした事もあり、今ではすっかり彼のマイフェイバリットカードとなっている。

「変身ジオウに神託してアタックステップ!!……仮面ライダージオウでアタック!!……効果で1枚ドロ、さらにフラッシュユタイミングの順番を入れ替える!」

「ジジジ、フラッシュユタイミングを先に使って何をするんだい？」

一刻も早くヘタマイトを殴り倒したいトウエンティはジオウの効果フルで発揮させ、フラッシュユタイミングの順番を入れ替える。

手札にあるカードを1枚引き抜き、コストとしてソウルコアを支払うと、それは発揮される。

「フラッシュ【煌臨】発揮、対象はジオウ!!……来い、仮面ライダージオウII……ッ
！」

ジオウのベルトのバックル部にさらにもう一つ別のライドウォッチが装着され、ジオウはそれをバックルごと回転……

……ジオウ!!ジオウ!!ジオウ!!

IIー!!

I【仮面ライダージオウII】LV2(2)BP10000

ハイテンションな音声が流れると共に、仮面ライダージオウはその姿をさらに一段階強化した姿、ジオウⅠへと昇華して見せた。

「成る程。抜け殻も抜け殻なりに進化はしてるみたいだね♡」

「笑っていられるのも今の内だ、ジオウⅠの煌臨時効果、トラツシュにあるライダースピリット2枚をデッキの下に戻し、BP15000以下のスピリット1体を破壊!!」

「!」

「インフェルモンを叩け!!」

ジオウⅠはカタカナで「ジオウサイキョウ」と書かれた剣を強く握りしめると、インフェルモンに向かって一閃。

インフェルモンは真つ二つに切断され、爆散するかと思われたが……

「……………なに!?!」

「残念……インフェルモンは効果で破壊されない」

砕けたのは剣の方。インフェルモンは如何なる効果であつても破壊する事はできない。

「そして今度は僕のフラッシュタイミングだね……僕も煌臨を使う。対象はこのインフェルモンだ」

「ッ……完全体を煌臨対象に……」

「察しがいいね……そう、僕が呼ぶのは究極体だ!!」

B パッドにカードを叩きつけ、ヘタマイトは狂気の笑みを浮かべながら、自分のエースカードであるその名を叫んで行く。

「次元の狭間の魔王よ……今こそ愚かなる者達に鉄槌を下せ……インフェルモン究極進化……ディアボロモン!!」

ディアボロモンLV2 (4) BP15000

インフェルモンは禍々しいオーラに飲まれてその形を変える。現れたのは異質な姿

をした究極体のデジタルスピリット、ディアボロモン。その見た目はまさしく魔王そのもの。

「これがデジタルスピリットなのか!？」

「臆した?」

「ッ……誰が臆するモノか!!……さらにフラッシュユタイミング、変身ジオウの【転神】發揮、このターン、オレもアタックを行う事ができる!」

「ジジジ……そうこなくちゃ!!……殺し甲斐がないよね!!」

ー【変身!!仮面ライダージオウ】BP3000

目の前に存在する異端なデジタルスピリット。だがトウエンティはそれでも臆する事なく自分のバトルを貫いていく。

「煌臨したとは言え、疲労状態のスピリットに煌臨したソイツはブロックできない!!……ジオウIIはアタック中、オレのデッキの数10枚につき赤のシンボルを1つ追加する。今のデッキは31枚、シンボルは3つ追加され4点。そこにさらに変身したオレ

の攻撃が加われば貴様の負けだ!!」

「へく!!…そこまで考えていたなんて。怒ってたから冷静さを失ったんだと思ってたけど、意外とやるじゃん!」

ヘタマイトのライフを4点破壊すべく、ベルトのバックルを回転させ、右足にエネルギーを溜めるジオウII。そして跳び上がり、ライダーキックを放つ……

………トウワイスタイムブレーーク!!

そのライダーキックは忽ちヘタマイトのライフバリアを壊していく………はずだった。彼女が手札からあるカードを1枚切るまでは………

「まあでも、それじゃ勝てないのが僕達ブラックフォースなんだけどね!!…ライフが1気に3つ以上減る時、その前に手札からフェイタルダメージコントロールの効果を発揮!」

「!!」

「このカードを手札から破棄する事で、フラッシュ効果をノーコストで強制発揮。それ

によりこのターンの間、如何なるダメージも1点になる!……そう、4点だろうがダメージは1点だけ!!」

「なに!?!」

〈ライフ5?!4〉ヘタマイト

ジオウIIの強烈なライダーキック。その余波は病室にあった花瓶、カーテンやレースなどを吹き飛ばしてしまう程強大なモノであった。

しかし、それでもヘタマイトのライフはたったの1点しか削られてなくて……

「ジジジ……どうする?……少なくともこのターンじゃ勝てなくなったみたいだけど」

「くっ……嘗めるなアアア!!……転神したオレでアタック!!」

「それもライフ」

〈ライフ4?!3〉ヘタマイト

怒りに身を任せたトウエンティの拳の一撃。ヘタマイトのライフをまた1つ破壊し

て見せる。

しかし、このターンはもうそれ以上はアタックできない。トウエンティはターンの終了を宣言するしかない。

「ターンエンド……」

「ジジジ……不思議。人間つてさ、怒ったら強くなるよね……ねえねえもつと怒つてよトウエンティ!!……そしたら君はもつと強くなつて、もつと楽しくなるでしょ?！」

「知ったような口を聞くな。このバケモノ……早くターンを進めろ!!」

「わあ……いいねいいね……その静かに怒りを燃やす感じ!」

頭の中から足の指先まで、狂った発言しかないヘタマイト。

ブラックフォースの中でも特に変わり種の性質を持つ彼女は、殺し合いと言う名のバトルスピリッツをより堪能すべく、己のターンを進めていく。

そして遂に、前のターンに疲労状態のまま煌臨したディアボロモンが回復状態となり起き上がる……

「ターン05」ヘタマイト

「メインステップ!…バーストをセットしてディアボロモンのLVを3にアップ!」

ー【ディアボロモン】(4??5) LV2??3

悍ましい眼光を輝かせ、レベルアップを示唆させるディアボロモン。その視線の先には当然ジオウIIがいて……

「アタックステップ、やっちゃえディアボロモン!!…その効果で2枚ドロし、ジオウIからコア2つをリザーブに」

「!!」

「ジジジ、よって消滅する!」

ー【仮面ライダージオウII】(2??0) 消滅

伸縮自在の両腕を伸ばし、ジオウIIを締め付けるディアボロモン。圧力で装甲に亀裂が走り、コアが飛び出すとジオウIIはこの場より消滅してしまう。

そして次にディアボロモンはその持ち主であるトウエンティに目を付けると……………

「ディアボロモン本命のアタックはどうする??:……………もつとも君を守るスピリットなんてどこにもいないけどねえ!!」

「……………ッ」

「逆襲の……………カタストロフィーキャノン!!」

ヘタマイトがディアボロモンの技名を叫ぶと、ディアボロモンは胸部から高威力の破壊エネルギー弾を発射。

それを防ぐ手段はトウエンティには無くて……………

「ぐっ……………ぐあああああ!!」

へライフ4??3トウエンティ

木っ端微塵に破壊される1つのライフバリア。そしてそれだけでなくトウエンティとそのBパッド、タイムマジーン事、病室の扉を吹き飛ばしてしまう。

「くっ……………」

「な、何今の爆発……………え、キヤアアー!?!」

「なんだこの怪物!?!」

ここは病院。当然D r. や看護師、患者などが大勢いる。そしてバトルしていた病室の扉が破壊された事で、遂にトウエンティとヘタマイトのバトルがその者達に露わになつてしまった。

病室から顔を覗かせるヘタマイトのディアポロモン。病院の者達は恐怖に怯えてしまふが、それを見たトウエンティは大きく息を吸い込み……………

「生きたくば怯むな!!……………早くここから出る!!」

強引に逃げるよう催促した。その後、慌ただしくも病院内の人々は速やかに逃げ去った。

バトルしている本人達、トウエンティとヘタマイトを残して……………

「なんで逃がしたのさ。別に危害なんて加えないよ?……あの中に強いカードバトルがいなければね、ジジジ……それとも何、師匠も恋人も助けられなかったから、せめて他の人達だけでもと思ったわけ?……エライなく!!」

「黙れ……今オマエと戦っているのはこのオレだ……これで思う存分、貴様を叩きのめせる」

「ジジジ……正直、これまでのバトルの流れは一方的過ぎてつまらなかったんだ。期待しておくよ、君の真の実力!!……ターンエンド!」

手札：6

場：【ディアボロモン】LV3

バースト：【有】

邪魔者は消えた。そう言わんばかりに倒れたBパッドを立て直し、己のターンを始めようとするトウエンティ。

ここは病院の7階。落ちたらひとたまりもない排水人の中、負けじとカナとテンドウのためにカードをドローしていく。

「ターン06」トウエンティ

「メインステツプ!!…仮面ライダージオウを召喚!」

「お、2枚目か」

1 【仮面ライダージオウ】LV2(4)BP7000

前のターンとは別の個体であるジオウが召喚される。そしてそれを歯切りに、トウエ
ンティは逆襲を開始していく……………

「見ろ。これがオレの得た最強のライダースピリット!!…【煌臨】発揮、対象は仮面ラ
イダージオウ!!」

「!」

グ・ラ・ン・ド!

ジオーウ!!

1 【仮面ライダーグランドジオウ】LV2(4)BP12000

歴史ある20体のライダースピリットの力を宿した黄金の仏像をその身に纏い、仮面ライダーグランドジオウが場へと煌臨した。

「ジジジ、病院に仏壇なんて演技が悪いね〜」

「……で決める!!…アタックステップ、グランドジオウ、行け!!」

トウエンティの最強スピリットであるグランドジオウ。幾度となく發揮して来たその効果を使うべく、彼は手札を構えて……

「グランドジオウのアタック時効果、手札にあるライダースピリット1枚をグランドジオウの煌臨元に追加する事で、そのスピリットのアタック時効果を發揮させる!」

「!」

他のライダースピリットの力をそれ以上に使い熟す事ができるグランドジオウの力。彼は今までジオウに限らず、多くのライダースピリットの力を利用し、勝ち上がってきた……

「オレはこのスピリット、仮面ライダーフォーゼコスミックステイツの効果を発揮!!：それにより相手スピリット1体をデッキの下に戻す!：消え去れディアボロモン!!」
「ジジジ……本当にそれ、使えると思ってるのかな?」

「!？」

だが、その他のライダースピリットの力を自在に操ると言う力はもう無い。

その証拠に、トウエンティがその効果発揮を宣言しても、グランドジオウはそれをおうとはしていない。つまりそれは今のトウエンティはジオウ以外のライダースピリットを扱えないと言う事実にはならない。

「な……何故だ。何故……」

「だ……か……ら……言ったでしょ?…今のジオウはもう抜け殻。黒の力はもう全部オブシディアンのオーマジオウが持って行っちゃったから、ライダースピリットを複数扱える事はもうできないんだよ!」

「!!」

そう。

今まで、仮面ライダージオウのカードはそこに黒の力があるが故に他のライダーズピリットを自在に操る事ができた。

しかし、オブシディアンのカード、オーマジオウが復活した事で、元はその抜け殻のような存在だったジオウのカードは文字通り抜け殻となり、今では何の力もない、ただのライダーズピリットと化してしまっていたのだ。

「ちえー…：なんだつまんないの。そんな事もわからずに僕に喧嘩挑んで来たんだ………ホント、笑わせてくれるよね？」

「ツ……いや、だがまだバトルが終わったわけじゃない!!…フラツシユ、グランドジオウの第二のアタック時効果で煌臨元のジオウを召喚!…その際に貴様に1点の効果ダメージを与える!!」

「!」

ー【仮面ライダージオウ】LV2(2)BP7000

〈ライフ3??2〉ヘタマイト

トウエンティを徐々に単なる弱いカードバトルだと感じて来たヘタマイトの恐怖の圧に気圧されかけるトウエンティであったが、それを跳ね除け、復讐するためにグラウンドジオウの更なる効果を適用。

額にあるジオウの像にタツチすると「2019」と刻まれた黄金の扉の中からジオウが出現。自慢のライダーキックを披露し、ヘタマイトのライフ1つを砕いた。

これで……………

「これで残りライフは2つ!!…グラウンドジオウとジオウのアタックでオレの……」

『オレの勝ち』って言いたいわけ？」

「!？」

「あーあーあーあーあー……なんか僕、興が醒めちやつたなく……こんな弱いヤツを待ち伏せしてたんだ……もういいや。殺しちやお」

雰囲気が変わり出すヘタマイト。その顔は最早感情のないただの殺戮兵器。

今まではトウエンティの実力を測るためのプレイングをしていたが、今度は彼を殺すためのプレイングでバトルを行なっていく。その切り替えだと言わんばかりに伏せて

いたバーストカードを勢い良く反転させる。

「ライフ減少のバースト、イマジナリーゲート……手札からノーコストで黄色のスピリットを召喚……僕はこの効果で2体目のディアボロモンを呼ぶ」

「な……………2体目!?!」

ー【ディアボロモン】LV3(5)BP20000

ヘタマイトの場に現れる光輝く天門。しかしそこより現れ出るのは天使ではなく、ディアボロモンと言う名の禍々しい悪魔……………

2体並んだディアボロモンは共鳴するように雄叫びを上げ、トウエンティの2体のジオウを威嚇した。

そして、このタイミング。まだトウエンティのグランドジオウのアタック中。即ちブロックが可能であり……………

「ブロックだ。殺せ」

「グランドジオウ……………!!」

伸縮自在の両腕を伸ばし、グランドジオウを捕らえるディアボロモン。自分の近くの手繰り寄せ、そのまま胸部から破壊光線を放ち、グランドジオウの腹部に大きな穴を開け、爆散させる。

「弱……流石抜け殻。あーあ。やっぱりアスラ君と戦えばよかった」

「くっ……ターンエンド」

手札：2

場：【仮面ライダージオウ】LV2

【変身!!仮面ライダージオウ】LV1(1)

【タイムマジンビークルモード】LV1

バースト：【無】

堪らずそのターンをエンドとするトウエンティ。このターンで決めたかったがだけに歯軋りが止まらない。

そして次はヘタマイトのターン。トウエンティに対して完全に興味を失ってしまった彼女は、トウエンティの事を用済みであると言わんばかりに殺しに行く……

「ターン07」ヘタマイト

「メインステップ……はもう要らない、アタックステップ。ディアボロモン……!!」

ヘタマイトがそう告げると、戦闘態勢に入ったのか、2体のディアボロモンの眼光が不気味に輝く。

「まずは効果で2枚ドロローしてジオウを消滅」

「!」

1【仮面ライダージオウ】(2??0) 消滅

伸縮自在の両腕でジオウを捕らえ、壁という壁に叩きつけていくディアボロモン。ジオウは堪らず消滅してしまう。

これでトウエンティのスピリットはゼロ。彼を守る者は一切合切いなくなってしまう。

そして、ここからがディアボロモンの真骨頂、ヘタマイトは気の狂った笑顔でその発揮を宣言する……………

「ジジジ……………さらにもう1つのアタック時効果を発揮、手札にあるディアボロモンを好きだけノーコストで召喚できる……………♡」

「好きだけ……………!?!」

「うん。僕は手札から追加で3体のディアボロモンを召喚!!」

- ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000
- ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000
- ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000

刹那。1体、2体であれ程苦戦してしまうディアボロモンが次々と増殖し、この病室内に溢れかえった。そのまるで地獄の門前のような光景は、トウエンティに敗北を感じさせるのに十分すぎるモノがあつて……………

「い、5体が増えただと!?!」

「ジジジ……僕のディアボロモンはデッキに何枚でも入れる事ができる。さあ、1体目のアタックはまだ残ってるよ!!」

「ツ……ライフで受ける!!……ぐっ!!」

へライフ3?!2へ トウエンティ

駆け抜けるのは最初のディアボロモン。伸縮自在の両腕を叩きつけ、トウエンティのライフ1つを砕く。

そして……

「さあてと、もう僕の勝ちは確定だね。まあ僕はブラックフォースだから当然なんだけど……最後に言い残す事はある?」

「……まだだ。まだオレのライフは残ってるぞ……既に勝った気にいるんじゃないやねえ……!!」

「……何それ。ウザ……アスラ君の真似事なんかやつても変わらないよ?……君はどこまでも哀れで、愚かで、情けない……利用されて、最後にはボロ雑巾のように捨てられる惨めな負け犬なんだから」

ディアボロモン……………

早くアレ、殺してよ

ヘタマイトは最後にそう告げると、アタックを残した4体のディアボロモンが同時にトウエンティの前に接近。そして4体同時に胸部の発射口からエネルギーを溜めていき……………

「オレは…………オレはオマエから絶対にカナを救う!!…………テンドウさんもこの手で救って見せる!!」

「いいから大人しく死ねって……………」

逆襲の……………

カタストロフィーキャノン!!!

「ッ……………!!」

△ライフ2??1??0??—1??—2△トウエンティ

4体同時に放たれた巨大なエネルギー砲。それはトウエンティのライフバリアはおろか、トウエンティ本人にも直撃。

血だらけのまま彼は吹き飛ばされ、ここ7階の病院から外へと放り出されてしまう。とてもではないが、人が生きていられる出来事ではない……………

これにより、勝者はヘタマイトだ。勝ちこそしたものの、トウエンティの実力は低いと感じていたからか、どこか不満気な様子……………

「今ので死んだかな??……………まあ何でもいいか」

トウエンティの遺体を確認しようともせず、デッキを片付け、この場から立ち去ろうとするヘタマイト。

そこに空間を裂いて現れた黒いゲートと共にテンドウ・ヒロミ、もといブラックフォースの頂点、オブシディアンが姿を見せて……………

「ザザザ……どうだったヘタマイト、トウエンティのバトルは？」

「あ、オブシディアン。全然ダメだね、こんなんじや及第点も上げられないよ。まあもう死んだだろうからどうでもいいけど」

テンドウ・ヒロミの体を奪ったオブシディアン。テンドウ・カナの体を奪ったヘタマイト。不本意ながらこの場にテンドウ兄妹が揃ってしまっていた。

「やっぱ僕もアスラ君達と戦いに行けばよかつたな……そっちの方が絶対楽しかつたよ……」

「ザザザ……まあ私達がいた時代の人間達とは比べ物にならない強者ばかりだったな。特に「頂点王」とか言う女は間違いなく私達ブラックフォースよりも強かつた」

「ええ!!……ソイツどこ!!?……僕今すぐソイツと殺し合いたくないな……!!」

「残念。もう死んだよ、ウィルが危険とみなして先に殺してしまった」

「ええ……!!……つまんないの!!」

誰よりも強い者との戦闘を求めるヘタマイト。ブラックフォースより強いと称され

た頂点王シイナの存在に興奮するが、死んだと言う情報を聞くなり、すぐさましょんぼりとする。

しかし、それはそれか。ヘタマイトは話題を変えるように口を開き……………

「ところでさ……この世界に戻って来て、私とシャーマンの意識が消えている間、オブシディアンはなんであんなウイルとか言う変なおじさんとつるんでたのさ」

「急にどうした」

「いや、なんかいつものオブシディアンらしくないと思ってさ。アレ、どう見ても小物だろ？」

「ザザザ……………小物と称するか。まあ見てなさい、ウイルはこれから我々ブラックフォースに力を齎してくれる」

「??……………ジジジ、まあいいや、僕は取り敢えず強いヤツと血みどろの戦いができれば」

あまり深い事は考えないことにしたヘタマイト。オブシディアンが潜って来た黒いゲートに飛び込み、その姿を消す。

そしてオブシディアンもまたトウエンティの落下した方角に首を向けると……………

「二兎を追う者は一兎をも得ず……………ようやくわかったろ？…君は贅沢を言っている生
物ではない。まあ、ウィルに従おうが従うまいが結局は同じ結果だったと思うけどね」

最後にそう告げ、オブシディアンもまた黒いゲートの中に姿を消した。

こうして、未だに悲しみの豪雨が降り続ける中、避難し切って誰もいなくなった病院
の中で、トウエンティは敗北を喫したのだった……………

ウィルと激闘を繰り広げたアスラ。

その果てに母に等しい頂点王シイナ・メザを失い、身体的にも精神的にも激しいダ
メージを負っていた……………

そしてそんな彼は今、黒くて深い、冷たくて暗い闇の中にいて……………

「……………ハハハ……………」

寝ぼけているアスラ。その目を擦り、視界を広げると……………

目の前に母であるシイナの後ろ姿があった。息苦しいくらい暗いこの場所でもそのオレンジ色の長い髪が目立つ。

「シイナ……………」

その背中に安堵し、アスラはそれに追いつこうと走り出すが……………

それに触れようとした直後、シイナは突如として光の粒子となり、消え去ってしま

……………

「ツ……………おいシイナ!?!…どこだよ、どこに行っただよ!?!」

慌てて辺りを見渡すアスラだが、当然そこはもう黒い闇ばかり、自分以外何者もない。だが、本当の所、アスラ自身もシイナがどこに行ったのかはわかっている。

わかっいて彼女を探している。

受け入れたくないのだ……………

「あの女はもう戻って来ねえよ……………死んだんだ。オマエが代償を支払ったからな」

「ツ……オニキス!!」

この世界の主のような存在、ブラックフォースのオニキスが龍の形を象り出現。アスラに囁く。

「ウソつくなよ!!…シイナは死なねえ!!…約束したんだ、いつか絶対自分に挑みに来ていつて!!…シイナが約束を守らないはずねえんだ!!」

「……………理解できていないみたいだな……………いいかよく聞け」

オマエが弱いからあの女は死んだんだ。

オマエが最初から強ければこんな事にはなつてねえんだよ!!

ー!!

哀れなアスラにはらわたを煮えくり返したオニキスが怒りを込めて叫ぶ。

しかし、彼にそう言われても尚、アスラにとってシイナが死んだと言う事実は受け入れ難くて……………

「!!」

場所は病院。時間は夜。豪雨による雨音が非常に喧しい中、およそ2日ぶりにアスラは目が覚め、飛び起きる。

「……………オレ、何で病院に??……………ああ、そうだよな。全部夢だったんだ……………オニキスのヤツ何脅しに来てんだよ、焦ったじゃねえか。そうだよ夢なんだよ全部……………夢……………」

今までの事が全部夢だったと錯覚しているアスラ。しかし、それは直ぐに覆される事になる。

アスラは病室のデスクに置かれていた自分のデッキを手にとると……………

「!!」

そこにはエールから借りると称して無理矢理黒の力で進化させた「ブラックウォーグレイモン」のカードと、シイナが消える直前に自分に渡した血のついた「デュークモン」のカードがあった。

それらがよりアスラに鮮烈に思い出させる。あの激闘、ロンとエール3人で乗り越えた瞬間、そしてシイナが自分の腕の中で消えていくあの感触を……………

「シイナ……………!!」

ウソだ。きっと何かの間違いに違いない。

そう思ったアスラはいつもの黒いパーカーを入院服の上から着用し、大雨の中、勢よく病院を飛び出していった。

……………

「ハアツ…………ハアツ…………ウソだ。んなわけねえ…………死ぬわけねえんだシイナは…………絶対に」

アスラが大雨の中、傘もささずにオウドウ都の街中を駆け回る。そして彼が目指している場所はただ一つ……………

絶対にあのデツケエ塔でオレを……

オレとロンを待ち構えているんだ!!

最後の砦、頂点王として、最後の壁として、オレ達を待つてるんだ……………!!

それは三王塔。王国の最強カードバトラーである三王と頂点王がカラーカードを6枚集めた挑戦者を待ち構える場所。

そう。シイナは昔、アスラとロンから離れる際に約束したのだ「必ず自分に挑みに来い」と……………

だからこそ、アスラは本当にシイナが消えてしまったのか否かをあの三王塔で確かめたいのだ。

本当は確かめるまでもないと言うのに……………

そして、その時だった……………

「何をしてるんだアスラ？」

ー！！

彼を呼ぶ声が聞こえて来た。男性の声だ。当然シイナではないが、どこか耳覚えのあの穏やかな声に、アスラは一度立ち止まり、振り向いて……………

「アンタ……………Zのおっちゃん……………!？」

「傘もささないで、風邪引くよ?……………まあでも丁度よかった、君達がこの間借りて行った本。アレそろそろ返却期限が来るから返してね、次おじさんの番だからさ」

そこにいたのは不気味な狐の面を被った長身の男性「仮面Z」……………

都立の図書館にて一度アスラ、エールと出会っている謎多き男。それが雨傘を片手に

再びアスラと出会した……………

だが、この再会は偶然ではなく、本当は彼が意図してアスラに会いに来ていて……………

「それと、教えてもらおうか。君が今、どこに行こうとしていたのかをね」

以前とは比較のしようもない圧をアスラに向ける仮面Z。

大雨が降り続ける中再会する2人。そしてこの再会はアスラに大きな影響を与えていく事になる……………

59 コア 「アスラの誓い」

王国の頂点王シイナ・メザの死を悲しむように豪雨を降らし続ける世界。そんな中、遂に疲労困憊から目覚めたアスラは無我夢中で母である彼女を探しに向かったのだが……

その道中、都立の図書館で知り合った仮面ライダーウィザードを使用する不気味な狐の面を被った男性『仮面Z』と再会して……

「Zのおっちゃん……なんでこんなところに」

「質問の答えになっていないよアスラ。僕は君がどこで何をしようとしていたのかを知りたいんだ」

「ツ……そんなの決まってる……会いに行くんだ!」

「誰に?」

「シイナ、頂点王に決まってるだろ!!……あの三王塔でオレを待ってるんだ!」

「……………」

アスラがそう言うのと、仮面乙は哀れみの表情を彼に向ける。無理もない。アスラが言っている事は狂言なのだから……………

「アスラ。君は一番近くで見ていたのだろうか？…三王の一人、テンドウ・ヒロミはオブシディアン製の器にされ、頂点王シイナは死んだ……………」

「ツ…………死んでねえ!!…死ぬわけねえんだシイナは!!…………そうだテンドウさん。テンドウさんを助けねえと。つーか乙のおっちゃん、なんで色々詳しいんだよ!!」

「それは秘密。と言うよりアスラ、なぜ君は頂点王シイナが死んだ事を頑なに否定する。君はあの場にいた誰よりも彼女がいなくなった喪失感を味わっていたはずだ」

「…………だから、シイナは死ぬわけねえって……………」

「また答えになってないね。そういう時はもうちよつと具体的に根拠のある事を言わないと」

「いったい何故この乙がこれまでの騒動の一連をある程度把握しているのかはアスラにはわからない。」

しかし、この間の穏やかな雰囲気とは違う様子から、この乙と言う男はただ者ではない事を密かに悟っていて……………

「そ、そうだ。シイナもきつとテンドウさんみたいにブラックフォースに身体を乗っ取られたんだ!!……だからいないんだ、助けねえと……オレが……オレが!!」

「落ち着きたまえ、そんなはずないだろ。ブラックフォースは4体、『オニキス』は君が、『オブシディアン』は「テンドウ・ヒロミ」に、『シャーマン』は「フリソデ」に、そして君が異世界で戦った『ヘタマイト』は今「テンドウ・カナ」に取り憑いている」

「な……ウソだろカナさんに!」

自分達さえも知らない情報を次々と口にする仮面乙。アスラはここでようやくテンドウ・ヒロミの妹カナがブラックフォース、ヘタマイトに取り憑かれている事を耳にする。

「だったら尚更助けにいかねえと!!……見てろよ、地の果てまで探し出してやる!!」

誰よりも仲間想いであるアスラがこの場で動かないわけがない。すぐさまブラックフォースを探そうと病み上がりの身体でまた走ろうとするが……

それを仮面乙は許さない。

「君1人で何ができる?……相手は3体のブラックフォース、そして既に半分は黒の力に汚染され、ブラックフォースと同列の存在と化しはじめたウィル。到底君1人で敵う相手ではない事くらい、理解しているはずだ」

「ツ……でもだからって放って置けるわけねえだろ!!……それにオレの中には同じブラックフォースのオニキスがいるんだ!!……またアイツの力を借りて」

「借りたらまた大事なモノを失うよ?」

「ツ……!」

「黒の力とはそう言うモノだ。人間がその力を借りれば、それ相応の代償が付き纏う……だから頂点王シイナも死んでしまったんじゃないのかい?……彼女は君にとって大事な目標である前に、母親だったのだから」

この男はいったいどこまで知っているのか……

ブラックフォース達との契約の最中必ず言われる代償の言葉をまたアスラは思い出す。そしてシイナが死んだあの瞬間も……

違う。違うんだ……………

「違うんだ!!…シイナはまだ生きてる!!…オレは何も失っちゃいねえ!!」

「強がるね。そんな現実逃避をしても彼女が帰ってくる事はないのに」

「うるせえッ!!…だから失ってねえんだ!!…オレは、オレは何も失ってねえ!!」

「はあ……どちらにせよそんな不安定な精神状態で戦場に行かせるわけにはいかないな。大の大人としてはね。どうだ、あの時みたいここは一つバトルで決めないか？」

「!」

「君が勝てばその後は好きにするがいい」

「……………ああ、わかったよ」

手に持つ傘を投げ捨てながらそう告げる仮面Z。今すぐにも助けに行きたいアスラとて、ここで止まるわけにも行かない。あっさりそのバトルを承諾してみせる。

「ただし、僕が勝ったら僕の言う事を聞くんだね」

「それもわかってる」

「よし、じゃあ始めようか」

お互いにBパッドとデッキを取り出し、バトルの準備を進める。
そして……………

……………ゲートオープン、解放!!

3日も続く大豪雨が降り続ける中、意味深な発言をするようになった仮面Zと、頂点王シイナの死であやふやな精神状態となっているアスラの自由を賭けたバトルスピーリッツが幕を開ける……………

先行は仮面Zだ。アスラに己の愚かさを伝えるべくそのターンを進めていく。

「ターン01」 仮面Z

「メインステップ。僕は仮面ライダーウィザードフレイムスタイルを召喚」

1【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】LV1（1）BP3000

『ヒーヒーヒー!!』の音楽と共に流れ行く赤い魔法陣。その中より魔法を高みに使うライダースピリット、仮面ライダーウィザードフレイムスタイルが出現。

「ウィザードフレイムスタイル召喚時効果。カードを3枚オープンし、その中にある仮面と導魔を持つスピリットカードを手元に置く。じゃあ僕はこの中にある仮面ライダーウィザードハリケーンスタイルを手元に置き、残りは破棄しよう……これでエンダ」

手札：4

場：【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】L V 1

手元：【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】

バースト：【無】

手慣れた手付きで第1ターンを締める仮面Z。次は唐突にシイナが死に、心に余裕がなくなつたアスラ。

目の前に立ちはだかる彼にその晴らせない怒りをぶつけるかの如くターンを進めていく。

「ターン02」アスラ

「メインステップ!!……ドラグノ突撃兵を召喚！」

1「ドラグノ突撃へR」LV1(1)BP4000

場に現れたのは、強靱な肉体を持つ一体の竜人。巨大な剣を構え、大雨の中今日も攻撃していく……………

「アタックステップ……行けドラグノ突撃兵!!」

「ライフだよ……………ッ」

へライフ5??4へ仮面Z

名の通り突撃していく突撃兵。手に持つ大剣を振り、仮面Zのライフバリアを1つ砕いてみせる。

そして、まだもう一撃……………

「ドラグノ突撃兵【追撃】の効果……重疲労させてもう一度攻撃!!」

「それもライフだよ……ッ」

〈ライフ4??3〉 仮面Z

二度の回復でようやく回復状態になる危険な状態、重疲労状態にする事でもう一度攻撃を可能にする【追撃】……………

アスラはドラグノ突撃兵のその効果を使い、もう一点彼のライフを粉碎してみせる。

「どうだZのおっちゃん……後3つだ!!……ターンエンド!!」

手札：4

場：【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV1

バースト：【無】

「……………」

相変わらず切羽詰まった様子ではあるが、ライフに差をつけた事で優勢には立った。アスラはこれでターンを終える。次はアスラの速攻を受けても微動だにしない仮面Zのターン……それを進めていく。

「ターン03」仮面Z

「メインステップ……僕は前のターンに手元に送ったこのカード、仮面ライダーウィザードハリケーンスタイルを召喚。効果でボイドからコア1つをトラッシュに置くよ」

1 「仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル」LV2 (3) BP3000

地面に現れた魔法陣を起点に巻き上がる竜巻。その中により緑色の仮面ライダー、ウィザードハリケーンスタイルが出現、効果で仮面Zが使える総合コア数を1つだけ増加させた。

「フレイムスタイルのレベルをアップ……」

「来るか……!!」

ー【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】(1??2) L V 1??2

上昇するレベル。如何にも戦闘態勢を整えましたと言わんばかりのその行いにアスラは強烈な反撃が来ると考え身構えるが……

「ターンエンドだ」

「!!」

「何を驚いている、ターンエンドだよ。君のターンだ」

手札：5

場：【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】L V 2

【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】L V 2

バースト：【無】

「何でアタックステップでアタックしねえんだ……まだ様子を伺ってんのか?……まあいいぜ。そっちがやる気ないのならこっちから行くまでだ!」

「……………」

意味深にターンを終える仮面Z。それ以外の宣言に寡黙を貫き通す中、アスラのターンが幕を開ける。

「ターン04」アスラ

「メインステップ!!……行くぜ、仮面ライダー龍騎を召喚!……不足コストはドラグノ突撃兵から確保!!」

「!」

「【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP5000

様々な鏡像が重なり合い、龍の影を纏う赤きライダースピリット、龍騎が姿をみせる。ただしその召喚の不足コストとしてドラグノ突撃が消滅した。

「強力なドラグノ突撃兵を消してまで無理矢理エースを呼び出したか」

……『やはり、冷静さを欠いているな』と内心で思い至る仮面乙。
実際それは射的を射ている。このターン、無理矢理龍騎を召喚する必要はない。ドラグ
ノ突撃兵を消してまで召喚するならまだ他のカードを使った方が遥かにマシ。
無論こんな初歩的なミス、いつものアスラならやるわけがない。

「アタックステップ!!……ぶちかませ龍騎!!」

「ライフで受けよう………ッ」

〈ライフ3??2〉仮面乙

やはりこのターンも攻撃するアスラ。龍騎の炎を纏った熱き拳の一撃が仮面乙のラ
イフをさらに砕いた。

「よし後2点!!……これでターンエンドだ!」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】LV1

バースト：【無】

勝手に勢いづいているアスラ。そのターンをエンドとする。

「ターン05」仮面Z

「メインステップ……………バーストをセット」

「ツ……………今度こそ来るか!？」

所謂罫のカードであるバーストを裏向きで伏せる仮面Z。その様子にいいよ来るかと勘づいたアスラがまた身構える。

しかし……………

「アタックステップは何もしない、ターンエンドだ」

「なに!？」

又しても一度もアタックをせずにターンを終えた。アスラのスピリットは全て疲労状態、絶好のチャンスであったはずなのにだ……………

ライダースピリットとは言え、低コストのスピリット2体のプロツカーとバースト1枚を残してターンを終えた……………

一見やる気のないように見えるこのプレイングに、アスラはどうとうはらわたを煮えくり返す。

「おいアンタ、やる気あんのかよ!!…戦う気ははじめからねえんだつたらそこどけよ!!…早くオレをブラックフォースのところに…シイナのところに行かせてくれ!!」

「君は本当に愚かだね」

「なに!?!」

「この世に冷静さを欠いたカードバトラー程脆いモノはない。頂点王シイナを目の前で失い、狂ってしまった君など、私の敵じゃない……………いつでも倒せるから僕は様子を見ているに過ぎない……………!」

「ツ……………んだとお!!」

カラーカードを5枚所持するアスラ。いくらソウルコアが使えないとは言え、かなりの実力を有している事は間違いない事。それは今までの冒険の中でも証明されて来ている……………

ただ、焦り、怒り、憎しみ……そして悲しみが今のアスラの判断力、総合的な力を低下させている事に違いはなくて……………

しかし認めない。認めたくない。ここで認めてしまったら『シイナの死を受け入れるのと同義』……………

アスラは仮面Zに向かって怒り狂いながらターンを進めていく。

「ターン06」アスラ

「メインステップ!!…ドラグレッダーを召喚!!…龍騎と合体し、そのままレベル3にアップだ!!」

「!」

ー【仮面ライダー龍騎+ドラグレッダー】LV3(4)BP13000

空間から亀裂が生じ、砕けたかと思えば、その裂け目から赤き龍ドラグレッダーが出る。龍騎の背後で鳥栖を巻き待機する。

龍騎とドラグレッダー。この2体が並んだという事はそれ即ちアスラの本気。

「アタックステップ!!…合体した龍騎でアタック!!…その効果でシンボル1つの相手スピリット1体を破壊して2枚ドロウする!」

「!」

「オレはウイザードハリケーンスタイルを破壊!!」

ストライクベントのカードをベントインし、龍の頭部を模したガントレットを右腕に装備する龍騎。ドラグレッダーと共にそこから火炎放射を放ち、仮面Zのライダースピリット、ウイザードハリケーンスタイルを焼き尽くしてみせる。

さらにこれだけでは終わらない……………

ミラーージュだ。

「スピリットを破壊した事により、龍騎は龍騎サバイブへと転醒!!…さらにドラグレッダーとのミラーージュで赫焉纏し最強の姿、龍騎サバイブランザーになる!!」

「来るか……………」

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】LV3(4)BP17000

サバイブのカードをベントインして強化形態サバイブとなる龍騎。さらにそれに共鳴するかの如く、ドラグレッダーは赤き機械龍ドラグランザーに進化。サバイブの上から見に纏う装備として形を変化させていく……………

そして現れたのは龍騎サバイブとドラグランザーが一体となった姿、龍騎サバイブランザー。今現在アスラが使うことのできる最強のスピリットである。

「行くぞ転醒アタック時効果で最もBPの低いスピリット、ウイザードフレイムスタイルを破壊……………でもってライフに1点のダメージを与える！」

「！」

「メテオバレットミラーージュ!!」

〈ライフ2??1〉仮面Z

両腕が強力な火炎放射器となっている龍騎サバイブランザー。その最大火力をウイザードフレイムスタイルへと放ち、溢れかえった炎が仮面Zのライフを襲った。

これで彼のライフは残り1つ。アタック中である龍騎サバイブランザーの一撃を受

けて仕舞えば終わりである。

だが……………

「不思議なものだ。カードバトルの精神状況によって、あれだけ強力無比だと感じていた龍騎サバイブランザーもこの程度かと思ってしまうのだから」

「なに……………!？」

「ライフ減少によりバースト発動!!……………ウイザードオールドラゴン!」
「!」

仮面Zのバトルはそう甘くはない。事前に伏せていたバーストカードが勢いよく反転していく。

「効果でライフ1つを回復し、このターンの間敵スピリット1体のBPをマイナス12000……………龍騎サバイブランザーから力を奪うよ!」

「ツ……………龍騎サバイブランザー!？」

へライフ1??2へ仮面Z

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ+ドラグレッダー】BP17000??5000

バーストの発動と共に瞬時に回復する仮面Zのライフ。そして赤、青、緑、黄の四つのエレメントが場へと解き放たれると、それは龍騎サバイブランザーへと直撃、そのBPを大幅にダウンさせた。

「そしてこの効果発揮後、自身をノーコストで呼ぶ……現れるオールドラゴン!!」

ー【仮面ライダーウィザードオールドラゴン】LV3(3)BP12000

上空から降り立ったのはドラゴンの意匠を持った仮面ライダーウィザードオールドラゴン。その眼光が、翼が、爪が、尾がそれぞれアスラにプレッシャーを与えていく……

「さて、早速で悪いけど、龍騎サバイブランザーはアタック状態……返り討ちにしちゃおうか、オールドラゴン」

「！」

それ即ちブロック宣言。ウィザードオールドドラゴンが龍騎サバイランザーへと向かって飛び立つ。

龍騎サバイランザーもそれに対抗すべく、背中から炎の翼を出現させ、ウィザードオールドドラゴンと衝突していく。

凄まじい速度で何度も上空で激突していく両者。しかし次第に龍騎サバイランザーが押され始め、オールドドラゴンの鋭く大きな鉤爪がその装甲に傷を入れた…………

そしてその傷で怯んだ隙を見て、オールドドラゴンは龍騎サバイランザーのさらに上空から、胸部にあるドラゴンの頭部より強力な炎を叩き込む。龍騎サバイランザーは地面に叩きつけられ、アスラの目の前で爆散してしまふ…………

その際、合体していたドラグレッダーが逃げ出すように爆炎から飛び出して来た。

「龍騎サバイランザー!!?」

「他愛もないとは正にこの状況…………まさかバーストを無警戒で突っ込んで来るとはね、さあどうするアスラ? ……まだ向かって来るか?」

「ツ……………ターンエンドだ…………」

手札：6

場：【ドラグレッダー】 LV1

バースト：【無】

こんな早いタイミングで龍騎サバイランザーを失ったのはアスラにとって大きな痛手。歯痒い思いをしながらもこのターンは切る。

次は呆気なく龍騎サバイランザーを返り討ちにしてしまった仮面Zのターン。アスラをさらに追い詰めるべくそのターンを進めていく。

「ターン07」 仮面Z

「メインステップ……ライダーマジック、ウィザードウオータードラゴンの効果を発揮！……その効果でコスト6以下のドラグレッダーを破壊！」

「！」

仮面Zの場より放たれた青き水流の弾丸がドラグレッダーを撃ち落とす。ドラグレッダーは堪らず爆散してしまう。

「さらにオールドラゴンの効果、使用したライダーマジックがスピリットカードの時、コストを支払わずに召喚できる……来るがいい、ウォータードラゴン！」

「ツ……マジックの効果を使った後に召喚?!」

ー【仮面ライダーウィザードウォータードラゴン】LV2(3)BP6000

青き魔法陣の中より出現したのは龍の尾を持つ青いライダースピリット、ウィザードウォータードラゴン。

まるでさっきまで何もしなかったのが嘘のよう……

仮面Zはアスラの攻撃をカウンターしたのちにオールドラゴンとウォータードラゴン。この強力無比な2体を軽々と並べてしまった。

「再びバーストを伏せ、アタックステップ!!……オールドラゴン、ウォータードラゴン……出陣だ！」

「ツ……ライフだ!!……ぐっ！」

△ライフ5??4??3△アスラ

重たい腰を上げ、ようやくアスラにまともな攻撃を仕掛けて来る仮面Z。オールドラゴンの巨大な爪の一撃が、ウォータードラゴンの尾がそれぞれ1つずつ彼のライフを砕いてみせた。

「ターンエンド。どうだい?……僕がいつでも倒せると言っただけの意味、理解できたかな?」

手札:5

場:【仮面ライダーウィザードオールドラゴン】LV3

【仮面ライダーウィザードウォータードラゴン】LV2

バースト:【有】

「まだだ……まだオレは負けてねえ!!」

「いいや。もう君は負けてる……このバトルで僕に勝つ事はできない」

「そんなの、やってみねえとわかんねえんだろ!!」

「最後まで諦めない心、執念だけでバトルに勝てると思っただけなのか?……確かに君は今までそうやって乗り越えて来たんだろうけど……まあいい、気が済むまで挑んで来

るといっかい」

……
 ……
 ……
 ……
 ……
 ……

敗北を繰り返しても何度だって這い上がり、最後には勝利を齎した。しかし、それが
 飯に運が良かったただけだとしたら………

「ターン08」アスラ

「メインステップ!!……ドラゴンヘッド3体を連続召喚!」

┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000
 ┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000
 ┆【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

飛び立つのは3体のドラゴンヘッド。コストが必要のない0コストであるこのスピ
 リット達は強力なスピリットを召喚する際の軽減コスト確保には打って付けだ。

アスラはその後手札にあるカードをさらにBパッドに叩きつけ、そのスピリットの名を叫ぶ……………

「続けてオマエだ……………来い、仮面ライダーリュウガ!!」

「来たか、オニキスの創り上げたスピリット……………」

ー【仮面ライダーリュウガ】LV2(3) 10000

様々な鏡像が重なり合い出現したのは黒きライダースピリット仮面ライダーリュウガ。

「召喚時効果!!……………相手スピリット全てのコアを2つずつリザーブに送る!」

「!」

「これでアンタのスピリット全てはレベル1まで下がる!」

ー【仮面ライダーウィザードオールドラゴン】(3??1) LV3??1

ー【仮面ライダーウィザードウォータードラゴン】(3??1) LV2??1

リュウガは己の背後に黒いドラグレッダーを呼び出す。そしてその黒いドラグレッダーは口内から黒炎の炎を放出。仮面Zの2体のスピリット達はそれに炙られ、体内のコアが2つほど弾け飛び、レベルを下げられてしまう……………

「どうだ!!…アタック時効果も使つてこのまま……………」

「やはり君は愚かだ」

「…」

「ライダースピリットとは本来、1人につき1枚しか使えないモノだ。君は何故そのリュウガを使えるようになったのかをちゃんと理解しているのかい?」

「そんなの、オレがイセカイで鍛えて貰ったからに決まつてるだろ!!…一々オレの全部を否定しようとするな!!」

リュウガを見たのはおそらくこれが初めてであろう仮面Z。しかし彼の知識は膨大、何故か知らぬ間にリュウガが使えるようになっていたカラクリも知っているようで

……………

「否定も何も、僕は事実を話しているに過ぎない……相手スピリットの召喚時発揮後によりバースト発動!!…フエアヴァイレ!!」

「!？」

「この効果で僕が今受けた召喚時効果をそっくりそのまま君の場にお返しするよ……つまり、君のスピリット全てのコアは2つずつリザーブに置かれる!!」

「なんだと!？」

ー【ドラゴンヘッド】(1??0) 消滅

ー【ドラゴンヘッド】(1??0) 消滅

ー【ドラゴンヘッド】(1??0) 消滅

ー【仮面ライダーリユウガ】(3??1) LV2??1

無警戒だったがために又してもバースト効果を受けるアスラ。仮面Zの場にも黒いドラグレッダーが呼び出され、同じように黒炎を放たれる。

しかしその肥大は明らかに仮面Zを上回っている。リユウガは辛うじて生き残るも、3体のドラゴンヘッドは呆気なく消滅してしまった。

「さらにコストを支払い、フラッシュ効果を適用……このターンの間、リュウガのアタックを封じる！」

「ツ……今度はリュウガを!?!」

光輪がリュウガを縛る。これではアタック時効果でスピリットを破壊しつつライフを奪う事が物理的にできない。

またしてもたった一枚のバーストカードのせいで攻め手を塞がれてしまった事になる。これは仮面乙が強すぎるからではない。アスラが余りにも無警戒が過ぎる故に起こった、言うなれば事故。

「一度、オニキスが無理矢理君の体から出ようとした時とかなかったかい？」

「オレの体から?!?………ツ」

「あるんだね」

唐突な質問をする仮面乙。

確かに一度だけある、異世界で………

ブラックフォースのヘタマイトが現れた途端暴走したあの日の事をアスラは忘れな

い。

「おそらくその時に溢れ出たオニキスの黒い力の欠片が君の身体の表面に残ったんだ。だから今の君は1人でも黒の力を多少なり扱える」

「また意味のわかんねえ事を……」

「最もその力を使っても僕程度に勝てないんじゃないやブラックフォースに勝とうなんて無理な話だよ。無策で立ち向かった所で死ぬだけだ。あの頂点王のように……!!」

「ツ……リユウガのレベルを上げてターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダーリユウガ】LV3

バースト：【無】

あの時溢れ出ていた黒い力の欠片でリユウガを召喚できるようになったアスラ。しかしそんなモノ理解したところでどうしようもない。シイナを馬鹿にされた怒りを噛み締めながらそのままターンをエンドとした。

「ターン09」仮面Z

「メインステップ……2体のウィザードにコアを追加」

1 【仮面ライダーウィザードオールドドラゴン】(1??5) LV1??3

1 【仮面ライダーウィザードウォータードラゴン】(1??4) LV1??2

「アタックステップ……オールドドラゴン、ウォータードラゴンで攻撃!!」

透かさず攻撃を仕掛けていく仮面Z。さらにこのタイミングでアスラを追い詰めるべく、手札にあるカードを引き抜いて……

「フラッシュマジック、ストライクウィザード!!…スピリット1体のBPをマイナス12000!…0になったら破壊、対象は当然リュウガだ」

「!!」

1 【仮面ライダーリュウガ】BP12000??0 (破壊)

オールドドラゴンが上空に飛び立ち、そこから急降下してライダーキックを放つ。それに身体を撃ち抜かれたリユウガは吹き飛ばされ、龍騎同様堪らず爆散してしまう。

「ブロッカーは消えた……2体の攻撃はどうする？」

「ライフで受ける……ぐっ、があ!？」

へライフ3??2??1アスラ

オールドドラゴンの巨大な鉤爪、ウォータードラゴンの大きな尾が又してもアスラのライフを1つずつ砕いていく。

その凄まじい猛攻に彼は思わず片膝をついて……

「ぐっ……クソ……ッ!!」

「ターンエンド。…僕は君を甘やかに来たわけではない。いい加減、頂点王の……いや君の母の死を受け入れたらどうだ？」

「!」

「既にわかっているはずだ。彼女はもうこの世のどこにもいない事を、君の手を離れて

しまっている……現実から目を背けるな」

頂点王シイナは死んだ。この世で最も強いと謳われていたカードバトラーはこの世のどこを探してももう見つかることはない……

それは最早覆しようもない事実。

アスラだってそんな事わかつている……

わかつているのだ……

ー『オマエが弱いからあの女は死んだんだ』

ー『オマエが最初から強ければこんな事にはなつてねえんだよ!!』

そんな時、オニキスに言われた言葉がアスラの頭を過ぎる。雑な説明だが、一番わかりやすい……

ああ………そうだよ

最初からわかつてたんだよ、そんな事………

豪雨の中、アスラは仮面乙にそう言われ、あの戦いでシイナがウィルのスピリットに串刺しにされた事を思い出した。

何故そうなってしまったのか初めから知っているし、考えるまでもない……………

オレが……………

オレが弱いから、シイナは死んじまったんだろ!?

もう二度と帰って来ないんだろ!?

初めから黒の力に頼らずとも強ければこんな事にはならなかった。ソウルコアよりも遥かに大事なモノを失わずに済んだ……………

世界の終わりの予兆のような大雨が降り注いでいく中、後悔と悔しき、悲しみが混ざり合った涙が溢れ出て来るアスラ。それはまだ16になったばかりの少年が背負うには余りにも大き過ぎるモノ……………

「……………わかつているじゃないか……………だったら最後、彼女は君になんて言った?……………

死の間際、冥土に向かう直前、何を君に残そうとした…!!」
「ツ……最後にシイナが残したモノ……!?」

喝を入れんと叫ぶ仮面Z……………

余りにもショックが大き過ぎて忘れかけていたシイナの最後の言葉をアスラは思い出していく……………

ー『そしてアスラ。オマエに言う事はただ一つ……………諦めるな。ソウルコアがなからうがコモンだろうが、オマエは強くなれたじゃないか、きつといつか頂点王にだってなれる…………頑張れ。頑張れ』

きつとこのメツセージに深い意味はない。

ただ感じるのはシイナの母親としての愛情。

いつもシイナは彼らの前に立っていた目標だった。いつかシイナみたいな頂点王になるのが夢だった……………

そうだ。約束したんだ……………
いつか絶対、頂点王になるって……………

そうだ!!

オレは昔からそうだ!!

諦めない事しかできねえ!!

たとえコモンでも、ソウルコアが使えなくても、目指す憧れがいなくなっても……………

オレはいつか頂点王になるんだ!!

それがオレの夢だから!!……………シイナに与えられた目標だから!!

アスラは誓う。

結局の所、やる事は変わらない。悲しみを乗り越え、また努力を重ねる事しかアスラにはできない。

そしてその雄叫びは世界の涙を拭うかの如く、3日続いた大雨を晴れ上がらせる。

「行くぜZのおっちゃん!!……オレのターンだ!!」

母親の死と言う大きな悲しみを乗り越え、完全に吹っ切れたアスラ。いつもの様子で意気揚々とターンを進めて行くこうとするが……

「フフ……いや、もうその必要はない。その言葉が聞けただけで十分だ」
「!!」

復活したアスラの様子に、仮面Zは口角を小さく上げ、笑顔を浮かべながら徐々にBパッドの電源を落とし、バトルを強制的に終了させる。

「世界が変わる瞬間を見た気がした。やはり君はそう言う宿命にある男のようだアスラ」

「??:……どゆこと!?:……つーかおつちやんなんで色んな事知ってたんだよ!?:……シイナが死んだ事とか、ブラックフォースがどうのこうのとか!!」

「フフ……丁度雨も上がった。少しどこかで休憩しようか……話はそこでやろう」

アスラと言う男の器を再認識し、認め直した様子の仮面Z。図書館の時に見せていた穏やかな表情に戻る。

その後、アスラは仮面Zに連れられるようにオウドウ都のドーナツショップに足を運んだ……

「……君、よく食べるね」

「びまんぶぢにがべるだけかべどがないど!!……ばじよるにだつだらがじやだかもじゃねえ!!」

「『今のうちに食べるだけ食べておかないと、バトルになったら身体がもたねえ』と言い

たいのかな？」

場所を移しドーナツショップ。ドーナツが大好きなムエとかシイナが来たら喜びそうなの場所でありつつたけのドーナツをたいらげていくアスラ。

およそ3日間も寝ていたため、相当腹が減っている事が見て取れる。

そして口に含んだドーナツを全て胃の中に収めると、仮面Zに向かって全力で頭を下げる。

「で……なんか色々あったんですけど、Zのおっちゃん、変な感じになってたオレを無理矢理止めてくれてありがとうな!!」

「ああ、どうと言う事はないさ。結構荒療治だったけどね、でも元に戻れたようでよかったよ」

「正直、シイナが死んじまった事は悲しい……けど、シイナの言葉はまだオレの中に残ってる……だからオレがいつか頂点王になる……シイナの代わりに!!……結局、オレがやる事は変わらない、ただガムシヤラに強くなるだけだ」

「フフ……そう言う君の人格を作り上げたのが頂点王か。良い母親だね」

お礼と謝罪をするアスラ。さっきまでの自分がどれだけ愚かだったのかを理解し、大いに反省していた。

そしてアスラが笑顔で顔を上げたその直後。

仮面Zは言葉が続けて……………

「やはり16年前、まだ赤ん坊だった君とロンを彼女に託して正解だった」

「だろ?……………やっぱシイナは良い母ちゃんなんだよ……………つて、え?」

彼の意味深な発言にアスラは大いに冷や汗を流し、戸惑いを見せる。

「ちよ、ちよつと待つて……………え、なに!?……………オレとロンをシイナに託した!?……………おっちゃんが!?……………え、ドユコト!?……………そりゃオレとロンは赤ん坊の頃シイナに拾われたけど……………え?……………え!?」

「ごめんごめん。戸惑うのも無理はないよね。厳密には頂点王シイナ自身も知らない事なんだけど……………そうだね、これからの話に説得力を持たせるためにも、僕の正体は知っておいてもらおうか……………」

「!?」

そこまで言い出すと、仮面Zはいつもつけていた不気味な形をした狐の面を取り外した。

アスラはこの時、もしかしたら自分の知っている人物が現れるのではないかと冷や冷やしていたが、そんな事はなく、特になんの変哲もない少しイケメンな普通のおじさんだった。

正直ちよつとホツとした。

だが、驚愕するのはこの後であり……………

「このお面を人前で外したのは久し振りだな……………改めて名乗ろうアスラ。僕の名前はゾン……………『ゾン・アーサー』……………君の幼馴染みにして最大の好敵手、ロンの実の父親だ」
「……………」

ああ……………なんかミラーワールドに行った時に聞いた事あったな。

成る程、ロンの父ちゃんのゾン・アーサーか……………ゾンの頭文字がZだから仮面Zって名乗ってたんだな……………

ふくん、あのロンの父ちゃんね……………

ロンの実の父親であるゾン・アーサー。彼は一体アスラやオニキス達ブラックフォー
スの何を知っているのか……………
その全貌が明かされる時は近い……………

60コア「ソウルコアが使えない、その理由」

頂点王であり、母であつたシイナの死という現実を受け入れられないアスラ。そんな彼を正気に叩き戻したのは以前都立の図書館で知り合つた仮面Zと言う男性。

何か多くの事を知っている彼は遂に自分の正体がロンの実の父、ゾン・アーサーである事を明かしたのだった……………

……………

「オレが、救世主!?!」

「ああ。私は君とオニキス、2人の力が合わされば他のブラックフォースをも超える力を発揮できると推測している」

とあるドーナツ屋の人気のないベンチにて会話を繰り広げるアスラと仮面Z、もといゾン。どういうわけか、彼はアスラこそがブラックフォースを倒す救世主たる存在であると信じて疑わなくて……………

「ちよ、ちよつと待てよ!!……いきなり救世主だの超える力だのなんだのつて言われたつてわかんねえよ!!……オレバカだし!!……もつとこう、わかりやすく説明できない?」

「うん。もちろんそうするよ……先ず、そうだな。あの時君達が借りて行った図書館の本、あるだろ?……大昔のブラックフォースの事が記載されたヤツ」

「ああ……うん。特に欲しい情報とか書いてなかったつてエールが言つてたけど」

「図書館で借りたのは伝記と言うよりかは昔話に近かった。大昔に悪い事をしたブラックフォースが神様に懲らしめられ、別の世界、即ち黒の世界に放り込まれると言うモノ……」

「僕は色んな場所でブラックフォース、黒の世界の事を研究して来た。その結果、本とは微妙に違う本当の歴史、そして新しい情報を得る事ができた」

「!!」

「大まかな話の流れは変わらないが、先ず、ブラックフォースを黒の世界に封印したのは神ではなく、大昔に実在したとある一族」

「一族??……エールのオメガ家みたいな感じか?」

「そうだね。その考え方が非常に近い……………因みにその一族の名前は『ギアの一族』……覚えておいてくれ」

「ギア……………歯車って意味か？」

「そのギアの一族がブラックフォースを黒の世界に封印、後に黒の世界に赴き、それらを監視していたと言われている」

何千年も前、ブラックフォース達を黒の世界に追いやったのは神ではなく『ギアの一族』と呼ばれるとある一族。

確かによくよく考えれば本当に神など存在するわけがないため、そっちの方がまだ信憑性はある。

「次に、この世界と黒の世界の関係についてだ。この世界と黒の世界はどうやらどこかに繋ぎ目があるらしく、そこから行き来ができるらしい……………まあ僕も見つけた事はないんだけど」

「ツ……………じゃあブラックフォース達はその繋ぎ目を探してこの世界にまた来たって事か!？」

「ああ、多分ね。ただその繋ぎ目とやらを見つけたとしても、直ぐに世界を渡る事はでき

ない」

「?!……な、なんで!?!」

「そこでも代償の力が働くからだよ。しかもブラックフォースのそれを遥かに凌ぐね。いくらブラックフォースと言えども片道だけで黒の力の殆どを交通費のように失ってしまう。普通の人間なら持つての他、多分命を落とすだろうね」

この世界と黒の世界の繋ぎ目。

確かに存在するそれであるが、それにもまた代償が付き纏う。その道を通るだけでブラックフォースは大半の力を失い、普通の人間だと命を落とすはめになる。

しかし、この時アスラにはある一つの疑問が浮かび上がった……………

「代償……………ん?……………じゃあさつき言ったそのギアの一族って人達は何を失ったんだ?……………黒の世界に行ってブラックフォースを監視してたんだよな?」

そう。

ギアの一族が何を失ったかだ。

ブラックフォース達は黒の力の大半を、普通の人間なら命を……………

いくらブラックフォースを倒せるくらい強かったとは言え、何も失わずに黒の世界に行けるとは考え辛い……………

「……………よくその点に気がついたね……………そうだ。失ったんだ、黒の世界に向かう時に、ギアの一族も……………」

「お、やっぱそうなんだ……………何失ったんすか?……………ブラックフォースを倒せる必殺技!!……………とかつすかね?」

呑気な事を言うアスラだが、ゾンは一度呼吸を整え、覚悟を決めたようにアスラに告げていく……………

その真実を……………

「ギアの一族が黒の世界に向かう際に失ったモノ……………それは……………」

ソウルコア

ー!!

ゾンがそれを静かに告げると、アスラは突然背中が震え上がったかたかたつてない程に寒気がした。とてもではないが急に他人事とは思えなくなつた……………

「そ、ソウル……………コア……………だつてツ!？」

「ギアの一族はソウルコアを出すと言う人間としての機能を失つてしまつたんだ。おそらく、その後の子孫にも遺伝し、大きな影響を及ぼしている。そしてギアの一族は何千年と黒の世界で暮らして来た……………無理もないよね、また戻れば次は死ぬかもしれないんだから」

「……………」

汗が止まらない。心臓の鼓動が加速して鳴り止まない。一言も言葉を話せない……………

そしてゾンはその真実を口にする……………

「もう、言うまでもないんだろうけどね……………君の本当の名前は『アスラ・ギア』……………僕の推測が正しいのなら、君はギアの一族の末裔で、しかもその最後の生き残りだ」
「……………オレが……………そのギアの一族、大昔にブラックフォースを倒した一族の子孫!」

今までアスラは自分だけがソウルコアを使えないと言う現実に疑問に思う事が殆どなかった。それが当たり前前、例えばそれがなくても強くなつてやると必死だった。

しかし、無くて当たり前前だったのだ。何せアスラはブラックフォースの封印に命を賭け、結果的にソウルコアを無くしてしまったギアの一族だったのだから……………

「ギアの一族には特別な力がある。それは絆を深めた者に進化の力を与えると言うものだ」

「進化の力!」

「うん。この旅をして来た1年間、君の周りでカードやデッキの進化は何度起こった?」
「え?……………あ……………7回?……………8回?……………9回?……………まあそんなもん」

「本来デッキの進化とは生きている間で一度見れるか見れないかと言った頻度でしか起きない。一年程度でその数は余りにも異常……………やはり間違いなく君はギアの一族、他の者達に大きな影響を及ぼしていたんだ」

「！」

ゾンが言うには、ギアの一族は進化の力を分け与えると言う。

エールを始め、ロンやトウエンティ…………アスラと強い関係がある者達は皆進化をして来た。それこそがソウルコアを除き、アスラがギアの一族である何よりの証拠…………

「オプシディアンの手先、ウィルが執拗に君を狙って来たのもオプシディアンが君の力を恐れたからだ。本来、相反する黒の力とギアの一族の力、それが合わさって仕舞えば、どんな強大な力になるかわかったものじゃないからね」

「…………あー、なるほど…………だいたいわかったかもしんねえ…………」

「ハツハツハ…………3割程度は理解したって感じの顔だね。まあ君が黒の世界で生まれた存在で、特別な力を持つていたとだけ考えてくれればいいよ」

色々と凄まじい情報量にアスラは完璧に理解はしていない様子。しかし、しつかりと重要な情報だけは頭にインプットしてある。

それは自分がギアの一族であることと、何で生まれ持つてソウルコアがなかったのか、と言う事。

「驚いたかい?……急な話でショックだったろ」

「ん?……いや、まあそりゃビックリはしたけど、何でオレがソウルコア使えないのかをわかっただけでも全然いいし……それに、何にせよ、オレにとつての家族はシイナと口ンだから!……そこが変わらなければオレは平気でへっちゃらだ!」

「……フフ、君のような兄弟がいて、息子は幸せだろうな」

「いや〜〜それ程でも〜〜つーかオレにとつてはおつちやんがロンの父ちゃんだったって事がよっぽど衝撃的だったつすよ〜」

確かに、衝撃的な内容ではあった。

だが、アスラは別に気にしてはおらず、寧ろソウルコアが使えない理由を知れたのを嬉しくさえ思っている。

「あ、でもまだまだ色々謎があんぞ!?……オニキスの事とか、あとオレがここにいてって事は一度、黒の世界からこの世界に来たって事だよな!?……なんで出入りするだけで何かを失う裂け目をオレはほぼ無傷でたどり着けたんだ!?……え、オレひよつとしてソウルコア以外にもまだ何か失ってる?……ハッ、まさか身長!?!」

「いや、身長がないのは生まれつきだと思っよう」

アスラの言う通り、この情報だけではこれまで疑問視されて来ていた全ての謎は解決できない。ブラックフォースのオニキスが何故アスラの中にいたのかも謎だし、アスラが無傷で、しかも赤ん坊の姿でこの世界に来れたと言う新しい疑問まで生まれてしまった。

「僕も全ての過去を知っているわけではない。推測の域を出ないモノもあるしね。詳しくは彼本人から直接聞くでしょう……………」

「彼？」

「無論、オニキスだ」

「!!」

「言っただろう。君はオニキスと分かり合えなければならぬ」と

「で、でもどうやって聞くんだよ!?!…オレの中にいるのは知ってるけどアイツ殆ど喋らないっすよ!?!」

「そこでこのアンダーワールドを使う」

「!?!」

オニキスと話すと言うゾン。デツキからウィザード専用のネクサスカード「アンダーワールド」を徐に提示する。

「以前、このネクサスを配置して、君の最も思い出深い所を再現しただろうか？」
「おう」

「それは君の心の中、即ちオニキスが棲みついている場所でもある。このカードはかなり特殊だね、その思い出深い場所、つまり君の心の中に向かう事ができる」

「ツ……オレがオレの心の中でオニキスと対面するつて事か!？」

「そう。彼が君の肉体を狙っているのは先刻承知ではあるが、しのごのとは言ってもらえない」

ウィザード専用のネクサスカード「アンダーワールド」……………

かつてアスラの生まれ故郷であるスーミ村をバトル中に再現したのは記憶に新しい。使用者の精神の中に向かう事ができる奇怪なアイテムである事が、今ここで判明した。

「街外れに行くのか。ここから精神世界に向かうにはいささか人が多過ぎる」

「お、おうっす」

ただでさえ人影はないが、やはり少しでも見られたらダメなのか、立ち上がりながらそう告げるゾン。アスラもそれに釣られて立ち上がり、ドーナツ屋を後にオウドウ都の街外れへと歩みを進めて行った……………

そして歩きながら、アスラはもう一つ別途の疑問をゾンに告げて……………

「なあ乙のおっちゃん、アンタがロンの父ちゃんだつて事、ロンは知ってるのか?」

「いや、知らないだろうね、僕も君以外の人物に正体を明かそうとは思わない。これからも仮面乙を名乗るつもりさ……………それにあの子の家族はもう君と頂点王だ。今更あの子を捨てた僕に父親の資格なんてないよ」

「……………そんな事ねえよ。おっちゃんがその気にさえなれば、きつといつか、絶対、家族として話せる時が来るって」

「フフ……………君はやはり優しいな」

そう告げながら再び狐の面を徐に被る仮面乙。如何に理由がどうあれ、その心の奥底ではロンを捨てた事を後悔しているように見える。

そして2人はオウドウ都の門を潜り抜け、街の外れ、森の中まで足を踏み入れる。

「よし誰もいねえぞ!!…行きましようオレの心の中!!」

「いや、実はもう1人君の精神世界に連れていきたい人物がいる」

「ん?…もう1人?」

仮面乙の計画にはもう1人アスラのアンダーワールドに連れていく人物がいるとう。

最もあり得そうなのはアスラの幼馴染みで仮面乙の息子であるロンだが、仮面乙の精神衛生的に彼は有り得ない。アスラが誰なのかと考えていると、仮面乙はその人物を呼んだ。

「出て来たまえ」

「……………」

「ん?」

茂みから姿を現したのは赤い髪に鋭い目付きの青年。歳は精々20半ばと言ったと

ころか。

無言で仏頂面で現れた彼の事を、アスラは覚えていて……………

「あ!!…………アンタ確かシエン町の水道公園にいた…………罰金の人!!」

「誰が罰金の人だ、金取られたいのか？」

「やっぱ罰金の人じゃねえですかアアア!!」

「なんだ君たち知り合いだっただのかい？」

「知り合いつてもんじゃねえ、ただの金蔓だ」

紫のカラーリダーが住む街シエン町。そこでアスラが一度迷子になった際に出会っていた青年で間違いなかった。

「彼の名前は『イツカク・アカバネ』…………僕の良き協力者さ、性格は結構尖っているが、こう見えてとても頼りになるんだよ」

「アンタから金をたんまりもらいたいだけだ」

「やっぱサイテーだこの人オオオ!!」

彼はと言う立場なのかは定かではないが、この男イツカクは仮面Zの協力者。喋るたびに性格の悪さが露呈していく。

「……メザシは死んだんだってな」

「??……メザシ?……誰?」

「シイナ・メザ。だからメザシだ……テメエはアイツの息子なんだろう?」

「え、あ、はい!!」

「ヤツはオレの最高のライバルだった。卓越された精神力、カードの腕前、ドロークス、全てにおいて他のカードバトルを超越していた。そんなヤツをいつか必ず超えてやろうと思っていた……だがまさかこんなチンチクリンを庇って最後を迎えたとはな、ヤツも結局は弱者か」

「ッ……なんだと!」

イツカクの放った言葉がアスラに怒りを募らせ、険悪なムードに包まれる。

どうやらイツカクはシイナを昔から知っているようであり、軽くアスラに対して当たっている様子……

余程自分の手で彼女をバトルで負かしたかったに違いない……

「まあまあ、そう怒らないよイツカク……………」

「オレの怒りを止めるなZ。止めたら3万円の罰金だ……………」

「ああ、後で払っておくよ。君の仕事はこれからだろ?……………だつたらその怒りはそれまでに取って置くといい」

「仕事?」

仮面Zがイツカクに任せてある仕事。その意味がわからず首を傾げるアスラだが、そんな折遂に精神世界へと使う時がやって来た……………

「少々ごたついたが、これで役者は揃った。行こうかオニキスの元に」

「おお!!……………で、どうやって行くんすか?」

「なあに、簡単さ……………こうすればいい」

「!!」

唐突にアンダーワールドのカードをアスラの額に軽く当てる仮面Z。

すると、眩い光が3人を包み込んでいき、やがて3人はこの世界から姿を消した

.....

.....

一方その頃、アスラの幼馴染にして生涯のライバルである少年ロンはとある人物とバトルをしていた。

互いに激しい攻防を繰り広げる中、ロンのBパッドから着信音が鳴り始めたため、一度バトルは中断される。

「すまない」

「いいさ。しばし休憩だ、出なよ」

対戦相手の金髪の女性から許しをもらい、ロンはその着信に応じる。

その相手は.....

《ロン!!……アンタのところにアスラはいる!?!》

「……なんだエールか。アスラは知らん、と言うか目が覚めたのか?」

エックスの身分を持つオメガ家の少女エールからであった。妙に切羽詰まった様子である事から、ただ事ではないと認知するロンであるが……

《お医者様からアスラが病院から抜け出したって言われたのよ!!……何故か電話にも出ないし………兎に角アンタも探しなさい!!》

この時、既にアスラは病院を飛び出し、仮面Zと再会、自身の正体を聞かされ、アンダーワールドへと向かったのだ。

当然エールの応答に答えられるわけもない。大事な存在であるシイナを失って、アスラまで失うわけにはいかない。そう心配したエールは焦ってロンに着信を入れたのだ

………

しかしロンは………

「探す必要はない」

《はあ!?!……何でそうなるわけ!?!……きつとアスラはシイナ様を探してるわよ……だってシイナ様はアイツにとって……》

「そんな事、オレの知るアスラならやらない。いなくなったのなら、オレと同じく修行をしているに違いない……アイツはさらに強くなる。だったらオレもそれに合わせて、いや超えられるくらい強くならないといけない。オマエは何をしているエール……そのまま探しているだけじゃ前に進めないぞ」

《!?!》

そう告げると、ロンはエールからの着信を切った。アスラの行動を予測した2人だが、正確にはどちらも正解と言える。

ただ、結果的にアスラはさらに強くなる道を選んだ。彼の言う通り、前に進み続ける事が最も重要な一手なのだ。ロンにそう言われたエールもきつとそれに気が付けたに違いない……

「お、もういいのかい?」

「ああ、悪かったな。アンタとソイツを待たせて……」

再び対戦相手に顔を向けるロン。そこには金髪の女性の対戦相手だけではなく、黄金色に輝く三つの首を持つ龍の姿も見受けられた……………

「別にいいさ。その分、アタイとこのギドラを楽しませてくれればな!!」

「…………シイナから貰ったこのカード、オレは必ず使いこなしてみせる…………オマエには負けないぞ、アスラ!!」

その女性の名はイカツチ。これまで何度かアスラ達と出会って来た強敵である。そんな彼女とそのエースカード、ギドラを相手に、ロンは修行をしていた。

全ては己をさらに強くするために……………

亡き母であるシイナを超えるために……………

ロンはシイナの形見とも呼べるそのカードを握りしめ、咆哮を張り上げるギドラに挑み続ける……………

「……は……」

「これが君のアンダーワールドだ……と言っても前のバトルで映した情景と何ら変わらないがね」

「……………田舎臭いな」

野原が広がり、そよ風が通り過ぎて行く小さな村。

その名はスーミ村。王国の隅っこに存在する事からそう名付けられた最低身分コモンの人間達が住む村。

そしてそこにはアスラとロン、シイナが住んでいた小さな木の家も見受けられた。アスラがそれを懐かしそうに眺めていると……………

突然そのドアが開いて……………

「おいロン!!…オニごっこやろうぜ!」

「2人で鬼ごっこことかつまらなさ過ぎるだろ、バカなのかアスラ?」

「誰がバカだアアアアア!!」

ー!!

「アレは……オレとロン?」

その小さな家から飛び出して来た小さな男児は紛う事なきおよそ10年以上前のアスラとロン。昔はよくそうやって2人で遊んでいた事をアスラは思い出す。

そして、今アスラが最も会いたいであろう人物もそこにはいて……

「まあいいじゃんロン。私を入れて3人でやろう」

「ッ………シイナ……!!」

アスラのアンダーワールドの中にいたのは他でもない10年以上前のシイナ。今の自分と対して年齢は変わらない年頃である。

若いとは言え、死の悲しみを乗り越え、断ち切ったとは言え、生きて、動いているシイナの姿に、アスラは思わずその方向に足が向いてしまうが……

「いや………ダメだ。止まれよオレの足……アレはシイナだけどシイナじゃねえだろ

……」

今すぐ母に向かって行きたい気持ちを制御し、その足を止めるアスラ。そうだ。

会いに来たのは母ではない……………

ー!!

突如としてアンダーワールドの時が止まる。

さつきまで動いていたシイナや昔の自分達の動きもピタリと止まり、動けるのは現実世界からやって来たアスラ達3人だけとなる。

そして、こんな所業ができるのはあの人物しかいない……………

……………ゼゼゼ

こいつは都合だ。

まさかテメエの方からオレの所に来るなんてな……!!

ー!!

乾いた笑い声と共に黒い瘴気がアスラ達の元に集まって行く。そしてその黒い瘴気は一体の人型の生命体へと姿を変える……………

背丈はアスラより少し高い程度、赤い瞳、黒い眼球。龍のような尾を持つ驚異的な生命体、ブラックフォースの一人、オニキスが遂に本当の姿でアスラの前に姿を現したのだった……………

「オニキス……………ッ!」

「どんなカラクリでここに来たか知らねえが、ようやくオレに身体を明け渡す気になったかアリンコ」

「アレがブラックフォース……………なんか汚いな。想像以上に」

初対面のイツカクがそう言葉を漏らす中、今度はアスラが口を開き……………

「……………オニキス、オマエに身体を渡すために来たわけじゃねえぞ。でも、オマエに直接会えたら言っておきたい事はあった……………今まで、オレの力になってくれて、ありがとう

!!

「……………は？」

アスラから突然感謝の言葉を告げられ、苛立ったように、戸惑ったように言葉を漏らすオニキス。

そのままアスラは言葉を続けて……………

「どんな理由があつてオマエがオレの中にいたのかは知らないけど、オレはずっとオマエに助けられて来た!!……………だからオレ、本当はオマエにスツゲエありがとうつて伝えたかったんだ!!」

「……………」

「成る程、君らしいねアスラ」

「メザシの息子つて感じがしてオレは気に食わんな」

おそらく最初は殺人鬼オロチとの対決が最初だったか、その後もミラーワールドで二度、異世界で一度、カラーリーダー戦で一度、と言った具合にアスラは何度も黒の力で死戦を潜り抜けて来た……………

オニキスの力なくして、今のアスラは存在しないのだ……………

「馬鹿か。それがテメエの身体を乗っ取ろうとしているヤツに向かって言うセリフかよ」

「おう!!……………つーか、オマエの本当の姿ってなんかちんまりとしてんだな。オレの事散々アリンコ呼ばわりしてたくせに」

「そんな事はどうでもいい。身体を渡す気がないなら今すぐオレと戦え……………力づくで奪い取ってやる……………ッ!!」

「ッ……………おい待てよ、オレはオマエとバトルしに来たんじゃない!!」

「そんな事はどうでもいいと言った!!」

やはり何かしらの復讐のため、オニキスはどうしてもアスラの身体が欲しい様子。己の黒き力を固め、Bパッド上のモノを形成し、それを腕に取り付けた。

「オニキス……………!!」

「やはりそうなってしまったか。仕方ない、戦うんだアスラ……………君がやるしかない」

「……………おう、わかってる」

仮面乙にそう言われ、アスラもまた己のBパッドを構える。その後、仮面乙はオニキスに対して口を開き……………

「バトルをやる前にオニキス、私の事、覚えているかな？」

「ああ？……………あー成る程、仮面被つててわからなかったが……………オマエあの時いた人間か。通りでコイツの頭の中に『ギアの一族』が記憶されていたわけだ」

「ええ!?…頭の中とか記憶とかって何!?……………オマエオレの頭の中覗けるのオオオ!?……………怖過ぎだろその設定!?!」

過去に面識があつたかのような発言をするオニキスと仮面乙の2人。アスラが別の理由で驚く中、仮面乙は言葉を続けて……………

「オニキス、君は『あの方』の復讐のためにアスラを器とし、龍騎を従え、16年も力を蓄えていたのだろうが、それだけで他のブラックフォースを倒す事はできないよ。何せ、元々彼らの力は君以上な上に、彼らもまた16年力を蓄え続けて来たのだからね」

「……………あの方?」

「その程度の力しかない君では犬死するだけ、普通の人間の中でブラックフォースを唯一倒せるかも知れなかった頂点王シイナ・メザももういない。ヤツらを倒すために君は、ギアの一族最後の生き残りである、このアスラと手を取り合うしかないんだ」

「黙れ……………オマエ如きにオレが理解されてたまるか、それにオレはもう十分力を蓄えた。他のブラックフォースなど、優に超えている!!」

とは言っているオニキスではあるものの、実際はまだまだオニキスの力は他のブラックフォースよりも下。

一度異世界での戦いで暴走した際に、まだ不完全だったヘタマイトが創り出したヤクーツオークにリュウガが敗北した事が何よりの証拠。実際はただの強がりなのである……………

だが、彼にも意地がある。もう一步も引く事はできない……………

自分の手で他のブラックフォースに殺されたアイツの復讐を果たすまでは、止まる事はできない……………

「そうだ。オレは、そのためにコイツらを育てて来たんだ……………来い!!」

「ッ!?!……………龍騎!?!……………みんな!?!」

オニキスがその手をアスラに向けて翳すと、アスラのデッキの中からカードが4枚程飛び出して行く。

それは「仮面ライダー龍騎」「仮面ライダーリユウガ」「ドラグレッダー」「ブラックウォーグレイモン」……………どれも黒き力の息がかかったカードばかりがオニキスの手に渡って行く……………

「オマエは龍騎に選ばれていたわけじゃねえ、コイツに選ばれていたのは、このオレだ!!」

「!!」
「あの日、あの時、あの瞬間……………オレが龍騎を呼び寄せた。何せ、オレのカードだったからな!!」

思い出すあの日、あの時、あの瞬間。

スーミ村を旅立つ半年ほど前にモスラ使いの盗賊、クサリと戦った事をアスラは決して忘れてはいない。あの時、龍騎が自分の所に現れた原因は他でもないこのオニキスだと言う……………

普通であれば、龍騎が自分のカードではない事を受け、ショックを受けた表情を見せ
てしまうだろうが……

アスラはそんな事はなかった。寧ろ笑ってみせ……

「へへ……そつか、あの時もオマエが助けてくれてたんだな」

「ツ……オマエの顔は、本当に腹立たしい……オレの前で、笑うな……!!」

「笑うさ!!……だってオレは、オマエと死ぬ程仲良くなりてえからな!!」

「だったら死なせてやるよ!!……そして必ず、オマエの身体を奪い取る!!」

譲れない想いがあり、叫び合う両者。

アスラは龍騎もリュウガもブラックウオーグレイモンも欠けてしまったデツキをB
パッドにセットし、バトルの準備を終える。

そして遂に……

……ゲートオープン、解放!!

アスラのアンダーワールドの中で、アスラ自身とオニキス。2人のバトルスピリッ

ツがコールと共に幕を開けた。

先行はオニキスだ。アスラの身体を奪い取るべく、そのターンを進めて行く……………

「ターン01」オニキス

「メインステップ!!…犀ボーグを召喚、召喚時効果でボイドからコア1つを自身に追加」

1【犀ボーグ〈R〉】LV2(2)BP5000

その姿、明らかに機械化されたサイ。犀ボーグを召喚してコアを増やして行く中、アスラはオニキスにあるモノが欠けている事に気がついた。

……それは自分にもないモノであり……………

「オマエもソウルコア、使えないんだな……………」

そう。

赤く、大きなコア、ソウルコアがないのだ。アスラは生まれて初めて自分以外にソウ

ルコアが使えない者と対面した事になる。

「ここはオマエの中だからな。必然的にオレもソウルコアは使えなくなるんだよ」

「……………なんでオレだったんだ？」

「ああ？」

「なんでソウルコアが使えないオレの中に入ったんだ？……………探せば強いヤツなんていくらでもいたのに……………なんでオレなんかの中に入ったんだ？」

確かにそうだ。

幾らアスラがギアの一族の末裔とは言っても、当時はまだ赤ん坊だった上にソウルコアが使えないのも確定。普通に考えたらオニキスにとって、アスラの中に入るメリットはない。

ただ、それはオニキスの過去に由来するモノであって……………

「ターンエンドだ。早くしろ」

手札：4

場：〔犀ボーグへR〕LV2

バースト：【無】

質問には答えず、そのままターンをエンドとするブラックフォース、オニキス。次はアスラのターンが始まる。

「ターン02」アスラ

「メインステップ……マジック、フェイタルドロ……その効果でオレはデツキから2枚ドロ……さらにバーストを伏せてターンエンドだ」

手札：5

バースト：【有】

バーストは伏せたものの、スピリットは召喚せず、マジックの手札増加のみでそのターンを終えたアスラ。

すぐさまオニキスにターンが渡る。

「ターン03」オニキス

「メインステップ……2体目の犀ボーグを召喚。再びコアを追加し、そのままレベル2にアップ」

1 【犀ボーグ〈R〉】 LV2 (2) BP5000

2体目の犀ボーグが姿を見せると、またもやコアブースト。着実に決着までの準備を進めて行く……

「ターンエンド」

手札：4

場：【犀ボーグ〈R〉】 LV2

【犀ボーグ〈R〉】 LV2

バースト：【無】

このターンも攻撃は無し、オニキスはそのターンを終える。

そんな彼の行動を疑問視したのは、他でもないイツカク……

「エンド?……アタックはしないのか?」

「アスラのコアが溜まるのを警戒してるんじゃないか?」

「アレだけ張り切っていた割には大人しいと思っただけだ」

「……確かにね、やはりアスラを攻撃するのに若干躊躇いがあるのかもしれない」

「??……どう言う事だ」

気性が荒い割にはプレイングが大人しいオニキスに疑問を抱くイツカク。しかし、その理由を仮面Zは知っているようで……

何はともあれ、次はアスラのターンだ。負けじとターンシークエンスを進めて行く。

「ターン04」アスラ

「メインステップ!!……ドラゴンヘッド、シャムシーザー、ドラグノ突撃兵を召喚!!」

ー【ドラゴンヘッド】LV1(1)BP1000

ー【シャムシーザー】LV1(1)BP2000

1【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV2(3)BP6000

アスラのバトルにおいて、いつものメンバーが大集結していく。

「龍騎がいなくても、コイツらがいる」……そう言わんばかりにアスラはメインステップを終え、アタックステップへと突き進む……

「アタックステップ!!……ドラグノ突撃兵でアタック!!……効果で1枚ドロー!」
「ライフで受ける!!」

〈ライフ5??4〉オニキス

このバトル、先に先制点を与えたのはアスラ。ドラグノ突撃兵が大剣を振り下ろし、そのライフバリアを1つ砕いた。

さらにまだ、ドラグノ突撃兵は動けて……

「ドラグノ突撃兵【追撃】の効果、重疲労状態にして、もう一度攻撃だ!……カードをドロー!」

「それも受ける!!……ッ」

〈ライフ4??3〉オニキス

ドラグノ突撃兵二撃目の攻撃がオニキスを襲う。そのライフを半数近くまで削られた。

「よし!!……これでターンエンド!!……どうだオニキス、龍騎がいなくてもオレは強いぜ!」

手札：5

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【シヤムシーザー】LV1

【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV2

バースト：【有】

速攻により勢いついて来たアスラ。龍騎がデッキからなくなっても、異世界での経験により、ある程度は戦えるのだ。

それ程までにアスラはカードバトラーとして強くなっていると見える。

「テメエ単体の強さなんてたかが知れてる……その程度だからオマエは大事なモノを失ったんだ……」

「知ってる……だから、そうならないためにオマエと力を合わせたいんだ!!」

言い合いになる中、オニキスは巡って来た己のターンを進行させていく。
全ては復讐のためだ。

「ターン05」オニキス

「メインステップ……来い、仮面ライダー龍騎!!」

「!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(3)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、龍の影を纏う赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎が場へと、アスラの目の前に出現した……

「不足コストは犀ボーグ1体のレベルを1に下げて確保……このターンだ、このターンからオレはオマエを攻撃する……!!」

「ああ、どんと来い!!……とことん楽しもうぜ!!」

自分のエースを前にすると言う確実に不利な状況の中、アスラはまたしても笑ってみせる。

その笑顔がオニキスの過去に突き刺さり、より怒りに火を付けさせる……………

「……………だから笑うなっつってんだろうが……………!!」

オレに……………

オレにあの日の事を思い出させるな……………!!

内心でそう叫ぶと、オニキスは一瞬にして思い出してしまった。あの時の思い出を

悲しみ、怒り、憎悪を……

オレはいつ、どうやって、誰から生まれたのかわからなかった……

ただ目の前にはいつも他のブラックフォース共がいて、ソイツらと一緒に破壊の限りを尽くして来た。

その日々は正直楽しかった。泣き叫んで逃げて行く人間の姿を見るのが、何より至福だった。

ギアの一族に黒の世界へと幽閉されるまでは……

その後とはある遺跡の奥で手足を縛られ、生き地獄を見続ける日々、暇だから数を数

えていた。それはそれはもう、呆れるくらい長い数字になっていったよ。

他のブラックフォースは別の場所に幽閉されたみたいで、喋る相手もいなかった。この時のオレは、兎に角退屈だったんだ……………

そんなオレが数えるのをやめようと思ったある日の事……………

ソイツはココノコとやって来た……………

「おおくく!!…これが伝説のブラックフォース!!……………物騒な見た目なのは噂通りだけど意外と小さいのね」

「……………誰だテメエ」

「喋ったアアアー!!!」

やけにテンションの高い女だった。汚ねえ灰色の髪色で、今の時代で言うところの、ショートヘアつー髪型……………

だがソイツがこのオレの運命を大きく変えちまうなんて、この時はまだ思ってもいなかった……………

「あ。先ずは自己紹介しないと……………オレ、キョーラ!!……………『キョーラ・ギア』!!……………こう

「見えて絶賛妊娠1ヶ月です!!」
「……………」

その女の第一印象は兎に角『バカそう』『アホそう』……………それに限った。

61 コア「オニキスとキョーラ」

オニキスは過去を振り返っていた。

時は17年前、彼が異世界、黒の世界のとある遺跡に幽閉されている際に『キョーラ・ギア』と言う女性と出会った時まで遡る……………

「ねえねえ！…オニキスってさあ、ずっとここで普通に一人暮らし？」

「うるせえ。つか手足を鎖で縛られてるこの姿のどこに普通に暮らしの要素がある」

好奇心が余りにも旺盛であるキョーラ。とてもではないが妊娠1ヶ月とは思えない。

「鎖ね…あ、お腹空いてんじゃない？…サンドイツチ食べる？」

「要らねえ」

「遠慮すんなって、オレが食べさせてやるからさ。こんな美人に「あくん」してもらえないなんて早々ないぞ？」

キョーラ・ギアと言う女性は兎に角明るかった。その太陽のような眩しさをオニキスは毛嫌いしていた。

最初のうちは……………

「オマエ、結局のところ何しに来たんだ？…………ギアの一族なんだろう？…………オレ達ブラックフオースに今度は何しようってんだ？」

「ん？」

何千年も昔の事、オニキス達ブラックフオースはキョーラ・ギアの子孫であるギアの一族にここ、黒の世界へと幽閉され、今のこの状況がある。

オニキスはその子孫たるキョーラが姿を見せた事から、また何か自分達に危害を加えるのではないかと警戒していたが……………

「別になんもしないよ？…………ただオレはブラックフオースがどんなだろうって見に来ただけだ。村のみんなには盛大に反対されるだろうけど」

「なに？」

キョーラは妊娠中の暇潰しに旅をしていて、その道のりで伝説となっていたブラックフォースに会いに行っていただけ。一族間でその行為は禁じられていたようだが、好奇心故に彼女はパンドラの箱へと飛び込んだのだ。

ただ、彼女は仮にも自分達を別世界に幽閉した子孫。オニキスが彼女の言葉を信じられるわけがなく……

「惚けるな!!…今度はオレの力でも奪おうってのか!？」

「だから何もしないって……困ったな」

「どうやったら信じてもらえるのだろうとキョーラは考え込む。

するとある一つの解決策が頭に浮かんで来て……

「よし。じゃあ切ろうか」

「ああ?……何をだ?」

「ふっふっふ、無論その鉄の鎖さ。このチェーンソーで!!」

「ツ……オマエ、今どっからそんなモン出しやがった!？」

「細かい事はいいんだよコレ小説だからアアア!!」

「バカ、やめろ、こんな狭いところで振り回すな……う、うおおお!!?」

どこからともなく取り出したチエーンソーに電源を入れ、振り回し、オニキスの鎖を切断し始めるキョーラ。

そして何千年も経過した故に錆び付いていた鉄の鎖、ブラックフォースの封印の印を、彼女は凄まじく強引に断ち切って見せて……

「っしやあ!!……これで完了だな……どうよ久し振りの動く手足つてヤツは!」

「……………」

「これで少しは信用してもらえたかな?…流石にちよつと可哀想だったもんね!」

唾然とするオニキス。残忍な特徴を持つブラックフォースである自分が思うのもアレだが、余りに狂気じみたモノをキョーラから感じた。

コレ程のバカは見たことがない。自分達の一部が必死こいて封印した自分を解放するなど……………

「オマエ……バカじゃねえのか!?!……オレはブラックフォースだぞ!?!」

「……………つかサンドイッチってなんだよ」

「え？……………サンドイッチも知らないの!?!…美味しいぞ〜」

こうしてしばらくの間、ギアの一族の末裔キョーラ・ギアとブラックフォースのオニキス、2人の黒の世界を回る奇妙な冒険が幕を開けた……………

最初のうちはオマエを背後から殺してやろうと思った。

何ていったってオマエはオレ達をこの世界に幽閉した一族の末裔なのだからな。

だが、信じられねえくらい無邪気でどうしようもなく無垢なオマエと色んな所を回っていくにつれてそれが段々馬鹿らしくなって来ちゃった。

奴らの子孫に復讐して何になる……………

そこまで思い至ったらオレはオマエのことを好きになっちゃってた。どうしようもなくなく……………

勘違いするな。いわゆる恋愛とか、異性だからとか、そう言うモノじゃねえ……………

生まれて初めて、家族のような温かみをオマエから感じていたんだ……………
だから、オマエの腹からガキが産まれた時は、それなりに嬉しかったよ……………

共に旅をするようになってから早数ヶ月後のとある日の事、オニキスとキョーラが歩みを進めていく中、男の子だろうか、キョーラが抱く赤ん坊が大きな泣き声を上げる。

「……………おい、テメエのガキうるせえぞ」

「まあまあいいじやねえか、可愛いだろ〜〜！」

「……………ハムみてえ」

「食うなよ!?!:オレの子供だぞ!?!」

キョーラは反射的に赤ん坊をオニキスの側から背ける。そんな彼女をオニキスは鼻で笑う。

その様子からして、2人があれ以降相当打ち解けている事が容易に理解できる。

「ソイツの名前、どうすんだ？」

「あ〜…まだ考えてないんだよね〜…どうせなら贅沢でカッコいい名前が良いよな。『ライジングアポロ』とか『ロードバベル』とか『シャイニングアーク』とかどう？」

「……………悪い事は言わねえからそれだけはやめとけ」

オニキスはキョーラのネーミングセンスの無さに呆れる。仮にも息子に付ける名前ではない。成長したら周囲の子供に虐められるのが目に見えるようにわかる。

「え〜…良いと思うけどなく……………あ、もうすぐ村に着くよ」

「……………そうか」

オニキスとキョーラは今現在『ギアの一族の村』に向かっていた。そこは当然ながらキョーラの生まれ故郷であり、人間が住んでいる村は黒の世界ではそこしかない。

因縁のある一族の村。キョーラとは仲良くなれたとは言え、みんながみんなそうであるとは限らないだろう……………

オニキスは自分の存在でキョーラが一族から追い出されてしまうのを懸念していて

……………

「本当にいいのか……オレなんかギアの一族の村に……多分一発でブラックフォースだとバレちゃうぞ。場合によっちゃオマエ、村を追放されるぞ？」

「いいよ。そんな時はまたオマエと旅をしたらいい……あ、息子もな！」

「ねえ知ってるか？……この世界ともう一つの世界を繋ぐゲートの話。しかもそのゲートの先には沢山人間がいるんだと!!……いつか成長した息子と3人でそこを潜ろうな!!」

「ゼゼゼ……ああ」

キョーラと言う人間がとてつもないほど前向きな人間である事を再認識するオニキス。何千年も幽閉されてしまっていたが、おそらく自分はこの人間と会うために生きていたのだらうと心の底から思う事ができる……

とても幸せだった。

家族の心地よさはどうしようもなく居心地が良かった。

だが、それは幽閉された時のように、長くは続かなかった……

……………

「こ、これは……!?!」

「ウソ……村が……!?!」

目の前には信じられない光景が広がっていた。

ギアの一族の末裔が住う村、その全てが烈火の如く、まるで天罰でも喰らったかのよう燃え盛っていたのだ。

誰が火をつけたのかは定かではないが、この時、キョーラの頭の中に過つたのは大事に思っている村のみんなの数々……………

咄嗟に「助けなければ」と思い浮かべると、勝手に身体は動いていた……………

「オニキス、息子を頼む!!」

「ツ……………おい、どこに行く気だ!?!」

「そんなの決まってる!!……………助けに行くんだよ村のみんなを!!」

「バカかテメエ、焼き殺されてえのか!?!……………行くならオレが行く、ブラックフォースは死なねえ」

「バカはテメエだろ!!……これ以上仲間や友達を焼き殺されてたまるか!!」
「ッ……!!」

ブラックフォースのオニキスでさえも威圧するキョーラの強い気迫。それは間違はなく大昔に自分達を封印したギアの一族のソレであった。

しかし、そんなオニキスもキョーラにとっては今では仲間友人家族、又はそれ以上………

危険な目に遭わせるわけには行かない。そう思い、無理矢理でも自分一人で火の海の中に飛び込んで行った………

ー………

「クソ……クソツ!!……誰か、誰か生きてるヤツはいないか!？」

火の海と化した村の中を走り回っているキョーラ。途中何度も村の人間を見て来たが、それらは皆既に亡き者にされていた。

しかも火事の火に焼かれたのではなく、身体に穴を開けられた状態だ。

これ即ち他殺。

間違いない。誰かがこの村を襲ったのだ…………

「許さねえ…………誰がこんな事…………!!」

村のみんななどの思い出が蘇り、珍しく怒りに顔を歪めるキョーラ。

そんな中、その村の皆を殺して回った、そして火をつけた者達と遭遇する。

「ん?…………ジジジ、ねえオブシディアン、シャーマン、まだ殺してないヤツいたよ…………
いい?…………いいよね僕が殺しても♡」

「ズズズ…………待てよヘタマイト、順番的に次はオレ様だろ」

「ザザザ…………美しい女性ではないか、もつたいないなく」

「オマエら、その姿まさかブラックフォース…………!?!」

そう。村に火をつけ、村人達を殺人しながら歩き回っていたのは他でもないブラックフォースのオニキスを除いた3体。

ー!!

「お、オニキス……!」

飛んで来たのか、上空から着地して来たオニキス。しかし、キョーラの現状を見て、シヨックを受ける……………

「キョーラ……オマエ……………!?!」

「はは……オニキス、助けに来てくれたんだな……やっぱオマエは良いヤツじゃねえか」
「バカ野郎、喋るんじゃない!!」

彼らと他のブラックフオーズ達は実に何千年振りも呼べる再会だったが、キョーラを庇うような彼の行動に、他のブラックフオーズ達は疑問に思い……………

「ザザザ……オニキス、何千年振りだ?……オマエだけ封印されていた場所から姿を消していたから何事かと思っていたが、まさか人間と、しかもギアの一族の女とつるんでいたとはな」

「テメエオニキス!!……その女達がオレ達にした事を忘れたのか!」

「そうそう。庇うなんてどうかしてるよねん♡」

「オレ達を封印したのはコイツの子孫だ、今を生きているコイツは関係ねえだろうが!!
……何千年前の話に恨み持ってやがんだ!!」

すれ違うブラックフオース達の意見。

オニキスとて、最初からギアの一族に恨みがなかったわけではなかったし、何なら今でも怨恨はある。しかし、それをやったのは昔のギアの一族であって、キョーラではない。

「まあそう熱くなるなよオニキス。せっかくこうしてまた巡り会えたんだ。また仲間、又は同志として一緒に人間を殺しにいかないか?……今度はこんな暗い世界ではなく、表の世界に戻って」

「……………バカ言えオブシディアン。オレはテメエらを仲間だと思った事はこれっぽっちもねえよ……………オレは、オレは許さねえ……………オレの家族をこんな目に合わせたオマエ達を!!」

「家族?!!……………ジジジ、本気でイカれたんだねオニキス!!……………ギアの一族が家族だなんて

く!!」

「オマエらにイカれたなんて言われたくねえ」

「だがどうする?……オマエは我らブラックフォースの中で最も脆弱な存在。そんな貴様だけで我らを倒せるとでも?」

「わかつてる……だから今は……こうする!!」

—!!!

次の瞬間、オニキスは手に黒き力を溜め込むと、全力で地面を叩く。すると地盤が歪み、崩壊。他のブラックフォース達を皆地の底へと落下させ、その隙に倒れるキョーラを抱えて一目散に逃げ出した。

「あくあ。オニキスマジだよ、本気と書いてマジの方。どうするオブシディアン?」

「ザザザ……まあ良いよヘタマイト。あのギアの一族はもう長くはない。これで我らが恐れるものはなくなった。大人しく向かおうではないか、表の世界へと!!」

オブシディアンとヘタマイトは落下しながらも余裕の表情で会話を繰り返す。本

当はまだキョーラの産んだ子供が無傷である事に気づかぬまま、自分たちが表の世界へと向かう算段を始めた……………

……………

そんな中、オニキスは片手にキョーラを、もう片方で赤ん坊を抱きながら燃え盛る村から全力で遠ざかっていた……………

「キョーラ、おいキョーラ!!」

「そ、そう言えばオニキス……………む、息子は？」

「大丈夫だ。一度置いていって、逃げる途中でまた拾って来た」

「そ、そっか。よかったよかった」

「よかねえよ!!……………オマエその傷じゃ……………」

肩と腹を貫かれ、瀕死の重体に陥っているキョーラ。何故話せているのかも不思議なくらいである。

そしてそんな折、ブラックフォース同士が近づいた事によるモノなのかはわからない

が、突然空間が渦を巻き、ゲートが開いた。オニキスとキョーラはその巨大な渦を見て
唖然とするが、気が付いた……………

それこそが表の世界と黒の世界を繋ぐゲートである事を……………

「このゲートはまさか表の世界に繋がる……………!?」

「……………成る程、これはきつと神様の御命令つてヤツだな……………行こうオニキス。
さっきの連中が追いかけてくる前に」

「ツ……………バカ言え、こんな所に逃げられるか!!…ブラックフォースのオレは力が多少なく
なるだけで済むが人間のオマエは……………」

表の世界にいたオニキスはこのゲートの事を知っている。通り抜けただけで代償が
働く事も……………

ただでさえ瀕死の重体であるキョーラが通ればどうなってしまうかは目に見えてい
る。オニキスは彼女に死んでほしくないのだ。

「大丈夫。私じゃない。アンタと息子が守れば、それでいいから……………」

「!」

「よし。じゃあ行こうか……………!!」

「おい、バカ…………やめろ、やめろオオオオー!!!」

最後の力を振り絞り、オニキスの制止を振り切り、彼ごと無理矢理そのゲートへと向かうキョーラ。その強い力に、オニキスは逆らえず……………

遂に3人はまるで吸い込まれるかの如く、凄まじい力の宿るそのゲートを通つていったのだつた……………

「ナイトを託してすまない……………オマエなら……………オマエならきつと……………」

舞台は移り変わり、およそ16年前の表の世界。パラパラと粉雪が降り積もる中、ゾン・アーサーは1人、当時0歳のロンにミラーライダーである仮面ライダーナイトのカードを託していた。

きつと彼なら仮面ライダーオーデインの魅力に取り憑かれた己の親友であるシスイ・メイキヨウを正気に戻す事ができると信じていた。

だが、まさかこの瞬間にそんな事よりも遥かに重大な場面に遭遇してしまうとは思いにも寄らなかつた……………

……………ドゴオオオーン!!!

「ツ……………なんだ!？」

粉雪が降り続ける中確かに聞こえて来た鈍い音。ゾン・アーサーは息子であるロンを残し、興味本位ですぐさまその場へと向かう。

そしてそこには……………

「おいキョーラ!!……………しつかりしろ、キョーラアアアアア!!!」

「(こ、これは……………!?)」

当時何も知らなかつたゾンが目にしたのはなんとも不気味な光景だった。血塗れで倒れた瀕死の女性。その女性の片腕に抱かれている赤ん坊に加え、それらの周囲に散らばる黒い影……………

その黒い影とはおそらくオニキス。彼はこの世界では肉体がなくなり、実体を持つ事ができなくなるのだ……………

「へへ……………まさかこんな形で憧れてた表の世界に来る事になるなんて……………でも無事でよかつたよ……………息子も、オニキスも……………変な博打に付き合ってくれてサンキューな」

「バカ言え、テメエ……………自分の命をすり減らしてまで……………!!」

どちらにせよ。

黒の世界にいたままだと間違いなく他のブラックフォースに殺されるのを待つだけだった。この行動は命を残すためには正解であると言える……………

ただ、どの道を選んだとしても、結局キョーラはもう助からない……………

「なあ、そこのお兄さん」

「!?!」

「ここで会えたのも何かの縁だ。オレの頼み、聞いてくれよ……………」

どこに目をつけていたのかは知らないが、ゾンの存在にも気が付いていたキョーラ。

自分の頼みを聞くよう懇願する。

「この子を……頼む。うんつと強くしてやってくれ……私の分まで表の世界を堪能させてあげてくれ……」

「?!」

「コイツバカなんだよ、だってこんな状況だつてのに、寝てやがんだ。きつとオレ以上の大物になる……ごめんな。オニキスと一緒にもっと一緒にいてあげたかった……ごめんな……ごめんなあ……!!」

生力を失いつつある弱々しい声色で涙を流しながら自分の抱いていた赤ん坊をゾンに授けるキョーラ。切羽詰まっている彼女からの頼みは、常識離れしたこの状況とも相まって、彼から断るといふ選択肢を除外させた……

戸惑いながらもその赤ん坊を受け取る……

「……………この子の……この子の名前はなんだ？」

「コイツの名前か……そうだな……」

そう言われ、咄嗟に今日と言う1日を思い出したキョーラ。こんな日は息子には忘れて欲しい……………

そう思うと、一つの名前が浮かんで来た……………

どんなに過酷なキョーがあっても、アスだけを精一杯見続けて欲しい……………
未来へ向かって、己の夢のために突き進んで欲しい……………

だから名前はアスラだ……………

オマエの名前はアスラ・ギア……………

オレの大事な……………

息……………子……………

そこまで言い切ると、キョーラは力尽き、静かに息を引き取る。22歳と言う短い人生に幕が下りた……………

アスラとオニキスと言う最後の希望を残して……………

「あ……………あああああ?!?!
!!!?!?!」

唯一無二に限りなく等しいキョーラを失い、気を保てなくなったオニキスは悲痛な叫びを上げる……………

「許せねえ……………オレは許さねえぞブラックフォース……………シャーマン、ヘタマイト、オブシディアン!!!……………テメエらはまとめてこのオレが地獄に送ってやる!!……………例え何年掛かろうともオオオオオオオー!!!」

ー!!!

唯一残ったのは復讐心のみ。オニキスは他のブラックフォース達に対する怒号を上げると、黒い煙へと姿を変え、吸い込まれるようにアスラの中へと入っていった

.....

こうしてアスラは幼くしてその身に黒の力を宿す事となった……………

その後、世界に何かが起こっている事を悟ったゾンは息子であるロンと、ひよんな事から受け取ったアスラを、当時余りにも強過ぎて国から迫害されたと言う少女、シイナ・メザに拾わせると言う形で託し、己は仮面Zとしてブラックフォースについて研究する事にしたのだ。

結果、スーミ村のアスラとスーミ村のロンが誕生した。

これこそがアスラ出生の秘密。オニキスは他のブラックフォース達にキョーラの復讐を果たすために16年もの間その息子であるアスラの中に宿り、力を蓄え続けて来たのだ……………

現在。あれから16年の歳月が流れ、アスラとオニキスはアスラの精神世界、アンダーワールドにて、仮面Zとイツカク・アカバネが見守る中、バトルスピリッツを行なっていた。

アスラはオニキスと和解するため、オニキスはアスラの肉体を得て現世に出るため、

負けられない戦いが続いて行く……………

「テメエのその顔がウゼエんだよ、死ぬ程ムカつくんだよ!!…………龍騎でアタック!」
「いや顔の話はしらねえよ、生まれつきだし!!…………ライフで受ける!!…………ぐっ」

〈ライフ5?!4〉アスラ

オニキスのライダースピリット、仮面ライダー龍騎が飛び出していき、アスラのライフバリアを拳で砕く。

しかしそれはアスラの伏せていたバーストの発動条件であつて…………

「ライフ減少後によりバースト発動、アドベントドローだ!」

「!」

「効果で犀ボーグ2体を破壊、でもってコストを支払い、2枚のカードをドロー!」

勢い良く反転したバーストカードはBP7000以下まで好きなだけ破壊できるマジックカードであるアドベントドロー。

飛び行く炎がオニキスの場にいる2体の犀ボークに直撃し、それらを爆散させた。

「……………ターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

バースト：【無】

追撃できる戦力を失い、ターンエンドを迫られたオニキスは致し方なくそのターンを終える。

次はアスラのターンだ。龍騎、リュウガなどがデツキから抜けた事による圧倒的な戦力差。それを覆すべくそのターンを進めて行く。

「ターン06」アスラ

「メインステップ!!……………LV2で来い、ドラグノ総軍団長!!……………不足コストは突撃兵のLVを1に下げて確保!」

1 「ドラグノ総軍団長」 L V 2 (3) B P 7 0 0 0

アスラの場に現れたのはテンドウ・ヒロミから譲り受けたカードの1枚、ドラグノ総軍団長。4本の腕で3本の剣を構え、戦闘態勢に入る。

「龍騎がいなかりうと、オレにはまだコイツらがいる!!……今あるモン全部ぶつけて勝つてやるぜ!!……アタクステップ、その開始時に総軍団長の効果……トラッシュにあるコアを5個まで突撃兵に追加、2枚ドロローだ!」

1 「ドラグノ突撃兵へR」(1??3) L V 1 ?? 2

今回は2つのコアが突撃兵に追加。アスラは2枚のカードをドロロー……

元から存在するドラゴンヘッドとシャムシーザー含め、スピリットの総数は4体。残りライフが3つしかないオニキスのライフを破壊するには十分過ぎる数であり……

「頼むぜ、シャムシーザー、ドラゴンヘッド!!」

「ライフで受ける……………ッ」

へライフ3??2??1〱オニキス

シヤムシーザーとドラゴンヘットの体当たりにより遂にオニキスを追い詰めるアスラ。勝利の一步手前まで迫る……………

「ラストを頼むぜ突撃兵!!……………【追撃】の効果でアタック、自身の効果と総軍団長の効果でオレはまた2枚のカードをドロロー!」

身の丈程はある大剣を構え、竜人のドラグノ突撃兵が文字通り突撃して行く。

だがしかし、オニキスはそのアタックを待っていたと言わんばかりに手札にあるカードを1枚引き抜いて見せ……………

「フラッシュ、手札にあるブラックウオーグレイモンの効果を発揮!……………1コストを支払い、自身を召喚!」

「!」

「暗黒に染まりし黒き龍……その猛き力を見よ!!」

ー【ブラックウオーグレイモン】LV3(4) B P 15000

ドラグノ突撃兵の行く道を遮るかの如く、上空から飛来して来たのはその名の通り黒いウオーグレイモン、ブラックウオーグレイモン。

アスラがエールのウオーグレイモンを黒の力で無理矢理強化した姿である。当然このカードもオニキスは使えるのだ。

「召喚時効果でB P 12000以下のスピリット、総軍団長を破壊……さらに突撃兵のアタックをブロックする!」

「ッ……!?!」

登場するなり凄まじい速度で地を駆け抜け、腕に装備したドラモンキラールと呼ばれる鉤爪で総軍団長、突撃兵といった順番で突き刺して周るブラックウオーグレイモン。

2体をあつという間に爆散させてしまった。

「くっ……届かなかったか………ターンエンド」

手札：10

場：【ドラゴンヘッド】LV1

【ドラゴンヘッド】LV1

バースト：【無】

オニキスの強烈なカウンター。主戦力を失い、アスラはそのままターンエンドを宣言。

それを聞くなりオニキスは圧倒的な力の差を彼に見せつけるべく、巡って来たそのターンを進めて行く………

「ターン07」オニキス

「メインステップ………仮面ライダーリュウガをLV1で召喚！」

「!!」

1 【仮面ライダーリュウガ】LV1(1)BP6000

龍騎、ブラックウオーグレイモンと続けて出現したのは黒い龍騎、リュウガ。このライダースピリットもまたこれまでアスラを支え続けて来たスピリットの1体。

「召喚時効果……テメエのスピリット全てのコアを2個ずつリザーブに置き、消滅した数だけドローする!!」

「くっ……」

ー【シヤムシーザー】(1??0) 消滅

ー【ドラゴンヘッド】(1??0) 消滅

リュウガが鉄仮面の奥に潜ませる黒い眼光をアスラのスピリット達に向けると、それらはたちまちコアを取り出され、消滅に追い込まれる。

「これでオマエを守るモノは何もない!!……バーストカードを伏せ、アタックステップ……龍騎、リュウガ、ブラックウオーグレイモンの3体で攻撃する!」

「!!」

ここぞとばかりに攻めに転ずるオニキス。龍騎、リュウガ、ブラックウオーグレイモンがアスラのライフを破壊せんと地を駆け抜ける……………

多くの手札を有するアスラだが、カウンターのカードがないのか、ここは意を決し、敢えてライフで受けて行く……………

「来い!!……………ライフで受ける!!……………ツ……………ぐつ……………ガアツ!!」

へライフ4??3??2??1へアスラ

龍騎とリュウガの炎を纏った拳が、ブラックウオーグレイモンの鋭い鉤爪の一撃がアスラのライフをこれでもかと碎き、切り裂いた。

凄まじいダメージ量がアスラの身体を襲うが、気合と根性で意識を保ち、膝をつきつつも持ち堪える。

「ターンエンド……………どうだ、思い知ったか、これが力の差だ。黒の力を持つオレと、ソウルコアも使えないただの人間……………決着は最初からついていた。このオレに、ブラック

フオースであるこのオレに、勝てると思っていたのか？」

手札：4

場：【ブラックウオーグレイモン】LV3

【仮面ライダー龍騎】LV2

【仮面ライダーリュウガ】LV1

バースト：【有】

「…………オマエも、自分1人だけで他のブラックフオースに勝てると思ってるのかよ？」
「!?」

「他の3人はオマエよりもずっと強いんだろ？…………死に行くもんじゃないか」

アスラはダメージを受けた身体を奮い立たせ、オニキスに返答しながらも立ち上がって見せる。

「何度も言わせるなよアリンコ。だからオレはこうやって力を蓄えて来たんだ…………16年、オマエの身体の中でな」

「アイツらと戦ったオレにはわかる。オマエだけじゃアイツらには絶対勝てねえ」

「……………オマエに何がわかる……………仮にそうだとしても、刺し違えてでもヤツらはこの手で殺す……………それがオレの復讐なんだよ!!」

オニキスの決意は固い。16年前、他のブラックフォースによって殺されたアスラの実母「キョーラ・ギア」……………

彼女が殺された恨みを晴らすまで、彼は止まる事はないのだろう……………

「おいアリンコ!!……………そんなにオレの力が欲しいか?……………そんなにオレと力を合わせたいか!?!」

「ああ」

「残念だがそれは無理な話なんだよ!!……………どう足掻いた所でオマエとオレは人間とブラックフォース……………決して絆を結び、育み、混じり合う事はない!!」

何故だかわかるか!?

ブラックフォースはどいつもこいつもどうしようもないクズだからだ!!

ヘタマイトも……………

シャーマンも……………

オブシディアンも……………

もちろんこのオレも……………

救いようがねえクズなんだよ!!

「勝手に決めつけんな……………みんながみんな、そうとは限らねえだろ」

「ツ……………!?!」

「オマエは、誰かに復讐しようとしてる。それってつまり、他の誰かのために復讐してやる……………思いやれる優しいヤツって事じゃねえのかよ!!」

「……………黙れ……………黙れ黙れ、黙れエエエー!!!!」

……………アイツと似たような事言ってるじゃねえ……………

オニキスはそう内心でも叫び、アスラの姿を、かつてのキョーラの姿に重ね合わせてしまう。

「行くぞオニキス!!……………このターンでオレの全部をぶつけてやる!!……………オレは絶対オマエ

だけを他のブラックフォースと戦わせたりしねえ!!」

全てはオニキスと和解するため、心の蟠りを解き放つため……………
全身全霊を込めて、アスラのターンが幕を開けて行く……………

「ターン08」アスラ

「ドローステップ!!……………ッ……………コイツは…!!」

このターンのドローステップ。ドローしたカードに思わず目が向くアスラ。そして
思わず口角が上がって、笑ってしまう……………

「へへ……………一緒に戦ってくれるのかよ。じゃあ頼りにしてるぜ……………!」

その後はすぐさまメインステップに直行。

この後からアスラはもう止まる事はない……………

己の夢と野望を信じ、突き進むだけだ……………

「メインステップ!!…ドラゴンヘッドとシヤムシーザーをそれぞれ2体ずつ召喚!」

┆【ドラゴンヘッド】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

┆【ドラゴンヘッド】 L V 1 (1) B P 1 0 0 0

┆【シヤムシーザー】 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

┆【シヤムシーザー】 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

手始めに呼び出されて行くいつもの低コストスピリット軍団。そしてお出ましであると言いたげに手札から更なるカードを引き抜くアスラ……………

それはこのターンのドローステップでドローしたカードであり、尚且つ自分に大事な事を沢山教えてくれた母親のカード……………

「呼ぶのは赤きロイヤルナイツ!!…来い、デュークモンツ!!」

「なに……………!?!」

┆【デュークモン】 L V 2 (3) B P 1 4 0 0 0

「アレは、頂点王シイナを象徴するデジタルスピリット……………」

「デュークモン…………メザシのエースカード。ヤツの手に渡っていたのか」

アスラが呼び出したのは他にもない、亡き頂点王シイナ・メザのエースカードであったデュークモンのカード。彼女が生き絶える直前にアスラに手渡していた事により、今この場で彼が呼び出した。

当然ながらバトルを観戦している仮面Zもイツカク・アカバネもこのカードの存在は知っている。アスラもまさかこんな形で母の形見であるこのカードを使う事になるとは思っても見なかった事だろう……………

「アタックステップ!!…………行けデュークモン、アタックだ!…………その効果でブラックウオーグレイモンを破壊!」

「!」

右腕に宿る聖なる槍に光のエネルギーを溜め、それを一点に放出するデュークモン。ブラックウオーグレイモンはそれに腹部を貫かれ、堪らず爆散してしまった……………

流石はあの頂点王シイナのエースカードの事はある。しかし、それだけではオニキスには勝てない……………

「アタック後のバースト、霸王爆炎撃!!」

「!!」

「効果でBP12000以下のスピリット3体を破壊……………シヤムシーザー2体、ドラゴンヘッド1体が対象だ、くたばりやがれ!」

オニキスが勢い良く反転させたバーストカードは赤のマジックカード霸王爆炎撃
 〈R〉……………

その効果で燃え盛る赤き爆炎撃がアスラの小さなスピリット達の大半を焼き払って行く。

しかもそれだけではオニキスのカウンターは終わらなくて……………

「相手スピリットを破壊した事により、龍騎の【零転醒】!!……………効果で龍騎サブイブへと姿を変える!」

「!!」

オニキスの場の龍騎がベルトのデッキからカードを引き抜き、それを新たに出現させたドラグレッダーを元にしたショットガン状の武器に装填……………

……………サバイブ!!

その音声と共に、仮面ライダー龍騎は強化形態、仮面ライダー龍騎サバイブへと進化を遂げて見せた。

「転醒アタック時効果、最もBPの低いスピリット……………残ったドラゴンヘッドを破壊!」
龍騎サバイブがショットガンから炎の弾丸を放つ。アスラの最後のドラゴンヘッドはそれに撃ち抜かれ、他愛もなく爆散させられてしまった……………

「さらに追加でマジック、スクランブルブースター……………リュウガを対象とし、このバトルのみ、疲労プロロッカーと化す。デュークモンの攻撃を防げ」

「!」

オニキスの放ったマジックカード、スクランブルブースターにより、このバトル中のみ唐突にブロッカーに仕立て上げられるリュウガ。

BP差的に敵うわけがないが、果敢にデュークモンへと立ち向かって行く。

しかしこれでアスラの攻め手は全て削ぎ落とされた。次のターン、オニキスは残った龍騎サバイブでデュークモンごとアスラのライフを破壊できる……

「これで本当に終わりだ!!……復讐を遂げるためにその身体を……その身体をオレに寄越せえ!!!」

「寄越さん!!……今この瞬間、オレはオマエを超える!!……フラッシュマジック、ワイルドライド!!」

「ツ……なに、緑のマジック!?!」

アスラが最後の最後で咄嗟に放って見せたのは緑色のマジックカード、ワイルドライド。

それが勝負の命運を左右する……

「デュークモンを対象に発揮。それによりこのターンの間、デュークモンのBPをプラス3000し、バトル勝利時に回復させる！」

「なんだと!?!」

ー【デュークモン】BP14000??17000

緑色のオーラを一瞬纏うデュークモン。風の力をその聖なる槍に込め、勢い良くリュウガに向けて突進して行く……………

オニキスのライフは残り1。この攻撃が通ればこれは負ける……………
そしてそれを覆す一手ももう持ち合わせてはいなくて……………

「…………何故だ、何故オレがオマエなんか…………認めねえ、認めねえぞ…………このオレが人間の傀儡になるなど!!」

「誰もそんな事言っちゃいねえ!!…………オマエはもう…………いや最初に力を貸してくれたあの日から…………ずっと!!…………オレの大事な仲間なんだよ!!」

「ッ……………」

「トドメだ…………デュークモンッ!!…………リュウガごと、オニキスの心の蟠りを解き放て

!!
」

喧しくも一直線なそのアスラの姿を、オニキスは思わずしてキョーラも重ね合わせて
しまう……………

そしてデュークモンが聖なる槍でリュウガの腹部を突き刺しながら己へと向かって
来るのを見届けながら、ある事に気がつく……………

(……………ああ、そうかオレは……………)

キョーラが死んだ事を、認めたくないだけだったんだ……………

だからオレはコイツの中にいたんだ。

コイツはキョーラの息子で、信じられないくらいよく似ていたから……………

ー!!

〈ライフ1??0〉オニキス

オニキスは何故16年もの間アスラの中にいたのかを自覚しながら、デュークモンの最後の攻撃を受け入れる。

頂点王シイナが最後の力を振り絞りアスラに託してくれたそのスピリットの槍の一撃は黒きライダースピリット、リュウガ諸共そのライフバリアを貫いた……………

62コア「赤カラー戦!!VSユニコーンガンダム!!」

人間の精神世界「アンダーワールド」……………

自分がエックスであるうとも、コモンであるうともどんな人間の中にも存在する世界の事で、奇跡のライダースピリットウイザードの力でのみ出入りする事ができる。

そして、今、この瞬間……………

そのアンダーワールドにて、互いの命を賭けたバトルスピリッツが幕を閉じる。

1人の少年が召喚した白い騎士型のデジタルスピリットが槍を用いてブラックフォースの1人、オニキスの最後のライフバリアを貫いてみせたのだ……………

……………

「ハアツ……………ハアツ……………オレの勝ちだ、オニキス!!」

「……………」

最後に場に残ったデュークモンと龍騎サバイブがバトルの終了に伴い消滅して行く。

息も吐く間もなく激しいバトルを制したのはスーミ村のアスラだ。

ソウルコアが使えない身でブラックフォース、オニキスをバトルスピリッツで負かして見せたのだ……………

「何故だ……………」

「?」

「何故オマエはオレより強い?……………いや強くなった!?……………あのソウルコアが使えず、あんなに弱かったオマエが何故、オレを倒せるくらいにまで成長できた!」

バトルダメージにより疲弊し、片膝をつきながらアスラに向かってそう叫ぶオニキス。

彼が幼い頃からその中にひっそりと棲んでいたオニキス。ソウルコアを失っているギアの一族であるアスラが何故ここまで強くなれたのかに疑問を抱く……………

しかし、その謎、本当はオニキス自身も理解していて……………

「ずっとオレの中にいたオマエならわかるだろ……………!」

「!」

「確かにオレは弱かった。コモンだから強いカードもなかったし、生まれた時からソウルコアが使えなかったし、兎に角何もなかった!……でも龍騎がオレのデッキに宿って、頂点王を目指す旅をしてから色んな人達から色んな大事なモンを貰った!……巡り、回って来た出会い、オレをどんどん強くさせてくれた!」

アスラの頭の中に浮かんで来るのはずっと一緒に旅をして来たエールやムエを始め、カラーリーダーや三王、イユ、トゥエンティに加えて仮面Z頂点王シイナ、そして最大のライバルにして最高の幼馴染ロン……

ソウルコアがない自分を受け入れてくれた彼らとの出会いが、紡がれて行く絆の力が自分を強くしたのだとアスラは自覚していた。

「強さってーのは自分1人で作るモンじゃねえ。みんなと一緒に作るモンだ………んでもって、そのみんなの中にオマエも入ってるんだぜオニキス!」

「!」

「オマエの過去に何があったのかをオレは知らねえ……けどオレの中ではもうとつくにオマエも仲間なんだ!!」

大昔に殺戮を繰り返した怪物ブラックフォースの1人「オニキス」を「仲間」と呼称するアスラ。

その姿がアスラの実の母、オニキスの親友だったキョーラと重なるが、オニキスはそれを否定するように歯を噛み締め……………

「ツ…………ざけんな…………仲間だど!? ……オレは…………黒き力の代償でオマエの母親を殺した…………こんなヤツが仲間? ……とんだお人好しだな!!」

「ああお人好しさ!! ……でもオレはオマエがシイナを殺しただなんてこれっぽっちも思っちゃいねえ!! ……んな不確定要素、オレは絶対信じねえからな!!」

「な!？」

「オマエがオレの事をどう思おうがかまわねえ、でもオレは何度でも言うぞオニキス……………オマエはオレの仲間だし、オマエの仲間はこのオレだ!! ……絶対に裏切ったり見捨てたりしねえ…………オマエがオレに、そうしたように!!」

「ツ……………!」

……………ああキョーラ……………

……………やっぱりコイツはオマエの息子だよ。信じられねえくらいバカだ……………

真っ直ぐな眼差しでオニキスに告げるアスラ。彼の事を誰よりも知り尽くしているオニキスはそれがウソではない事を理解する。そして彼がキョーラの息子である事を再度認識すると……………

ニヤリと口角が上がって……………

「ゼゼゼ……………呆れたよ、とんだ大バカヤロウがいたモンだ……………このオレを、ブラックフォースのこのオレを仲間だの信じるだの戯言を口にするとはな」

「へっ……………おうそうだけゼオニキス……………何度だって言っただけやる、オレとオマエは一心同体の仲間で、友達だ!」

「……………仕方ねえ。乗ってやるよ、賭けてやるよオマエに……………ただし負けたら承知しないからな」

「ああ……………オレはもう絶対に負けない!!……………だって頂点王になるからな!!」

喋りながら距離を詰め合う2人。そして近づくと、遂に2人は握手を交わした……………人間とブラックフォース、決して相容れない存在である2つの種族に絆が生まれた決定的な瞬間であった……………

その瞬間に立ち会った仮面乙とイツカク・アカバネ。仮面乙は狐の面越しでもわかるように嬉しそうに口角を上げ、逆にイツカクはどこか不服そうに、それでいてつまらなそうに口を歪ませていた。

「アスラは凄いいねイツカク。たとえ大昔の怪物、ブラックフォースでも、自分の仲間や友達にしてしまう……きつとあの子こそ、王の器を持つ者なんだろうね」

「……………いや、あんなヤツは王じゃない……………王は……………ヤツだけだ」

イツカクはそこまで言い切ると、アスラとオニキスの元まで歩みを進めた。

そして……………

「オマエに休む暇はないぞチビ助、今度はこのオレ、イツカク・アカバネと戦え」

「!?」

「無論、その黒いヤツを身体に入れてな……………全力でかかって来い」

アスラにバトルを申し入れた。突然の宣言にアスラとオニキスは目を見開く

……………

「ちよ、ちよつと待てよ罰金の人!!…なんでいきなりアンタとバトルしないといけねーんだ!…オレはこうしてオニキスと友達になれたんだ!…このアンダーワールドでやる事はそれだけだろ!？」

「戦う理由ならある………オマエ、5番目のカラーリーダー、カゲミツ・ブゲイに勝ったんだろ？」

「え?…ああ、うんそうだけど」

「フ……言つてなかったが、オレは6番目、最後となる赤属性のカラーリーダーだ」

「え……ええええ!!?!…アンタが6人目えええ!!？」

「だから今すぐこの場でオレと戦えンチクリン。6枚目のこのレッドカードが欲しかったらな」

仮面Zの協力者イツカク・アカバネ。その正体はこの国の赤属性のカラーリーダー。アスラが越えるべき壁………

「その通り。イツカクは赤のカラーリーダー……カラーリーダーは三王や頂点王などが機密にしている情報を唯一耳にできる役職。だからこそ僕は彼を自分の協力者に選ん

だんだ」

「!!」

「ここからが本番、イツカクと戦うんだアスラ。そのために僕は彼も君のアンダーワールドに連れて来た」

正体を明かしたイツカクに間髪入れずに仮面Zがそう説明した。

そう。彼はカラーリーダーであるイツカクを利用し、三王や頂点王が秘密にしていた情報をその耳に入れていたのだ。

「さあ。デツキからカードの剣を抜けよチビ助。メザシだったらこのバトルは100%逃げない……それに、そんな怪物と仲良しこよしするだけで強くなった気ではないじゃねえ!」

「なに!?……それってどう言う事だよ!!」

「言葉の通りだ……いいからオマエはオレと戦え」

止まらないバトルへの欲求。しかしアスラもバトルを挑まれては逃げるわけにはいかないか、一度デツキとBパッドをセットし直して……

「なんかよくわからんけども……いずれは通らなきやいけない相手だ……バトルは当然、受ける!!……力を貸してくれるよなオニキス!!」

『ああ、試されてる感じがしてあまり気乗りはしないがな……』

オニキスがそう告げると、その姿を黒い霊体に変化させ、アスラの中に移動する。その間にオニキスの力である「龍騎」「リュウガ」「ブラックウオーグレイモン」「ドラグレッダー」と言ったカード達がアスラのデッキへと投入されていた。

「おお龍騎にリュウガ!!……ありがとうございまアアアす!!」

『オマエのデッキはコイツらがいないとクソザコだからな……せぜぜ、このバトル、勝つぞアスラ』

「ツ……おう!……これは最後のカラー戦、オマエと一緒にならオレは絶対負けねえ!!
……行くぞオニキス!」

「御託はもういいか?……なら潰してやる、全力でな!」

……ゲートオープン、界放!!

初めて自分を名前前で呼んだオニキスと力を合わせ、最後のカラーリーダーであるイツカクに挑むアスラ。コールと共に再び彼のアンダーワールドの中でバトルスピリッツが幕を開けた。

「……………見せてもらおうかアスラ、オニキス。ギアの一族とブラックフォース。その決して交わる事がない者達から生まれるであろう救世の力を……………」

仮面乙はそのバトルを期待の眼差しで見守る。余程アスラとオニキスが力を合わせた時に発揮できる力が気になるらしい……………

一方その頃現実世界。オウドウ都に聳え立つ三王塔の中にて……………

三王の一人、モビルスピリットを操るエレン・オメガはその実の妹であるエール・オメガを相手にバトルスピリッツを行おうとしていた……………

「本当にいいのかエールよ。余はバトルにおいて手は抜かんぞ」

「ええ、お願いしますお兄様……………私をうんと叩きのめしてください!!……………私もその数だけ這い上がって強くなって見せます!」

ただならぬ気迫でバトルに臨もうとするエール。今の彼女は姉同然だったシイナの損失やアスラへの心配が重なり、とてもではないが精神的にバトルどころではなかった。

しかしそれでも前を向いて強くならなければと思った。

ここで少しでも自分が強くなっておかねばまた誰かを失うかもしれないからだ

……………

……………エール。

強くなったな。まさかたった一年でここまで大きく成長するとは、思ってもいなかったぞ……………

内心でそう呟くエレン。実は重度のシスコンである彼、エールの成長を他の誰よりも喜んでいた。だがこれもあのソウルコアが使えない少年のお陰かと思えば少しやるせ

ないが……………

「行くぞエール!!…強くなり、テンドウをブラックフォースから救い出すぞ!!」
「はい!!」

……………ゲートオープン、解放!!

今や2人しかいない三王塔の中で、兄妹である2人のエックスが特訓と言う名のバトルスピリッツを初めて行った……………

そして舞台は戻り、ここはアスラの精神世界アンダーワールド。

オニキスと和解し、彼と真の友となったアスラと頂点王シイナのライバルであったと自称する赤のカードバトラーイックカク・アカバネのカラー戦を兼ねたバトルスピリッツが幕を開けた。

先行はアスラだ。オニキス宿るその体でターンシークエンスを進めて行く……………

「ターン01」アスラ

「メインステップ!…ネクサス、燃えさかる戦場を配置!…これでターンエンドだ!」

ー【燃えさかる戦場へR】LV1

自分のアタックステップ中にスピリットのBPをアップできるネクサスカード、燃えさかる戦場の配置のみでこのターンを終え、赤のカラーリーダー、イツカクの様子を伺う。

「ターン02」イツカク

「メインステップ…オマエのアンダーワールドでバトルするのはいささか気分が悪い、一度このカードでオレ色に変えてやるよ…マジック、宇宙世紀憲章!」

「!」

「効果でデッキから2枚のカードをドロ―し、その後このカードを自分のフィールドに

置く」

イツカクが発揮したのは赤のマジックカード宇宙世紀憲章。効果でイツカクにカードをドロ―させた後にこの場を星々が輝く暗がりの宇宙へと塗り替えて行く…………

「うおおお!!…宇宙だアアア!!…生まれて初めて来たアアア!!…あ、つーか空気がアアア!!」

『バカかテメエ。そこまで再現できるわけねえだろ』

「あ、本当だ。息できる」

一瞬焦るアスラだったが、体の中にいるオニキスにそう言われ冷静さを取り戻す。

「宇宙世紀憲章が場に存在する限り、お互いターンに一回、創界神ネクサスの上に1個ずつしかコアを置けない……………ターンエンドだ」

手札：6

場：【宇宙世紀憲章】

バースト：【無】

バトルの舞台を緑豊かな場所から宇宙へと切り替えたイツカク。一度このターンはエンドとし、アスラにターンを渡した。

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!…つしやあ、ガンガン行くぜ!!…シヤムシーザー、ドラグノ突撃兵!!」

ー【シヤムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【ドラグノ突撃兵(へR)】LV2(3)BP6000

背中に幾千ものトゲを生やした赤いトカゲのようなスピリットシヤムシーザーと大剣を握る竜戦士ドラグノ突撃兵がアスラの場合に出現。

これらのスピリットがアスラのやる事は速攻のみ……

「アタックステップ!!…シヤムシーザーとドラグノ突撃兵2体で攻撃!!…ドラグノ突撃

兵は【追撃】で二度攻撃でき、さらにアタックするたびににカードをドロ―!!」

走りゆくシャムシーザーとドラグノ突撃兵。重疲労する事で2回アタックできるドラグノ突撃兵、そのアタック時効果でアスラに2枚のカードを齎す。

そして前のターンにスピリットを召喚しなかった赤のカラーリーダーイツカクはこれをライフで受ける以外の選択肢はなくて……………

「全てライフで受けてやる…………ぐっ」

△ライフ5??4??3??2△ イツカク

シャムシーザーの体当たりで1つ、ドラグノ突撃兵の振るった大剣で2つ、イツカクのライフバリアは砕け散り、残り2つとなる。

いくら最後にして最強のカラーリーダーと言えども、いきなり3点のダメージは応えたか、少しだけ仰反る。

「よし、大ダメージ!!…………ターンエンド!」

手札：5

場：【シヤムシーザー】LV1

【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV2

【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

バースト：【無】

ライフを大幅に減らし、一気に優勢に立つアスラ。仰反ったイツカクを目にするなり、確かな手応えを感じ、一度そのターンをエンドとする。

だがイツカクはその後、何事もなかったかのように淡々と巡って来たターンを進めて行つて……………

「ターン04」イツカク

「メインステツプ……………龍が支配する地、転醒ネクサス赤の世界を配置」

「ツ……………赤の世界!?!」

―【赤の世界】LV1

メインステップの開始直後、イツカクが背後に配置したのは龍の頭部の形をした山々が聳え立つ赤の世界。

その圧倒的な威圧感は一アスラにこれまでのネクサスとは違う事を察知させる。

「赤の世界は転醒エックスレア。他の転醒カードとは訳が違うぞ………配置時効果で相手の場に存在する最もBPの低いスピリット1体を破壊する、シャムシーザーを焼く」
「!!」

登場するなり大噴火を起こす赤の世界の山々。それによって押し出された岩石がアスラの場に存在するシャムシーザーの上に落下。潰されて堪らず爆散してしまう。

「さらにジンライドラゴンを2体、LV1で連続召喚し、バーストをセット。ターンエンド」

手札：3

場：【ジンライドラゴン】 LV1

【ジンライドラゴン】 LV1

【赤の世界】 LV1

バースト：【有】

甲冑を見に纏う一角の頭角を備えたジンライドラゴン。

本来であれば攻撃的な効果を持つスピリットではあるが、今回もアタックはせず、呼び出した2体をブロッカーとして残してそのターンをイツカクは終える。

ここまで攻撃をしても全く反撃しない彼に、アスラとオニキスは少々の疑問を抱く。

「殴って来ない……!?!」

『妙だな………気をつけろよ』

「おう!!」

心の中でオニキスと軽くコミュニケーションを交わしつつ、アスラはターンを進めていく。

「ターン05」アスラ

「ドローステップ……ドロー!!………ッ」

『引いたか!!』

「ああオニキス!!…オマエがオレに託してくれた力だ!!…このバトル、コイツで一気に決めるぜ!!」

ドローステップでドローしたカードに共鳴する2人。そしてアスラはそのドローしたカードを颯爽とBパッドに叩きつける。

そのカードは最早2人を象徴するカードと言っても過言ではないモノであって………

「メインステップ!!………2体目のシャムシーザーを召喚!!………さらにソイツから不足コストを借り、消滅させ………来い、黒きを纏いし仮面ライダーリュウガ!!」

ー【仮面ライダーリュウガ】LV1(1)BP6000

2体目のシャムシーザーは直ぐに呼び出され、消滅されてしまうが、それと引き換えに様々な胸像が重なり合い、黒きライダースピリット、リュウガがその姿を見せる。

「黒いライダースピリットか」

「召喚時効果、相手スピリット全てのコアを2つずつリザーブに送り、消滅したカードの数だけデッキからドロウする!!」

ー【ジンライドラゴン】LV1（消滅）

ー【ジンライドラゴン】LV1（消滅）

登場するなり仮面の奥に潜める黒い眼差しを2体のジンライドラゴンに向けるリュウガ。そうすると、ジンライドラゴン達はたちまち体内のコアが弾き出され、消滅に陥ってしまう。

「これで邪魔なブロッカーは消えた!!……バーストをセットして、アタックステップ!!
……リュウガ!!」

勝利への道筋を邪魔立てするスピリットは最早イツカクの場にはいない。リュウガにアタックの指示を送るアスラ……

しかし……………

「攻撃はライフで受ける……………チイツ……………だがライフ減少によりバースト、絶甲氷盾!!…
ライフ1つを回復し、その後コストを支払う事でアタックステップを強制終了」

「!!」

〈ライフ2??1??2〉 イツカク

あのカラーリーダーが何も手を打っていない訳がなかった。リュウガが黒い炎を纏
わせた拳による一撃で彼のライフを砕くと、すぐさまそれを再生、さらにその後の効果
でアスラのターンを強制的に終了させて見せた……………

「クソ……………やっぱそう簡単にはいかねえか、ターンエンド」

手札：4

場：【仮面ライダーリュウガ】LV1

【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV1

【燃えさかる戦場〈R〉】LV1

バースト：【有】

「……オマエ達の力はこの程度か？……これならまだもう1人の息子の方がマシだったぞ」

「なに?」

自分のターンが巡ってくる直後、アスラとオニキスを鋭い目つきで睨み、煽り始めるイツカク。おそらく、ここで言うもう1人の息子と言うのはアスラと同じく育ての母にシイナを持つロンの事だろう。

ロンは現時点で全てのカラーカードを獲得しているため、このイツカクを既に倒しているのだ。

「あの黒くて気持ち悪いヤツと仲良くなつていったい何が変わった?……今までのオマエのどこが強くなった?」

「!!」

「使うカードはほぼ変わらず戦略は一辺倒の速攻のみ。これでバケモノじみた強さを持つ相手と戦う?……頂点王になる?……片腹が痛すぎる」

「ぐぬぬ……さつきから言わせておけば……こんなウオーミングアップだ!!……オレ達の本気はこれからなんだよ!!……なあオニキス?」

とことんアスラとオニキスを否定するイツカク。ムキになるアスラはそんな事はな
いと体の内に存在する相棒、オニキスに問いかけるが……

『……いや、コイツの言っている事は正しい……事実、オレはさつきから自分の黒の力
をオマエの身体に流し込んでいるが、全くデツキが進化をしない』

「なッ……どう言う事だよそれ!」

リュウガと言いブラックウオーグレイモンと言い、今までアスラのデツキで起こった
進化の殆どはオニキスの力によるモノだ。

だが、このバトルが始まって以降、オニキスはアスラに今まで通り力を流し込んでも
アスラやそのデツキは全く反応を示さなかった……

これ即ち、アスラのデツキはこれ以上強くないと言うサインでもあり……

「…………おそらく、オニキスの黒の力で強くなる限界値まで達したんだろうね」

「ええ!?……なんすかそれ!?……そんなのあるの!？」

「無限に進化を繰り返すデツキなんて存在しない。オニキスの黒の力もブラックフォースとして限界があるだろう」

この状況を鑑みて、仮面Zが憶測で予想した解釈をアスラ達に聞かせる。事実その通りで有り、アスラの今のデツキこそが、オニキスの力の限界である事も同時に示唆している……

しかし……

仮面Zはその後続けて「ただ……」と言葉を付け足し……

「進化ができなくなるわけではないと思う。オニキスは兎も角として、他者との絆の力でデツキを進化させられるギアの一族である君の力はまた別だしね。大丈夫、僕が見込んだ君たちなら、ここから更なる飛躍ができると信じているよ……このバトルはそのためでもある」

「……Zのおっちゃん……」

『フン……上から目線な人間だ。嫌いなタイプだな』

「バカヤロウオニキス!!……オレ達期待されてんだぞ!!……そんな事言ったらダメだ

ろオオオー!!」

『喧しい』

「何をお!?…オマエだつて人の身体の中でぶつくさ言つてんじやねえ!!」

『うるせえ脳筋バカ』

「誰が脳筋バカだアアアー!!」

まるで漫才のように流れる喧嘩をするアスラとオニキス。これは2人の心の距離がかなり縮まっている何よりの証拠。仮面Z、ゾン・アーサーはそんな2人を見て、必ず何遂げられるだろうと確信するように笑みをこぼした……………

ただ、逆に対戦相手であるイツカクには腹立たしいようで……………

「喧しくてうるせえのはテメエら両方だが……………イラツと来るぜ、こんなつまらねえバトル、さつさと終わらせてやるよ…………オレと、オレのスピリットでな…………!!」

『!!』

これまでのカラーリーダー達とはまるで比にならない溢れんばかりの強者のオーラがアスラとオニキスに意識を向けさせる。そしてイツカクはこのバトルを本当に颯爽

と終わらせるべく己のターンを進めていって……………

「ターン06」 イツカク

「メインステップ……………可能性の獣、ユニコーンガンダム・ユニコーンモードをLV2で
召喚する!!」

「ツ……………」

ー「ユニコーンガンダム「ユニコーンモード」LV2(5)BP10000

………
遙か彼方の宇宙より飛来して来たのは一角の頭角を持つ白いモビルスピリット

………
その名はユニコーンガンダム。ガンダムの名を関するモビルスピリットの中でも最
高位の位置に立つ存在。緑色の眼が捉えた者を全て焼き払わんと輝き出す。

「モビルスピリット!?!」

『しかもガンダムの名を持つ最高級のモビルスピリットか……………』

「オマエ達2人はコイツを見た。もう生き残れると思うなよ?……召喚時効果、デツキから5枚をオープンし、その中の対象カードを1枚手札に加える……フ」

「!!」

効果によりオープンされたカードを見るなり鼻で笑うイツカク。その中の1枚を手札に加え、残りはデツキの下に戻した。

そして……

6属性の中で最も高い攻撃力を誇る赤属性、そのカラーリーダーであるイツカク・アカバネによる最高火力のアタックステップが幕を開ける事になる……

「見せてやろう、オマエのデツキがオレのデツキの下位互換だつて事をな……アタックステップ!!……出陣せよユニコーンモード!!……さらにこの瞬間、転醒ネクサス、赤の世界の【転醒】を發揮!!」

「ツ……このタイミングで転醒!?!」

「コスト5以上の赤スピリットのアタック、それが赤の世界の転醒条件、そしてコイツは裏返れば竜の中の竜となる!!……来い、赤き神龍皇!!」

1【赤き神龍皇】LV1(1S)BP6000

龍の形をした山が大噴火を起こすと、その中より翼を丸めながらゆつくりと飛び出して行く存在が1体……

それは翼を広げると、世界をも震撼させる程の咆哮を放ちながらこの宇宙のバトルゾーンへと降り立った。その名は赤き神龍皇。正しく竜の中の竜。

「赤い、ドラゴン……か、カッケェ!!…なんつーかつこよさだよ、反則だろ!!」
「……ウザ」

誰がどう見てもバトルの流れが代わり、劣勢に立たされたこの状況。ピンチである事を自覚しながらも、赤属性の使い手であるアスラは赤き神龍皇の姿を見るなり、見惚れ、目をギラギラと輝かせながら感動の声を上げる。その様子に腹を立てたイツカクは舌打ち。

『おい、喜んでる場合じゃねえぞバカチビ……コイツは多分やべー……』

「ああ、そいつの言う通りだ。オマエ達は思い知る……力の差をな!!……赤き神龍皇の

転醒時効果、BP1000以下のスピリット1体を破壊する。ドラグノ突撃兵を焼却

!!」

赤き神龍皇が登場するなり口内から渦巻く炎を放出。それに呑み込まれたドラグノ突撃兵はたちまち爆散してしまった。

これだけでも赤き神龍皇は十分強い。

だが、この転醒スピリットの本領を發揮するタイミングはここではなくて…………

「さらに赤き神龍皇のもう一つの効果、永続的にコスト5以上の赤スピリット全てに赤のシンボルを1つずつ追加する!!」

「なに!?!……じゃあそのメチャクチャイケてるドラゴンだけじゃなくて、今アタック中のモビルスピリットにも赤のシンボルが1個追加されてるって事か!?!」

「ああ。オマエにしては察しいいな……そしてこの状況でオレの愛機、ユニコーンは真価を發揮できる!!……ユニコーンモード効果發揮!!…〔NTD〕!!!」

「ッー!?!」

赤き神龍皇の効果で赤のシンボルが1つ追加され、ダブルシンボルになった途端、装甲の隙間から赤い光が飛び出して行くユニコーンガンダム。これこそ正にNTD。ユニコーンガンダムが覚醒する直前の様子である……

「【NTD】はフィールドにダブルシンボル以上のスピリットがいる時、このユニコーンモードを手札にあるデストロイモードと回復状態で入れ替える!!……解き放て真の姿!!…ユニコーンガンダム・デストロイモード!!」

ー【ユニコーンガンダム「デストロイモード」】LV3(5)BP16000

覚醒を始めるユニコーンガンダム。装甲が開いていき、赤い光が剥き出しになって行く。そして最後に角が開き、ガンダムスピリットの特徴である二本の角を展開。

赤き神龍皇の力を借り、モビルスピリットユニコーンガンダムはユニコーンモードより、真の姿デストロイモードへと覚醒を果たした。

「な、なんかめっちゃゴツくなった……」

「最後にNTD成功時、スピリット1体を問答無用で破壊……くたばれリウウガ!!」

「!!」

デストロイモードは手に持つビーム銃でリユウガを狙い撃ち。リユウガはそれに胸部を貫かれ、凄まじい威力にたちまち爆散してしまった。

これでアスラのスピリットは0。ライフを守ってくれる存在は何一つとして消え去った。

「デストロイモードは元より赤のダブルシンボルのスピリット、赤き神龍皇の効果が加えられ、計3点のアタック!!」

「ツ……ライフだ!!……ぐうっ……うああ!!」

『ぐおおお!!』

へライフ5?2へアスラ

今度はアスラに向けてビーム銃を放つユニコーンガンダム・デストロイモード。その威力は絶大であり、彼を守るライフバリアは一気に3つ消し飛んだ。

ダメージにより苦しむアスラとオニキスだが、負けじとライフ減少時のバーストカー

ドを勢いよく反転させて行く……………

「ライフ減少時のバースト、エクステインクシヨンウオール!!……………バースト効果で減ったライフ分を回復し、その後コストを支払い、このターンのアタックステップを終了させる!!」

「!!」

へライフ2??5へアスラ

「あ、危ねえ……………」

瞬時にライフを回復させるアスラ。半分以下に陥っていたライフが一気に全快まで戻った。さらにこのターンのアタックステップを終了させる。

だがしかし……………

ユニコーンガンダム・デストロイモードの真骨頂はここからであった。

「何勝手にデストロイモードの攻撃を防いだ気になってやがる!!……………本当の攻撃はここ

からだろが!!」

「!!」

「デストロイモードの効果!!……このスピリットのアタック中、相手は効果によりアタックステップを終了できない!!」

「な……!?」

「これによりオマエの使ったエクステインクシオンウォールのフラッシュ効果は実質無効……さらにバトル終了時、追加で1点のライフを破壊!」

「ぐっ……!!」

〈ライフ5??4〉アスラ

喜びも束の間。炸裂するユニコーンガンダム・デストロイモードの力。その機体から放たれる赤い光の障壁はアスラの使ったエクステインクシオンウォールのフラッシュ効果を無効にし、破棄させた。

さらにアスラの戻ったライフも1つ砕け散る。

そして何を隠そうこのデストロイモード。【NTD】の効果によりアタックを終えても尚、回復状態であって……

「追撃せよデストロイモード!!……3点シンボルのアタック、バトル終了時のバーン効果……これで終わりだ!!」

「!!」

赤きカラーリーダーダイツカクの命令を受け、再びビーム銃をアスラに向けるユニコーンガンダム・デストロイモード。防御札と呼べる白マジックのカード効果を飛び越え、アスラのライフを一気に蹴散らす……

『おいバカチビ!!』

「わかってる!!……オレはライフが一度に3つ以上減らされる時、手札にある白マジック、フェイタルダメージコントロールの効果発揮!!」

「!!」

かに見えたが、アスラとオニキスもまだまだ食い下がる。2枚目の防御札のカードを、今度はバーストではなく、手札より切って見せた。

「このカードは自分のライフが一度に3つ以上減らされる時、手札からノーコストで使用できる。その効果はこのターンの間、ライフが減る時、そのダメージ数を1に抑える!!……………ぐうつ!!」

へライフ4??3へアスラ

ビームが直撃する直前。アスラの使ったマジックカードにより、前方に巨大なバリアが出現。それがクッションとなり、ビームの威力が柔和。ダメージが抑えられる。

「チ…………だがバトル終了時のバーン効果はしっかり受けてもらおう」

「ぐつ!!」

へライフ3??2へアスラ

ユニコーンガンダム・デストロイモードが緑色の眼光を輝かせると同時に又しても碎け散るアスラのライフバリア。これで残りライフは2つ、イツカクと同じラインにされてしまう。

しかし、バトルフィールドに存在するカードの差は歴然。どっちが優勢にあるかは一目瞭然であった。

「……………まあいい。オレはこれでターンエンドだ」

手札：2

場：【赤き神龍皇】 L V 1

【ユニコーンガンダム】「デストロイモード」 L V 3

【宇宙世紀憲章】

バースト：【有】

前のターンまで無傷だったアスラを一気に追い詰めたイツカク。赤き神龍皇をブロッカーとして場に残し、そのターンをエンド。

「つ、つええ……………防御マジックを2枚も使わされた……………」

「この程度で驚くな。誰よりも強い力で他者を捻じ伏せる……………それが赤属性の本来の資質だ。オマエがオレのユニコーンと赤の世界に驚いていると言う事は、オマエが弱者であると言う証拠だ」

『無茶苦茶言ってくれるぜ……見せつけてやれアスラ。オマエのデッキの底力を!!』
「おうオニクス!!…言われなくともやってやるぜ!!」

オニクスの言葉に背中を押され、目の前の強力なスピリット達を倒さんと、アスラが
ターンを進めて行く。

「ターン07」アスラ

「メインステップ!!…来い、仮面ライダー龍騎、ドラグレッダー!!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV2(5)BP8000

ー【ドラグレッダー】LV1(1)BP6000

様々な鏡像が重なり合い、姿を現したのは赤き龍の影を纏う騎士、仮面ライダー龍騎。
さらに左腕にあるバイザーにアドベントのカードをベントインさせ、ミラーモンス
ター、ドラグレッダーをこの場に呼び寄せた。

「……………この布陣は」

ライダースピリット龍騎にその相棒ドラグレッダー。この布陣でイツカクは彼の行動パターンを察する。

「龍騎にドラグレッダーを合体してアタックステップ!!…行け、龍騎!!」

赤き龍、ドラグレッダーが龍騎の背後で鳥栖を巻き、戦闘態勢を取る。そしてこのフラッシュタイムイング、アスラはさらにカードを引き抜いて……………

「フラッシュユマジック、ストライクベント!…効果によりBP6000の赤き神龍皇を破壊して1枚ドロウ!!」

「!」

龍騎はストライクベントのカードをベントイン。右手にドラグレッダーの頭部を模したガントレットを装備。そこに炎の力を溜め込む。ドラグレッダー本体もまたその口内に赤々と輝く炎を溜め込んでいく。

準備を終えた龍騎とドラグレッダーは赤き神龍皇目掛け、その火炎放射を放出。赤き神龍皇はたちまち吹き飛ばされてしまう……………

「よし!!…スピリットを破壊した事により龍騎の【零転醒】も使える!!…これで一気に……………」

……………一気に決める。

そう告げようとした直後、それを遮るように効果の発揮を宣言したのは他でもないイツカク。

「赤き神龍皇の【根幻回帰】!!」

「ッー?!」

「相手の効果でフィールドを離れる時、赤き神龍皇は転醒前の姿に戻る……………赤の世界へ帰還せよ神龍皇」

「なに!?!」

―【赤の世界】 L V I

龍騎とドラグレッダーによって吹き飛ばされた赤き神龍皇だが、すぐさま体制を整え、背後に存在する赤の世界、その中にある龍の頭部を模した火山口に傷ついた身体を癒すべく帰還して行く。

「さらに赤の世界配置時の効果で最もBPの低いスピリット、龍騎を破壊!!」
「ツ……配置時にも使えるのかよ……龍騎!?!」

赤の世界より降り注ぐ火山弾。それが龍騎を押し潰し、爆散させる。アスラの場合はアタック中のドラグレッダーのみとなってしまう。

「くっ……だけどドラグレッダーのアタックは続いている!!」

「たかが一点、ライフで受ける!……ツ……さらにその減少によりバースト、絶甲氷盾!!
…ライフ1つを回復!」

「!!」

へライフ2??1??2 イツカク

ドラグレッダーがイツカクの懐まで飛び行き、そのライフを頭突きで砕くが、又しても絶甲氷盾のカードでライフが戻ってしまう。

「……………ターンエンドだ。クソ、まさか赤の世界にまだそんな効果があつたなんて……………」

手札：2

場：【ドラグレッダー】 LV1

【燃えさかる戦場へR】 LV1

バースト：【無】

赤の世界と絶甲氷盾に翻弄され、アスラは結局劣勢は覆せないまま、そのターンを切る。

「このターン、メザシ……………シイナ・メザだつたらオレのライフを0にしていたらどうな
「！」

「ヤツはイカれた程強かった。だからこそオレはヤツを好敵手とし、この腕を磨き上げて来た。しかしヤツは死んだ。もうヤツとのバトルは叶わない。だがまだ息子のオマ

エがいる……このオレに好敵手だと思わせてくれるヤツがまだこの世にいる。そう
思っただけ待してみたが所詮はこの程度……結局はどいつもこいつもオレを楽しませ
てはくれない……………」

「……………アンタ」

……………ひよつとして寂しいのか？

アスラは内心でそう思った。ライバルだったシイナを失ってしまい、本当に一番寂し
がっているのはこのイツカクなのではないかと……………」

そうだとしたらさすがに謝りたい……………」

何せあの時、シイナは自分を庇って命を落としたのだから……………」

「完全に興が醒めた。何が黒属性だ。何が古の力だ。何がギアの一族だ。そんなもん、
全部このオレの手で粉々にしてやる!!」

「!!」

イツカクの湧き上がる闘志が謝ろうとしていたアスラを黙らせる。そしてそんな彼
に謝っては逆に失礼であると悟ると、そのターンを待ち構える……………」

「ターン08」 イツカク

「メインステツプ!!…パイロットブレイヴ、バナージ・リンクスをユニコーンガンダム・デストロイモードに合体!!」

「ツ……ここでもパイロット合体!?!」

ー「ユニコーンガンダム」デストロイモード」+バナージ・リンクス」LV3(5) B
P21000

姿見た目は全く変わらないが、乗り手を得た事で明らかに雰囲気を変えるユニコーンガンダム・デストロイモード。その強者たる風格にさらに磨きをかける。

「アタックスステツプ!!…再度出陣せよデストロイモード!!…アタック時効果、先ずはバナージの効果で1枚ドロウ。さらにデストロイモードの更なる効果で相手の最もBPの高いスピリット1体を破壊する事で回復!」

「!!」

「ドラグレッダーを破壊、回復せよ!!」

ー【ユニコーンガンダム】「デストロイモード」+バナージ・リンクス（疲労??回復）

機械仕掛けのその手でドラグレッダーを鷲掴みにし、叩きつけるユニコーンガンダム。さらに回復状態となり全く隙を見せない。

「これでまたテメエの場はガラ空き。赤の世界を転醒させるまでもなく、これで終わらだ!!」

「くっ……っ!」

合体によりユニコーンガンダムは素でトリプルシンボル。アスラのライフは2つ。これで今度こそ決まるかと思われたその直後……

……「まだだ」

アスラはいつものようにそう告げると、手札からカードを切った……

「フラッシュマジック、デルタバリア!!……このターン、オレのライフはコスト4以上のス

ピリットのアタックでも効果でも0にされない!!」

「なに!?!」

「そのアタックはライフで受ける!!……ぐあっ!!」

〈ライフ2?!1〉アスラ

咄嗟に現れた三角のバリアが緩衝材となり、アスラのダメージを抑え込む。これはこのターンの間常に有効。アスラはイツカクの攻撃を完璧に防いだ事になる。

「チイツ……しぶとい。そこだけはメザシに似たようだな。だがまあ良い。次のターンで仕留める……ターンエンドだ!」

手札：3

場：【ユニコーンガンダム】「デストロイモード」+バナージ・リンクス】LV3

【赤の世界】LV1

【宇宙世紀憲章】

バースト：【無】

致し方ないか。悔しさに表情を少しだけ歪ませ、そのターンをエンドとする赤のカラーリーダーイツカク。

次はアスラのターンだが……

「ターン09」アスラ

「ドローステップ……ドロー……だ、だめだ、進化できない……」

「これがオマエの限界だ。諦めろ」

ドローしたカードはシイナから託されたデジタルスピリット、デュークモン。決して悪い引きではない。だがアスラは未だにオニキスと連携してデツキやカードの進化ができないでいた。

「何でだ!?!…こんなに追い詰められて、こんなに窮地に陥って、こんなにも負けたくねえって叫んでるのに、何でオレは進化できないんだよ!?!」

『オレもだ……何でこれ以上強くなれない!?!……オレとアスラの気持ちは既に1つのはずなのに!?!』

何故だ!?

兎に角それだけが尽きない疑問で、解けない謎だった。強くられる素材は揃っている。しかし何故かこれ以上の飛躍ができない……………

「いや、待て……………落ち着け……………ゆっくり考えろ……………」

両手で顔を叩きながらアスラがそう呟く。今までもそうやって一度一歩引き、強くないかと考えてきたのだ。

今回も絶対上手くいくと信じ、焦らずに一度冷静になつて考える。そうしたら、解決策ではないが、オニキスに聞きたい事が見つかつて……………

アスラは一度力んだ力を抜き、自身の身体の中にあるオニキスに問いかける。

「……………なあオニキス」

『なんだ?』

「……………オマエ、殺された誰かのために復讐したいんだよな。今更なんだけど、その殺された人ってどんな人だったんだ?」

『……………』

不本意ながら自分の血の繋がった本当の母親の事を質問するアスラ。オニキスは一度口を閉じるが、すぐに開く。

『バカなヤツだったよ。髪は汚い灰色だったし、リアクションはデカイし、オマケに寝言が喧しい……………最悪だ』

「マジか。やばいなソイツ」

『ああ。だがオレはソイツのお陰で知ったんだ。人の温もりと暖かさ……………ソイツがブラックフォースのオレにもそれがあつた事を気づかせてくれたんだ』

「……………そっか」

良い人だったんだ……………

その人の事が本当に大事だったんだ……………

アスラがそう思うと、今度はオニキスがアスラに問いかける。

『オマエは何故頂点王を目指す?……………何故そこまでして強くなりたい。しかもソウルコ

アも使えないその身体で』

「ずっとオレの中にいたオマエならわかるだろ……約束なんだ、シイナ……母ちゃんとの……いや、もう母ちゃんだけじゃない。今まで出会って来たみんなとの約束なんだ」

『そうか……なら負けられないな、このバトル』

「ああ……オマエこそ……」

そこまで話し合うと、2人は内心で互いの事を思い合い、心で叫ぶ。

……オニキス、オマエは他の誰かのためだけに16年もオレの中で力を蓄えて来た。そんなコイツを、本当は心の優しいコイツを、オレは放っておけねえ。

……アスラ、オマエは幾度となく諦めなかった。夢のためだけに命を賭けて走って行くコイツを、アイツによく似たコイツを、オレは放っておけねえ。

そうだ!!!

だからこそもう二度と、負けるわけにはいかねえ!!

コイツを救えるのはオレだけだから!!

もう二度と、負けさせるわけにはいかねえんだよオオオオ!!!

「ッ……………、これは……………?!」

「……………遂に来たか……………相反する2人、それが混ざり合う時、真の救世主が爆誕する……………!!」

アスラとオニキス。2人の心が真に繋がるその時、彼ら自身だけでなく、デツキのカード達が赤と黒に光輝く。その溢れんばかりの光量にイツカクはたじろぎ、仮面乙は仮面越しでも伝わる程に興奮していた……………

この現象は誰がどう見ても紛う事なき進化。ただ、ギアの一族とブラックフォースの進化であるため、その力は誰にも予測できない。

重なり合った2人の絆は誰にも打ち破れる事のない真の力を發揮させる……………

そしてその進化の過程の中で、アスラの手握られていたデュークモンのカードがみるみる内に全く別のカードへと書き換えられていき……………

「うおおお!!…メインステップ!!……………行くぞオニキス!!」

『ああ、いつでも来いアスラ!!』

叫ぶアスラ。新たに握られたそのスピリットをオニキスと共に口上を述べ、召喚して行く……………

龍を纏いしその衣!!

聖剣と共に世界を救え!!

仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン!!

L V 2で召喚
!!!!

1【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン「2」】LV2（5）BP5000

アスラの前方に出現する炎の球。その中よりそれを抜刀した赤の剣で斬り裂きながら姿を見せたのは2人の絆の力で爆誕した新たなライダースピリット……………

その名は仮面ライダーセイバー……………

「これが世界を救世する力……………アスラが得た新たなライダースピリット……………」

「……………わかる、オレにはわかるぞ。アイツはメザシのデュークモン……………アイツら、デジタルスピリットをライダースピリットに変えやがった……………!!」

アスラのこのセイバーにはシイナの想いの詰まったデュークモンを始め、これまでのみんななどの思い出、記録が全て刻まれている。

これを新たに召喚したアスラとオニキスが負けるわけなくて……………

『「召喚時効果!!……………デッキから3枚オープンし、対象のカード1枚を手札に加える!!……………オレは!!……………剣刃ブレイヴ、火炎剣烈火を手札に!!」』

アスラとオニキスは声と息を合わせ、セイバーブレイブドラゴンの効果を發揮。これまた新しいカードを手札に加えた。どうやら変化したのはセイバーブレイブドラゴンだけではないらしい。

『「アタックステップ!!……行け、セイバーブレイブドラゴン!!」』

2人から攻撃の指示が通るなり、手に持つ聖劍、火炎劍烈火をベルトと言う名の鞆に収めるセイバーブレイブドラゴン。

そしてこの瞬間に發揮できる効果がある。

『「フラッシュ!!……セイバーブレイブドラゴンのアタック時効果發揮!!……手札にある劍刃ブレイヴカード1枚をノーコストで召喚、このスピリットに合体させる事で、もう一度このスピリットの召喚時効果を發揮させる!!」』

「ツ……ブレイヴをノーコスト召喚だど!？」

『「オレはさつき手札に加えた火炎劍烈火をセイバーブレイブドラゴンに合体!!……召喚時効果でセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンを手札に!!」』

1 「仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン」[2] + 火炎剣烈火」LV2 (5) BP
9000

再び鞘から火炎剣烈火を抜刀する仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン。その摩擦で火炎剣烈火は赤々と光輝く。

『「この瞬間!!…火炎剣烈火の召喚時効果を発揮!!…相手ネクサス1つを破壊!!…オレは転醒ネクサス、赤の世界を破壊する」』

「!!」

火炎剣烈火を振り、その刃から放たれる赤い斬撃は赤の世界を斬り裂いていく………
しかし………

「馬鹿が。赤の世界の更なる効果、相手の効果で場を離れる時にも赤き神龍皇に転醒で
きる!!」

そう。赤の世界はこのタイミングでも転醒を可能とする特異且つ強力な転醒ネクサ

スカード。

今一度赤き神龍皇になってしまえば、その転醒時効果でセイバーブレイブドラゴンは破壊されてしまうだろう……

だが……

この程度の事、アスラとオニキスが予測していないわけがなくて……

『火炎剣烈火が効果で召喚されていた時、相手はこの効果で破壊したネクサス効果を發揮できない!!』

「なんだと!？」

火炎剣烈火の更なる効果が發揮され、赤の世界の火山口から再び赤き神龍皇がやってくる事はなく、赤き神龍皇事赤の世界はこの場から消滅した。

そして、アスラとオニキスは『さらに!!』と声を重ね合わせ、また新たなるカードの効果を發揮させる……

『フラッシュ!!…仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンの「チェンジ」効果を發揮!!…対象はセイバーブレイブドラゴン!!』

「……今度はチェンジ……!!」

『この効果でシンボル1つの相手スピリットと合体スピリットを1体ずつ破壊する!!
……合体中のデストロイモードを破壊!!』

「なに!?!」

赤い炎と青白い炎が激しく燃え上がり、宙を飛び交う。その炎はやがてユニコーンガンダム・デストロイモードへと直撃。爆散させたかに見えたが……

「チイツ……オレは合体中のパイロットブレイヴ、バナージ・リンクスの効果発揮!!…手札からモビルスピリット1枚を破棄する事で疲労状態で場に残す!!…オレはユニコーンモードを破棄する事でデストロイモードを場に残す!」

爆発による爆煙の中姿を見せたのは他でもない破壊されたはずのユニコーンガンダム・デストロイモード。だがこれだけでアスラとオニキスの攻撃をかわせたわけではない……

【チェンジ】と言えばこの効果の発揮後、対象スピリットとのチェンジだ……

『この効果発揮後、このカードを剣刃ブレイヴと合体しているライダースピリットと回復状態で入れ替える!!』

相反する2つの炎が1つになる時、語り継がれし伝説が咆哮を上げる!!
来い、仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン!!

ー【仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン+火炎剣烈火】LV3
(5) BP20000

赤い炎と青白い炎が龍へと姿を変え、セイバーブレイブドラゴンに向かって飛び行き、結合して行く……………

そして新たに爆誕したのはセイバー最強の姿であるエレメンタルプリミティブドラゴン。これこそがアスラの真のエースカードと呼ぶに相応しい最強のライダースピリット……………

「凄い……………凄すぎる。アスラ、君はソウルコアが使えない……………だがここまで己のデッキを、バトルを進化させた。それはきつとオニクスやギアの一族の力だけではない……………

君が諦めずに努力したからこそセイバーは生まれた……君がして来た事は決して無駄ではなかったんだ……!」

爆誕したセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンと共にアスラを視界に入れ、感動の言葉を漏らす仮面Z。

そう。

決してアスラがギアの一族だからとか、オニキスがその身体に宿っていたからであるというだけでこの力を手に入れたのではない。アスラが諦めずに努力を重ね続けて来たからこそ、このスピリットは生まれた……

アスラがやって来た努力は何一つとして無駄ではなかった……

『「火炎剣烈火はコスト6以上のスピリットとの合体中、赤のシンボルを1つ追加する! ……これでエレメンタルプリミティブドラゴンはダブルシンボル!! ……ライフを2つ破壊できる!!」』

「!!」

【チェンジ】によって回復しているため、二撃でも十分だが、追い討ちをかけるようにシ

ンボル追加効果を宣言。これで残りライフが2つのイツカクは是が非でもこの攻撃を受け止めなければいけなくなった。

「フラッシュマジック、スクランブルブースター!!」

『!!』

「対象はデストロイモード。このバトル中、デストロイモードは疲労状態でブロックができる……迎え撃て!!」

流石はカラーリーダー最後の砦である赤のカラーリーダーと言ったところか。白の防御マジックで応戦。それに応えたユニコーンガンダム・デストロイモードはゆっくりと迫り来るセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンと対峙する。

デストロイモードはモビルスピリット故の体格差を活かし、強力な威力を誇るビーム銃をセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンのほぼ真上から放つが、火炎剣烈火を振るっただけで弾かれ、分散されてしまう。

セイバーエレメンタルプリミティブドラゴンは火炎剣烈火を今一度振り、炎の斬撃を放ち、デストロイモードのビーム銃を斬り裂き、焼き尽くし、爆散させる。デストロイモードは銃撃戦では敵わないと見て、肩からビームサーベルを引き抜き、空中へと飛び

立った。それを見たセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンも宙へと飛び立つ。

フィールドマジック【宇宙世紀憲章】が齎した真つ暗な宇宙を舞台に何度もぶつかり合つて行く両者。その戦いは互角である……………

「デストロイモードのBPは21000!!…対するライダースピリットは20000!!
……勝負あつたな!!」

『いや!!…ネクサス、燃えさかる戦場の効果でそのBPはプラス3000…合計BP
23000で、オレのセイバーはデストロイモードを上回っている!!』

「!!」

ー【仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン+火炎剣烈火】BP2
0000??23000

最後にアスラ達を救つたのは一見地味のように思える些細なBPバフ効果。これにより形成がセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンへと傾き始める。

何度もぶつかり合つて来た両者。しかしここに来てセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンの火炎剣烈火を大きく振るつた渾身の一撃が遂にその均衡を破る。

ビームサーベルごと、デストロイモードのその巨大な鉄の腕を斬り裂いたのだ。

大きな損傷を受け、怯むデストロイモード。しかしセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンはその隙を逃さず、トドメの一閃……………

デストロイモードはとうとう力尽き爆散。セイバーエレメンタルプリミティブドラゴンの勝利に終わる……………

そして、アスラ達の勝利でもある……………

「セイバーエレメンタルプリミティブドラゴンでラストアタック！…火炎剣烈火の効果でBP7000以下のバナージ・リンクスを破壊して1枚ドロウ」

トドメの宣言。場に姿を見せる事はないパイロットブレイヴのカードはイツカクBパッド上から静かにトラッシュユヘと置かれた……………

それでももう彼にその攻撃を止める手立ては残っていない……………

「…………フ、やればできるじゃねえか。流石はアイツの息子だな…………ライフで受けてやるよ……………」

へライフ2??0へ イツカク

最後の最後でアスラの事を認めたような思わせぶりな発言をするイツカク。

その直後に火炎剣烈火を振り下ろし、セイバーエレメンタルプリミティブドラゴンがイツカクの最後のライフバリアを破壊する。そしてそれに反応するように彼のBパッドから「ピー……」と無機質な音が流れ出した……

それはいつも通り、勝者を祝う音色でもある。アスラは遂に最後のカラーリーダーに勝利を収めたのだ。バトルの終了に伴い、宇宙だった場合は元に戻り、仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンはその姿をゆつくりと消していった。

「ゼエ……ハアツ……ハアツ……勝った……のか!？」

『ああ。オマエの勝ちだアスラ……』

病み上がり直後からの連続バトル故に流石のアスラと言えども疲労が溜まったか、息を切らし、その場に腰を突いてしまう。

「勝った……勝ってたんだオレ……遂にカラーリーダー全員に……!!」

アスラの頭の中に浮かんで来たのは「オマエでは決して勝てない」と周囲から言われ続けて来た毎日。今日は誰に何と言われようが諦めずに努力を重ねて来たアスラが己の夢へと大きな一歩を踏み出した記念日になる事だろう……

「よくやったねアスラ。君とオニキスならやれると信じていたよ……君は間違いないこの世界の救世主だよ」

「へへ、サンキューな乙のおっちゃん」

腰を突いたアスラに仮面乙が手を差し伸べる。アスラはそれを掴み取って立ち上がった。

「ほらよクソチビ」

「!!」

直後にイツカクがアスラに対してあるまじく2枚のカードを投げつける。1枚目のカードは表も裏も真っ赤なカードであるレッドカード。赤のカラーリーダーに勝利した証

であり、最後のカラーカードでもある。

これを手にしたという事はそれ即ち『三王への挑戦資格を得た』に等しい……………
そして2枚目はなんと先程のバトルでイツカクが使用した『赤の世界』のカード。

「お、おおお!!……………これが最後のカラーカード!!……………えええ!!……………こつちはさつき使った
メツチャイカす転醒ネクサス!……………あ、ありがとうございまアアアす!!……………実は良い人
なのか!」

「オレに勝つたんだから当たり前だろ。それとも何だ、有料がいいか?」

「いえオレ貧乏なんで結構です!!……………ありがたくタダで受け取らせていただきます!!」

「だったら他のカラーカードを売ればいいじゃねえか。良い額になるぞ」

「それじゃあ今まで頑張つて集めた意味がないじゃないですかアアア!!」

何の変哲もない会話を繰り返す中で、イツカクは少しだけ口角を上げて笑顔を作
と……………

「フ……………スーミ村のアスラ。オマエはホントにメザシのヤツにクリソツだな……………」

「ツ……………へへ、あざす!」

イツカクの言葉を聞くなり、今までの彼の敵意がなくなっているのを感じたのか、鼻の下を擦りながら自慢気にそう言い返すアスラ。

頂点王シイナ関係でいざこざあった2人の関係もどうやら修繕されつつあるようだ。

こうして、アスラのアンダーワールドでの修行は終わりを告げる。壮絶なバトルを繰り返していき、遂にアスラは最強のライダースピリット、セイバーを手にしたのだった。そして、ブラックフォース達との決戦の日は近い………

63 コア「ネオ・ジオングを斬れ!!」

息が詰まるほどの黒い空間。とてもではないがこの世界に存在するようには思えないようなこの場所。そこには大昔にギアの一族に封印された黒属性を操る怪物達であるブラックフォース、又はそれらを体の中に住ませる者達が居座っている。

金髪でワカメ頭の青年、フリソデもその1人。その中にはブラックフォースの「シャーマン」が息を潜めている。そんな彼は退屈そうな表情で他のメンバーに告げた。

「ねえさあ。いったいいつになったら愚かな下民共をなぶり殺しに行くわけ? ……僕ちよつと我慢の限界なんだけど」

「ジジジ……それね! ……ボクも思った思った、早く戦いに行きたいよね!! ……そして早く血をみたいよね!!」

フリソデの言葉に賛同するのは同じように己の力を奮いたいブラックフォースの1人「ヘタマイト」……彼女は今「テンドウ・カナ」と言う女性の身体、意識を奪い、依代とし、行動している。

それはその兄である「テンドウ・ヒロミ」の身体を奪った最強のブラックフォース「オブシディアン」も同じだ。

「まあ待てフリソデ、ヘタマイト。まだ気は熟していない……ザザザ、そうだろう我が王ウィルよ」

「……はい。オブシディアン様の言う通りです……まだ動くべき時ではない。我々は先の戦いで黒の力を消費し過ぎた。今はこうして少しでも多くの力を回復せねばならない」

オブシディアンが目を向ける先にはすっかり黒属性の力に侵されたシルクハットの男ウィルがいた。白眼は黒く染まり、最早完全に新たなブラックフォースとしての存在感を醸し出している。

ブラックフォース最強と言われるオブシディアンだが、ウィルの願い、やりたい事を叶えさせるためか「我が王」と呼び、敬意を払っているのが窺える。

「なんでだよウィルさん。せつかく念願の力をもらえたのに、僕は早くあのアスラとか言うゴミを始末したいだけなんだ」

「ヤツの始末ならもう終わっている。母親である頂点王を失い、完全に戦意を失っている筈だ。今更立ち上がれまいよ。仮に立ち上がれたとして、怒りに身を任せるあまりカードバトラーとして冷静な判断ができずに犬死にするだけだろうがね」

鏡の中の異世界、ミラーワールドでの一件でアスラに一方的な因縁を抱いているフリソデ。どうしても彼とバトルがしたいらしい。

「いいじゃんいいじゃん。犬死にさせようよ!!……まあ正直この力で痛ぶる事ができるだけでもいいんだけどさ!!……誰か他に倒しておきたい敵とかいる?」

「……何故もう行く事が前提になっっているのです……はあ、まあいいでしょう。幸い君は余力を酷使してないです。そうか敵……頂点王はこの手で消去しましたし、残った三王もエレン・オメガ1人、スーミ村のロン如きでは我々に敵いませんし、トウエンティも死んだ……ゾゾ、これだともう私たちの勝ちは確定ですね」

自分で思い返しながら笑みを浮かべて行くウィル。その表情は勝利という優越感に浸っている。

だが、彼をその道まで導いたと言える存在、ブラックフォースのオブシディアンはそ

の優越感に水を刺す。

「いや待てウイル。まだ喜ぶのは早い。まだ懸念すべき点はある」
「！」

「確かに我らの勝利はほぼ確定だ。だが、私はまだ一人要注意と見ている人物が一人いる」

「ツ……………なんと、貴方のようなお方がそこまで警戒しているとは……………だがそれは
いったい……………」

「あのエールとか言う小娘だ」

「ツ……………エール・オメガ!？」

オブシディアンの口から出てきた名は「エール・オメガ」……………

この世界においてもっとも身分が高い「エックス」であり、その中でもさらに最高級である「オメガ」の名を持つ一族の一人……………

これだけ聞けば確かに要注意人物ではあるが……………

「何故です……………ヤツは黒属性の力、即ちブラックフォースを宿してはいません。バトル

の才能こそあれどまだ若過ぎる……私たちの敵ではない筈!」

そう。エールはアスラのようにブラックフォースの力を持たないし、ロンや三王エレンなどと比べてもやや見劣りすると判断していた。

「いや。何故だろうな。ヤツに近づくと疼くのだよ……ブラックフォースとしての血がね……」

「??」

「兎に角ヤツは潰しておいて欲しい。受けてくれるかなフリソデ」

「フフ、その言葉を待ってました!!……可愛い女の子だから残念だけど、これも運命だね!!」

オブシディアンからフリソデにエール・オメガの討伐を依頼する。フリソデはその直後にBパッドに内蔵したワームホール機能でこの場を離脱。任務遂行へと向かった。

フリソデだけが出陣した事により、誰よりも闘いを求める無垢なブラックフォースであるヘタマイトは膨れっ面で……

「むうくく!!……オブシディアン、なんであのお坊ちゃんだけ向かわせるのさ!!」

「ザザザ……こりやまたすまんね」

「ボクも行ききたかったよくく!!」

無邪気に駄々をこねるヘタマイト。そんな彼女を納得させるためにオブシディアンはさらに一言を添える……

「ザツザ……どうしても、シャーマンと会いたくてね」

シャーマンとはフリソデがその中に宿したブラックフォースの名前であるが、この言葉の意味は同じブラックフォースのモノしかわからない。

そのため、ヘタマイトもブラックフォースと化したウィルも理解した。

ここは国の中心都市であるオウドウ都。その繁華街。大勢の人達が自由に歩き回り、自由に商売、やり取りをするどこまでも人間味溢れるこの場所のど真ん中をエックスの

身分を持つ少女エール・オメガは歩いていった。

「……………だいが、強くなれた気がする……………これもお兄様が修行を引き受けてくださったお陰ね……………」

よく見ればいつも綺麗なその身体は少し汚れている。兄であるエレン・オメガに相当な稽古をつけられたに違いないと察する事ができる。アスラとは違い、元々バトルの才能に満ち溢れている彼女、しかも努力は一切怠らない性格であるため、これは相当なレベルアツプが見込める。

「……………あれから1週間か。アスラ……………今頃どうしてるかな……………」

アスラが病院を黙って抜け出し、仮面Zと共にアンダーワールドへと向かってからおよそ1週間が経過していた。彼と連絡の取りようのなかったエールはアスラの行き先を知らない。

彼の事を密かに想う彼女にとって、この出来事はかなり辛い。姉に近い存在だった頂点王シイナを失った直後なら尚更だ。それでも自分にできる事は何かと考え、兄である

エレンに修行を申し出たのは彼女が誰よりも強い証拠。

「いや、ダメね…………ちよつと油断したら直ぐにアイツの事を考えちゃう。どうせロンの言う通り無事よ…………また強くなって戻ってくる前に、私も少しでも強くならなくちゃ！」

いつもアスラの後ろ姿を励みにして来たエール。今度は自分が頑張る番であると思いを巻くが…………

その直後だ。聞き覚えがある声で、尚且つどうにも耳障りな気色の悪い声が聞こえて来たのは…………

「やあ…………エックスのお嬢さん…………!!」

「ツ…………アンタ、確かフリソデ!？」

そう。フリソデだ。オブシディアンの命を受け、エールを探しにこのオウドウ都までやって来たのだ。その片手にはこの繁華街で購入したであろう真っ赤なリングが握られていた、何口か齧った後もある。

「おお、君みたいな可愛い子に名前を覚えてもらえて光栄だよ」

「アンタ、いったい何しにここに……………!!」

「何しについて、まあ不安要素を取り除きに来たと言えればわかってもらえるかな?」
「!」

Bパッドを構えながらそう告げるフリソデに、エールもまた反射的に己のBパッドを構える。

だが、直ぐにバトルを始めようとはせず、フリソデはまだその口を開き続け……………

「君のカード、オメガモンだったっけ?……………良いよね。強そうだ」

「はあ?……………何よ急に」

「ウィルさんの言っていた通りだ。この世は不公平。君みたいな身分が高いだけの女の子にそんな強いカードが行き渡るんだから……………シナンジュを召喚」

「!?」

フリソデはそこまで言い切ると、己のBパッドに1枚のカードを叩きつけ、赤き一つ

目のモビルスピリット、シナンジュをこの場に呼び寄せる。

人が多く集まるオウドウ都の繁華街に呼び出された事で、そのシナンジュは一躍脚光を浴びる。その美しい姿に誰もが「おお」や「美しい！」などと感想を述べる……

だが、美しいのは外見だけだ。

「さあ、ウイルさんの祈願の願いを果たせ……シナンジュ。あの愚かな人間共にアタックだ……!!」

「な!?!」

フリソデが出した指令を受け、シナンジュはその手に持つビーム銃を繁華街の建物に向け、連射。当然倒壊して行く建物に、人々はシナンジュの見る目を変え、悲鳴を上げながら逃げ惑う。

「や、やめなさい!!……狙いは私だけのはずでしょ!?!……なら私だけを狙って来なさいよこの臆病者!!」

「わかつてないな……ウイルさんの願いはこの世界の破壊、及びリセット。今を生きるゴミ人間はここで消えるべきなんだよ」

「ツ……アンタにもウィルにも、今を生きる人たちから生きる権利を奪う資格はないわ!!」

「ほらほら……無駄口叩いてると死ぬよ?…助けなくて良いの、エックスのお嬢さん
す!!」

「!!」

最早救いようがない程までに下衆まで落ちたフリソデ。しかし今は人命救助に専念か、人々を倒壊する瓦礫から守るべく、エールもまた己のBパッドにカードを叩きつける……

「オメガモン!!」

白騎士の究極体のデジタルスピリット、オメガモンを召喚。右腕の大砲と左腕の大剣で瓦礫から人々を守る。だがフリソデのシナンジュもまた同様に破壊行動を続ける……

「ほらほらほら!!……いつまでそれが持つかなく!!」

「くっ……………」

一目散に逃げ続ける人々。だが、その中でも一人だけ全く微動だにせず、破壊するシナンジュとそれを見守るオメガモンを見つめる小さな男の子がいた。綺麗に仕立て上げられた身なりや服装からして、マスター程の身分が妥当か。

その子は幼なすぎるが故に危機感がないのか、寡黙を続けながらそのスピリット達を見守っていた。

そしてそこにフリソデは目をつけ……………

「ヒヤハハハッ!!…………アレだ!!…………あのガキをやれ、シナンジュ!!」

「!!」

幼い男の子に対して直接向けられるシナンジュのビーム銃。そして自分に向かって轟音を鳴らしながら飛んで来るビームに、その子はまだ危機感を覚えずに逃げようとしめない……………

直撃なんてしたらひとたまりもない。エールは透かさずもう一体のスピリットを呼び出そうとするが……………

……………「間に合わない……………!!」

そう思った。自分1人ではどうやってもこの子を守り抜く事はできない。思考ではなく、本能でそれを悟った……………

だが……………

ー!!

直前でそのビームは四方へと弾き返される。それをしたのは突如として飛んで来た赤い光球。誰もが啞然としてそれを見つめる中で、その中よりある少年が姿を見せる

……………

それはエールもフリゾデもよく知るあの人物……………

「よ。なんか久しぶりだな……………エール」

「あ、アスラ……………!?!」

「……………ドブネズミ……………!!」

そう、アスラだ。登場の仕方もあり、異様な力を身につけたアスラに戸惑うエール。

それに対しフリソデは彼に対する復讐心で頭をいっぱいにしてしまう。

身を呈して小さな男の子を守ったアスラはその子に目線を合わせるようにしやがみ込み「危ないから逃げな」と優しく諭す。その子は余程目の前に突然現れたアスラに対してもノーリアクションだったが、流石に聞く耳はあったか、寡黙ながらもこの場からようやく立ち去ってくれた。

これでこの半壊した繁華街にいる人間はアスラ、エール、フリソデの3人のみとなった。アスラは男の子を見届けると、再び立ち上がってフリソデと対峙する。

「ヒヤハハ……なんだまだ居たのか。頂点王を失った哀れなドブネズミく!!……わざわざこの僕にやられに来てくれたのかい??」

哀れみの目を向けるフリソデ。彼にとってコモンのアスラは人ではない。それは怪物と言う意味ではなく、惨めで哀れな下級生物だからと言う理由だ。

もちろんそんな事はない……

「フリソデ……もうやめよう。オレ達、本当はもう争う理由なんてないんだ」

「はあ?……何それ、なめてんの??……あ、わかった!……僕が怖いんだ!!……黒属性の力

を手に入れた、この僕に負けるのが!!」

「違う。オマエは利用されてるだけなんだ、ちよび髭シルクハットと、ブラックフォースに」

「利用??……僕は既に彼らの一員として認められている。そんなわけないだろ?……これだからコモンのドブネズミは見る目がない」

アスラの言う通り、フリソデは明らかにウイルやブラックフォースに利用されている。その身にブラックフォースの1人である「シャーマン」を宿されたのもその一貫である。

連中はフリソデの事をシャーマンを宿らせるための駒としか見ていない。その内彼がさらに危険な目にあってしまうのは目に見えていた。

しかし、アスラからその真実を告げられても尚、聞く耳は持たない。

『ズズズ!!……そうだフリソデ、耳を傾けるな。ヤツはオマエを惑わそうとしている。オレ様はオマエの味方だぜ』

「ヒヤハハ!!……そう言うわけだコモンのドブネズミ!!……いいからさっさと僕と戦え!!」

ブラックフォースの1人、シャーマン。そんな彼の野太い声がフリソデの中から声が聞こえて来る。明らかに上っ面だけの信頼関係がアスラとエールには見える。

そんなフリソデは当初の目的であるエールの事を忘れ、アスラを新たな標的とし、バトルを要求する。

「フリソデ……………」

『やるしかないぞアスラ。正直オレにはあの金髪ワカメ野郎を助けてやる価値が見出せないが…………どちらにせよ、やらないと先には進めねえ。それはオマエもわかってるはずだ』

アスラの中に宿るオニキスが彼に語り掛ける。

「ああそうだなオニキス……………わかったぜフリソデ。オレはオマエとのバトルを受ける。でもって勝って、必ずオマエを救け出す!!」

「ようやくその気になったか!!」

『ズズズ……………やっとオマエをこの手で葬れるな、オニキス。ブラックフォースの唯一

の汚点』

『ゼゼゼ！……元々オレらは真つ黒で汚ねえんだよシャーマン。そしてオレも今、この瞬間を待っていたぜ……！』

アスラ、フリソデ、オニキス、シャーマンが言い合う中、遂に2人のBパッドは互いの方向を向き合う。

フリソデのBパッドがアスラに向けられた事でこの場にいたモビルスピリット、シンジュは消滅。エールも一度Bパッドの電源を切り、オメガモンを消滅させる。

そしてアスラに心配そうな眼差しを向けると……

「アスラ……！」

「大丈夫だエール、心配すんな……オレは、オレだ……ッ！」

「!!」

アスラのいつもと違う雰囲気、信じられないくらい落ち着いた様子を見て、今までの彼とは何かが一線を画しているのをエールは感じる。

だが、アスラが大丈夫だと言っているのだ。エールはそれを信じる事しかできない。

「行くぞオニキス、力を貸してくれ」

『ゼゼゼ……ハナっからそのつもりだ。アイツをぶっ倒すぞ、アスラ!』

「ヒヤハハ!!……行くぞドブネズミ!!…オマエは僕に負ける、そう言う運命だ!!」

……ゲートオープン、界放!!

半壊した繁華街にて、ブラックフォースの力をその身に宿した者同士のバトルスピリッツがコールと共に幕を開ける。

先行はフリソデだ。アスラに逆恨みしている彼は復讐を遂げるべくそのターンを進めていく。

「ターン01」フリソデ

「メインステップ……先ずは母艦ネクサス、ガランシエールとレウルーラを配置……!」

ー【ガランシエール】LV1

ー【レウルーラ【UC】】LV1

背後に颯爽と配置したのは世界三大スピリットの1つであるモビルスピリットをサポートする2種の母艦ネクスス。宙に浮かぶ巨大な戦艦が2隻姿を見せる。

「ターンエンド。幸先の良いスタートだ」

手札：3

場：【ガランシエール】LV1

【レウルーラ【UC】】LV1

バースト：【無】

デッキが回る事を確信し、余裕の笑みを浮かべながらそのターンを終えるフリソデ。次はアンダーワールドでの修行を終えたアスラのターン。オニキスが宿るその右手でドロローして行く……………

【ターン02】アスラ

「メインステップ……………行くぞフリソデ、オレはオレ自身を仮面ライダーセイバーに変身させる!!」

「!？」

―【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

……………烈火拔刀!!

その音声が流れると、アスラは炎をその身に纏い、変身する。その姿は右肩に赤き龍が刻まれた新たななるライダースピリット、仮面ライダーセイバー。

「神託によりボイドからコア1個をオレに追加……………」

「セイバー……………!?!……………龍騎じゃないの？」

アスラの新しいライダースピリットを初めて視認したエールにフリソデ。彼の今までにない雰囲気もあり、よりその存在を際立たせていた。

そんな中、アスラは「さらに!」と続け、手札にあるカード1枚をBパッドに叩きつける。

「転醒ネクサスカード、赤の世界を配置！」

ー【赤の世界】LV1

アスラの背後に龍の頭部を模した燃えさかる山々が配置される。その吹き上がる火山の噴火はまるで龍の咆哮そのモノ……………

「バーストをセットしてターンエンド」

手札：2

場：【赤の世界】LV1

【変身!!：仮面ライダーセイバー】LV1(1)

バースト：【有】

全てのコアを使い切った上にバーストカードもセット。盤石とも取れる動きを行い、アスラはそのターンをエンドとする。

「……アレは、本当に私の知ってるアスラなの……??」

使うカードと言い、大人しい雰囲気と言い、これまでのアスラとは一線を画したその様子にやはり戸惑いを隠せないエール。

そんな彼女の前に、優しい声を放つある人物が現れて……

「心配する事はないよ、オメガ家のお嬢さん」

「！」

「アスラは己の中にいるブラックフォース、オニキスと向き合い、修行しただけだ。いつもと違うように見えるのも、彼の成長故だろうね」

「仮面Z!?!……なんでアンタがここに……!?!」

エールの前に現れたのはここ一週間、アスラを誰よりも近くで見て来た狐の面を被っている男性、仮面Z。

「その話は今は後。まずは見守って欲しい、生まれながらにソウルコアが使えないアスラのバトルスピリッツを……!」

エールにそう告げると、仮面乙も同様に2人のバトルへと視線を向けた。

「仮面ライダーセイバーに赤の世界……………ヒャハハ。また仮初だけの力を手にしたのか!!……………だけどその程度の力でこの僕を倒せると思うなよ……………黒の力を持つのはもう君だけじゃない……………同じ力があれば勝つのは当然この僕なんだ!!」

フリソデはアスラの新たなライダースピリット、セイバー、転醒ネクサスの赤の世界を前にしても尚、怯む事なく、絶対的な自信を持ちながら己のターンを進めて行く……………

「ターン03」フリソデ

「メインステツプ……………母艦ネクサス2枚のレベルをアップ。ギラ・ズール・ギルボア機を召喚」

ー【ギラ・ズール「ギルボア機」】LV1(1)BP3000

一つ目で緑色のモビルスピリット、ギラ・ズールのギルボア機が出現。

「召喚時効果でデッキから袖付きスピリットを手札に、さらにレウルーラの効果でドロ」

フリソデは効果で順当に手札を増やし、アスラとの差をつける。そして今度はそのライフへと狙いを定め……………

「アタックステップ……………行け、ギルボア機！」

フリソデの命を受け、発進するギルボア機。前のターン、ネクサスの配置のみに全力を注いだアスラはこの攻撃をライフで受ける他ない。

「ライフで受ける……………！」

へライフ5??4へアスラ

ギルボア機の放った実弾がアスラのライフバリアを1つ砕く。だが、これが彼の伏せていたバーストカードのトリガーとなる。

「ライフ減少によりバースト発動、ドラグーンシユート!」

「!」

「効果によりトラッシュからコスト6以下の赤スピリット、龍騎をノーコストで召喚!」

ー【仮面ライダー龍騎】LV1(1)BP5000

様々な鏡像が重なり合い、龍の影を纏うライダースピリット、龍騎が召喚される。

「ターンエンド。相変わらず貧相なライダースピリットだ、ホント君にお似合いだと思
うよ」

手札：5

場：【ギラ・ズール】「ギルボア機」LV1

【ガランシエール】LV2

【レウルーラ【UC】】LV2

バースト：【無】

アスラの龍騎を小馬鹿にしながらそのターンを終える。アスラはそれに構う事なく巡って来た己のターンを進めていった。

【ターン04】アスラ

「メインステップ……龍を纏いしその衣、仮面ライダーセイバーブレイブドラゴンを召喚！」

ー【仮面ライダーセイバー仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン【2】】LV2(3)
BP5000

変身したアスラと全く同じ姿をしたライダースピリット、セイバーブレイブドラゴンが龍騎の横に呼び出され、場にはアスラが絆を繋いで来たスピリットが揃う。

「召喚時効果で剣刃ブレイヴ、火炎剣烈火を手札に!!……アタックステップ、セイバーブレイブドラゴン……アタックだ!」

セイバーブレイブドラゴンに攻撃の指示を送るアスラ。そしてこの瞬間、使用できる効果があつて……

「フラッシュ、セイバーブレイブドラゴンの効果。手札にある火炎剣烈火をこのスピリットに直接合体させる事で、もう一度召喚時効果を発揮させる」

「!」

1 〔仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン〕「2」＋火炎剣烈火〕LV2 (3) BP
9000

アスラはこの効果を使い、手札に新たなるカードを引き込んだ。さらに神託を行いつつ、火炎剣烈火の真の力が起動する……

「今度は火炎剣烈火の召喚時効果発揮、母艦ネクサス、ガランシエールを破壊!!」

「!!」

炎纏う聖剣、火炎剣烈火を振るうセイバーブレイブドラゴン。そこから飛び行く熱き斬撃がフリソデの背後に位置するガランシエールを斬り捨てた。

「アタックは継続中!!」

「ライフで受ける……………ぐっ」

へライフ5??4へフリソデ

セイバーブレイブドラゴンは火炎剣烈火を振り、フリソデのライフ1つを斬り刻んだ。

「まだまだ行くぞ……………龍騎! ……アタック時効果でネクサス、レウルーラを破壊して回復!」

「ツ……………小癩な、また僕のネクサスを……………!」

1 【仮面ライダー龍騎】（疲労??回復）

龍の闘気をその拳に纏い、フリソデの背後にあるレウルーラに向けて放つ龍騎。2つ目の母艦であるレウルーラも敢えなく爆散してしまった。

「クソ……この攻撃もライフだ」

へライフ4??3へフリソデ

龍騎の拳がフリソデのライフを砕く。そしてこの瞬間、赤のカラーリーダーであるイツカクから貰い受けた赤の世界の効果が起動する。

「赤の世界の効果……本来のコストが5以上、赤一色のスピリットがアタックしたバトルの終了時、相手ライフを1つ破壊する！」

「なに!?!……ぐうっ!?!」

へライフ3??2へフリソデ

赤の世界の火山が唸りを上げ、大噴火を起こす。その火山岩が流星の如く降り注ぎ、追加でフリソデのライフ1つを破壊した。

「よし。これでもう一撃ぶち込めば勝てる……………」

赤の世界の効果により、今の龍騎のシンボルは実質2。もう一度アタックをすれば残りライフ2のフリソデに勝てる。

だが、流石にそれをフリソデが察していないわけがない、手札から発揮できる1枚のマジックカードをBパッドへと叩きつけた。

「そんなわけないだろ?!……………ライフが減った時、手札の絶甲氷盾の効果!……………このターンのアタックステップは強制終了!」

「!」

発揮されたのは白の防御マジック絶甲氷盾へRのカード。それによりアスラのこのターンでのアタックステップは終わり。否応言わずにターン終了の宣言をしなくては

いけなくなってしまう。

「…………やるな、ターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダー龍騎】LV1

【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン】「2」＋火炎剣烈火】LV2

バースト：【無】

ネクサス2つを破壊しつつ、ライフも多く破壊したアスラだったが、惜しくもこのターンはエンド。フリゾデにターンが巡って来る。

「僕のターン…………ネクサスを2つも失ったのは計算外だったけど、関係ないね。既に勝利へのパーツは揃っている…………！」

「！」

フリゾデにはどうやら既に勝利のビジョンが見えているようで、不気味な笑みを浮かべ続ける。その様子に対してアスラは受け身を取るように身を構える…………

「ターン05」フリソデ

「メインステップ……先ずはドラッチェ2体を召喚」

┆【ドラッチェ】LV1(1)BP1000

┆【ドラッチェ】LV1(1)BP1000

一つ目の赤い小さなモビルスピリット、ドラッチェが2体出現。これで軽減シンボルを確保し、大型のスピリットを召喚するつもりなのだろう……。そして案の定、手札にある1枚のカードへと手を掛けて……

「我が魂は赤き彗星と共に……来い、転醒シナンジュ!!」

┆【シナンジュ】LV1(1S)BP6000

轟音と共に降り注ぐ赤き彗星。そこから現れたのは深紅のモビルスピリット、シナン

ジユ。それそのものとはアスラとて戦った事がある……………

『気をつけろアスラ。あのモビルスピリット、シャーマンの力が注ぎ込まれている』
「ああ、わかつてる」

しかし、このシナンジュは転醒体。これまでとは何から何までが別格であるとアスラ、オニキスの2人は感じ取った。

「さらにマジック、大人の特権。それによりパイロットブレイヴ、フル・フロンタルを召喚して転醒シナンジュに合体！」

1 「シナンジュ+フル・フロンタル」 L V 1 (1) B P 1 2 0 0 0

モビルスピリット専用のブレイヴ、パイロットブレイヴでその性能を3倍以上に引き上げるシナンジュ。

「フル・フロンタルの召喚時効果、相手はスピリットを破壊しなければ僕は2枚のカード

をドロー」

「……………龍騎を破壊する」

フリソデにカードをドローはさせまいと龍騎の破壊を選択するアスラ。赤い光に包まれ消滅して行く。

「ヒヤハハ!!…相棒とか呼んでるライダースピリットを消しちゃうんだ!!……………惨めな選択だね、所詮はその程度なんだよ!」

「へっ……………でもこれでオマエはドローできない。本当は手札がなくなつて内心焦つてんじゃないねえのか?」

「なんだと……………ツ!!」

アスラは決して龍騎に愛着がないと言うわけではない。ここで敢えて破壊する事で逆にフリソデを追い詰めたのだ。

コアも手札も使い切り、準備を整えたフリソデ。アスラに挑発され、ここからが本番だと言わんばかりの勢いでアタックステップを宣言して……………

「ああもうなんでオマエは一々喧しいんだ!!……さっさと消えろよな!!……アタックス
テップ!!……転醒シナンジユで合体アタック!」

強力なスピリットとなっているシナンジユのアタック。その効果もまたかなり強力
なモノであり……

「その効果でトラッシュのコア3つをこのスピリットに!!……LV上昇!」

1 【シナンジユ+フル・フロンタル】(1S??4S) LV1??2

「コアを戻した!?!」

「まだまだこんなモンじゃない!!……フル・フロンタルの効果でセイバーブレイブドラ
ゴンに指定アタック!!……そしてフラッシュ【零転醒】!……2コストを支払い、シナン
ジユを新たな姿に転醒させる!」

「ツ……!」

「不足コストはドラッチェー体を消滅させて確保だ……来たれ、深紅の巨兵、ネオ・ジ
オング!!」

シナンジュの体格よりも遥かに巨大な機体が空に圧を掛けながらこの場に出現。シナンジュはその機体の中心部へとドッキング。

巨大なモビルスピリット、ネオ・ジオングへと転醒を果たしてみせた。

―【ネオ・ジオング＋フル・フロンタル】LV2（3）BP24000

「な、なんて大ききなの……!?!」

「……これがブラックフォースの黒き力を注ぎ込まれたモビルスピリットか」

これまでにはない強大なサイズのスピリットに驚愕するエール。逆にすぐ横にいる仮面Zはそれがブラックフォースの力によるモノだと看破。そして今のアスラの敵ではない事をはつきりと理解する。

「ヒヤハハ!!……転醒アタック時効果、相手トラッシュシユにあるスピリットカードのアタック時効果をこのスピリットの効果として発揮させる……!」

「ッ……オレのトラッシュシユから?」

「そうだ。僕はこの効果でオマエの仮面ライダー龍騎を指定。その効果でネクサスを破壊して回復!…赤の世界は破壊だ!」

ー【ネオ・ジオング+フル・フロンタル】（疲労?!回復）

指先と肩から有りつ丈のレーザー光線を発射するネオ・ジオング。八方から撃ち出されたそれはアスラの背後に聳え立つ赤の世界を蹂躪、爆散させてしまった。

この時、赤の世界はソウルコアを置き、転醒して場に残る事ができるが、アスラはソウルコアは使えない。よってこの効果は実質無効。コアがないので転醒もできずにそのままトラッシュユへと破棄された。

「さらにネオ・ジオングはフル・フロンタルの効果でセイバーブレイブドラゴンにバトルを挑んでいる……!!」

「!」

「合計BPは24000!!……踏み潰してしまえ!!」

指先と肩からのレーザー光線が今度はセイバーブレイブドラゴンを襲う。火炎剣烈

火である程度弾き返してはいるが、状況は明らかに劣勢。このままだと破壊されてしまうのは時間の問題である。

「ヒヤハハ!!……これでわかつただろう!?!……君と僕とじゃ力のレベルが違う!!……やつぱり君は僕に負ける運命から逃げる事はできない。このまま枯れて朽ち果てるオオオー!!!」

圧倒的に劣勢を強いられている仮面ライダーセイバー。己の勝利を確信するフリソデ。

それを見ているエールは「アスラ……」と心配の声が溢れる。そんな彼女を落ち着かせるべく、肩に手を置いたのはここまでアスラを導いた存在である仮面Z。

「大丈夫だよ」

「ツ………Z……」

「あのモビルスピリットからは全く覇気を感じない。それは黒の力に驕り、己を鍛え上げなかつた証拠だ………そんなヤツに16年も夢のために己の力、才能を信じて努力を重ねて来たアスラは負けない……!」

仮面Zの言った事は正しくその通りであった。

アスラが手札にある1枚のカードを静かに抜き取り、発揮させると、それは直ぐに証明される……………

「フラッシュ【チェンジ】…………仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン!!」

「なに、このタイミングでチェンジだと!」

「不足コストはセイバーブレイブドラゴンのLVを1に下げて確保」

アスラがその効果の発揮を宣言すると、彼の背後から烈火の炎に燃える龍と青白い冷たい炎を見に纏う龍の2体が出現。

そしてそれらがフリソデにもたらずモノは敗北の道のみ……………

「チェンジ効果でシンボル1つのスピリットと合体スピリットを1体ずつ破壊……………ギルボア機と合体しているネオ・ジオングを破壊だ……………」

「……………は!」

一瞬間聞き間違いかと思ったフリソデは思わず驚嘆の声を上げてしまう。そして次の瞬間、赤い炎はギルボア機を、青白い炎はネオ・ジオングをそれぞれ貫き焼き尽くして行く。

「そしてその後ブレイブドラゴンと入れ変わる……相反する2つの龍が交わりし時、語り継がれし伝説が咆哮を上げる。来い、エレメンタルプリミティブドラゴン……ッ！」

「〔仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン＋火炎剣烈火〕LV1

見る影も残らない程にネオ・ジオングとギルボア機を焼き払った2つの龍の姿をした炎はその後セイバーブレイブドラゴンと結合。手を取り合い無敵の姿であるセイバーエレメンタルプリミティブドラゴンに進化。

結果的にフリソデの場には小型モビルスピリットのドラツチエと単騎ではアタックとブロックができないパイロットブレイヴ、フル・フロンタルだけとなる。

「……な、何をしたんだ………いったい何でネオ・ジオングは消えた!?………何で何で何で

「何で何で?!?!」

「オレはあんなのよりもつとヤバイ赤のモビルスピリットを使う人に修行つけてもらってたんだ……このくらいへでもねえ」

「ツ………ターンエンドだ」

手札：0

場：【ドラツチエ】LV1

【フル・フロンタル】LV1

バースト：【無】

己の最強カードが一瞬にして敗北した事で焦りが見え始めるフリソデ。この時点で力の差を本能的に自覚してしまう。

アスラの言う人物とは赤のカラーリーダーであるイツカク・アカバネ。そんな彼とついきままで修行していたアスラにとってはフリソデのモビルスピリットなど大した事なかった。

現に今、息を吸って呼吸をするかの如く軽くあしらった。

「アスラ………そっか、もうアンタはそのくらい強くなったのね」

知らぬ間にそれ程までの実力をつけていたアスラにエールは微笑ましく見守る。だが少しだけ遠い存在になった気がして寂しい気持ちもある。

『ゼゼゼ……アスラ、オマエは強くなった……行け……ッ!』

「……………おう!!」

何はともあれ、次はアスラのターンだ。オニキスの言葉に背中を押され、残り手札0枚且つバーストが無いと言う状況に陥ったフリソデに最後の1撃を入れるべくそのターンを進めて行く……………

「ターン06」アスラ

「メインステップ!……【チェンジ】の効果で手札に戻っていたセイバーブレイブドラゴンをもう一度召喚!……神託でオレにコアを追加、LV2にアップ!……でもってエレメンタルプリミティブドラゴンもLV2にするぜ!」

1 〔仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン「2」〕LV2 (3) BP5000

1 〔仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン+火炎剣烈火〕(1??
3) LV1??2

2体のセイバーが揃い、そんなセイバーに変身したアスラもまたコアが4つ置かれ、LVアツプを果たす。

「アタックステップ!!……セイバーエレメンタルプリミティブドラゴンで合体アタック!……火炎剣烈火のアタック時効果でBP7000以下のパイロットブレイヴ、フル・フロンタルを破壊して1枚ドロ……さらに赤のシンボルを1つ追加!」

「!!」

パイロットブレイヴは基本的に場に召喚されていてもその姿は出現しない。フリソデのBパッド上に置かれたフル・フロンタルのカードは終始無言でトラッシュへと送られた。

「フラッシュ……エレメンタルプリミティブドラゴンの効果!……このスピリットのコア

を別のスピリットに移動させる事でそのスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊!……オレはエレメンタルプリミティブドラゴンのコア1つをブレイヴドラゴンに移動させる事でBP1000のドラッチェを破壊!!……さらに変身したオレの【神域】の効果で破壊されたスピリットのコアは全てトラッシュだ!」

「くっ……!?!」

LVに変動はないが、コアを移動させた事により力を得たエレメンタルプリミティブドラゴン。火炎剣烈火を振り炎の斬撃を発生させ、フリソデの最後のスピリットであるドラッチェを焼き尽くし斬り裂いた。

「そしてこれが本命のアタック!!……オレは言ったはずだフリソデ、オマエの言う運命や定めなんてこのオレが捻じ曲げてでも変えてやるってな!!」

「あああ……あああ、チクシヨウ。チクシヨウ……チクシヨオオオオオオオオオオ!!!」

へライフ2?0フリソデ

「ぐ、ぐあああああ!?!」

雄叫びの抵抗虚しく、エレメンタルプリミティブドラゴンは火炎剣烈火を振ってフリソデの残り2つだったライフバリアを破壊。

アスラに勝利を齎して見せた……………

その際に黒属性の力がフリソデを襲い、通常よりも多大なバトルダメージが彼に向けられた。しかしこのダメージは彼をブラックフォースのシャーマンから救い出す唯一無二の手段でもあつて……………

「あ……………ああああ!!?!……………抜けていく、黒属性の力が抜けていくよオオオオ!!?!……………何で、何でいつもいつもいつもいつもいつもいつも恥をかくのがこの僕なんだ!?!……………なんでこんなコモンのドブネズミに負けないと行けないんだよオオオオ!!?!」

悲痛な思いを叫びまくるフリソデ。彼を倒すためにブラックフォースの力を手に入れた彼にとって、この敗北は恥を晒しているのに近かった。

「どうしてくれんだよシャーマン!!?!……………オマエの黒の力が弱いからこんな事になったんじゃないのか!?!……………まさか本当はオニクスじゃなくてオマエが1番弱いんじゃないだ

ろうな!!?!

『……………』

その矛先は己の内に存在するブラックフォース、シャーマンへと向けられる。ブラックフォース同士の衝突、及びその敗北によって間もなく消え去ろうとするシャーマンであつたが……………

何故か彼は不気味過ぎる笑い声を上げていて……………

『ズズズ……………オレ様はこの時を待っていた……………オマエがバトルに負けて衰弱するこの瞬間を!!』

「……………は?!

シャーマンはそこまで言うと、フリソデの身体の内側から黒の力を解き放ち、その力をフリソデの口や耳、鼻へと直接入っていく。

彼の身体を完全に自分のモノとするためだ……………

「づあ!?!……………な、何を……………!?!」

に入れたぜ」

『シャーマン……………』

「オマエ達には感謝してるぜオニキス。こうやって、オレ様は何千年ぶりに新しい身体を手に入れたんだからな。今日の所は見逃してやるが、どちらにせよもうすぐこの世界は黒に染まる……………首を洗って待ってるんだな」

フリソデの身体を奪ったシャーマンはそう告げると、黒の力でゲートを作り出し、何処かへと去ってしまう。

アスラはフリソデを救い出せなかった事に自責の念を感じて……………

「……………また救われなかった、あんなだけ修行したのに」

『ゼゼゼ……………でも諦めないんだろ？……………オマエはそう言うヤツだ』

「ああ、必ずオレはみんなを救ってみせる……………例えコモンでも、ソウルコアが使えなからうとな」

静かに誓いを口にするアスラ。そしてそんな彼の元に仮面乙とエールが集まって来て……………

「十分通じたじゃないか。やっぱり君たちの力は本物だ。シャーマンは余裕のある表情こそ浮かべていたが、おそらく身体を奪い取るのに相当な力を費やしていたに違いはない。次バトルに負けたら間違いなくこの世から消え去るだろう」

シャーマンの目的はフリソデの身体を手に入れる事だった。これでオニキスを除いた全てのブラックフォース達がこの世界での自分の肉体を手に入れた事になる。

それ即ち、一度ブラックフォース同士のバトルに敗れば消え去ると言う事に他ならない。

アスラはそこら辺の事情を深く理解していないが、これまでの経験から納得。今度はエールの方へと身体を向けて……………

「エール……………」

「アスラ……………」

「あ、なんかごめんな、ここんとこずつと違う場所で修行してて。ここに帰って来たらオマエからの着信数エグくてビックリした」

久し振りであるが故か、どことなく気まずさを感じるアスラ。アンダーワールドにすぎたせいでエールの着信に全く気が付かなかったのもその要因の一つ。

だがエールはもうそんな事どうでもいいのか、耐えられなくなつてアスラに思わず抱きついた。

「!」

「別にいいわよそんな事……でももう勝手にどつか行かないで……アンタまで失いたくない……失いたくないわよ」

より強く抱きしめる。

姉同然のシイナや親しかったテンドウがいなくなつた事で、エールの心中には兄であるエレンとアスラまで失いたくないと言う強い想いがあるようだ。

そんなアスラは照れ臭そうに少しだけ顔を赤らめながら「おう」と小声で返答する。

「あ、そうだ。オマエにコレ返さない」と

「?」

「ウォーグレイモンのカードだよ。悪い、真っ黒になつちまつた」

エールにウォーグレイモンのカードを返却するアスラ。しかしそのカードはウィルと戦った時にただのウォーグレイモンではなく、黒い姿のブラックウォーグレイモンとなっている。

「別にいいわよ。色はどうあれ、コレは私のウォーグレイモン。お母様の形見なんだから……………」

そうアスラに告げながらそれを受け取るエールだったが、受け取った途端にブラックウォーグレイモンのカードはみるみる内に普通のウォーグレイモンの姿に戻って行って……………」

「あれ、戻った?」

「なんで?!」

「さ、さあ……………私に言われても」

この事象に不思議がるアスラとエール。しかし、オニキスと仮面Zはコレに少々驚愕

していて……………

(…………今まさかオニキスの黒属性の力が消えた!?…………いや、浄化されたと言うべきか!?…………しかし何故彼女にその力が…………)

『この女…………』

無自覚ながら黒の力が消し去る事ができると言うエールの不思議な力。どうやらオニキスだけは彼女の正体を確信したようで……………

「!!」

ここはオウドウ都近辺にある洞穴。そこでトウエンティは目覚め、跳ね起きる。恋人であるカナの身体を乗っ取ったブラックフォース、ヘタマイトから病院の7階より放り出されながらも彼は生きていたのだ。

もちろん、己の生命力だけが生き残れた原因ではない。

「オ、オレは今まで…………ツ…………そうだからは…!!」

瞬時に気を失っていた経緯を思い出すとウエンティ。何よりも大事な恋人であるカナの事を思い出し、無我夢中な様子で飛び出そうとするが…………

それを制止させるように声を発する人物が1人…………

「ようやくお目覚めか？」

「!!」

自分とは違う声のする方へと首を向けるトウエンティ。そこにはとある人物がいた。それは彼がよく知る人物であるが、余りにも意外過ぎる人物…………

「オマエ…………オロチ…………!?!」

「おお、久し振りだな」

それは元ライダーハンターズの一員であったコモンの大男、オロチ。殺人鬼でおった

彼、しかし不思議と今はそれを証明するような殺気は感じられなかった………
唐突な再会。彼がトウエンテイを助けた理由とはいつたい………

64コア「頂点王が遺した孤高の魔王」

テンドウ・カナの身体を乗っ取ったブラックフォース、ヘタマイトに敗れ、意識を失っていたトウエンティ。

そんな彼が目覚めると、そこは見慣れない洞窟。薄暗いそこにはかつての同僚、殺人鬼オロチであった……

「オロチ、何故オマエがオレという……まさかオマエがオレを助けたのか!」

「おいおい、そりゃ助けられたヤツのセリフじゃねえぜ」

オロチに昔のような覇気は感じられない。が、言動から察するに、どうやら本当に彼がトウエンティの命を救ったらしい。

仮にも殺人鬼であった彼が自分の命を救うなど、トウエンティにとっては俄かに信じ難い。

「因みにオマエの窮地はコイツが教えてくれた」

「ツ……王蛇のカード!?……見つけたのか!」

「ああ、見つけたと言うか、帰って来やがった」

オロチがトウエンティに見せつけたカードはライダースピリットである王蛇。一度はミラーライダーとしてオーデインの手に渡ったが、彼がアスラとロンに敗れた後、こうして再び彼の元へと戻って来たのだ……

だが、そのカードはすぐさま紫色に発光すると、謎の浮力で宙を飛び、トウエンティの眼前へと移動して……

「ツ……なんだ!」

「……コイツはオマエの所に行きたいんだとよ。貰つとけ……敵は強敵なんだろう?」

「……だが、オレはもう他のライダースピリットの力を使えない」

「知るかそんな事情。つべこべ言わずにデッキに入れろ」

無言で王蛇のカードを手取る。トウエンティはそれをデッキケースの中へと差し込んだ。

「……オマエは変わったなオロチ。本当に同じ殺人鬼とは思えん」

「ガハハハ!!……そう言うオマエは何も変わってねえな。テメエの女、まだ救えてねえんだろ？」

「ああ、オレはまだカナどころか誰も救えていない……オレ自身でさえも」

「だったら立て。戦えよ……オレと違ってオマエにはいるんだろ?……仲間ってヤツが」

「!!」

まさかあのオロチに激励の言葉を受けるとは思ってもいなかった。トウエンティがそう言われて真つ先に思い浮かべるのはアスラの顔……

「来いよトウエンティ。先ずはこのオレが相手してやる……その強敵とやらに勝てるよ、テメエを鍛え直す」

「……………フ……………オレに一度も勝てた事がないヤツがよく言う……」

そう告げながらお互いにデッキとBパッドを握る。

「すまない。感謝するぞオロチ……オレは、まだ諦めるわけにはいかない」
「ガハハハ!!……テメエがオレに礼を言う日が来るなんてな」

直後に「ゲートオープン、解放!」のコールをし、2人は特訓を始める。オロチはトウエンティの怪我などお構いなしに全力で叩き伏せるべく、全力で戦い、トウエンティもまたそれに応えるべく、そして恋人であるカナの身体を器としたヘタマイト超えるべく、彼と戦いを繰り広げていった。

舞台は移り変わり王国の中心都市オウドウ都。その中央に聳え立つ巨大な塔、三王塔にて……

「よく来たな、スーミ村のアスラ」

「おうっす……お久しぶりですエールの兄ちゃん!!」

アスラ、エール、仮面Zの3人はモビルスピリットを使う三王の1人、エレン・オメ

ガに会いに来ていた。アスラは手を直角に曲げ、ピシッと敬礼する。エレンは三王らしく相変わらず玉座から上からの視線を送っている。

だがしかし、ブラックフォース達との激闘で今や三王は彼一人。一抹の悲しさを感じずにはいられない。

「そして貴様だな。余に話があると言う男は」

「お初にお目にかかります、三王エレン殿……僕の名前は仮面Z。この15年間、いや、16年間、黒の世界やそこに住む怪人、ブラックフォース達を調査して来た者です」

「ツ……あの化け物共を調べただと？」

不気味な狐の面で顔を隠している長身の男性、仮面Z。会話の内容からして、どうやら彼がエレンとの会談を望んだようである。

今までほとんどが未知数であったブラックフォースの情報を持つ人物と言う事で、エレンも彼に興味を示す。

だが、その口から次に放たれた言葉は……

「単刀直入に申し上げます三王エレン。貴方には必ず来るであろうブラックフォースの

襲撃に備え、王国中の人々に避難誘導を扇いで欲しい」

「……………なに!？」

「はつきり言いましょう、ブラックフォースを討伐するのはこのアスラとその中にいるオニキス、そして僕だけで十分。普通の人間である貴方達には不可能です」

それはブラックフォースと言う仇の相手を他の誰かに任せ、他の役回りをやらされると言う三王の彼にとつては余りにも屈辱が過ぎる内容だった。

しかし、エレンはそれに対して驚きこそしているが苛立ちはなさそうだ。そしてアスラとエールもまたその言葉を初めて聞いていたようで……………

「ええ!?!……………なんでだよおつちゃん!?!…エールの兄ちゃんにも強力してもらおうぜ、相手はいっぱいいるんだしよ」

「そうよ。そのために私も……………」

エールが「私もさらに特訓を重ねたんだから」と告げる前に、それを遮るように仮面Zは言葉を呈す。

「無理だ。ブラックフォースは同じ黒の力を持つ者でないと勝つ事は決してできない……ましてや一朝一夕の努力で敵う相手ではない。アスラはこちら側の人間の中で唯一ブラックフォースをその身に収め、尚且つ手を取り合う事ができた人材。彼らを倒せるとしたらこのアスラしかない」

「……コモンの小僧にできて、余にできぬと言うか」

そんな事を言われて黙っていられるエレンではない。三王らしい圧倒的な威圧感を放ちながら彼に問う……

「……貴様は余の実力を知らぬのか。この三王エレンの……」

「よく知っていますよ。若くして三王の座についた逸材。エックス、オメガ家の当主エレン・オメガ。勘違いしないで欲しい。僕は貴方を弱いと思っているから避難誘導なんて頼んでいるんじゃない。信用できる人間だと思っているからこそだ」

「第一どこに逃げると言うのだ？……さつきからイマイチ話の先が見えん。ブラックフォースは、あの化け物共はいったい何を企んでいると言うのだ？」

「……それに関しては僕よりも彼に聞いた方が早いでしょう」

「え、オレ??」

仮面乙はそう言いながらアスラの方へと目を向ける。ブラックフォースの狙いや考え方などを知らないアスラはキョトンとするが、彼が聞いたのはその中に存在するブラックフォース、オニキスであり……………

『ゼゼゼ……………お呼びか?』

「あ、オニキス」

ー!!

「これがアスラの中にいるブラックフォース、オニキス……………!?」

「4体いるブラックフォースの1人か」

アスラの身体の内側から影が伸び、ブラックフォースのオニキスが乾いた笑い声を上げながら霊体となって出現。エール、エレンの2人は初めて彼と対面した。

「オニキス。ブラックフォースの目的を説明してやってくれ。人間の僕が言うよりもブ

ラックフォースである君が言った方が説得力がある」

『……………オレを上から目線で指示するとは、良い度胸してるじゃねえか人間』

「いいから早く説明してくれよオニキス!!……………オレも早く知りてえぞ!」

『オマエは下から目線で喧しいんだよ!!』

「下から目線ってなんだアアア!!……………オマエもあんまり身長変わんねえだろ!!」

アスラとオニキスの仲良くなった様子に驚くエールとエレン。この光景だけでアスラと言う人間がこの短期間の間にどれだけ強くなったのかが強く伝わって来る。

その後、オニキスは軽く咳き込むと、説明を開始する。

『オブシディアンや他のブラックフォースがやりたいのは間違いなく『ブラックゲイン』だろうな』

「ブラックゲイン?……………なんだそれは?」

見知らぬ単語に疑問を抱いたエレンがオニキスに聞いた。オニキスは『今から説明するっつーの』と付け足すと、さらに説明を続ける。

『ブラックゲイン。端的に言うとなら『世界のリセット』だな』
「！」

『オレ達ブラックフォースの持つ黒属性の力は4人揃えば世界を丸ごと黒に染め上げる事ができる。アスラみたいに黒の力に耐性のある人間はごく一部。基本的に黒の力に耐性を持たない人間共はゆっくりと滅びていく。そんなもって、オレが欠けた事でそのブラックゲインはできなくなっていたはずだったんだが…………』

「ウイルがブラックフォースに覚醒した事で、再びブラックゲインが可能になった……………と言う事か」

ブラックフォースの目的は世界を全て黒に染め上げ、世界をリセットする事。そしてウイルもまたそれを望んでいる。だからこそ彼はブラックフォースに忠誠を誓い、自らそこへと足を突っ込んだのだ。

結果、再びブラックゲインが可能となった。いつ彼らがそれをするのかは時間の問題なのだ。そしてそれを食い止めるためにはやはりブラックフォースを倒すしかない。

『ヤツらを葬るのはオレの使命だ。オマエら普通の人間はすつこんでろ』

「そうか。だが、余も国民を置いていく程腐つてはないぞ…………必ずブラックフォースを

倒す。今は亡き頂点王のためにもな」

「お兄様……………」

いくらブラックフォースが相手だとは言え、エレンとて引き下がれない。亡くなった事で友であったと認識した頂点王シイナの顔を頭に浮かべながらオニキスの前で堂々と啖呵を切る。

そしてバトル用端末、Bパッドを構えると……………

「オニキスと言ったな。余とバトルしろ……………貴様らがブラックフォースを倒せると言うのなら、先ずはこの余を倒してみろ」

「！」

バトルを要求して来た。まるで自分の実力を今から示そうとせんばかりに……………

その矛先はアスラとオニキスの2人。彼らは三王たる強者のオーラを全力を肌で感じ取る。

「待つてくれエールの兄ちゃん!!……………今はオレ達で争つてる場合じゃねえ！」

「そもそも、ソイツは諸悪の根源、ブラックフォースの1体なのだろう?……信用しろと言う方がどうかしている。いいから貴様もBパッドを構えよ」

『ゼゼゼ……面白。相手になってやるぜ、身の程を教えてやる』

「オイイイイ!!…なんでやる気満々なんだアアア!!」

アスラが2人をどうにか止めようとするが、聞く耳は持たれない。

三王エレンは自分が頂点王を目指し続ける限り、いつか必ず相手にしなければならぬ相手だ。全てのカラーカードを揃えた事でその挑戦資格もある……

だが今ではない。やるなら全てに決着をつけてからだ。

「やるんだアスラ」

「Zのおっちゃん!」

「今ここで君の実力を見せつけてやった方が手っ取り早い。彼も馬鹿ではないはずだ、実力の差を感じれば自ずと手を引くだろう」

仮面Zもバトルを催促し出した。エールもただこの状況を傍観する事しかできないため、アスラは致し方なく懐からBパッドを取り出し、構える……

ただその時、三王塔の扉が開き、とある人物が顔を出した……………

「三王エレン。実力を示したいのなら、先ずはこのオレと戦ってもらおうか？」

！！！

「……………ロン……………！」

現れたのはスーミ村のロン。汚れてボロボロになった服装からはかなりの修練を積んだ事が伺える。

この事實はアスラ以外には伝えられていないが、仮面乙の正体は彼の実の父親であるゾン・アーサー。面を被って顔を隠しているため、バレる事は先ずないが、この瞬間は2人の親子の再会の時でもあった。

「ロン……………オマエ」

「フ……………アスラ、やっぱりもつと強くなって帰って来やがったな……………だが、オレはオマエよりももつと強くなったぞ。後、勝手に抜け駆けしようとするな。三王エレンはオレ

が先に倒す。オマエよりも先にな」

「……………へ、負けず嫌いは相変わらずかよ。なんだ、全然変わってなくて安心したぜ」

母であるシイナが亡くなってから初めて会話する息子2人。ロンはアスラの雰囲気の変化、背後にいるオニキスの存在から彼がさらなる力を手にして強くなった事を悟り、アスラもまたロンから底知れない才能をさらに磨き上げた匂いを感じる。

シイナの事に対してはお互いに一切触れようとしない。意味がないからだ。自分が頂点王になる事には変わりはないから……………

夢がある限り、お互い前を向いて走っていく事を知っているから……………

「さあ、始めよう三王エレン。カラーカードを8枚集めたオレの挑戦を受けないとは言わせないぞ」

「余程自身があるようだな……………いいだろう。相手になってやる。ただし、今は機嫌が悪い。少々手荒にいかせてもらおうぞ」

「構わない。寧ろ手荒に来てもらわないと困るのはこっちだ。オレはアスラの後ろにいるバケモノに力を示すのが目的じゃない。今、オレが欲しいのは全力のアンタを倒したと言う称号だけだ」

ロンが静かにBパッドを取り出し構える。その向けた先はエレンだ。アスラに先を越されまいと言う気概も感じる。

その後、すぐさま互いにデッキをセット。バトルの準備を行い……………それは始まった……………

……………ゲートオープン、解放!!

……………三王塔にて、人間の力を示すため、三王エレンと挑戦者ロンのバトルが幕を開ける……………先行は挑戦者のロンだ。無言でターンを進めていく。

「ターン01」ロン

「マジック、ヴァイオレットフィールド。手札にある紫のスピリットカードを破棄する事で、3枚ドロー……………バーストをセットしてエンドだ」

手札：6

場：「ヴァイオレットフィールド」
バースト：「有」

早々にデッキを回転させる。だが、バーストのみでスピリットの召喚は無し。

「ターン02」エレン

「メインステップ……バーストで防御を行おうとしても無駄だ。白きモビルスピリット、ストライクガンダムを召喚！」

「！」

ー「ストライクガンダム」LV1(1)BP4000

上空から飛来して来たのは三王エレンを象徴するモビルスピリットの1体、ストライクガンダム。

「召喚時効果でバーストカードを破棄！」

「……成る程」

ストライクガンダムが登場に伴い、ロンの伏せたバーストがオープン。

そのカードはライフ減少時にトラッシュのスピリットを復活させるマジックカード
「ドラグーンシユート」……………

特に耐性もないそのカードはすぐさま砕け散り、トラッシュへと破棄された。

「ドラグーンシユート……………これでトラッシュに送ったスピリットを召喚するつもりだったか。温いな、その程度の戦法では余に勝てぬぞ……………」

「知ってます」

相手は仮にもこの王国の中でトップの実力を誇る三王。挑戦者であるロンの戦法など手に取る様に理解できる。

しかし、今のロンにはそれでも負けなれないと言う自信があるのか、強気で、それでいて平然と言葉を言い返す。

「アタックステップ……………出撃せよ、ストライクガンダム……………効果でコアブースト！」

コアを増やし、レベルアップしながらロンの方へと突き進むストライクガンダム。バーストを破棄され、丸腰となったロンはこの攻撃をライフで受ける他なくて……………

「ライフで受ける……………ッ」

へライフ5??4へロン

ストライクガンダムの拳の一撃がロンのライフバリアを砕き、エレンに先制点を齎した。

「ターンエンド」

手札：4

場：【ストライクガンダム】LV2

バースト：【無】

ストライクガンダム1枚でロンの作戦を封じ込めた挙句ライフまで破壊した三王エ

レン。これぞ三王のバトルスピリッツであると見せつけるようにこのターンをエンドとした。

「ターン03」ロン

「メインステップ……………アーマーバット2体、第一のナイトを召喚！……………効果で1枚ドロロー」

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

ー【アーマーバット】LV1(1)BP1000

ー【仮面ライダーナイト】LV2(2)BP4000

鎧をつけたコウモリ、アーマーバットが2体と、ロンが物心ついた時から所持していたライダースピリット、第一のナイトが出現。

「そして、再びバーストをセット」

「性懲りも無くバーストか。また破棄されるぞ」

「なら破棄されなくなるまで伏せるだけです……アタックステップ、オレは召喚した3体のスピリットでアタック！」

「！」

連続攻撃の指示。前のターンに唯一のスピリットでアタックを行なってしまったエレンはこれらの攻撃をライフで受ける事しかできない。

「余は全てライフで受ける………ッ」

〈ライフ5??4??3??2〉エレン

アーマーバット2体による体当たり、ナイトの剣による刺突がエレンの3つのライフを撃破。ロンはライフの差で一気に優勢に立つ。

「ターンエンド」

手札：4

場：【アーマーバット】LV1

【アーマーバット】 L V 1

【仮面ライダーナイト】 L V 2

【ヴァイオレットフィールド】

バースト：【有】

「……………立派になったな、ロン」

「ツ……………おっちゃん」

アスラの横にいる仮面Zことゾン・アーサーがそう小さく呟いた。今日の前にいるのはわけあってスーミ村に置いて来た自分の息子。

親友を止めなければならぬと言う自分の責任を全て押し付けた息子なのだ……………
自責の念を含めた様な言い方に、アスラは思わずロンに仮面Zの正体を明かしたくなるが、正体はバラさないとと言う約束がそれを阻む。

そんな仮面Zの気も知れず、三王エレンは巡って来たターンを進めていく。

「ターン04」エレン

「メインステップ。このターンでバトルを動かす……!!」
「そうですか」

その言葉一つで一瞬にして空気が変わる。そして、エレンは手札にある1枚のカードを引き抜き、Bパッドへと叩きつけた。

「挑戦者よ、その心に身体に刻み込め……白夜の宝剣ミッドナイト・サンX……召喚」
「……剣のブレイヴ」

1 【白夜の宝剣ミッドナイト・サンX】LV1(2)BP5000

地面に突き刺さるように現れたのは、まるで夜をも照らせそうな輝きを放つ宝剣。エレンが所持する強力なブレイヴカードである……

「合体せよ、ストライクガンダム!」

1 【ストライクガンダム+白夜の宝剣ミッドナイト・サンX】LV2(4)BP11

000

合体先は当然ストライクガンダム。その鉄の拳で宝剣を握り、構える。

本来であればコスト4のこのスピリットはミッドナイト・サンと合体はできないが、効果でコストを上げることとその条件を満たし、可能とした。

「アタックステップ……ストライクガンダムで合体アタック……：効果でコアを増やし、さらに手札のソードストライクガンダムの「換装：ストライカーパック」により回復状態で入れ替える!!」

ー【ソードストライクガンダム＋白夜の宝剣ミッドナイト・サンX】LV3（5）B
P13000

ストライクガンダムの背部にストライカーパックと呼ばれる飛行物体がドッキング。ストライクガンダムはそこからビームサーバルを引き抜き、通常形態からソードストライクガンダムへとフォームチェンジ。

白夜の宝剣ミッドナイト・サンXと合わせて二刀流の姿となる。

「回復状態になってもアタックは継続している！……受けてもらうぞ、ダブルシンボルの一撃を！」

「ライフで受ける……ッ」

〈ライフ4??2〉ロン

ソードストライクガンダムの二刀流の一撃二撃がロンのライフ2つを破壊。一気に窮地に立たされるロンだが、このタイミングで伏せていたバーストカードが光る。

「ライフ減少のバースト、ドラグーンシュート。トラツシュからコスト6以下の転醒ナイトをLV3で召喚！……不足コストはアーマーバット2体から確保、よって消滅する」

┆【アーマーバット】(1??0) 消滅

┆【アーマーバット】(1??0) 消滅

┆【仮面ライダーナイト】LV3(4)BP8000

「効果で2枚ドロロー」

「……同じバーストだったか。まあいい、それでも余の勝利は揺るがん」

ドラグーンシユートの効果で転醒の力を持つナイト、転醒ナイトが召喚される。アーマーバット2体が消滅するものの、効果によりロンにカードを多くドロローさせた。

「アタックステップは続行だ……再び行け、ソードストライクガンダム！」

「ブロックだ、転醒ナイト」

ロンの残りライフは残り2つ。エレンにとってはここで行かない手はない。しかしその行手を転醒ナイトが阻む。

「BPはソードストライクガンダムの方が上だぞ」

「知ってます」

剣を扱う者同士、このBPバトルは剣術勝負となる。モビルスピリット故の巨大な体格を活かし、ソードストライクガンダムがナイトを圧倒する。

だが、ロンもここでただ黙って見届けるわけにはいかない。
マジックカードを投入していく。

「フラッシュマジック、ソードベント」

「！」

「転醒ナイトのBPを5000上げ、ソードストライクガンダムのコア2つをリザーブに」

「〔仮面ライダーナイト〕 BP 8000??13000

投入されたのはソードベント。ナイトはソードベントのカードをベントインし、巨大な黒槍を装備する。

そしてそれを振り、紫の斬撃を放ち、ソードストライクガンダムの一刀両断を狙うが
………

「ソードストライクガンダムは〔PS装甲・コスト4以下〕によりソードベントの効果を
受けない！」

難なく弾き返す。コスト3のソードベントではストライクガンダムは倒せない。

「BPが上がってもまだ互角だぞ!!」

「それも知ってる。だから2枚目だ……ソードベント!」

「!」

「効果で転醒ナイトのBPを5000アップ……合計18000でソードストライクガンダムを超える……!」

1 「仮面ライダーナイト」 BP13000??18000

2 枚目のソードベントのカードをベントイン。2本目の黒槍を装備し、ナイトもソードストライクガンダム同様に二刀流となる。

その後、目にも止まらない速さでソードストライクガンダムの周囲を縦横無尽に駆け抜け、翻弄。黒槍による斬撃をこれでもかといき、爆散させた。

「ツ……ロンのナイトがお兄様のストライクガンダムを倒した……!?!」

「うん。でも……………」

ナイトの勝利に愕然とするエールに対してそう呟いたのは彼の父である仮面Z。この後に何が起こるのかを知っているからこそその発言である。

「!」

「な、何ですかコイツはアアアア!?!」

アスラが叫ぶ。ソードストライクガンダムの爆発による爆煙が晴れた頃、その中より姿を見せたのは九つの尾を持つ見たこともない白いスピリット……

「合体したミッドナイト・サンXの効果。場を離れる時、分離して転醒できる……そして現れたのがこの転醒化身!」

―【白夜の宝剣ミッドナイト・サンX―転醒化身―】LV2(5)BP12000

転醒の力を持つミッドナイト・サンXはそう易々とは倒れてはくれないみたいだ。合

体先のストライクガンダムが消えてもなお、強力なスピリットとなって挑戦者であるロンの前へと立ちはだかる……………

「転醒時効果、転醒ナイトをデツキの下へと戻す！」

「なに？」

ミッドナイト・サンXの転醒化身は九つの尾を伸ばし、転醒ナイトに突き刺す。転醒ナイトは堪らず粒子となり、ロンのデツキの一番下へと消え去った。

「ソイツの転醒後が貴様のエースだと言う事は知っている。余はこれでターンエンド」

手札：4

場：【白夜の宝剣ミッドナイト・サンX―転醒化身―】LV2

バースト：【無】

ロンのスピリットを第一のナイトのみにするも、スピリット全ては疲労状態。エレンはこのままターンを終了。ロンのターンへと移り変わる。

「フ……いいな。やはりこれくらいの手応えがないとバトルのやり甲斐がない」
「……………余裕だな。とてもではないが、少し前に母親に近しい人を失った者ができる表情ではない」

余裕の表情を浮かべるロンに対し、エレンが亡くなったシイナに対して触れる。

「確かにシイナは死んだ。もうこの世のどこにもいない……………だが、それでも進むしかない。ガキの頃、オレは決めたんだ……………頂点王になると……………」

「ロン……………」

アスラも気持ちと同じだ。

例え目標だったシイナがいなくなっても、この夢を、約束を諦めるわけにはいかない。しかし、そこは類似していても、アスラとはまた異なる点もあって……………

「そして、シイナが死んで、わかった事もある……………」

「?……………わかった事だと、なんだそれは?」

「アンタに話す必要はない。オレに勝った後にでも教えてやるよ……………まあ、無理だろ

うがな」

アスラとはまた違い、また何か別の考え方を見出しているロン。それを教える事はなく、巡って来たターンを進めていく……

「ターン05」ロン

「メインステップ……第一のナイトのLVを最大にして、アタックステップだ……行け、ナイト！」

ー【仮面ライダーナイト】（1??6）LV1??3

ターン開始の早々。唯一残ったスピリット、第一のナイトで攻撃を仕掛けるロン。そしてその直後に、新たなカードを切る……

「フラッシュ【煌臨】を発揮……対象はナイト」

「！」

ソウルコアをトラッシュに置いてスピリットを強化する効果【煌臨】……………

ロンがそれを行ったと言う事は、呼び出されると予想できるスピリットは1体

……………

「疾風纏いて現れよ……………仮面ライダーナイトサバイブツッ!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3（6）BP16000

サバイブのカードをベントインし、ナイトが強化変身。疾風を巻き起こすライダースピリット、ナイトサバイブがこの場に煌臨した。

「煌臨アタック時効果、色を無色にし、スピリットのコアを2つトラッシュに送る」

「!」

「転醒化身からコアを外す」

ー【白夜の宝剣ミッドナイト・サンXー転醒化身ー】（5??3）

聖剣を振るうナイトサバイブ。その刃先からは疾風の斬撃が放たれ、それがエレンの転醒化身に直撃。消滅には至らないものの、一部のコアをトラッシュ送りにした。

「さらにナイトサバイブLV2、3の効果でターンに一度、デッキの上からカードを3枚トラッシュ。その後回復！」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ】（疲労??回復）

回復し、このターンだけで二度目のアタックを可能にした。

そして、今現在のエレンの残りライフは2。プロッカードも転醒化身が疲労状態となっているため皆無。誰がどう見ても、ナイトサバイブの連撃が決まれば勝利の場面となった……………

しかし……………

「どうせ、まだまだ足掻けるんだろ？」

「……………わかつているじゃないか、フラッシュマジック、リミテッドバリア……………この

ターンの間、コスト4以上のスピリットのアタックでは余のライフは減らぬ。その攻撃はライフだ」

〈ライフ2?!2〉エレン

防御マジック、リミテッドバリア。その効果で張り巡らされた透明のバリアがナイトサバイブの猛攻を耐え抜く。

流石は三王だ。一回の王手程度では落ちない。

「ターンエンド」

手札：4

場：【仮面ライダーナイトサバイブ】LV3

【ヴァイオレットフィールド】

バースト：【無】

口ぶりからして、どうやらロンもこのターンでは決めきれない事を予期していたようだ。

……………やはり、決着をつけるならあのカードか……………

頭の片隅でそう感じながら、彼はこのターンを終える。そして、ナイトサバイブの猛攻を凌いだエレンの反撃のターンが始まっていく……………

「ターン06」エレン

「メインステップ……………再び出撃せよ、ストライクガンダム！」

ー「ストライクガンダム」LV2(3)BP6000

前のターンに「換装：ストライカーパック」の効果で手札に戻っていたストライクガンダムが再召喚される。

エレンはその後、息つく間もなくアタックスステップを宣言して……………

「アタックスステップ……………ストライクガンダムでアタック！……………その効果でボイドからコア1つを自身に追加」

ストライクガンダムに攻撃指令。だが、この瞬間もまた、エレンは手札にあるカードを引き抜いた……………

無論、新たなスピリットを……………

己が最も信頼するモビルスピリットをこの場に顕現させるためである。

「フラッシュ【煌臨】 発揮……………対象はストライクガンダム」

「！」

「来る……………お兄様のエース……………!!」

エールだけではなく、この場にいる全ての人物がそれを察する。

ストライクガンダムから純白の光が溢れ出ていき、その姿形を大きく変化させていく

……………

「顕現せよ、フリーダムガンダム!!」

ー【フリーダムガンダム】LV3（4）BP13000

溢れ出した光を弾き飛ばしながら姿を見せたのは、三王エレンの切札フリーダムガンダム。雄々しく翻された青い機翼、美しく輝く装甲は正しく舞い降りた剣。

「煌臨時効果でナイトサバイブをデツキの下に戻す」

「！」

フリーダムガンダムが登場するだけでロンの強力無比なライダースピリット、ナイトサバイブが粒子に変換され、彼のデツキの底へと沈む。

「言われるまでもないだろうが、煌臨スピリットはその煌臨元となったスピリットから全ての情報を引き継ぐ。そしてこのフリーダムガンダムはバトルの終了時に敵のライフを1つ砕く……」

「！」

ロンの残りライフは2。

フリーダムガンダム、ミッドナイト・サンXの転醒化身、いずれかの攻撃をまともに受けて仕舞えば即敗北と言った状況に陥っている。

だが、ここまでいくつもの試練を乗り越えて来たロンに、その程度の逆境は最早苦でもなんでもなくて……

「貴様の残りライフは2。これで終いだ……！」

「な訳ないだろ。フラッシュマジック、デルタバリア」

「なに!？」

「これによりこのターンの間、コスト4以上のスピリットからは如何なる攻撃でも、オレのライフは0にならない……その攻撃はライフで受ける」

へライフ2?! 1 ロン

フリーダムガンダムが手持ちのビームサーベルでロンのライフを斬り裂こうとした直後、ロンの放ったマジックカードは絶対防御のマジック。

その効果でライフをギリギリ1つだけ保つ事に成功する。

「くっ………よりもよってデルタバリアで凌がれたか。ターンエンド」

手札：2

場：【フリーダムガンダム】LV3

【白夜の宝剣ミッドナイト・サンX―転醒化身―】LV2

バースト：【無】

10年以上前、シイナと頂点王を賭けたバトルを行った時のことを思い出したエレン。あの時もデルタバリアで凌がれたのだ。

今は亡き頂点王シイナ。目の前にいる息子であるロンと重なって見える。常に余裕のある表情を浮かべているところが特にそっくりだ。

「オレのターンだ………このターンでアンタのライフを全て破壊し、オレは頂点王に近づく」

「!？」

ロンの一言で空気が一変する。元々、久し振りに顔を見せた彼からは何かしらの変化があるように見えたが………

今、この瞬間、それがより露骨に現れたような気がした。

このターンはロンの修行の成果、その集大成。如何に彼がこの短期間で強くなったのかが証明されるターンだ。

「ターン07」ロン

「メインステップ。第一のナイトを召喚。効果でドロ」

1 「仮面ライダーナイト」 LV3 (4) BP6000

本日2体目となる第一のナイト。その効果でロンはデッキから1枚のカードをドロした。

「アタックスステップ……行け、ナイト」

余りにも短すぎるメインステップを終え、アタックスステップへと直行。ナイトが剣を手にライフ目掛けて走り出した……

「小童如きが……余のライフを全て碎くなど片腹痛い。阻め、転醒化身！」

対峙するナイトとミッドナイト・サンXの転醒化身。果敢に剣を振るい、猛攻を仕掛けるナイトだが、その硬い装甲を前にその剣は碎け散る。転醒化身は自身の強固な装甲を見せつけた所で宝剣をナイトに向けて振り下ろし、斬りつける。ナイトは堪らず爆散し、敗北を喫する。

「他愛もないとは正にこの事。貴様はここから逆転する手があるとでも言うのか？」

「……………ああ、言う。今ここが、シイナがオレにくれたカードを使う時だ」

「なに？」

そう言い放ちながら、ロンは手札にある1枚のカードをBパッドに叩きつける。

そして、それこそがシイナの最後のカード。アスラに託したデュークモンと対を成す存在……………

「孤高の魔王よ、今こそ己が力を世に知らしめよ!!……………究極体のデジタルスピリット、ベ

ルゼブモンをLV3で召喚ッ!!」

「ッ……デジタルスピリットだと!？」

「〔ベルゼブモン〕 LV3 (7) BP16000

「ロンが、デジタルスピリットを……!」

光をも塗り潰してしまうような闇の中より出現したのは悪魔とも呼べる姿をした邪悪なデジタルスピリット……………

その名はベルゼブモン。シイナ・メザが所持していたと思われるデジタルスピリットのカード。それを今、息子であるロンが召喚した……………

「ベルゼブモンはコスト3以下の紫のスピリットが破壊された時、1コストで召喚できる」

ロンがベルゼブモンの効果説明を挟むと、アスラの後ろにいるオニキスが口を開ける。

『ゼゼ……アイツ、バケモノだな』

「……………オマエの方がバケモノじゃね？」

『そう言う意味じゃねえよ……………あの人間、オマエのずっと横にいたな』

「ああ、そうだぞ。オレの幼馴染で、ライバルだ」

『……………アイツは、使えるかもな。ブラックフォースとの戦いにも、その才能とセンスだけで勝てるかもしれねえ』

これまでのバトルと、ベルゼブモンでロンに対する評価を改まるオニキス。ブラックフォース戦においての重要な戦力であるとカウントした様子。

そして直後にロンはベルゼブモンの効果を発揮させて……………

「ベルゼブモンの召喚アタック時効果、スピリットのコア2つをリザーブに送る」

「コア除去効果か!!……………だがフリーダムガンダムの【PS装甲】と転醒化身の【超装甲】の前では無意味!!」

その体内にあるであろうコアを弾き出さんと拳銃から弾丸を連射するベルゼブモン

だが、フリーダムガンダムと転醒化身は磨き上げられた装甲でそれを難なく弾き返してしまう。

「何を出そうが同じ事だ……オマエでは余に勝てん!!」

「いや、勝てる……アンタは確かに強い。だが、今のオレはそのさらに上を行く……ベルゼブモン、アタックだ」

三王である誇りを胸に、尊大な態度で接するエレン。如何なるバトルでも負けられないと言うプレッシャーを背負った彼だからこそ言える事だ。

だが、最早負けられないと言う理由に関してはロンも同じ……

ベルゼブモンに攻撃の指示を仰ぐと、直後に手札からカードを引き抜いた。

「フラッシュ【チェンジ】発揮……対象はベルゼブモン」

「ツ……デジタルスピリットを対象にチェンジだ?!」

「その効果で、オレはアンタのリザーブからコアを支払って使用、フリーダムガンダムのコア全てをリザーブに置く」

「!!」

相手のリザーブからコストを支払うと言う、その特異な効果で、ロンはエレンリザーブからチェンジのコストを確保する。そしてフリーダムガンダムから全てのコアが弾け飛び、消滅。

エレンのスピリットはミッドナイト・サンXの転醒化身のみとなる。

さらにチェンジの醍醐味はその効果発揮後に対象スピリットと自身を入れ替える事にある……………

「その後、回復状態に入れ替える……………今ここで進化を超えろ……………モードチェンジ、ブラストモードツツ!!」

ベルゼブモンの背中に漆黒の4枚の翼が新たに生える。そして天よりの贈り物なのか、天空より巨大な機関銃が降り注ぎ、ベルゼブモンは右手を差し上げるかのように上に挙げ、それと合体。その機関銃は差し出されたベルゼブモンの右手と一体化した。

……………その威厳のある姿はまさしくオメガモンと同様、究極体を超えた究極体……………

ー【ベルゼブモンブラストモード】LV3(6)BP20000

「で、デジタルスピリットがチェンジを使うなんて……………」

「ロンのヤツ、また強くなりやがって……………羨ましいぞコノヤロー」

その姿を見て、アスラはただただ目をギラギラと輝かせ、口元を大きく開け、他の誰よりも永遠のライバルの進化を喜んでいた……………

「チェンジの効果によりアタックはこのまま続行……………プラストモードは自身の効果で紫のダブルシンボルとなる」

「ツ……………ライフを2つ削ると言うのか……………!」

回復状態でのアタック。さらにダブルシンボルになる力を発揮するベルゼブモンブラストモード。

残りライフ的に一撃でもそれを貫えば敗北してしまうエレンは咄嗟に1枚のカードを手札から切つて……………

「フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「！」

「これによりこのターン、転醒化身のBPを3000上げ、疲労状態でのブロックを可能にする……再び阻め、転醒化身!!」

「【白夜の宝剣ミッドナイト・サンX―転醒化身―】BP12000??15000

マジックの効果を受け、再びブロックする転醒化身。九つの尾を伸ばし、上空に佇むブラストモードを迎え撃つ。

が、ブラストモードにその攻撃は通じないか、黒き4枚の翼を中心に身体を高速で回転させ、それを弾き返す。

「無駄だ。最早アンタ如きに負けない……オレは、頂点王になる男だから……!!」
「くっ……」

「やれ、ブラストモードツツ!!」

ロンの木霊に合わせて左手で魔法陣を形成、そこに向かって右腕の機関銃からエネルギー砲を放つブラストモード。

それに直撃してしまった転醒化身は遂に力尽き、爆散。

これはロンが、アスラと同様に劇的な成長を遂げたのだと証明した一瞬でもあつて

……

「ブラストモードで二度目のアタック……これが、最後だ」

「ッ……ライフで受ける」

ラストのアタック宣言を行うロンからエレンが不覚ながらに感じ取ったのは「恐怖と
言う名の悪寒」……

それは昔、エレンが初めてシイナと対面した時に抱いた感情でもある。

そう。

今のロンは頂点王シイナに限りなく近い存在になりつつあつて……

「……見事だ」

〈ライフ2??0〉エレン

最早自分では届かない存在になってしまった事を悟るエレン。実力を認め、瞳を閉じながらプラスチックモードが放った弾丸を受け入れる……………

やがてライフは砕け散り、エレンのBパッドからは滅多に聞こえない「ピー……………」と言う無機質な機械音が鳴り響く。

それはロンが王国の最強カードバトラーの一角、三王エレンに勝利を収めた何よりの証拠の音色。ロンは遂に頂点王になるための大きな一步を踏み出したのだ……………

「お、お兄様が……………負けた!？」

彼の敗北が一番信じられなかったのは妹のエルだった。ダメージにより片膝を突くエレンの様子がウソなのではないかと目を疑う。

しかし、これは嘘ではない。全て現実だ。

およそ10年ぶりに三王を負かしてしまう程のカードバトラーがこの地に誕生したのだ。紛う事なきこの瞬間は歴史的なモノである。

「黒の連中と戦うのはオレとアスラだけで十分だ。アンタは大人しく裏方でもやってるんだな」

「くっ……」

辛辣なロンに対して、言い返す言葉もない。

敗者に口無し。三王と言う強者の立場にいる彼だからこそ、その言葉を噛み締めながら素直に受け取った。

「……………なあ、Zのおっちゃん」

「なんだい？」

「エールの兄ちゃんは……………三王エレンは強えよ。本当に足手纏いになっちゃうのか？」

「……………如何に強いカードバトラーとも言えども、ブラックフォースの前では黒の力を持たない者は無力だ……………ただ、頂点王シイナのように、誰にも超えられないような力を持つ者は……………別だけどね」

アスラにそう言われ、仮面Zは実の息子であるロンの方を見た。

ロンの実力は最早頂点王シイナのそれに限りなく近くなってしまった。おそらく、もう一人の三王であるテンドウ・ヒロミもこの時点で変えてしまったのだろう

……………

それならば、オニキスが言っていた通り、確実に戦力になる……………
だが……………

「僕はいつたい、何を考えていたんだろうね」

「え？」

仮面Zの気持ちを察する事のできなかったアスラ。この瞬間から、彼は自分の考え方に揺らぎが生じる事となる……………

アスラを含め、こんな幼く、若い子に、世界の存亡を賭けた戦いに巻き込んでもいいものかと……………

「アスラ、ところでその人は誰だ？」

「え……………いや、誰って……………その、だな」

「？」

ロンがアスラに仮面Zの事を聞いた……………

無自覚ながら自分の父の事を尋ねた彼に対し、嘘をつけないアスラは誤魔化し方がわ

からずに戸惑う。そんな2人の様子に、仮面Zは笑みを浮かべ……………

「僕の名は仮面Z。アスラを鍛え直した者さ……………こんな物騒な仮面をつけてるけど、こ
う見えておじさん、結構温厚だから。よろしくね、ロン」

「……………(こ)ちら(こ)そ」

彼の挨拶に、少しだけ考えるような表情を見せるが、そんなモノは一瞬で終わり、す
ぐさまロンはアスラの方へと首を向けると……………

「アスラ、オマエに話がある……………ちよつと来い」

「お?……………んだよ、ここじやダメなのか?」

「ああ、どうしてもオマエに聞きたい事がある」

「……………わかった」

アスラとロンはそう話し合うと、三王塔を後にする。直後にエールは片膝を突くエレ
ンに寄り添う。

「だ、大丈夫ですかお兄様……………」

「余の心配をするなエール……………三王であるとは言え、兄であるとは言え、敗者に情けをかけるものではない」

「ッ……………はい」

彼女を突き放すような言葉を使うエレン。本当は凄まじく嬉しいのだが、未だに素直になれないため、やや棘のある言い方になってしまった……………

しかし、この一大事に私情を優先するべきではない……………

「余の力では不足と言うのか……………だが、まだやるべき事はある」

「……………ようやく国民に避難誘導を行う気になってくれたかな？」

仮面乙がエレンに訊いた。

「……………オマエは国と言うモノをわかっていない。ブラックフォース、黒の力だのと言つても、国民は誰一人として信用せぬ。況してや国の危機と言えば混乱し、逆に争いを招く結果になるだろう」

「……じゃあどうするのです。まさか、三王ともあろうお方が国民を見捨てるわけじゃありませんよね？」

「見捨てるものか。余なりの考え方で必ず、国民には指一本と触れさせん」

エレンの覚悟を聞いて安堵したか、「よかった」と口にする、仮面Zもまた外へ向かわんと扉の方へと足を運んでいく。

「ちよ、ちよつとZ！……アンタまでどこ行くのよ!？」

「少しだけ僕も考え方が変わった。これからその埋め合わせに………ね」

狐が描かれた仮面の奥には、何かしらの決意を感じる。あの一戦には、どうやら見ていた者達の心に大きな変化を齎した様子………

こうして、ロンの三王戦、その最初の試合は、勝利こそしたものの、今までとは何かが違う変化を見せながら、静かにその幕を閉じるのであった………

ザザザ……………

ジジジ……………

ズズズ……………

ゾゾゾ……………

暗闇の中、4つの不敵な笑い声が共鳴し合い、反響した。

その正体は言わずもがな、黒属性の力を操る古の怪物ブラックフォースの3人、オブシディアン、ヘタマイト、シャーマン……………

そして、彼ら3人から力を授かり、より強力なモノとしてその体内に宿したバケモノ……………ウイル。

「やっとこの時が来た。これまで様々な苦難が私を遮って来たが、今日ようやく、私はこ

の世界を一からリセットさせる事ができる……さあ行きましょうブラックフォースの皆さん!!」

今宵からは二度と明けない永遠の夜……

ブラックゲインの時間です……!!

ウィルが目前まで来た願いを叫ぶ。ブラックフォース3人の力さえも、己が力に変えた彼は遂に世界へと宣戦布告を行ったのだった……

ブラックフオーズ決戦篇

65コア「明けぬ夜ブラックゲイン、アスラVSオブシディアン」

「おい、どこまで行くんだよロン」

「……………」

王国の中心都市であるオウドウ都。その中でも人気が全くない裏道がある。アスラはロンの話を聞くために、2人でそこを歩いていて……………

「……………ここら辺でいいか」

「で、話ってなんだよ。お金貸してくれとか?」

「別に金に困ってないし、つかオマエはオレよりも金ないだろ」

「なにをオオオオ!!!……………オレだつてこう見えていろんな人達にバトルで勝つてお金貯めたんだぞオオオオ!!!」

Bパッドに記されたそれなりの残高をロンに見せつけるアスラ。だがそんな事はどうでもいい。

ロンはそう言わんばかりに話を始める……………

「単刀直入に聞けど」

アスラ、オマエは頂点王になってどうする？

王国最強のカードバトラーとなって何を望む？

ー!!

それは凄まじく簡素で、尚且つ深い質問だった。今までガムシヤラに目指して来た最強カードバトラー『頂点王』の称号。ロンは如何にしてそれになるかの話ではなく、なった後にどうしたいかをアスラに尋ねたのだ……………

「頂点王になってどうするって……………んなもんわかんねえよ。だってオレはシイナとの

約束を果たすために、コモンでも、ソウルコアが使えないヤツでも最強になれるって事を証明したいから頂点王になりたいんだ。なった後の事は考えた事ねえ……………」

そうだ。アスラにはそれが無い。頂点王になると言う大きな夢こそ掲げてはいたが、それになった後にどんな事をしようか考えたこともなかった。

「やはりな。オマエはどんなに強くなっても、そこだけは絶対に考えたりしないと思っていた」

「……………なんかオレの事バカにしてる？」

「してる」

「オイ!!……………じゃあオマエにはあんのかよ、頂点王になった後にやりたい事」

確かに。話し方からして、アスラとは違い、ロンには頂点王になった後にやりたい事がある事になる。

ロンは薄く笑みを浮かべると、その質問に返答する。

「ああ、ある。オレは……………」

だが、返答しようとしたその直後、アスラの加減からブラックフォースの1人、オニキスが現れ……………

『ゼゼゼ……………おい、夢について語るのは後にしてもらおうか』

「……………アスラの中にいるブラックフォースか」

『ああ、オレはアスラの中にとつといた。オマエの事もよく知ってるぜ』

顔合わせは初めてとなるオニキスとロン。オニキスがこの変なタイミングで突然現れたのには理由があつて……………

『アスラ、今他のブラックフォースの力を感じ取った』

「ツ……………じゃあ」

『ああ、遂に来るぞ……………ブラックゲインが』

ブラックゲイン……………

この世の全てを黒属性の力で染め上げ、黒属性の力に対応し切れない人間を滅ぼすと

言う計画。王国のどこかでブラックフォースの力を感じ取ったオニキスは、遂にそれがやってくるかと確信した。

「一旦この話は終わりか。だがアスラ、これだけは覚えておけ」

「ん？」

「先を見ているヤツと見てないヤツとでは力の差が違う。頂点王になった後の事を考えた事もないオマエでは、オレには決して勝てない……………」

「……………勝手な事言うんじゃないやねえコノヤロー……………オレはそれでも頂点王になる。オマエを倒してな」

「……………フ、それでこそアスラだ。行くぞ、この国を救いに」

「おう!!」

ロンが頂点王になった後、何を成そうとしているのかは結局わからず終いだっただが、今はそれどころではない。もつと大きな厄災から世界を救うべく、アスラとロンは風のように走り去って行った……………

一方、オウドウ都の中心部には異常事態が発生していた。

まるで街を見下ろすかのように巨大な黒い球体が宙に浮かんでいたのだ。誰も見た事がない見たなる物体に王国中の皆が興味本位でそれを眺めていた……

それが厄災の始まりだとも知らずに……

黒く、巨大な球体はやがて中から同じくらい黒いガスを上へと放出。瞬く間に晴天だった空全体を黒く塗りつぶして見せる。

そして、一瞬にして黒く染まった大空より、これまた未知なる黒い怪物達が現れる。それはスピリットではなく、黒属性の力によって固められた人形……

だが、人間達によって封印されたと言うブラックフォース達の昔年の恨みが詰まっている。故に、それらは人間を襲わんと地上へと降り立ち、破壊を開始した……

逃げ惑う人々。最早レアやマスターなどの身分は関係ない。こうなってしまうば、人は人。力によって淘汰されるだけの無力な存在に成り下がる……

しかし、それでも抗う者達はある……

「行きなさい、オメガモン!!」

崩壊した都市の中、白い聖騎士型のデジタルスピリット、オメガモンが黒い怪物達を次々と斬り裂いていく。

オメガモンを操る少女の名はエール・オメガ。エックスの身分を持つ者として、街を守護するためにその身を賭ける……

「出撃せよ、フリーダムガンダム!!」

オメガモンに続き、青き機翼を羽ばたかせるモビルスピリット、フリーダムガンダムが怪物達をビームサーベルを振り葬っていく。

操っているのはエールの実兄、この王国の三王でもあるエレン・オメガ。

「生き残りたくば早く逃げろ!!……出来るだけ遠くに!!」

街の人々にそう呼び掛けながら戦闘を続けるエレン。

エールと彼女の操るオメガモンと共に、エックスとして、三王として国民の皆を守る。

「来た……本当に来た。アスラ達は今頃どこに……」

「余計な事を考えるなエール。ヤツらが必ず主犯を倒すと言うのであれば、我らでその時間を稼ぐまで。国民には指一本触れさせるな」

「はい!!」

黒属性の力は余り理解はしていなかったものの、今のこの異常な事態から、これこそがオニキスの言っていたブラックゲインなのだと言う事を理解していた2人。

エレンは続け様に「それに……」と呟くと……

「助太刀も用意してある」

「え……助太刀って……?」

「ワイラの事やで、エールちゃん!!」

「!!」

聞き覚えのある声がエールの耳を通過する。その方へと振り向くと、巨大な体格を持つ黄金の甲虫型のデジタルスピリットが黒い怪物達を次々と撃破している光景が目に見え、浮かんで来た……

そして、そのスピリットを操る事ができるのはただ1人……………

「へ、ヘラクレス!？」

「お久やな!……………また綺麗になったんとちやうか!……………いつでもワイの嫁に来てもええんやで!」

「……………アンタが助つ人?」

「あれ、そこ無視すんの……………まあええわ。助つ人はワイだけやないでえ!!」

そこにいたのはこの国の緑のカラーリーダー、ヘラクレス。彼にそう言われ、エールは辺一帯を見渡していく……………

するとそこには……………

「行きます、わたくしはズドモンを召喚!!」

長いブランドヘアの少女がBパッドにそつとカードを置き、亀のような頑丈な甲羅を持つ青の完全体デジタルスピリット、ズドモンを召喚した。

彼女の名は『ローザ・アルファ』……………

この国の青属性のカラーリーダーだ。

「ワシがいる限り、王国のライフには傷一つ付けません。メカゴジラを召喚じゃ!」

歳を感じさせる喋り方の白銀の髪の男性、Bパッドにカードを配置し、鋼鉄の大怪獣、メカゴジラを召喚した。

彼の名は『ゴゴ・シラミネ』……………

この国の白属性のカラーリーダー……………

「次はオレ様だぜYEAH!!……………ホーリーエンジエモンをサモン!!」

金髪のトサカ頭、テンションの高い男性がBパッドにカードを叩きつけ、大天使の如き完全体デジタルスピリット、ホーリーエンジエモンを召喚して見せる。

彼の名は『スピーカー・ヘブン』……………

この国の黄属性のカラーリーダー……………

『HAY HAY HAY HAY HAY HAY HAY!!!』……みんな揃ってgoingマイウェイ

「嬉しいぞスピーカー!!……次は私だ、命は燃やしません。変身、仮面ライダーゴースト!!」

一本に結った黒くて長い髪の女性が、スピーカーをどかしながらBパッドにカードを叩きつける。

……カクゴ、ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!

と言う音声流れると、彼女は頭部に一角を持ち、パーカーを着こなすライダースピリット、ゴーストに変身した。

彼女の名は『カゲミツ・ブゲイ』……

この国の紫のカラーリーダー……

そして最後は……

「……可能性の獣、ユニコーンガンダムを召喚」

赤髪の青年がBパッドにカードを置き、一角を備えた白きモビルスピリット、ユニ

コーンガンダムを召喚する。そのユニコーンガンダムは登場するなりビーム銃で周囲の黒い怪物達を薙ぎ払っていく……………

彼の名は『イツカク・アカバネ』……………

この国の赤属性のカラーリーダー……………

「…す、凄い……………これって……………」

「ああエールよ。王国のカラーリーダーはここに集結した」

エレンが呼び寄せたのは王国にいる6人のカラーリーダー。オウドウ都を守護すべく、こうして皆集まってくれたのだ……………

「ほなみんな行くでえ!!……………このヘラクレス様に続きな!!」

「なんでオマエが指揮するんだヘラクレス。カラーリーダーのリーダーはどう考えてもこのオレ、最後の赤のカラーリーダー、イツカクだろ。リーダーになりたくば100万円寄越すんだな」

「そんなに払えるかアアアア!!」

「うつつふ、多分ですけど誰がリーダーでも対して変わらないと思いますわ」

「……………ローザちゃんって意外と手厳しいよね……………」

誰がカラーリーダーを指揮するかで揉めるヘラクレスとイツカク。それに対してローザが無自覚ながら釘を刺していく。

「ほっほっほ。なんかよくわからんが、アスラがこの事件の大元を叩いてくれるのじゃろ?」

「え……………あ、うん……………そうよ」

白のカラーリーダーであるゴゴがエールに訊いた。エールも軽く首を縦に振りながら返答する。

「アイツが帰って来た時に、安心して頂点王になれるよう、王国はしっかり守護しないと
な」

「カゲミツ……………」

「つまりオレ達ヒアウィーゴー!!…つまりアスラは頂点王!!……………YEAH H H !!」

「……………ごめん、アンタはちよつと何言ってるかわからないわ」

紫のカラーリーダーであるカゲミツと、黄のカラーリーダーであるスピーカーがエールにそう言った。

「……………ヤツなら必ず諸悪を倒す。皆の者よ、それまで信じて戦い抜け……………これは三王命令だ」

エレンがそう告げると、6人のカラーリーダー達は各々が召喚したスピリットと共に黒き怪物達と本格的な戦闘を始めた。

皆気持ちは同じ、王国を守るため、そしてアスラのため……………

「……………ねえ見てるバカスラ?……………みんなアンタみたいなコモンのために戦うんだって……………凄じじゃない、この国を変えたのよアンタは。本当にアンタが見てきたバカな夢は現実になるうとしてる。もう少して頂点王になれるのよ?……………だから絶対に帰って来なさいよね」

「……………我らも行くぞエール。この国を、守り抜け」

「はい、お兄様!!」

「そんな馬鹿な事はやらねえ。みんなオレ達が天元をぶっ倒すのを待ってるんだ……
オレはそんなみんなの期待にぜってえ応える」

「フ………だつたらもつと急ぐぞ」

「おう!!」

アスラは皆の考えを理解している。ここでエール達を助けたらみんなの期待を裏切る事になる。

だからこそ、ブラックゲインの原因になっているであろう目の前の黒い球体をぶっ壊す………

そう誓いながら、走り行くのだが………

ある声によって、それは止められる………

「ザザザ………誰が、誰をぶっ倒すって？」

「!!!」

思わずその足が止まる………

声の方へと身体ごと振り向く……………

そこにいたのはブラックフォース最強の男、オブシディアンだった。今はこの国の三王の1人であり、アスラの恩人でもあるテンドウ・ヒロミの身体を乗っ取っている……………

「…………オブシディアン…………!!」

「シャーマンから聞いたよ。君たち、まだ私らに齒向かうつもりみたいだね」

「あつたり前だ!!…………ブラックゲインとか言うふざけた計画は、このオレとロン…………そしてオニキスがぶっ潰す!!…………つーかオマエはテンドウさんの身体から離れやがれ!!」

拳を握り、強く宣言するアスラ。

オブシディアンは不敵な笑みを浮かべながら、まるでアスラの中を見通しているかの如く……………

「ブラックゲインの事はオニキスから聞いたのかな?…………随分と仲が良くなったんだね……………出て来いよ、裏切り者」

「!」

アスラではなく、オニキスに告げたその言葉。やはりオブシディアンとて裏切り者は許せない様子……………

そしてその言葉に合わせ、アスラの影から霊体のオニキスが姿を見せる……………

『ゼゼゼ……………よう、待ちわびたぜオブシディアン。オマエ達がまだブラックゲインなんてくだらねえこと考えてたとはな』

「ザツザツザ……………くだらないのはお互い様ではないかオニキス。君こそまだあの時殺した人間の事が忘れられないのかい？」

『……………』

「だからこうして私たちに復讐しようとして来たのだろうか……………すっかり人間に毒されたね」

オブシディアンの言う『人間』とは、アスラの実の母親である「キョーラ・ギア」の事だ。

「そこにいる少年は、あの時の人間の子供か何かなんだろ？」

「!!」

『……………ああ、そうだ』

「お、おいどう言う事だよオニキス?? ……いったいなんの話だ!」

サラツと口にするには余りにも衝撃過ぎる内容。流石のアスラも困惑してしまう。

オニキスは遂にこの時が来てしまったかと言わんばかりに、16年前のあの出来事を説明する……………

『……………オマエの本当の母親と、オレは親友だった』

「マジ!?!」

『ああ、名前はキョーラ』

「……………キョーラ」

『……………だがある日、復活したオブシディアンが、ギアの一族の末裔と言う理由だけで……………キョーラを殺そうとした』

「!!」

『キョーラは最後の力を振り絞り、オレと共にこの世界に来た。だが、直後にオブシディアンから受けた傷が原因で死んだ……………生まれたばかりのオマエの事を心から愛して

いた』

「……………」

全てを話した……………」

アスラは遂に自分の本当の母親であるキョーラの事を知る。彼は今何を思っているのか、斜め下を向き、黙り込む。

興味がないのか、ロンもただその後ろ姿を無言で眺めるだけだ……………」

「ザツザツザ……………まさか絶滅させたはずのギアの一族がこうして生き残っているとは思ってもいなかったよ。まあ、それも直ぐにあの世に行く事になる……………ちゃんと私の手で母親の後を合わせてあげましょう」

『……………今まで黙っていてすまなかったアスラ、行けるか?』

ここで会った時から簡単に推測できたが、オブシディアンがここに来た理由はアスラを消す事。黒の力で腕にBパッドのようなモノを纏い、バトルのスタンバイを行う。

それを見ても尚戦闘態勢を取らないアスラにオニキスが訊いた。彼はどうやらキョーラの事を黙っていた事に罪悪感を覚えている様子……………」

だがしかし、直後に何故かアスラは薄く口角を上げて……………

「ヤベエよオニキス、どうしよ。オレ今めちやくちや嬉しい……………！」

ー!!

赤ん坊の頃に血の繋がった母親を失ったと言う過去を知らされた後、そして目の前にはその殺害した張本人がいると言うにもかかわらず、アスラは笑ってしまった……………この行動には流石のオブシディアンも動揺する。

「オレ、今までソウルコアが使えなくてめちやくちや悔しかったんだ。なんでオレだけがこんな不幸なんだって思ってたんだ」

『……………』

「でも違った、不幸なんかじゃなかった……………オレは、2人の母ちゃんに愛されていた……………こんな幸せなヤツ、他にいねえよな？」

自分は他の誰よりも幸せ者だった……………

その事を嘸み締めると、嬉しくて嬉しくてしよがなかつた。

そんなアスラを見てロンは鼻で笑いながら「……やっぱバカだなアイツは」と呟きながら彼の元まで歩み寄り……

「アスラ。このバトル、オレは一切手を出さない……オマエがやって、勝て」

「ああ、サンキューな親友」

オブシディアンとのバトルには手を貸さない事を告げるロン。今の自分がアスラにしてやれる事はこのくらいだと思っている。

『ゼゼゼ……なんだ、てつきりビビってやる気を失ったのかと思つたぜ。心配して損したわ』

「な訳ねえだろ。待たせたな、オニクス!!」

『ああ、このバトル……勝つぞアスラ!!』

「おう!!」

相棒であるオニクスともそう語り合い、アスラは直後に己のBパッドを腕にはめ、展

開。デツキをセットしてバトルの準備を行う……………

やる気は十分。目標は最強最大のブラックフォース「オブシディアン」の討伐……………

「ザザザ……………愚か者とはオマエ達のような言葉を指すんだろうね。最弱のブラックフォースと、ソウルコアが使えない最弱の人間如き、このオブシディアンが軽く捻り潰してくれる」

「うるせえぞコノヤロー!!……………テンドウさんの身体は絶対返してもらおう!!……………でもってオレは必ずオニキスの無念を晴らす!!」

『ゼゼゼ……………決着だオブシディアン!!』

……………ゲートオープン、解放!!!

そのコールはまさにこれから始まる激闘の狼煙。

戦場と化したオウドウ都にて、アスラとオニキス、そして最強のブラックフォースであるオブシディアンがバトルを始める。

先行はアスラだ。ロンが後ろで黙って見守る中、ターンを進めていく……………

「ターン01」アスラ

「メインステップ!!…オレは、オレ自身を仮面ライダーセイバーに変身させる!!」

「!」

「変身!!仮面ライダーセイバー」LV1

……………烈火抜刀!!

その音声が流れると、アスラは炎をその身に纏い、変身する。その姿は右肩に赤き龍が刻まれた新たななるライダースピリット、仮面ライダーセイバー。

「……………シャーマンが言っていた、ジオウを持つこの私でさえも知らぬライダー……………成る程、オニキスの黒の力が宿っているのか」

「アレがアスラの新しい力か」

オブシディアンが存在を知らないのも無理はない。何せセイバーはアスラとオニキ

スの絆で誕生した奇跡のライダースピリットなのだから。

ロンもアスラの新しいライダーの姿を認識した所で変身のカードの神託が発揮。デッキからカードがトラッシュへと送られるが、今回の対象はなかったため、追加コアも0だ。

「……………ターンエンド」

手札：4

場：【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

バースト：【無】

緊張感が張り詰める中、アスラの第1ターンが幕を閉じ、最強のブラックフォース、オブシディアンのターンが始まる。

「ターン02」オブシディアン

「メインステップ。私もネクサスカード、旅団の摩天楼。これを2枚配置だ……………効果により2枚ドロー」

―【旅団の摩天楼】LV1

―【旅団の摩天楼】LV1

オブシディアンの背後に二棟の摩天楼が聳え立つ。彼はその効果でカードを引き、己のデッキを回した。

「ターンエンド」

手札：5

場：【旅団の摩天楼】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【無】

すぐさまターンエンドが宣言され、アスラのターンが巡って来る。

「ターン03」アスラ

「メインステップ!!……オレはドラグノ突撃兵をLV2で召喚!!」

┌【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV2(3)BP6000

アスラが呼び出したのは身の丈と同等の大剣を構える竜人、ドラグノ突撃兵。彼が恩人であるテンドウから譲り受けたカードである。今までどれだけこのカードに序盤を支えてもらっていたかは計り知れない。

「アタックスステップ!!……テンドウさんから貰ったこのカードでぶつかる!!……行くぞ突撃兵!!……効果で1枚ドロロー!」

「……………ほお、ライフで受けよう……………ッ」

〈ライフ5??4〉オブシディアン

ドラグノ突撃兵が大剣を振り、オブシディアンのライフバリアを1つ砕く。そしてこれだけでは終わらない。

「【追撃】の効果、重疲労状態にする事でもう一度攻撃だ！……でもってカードもまたドロー！」

「面白い効果だ。それもライフで受けよう……ッ」

〈ライフ4??3〉オブシディアン

ドラグノ突撃兵の二度目の攻撃もヒット。僅か3ターン目にして2つのライフを挽ぎ取る事に成功した。

「どうだクロキモヤロー!!……オレはこれでターンエンドだ!!」

手札：6

場：【ドラグノ突撃兵〈R〉】LV2

【変身!!仮面ライダーセイバー】

バースト：【無】

アスラの怒りも込められた渾身の二撃。それはオブシディアンに確かなダメージを負わせ、彼を優勢に立たせた……

はずだった。

この直後に、アスラ達は人間とブラックフォースの生物としての格の違いを思い知る事になる……………

「ターン04」オブシディアン

「私のターン……………今のは少し痛かったぞ」

「……………」

「だが、痛いだけだがね」

〈ライフ3??5〉オブシディアン

「……………は？」

呆気に囚われた声が漏れるアスラ。無理もない、何せ、壊したはずのオブシディアン
のライフバリアが自分の目の前で新たに形成されていくのだから……………

いったい何のカード効果なのかとアスラは考える。だが違う……………

これは決してカードの効果ではない……………
ブラックフォースと人間の格の違いなのである。

「ザザザ、驚いたかい？……………かなり長い期間この肉体で過ごして来たからね。ようやく、本来の力を発揮できる」

「……………どう言う事だよ」

「端的に言うと、ライフの再生」

「!!」

「貴様がどれだけ私のライフを破壊しようとも、次の私のターンまでにそれは回復する」
「……………マジかよ」

ブラックフォース本来の力、それ即ち『ライフの再生』……………

アスラがどれだけ攻撃を行おうとも、オブシディアンは瞬時にそれを回復してしまうのだ。

「……………カード効果でもない、ライフの自動回復。最早ただのチートだな」

バトルを傍観しているロンが一人、そう呟く。アスラとは違って対して驚いてはいない様子。

「チートか。ザザザ、そうだな……我々ブラックフォースと人間とでは生物としての格が違う!!」

人間は下等種族。黒属性の力を容易く扱えるブラックフォースこそ至高の生物。そう言いたげな表情で高笑いするオブシディアン。

ライフ再生の原因は間違いなく彼の体内を駆け巡る、強大な黒属性の力。

同じくオニキスの影響で黒属性の力を持つアスラだが、果たして勝機はあるのか
……………

私の身分はレアだった。どこにでも存在する、普通の人間、普通の子供、普通の存在だった。

ただ他の者達と違う事があるとすれば、それは身寄りの方々、例えば両親が物心つい

た時から誰もいなかった事でしょうか……………
生きていくのに必死だった。

毎日毎日、食べ物を盗み、ドブに挟むネズミを食べては嘔吐し、川の水を啜った。その繰り返しだ。

本当に辛かった。地獄だった。この世に自分が生まれた意味を見出せなかった。他の人間は違った。裕福だった。通りかかった裕福な人間は偶に「食べきれないから」と言う理由で食べ物捨てていた。

不思議な話だ。食べ物に困っている者がいるのに、別の人間は食べきれないからとそれを投げ捨てる。

そんな光景を見る度に思った。

この世界はいつたいなんだと??

何故こんなにも醜い人間が貧乏なだけの美しい人間達を支配している気になっていくのかと……………思い出しただけでも腹立たしい。胸糞が悪過ぎる。今すぐ殺してやりたいと思った。

だができなかつた。自分にその力がないからだ。

逆に自分が死のうとも思った。だが死ねなかつた。なんでかかって?

怖いからに決まつてるだろう。

そんな私を偶然見つけたのはエックスの身分を持ち、尚且つデジタルスピリットを司る三王、エレナ・オメガ。

彼女は空腹で今にも生き絶えそうな私を優しく抱き、実の子のように世話をしてくれた。そして私はあの方の元で暮らすようになり、恩人であるエレナ・オメガの事を、敬意を込めて「お師匠」と呼ぶ事にした。

保証されたは裕福な暮らし。正直言つて毎日が幸せだった。お師匠は偶にサイコパスだったが、本当に良い人だった。

しかし、私の中にあつた「この世界の抱えた愚かさ」の考え方が消えることはなく………

今日、ここまでやって来た。バトルスピリッツ第七の属性、黒属性を操る古の怪物達、ブラックフォースと協定を結び、それを成し得るだけの力を遂に私に手に入れたのだ………

「……今更こんな事を思い出すなんてね………もう、あの時の無力な私ではない。力を得た。最早他の人間……いや、猿共には到達できない神の領域にまで手を伸ばしたのだ」

ここは、オウドウ都に現れた黒き球体。その中にある巨大な空間の中、玉座のような座椅子に腰を掛けているのはブラックフォースと化したちよび髭シルクハット、ウィル。

そこには彼だけが存在し、他のオリジナルのブラックフォース達の姿は一切確認できない。

「必ず世界を創り変える。今いる人間を全て排除、理想郷をこの手に……………」

全ては己の夢のため……………」

どうしようもなく捻じ曲がった世界を直すため……………」

ウィルはただ一人狂気の道沿いを歩んでいる……………」

だがその直後、足音が聞こえて来た。その音は徐々に大きくなっていき、こちらに近づいて来るのがわかった。

「……………残念だけど、簡単にこの世界を渡すわけにはいかないな」

「……………誰だ貴様。どうやってこの空間に入ってきた？」

「通りすがりのイカしたマスクマンさ」

ウイルの目の前に現れた男は、不気味な狐の面を被った男性、仮面Z。どう言うわけか、彼は黒い球体の中へと単身で侵入して来たようだ。

あれだけアスラを戦わせようとしていたはずなのに、いつたいう風吹き回しか……………

「ところで、他のブラックフォースがいないみたいだけど、どうかしたのかな？」

「……………何故ブラックフォースの事まで知っている。貴様、三王やカラーリーダーなどのこの国の中枢に存在する人間か？」

「ガン無視はやめて欲しいな」

今まで仮面で正体を隠しながらブラックフォースや黒属性、アスラ達の事を調べ尽くし、今日この日のために準備をして来た仮面Z……………

本名、ゾン・アーサー。

ウイルに対し、バトルをしろと言わんばかりに己のBパッドを構える。

「まあ良い、他のブラックフォースは後で始末するとして、先ずは一番厄介そうな君から倒させてもらおう。その玉座から降りたまえ」

「……………つくづく偉そうに。これだから現代人は嫌いなんだ、虫唾が走る」

「勝手に走ってるがいい。それに君も人間だろ？」

「何を言う。私は最早神に等しい存在だ。人間などと言うしようなも無い枠組みに収まらずに良いわけがない」

自分の存在は神に近い存在である事を自負するウィル。

同じく黒の力を手にした存在として、Zは真つ先にアスラの顔を浮かべる。

あの子は違った。こうはならなかった。10年以上、己の弱さと向き合い続け、自分のまま強くなってみせた。

だがウィルはどうだ。

これ程までに愚かに成り果てた人間を知らない。哀れみの目を向けながら、己のデッキをBパッドにセットする。

「OK……………じゃあやろうか、神様」

「……………丁度いい。暇潰しに消し去ってやろう」

……ゲートオープン、解放!!

突如出現した黒い球体の中でひっそりと、世界の命運を分けた戦いが勃発。アスラとは違い、黒の力を一切持たないZに勝機は見出せるのか……

必ず勝つ。アスラとロンをこれ以上危険な目に合わせるわけにはいかない……

そう願いつつ、バトルへと意識を向ける仮面Z。彼はどうかやらアスラやロンにもう危険な目には遭って欲しくない様子。全てを自分だけで解決するためにこうやってここに来たらしい。

優柔不断と言って仕舞えばそれまでだが、彼本来の性格である心の優しさが垣間見えたとも言えて……

場面は戻り、オウドウ都。ロンが見守る中、オニキスを宿したアスラとテンドウの肉

体を依代とした最強のブラックフォース、オブシディアンとの激闘が続く。

アスラの攻撃が実質の無効になる中、オブシディアンが己の第4ターン目を本格的に開始して………

「ザザザ………メインステップ。緑のスピリット、ヤン・オーガをLV2で召喚」

ー【ヤン・オーガ】LV2(3)BP4000

オブシディアンがこのバトル初めて呼び出したスピリットはトンボの姿をしたヤン・オーガ。

「マジックカード、ライフチャージ。効果で今召喚したヤン・オーガを自壊させ、ボイドからコア3つをリザーブに追加、さらにヤン・オーガ破壊時効果、破壊直前のLVの数だけコアをリザーブに追加、よって計5個のコアをリザーブに」

「ツ………一気に5個も!？」

マジックカードの効果により、召喚ほやほやのヤン・オーガは緑の光を纏いながら爆

散。だが払った代償に見合う見返りがオブシディアンのリザーブに施された。

「まだ行くぞ。龍星の矢で射抜け、龍星の射手リュキオースをLV1で召喚」

「!!」

【龍星の射手リュキオース】LV1（1）BP6000

フィールドから吹き上げる火柱、それらは美しく、滑らかに左右へと分かれ展開。そしてその狭間より現れ出たのは、白獣に跨って駆け抜ける龍、リュキオース。

このスピリットの強さはアスラも異世界で経験済みであつて……

「召喚時効果。BP20000以下のスピリット、ドラグノ突撃兵を破壊」

「くっ……!」

リュキオースの豪腕から放たれる強烈な矢。それはドラグノ突撃兵を容易く射抜き、爆散させた。

「アタックステップ……行け、リュキオース」

すかさずアタックステップに移行し、リュキオースで攻撃を仕掛けるオブシディア
ン。スピリットがないアスラはこの攻撃をライフで受ける他ない……

「ライフで受ける!!……………ぐ、ぐあッ!」

『ぐおっ!』

〈ライフ5??4〉アスラ

リュキオースの矢が再び放たれ、今度はアスラのライフバリアを1つ射抜く。

その今までは比較のしようもない強烈な一撃、まるで身体の中で爆竹が爆裂したよ
うな痛みをアスラとオニキスは受けて……………

「い、いつてえ……マジかよ、たったの1ダメージで」

『まだ行けるかアスラ?』

「おうもちろんだぜオニキス。オマエこそ、へばんなよ!」

それでも尚立ち上がれるのはアスラの凄いところだ。こう言った所でも無駄に鍛えていた肉体が役に立つ。

「つーかアイツみたいにオレ達のライフも回復できねえのか？」

『……………!!』

「向こうが回復すんなら、こっちもやろうぜ!!」

アスラがオニキスに訊いた。オブシディアンみたく、黒属性の力でライフを補えないかと……………

だがそれは直ぐに否定される。

『それは無理だな』

「マジ!?…なんで!？」

『……………』

アスラの質問に黙るオニキス。だが直後にオブシディアンが2人の会話に入り

……

「ザザザ……ギアの一族、そんなヤツに期待しても無駄だ。何度も言うが、オニキスはブラックフォースの中で最も弱い、貴様のライフを回復してあげられる程の力を有していないのだよ」

「！」

ブラックフォースにも序列がある。

オブシディアンはその中で最も高い1番目の序列の持ち主。だが反対にオニキスは最も下の序列、4番目だ。彼らの中での序列とは、一つ違うだけでも天と地程の差がある。

オニキスとて、回復したいのは山々だ。だが、単純に力がないと言う理由で、彼はそれをしてやれないのだ。

「ザザザ……本当にオマエは昔からそうだオニキス、なんで生きているのかわからない。その程度の手力しか持たぬオマエが何故ブラックフォースの枠組みに収まっているのだ

……？」

ライフの回復程度、本当の力さえ取り戻せば、他のブラックフォースでも容易に行える。

下衆の笑い声を上げながらオニキスを見下すオブシディアン。だが、そんな中でもオニキスは笑みを浮かべて……………

『ゼゼゼ……………生きてる意味なんざ、オレもわからなかつたさ』

「む?」

『今思えばなんでテメエらみたいなくズ共と一緒にいたのかもわかりやしねえ……………だがあの日、キョーラのお陰で理解した。アイツはオレの恩人でもある、だからオレは今日も生きるんだ、オレの記憶の中にいる、アイツのために』

オニキスの頭の中に浮かんで来たのは黒の世界を共に旅したキョーラとの記憶。力の有無、質などは関係ない……………

あの日出会った親友、キョーラ・ギアのために、今日も強く生き抜く……………
それだけだ。

「へっ……そうだよなオニキス。生きようぜ一緒に……でもってその前に先ずはアイツをぶっ倒すぞ!!」

『ゼゼゼ……おう、オレを……オレとオマエのカードを信じて全力で駆ける!!』

今の相棒であるアスラが己の手札をより強く握り、より強かにBパッドを構える。

「ザザザ……これはもう重症だなオニキス。ブラックフォース最弱の男とソウルコアが使えないこの世界の落ちこぼれ、よく考えたら良いコンビじゃないか。ブラックフォース最強である私に刃向かう事、後悔するなよ?……ターンエンドだ」

手札：2

場：【龍星射手リユキオース】 L V 1

【旅団の摩天楼】 L V 1

【旅団の摩天楼】 L V 1

バースト：【無】

オブシディアンが嫌味を言いながらそのターンを終える。

次は決して諦めない精神を持っているアスラのターン。オニキスのためにもオブシ

ディアンを討つべく、それを進めていく……………

「ターン05」アスラ

「メインステップ……………来たぜオニキス、オマエとの絆のカードだ」

「！」

「龍を纏いしその衣、仮面ライダーセイバーブレイブドラゴンをLV2で召喚！」

1 〔仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン〕〔2〕LV2 (3) BP5000

変身したアスラの今の姿と全く同じ姿をしたライダースピリット、セイバーブレイブドラゴンが召喚される。

「対象スピリットの召喚により、変身したオレに1コア追加。召喚時効果発揮！…デツキからカードを3枚オープンし、オレはその中のカード、火炎剣烈火を手札に加えて、残りを破棄する」

召喚時効果を發揮させ、手札を増やすアスラ。
そんな彼が次に目を向けたのは当然、オブシディアンとそのフィールド……………

「アタックステップ!!……………攻撃だ、仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン!!」

アスラの指示により、セイバーブレイブドラゴンがオブシディアンのライフを目掛けて地を駆け抜ける。そして、この瞬間に發揮できる効果がセイバーブレイブドラゴンにはあつて……………

「フラッシュ!!……………セイバーブレイブドラゴンのLV2効果、手札にある系統、剣刃を持つブレイヴをセイバーブレイブドラゴンに直接合体させる事で、セイバーブレイブドラゴンの召喚時効果をもう一度發揮する!!」

「!!」

「オレは!!……………さつき加えた火炎剣烈火を、セイバーブレイブドラゴンと合体させる!!」

1 【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン】「2」＋火炎剣烈火】LV2（3）BP

9000

セイバーブレイブドラゴンが腰にあるベルトから引き抜いた赤い剣、その名は火炎剣
烈火。

これにより、もう一度召喚時効果を発揮させるが、今回は不発。オープンカードは全
てトラッシュユヘと破棄された。

しかし、それだけでは終わらないのがこの仮面ライダーセイバーだ。

「火炎剣烈火の召喚によりオレに神託!!……さらにここで、火炎剣烈火、召喚時効果!!
……ネクサス一つを破壊する!」

「……!」

「オレはこの効果でこの効果で旅団の摩天楼を一つを破壊!!」

火炎剣烈火を振り、炎の斬撃を発生させるセイバーブレイブドラゴン。その斬撃はオ
ブシディアンの配置した旅団の摩天楼を一つ焼き切った……

「まだだ!!……こんなもんじゃ終わらせねえ!!……フラッシュマジック、火炎十字斬!!」
「む……!」

「この効果でリユキオースを破壊!!」

セイバーが存在する事でその真価を發揮するマジックカード、火炎十字斬。

セイバーブレイブドラゴンは、火炎剣烈火に炎の力を溜め込むと、それをリユキオースに向けて十字に二撃。そして斬り口から溢れんばかりの炎が吹き上がり、リユキオースは堪らず爆散した。

「ザザザ、やるね」

「アタックは当然続行!!……くらいやがれ!!」

「……ライフで受ける」

〈ライフ5??4〉オブシディアン

オブシディアンの眼前に迫るセイバーブレイブドラゴン。火炎剣烈火を横一線に払い、彼のライフにダメージを負わせる。

「どうだコノヤロー!!……ターンエンドだ!」

手札：5

場：【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン】「2」+【炎剣烈火】LV2

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1(2)

バースト：【無】

コントロールされつつあった盤面をひっくり返し、そのターンをエンドとしたアスラ。

次はオブシディアンのターンだ。おそらく、またライフが復活するに違いない

……

と、思われていたが……

「ターン06」オブシディアン

「スタートステップ……む？」

〈ライフ4??4〉オブシディアン

「……ライフが回復しないだと……?」

そのライフバリアは修復されず、合計の数は4のままだ。

オブシディアンはブラックフォース最強。二番目に強いとされるヘタマイトの攻撃を受けたとしても即座に回復できると言うのに、一番弱いオニキスのカードの攻撃で傷が癒えないなどあるわけがない……

改めて自分のライフを傷つけた仮面ライダーセイバーを見る彼、その時、セイバーのまた別の特徴に気がついて……

「…………成る程、そのライダースピリット、オニキスの力だけではなく、貴様のギアの一族の力も注ぎ込まれているのか」

「おう!!……だから言ったろ、これはオレとオニキスの絆のカードだ!!」

「ザザザ……それがどう言った原理で私のライフに傷をつけたのかは定かではないが、少なくともそのカードは私にとっての天敵みたいだ」

「だったらもうちよつと驚きやがれコノヤロー!!」

セイバーは、オブシディアンにとっての天敵。たった今それが判明した。

アスラの持つ、他者との絆でカードを進化させるギアの一族の力。そして、オニキスの持つ、全てを塗り替える黒属性の力が合わさったこの仮面ライダーセイバーは、この世で唯一オブシディアンに対抗できるカードであると言える。

アスラにオニキスの力を使いこなせるよう助言した仮面Zは結果的にファインプレイであつたに違いない。

「最弱同士が力を合わせ、私と言う最強を相手に希望を見出すか……面白い、ならば一度様子を見よう、ターンエンドだ」

手札：3

場：【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【無】

セイバーの特性を理解しても尚、冷静さを失わず、余裕を見せるオブシディアン。多量のコアをリザーブに残しながらこのターンはエンド。

そんな折、常にアスラの側にいる相棒、オニキスはアスラの背中を見ながら、彼から告げられたある言葉を思い出して……………

「オマエに直接会えたら言っておきたい事はあった……今まで、オレの力になってくれて、ありがとう!!」

アンダーワールドにて初めて対面した際、アスラがオニキスに掛けた言葉だ。直後に母であるシイナが自分の黒の力による代償で殺害された直後だと言うのにもかかわらず、アスラは自分に今まで力を貸して来た事に感謝して来た……

だが………

………ゼゼゼ、そりゃこっちのセリフだ。オマエのおかげで、オレはあのオブシディア
ンと戦える!!

内心でそう叫ぶオニキス。アスラには感謝しても仕切れない。ブラックフォース最弱であった自分が、最強であるオブシディアンと対等に戦えている事に対して、愉悅に浸っていた………

そんな最強タッグ、アスラとオニキスのターンが幕を開ける………

「ターン07」アスラ

「オレのターン、メインステップはすっ飛ばしてそのままアタックステップだ!!」

己のターン開始直後、すぐさまアタックステップへと移行……………

「このまま一気に行くぜ、セイバーブレイブドラゴンツ!!…火炎剣烈火の効果でデッキから1枚ドロ―!」

セイバーが火炎剣烈火を構え、戦闘態勢に入る。さらにアスラは「フラッシュ!!」と力強く宣言し……………

「セイバーブレイブドラゴンのLV2効果、このスピリットと合体可能な剣刃をノーコストで合体させる事で、召喚時効果をもう一度発揮できる!」

「ツ……………なに、2枚目のブレイヴを付けると言うのか!?!」

「ああ付けてやるさ!!」

オレはこのカード……………

第二の剣、雷鳴剣黄雷をセイバーブレイブドラゴンに合体!!!

空いている左手を天に掲げるセイバー。その先から雷雲が集い、一閃の落雷が迸る。セイバーはその落雷を強く掴み取ると、そこには火炎剣烈火の次なる剣、雷鳴剣黄雷が存在していて……………

1〔仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン「2」+火炎剣烈火+雷鳴剣黄雷〕LV
2(3)BP12000

「……………2体のブレイヴと合体だと?」

「オマエだけじゃねえ、オレ達のデツキも常に進化している。雷鳴剣黄雷はセイバーの2枚目のブレイヴカードとして合体が可能!」

新たな剣を呼び出し、ダブルブレイヴを決めるアスラ。

だがこんな時、大事な戦いの時であると言うのにもかかわらず、アスラはついさつき

耳にしたロンの質問を思い出していた……………

「『アスラ、オマエは頂点王になってどうする?』

「『王国最強のカードバトラーとなって何を望む?』

「……………なあオブシディアン、オマエは強くなって何を望んでいる?……………既に最強のオマエは、いったいその力で何がしたいんだ?」

今度は逆にそれと全く同じ質問をアスラがした。オブシディアンはそれを聞くなり口角を不気味な角度に上げ、返答する……………

「ザザザ……………そんな願いなど無い。私はウィルの育成に全てを注いでいる、あの子は強い、きつと私を凌ぐブラックフォースに成長する。私はあの子が創造する世界が見たくて力を貸したのだ」

そう己の心中を謳いながら、彼は一枚のカードを手札から切ってみせ……………

「フラッシュマジック、ブリザードウォール！」

「！」

「このターンの間、スピリットのアタックによって減少するダメージは1つのみとなる!!……その攻撃はライフで受けよう!!……ッ！」

〈ライフ4??3〉 オブシディアン

二本の剣を用いてオブシディアンのライフを斬り裂こうとするセイバーだったが、前方に出現した猛吹雪の防壁がそれを阻む。

ダブルシンボルであったがそのライフバリアは1つしか砕けなかった。が、あのオブシディアンのライフを3にした事はかなり大きい。

「オマエと違って、オレには強くなって、最強になりたい理由がある……いや、思い出したんだ……オレは……」

直前、アスラが脳裏に浮かべたのは母であるシイナが死んだあの日。

自分の腕の中で消えていった感覚は今でも覚えている……

そうだ。あんな事、もう二度と起こさせてたまるか……………

オレは、大事なモン全部護るために頂点王になるんだ!!
もう二度と、オレの好きなモンは壊させやしねえ!!

未知の力「黒属性」を操る究極の生命体ブラックフォース、その中で最も強いオブシディアンに向かって獣の如く咆哮を上げたのは、ソウルコアも使えない世界最弱の少年……………

今まで格上相手にも幾度となく戦い、デツキのカードを含めた仲間達と共に勝利を重ねて来た。

そんな彼を見て、ライバルのロンは薄く笑みを浮かべながらこう思った。
きつと、今回も勝つと。

「ターンエンド!!……………つしやあ!!……………来いやあ!!」

手札：6

2 場：〔仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン「2」十火炎剣烈火十雷鳴剣黄雷〕LV

【変身!!：仮面ライダーセイバー】LV1(3)

バースト：〔無〕

想いを叫び、セイバーのダブルブレイヴを決めたアスラ。依然優勢のままそのターンをエンドとした。

次は未だ余裕の笑みを浮かべ続ける最強の男オブシディアン……………

「ターン08」オブシディアン

「メインステップ……………ザザザ、堂々と吠え続けられるのも今のうちだ。貴様ら弱者が相手をしているのは誰かと言うことを思い知らせてやる」

「!」

「抱かれた淡い希望を砕け、LV3で召喚……………」

バル・マスケ男爵……………

ルーデンドルフ

淡い紫に光る粒子の群れ。それらはオブシディアンのフィールドで結合し、その本当の姿を表す……………

その名はルーデンドルフ。目と鼻が隠れる黒きマスクを纏う、夜族のスピリット……………

ー【バル・マスケ男爵ルーデンドルフ】LV3（6）BP13000

世界三大スピリットであるライダー、デジタル、モビルのいずれにも属していないスピリットと思われ、見た限りでは堂々と宣言して召喚するスピリットには見えない……………

「……………なんだ、コイツ……………？」

「ザザザ、バーストを伏せてターンエンドだ。ルーデンドルフの恐ろしさは今にわかる」

手札：1

場：【バル・マスケ男爵ルーデンドルフ】LV3

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【有】

世界三大スピリットでもない普通のスピリットを召喚しただけでそのターンを終えるオブシディアン。

あのスピリットが何をしてくるか想像もできないが、警戒ばかりもしてられない。アスラはオブシディアンとの決着をつけるべく、己に巡って来たターンを進めていく………

「ターン09」アスラ

「ドローステップ、ドロー!!………ッ」

『ゼゼゼ、来たか』

アスラがドローしたのは最初に黒属性の力を使った時に爆誕したあのライダースピリット………

セイバー、龍騎と並びオニキスとの絆の象徴とも呼べるそのカードの召喚を宣言して

いく……………

「おう!!……………メインステップ、次はオマエだ、黒きを纏うライダースピリット、仮面ライダーリユウガツツ!!」

アスラのフィールドで様々な鏡像が重なり合い、黒属性の力を纏った黒い仮面ライダー龍騎、リユウガがその姿を見せる……………
はずだった。

……………パリンツ!!

「ツ……………な、なに!?!」

重なり合った鏡像はアスラの目の前で音を立てながら砕け散っていく。

これ即ち召喚の不発。アスラはリユウガの召喚に失敗したのだ。そのリユウガのカードはアスラのBパッドを離れて手札へと戻る。

この光景にオブシディアン以外が思わず目を丸くする。そう、この召喚の不発も全て

彼の呼び出したスピリットにある…………

「ザザ、ルーデンドルフは存在する限り、相手はメインステップ中、ソウルコアをコストとして支払わなければスピリットカードを召喚できない」

「!!」

ふとオブシディアンのフィールドに目をやると、先程召喚されたルーデンドルフの身体が淡い紫色に発光している。効果発揮中である証拠だ。

ソウルコアを支払わなければスピリットを召喚できない。この制約は決してプレイヤーにとって重たいわけではない。ソウルコアの性質上、最低でも一回は召喚が可能だからだ……………

だが、それを受けたプレイヤーがアスラだと話は変わってくる……………

「貴様はソウルコアが使えない。もう言うまでもないな……………」

「……………」

貴様はもう二度とスピリットを召喚できない!!

自分にとって、これでもかと驚異的な効果を持つスピリットの登場に、冷や汗が止まらない。このルーデンドルフをどうにかしない限り、アスラ達に勝ち目はないだろう

……………

明けぬ夜、ブラックゲインが続く中、アスラとオブシディアンの激闘はまだまだ続く

……………

ブラックゲインが始まって以降、王国は地獄と化した。

黒き球体から現れ続ける黒き怪物。そんな怪物達から王国と人々を護るために立ち向かうカラーリーダーや三王。彼らは強い、だが無限に沸き続ける怪物達に勝ち目はないだろう。きっと、その内押し切られて敗北してしまう……………

この国は今、歴史上最大の危機に瀕している……………

「むえ……………」

この国で一番巨大な建物三王塔。その頂、頂点王とそれに挑む挑戦者しか立つ事が許されない、その場所にて、地獄となった王国を眺めるのは、これまでアスラ達と共に旅をして来たオレンジ色の犬みたいな生き物「ムエ」……………」

「むえ……………遂に始まったか」

ムエ、人語を喋る。

66コア「正しき黒の力で、悪しき黒を討て！」

人間の生きる事のできない世界を目指すべく施行された明けぬ夜ブラックゲイン。

今、王国中は黒属性の力で溢れかえっている。黒属性の力是对応できない弱き人々の肉体を蝕み、やがて世界から人は消えゆくだろう……………

アスラ達はそれらを止めるために立ち上がる……………

明けぬ夜ブラックゲイン。その中で遂にアスラは、ブラックフォース最強のオブシディアンと対峙する。

激闘を繰り広げて行き、セイバーのカードで勝利目前まで迫るアスラだったが、オブシディアンにソウルコアを支払わなければスピリットを召喚できなくすると言う効果を持つ「バル・マスケ男爵ルーデンドルフ」を召喚されて……………

「貴様はもう、スピリットを召喚できない。ザザザ、大人しくターンを私に渡すんだね」

オブシディアンが不気味な笑みを浮かべながらアスラにそう告げる。ソウルコアを消費しなければスピリットを召喚できなくすると言う効果を持つルーデンドルフ、普通のバトルならば誰もが最低でも一回は召喚できる……

それはソウルコアがルールとして、必ずそこに存在するからだ。

だがアスラは違う。彼のリザーブに、ソウルコアと言う文字はない。

先祖であるギアの一部が黒の世界に移動する際、その代償としてソウルコアを出すと言う機能そのものが失われたからだ。祖先たるアスラも、どう足掻こうがソウルコアを出す事はできない。

「……………これは完全にソウルコアを出せないオマエが悪い。反省しろアスラ」

「うるせえぞロン!!……………出せねえモンはしようがねえじゃねえか!!……………こう見えて結構出せるよう頑張ってたんだよ!」

後ろで呆れた様子を見せながらぼやくのはアスラの最大のライバルであるロン。この世界を賭けた戦いであると言うのに、2人は漫才のコントの如く会話を繰り広げる。

緊張感がないと言えばそれまでだが、これは2人が冷静でいる何よりの証拠でもあつ

て……………

『ゼゼゼ……………ブラックフォース最強の男がこんな小細工を使うなんてな。最強の名が聞いて呆れるぜ』

アスラの後ろにいるブラックフォース最弱のオニキスがオブシディアンにそう告げる。

「敵の弱点を突く事は戦いにおいて鉄則だ。特にそのセイバーと言うライダースピリットはかなり厄介なのでね……………ザザザ、オマエ達をウイルの所には行かせないよ……………このままゆっくりと潰してやる」

「……………」

どうやらオブシディアンは少なくともアスラ達を驚異的な存在と見做してる様子。奴も必死になっている事を悟りつつ、アスラはできる限りの手を打っていく。

「……………スピリットがダメならそれ以外で対抗するまでだぜ、オレはネクサス、聖剣連山を

配置!!」

「!」

ー【聖劍連山】LV1

フィールド全域を覆うように出現したのは、幾億本もの聖劍が突き刺さっている山々。それらは同じく聖劍を扱うセイバーをさらに強くしてくれる存在だ……

「アタックステップ……聖劍連山の効果、剣刃と合体しているスピリットにBPプラス3000!!」

ー【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン「2」+火炎剣烈火+雷鳴剣黄雷】BP12000?15000

まるで聖劍連山がセイバーブレイブドラゴンを鼓舞するように力を与えていく、ブレイブドラゴンの手に握られた火炎剣と雷鳴剣の刀身が赤く光り輝いた。

「ッ……ルーデンドルフのBPを超えたか!!」

「行け、セイバーブレイブドラゴン!!……ダブルブレイヴアタックだ!!……火炎剣の効果で1枚ドロ」

スピリットを召喚できないのなら、今存在するスピリットとそれ以外のカードで戦い抜くまで……

オブシディアンはこの攻撃をルーデンドルフで受けるわけにはいかない。そのライフを捧げる……

「ザザザ、いいだろう……我がライフ、受け取れ!!……ッ」

〈ライフ3??1〉オブシディアン

火炎剣と雷鳴剣。赤く輝いた2本の刀身でオブシディアンのライフバリアを一気に2つ木っ端微塵にして見せる……

だが、それはオブシディアンの伏せていたバーストの発動条件でもあって……

「ライフ減少によりバースト発動！」

「！」

「エクステインクションウォール!!……効果で今減った分のライフを取り戻す」

「なに………ッ」

〈ライフ1??3〉オブシディアン

勢い良く反転されたバーストカードにセイバーブレイブドラゴンの攻撃が実質の無効とされてしまう。

完全にアスラの読み違いだ。自動でライフが回復していくのなら、ライフ回復系の効果は一切デッキに入っていないと踏んでいた。

「………ターンエンドだ」

手札：7

2 場：【仮面ライダーセイバーブレイブドラゴン】〔2〕＋【火炎剣烈火＋雷鳴剣黄雷】LV

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1(3)

【聖剣連山】 L V I

バースト：【無】

攻撃できるスピリットはもう存在しない。このターンを半ば強制的にエンドとさせられるアスラ。

オブシディアンの反撃が待ち受ける……………

「ターン10」オブシディアン

「メインステップ…………更なる絶望を貴様らに与えてやる」

「!!」

『来るか』

ターン開始早々にそう告げるオブシディアン。

言動から、オニキスは何が来るのかを察する。

「歴戦の力を統べる孤高の魔王よ……………今ここに顕現せよ!!……………オーマジオウ!!」

「!!」

……………祝福の時!!

……………最高最善!!

……………最強王!!!

I 【仮面ライダーオーマジオウ】LV2(3)BP30000

地獄の門でも開かれたかのような獄炎が地を這って行く。その中心で確かな力の根源が姿を見せた。

その名は仮面ライダーオーマジオウ。

「……………オーマジオウ!?!……………トウエンテイのジオウと何か関係あんのかよ!?!」

「ザザザ……………ジオウは元々私の私物。黒の世界からこの世界に来る時に私共々力を失ってしまつてね。だから私はウィルにライダースピリットを集めるよう命じていた。そしてその間、一番良い働きを見せたのは、その貴様の言うトウエンテイ」

「!!」

「彼はよくライダースピリットを集めてくれたよ。面白いよね、女一人のためだけにあそこまでモチベーションを上げるなんて、ここまで完璧な捨て駒は見た事がない……近年稀に見る大馬鹿者だよ」

「……………テメエ……………トウエンティがどんな想いでライダースピリットを集めてたのか知ってんのかよ!!」

トウエンティの想いを踏みにいじるオブシディアンに怒りを露わにするアスラ。だが、直後にオブシディアンは召喚されたばかりの最強ジオウ、オーマジオウの効果を発揮させていき……………

「知りたくないね。キモいし……………オーマジオウ召喚時効果、コスト20以下のスピリット1体を破壊する」

「!」

「ザザザ、仮面ライダーセイバーブレイブドラゴンを破壊する!!」

「なに!?!……………セイバーツ!」

オーマジオウが両手を翳すと、緑と黒の竜巻が発生。セイバーブレイブドラゴンはそ

れに飲み込まれ爆散してしまう。握っていた2本の剣は切先を地面に向けて突き刺さった。

「これで唯一のスピリットは消えた。そのまま指を加えて敗北を待っている」

「くっ……………」

「マジック、フォースブライトドロロー。デッキから手札が4枚になるまでドロロー、さらにマジック、ソウルドロロー。コストの支払いにソウルコアを使用し、デッキから3枚ドロロー！」

ドローマジックのラッシュでその手札の合計を6枚にまで増加させるオブシディア。続けてアタックステップを宣言して……………

「アタックステップ……………行くのだ、オーマジオウ！」

「！」

「オーマジオウは赤と紫のダブルシンボル、貴様達からライフを2つ奪うぞ」

オーマジオウがアスラへの視線を移す。

彼はダブルシンボルの攻撃をいなすべく、手札からカードを抜き取るが……………

「奪わせるかよ、フラッシュマジック……………」

「させん!!…………ルーデンドルフの更なる効果、私のアタックステップ中、相手はソウルコアをコストとして支払わねばマジックを使えない!!」

「なに!?!…………マジックにもソウルコアを!?!」

スピリットだけでなく、マジックカードの効果までも封じて来るルーデンドルフ。Bパッドに叩きつけたマジックカードが早々にアスラの手札へと戻ってしまう……………

「貴様に反撃の余地はない!!」

「くそ…………ライフで受ける…………ぐ、ぐあつ?!」

へライフ4?!?2へアスラ

オーマジオウが手を翳すと、黒いオーラを纏った蝙蝠の群れが出現し、アスラのライ

フバリアを奪い去っていく。

何も抵抗できず、アスラはオーマジオウの強烈な一撃をもらい、流石に片膝を突いてしまう。

「ザザ、私はこれでターンエンド。最早虫の息、次のターンでトドメを刺してくれるわ」

手札：6

場：【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【バル・マスケ男爵ルーデンドルフ】LV3

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【無】

セイバーも失い、圧倒的劣勢に立たされたアスラ。蓄積されたダメージをおしのけ、なんとか立ち上がるが、すでに体はボロボロ……………

ここからの逆転など、薄い望みに感じる……………

「まだまだ、まだオレは諦めねえ……………」

だがアスラは決して諦めない。どんな状況になっても己の才能と努力を信じ、前へと進み続ける。

そんな彼だからこそ、ロンをはじめとし、ブラックフォースのオニキスまでもが彼について来たのだ……………

『ゼゼゼ、オマエならそう言うと思ってたぜ』

「つしゃあ!!…行くぜオニキス!!」

固い絆で結ばれたソウルコアの使えない人間と最弱のブラックフォースのターンが幕を開けていく……………

「ターンー」アスラ

「メインステツプ!!…スピリットがダメならコイツだ!!…来い、ドラグレッツダー!!」

「!」

「成る程、ブレイヴカードか」

1 【ドラグレッタダー】 L V 1 (1) B P 6 0 0 0

呼び出したのは全てを焼き尽くす赤き龍、ドラグレッタダー。このカードはスピリットではなく、ブレイヴであるため、ルーデンドルフの効果を見逃して召喚が可能なのだ。

「さらにバーストをセットして、ターンエンドだ」

手札：6

場：【ドラグレッタダー】 L V 1

【火炎剣烈火】 L V 1

【雷鳴剣黄雷】 L V 1

バースト：【有】

………コイツに賭ける。

アスラはそう内心で意気込みながらバーストを伏せると、そのターンをエンドとした。

オーマジオウを駆るオブシディアンのターンが又しても始まる。

「ターン12」オブシディアン

「メインステップ……先ずはオードランを召喚」

1「オードラン」LV2(3)BP3000

オブシディアンは手始めに鬼のような角を持つ小さなドラゴン、オードランを召喚。

「如何なる小細工を用意しても無駄だ。貴様達はここで敗北し、ブラックゲインは完遂、黒属性に対応できない人間は全て滅びる」

「んな事はさせねえ!!……頂点王になるこのオレが、絶対みんなを護る!!」

「だから無駄だと言っている、マジック、フレイムテンペスト」

「!!」

オブシディアンの放った1枚のマジックカードにより、炎の竜巻が発生。アスラのドラグレッダーや聖剣達がそれに吸い込まれ、次々と爆発四散して行く……………

「マジック、フレイムテンペストはコストの支払いにソウルコアを使う事でBP7000以下のスピリットを壊滅させる。言っただろう、無駄だと」

「……………いや、無駄にはならん!!……………バースト発動、双光気弾!!」

「!」

全滅したが、希望の光は潰えない。アスラは伏せていたバーストカード、双光気弾を発動させる。

「効果で2枚ドロ、コストを支払ってネクサス、旅団の摩天楼を破壊だ」

「む…………」

放たれた2つの炎の弾丸が、オブシディアンのバックに存在する旅団の摩天楼を焼き尽くした。

「ザザ、だからなんだと言うのだ。さらにマジック、リカバードコア。不足コストはルーデンドルフのLVを2に下げて確保し、オーマジオウと我がライフにコアを1つずつ追加」

〈ライフ3??4〉オブシディアン

「ッ……またライフ回復」

「バーストを伏せてアタックスステップ、行くのだオーマジオウ!!」

進撃のオーマジオウ。残り2つしかライフを持たないアスラはこの攻撃を受けたら敗北が確定してしまう……………

仲間達から期待されている以上、ここは全力で守り抜く……………

「……は絶対に凌ぐ!!……………フラッシュユ!!」

「ザザ、馬鹿め、ルーデンドルフの効果でマジックカードの使用も封じられているのを忘れたか!!」

アスラは今、マジックカードでのカウンターを封殺されている。オブシディアンのアタックスステップ中では身動きすら取れない……………

はずだった。

「忘れてるわけねえだろコノヤロー……オレが使うのはこれだ、チェンジ、仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン!!」

「!!」

「効果によりシンボル1つのスピリット、ルーデンドルフを焼き尽くす!!」

アスラの背後から炎の龍と氷の龍が交差しながら飛翔する。それらはオブシディアンのルーデンドルフへと直撃し、爆散させる。その厄介な呪縛からアスラを解き放った………

「入れ替えの対象がないエレメンタルプリミティブはそのままトラッシュユへと破棄。だけどこれでルーデンドルフはいなくなった!!……心置きなくマジックを使えるぜ」

「くっ……!」

「マジック、リミテッドバリア!!……このターンの間、コスト4以上のスピリットのアタックじゃオレのライフは減らない。その攻撃はライフで受ける!!」

へライフ2??2へアスラ

前のターンに腐らせたマジックカードをここで発揮。前方に展開されたバリアがオーマジオウの攻撃からアスラを守護する。

「ザザ、まだ抗うか。ルーデンドルフの呪縛から逃れられようが、貴様が味わうのは敗北だけだ……ターンエンド」

手札：3

場：【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【オードラン】LV2

バースト：【有】

寸前のところで息ながられるが、力の差は歴然。

「勝手に決めつけんなコノヤロー……言つたろ？…テンドウさんは必ず返してもらおうし、オニキスの無念はオレが晴らす!!」

アスラには「諦める」と言う言葉が頭の辞書には存在しない。

黒属性がなんだ。
力の差がなんだ。

頭の中にあるのは常に「勝利」の二文字のみ……………

「ターン13」アスラ

「メインステップ!!……………ようやく召喚できるぜ、来い!!……………仮面ライダーリュウガ!!」

1 【仮面ライダーリュウガ】LV3 (5) BP12000

ルーデンドルフがいなくなった隙を突き、アスラは黒いライダースピリット、仮面ライダーリュウガを召喚。様々な鏡像が重なり合い、その姿を見せる。

「召喚時効果、相手スピリット全てのコアを2つずつリザーブに送る!!」
「!!」

1 【オードラン】(3??1) LV2??1

1【仮面ライダーオーマジオウ】(4??2) LV2??1

リュウガが登場するなり、オブシディアンの2体のスピリットの体内からコアが弾け飛ぶ。

しかしLVは後退するものの、消滅までには至らなかった。

「バーストをセットして、ネクサス、聖剣連山のLVを2にアップ!!」

1【聖剣連山】(0??1) LV1??2

バーストがセットされるとほぼ同時に、アスラの背後に存在する聖剣連山が神々しい光を解き放つ。

「アタックステップ!!……行くぞ、リュウガでアタック!!……その効果でコア3個以下のスピリット、オードランを破壊して、オマエのライフ1つをボイドに送る!!」

「!!」

〈ライフ4??3〉オブシディアン

一瞬にしてオードランとの間合いを詰める仮面ライダーリュウガ。そのまま怯えるオードランを鷲掴みにし、地に叩き伏せる。

オードランが呆気なく破壊されると同時に、オブシディアンのライフバリアが1つ砕け散った。

前のターンとは打って変わって攻勢に転じる事ができたアスラだったが、その攻撃がオブシディアンのカウンターを誘発してしまう……………

「ザザ、ライフが減った時……赤のマジック、シックスブレイズはノーコストで効果を発揮できる!」

「!」

「BP12000以下までスピリットを破壊……我が前から消え去れ、オニキスの怨念の塊!!」

「ぐっ……………」

オブシディアンの背後から放たれる6つの火の玉が仮面ライダーリュウガに直撃、堪

らず爆散してしまう……………

「そのカードはオニキスが創り上げたライダースピリットだったのだろうか？…………だが残念ながらその程度の力では最強のブラックフォースたる私は倒せない。傷ついたライフも次のターンで回復する……………!!」

「……………」

エースたる存在、リュウガを失ったアスラ。

そんなアスラに声を掛けたのは、最大のライバルであるロンだ。

「アスラ、オマエまさかこんなところで負ける気じゃないだろうか？」

口角を上げ、煽るようにそう告げたロン。それを耳にしたアスラもまた薄く笑って

……………

「……………へっ……………なわけねえだろイケメン天才ヤロー!!……………オレは誓ったんだ、もう誰にも負けねえ!!……………もちろんオマエにもな!!……………スピリットの破壊により、バースト発

動!!」

「ツ……また破壊後のバースト」

いつもそうやってアスラを鼓舞し、闘争心を昂らせるのは他でもないロンだ。彼がいるからこそ、アスラはその期待に応えようと……

いや、期待されてる以上の力を発揮するのだ。

「バースト効果により、先ずは自身を召喚する……行くぜ」

鋼纏しその衣、熱き意思で悪を貫く!!

仮面ライダーセイバードラゴニックナイト!!

LV3で召喚!!

ー【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト】LV3（6）BP14000

「……………バースト効果持ちのライダースピリットだと!?!」

荒ぶる火球が地を熱するように出現。中よりそれを振り払いながら現れたのは、仮面ライダーセイバーの強化形態、ドラゴニックナイト。重厚感のある白銀の鎧がオプシディアンの上に焼き付けられる。

そして悟らせる、コイツはヤバいと……………

「バースト効果はまだ続くぜ、その後手札にある剣刃のブレイヴをノーコストで召喚する……………」

オレ達と呼ぶのは第三の剣……………

暗黒剣月闇!!!

1【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト+暗黒剣月闇】LV3(6)BP18000

ドラゴニックナイトは現れるなり鋼の拳で地を穿つ。

そしてその中より第三の剣、暗黒剣を生成し、己がブレイヴとしてその手に握りしめる。

「暗黒剣の召喚時効果!!：相手スピリット1体のコアを3つリザーブに置く!!」
「!」

「オレはオーマジオウからコアを3つ取り除く、よって消滅だ!!」

ー【仮面ライダーオーマジオウ】(2??0)消滅

暗黒剣に黒き力を束ねるセイバードラゴニックナイト。そのままオーマジオウへと距離を詰め一線……………

黒の力でオーマジオウを一刀両断し、爆散させた。

「消滅後、オレはカードをドロ」

「ツ……………オニキスのカード如きが、私のオーマジオウを葬り去るだ?!」

『ゼゼゼ、皮肉なもんだなオブシディアン。史上最強のオマエのスピリットをぶっ倒したのは、この世界で一番努力しただけの大バカヤロウだ』

敗北を喫するオーマジオウを前に、愕然とする最強のオブシディアン。オニキスが嬉

しそうにそう眩くと、アスラはさらに効果を發揮させ……………

「まだまだアアアア!!…変身したオレの【神技】!!…トラツシュにある剣刃のカードを
ノーコストで復活!!」

「またブレイヴ!?!」

「トラツシュから第二の剣、雷鳴剣を召喚し、ドラゴニックナイトに直接合体!!…ダブ
ル合体だ!!」

1 【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト＋暗黒剣月闇＋雷鳴剣黄雷】LV3
(6) BP21000

己の気迫を天上に響かせるように放ち続けるドラゴニックナイト。やがてそこから
雷鳴剣が降り注ぐと、ドラゴニックナイトは左手にそれを強く握り、暗黒剣と合わせて
ダブルブレイヴスピリットと化した。

「土壇場でダブルブレイヴか。フ、やるなアスラ」

「さらに聖剣連山の効果で、ドラゴニックナイトのBPは3000アップ…合計BP

24000だ!!」

「〔仮面ライダーセイバードラゴニックナイト＋暗黒剣月闇＋雷鳴剣黄雷〕BP21000?24000

より強い存在となったアスラ、それを我が事のように喜ぶロン。

そしてドラゴニックナイトは二本の剣を構え、場がガラ空きとなったオブシディアンへと視線を向ける……………

「これで決める!!…………アタックだドラゴニックナイト!!…………効果で1枚ドロ!!」

残り3つのオブシディアンのライフバリアを目掛けて走り出すドラゴニックナイト。

ダブルブレイヴにつき、その合計シンボルは3つ。一撃で彼のライフを葬り去る事ができる……………

「……………図に乗るなよ小童が、アタック後のバースト、霸王爆炎撃!」

「!」

オブシディアンとて、その一撃を易々と受けるわけにはいかない。格下に敗北仕掛けている現状に怒り、伏せていたバーストカードを勢いよく反転させる。

「霸王爆炎撃のバースト効果はBP12000以下のスピリット3体を破壊する」

「バカ言え、オレのドラゴニックナイトのBPは24000、その倍だぜ」

「バカは貴様だ、だからこそ私はその後のフラッシュ効果を発揮!!…合体スピリット1体を爆撃!!」

「!」

赤のマジックカード『霸王爆炎撃〈R〉』……………

そのマジック効果により、爆炎の炎が容赦なくドラゴニックナイトに襲い掛かる……………

このドラゴニックナイトが破壊されて仕舞えばもうアスラに攻め手はない。

だが、万事休すかと思われたその時、アスラの手札が光る……………

「この程度の炎でオレ達の絆は焼き殺されたりしねえ!!……………ネクサス、聖剣連山のLV

2 効果発揮!!」

「!!」

「コスト13以上の合体スピリットが相手のスピリットかマジックカードの対象になる時、自分の手札のカード1枚を破棄する事で、それを無効とする!!」

「ツ……………バカな!?!」

「弾き返せ、ドラゴニックナイト!!」

アスラの雄叫びに應えるように、ドラゴニックナイトの赤い眼光が光り輝くと、二本の剣を力強く振り、周囲の爆炎を吹き飛ばして見せる……………

「これでドラゴニックナイトは生還!!…トリプルシンボルのアタックを食らえ!!」

「ツ……………!」

ドラゴニックナイトの手に持つ暗黒剣と雷鳴剣……………

その二本が遂にオブシディアンのライフバリアを捉える。オブシディアンのライフバリアは今にも砕けんと亀裂が生じていく……………

トリプルシンボルの強烈な一撃、流星のオブシディアンもこれにはひとたまりもない

.....

はずだった。

「ザザ…………一度に3つ以上のライフが減る時、手札からフェイタルダメージコントロールの効果を発揮…………!!」

「ツ…………なに!?!」

「自身を破棄すれば、このターンの間、一度に減るライフの上限は1となる…………ザザ、まさか勝てると思ったのか?…………なあ思ってたのか!?!…仮にもギアの一族如きが、このオブシディアン様に!!」

「!!」

ここにきてまさかの白マジック、まさかのカウンター…………

これを受け切られるとかなりマズイ…………

冷や汗が流れるアスラとオニキス。オブシディアンを甘く見積もっていた。やはりコイツは最強なのだ。史上最強の生命体なのだ…………

「ザザ、オマエ達の努力は全く意味がなかった。それがたつた今証明されたねえ」

……結局オマエ達は生まれながらの負け犬なんだよオオオ!!!
「くっ……」

アスラ達のこれまでの努力を全否定するオブシディアン。その嘲笑は余りにも耳障り……

だがダメだ。

悔しいがこれ以上は手の打ちようがない。

……しかしその時だった。アスラにとって耳馴染みのある声色が聞こえてきたのは……

コイツの努力が意味ねえわけねえだろこのクロキモヤロー……

—!!!

「て、テンドウさん……!?」

「ザザ!?……バカな、何故貴様が……完全に意識は消したはず!?」

他でもない、今現在オブシディアンに肉体を乗っ取られているこの国のライダースピリットを司る三王テンドウ・ヒロミの声だった。不思議な事に、今彼らはテンドウとオブシディアン、2人の意識が混同している……………

「ワハハハハハハ!!…残念だったな、このくらいじゃオレは負けん、55話から出番消し去りやがって、絶対許さねえからな、覚悟しろよ」

「訳の分からん事を……………!!」

「つーかそう、コイツの努力は無駄なんかじゃねえ……………なんてったって、アイツは諦めなかった。だからこそ、アイツと知り合った他のヤツらも諦めなかった。バカ弟子も変えられた……………そしてかく言うオレも、変えられた!!」

「ツ……………テンドウさん……………!!」

今思えばそう……………

エールもトウエンティも、決して諦めないアスラがいたからこそ、今の彼らがいる。そんなアスラを見ていたら、自分自身もまた変えられた……………

「見せつけてやれ小僧、いやアスラツツ!!……このクロキモヤローに、オマエの旅は無駄じゃなかったってな!!」

「!!」

「ぐ……やめ、やめろおお!!」

そう叫びながらテンドウは一時的に肉体を取り戻し、手に持つフェイタルダメージコントロールのカードを破り捨てる……

これでその効果は無効……

ドラゴニックナイトの攻撃を遮るモノは全て消え去った……

「やれやアアアアアア!!」

「うおおお!!……ドラゴニックナイトツツ!!」

「バカな……このオレが、貴様ら人間如きにイイイイイイ!!」

〈ライフ3??0〉オブシディアン

「ぐつ……ぐあああああ!!?!」

ドラゴニックナイトの怒涛の猛攻……………

振り下ろされた二本の聖剣が、オブシディアンのライフバリアをその叫びごと打ち砕く……………

そのライフは遂に0となり、遂に最強の生命体は敗北を喫した。しかも皮肉な事に、彼に勝利したのはこの世で最も弱いと思われていた存在、スーミ村のアスラ……………

「……………勝った……………勝てた……………！」

『……………オレ達が、オブシディアンに……………!!』

バトルの終了に伴い、フィールドのカードが次々と消滅していく中、アスラとオニキスはお互いに勝利を掴んだのだと自覚する。

そして、まるで息もがくように、倒れたテンドウの肉体から、オブシディアンの正体である実体の無い黒い霧が現れて……………

「ザザ……………ザザ、負けただど!?!……………最強のブラックフォースにして、史上最強の生命体である、このオレが!?!」

今にも消えそうな霧。オブシディアンは自分の敗北が信じられないと言いたげに叫び出す。一人称も「私」から「オレ」に変わっている事から、かなり余裕がなくなっているのが窺える。

『ゼゼゼ、そうだ。オマエは負けたんだオブシディアン……このオレにな』

「……………オニキス。だが、オレが死んでも、ブラックゲインは終わらん……………手塩にかけて育てたウィルはオマエ達でも止められんぞ。あの子が望む通り、この世界は間もなく黒に染まるのだ」

「そんな事させるわけねえだろ。オレが…………オレ達が必ず止める!!」

「その強がりも、いつまで続くかな……………ザザ、ザザ……………ッ！」

そう告げると、オブシディアンは塵となり消滅した。彼のカードである「オーマジオウ」のカードもまたそれに伴い消え去っていく。

その消えゆく塵を眺めながら、オニキスは「じゃあな、オブシディアン」と昔の仲間に別れを言い残す。

アスラは倒れたテンドウの身を案じ、倒れる彼の元へと大急ぎで駆け寄る。

「テンドウさん!!……大丈夫すか!？」

「………タバコ、酒………」

「よかった!!……めっちゃ元気そう!!」

テンドウもどうやら無事のよう、気怠そうにしながらもゆっくりと起き上がり
………

「………まだ頭ガンガンすんだけど、あのクロキモヤロー、仮に生き返ったらぶち殺してやる」

「テンドウさん………うおお!!よかったっす!!……ご無事で何より!!」

「………オレ、男同士の熱い何かとか凄く苦手なんだけど」

「えええええ!？」

助けられて早々にいつものマイペースぶりを発揮するテンドウ。だが直後に口角を上げて笑顔になると………

「まあでも、今回はよくやった……強くなったな、アスラ!!」

「ツ……おうつす!!……でもまだまだ!!……オレはもつと強くなります!!」

「へっ……借りができちまったな」

アスラの頭の上に手をポンつと置き、そう告げた。しかしアスラのリアクションを聞きなくなりすぐさま不機嫌になって……

「ああ?……このオレが褒めてやってんだから素直に喜べや元気小僧」

「えええええ!!……めっちゃ喜んでるんですけど!?!」

「……ゆつくり話してる暇はないぞアスラ。早くあの黒い球体の中に行かないと」

「ツ……おっと、そうだった」

話が一向に進まない中、ロンが話題を変える。

「テンドウさん、今、王国が大変な事になってつすね……」

「ああ要らない要らない。概ね理解してるから、別にそこら辺の説明しないでいいわ」

「あ、そうなんすか」

さつきまで洗脳されていたテンドウに、アスラがこの状況を説明しようとするが、テンドウは昼間なのに黒い空などで色々ともう察している様子。

「役割分担だ。小僧とイケメンライバル君はあの球体の中に行け、世界でもなんでもさつきと救って来い」

「最初からそのつもりだ」

「おうつす！……テンドウさんは？」

アスラがテンドウに訊いた。

「ああ？……言うまでもねえだろ。ちよつとタバコ買って来る」

「役割分担って何!？」

「オレが何ヶ月出番なかったと思ってるんだ、いい加減ニコチン摂取しないとオレが世界滅ぼしちゃうのよ」

「まためちやくちやな事言ってるよこの人オオオー!?!」

「つーかタバコ屋開いてるかな？」

ボケるテンドウとツツコむアスラ。ロンが内心で「漫才かな」と呟く中、ブラックゲイン、世界が黒に染まる怪奇現象は、オブシディアンの言葉通り、まだまだ続いていく……

一方その頃、ブラックゲインにより出現した黒い異形達と戦っているエール達。知らずの内にカラーリーダー達と分断されてしまっていたエールとその兄、エレンはある人物と遭遇していた。

「ズズ、待ち侘びたぜ。この肉体でオレ様が愚かな人間共をまたぶち殺して周る事をな……！」
「フリソデ、いや……ブラックフォースのシャーマン」

それはまるで獲物に飢えた獣の如く……

ブラックフォースのシャーマンは念願だった人間狩りを行うべく、エール、エレンと

対峙を果たす。もちろん、2人とも黙って狩られる側ではない。

「ブラックフォースは黒属性を持たぬ者では倒せない。仮面乙はそう申ししたが……」

「王国を守るため、私達だけで戦うしかない。ですよね、お兄様？」

「……………フ、オマエもわかって来たなエールよ」

兄妹2人はそう話し合うと、同時にBパッドをフリソデの肉体で動くシャーマンの方へと向ける。

「どんな戦いでも、必ず敗北する戦いは存在しない。我々2人でヤツを屠るぞ、エール!!」

「はい!!……………私もアスラに負けてられないわ!!」

「ズズ、齒向かって来るか……………いいいぜ、その調子で抗って見せる!!」

……………ゲートオープン、界放!!!

王国を、いや、世界存亡の片棒を背負った2対1のレイドバトルがコールと共に幕を

開ける。黒属性の力を持たないエレン、そしてその妹エールはブラックフォースである
シヤーマンを倒す事ができるのか……………

「あゝあ、せっかく強そうなヤツと戦えると思って地上に降りたのに、ここら辺誰もい
ないじゃん」

一方、また別の場所では、テンドウ・ヒロミの妹、カナの肉体で動くブラックフォー
ス、ヘタマイトが暇そうにしていた。

「オブシディアンもシヤーマンも今頃ハツスルしてるんだろな……………ちよつと面倒だ
けど、ボクも誰か殺したいし、良さげな人間でも見つけて来るか。できればアスラ君が
いいな」

そう独り言を呟き、殺害する相手を探すべく歩を進めようとするヘタマイト。

だが、その直後に、彼女にとっても、器であるカナにとっても記憶に残っているあの

人物の呼ぶ声が聞こえて来て……………

「おい、オマエの相手はこのオレだ」

「ん？」

「その身体を使って誰かを殺す事は、このオレが決して許さない……………！」

それはトウエンティだ。

薄汚れた服装をその身に纏い、リベンジに燃えている様子。もちろん、全ては恋人であるカナのためだ……………

「ジジ、誰かと思えばトウエンティか。よく生きてたね」

「オレは不死身だ。カナをこの手に取り戻すまでは何度だつて蘇り続けてやる」

「キモ。小物の操り人形如きがこのボクに偉そうな口聞くなよ」

ここで言うヘタマイトの「小物」とはウィルの事。オブシディアンが彼に心酔しているだけで、彼女は彼の事を余り信用していない様子。

「ただまあ、そうだね。準備運動くらいにはちようどいいかな?……さっさと殺してやるからかかって来いよ、この死に損ない」

「この間までのオレとジオウだと思ふなよ。オレはもう、二度と負けない……!!」

……………ゲートオープン、界放!!

互いにBパッドを展開し、コールと共にそれを開始する。世界存亡の片棒を担がされたトウエンティのリベンジマツチ……………

果たしてその結果は……………

王国に突如として出現した黒い球体の内部。蠢く黒属性の力が支配するこの空間で、ブラックフォースに力を与えられ、オブシディアンをも凌ぐ力を手に入れたウィルと、狐の面を被ったアスラの恩人、仮面Zの2人がバトルスピリッツを開始していた。

先行は仮面Zだ。ウィルをこの手で葬るべく、そのターンを進めていく。

「ターナー01」仮面乙

「メインステップ。僕は、僕自身を仮面ライダーウィザードに変身させる」
「！」

……シャバドウビタッチヘンシーン!!
……シャバドウビタッチヘンシーン!!
……ヒー! ヒー! ……ヒーヒーヒー!!

【変身!! 仮面ライダーウィザード】LV1

右側から赤い魔法陣が仮面乙を通り過ぎると、仮面乙は黒い衣装に赤い宝石のような仮面を装着した魔法使いのようなライダースピリット、仮面ライダーウィザードへと変身を遂げた。

「……貴方もライダースピリットの使い手でしたか。ただ、たかがライダースピリット1体では私には到底敵いませんよ?」

「ウィザードをただのライダースピリットと考えるのはやめた方が良い。このスピリットは特別なんだ」

「ゾゾ、それはそれは……また面白い事を抜かす」

余裕しかないウィル。ウィザードに何か秘訣を見出している仮面Z。彼らの戦いはまだ始まったばかり……………

アスラとオブシディアンの戦いを節目に、それぞれが、それぞれの戦いに身を投じていく……………

王国は、世界は、そんな彼らの手に掛かっている……………

67コア 「ウィザード乱舞」

黒き空が世界中を覆い続ける中、その中心となっているオウドウ都に現れた黒き巨大な球体……………

その内部にて、仮面ライダーウィザードに変身した仮面Zと、最早怪物の領域に達した元人間、ウィル……………

この2人が戦闘と言う名のバトルスピリッツを繰り広げていた……………
次はウィルの第2ターンからだ。

「ターン02」ウィル

「メインステップ……ゾゾゾ、私はエイプウィップを召喚。コストにソウルコアを支払った事で、リザーブにコア1つ、トラッシュユに2つ追加」

ー【エイプウィップへR】LV1(1)BP1000

緑色の毛色で覆われた4本腕の猿型スピリット、エイプウィップがウィルのフィールドに出現。その効果で合計3つものコアを増やして見せた。

「さらにバーストをセットして、ターンエンドです」

手札：3

場：【エイプウィップ〈R〉】LV1

バースト：【有】

バーストを張り、ターンを早々に終える。

仮面Zはその宣言を聞くなり、再び己のターンを開始して行く。

「ターン03」仮面Z

「メインステップ……私は知っている、ウィル、君がブラックフォースのオブシディアンと出会い、手を組み、ここまで世界を引っ掻き回してきた事を……」

「へえ、通だね」

「君は何故悪魔に全てを委ねてまで世界をリセットしようとする？」

ターン開始直後に、仮面乙がウィルに聞いた。彼は薄気味悪い笑顔を浮かべながら返答する。

「ゾゾ……貴方が誰なのかは知りませんがね、わかりませんか？……この世は不平等だ」
「！」

「コモンやマスター、生まれながらに力の差が存在し、下にいる者達が淘汰されなければならぬ。さらに必然的と言うか、同時に貧富の差も広がり、弱き者たちは、まともな食も取れず、反面、強き者たちはもう食べきれないとその食料を捨てる」

「……………」
「だから黒属性の力を手に入れた。オブシディアン様たちに分け続けていただいた!!
……………これでこの世界を創り直す事ができる、真の神たる……………この私が!!」

彼の言う事はもつともではあった。

この世界は余りにも不平等だった。身分がレア、コモンの人間たちは弱いからと言う理由で差別され、淘汰される。

実際には頂点王シイナの努力の影響でその考え方は薄れつつある、と言うのが現状で

はあるが、未だ根強く蔓延つていると言うのもまた事実。

だが、仮面Zは知っている。アスラとロンの2人が、最初はコモンの身分で皆から差別されてきた者たちが認められ、親しまれて来た事を……

それ故に確信している。この国は黒の力に、ブラックフォースなんぞに頼らずとも、変えられると。

「神とは大きく出たね。返答次第によつては……と思つたが、どうやら君と僕とでは価値観が合わないらしい……本当に世界を創り直したけば、黒属性なんか頼らず、己の力だけで前を向き続けるべきだった……アスラみたいに」

「は!?……何を言っている、奴も黒属性の力に頼らなければ、ただの泥臭いガキではないか」

アスラの事を話題に上げる仮面Z。しかし、ウィルは奴も黒属性に頼っていると一蹴
……………

「決定的な違いがある。自らの欲望のために黒属性を手に入れた君とは違い、あの子は生まれながらに……赤ん坊の頃からオニキスがいた。それを知らずに15年も暮らし

て来たんだ」

「……………」

「そうだ。今思えば、あの日……………あの日から、僕はアスラとロンに縋っていた。良い大人が、だらしない」

「……………何を言っているのか、理解できないね」

15年前の吹雪の中、アスラの母であるキョーラが死に、復讐を誓ったオニキスが赤ん坊だったアスラの中に入っていった時の事を鮮烈に思い出す。

あの日から、仮面Zは心のどこかで、アスラとロンをブラックフォースを退けるための兵器として見ていた。

今更、とてつもない罪悪感が身体の中を駆け巡っている。だからこそ、今ここで、このバトルに勝ち、絶たねばならない……………

「ライダーマジック、ウィザードフレームスタイルを使用、効果でBP4000以下のエイプウィップを破壊！」

「ツ……………ライダーマジックだと」

エイプウィップの足元に火柱が迸り、それを焼却。彼が使ったのはライダースピリットでもあり、マジックカードでもある大変珍しいカード。

そしてその真骨頂は、その後の召喚にある。

「この効果発揮後、自身をノーコスト召喚する!!……現れよ、フレイムスタイル!!」

ー【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】LV2(2)BP4000

変身した仮面乙と全く同じ姿をしたライダースピリット、ウィザードフレイムスタイルが赤き魔法陣の中より出現。

「召喚時効果、デッキから3枚オープン、その中にある対象カードを3枚まで手元に置く………よって私は、オープンされたウィザードウォーター、ハリケーン、ランドスタイルの3枚全てを手元に」

「ツ………手札ではなく、手元に置く効果………しかし、バーストは貰いますよ、召喚時発揮後のバーストでキングスコマンド!!………3枚ドロし、1枚捨てます」

「ここまでの流れで、仮面乙は手元に新たに3枚のカードを手元に追加し、ウィルもまた3枚の新たなカードをドローした。」

「今ここで、僕が君を倒す。アスラとロンにはこれ以上、何も背負わせない!!……アタックステップ、行け、フレイムスタイル!!」

「……ライフで受けましょう」

〈ライフ5??4〉ウィル

フレイムスタイルが掌から火炎弾を放ち、ウィルのライフ1つを粉碎してみせる。

「……………ふむ、この程度ですか。言つてた割には大した事ありませんね……………これだとまだあのゴミ共の方がましですよ」

彼の言う『あのゴミ共』とは、アスラたちの事だろう。ダメージの痛みからして、仮面乙が今の己の力には到底及ばない事を悟り、余裕の笑みを浮かべるウィルであったが……………

本当の痛みは、これからであって……………

「フ…………それはどうかかな？」

「なに？…………ぐっ!?!…………な、なんだ!?!」

突如、脳が揺らぎ、まるで精神と肉体が離れていくような痛みを感じ取るウィル。それは直ぐに収まるが、あのウィザードと言うライダースピリットが、生半可な力でない事に気がつく……………

「……………貴様、何をした？」

「ライダースピリットにはライダーとはまた別の力が隠されている……………龍騎と言う赤き龍、ナイトで言う黒き翼みたいだね。その中でも一部のライダースピリットには異能染みた力を持つものもある……………君も経験上、知っているはずだよね？」

「……………」

確かに、数多く存在しているミラーライダーを操るオーデインや、全てのライダースピリットを内包できるジオウなど。

ライダーハンターズの主任として、これまで数多くのライダースピリットを見てきた自分だからこそ、わかる……………

「このウィザードもその一つさ。精神と肉体が離れていくのを感じただろう？…………君のライフが0になれば、完全にそれは切り離され、君の精神は、君自身の心の世界『アンダーワールド』に幽閉される」

「…………!!」

「そうなれば、いくらブラックフォースの加護を受けていおうと意味はない」

ウィザードは特殊なライダースピリットの一種。アンダーワールドと言う人間の精神世界を操る事ができる。アスラも一度連れて行ってもらい、そこで修行を積むと言う経験もしている。

仮面Zはウィザードのその力を使い、ウィルを完全にアンダーワールドに閉じ込めようと言うのだ。

「…………成る程、それが貴方の勝算と言う事ですか…………しかし」

「？」

「ライフが減った事により、トラッシュにあるゴジラの効果……2コストを支払い、召喚する!!……現れ出でよ、怪獣王!!」

ー【ゴジラ(2004)】LV1(1)BP10000

蠢く地の底より、咆哮を張り上げながら現れたのは黒い体に大きな尾を持つシンプルな怪獣と言った見た目のスピリット、ゴジラ。

だが、そこから感じられる迫力やオーラは美しくも凄まじく、神にも匹敵すると言って過言ではない程だ。

「ゴジラ。メカゴジラの元になったと言われる伝説のカード……アスラから聞いた通り、所持していたか、僕はこれでターンエンドだ」

手札：4

場：【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】LV2

【変身!!仮面ライダーウィザード】LV2(2)

手元：【仮面ライダーウィザードウォータースタイル】

【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】

【仮面ライダーウィザードランドスタイル】

バースト…【無】

「ターン04」ウィル

「ゾゾ、別世界に幽閉とは考えましたね〜……だが、全ては貴方が私に勝てればの話!!
……そして……」

〈ライフ4??5〉ウィル

「ツ……ライフが回復した!？」

「これぞブラックフォースの力!!……同じ総量の黒属性の力をぶつけない限り、私のライフは1ターンで回復する!!」

せつかく破壊したライフバリアがたちまちまた形を形成し、復活する。そう、これこそが黒に勝てるのは黒しかないと言われている所以の1つ……

アスラとオニキスのような特別な力がない限りは勝つ事が極めて困難である。

「フ……それがどうした。だったら1ターンで君のライフを全て消し飛ばすまでだ」

「……ゾゾゾ、できるかな?……メインステップでバーストを伏せ、そのままアタックス
テップ……行きなさいゴジラ!!……効果でウィザードフレイムスタイルに指定アタック
!」

「!」

「効果でコアを追加し、回復する」

伝説のスピリットゴジラがウィザードフレイムスタイルに牙を向ける。噛み砕こうとするゴジラに対し、フレイムスタイルは赤い魔法壁を前方に展開し、難なく退けるが、直後に飛んで来た尾で払う攻撃に魔法壁ごと吹き飛ばされ、爆散した。

「相手スピリットを葬った時、ゴジラは赤のシンボルを1つ追加……ゾゾゾ、ダブルシンボルで再アタック!!」

「ぐっ……ライフだ……!」

変身した仮面Zにも牙を向ける。背鰭が体内に眠る核によって赤々と光り輝くと、そ

これらのエネルギーは全て口内に移動し、ゴジラはそこから赤色熱線を放つ。

「ぐ、ぐおおお!!?!」

〈ライフ5??3〉仮面Z

直撃した2つのライフバリアは消し飛び、仮面Zに多大なダメージを与えた。

意識が吹き飛びそうになる程の強烈な一撃に足元がふらつくが、己の責任を思い出し、倒れるわけにはいかないと踏み止まる。

「ターンエンドです。さあ、貴方はどこまでこの私に喰らい付いていけるか、楽しみです
ね」

手札：6

場：【ゴジラ（2004）】LV2

バースト：【有】

完全に弄ばれている。

だが、ウィザードの力さえ使えば、ライフを一度でも0にできればまだ勝機は望めるのだ。ここで諦めるわけにはいかない。

「ターン05」仮面Z

「メイנסテップ……僕は前のターンに手元に置いた、ウィザードウォータースタイルとハリケーンスタイルを召喚……ハリケーンスタイルの召喚時効果でボイドからコア一つをウォータースタイルに追加」

ー【仮面ライダーウィザードウォータースタイル】LV2（3）BP4000

ー【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】LV2（3）BP3000

フィールドに出現するのは、青いウィザードと緑のウィザード。いずれも小型ながら強力な効果を有しているが、ウィルのゴジラの前ではどれも霞んで見えてしまう

……

「……………このターンは何もしない、ターンエンド」

手札：5

場：【仮面ライダーウィザードウォータースタイル】LV2

【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】LV2

【変身!!仮面ライダーウィザード】LV2（4）

手元：【仮面ライダーウィザードランドスタイル】

バースト：【無】

無限に回復し続けるライフの前には、そのターン中に削り切れる程の攻撃力を持ったスピリットでなければ攻撃は無意味。

仮面Zはそのターンを終了とする……………

「ターン06」ウィル

「メインステップはスキップし、そのままアタックステップ……再び蹴散らさない、ゴジラ!!」

「む……………」

迫り来る怪獣王。ウォータースタイルを尾で払い、ハリケーンスタイルを握り潰す。コアを増やし、回復して倒すを繰り返していく。

ここまで一方的な試合展開になってしまったのは、単純にウイザードとゴジラの相性が悪いせいだろう……

「破壊したスピリットは2体、よってシンボルは2つ追加され、トリプルシンボル!!……
貴様の残ったライフを全て破壊する!!」

「!」

仮面Zに向かって放たれたのは、前のターンよりも遥かに強力な赤色熱線。残りライフが3つの彼は、これを受けたら敗北してしまうが……

これを凌げない程度の軽い策で、単身乗り込んでくる訳がなくて……

「残念だが、これ以上のダメージは受けてあげられないな。フラッシュマジック、手元よりウイザードランドスタイルの効果を使用」

「!?!」

「効果により、ゴジラのシンボルをこのターン0にする……よって、僕が受けるダメージ

も0となる」

〈ライフ3??3〉仮面Z

咄嗟にシンボルが消え、ライフバリアを1つも碎けないにまで赤色熱線の威力は低下。華麗にゴジラの攻撃をいなして見せた。

「……………ターンエンド。小癪とはまさにこの事です。一時凌ぎの効果で身を守つても、いずれ勝つのはこの私だと言うのに」

手札：7

場：【ゴジラ（2004）】LV2

バースト：【有】

「そうとも限らないさ」

「……………なに？」

「さあショータイムだ。ライダースピリットにして、魔法使い、ウィザードの真骨頂、お見せしようじゃないか」

「……………ゾゾ、いいでしょう。その余興、楽しみにしていますよ」

己を選んでくれたウイザードのカード。それを信じ、仮面乙はターンを進めて行く
……………

「ターン07」仮面乙

「メインステップ……………変身した僕の【神域】により、トラツシュにあるカードでもウイザードは軽減シンボルを満たす事ができる」

「！」

「今、トラツシュには5枚のウイザードがいる……………よってフル軽減で現れる……………仮面ライダーウイザードインフィニティースタイル!!」

……………イーンファイニティー!!

……………イーンファイニティー!!

ヒースイーフードー、ボウザバビユードゴーン!!

0
 1【仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル】LV3(3) BPI600

魔法陣から美しいダイヤモンドでできた白銀のドラゴンが現れ、天高く舞い上がったかと思えば、地へと急速に落下。それは碎け散って行き、中から仮面ライダーウィザードの最強の形態、仮面ライダーウィザードインフィニティースタイルが出現した。

その鎧はダイヤモンドで光り輝き、その手には斧のような、はたまた剣のような武器が握られている。

「……………美しい」

「その余裕、いつまで持つかな?……………召喚時効果発揮!!……………我がトラッシュに眠るライダーマジックを全て手元に置く」

「ツ……………全て?」

「そう、全てだ」

神託や召喚時でめくれ、使用され続けて来たライダーマジック、もといウィザードのカード。それら全てがインフィニティの効果で今再び彼の手元へと舞い戻る。

「さらにブレイヴ、ウイザーソードガンをインフィニティーに直接合体するように召喚！」

ー【仮面ライダーウイザードインフィニティースタイル＋ウイザーソードガン】LV
3 (3) BP19000

インフィニティーは銃剣ウイザーソードガンを魔力で作り出し、片手でそれを握り締める。二振りの武器を手に携えたその姿は最早、鬼神と呼べるものを感じさせる。

「アタックステップ、インフィニティーで合体アタック!!」

遂に攻撃を再開する仮面Z。馴染みきつた黒の力で回復し続けるライフを討つべく、インフィニティーに突撃させる。

そしてこの瞬間、発揮できる力があつて……

「フラッシュ、ウイザーソードガンの効果発揮!……手札か手元にあるライダーマジッ

クを1コストで使用できる」

「?」

「僕はこの効果で手元にあるウィザードウオータースタイルの効果を使用。このターンの間、インフィニティーは如何なる場合であっても最高LVを維持し続ける」

合体中のブレイヴ、ウィザードソードガンの効果が発揮。ほぼ無意味に等しいライダーマジックを今ここで使用する。

だが、そのマジック効果は無意味であつても、インフィニティーにとっては全く無意味ではなくて……………

「インフィニティーの効果、マジックを使用した時回復。さらにバトル中、ブロックされなくなる」

「ツ……………成る程、そう言う事ですか」

ー【仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル＋ウィザードソードガン】（疲労??回復）

インフィニティーの眼光が光り、疲労より回復状態となる。これでこの攻撃の後も再び攻撃を行うことが可能となる。

「無限の名を持つインフィニティー……貴方はマジックを最小限のコストで打ち続け、回復効果を連打。私のライフを1ターンで削り切ろうと言う作戦ですか」

「ああ、しかもインフィニティーはエンドステップ時にも召喚時効果を使用可能。これで再びトラッシュから防御用にライダーマジックを手元に置ける。いくら君が僕の攻撃を凌ぎ、ターンを迎えようと、その数だけ僕も君の攻撃を凌ぐ。そしてまたインフィニティーが君のライフを穿つ」

ウイルを屠るための永久機関は既に完成していた。

インフィニティーさえいればライダーマジックと言う名の魔力は枯渇する事はない。さらにこちらは一度のターンにコアの続く限り攻撃が可能……

これならば、いくら無敵に近い黒属性の力を持つウイルと言えども突破するのは困難であろう……

「…………一度目の攻撃はライフで受けましょう…………ツ…………」

〈ライフ5??3〉ウィル

ウィザードソードガンを装備し、己の武器と合わせて二刀流となっているインフィニティーがウィルのライフバリアを2つ両断。

ライフが消えた事により、またアンダーワールドへの魂追放が早まり、肉体と精神が離れて行くのを感じる。

「二撃目だ、アタック!!……フラッシュで今度はハリケーンスタイルを使用。インフィニティーは回復する!!」

「〔仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル+ウィザードソードガン〕(疲労??回復)」

ハリケーンスタイルの効果はスピリットを疲労させるもの。この効果は全く意味がないが、使用した事で、インフィニティーは再び回復状態となる。

「さあどう受けるウィル!!」

「ふむ。ライフで受けましょう……………ぐ、ぐつあ」

〈ライフ3?!1〉ウィル

二度目の攻撃も炸裂。残りライフが1となった事により、その意識は天上へと向かい掛ける……………

「……………打つ手なしか……………ならこれで終わりだ、インフィニティー!!」

ここまでの展開から、防御用のカードが引けていない事を察した仮面Z。最後の一撃をお見舞いすべく、インフィニティーに指示を送った。

この攻撃でライフを0にさえできれば、無敵の黒属性を持つウィルもアンダーワールドに封印できる……………

だが……………

「ゾゾゾ……………アタック後のバースト、煌星銃ウルムシューター!!」

「なに!？」

「効果で1枚ドロローし、召喚」

1 【煌星銃ヴルムシューター】 L V 1 (5) B P 6 0 0 0

ここに来てまさかのバーストが発動。Bパッド上にあるカードを勢い良く反転させ、場に伝説の救世龍を模した銃、ヴルムシューターを呼び寄せる。

三度目のアタックで敢えてのバースト発動。この意味深なタイミングは、仮面Zに何かがあると予感させるには十分すぎるものがあつて……………

「アンダーワールドと言う世界は良くわからなかったが、肉体と精神が離脱しそうになる感覚は生まれて初めてでちよつと刺激的だったよ」

「……………」

「だが残念、やつぱり今の私と貴方では力の差がありすぎる……………余興は終わりだ。煌臨發揮、対象はヴルムシューター」

「!!」

ウィルの煌臨の宣言に合わせ、グルムシューターが烈火の如く炎を纏いながら姿形を大きく変化して行く。

そして彼はその名を呼ぶ……………

「伝説の救世龍……………悪しき傀儡となりて我の前に現れよ、超新星龍ジークヴルムノヴァ
!!」

「ツ……………な、なんだって?!」

┌【超新星龍ジークヴルムノヴァへR】LV3(5)BP25000

炎を吹き飛ばし、まるで宇宙創造のビックバンとも思わしき衝撃の中から出現したのは、白き聖装を見に纏う赤きドラゴン。

その名もジークヴルムノヴァ……………

この王国の名前、ノヴァ王国の由来にもなっている伝説のカードだ。

「……………馬鹿な、ゴジラに続いてノヴァまで……………君はいたい……………」

「貴方達は黒属性の力を単なる悪しき力と認識しているようですが、それは違う。黒属

性とは、言わば進化の力の塊、結集。その力が高まれば高まる程、自在に様々なカードを形成できるのです……………ジークヴルムノヴァ煌臨時効果、トラッシュのコア全てを自身に置き、ライフを5になるまで回復」

「!?」

〈ライフ1?!5〉ウィル

「地が砕けんとする程の強烈な咆哮を張り上げるジークヴルムノヴァ。しかしその咆哮は聖なる癒し、ウィルのライフを一気に初期値である5まで回復させた。

「……………だがまだだ。まだインフィニティーの攻撃は生きている……………ウィザードガン」の効果でランドスタイルの効果を使用。インフィニティーは回復し、相手が伝説のスプリット、ノヴァであろうともブロックはできない!!」

「〔仮面ライダーウィザードインフィニティースタイル＋ウィザードガン〕(疲労??回復)」

ライフが5に戻ろうともまた1から破壊して行くのみ。そう言わんばかりに果敢に効果を使って行く仮面Zであつたが……………

「ライフで受けましょう……………さらにこのライフ減少時、手札からマジックカード絶甲氷盾を發揮」

「!?」

「効果によりこのアタックステップを強制的に終了」

インフイニティーがライフを斬り裂くも、ここでマジックカード『絶甲氷盾へR』の効果が発揮。これにより彼のアタックステップは有無を言わずに終了となる。

「……………エンドステップ。僕はインフイニティーの効果で召喚時効果を發揮、トラッシュからウオーター、ハリケーン、ランドのカードを手元に置く。ターンエンド」

手札：5

3 場：[仮面ライダーウィザードインフイニテースタイル+ウィザーソードガン] LV

【変身!!仮面ライダーウィザード】LV2 (5)

手元：【仮面ライダーウィザードフレイムスタイル】

【仮面ライダーウィザードウォータースタイル】

【仮面ライダーウィザードハリケーンスタイル】

【仮面ライダーウィザードランドスタイル】

バースト：【無】

ゴジラとノヴァ。並び立つ2体の伝説のスピリットに困惑するも、やる事は何一つ変わらない。トラッシュユから防御マジックを手元に戻し、万全を尽くした状態でそのターンをエンドとする。

しかし……………

彼はまだ知らないが、最早その努力さえも無に帰してしまう程に彼は成長を遂げていて……………

「ターン08」 ウイル

「我がターン。ここで黒き力により、ライフは5に戻る」

「くっ……………」

へライフ3??5) ウイル

再び1から、いや、5から戻される。ここまでライフを回復されると最早自分が何とバトスピをしているのかさえわからなくなる。

「メインステップ……先ずはマジック、ゴッドブレイク」

「!!」

「カードを1枚ドロウし、目障りな変身のカードを解除します」

メインステップ開始と同時に放たれたのは創界神ネクサスを破壊すると言う効果を持つ異端なカードゴッドブレイク。

天より怒りの鉄槌が降り注ぎ………

「ぐっ………ぐおあああ!?!」

ウィザードに変身している仮面乙を叩き潰し、その変身を強制的に解除させた。そし

てその際、仮面乙の被っている狐の面に亀裂が生じ、破損。やがて彼の『ゾン・アーサー』としての素顔が露わになって……………

「その顔……………ああ、思い出しましたよ。貴方、ゾン・アーサーですね。失われたエックスのアーサー家の最後のトップではありませんか。ミラーワールドでシスイ・メイキヨウと協力していた際に資料で知りましたよ。まさかこんな形で顔を合わせる時が来るなんてね」

「……………」

ウィルもゾンについては知っていたようで、素顔を見るなり思い出した。

「今までの会話ぶりからして、貴方はあのゴミに手を貸していたみたいですね……………しかしそれも間もなく無駄に終わります。何せ、ゴミ共の始末はあのブラックフォース最強にして我が恩人、オブシディアン様が向かいましたからね」

「!」

「ゾゾ、最弱のオニキスの力しかない彼に先ず間違いなく勝ち目はない。終わりだよ、この世界は間もなくこの私が創り変える……………この黒き力で!!」

己が野望を今一度叫ぶと、ウィルは手札から更なるカードを展開する。

「さらに砲竜バルガンナーを召喚し、ジークヴルムノヴァに直接合体」

ー【超新星龍ジークヴルムノヴァへR】＋砲竜バルガンナーへR】LV3（6S）B
P29000

ブレイヴカード、バルガンナー。それにより、ノヴァの背中に2つの砲手が装着され、より強力な合体スピリットとなる。

「アタックステップ……………」

「来るか……………だが、僕の手元と手札にはまだ多量のマジックカードが仕込まれている……………このターンを凌ぎ、必ず次のターンで……………」

「次のターンなどない!!……………貴様には確実にこのターンで死んでもらう!!」
「!!」

そう強く、高らかに宣言しながら、ウィルはアタックステップへと移行。ノヴァのカードを横向きにし、アタックを行う……………

「アタックだ、ジークヴルムノヴァ!!……………そしてその効果、ゲーム中に一度、互いの手札と手元のカードを全て破棄する!!」

「ツ!?!……………なんだとお!?!……………ぐうっ!?!」

空が張り裂ける程の強烈な咆哮。それは全てを破壊するための咆哮……………

仮面乙はおろか、主人であるウィルの手札のカードまで全てをトラッシュユへと破棄してみせる。だがこの状況、手元も破棄された仮面乙の方が圧倒的に不利であり……………

「バルガンナーの効果でまたドロ……………ゾゾ、さらに面白いモノを見せてやろう」

「……………今度は何を……………」

「フラッシュチェンジ!!……………対象はジークヴルムノヴァ!!」

「な……………ノヴァを対象にチェンジ……………!?!」

本来ならばライダースピリットの十八番であるはずのチェンジの効果。それがノ

ヴァを対象に發揮される……………

「チェンジ効果、最もコストの高いスピリット、ウィザードインファイニティーを破壊!!
……その後トラッシュを除外」

「ツ……インファイニティー?!?!」

白く、巨大な剣が天空より現れ、インファイニティーの胸部に突き刺さる。流石にこれには耐えられず、インファイニティーはたまらず爆散、手に持っていたウィザードソードガ
ンは主人を失い地に突き刺さる。

しかもそれだけでは終わらず、ゾンのトラッシュにあるカードをゲームから除外、こ
のバトルでは使えなくしてしまう……………

「さらにこの効果發揮後、対象としたスピリットと入れ替える……………究極モードチェ
ンジ、悪しき傀儡となりて現れる…………インペリアルドラモンパラディンモード!!」

「……………い、インペリアル……………?!?!」

ー【インペリアルドラモンパラディンモード＋砲竜バルガンナー〈R〉】LV3 (5)

BP27000

フィールドにいたジークヴルムノヴァが粒子化し、分解。再び結合していくと、新たに出現したのは白き翼と大剣を持つ聖なる竜騎士、インペリアルドラモン。パラディンモード。黒き力を内包しているからか、その身体からは黒きオーラを常に放っている。そしてこのスピリットはかの有名なカードバトラー、頂点王シイナの持つモノと全く同じであり……………

「インペリアルの名を持つデジタルスピリットは頂点王シイナの手にはしかないはず……………まさか貴様はそれさえも黒の力で創り出したと言うのか!？」

「もちろん。今の私に不可能と言う文字はありませんよ……………彼女には決してバトルでは勝てないと思っていましたが、案外楽勝だったのかもしれないね」

目の前にいるのは、黒属性という力に魅入られ、人間ではなくなったバケモノ……………

それをたった今自覚し直した。こんなの、普通の人間でどうこうできるレベルではない。

「さあ、パラディンモードのアタックは健在ですよ？……バルガンナーとの合体でトリプルシンボル」

「くっ……残ったウイザーソードガンでブロック」

だが抵抗を止めるわけにはいかない。ウイザーソードガンでブロックするが、握るべき主人もいないただの武器が太刀打ちできるはずもなく、背中に装着されたバルガンナーの砲弾で爆散させられる。

そして、この瞬間、仮面乙の場合は全滅。手札と手元も全て捨てられ、トラッシュも除外。最早打つ手など残っているはずがない……………

諦めるしか、選択肢はない。

本来ならば……………

「終わりです。ただの人にしては良くやった方なんじゃないですかね？」

「……………まだだ」

「は？」

「まだ僕は諦めない。例えどんな状況になろうと、今更諦める事なんてできない!!……………

あの粉雪が降る日、誓ったんだ。あの親子、キョーラさんとアスラのために……自分の息子、ロンのために生きようと!!」

思い出すのは全ての始まり。あの日、死にかけていたキョーラと出会い、アスラを託された日から全てが始まった。

我ながら最高身分のエックスらしからぬ、泥臭くて醜い人生だと思う。だけどそれでもよかった……………

全てはあの子達のためだと思えば、幾らでも頑張れた……………

「あの子達の夢が叶うまで、見届けるまで……僕は死ねないんだ!!」

「ゾゾ、そうか。じゃあ逝こう」

「!!」

「いい加減、最後まで諦めないとか言う茶番には飽き飽きしてるんだよ。パラディンモードで再アタック。バルガンナーの効果でドローし、トラッシュにあるコア全てを自身に追加」

その魂の叫びも虚しく、ウィルはトドメの一撃を宣言。

「伝説の一撃……オメガ・ザ・レジエンダリイイ!!」

パラデインモードは手に持つ身の丈程はある大剣を豪快に地面に突き刺す。そしてその接地面からゾン目掛けて溢れんばかりの黒き波動が放たれて……………

「……………すまないアスラ……………ロン……………!!」

迫り来る死を感じるゾン。真っ先に思い浮かべたのは唯一真実を打ち明けた存在アスラと、息子のロン。

だが……………

神は彼を見逃してはいなかった……………

「うおおお!!……………つらあああ!!」

「!!」

「……………なに?」

一瞬だった。

ほんの一瞬でゾンの前に現れた小さな影が手に持つ剣でインペリアルドラモンパラ
デインモードの奥義、オメガザレジエンダリーを弾き返した。

そしてその小さな存在、当然アイツだ……………

「落ちるとここまで落ちたな、このちよび髭シルクハット……………オレの、オレの恩人に
……………手を出すんじゃないぞ!!」

「アスラ……………!!」

スーミ村のアスラ、ここに参上。Bパッドで召喚した火炎剣烈火で見事トドメの一撃
を凌いで見せた。

さらに彼のライバルであるロンも少し遅れてこの場にやって来る。

「無事か？」

「ロン……………」

初めて……………

いや、17年ぶりに息子と仮面無しで顔を合わせるゾン。元々はシスイにバレないよう装着していた仮面。ロンに素顔は見られても平気だと思っていたが……………

「アンタ、オレの親父、ゾン・アーサーなんだろう？」

「ツ……………な、何故それを…………?!」

バレていた。冷静すぎるほどの口調であっさりとそれを口にする。

「オレには赤ん坊の頃の記憶が朧気ながら残ってる。初めて会った時からなんか引つかかって、ひよつとしたらと思ってるな」

「……………すまない。僕は君を捨てたも同然の行いをした……………今更許してくれとは言わない……………」

いつかは言わなければならなかった事である謝罪を今ここでするゾン。ロンは無表情でそれを受け止め……………

「ぶつちやけ、オレはアンタを父親だとは思えねえ、無理もないよな。赤ん坊の頃の記憶

でしかオレはアンタを知らないんだから」

「……………」

「でも、アンタには感謝もしている」

「！」

「あの日、オレを捨てなかつたら、オレはアスラとは出会えなかつた。アイツの存在が、オレを大きくしてくれた。たったそれだけ、その一点のみで、オレはアンタに感謝している……………フ、これが終わつたら一緒に飯でも行かないか？……………奢ってやるよ」

「……………ロン」

息子の言葉に思わず目に涙を浮かべる。ゾンの事情を全て知っていたアスラはそれを見て「よかつたな、おっちゃん」と優しい笑みを浮かべながらそう呟く……………

だが直後にウィルが口を開き……………

「何故だ。何故貴様らがいる!?……………貴様らはオブシディアン様が始末しに向かつた筈だ」

そう。彼の中で、既にアスラは死んでいた。

己が最も信頼しているあの最強のブラックフォース、オブシディアンが自ら息の根を止めると言っていたのだから無理もない。

しかし、その理由は簡潔なモノで、尚且つウィルが望まぬモノ……………

『ゼゼゼ…………オブシディアンは消えた。残りはオマエとシャーマン、ヘタマイトだけだ』
「?!」

アスラの影からブラックフォース、オニキスが霊体として姿を現し、ウィルにそう宣告する。

受け入れ難い真実に、ウィルは口と腕を震わせて……………

「馬鹿なアアアアアア!!……………そんなわけがないだろう、あのオブシディアン様が、貴様らみたいな過当な生き物に!!」

「だったら試してみろよちよび髭ヤロウ……………!」

「オレとこのチビでな……………!!」

アスラとロンがゾンを庇うようにウィルの前に立ちはだかる……………

幾度となくバトルと言う名の激戦を繰り広げて来た彼ら、その最終決戦が間もなく開始されようとしていた……………

68コア「ジオウ・オンパレード」

ノヴァ王国のオウドウ都を中心に、この世の終わりを告げるかのように広がり続ける黒い瘴気。彼らが完全に世界を満たせば、今を生きる人間が生きていける世界ではなくなってしまう事だろう……………

それらを操るのは黒の世界より来たり復讐者ブラックフォース……………

カードを幾度となく進化させる黒属性の力を前に、人々はなす術もない。

しかし、その絶対的な力に抗う者達もいる。

青年、トウエンテイもまた、その1人だ……………

「先行はオレが貰う」

「ジジ……………ああいいよ。先行でも後攻でも、結局最後にはこのボク、ヘタマイトが勝つんだから」

恋人であるカナの身体を依代としているブラックフォースの紅一点にしてNO.2
「ヘタマイト」……………

彼女との因縁の戦いが、トウエンティの先行で幕を開けていく……………

「ターン01」トウエンティ

「メインステップ、オレはオレ自身を仮面ライダージオウに変身させる!!」

……………カメー……ンライダー……!!

ジ、オー……ウ!!!

ー【変身!!仮面ライダージオウ】LV1

己の持つ最強のライダースピリット、仮面ライダージオウに変身するトウエンティ。
創界神特有の神託の効果でカードをトラッシュに置き、合計1個のコアを追加した。

「ターンエンド」

手札：4

場：【変身!!仮面ライダージオウ】LV1(1)

バースト：【無】

「ジジ……今の君はその抜け殻のジオウを除いた他のライダースピリットの力を扱えない。何ターン持ち堪えられるかな？」

「……………」

ヘタマイトが余裕を感じさせる不気味な笑みを浮かべながらそう告げた。

彼女の言う通り、トウエンティはオブシディアンの憑依が解除された後、ジオウに宿っていた黒の力を全て取り除かれた。今まで集めて来たライダースピリットのカードこそ残ったものの、黒の力がなければ、複数のライダースピリットを操る事はできない……………」

そして、その力無くして、本来の力を取り戻したブラックフォースのNo. 2「ヘタマイト」に勝てるわけがない……………」

「ターン02」ヘタマイト

「メインステップ……………ボクはバーストをセット!!……………ジジ、ターンエンドだよ」

手札：4

バースト：〔有〕

罫のカード、バーストを裏向きでセットし、そのターンを終える。驚異的な力を有するブラックフォースにしては大人しいターンであったが、逆に「嵐の前の静けさ」とも捉える事ができる。

「ターン03」トウエンティ

「メインステップ……………オレはコイツを召喚する……………」

「ジジ、またジオウかな？」

Bパッドとカードを構えるトウエンティ。その仕草からヘタマイトはいつものようにジオウのカードを呼び出すものと勘繰るが……………

「いや、オレが召喚するのはコイツだ……来い、仮面ライダーWサイクロンジョーカー
!!」

「……………え？」

ー【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】LV1(2)BP2000

疾風の風と紫電の稲妻が駆け巡り、仮面ライダーWサイクロンジョーカーが出現する。

「召喚時効果でリザーブにコアブースト、変身したオレに神託」

「……………なんで？」

「何がだ」

「なんでジオウ以外のスピリットを召喚できるの？」

確かにトウエンティのジオウは黒の力を失ったはず。黒の力が無ければ2種以上のライダースピリットは扱えない。

今となっては他のブラックフォースにでも力を与えられない限り先ず不可能だ

.....

「……………まさかオニキスに黒の力を分けてもらった感じ?」

「オニキス?……………誰だそれは」

「……………」

トウエンティはオニキスも知らない様子。

こうなつて来ると本当に何故、どこで黒の力を得たのかが検討もつかなくなる。

「……………御託はもういいか?……………バーストをセットし、Wヒートメタルのチェンジを發揮。サイクロンジョーカーと入れ替える」

ー【仮面ライダーWヒートメタル】LV1(2)BP3000

鋼鉄の棒を握り、サイクロンジョーカーは赤と白の戦士、ヒートメタルへとチェンジする。

「アタックステップ……ヒートメタルでアタック、その効果で1コアを追加し、LVアップ」

「……ライフで受けるよ」

〈ライフ5??4〉ヘタマイト

ヒートメタルは炎を鋼鉄の棒に注ぎ、それでヘタマイトのライフバリアを1つ砕く。だが、それはヘタマイトの伏せているバーストの発動条件でもあつて……

「ジジ……まあいいや。力を取り戻しても、キミがボクに負けるのは変わらないもんね!!……ライフ減少によりバースト発動、黄色のマジック、イマジナリーゲート!!」

「!」

「効果で、手札にある黄色のスピリットをノーコストで召喚できる……次元の狭間の魔王よ……今こそ愚かなる者達に鉄槌を下せ……ディアボロモン!!」

┆【ディアボロモン】LV2(3)BP16000

ヘタマイトの場に現れる光輝く天門。しかしそこより現れ出るのは天使ではなく、究極体のデジタルスピリット、ディアボロモンと言う名の禍々しい悪魔……………

邪悪な雄叫びと共にそれは地へと姿を現した。

「……………出たなディアボロモン。オレはこれで、ターンエンドだ」

手札：3

場：【仮面ライダーWヒートメタル】LV2

【変身!!仮面ライダージオウ】LV1(2)

バースト：【有】

ヘタマイトだけでなく、ディアボロモンにも改めてリベンジを心から違うトウエンティ。再び複数のライダースピリットを操れるようになった事をヘタマイトに見せつけたこのターンをエンドとする。

「ターン04」ヘタマイト

アレ……………

ライフが回復しない。

「メインステップ……………」

このターンの始めに、ヘタマイトは己のライフが回復しない事に気がついた。ブラックフォースとして本来の力を取り戻した彼女は、バトルにおいてもほぼ無敵で、同じ総量の黒の力を持つ者の攻撃でないと、そのライフは砕いても直ぐに回復してしまうのだ……………

だがこれはどう言う事か。少なくとも、今のトウエンティはブラックフォースNO.2であるヘタマイトと同等程度の黒の力を所有している事になる。

「……………まあ、こつちの方が楽しいからいいか」

「遅延か？」

「ジジジ……………煽るスタイル嫌いじゃないよ?……………アタックステップ、やつちやえディアボロモン!!」

ヘタマイトのエースカード『ディアボロモン』が行く。狙うは当然トウエンティのラ

イフであるが、この瞬間に使える様々な効果がそれにはあつて……………

「ディアボロモンのアタック時、まずはヒートメタルからコアを2つリザーブに置き、2枚ドロ―」

「!」

―【仮面ライダーWヒートメタル】(3??1) LV2??1

ヒートメタルのLVがダウン。さらにヘタマイトはカードをドロ―と隙が無いが、まだこれで終わりではない。

「さらにもう1つのアタック時効果で、手札から2枚目のディアボロモンをノーコスト召喚」

「くっ……………!」

―【ディアボロモン】LV2(3S) BP16000

刹那、ディアボロモンは自身と全く同じ姿をしたコピーを作り出し、その数は合計2体となる。

「さあさあさあトウエンティ!!……この攻撃はどう受けてくれるのかな?」

「……ライフで受ける………ぐっあ……!!」

へライフ5??4トウエンティ

1体目のディアボロモンの長い腕による鞭のようなしなる攻撃がトウエンティのライフバリアを撃破する。

黒属性により造られたディアボロモンによる一撃はそれ相応のモノであり、トウエンティに多大な痛みを与え……

「ジジ、やっぱり病み上がりはしんどい感じ?……さつきまでの威勢はどうしたのかな?」

「威勢は消えてないさ………オレもライフの減少によりバースト発動!!」

「!」

痛みに耐え、トウエンティは伏せていたバーストを勢い良くオープンする。
 そしてそのカードは……………

「行くぞオロチ……………仮面ライダー王蛇をLV2で召喚！」
 「!？」

1 〔仮面ライダー王蛇〕LV2(3)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、紫属性のライダースピリット……………しかもその中でも特異なスピリットに数えられるミラーライダーの一種「仮面ライダー王蛇」がその姿を現す。
 このスピリットはあのオロチのライダースピリット……………
 それを見るなり、ヘタマイトはある事に気がついて……………

「……………そのスピリット、確かシャーマンが前に取り憑いてた奴の……………ああ、成る程、そう言う事か。黒の力の元はソレか」

「多分な」

かつて、オロチにはブラックフォースのシャーマンが取り憑いていた。

彼がアスラやエールと対峙した時にその中にいたシャーマンが覚醒、王蛇に黒の力が宿った。

その後、オロチはアスラに敗れ、シャーマンはフリソデの中へと移行した。結果、今の王蛇にはシャーマンの黒の力の残滓が残されていた……………

そして、その王蛇のカードがトウエンティの手へと渡り、ジオウと共にデツキへと入った事でトウエンティのデツキに黒属性が復活したのだ。

「序列が3番目のシャーマンの黒の力で、この僕のライフを完全に破壊できたのは、流石ジオウと言ったところかな?……………にしてもシャーマンの奴しくじったね、まあ、アイツは僕らの中でも1番頭スカスカだったけど」

「何をブツブツと言っている……………王蛇の召喚時効果だ!」

「!!」

「疲労状態のスピリット、ディアボロモンを破壊し、そのLVの数分、コアをボイドに置く。ディアボロモンのLVは2、よって2つのコアをボイドに」

「む、コアの完全除去……………厄介な」

王蛇が手に持つ杖を地面に突くと、アタックしたディアボロモンの足下に冥界への道が形成、その中へと引きづり込まれる。

しかもヘタマイトの使用可能なコア2つが完全に消滅。いくら黒属性の力を持つ彼女と言えど、コアまでは戻せない。

「……………ジジ、でもこっちの方が楽しいからいつか♡……………2体目のディアボロモンでアタック……………効果でヒートメタルを消滅させて2枚ドロー」

「ー」

だがそれでも一切怯まず向かって来る。ブラックフォースならではの異質なオーラがその場を飲み込む。

フィールドではヒートメタルが効果によって消滅。2体目のディアボロモンがトウエンティのライフを目掛けて走り出した。

「さらにもう1つの効果で手札から3枚のディアボロモンを召喚!!……………不足コストはアタック中のディアボロモンのLVを1に下げて確保」

「ツ……………またこの展開か」

┆【ディアボロモン】 LV1 (1S) BP12000
 ┆【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000
 ┆【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000

次々と分裂を繰り返すディアボロモン。その数は合計で4体となる。

「ジジ、その程度のコア除去はディアボロモンには意味を成さない!!…1個でBP12000もあるんだからね!!」

「くっ……………ライフで受ける……………ぐあっ?」

へライフ4?!3へ トウエンティ

再びディアボロモンがトウエンティのライフバリアを砕く。ヘタマイトにはまだ3体のディアボロモンの攻撃が残されているが、そう何度も受けていられない。トウエンティは手札にあるカードをこのタイミングでBパッドに叩きつける……………

「……………手札にあるマジックカード、絶甲氷盾の効果発揮！」

「！」

「ライフが減った時、手札からフラッシュ効果を発揮できる。それにより、貴様のこのターンのアタックステップを強制的に終了させる」

放たれたのは白のマジックカード『絶甲氷盾へR』……………

いくらディアポロモンが黒の力を宿しているへタマイトのスピリットとは言え、これ以上のアタックは行えなくなる。

「……………へえ、いいの持つてんじゃん。ボクはこれでターンエンド……………あは、少し楽しみになっちゃった♡……………さあ、もつとボクを楽しませてよトウエンティ!!」

手札：4

場：【ディアポロモン】LV1

【ディアポロモン】LV1

【ディアポロモン】LV1

【ディアポロモン】LV1

バースト：【無】

トウエンティが自分に見合う実力にあると自覚し、ブラックフォース内で最も戦闘に對しての欲求が強い彼女は、イカれた眼差しをトウエンティに向ける。

「ターン05」トウエンティ

「メインステップ……………チェンジで手札に戻ったサイクロンジョーカーを再召喚する。効果でコアブースト」

ー【仮面ライダーWサイクロンジョーカー】LV1(1)BP2000

緑と黒の姿をしたW、サイクロンジョーカーが再びトウエンティの場で姿を見せる。

「行くぞへタマイト……………このカードで、オレはオマエを討つ!!」

「ジジ……………いよいよだね」

ここからが真の戦いだ。そう言わんばかりに、トウエンティは己の持つ最強カードをBパッドに叩きつける……………

「王蛇を対象に煌臨発揮!!……………現れよ、ライダーを束ねし王……………グランドジオウ!!」

グ・ラ・ン・ド!!!
ジ、オーウ!!!

ー【仮面ライダーグランドジオウ】LV2(3)BP12000

王蛇が黄金の光の中で姿形を変え、仮面ライダージオウの強化形態、グランドジオウへと進化を遂げる。

「さらにマジック、フォースブライトドロー!!……………効果でデッキから4枚になるようドローする。今のオレの手札は0、よって4枚のカードをドロー!!」

グランドジオウ煌臨直後に使ったのは赤のドローマジック。これによりトウエン

テイの手札は一気に4枚まで回復する。

「バーストをセット……………アタックスステップ、行くぞグランドジオウ!!」

ヘタマイトも待ち侘びていた、このターンのトウエンテイのアタックスステップ。彼はグランドジオウでアタック宣言を行い、その効果を遺憾なく発揮させていく……………

「アタック時効果、手札にあるライダースピリット『キバドガバッキフォーム』のアタック時効果をコピー……………相手のスピリットからコア2つをリザーブに置く」

「!」

「回復している3体のディアボロモンの内2体からコアを1つずつリザーブへ、よって消滅!!」

ー【ディアボロモン】(1??0) 消滅

ー【ディアボロモン】(1??0) 消滅

他のライダースピリットの効果を模倣したグランドジオウの効果。それによりディ

アポロモン2体からコアが飛び、消滅する。

これで残り2体だ。

「フラツシュ……グランドジオウの更なる効果。1コストを支払い、煌臨元の王蛇を再召喚……貴様に1点のダメージを与える」

「！」

1【仮面ライダー王蛇】LV1(1)BP5000

〈ライフ4??3〉ヘタマイト

グランドジオウの横にオロチのエーススピリット、王蛇が並び立つ。そのついでのようにヘタマイトのライフバリアが瓦解、残り3つとなる。

しかも、召喚された王蛇の効果は無効にならなくて……………

「王蛇の召喚時効果、疲労しているディアポロモンを破壊し、そのLVの数だけ乗っ取ったコアをボイドに置く」

「む……」

「ソイツのLVは1、よってコア1つはボイドだ」

王蛇が杖を地面に突き、再びディアボロモンを冥界へと誘う。ディアボロモンが残り1となっただけでなく、ヘタマイトのコアは前のターンと合わせて3つボイド送り。

トウエンティがかなり優勢となってきたのは先ず間違いないだろう……

「……………これがオレ達、ライダーハンターズのカだ」

「ジジ、いいね……………それでこそ殺し甲斐がある。久し振りに本気出しちやおっかな

!!

!!

しかし、相手はブラックフォースNo. 2の称号を持つヘタマイト。

トウエンティの筋書き通りにバトルが進むわけがなくて……………

「ライフが減って3以下になった時、手札からシックスブレイズの効果を発揮、ノーコストで効果を使用。BP12000まで好きなだけスピリットを破壊する」

「なに?」

「ジジ、王蛇とサイクロンジョーカーを破壊!」

ヘタマイトの背後より放たれた6つの火の玉がそれぞれ3つずつ王蛇とサイクロンジョーカーに命中。2体とも堪らず焼却。

これでトウエンティの場のスピリットはアタック中のグランドジオウのみとなる。

「そしてまだ終わらないよ!!……フラッシュ、手札にある『アーマゲモン』の効果発揮!!」
「ツ………新車のスピリット!?!」

「この効果で、自身を召喚する。この時、トラッシュにあるディアボロモンを4枚まで手札に戻す事で、コストを戻した数×3マイナスする……ボクはキミが破壊してくれた4枚のディアボロモンを手札に戻す事で、コストをマイナス12にし、コスト0でこのアーマゲモンを召喚する!!」

「!!」

ヘタマイトのカード効果発揮と共に、ディアボロモン4体が一気に出現したデジタルゲートを潜り抜け、復活する。

そして……………

魔界の龍神よ、

今こそ世界のコトワリをぶち壊しちゃえ!!!

アーマゲモン!!

ー【アーマゲモン】LV3(3)BP16000

4体のディアボロモンは混ざり合い、融合し、より巨大な姿へと変貌していく。その大きさはそこら辺の倒壊物を遙かに凌ぐ。

蜘蛛のような手足、竜のような頭部、そして純黒の体色、瞳のない目玉をギラつかせて史上最悪の超究極体のデジタルスピリット、アーマゲモンが誕生した。

アーマゲモンは登場してくるなり、大きな奇声をあげる。耳の鼓膜が割れるかと思ってしまうその音量は、まるでこの世の終わりを告げられているかのよう。

「な、なんだコイツは……………!?!」

「ジジ……………これがボクの真のエースカード、今注ぎ込めるだけの黒の力を全て注ぎ込んで作り上げた最高傑作!!……………楽しみだ、ああ楽しみだなあ、これを使ってキミと命を賭けた血みどろの戦いができるんだから」

「……………貴様」

ヘタマイトの言葉に共鳴するように、アーマゲモンが再び爆音のような咆哮を張り上げる。

彼女もまたその咆哮でアーマゲモンのやる気を感じ取ったのち、それに指示を送る……………

「じゃあアーマゲモン、手始めにグランドジオウをぶつ殺して♡」

「!」

「漆黒の豪雨……………ブラックレイン!!」

刹那、アーマゲモンは背中から黒き雨と言える程の数のミサイルを発射。

「くっ……フラッシュ、グランドジオウの効果、煌臨元からキバドガバツキを1コストで召喚し、貴様に1ダメージ」

「ッ……！」

1【仮面ライダーキバ ドガバツキフォーム】LV1(1)BP4000

〈ライフ3??2〉ヘタマイト

グランドジオウでは先ず間違いなくあの究極の怪物、アーマゲモンには勝てない。そう見込んだトウエンティは咄嗟にグランドジオウの効果を使い、キバドガバツキフォームを召喚。ヘタマイトに更なるダメージを与えた。

だが、グランドジオウが破壊されなくなったわけではない。ミサイルはほぼ全弾が被弾してしまい、グランドジオウは耐えられず爆散してしまった。

グランドジオウの爆散を見届けたアーマゲモンは勝利の雄叫びを上げる。

「いったた……でもこれでキミのエースが消えたね」

「くっ……………ターンエンドだ」

手札：2

場：【仮面ライダーキバ ドガバッキフォーム】LV1

【変身!!仮面ライダージオウ】LV2(4)

バースト：【有】

ただ1体のライダースピリットを場に残し、トウエンティはそのターンをエンドとする。

「ああ素敵だな素敵だなく!!……………こうやって命を賭けて全力で死闘を繰り広げるのって最高だよね!!」

「……………」

「でも結局、なんだかんだ勝つのはこのボク、ブラックフォースの紅一点、ヘタマイト。キミは恋人の身体を奪ったこのボクに殺されるんだよ」

「……………カナ」

病気になったカナのためだ。そう思いウイルスに唆されライダーハンターズと言う嘘

偽りで固められた組織の仲間入りをした。

だが、カナの病気から何から何までが全てウイルの手で作り上げられていたものだった。結果、カナをさらに苦しめてしまっただけでなく、他の人達まで巻き添えにしてしまった……………

自分には、償い切れない程の罪がある。

「……………殺されるだど?……………オレは死なない。いや、死ねないんだ……………自分がやって来たことに対して、そっぽ向きながら死ねるわけがない。これから1つずつ償って行かなければならないんだ、オレが背負って来た罪を……………このバトルはその第一歩、絶対に勝ち、カナを取り戻す!!」

「ジジジ、いいないいな……………さあ、ボクのターンだ!!」

カナを必ず助け出すと気合を入れ直すトウエンティ。

そしてアーマゲモンとディアボロモンを場に残しているヘタマイトのターンが幕を開けようとしたその直後だった。

トウエンティにとって聴き慣れた声が聞こえて来たのは……………

「言うようになったじゃねえか、トウエンテイ」

—!!!

「へっ……流石はこのオレの弟子だな」

「……………て、テンドウ……さん……!!?」

「この感じ、オブシディアンじゃない?」

現れたのはこの国の三王、テンドウ・ヒロミだった。トウエンテイ達の記憶では彼はブラックフォース最強のオブシディアンに身体を奪われていた。

しかし、特にその様子はなく、片手で徐にタバコを吸う、いつものテンドウであった。

「ほ、本当にテンドウさんなのか!?!」

「ああ?…何寝ぼけてんだ、そうに決まってるだろバカ弟子。アスラだよ、アイツにデケエ借りを作っちまった。返すのがめんどくさそうだ」

「アスラ……!」

そう。テンドウはアスラとオニキスの活躍によって復活を遂げた。見事オブシディアンの呪縛を振り解き、トウエンティの元まで辿り着いて見せていた。

「へ〜〜くにそれ、まさかアスラ君がオブシディアンにバトルで勝ったって事?……………へえ、そうなんだそうなんだ♡」

「オマエはオレの妹の顔で遊びすぎだろ。何つー顔してんだ」

アスラの名前と活躍を耳にすると、不気味すぎる表情を浮かべるヘタマイト。

差し詰、このバトルが終わったら次はアスラにバトルを挑もうと思っっているのだから。

「ジジ、ジジジ!!……………残念だったねトウエンティ!!……………ボクキミとのバトルより、やっぱりアスラ君とバトルした方が楽しいかも!!……………だからこのバトル、さっさと終わらせろね!!」

「アスラ……………やはり復活したか。オマエが別の所で頑張ったんだ……………オマエのライブであるこのオレがもつと頑張らないわけにはいかないよな」

アスラの影響で、トウエンティとヘタマイトはそれぞれ別の理由でバトルのモチベーションを高める……………

そして今度こそ、ヘタマイトのターンが幕を開ける……………

「ターン06」ヘタマイト

「メインステップ!!……………ディアボロモンのLVを2に上昇するよ」

ー【ディアボロモン】(1??3) LV1??2

王蛇により減らされている、ヘタマイトのコアの総数。それでも1体のディアボロモンのLVアップには十分な数がある。

「アタックステップ!!……………またディアボロモンでアタック!!……………その効果で2枚ドロし、キバを消滅」

「!」

ー【仮面ライダーキバ ドガバツキフォーム】(1??0) 消滅

トウエンティイの場に唯一残っていたキバドガバツキが消滅。しかもこれだけではディアボロモンの効果は終わらない。

「さらにもう1つのアタック時効果で、手札から3体のディアボロモンを召喚!!」
 「くっ……またディアボロモンが」

「ジジ、不足コストはアタック中のディアボロモンをLV1に下げて確保するよ」

ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000

ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000

ー【ディアボロモン】 LV1 (1) BP12000

再び次々と己の分身を作り出すディアボロモン。その数は合計で4体となる。さらにそれらを超越したアーマゲモンの存在から、トウエンティイとの戦力差は見るに明らか

……

「ブロッカーはいない!!……大人しく死んでもらおうか!!」

「ツ……ライフだ……ぐっぐおおおお!!」

へライフ3?!2へ トウエンティ

ディアボロモンの攻撃がトウエンティのライフバリアを破壊。またしても苦痛という名の苦しみが彼を襲う……

だが負けられない。この程度の痛みで倒れるわけにはいかない。今、本当に苦しんでいるのは自分ではなく、目の前にいるカナなのだから……

「……手札から絶甲氷盾の効果を発揮!!」

「なに!?!……2枚目」

「この効果により、このバトルの終了が、貴様のアタックステップの終わりだ」

苦しみの中、手札よりはなったのは、引き込んでいた2枚目の防御マジック。それによりこのターンのヘタマイトの攻撃も食い止める。

さらにそれだけに終わらず、彼は伏せていたバーストカードを反転させて……

「さらにライフ減少によりバースト発動、ドラグーンシユート！」

「！」

「この効果により、トラツシユに眠る赤か紫のコスト6以下のスピリット1体をノーコストで復活させる」

「ツ……また王蛇か？」

「いや、オレが呼び出すのはコイツだ。来い、仮面ライダージオウ!!」

┆ 【仮面ライダージオウ】 LV2 (3) BP7000

スピリットを復活させる効果を持つ紫のバーストマジック『ドラグーンシユート』
.....

この効果でトウエンティは、変身した自身と全く同じ姿をしたライダースピリット『仮面ライダージオウ』を召喚して見せる……………

「ここで通常のジオウ?……成る程、変身カードの神託でトラツシユに落としていたのか。だけど、オーマジオウの抜け殻如きでこのボクを突破する事はできない!!……

「ジジ、ターンエンドだ!!」

手札：7

場：【アーマゲモン】LV2

【ディアボロモン】LV1

【ディアボロモン】LV1

【ディアボロモン】LV1

【ディアボロモン】LV1

バースト：【無】

余裕のある笑みを浮かべ、ヘタマイトはそのターンをエンドとする。

「……………トウエンティ、オマエの力はこんなもんじゃないだろう?」

「……………はい、テンドウさん」

「へっ……………だったらこのターンでケリつけてみる。オマエもアスラに借りを返すんだろ?」

「ああ……………行くぞ、ジオウ!!」

この時、トウエンティとフィールドにいるジオウの身体が赤々と光り輝く。バトル中にバトルラーやデッキのカード達が光り輝くこの現象は間違いなく『進化』だ……………

「ツ……………進化している!?……………あの抜け殻のジオウが!？」

「オマエ達はこのジオウをずっとそう呼んでいるな。確かに、このカードはオーマジオウと言うカードが復活した瞬間に価値を無くしたのかもしれない。だが、オレにとつて、最早コイツはなくてはならない存在、相棒だ。オレはこれからの人生、これからもコイツと共に生き抜いていく……………!!」

トウエンティの持っているジオウのカードは、元はオブシディアンの持っている『オーマジオウ』なカード。

彼らが黒の世界からこの世界にやってくる時に『オーマジオウ』のカードが力を消費して誕生したのが、今のトウエンティのジオウ。

そして、トウエンティが20枚のライダースピリットでオブシディアンのオーマジオウが復活を果たし、結果的に『2枚のジオウ』が生まれた事になる。

復活を遂げたオブシディアンのオーマジオウはまさに最強のライダースピリットだ、他を圧倒する絶対的な力を持っている。だが、今トウエンティが持つジオウのカードも

また、長きに渡って彼と共にバトルをし、共に絆を深めていったが故に……
強くなっていた。それをブラックフォース達は予測していなくて……

「オレのターン!!」

悪に利用され続けて来た青年トウエンティ……
彼の逆襲が今、幕を開ける……

「ターン07」トウエンティ

「メインステップ……チェンジ発揮、対象は仮面ライダージオーウ!!」
「!」

トウエンティは光り輝くデッキからカードをドロし、それをすぐさま使用する。

「先ずはチェンジ効果。トラッシュからコスト8以上のライダースピリットをノーコストで復活させる」

「!」

「トラツシユの底より蘇れ、グランドジオウ!!」

ー【仮面ライダーグランドジオウ】LV2(3S)BP12000

多くのライダー達をその身に纏うジオウの強化形態の1つ、グランドジオウが復活を果たす。

そして、この後に発揮されるのは、チェンジの効果らしく、場のスピリットとの入れ替えだ……………

「その後、対象のスピリットと入れ替える!!」

刹那、彼の相棒であるジオウが、今度は黄金色に光り輝く。その光景は『チェンジ』と言うよりかは『究極進化』を表しているようで……………

「祝え!!……………新たなる王の凱旋を……………来い、仮面ライダージオウ オーマフォーム!!」

……キングタイム!!!

仮面ライダージ、オー……ウ!!オーマー!!

ー【仮面ライダージオウ オーマフォーム】LV2(3) BP15000

黄金の輝きを解き放ち、その新たな姿を披露する。

『ジオウII』『グランドジオウ』など、度重なる進化を遂げて来たトウエンティのジオウが行き着いた最終形態『オーマフォーム』がたった今、この瞬間に誕生した。

「ジジ……オプシディアンのオーマジオウに限りなく近い姿まで進化したのか……やっぱり良い。やっぱりいいよトウエンティイイイイイ!!!」

「貴様の狂言はもう聞き飽きた……行くぞ、オーマフォーム、グランドジオウ!!……アタックステップ!!」

これで準備は整った。

トウエンティはそう言わんばかりにディアボロモン4体、それらを超越した存在、アーマゲモンがいるヘタマイトへと攻撃を仕掛けていく。

先ずはグランドジオウだ。

「グランドジオウでアタック!!…その効果で手札にあるライダースピリットカードを煌臨元に入れ、そのアタック時効果をコピーする。対象はさつきオーマフォームのチェンジで手札に戻した『仮面ライダージオウ』……その効果は、デッキから1枚ドロウする!!」

グランドジオウの効果を発揮させ、デッキから新たなカードをドロウする。

「さらにフラッシュユ!!…1コスト支払い、煌臨元となっているジオウを召喚、貴様に再び1点のダメージを与える!!」

「ツ……!!」

1 【仮面ライダージオウ】 LV2 (2) BP7000

へライフ2??1へタマイト

グランドジオウは額にあるジオウの仏像をタッチ。異次元より黄金の扉が出現し、そこから飛び出して来た通常の姿のジオウが拳でヘタマイトのライフを砕く。

これで彼女のライフは遂に残り1つ。後1つでカナを解放できる。

「そしてグランドジオウの効果。コスト8以上のライダースピリット全ては赤のシンボル1つを得る」

「ジジ、残りライフ1つならその効果は全く意味がないね……グランドジオウはアーマゲモンがブロック!!」

再びアーマゲモンがグランドジオウの行手を阻む。先手必勝だと言わんばかりにグランドジオウが駆け抜け、アーマゲモンの巨大な額を殴りつける。

それにより若干怯むアーマゲモンだが、あくまで若干。直ぐに体制を立て直して
 ……………

「BPはこちらの方が圧倒的に上!!……トドメだアーマゲモン、アルティメットフレア

!!」

「!」

ヘタマイトの指示を受け、口内から原爆を思わせるような強烈な破壊弾を発射する
アーマゲモン。グランドジオウはそれに直撃してしまい、堪らず爆散。

「ジジ……他愛もないね」

「いや、まだだ。次はジオウ、オマエだ!!…アタック時効果で1枚ドロ」

次はヘタマイト達が「抜け殻」と称する通常のジオウの順番だ。トウエンティは効果
でドロし、確認。その内容に思わずその口元が緩む。

「フラッシュ煌臨を發揮!!」

「!!」

「対象はアタック中の仮面ライダージオウ!!」

ジオウのベルトのバックル部にさらにもう一つ別のライドウォッチが装着され、ジオ
ウはそれをバックルごと回転させ……

……ジオウ!! ジオウ!! ジオウ!!

IIー!!

「……………煌臨、仮面ライダージオウII……………!!」

ハイテンションな音声が流れると共に、仮面ライダージオウはその姿をさらに一段階強化した姿『ジオウII』へと昇華する。

1 [仮面ライダージオウII] LV2 (2) BP10000

「……………煌臨時効果。手札かトラッシュにあるライダースピリットカードを20枚までデッキの下に戻し、戻した数2枚につきBP15000以下の相手スピリットを破壊する」

「!!」

「オレはトラッシュから5枚、手札から1枚のライダースピリットをデッキの下に戻し、回復状態の3体のディアボロモンを破壊する!!」

「ジ……………ブロッカーを!?!」

ジオウⅡは通常のジオウの顔を摸して作られた剣、ジカンギレードを取り出し、そこにエネルギーを蓄積。

やがてそのエネルギーを全解放し、3体のディアボロモンに向かって横一線。一気に薙ぎ払って見せる。

これでヘタマイトの場は疲労状態のディアボロモンとアーマゲモンが1体ずつ。このジオウⅡのアタックさえ通ればトウエンティの勝利に終わるが……

「決めろ、ジオウⅡ!!」

……そう簡単に終わるわけがなくて。

「ジジ、決めさせない!!……フラッシュユマジック、光翼之太刀!!」
「!」

「アーマゲモンを指定。よってこのターン、アーマゲモンのBPは3000上がって、尚且つ疲労状態のままブロックができる!!……ジオウⅡも潰しちやえ!!……黒き豪雨ブ
ラックレイン!!」

ー【アーマゲモン】BP16000??19000

マジックにより再び活躍を可能にしたアーマゲモン。今一度黒き豪雨ブラックレインを放つ。ジオウIIはそれを避けられるわけもなく被弾し、爆散してしまう。これでトウエンティの場に残ったスピリットはオーマフォームだけとなる。

「諦めない!!……オレはそれをアスラから教わった、ソウルコアが使えない、アイツから!!……オーマフォーム!!」

「アーマゲモンは破壊されない限り、このターン常にブロックできる!!……受けて立つよこの勝負!!」

最初は敵として戦ったアスラの事を脳裏に浮かべ、前へと進み続けるトウエンティ。それを絶対的な力で押し返そうとするヘタマイト。

進化したジオウ、オーマフォームのBPは15000。

対するアーマゲモンのBPはマジック効果を含めて19000。

このままいけばトウエンティは勝利できないが、当然ここで対抗札を切つて見せる。

「フラッシュマジック、ソウルドロー!!」

「!」

「効果により、このターンの間オーマフォームのBPを4000上昇!!……合計BPは
アーマゲモンと同じ19000となる!!」

「ジジ……マジジ?」

ー【仮面ライダージオウ オーマフォーム】BP15000??19000

ここに来てBP増強マジック。オーマフォームのBPがアーマゲモンと同等の数値
となる。

「うおおお!!……オーマフォーム、奴を、アーマゲモンを、砕けええええ!!」

昂るトウエンテイの感情を表すかのように、オーマフォームは黄金の輝きをその身に
纏い、アーマゲモンの口内へと突撃。アーマゲモンはそれを飲み込むが、オーマフォー
ムがその体内で誘爆し、諸共爆散していく……

そして爆発による爆煙の中、ヘタマイトが顔を覗かせる。真のエースとまで呼んでいたアーマゲモンを破壊されたと言うのにも関わらず、その表情はかなり余裕です………

「ジジ……ジジジ、アーマゲモン対消滅、やるね。でも結果は変わらない!!…これでキミの場のスピリットは0、これ以上の攻撃はできない。対する僕の場合には疲労しているディアボロモンが1体……次のターンでこのボクの勝ちだ!!」

そう叫ぶヘタマイト。己の持つ黒の力が強いからではなく、バトルの状況で自身の勝利を確信する。

だが………

それを否定したのはトウエンティにとっての師、ライダースピリットを司る三王、テンドウ・ヒロミ。

「ウチの婆さんが言ってたぜ」

「!?!」

「そう言う事言う奴は大体負ける。フラグって言葉知ってる?」

「……………なに？」

彼がそこまで言い切ると、トウエンティが効果の発揮を宣言する。いや、正確には「していた」と言うべきか。

「最後のフラッシュ、オレはこの効果を使っていた。変身ジオウの【転神】!!」

「これにより、このターン、オレはBP3000、シンボル1つのスピリットとしてアタックができる」

「……………おお」

ー【変身!!仮面ライダージオウ】(6??3)BP3000

創界神ネクサスをスピリットとして扱い、アタックを可能とする効果【転神】……………トウエンティはこの効果により、このターンでのアタック権利を獲得していた。これにより、ヘタマイトに最後の攻撃を仕掛けることができる……………

「行け、トウエンテイ」

「ああ、これで最後だへタマイト!!」

「ジジ……………ああ、キミって最高だよトウエンテイ」

トウエンテイはへタマイトにそう告げると、ベルトのバックルを回転させ、力を溜め込む……………

……………タイムブ레이크!!

ベルトの音声が鳴り響くと、トウエンテイは跳び上がり、強烈なライダーキックをへタマイトに向かって放った。

そして……………

「ジジ、ああまだやり足りない。やり足りないよ!!……………くっ……………ぐっ……………ぐああああ!!」

へライフ1??0へタマイト

変身したトウエンティの渾身の一撃。それによりヘタマイトの最後のライフバリアを撃破。遂にトウエンティはカナの肉体を蝕んでいたヘタマイトに勝利して見せる
.....

「……………カナ」

「……………」

ライダーキックを直撃させ、勝負を決めた直後、トウエンティがそう呟いた。カナの事が心配なのだろう……………

ヘタマイトの黒の力と言う呪いはこれで消えたはずだが……………

「……………ジ…ジジ」

「!!」

「ジジジ、い、今の一撃最高だったアアアア……………ま、まだできる!!……………もう一度、もう一度ボクとバトルしようよ、しようよねえ、トウエンティ!!!」

「アイツ、まだ意識があるのか!?!……………トウエンティ!!」

ヘタマイトにはまだ意識があった。しかし、身体中から黒の力が溢れ出ている様子から、もう既に限界であるのには違いないようで、とてもではないがもう一度バトルできる体力があるようには見えない。

それでも執念だけでトウエンティに歩み寄って来る。そんなヘタマイトに彼は
.....

「……………ごめん!!」

「!？」

彼女を強く抱きしめた。

「は、離してよトウエンティ……………ボ、ボクがキミとしたいのはこんな事じゃない。バトルだバトル。バトルをしようよ」

「ごめんカナ!!……………オレが、オレが全部間違っていた、愚かだった。今更許してくれとは言わない!!……………でも、またできるのならば、できるのならば……………また一緒に旅をしよう!!……………今度は絶対にキミを離さない!!」

「!!」

トウエンティの誓いの言葉。その強き意思が奇跡を起こす。

ヘタマイトのいや、カナの体内から黒の力が全て抜け落ち、やがて完全に塵となり消滅していつて……………

「……………言ったからね、トウエンティ……………」

「—」

ヘタマイトの黒の力は完全に消滅した。今ここよりこの肉体で話しているのは正真正銘、テンドウ・ヒロミの妹『テンドウ・カナ』……………

その優しい声色がトウエンティの荒んだ心に突き刺さり、涙が零れ落ちる。今まで、どれだけ彼がこの時を待ち侘びていた事だろう……………

こんなに嬉しい事はない。

「絶対、今度こそもう絶対……………どこにも行かないで……………!!」

「ああ、行かない。もう絶対オレはキミの元から離れない……………誓うよ」

様々な障害が邪魔をし、ようやく久方ぶりに巡り会えたトウエンティとカナ。互いに涙ぐみながら篤き抱擁を交わしたのだった……………

その様子を見ながらテンドウは「よくやった、トウエンティ」と口にし、弟子の成長を見届ける。

二兎追う者は二兎とも取った。

69 コア 「マーシフルモード」

「よし、トウエンティ。オレは先ず妹野郎をどっかに避難させつから、取り敢えずオマエは小僧共を追つて、あの黒くてデカイ球の中に行け」

「！」

ウィルによつて、ブラックフォースのヘタマイトに取り憑かれていた恋人、カナを見事に助け出したトウエンティ。彼女との感動の再会の余韻に浸る間もなく、彼女の兄であるテンドウ・ヒロミがそう提案した。

「ちよつと兄さん、何言つてるのよ……トウエンティは私のせいでボロボロなのに……」

「いや、だつてオレのデツキじゃもうあのちよび髭シルクハットには勝てないし」

「頑張りなさいよ、三王でしょ？」

野生的な感を持つテンドウ・ヒロミ。おそらく彼は己が既にアスラ達よりも実力が

劣ってしまっている事に気がついている様子。

しかし、だからといって彼も何もしないわけではない。妹であるカナを無事避難させた後は、黒い怪物達が暴れ回る街を守り抜く予定でいる。

「いや、いいんだカナ。オレは行くよ、アスラには大き過ぎる借りがある」

「…………アスラって、あのエールちゃんが好きなの男の子でしょ？…一度病院に来た」

「ああ、アイツはいずれ頂点王になる男で、オレの好敵手だ。アイツのピンチは、オレが救う…………だからカナ、もう少しだけ待っていてくれ」

「トウエンティ……………」

トウエンティの言葉に、カナは頷く。そんな彼らの会話に「イチヤイチャすんな」とテンドウ。

「そうそうトウエンティ、ついでにコレも渡して置く」

「ツ…………このカードは」

「餓別だ、大事に使えよ。捨てたら殺す」

「ああ、大事に使いますよ」

トウエンティに一枚のカードを与えた直後、テンドウはカナを抱き抱え、避難場所まで走り出し、トウエンティはアスラとロン、そして因縁の宿敵であるウィルがいるであろう、黒い球体へと急いだ……………

そこからほんの少しだけ時は戻り、無事はトウエンティとヘタマイトの激闘からそう遠くない場所……………

街を破壊しようとして攻め込んで来た黒い怪物達をカラーリーダーの6人が食い止めていた中、エールとエレンのオメガ兄妹は、金髪の「クズ」と言う言葉が似合う青年、フリソデの身体を奪ったブラックフォース「シャーマン」と対峙し、2対1のレイドバトルが開始していた。

先行はシャーマンだ。ブラックフォースの中でも最も人間に対しての恨みが強い彼は、目の前の2人の人間を潰すべく、己のターンを開始していく……………

「ターン01」シャーマン

「ズズズ……メインステップ、レウルーラをLV1で配置してターンエンド」

ー【レウルーラ【UC】】LV2（IS）

「ツ……デッキのカードはフリソデのままなのね」

シャーマンの背後に配置されたのは赤い母艦、レウルーラ。エールもリアクションした通り、どうやら彼のデッキの原型は器たるフリソデのモノのままらしい。

「臆するなエール、余と特訓した時の事を思い出せ……このバトル、必ず勝つぞ」

「お兄様………はい！」

三王である兄、エレンがそばに居る安心感を感じつつ、エールは共にターンを進めていく。

「ターン02」エール&エレン

「メインステップ……先ずは余から行くぞ、母艦ネクサス、アークエンジェルを配置」

ー【アークエンジェル】LVI

「ズズ、オレ様が赤の母艦に対し、貴様は白の母艦か」

エレン達の背後に颯爽と出現したのは白き母艦アークエンジェル。自分のバトルでは殆どの確率で配置する、このいつものネクサスをエレンは視認しながら、謎の放浪者「仮面乙」から言われた言葉を思い出して……

ー『はつきり言いましょう、ブラックフォースを討伐するのはこのアスラとその中にいるオニキス、そして僕だけで十分。普通の人間である貴方達には不可能です』

「……………余は三王にして誇り高きオメガ家、エレン。この国のため、貴様には負けん。ターンエンドだ」

エレン手札：2

エール手札：3

場：【アークエンジェル】LV1

バースト：【無】

「ズズ、ただの雑魚人間如きがほざくな」

仮面Zの助言を覆すと言う意味を含めた言葉を口にし、エレンはそのターンを終了。再びシャーマンへとターンが回る。

「ターン03」シャーマン

「メインステップ、レウルーラからコアを取り、赤マジック、ソウルドロロー。コストにソウルコアを支払い、デッキから3枚ドロロー……ズズ、さらに2枚目の母艦ネクサス、ガランシエールをLV1で配置してターンエンド」

手札：6

場：【レウルーラ】【UCC】LV1

【ガランシエール】【UCC】LV1

バースト：【無】

黒色のもう一つの母艦、ガランシエールを配置し、シャーマンはそのターンを終える。

「ターン04」エール&エレン

「メインステップ……今度は私が行きます、お兄様！」

「ああ、好きに動け」

エレンの言葉に、エールは「はい！」と力強く答えると、彼女は2枚のカードを引き抜き、Bパッドに置く。

「ネクサス、勇気の紋章と友情の紋章を配置!!」

―【勇気の紋章】 L V I

―【友情の紋章】 L V I

エールがこれまで使用して来た紋章の名が刻まれたネクサスカードを配置していく。これで彼らの場には赤と紫と白のシンボルが1つずつ並んだ。

「ターンエンドよ!!」

エール手札：2

エレン手札：3

場：【勇気の紋章】LV1

【友情の紋章】LV1

【アークエンジェル】LV1

バースト：【無】

4ターンに渡り展開されるネクサス配置合戦。互いに足場を固めていくその様子は、さながら嵐の前の静けさのよう……………

「ターン05」シャーマン

「ズズ、メインステップ。さあ、ここいらでちよつと本気を見せてやるか……………レウルー

ラのLVを2に上げ、ドラッツエを召喚。レウルーラの効果でドロ―

ー【ドラッツエ【UC】】LV1(1)BP1000

シャーマンの場に召喚されたのは赤き装甲を持つ小さなモビルスピリット、ドラッツエ。このスピリットで軽減シンボルを確保し、彼は新たなスピリットを呼び寄せる
………

「そして赤き彗星の再来、シナンジュをLV1で召喚!!」

ー【シナンジュ】LV1(1)BP6000

上空より飛来して来たのは正しく赤き彗星。

ドラッツエとは比較できない程、透き通るように澄んだ深紅のボディ。長いレーザービーム砲とボディと同じ色をした盾を所持する強力なモビルスピリット、シナンジュがここに顕現した。緑色をした一つ目の眼光がエールとエレンを威嚇するように睨みつける。

「ズズ、召喚時効果、このターンのみ、袖付きのスピリットは相手効果を受けない。アタックステップ、シナンジュ、早速行つてこい。ブラックフォースにたてつく愚かな人間共に恐怖と絶望を与えるんだ」

……

シャーマンの指示を受け、シナンジュが低空飛行で地を駆け抜ける。前のターンにネクススを配置する事に全力を注いだエールとエレンは、これをライフで受ける他なくて

「ライフで受ける!!……………ぐっ……………ああ」

「ぬっ」

〈ライフ5??4〉エール&エレン

至近距離から放たれるシナンジュのビームライフによる一撃は、彼らのライフを焼き切り、撃ち抜いた。

ブラックフォースであるシャーマンの攻撃はとても重く、エールはおろか、流石のエ

レンも僅かばかり堪えた様子。

「……………無事かエール？」

「は、はい、大丈夫ですお兄様……………今頃、アスラはきつともつと辛い戦いをしているはず……………それに比べればこんな痛みなんて」

「ターンエンドだ。ズズ、さあ、オマエ達も本領を發揮してみろ!!……………全部出し切った後に、ぶっ殺してやる!!」

手札：6

場：【ドラツツエ「UC」】LV1

【シナンジュ】LV1

【レウルーラ「UC」】LV2

【ガランシエール】LV1

バースト：【無】

狂気の笑みを浮かべながらそのターンをエンドとするシャーマン。言動からして、やはり彼がどのブラックフォースよりも人間に対する恨みが強いのが見て取れる

……………

しかし、彼らを封印したのは大昔にいたアスラの先祖『ギアの一族』
今を生きるエール達には何も関係はない。

「ターン06」エール&エレン

「勇気の紋章をLV2にアップ……………バーストをセット！」

「余は手札からネクサスカード、要塞都市ナウマンシティーを配置！」

ー【要塞都市ナウマンシティー】LV1

エレンの背後に機械仕掛けの巨大な像がバックに映る巨大都市が出現。その効果は
白属性を強力にサポートするモノであり……………

「配置時効果、手札にある白のスピリットを1体、ノーコスト召喚する……………エール、オ
マエがこの効果を使え！」

「はい、お兄様!!……………絆の進化の軌跡、オメガモンをLV1で召喚!!」

「!」

┆【オメガモン】LV1(1)BP12000

エレンの背後に聳え立つナウマンシテイーから飛び立ち、フィールドへと姿を現したのは、エールのエースカード「オメガモン」……………

「さらに余はストライクガンダムをLV1で召喚！」

┆【ストライクガンダム】LV1(1S)BP4000

オメガモンの横でダイヤモンドを模した白シンボルが砕け散り、白きモビルスピリット「ストライクガンダム」がその姿を見せる。

「アタックステップ!!……………出撃せよストライクガンダム、効果によりコアブースト、自身のLVを2にアップさせる」

┆【ストライクガンダム】(1S??2S)LV1??2

エレンの指示を受け、ストライクガンダムが背中中のブースターを逆噴射させ、低空を駆け抜ける。そしてその間に、エレンは再びカードを1枚切って……

「フラッシュ煌臨発揮、対象はストライクガンダム!!」

「ズ……煌臨か」

「自由の翼で飛翔せよ、フリーダムガンダム!!」

1 「フリーダムガンダム」LV1(1)BP7000

ストライクガンダムが一瞬、黒を塗り替える程の白の眩い光に包み込まれると、その姿は雄々しく美しい青い機翼を持つ最高級のモビルスピリット「フリーダムガンダム」へと進化を遂げた。

「煌臨時効果、スピリット2体をデッキの下に……ドラツチエとシナンジュには退場してもらおう」

「!?!」

瞬きをする間もなく、フリーダムガンダムはビームサーベルでドラツチエとシナンジユを一刀両断。2体は強制的に粒子へと変換され、シャーマンのデッキの下へと消えてしまった。

「……モビルスピリットのアタックはライフで受けてやる」

〈ライフ5??4〉シャーマン

フリーダムガンダムは飛翔し、機翼でシャーマンのライフバリアを1つ切り裂いた。

「奴のライフは残り4点、決めろエール!!」

「オメガモン!!……効果で回復!!」

エレンがエールに託し、彼女もまた瞬時に理解してオメガモンでアタック宣言を行う。

「オメガモンは赤と白のダブルシンボル!!……その2回攻撃で、あんたは終わりよ!!」
「……………」

オメガモンがマントを翻し、左手のグレイソードと呼ばれる聖剣を展開。シャーマンのライフバリアへと飛び込んで行く……………

「ライフで受ける……………ぐっ!!」

〈ライフ4??2〉シャーマン

オメガモンはグレイソードを横一線に振り、彼のライフバリアを一気に2つ、紙切れのように斬り裂いた。

強烈な一撃に半歩あらずさるシャーマンであったが、直後に手札にあるカードを切った。

「ライフ減少により、手札から絶甲氷盾の効果!!」

「!!」

「このバトル終了時に、オマエ達のアタックステップは終わる!!」

オメガモンの巨体をも吹き飛ばす冷寒な強風。これにより、このターンのエレンとエールのアタックステップは強制的に終了となる。

「くっ……仕留め切れなかった」

「だが良い攻撃だった。このまま押し切るぞ」

「はい!!……ターンエンド!」

エール手札：1

エレン手札：1

場：【フリーダムガンダム】 LV1

【オメガモン】 LV1

【アークエンジェル】 LV1

【要塞都市ナウマンシティー】 LV1

【勇気の紋章】 LV2

【友情の紋章】 LV1

バースト：有

ここ数週間でエレンに修行をつけてもらっていた事もあつてか、兄妹ならではのコンビネーションを見せつける2人。

シャーマンの残りライフを2にまで追い詰め、そのターンをエンドとする。
だが……………

「ターン07」シャーマン

「ズズズ!!…………オレ様のライフが、ただの人間如きに碎けるわけないだろ!!」

〈ライフ2??5〉シャーマン

「なに!?!」

「ウソ…………ライフが5に戻った!?!」

同等の力を持たぬ者の攻撃では、ライフは1ターンで回復すると言うブラックフォース本来の特性を發揮するシャーマン。これにはエールはおろか、流石のエレンも愕然と

して表情を見せる……………

「思い知ったかゴミ共が。オレ様と同等以上の黒の力がなければ、オレ様のライフは砕けない!!」

「……………成る程な。黒を持たぬ者がブラックフォースには勝てないとはそう言う事だったか……………まあいい、1ターンで貴様のライフを全て破壊すればいいだけの話だ」

「ええ、アスラだったら、この程度じゃ諦めない!!」

驚愕はするが、すぐさま希望を見い出す2人。そんな決して諦めないと言う表情を見せつけてくる2人に、シャーマンは苛立って……………

「なんだその目は、なんだその顔付きは……………本気で勝てると思ってんのか、これだから人間はよお、1人残らずクズなんだ!!……………メインステップ、ネクサス、オリン円錐山を配置!」

―【オリン円錐山】LV1

2隻の母艦と同じく背後に配置されたのは円錐の形をした山。オリン円錐山。

「これがある限り、オレ様のスピリットは手札とデッキに戻らねえ!!……さらに絶望を呼び込む機体、ローゼン・ズールを召喚!」

「!!」

ー【ローゼン・ズール】LV1(1)BP5000

赤い一つ目を輝かせる紫の装甲を持つスピリット、ローゼン・ズールがシャーマンのフィールドへと降り立った。

そしてその効果は彼の言う通り、絶望を呼び込むモノであり……

「召喚時効果、デッキから5枚オープンして、その中のシナンジュかネオ・ジオングを好きにだけ召喚する!!」

「なんだと?」

ローゼン・ズールの効果でデッキの上から5枚を見るシャーマン。そしてその中に

は、対象となるカードが1枚だけある事を確認して……………

「ズズズ……見よ、これがオレ様の黒属性の力の象徴!!……………ネオ・ジオング・サイコシャード!!」

「!!」

「LV3で召喚、不足コストはローゼン・ズールを潰して確保する」

ー「ネオ・ジオング」「サイコシャード」LV3（5）BP250000

ローゼン・ズールを踏み潰しながら、上空から現れた1体の深紅の巨兵。オウドウ都で最も高い建物である三王塔をも凌ぐその巨体に、エールもエレンを上を見上げながら驚愕する……………

「ネオ・ジオング……………サイコシャード!?!……………アスラが倒したネオ・ジオングよりもさらにデカイ……………!?!」

「ズズ、サイコシャードが存在する限り、互いにコスト6以下のスピリットでアタック及びブロックができない」

その後シャーマンはバーストカードを伏せると「アタックステップ……」と静かに宣言して……………

「サイコシャードでアタック!!……効果によりBP12000までスピリットを破壊!!
……ズズ、オメガモンを砕け!!」

「!!」

サイコシャードは背部と指先からミサイル、バツクにある光輪からはレーザー光線を照射、オメガモンは受け止めようと身構えるが、それも全て無駄に終わる……………
それは全てオメガモンの強固な装甲を貫き、爆散させた。

「さらにサイコシャードはダブルシンボル、一度に2つのライフを破壊する!!」
「……ライフで受けるわ……………ぐっ!」

〈ライフ4??2〉 エール&エレン

サイコシャードが次に狙いを定めたのはエール達のライフバリア。再びミサイルやレーザーなどのありとあらゆる兵器を駆使し、それを2つ粉碎する。

だがこのライフ減少が、エールの伏せていたバーストのトリガーとなる……………

「やってくれたわね……………ライフ減少によりバースト発動、妖華吸血爪!!」

「!」

「効果により、デツキからカードを2枚ドロウする……………この効果をお兄様に適用!!……………カードを引いてください、お兄様!!」

「ああ」

エールが反転させたバーストカードは、エレンをサポートするために伏せたモノ。少しでもブラックフォースに勝つために、より強いカードバトラーの手札を回復させようと言う彼女の考え方が窺える。

「……………ターンエンド。手札が増えた所で、オマエらにサイコシャードは突破できん!!」

手札：5

場：【ネオ・ジオング「サイコシャード」】LV3

【レウルーラ「UC」】LV1

【ガランシエール】LV1

【オリン円錐山】LV1

バースト：【無】

サイコシャードに対する絶対的な自信を自負し、そのターンをエンドとするシャーマン。
ン。

エールとエレンのターンが巡って来る。

「ターン08」エール&エレン

このターンのドローステップ時、エールはネクサス、勇気の紋章のLV2効果により、ドローク枚数を2枚にし、その後トラッシュに1枚捨てた。

「メインステップ……見せてやろう、余の三王たる力を……！」

「おうおう、さっさと拝ませろや。そしてそのまま捻り潰してやんよ」

三王たる者が放てる圧倒的強者のオーラがこの場を制圧。本気になったコアも手札も回り、遂にエレンの本気が牙を剥く……………

「転醒フリーダムを召喚!!」

ー「フリーダムガンダム」LV2(2)BP9000

「召喚時効果により、ボイドからコア2つを自身に追加」

「煌臨フリーダムと転醒フリーダムが場に揃った……………!」

前のターンに煌臨したフリーダムガンダムと全く同じ姿をしたもう1体のフリーダムガンダムが見参する。どちらもエレンのバトルにとって欠かせない存在であるが、どちらともフィールドに揃うのは、実妹のエールでさえも初めて見る光景であり……………

「アークエンジェルと煌臨フリーダムのLVを2に上げてアタックステップ。翔けろ、煌臨フリーダム!!……………アークエンジェル、LV2の効果でコア1つをボイドから追加」

機翼を羽ばたかせ、翔か出したのは、前のターンに煌臨したフリーダムガンダム。ビームサーベルと機翼で空を切りながら前進していく……………

そして、ブラックフォースの特性故に1ターンでライフが回復するシャーマンを倒すべく、ここで更なるカードを手札から使用する……………

「フラッシュエンジン、フリーダムガンダム・ハイマツトフルバースト!!」

「!!」

「効果により、先ずはコスト40までスピリットを手札に戻す」

「ズズ、だがオリン円錐山により、サイコシャードは手札デッキに戻らん」

放たれるはチェンジの効果。サイコシャードを手札に戻さんと白いオーラがその回りを包み込むが、サイコシャードはそれを気迫だけで粉々に粉碎してしまう。

「問題ない。この効果発揮後、アタック中の煌臨フリーダムと回復した状態で入れ替える……………!!」

1 「フリーダムガンダム「ハイマツトフルバースト」」LV3 (4) BP17000

刹那、フリーダムガンダムは内包する全ての武装を展開。幾数モノ機関銃をシャーマンのライフバリアへと向ける。

「ハイマツトフルバーストのフラッシュユ効果、ターンに一度、回復するか、このターンの間白シンボルを1つ追加できる……余は後者を選択し、ハイマツトフルバーストをダブルシンボルへ!!」

「ッ……ダブルシンボル」

「そうだ。さらにハイマツトフルバーストはチェンジにより回復している。くらうがい!!」

「……………!!」

〈ライフ5??3〉シャーマン

ダブルシンボルになったハイマツトフルバーストの攻撃。幾数モノ機関銃から繰り出される巨大なビームが彼のライフバリアをガラス玉のようにあっさりと砕いていく

……………

前のターンはこのタイミングで絶甲氷盾を切り、その場を凌いだシャーマンだが、もうそれは手札にないのか、そんな素振りは一切見せず……………

「防御マジックもないか、続け、転醒フリーダム!!」

「……ライフだ」

〈ライフ3??2〉シャーマン

転醒フリーダムが飛び立ち、機翼で彼のライフバリアをまた一つ切り裂いて見せる。これで再び残り2つだ。

「行ける、勝てる……お兄様!!」

「ああ、トドメを刺せ、ハイマツトフルバースト!!」

再びハイマツトフルバーストが機関銃をシャーマンへと向ける。これが通ればエレメン達の勝利である。

この約1年で成長した兄妹の絆による連携、それにあの伝説の怪物であるブラック

フォースが破れ去る……………

かと思われた。シャーマンが手札から一枚のカードを使用するまでは……………

「ズズ、だから無理だつて言つたら!!…………フラッシュユマジック、光翼之太刀!!」

「なに!?!」

「対象はもちろんサイコシャード。これによりこのターン、対象に取られたスピリットのBPは3000アップし、疲労状態でもブラックが可能となる……………淡い希望を踏み潰せ!!」

ー【ネオ・ジオング「サイコシャード」】BP25000??28000

疲労により微動だにしていなかったサイコシャードが一点。シャーマンのマジックカードにより再び鳴動……………

ハイマツトフルバーストのビーム攻撃を全て難なく受け切ると、巨大な手を伸ばし、それを驚掴みにすると、意図も容易く握り潰した。爆散するハイマツトフルバーストの様は、まさに希望の消滅そのモノであり……………

「くっ……………」

「そんな、お兄様のフリーダムガンダムが」

「ズズズ、諦めな!!…………所詮人間は黒属性には、ブラックフォースには勝てねえ!!…………オレらに支配されるだけのムシケラなんだからな!!」

シャーマンのブラックフォースとしての序列は『第3位』……………

これはオニキスの次に弱い順位である。しかし、序列はどうアレ黒は黒。他の色を圧倒するその力をたった今証明したのだ。

「……………ターンエンドだ」

エレン手札：2

エール手札：2

場：【フリーダムガンダム】 LV2

【アークエンジェル】 LV2

【要塞都市ナウマンシティー】 LV1

【勇気の紋章】 LV2

【友情の紋章】 LV1

バースト：【無】

好機から一点、最悪の展開を迎えてしまったこのターンのアタックステップ。しかしバトルを止めるわけにもいかず、エレンはそのターンをエンドとし、シャーマンにそれを譲る。

「ターン09」シャーマン

「オレ様のターン!!……ズズ、覚醒した黒属性の力により、再びライフは5に戻る!!」

〈ライフ2??5〉シャーマン

「そんな、折角また2まで追い詰める事ができたのに」

苦勞して破壊して来たライフがまた振り出しに戻る。この行為が相対する側のカードバトラーにとつてどれだけの心にダメージを与えるかは計り知れない。

エールも良い加減心身共に疲弊して来ている。

「ズズ、メイנסテップ。ここで赤のパイロットブレイヴ、フル・フロンタルでサイコシャードをさらに強化する!!」

000
1【ネオ・ジオング「サイコシャード」＋フル・フロンタル】LV3(5)BP31

「フル・フロンタルの召喚時効果、オマエ達がスピリット1体を破壊しなければ、オレ様はデツキから2枚ドローする」

「……………余は転醒フリーダムを破壊。貴様にドローはさせぬ」

「転醒フリーダムが赤い粒子と化して次第に消滅。ここで場に残しても結局は合体もしたサイコシャードには敵わないため、妥当な判断であると言える。」

「母艦ネクサス、ガランシエールをLV2にアップしてアタックステップだ!!……………オマエ達人間は、必ずオレ様が潰す!!……………昔年の怨みを晴らさせてもらうぜ!!……………攻撃だ、サイコシャード!!」

完全強化されたサイコシャードが緑色に輝く一つ目の眼光をエレンとエールへ向ける。

今のサイコシャードは合体につきシンボルはトリプル、一度に3つのライフバリアを粉碎できる。残り2つしかライフを持たないエレンとエールがともに受けて仕舞えばひとたまりもないのは必至。

だが流石は三王エレン。この攻撃を読み、新たな手を打つ。

「フラッシュマジック、リミテッドバリア」

「！」

「このターンの間、貴様はコスト4以上のスピリットのアタックではライフを減らせない。さらにコストの支払いにソウルコアを使用していた時、ネクサス1枚を手札に戻す……対象はガランシエール」

ガランシエールが粒子化してシャーマンの手札へと戻る。そしてライフバリアとはまた違う別の半透明なバリアが展開され、それがサイコシャードの拳の一撃からエレンとエールを守護して見せる。

「流石です、お兄様！」

「これで貴様の攻撃は凌いだ」

「ズズ……………何勝手に防いだ気でいやがる」

「？」

アタックを凌がれたと言うのに余裕の笑みを浮かべるシャーマン。その笑みの理由は直ぐに明らかとなり……………

「フル・フロンタルと合体した、サイコシャードの真の力を発揮!!……………このターンの終わり、オレ様はもう一度ターンを行う!!」

「なツ……………!?!」

「エクストラターン効果!?!……………テンドウのカブトと同じ」

「リミテッドバリアの効果が持続するのはこのターンのみ、次のターンには引き継がれねえよなあ!!……………さあ、もう一度だ!!」

まさか過ぎるエクストラターンの効果。

おそらくどの効果よりも強い効果であるソレは、全世界的に見てもテンドウの持つカブトしか確認されていなかった。黒属性を持つシャーマンはソレと同等の存在をも容易く作り出してしまえるのだ。

「ターン10」シャーマン

「再アタック!!……サイコシャード!!」

再び迫り来るサイコシャード。指先と背中からの光輪からミサイルやビームをフルバーストし、エレンやエールを狙い撃つ……………

何か手はないかと己の手札を見直すエールだったが……………

「……わ、私の手札にアレを防ぐ手段は……………ない。そんな……………」

「エール!!」

「!」

エールが敗北を悟り、エレンが声を荒げた次の瞬間、ミサイルやビームが次々と直撃

していく。舞い上がる砂埃は彼らの敗北を確信させるには余りに十分過ぎる要素
……………

しかし……………

「……………ッ!？」

「……………無事か、エール？」

「お兄様!？」

不思議と痛みのなかったエールは目を開けると、その眼前にはエレンがいた。そして直ぐに察した。己が受けるはずだったダメージを全て彼が庇ってくれていたのだ。

エレンは今の攻撃で、エックスの者とは思えない程傷だらけになり、羽織っていた三王のマントもボロボロになっていた。その光景は余りにも痛々しい……………

だが、エレンはあるカードをまた発揮させていたように……………

「フラッシュマジック、ブリザードウォール。このターンアタックによってライフは1しか減らない」

「なっ!？」

へライフ2??1へ エール&エレン

「くっ……………」

「お兄様、しつかりして下さい!!……………なんで私のためなんか、こんな」

「……………そんなの、妹だからに決まっている」

「!!」

よろよろになりながらも歯を食いしばり立ち上がるエレン。その間に己のエールに
対する本当の思いを打ち明ける。

「シャーマン。オマエは余の事を愚かだと言っていたな……………ああ愚かだ、余は愚かを
極めた男だ。母が亡くなり、その面影を残す妹にバトルを遠ざけるようしむけ、敢えて
突き放していた」

「……………お兄様」

「しかも努力を重ねた者達もコモンだからと、異邦人だからと言う理由だけで認めず。
つまらん意地を張り続けていた……………」

エレンがここで言う「努力を重ねた者達」とは、アスラとテンドウ、シイナの事だろう。

本当にここ一年の話、自分が今までどれだけ惨めで愚か者だった事を痛感していたみたいだ。

「もう一度言わせてもらう、余はどうしようもない愚か者だ!!……こうして妹の横に立てるような立派な男ではない!!……だが、ここで負けてはあの者達に顔向けもできぬ!!……だからこそこのバトル、負けられないのだ!!」

「お兄様………」

「ぐっ………」

「お兄様!?!」

気迫はあっても体力は残っていないか、エレンは思いを叫ぶと、その場で膝から崩れ落ちてしまう。

「ズズ、だからなんだってんだ。オレ様を知ったこつちやねえ………オマエ達は今から

死ぬんだよ!!……希望を見出せぬまま、絶望のどん底に落ちて!!」

「私たちは、諦めない!!」

「!?!」

シャーマンに対して声を荒げたのは、他でもないエレンの妹、エール・オメガ。

「絶望したりしない。少なくとも今戦っている人達は誰もアンタなんかには絶望したりしない!!……アイツが、バカ正直に自分の夢を追い掛けるアイツが教えてくれた、諦めなければ、どんな困難だって乗り越えられる!!」

「……………エール」

エールの言う「アイツ」とは間違いなくアスラの事だ。彼の絶対に諦めないと言う気持ちの方が飛び火し、エールもロンもトウエンティも、そして彼らに関わって来た者達にも今がある……………

「だから愚かなんだよ!!……気持ちだけでどうにかなると思ってるのか、ムシケラが!!……オマエらにもうこのサイコシャードを倒せる可能性のあるスピリットは残って

ねえだろう!!」

「……………」

エールは考える。

アスラならこの状況どうするか……………

この1年間の旅の中で彼を誰よりも見て来たエール。ふとした瞬間に彼との楽しかった旅の日々を思い出していく。そうすると、不思議と答えが出て来て……………

「ええ、そうよねアスラ。兎に角がガムシヤラに立ち向かう!!……………つしやあ!!……………行くわよ、私のデツキ!!……………ここからが本当の戦いよ!!」

アスラの事を思い、成長して来たエール。そんな彼女のデツキ「オメガのカード」達が又しても奇跡を起こさんと淡い光を放ち始めて……………

「エールのデツキがまた進化?……………これで何度目だ」

「ズ……………なんだ、この違和感」

「私の……………ターン!!!」

エレンが繋ぎ、ターンが巡って来る。エールは勇気の紋章の効果により2枚のカードをドロローして、その後1枚のカードを捨てる。

「ターン1」エール&エレン

「メインステップ、マジック、コールオブロストでトラッシュにあるオメガモンを手札に戻し、そのまま再召喚!!」

1 「オメガモン」LV3 (6) BP21000

疾風迅雷の如く復活を果たしたのは、白き装甲を見に纏うオメガモン。

しかしデジタルスピリットを超えた性能を誇るものの、目の前のサイコシャードと比べて仕舞えばちっぽけな存在に思えてしまう。

「ズズ、今更そんなスピリットに何ができる……オマエ達人間如きが」

「さつきから人間人間って……そんなに私たちが怖いのか？」

「ッ……………なんだと!？」

エールに煽り返されるシャーマン。凶星と言わんばかりの表情を見せるがすぐさま反論して見せる。

「ざけんなよ!!……………何故オレ様がムシケラなんぞに」

「アタックステップ、オメガモンでアタック!!……………効果でターンに一度回復!!」

エールの攻撃の指示を受け入れるオメガモン。眼光を輝かせ、視線をシャーマンとサイコシャードへと向ける……………

そしてこの時、この瞬間。エールは手札から新たなるカードを引き抜く。それは当然、進化したカードだ。

「フラッシュ煌臨発揮、対象はオメガモン!!」

「なに!?!……………オメガモンに更なる煌臨だと!？」

「こ、これは……………」

究極を超えるデジタルスピリットオメガモン。それがエールやその仲間達の絆の力により更なる進化を遂げる……………

この世界におけるデツキの進化条件。

1つ目は『高身分であればある程存在するセンス』

2つ目は『努力や研鑽の日々』

3つ目は『仲間の思いや絆』

エール・オメガは、最高位に立つエックスの身分でありながら、幼少期から煌臨がでないと言う理由で努力を重ね、さらに今ではアスラ達と深い絆を結んだ……………

それ故に……………

無敵である。その力がたった今、覚醒したのだ。

「オメガモン・マーシフルモード!!」

ー【オメガモン マーシフルモード】LV3(6)BP27000

オメガモンはエールがこれまで培って来た力を得て、全てが純白に包まれた姿、マーシフルモードへと姿を変えた。

マントは白き翼へと変化し、その両翼は辺りに散らばっている黒の力を浄化させている。

「な、なんだコイツは……辺りの黒属性の力が掻き消されている!？」

「美しい、そして素晴らしい……エール、余はオマエが妹なのを誇りに思うぞ」

この場にいる誰もがエールとマーシフルモードに魅了されていく中で、彼女は掌を翳し、その効果を発揮させていく……

「マーシフルモードの煌臨時効果!!……トラツシュにある究極体のカードを好きだけこのカードの煌臨元に追加……!!」

「!!」

「今の私のトラツシュには、勇気の紋章で送っておいたウオーグレイモンとメタルガルルモンがいる。よってこの2枚を追加するわ」

ウオーグレイモンとメタルガルルモンの残影が出現し、マーシフルモードに重なり合うように吸収されていく。これにより、マーシフルモードは己のその力をより強力なモ

ノとする。

「煌臨したスピリットは、その煌臨元にしたスピリットから全ての情報を引き継ぐ……つまり、アタック中のオメガモンに煌臨したマーシフルモードもまた、アタック中!!」

「……………ライフだ。ライフに来やがれ……………!!」

「絶対零度の咆哮……………雅琉々砲!!」

マーシフルモードは元々ガルルキャノンと呼ばれていた右手の砲手から絶対零度の冷気をレーザー状に打ち出す。その攻撃はサイコシャードを素通りし、真っ直ぐシャーマンのライフへと向かって……………

「ぐっ……………ぐおおおおお!!?!?!」

〈ライフ5?!3〉シャーマン

打ち破って見せた。ライフバリア2つは凍りつき、バラバラに砕け散って行った

.....

しかもこれまでと違って、シャーマンは痛がっている。マーシフルモードのこの攻撃が余程有効打となっているのだろうか.....

「こ、この痛み.....どこかで覚えが、いや、まさかそんな事.....いやでもそうなのか!?!.....馬鹿な、だとしたら何故!?!」

激しい痛みの中、シャーマンは何千年と昔の事を思い出していた。無敵と思われていた我らブラツクフォース達.....

しかし突如、彗星の如く現れ、自分達を圧倒したあの連中から受けた痛み。この痛みはそれに似ていた。

「.....ギアの一族。オマエは、オマエ達はまさかギアの一族の末裔なのか!?!.....だが何故!?!.....奴らの殆どは黒の世界で滅び、今はあのクソチビだけじゃ」

「回復しているマーシフルモードで再度アタック!!」

「くっ.....!」

「このフラツシユタイミング、マーシフルモードの更なる効果。煌臨元カード1枚を破

棄する事で何度でも回復できる!!……メタルガルルモンのカードを破棄して回復」

シャーマンがマーシフルモードから受けた傷は、まさにギアの一族の力そのモノであつた。彼の言う通り、確かに何故黒の世界出身でもないエールがギアの一族、若しくはその力を扱える者なのか疑問に残る……

だがこう考えれば全て辻褃が合うのだ。

例えば、ブラックフォースを黒の世界に封印した直後、ソウルコアを失つてまで黒の世界に向かったギアの一族が全員でなかったとすれば、何名かはこの世界に残っていたのだと考えれば……

そして、その末裔こそが今を生きるエール達『オメガ家』なのだとしたら……

「クソが!!……フラッシュマジック、光翼之太刀!!」

「!!」

「再びサイコシャードのBPを3000アップさせ、疲労状態でのブロックを可能とする。奴らの希望を捻り潰せ!!」

ー「ネオ・ジオング「サイコシャード」＋フル・フロンタル」BP31000??34

000

ここに来て2枚目の光翼之太刀。サイコシャードが再び鳴動し、エールのマーシフルモードを迎え撃つ。

マーシフルモードは絶対零度の雅流々砲を放つも、サイコシャードはそれを片手を振るうだけで相殺してしまう。そしてそのままマーシフルモードを両手で掴み、圧殺せんと力を込める……………

「BP27000と34000!!……………オレ様の勝ちだ……………!!」

圧倒的なBP差に勝ちを確信するシャーマン。しかし、ここでエールが更なる一手を繰り出す。

「フラッシュマジック、黄色のカードフルーツチェンジ!!」

「!」

「不足コストはマーシフルモードをLV2に下げて確保。このバトルでBPを比べる時、互いのスピリットのBPを入れ替える」

モードはそこに己の白いオーラを纏わせ、一線。

サイコシャードを顔から真つ二つに一刀両断して見せる。これには流石に耐えられなかったか、遂に黒属性で強化されたネオ・ジオング・サイコシャードは爆散して行つた……………

残つたのは白き翼羽ばたかせるオメガモン・マーシフルモードのみ。

「お、オレの……………オレの最強のスピリットが」

「回復したマーシフルモードで再度アタック!!…………フラッシュタイミングで今度はウオーグレイモンを破棄して回復」

「…………ライフだ、ライフで受ける!!…………ぐ、ぐあああ?!」

〈ライフ3??1〉シャーマン

マーシフルモードの体内から解き放たれたウオーグレイモンの残影がシャーマンのライフバリアへと体当たり。それを2つ砕くと、消滅した。

これでシャーマンのライフは残り1つ。無論、まだマーシフルモードはアタックが可能である。そして、サイコシャードを失ったシャーマンに、もうこれをどうにかする方

法は残っていないくて……………

「トドメよ……………どんな事があっても絶対に諦めない、それがアスラから教わった、私のバトルスピリッツだアアアー!!!」

エールの叫びを聞き入れ、マーシフルモードが最後の攻撃を仕掛けるべく白き翼で飛翔する。

「い、嫌だ。嫌だ嫌だ……………またこのオレ様が、人間なんか……………ぐ、ぐおああ!!!」

〈ライフ1??0〉シヤーマン

マーシフルモードの虐怜刀による斬撃が、シヤーマンの最後となるライフバリアを木っ端微塵に粉碎。

彼はその心の中に刻み込まれたギアの一族、人間に対する恐怖心を思い出しながら吹き飛ばされる。

「……ハアツ、ハアツ……か、勝った!？」

「ああ、我らの勝ちだエール。見事なバトルだったぞ」

結果はエレンとエールの勝利に終わったこのバトル。終了に伴ってフィールドに出現していた全てのスピリットとネクサスは消滅していく。

無我夢中だったエールは、その光景を目にすると、徐々にその喜びを感じていく。

「ふ、ふざけんな……このオレ様が又してもムシケラ如きに!!」

「!!」

まだ完全に消え去っていなかったシャーマン。最後の気力を振り絞り、立ち上がる。しかし、今にも消えてしまいそうだ。

「今に見ている、オブシディアンが必ずこの世界を変える……オレ様の代わりに、必ずこの世界を黒に染め上げる……ズズ、ズズズ……!!」

最後にそう言い残すと、シャーマンはフリソデの身体から抜けて行き、消滅。フリソ

デは目覚めぬまま、その場に倒れ込んだ。様子からして眠っているだけで、命に別状はなさそうである。

「これでウィルを含めれば、ブラックフォースは残り3人か」

「……大丈夫です。アスラが絶対にやってくれます、あいつはいつだって私達の切札なんだから」

シャーマンの消滅を見届け、そう会話する2人。エールがどれだけアスラを信用しているのかがわかる。

そしてその時、彼らの背後から歩み寄って来る。その足音が耳に入ると、2人は思わずその方へと体を向ける……………

だがそこにいたのは……………

「よお、元気そうじゃねえか。ツンデレお兄様」

「ツ……………う、ウソ?」

「テンドウ……………なのか!?!」

「ああ?……………どっからどう見てもそうだろうが。オマエらの目どうなってんの?」

まさかのテンドウ・ヒロミ。2人が愕然とするのも無理はない。何せ彼は今までブラックフォースの最強格であるオブシディアンに身体を奪われていたのだから………

しかし、発言や言い回しからして、彼本人なのは最早確定。エールにとって、こんなに嬉しい事はない。

「……アスラだよ」

「!!」

「アイツがオレを救い出した。デカイ借りを作っちまったな」

「アスラ……じゃあもうオブシディアンは倒したのね!」

「ああ、だがまだそれよりも強くなったちよび髭シルクハットが残っているらしい。とりまアイツとイケメン天才君、そしてなんかいたトウエンティを先に行かせた」

「………何はともあれ、貴様は相変わらず悪運の強い奴だな」

一応状況を説明しておくテンドウ。エレンにそう言われると「フツ………テメエもな」と鼻で笑い返した。

エールはいつものテンドウが帰って来てくれた喜びで胸いっぱいだ。

「つーわけだ。ラスボスは強くなったアイツらに任せるとして、オレらはそこら中で暴れ回っている真つ黒怪人どもを蹴散らそうじゃねえか」

「無論だ」

「……ツンデレお兄様、もう既にボロボロっぽいけどいけんの？……大好きな妹の目の前だからってちよつと無理してね？」

「無理はしていない」

テンドウとエレンがありきたりな会話を繰り広げていく中、彼らの足元からある人物の声がまた聞こえて来た。

その姿はエールも知っている者だが……

「むえ………エールちゃんはアスラ達の所に行った方がいいんじゃない？」

「………え、ムエ？………え!?!…今喋って」

どこからともなく現れていたのはオレンジ色の犬みたいな生き物『ムエ』……

アスラとエールと共に旅をしていたへんちくりんな生き物だ。それが何故今このタイミングで自分達の前に出て来たのかも疑問に残るが、それ以上に何故「むえく」としか鳴かなかったくせに急に人間語を流暢に話せるようになったのかと言う疑問が何よりも先行してしまう。

「オウドウ都にあの黒い球が出現してから、ようやく話せるようになったよ。いや実に不憫だったね」

「……………ど、どう言う事？……………て言うかこの喋り方、聞き覚えが」

エールはムエの喋り方に聞き覚えを感じる。

「……………やつぱこのクソ犬、アイツか」

そんな折、テンドウがムエの正体に勘づく。いや、元からそうではないかと考えてはいたような口振りなので、確信したと言うべきか……………

「フツ……………流石テンドウだな。勘がいい……………丁度いい、多分元に戻れようになったと

思うし、ここでネタを明かそうか」

「!!」

ムエはそう言うと、己の身体を白く発光させる。その間にその小さな生き物の形は徐々に人間の女性の形へと変化していき……………

今、ムエはその真の姿を露わにする。

「き、貴様は……………!!」

「ウソ……………し、シイナ様!?!」

「いや〜〜久し振りに人間の姿になったな〜…なんか逆に慣れない、二足歩行に」

その正体はまさかの死亡したはずの頂点王シイナ・メザ。白いラフなTシャツと短パン姿と言う頂点王と言う立場の者とは思えない格好でまさかの再登場を果たす。

死亡したと思われていた大切な存在に、エレンは啞然とし、エールは思わず口に手を当て、涙を浮かべる。

「な、なんで……………なんでムエが……………シイナ様なんですか……………?」

「お〜よしよし。可愛い妹よ〜」

ムエだった者シイナは、泣き崩れるエールを軽く抱きしめる。

「……………しかし何故、どうやって。後エールは余の妹だ」

未だ驚きを隠せないエレンがシイナに訊いた。

「いやまあ、理屈はわからないんだけど、兎に角死んだら過去にタイムスリップしてて、なんか犬になってた」

「は、話がぶつ飛び過ぎてついていけん。本当に貴様は人間なのか？」

「犬になってたね」

「そう言う意味じゃないんだが」

「……………でもこれはこれで、いいだろ？」

「……………フツ、そうだな」

全く理解が追いつかないが、兎に角彼女が生きていた事を素直にエレンは喜ぶ。

シイナは死後、何故か過去に戻り、ムエに転生していた。そしてアスラ達と共に旅をし、彼らの成長を見守っていたのだ……ずっと。

「……………ここは任せてエールちゃんはその黒い球の中に行つて。今の私に力はない。でも今のエールちゃんならきつとアスラ達の力になれる……………！」

「ッ……………」

「私は、やれない子にそんな事は言わない……………今まで死に物狂いで頑張つて来たエールちゃんだからこそ言ってるんだ」

「……………はい、わかっています。私、アスラ達を追い掛けます。そして一緒に世界を救つて、必ずアイツとシイナ様を会わせます!!」

「よし」

そう言うと、エールはBパッドを再展開、オメガモンを召喚し、その肩に飛び乗って黒い球へと目指した。エレン、テンドウ、シイナはその背中を最後まで見送つた……………

「止めないんだねエレン」

「止めても無駄な事は知っている……それに、もうエールは余より強い。強者がこの国を護るのは当然の事だ」

「まあやれる事はやったなオレ達。後はあのバケモノ共をできるだけ食い止めるだけだ。アイツらも帰って来た時にボロボロになった国なんざ見たかねえだろうからな」

3人はそれぞれ己のBパッドを構える。

「フリーダムガンダムを召喚」

「変身、仮面ライダーカブト」

「燃え上がる勇氣、フレイドラモン!!」

エレンが白きモビルスーツ、フリーダムガンダムを召喚する。

テンドウが赤き一角を持つライダースーツ、カブトに変身する。

シイナが青き肉体に赤き炎を模した装甲を身につけたスマートな竜人型アーマー体スピリット、フレイドラモンを召喚する。

彼らは弟子や妹や息子にこの国の全てを託し、自分達は国を護るため、黒の力で固められた怪物達と戦いを繰り広げていくのであった……………

70コア 「決戦、アスラ&ロンVSウィル」

ブラックフォース達の襲撃を受けた王国。しかしアスラやトウエンティ、エールなどの者達の活躍により、それは遂に残り1人、ウィルのみとなる。

アスラとロンは、そんなウィルと今にもぶつかり合わんと言った様子で対峙していた。彼らの背後ではボロボロになったゾンが心配そうな眼差しでこの光景を見つめている……………

「……………行けるかロン」

「ああ、当然だ。オマエこそ行けるのかアスラ。さっきのバトルダメージがまだ回復し切っていないんじゃないか？」

「……………このくらい平気だ。2人で絶対に勝つぞ」

『ゼゼゼ……………いや、3人だ』

「オニキス……………ああそうだな。勝つぞ、3人で!!」

アスラとロン、オニキスが結託している中、ブラックフォースと化した人間ウィルは

トレードマークだったシルクハットと杖を投げ捨て、苛立った様子を見せる。

「……何故貴様達はこの私の邪魔をする？……私の目指している世界は、オマエ達にとっても素晴らしいモノなのだぞ？」

「素晴らしいモノ？」

「ああそうだ。差別も偏見もない、コモン、エックスと言った身分もない。個人の力の差もない、故に、争いも痛みもない平和で、優しい世界だ」

「……………」

「コモンだった貴様らにもわかるだろう、この世界は醜い。だからこそ一度、この黒の力で全てを塗り潰して、新たに書き換えねばならないのだ……そのために私は伝説のブラックフォース様達から力を授かった」

己の欲望の全てをアスラ達に話すウィル。痛みを伴わない、優しく平和な世界……………

一見すると、誰もが望んでいるような素晴らしい世界のように聞こえるが……………アスラは違った。

「……………諦めんなよ」

「!?」

「いくらこの世界が醜いからって、諦めんなよ!!」

「なんだと…………!!」

アスラの言葉にウィルの額から青筋が浮き上がる。

「ふざけるなよゴミが!!……………諦めていないからこそ、私は黒の力を手にし、今オマエ達の前にいるのであろう!!」

「いや違う!!……………オマエは今を生きる人達から逃げてるだけだ、楽な道に行こうとしてるだけだ!!……………黒の力なんて言うよくわからんモノで、身勝手に支配しようとしているだけだ!!……………そんなヤツが良い世界なんて創れるわけねえだろうがコノヤロー!!」

「ツ!?!」

余りにド正論すぎる言葉に、ウィルは言い返す言葉せず、声を詰まらせる。

「旅をして、わかった事がある……………人の心は変わるし、変えられる!!……………心の底から本音

でぶつかり合えれば、分かり合えないヤツなんていねえ!!……だからオレはもう絶対諦めねえ……諦めないのがオレのバトスピだ!!」

「……いや、オレ達のバトスピだ」

「ロン……!」

叫ぶアスラの肩にロンが手を置き、同意する。

「つーわけだちよび髭ヤロウ!!……オマエはオレ達が倒す、でもって、オレ達の諦めない心で繋がったみんなを守る!!」

「喧しい……黙れ。ヒーロー気取りの餓鬼共が……自分達が今何を敵に回しているか証明してやろう!!」

3人は互いにBパッドを展開し、デッキをセットする。

「つしやあ!……行くぞロン」

「こつちのセリフだ。遅れるなよ、アスラ!!」

「潰す、今度こそ貴様らは完膚なきまでに叩き潰す!!」

……………ゲートオープン、界放!!

「始まった……………世界を賭けた、最後のバトルスピリッツが……………」

それぞれの思いを胸に、オウドウ都に突如出現した黒い球体の中で、アスラとロン、そしてウィルによるバトルスピリッツが開幕する。これが最後だと思ったゾンは、成長したアスラとロンを見守りながらそう呟いた。

バトルの先行はウィル。己が野望を叶えるためにターンを進めていく。

「ターン01」ウィル

「メインステップ。緑ネクサス、湖に咲く薔薇を配置してターンエンド」

1 【湖に咲く薔薇】 L V 1

「ツ……………イバラのカード!？」

最初の第1ターン。ウィルが背後に配置したのは蠢く不気味な巨大薔薇。実質的に今はなくなつた組織ライダーハンターズのメンバーであつたイバラが使用していたカードだ。

「第七の属性『黒』は万能の色。様々なカードを無から生み出し、使用することができる」
『……黒にそんな力があるなんて聞いた事ねえな』

「ゾゾ……オニキス、貴様のような下等な存在にはこの領域まで来る事はできませんよ。これは私だからこそ獲得できた、黒属性の新たなる境地だ！」

ブラックフォースであるオニキスも知らない黒属性の新たなる力。無から有を創り出すその力は、最早この時点でブラックフォース以上の怪物となつている事に違いはなさそうだ。

「ターン02」アスラ&ロン

「メインステップ!!……っしやあ!!……オレから行くぞロン」

「ああ」

ロンが頷き、アスラが手札にある1枚のカードをBパッドへと叩きつける。

「オレはオレ自身を、仮面ライダーセイバーに変身させる!!」

「!!」

ー【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

アスラが炎に包まれ、その中で変身する。それは身体に赤き龍を纏いしライダー……セイバーだ。

この時、創界神ネクサス特有の神託の効果が発揮されるも、今回の対象カードは0枚。コアは1つも追加されなかった。

「セイバー?……なんだそのライダースピリットは」

「オレが、いやオレとオニキスが……もう何も失わないために手に入れた、新たな力だ!!」

「……この力で、みんなを護る!!……ターンエンド!!」

アスラ手札：2

ロン手札：3

バースト：【無】

エンドとなり、再びウィルへとターンが巡りゆく。

「ターン03」ウィル

「メインステップ……コストにソウルコアを支払い、エイプウィップを召喚」

1【エイプウィップ〈R〉】LV1(1)BP1000

4本の腕を持つ緑の猿型スピリット、エイプウィップがフィールドへと姿を見せる。人の耳にはキツイ奇声を発し、主人にコアを与える。

「召喚時効果。コア1つをリザーブに……召喚コストとしてソウルコアを支払っていた場合トラッシュにも2コア追加。湖に咲く薔薇の効果でさらに1コア追加」

「ツ……一気に4ブーストかよ」

「ゾゾ……最後にバーストをセットし、ターンエンド」

手札：3

場：〔エイプウィップへR〕 L V 1

【湖に咲く薔薇】 L V 1

バースト：【有】

脅威の4コアブースト、さらにはバーストまでセットし、ウィルは己の場を磐石なモノとする。

「ターン04」アスラ&ロン

「メインステップ……オレは仮面ライダーナイトをL V 3で召喚」

1 【仮面ライダーナイト】 L V 3 (4 S) B P 6 0 0 0

今度はロンが動く。彼が物心ついたその時から握りしめていたライダースピリット、

黒騎士のナイトがこの場に姿を見せる。

「召喚時効果で1枚ドロロー」

「ゾゾ……その行動で我がバーストが鳴動する!!」

「!」

「バースト発動……完全体デジタルスピリット、キメラモン!!」

ドロローによる手札増加。それによりウィルの伏せていたバーストカードが勢い良く反転する。

「バースト効果、ネクサス2つを破壊し、ボイドからコア1つをリザーブへ……この効果発揮後、自身を召喚する……異形の怪物、キメラモンよ……LV2で暴れる」

1【キメラモン】LV2(3)BP9000

黒い力が場に集結。それらが形成したのは様々なデジタルスピリットの特徴を併せ持った異形の怪物……名はキメラモン。

「湖に咲く薔薇の効果で自身に1コア追加」

「な、なんか雰囲気ヤバそうだな……………」

「どうした、狼狽えたかアスラ？」

「な訳!!…………オレもバーストをセット!!…………これでオレ達はターンエンドだ!!」

アスラ手札：2

ロン手札：4

場：【仮面ライダーナイト】LV3

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

バースト：【有】

キメラモンがブロッカーとしている以上、ナイトも気軽にはアタックできない。アスラはバーストをセットし、2人のターンは一度途絶える。

再びウィルへとターンが巡る。

「ターン05」ウィル

「メインステップ……キメラモンのLVを3に上げ、そのままアタックステップ……キメラモンよ、その邪悪な力でしぶとい愚か者共を滅つするのだ」

ー【キメラモン】(3??5) LV2??3

咆哮を張り上げ、戦闘本能に従い、キメラモンはアスラとロンのフィールドへと飛び立つ。

「アタック時効果、このスピリットのBP以下のスピリットを1体破壊、その後1枚ドロ……くたばれミラーライダー……仮面ライダーナイト!!」

「!」

着地し、まず先に目をつけたのは仮面ライダーナイト。キメラモンは身体から生えている4本の腕でナイトを軽く持ち上げ、何度も地面へと叩きつけていく。力の差がある故に反撃の手も出ず、ナイトはその場で呆気なく爆散し、散っていく……

「ゾゾ……他愛もない」

「甘いな。この瞬間、オレは手札から紫の究極体デジタルスピリット、ベルゼブモンの効果を発揮」

「!!」

「1コスト支払い、これを召喚……………孤高の魔王よ、今こそ己が力を世に知らしめよ!!
……………究極体のデジタルスピリット、ベルゼブモンをLV1で召喚ツ!!」

「ツ……………貴様がデジタルスピリットだと!?!」

ー「ベルゼブモン」LV1（1）BP7000

「来たぜ、ロンのデジタルスピリット!」

ナイトの破壊に反応するように、闇の塊が出現。光をも塗り潰してしまうようなその闇の塊の中より出現したのは、悪魔とも呼べる姿をした邪悪なデジタルスピリット……………

その名もベルゼブモン。シイナに託された、ロンの新たな力。

「召喚時効果、相手スピリット1体のコア2つをリザーブに……………消えろ、エイプウィップ

「！」

「！」

「【エイプウィップ（R）（1??0）消滅

ベルゼブモンは登場するなり二丁の拳銃を腰から取り出し、エイプウィップ目掛けてその引き金を引く。それは瞬く間にエイプウィップの脳天を貫き、爆散させた。

「くっ……だがキメラモンのアタックは止められない！」

「いや、それも止めてみせる……そうだろアスラ？」

「おう!!……今度は破壊後のバーストを発動!!……仮面ライダーセイバードラゴニックナイト!!」

「!？」

「効果により、先ずは自身を召喚する！」

ロンの声に応え、アスラがバーストを勢い良く反転。それはあのブラックフォース最強のオブシディアンさえも打ち破って見せたあのスピリットだ……

「鋼を纏いしその衣、熱き意思で悪を穿つ!!……仮面ライダーセイバードラゴニックナイトをLV1で召喚!」

1【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト】LV1(1) BP6000

荒ぶる火球が地を熱するように出現。中よりそれを振り払いながら現れたのは、重厚感のある白銀の鎧を身に纏う、仮面ライダーセイバーの強化形態、ドラゴニックナイト。

「効果はまだ終わらねえ!!……召喚後、手札から剣のブレイヴをノーコスト召喚する!!……来い、第一の剣……火炎剣烈火!!……ドラゴニックナイトと直接合体だ!」

1【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト+火炎剣烈火】LV1(1) BP10000

その右手に握られるのは、最初に誕生した剣のブレイヴ、火炎剣烈火。そしてドラゴニックナイトの効果はまだ完全に解決したわけではなくて……

「そしてそうした時、BP12000以下の相手スピリット1体を破壊する」
「なに!？」

「ちよūdō12000のキメラモンを破壊するぜ……ドラゴニックナイト!!」

ドラゴニックナイトが火炎剣を振り、キメラモンの翼や腕を斬り落としていく。そして最後にはその頭部から腹部までをも一刀両断………

キメラモンは堪らず爆散してしまう。

「最後に火炎剣烈火の召喚時効果、湖に咲く薔薇を破壊」

「ぬうつ………!」

炎の斬撃波を飛ばし、今度はウィルの背後で佇む湖に咲く薔薇を焼き切った。

あれだけ盤石を喫していたウィルの盤面であったが、アスラとロン、2人のカウンターを受け、1つ残らず破壊し尽くされた。

「凄い……この2人、何というコンビネーション。あのウィルの攻撃からライフを無傷

で守り抜くとは……………」

このバトルを傍観しているゾンがそう眩く。

とても一朝一夕で築き上げる事などできないアスラとロンのコンビネーション、それがあのウィルにも通用するのを知り、2人の生まれて間もない時の事を知っている彼は、何か感慨深く、心に来るモノがあつた。

「鬱陶しい……………この程度で良い気になるなよゴミが……………ターンエンド」

手札：5

バースト：【無】

暴言を吐くウィル。だがその表情からはまだ余裕は消えない……………

キメラモン以上のスピリットなど、まだごまんというからだろう。アスラとロンとてそれを知っている。だからこそ次のターンで早期決着を狙っていて……………

「ターン06」アスラ&ロン

「メインステップ……オレはドラゴニックナイトのLVを2にアップ」
 「オレもベルゼブモンのLVを2にアップさせる」

1【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト+火炎剣烈火】(1??3) LV1??2
 1【ベルゼブモン】(1??3S) LV1??2

場に揃った2人の新たな力。それらのレベルが次の段階へと進む。

『ゼゼゼ……行くぞアスラ』

「おうオニキス!!……アタックステップ、オレはドラゴニックナイトでアタック!!……効果でデッキから1枚ドロ。さらに火炎剣の効果、赤のシンボルが1つ追加され、ダブルシンボルに!」

「くっ……ライフで受けます……くっ、ぐおおお!?!」

へライフ5??3へウィル

先ずはオニキスと共にアスラが攻撃する。ドラゴニックナイトの火炎剣による一振

りが、今度はウィル自身のライフバリアを襲う……………

「……………な、なんだこの痛みは、いったい何をした……………」

ブラックフォースの肉体を得たと言うのにも関わらず大きな痛みという感覚がウィルを襲う。それに違和感を覚えるも、すぐさまフィールドへと意識を向けられる……………

「ベルゼブモンでアタック!!……………さらにこのフラッシュタイミングでオレはチェンジを發揮する……………効果によりコストはオマエのリザーブのコアからだ」

「なんだと!?!……………ッ」

ロンのチェンジ。その特異な力により、ウィルのリザーブのコアがトラッシュユへと流れる。

そして、次はチェンジの効果らしく、場のスピリットとの入れ替えだ。

「その後、回復状態に入れ替える……………今ここで進化を超えろ……………モードチェンジ、ブ

ラストモードツッ!!」

ベルゼブモンの背中に漆黒の4枚の翼が新たに生える。そして天よりの贈り物なのか、天空より巨大な機関銃が降り注ぎ、ベルゼブモンは右手を差し上げるかのように上に挙げ、それと合体。その機関銃は差し出されたベルゼブモンの右手と一体化した。

ー【ベルゼブモンプラスチックモード】LV2(3S)BP15000

「くっ……何故だ、何故コイツらはこの短期間でここまでの力を!」

「っしやあ!!……行けロン!!」

「プラスチックモードはアタック時効果で紫のダブルシンボルとなる……やれ!!」
「!」

へライフ3??1〜ウィル

プラスチックモードの機関銃からビーム砲が放たれる。それは難なくウィルのライフを撃ち砕き、その数を1まで減らしてみせる……

……「行ける」「勝てる」

誰もがそう思った中、それを感じ取ったウィルはまた苛立つように額に青筋を浮き上がらせながら、手札より一枚のマジックカードの効果を發揮させる。

「嘗めるなよこの世の屑共が!!……私は手札からマジックカード、絶甲氷盾の効果を發揮!!……このバトルの終了が、貴様らのターンエンドとなる！」

「!!」

怒りの声と共に放たれたのは、白の防御マジック「絶甲氷盾へR」……それにより、このターンにこれ以上の攻撃は不可能となる。

「チクショー……あと一歩だつてえのに」

「……ターンエンドだ」

アスラ手札：3

ロン手札：4

場：【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト＋火炎剣烈火】LV2

【ベルゼブモンブラストモード】LV2

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

バースト：【無】

息の合った連携でこれでもかと連続攻撃を決めた2人だったが、今一步届かず。致し方なく一度そのターンをエンド、再びウィルへとターンを譲った。

「ターン07」ウィル

「私のターンの開始時、黒の力でライフは5に戻る……!」

〈ライフ1??3〉ウィル

「……………なに!？」

ウィルのライフのコアが復活していく。しかしその数は全快とはならず、何故か3止まりで……………

「セイバーの力だ！……セイバーのアタックで減ったオマエのライフは元には戻らねえ」

「ツ……その力でオブシディアン様も……小癩な」

このタイミングで仮面ライダーセイバーの特性を知るウィル。瞬間に何故尊敬していた最強のブラックフォース『オブシディアン』が負けたのかを悟る……

怒り浸透しながらも、アスラ達今を生きる人間を倒すべく、そのターンを継続して行く。

「ドローステップ時、仮面ライダーウオズの効果。自身を手元に置く事で、ドロ一枚増やし、その後手札のカード一枚を破棄」

自身が元から所有していたライダースピリットウオズ。それはどうやらブラックフォースと言う怪物になろうとも使用し続けている様子。

その効果で手札の質が向上する。

「メインステップ……バーストをセットし、雷皇龍ジークヴルムを召喚」

「！」

ー【雷皇龍ジークヴルム】LV3(5)BP9000

ウィルの背後から咆哮を張り上げながら出現したのは、赤き龍ジークヴルム。その名に相応しく帯電しながらフィールドへと降り立った。

「アタックステップ。その開始時、手元にあるウオズの効果。自身を召喚する、LV1で呼ぼう」

ー【仮面ライダーウオズ】LV1(1S)BP5000

黒い一反の木綿が球体を形成、やがてそれは弾け飛ぶと、中より緑色の蛍光色で輝くライダースピリット、ウオズが新たに出現した。

「ゾゾ……ウオズには悪いが直ぐに消えてもらおうか、あのスピリットを呼び出すために」

「…………あのスピリット?」

既に様々な強力スピリットが蠢くウィルのデッキにおいて、使用者自身に「あのスピリット」と凄みを含んで呼ばれるスピリットの存在がロンに疑問の念を抱かせる。

そしてウィルはそのスピリットを呼び出すべく、アタックステップを継続して
 ……………

「ウオズでアタック!!……………そしてこのフラッシュユタイミングで煌臨。コストのソウルコアを確保し、ウオズは消滅!!……………対象はジークヴルムだ」

「ツ……………アイツを呼ぶ気か!」

ー【仮面ライダーウオズ】(1S??0) 消滅

コア不足で消滅するウオズ。その様子はまるで主人の勝利を願っているかのようであった。

ただ1人そのスピリットを知っていたゾンはこの時点でウィルが呼び出すスピリットに勘づく。しかし時既に遅し、ウィルはBパッドにそのカードを叩きつけ、それを場

に呼ぶ。

「伝説の救世龍……悪しき傀儡となりて私の前に現れよ、超新星龍ジークヴルムノヴァ

!!」

「!!」

ー【超新星龍ジークヴルム・ノヴァへR】LV3(5)BP25000

ジークヴルムが咆哮を張り上げながら燃えたぎる炎の中でその姿を大きく変えて行く。そして降臨するのは白き聖装を見に纏う赤きドラゴン。

その名はジークヴルム・ノヴァ。この王国の名前の由来にもなっている伝説のスピリットである。

「うおおお!!なんだあのドラゴン、クソカッケェ!!」

『目をギラギラさせてる場合か、来るぞ』

ジークヴルム・ノヴァの余りの美しき、格好良さに思わず惚れるアスラ。ロンは口は

開いてこそないものの「緊張感ないな」と内心では思っていた。

「ジークヴルム・ノヴァ煌臨時効果。トラッシュのコア全てを自身に戻し、ライフのコアを5に戻す!!」

「なに!?!」

「黒の力じゃなくて、カード効果でライフの初期化!?!」

〈ライフ3??5〉ウイル

「やはりそうかその力……ブラックフォースには対抗できても、バトスピのルールそのモノを覆す力はないか」

そこに鏡があれば割れてしまうのではないかと思う程の咆哮を張り上げるジークヴルム・ノヴァ。しかしそれは癒しの波動でもあり、主人であるウイルのライフを5まで回復させた。

セイバーの攻撃は確かにブラックフォースには有効。だが、ルールを覆すその力は突破できても、ルールそのモノには抗えない。

「ゾゾ……まだだぞ、伝説の超新星龍の力はこんなモノではない……アタックだ!!」

コストとしてアタック中のウオズが消滅したため、バトルは無効。ウィルは次に煌臨したてのジークヴルム・ノヴァでアタックを宣言。

まだ解放していなかったその力を発揮させて行く……

「アタック時効果、互いの手札手元のカード全てを破壊する!!」

「なに!?!……うわっ!?!」

「……手札を消す力」

ジークヴルム・ノヴァが飛び立つその瞬間に発揮される効果。アスラとロンはおろか、主人であるウィルでさえもその力により手札は全て破棄され、0枚となる。

「さらにこの攻撃はダブルシンボル、貴様らのライフを2つ破壊する!!」

「くっ……ライフで受ける……ぐあ!?!」

「ぐっ!!」

へライフ5?!3) アスラ&ロン

ジークヴルム・ノヴァアがアスラとロンのライフバリアに飛びつき、それを噛み砕く。2人のライフは一気に2つ砕かれ、残り3つとなる。

「スピリットとライフは残ったが、これで手札は0枚。一気に私の勝利が近づいたな……ターンエンド」

手札：0

場：【超新星龍ジークヴルム・ノヴァア】LV3

バースト：【有】

「勝利が近づいた……だと?」

「寝言は寝てから言いやがれコノヤロー……寧ろバトスピは手札が0になってからが本番だぜ……!!」

「行くぞアスラ」

「おうロン、反撃開始だ!!」

手札が0と言う絶望的な状況だが、この程度で諦めるような2人ではない。ライフダメージによる痛みから立ち上がると、再び自分達のターンを開始して行く……………

「……………見てますかキョーラさん、貴女の息子さんは私の息子と共に世界を救おうと必死に戦ってますよ。こんなに素晴らしい事がありますか？……………あんなに小さかった2人が……………」

冬のある日、死にかけていたキョーラ・ギアと出会い、アスラを託された日の事を思い出すゾン・アーサー。その目には薄らと涙を浮かべている。

あの日、キョーラがゾンに頼んだ願いは『うんと強くしてほしい』と『表の世界を堪能させてほしい』の2つ……………

形はどうあれ、アスラは冒険の中、多くのカードバトラー達との絆を深め、学び取り、強くなった。結果として彼はキョーラとの約束を守ったと言える。

「ターン08」アスラ&ロン

「ドロー!!」

勢い良くドローを決めるのはアスラだ。彼のここぞと言う時のタイミングは決まらずに必ず良いカードを引けるのがお約束……………

今回もまたそれが発揮されて……………

「つしやあ行くぜ!!……………メインステップ、龍吼える世界、転醒ネクサス、赤の世界を配置だ!!」

「!!」

ー【赤の世界】LV1(1)

アスラとロンのバックに龍の頭部を模った山脈が連なる。このカードは、アスラが赤のカラーリーダーであるイツカク・アカバネから譲り受けたモノ……………

その力は彼の折り紙付きだ。

「配置時効果、相手の場に存在する最もBPの低いスピリット1体を破壊する」

「ツ……場の最もBPの低いスピリット!?」

「そうだ。オマエの場のスピリットは1体……よってジークヴルム・ノヴァを破壊だ!!」
「!!」

龍の山が唸り、大噴火を起こす。ジークヴルム・ノヴァはその大噴火によって飛んで来た溶岩に押し潰され、爆散して行く……………

「ネクサス効果でこのジークヴルム・ノヴァを倒しただと……」

「次はオレだ。マジック、イラプションドロ。デッキから2枚のカードをドロする」
すかさずマジックカードの効果で手札を増やすロン。その後、アスラがアタックス
テップを開始させる。

「アタックステップ……行くぞ、ドラゴニックナイト!!……自身と火炎剣の効果でそれぞれ1枚ずつ、合計2枚のカードをドロする!」

ドラゴニックナイトで攻撃を仕掛けるアスラ。その効果でなくなった手札を増やし

て行く。

「控えにはまだブラストモードがいる………決めるぞアスラ!!」

「おう!!……ドラゴニックナイトツッ!!」

〈ライフ5??3〉ウイル

「ぐっ……ぐあ!?!」

赤き神龍皇の加護を受けたドラゴニックナイトが火炎剣の一撃でウイルのライフを一気に3つ一刀両断してみせる。そしてこの時、配置した赤の世界の更なる効果が発揮されて……

「赤の世界の効果、本来のコスト5以上で、赤一色のスピリットがアタックしたバトル終了時、相手ライフ1つをさらに破壊する!!」

「!」

〈ライフ3??2〉ウィル

再び赤の世界が大噴火。吹き出したマグマはウィルのライフバリア一つを砕き、溶かした。これではダブルシンボルになれるベルゼブモンプラストモードでのアタックが通ればアスラ達の勝利となるが……………

格下であるアスラ達に大きなダメージを受けたと言う怒りのままに、ウィルは叫び……………

「凶に乗るなアアア!!……………ライフが減った事により、トラツシュに眠るゴジラの効果を発揮!!」

「!?!」

「2コストを支払い、トラツシュから自身を召喚する!!」

1【ゴジラ(2004)】LV1(1)10000

蠢く地の底より、咆哮を張り上げながら現れたのは黒い体に大きな尾を持つシンプルな怪獣と言った見た目のスピリット、ゴジラ。

「ツ……ノヴァの効果で既に手札からトラッシュに送っていたのか」

「それだけではない!!……さらにライフ減少後のバースト、絶甲氷盾!!」

「!」

ノヴァの効果で破棄させないために伏せていたウイルのバーストがここで発動。本日2枚目となる防御札「絶甲氷盾〈R〉」だ。

「効果によりライフを1つ回復。コストを支払いアタックステップを終了させる………!!」

「クソ……またそれかよ」

「オマエ達の攻撃はもう私には届かない!!」

〈ライフ2?!3〉ウイル

ライフも僅かに回復され、またもやアタックステップが強制的に終了してしまう。なんととしてもこのターンで勝負を決めたかった2人にとって、このタイミングでの絶甲氷

盾はかなり心に来るモノがあつて……………

「……………仕方ない。このターンはエンドだ」

アスラ：2

ロン手札：2

場：【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト＋火炎剣烈火】LV2

【ベルゼブモンブラストモード】LV2

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1(2)

【赤の世界】LV1

バースト：【無】

『…………アスラ』

「ん?…………どうしたオニキス?」

『奴から多量の黒属性の力を感じる…………次のターン、気を引き締めて掛かれ』

「ツ…………おう、わかつてる」

ロンがターンをエンドとする中、アスラは相棒であるブラックフォース、オニキスカ

ら忠告を受ける。

そして迎えるは5体目のブラックフォース、ウィルのターン。

「ターン09」ウィル

「ターンの開始時、赤の世界で受けたダメージはここで回復させてもらう」

〈ライフ3??4〉ウィル

「……やはりセイバーで破壊していないライフは1ターンで回復するののか」

「ゾゾ……メインステップ。マジック、フォースブライトドロ……デツキからカードを手札が4枚になるまでドロする」

「！」

ウィルも赤マジックで手札を回復する。黒属性の力の恩恵を受けたデツキから引き抜かれたそのカード達は、アスラ達の想像を絶するモノばかりであって……

ウィルは勝利を確信し、不気味な笑みを浮かべると、それらを使用して行く……

「行くぞゴミ共、このブラックフォースであるウィルに逆らった事を後悔させてやる……先ずは異魔神ブレイヴ、海魔神を召喚!!」

「ツ……異魔神!?!」

―【海魔神】LV1

ウィルの背後から水飛沫と共に現れたのは、10本はある職種を持つ特殊なブレイヴ、異魔神の1体、海魔神。

「召喚時効果発揮、手札から異合、殻人を持つスピリットカードを1枚ずつノーコスト召喚ができる!!……現れよ、終焉の騎神ラグナ・ロック!!……時の監視者ロンバルディアツツ!!」

「ツ……一気に2体の召喚!?!」

―【終焉の騎神ラグナ・ロックへR】LV1(1)BP10000

―【時の監視者ロンバルディア】LV2(3)BP14000

海魔神がその眼光を輝かせると、フィールドに2つの闇が出現。それが晴れると2体のスピリットが姿を見せる。1体は蝶の翼を持つ終焉を呼ぶ騎士、ラグナ・ロック。もう1体はウィルのエース……背中に二頭の龍を共存させる青きスピリット、ロンバルディア。

この2体の超大型スピリットが、アスラとロンの眼前に壁として立ちはだかる。

「ラグナ・ロック召喚時効果。ボイドからコア6つを自身に追加!!」

1【終焉の騎神ラグナ・ロックへR】(1??7) LV1??3

超大型スピリットであるラグナ・ロックは、その効果もド派手。普通では考えられない、6コアブーストを一度の効果発揮で行う。

だが、この程度はまだ序の口。ウィルはさらに手札を切って……

「オマエ達に面白いモノを見せてやる!!……チェンジ発揮!!……対象はラグナ・ロック!!」

「チェンジだと？」

「先ずはチェンジ効果で最もコストの高いスピリット、セイバードラゴニックナイトを破壊！」

「くっ……火炎剣は場に残す」

┆【火炎剣烈火】LV1（1）BP4000

黒き上空から聖なる大剣がドラゴニックナイトの身体を貫く……………

謎の浮力を持つその大剣はその後ウィルの場へと戻り、地に剣先から突き刺さる。致命傷を受けたドラゴニックナイトはこの瞬間に爆散し、手に持つ火炎剣は場に残された。

「その後、相手トラッシュにあるカード全てをゲームから除外する」

「!!」

アスラとロンのトラッシュに眠る使用して来たカード達が黒の力を帯びて消滅して行く。これにより、少なくともこのバトル中にそれらが復活させて使用する事は不可能

となる。

「このチェンジ効果、まさか」

そして、その後はチェンジらしく、対象スピリットとの入れ替えである。その効果をただ一人受けたゾンは、今から何が来るのかを瞬時に理解して……………

「この効果発揮後、対象のスピリットと回復状態に入れ替える……………ゾゾ、究極モードチェンジ……………悪しき傀儡となりて現れよ、インペリアルドラモンパラディンモードツ

!!

!?!

ー【インペリアルドラモンパラディンモード】LV3(4)BP15000

ラグナ・ロックが静かな粒子化し、ウィルの手札へと帰還する。そしてその代わりとして新たに闇から誕生したのは、白き翼を持つ巨大な竜戦士、インペリアルドラモンパラディンモード。

それは地に突き刺さった大剣を握り、構えると、ウィルの黒き力の影響により、翼から鎧まで全てのカラーリングが黒系統に統一されていった。

「インペリアル……………」

「聞いた事がある。シイナのエースカードの1体だ」

「ゾゾ……最早私に創造できないカードはない!!……さらに今手札に戻ったラグナ・ロックを再召喚する!!……6コアブースト!!」

ー【終焉の騎神ラグナ・ロック】LV3(7)BP18000

再び呼び出されるラグナ・ロック。その効果ももう一度適用され、多量のコアを捻出した。

「海魔神をロンバルディアとパラディンモードに合体」

ー【時の監視者ロンバルディア+海魔神】LV2(3)BP19000

ー【インペリアルドラモンパラディンモード+海魔神】LV2(3)BP20000

海魔神が触手の先から一筋の青き光を放つ。それはロンバルディアとパラディンモードと繋がり、より強力な合体スピリットとなる。1つのブレイヴで2体のスピリットと合体できるのが、海魔神をはじめとした異魔神ブレイヴ達の大きな特徴である。

「待たせたな……アタックステップだ。私はパラディンモードで攻撃!!」

ウイルは「ロンバルディア」「ゴジラ」「ラグナ・ロック」そして「パラディンモード」と言う4体の超大型スピリットを従え、いよいよアタックステップへと躍り出る。

「パラディンモードのアタック時効果、トラッシュのコア全てを自身に追加し、相手スピリットを全て疲労させる」

「なに!?!」

「トラッシュの計20個のコアを全てパラディンモードに集約!!……ベルゼブモンブラストモードを疲労!!」

ー【インペリアルドラモンパラディンモード+海魔神】(3??23) LV2??3

ー【ベルゼブモンブラストモード】（回復??疲労）

パラディンモードが放つ王者の波動。それは使用済みのコアを自身に取り込むと同時に、ベルゼブモンブラストモードを威圧し、疲労状態へと追いやった。

「これでオメガ達のスピリットは全て疲労状態。パラディンモードは海魔神との合体でトリプルシンボル!!……この一撃で終いだ」

「!!」

「伝説の一撃、オメガ・ザ・レジエンダリー!!」

アスラとロンの残りライフは3。それにトドメを刺すべく、パラディンモードは己の持つ大剣を勢い良く地面に突き刺すと、その接地面から溢れんばかりの闇の波動を放出する。

それはアスラ達のライフバリアを全て破壊せんと迫り来るが……………

「フラッシュマジック、デルタバリア!!」

「!!」

「このターンの間、オレ達のライフはコスト4以上のスピリットからは0にされねえ。不足コストはブラストモードから確保、よって1まで下がる」

アスラが白の防御マジックカードを使用する。しかし、決して0になる事はない優秀な効果だが、ライフが減らないわけではない。

「ならば1になるまで破壊されろ!!」

「ぐッ……………ぐああああ!!」

〈ライフ3??1〉アスラ&ロン

オメガ・ザ・レジエンダリーの闇の波動を受け、2つのライフバリアが消し飛び、アスラとロンの2人は大ダメージを受ける。遂にそのライフは残り1つだ。

デルタバリアの効果により、少なくともこのターンでそれが破壊される事はないが、ウィルのアタックステップが終わったわけではなくて……………

「相手のライフが減った事により、ロンバルディアの転醒!!」

ウィルがその効果の宣言をすると、再び黒き核にその身を包んでいき、進化の準備を加速させていく。

「全てを破壊する時の破壊者……その名もロンバルディア・Ω!!……今こそ世界を破壊し、創造を!!」

「!!」

―【時の破壊者ロンバルディア・Ω+海魔神】LV2(3)BP21000

黒き核から再び姿を現したロンバルディア。その姿はより異形なモノへと変化しており、言うなればそれは最早破壊の化身……

「ロンバルディア・Ωは相手の効果を受けない。さらにゴジラで火炎剣に指定アタック、効果で回復し、コアブースト。さらにブラストモードにも指定アタック!!」

「くっ……」

「全滅かよ」

ロンバルディアが転醒を果たす中、攻撃と言う名の追い討ちを仕掛けて来たのは怪獣王ゴジラ。アスラの火炎剣を踏み潰し、さらにはロンのベルゼブモンブラストモードさえも尾で薙ぎ払い、爆散させた。

これでアスラとロン、2人のスピリットは0。対するウイルの場には強力なスピリットが4体。ここからの勝利は絶望的な状況となった……

「ターンエンド。もうすぐ、もうすぐだ。世界は私の黒の力で塗り潰され、新たな道を辿る……」

手札：0

場：【ゴジラ（2004）】LV2

【終焉の騎神ラグナ・ロック（R）】LV3

【インペリアルドラモンパラディンモード+海魔神】LV3

【時の破壊者ロンバルディア・Ω+海魔神】LV2

バースト：【無】

パラディンモード以外の3体がブロッカーとして残り、ウイルはそのターンをエンド

とした。

次はアスラとロンのターン。このターンでどうにか覆さなければ、おそらく世界はブラックフォースの力を手にしたウィルの思うがままとなってしまうだろう……………

「そんな道、辿らせるわけねえだろコノヤロー!!……………行くぞロン!!」

いつものようにどんな状況でも諦めたりしないアスラ。勢いのまま迎えたターンシークエンスを行おうとするが……………

「待てチビスラ」

「!!」

それを止めたのは他でもない幼馴染にして最大のライバルであるロン。

「んだよロン!!……………怖気ついたのかよ、つーか久し振りにそんな呼ばれ方したわ!!」

「バカ、そんなわけないだろう?……………この2週間でオレらはそれぞれの道を行って、各々強くなった。だがそれでも闇雲にぶつかって所で、奴には敵わない事はさつきわかった

………」

ならやり方を変えよう。

オレがたった今思いついた作戦を執行すれば、このバトル、勝つのは必ずオレ達だ
………!!

この時、アスラでは到底思いつかないような作戦を、ロンはバトルの最中に閃いてい
て………

余興はお終いだ。
もうすぐ全てが始まる……
……
……
ザザ。

71コア 「融合、ナイトサバイブランザー!!」

世界が黒の力に蝕まれて行く中、遂にアスラとロン、史上最強のブラックフォースとなったウィルによる最終決戦が幕を開けた。

セイバーの力を中心に対抗していくアスラとロンだったが、カードを新たに生成する力を持つウィルには歯が立たず、次第に追い詰められて行く……………

絶望的な状況の中、ロンは「たった1つだけ勝つ方法がある」とアスラに告げて……………

「……………もう何をしても手遅れだ。黒の力を手にした私には誰も勝てない」

美しい蝶の羽を持つ終末の騎士、ラグナロック。

強靱な黒い鱗に身を包んだ怪獣王、ゴジラ。

白き翼を持つ聖騎士、インペリアルドラモンパラディンモード。

そして双頭の龍を従える時の支配者、ロンバルディア・Ω。

以上4体の強力なスピリットを従えているばかりかロンバルディア・Ωとパラディンモードには異魔神ブレイヴである海魔神も合体している。

対するアスラとロンの盤面には変身のカードと赤の世界と言ったネクサスカードのみ。

はつきり言つて、ここまで戦力差が開いた今、どう足掻いても勝利するのは不可能である。普通に考えたら勝てるわけがない……………

しかし「諦める」と言う選択肢が最初から無いアスラとロンは、前を向いて走り続ける、挑み続ける……………

「行くぞ天才イケメンヤロー!!…………オマエの言つた作戦に全て賭ける!!」

「着いて来いよ一点突破バカ!!…………このターンに、オレ達の全身全霊を叩き込む!!」

オレ達のターン!!

2人の最後のターンが幕を開ける。このターンに世界の命運が託されていると言つても過言ではない。

2人はそのプレッシャーにも負けず、勢いよくカードをドローして行く……………

「ターン10」アスラ&ロン

「つしやあ!!……オレはドラグレッダーを……」

「オレは転醒ナイトを……」

召喚!!

ー【ドラグレッダー】LV1(1)BP6000

ー【仮面ライダーナイト】LV2(3)BP6000

アスラは龍騎に宿る赤いドラゴン、ドラグレッダーを、対するロンは自身が最も信頼するエースカード、仮面ライダーナイトを召喚した。ドラグレッダーが咆哮を張り上げ、ナイトが手に持つ剣を構え、戦闘態勢を整える。

「ゾゾ……馬鹿め。今更そんなスピリットを召喚しても無意味!!……私が生み出したこの究極のスピリットが踏み潰してくれる!!」

「余裕ぶっこいていられるのも今のうちだぜ!!……今だロン!!」

「!?」

「ああ、オレは………仮面ライダーナイトに、アスラのドラグレッダーを合体!!」

「なに!?!……ナイトにドラグレッダーを合体だと!?!」

「〔仮面ライダーナイト+ドラグレッダー〕 L V 3 (4) B P 1 3 0 0 0

アスラのドラグレッダーが、ロンのナイトの背後に回り、鳥栖を巻く。その光景はまるで、ナイトがドラグレッダーを新たなパートナーとして従えているように見える………

ドラグレッダーはアスラのデツキに入っている都合上、龍騎との連携に使用されて来た。それ故の先入観として「ドラグレッダーはナイトにも合体できる」と言う考え方が今まで生まれなかった。

しかし、この土壇場でロンがそれを閃いた。今まで努力して来た事が全て繋がった。この合体スピリットは、アスラとロン、2人の努力の結晶とも言えるべき存在。

「くっ………だがそんな急拵えの合体で………」

「アタックステップ!!……ドラグレッツダーと合体したナイトでアタック!!……ナイトの
アタック時効果、ラグナ・ロックのコア2つをリザーブに置き、ターンに一度回復する。
よってラグナ・ロックのLVは2にダウン」

ー【終焉の騎神ラグナ・ロックへR】(5??3) LV3??2

ー【仮面ライダーナイト+ドラグレッツダー】(疲労??回復)

ドラグレッツダーが身体全体を使ってラグナ・ロックを縛り上げ、その隙を突き、ナイ
トが剣で一閃。ラグナ・ロックのLVは下がり、そのBPは15000となる。

「そしてここからだ。ナイトの【零転醒】を發揮。手札にあるアドベントカードを1枚破
壊する事で、ナイトは転醒し、サバイブとなる!」

「ぬっ……!!」

ナイトはすかさずサバイブのアドベントカードを剣のバイザー部に装填。疾風の風
がその身を包み込み、青い鎧を持つナイトの強化形態、ナイトサバイブへと強化を遂げ
る……

だがまだその強化は止まる事を知らない……………

「でもって、ドラグレッダーはドラグランザーとなって、ロンのナイトサバイブと一体化する!!」

アスラが叫ぶとドラグレッダーは烈火の炎の中、武装龍、ドラグランザーへと進化を遂げる。そしてその直後にその装甲やパーツは分解されていき、ロンのナイトサバイブへとドツキングして行つて……………

赫き夜が、世界を照らす!!……………来い、ナイトサバイブランザーツツ!!

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ドラグレッダー】LV3(4)BP17000

アスラとロンが声を重ね合わせ、叫ぶと同時に、赤いドラゴンの翼の羽ばたきが黒い

空間を赤く照らし出す。

そのスピリットの名は「ナイトサバイブレイダー」の亜種形態「ナイトサバイブランザー」……………」

その鎧はナイトの黒とドラグランザーの赤が絶妙な配色で混ざり合っており、手にはドラグランザーの頭部を模した、身の丈程はある大剣が握られていて……………」

「……………美しい、これがアスラとロンの絆……………」

ただ一人このバトルを傍観しているゾン・アーサーは、ナイトサバイブランザーを見てそう言葉を落とした。

「ナイトとドラグレッツダーの融合??……………だがしかし、そのスピリットでもまだ私のスピリットには遠く及ばない!!」

「ナイトサバイブランザーの転醒時効果!!……………相手は相手のスピリット1体を指定、その後、そのスピリットとナイトサバイブランザー以外のスピリットを全て破壊する」

「ッ……………!!」

發揮されたのは転醒ナイトが持つ転醒時効果。多くのスピリットを一度に破壊してしまう豪快な効果だ。

残すスピリットはウィル自身が選べる。彼の選択は……………

「ラグナ・ロックを指定!!……………残り破壊する!!」

「行くぞ、レッドドラグストームツツ!!」

アスラの声に合わせ、龍の大剣を天に掲げるナイトサバイブランザー。そこから黒も唸らせる赤い炎の竜巻を発生させ、ウィルの場のラグナ・ロック以外のスピリット達を飲み込んで行く。

だがその竜巻の中、1人だけ眼光を輝かせるスピリットが1体……………
ロンバルディア・Ωだ。

「ロンバルディア・Ωは相手の効果を受けん。ゾゾ、つまりその効果でも破壊されずに生き残る!!」

「だがこの瞬間、オマエのスピリットを破壊した事により、ドラグレッダーの効果を發揮させる。ライフに1点のダメージだ」

「ッ……!!」

へライフ4??3へウイル

ナイトサバイブランザーは龍の大剣の先端から炎の弾丸を発射。それはウイルのライフを1つ射抜く。

「ドラグレッダーの更なる効果!!……ラグナ・ロックに指定アタックだ!!」

アスラの叫びと共にドラゴンの翼を羽ばたかせ、ナイトサバイブランザーが飛翔する。目指す先はウイルの場のスピリット、ラグナ・ロック。彼もまた蝶の羽で飛び立ち、ナイトサバイブランザーを迎え撃つ……

上空で幾度となく剣を交える両者。しかし、体格はラグナ・ロックに部があると言うのに、徐々にナイトサバイブランザーに押され始める。そして一瞬の隙を突かれ、蝶の羽が切断される。

真つ逆さまになって地面に叩きつけられるラグナ・ロックに、ナイトサバイブランザーは追い討ちをかけるように大剣をその腹部へと突き刺す。ラグナ・ロックは堪らず

爆散し、ウィルの場には、海魔人と合体した自身のエース、ロンバルディア・Ωのみとなる。

「……………再び、合体したドラグレッダーの効果でオマエに1点のダメージを与える」
「くっ……………!」

へライフ3??2へウィル

ウィルのライフバリアが1つ破裂するように割れて行く。そのライフは遂に半数を下回るものの、ウィルはこのタイミングを逃さず、トラッシュに眠るあのスピリットの効果を発揮させる……………

「トラッシュに眠るゴジラの効果!!……………私のライフが減った時、トラッシュから復活する!!」

「!!」

1【ゴジラ(2004)】LV3(7)BP22000

地中から勢い良く飛び出して来たのはナイトサバイブランザーが転醒時効果で破壊したはずのゴジラ。その張り上げる咆哮はこの黒いフィールド全体に響き渡る……………

おそらくウィルはこの効果を見越して、前の選択でラグナ・ロックを対象にしたのだろう。

「構うモノか。続けて行くぞ、ナイトサバイブランザー!!」

ゴジラが復活しても、アスラとロンの勢いが止まる事はない。ロンの指示を聞き入れ、再びナイトサバイブランザーは羽ばたき、飛翔する。

そしてその瞬間に、アスラが手札にある最後のカードを切って、Bパッドに叩きつける。

『アスラ、マジックカードだ!!』

「おうわかつてるぜ、フラッシュマジック、シユートベントツツ!!」

「!!」

「効果により、ゴジラをデッキの下に戻す!!」

「なに!？」

上空に飛び立ったナイトサバイブランザーは、今一度龍の大剣の先端から炎の弾丸を発射。それはゴジラの頭部を射抜き、内部から爆散させる。そしてそのカードはトラッシュではなく、デッキの下に送られる……………

つまり、トラッシュでしか効果を発揮できないゴジラはこれ以上復活が不可能となったのだ。

「さらに転醒ナイトの効果。アドベントカードを使用した時、回復する……………ネクスト・イストリア!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブ+ドラグレッダー】(疲労??回復)

ロンが技名を叫ぶと、ナイトサバイブランザーは体内から赤い光を爆発させる。それ即ち疲労状態から回復状態になったと言う何よりの証……………

「くっ……………ゴミのマジック如きに私のゴジラが……………だがしかし!!……………貴様らの猛迫も

ここまでだ!!……奴を迎え撃て、ロンバルディア・Ω!!」

ここに来てウイルはロンバルディア・Ωでブロック宣言。ナイトサバイランザーの迎撃に出陣させる。

背中から生えた、青き双頭の龍を伸ばし、上空のナイトサバイランザーを捕らえようとするロンバルディア・Ω。しかしナイトサバイランザーは龍の大剣を振り、ドラゴンの翼で翻し、その攻撃を難なく回避して行く。

「ロンバルディア・ΩのBPは海魔神との合体により21000!!……対するオマエ達の合体スピリットはBP17000!!……勝負あつたな!!」

ロンバルディア・Ωの攻撃を幾度となく交わし続けるナイトサバイランザーだが、BPの格差の問題でそれも時間の問題だろう……………

しかし、そんなウイルの度肝を抜く、新手のマジックカードをロンが発揮させる。

「マジック、ソードベント!!」

「なッ?!」

「効果により、ナイトサバイブランザーのBPを5000アップ……………合計BP、22000となる!!」

ー【仮面ライダーナイトサバイブランザー】BP17000?22000

瞬間。ナイトサバイブランザーの手元に、龍騎がいつも使用している柳葉型の剣が出現。ナイトサバイブランザーはそれを強く握り締め二刀流となる。

そして迫り来るロンバルディア・Ωの双頭龍をその二振りの剣で斬り裂き、消滅させた。これで残りはロンバルディア・Ω本体のみ……………

ナイトサバイブランザーはドラゴンの翼で羽ばたく。ロンバルディア・Ωは近づきさせまいと両手からエネルギー弾を連射するが、全て剣で斬り落とされ、その勢いが弱まる事はない……………

「そ、そんな馬鹿な……………わからない、これはきつと何かの冗談だ…………」

ぶった斬れ……………

ナイトサバイブランザー!!!

目の前の信じられない光景に、現実逃避を仕掛けるウィル。そしてナイトサバイブランザーはアスラとロンのかげにひびくようにロンバルディア・Ωを捉える……………

龍騎の剣を投げ、ロンバルディア・Ωの胸部に突き刺すと、残った龍の大剣に赤い炎のエネルギを溜め、それごとロンバルディア・Ωの巨大な身体を一刀両断。それは絶望の嘆きを轟かせながら、無惨にもこの場から爆散し、消えていった……………

「……………ドラグレッターの効果で、オマエのライフ1つは破壊される」

「……………」

〈ライフ2?1〉ウィル

砕け散るライフバリア。その音がウィルにも聞こえて来る。

この音は、自身の敗北が近づいて来ている音なのだ、直ぐに理解した。だが理解はできて、認めたくはない……………

「ナイトサバイブランザーでラストアタック!!」

「これで終わりだアアアアアア!!」

「何故だ………何故オマエ達は諦めない。何故折れない!!………何故だアアアア!!!」

折れたり、諦めてる暇なんてどこにもねえ………

オレ達は頂点王になるまで、負けるわけにはいかないんだアアアアアアアアアア!!!!!!

「!!」

何度倒しても、叩き潰しても直ぐに立ち上がって向かって来る………

コイツらは………コイツらこそが本物のバケモノだ。

へライフ1??0へウィル

ナイトサバイブランザーのトドメの一撃がウィルのライフバリアを破壊する。彼はその間に、自分がいくら黒の力で強くなっても、何度でも立ち上がり、何度でも向かって来るアスラとロンの強さには勝てない事を悟る………

これにより、勝者はアスラとロンだ。彼らの16年間で築き上げて来た絆の力が勝敗を分けた……………

「つしやあ!!」

アスラがいつもの掛け声で叫び、ロンと共に拳を合わせる。ロンもこの勝利に満族気な表情を浮かべていた。

敗北したウィルはダメージによる疲労困憊からか、片膝を突き、そこからピクリとも動かない。

「…………アスラ、ロン。君達2人は、僕の誇りだ…………!!」

これまで2人を陰から見守って来たゾン・アーサー。目に涙を浮かべながらこの瞬間に感激している。

この間にバトル終了に伴い、ナイトサバイブランザーがゆつくりと消滅して行くが、アスラとロンにとって嬉しい事はその勝利だけではなかった。

「アスラ、ロン!!」

「ッ……トウエンティ!?」

「オマエ……」

駆けつけて来たのは短い銀髪の青年トウエンティ。これまでライダーハンターズの一員として、アスラとロンのライダースピリットを狙っていたが、今は互いに敵意は一切なく、寧ろ仲間とも思っている。

「トウエンティ、どうしてここに?」

「テンドウさんから言われてな。安心しろ、ヘタマイトはオレが倒した」

「ッ……ヘタマイトってブラックフォースの……確かカナさんが器にされたたんじや……」

ブラックフォースの1人、ヘタマイトはトウエンティが倒した事を知るアスラ。驚くが、そんな彼にトウエンティは珍しく笑みを見せる。

「ああ、当然カナは取り返した。ようやく、カナとまた一緒に暮らす事ができる……オ

マエのお陰だ、アスラ」

「え、オレ何もしてないけど？……へへ、でもそっか、よかつたな。オマエの夢が叶って!!」

「ああ」

カナを取り戻すためなら他人を傷つけても構わない。そこまで良心を捨ててしまっていたトウエンティを今の優しい彼に戻したのは他でもないアスラ……

だとトウエンティは思っているが、とうの本人にはそれが理解できていない様子。だが、あの悲しみを背負って戦っていたトウエンティがこうして自分の前で笑っていてくれるだけで嬉しい様子で……

「……………と言う事は後はシャーマンだけか」

ロンがそう呟くと、また彼方より聞き慣れた声が入って来る。

「シャーマンは私とお兄様が倒したわ……!!」

「!!」

「おおエール!!……無事だったか〜!」

ここでエール・オメガも合流。これでブラックフォース達と直接激闘を繰り広げた面々が集った。

周囲の光景を視認するなり、エールはアスラ達もまた勝利したのだと理解して

……

「……………勝ったのね、アンタ達も」

「おう当然だぜ!!」

「じゃあこれでブラックフォースは全滅か」

互いの勝利を喜び合うアスラとエール。その間、トウエンティはただ一人、片膝を突いたウィルの方へと目を向けて……………

「……………ウィル」

「……………トウエンティですか。今更また何を……………いやわかる。敗北した私を笑いに来たのでしょうか?」

首を軽く横に振り「そんな事はない」とトウエンティ。

「……………負けた。何もかもお終いだ。次第に得て来た黒の力はなくなり、私は人間に戻ってしまふ……………世界を黒く塗り潰し、新世界を切り拓く夢はここで潰えたのだ」

「そうだな。オマエはカナとオレを利用し、めちやくちやにした。そんなオマエを、オレは許せない」

「……………ならどうするのです?」

「……………」

思い出しただけで怒りが込み上げて来る。無理もない、カナの病気になったのも、自分がライダーハンターズに入ってライダースピリットを集めなくてはならなくなったのも、全部はこの男のせいなのだ……………

だが同時に込み上げて来るのは、アスラ達と戦って来た記憶。アスラとのバトルは、彼の本当の気持ち思い出させてくれた。

「どうもしない。オレではなく、アスラに聞け」

「?!」

「……………え、オレ?」

「アスラ、オマエならウイルスをどうする?」

ウイルスをどうするかアスラに問いかけるトウエンティ。その言葉を聞き入れると、軽く笑みを浮かべながら膝を突くウイルスの元まで歩み寄る……………

「……………オレもトウエンティと同じだ。どうもしない」

「!!」

「なんかまあ、色々あったけどさ。世界を変えたいって言う気持ちはわからない事もないんだ。オレもコモンで、貧しくて、しかもソウルコアが使えないから、馬鹿にされて、悔しくて……………でもさ。だからって1人でずっと背追い込もうとするなよ。1人で変えられないって言うなら、みんなで一緒に変えようぜ?」

「……………」

「オレは……………オレ達はずっとそうして来た。だからブラックフォースにだって、オマエにだって勝ってたんだ。みんなやれば、きっとできない事なんてない」

「へへ、手始めに、先ずはオレが頂点王になってやっからよ!!」と言葉を足しながらその手をウイルへと向ける。その手は誰がどう見ても和解を求める手だ。

ウイルは信じられなかった。仮にも自分は彼らにとつて大事な存在である「頂点王シイナ」を殺害した存在であると言うのに……………

「……………やっぱ大バカのバカスラよね、アスラって」

「ああ、世界一の一点突破バカだ」

エールとロンもまたアスラが敵だったウイルに手を差し伸ばす光景に笑みを浮かべていた。もちろん、トウエンティとゾンもだ。ブラックフォースのオニキスも霊体となつて彼の背後でほくそ笑んでいる。

ここにいる誰もがアスラの諦めない心に変えられて来た。だからこそここまで奇跡を起こし続けて来たのだ。

「……………もし、君ともっと早く出会っていたら、こんな愚かな事をしてなかったのかな。アスラ……………」

「どうだろうな?……………でもまたウイルが間違ったら止めてやるよ、オレ達が!!」

「……………ふん」

完敗だ。信じてみよう。この少年を。いつか自分の夢だった世界を作れるのではないかと……………

そう信じてその差し出された手を取ろうとした。

その瞬間だった……………

『ザザ……………余興は終わりだよ、ウィル』

ー!!!

『この声、まさか?!』

その乾いた笑い声にいち早く反応したのはオニキスだった。

だが時すでに遅し、その声の主人は黒い煙となってウィルの身体を捕らえ、それに伴う衝撃波でアスラを吹き飛ばす。

「ぐう……ぐあああああ?!」

「ウイル?!……くつ……なんなんだ?!」

アスラやウイル、オニクスだけではない、エールやロン、トウエンティやゾンもいったい何が目の前で起こっているのかを全く理解できない。

やがて、ウイルの身動きを封じ込めた黒い煙はまた声を発して……

『……この時だ。オレはずつとこの時を待っていたんだ。ザザ、ザザザザ……待ち侘びていたぞオオオオオオオー!!!』

「今、ザザって……」

『ああ、アイツは間違いない……オブシディアンだ』

「ツ……でもなんで、アイツはオレとオマエで倒したはずじゃ」

そう。

今アスラ達の目の前でウイルの肉体を捕らえたのは他でもないブラックフォースのトップに君臨するオブシディアン。一人称も「私」から「オレ」に変わってだいぶ性格

の変化に印象を受けるが、笑い方の「ザザ」で理解できる。

『貴様らにわざと負け、消滅した振りをしていたのだよ!!……その方が都合が良かったからな!!』

「お、オブシディアン様……い、いったいなぜ……?!?」

『ザザ……待ちに待っていたぞウィル。オマエに貸し与え、膨れ上がった黒の力をオレが喰らうこの時を……!!』

「……………!?!」

この中でおそらく一番困惑しているのはウィルだろう。苦しみながらも出て来た声でオブシディアンに問うた。

『言ってなかったなウィル。黒の力を人間が使うと代償が付き纏う。まあ代償と言って、ソイツが不幸になる程度だがな』

「な、なにを……………!?!」

『ザザ……まあ要するにオマエはもう不要ってこった。返してもらうぜ、オレの黒の力!!』

「そ、そんな……………今まで私は貴方に……………う、うああああ!!」
「ウイルツツ?!……………クソ、近づけねえ!!」

ウイルの叫びも虚しく、オブシディアンがウイルの黒の力を肉体ごと吸収し始める。そこから奏でられる響きはまるで絶望の音色……………

そこから発せられる凄まじい衝撃波の中、アスラ達はただそれを見ている事しかできなくて……………

『ザザ。いいぞ、力が回復していく『誠の肉体』が蘇ろうとしている。さらにここから倒されたヘタマイトとシャーマンの力も喰らえば……………!!』

徐々に人型の体型に近づいていくオブシディアン。その間に、おそらくヘタマイトとシャーマンの力の源であろう黒い玉をもたいらげていく。

そしてやがてオブシディアンから発せられていた衝撃波は終息し、アスラ達もその方へと目を向ける……………

「収まった……………!!」

「……………ウイルスは」

エール、トウエンティの順に言葉を発する。しかし、その場にもうウイルスはおらず、そこにいるのは全長3メートルはある巨大な人影……………

それは、この世で最も蘇らせてはならない存在……………

ザ……………ジ……………ズ……………ゾ……………

鋭く、悍ましく、禍々しいその声に誰もが背筋を凍らせる。

『……………テメエは、オブシディアン……………なのか?』

オニキスが目の前の生命体にそう質問した。おそらくオブシディアンであろうその生命体はすぐさま答える……………

「いや、オレはオブシディアンではない。取り戻したんだ、本当の姿を……………それもあの時以上の力となって……………」

『……………何言つてんだよテメエ……………』

「我が名は『ブラックフォース』!!……………黒の力を操る、古代の魔物だ!!」

『ブラックフォース』……………

そう名乗る生命体。その名に最も強く反応を示したのはブラックフォースに属するオニキスだ。冷や汗を流しながらも、勇んでその口を開く……………

『……………ど、どう言う事だ……………!?!』

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………オマエにもわかるように順を追って説明していこうか。そもそも、ブラックフォースとはオレの名前だ。本当はもうなんとなく気づいているんじゃないのかオニキス?」

『……………』

「オマエは、いや……………オマエとシャーマン、ヘタマイト、オブシディアンの4人はオレの分身体だ」

—!!!

「オブシディアンはその中でも主人格だったと言うわけだ」

ブラックフォースの口から放たれたのは衝撃の事実。黒の力を操る4体の集団であるブラックフォースだったが、その存在は元々1つだった。

「オニキス……………」

『……………』

アスラが心配してオニキスの顔色を伺う。しかし、その顔色はあまり良くはない。ここまで衝撃的な事実を突きつけられたのだ、無理もない……………

きつと、その身も張り裂けそうな想いなのだろう……………

『う、嘘だ。そんなわけはない……………』

「オマエに、幼少の時の記憶はあるか？」

『ツ……………!?!』

「気づけばオマエはオニキスとして存在していた。他の2人も同じだ……………オマエ達は元々オレの分身体、大昔にギアの一族と戦っていた時、数で勝る奴らを蹴散らそうと

思つてオマエ達を作つたんだよ」

オブシディアン、いや、ブラックフォースは「だが」と言葉を続ける……………

「だが負けた。それこそが奴らの作戦だった。4人となったオレは黒の世界と言う何もない世界に幽閉された……………この話はオマエでもわかるだろう……………」

『……………』

「オブシディアンとなつて封印されてしまったオレは、人間達に復讐しようと考えに考え抜いた。そして閃いた……………分裂したオマエ達をさらに強くしようとな」

『……………なに?』

「簡単な考えだ。元々4だったものを1に分裂させ、その1が2となり再び結集すればどうなる?……………答えは8だ。より強くなった個体が出現するつてこつた」

オブシディアンのその言葉に、トウエンティがハツとなつて気づく……………

「まさか貴様はそのためにウィルを……………」

「勘がいい。流石ウィルに見込まれただけはあるなトウエンティ……………そう。ウィルは

は黒の力を扱える程の大きな器を持っていた。だから奴の愚かな思想に乗っかる振りをして、黒の力を与え続けていた……いやはや滑稽だったよ。いずれオレの元に戻ってくる力とも知らずに、騙され続ける奴の顔がな」

ブラックフォースはずっとこの計画を考えていたのだ。封印されてからの何千年もの間、ずっと……………

ゾンは「まさかブラックフォースにそんな秘密があったとは……………」と口にする。長年ブラックフォースや黒の力について研究していた彼でもこの事実は知らなかったのがわかる。

エールは「酷い……………」と口にし、ウイルスに同情の心を示す。

ロンはずっと何も喋らない。ただただ話が終わるのを待っている。

アスラは……………

「だがこの身体も完璧ではない。最後のピースであるオニキス、オマエを吸収する事で、オレは完成するんだ」

「オイ、クソデカ真っ黒ヤロー……………」

「ああ？」

ブラックフォースがオニキスに目を向ける中、アスラがブラックフォースに啖呵を切るように声を荒げる。

「オマエは何のために人を騙してまでこんな事やってんだ……」

「何のため？……ザ、ジ、ズ、ゾ………そんなのオマエ達人間を皆殺しにするために決まってるだろ？」

「……………」

「下等なムシケラ如きが、何千年も前はこのオレに支配されるがままだった癖に、このオレを封印しやがって………生意気もいいとこだ。思い出させてやるよ………本当の支配者の力って奴をな」

ブラックフォースの人間を根絶やしにしたいと言う欲望を聞くなり、またアスラが吠える。

「オマエは、みんなを殺してその先に何を見てんだ」

「ああ？………ねえよそんなの。目の前にある邪魔なモノを排除して、オレが生活し易い

世界を作る。それが目的だ」

「……………くだらねえ」

「は？」

「くだらねえつつつてんだよコノヤロー…ウイルの方がまだマシだ。アイツは世界をぶつ壊したその先も見ていた……………オマエはアイツ以下だ」

「!!」

静かな怒りをブラックフォースにぶつけるアスラ。眼前にいる小粒のような存在如きに嘗められた口を聞かれ、ブラックフォースはその額に青筋を浮かべて……………

「このオレがウイル以下だと?……………ただの傀儡よりも下だと?」

「ああ、何回でも言ってるぜオブシディアン、いやブラックフォース!!……………オマエはウイルより下だ!!……………でもってオマエじゃ、オレ達には勝てねえ!!……………そうだろ、オニキス?」

「!!」

ブラックフォースの事実には戦慄し、弱気になっていたオニキスにアスラが聞いた。

『アスラ、オレは……………』

「オマエは誰が何と言おうと、オニキスだ。ブラックフォースなんて言う奴の一部なんかじゃねえ……………オレの血の繋がった方の母ちゃん友達で、オレの仲間!!……………そうだろう?」

『ッ……………!』

アスラの言葉に、オニキスは心を震わせる。

まるで怯えていた自分の方が馬鹿みたいだ。いつも一緒にいてくれてるアスラの方がよっぽどバカだと言うのに……………

『ゼゼゼ……………そうだなアスラ……………オレはオニキスだ。それ以外の何者でもねえ』

「おうそうだぜ!……………一緒にアイツをぶつ倒すぞ!!」

『ああ、行くぞ』

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………ムシケラが、粹がりよる」

事実には絶望しかけていたオニキスをアスラが即刻立ち直らせる。そんな2人の光景

を他の仲間達が微笑ましく見守る中……………

奇跡は起こる。

「ツ……………なんだ!？」

「私たちのデッキが…………?!？」

ロン、エール、トウエンテイの3人のデッキが直後に淡い光を放ちながら宙へと飛び交い、やがてアスラの元へと集う。

そしてアスラのデッキもまた、彼の元を離れ、彼の目の前に4つのデッキが集結した。

「な、ななななんだアアアア〜?!……………何事ですかアアアア〜?!」

『これは……………』

困惑する中、4つのデッキのカード達はバラバラになり、その内のデッキに必要な枚数である40枚程度が再結集。新たなデッキとなる。

残ったカードはそれぞれの持ち主の元へと帰還していく……………

アスラはその金色に光り輝く新たなデッキを前にして……………

「コレ……………まさかオレに使ってくれって言うてんのか？……………アイツに勝つために」
『そうかもしれないねえな』

そうだと察した。いや、それ以外に考えられない。

アスラはそのデツキを静かに手に取る。

「……………これもまた、ギアの一族であるアスラの持つ、絆の力……………なのかもしれないね」

不思議な現象を前にして、ゾンがそう分析する。今までアスラとロンを遠い場所から見守つて来た彼は、きつとこの分析は真実であると確信している。

「……………全くもつてどう言う理屈かは知らんが、勝てアスラ。勝つて世界を救つて来い。

その次は、オレと決着をつける、ライバルとして」

「トウエンティ……………おう、任せとけ!!」

トウエンティがアスラに告げる。

「大丈夫。アンタならやれる!!……あんな奴、さつきと倒して頂点王にでも何でもなりなさい!!……エックスの身分である私からの命令なんだから」

「おうよエール!!……オマエの分まで戦ってくるぜ、応援よろしくな!!」

エールがアスラに告げる。

「……アスラ」

「ロン……」

「フ……オマエはオレ達の代表だ。だが、頂点王になるのはこのオレだぞ。それを忘れるな」

「へっ……忘れるさ。だって頂点王になるのはオレだから!!……このバトルにも、オマエにもいつか勝ってやるぜ!!」

最後にロンがアスラに告げ、言葉を交わし合った。そしてアスラとオニキスは本当に本当の最後の敵、ブラックフォースへと体とデッキを向けて……

「つーことで勝負だクソデカ真っ黒ヤロー!!……このオレとオニキス、そしてみんなのデツキがコラボした、名付けて『コラボストーリーーズ』デツキでオマエをぶっ倒すツツ!!」

「いやネーミングセンスだっさ!!」

勝負を挑む。エールがアスラのセンスのなさに思わずツツコミを入れる。

「……………いいだろう。全ての力を揃えるため、どちらにせよ貴様は今ここで倒さなければならぬのだからな。このブラックフォースの逆鱗に触れた事を後悔させてやる」

「オマエこそ、オレ達に喧嘩売った事後悔すんなよ!!……行くぜオニキス!!」

『ああ、これで最後だ。気合入れてくぞ』

アスラはBパッドを展開し、コラボストーリーーズデツキをそこに装填。バトルの準備を行う。ブラックフォースもまた、黒の力で腕からBパッドに似た何かを展開し、そこに己のデツキを出現させた。

そして……………

……ゲートオープン、解放!!!

頂点王になるために努力を重ね続けて来た少年アスラと、人々を駆逐せんとオニキスの力を欲するブラックフォースによる最後の決戦が幕を開ける。

バトルの先行はアスラ。これまでの旅の中で強い絆で結ばれていた仲間達が見守る中、勇んでターンを進めて行く。

「ターン01」アスラ

「メインステップ!!……早速行くぜ。オレは仮面ライダーナイトを召喚!!」

1【仮面ライダーナイト】LV1(1)BP2000

様々な鏡像が重なり合い、アスラの場合にロンのライダースピリット、ナイトが出現する。本来であればライダースピリットは1人につき1種類しか使えないが、オニキスの黒の力を持つアスラはそれを無視できて……

「召喚時効果、使わせてもらおうぜロン!!」

「ああ、存分に使え、アスラ!!」

「デツキから1枚ドロロー!!……ターンエンド!!」

手札：5

場：【仮面ライダーナイト】LV1

バースト：【無】

『……………アスラ』

「ん?……………どうしたオニキス」

『奴の、ブラックフォースの中からウィルとか言う奴の力を感じる』

「ツ……………それってつまり」

『ああ、まだ助けられるかもしれないねえって事だ。オレは奴の命なんざどうだっていいが、お人好しのオマエは違うんだろ?』

オニキスにそう告げられ、アスラは「おうよ、ぜってえウィルの命を諦めたりはしねえ」と笑みを浮かべながら一言。

ウィルを救う事を決意し、ターンをエンド。ブラックフォースが巡って来たターンを進めて行く。

「ターン02」ブラックフォース

「メインステップ……ネクサス、旅団の摩天楼を2枚連続配置する」

ー【旅団の摩天楼】 L V 1

ー【旅団の摩天楼】 L V 1

「配置時効果により、デッキから1枚ずつドロウする」

ブラックフォースの背後に聳え立つのは不気味な摩天楼。これは彼がオブシディアだった時も使用していたため、デッキ自体はオブシディアンのモノがベースなのかわかる。

「さらにバーストをセット。ザ、ジ、ズ、ゾ………確かに未だウィルの残滓はオレの中を

泳いでいる。だが、決して助かる事はない。何せ貴様らの相手はこの最強の生命体ブラックフォースなのだから!!……ターンエンド」

手札：4

場：【旅団の摩天楼】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【有】

「んなモン、やってみねえとわかんねえだろ!!」

ブラックフォースに反発するように叫ぶアスラ。二度目のターンが巡って来る。

「ターン03」アスラ

「ドローステップ!!……ッ!？」

このターンのドローステップ。アスラは思わずそのドローカードに目を疑った。

「コレ……なんでデツキに」

『ゼゼゼ……どうやら単に複数のデツキのカードが混ざっただけじゃねえみてえだな。久し振りに使つてやるぞ、アスラ!!』

「おう、オレのメインステップ!!」

何故か知らぬ間にアスラのデツキに入っていたカード。それはアスラとオニキスの2人にとつても思い入れのあるカードであり……………

「第一の龍騎を召喚!!」

1 【仮面ライダー龍騎】 LV2 (2) BP4000

様々な鏡像が重なり合い、赤きライダースピリット、仮面ライダー龍騎が登場する。しかもただの龍騎ではなく、第一の龍騎。

これは、アスラが一番最初に召喚したライダースピリットである。異世界での進化の影響で消えてしまっていたのだが、何故か今になって復活を果たして……………

「第一の龍騎……懐かしいな。今思えばアレがアスラの始まりだったな」
「凄い、まるで私たちの記憶を辿るようなデッキね……」

ロンとエールがそう感想を呟く中、アスラは感動の気持ちを抑えつつ、久し振りに第一の龍騎の召喚時効果を発揮させていく。

「へへ、久し振りだな第一の龍騎!!……使わせてもらうぜ召喚時効果!!……デッキから3枚オーブンし、その中にある対象のカードを手札に加える!!……オレは『仮面ライダーリユウガ』と『ソードベント』のカードを手札に加えて、残りは破棄する」

その召喚時効果は謂わゆるサーチ効果。アスラは合計で2枚のカードを新たに加えた。

しかしそれは、ブラックフォースの伏せたバーストカードの発動条件でもあつて……

「召喚時効果発揮後のバースト、双翼乱舞。デッキから2枚ドロウする」

そのバーストカードは汎用性の高いバーストマジック。効果により彼もまた2枚のカードを新たに加える。

「最後にバーストをセットして、アタックステップ!!……行くぞ龍騎、ナイト!!」

アスラの指示を受け、第一の龍騎、ナイトの2体が走り出した。狙うは当然ブラックフォースのライフバリア。

前のターン、アタックもブロックもできないネクサスの配置のみを行ったブラックフォース。この攻撃はライフで受ける他なくて……………

「ライフで受ける」

〈ライフ5??4??3〉ブラックフォース

龍騎の炎を纏った飛び蹴りが、ナイトの剣先に紫を纏った斬撃が、それぞれ1つずつブラックフォースのライフバリアを破壊して行く。

「つしやあ!!……オレはこれでターンエンドだ!!」
『さあどう来る?』

手札：6

場：【仮面ライダー龍騎】LV2

【仮面ライダーナイト】LV1

バースト：【有】

最後のバトル、最初のアタックステップ。アスラはフルアタックでブラックフォースのライフを2つ破壊し、そのターンをエンドとする。

「ターン04」ブラックフォース

〈ライフ3?!5〉

ブラックフォースの開始のターン。膨大な黒の力により、彼のライフは瞬く間に復活して行く。

「ザ、ジ、ズ、ゾ……愚か者め、いくら攻撃してもオレのライフは5に戻る。オブシディアンの方に教えてやっつたろ」

「くっ……やっぱ回復すんのかよ」

『焦るなアスラ。ここまでは予想の範囲内だ、次の作戦を考える』

やはり大は小を兼ねるか。ブラックフォースもまたオブシディアン達が持っていたライフを回復する能力を有していた。

アスラが彼のライフに傷をつけるためには1ターン以内で全てのライフを砕き決着を着けるか、セイバーで破壊するしかない。

「メインステップ!!……先ずは小手調べと行こうか。タمامツシュをLV2で召喚。召喚時効果でボイドからコア2つを自身に追加」

1【タمامツシュ】LV2(6)BP5000

玉虫のような緑のスピリット、タمامツシュが登場。その効果によりブラックフォースはコアを2つ増やす。

そしてそのコアを活かし、手札からスピリットを呼ぶ。
それはオブシディアンの時から使用していたあのカードだ……

「歴戦の力を統べる孤高の魔王よ……今ここに顕現せよ!!……オーマジオウ!!」
「!!」

……………祝福の時!!

……………最高最善!!

……………最強王!!!

ー【仮面ライダーオーマジオウ】LV1(1)BP20000

地獄の門でも開かれたかのような獄炎が地を這って行く。その中心で確かな力の根源が姿を見せた。

その名は仮面ライダーオーマジオウ。強力無比な力を持つ、仮面ライダーオーマジオウの最強の姿だ。

「アレがオーマジオウか」

その存在にいち早く反応を示したのは他でもないトウエンティ。自分がライダースピリットを集めさせられていた理由の一つがコレの復活だったのだから、やはりどこか思う所があるのだろう。

「召喚時効果、コスト20以下のスピリット1体を破壊する!!……仮面ライダーナイト

!!」

!!」

オーマジオウは登場するなりアスラの場にいるナイトへと視線を向ける。そしてその瞬間、ナイトの足元から黒い稲妻が迸り、それを飲み込んだ。

「アタックステップ。オーマジオウ、力の差を思い知らせて来るのだ」

ブラックフォースのアタックステップ。オーマジオウが指示を聞き入れアスラの元へと走り出す。唯一のスピリットである龍騎が疲労状態につきブロック不可であるた

め、ライフで受ける以外の選択肢はない。

「……………ライフで受ける!!」

「ならばダブルシンボルを喰らうがいい!!」

「ぐっ……………ぐあああああ!!?!」

へライフ5??3へアスラ

オーマジオウの重たい拳の一撃がアスラのライフバリアを一気に2つ砕く。オブシディアンやウィルの時と比べようがないダメージがアスラとオニキスを襲うが……………

単純な肉体の痛みだけでは終わらなくて……………

「ツ……………!!?!」

『な、なんだ。この感覚!?!……………まるで魂が抜けようとしているような……………』

そう。肉体の痛みの後、2人が味わったのは幽体離脱でも始まったのではないかと錯

覚してしまいう程の不思議な感覚。

これもまた当然、全ての元凶であるブラックフォースによるものであり……………

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………言ったはずだ、オニキスは返して貰うと。ライフが減るたびにオニキスは1つ1つこのオレの元に近づいていくのだ」

「!!」

それは、このバトルの中でオニキスの力を得て、完全体になろうとしているブラックフォースの巧妙な作戦。

世界の命運を賭けたバトルスピリッツはまだ始まったばかり……………

72コア「オニキス消滅、絶望操りしブラックフォース」

遂に始まった本当に最後のバトルスピリッツ……………

世界の命運を賭けたこの戦いに挑むのは、皆のデツキを束ねたアスラ。そんな彼の相手は黒の力の根源、究極の生命体ブラックフォース……………

試合はまだ序盤。拮抗していた勝負であったが、その最中、ブラックフォースの攻撃がアスラにヒットするたびに、オニキスがブラックフォースへの吸収に近づく事が発覚して……………

「くっ……………ライフ減少によりバースト発動、エクステインクションウオール！」

肉体から魂ごと抜かれるような痛みを感じていたアスラ。だがこの程度の痛み如きで臆するわけにはいかない。勇んだ様子で立ち上がると、伏せていたバーストカードを発動させていく。

「この効果で減った分のライフを取り戻す！」

〈ライフ3??5〉アスラ

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………ライフが回復してもその痛みが回復するわけじゃない。無駄な努力はするな、早くオニキスを渡せ、そうしたらお前は楽になる」

「うるせえぞクソデカ真つ黒ヤロー!!……………無駄な努力なんてねえ、その事はオレだけじゃなくて、みんなで証明した事だ」

「……………ターンエンド」

手札：4

場：【仮面ライダーオーマジオウ】 L V 1

【タマムツシユ】 L V 1

【旅団の摩天楼】 L V 1

【旅団の摩天楼】 L V 1

バースト：【無】

2体のスピリットを残し、そのターンをエンドとするブラックフォース。エール、ロン、トウエンティ、ゾン、4人の仲間たちに見守られながら、アスラはターンを開始していく。

「ターン05」アスラ

「メインステップ!!……シャムシーザーを召喚、でもってオレ自身を仮面ライダーセイバーに変身!!」

ー【シャムシーザー】LV1(1)BP2000

ー【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

赤いトカゲのスピリットが召喚されると共に、アスラは自身の姿を、赤きライダースピリット、仮面ライダーセイバーへと変身させる。

その後の神託も発揮され、3枚のカードがデッキからトラッシュに落ちる。今回の対象カードは2枚のため、コアが2つ追加された。

「つしやあ!!……ここで行くぜオニキス!!」

『ゼゼ……ああ、アスラ!!……そのカードを使い!!』

「おう!!……黒き炎、龍の牙で頂点を目指す!!……仮面ライダーリュウガをLV1で召喚ツツ!!」

┆【仮面ライダーリュウガ】LV1(1)BP6000

様々な鏡像が重なり合い、黒い龍騎、仮面ライダーリュウガがこの場へと出現する。
このカードもまたセイバーと同じく、アスラとオニキスを繋ぐ1枚。

「召喚時効果!!……相手スピリット全てからコアを2つずつリザーブに!!……タマムツシユとオーマジオウには消滅してもらおうぜ!!」

「!!」

「ブラックドラゴンブレスツツ!!」

┆【仮面ライダーオーマジオウ】(1??0)消滅

┆【タマムツシユ】(1??0)消滅

「よう!!」

リュウガの背後に黒龍が現れ、鳥栖を巻く。その黒龍は口内より黒炎を放出し、ブラックフォースのオーマジオウとタマムツシユを焼き払ってみせた。

敵の強大なスピリットの消滅の成功に、仲間達の誰よりも先に、エールが一人ガッツポーズを見せる。

「さらに、この効果で消滅したスピリットの数だけデッキからカードをドロウする!!
……消滅したスピリットは2体、よってデッキから2枚のカードをドロウ!!」

敵を倒すとドロウができるリュウガの効果。

アスラは勢いよくカードを引き、それを視認するなり、また口角を上げた。

『ゼゼ……アスラ、リュウガと龍騎で攻撃しても奴のライフはまともに減らせない。ここは様子を見るぞ』

「おう、わかってるぜ!!……オレはバーストをセットして、ターンエンドだ」

手札：5

場：【シヤムシーザー】 LV1

【仮面ライダー龍騎】 LV1

【仮面ライダーリュウガ】 LV1

【変身!!仮面ライダーセイバー】 LV1 (2)

バースト：【有】

ブラックフォースのスピリットはこれで全滅。

しかし龍騎とリュウガでは彼のライフを破壊はできない。

それならばとアスラは手を打つようにバーストをセット、ターンをブラックフォースへと返した。

「ターン06」ブラックフォース

「ザ、ジ、ズ、ゾ………メインステップ、3枚目となる旅団の摩天楼を配置、デッキから1枚ドロ―し、さらにヤン・オーガをLV3で召喚」

ー【旅団の摩天楼】LV1

ー【ヤン・オーガ】LV3(4)BP5000

3枚目となる旅団の摩天楼、さらに蜻蛉人間とも呼べる姿をしたスピリット、ヤン・オーガが召喚される。

さらに、ブラックフォースはアスラとの力の差を見せつけるべく、今一度手札を切り……

「そして、2枚目、3枚目となるオーマジオウを連続召喚!!」

「なに!?!」

『複数のオーマジオウだと!?!』

ー【オーマジオウ】LV1(1)BP20000

ー【オーマジオウ】LV1(1)BP20000

最強最善、最強王のコールの元、最凶で最悪の魔王、オーマジオウが再びこの場を
姿を見せる。しかも2体……

「それぞれの召喚時効果、龍騎とリユウガを破壊する……!!」

「くっ……!!」

2体のオーマジオウの出現により、龍騎とリユウガが体内から破裂、無惨にも散って行ってしまう……………

が、アスラもただでは転ばない。このタイミングで伏せていたバーストカードを発動させる。

「でも甘いぜ、破壊後のバーストを発動!!……仮面ライダーセイバードラゴニックナイトト!!」

「……………!!」

「効果により、先ずは自身を召喚。鋼を纏いしその衣、熱き意志で悪を穿つ!!……セイバードラゴニックナイト、LV1で召喚だ!!」

1【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト】LV1(1)BP6000

地を熱するように炎の球体が出現。それらは拡散、消滅していき、その中のアスラのエース、ドラゴニックナイトが新たに姿を見せる。

「バースト効果はまだ続くぜ、手札にあるソードブレイヴ……オレは第4の剣、暗黒の魔剣ダーク・ブレードXを召喚し、ドラゴニックナイトと合体!!」

Ⅰ【仮面ライダーセイバードラゴニックナイト＋暗黒の魔剣ダーク・ブレードX】L
V1(1) BP11000

地上に降り注ぎ、ドラゴニックナイトの新たな力となった剣。その名はダーク・ブレードX。ここに来て黒の力でまた新しいカードを生成したようだ。

「さらにそうした時、BP12000以下のスピリット、ヤン・オーガを破壊し、ダーク・ブレードXの召喚時効果でネクサスカード、旅団の摩天楼を1枚破壊して2枚ドロースる!!」

「!」

「いけ……ドラゴニックナイトツッ!!」

手に強く握る暗黒の魔剣ダーク・ブレードXを振り、強烈な飛ぶ斬撃を発生させるドラゴニックナイト。それはたちまちブラックフォースのヤン・オーガと旅団の摩天楼を斬り裂いた。

「…………ヤン・オーガ破壊時効果。ボイドからコア3つをリザーブに追加する」

オブシディアンの中から使用していたヤン・オーガの効果により、ブラックフォースのリザーブにはコアが3つも追加される。

さらにそのコアを使い、彼はまだ動き続ける。

「マジックソウルドロワー、コストにソウルコアを支払う事で、デッキから3枚ドロワー、さらにマジック、双翼乱舞を2枚使用し、デッキから合計4枚ドロワー」

「ツ…………一気に手札が回復した」

ドロワーマジックの連打。これによりブラックフォースの手札は2枚から6枚へと回復する。

その直後、彼はまた薄気味悪く、不気味な声色で「アタックステップ……」と静かに宣言して……………

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………奴のスピリットを蹴散らして来い、オーマジオウ」
「!!」

2体のオーマジオウが動き出す。ダブルシンボルのため、この攻撃を全てライフで受けて仕舞えば、5個あるライフでも一瞬で1となってしまう。

それにブラックフォースの攻撃を何度も受けて仕舞えば、オニキスは奴に吸収されてしまう。その事を知って、アスラがこれをライフで受けるわけがない……………

「ブロック頼む、シャムシーザー、ドラゴニックナイト……………!!」

BPでは遥かに劣る2体のスピリットをブロックカーに選択。先ずはシャムシーザーがオーマジオウの1体に向かっていくが、瞬時に拳を叩きつけられあっさり爆散。

ドラゴニックナイトもまた別のオーマジオウに向かって行くが……………

「ギアの一族が持つとされる「絆の力」……………それとオレの力の一端が混ざって誕生したライダースピリット!!……………確かに強かった。しかし、全盛期以上の力を手にした今のオレにとっては紙切れも同然!!」

「くっ……………」

接近し、ダーク・ブレードXを振るうドラゴニックナイト。しかしオーマジオウは片手でそれを受け止め、ダーク・ブレードXを奪い上げ、地に投げると、拳に炎を溜め込みドラゴニックナイトへと叩き込む。

それにドラゴニックナイトは腹部を貫かれ、力尽きて爆散した。

「ターンエンド。来いよ愚かなる人間、愚かな力の一部よ……………オマエ達が今まで得て来たモノなど、全て無意味であると言う事を証明してくれる!!」

手札：6

場：【仮面ライダーオーマジオウ】LV1

【仮面ライダーオーマジオウ】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【無】

「んなもん、証明されてたまるかコノヤロオオオ!!」

オーマジオウの連続召喚により力の差を見せつけるブラックフォース。しかもそれでさえまだまだ序の口だと言わんばかりのセリフも吐く。

だがそれでもアスラは勇敢に立ち向かう。

「ターン07」アスラ

「メインステップ!!……先ずはバーストをセットして、転醒ネクサスカード、赤の世界を配置!!」

「!」

ー【赤の世界】LVI

ターン開始早々、アスラの背後に龍の頭部を模した巨大な山々が出現。これこそが龍

唸る赤の世界……………

「配置時効果、相手の最もBPの低いスピリット1体を破壊する!!」

「なに」

「オマエの場にはオーマジオウ2体のみ、1体を破壊だアアアツ!!」

アスラの叫びに合わせ、赤の世界に蔓延る龍の山が大噴火。炎纏う落石が、ブラックフォースの場にあるオーマジオウ1体に直撃し、爆発四散させる。

「でもって、次はオマエだ。行くぞトウエンティ!!」

「ああ、共に戦うぞアスラ!!」

ライダーを統べる時の王者……………

仮面ライダージオウ!!

「LV2で召喚だ!!」

1 【仮面ライダージオウ】LV2(2)BP7000

アスラとトウエンティが声を重ね合わせ、通常の仮面ライダージオウを召喚する。

完全に力を取り戻した最強形態のオーマジオウと、その抜け殻とも呼ばれる通常のジオウがこうしてバトルの中で対峙するのはいつたいなんの因果か……………

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………そうか、結果としてその抜け殻はカードとして残ったんだっとな」

「ああ、だがそれがアスラの勝利のための切札となる。行けアスラ!!」

「おう!!……………オレは、ジオウにダーク・ブレードXを合体!!」

00 1 【仮面ライダージオウ+暗黒の魔剣ダーク・ブレードX】LV2(2)BP1200

ドラゴニックナイトの置き土産である暗黒の魔剣を握るジオウ。そしてアスラは直後にアタックステップを宣言して……………

「アタックステップ、仮面ライダージオウでアタックだ!!」

アタックしたこの瞬間、仮面ライダージオウには発揮できる効果がある。

「アタック時効果で1枚ドロ!!……さらにジオウの効果、フラッシュタイミングの順番を入れ替える!!」

「!」

「つまり、オレが先にフラッシュ効果を使えるって事だ、フラッシュチェンジ!!……仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン!!」

「……ほう、又してもセイバーか」

「効果により、アタック中のジオウとコイツを入れ替える!!……この時、ジオウの効果でトラッシュのコア全てを自身に置く……」

相反する2つの炎が1つになる時、語り継がれし伝説が咆哮を上げる!!

来い、仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン!!

1【仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン+暗黒の魔剣ダーク・ブレードX】LV3(6)BP21000

赤い炎と青白い炎が龍へと姿を変え、ジオウに向かって飛び行き、それと結合して行く……………

そして新たに爆誕したのはセイバー最強の姿であるエレメンタルプリミティブドラゴン。これこそがアスラの真のエースカードと呼ぶに相応しい最強のライダースピリット……………

ジオウとのコンビネーションはまるでアスラとトウエンティの絆を表したかのよう。

「さらにフラッシュマジック、火炎十字斬!!」

「!!」

「効果により、シンボル2つ以下のスピリット、2体目のオーマジオウを破壊だアアア!!」

暗黒の魔剣に赤い炎を滾らせると、オーマジオウへと急接近、その肉体を十字に斬りつけるエレメンタルプリミティブドラゴン。

ライダースピリットを続べると言われている仮面ライダージオウの最終最強形態と言われているオーマジオウでも、流星にこの一撃は応えたか、片膝をつき、静かに消え

て行った。

「成る程、オーマジオウを軽く蹴散らすか。どうやら以前戦った時よりもさらに磨きをかけているみたいだな」

「そんなモン当たり前だ!!」

「……………その攻撃、ライフで受けよう……………ぐっ!？」

へライフ5??3へブラックフォース

オーマジオウを葬ったエレメンタルプリミティブドラゴン。その燃え盛る暗黒の魔剣で、今度はブラックフォースのライフバリアを破壊する。

「バトル終了時、赤の世界の効果でさらに1ダメージを与える!!」

「……………」

へライフ3??2へブラックフォース

エレメンタルプリミティブドラゴンの攻撃に合わせ、再び赤の世界が大噴火。その噴煙はブラックフォースのライフバリアをまたも破壊する。

「よし、エレメンタルプリミティブドラゴンはチェンジで回復状態、もう一度アタックできざるわ……!」

「決めて来いアスラ!!」

勝利が近づいて来たこの瞬間、エールとトウエンティが声を荒げる。

しかし、それを遮るかのように、ブラックフォースは手札から1枚のカードを引き抜き………

「決めさせないさ。ライフが減った事で、手札から絶甲氷盾の効果を発揮!!」

「!?!」

「これにより、貴様らのアタックステップは終了となる」

放たれたのは誰もが使用する汎用マジックカード、絶甲氷盾。その効果でアスラとオニキスのアタックステップは強制的に終了となり、このターン中にそれ以上のアタック

は行えなくなる。

「……………オレはこれで、ターンエンドだ」

手札：5

場：〔仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン＋暗黒の魔剣ダーク・ブレードX〕LV3

〔変身!!仮面ライダーセイバー〕LV2 (4)

〔赤の世界〕LV1

バースト：〔有〕

ターンを譲らざるを得なくなったアスラ。エレメンタルプリミティブドラゴンがブロッカーとして残る中、大人しくこのターンはエンドとする。

次は一見不利な状況下となったブラックフォースのターンだが……………

「ターン08」ブラックフォース

〈ライフ2?!3〉

ターンの始まり、黒属性の力をふんだんに所持するブラックフォースはこのタイミングでライフが5に回復する。

しかし、その回復量は少なく、本来であれば3回復するはずが、今回は1のみとなった。それもこれも、エレメンタルプリミティブドラゴンの力によるモノだ。

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………赤の世界によるダメージだけ回復したか。まあいい」

「よし、セイバーの攻撃は今のアイツにも有効みたいだな」

回復しないライフバリアを見て、ロンがそう呟く。

だが、自分への特効を持つスピリットが発覚したと言うのに、ブラックフォースはそれさえも想定内だと言わんばかりの余裕を見せている。

そしてその理由は、彼の手札にあり……………

「メインステップ……………赤のネクサスカード、永遠なる神都を配置」

「!!」

Ⅰ【永遠なる神都】LVⅠ

ブラックフォースの背後に配置されたのは、何の素材かもわからない、無機質な白い塔が聳え立つ都。

この効果が、アスラとオニキスを苦しめる……………

「永遠なる神都の配置時効果、トラッシュからコスト8以上の赤のスピリットカードを全て手札に戻す」

「なに……………!？」

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………オレはこの効果で、6色スピリット、オーマジオウのカード3枚全てを手札に戻す!!……………そしてそのまま3体を連続召喚!!」

Ⅰ【オーマジオウ】LV2(3)BP30000
 Ⅰ【オーマジオウ】LV2(3)BP30000
 Ⅰ【オーマジオウ】LV2(3)BP30000

地表から溢れ出る煉獄のマグマと共に、アスラが倒して行つた3体のオーマジオウが

復活を果たす。

「そ、そんな……オーマジオウ3体が復活……!?!」

「しかも今度はLV2、BPは30000か」

エール、ロンがそう言葉をとす。

オーマジオウ程のスピリットが3体並んだこのフィールドは、最早絶望の始まりとも言える光景である。

「3体分の召喚時効果で、エレメンタルプリミティブドラゴンを合体しているブレイヴ事破壊する!!」

「ぐっ……クソッ!!」

3体のオーマジオウは両手を天に掲げ、その先に紫電纏いし緑の竜巻を形成。それをエレメンタルプリミティブドラゴンへと投げ、直撃させる。

エレメンタルプリミティブドラゴンはその手に握る暗黒の魔剣ごと塵と化し、この場から姿を消してしまう………

「だけど召喚時効果発揮後のバーストはもらうぜ……………ネオコールオブロスト。デツキから2枚ドロウして、その後コストを支払いメイン効果も発揮!!……………オレはトラッシュからシャムシーザーを手札に戻す」

苦し紛れのバーストカード。手札が大きく増えるものの、今一番必要とされるスピリットは何も出現しない。

「その程度のバーストでは戦線維持にもならんぞ、ソウルコアを支払いソウルドロ……………デツキから3枚引く」

マジックにより手札をさらに補うブラックフォース。直後にアタックステップを宣言して……………

「アタックステップ、オーマジオウでアタック!!……………ダブルシンボル!!」
「!!」

撃でライフが1つでも減れば、オニキスの力も再び手中に収まり、無敵のオレが爆誕する!!」

ブラックフォースが欲望のままにオーマジオウのカードに手を掛けようとするが、直後にアスラムも「させるかよオオオー!!」と叫びながら手札のカードを切る……………

「オレもマジック、絶甲氷盾だ!!」

「!!」

「これでこのターンのオマエのアタックステップは終了となる!!」

咄嗟に放たれた汎用マジック絶甲氷盾によつて事なきを得る。

「……………まだ足掻けるか。いいだろう、もう少し待っておこうか……………ターンエンド」

手札：7

場：【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【仮面ライダーオーマジオウ】LV2

【永遠なる神都】 L V I

【旅団の摩天楼】 L V I

【旅団の摩天楼】 L V I

バースト：【無】

自分の優勢は変わらない事を理解しているブラックフォースは未だ余裕の笑みを浮かべ、そのターンをエンドとした。

「ターン09」アスラ

「メインステップ!!」

『アスラ、次のターンに持ち越せば、オレが奴に吸収されてオマエが敗北すると言う最悪の展開が待ち受けるに違いねえ……このターンで確実に決めるぞ』

「おう!!……先ずはシャムシーザー3体を連続召喚だ!!」

ー【シャムシーザー】 L V I (1) B P 2 0 0 0

ー【シャムシーザー】 L V I (1) B P 2 0 0 0

1 「シャムシーザー」 L V 1 (1) B P 2 0 0 0

回収したカードと合わせて合計3体のシャムシーザーがアスラの場に出現。白属性のシンボルとしても扱うその効果でアスラの展開を手助けする……………

「続けて、もう一度仮面ライダージオウを召喚だ!!」

1 「仮面ライダージオウ」 L V 1 (1) B P 5 0 0 0

チェンジの効果で手札に戻っていたトウエンティの仮面ライダージオウが再びシャムシーザーと共にアスラの場に召喚される。

そしてアスラはさらに手札にあるカードに手を掛ける……………
それは自分と今までずっと一緒に旅をして来た仲間のカード。

「つしやあ!!……………次はエールだ、行くぞ!!」

「ええ……………待ってたわ!!」

右に友情!!

左に勇氣!!

2つの勇姿重ね合う時、すべての闇穿つ英雄となる!!

現れる、究極を超えるデジタルスピリット、オメガモンツツ!!

┆【オメガモン】LV3(3)BP21000

「不足コストはシャムシーザー1体から確保だ、よつて消滅」

黒を塗り潰す勢いで眩い光の粒子が次々と生成されていく。そしてそれらは結合していき、新たな命を紡ぎ出す……………

こうして爆誕したのはエールがオメガ家のカードを進化させて生み出したカード、オメガモン。現存するデジタルスピリットの中でもトップクラスの力を誇る。

「オメガモンを使って負けたら承知しないわよアスラ!!」

「おう!!……………必ず勝つぜ!!」

「オメガモン……………だが、そのBPは21000。我がオーマジオウ達には遠く及ばん」

オメガモンBP21000に対し、ブラックフォースのオーマジオウのBPは3000。確かに遠く及ばない。

しかし、この状況を覆せる一手がアスラの手にはある。

「及ばせてやるぜ!!……手札からマジックカード、ソードベント!!……これを2枚発揮
!!」

「不足コストはシャムシーザー2体から確保、よって消滅」

2体分のシャムシーザーが消滅するものの、アスラは自身が何度も使用して来たマジックカード、ソードベントを発揮させる。

「効果により、スピリット1体のBPをプラス5000……これを2回分、オメガモンのBPは10000上がり、オーマジオウを超えた、BP31000となる!!」

「……なに?」

ー【オメガモン】BP21000??26000??31000

一気に跳ね上がるオメガモンのBP。フィールドにはそれとジオウしか残っていないものの、突破するには十分すぎる盤面が完成した……………

アスラは世界を救うべく、この仲間達のスピリットと共に駆け抜ける。

「最後にまたバーストをセットして、アタックステップ!!……………行くぞ、オメガモンツ!!」

早速オメガモンでアタック宣言をするアスラ。

この時、ソウルコアが使えない身体も発揮できる効果が2つ発揮される。

「オメガモンのアタック時効果、このスピリットのBP以下のスピリット1体を破壊し、ターンに一度だけ回復する!!」

「……………!!」

「オーマジオウ1体を破壊して、回復だ!!……………ガルルキャノン!!」

ー【オメガモン】（疲労??回復）

右腕のメタルガルルモンを模した巨大な砲手から豪快に極太の弾丸を発射。オーマジオウ1体を蹴散らし、爆散させる。

「……2体目のオーマジオウでブロック」

「BPはこつちが上だアアアー!!……天下の豪剣、グレイソードッ!!」

今度はウオーグレイモンを模した左腕から剣を展開するオメガモン。その無双の一振りで2体目のオーマジオウもすぐさま斬り裂き、撃破した。

「回復したオメガモンで二度目のアタック!!……効果で最後のオーマジオウを破壊!!」
「……………」

止まらないオメガモンの猛攻。ガルルキャノンとグレイソード、この2つの武装で最後のオーマジオウさえも破壊して見せる。

そしてこの攻撃は、ライフを2つ破壊できるダブルシンボル……………

「……………ライフで受ける」

〈ライフ3??1〉ブラックフォース

オメガモンのグレイソードによる一撃が、一気に2つのライフバリアを破壊した。

これでブラックフォースのライフはいよいよ残り1つ。アスラはトドメを刺すべく、トウエンティのジオウのカードに手を伸ばすが……………

それが届く前に、ブラックフォースが手札から又してもあのカードを使用して……………

「ライフが減った事により、手札から絶甲氷盾発揮!!」

「なッ……………!?!」

「これによりオマエのアタックステップは終了となる」

2枚目の絶甲氷盾。アスラのアタックステップがまた強制的に終了、エンドステップへと移行してしまう。

ここまで来てトドメを刺さなかった歯痒さ、次のターンを渡さなければいけない絶望

感。それらが同時にアスラへと襲い掛かってくる……………

「……………」

『何ボサつとしてやがる、切り替えろ』

「ツ…………おう、そうだな。オレはこれでターンエンドだ」

手札：0

場：【オメガモン】LV3

【仮面ライダージオウ】LV1

【赤の世界】LV1

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV2 (4)

バースト：【有】

オニキスの言葉で我に返り、アスラはこのターンをエンドとする。

『オマエ、今一瞬諦めかけたろ』

「ツ!!…………何言つてんだ、そんなわけねえだろ!」

『じゃなんでさつき手が止まった?』

「そ、それは……………」

オニキスがアスラに聞いた。アスラは全力でそれを否定する。確かに、諦めたわけではない。

ただ、恐れているのだ。オニキスを失ってしまうのではないかと……………だからさつき、絶甲氷盾を打たれた瞬間、手が止まった。

『……………もし、オレが消える事に気を使ってんのなら、考え直せ。そんな事一々気にしてたら勝てねえぞ、どうせオレの命をなんて安いもんだ』

『!!』

アスラの困ったような表情を見て全てを察したオニキスが、彼にそう告げた。まるで自分の命など捧げても構わないとでも言いたげな言葉に、アスラは憤慨して……………

「何言ってるんだコノヤロー!!……………オマエはオレの仲間だ、オレはもう誰一人失ったりしたくねえんだよ!!」

『……………』

黙るオニキス。そこにブラックフォースが「痴話喧嘩は済んだか？」と一声かけると、巡って来た己のターンを開始していく……………

「ターン10」ブラックフォース

「この瞬間、オレのライフは復活する」

「ライフ1??3」ブラックフォース

ターン開始の直後、ブラックフォースのライフは多量の黒属性により復活を果たす。

「メインステップ!!……………2枚目の永遠なる神都を配置!!」

「ツ……………それも2枚持つてんのかよ」

「【永遠なる神都】LV1

「配置時効果、トラッシュにあるオーマジオウ3枚を復活。そして再召喚!!」

┆【オーマジオウ】LV1(1) BP20000
 ┆【オーマジオウ】LV1(1) BP20000
 ┆【オーマジオウ】LV1(1) BP20000

ようやく3体倒せたと言うのに、又しても復活してしまう3体のオーマジオウ。当然ながらも一度召喚時効果も発揮されて……………

「召喚時効果でオメガモンと抜け殻を破壊する!!」

3体のオーマジオウが鋭い眼光でジオウとオメガモンを睨みつけると、2体はたちまち石化、やがて粉塵となり、この場から姿を消してしまう。

「ぐっ……召喚時効果発揮後のバースト、双翼乱舞。バースト効果で2枚ドロ、その後のメイン効果でもう一度2枚ドロだ」

アスラもまた召喚時効果のバーストを伏せていた。汎用性の高いバーストマジック、双翼乱舞で合計4枚ドロ。

しかし、エールとトウエンテイ、絆を紡いできた2人のスピリットを失ったのはかなりショックが大きいようで……………

「トウエンテイ、エール……………ごめん!!」

「気にするなアスラ」

「それより前を向きなさい、アンタは頂点王になるんでしょう?」

謝るアスラを宥める2人。

そうだ、この程度で後ろなんて向いていられない……………

だがそう思った直後に、ブラックフォースは手札から更なる一手を繰り出す。それは最早人の想像などで測れるような代物ではなくて……………

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………今度こそ絶望させてやる、来い……………」

エヴァンゲリオンスピリット……………

エヴァンゲリオン第13号機!!

「!？」

口上と共に張り裂ける空間。

そこから聞こえて来る地獄の化身のような雄叫び。

やがてその雄叫びの主人は空間を飛び越え、地上へと降り立つのは、紫の装甲に4本腕の巨大なスピリット、エヴァンゲリオン。

ー【エヴァンゲリオン第13号機】LV3（5）BP13000

「え、エヴァンゲリオン!?!……なんなんだコイツ」

「ザ、ジ、ズ、ゾ……エヴァンゲリオンスピリット……ライダースピリット、デジタルスピリット、モビルスピリットの世界三大スピリットをも陵駕する全てを超越した存在」

ここにきて世界三大スピリットである3種のスピリット達さえも超越した存在を召

喚するブラックフォース。

これはおそらく、彼が自身の黒の力で創り出したカードなのだろう。

「さらにブレイヴ、ロンギヌスの槍!!……エヴァンゲリオン第13号機に合体」

「!!」

「【エヴァンゲリオン第13号機+ロンギヌスの槍】LV3（5）BP20000

天空より、歪な形をした赤紫色の槍が地に突き刺さる。エヴァンゲリオン第13号機はそれを4本ある腕のうち右の2本でそれを引き抜き、合体スピリットとなる。

「アタックステップ、エヴァンゲリオン第13号機でアタック!!……効果で貴様のフィールド、リザーブのコア2つをトラッシュに!!」

「ツ……コアが」

「まだ終わらないぞ。さらにLV3の効果、このスピリットと合体しているブレイヴの数まで貴様の手札1枚を破棄する」

「!!」

アタックステップに突入し、眼光を強く解き放つエヴァンゲリオン第13号機。瞬間、Bパッド上のリザーブにあるアスラのコアが2つ、使用不可のトラッシュへと移動、手札が1枚黒ずんで消滅する。

「これで貴様のフィールドにスピリットは0。使えるコアもない。次いでにエヴァンゲリオン第13号機は合体によりトリプルシンボル……ライフを3つ破壊する」

「ッ……………!!」

「アスラのライフは残り3つ……………これを受けたらお終いだ」

そう言ったのはロンの父親であるゾン。

当然ながらアスラとてそれを理解している。コアがなくても使用できるカードを手探りで使っていくしかない……………

「オレのライフが一度に3つ以上減少する時、手札からフェイタルダメージコントロールの効果発揮!!」

「!!」

「このカードをノーコストで発揮する。その効果は、このターンの間、自分のライフが減る時、2以上のダメージは1となる!!」

反射的に使ったのは白マジック『フェイタルダメージコントロール』……………

しかし、これがあれば確かにエヴァンゲリオンの攻撃は防げるものの、完全にダメージを抑えられるわけではなくて……………

「ザ、ジ、ズ、ゾ……………言っただろ?……………後1つでも減らされればオニキスは我が手に収まると」

「くっ……………オニキス」

『……………』

「喰らえッ!!」

喰らえばオニキスを失うこの状況、最早アスラにこれを回避する手段はない。途端にオニキスの方へと振り向くが、当の本人は無言のまま、ただその攻撃を待つのみ……………

そして次の瞬間、エヴァンゲリオン第13号機が手に持つロンギヌスの槍を振り回

し、無慈悲にもアスラのライフバリアーつを貫いた……………

アスラは激痛が伴うと思ひ、咄嗟に手を覆い被せてガードの構えを取るが……………

「ツ……………オニキス!？」

『……………ガツ……………ハ……………ツ』

全然痛みを感じなかった。

それもそのはず、あの一瞬のうちに、オニキスが自分よりも前方に立って、そのダメージを全て肩代わりしていたのだから……………

「オニキスツ!!」

『……………アスラ、手札のカード……………ぐつ……………手札のカードを使え』

「!!」

『早く!!』

「……………オレは手札から2枚目の絶甲氷盾!!……………このターンのアタックステップを終了する!!」

体中に蓄積されたダメージを振り切り、アスラに指示を送るオニキス。アスラは言われるがままにそれを使用。

なんとかこのターンのブラックフォースの攻撃を凌ぎ切った。だがオニキスはもう限界で……………

「オニキス、オマエ、なんだってそんな無茶を……………」

『ゼゼ……………最初はな、オブシディアンや他のブラックフォースに復讐できればなんでも良かった。それがキョーラのためになると思っていたんだ』

「？」

『だけどオマエとバトルして気付かされた。そんなのはただの自己満足、虚しくなるだけだと……………アスラ、オマエはオレをブラックフォースから人間にしてくれたんだ』
「な、何言ってるんだよ。そんな今生の別れみたいな……………ッ！」

次の瞬間、ブラックフォースから蓄積されたダメージが元となり、オニキスは足元から段々と黒い粒子へと変化していく……………

それは、間もなくアスラとの別れが近づいて来た、何よりの証拠……………

「おい、オニクスッ!!」

『このバトル、勝てアスラ。オレみたいなバケモノまでダチ公にした奴だ………不可能もきつと、可能にできる………』

「オニクス………オニクスウウウウツツ!!」

アスラの叫びも虚しく、オニクスの全身が黒い光に変換されると、それらは全て高笑いしているブラックフォースへと吸収される。

大昔の怪物、ブラックフォースは遂に分裂したその力を、分裂した時以上の力となって全て取り戻したのだ………

そしてそれは、絶望の始まり………

ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ………

「取り戻した。遂に取り戻したぞオオオオオオ!!!………これが、完全体を超えた、真のオレの力だ!!」

「………」

オニキスを失ってしまった悲しさから立ち直れないアスラ。唾然としながらブラックフォースの方へと首を向ける。

その目の前にいる本物のバケモノの肉体はさらに筋骨隆々となり、肩には新たに外骨格のような棘が生えていた。

「オマエには感謝してるぞ、ギアの一族の生き残り。オマエはこうしてオニキスを成長させてくれた、そのお陰でオレは全盛期以上の力を手にした」

「……………」

「悲しくて、悔しくて、苦しいか??……………それもそうだよなあ、なんてったってこれまで共に戦ってきた仲間が、このオレの一部で、こうしてまたオレに吸収されたんだから」

今思えば、オニキスが復讐心を抱いたのも、全てブラックフォースの計画の一部だったのかも知らない。

最も弱いオニキスを成長させるべく、わざと恨みを買うような行為をしたのかも知れない。その正解は、ブラックフォースのみぞ知る。

「アスラ……………」

エールが思わずアスラに駆け寄ろうとするも、ロンが静かに彼女の肩に手を置き、制止させる。

ライバルで、幼馴染でもある彼は、今のこの状況は、アスラ自身の問題で、アスラ自身で解決せねばならない問題であることを、なんとなくだが、理解しているのだ。

「さあ絶望しろ絶望しろ絶望しろ!!!……………オマエのその顔を見るために、何年も生かしていたのだ、忌々しいギアの一族の末裔!!」

「……………」

敵のフィールドはオーマジオウ3体に未知のエヴァンゲリオンスピリット1体、対するアスラはネクサスのみ、手札も僅か1枚。

誰がどう見ても、覆しようもない絶望的な差がそこにはある。

「……………オニキス」

この時、アスラはオニキスとの思い出を思い出していた。

単なるバケモノだと思っていた最初の出会い。

訳有り度ブラックフォースと戦っていることを知った異世界での戦い。
和解して、とも戦っていた現在。

そして、最後に告げられた言葉……………

「……………アイツは最後、オレに『勝て』って言った。なら、約束は守ってやらねえとな」
「??」

「クソデカ真つ黒ヤロー……………オレは絶望しねえし、諦めねえぞ!!……………勝って絶対、みんなも、オニキスも救ってみせる!!」

アスラはオニキスを失った尚も諦めたりはしない。希望を見出すべく、巡って来た己のターンを開始していく。

その様子を見て、他の仲間たちは微笑み、ライバルであるロンは「それでこそアスラだ」と呟いた。

「……………愚かな。ソウルコアも、オニキスも失って尚たてつくか」

手札：5

場：【エヴァンゲリオン第13号機+ロンギヌスの槍】LV3

【仮面ライダーオーマジオウ】LV1

【仮面ライダーオーマジオウ】LV1

【仮面ライダーオーマジオウ】LV1

【永遠なる神都】LV1

【永遠なる神都】LV1

【旅団の摩天楼】LV1

バースト：【無】

「ターン1」アスラ

「オレのターン、ドロツツ!!」

このターンのドロステップ、アスラはBパッドから全身全霊を込めてドロする。

絶体絶命なこの状況だが、アスラはどうやら土壇場で使えるカードを引いたようにで

.....

「メインステップ!!……マジック、ボルカニックブレイク!!」

「!!」

「効果により、オマエのネクサスカードを全て破壊。破壊した数だけドローする!!」

豪快に降り注ぐ火炎。それがブラックフォースの背後に潜む4枚のネクサスカードを履き尽くしていく。

「破壊した数は4枚、よってオレはデッキから4枚のカードをドローする!!」

この土壇場でネクサスを破壊しつつドローまで補うカードを引いてくるのは流石の勝負強さと言った所。

アスラはデッキからさらに4枚のカードをドローし、その手札は合計で5枚となる。

「さらにオレは、転醒する仮面ライダーナイトを召喚!!」

┆【仮面ライダーナイト】LV3(4)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、アスラの幼馴染にして最大のライバルであるロンの最強スピリット、転醒する仮面ライダーナイトが出現。

「召喚時効果でデッキから2枚ドロー!!……マジック、フェイタルドロー!!……オレのライフが2以下の時、デッキから3枚ドローする!!……最後にバーストをセットして、アタックステップだ」

スピリット効果とマジックで手札を大きく増やしたアスラ。メインステップを終了させ、アタックステップへと移行する。

「転醒ナイトでアタック!!……この瞬間、手札にあるアドベントカードを破棄する事で、ナイトは転醒する」

「!!」

「オレは手札にあるファイナルベントを破棄して、ナイトを転醒させる……行くぞロン!!」

「ああ」

疾風纏いて現れよ……………

仮面ライダーナイトサバイブ!!

アスラとロンが叫ぶ。ナイトはサバイブのアドベントカードをベントインし、疾風吹き荒れるライダースピリット、ナイトサバイブへと強化を果たした。

そしてその天下無敵の効果は、ブラックフォースのオーマジオウをも吹き飛ばす。

「煌臨時効果、相手は相手スピリット1体を選び、それ以外を破壊する」

「ツ……………まだそんなスピリットを残していたか……………エヴァンゲリオン第13号機を残す」

「なら残った3体のオーマジオウは破壊!!」

ナイトサバイブが天に聖剣を掲げると、巨大な竜巻が発生。それはオーマジオウ達を次々と飲み込んでいき、消滅させた。

これでブラックフォースの場に残ったのは、エヴァンゲリオン第13号機のみ。

「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………だがオーマジオウはもう用済み。このエヴァンゲリオン

ピリットで全てを打ち砕いてくれるわ……………フラッシュマジック、スクランブルブースター」

「!!」

「効果により、このバトルの間、エヴァンゲリオン第13号機は疲労状態でのブロックを可能にする……………ナイトサバイブを迎え討て」

咄嗟のマジックカードにより、エヴァンゲリオン第13号機が再び動き出す。

ナイトサバイブが聖剣を手に挑みかかるものの、力の差は歴然か、ロンギヌスの槍を振るう風圧だけで吹き飛ばされてしまう。

「終わりだ。貴様の攻撃はオレには届かない!!」

「いや、まだだ!!……………ぜってえに届かせてみせる!!……………フラッシュ、変身したオレの【神技】を発揮。トラッシュからスピリット状態で、暗黒の魔剣を復活させる!!」

「!!」

┆【暗黒の魔剣ダーク・ブレードX】LV1(1)BP5000

復活し、アスラの右手に握られる剣は、暗黒の魔剣ダーク・ブレードX。

だがそれも束の間、エヴァンゲリオン第13号機のロンギヌスの槍がナイトサバイブの肉体を貫いてしまう。これにより、ナイトサバイブは堪らず爆散。

「スクランブルブースターの効果でデッキから2枚ドロ」

「次はオレだ!!……暗黒の魔剣でアタック!!」

「己で来るか、愚か極まりなし!!」

暗黒の魔剣を手にしたアスラ自身がフィールドに移動し、ブラックフォース目掛けて走り出した。

史上最強の生命体であるブラックフォースに単身で挑みにかかる行為が、どれほど身の程知らずかは計り知れない。だが、アスラは今までその身の程知らずから、誰もが想像さえしなかった奇跡の大逆転劇を披露して来た……

きつと、絶対今回もそれは起こるはずだ……

「その程度の攻撃、我がライフに収めよう!!」

「うおおお!!」

ブラックフォースのライフバリアに暗黒の魔剣の剣先を突き立てるアスラ。気合いとド根性でそれをねじ込み、ライフバリアに亀裂を生じさせていく……………

「頂点王になるまで、ぜってえに諦めねえ……………それがオレのバトルスピリッツだアアアー!!!」

「?!」

この瞬間、ブラックフォースでさえも予期していなかった事が発生する。

ブラックフォースと……………いや、きつとブラックフォースの中に眠るオニキスとアスラが共鳴でもするように、ブラックフォースは黒、アスラは赤色に光輝く。

「な、なんだこれは……………いったい何が起こつて……………ぐ、ぐオオオオオオオオー!!!」
「うおおおお!!!」

へライフ3??2へブラックフォース

73 コア 「スーミ村のアスラ」

大昔の怪物ブラックフォース。黒属性のオリジンにしてそのモノと呼べる彼の力の前に窮地に立たされるアスラとオニキス。

やがてオニキスは吸収され、アスラもまた、ブラックフォースの中へと誘われて
……………

だが、アスラはブラックフォースにとって汚物だったか、彼が中へと入った事で機能を停止した機械のように動かなくなつて……………

「アスラはまだあの中で戦っている」

「ああ、デッキのカード達を通して伝わってくる」

「アスラ……………負けるんじゃないわよ。絶対帰つて来なさい」

ロン、トウエンティ、エールの3人がそう言葉を落とす。そのそばにいるゾンもまた、アスラの帰還と勝利を心より願っている。

そして、今のアスラは……………

「ツ……………(、(、(、(は……………!?!」

気がつけば、アスラは光一つない闇の中にいた。いつの間にかセイバーへの変身も解けている。

「そ、そうかオレ……………ブラックフォースに吸い込まれて……………じゃあここはアイツの中??……………待てよじゃあオニキスもウイルスもこの中にいるんじゃない」

自分が今、どう言う状況下に置かれているかがある程度把握するアスラ。取り敢えず、この黒い闇のゾーンを抜け出して、同じく吸収されてしまったオニキスとウイルスに合わなければならぬ。

「……………にしたってどうやって探せばいいんだ、こんな右も左もわからん状況で……………」

どの方向に、どの道筋にオニクス達がいるかはブラックフォースのみぞ知る。きっと無象に進めば長い長い道のりになるに違いない……………

「だアアアア!!!……………もう何でもいい、何時間でも何日でも何週間でも何ヶ月でも何年で
も探し回ってやらアアアアアー!!!」

いつもの諦めないスピリッツで躍起になるアスラ。大層立派だが、何の解決策にもなっていない。

「!!」

しかしそんな時だ。一粒の光球がアスラの目の前に出現したのは……………

やがてそれは人の、女性の形へと姿を変える。背丈はアスラと同じくらい、結構美人で、年齢は多分上。灰色のショートヘアで、顔つきからして元気いっぱい女性なのがわかる……………

「よっー!」

何故かは知らないが、怪しいことは沢山言ってるのに、アスラは不思議と嘘には聞こえなかった。

取り敢えず行く当てもない、アスラはこのやけに男つ気の強い女性についていく事を決める。

「……………正直、お姉さんを信用していいかわかんねえ。でもオレには当てがない。オニキスにもう一度会うために、お願いできますか……………」

「ハツハツハ!!!……………固!!……………真面目か!!……………最初っから連れて行ってやるって言ってる?」

「えええ!?!……………なんで笑ってんすか!?!」

何故かめちやくちや笑われた。どうやら笑いの壺が凄く浅いらしい。

「はあ可笑しい可笑しい……………そっか。アンタは、思った事を正直に言うタイプなんだね」
「??」

「良い男に育ったね。身長はクソチビだけど」

「クソチビ言うな!!」

その後、アスラと女性は黒い闇の中を歩み始める。

アスラはわかっていないようだが、彼女こそ彼の本当の母親『キョーラ・ギア』である。何故だか2人は皮肉にもブラックフォースの体内で再開してしまっていて

……………

……………

「……………一つ、聞いて良いか?」

「お、なんすか?」

道中、キョーラがアスラに質問を投げ掛ける。それは16年間、アスラを思い続けて来た彼女からの、本当に本心からの、素朴な疑問であつて……………

「ソウルコア、使えなかつたろ。生まれた時から」

「ツ……………そんな事も知ってたのか、スゲーなアンタ!!……………そうなんだよ……オレ生ま

れた時からソウルコア使えなくてさくく……」

「……………辛く、なかつたか……!?!」

やけに険しい顔で聞いて来た。

無理もない。

黒の世界出身のキョーラとて、表の世界の者達が皆当たり前のようにソウルコアを使っているのは知っていた。そこに突如ソウルコアが使えない人間が現れたら、その人間がどんな扱いを受けてしまうか、想像は容易だ……………

アスラにソウルコアがないのは、ギアの一族の末裔である自分の遺伝だ。きっと大きな責任を感じているに違いない。

そんなアスラは口角を少し上げて笑うと、目の前にいるのが血の繋がった、本当の母親だとも知らずに、その質問に答える。

「そりゃ、辛かったよ。何でオレだけってずっと思ってた」

「……………」

「でもシイナが、育ての親が言ったんだ。『バトルは強いカード、ましてやソウルコアでやるモノじゃない。諦めない心でやるモノだ』って……………それからその人は史上最強の

カードバトラーになって、オレ達の目標になった。そして、その目標のために旅をしていくうちに、こんなソウルコアも使えない底辺ヤロウも認めてくれる、優しい仲間達が出来たんだ。なんかそいつらといたら、ソウルコアが使えないからなんだよって思ってた。今ではそんなに気にしてないんだ」

「……………そつか。良い人達と出会えたんだな」

鼻の下を擦りながら、やや自慢気に己の半生を語るアスラ。趣のある彼の言葉に、キョーラは首を軽く縦に振り、感動する。その目には薄らと涙を浮かべていた。

「……………やっぱオマエは、オレ以上の器の持ち主だよ」

アスラにも聞こえない程、小さくそう呟いたキョーラ。これは自分が死ぬ間際にアスラに対して思った事だ。

「後そうだな。じゃあ好きな女の子とかいる？」

「え、好きな女の子??:……………あー最近気づいたんだけど、一応いるよ」

「え、マジ!？」

「マジ」

親としてはどうしても聞いておきたかった質問その2を出題するキョーラ。まさかの好きな女の子がいる発言に少し驚く。

「…………その子が誰かは知らないけど、どうせ選ぶならオレみたいな美人で逞しい系の女にしろよ。騙して来たり、裏がありそうなヒステリック系とかはNGだからな？」

「大丈夫大丈夫、偶にオレの事殴って来るけど、そいつスゲー逞しいんだぜ……………つか、なんか質問の内容が母ちゃんみたいだな」

「ふふ」

この16年間で、すっかり大人になったんだな。そうキョーラは思い、満気な表情を浮かべる。

そしてその途端に、彼女の体が薄く光り輝き、少しずつ肉体が粒子となつて行つて……………

「え、どうしたんだお姉さん!」

「……………悪い、時間みたいだ。もう少し先を歩けばオニキスの所に辿り着ける」
「そんな、お別れって事か!？」

アスラにそう言われ、キョーラは薄く笑顔を浮かべながら、無言で首を縦に振る。

「なんでかよくわかんねえけど、オレお姉さんともつと沢山話していたかった」

「ああ、オレもだ。もつともつとアスラとこうしてお話があった。呆れるくらい長くて、バカみたいにどうでもいい話をしていたかった……………まるで、親子のように」

ただ、満足はした。アスラが自分の代わりに表の世界で楽しくやっていた事が知れたのだ。

それだけでもう、大満足。

「じゃあなアスラ。オニキスに会ったらよろしく言つといてくれ……………アイツは本当にオレのマジダチだから」

「おう!!……………お姉さんも、元気だな!!」

「……………おう!!」

最後に満面の笑みを見せながら、キョーラは完全に粒子となり、やがてこの場から完全に消え去ってしまった。

この時、アスラは彼女のその笑った顔が自分によく似ていると思った。その考え方が彼の脳の全域に染み渡っていった直後、何故だかよくわからないが、涙が頬を伝って来て……

「……………なんで泣いてんだ、オレ？」

アスラは涙の意味もわからぬまま、それを拭い、言われた通りの道筋を辿って、どこかにいるであろうオニキスを探し続けた。

「そう言えば、お姉さんの名前、聞いてなかったな。聞いとけばよかった」

「……………見つけた。オニキス……………!!」

少し時間が経ち、アスラは広々とした空間に出た。そこには黒いカプセルが1つ存在し、その中には吸収されたオニキスの姿が確認できる。

所謂仮死状態なのか、目も開けず、その体をピクリとも動かさない。

「よし、早くオニキスを助けよう。でもってこんな所さつさと抜け出して……………」

「君もここに来たのかアスラ」

「ッ……………」

オニキスの元へ駆け寄ろうとした直後、アスラに細々と声を掛けたのは、他でもない、ブラックフオースに利用され続けて来た男性「ウィル」……………」

その痩せこけた様子から、蓄えて来た黒の力は全て抜き取られた後みたいで……………」

「ウィル!!……………そうかやっぱオマエも……………無事でよかつたぜ。オニキスを助けて、一緒に……………」

「出られないよ」

「!!」

「どうやってここから出る事なんて不可能なんだ」

やけに後ろ向きな思考と雰囲気を感じさせるウィル。どうやら彼は既にこの状況から絶望を見出し、諦めているようだ。

「そんなのやってみねえとわかんねえだろ!？」

「仮に出れたとして、あのブラックフォースに勝つ事なんてできない。奴はおそらく究極の生命体……出れても犬死にするだけだ」

「でもオレ達が出ねえと他のみんなが殺されちまう!!……それだけは絶対にあっちゃいけねえ事だろ!!」

「死ぬのはしょうがない事なんだ。世界はもうブラックフォースが掌握していると言っても過言じゃないんだから……」

ふざけんな!!!

「!!」

「何マイナス思考働かせてんだ、このネガティブちよび髭ヤロウ!!」

頭に血の上ったアスラは、ウィルの胸ぐらを掴み、叫ぶ。

「そうやって後ろ向きな考え方してる方が楽だよな。そうやって逃げとく方が楽だよな
!？」

「!!」

「オマエにもこうなつた責任があるんだろ!?!……落とし前を付ける義務があるはずだろ
!?!……やらねえと行けない事から、逃げ出すんじゃない!!」

わかっている、ブラックフォースを倒さないと行けないのも、自業自得なもの、その
自業自得に、他の者達を巻き込んで行けないのも、本能レベルで把握している。

だが無理なんだ。もう疲れたんだ。休ませてくれ。
ただただ、ウィルはそう思っていた。

「もういい、オレー人でオニキスを助ける。オマエは引つ込んだろ」

そういい、アスラはウィルを離すと、再びオニキスの方へと体を向け、走り出した

……

そして、もう一步、オニキスの入ったカプセルに手が届く。

その瞬間……………

「ぐへッ…………?!」

誰かに顔面を殴られ、体ごと吹き飛ばされた。アスラは痛む頬をさすりながら自分を故意に殴り飛ばしたであろう人物を視認する……………

「オマエらは……………」

「ジジジ……………」

「ズズズ……………」

「ヘタマイトとシャーマン……………!!」

そこにいたのはヘタマイトとシャーマン。おそろくさつきアスラを殴つたのはシャーマンの方だろう。アスラをオニキスの所に行かすまいと飛び出して来たのだ。

ブラックフォースの体内だからか、2人は黒い肉体に尻尾、翼など、ブラックフォー

スと似た、悪魔らしい姿に戻っている。

「邪魔すんじゃないやねえ!!……オレをオニキスの所にいかせろ」

「ジジジ……アスラくん。久し振りの再会を喜びたい所だけど、それは無理♡」

「ズズズ……今奴は余計なモノを消去されている所だからな」

「余計なモノ……?？」

アスラの疑問に、シャーマンが答える。

「記憶だよ。貴様ら愚かな人間共のな」

「!!」

「奴は人間を愛し過ぎた。それはブラックフォースの一部として相応しくない。だから消されるんだよ」

オニキスのみ、カプセルの中で眠り続けている理由は、記憶の排斥。もちろん彼が進んで望んだわけではない。

ブラックフォースの本能が、そうさせたのだ。

「…………オマエ達2人も、ブラックフォースに、オブシディアンに騙されてたんだろ!? ……アイツの分裂体だって知らなかったんだろ!? ……それなのになんでアイツの側に付くんだよ!」

「ジジジ…………そんなの、最高だからに決まってるじゃん!!」

「!?」

「最高の。この一体感。ボク達の力がオブシディアンに集約されていくこの感じ、堪らなく良い!!…………ボク達こそ、最強の生命体なんだ!!」

「オブシディアン、いやブラックフォースが人間を根絶やしにしてくれるならオレ様が分裂体でも何でも良い!!…………それがオレ様の望みだ」

ヘタマイトもシャーマンも、それぞれがそれぞれの理由でブラックフォースに付いていた。

仮に反抗していたとしても吸収は免れなかったと思うが、こうして彼らがブラックフォース側にいるのは、オブシディアンへの篤い信頼とも取れる。

「……………そうかよ。ならしようがねえ、力づくでもそこをどいてもらうぜ……………!!」

アスラが再びオニキス目掛けて走り出す。それを近づけてはならないと本能レベルでわかっているヘタマイトとシャーマンはその道を阻む。

「うおおお!!……どきやがれエエ!!」

道を阻むシャーマンとヘタマイトに拳を握るアスラ。強烈なパンチを繰り出す。2人は一瞬でそれを見切り、避けて………

「ジジジ」

「ズズズ」

「ぐあっ……!？」

息の合ったコンビネーションでアスラを蹴り飛ばした。そして地面に転がる彼を見てニタニタと笑う。

「く、クソ!!」

アスラもまだ負けてはいない。すぐさま立ち上がると、またヘタマイトとシャーマンに戦いを挑みにいく。

しかし……………

「ぐっ…………ぬわあっ!？」

また吹き飛ばされる。

「なんのこれしき!!…………ぐあっ!？」

立ち上がったては吹き飛ばされ、立ち上がったては吹き飛ばされを繰り返してしまおうアスラ。絶対にオニキスを取り戻してみせると言う強い意志が、彼を何度も立ち上がらせていた……………

「しづてえなコイツ……………」

「ジジジ…………いいいいいよ、しづといの大歓迎!!…………絶対最後に殺すのはボクだからね

!!

「ゼエ……………ゼエ……………うおお!!……………まだまだアアアー!!!」

吹き飛ばされ、立ち上がるたびにボロボロになっていくアスラ。身体を鍛えているのだが、流石にブラックフォースと人間とでの肉弾戦では歯が立たない……………

「なんで、そこまで……………」

その光景をずっと見続けて来たウィル。アスラの決して諦めないと言う熱い思いに、次第に心が動かされていく……………

「ぐあああああ?!」

これで何十回目だろうか。顔はコブやアザだらけ。皮膚や服もボロボロ。それでも尚、アスラは立ち上がって見せる……………

戦いが大好きな戦闘狂、ヘタマイトでさえもその諦めの悪さに飽きを覚えて来ている……………

そしてそれで、アスラの肉体を串刺しに……………

できるかと思われた。ウィルがその2人の両手を押さえ込んで、アスラを守るまでは

……………

「なに!？」

「ウィル!!」

「アスラ……………君は本当に愚かでバカで……………優しい奴なんだな。今まで見下していて悪かった。だから……………救ってくれ、世界を……………オニキスと共に!!」

「おう!!!」

ウィルがブラックフォースの2人を抑えたその瞬間。アスラは再び駆け出した。その目指す先は当然相棒であるオニキスだ。

「オニキス、オレだ、アスラだ!!!……………絶対オレの事忘れたとか言うんじゃねえぞコノヤ

ロー!!!」

アスラの叫び。それに呼応するかの如く、オニキスがカプセルの中でその目をゆつく

りと開眼させ、目醒める……………

「ゼゼゼ……………テメエみたいな喧しい奴、忘れられるわけねえだろうがバカヤロウ……………!!」

アスラの接近に目醒め、カプセルから飛び出すオニキス。アスラの元まで飛翔し、その手を掴む。

「こんな所まで追っかけて来やがって……………負けてねえだろうなアスラ!!」

「おう、まだ負けてねえぞ!!」

「なら勝つぞ……………ガラじゃねえが、世界でも何でも救ってやろうじゃねえか!!」

「つしやあ!!……………行くぞ、オニキス!!!」

アスラとオニキス。2人が再び揃ったその瞬間、黒い光が当たり一体を包み込んだ……………

そしてその光は、希望と言う名の奇跡を呼び込んだ……………

舞台は再び戻って決戦の地。不本意でアスラを吸収してしまって、機能を停止していたブラックフォースに変化が訪れる。

「なんだ、奴から光が……………」

真つ先にその異変に気が付いたのはトウエンティだった。それに合わせて周囲の皆もそこへと目をやる。

「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………ふ、ふぎけるなよオニキスウウウアアアア!!!!」

ー!!!

ブラックフォースの体内から飛び出して来たのは2つの光球。内1つはウィルだった。彼は地につけられた事を喜び、その拳を握り締める。

そして、もう1つは当然……………

「……アスラ!!」

エールが喜びに満ちた声を荒げると、その光球からアスラが再び地に足を付ける。色々あったが、こうして復活を果たす事ができた。

だが、その姿はいつもとはだいぶ異なっていて……

「き、貴様ら……その姿は……」

黒いオーラでできた片翼、角、尾……

今のアスラは、まさしくオニキスと融合したと言える姿だった。その悍ましくも神秘的な容姿は、この戦いに終止符を打つのに最も相応しい……

『ゼゼゼ、アスラの絆の力と』

「オニキスの黒の力」

『「掛け合わさった2つの力で、今度こそオマエを討つ!!」』

「小癩な……このオレの力の一部をギアの一族の力なんかと混ぜ合わせやがって

……」

絶望的な状況の中で一体化したアスラとオニキス。2人は妥当ブラックフォースを
目指す。

「アスラとオニキスが合体したのか」

「何というか、悍ましいな……だが」

「うん。アレは紛う事なき、いつものアスラよ」

ロン、トウエンティ、エールの順でそう話し合った。目の前の存在はほぼブラック
フォースに近い存在と言っても差し違えない。

だが、言動や立ち振舞いから、アレがいつものアスラで間違いと確信して……

「ギアの一族と黒の力の融合……そうだな『ブラックアスラ』とでも名づけておこうか
な。本当に凄い男だよ、君は」

ゾンが勝手に今のアスラの形態を命名する。そしてその直後、遂にバトルが再開する

………

『オレ達のアタックステップは続いている。暗黒の魔剣がアタックしたバトルの終了時、転醒ネクスス、赤の世界の効果を発揮!!……オマエに1点のダメージを与える!!』
「ぐっ……!!」

へライフ2??1へブラックフォース

ブラックアスラが手をかざすと、赤の世界の効果が機動。龍の形をした山脈から次々と隕石が落ち、ブラックフォースのライフバリアを1つ破壊した。

『オレ達はこれで、ターンエンド!!』

手札：6

場：【暗黒の魔剣ダーク・ブレードX】LV1

【赤の世界】LV1

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

バースト：【有】

そのターンをエンドとするブラックアスラ。

次はようやくブラックフォースのターン、疲労により片膝をついていた三大スピリットをも超える強力なスピリット、エヴァンゲリオンが再び鳴動する……………

「ターン12」ブラックフォース

「このターンの開始時、黒の力により、オレのライフは回復する」

「ライフ1??3」ブラックフォース

もう何度この光景を迎えただろうか、ブラックフォースのライフは又しても回復し、3となった。

「メインステップ……………オレは手札からもう1枚のロンギヌスの槍を召喚し、エヴァンゲリオン13号機と合体!!」

「!!」

「このスピリットはロンギヌスの槍2つとの合体が可能!!……唸れ、叫べ、ダブルブレイヴスピリット」

ー【エヴァンゲリオン13号機+ロンギヌスの槍+ロンギヌスの槍】LV3(5)B
P27000

突如出現したのは黒い霧。その中より出し2本目のロンギヌスの槍。エヴァンゲリオン13号機は4本の腕のうち、余った2本の腕でそれを握り、前人未到のダブルブレイヴスピリットとなる。

「さらにネクサス、時止まりの氷原を配置」

ー【時止まりの氷原】LV1

「そして、リザーブの全てのコアをエヴァンゲリオン13号機に追加する」

ブラックフォースの背後に広がるのは白く凍てつく氷原。その後、ブラックフォース

はりザーブのコアを全て使い切り、20近くのコアをエヴァンゲリオン13号機に追加した。

「アタックステップ!!……エヴァンゲリオン13号機でダブルブレイヴアタック!!……その効果で貴様らの手札を2枚破棄」

「!!」

「さらに暗黒の魔剣からコアを取り除き消滅させる」

遂に攻撃を仕掛けるブラックフォース。その直後にアスラの手札が2枚黒炭となって消滅。

さらにエヴァンゲリオン13号機はロンギヌスの槍2本を振り、暗黒の斬撃を発生。アスラの場の暗黒の魔剣を斬り裂き、爆散させた。

「今のエヴァンゲリオン13号機はクアドラプルシンボル、一撃で4つのライフを破壊できる。貴様らのライフは残り2つ……塵芥となるがいい!!」

場を荒らし、手札を減らし、勝利を確信するブラックフォース。だが、「そんなわけ

ねえだろ」と言わんばかりに、ブラックアスラは減った手札から1枚のカードを引き抜いて……………

『「フラッシュマジック、デルタバリア」』

「ッ……………!!」

「効果により、このターンの間、コスト4以上のスピリットのアタック、効果ではオレ達のライフを0にできない」

『ゼゼ、アタックは当然ライフで受けてやるよ』

〈ライフ2??1〉ブラックアスラ

前方に展開された稲妻迸る三角形のバリアがアスラの最後のライフを守護する。

如何にブラックフォースが無敵の生命体でも、如何に強力なスピリットを生み出そうとも関係ない。このターンは何をした所で、彼にそれを砕く事はできない。

「こ、この攻撃も凌ぐだ?!?!……………貴様らのどこにそんな力が眠っている!?!」

「そんなモン、ここに決まってるんだろ!!……………ライフ減少によりバースト発動、妖華吸血

爪。デツキから2枚ドロする」

胸に拳を当て、己の伏せていたバーストカードを発動させるアスラ。これで減った手札の数も帳消しとなる。

「……………ターンエンド」

手札：5

場：【エヴァンゲリオン第13号機＋ロンギヌスの槍＋ロンギヌスの槍】LV3

【時止まりの氷原】LV1

バースト：【無】

3つのライフ、多量の手札を残し、そのターンをエンドとするブラックフォース。アスラとオニキスが復活してからと言うもの、全くもって余裕を感じられない状況が続いている。

そして次はそんなアスラとオニキスのターン。

2人の、いや、今までアスラを中心に築き上げて来たみんなの絆が、未来を切り拓く

……………

「ターン13」ブラックアスラ

『ゼゼ、このターンのドローで全てが決まる。オレの全力を注いでやるから、気を抜くんじゃねえぞ……アスラ!!』

「おう!!……ドローステップ!!」

ブラックアスラとなったアスラの眼光が赤黒く輝き出す。その勢いのまま、アスラは全力でBパッドのデッキからカードをドロー………

オニキスの黒の力、自分の絆の力が織り混ぜられたその右手からドローしたカードは、まさしくこの状況にピッタリの最強カード。

「ツ……オマエが来てくれたか」

『コイツは良いのを引いたな』

どうやらその最強カードは、彼らも良く知っているカードらしい。

アスラは直後にそのドローカードを手札に加え、颯爽とメインステップへと移行す

る。

「メインステツプ………先ずはダークウイングを召喚！」

ー【ダークウイング】LV1(1)BP3000

空つぽのアスラの場合に出現したのは、ロンのライダースピリット、そのナイトの操る黒き翼、ダークウイング。

「ロンの次はトウエンティだ!!………手札から仮面ライダージオウ オーマフォームのチェンジの効果を發揮」

「!?!」

『ゼゼ、カード効果により、トラッシュからコスト8以上のライダースピリットをノーコストで召喚する』

「オレは、トラッシュにいる仮面ライダージオウ グランドフォームを召喚する!!」

ー【仮面ライダーグランドジオウ】LV1(1)BP8000

「オーマフォームは入れ替えずにトラッシュユへと破棄する」

続けてアスラの場合に現れたのは、20体のライダースピリットの黄金の仏像を身に纏う、トウエンティのジオウ、その進化系、グランドジオウ。

これでロンとトウエンティのカードが場に出揃い、最後はアスラだ。

「そしてこれが、このターンのドローステップでドローした、オマエに勝つための切札だ!!!」

烈火纏いて現れよ……

仮面ライダー龍騎サバイブ!!!

ー【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV2(3)BP11000

様々な鏡像が重なり合い、爆誕したのは、深紅の装甲を身に纏う、烈火の如く熱きライダースピリット、仮面ライダー龍騎サバイブ。

そしてこのカードは、アスラが以前所持していた物。第一の龍騎と同様、オニキスの黒の力で堂々復活を果たしてみせた。

「そして、ロンのダークウイングに、オレの龍騎サバイブを合体」
「!!」

赫炎の疾風が世界の全てを包み込む!!
来い、龍騎サバイブライダー!!!

ー〔仮面ライダー龍騎サバイブ+ダークウイング〕LV3 (4) BP16000

前のウィル戦とは逆のパターンだ。今度はアスラの龍騎サバイブに、ロンのダークウイングが合体。

黒いマント、青い盾、勇者の聖剣を携えた仮面ライダー龍騎の新たな形態、仮面ライダー龍騎サバイブライダーがここに爆誕した。

『最後にバーストをセットしてアタックステップ!!……龍騎サバイブライダーでア

タツク!!」』

「合体したダークウィングの効果、トラッシュユからソードベントのカードを手札に戻し、エヴァンゲリオン第13号機からコア2つをトラッシュユに置く」

「くっ……………」

いよいよ始まるアタックスステップ。

アスラがトラッシュユから『ソードベント』のカードを手札に戻すと、龍騎サバイブライダーは聖剣を振り、赤き竜巻を発生させる。

エヴァンゲリオン第13号機はそれに飲み込まれるも、多量のコアからか、L.Vも下ならず、平然とした様子でそこに留まり、やがて己の気迫だけでそれを吹き飛ばして見せた。

「龍騎サバイブライダーは、アタックスステップ中、ライダースピリットのバトル終了時、そのシンボル分だけ相手にダメージを与える。ライフ3なんてあつという間に消し飛ばしてやるぜ!!」

龍騎サバイブライダーがマントを広げ、勇者の聖剣を構え、走り出す。目指す先は当

然ブラックフォース。

この一撃が通ればアスラ達の勝利となるが……………

史上最強の生命体、ブラックフォースがそう易々とそれを許すわけがなくて……………

「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………オマエ達の快進撃もここまでだ。フラッシュマジック、シシヤノシヨドリーム」

「!!」

「このターンの間、オレのライフはコスト4以上のスピリットのアタック、効果では1以下にならない……………その攻撃はライフだ!!」

〈ライフ3??2〉ブラックフォース

ブラックフォースの前方に出現する本の形をしたバリア。それが龍騎サバイブレイダーの一振りを阻み、ライフバリアを2つも残して見せた。

「……………」

「オマエ達如きが、このオレに勝てると思っていたのか!!……………勇者気取ってんじやねえ

ぞクソ雑魚共が!!」

このターンさえ凌ぐ事ができれば自分の勝利になる事を感じ覚的に理解していたブラックフォース。シシャノシヨドリームでそれを実行できた今、再び心に余裕が生まれている様子。

『シシャノシヨドリームはライフを守る効果、アタックステップそのモノを終了させる効果じゃない』

「ああ?……だったらなんだ」

『「続け、グランドジオウ!!……アタック時効果を發揮だ」』

「!!」

身も心も一体化しているアスラとオニキスは、互いの声を重ね合わせ、グランドジオウでアタック宣言。

しかし……

「馬鹿め。シシャノシヨドリームの効果はまだ続いている、ライフは減らない!!」

へライフ??2??2) ブラックフォース

グランドジオウがブラックフォースに拳を突き付けるが、またしてもシシャノシヨド
リームがそれを防ぐ。

ブラックフォースのライフバリアは砕けず、その数は2を維持している。

「愚か、滑稽なり、ギアの一族、オニキス。さあ早くターンを終了しろ!!」

『「オレ達はこれでターンエンド」』

手札：4

場：【仮面ライダー龍騎サバイブ+ダークウイング】LV3

【仮面ライダーグランドジオウ】LV1

【赤の世界】LV1

【変身!!仮面ライダーセイバー】LV1

バースト：【有】

ゆつくりとその瞳を閉じ、ターンを終了するアスラとオニキス。その様子を見届けた

ブラックフォースは大きく口角を上げて喜ぶ。

「オレのターン……………このターンで貴様達に更なる絶望を与えてやる!!」

そう意気込み、ブラックフォースはターンを進めて行こうとするが……………
ある異変に気がついて……………

「……………な、何だ。ライフが回復できない……………それどころかターンを開始できないだ
と……………!?!」

ライフも回復せず、ターンを開始できない事に気がついた。
何か裏がある。

そう思い、再びアスラとオニキスの方へと首を向ける。

「貴様ら、何をした!!」

『ゼゼ、やっと気がついたか』

「ブラックフォース、残念だけどオマエにもう次のターンは回って来ない。オレ達はグ

ランドジオウのアタック時効果で、テンドウさんの第二の仮面ライダーカブト ハイパーフォームの効果を使った……………」

これにより、もう一度オレ達のターンが巡って来る!!

「か、カブトだど!?……………何故そのカードが貴様らのデッキに」

ここにきてまさかの仮面ライダーカブトのエクストラターンの力を発揮するアスラ。予想外過ぎる一手に流石のブラックフォースも戸惑いが隠せない。

「テンドウさん、アンタのカード。アスラの役に立ちましたよ……………まさかこの展開を見越してたんじゃないでしょうね」

テンドウの弟子であるトウエンティ。

彼がここに来る前にテンドウから手渡されていたカード。それが第二のカブト ハイパーフォームだったのだ。彼がこの展開を見越していたのかは定かではないが、どちらにせよ、アスラ達に再びチャンスが巡って来た事に変わりはない……………」

「!!」

「このターンの間、エヴァンゲリオン第13号機のBPを3000アップし、このターンの間は疲労状態でのブロックが可能となる……奴の攻撃を止め!!……さらに時止まりの氷原の効果でBPを3000アップ。その合計BPは33000となる!!」

ー【エヴァンゲリオン第13号機+ロンギヌスの槍+ロンギヌスの槍】BP2700
0??30000??33000

まだまだ足掻けないわけがない。ブラックフォースは渾身のフラッシュマジックでエヴァンゲリオン第13号機を再び鳴動させ、ランドジオウのアタックをブロックする。

「負けぬ。負ける訳がないのだ……この最強の生命体、ブラックフォース様が!!」

フィールドではランドジオウの行手をエヴァンゲリオン第13号機が阻む。

体格差を活かし、エヴァンゲリオン第13号機がロンギヌスの槍でランドジオウを貫こうとする。ランドジオウはそれを紙一重で回避し、ロンギヌスの槍を足場にエ

ヴァンゲリオン第13号機本体まで駆けあがろうとするが、もう一本のロンギヌスの槍に身体を貫かれ、忽ち爆散してしまう……………

これで、アスラとオニキスの場には龍騎サバイブレイダーのみ。そのBPは16000、エヴァンゲリオン第13号機の33000には遠く及ばない……………

だが、それでも決して諦めたりはしない……………

どんなに力の差があろうとも、絶望的な状況であろうとも、絶対にバトルを諦めない。それがアスラのバトルスピリッツだ。

「龍騎サバイブレイダーでアタック!!……………合体したダークウイングの効果で再びトラッシュからソードベントのカードを手札に戻し、エヴァンゲリオンからコア2つをトラッシュに!!」

「いくつコアを置いたと思っている、その程度でLVダウンなどせんわ!!」

前のターンと同じく、アスラは『ソードベント』のカードをトラッシュから回収しつつ、龍騎サバイブレイダーの聖剣から発生させる赤い竜巻でエヴァンゲリオン第13号機からコア2つを取り除くが、それでもまだ10個以上のコアが置かれている。

LVダウンなどあり得ない。

エヴァンゲリオン第13号機はその赤い竜巻を弾き飛ばしながら、効かないぞと言わんばかりに咆哮を張り上げる。

「ブロックだエヴァンゲリオン!!……黒属性の力を携え、三大スピリットをも超えたその力を奴らに指し示せ!!」

ブラックフォースの指示を聞くなり、龍騎サバイブレイダーへと襲い掛かるエヴァンゲリオン第13号機。その圧倒的なパワーで2本のロンギヌスの槍を振り、龍騎サバイブレイダーを追い詰めていく……

「フラッシュマジック、ソードベント!!……これを2枚使って、龍騎サバイブレイダーのBPを10000プラスして、エヴァンゲリオンのコア4つをリザーブに!!」

「!!」

『「サバイブセイバーツヴァイ!!!」』

1【仮面ライダー龍騎サバイブ+ダークウイング】BP16000??21000??2
6000

2ターン連続で手札に戻し続けたソードベントのカードをここで消費。龍騎サバイブレイダーの勇者の聖剣は炎を帯び、身の丈をも遥かに超えるサイズへと変貌……………龍騎サバイブレイダーはそれを猛々しく、全身全霊で振り、エヴァンゲリオン第13号機をロンギヌスの槍諸共上空へと高く飛ばしてみせる。

だが……………

「だが、まだエヴァンゲリオン第13号機のLVは下がらない!!……………BPもまだ僅かに届いていない!!……………終わりだギアの一族、オニキス!!!」

『……………』

そう。この行為は一時凌ぎにしかならない。エヴァンゲリオン第13号機は上空ですぐさま体勢を整え、ロンギヌスの槍2本を構える。地上にいる龍騎サバイブレイダーにそれを投擲するつもりなのだ……………

龍騎サバイブレイダーもまたソードベント2枚分で作り上げた巨大な炎の剣を投擲しようとする。しけし力の差は歴然、このまま行けば間違いなく敗北を喫するのは龍騎サバイブレイダーの方であろう……………

頂点王になるんでしょ………

アスラアアアアアアアアアア
!!!!!!

「!!」

この局面でエールがアスラに向けて叫んだ。その言葉は背中を押すように、アスラに一枚のカードを手札から引かせた………

「フラッシュマジック、シーズグロリー!!」

「!？」

『このターンの間、相手スピリット1体のBPをマイナス7000………よつて、エヴァンゲリオンのBPは、今の龍騎サバイブレイダーと同じ、26000となる!!』

「エヴァンゲリオン第13号機+ロンギヌスの槍+ロンギヌスの槍」BP3300
0??26000

刹那。稲妻纏いし槍がエヴァンゲリオン第13号機の右胸部を貫いて見せる……………
喘ぎ声を上げるエヴァンゲリオン第13号機。しかしそれでも執念でロンギヌスの
槍2本を龍騎サバイブレイダーに向けて放つ。龍騎サバイブレイダーもまた炎纏った
巨大な聖剣をエヴァンゲリオン第13号機のいる上空へと投げる……………
そしてそれは互いに命中。

2体は耐えられず、忽ち爆散して行った。ブラックフォースの場にはロンギヌスの槍
2本が、アスラ達の場にはダークウィングがそれぞれ疲労状態で場に残った……………

「エヴァンゲリオンがライダースピリットと相打ちだ?!……………だがこれでもう貴様ら
の場にアタックできるスピリットはいない!!……………ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………このオレの、
ブラックフォースの勝利だ……………!!」

両者の爆発による爆煙の中、ブラックフォースが自分の勝利を確信する。

だが、その爆煙が晴れる頃、彼の目先には信じられない光景が飛び交う……………

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV3（4）BP13000

「な、何……何故そいつが、龍騎サバイブが場に残っている!?!」

そう。破壊されたはずの龍騎サバイブが何故か場に残っていたのだ。それもアタックが可能となる回復状態で………

ブラックフォースは何度もその目を疑った。しかしそれは紛う事なき本物。覆しやうがない事実であって………

『「スピリット破壊後のバースト、トリックベント。この効果で破壊された龍騎サバイブをトラッシュから復活させた」』

「ッ……何だと!?!」

爆煙の中、アスラが最後に使用したカードは、バーストカードのトリックベント。この効果により、龍騎サバイブは奇跡の復活を果たしていたのだ。

『決めるぞアスラ、これが真正正銘、最後の一撃だ……!!』

オニキスの言葉がアスラの背中を押す。ロンやエール、他の仲間達も「行つけええ!!」と彼に強く声援を送る。

そして、アスラは最後の宣言を行う……

行け龍騎サバイブ!!

オレ達の想いを繋ぎ、未来を照らせ!!

アスラの指示の声の大きさに呼応するように、龍騎サバイブは今までとは比べ物にならない程の巨大な火球を銃より放つ……

まるで太陽のようなその炎の弾丸は忽ちロンギヌスの槍とブラックフォースを飲み込んでいき……

「何故だ。完全にオレの勝ちだった筈だ……何故ここまでしてギアの一族に、人間に勝てない……何故だオニキス、オニキスウウアアア!!!」

△ライフ2??0△ブラックフォース

又してもギアの一族に、人間に敗れる事になったブラックフォース。その最後のライフバリアが、彼の叫びと共に大きな音を立てながら砕け散って行った……………

これは、この一瞬は……………

『アスラ』と言うソウルコアが使えないコモンの落ちこぼれが、努力を重ね、仲間と共に成長し、勇者となり、英雄とまで呼ばれるようになった、奇跡の瞬間である……………

ラストコア「オレ達のコラボストーリーーズ」

刹那。稲妻纏いし槍がエヴァンゲリオン第13号機の右胸部を貫いて見せる……………

喘ぎ声を上げるエヴァンゲリオン第13号機。しかしそれでも執念でロンギヌスの槍2本を龍騎サバイブレイダーに向けて放つ。龍騎サバイブレイダーもまた炎纏った巨大な聖剣をエヴァンゲリオン第13号機のいる上空へと投げる……………

そしてそれは互いに命中。

2体は耐えられず、忽ち爆散して行った。ブラックフォースの場にはロンギヌスの槍2本が、アスラ達の間にはダークウイングがそれぞれ疲労状態で場に残った……………

「エヴァンゲリオンがライダースピリットと相打ちだ?!……………だがこれでもう貴様らの間にアタックできるスピリットはいない!!……………ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………このオレの、ブラックフォースの勝利だ……………!!」

両者の爆発による爆煙の中、ブラックフォースが自分の勝利を確信する。

だが、その爆煙が晴れる頃、彼の目先には信じられない光景が飛び交う……………

1 【仮面ライダー龍騎サバイブ】LV3（4）BP13000

「な、何……何故そいつが、龍騎サバイブが場に残っている!?!」

そう。破壊されたはずの龍騎サバイブが何故か場に残っていたのだ。それもアタックが可能となる回復状態で………

ブラックフォースは何度もその目を疑った。しかしそれは紛う事なき本物。覆しやうがない事実であって………

『「スピリット破壊後のバースト、トリックベント。この効果で破壊された龍騎サバイブをトラッシュから復活させた」』

「ッ……何だと!?!」

爆煙の中、アスラが最後に使用したカードは、バーストカードのトリックベント。この効果により、龍騎サバイブは奇跡の復活を果たしていたのだ。

『決めるぞアスラ、これが真正正銘、最後の一撃だ……!!』

オニキスの言葉がアスラの背中を押す。ロンやエール、他の仲間達も「行っけええ!!」と彼に強く声援を送る。

そして、アスラは最後の宣言を行う……

行け龍騎サバイブ!!

オレ達の想いを繋ぎ、未来を照らせ!!

アスラの指示の声の大きさに呼応するように、龍騎サバイブは今までとは比べ物にならない程の巨大な火球を銃より放つ……

まるで太陽のようなその炎の弾丸は忽ちロンギヌスの槍とブラックフォースを飲み込んでいき……

「何故だ。完全にオレの勝ちだった筈だ……何故ここまでしてギアの一族に、人間に勝てない……何故だオニキス、オニキスウウアアア!!!」

へライフ2??0へブラックフォース

又してもギアの一族に、人間に敗れる事になったブラックフォース。その最後のライフバリアが、彼の叫びと共に大きな音を立てながら砕け散って行った……………

これは、この一瞬は……………

『アストラ』と言うソウルコアが使えないコモンの落ちこぼれが、努力を重ね、仲間と共に成長し、勇者となり、英雄とまで呼ばれるようになった、奇跡の瞬間である……………

「……………なんで、負けた。何千年と練ってきた計画に狂いなどなかった。オレの力は完璧だった筈だ……………なのに何故だ」

全てのライフが砕け散り、その手に入れた究極の肉体を維持できなくなってしまったのか、ブラックフォースの身体は先から少しずつ消滅して行っている。

彼は迫り来る死の中で、自分の敗北の理由を考えた……………

答えの出ない中、彼に回答を授けるのは、他でもない己の分身であるオニキス。

『ゼゼ、オマエはただ自分の思い通りになる傀儡が欲しかっただけだろ？……………オレがこの表の世界で欲しかったのは『友達』だ。キョーラのようだな』

「……………」

ブラックアスラの合体が解除され、オニキスが元の姿に戻りながら彼にそう告げた。

否定はできなかった。ギアの一族という友や仲間の絆を武器に変えて戦い抜く戦士が目の前にいるからだ。ブラックフォースは彼らの底知れない力、恐ろしさを少しだけ忘れていたのかもしれない。

『オマエの中にいる時、オマエの感情や記憶がオレの中に潜り込んで来た。ブラックフォース、オマエ、本当は人間の事を……………』

「言うなオニキス」

オニキスが言おうとしていた言葉は、彼らのみぞ知る。

そして、敗北の理由に納得したか、ブラックフォースは口角を上げて……………

「……………オニキス、オマエは、強くなったな」

『オマエが何も変わらないだけだオブシディアン。あばよ、先に地獄に行つてろ』

「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ……………ああ、そうするとしよう。これからは貴様がブラックフォースとなれ」

ブラックフォースの最後の言葉に「それは嫌だ」とオニキス。そして遂にブラックフォースの肉体は消滅。それにより、彼の黒の力の影響で造られたこの空間は維持できなくなったのか、突如眩い光と共に消失。

アスラ達は気が付けば外に出ていた。

黒で覆われていた空はすっかり元通りの晴天となっていた。その空は、アスラ達が世界を救った、何よりの証拠であって……………

「勝った。オレ達、勝ったんだな、オニキス」

『ゼゼ、ああ。これでオレの復讐は果たされたわけだ』

アスラとオニキスが勝利を実感する中、エールにトウエンティにロンと言った仲間たちが「アスラアア」と声を上げて走って来る。その間にオニキスは邪魔にならないよう、アスラの身体の中に入った。

「アスラ!!」

「お、エール。お疲れ様」

「お疲れ様じゃないわよ……………でも凄いわアンタ、世界を救ったのよ」

「へへ、おう!!」

エールがアスラを抱き締める。今まで一緒に旅をして来た2人。アスラが旅の中で少しずつ強くなって行っただのをずっと見て来た彼女にとって、この瞬間は感慨深いものがあつたのだろう……………

「後エール、ちょっと苦しいんですけど……………」

「!!」

刹那。自分が何をしたのかを理解するエール。顔が真っ赤になり、思わず手が飛び出

る。

「な、何変な事考えてんのよバカスラアア!!」

「なんでだアアア!?!」

エールに突き飛ばされるアスラ。そんな彼に手を差し伸べたのは、トウエンティだ。アスラはその手を取り、立ち上がる。

「オマエは凄い男だアスラ」

「凄いのはここにいるみんなさトウエンティ。本当にありがとう!!」

ニカッと擬音が飛び出るような笑みを浮かべるアスラ。トウエンティもまたその笑顔を見て、自分も口角が緩む。

「……………オレの罪は重たい。いつか贖罪ができた時、今度こそオマエとの決着をつけよう」

「固い固い!!……………罪とか食材とかそんなの関係ねえって。楽しく、バトルしようぜ!!」

「……………ああ」

拳を合わせる両者。その横から、今度はアスラ幼馴染にして最大のライバル、ロンが入って来る。

「オレの事を忘れてもらっては困るぞアスラ。オレもまだトウエンティとの決着はついていない」

「へへ……………ロン。これでようやく、頂点王への道が開いたな」

「ああ。負けないぞアスラ。シイナの次に頂点王になるのはこのオレだ……………オレは、オレ自身の野望のために、必ず頂点王になる」

「そう言えば戦いの前にも「野望」がどうのこうのって言ってたな、それって結局なんだ!?」

アスラがロンに質問する中、会話の中に出て来た「シイナ」の言葉を耳に入れるなり、エールがハツとなって思い出す。

「あ!!……………待って2人とも、私今重要な事思い出した」

「え、何。急にどうしたのエール」

「ええつと……なんて説明すれば」

実はシイナは完全に死んでおらず、その魂はムエとなつて、過去にタイムスリップしていた事をどうにか頑張つて彼らに説明しようとするエール。

事実だが、内容が完全にトンチンカンであるため、中々説明の文が頭から形成されない。

そんな中、この仲睦まじい光景を眺めながら、ウィルは一人呟いた。

「世界はブラックフォースではなく、彼らを選んだ。決して諦めない、強き若者達を……」

「子供達の成長を見届けるために大人はいる。ゆっくりと償おう、君の犯した、大きな罪を」

「……………わかっていきますよ、ゾン・アーサー」

ロンの父、ゾンは彼の肩に手を置きながらそう告げた。ウィルももうあの時の彼ではない。きつと己の犯した大きな罪を償えるに違いない。

「お師匠。今なら貴女の気持ちわかりますよ」

ウイルの言うお師匠とはエールの母である「エレナ・オメガ」……………

彼女と仲違いし、彼は黒の道へと突き進んだ経緯がある。だがそれは過去の話、今ならばきつと理解し合えると、いもしない我が師匠に思いを馳せた。

「えーっと、うーんと、何て説明すればいいのよ」

「なんかよくわかんねえけど、そんな無理して言わなくてもいいぞ」

シイナの説明に頭を抱えるエール。そんな彼女にそう促すと、アスラは平和になったと言う実感を、自分の体の中にあるであろうアイツにも伝えた。

「……………なんかいいな。大好きなみんなを守れて、本当に良かった……………オマエもそう思うだろ、オニキス……………オニキス？」

アスラは自分の中にいるであろう相棒、オニキスと呼ぶが、彼からの返事は返って来

ない。そして、冷静になって感じて見ると、その中に既にオニキス、及び彼の持つ黒の力がなくなっているのがわかった……………

「……………オニキス」

この衝撃的な現実を受け入れられない。胸の鼓動が高鳴り、息が乱れる。

恐る恐る自分のデツキからセイバーのカードを抜き取ると、それはたちまち消え去っていき、元のデュークモンに戻る。きつと、オニキスが消えた事によって、その姿を維持できなくなったのだろう……………

「……………何でだよ、バカヤロウ」

何でも言わずに、去って行ったんだ。心中でそう強く叫んだ。

今まで幾度となく共に戦い、成長し続けた相棒。その名はオニキス。今、アスラは16年の時を経て、内に眠る黒の力から解放された。そして、自ずと涙が溢れて来た。

アスラ達が黒属性の始祖、ブラックフォースを打ち破り、世界が平和になってから、およそ3ヶ月が経過した。

黒の怪物達が暴れ回って崩壊したオウドウ都は、今では殆ど復興され、元の活気あふれる大都市へと戻っていた。

「今日、遂に三王塔で三王にバトルを挑むのね、アスラ」

「おう、今日はオレが頂点王になる日だぜ」

世界を救い、オニキスがなくなってから3ヶ月。ようやく三王達やカラーリーダー達にバトルを挑めるようになった。アスラとエールは、待ちに待った三王塔の入り口に立った。

テンドウやエレンなどから、何度も様々な事情で呼び出されていたが、今回は違う。今までとは桁違いの緊張感がアスラの中を走る。

無理もない、泣いても笑っても今日この日は、シイナに代わって新しい頂点王が決定する日なのだから……………

「ずっと待ってたんだこの日を………ぜってえに勝つ」

「ふふ」

「むえ」

「………とこで本当にムエがシイナなんだよな??……慣れないんすけど」

エールが抱き抱えるオレンジ色の毛並みをした妙な犬みたいな生き物ムエ。今まで一緒に旅をして来た大事な仲間であるが、実はコレ、死亡したはずの頂点王、シイナ・メザなのである。

3ヶ月も経過したが、アスラは今だにその事実には震えが止まらない。

「当然だ。感動の再会をしただろ?」

「うん、まあ普通に泣いたけどさ。普通に考えてやばいだろ、転生したとか。何で今まで言わなかったんだ?」

「ムエのままじゃまともに話せなかったんだよ………こんな感じで元の姿にもなれなかったし」

ムエは緩やかにシイナに変身しながらアスラにそう告げる。

「ねえシイナ様、頂点王引退って本当ですか？」

今度はエールがシイナに訊いた。彼女はポーチに入っている自分のデツキを彼らに晒しながら答える。

その中にはインペリアルやクリムゾンモードなど、彼女の主力となっていたスピリットは存在しなくて……………

「ああ、ムエになった時は既に私のデツキのスピリットの殆どがなくなってたし、なんかお肌も荒れたし」

「お肌は関係ねえだろ」

「何はともあれ、後はアスラとロン、大好きで大事な息子2人に託すよ」

「そーいや、ロンはどうなったんだ。昨日三王に挑戦したって言ってたけど……………シイナ同伴したんだろ？」

アスラの質問に対し、シイナは真面目な顔つきになりながら返答する。

「ああ、三戦とも全勝したよ。それも、圧倒的な力の差を見せてね」

「!!」

「これでロンは頂点王までリーチ。アスラも三王に勝って同じ舞台に立たないとね。ロンはヤバイよ、あそこまで強くなるなんて思ってもなかった……正直、全盛期の私でも敵わないかも」

シイナは「さらにその野望も……」と心中で呟く。ブラックフォース達との戦いの前にアスラに言いかけたロンの「野望」とは、いったいどう言った事なのだろうか……

そんな折、アスラは最大のライバルが勝ち進んだ話を聞いて、思わずその口角が上がる。

「へへ……あの天才イケメンヤロー……やるじゃねえか。いつもいつもオレより一步先を行きやがって……見てろ、ぜってえ追いつくからなロン!!!……待ってる!!……うおおお!!」

「……………」

いつも通り、気合の現れを表すように雄叫びを上げるアスラ。だが、エールやシイナから見たら、やや無理をしているように見えて……………

「…………アスラ、やっぱり無理してる？…………オニキスの事で」

「……………んな事ねえよ。そりゃ急なサヨナラでショックだったけど、今は平気だ!!」

「……………」

気を遣わせまいと無理をしているのは一目瞭然だった。

エールは知っている、あの日以降、自分の修行や街の復興をしながらも、夜な夜なオニキスを一人で探しに行っている事を……………

正直、今のアスラは見るに耐えなかった。シイナも同じ考えだ。

「ゾンさんが言うに、オニキスは本体であるブラックフォースを失った事で、共に消滅したかもしれないんだって」

「……………」

シイナがアスラに言った。前に進ませるために、敢えて辛い現実を彼に突きつける。

「ごめんシイナ。それでもオレは認められねえ……アイツが勝手に消えるとは思えねえんだ」

「アスラ………」

「オレは諦めねえ……いつか必ずオニキスを見つけ出す。例え何年、何千年掛かろうとも、ぜってえ探し出してやる!!」

アスラの意志は固い。シイナはアスラはオニキスのために立ち止まっているのではなく、前へ進むためにオニキスを探していたのだと悟る。エールはそのアスラの健気さが窺える言葉に、涙が目に溜まる。

だが、その時………

『ゼゼ……テメエなんかを探してもらっても、何も嬉しくねえぞ』

ー!!

憎まれ口が聞こえて来た。アスラはその笑い方で、誰がすぐそばにいるのかがわかる。間違いない、オニキスが帰って来たのだ……………

「オ、オニキス……………なのか!？」

『何寝ぼけた事言ってるんだ。散々一緒に戦って来てやっただろうが』

「お、オニキスウウウウー!!!」

アスラは嬉しさの余り、滝のような大粒の涙を流しながらオニキスを抱きしめようとするが、ここでのオニキスは霊体。触れられないために空振りに終わる。

『バカかテメエ……………いや、バカだったか』

「オマエ、何で今までどっか行ってたんだよ!!」

『ああ、世界を見渡したくてな。キョーラの見たがってた、この表の世界を……………で、大体見たから帰って来た。それだけの事だ』

「大体見たって……………オマエなあ」

嘘か真かは定かではないが、オニキスは決戦後3ヶ月もの間、世界中を旅していたの

だと言う。

『やっぱオマエといった方が面白いモノを見れると思ってな……………違うか?』

「……………へへ、そうに決まってるだろ!!……………丁度いいや、今日はオレが頂点王になる晴れ舞台だから、一緒に見ていけよ!!」

『ゼゼ、ああ、そうしてやるよ』

そう告げながら涙を拭うアスラ。霊体のオニキスはそのままアスラの中へと帰還して行った。その心中では「キョーラ、オレはこのオマエが残した最高のバカと共に生き抜いてやるよ」と呟いていて……………

「……………良かったな、アスラ」

「おう、これで思い残す事は何もねえ……………行くぜ三王戦、全員倒して、ロンも倒して、必ずオレが頂点王になる!!」

ハイ!!!

それはどうかな!!!

—!!!

全てが整い「さあいざ三王塔へ」と行った時にまた新たな人物がこの場に現れる。

その人物は、彼らもよく知る女性。彼女の豪快なバトルは嫌でも脳裏に焼き付いてい
る……………

「い、イカツチ!？」

「やあオマエさん達、元気だったかい？」

「イカツチさん、どうしたんすか急に……………」

「どうしたって言っただろうスーミ村のアスラ。次に会った時はアタイのギドラの餌に
してやるってな」

「!!」

どうやら、イカツチの狙いはアスラとのバトルのようである。彼女もまたカラーリー
ダーに挑戦していたこともここで思い出す。

「こう見えて、アタイも6枚のカラーカードは揃えてんだ………どうだ、アタイもアンタ、どっちか勝った方がこの三王塔に行くってーのは」

「へへ、おうよ。臨むところだぜ……オレもアンタとのバトルを楽しみにしてたんだ!!」
「決まりだな」

2人の中で話がまとまると、互いに距離を取り、Bパッドを展開、そこに己のデッキをセットして、バトルの準備を終える。

「はあ………今から三王戦なのに、何またバトルしてんのよあのバカスラ」

「ハハ!!………でも、アスラらしいよな………あの子の挑戦、楽しみだな」

「………はい!!」

呆れながらも、素敵な笑みで、アスラを見届ける少女エール。シイナと共にアスラのバトルを応援する。

「どうせなら勝ちなさいよアスラ!!」

「おう任せろエール!!………行くぞイカツチさん!!」

「どっからでもかかって来い、全てアタイのギドラで薙ぎ払ってやる!!」

……………ゲートオープン、界放!!

こうして、三王塔の目前で、アスラとイカツチ、2人のバトルスピリッツが幕を開けた。シイナとエール、そして少し離れたところで彼のライバルであるロンがそれを見守る……………

アスラとイカツチのバトルが始まり、数ターンが経過した。バトルは終盤を迎え、アスラのターン。

彼の場合にはスピリットがないのに対し、イカツチは自身のエースである三ツ首龍、メカキングギドラが場に1体存在する。

「召喚!!……………仮面ライダー龍騎!!」

Ⅰ【仮面ライダー龍騎】LV2(3)BP8000

様々な鏡像が重なり合い、アスラのデッキのキーカード、龍騎が出現。

龍騎は気合を入れるように拳を固め、目の敵であるメカキングギドラに確かな戦意を示す。

「相手がどんなに強かろうと、頂点王になるまでぜってえ諦めねえ!!……それがオレの、バトスピだアアアア!!!」

アスラの声は、雄叫びは。いつも誰かを勇気付けて来た。

そして、これからもそれは響き渡っていく事だろう。

彼が頂点王になる、その日まで。

『バトルスピリッツ コラボストーリーズ』
―完―